

ハイスクール・フリー ト Gフォース

首都防衛戦闘機

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

伝説の怪獣ゴジラと戦ったGフォース艦隊がある島の核爆発ではいふりの世界へと転生してしまう。

登場兵器を編集しました。

目次

登場人物	1
登場兵器	138
プロローグ	216
黎明編	
第1章 異世界へ	228
第2章 ブルーマーメイド	250
第3章 交渉	264
第4章 選択	274
第5章 宗谷真雪	292
第6章 宗谷家同居生活	311
第7章 初陣	330
第8章 宗谷家での生活	382
第9章 合同演習	398
第10章 大規模救助要請	419
第11章 オマハ救助作戦	435
第12章 宗谷家での生活 2 (横須賀女子海洋学校見学！)	450
第13章 命の理由 前編	469
第14章 命の理由 後編	491
第15章 仮想巡洋艦 前編	510
第16章 仮想巡洋艦 後編	529
第17章 岬 明乃	548
第18章 ブルーマーメイドフェス	570
ター 前編	570

第 1 9 章	ブルーマーメイドフェス	595	754	第 2 6 章	妙な物体	782
ター	中編			第 2 7 章	宗谷家での生活 4	
第 2 0 章	ブルーマーメイドフェス	625	818	第 2 8 章	アメリカ大統領	834
ター	後編			第 2 9 章	ゴジラの亡霊	861
第 2 1 章	Gフォース危機一髪！	656		第 3 0 章	恋の進展	898
編				第 3 1 章	初詣	916
第 2 2 章	Gフォース危機一髪！	682		第 3 2 章	中止命令	929
編				第 3 3 章	遅い初詣	952
第 2 3 章	宗谷家での生活 3			第 3 4 章	横須賀女子海洋学校入学試	976
705				験		
第 2 4 章	龍之介と真霜 前編			第 3 5 章	合格発表!!	998
727						
第 2 5 章	龍之介と真霜 後編					

第36章 しばしの別れ

第37章 臨時教員

最終章 旅立ち

本編

第1章 入学式

第2章 晴風出港

第3章 視察

第4章 世にも奇妙な晴風の夜

1152

第5章 異変

第6章 初航海でピンチ!

第7章 濡れ衣と拘束

第8章 それぞれの決意

第9章 追撃されてピンチ!

1267

第10章 八神はやての最期、決死の

無線機奪取

第11章 晴風撃沈命令と龍之介の起

訴

第12章 パジャマでピンチ!

1362

第13章 龍之介 VS 邦夫

1427

第14章 乙女のピンチ! 前編

1447

第15章 乙女のピンチ! 中編

106710371017

113011011081

1248121811921185

1351 1336

新起動編

第1章 新生Gフォース起動!

2235

第2章 納沙幸子がピンチ! 前編

2269

第3章 納沙幸子がピンチ! 後編

2323

第4章 雅かの合同演習でピンチ!

前編

第5章 雅かの合同演習でピンチ! 中

編

第6章 雅かの合同演習でピンチ!

後編

2447

2406

2382

第7章 特別研修

第8章 婿養子と同居 前編

第9章 婿養子と同居 後編

第10章 新婚と日常

第11章 特別実習 前編

第12章 特別実習 後編

第13章 新たな敵と陰謀

第14章 夏休み 前編

特別編

特別編 前編

特別編 中編

特別編 後編

292428012709

26952667263926272612256525532519

登場人物

登場人物

主人公

山本 龍之介（やまもと りゅうのすけ）↓ 宗谷 龍之介（むねたに りゅうのすけ）

役職：Gフォース西部方面艦隊指揮官 ↓ Gフォース艦隊指揮官

階級：准将、一等保安監督官

出身地：東京都新宿

誕生日：11月21日

血液型：A型

身長：171cm

性格・特徴：極めて厳格

趣味・特技：艦隊航空戦

得意科目：航空部門

苦手科目：特になし

好物：コーラ、カレー

苦手な物：お酒類、薫

ニックネーム：准将、龍之介

Gフォース西部方面艦隊の指揮官で山本薫の兄。黎明編の主人公。性格は、極めて厳格だが、薫に対して、頭が上がらない。昔は、パイロットだったので航空機の基本や戦術などは、長が出る程詳しいが、そのせいでお酒が飲めない下戸。東京都新宿にあった山本製作所（小さな航空機部品を製作していた町工場）の社長、山本英二の長男。でいづれ父親の後を継ぐ事になっていたが、第2次ゴジラ戦で工場は、全焼、父、母は、ゴジラによって倒壊されたビルの下敷きになって死亡。両親、工場、全てを失った後、妹の薫と共に従妹のはやての元に引き取られた。引き取られた後、工場の借金やはやての家の家計を助けようと難題だった国防軍江田島海軍学校を受験（在籍1年）。その後、パイロットに憧れ、岩国の航空学校に転入。卒業後、パイロットとして、石川県の小松基地に配属（階級は、大尉）。しかし、訓練中の機体の事故で右目を負傷した事によって、パイロットの資格を失う。資格を失った後、失望の余り国防軍を除隊しようと思ったが、特殊戦略作戦室室長の黒木 翔に説得され、特殊戦略作戦室にスカウトされる（階

級は、中佐)。特殊戦略作戦室に配属後は、翔の部下として、ゴジラ戦に参加、やがて、ゴジラ迎撃が国防軍からGフォースに移った事によって、Gフォースに移籍する。移籍後は、大佐として、Gフォース西部方面艦隊指揮官を任される。ゴジラ戦後は、准将に昇進。最後の任務である西太平洋沖の哨戒任務中、ウララ島の核爆発で薫達と共に異世界の日本に飛ばされる。

飛ばされた後、真霜の計らいと深町によって、薫達と共に海上安全整備局の指揮下入り、ブルーマーメイドに入る。

真霜とは、家に下宿する時から睨み合いするほど毛嫌いしていたが、自分達を本気で田沼総理から守った事に感謝する。デートの時に真霜が不良少年達に絡まれていたのを助け、それが真霜の心を動かし、以来、真霜と付き合っている。

RAT事件では、田沼総理と野田の計略によって、功と共に拘束され、東京拘置所の特別牢に監禁される。

その後、真霜によって、救出される。救出後は、深町の要請で武蔵と行方不明艦の捜索に参加。

最終戦では、自ら試作戦闘機烈風に乗って、晴風の元へ向かい、武蔵を止める事に成功した。だが、突然のゴジラ出現で状況が一変、上陸を阻止しようと次郎と共に迎撃に出るも撃墜された。しかし、直前で脱出した。

新起動編では、深町を総司令にした新生Gフォース創設し、ブルーマーメイドから独立。

Gフォース艦隊指揮官に就任する。

真雪に婿養子にならないかと言われ一度は拒むが、真霜と喧嘩した事で自分が間違っていた事に気づき、真霜と仲直りし、改めて宗谷家を継ぐ。

海賊事件では、真つ先に海賊の動きを察知し、艦隊を湾外に退避させるも時既に遅く。止む追えず湾外に停泊していた僅かな戦力と学生艦隊でプラント及び海上要塞攻略に向かう。

山本 薫（やまもと かおる）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳艦長 ↓艦長及びGフォース空母戦闘群指揮官

階級：中佐、二等保安監督官

出身地：東京都新宿

誕生日：6月11日

血液型：A型

身長：169cm

性格・特徴：一度決めたら曲げない。

趣味・特技：新体操、料理

得意科目：全科目

苦手科目：特になし

好物：アイスクリーム、ハンバーガー

苦手な物：ムカデ、ゴジラ

ニツクネーム：薫先輩、教官

G フォース西部方面艦隊所属空母大鳳の艦長、龍之介の妹。本編の主人公。第2次ゴジラ戦で両親を失った後、龍之介と共に従妹のはやての元に引き取られた。

引き取られた後、はやてが通う学校に転校し、そこでなのはやフェイトと知り合い3人とは、友人に成る。性格は、大らかで一度決めた事は、曲げない。だが、怒らせると怖い一面もある。幼い頃から、成績は、優秀で特に新体操部に入っていたので、大会で優勝する程の腕前で将来は、スポーツの名門校に推薦が約束されていたが、本人は、それを自ら不意にして、龍之介の後を追って、国防軍江田島海軍学校に入学。入学時、次郎と初めて、出会う。入学時の成績は、主席だったのだが、当時、教官だった美由紀によって、次郎と共に最低クラスの駆逐艦そよかぜに編入される。そよかぜ編入の頃は、次郎とは、対立していたが、ある事件をきっかけに仲が良くなる。卒業後は、共にG

フォースに編入し、何故か龍之介が指揮する部隊に配属された。配属後は、空母大鳳の艦長として、ゴジラ戦に参加。戦後は、中佐に昇進。最後の任務である西太平洋沖の哨戒任務中、ウララ島の核爆発で異世界の日本に飛ばされる。

飛ばされた後、真霜の計らいと深町によって、龍之介達と共に海上安全整備局の指揮下入り、ブルーマーメイドに入る。

本編から真雪に頼まれはやてと共に臨時教員として、晴風に乗艦する。

RATt事件では、濡れぎぬの罪によって、海上安全整備局に追われる晴風について、明乃達を護りながら、数々の難を乗り越える。

疑いが晴れた後、武蔵が行方不明だと知り、もえかと共に乗艦していたはやての安否が不明だと知り、困惑しながら明乃と共に武蔵救助に向かうも失敗する。

その後は、明乃と共に自ら犯した過ちを反省しながら、武蔵追跡の任に当たる。

最終戦では、晴風共々、武蔵救出に向かうも武蔵相手に苦戦、諦め様とした時、古庄が率いる横須賀女子海洋学校の増援部隊が到着、増援部隊の到着で武蔵救出を続行、結果武蔵に接岸、はやて救出のため明乃と共に武蔵に乗り込み捜索中にはやてと見つかる。

しかし、感染した生徒同様な状態になっていたので、逆にはやてに襲われるが、次郎に救われ、無事にはやてを救出する。

新起動編では、空母大鳳の艦長及びGフォース空母戦闘群指揮官。

次郎と結婚し、五十六と共に横須賀女子海洋学校の寮に移る。

時々、古庄に頼まれ、明乃達の指導を行っている。

特別編では、真霜から自分の部署にスカウトする話が来ていた。

プラント及び海上要塞攻略では、空母大鳳で航空戦を指揮、その後、晴風が要塞に突入すると聞き、共に向かうべく、次郎と共に晴風に乗艦。

戦闘後、比叡の艦長推薦を断つたましろを見て、自分もブルーマーメイド行きを断り、Gフォースに残留する。

容姿は、アズールレーンの瑞鶴さんをモデルにしている。

岬 明乃（みさき あけの）

役職：航洋直接教育艦晴風艦長

所属：航海科

出身：長野県松本市

誕生日：7月20日（かに座）

血液型：B型

身長：152cm

性格・特徴：大らかで行動的。運がいい

趣味・特技：カヌー

得意科目：国語

苦手科目：数学

資格・実績：中等丙種海技士、丙種二級小型水上免許（中型スキッパー免許）

好物：カレー、プリン

苦手な物：生牡蠣

好きな色：群青色

好きな言葉：なんとかなる

ニックネーム：ミケちゃん

航洋直接教育艦晴風艦長であり、本編のもう一人の主人公。クラス委員長。航海科所属。艦の全体指揮を担当。考えるよりも先に体が動くタイプで、直観に頼っている所が割とある。天性の物なのか、その直感が良く当たるため、物事は頑張れば何とかなると思っている。決断は早く、こうだと決めたらなかなかそれを曲げない頑固な面もある。その為か、人の話をよく聞いていないこともしばしば。また、名前を覚えるのが下手なのか、他人に勝手にニックネームをつけて呼ぶことが多い。もえかとは呉の児童養護施設からの親友で小学卒業後、別々の両親に引き取られた。座学は元々それほど良くもな

かったが、試験では、もえかのお陰で、中々の成績を残している。また、運動神経に優れているので、スキツパーの操縦をはじめ実技の成績は極めて優秀だった。こうした結果と、物怖じしない大らかな性格から統率力もあると判断され、航洋直接教育艦クラス艦長に適していると学校側からは見なされている。非常時にこそ本領を発揮するタイプだが、やや視野狭窄鱒気味で思い込みが強い面もある。育ちのせいかな依存心が強く、仲間や家族を強く求める傾向がある。そのため海の仲間は、家族だっと思っている。幼い頃に両親を海難事故で亡くしている。自身はその際にブルーマーメイドに救助される。その後、呉の児童養護施設でもえかと出会って無二の親友となり、共にブルーマーメイドを目指すことを誓う。

ましろとは、艦長と副長の関係で対立していたが、しんばしの救出でお互いにひたしい関係に成る。

本編では、航洋直接教育艦晴風艦長として、乗艦する。

R A T t事件では、教員艦さるしまからの無差別的な砲撃に対し、自ら反撃を主張し、難を逃れる。その後は、アドミラル・グラフ・シュペーや伊号第201潜水艦との戦闘を乗り越える。疑いが晴れた後、武蔵が行方不明だと知り、乗艦していたもえかの安否が不明だと知り、困惑しながら薫と共に武蔵救助に向かうも失敗する。その後は、薫と共に自ら犯した過ちを反省しながら、武蔵追跡の任に当たる。

最終戦では、武蔵救出に向かうも武蔵相手に苦戦、諦め様とした時、古庄が率いる横須賀女子海洋学校の増援部隊が到着、増援部隊の到着で武蔵救出を続行、結果武蔵に接岸、もえか救出のため薫と共に武蔵に乗り込み無事にもえか達を救出する。

新起動編では、新しくなった晴風の艦長になる。

特別編では、ましろが比叡艦長に引き抜かれると聞いて戸惑うも、ましろの頼みで凶上演習競技に出て勝負する。

結果は、追い詰められるも事件発生で決着はつかなかった。

プラント及び海上要塞攻略では、要塞相手にホワイトドルフィンが苦戦を強いられるのを見て、晴風で要塞内部に突入し、動力炉を破壊する。

プラント及び海上要塞攻略後にましろから晴風残留を聞き、大喜びする。

ヒロイン

宗谷 真霜（むねたに ましも）

役職：ブルーマーメイド安全監督室情報調査室長

階級：一等保安監督官

出身：神奈川県横須賀市

誕生日：5月1日

血液型・A型

身長：162cm

性格・特徴：温厚で篤実、また極めて厳格

趣味・特技：水上スキー、ウィンタースキー

得意科目：全教科

苦手科目：特になし

好物：ハンバーガー、こんぺいとう

ニックネーム：ましもん

ブルーマーメイド安全監督室室長で黎明編のヒロイン。宗谷家三姉妹の長女。龍之介が頼りにしている親友、妻。小さい頃から学業が優秀で、また母親に感化されてブルーマーメイドになろうと努力していた。それが実って、海洋学校時代も優れた成績を修め、主席入校主席卒業という偉業を達成する。性格も普段は温厚で篤実だが、任務には鉄の意志で対処し、極めて厳格。ただ、家庭的な見掛けとは裏腹に、龍之介同様日常生活はざぼらで家事もあまり得意ではない、その為、暇な時は、薫から料理を教わっている。ハンバーガーやソフトクリームなどの大の甘党好き。

龍之介とは、家に下宿する時から睨み合いするほど毛嫌いしていたが、田沼総理との

会谈で龍之介がGフォースの理想を掲げながら、要求を拒否した事に感激し、また、デー卜の時に不良少年達に絡まれていたのを助けられ、以来、龍之介が好きに成った。

かつては、野田と言う許婚が居たが、野田の野心や浮気に絶望し、以来、男嫌いになるが、龍之介の出会いで男嫌いは、少し解消する。

黎明編では、平賀達と共に突然現れた龍之介達と接触。龍之介達を自分の部署に組み込んだ。その後、日本政府の陰謀から龍之介達を護る。

RATt事件では、田沼総理と邦夫の計略によって、拘束、監禁された龍之介を救い出し、更に反乱の濡れ衣を着せられた晴風を保護する。古庄の見舞いで病院を訪れた際、偶然海洋研究機関員の会話を聞いて調査、RATtの存在や異常事態の原因を突き止め、事件解決に翻弄する。

最終戦では、Pーシアス作戦を立案するが、思わぬ武蔵の日本近海出現に主力部隊は間に合わなかったので、平賀部隊を送り込むなど総指揮を執る。

新起動編では、ブルーマーメイドから独立した龍之介を影ながら支援を続けている。

母真雪から龍之介が婿養子になると聞いて喜ぶも、本人が拒むのを見て、腹が立ち喧嘩したもの。

龍之介が自分を守ろうとしている事に気づき、龍之介と仲直りし結婚した。

特別編では、龍之介と共にプラント及び海上要塞攻略に参加する。

宗谷 ましろ

役職：航洋直接教育艦晴風副長

所属：砲雷科

出身：神奈川県横須賀市汐入町

誕生日：5月27日（ふたご座）

血液型：A型

身長：160cm

性格・特徴：真面目でクールな優等生。しかし運が悪い。

趣味・特技：おまじない、水泳

得意科目：学業全般

苦手科目：特になし

資格・実績：中等乙種海技士、水上交通管制基礎試験合格

好物：ヒラメの刺身、ソフトクッキー

苦手な物：カルビー

好きな色：赤色

好きな言葉：全ての不幸は未来への踏み台に過ぎない

ニツクネーム：シロちゃん

航洋直接教育艦晴風副長であり、本編のヒロイン。クラス副委員長。砲雷科所属。艦長である明乃の補佐と艦内の円滑運営を主に担当。また、明乃の不在時には代わって指揮を執る。代々ブルーマーメイドを輩出してきた名家、宗谷家の三女。母は元ブルーマーメイドで横須賀女子海洋学校の校長。2人の姉もブルーマーメイドになりたいたいと考えていたが、そのため、本人も小さな頃から将来はブルーマーメイドになりたいと考えていたが、家族がみな優秀なので、自分はそれより劣っているのではとコンプレックスを抱いている。頭も非常に切れて記憶力も良く、勉強も運動も極めて優秀、操船や指揮能力にも優れており、それだけを見ると家族には決して劣っていない。しかし、どうしても肝心なところで運の悪さが目立ち、そのためにネガティブになりやすく、更にはピンチの際には動揺しやすい、と実力を発揮しきれない面がある。入学試験の際も、薫が注意したにもかかわらず回答欄をひとつずつ間違えるというケアレスミスによって、大幅に減点、本来なら不合格（実技は、満点だった。）だったのを真雪の計らいで晴風クラスに編入と言う条件で特別合格に成る。そのせいか、本人には、コンプレックスになっている。普段は、凜とした態度を取るが可愛いもの好きで、自室に多量のぬいぐるみを持ち込んでいる。当初は猫が苦手だったが、商店街船「しんばし」での出来事を経て克服している。幸子とヴィルヘルミーナが自室のテレビで一緒に映画を観ていた影響で、広島弁を覚え

てしまい、幸子を広島弁で慰めたことをきっかけに、幸子から一方的に「心の友」と呼ばれ、慕われる。

龍之介や薫とは、居候での付き合いで、特に薫からは、義妹として可愛がられている。（本人は、嫌がっていたが、しんぼしの救出の時に薫だけが戻ってきて、しかも優しく慰められたことによつて、今では、本当の姉妹みたいに仲が良い）

RATt事件では、明乃と意見の違いや持ち場放棄で対立していたが、しんぼしの救出で明乃からの謝罪をうけ、以来、関係は改善される。その後、アドミラル・グラフ・シユペー戦では、明乃の留守中に艦長として、指揮を全うする。

最終戦では、迷う明乃を補佐する。

新起動編では、新しくなった晴風の副長になる。

特別編では、比叡艦長に推薦されるが、本人は迷いながらもプラント及び海上要塞攻略に参加。

プラント及び海上要塞攻略、晴風残留を決める。

Gフォース

小沢 次郎（おざわ じろう） ↓ 山本 次郎（やまもと じろう）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属特殊戦闘艦白鳳艦長 ↓ 空母大鳳艦長補佐

階級：中佐、二等保安監督官

出身：兵庫県神戸市

誕生日：6月2日

血液型：A型

身長：185cm

性格・特徴：脳天気で短気

趣味・特技：格闘術、

得意科目：全科目

苦手科目：特になし

好物：ホットドック

苦手な物：真冬

ニックネーム：次朗君

Gフォース西部方面艦隊所属特殊戦闘艦白鳳の艦長。性格は、脳天気で短気、いつも髪は、パーマにして、サングラスを掛けて、煙草を吸っている。(ただし、はいふりの世界では、薫に勧められ、電子煙草にした。)薫の事になると何時も首をつ込む。神戸に一大企業を置く財閥の3人兄弟の3番目の末子だったが、長男が病気で後継ぎから外さ

れ、無理やり後継ぎにされた。そんな家のやり方に嫌気がさし、また、自由気ままにな
りたかったので、親の反対を押し切って、国防軍江田島海軍学校に入学。入学時の成績
は、薫と並んで次席だったのだが、当時、教官だった美由紀によつて、薫と共に最低ク
ラスの駆逐艦そよかぜに編入される。薫とは、初めて会った時から、女だからと言う事
で対立していたが、ある事件で救助に向かおうとする薫に対し、自ら薫の代わりをかつ
てで、救助に向かう。救助後に艦に戻ってきたら薫が泣きながら自分に謝罪したの
で、次郎は、それに感謝し、以来、薫とは、仲がよく恋人に成る。海士学校卒業後、薫
と一緒にGフォースに編入する。編入後は、副長として、薫の補佐を務めながら、ゴジ
ラ戦に参加。戦後は、中佐に昇進し、特殊戦闘艦白鳳の艦長に就任する。最後の任務で
ある西太平洋沖の哨戒任務中、ウララ島の核爆発で異世界の日本に飛ばされる。

飛ばされた後、龍之介達と共に海上安全整備局の指揮下入り、ブルーマーメイドに入
る。

ましろの姉、真冬とは、犬仲で会う時からいつも決闘に成るが、未だに決着が着かな
い。

RATt事件では、美由紀共々、地中海遠征に出ていたが、晴風の訃報を聞いて、美
由紀の命令で単独で晴風の元に向かう。その後、四国沖で晴風や救援に來た平賀達と合
流、薫と再会する。晴風と龍之介達の無実が証明され、共に横須賀へ帰還するが、晴風

が武蔵の追跡の任にあたったと言う知らせを受け、激怒し龍之介を責める。その後は、無礼を謝罪し、共に武蔵と行方不明艦の捜索に参加。比叡戦では、満身創痕に成った晴風の危機を救い、比叡を制圧する。

それから、真冬と共にビスマルクを制圧し、ゼーアドラー基地に護送する。最終戦では、晴風の武蔵突入を支援する。

新起動編では、白鳳の修理の為、一時的に艦長補佐になる。

プラント及び海上要塞攻略では、薫を補佐し、要塞に突入する。

プラント及び海上要塞攻略後は、薫からGフォース残留を聞き大喜びする。容姿は、松田優作をモデルにしている

八神 はやて（やがみ はやて）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳副長

階級：中佐、二等保安監督官

出身：海鳴市

誕生日：6月4日

血液型：O型

身長：149cm

性格・特徴：のんびり

趣味・特技：料理、関西弁、胸をもむ

得意科目：全教科

苦手科目：特になし

好物：甘い物

苦手な物：ゴキブリ

ニツクネーム：はやてちゃん、ちびタヌキ

Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳の副長、龍之介と薫の従妹。とある事故で両親を失い、おじいさんと一緒に海鳴市で暮らしていた。第2次ゴジラ戦で両親を失った龍之介と薫を引き取る事に成り、それ以来一緒に暮らす。性格は、のんびりした性格で何故か会話では、関西弁で話す。幼い頃から体が弱かったせいも足が不自由で、いつも車椅子の生活だったが、その後の治療やりハビリで立てるほどに回復した。薫とは、従妹と言うよりも姉と妹見たいな関係で、何時も薫に心配される。また、なのはやフェイトとは、小学校から知り合い、以来友人に成る。中学校卒業後は、薫の後を追って、国防軍江田島の海士学校に入学、入学時の成績は、薫と同じ主席、卒業後は、1年遅れて、Gフォースに編入する。編入後は、空母大鳳の副長として、薫の補佐をしながら、ゴジラ戦に参加。戦後は、中佐に昇進。最後の任務である西太平洋沖の哨戒任務中、ウララ島

の核爆発で異世界の日本に飛ばされる。

飛ばされた後、真霜の計らいと深町によって、龍之介達と共に海上安全整備局の指揮下入り、ブルーマーメイドに入る。

本編から真雪に頼まれ薫と共に臨時教員として、武蔵に乗艦する。

R A T t 事件では、ウイルスに感染した武蔵の生徒からもえか達を守りながら奮戦するが、無線機の争奪でもえか達を逃がした後、感染した生徒達に囲まれ、その後の安否は、不明である。

最終戦で救出に来た薫と再会したが、既に感染していたので、奮戦する中、次郎の助太刀によって、ワクチンを注射され、元に戻る。

新起動編では、再び空母大鳳の副長に復帰している。

容姿は、魔法少女リリカルなのは S t r i k e r s の八神はやてをモデルにしている。

高町なのは（たかまち なのは）

役職：G フォース西部方面艦隊所属第343空母航空団第1小隊長

階級：大尉、一等保安監督正

出身：海鳴市

誕生日：2月27日

血液型：O型

身長：162cm

性格・特徴：明るく優しい、負けず嫌い

趣味・特技：航空部門、体育

得意科目：理数系 体育（中学から得意になる。）

苦手科目：文系

好物：甘い物

苦手な物：なし

ニックネーム：なのはちゃん、誰もが認める無敵のエース

Gフォース西部方面艦隊所属の第343空母航空団第1小隊長、はやてと同じ海鳴市の出身。小学校の頃は、自称「平凡な小学生」で理数系が得意なものの体育（中学からは、得意になる。）など文系は、苦手であった。性格は、明るく優しいが、勝負に負けるのが嫌い。薫やはやて、フェイトとは、小学校からの友人、中学校卒業後は、空に憧れ航空士を目指そうと岩国の航空学校に入学する。航空機の操縦は、かなりの腕で在校時は、練習機で曲技飛行をよくやっていた。卒業後は、一時期、松島基地の教導隊に所

属していたが、龍之介にスカウトされ、Gフォース西部方面艦隊の第343空母航空団第1小隊長に抜擢、ゴジラ戦に参加。戦後は、大尉に昇進し、教導隊に復帰する予定だったが、最後の任務である西太平洋沖の哨戒任務中、ウララ島の核爆発で異世界の日本に飛ばされる。

飛ばされた後、真霜の計らいと深町によって、龍之介達と共に海上安全整備局の指揮下入り、再び第343空母航空団第1小隊長として、ブルーマーメイドに入る。

黎明編でオバマ救出でヴィヴィオを救出し、義理の娘として、引き取る。

RAT事件では、田沼総理と野田の計略によって、フェイト達と共に拘束され、ブルーマーメイドの寮に監禁される。その後、真霜達の尽力で釈放され、龍之介の指揮下の元で武蔵と行方不明艦の捜索に参加。アドミラル・グラフ・シユペー戦では、安全圏に退避する晴風を支援する。

最終戦では、ゴジラ迎撃に活躍する。

容姿は、魔法少女リリカルなのはStrikerSの高町なのはをモデルにしている。

フェイト・テストロッサ（ふえいと・てすたろっさ）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属第343空母航空団第2小隊長

階級：大尉、一等保安監督正

出身：不明

誕生日：5月11日

血液型：A型

身長：165cm

趣味・特技：航空部門、事務

得意科目：理数系 体育

苦手科目：文系

好物：不明

苦手な物：なし

ニックネーム：フエイトちゃん

Gフォース西部方面艦隊所属の第343空母航空団第2小隊長、アメリカ出身で小さい頃、日本に留学した経験があり、その時に薰やはやて、なのはと友人に成になる。特になのはとは、かなりの関係。中学卒業後は、アメリカに戻って、空軍士官学校に入学、卒業後は、Gフォースに編入し、日本に派遣され、龍之介の部隊に第343空母航空団第2小隊長として配属される。配属後に薰やはやて、なのはと再会した。ゴジラ戦に参加。戦後は、大尉に昇進し、日本に移住する予定だったが、最後の任務である西太平

洋沖の哨戒任務中、ウララ島の核爆発で異世界の日本に飛ばされる。

飛ばされた後、真霜の計らいと深町によって、龍之介達と共に海上安全整備局の指揮下入り、再び第343空母航空団第2小隊隊長として、ブルーマーメイドに入る。

RATt事件では、田沼総理と野田の計略によって、フェイト達と共に拘束され、ブルーマーメイドの寮に監禁される。その後、真霜達の尽力で釈放され、龍之介の指揮下の元で武蔵と行方不明艦の捜索に参加。アドミラル・グラフ・シユペー戦では、安全圏に退避する晴風を支援する。

最終戦では、ゴジラ迎撃に活躍する。

容姿は、魔法少女リリカルなのはStrikeSのフェイト・T・テストロッサをモデルにしている。

徳吉 功（とくよし こう）

役職：Gフォース西部方面艦隊参謀長

階級：大佐、二等保安監督官

出身：広島県広島市

誕生日：2月5日

血液型：A型

身長：171cm

趣味・特技：事務

得意科目：全教科

苦手科目：なし

好物：不明

苦手な物：なし

ニックネーム：参謀

Gフォース西部方面艦隊参謀長。龍之介の右腕で艦隊の事務や指揮の統制を務めている。大学から国防軍に入隊したエリートで、ある事件で龍之介の協力の元により解決した事で、その事務的な腕を龍之介にかれ、参謀長としてGフォース西部方面艦隊に配属され、ゴジラ戦に参加。戦後は、大佐に昇進。最後の任務である西太平洋沖の哨戒任務中、ウララ島の核爆発で異世界の日本に飛ばされる。

飛ばされた後、真霜の計らいと深町によって、龍之介達と共に海上安全整備局の指揮下入り、参謀として、龍之介を支える。

古庄とは、如何いう訳か寮が隣と出身地が同じだった事で親しくなる。

RAT事件では、田沼総理と野田の計略によって、龍之介と共に拘束され、東京拘置所の特別牢に監禁される。監禁中に邦夫に自白剤を注射され、中毒状態に成る。その

後、真霜によって、救出され、横須賀病院で古庄と共に入院する。

最終戦では、古庄と共に横須賀女子海洋学校の増援部隊を率いて、武蔵救出に参加する

権藤 美由紀（ごんどう みゆき）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属戦艦高千穂艦長 ↓ 戦艦高千穂艦長及びG

フォース打撃部隊指揮官

階級：中佐、二等保安監督官、大佐

出身：東京都京橋区

誕生日：2月5日

血液型：O型

身長：167cm

趣味・特技：艦隊指揮

得意科目：全教科

苦手科目：なし

好物：不明
：不明

苦手な物：なし

ニツクネーム：教官

Gフォース西部方面艦隊所属戦艦高千穂艦長で功共々、龍之介の左腕。性格は、厳しくまた冷酷的もありながら、薫達隊員の事を心配する面もある。実は、第3次ゴジラ戦で殉職した権藤吾郎の妹であり、薫と次郎が学生時代の教官を務めていた。教官後は、自らGフォースに編入し、龍之介の部隊で第2部隊を指揮し、ゴジラ戦に参加。戦後は、中佐に昇進。最後の任務である西太平洋沖の哨戒任務中、ウララ島の核爆発で異世界の日本に飛ばされる。

飛ばされた後、真霜の計らいと深町によつて、不可侵ながら、龍之介達と共に海上安全整備局の指揮下入り、龍之介を支える。

RAT事件では、次郎共々、地中海遠征に出ていたが、晴風の訃報を聞いて、次郎達だけを逃がし、自らは、地中海に残る。

その後釈放され、急いで日本に帰還する。

事件後は、深町が自分の兄だと分かり、再会を喜ぶ。

新起動編では、もえかの能力に脅威を抱く。

その後、大佐に昇進し、ブルーマーメイドとホワイトドルフィンから戦力外だと見なされた隊員達の再教育訓練を行っている。

矢野 慶介（やの けいすけ）

役職：Gフォース兵器開発主任

出身：東京都

趣味・特技：兵器開発

得意科目：ロボット工学

Gフォース兵器開発主任で白鳳の開発者。東京大学を首席で卒業した天才研究者。専門は、ロボット工学だが、物理学も少しは、詳しい。かつては、スーパーXや機龍などの兵器を開発している。ゴジラを抹殺した芹澤大助を深く尊敬しており、彼が自ら命を捨ててまでオキシジェンデストロイヤーを兵器に転用するのを防いだ事に評価しており、自らも自分の兵器が戦争に使われるのを嫌がっている。

黎明編では、Gフォースとブルーマーメイドの技術を使ってハイブリッド戦闘機烈風を開発する。

RATt事件では、田沼総理と野田の計略によって、なのは達と共に監禁されるが、その後、真霜達の尽力で釈放され、事件で起きた謎の電子機器不良について、対処している。

新起動編では、白鳳修理及び改装と新型飛行艇深山の開発を行っている。

林 三郎（はやし さぶろう）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属特殊戦闘艦白鳳副長 ↓ Gフォース特殊部隊指

揮官

階級：少佐、三等保安監督官

Gフォース西部方面艦隊所属特殊戦闘艦白鳳副長で次郎のお目付け的な存在。

副長でありながら、次郎のやる事に何時も振り回される。

新起動編では、特殊部隊に編入する。

特別編では、真冬と共に海上プラントを制圧する。

岸田 文夫（きしだ ふみお）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属戦艦高千穂副長

階級：少佐、三等保安監督官

Gフォース西部方面艦隊所属戦艦高千穂副長で美由紀の補佐役。

矢代（やしろ）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属第343空母航空団第1小隊

階級：中尉

Gフォース西部方面艦隊所属第343空母航空団第1小隊の所属。

古野間 卓（このま たく）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属第21対生物特殊部隊第6小隊長

階級：少尉

Gフォース西部方面艦隊所属の第21対生物特殊部隊第6小隊所属で柔道・空手・レスリングなどを合わせて23段の段位を持つ、武道の達人でもあり、切り込み隊長。

黎明編では、仮想巡洋艦に部隊を率いて乗り込み制圧する。

RAT事件では、美由紀共々、地中海遠征に出ていたが、晴風の訃報を聞いて、次郎と共に晴風の元に向かう。その後、薫達の危機的な状況を救う。比叡戦では、比叡に乗り込み制圧する。

特別編では、三郎と共に海上プラントを制圧する。

桐野 俊秋（きりの としあき）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳主計科長兼料理長

階級：少佐

Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳の主計科長兼料理長。空母大鳳に乗艦する5

700人の食事を養っている。また、自分が作る料理に関しては、厳しく、ケチを付けると切れて、よく怒る。以前は、横浜中華街で働いていた。その履歴のせいかな、作るのは、いつも中華料理に成る。その為、龍之介の提案で当番制にしたので、本人は、それを嫌がっている。

晴風主計科の美甘、杵崎姉妹とは、同盟を結んでいる。

山崎文雄（やまざき ぶんゆう）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳整備班長

階級：技術少佐

Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳の整備班長。40代の爺さんで空母大鳳に20年間、整備士として勤めている大ベテラン整備士。艦載機の整備では、凄腕だが、あまり無理をし過ぎ、血圧が上がって、倒れる事もあり、そのせいで宗方に何時も怒られている。だが、2人は、酒の好で、たまに大山を誘って、3人で飲んでる事もある。

篠原 夏雄（しのはら なつお）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳機関長

階級：中佐

身長：146cm

趣味・特技：機関整備、博打

Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳の機関長。体格は、小柄ながら機関に関して、凄腕。実家は、千葉で銭湯を経営していて、幼い頃からボイラーの修理を手伝っていたので機関に関してはかなり詳しい。また、大の博打好きで、暇な時は、乗員から金を巻き上げている

晴風の機関長である麻侖とは、瓜二つで、時々、制服と髪留めを交換し合っている。

大山 歳郎（おおやま としろう）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳機関助手

階級：中佐

Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳機関助手。夏雄のお目付け役で補佐的な存在。功とは、大学の同期。山崎と宗方とは、酒の好で、たまに3人で飲んでる事もある。

宗方 悟郎（むなかた ごろう）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳軍医長

階級：少佐

Gフオース西部方面艦隊所属空母大鳳の軍医長。四六時中ウイスキーやブランデーを呷っている。だが、医者としての腕は、凄腕。かつては、軍病院で院長に成る程だったが、ある時、新天地を求めようと艦船の軍医長を志願する。山崎と大山とは、酒の好で、たまに3人で飲んでいる事もある。愛猫にミーくんと言う猫が居る。

容姿は、ドラマ大都会の宗方 悟郎をモデルにしている。

四葉 美奈（しば みな）

役職：Gフオース西部方面艦隊所属空母大鳳航海長

階級：大尉

Gフオース西部方面艦隊所属空母大鳳の航海長。性格は、しっかりしているが、たまに心配症に成り気が弱くなるところは、晴風航海長の知床 鈴に少し似ている。実と信吾とは、江田島海軍学校での同期で江田島三羽ガラスとも呼ばれている。

滝川 実（たきがわ じつ）

役職：Gフオース西部方面艦隊所属空母大鳳通信主。

階級：大尉

Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳の通信主。元々は、美術学校を受験しようとしたが、家が貧乏と学費の事で受験を諦めて、江田島海士学校を受験。美奈と信吾とは、江田島海軍学校での同期で江田島三羽ガラスとも呼ばれている。

辻 信吾（つじ しんご）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳砲雷長

階級：大尉

Gフォース西部方面艦隊所属空母大鳳の砲雷長。美奈と実とは、江田島海軍学校での同期で江田島三羽ガラスとも呼ばれている。

十六夜 五月（いざよい いつき）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属巡洋艦すくね艦長

階級：中佐

Gフォース西部方面艦隊所属巡洋艦すくね艦長。

南田 志津真（みなみだ しづま）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属巡洋艦すくね副長

階級：少佐

Gフォース西部方面艦隊所属巡洋艦すくね副長。

十条 紫音（じゅうじょう しおん）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦いばらぎ艦長

階級：中佐

Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦いばらぎ艦長。

高槻 渚（たかつき なぎさ）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦いばらぎ副長

階級：少佐

Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦いばらぎ副長。

片桐 士道（かたぎり しどう）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦ながおか艦長

階級：中佐

Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦ながおか艦長。

一木 優作（いちき ゆうさく）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦ながおか副長

階級：少佐

Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦ながおか副長。

四条 那月（しじょう なつき）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦きしゅう艦長

階級：中佐

Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦きしゅう艦長。

高坂天音（こうさか あまね）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦きしゅう副長

階級：少佐

Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦きしゅう副長。

柴田 徹（しばた とおる）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属補給艦せた艦長

階級：少佐

Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦補給艦せた艦長。

松田金太郎（まつだ きんたろう）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属補給艦せた副長

階級：大尉

Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦補給艦せた副長。

日下部みちる（くさかべ みちる）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属補給艦とよだ艦長

階級：少佐

Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦補給艦とよだ艦長。

向島 美冬（むこうじま みふゆ）

役職：Gフォース西部方面艦隊所属補給艦とよだ副長

階級：大尉

Gフォース西部方面艦隊所属護衛艦補給艦とよだ副長。

ミーくん

宗方の愛猫。

容姿は、松本零士のミーくんをモデルにしている。

晴風クラス

立石 志摩（たていし しま）

役職：航洋艦砲術長

所属：砲雷科

出身：千葉県館山市市営スポーツセンター船

誕生日：8月5日（しし座）

血液型：A型

身長：147cm

性格・特徴：無口で大人しい

趣味・特技：スポーツ観戦、ソフトボール

得意科目目：体育

苦手科目目：理科

資格・実績：中等丁種海技士

好物：カレー、チキンソテー、ロールケーキ

苦手な物：雑炊、おかゆ

好きな色：オレンジ

好きな言葉：沈黙は金

ニックネーム：タマちゃん

航洋艦晴風砲術長であり砲術委員。砲雷科所属。主に主砲指揮と、砲雷科全体の指揮を担当。人見知りで気が弱く他人とコミュニケーションを取るのが苦手なので、時々つたない会話をし、「うい」と返事する。そのため少ない言葉で言いたいことを理解してくれた明乃や薫には懐いている。また同じ砲雷科で艦橋勤務の芽依とは仲が良く、大抵一緒に行動する。物静かな見かけによらず身体能力は高く、中学時代はソフトボールの選手をしていた。それもあって、暇なときはバットを振り回している姿を見ることもある。また、動体視力も良好で、砲撃でも優れた成績を出している。だが砲術が得意な割には、理数系が今一つ苦手で、弾道計算も直感でやっている部分がある。勉強も理数系

より、実技系が得意で、その点でも明乃と気が合う模様。入試の成績は入学に充分であったが、コミュニケーション能力の低さから、艦のサイズが小さいため嫌でも他の人間との距離が近く、しょっちゅう顔を突き合わせる必要がある航洋直接教育艦クラスに配属させられた。自分でもコミュニケーションをもっととれるようになりたいとは思っており、上手く出来ない自分に対して鬱屈した感情を持っている。そのため、顔に全く出ないが内心ストレスがたまり気味である。

RATt事件では、RATtウイルスに感染し、暴走、晴風の補給に來た明石と間宮を銃撃するが、ヴィルヘルミーナに海へ投げ落とされて正氣に戻る。

西崎 芽依（いりざき めい）

役職：航洋艦水雷長

所属：砲雷科

出身：神奈川県川崎沖リチウム精製プラント

性格・特徴：せっかち

誕生日：1月28日（みずがめ座）

血液型：AB型

身長：146cm

趣味・特技：将棋、木工、魚雷戦ゲーム

得意科目目：日本史

苦手科目目：体育（の授業）

資格・実績：中等丁種海技士、将棋アマチュア一級

好物・うな重、シュークリーム

苦手な物：ざる蕎麦

好きな色：紫色

好きな言葉：鳴かぬなら殺してしまえホトトギス

ニックネーム：メイちゃん

航洋艦晴風水雷長であり水雷委員。砲雷科所属。主に魚雷指揮や各種甲板作業の指揮を担当。トリガーハッピーでとにかく撃ちたがる。機会があれば撃ち、機会が無くても無理やり機会を作って撃ちたがる。何かを撃っていればとにかく幸せ。そのせいかどうかは知らないが将棋に凝っていて、暇があるとひとりで将棋を目指している。性格的にはわがままかつ負けず嫌いで短気だが、好きなことをやっている時の集中力は極めて高い。特に趣味の木工の際は、一心不乱に物を作って時間経過を忘れるほど。また、謎の猫将棋というゲームをひそかに開発し、五十六と将棋盤に向かっていることも。勉強は工作や歴史などの好きな科目にはとても強いが、嫌いな科目はとても弱い。また活

発な見かけによらず運動が苦手で、更にはスタミナが無いので長距離走や遠泳が嫌い。それでも、弾道計算に必要な三角関数を必死で覚えて、理論的に雷撃を行えるように努力するという一面もある。頼れる姉御肌の人間に憧れていて、そうなりたいと常々思っている。他人のことをよく見ていて、機に入った人間に対してはちゃんと面倒をみようと思っている。ただし、性格が基本的に子供なので、その理想にはほど遠い。志摩とは仲が良く、大抵一緒に行動する。

納沙 幸子（のさ こうこ）

役職：航洋艦乗組士官

所属：主計科

出身：東京都品川区

性格・特徴：オーバーな一人芝居をする

誕生日：5月28日（ふたご座）

血液型：O型

身長：155cm

趣味・特技：読書、映画鑑賞、タブレットでの撮影

得意科目：世界史

苦手科目：美術

資格・実績：中等丙種海技士、データベーススペシャリスト、基本情報技術者、映画
検定2級、歴史能力検定1級

好物：豆腐、くずもち

苦手な物：鍋料理

好きな色：緑色

好きな言葉：ゆりかごの中で覚えたことは墓場まで忘れない

ニックネーム：ココちゃん

航洋艦晴風乗組士官であり記録員・書記。主計科所属。艦橋での雑用一般や艦内の記録全般、艦内ネットワークの管理を担当。艦と乗員のほとんどのデータと、学校所属艦だけではなく、世界中の艦艇の大まかなデータや、海図など航海に必要なデータが手にしたタブレットに入っている。データ収集が好きで、暇さえあれば新たなデータをタブレットに蓄えつつ、それを覚えるようにしているが、それ以上に妄想の世界に生きるのが大好き。現実よりも自分の妄想の方が重要であるが、一応必要なデータと妄想を切り分けるだけの分別は持っている。というか、自分の知識が頼りにされると喜々として饒舌になり懇切丁寧に説明する。また、役割柄航海日誌をつけているが、それと同時に自分の妄想で構築した裏航海日誌も精力的に書いており、艦内ネット上で公開しているの

で、一部のクラスメートにはそれが人気の模様。データ主義なので暗記型の勉強はとて
も得意で成績も優れているが、データで割り切れない美術などの科目は極めて苦手。黄
金比を知って、美術もデータで割り切れると思つて絵画にチャレンジしたが、頭で思つ
た物を画面上に落とし込むのが壊滅的にダメで、よけい苦手になつた。また、任侠映画
が大好きで、そのせいかヴィルヘルミーナと意気投合して親交を深め、広島弁で話を
するようになる。彼女がスーパーに戻つて意気消沈するが、むしろが広島弁で接したの
をきっかけに彼女に懐くようになり、一方的な親友関係になる。

知床 鈴（しれとこ りん）

役職：航洋艦航海長

所属：航海科

出身：島根県日御碕沖海上神社

誕生日：10月29日（さそり座）

血液型：O型

身長：148cm

性格・特徴：超心配性

趣味・特技：海生哺乳類鑑賞、逃げ足が速い

得意科目：生物、美術

苦手科目：社会

資格・実績：中等丙種海技士

好物：シーフードパスタ、キャラメル

苦手な物：サンドイッチ

好きな色：薄水色

好きな言葉：三十六計逃げるにしかず

ニックネーム：リンちゃん

航洋艦晴風航海長であり、航海委員。航海科所属。主に操艦を担当、通常時は自ら舵を握っている。航海科全体の指揮も担当。心配性で気が弱く、いつもおどおどしている。ストレスで胃が痛くなることも多く、胃薬が手放せないためポケットには色々な胃薬が入っている。可愛い生き物が好きで、特に海生哺乳類系は大好き。また、そうした動物のスケッチも好きで、暇があったら艦内でイルカのスケッチをしたり、イルカのアクセサリーを作りたいと思って、道具だけは持ち込んでいる。逃げ足は天下一品で、また逃げるための準備も日々欠かさない。そのため、余裕のある時は機関員に機関の調子を聞いて、出せる最大の速度を調べ、また舵のメンテナンスも徹底的に行い、更には航路図を細かくチェックして、最適な航路を考えている。事前に石橋を叩いて、叩いて、超

音波探査までやっておくような慎重派。性格は真面目だが逃げる以外にはあまり真剣に取り組めなく、またどこか要領が悪い。勉強はそこそこで、運動も逃げる時以外はそこそこ。本人も自分の取り柄のなさや気の弱さに悩んでいる。幼い頃より怖いことや嫌なことから逃げてばかりの選択や生き方をしてきたため、大好きな海で船に乗ればどこにも逃げられず、自分を変えることができるかもという理由でブルーマーメイドを目指す。晴風に乗りに入っても結果的に艦ごと逃げている自分に落ち込んでいたが、明乃から励ましの言葉をもらったのをきっかけに、危機や困難にも立ち向かう勇気を持つとうと努力しており、自分に自信を持たせてくれた明乃を懸命に支える。

小笠原 光（おがさわら ひかり）

役職：砲術員、主砲照準担当

所属：砲雷科

出身：山梨県甲府市

誕生日：10月25日（さそり座）

血液型：B型

身長：155cm

性格・特徴：前向き

趣味・特技：ダーツ、茶道

得意科目：物理

苦手科目：生物

資格・実績・乙種危険物取扱者1, 2, 3, 5, 6類

好物：馬肉

苦手な物：ピーマン

好きな色：菖蒲色

好きな言葉：一発必中

ニックネーム：ヒカリちゃん

砲術員で主砲照準担当。好きな言葉は一発必中。その言葉の通り、小さい時からダーツや輪投げなど物を投げて的に当てるのが好きで、そこからどうやったら一発必中するかを考えるようになり、運動法則に関する勉強に積極的になった。もう一つの趣味の茶道は、親戚の叔母が茶道の師範のため半強制的に教えられている。小学生の時に兄の物理教科書を眺めていたのを目撃されているほどで（ただし、逆さにしていたので途中で分からなくなつて飽きたと思われる）、数学と物理にはとても詳しくなつた。逆に計算で割り切れないものは今一つ苦手で、得意な理系でも生物は「数式で割り切れない」という理由で好まない。同様に、国語の問題で「作者が何を考えているか」系の質問は大

嫌い。また的に当てるために遠くばかり見ていたので、視力は2, 0以上でたまに昼間に星が見えるらしく、目算で対象までの距離を測るのにも長けている。美千留とは中学は別だったが、互いの学校から距離的に中間の場所に射的やビリヤード、ダーツなどが遊べるカフェが有り、遊んでいる内に互いに顔馴染となり仲良くなった。

武田 美千留（たけだ みちる）

役職：砲術員、主砲旋回担当

所属：砲雷科

出身：山梨県甲州市

誕生日：1月11日（やぎ座）

血液型：B型

身長：162cm

性格・特徴：ポジティブ

趣味・特技：ビリヤード

得意科目：物理

苦手科目：地理

資格・実績：乙種火薬類製造保安責任者資格

好物：イノシシ肉、柏餅

苦手な物：トマト

好きな色：えんじ色

好きな言葉：百発百中

ニツクネーム：みつちん

砲術員で主砲旋回担当。好きな言葉は百発百中。将来の夢として大型艦の砲術長を目指していたが、中学時代に急速に視力が落ちたので、何でもいいから砲術に関係したことをしたいと変更。視力が落ちた原因が猛勉強のせいか、それとも運動法則を調べているうちにビリヤードにはまったためかは不明。砲術関係の勉強の一環として、地学、天分、気象などにも積極的に取り組んだが、どうも地理だけは今一つ苦手で、三重県の名物は鹿だと思っている。それもビリヤードにはまる一因だったとか。私物としてビリヤードセットを晴風にまで持ち込んできているが、残念ながらやる場所がなく、また船の上では揺れが激しくて場所があっても難しいのを残念がつている。何でも昔見た映画で、豪華客船でビリヤードをするのを再現したかったとのこと。そのかわりと言うわけではないだろうが、私物で持ち込んだ花札が、妙に砲術指揮所の中で人気となっている。性格はSっぽく、ポケポケの光と順子のツツコミ役に回っている。光とは中学は別だったが、互いの学校から距離的に中間の場所に射的やビリヤード、ダーツなどが遊

べるカフェが有り、遊んでいる内に互いに顔馴染となり仲良くなった。

日置 順子（へき じゅんこ）

役職：砲術員、主砲発射担当

所属：砲雷科

出身：三重県津市

誕生日：2月5日（みずがめ座）

血液型：B型

身長：153cm

性格・特徴：明るい

趣味・特技：輪投げ

得意科目：物理

苦手科目：化学

資格・実績：甲種火薬類製造保安責任者資格

好物：シカ肉

苦手な物：ブロッコリー

好きな色：若草色

好きな言葉：全弾命中

ニツクネーム：じゅんちゃん

砲術員で主砲発射担当。初対面の人がちゃんと苗字を「へき」と呼んでくれないのが悩みの種。小中の頃の同級生でも、なかなか覚えてもらえないのを気にしていたが、すぐに覚えてくれた光と美千留にとともうれしかった模様。また、晴風に乗艦した時から明乃がフルネームを覚えていて、呼びかけたのにとっても驚き、比較的最初から明乃には好意を持っている。割とのんびりした見かけだが、他の砲術担当と同じく砲術員を目指して努力しており、弾道学を体感的に学ぶために輪投げの練習を行う。その成果か物理学、流体力学、数学、地学、気象は十分に理解したが、残念ながら輪投げでは物性まで必要ななかったのか、化学はやや苦手。それもあって、砲弾の性質や発射薬などの知識は今一つ。性格は基本のんきで明るい。理系に強い割には、「バキュン」といった擬音を多用した言葉が多く、またそのほんわかとした見かけと相まって文系タイプとよく誤解される。光と美千留の出会いについて、某仁義の無い展開を勝手に妄想をしたどこかの記録係と似たような妄想癖の持ち主でもある。

松永 理都子（まつなが りつこ）

役職：水雷員（一番発射管担当）

所属：砲雷科

出身：群馬県吾妻郡

誕生日：10月12日（てんびん座）

血液型：B型

身長：156cm

性格・特徴：おっとりとしている

趣味・特技：ボウリングの達人

得意科目：数学

苦手科目：世界史

資格・実績：丙種二級小型水上免許（中型スキッパー免許）、丙種火薬類製造保安責任者資格

好物：バター、シュークリーム

苦手な物：マーガリン

好きな色：紺色

好きな言葉：人生は一度だけ

ニックネーム：りっちゃん

航洋艦「晴風」の1番魚雷発射管の旋回操作及び発射の担当。海のない群馬県育ち

だったので、小さい時に連れて行ってもらった海に憧れて、横須賀海洋学校を志望。また、国内トップクラスの実力を誇るプロボウラーだった母の影響で、ボウリングの腕は達人級。甲板から打ち出され海中を走り目標に向かっていく魚雷の動きにボウリングと通じるなにかを感じ、水雷員を目指す。なお母の嫁ぎ先、すなわち理都子の実家は老舗の温泉旅館で、おっとりして物柔らかだが人見知りをしない性格から、両親や祖父母は良い跡取りになってくれると期待していた。だが「人生は一度だけ」だから好きなことをやりたいと珍しく主張したため、本人の希望を優先した。それでも家族は、ある程度海の仕事をやったら、帰って来て欲しいとは思っている模様。また、実家の経理の手伝いを小さい時からしていたためか、それとも実家近くの神社にあつた和算額を見るのが好きで、祖母にその解法を教わったりしていたためか、計算能力にも長けている。特にそろばんは段持ちで、暗算も得意。意外に運動神経も良く、中学時代に頑張つて榛名湖の教習所に通つてスキッパー免許を取得。明乃を含めて晴風に4名しかいないスキッパーの免許所持者のひとりでもある。

RATt事件では、スキッパーを操縦して果代子と共に機雷の掃海を行う。

姫路 果代子（ひめじ かよこ）

役職：水雷員（二番発射管担当）

所属：砲雷科

出身：東京都練馬区

誕生日：8月2日（しし座）

血液型：A型

身長：148cm

性格・特徴：のんびりしている

趣味・特技：ボウリングの名人

得意科目：数学

苦手科目：英語

資格・実績：中等クレーン・デリック運転士免許

好物：ナス

苦手な物：山菜

好きな色：ライトグリーン

好きな言葉：常に先のことを考えよ

ニックネーム：かよちゃん

航洋艦「晴風」の2番魚雷発射管の旋回操作及び発射の担当。母親が遠洋定期船の乗員で、たまにしか家に帰ってこられないが、帰宅の際には制服を着てキリツとした姿に

憧れる。また、世界中の色々なお土産を持ってきてくれて、更にとても可愛がつてくれるのが嬉しく、自分も海洋関係の仕事をしようと小さい時から思っていた。父親は世界に通用するレベルのポロポウラーで、時々母親の船で海外に行くこともあり、そういう時は一緒に連れて行ってもらっていたので、海にはとても強い憧れを抱いている。両親からは、民間船の乗員養成校を勧められていて、本人も割とその気だったが、港でたまに見かけたブルーマーメイドの制服を見て、衝動的に横須賀海洋女子への進学を決める。小さい時から海外旅行をしていたので、英語は聞き取れて意味も分かるのだが、性格的な問題か、会話が苦手なのか密かな悩み。それもあつて、不特定多数の各国人と交流する必要のある民間船ではなく、ブルーマーメイドを選んだという説も。

RAT事件では、理都子と共に機雷の掃海を行う。

万里小路 楓（まりこうじ かえで）

役職：水測員、ラツパ手

所属：砲雷科

出身：愛知県名古屋市

誕生日：3月3日（うお座）

血液型：A型

身長：158cm

性格・特徴：落ち着いた佇まいで、極度の丁寧口調

趣味・特技：楽器演奏（管楽器以外）

得意科目：音楽

苦手科目：なし

資格・実績：万里小路流薙刀術免許皆伝、2級音響技術者

好物：きしめん

苦手な物：そうめん

好きな色・蔭色

好きな言葉・旅をしない音楽家は不幸だ

ニックネーム・まりこうじさん、まりこー

水測員でラツパ手担当。個人でフロート船を持つているほどの超お嬢様。普段から現金は持たず、小切手帳とクレジットカードのみ。それ以前に支払いはじいやがしてくれるので、物の値段があまりよく分からない。小さい時からヴァイオリンを習っており、腕前はプロ級。それだけではなく弦楽器を一通りマスター、次いで鍵盤楽器もマスターした。だが、管楽器は勝手が違ったのか、かろうじて吹ける程度。本来ラツパ手は艦橋要員が行うが、晴風には他にラツパの音を出せる人間すらいなかったため、担当し

ている。腕前はなかなか上達せず、時々艦底方面から不気味なラツパの音が聞こえるとして、一時期は怪談になっていた。また、お嬢様然とした見かけの割には運動神経も良く、家に伝わる万里小路流薙刀術免許皆伝の腕前であり、シュペー救出作戦では、突入班として参加している。そういった姿からよく誤解されているが、公家の万里小路家とは関係がなく、実家は幕末から明治にかけて造船と貿易で財を成した財閥。現在も、東海地方で使用されている居住用のフロート船の大部分は、万里小路重工が建造している。

RATも事件では、アドミラル・グラフ・シュペー救出作戦で突入班として、アドミラル・グラフ・シュペーに向かう。

勝田 聡子（かつた さとこ）

役職：航海員、予備操舵員

所属：航海科

出身：愛媛県松山市

誕生日：10月1日（てんびん座）

血液型：O型

身長：160cm

性格・特徴：さばさばしている

趣味・特技：ロシア語、ロシア文化

得意科目：政治経済、社会

苦手科目：化学

資格・実績：中等丙種海技士、丙種二級小型水上免許（中型スキッパー免許）

好物：ピロシキ

苦手な物：さつまいも

好きな色：シルバー

好きな言葉：約束は鉄のごとし

ニックネーム：サトちゃん

航海員および予備操舵員。通常は海図室で海図管理をしているが、予備操舵員として、航海長が舵を取れない時は交代する。もともと基本的に、艦橋要員は最低でも当直時に全員舵取りをさせられる。戦闘になると忙しいから、暇な時に遊んでいる五十六が邪魔になるので追い出すのが大変。また、スキッパー免許所持者4名のうちのひとり、シユペー救出作戦では突入班として明乃とともにスキッパーを操縦している。松山出身で、日常会話でも伊予弁を使用していたが、それだと会話が成り立たなくなるので、海洋学校を志した時に標準語で話すようになっていた。それでも気が緩むと伊予弁が

出る。実家が過去に海洋関係や貿易関係の仕事をしていたためか、実家の蔵になぜかロシアの絵本やおもちやが大量にあり、子供の頃からそれらに触れているうちにロシアの文化が好きになった。また、過去に実家の持ち船だった貨客船がスクラップとして家の近くに放置されており、そこが遊び場だったことが海洋学校を志すきっかけになったとも。

RATt事件では、アドミラル・グラフ・シユペー救出作戦で突入班として、アドミラル・グラフ・シユペーに向かう。

山下 秀子（やました ひでこ）

役職：左舷航海管制員

所属：航海科

出身：神奈川県横須賀市

誕生日：12月13日（いて座）

血液型：A型

身長：145cm

性格・特徴：慎重

趣味・特技：聞き上手

得意科目：政治経済、社会

苦手科目：数学

資格・実績：クリーニング師

好物：湯豆腐、みかんゼリー

苦手な物：すっぱん

好きな色：深緑

好きな言葉：石橋を叩いて渡る

ニックネーム：しゅうちゃん

左舷航海管制員。いつも閉じているような目なのに、とても視力が良い。実家が横須賀のクリーニング屋で、ブルーマーメイドの制服を見かけることも多く、また艦艇の公開時に見たマストの信号旗が洗濯物のようで、そこからブルーマーメイドに興味を持った。とても聞き上手で、色々な人が相談を持ちかけて、気が付くとかなりの時間がたっていることも珍しくない。しかも話すつもりがなかった色々なことまでも話すほどで、将来的には警察の尋問役やマスコミ関係が向いているのではと周囲から言われるが、本人は興味が無く、その上聞いた話をまるごと忘れていく様子。それ以外の暇な時は、地道にコツコツ勉強をしており、予習復習を欠かさず、かなり先のカリキュラムまで進んでいる模様。ただし、数学だけは苦手で、時々松永、姫路のふたりに教えて貰っている。

彼女たちの姿をみてか、いつの間にか第三兵員室全体の勉強会に広がったとか。実は体育会系らしい。

内田 まゆみ（うちだ まゆみ）

役職：右舷航海管制員

所属：航海科

出身：茨城県行方市

誕生日：12月6日（いて座）

血液型：B型

身長：158cm

性格・特徴：おだやか

趣味・特技：柔道

得意科目：政治経済、社会

苦手科目：物理

資格・実績：測量士補、柔道一級

好物：マグロの寿司

苦手な物：麦飯

好きな色：ゴールド

好きな言葉：一攫千金

ニックネーム：まゆちゃん

右舷航海管制員。基本的に山下とペアで行動することが多い。実は、知床鈴とは幼馴染で、その逃げ逃げ人生の巻き添えをちよくちよく食らっている。子供の頃から柔道を習っていて、そこそこ強く、中学時代に段を狙えるほどだった。特に寝技での抑え込みや関節技は大得意。しかし立ち技は苦手で、今一つ伸び悩んでいる。彼女の褐色の肌は日焼けによるものだと言っている。性格的にも、割とがつつく方だが、根本的な部分では穏やかで闘争心に欠ける面も。好きな言葉は一攫千金で、毎月お小遣いの範囲内で宝くじを買い続けている。ちなみに当たった時の使い道は秘密。余暇の過ごし方が人生設計であり、割と綿密な将来を夢想しているところがあるので、恐らく衣食住に使うのでは、と周囲には思われている。本人はゴージャスでセレブな生活を夢見ている所があり、貧乏臭いのが嫌い。ブルーマーメイドを志したのは、世界中を航海して各寄港地で宝くじを買うため。

八木 鶴（やぎ つぐみ）

役職：電信員

所属：航海科

出身：茨城県行方市

誕生日：1月28日（みずがめ座）

血液型：O型

身長：151cm

性格・特徴：不思議ちゃん

趣味・特技：ダウジング、アマチュア無線

得意科目：物理

苦手科目：社会

資格・実績：三級海上無線通信士、気象予報士

好物：甘酒、こんぺいとう

苦手な物：こんにゃく

好きな色：黄色

好きな言葉：間違った知識には注意せよ。それは無知よりも危険である。

ニックネーム：つぐちゃん

電信員。電信室で、周囲の通信傍受や関係各所との無電連絡、艦内電話やネットワークサーバの保守管理、広域無線システムなどを担当している。入学前からの友達である

慧とペアになる機会が多い。横須賀にある諏訪神社の跡取り娘（母親が床屋を兼業）で、中学時代から家の手伝いをしている。何を考えているのか、今一つ分からない所があるが、タブレットでの文字入力には正確かつ素早く、連絡の正確さにも定評がある。ダウジングが趣味であり、小学時代には学校の運動場から油田を発見したり、中学時代に学校の裏庭で温泉を掘り当てるようなことも。実家の神社でも、ダウジング占いをこつそりやっております、結構当たるとして一部ではたいへんな人気。また、海洋学校入学を志したのも、ダウジングの結果。因みに、その際に使っているダウジング・ロッドは小さい頃はただの棒だったのだが、徐々に棒が増えてアンテナ型になっていった。知識収集欲が強く、普段は暇さえあれば電子書籍を読みふけっている読書家。コミックス版では多忙な正月に偶然訪れた鈴を神職関係者と見抜き、手伝わせた。母は理容師を兼業している。

宇田 慧（うだ めぐみ）

役職：電測員

所属：航海科

出身：富山県下新川郡

誕生日：6月1日（ふたご座）

血液型：A B型

身長：148cm

性格・特徴：リアリスト

趣味・特技：カメラ、アマチュア無線

得意科目：物理

苦手科目：国語

資格・実績：二級海上特殊無線技士

好物：本格インドカレー、あんみつ

苦手な物：甘納豆

好きな色：ワインレッド

好きな言葉：逆境もよし、順境もよし

ニックネーム：めぐちゃん

電測員。電側室で航海用レーダーの管理を担当している。八木と共に、艦内ネットワークサーバの保守管理も行っており、無線関係の知識もあるのでメンテナンスの手伝いもしている。小さい時から家にあつた祖父のカメラとアマチュア無線を一緒に弄っていたので、それらが趣味となつている。デジタル一眼も好きだが、基本的には銀塩カメラが大好き。さすがに晴風に現象機材を持ち込めなかつたので、仕方なくデジ―を持

ち込んでいる。好きなカメラメーカーは大日本光学。艦内の双眼鏡がすっかり手入れされていないのを見かけると、こつそりメンテナンスしている。カレー好きで、晴風カレーも悪くないと思っているが、本当に好きなのは本格的なインドカレー、特にチキンマサラとキーマカレー。タンドリーチキンとナンとラッシーが欠かせない。そのため、自分でナンが焼けないか艦内で色々試している。ただし甘納豆が苦手。前日談では鵜に神社の手伝いに呼ばれており、その時に「相変わらずすごい人数だね」と言っているため、昔から交友があるものと思われるが、詳細は不明。鵜の脅威のダウジング能力を知っているものの、未だ懐疑的なりアリスト。だが、やはり怖いものは怖いのか、暗い医務室でネズミを解剖中の鏑木美波を見て「お化けー！」と叫んで驚いた。狭い通路で伊勢桜良とすれ違った際、彼女の胸に顔が埋まってしまい、それ以来おっぱい星人に目覚めたらしい（ここでもか！）。彼女の晴風乗員を中心にはいふりキヤラのおっぱいランキングメモをしている。

野間 マチコ（のぎ まちこ）

役職：見張員

所属：航海科

出身：群馬県渋峠天文台

誕生日：7月19日（かに座）

血液型：O型

身長：165cm

性格・特徴：超目が良いが、遠視のためいつもは眼鏡をかけている。よくウトウトしている。

趣味・特技：天体観測・夜目が利く、優れた運動神経

得意科目：理科（天文）

苦手科目：国語

資格・実績：星空宇宙天文検定1級

好物：ブルーベリー、あんまん

苦手な物：栗

好きな色：深緑

好きな言葉：天には星、大地には花、人には愛

ニックネーム：マツチ

見張員。マスト上方にある見張所で、周辺の見張りを担当。小さい頃から山野を駆け巡っていたので、たぐいまれなる運動神経と平衡感覚を身に付けた。シユペー救出作戦時には突入班に参加し、海水入りの水鉄砲2丁でシユペーの乗員と渡り合っている。ま

た育ちからか、高い所が平気なため、揺れる細いマストの上にも余裕で立つほど。また、マストに登る時もいちいちしごを使うのが面倒と、ワイヤーをマストに引つ掛け、それを使って上がり下りしている。日本の国土最高地点からほど近いところにある天文台出身で、そこで天体観測をしていたので非常に視力が良く、昼間の星が見えるという噂も。ちなみに、眼鏡をかけているのは遠視矯正のためなので、実はかなり目がいい。そのため、見張り任務中には眼鏡を額に持ち上げて、遠くの目標を確認している。教室で席が一番後ろであるのもこれが関係し、前の席だと逆に見えづらいためである。夜に強いが、昼間は今一つで、仕事が無い時は見張台でウトウトしていることも珍しくない。一部の女子からはモテモテだが、本人はあまりその意識が無く、それ以上に他人とのコミュニケーションを面倒だと思っており、ひとりであることを好む。それもあって、見張員を志願した。ただ、本格的には船に乗るよりも車に乗る方が好きで、海洋学校に入らなければレーサーになりたかった。

RATt事件では、アドミラル・グラフ・シュペー救出作戦で突入班として、アドミラル・グラフ・シュペーに向かう。

柳原 麻命（やなぎはら まろん）

役職：機関長

所属：機関科

出身：千葉県銚子港所属統合漁業船

誕生日：8月8日（しし座）

血液型：A型

身長：146cm

性格・特徴：千葉県生まれだが、心は江戸っ子。

趣味・特技：機関整備、魚を捌く、魚料理

得意科目：数学、技術

苦手科目：英語

資格・実績：中等甲種海技士（機関）、幼年特級ボイラー技士、丙種危険物取扱者

好物：焼き肉

苦手な物：刺身

好きな色：黄色

好きな言葉：汝の隣人を愛せよ

ニックネーム：マロンちゃん

航洋艦晴風機関長で機関委員。すぐに調子の悪くなる晴風の機関のおもりをよくしている。機関室に籠っていることが多いが、艦内の人間関係にはそれとなく気を配って

いる。黒木とは幼馴染でクルールに見えて、実は優しくて色々な所でフォローしてくれる彼女を深く信頼しており、ずっと友達でいたいと思っている。また、横須賀女子海洋学校に入学したのも彼女と同じ高校に入ると決めていたため。黒木と一緒にいられないと、時たまダダをこねる。薫とは、信用できる教官として、よく彼女に助けられている。黒木と薫がもめ事を起こしている時にも割って入ることもある。小さい頃から祖父の漁船の機関修理を手伝っていたため、機関修理とちよつとした部品の自作は得意。記憶力は高く、一度見た図面は大体忘れないが、忙しくなると細かい部分は思い出せなくなることも。しかし、大雑把な性格が災いであり、試験の際には『部品は少ない構造のほうが優秀なんでい！』と、用意された部品が余らした。これが優秀なれど晴風配属となった原因という推測もある。中学でも船舶工学を優先して勉強、機関関連のみならず燃料関係や造船関連にまで手を出していたほどである。そのためか、ほかの授業がおろそかになることもあり、その場合は黒木に助けて貰っていた。修理をしながら祖父の好きな時代劇と一緒に見ることも多く、そのため言葉遣いも江戸っ子風のべらんめえ調になった。晴風に乗ってから黒木がましろに関心を持ち続ける姿を見て、内心は落ち込んでいる。

黒木 洋美（くろき ひろみ）

役職：機関助手

所属：機関科

出身：千葉県銚子市

誕生日：11月1日（さそり座）

血液型：O型

身長：169cm

性格・特徴：ましろに憧れている

趣味・特技：ストレッチ、醤油作り

得意科目：化学

苦手科目：国語

資格・実績：銚子市女子相撲大会 個人中学生の部 優勝、中等乙種海技士（機関）、

幼年一級ボイラー技士、煙火消費保安手帳、乙種危険物取扱者2く4類

好物：シナモントースト、シナモンケーキ、トースト

苦手な物：ピーマン

好きな色：クリーム色

好きな言葉：愛は惜しみなく与う

ニックネーム：クロちゃん

航洋艦晴風機関助手。基本的には麻命の公私に渡るサポーター役。昔から機械関係なら大抵のことが出来る麻命だが、それ以外の部分が抜けていることが多く、フオローに回っていた。何かあると舞い上がりがちな麻命に対して、常に一步引いて冷静になる場合が多い。そのため表面上はクールで冷静沈着に見えるが、内心は情熱家で思い込みが激しい所があり、一度何かにはまるとのめり込む。例えば、実家は別に醤油に関係ないにも関わらず、幼いころに見学した醤油工場で見た醸造工程と、近くに置いてあったディーゼル機関車にはまって、自家製醤油作りや機械弄りが趣味になったことも。この性質からか、中学の時に進路で悩んでいたが、入学前に、ブルーマーメイドフェスタや試験会場でましろや薫と出会い、その時の出来事がきっかけで彼女らに強い憧れを持つようになり、ブルーマーメイドを目指すようになった。(しかし、ましろのことになるとうまく薫と対立する。)なお、麻命は『クロちゃんがぼつと出の女にとられる』と焼きもちを焼いている。麻命の相方として、また機関助手という立場から機械弄りもそれなりに得意だが、それ以上に燃料や潤滑油、火薬などに詳しい。なお醤油作りの際は麻命も巻き込まれているが、ディーゼル機関弄りが楽しく、主にそっちに精を出していた。相撲が強く、多彩な技を巧みに繰り出す業師であり、地元の水相撲大会で優勝したこともある。入学後は、晴風でましろと同じ艦になったことを喜んだが、ましろではなく岬明乃が晴風の艦長を務めている事に関しては不満をあらわにする。

若狭 麗緒（わかさ れお）

役職：機関員

所属：機関科

出身：神奈川県三浦郡葉山町

誕生日：5月18日（おうし座）

血液型：A型

身長：157cm

性格・特徴：愚痴っぽい

趣味・特技：麻雀、目が良い

得意科目：物理

苦手科目：国語

資格・実績：中等丙種海技士（機関）、幼年2級ボイラー技士

好物：お好み焼き、芋ようかん

苦手な物：納豆

好きな色：シアン

好きな言葉：東西南北

ニックネーム：レオちゃん

機関員で晴風の機関員四人衆その一人。桜良、留奈、空と共に暇な時はカード麻雀をしてる。チーやポンなどの鳴きを多用するので、上がっても点が安く、トータルとしては負けていることが多い。視力が良く、見張り員の打診も受けたが、機関員志望であつたので断っている。また、父親がヨットレースに参加していたため、小さな時から小型ヨットのディングーに乗っていた。ただ、性格的な問題か、中学時代にはディングーに乗るのはやめてしまつて、むしろ小型スキッパーの免許が欲しかつた模様。残念ながら父親の反対で、免許は取得出来なかつたので堂々と資格が取れる女子海洋学校を志望した。普段あまり勉強しないのに、付け焼刃でも受験勉強を頑張つて合格できたのだから、普段からまじめに勉強をしていればもう少し成績が良かったかもしれないのと家族を嘆かせている。シーフードのお好み焼きが好物で、自分で釣りをすることもあつた。本人曰くチーズやベーコンは邪道らしい。でも目の前にあつたら文句言いつつも食べる。この4人の中では特に愚痴を吐くタイプ。

伊勢 桜良（いせ さくら）

役職：機関員

所属：機関科

出身：神奈川県三浦郡葉山町

誕生日：11月21日（さそり座）

血液型：B型

身長：163cm

性格・特徴：色っぽい

趣味・特技：麻雀

得意科目：物理

苦手科目：国語

資格・実績：中等丙種海技士（機関）、お好み焼き検定特級

好物：お好み焼き、栗ようかん

苦手な物：オクラ

好きな色：マゼンタ

好きな言葉：上下左右

ニックネーム：サクラちゃん

機関員で晴風の機関員四人衆その一人。麗緒、留奈、空と共に暇な時はカード麻雀をしている。手役作りに凝り過ぎ、さらにはおっとりとした性格からか相手の手まで見ている余裕が無く、よく先に上がられている。晴風乗員の中では胸が最も大きい。それ故

か、ミーナ、薫の入浴時に彼女らの胸を見た際、悔しそうな顔をしていた。マリンスポーツ一般が大好きだったが、海水浴をしているとすぐにナンパされるのが嫌で、知らない人が多いビーチには行かなくなった。それを聞いた祖父が、知り合いにプールを貸してくれるように頼んでくれたので、もっぱらプールで泳ぐようになる。祖父の知り合いはかつてどこかの船で機関長をしていたとかで、プールに通ううちに海や機械いじりの仕事を教えてくれるようになった。また、そのプールにはブルーマーメイドも遊びに来ており、海洋女子学校に興味をもっており、資格をたくさん取って機械関係に進みたいと思っている。

駿河 留奈（するが るな）

役職：機関員

所属：機関科

出身：神奈川県三浦郡葉山町

誕生日：12月14日（いて座）

血液型：A B型

身長：152cm

性格・特徴：バカっぽい

趣味・特技：麻雀

得意科目：物理

苦手科目：国語

資格・実績：中等丙種海技士（機関）、幼年1級ボイラー技士、普通ボイラー溶接士

好物：お好み焼き、練りようかん

苦手な物：なめこ

好きな色：イエロー

好きな言葉：春夏秋冬

ニックネーム：ルナちゃん

機関員で晴風の機関員四人衆その一人。麗緒、桜良、空と共に暇な時はカード麻雀をしている。ただし、下手の横好きかつ、ルールをちゃんと理解していないので、よくチョンボをする。当然点数計算も分からない。実際、彼女4人の中で唯一補欠合格であり、本合格者発表に自分の番号がなかった時、ヤケになって「人間なんてやめてやるうー!!!」
 「私は今日からお魚さんとして生きる」などと叫び、冬の海へ飛び込んだ。（ちなみにその後勝田聡子に救助された模様）反面、ビギナーズラックなのか、ときどき大きな手で上がることも。父親が機関に関してには非常に有能な造船技術者であり、留奈も小さなころから仕事部屋に入り浸って、父親の書く設計図をまねた落書きをしていた。ある時、

父親がその落書きからインスピレーションを得て、一週間製図室に籠ったこともある。機関の構造と熱力学に関しては非常に優秀だが、それをうまく口で説明するのが苦手。ただ、麻侖とはスパナの振り回し方で意思疎通できる模様で、ボイラーの修理に関しては彼女の助手を務めている。慧にナンを作れないか相談を受けて、幸子がネットで調べた図面を元に、空と共にボイラーの熱を利用するタンドール釜の自作に挑戦しているが、まだ完成していない。

広田 空（ひろた そら）

役職：機関員

所属：機関科

出身：神奈川県三浦郡葉山町

誕生日：12月1日（いて座）

血液型：O型

身長：157cm

性格・特徴：皮肉っぽい。

趣味・特技：麻雀

得意科目：物理

苦手科目：国語

資格・実績：中等丙種海技士（機関）、丙種危険物取扱者

好物：お好み焼き、水ようかん

苦手な物：じゅんさい

好きな色：ブラック

好きな言葉：朝三暮四

ニックネーム：ソラちゃん

機関員で晴風の機関員四人衆その一人。麗緒、桜良、留奈と共に暇な時はカード麻雀をしている。ほかの3人が割とボケボケだったり、フリーダムだったりといった中、機関長である麻侖がボケても誰も突っ込まないので、自分がツツコミ役をするしかないと思っている。そういう生真面目さもあって、機関員四人衆の中では比較的眞面目で堅実な性格。暇だが機関室から離れられない時は、カード麻雀で遊んでいる。その中でも彼女は淡々と確実に手を進めるため、ほかから読まれにくく、4人の中では勝ち組。だが、性格によるものか、比較的堅い役作りで大勝もしない。実家のクルーザーに両親と一緒に小さな時から乗っており、エンジンを父親と一緒にいじっていた。また沖合をよくブルーマーメイド艦艇が通っていたこともあり、艦艇の機関関係の仕事に就きたくて横須賀女子海洋学校を受験する。将来ブルーマーメイドになるかどうかは悩み中、というか

将来の職業自体模索中。

和住 媛萌（わずみ ひめ）

役職：応急長

所属：機関科

出身：神奈川県横須賀市三春町

誕生日：4月1日（おひつじ座）

血液型：AB型

身長：152cm

性格・特徴：口うるさい。

趣味・特技：各種模型制作、裁縫、ボトルシップ作り

得意科目：技術（工作）、美術

苦手科目：数学

資格・実績：丙種二級小型水上免許（中型スキッパー免許）、潜水士資格、乙種消防設

備士4類

好物：かまぼこ、人形焼き

苦手な物：いよかん

好きな色：黄土色

好きな言葉：神は細部に宿る

ニックネーム：ヒメちゃん

航洋艦晴風応急長で美化委員長。艦内の安全管理、保守、各種修理、燃料などの管理を行っている。特に損害を受けた際の応急修理や復旧作業、傾いた時の注排水、火災時の消火指示など、艦を守るための仕事は非常に多い。そのため、各種工作能力に優れた人員が配置されるが、それだけではなく危機対処能力も必要。本来、各種資材や燃料管理のために数学にも優れている必要があり、彼女も物資の管理能力には長けている。赤道祭の際には神輿や屋台を自作したほど。両親が東京の神田出身で、祭りと聞くと血が騒ぐが、何故か数学の試験は苦手。本人曰く、「実技じゃないとダメ」らしい。また、暇な時は余った木材でボトルシップを作っているが、晴風に乗り込んでからは色々直したり部品を作ったりと忙しく、まったくボトルシップ制作が出来ないのが悩み。いつもクラスで最も年下となるので、今回もそうだと思っていたが、美波の年齢を知って大いに驚愕する。ただ、それ以来初めて同学年で年下が出来たのが嬉しく、ちよくちよく彼女の所に入ります様になった。百々とは仲が良く、大抵一緒にいる。スキッパー免許所持者4名のうちのひとり、明乃、薫とともにスキッパーを操縦してオーシャンモールに買い出しに出かけている。

青木 百々（あおき もも）

役職：応急員

所属：機関科

出身：神奈川県横須賀港所属服飾船「テラー青木」

誕生日：6月1日（ふたご座）

血液型：B型

身長：154cm

性格・特徴：マンガを読み始めると他のことを忘れる

趣味・特技：漫画（読む描く両方）、木工、部屋の掃除、裁縫

得意科目：技術、美術、家庭科（被服）

苦手科目：英語

資格・実績：第二種電気工事士、潜水士資格、中等クレーン・デリック運転士免許、第

20回飛山社漫画賞「期待賞」

好物：卵料理全般、卵かけご飯、ミルフィーユ

苦手な物：イワシ

好きな色：焦げ茶色

好きな言葉：あらゆるものは磨けば光る

ニツクネーム：モモちゃん

応急員で美化委員。媛萌の下で各種保守管理業務や修理の補助を担当。媛萌とは仲が良く、大抵一緒にいる。得意の被服の腕前を生かして、同級生の服の手入れや、サイズ直しなども行っている。また、小さなころから描いていた漫画の腕前もなかなかのもので、艦内新聞に連載漫画を載せたり、掲示板への各種告知にイラストを描いたりもしている。ちなみに晴風の艦内新聞はネタが豊富で、貼り出すのには分量が多すぎる。しかも余裕のある時は一日数回掲示されるのだが、そのかなりの部分を彼女が担当している。艦に持ち込んだ荷物の大部分が漫画で、同室以外の子も読みに来るが、どの本も一番いい所までで、続きの巻を持って来ていないので、読んだ子が先を読みたくてもやもやしているとか。将来の夢は漫画家かブルーマーメイドか実家を継ぐか悩んでいたが、母親の「全部やってみたら」というひとことで、実家の近くの横須賀女子海洋学校を受験した。実は麻侖が着ている半被も彼女の実家が受注し、彼女が製作したものである。ただし、麻侖と百々が互いにこのことに気が付いているかは不明である。

RATt事件では、アドミラル・グラフ・シユペー救出作戦で突入班として、五十六を連れて、アドミラル・グラフ・シユペーに向かう。

等松 美海（とうまつ みみ）

役職：主計長

所属：主計科

出身：東京都兜町金融船団

誕生日：10月23日（てんびん座）

血液型：A型

身長：155cm

性格・特徴：すぐく物事に細かい

趣味・特技：株式為替動向チエツク、デイトレード、珠算1級

得意科目：数学

苦手科目：美術

資格・実績：簿記検定1級、珠算1級、第三種冷凍機械責任者、シユペー感状

好物：サンドイツチ、板チョコ、マチコ

苦手な物：カニ

好きな色：赤色

好きな言葉：見切り千両

ニツクネーム：ミミちゃん

主計長で会計長。艦内を円滑に動かすために、庶務、経理、消耗品の管理と補給、各種事務仕事などを担当するほか、細かい所では風呂に入る時間割も作るなど、日常生活を過ごすのに大事な裏方。そのため、数学に長けて頭の回転が速い人間になるのが一般的で、普段から趣味のデイトレードとその帳簿付けて鍛えていた才能が十分に生かされている。また、マチコの大ファンで、その写真を大量に蓄えており、一目でそれが何日の何時に撮影されたのか分るといふ才能の無駄遣いをしている。上陸日にまとめてツケ払いが可能な購買の業務をになっている。なお、その購買には「マッチの写真買い取ります（要相談）」という張り紙が有るらしい。

RAT7事件では、アドミラル・グラフ・シユペー救出作戦で突入班として、アドミラル・グラフ・シユペーに向かい、感染した生徒と奮闘する。

その奮闘が称えられ、アドミラル・グラフ・シユペー艦長のテアから感状が授与された。

伊良子 美甘（いらこ みかん）

役職：給養員・砲水雷運用員

所属：主計科

出身：千葉県袖ヶ浦市

誕生日：2月14日（みずがめ座）

血液型：O型

身長：151cm

性格・特徴：こだわりの人

趣味・特技：カメラ（写真撮影）、テレビ鑑賞（ドラマ大好き）、料理

得意科目：家庭科（調理・栄養）

苦手科目：国語

資格・実績：中等船舶料理士、中等船舶衛生管理者

好物：イタリアン・懷石料理、クリームブリュレ、ひよこまんじゅう

苦手な物：カップラーメン

好きな色：ピンク

好きな言葉：憧れは忘れなければ現実になる

ニックネーム：ミカンちゃん

給養員・砲水雷運用員で炊事委員。料理係3人組のリーダー格。TVドラマ好きで、結構その内容に影響されることが多い。料理が好きになったのも、ブルーマーメイドを目指そうと思ったのも、ドラマがきっかけ。チャレンジ精神が旺盛で、料理に関しては負けず嫌いで、つい、何でも作れると言ってしまった後で、必死でレシピを調べて作る

ような一面も。だが、初見の料理でもきっちりレシピ通り作るのと、基礎がしつかりできていたため、ちゃんと美味しい物が作れる。ただ、慣れて来た料理に関しては、自分で工夫したりドラマで見た隠し味を入れる癖がある。そのためにミーナのためにドイツ料理を作ったが、見事に撃沈してしまった。杵崎姉妹や柳原麻侖、黒木洋美とは入学前から親交があり、仲が良い。基本的に優しいが、言動がちよつとキツめなので腹黒と言われることもあるらしい。体は小さいが力はあるようで、コミカライズ版では小豆などが入る麻袋（小麦粉の袋には10kgと書かれていた）を一人で持ち上げていた。将来の夢はお嫁さん。

杵崎 ほまれ（きねさき ほまれ）

役職：給養員・水雷運用員

所属：主計科

出身：久里浜港所属和菓子屋船「杵崎屋」

誕生日：6月16日（ふたご座）

血液型：A型

身長：156cm

性格・特徴：悩みっぽい。

趣味・特技：和菓子作り、家庭菜園、甲板菜園

得意科目：家庭科（調理・栄養）

苦手科目：社会科、社会全般

資格・実績：2級和菓子製造技能士

好物：味噌汁、大福

苦手な物：フオアグラ

好きな色：えんじ

好きな言葉：温故知新

ニックネーム：ほつちゃん

給養員・水雷運用員で炊事委員。和菓子屋の娘で、杵崎姉妹の双子の姉。明治時代から続く横須賀の伝統和菓子店の系列店出身で、小さい時から和菓子に慣れ親しんでいた。そのため、入学時には間宮への乗組を学校から希望されたが、あかねと共に辞退している。料理も得意だが、本来は和菓子がメインで、特に古い歴史のある和菓子の製法を復活させるのが密かな趣味。小さい頃に手に入れた江戸時代のレシピ集がお気に入り、それを読んでいるうちに古文の成績が向上したのは思わぬ副産物。菜園作りも趣味で、艦内の空いた場所にこっそり甲板菜園を作っていたが、爆雷投下の際にインゲンとシソの菜園が吹き飛ばされたのが、ちよつと悲しかった。赤道祭では、「実習前に幼馴染

染みに告られたけど、返事せずに逃げた」ことを告白。メールでやり取りするも、その幼馴染には「好きな子が出来た」という返信が来てしまう・

杵崎 あかね（きねさき あかね）

役職：給養員・水雷運用員

所属：主計科

出身：久里浜港所属和菓子屋船「杵崎屋」

誕生日：6月16日（ふたご座）

血液型：A型

身長：156cm

性格・特徴：忘れっぽい。

趣味・特技：洋菓子作り・ゲーム

得意科目：家庭科（調理・栄養）

苦手科目：社会科、社会全般

資格・実績：2級和菓子製造技能士

好物：クリームシチュー、レアチーズケーキ

苦手な物：ぬか漬け

好きな色：赤色

好きな言葉：革命戦士

ニックネーム：あっちゃん

給養員・水雷運用員で炊事委員。和菓子屋の娘で、杵崎姉妹の双子の妹。小さい時から、ほまれが作った失敗作の和菓子の証拠隠滅を手伝わされていたので、和菓子に飽きて洋菓子作りに力を入れるようになった。特にレアチーズケーキは大得意で、最近ほまれに頼まれて和と洋の融合のケーキなども作るようになった。実はほまれに頼まれると嫌とは言えない性格。料理も菓子同様に洋風料理が得意で、実家のツテで手に入れた、横浜の一流ホテルのレシピ集がお気に入り。レシピにあつたので、最近中華も作るようになった。また、ゲーム好きで艦内にも最新の携帯ゲーム機を持ち込んで、暇さえあれば新作のチェックをしている。和菓子屋出身もあり、入学時には間宮への乗組を学校から希望されたが、あかねと共に辞退している。

鎚木 美波（かぶらぎ みなみ）

役職：衛生長

所属：主計科

出身：御前崎港所属 医療法人洋州会・駿河湾沖総合病院船

誕生日：9月4日（おとめ座）

血液型：O型

身長：143cm

性格・特徴：よく漢語を使う。

趣味・特技：医療行為、裁縫もちよつと得意

得意科目：理科全般

苦手科目：社会全般

資格・実績：合衆国医師免許、船舶衛生管理者

好物：肉じゃが、ゼリー

苦手な物：麻婆豆腐など辛いもの全般

好きな色：白色

好きな言葉：失敗は成功の母

ニックネーム：みなみさん、みなみちゃん

航洋艦晴風衛生長で保健委員。小さい頃から実験や研究が好きで、小学生に入る前には既に神童として知られていた。それもあつて、ブルーマーメイド支部経由でアメリカに留学、二年で大学の、三年で大学院の必要単位を取得して、海洋医科大学に特待生として研究室を持つほどに。不足している航海実習の単位取得のために、晴風に乗り込ん

だ。聞き上手と思われていて、よく色々な人が愚痴をこぼしに来るが、本人は人生経験の不足から言われたことの半分も理解しておらず、また、返す漢文やことわざも、知識として理解したことから、それに相応しいのを答えているだけ。ややマツドサイエンティストの気があり、研究心と知的好奇心を満たすのが何よりも好き。制服が他の生徒と若干異なるのはそのため。なお、薫以外「晴風」の仲間達がそれを知るのは、赤道祭の締めの前に本人の口から語られたことであり、さらに実年齢が12歳であることも初めて知らされた。それらに対し仲間達は皆啞然とした（自分達より年が上だと思った仲間もいたほど）。だがその一方で真雪はその事は把握しており、安全監督室長である長女の宗谷真霜に、「晴風」に乗り込んでいることを話している。

RAT事件では、RATウイルスを解明し、抗体を試作・製造する。

アドミラル・グラフ・シユペー救出作戦で突入班として、アドミラル・グラフ・シユペーに向かい、感染した生徒に抗体を注射する。

五十六（いそろく）

役職：航洋艦大艦長

趣味・特技：ネズミ捕り

好物：かつお節、魚

航洋艦大艦長。横須賀女子海洋学校棧橋周辺に住み着いていて、薫が学校の庭で出会ったデブ猫。太々しい態度と体形に似合わない素早い行動で、よくネズミを捕つてくる。半野良で誰かに飼われている訳ではないが、学校周辺で良く目撃され、人懐っこいので、誰ともなく海洋学校の昔の先生に因んで五十六と呼ばれている。過去に何度か教育艦を観察し乗る船を選んでいるとも。晴風の艦橋に入り込み、薫達と航海を共にする。

R A T t 事件では、事件の原因である R A T t を捕まえて、事件を解決するきつかけを発見した事により、大提督へ昇進する。

アドミラル・グラフ・シユペー救出作戦で突入班として、アドミラル・グラフ・シユペーに向かい、艦内に居た全ての R A T t を捕まえている。

多門丸（たもんまる）

商店街船「しんばし」の住民が飼っていた子猫。座礁事故の際に救助に来たましろ、薫と行動を共にするうちに懐いてしまい、飼い主の好意で譲り受け、ましろが面倒を見ることとなる。

横須賀女子海洋学校

知名 もえか(ちな もえか)

役職：大型直接教育艦武蔵艦長

所属：航海科

出身：長野県松本市

誕生日：7月25日(しし座)

血液型：AB型

身長：158cm

性格・特徴：優秀でリーダーシップがある。いつも明乃を励ましてくれる。

趣味・特技：カヌー

得意科目：全部

苦手科目：なし

資格・実績：中等乙種海技士、丙種二級小型水上免許(中型スキッパー免許)

好物：ハヤシライス、ショートケーキ

苦手な物：無し

好きな色：白色

好きな言葉：努力に勝る天才無し

ニツクネーム：もかちゃん

大型直接教育艦武蔵艦長。航海科の所属。明乃の幼馴染で、呉のブルーマーメイド施設に併設された児童養護施設で一緒に育った。大抵のことは何でもそつなくこなし、一度覚えたことはほぼ忘れない記憶力の持ち主。それだけ優秀なのに、不断の努力を欠かさないので、ますます何でもこなせるようになっていった。そのため、世の中が今一つつまらないと感じていたが、何をしかずか全然わからない明乃との付き合いが深くなるにつれて、一番面白いことが明乃と一緒にいることだと思ふようになった。小学卒業後、別々の両親に引き取られたが、ちよくちよく会っている。母親がブルーマーメイドに所属していたこともあり、自身も明乃と共にブルーマーメイドになろうと誓いを立てる。

RATt事件では、超大型直接教育艦「武蔵」艦長となり、はやてと共に海洋実習に向かう。

実習の集合地点に向かう途中、艦内の異常に気づき、無事な4人と共に艦橋に立て籠もる。

無線機の争奪ではやてを失いながら、残り3人と共に艦橋に立て籠もりながら奮戦する。

最終戦では、龍之介達と晴風や横須賀女子海洋学校の増援部隊によって、武蔵を止める事に成功し、無事に明乃に救出される。

宗谷 真雪（むねたに まゆき）

役職：横須賀女子海洋学校校長

出身：神奈川県横須賀市

誕生日：10月31日

血液型：O型

身長：161cm

趣味・特技：艦艇指揮

好物：まぐろの刺身、きんつば

ニックネーム：来島の巴御前

横須賀女子海洋学校校長であり、宗谷真霜、宗谷真冬、宗谷ましろの母親。ブルーマーメイド設立時代から続く海洋一族。9年前は旗艦大和の艦長を務めていた。現役時には徹底的かつ緻密な情報収集による事前準備と大胆かつ豪胆な作戦指導によって、一部海域に巢食っていた武装勢力を単艦で一掃したことから、「来島の巴御前」と呼ばれ、第一線を退いた今でも恐れられている。その優れた統率力と本人の希望によって、現役を

退いた後にブルーマーメイド組織の中で管理職となるよりも海洋学校教員となる道を選び、そこでも強い指導力を発揮して校長にまで上りつめた。家庭では良き母親であり、三人の娘を立派に育て上げる。公務では厳しい面も見せるが、それ以外では娘と同じ様に生徒に接して慕われている。

黎明編では、深町の要請で龍之介と薫の面倒を見る。

龍之介と真霜が密かに恋愛しているところを目撃する。

RAT事件では、教員不足を補おうと薫とはやてに臨時教員を頼むが、晴風が田沼総理と野田の計略によって、反乱艦の汚名を着せられた事により、晴風を保護しようとする。真霜と協力して、晴風を保護する。

その後、晴風に武蔵と行方不明艦の搜索を命じ、自らも事件解決に翻弄する。最終戦では、武蔵の浦賀水道阻止の為、自らフロート艦を動かして阻止する。

新起動編では、ブルーマーメイドから独立した龍之介達の為に横須賀女子海洋学校を提供する。

古庄 薫（ふるしよう かおる）

役職：横須賀女子海洋学校指導教官

階級：二等保安監督官

出身：広島県

性格・特徴：明朗快活で裏表のない

横須賀女子海洋学校の指導教官。横須賀女子海洋学校の卒業生で、真霜の先輩。卒業後ブルーマーメイドの任務部門で実務経験を積み、その後指導力の高さを買われて救難支援部門に移動、育成学校の教官となる。次いで、宗谷真雪に母校の教官に引き抜かれた。基本生徒と一緒に動いて動き回るタイプの熱血教師でありつつも、教え方も懇切丁寧で、各人の能力を引き出すのに定評があるので、その能力の高さと相まって人気が高い。

薫とは、横須賀女子海洋学校の視察の時に同じ名前如何し、気が合い、功とは、出身地と寮が隣同士だった事で親しい同士に成る。

RAT事件では、教員艦さるしまに乗艦し、海洋実習に向かうも実習に遅刻した晴風を砲撃し、魚雷で足止めされる。その後、何故か、海上安全整備局に晴風が反乱を起こしたと打電。さるしま沈没後は、意識不明のまま海上を漂流し、救出されて、横須賀病院に収容される。意識回復後は、後から収容された功と共に真霜から事情聴取を受ける。

最終戦では、功と共に横須賀女子海洋学校の増援部隊を率いて、武蔵救出に参加する。

杉本 珊瑚（すぎもと さんご）

役職：工作支援教育艦明石艦長

所属：機関科

工作支援教育艦明石艦長。かなり小柄な生徒で、明石の艦橋には自分用の踏み台を持ち込んでいる。普段は眠そうな目をしているが、頭脳明晰で、さまざまな情報の分析に長けている。人生と書いたマンボウの絵がトレードマークで、私物にはすべてこのマークが入っている。機械弄りが好きで、また体の小ささを生かして狭い場所の修理も得意。癖のある晴風の機関のメンテをこなしている麻命の腕を高く評価しているらしい。間宮の藤田優衣とは中学時代からの知り合いで、彼女の料理の腕前を評価し、優衣に横須賀への入学と間宮への乗艦を勧めた。

RATt事件では、真雪の依頼を受けて、間宮やと共に晴風と白鳳に合流して晴風の修理や改装を行い、後にアドミラル・グラフ・シユペー戦で被弾した晴風と再度合流し、修理や改装を行う。

藤田 優衣（ふじた ゆい）

役職：給糧支援教育艦間宮艦長

所属：主計科

給糧支援教育艦間宮艦長。料理作りが好きで美食家であり、本人も艦長業務とは別に調理場に立っている。長崎出身もあってか、知人からカステラの作り方を教わっていたため、特にカステラ作りが上手い。間宮の羊羹と合わせたシベリアは、一部で大好評だった。中学時代に杉本珊瑚と知り合い、特技の料理を買われて、横須賀女子海洋学校を勧められ、入学した。

RATt事件では、真雪の依頼を受けて、明石と共に晴風と白鳳に合流して晴風の補給を行い、後にアドミラル・グラフ・シユペー戦で被弾した晴風と再度合流し、補給を行う。

教頭（きょうとう）

役職：横須賀女子海洋学校教頭

階級：二等保安監督官

出身：広島県

横須賀女子海洋学校教頭であり真雪の補佐役。

老松 亮（おいまつ りょう）

役職：横須賀女子海洋学校秘書

出身：山梨県甲府市

宗谷真雪の秘書であり参謀を兼ねている。以前ホワイトドルフィンの情報収集集隊群に所属し、各種情報収集と情報整理を行っていたが、ある事件をきっかけにホワイトドルフィンから出向して、真雪の秘書となった。前職での交友関係を生かし、高い情報収集、処理能力を持っている。苦勞人

榊原 つむぎ（さかきばら つむぎ）

役職：航洋直接教育艦時津風艦長

出身：埼玉県所沢市

誕生日：11月11日（さそり座）

血液型：A型

身長：147cm

性格・特徴：平凡こそ幸せ、平隠無事である事を重んじる。

趣味・特技：刺繍、編み物

得意科目：理科全般

苦手科目：英語

好物：しらたき

苦手な物：珍味全般

好きな言葉：無事これ名馬

ニックネーム：つーちゃん

航洋直接教育艦時津風艦長。両親ともに芸能人という刺激溢れる家庭環境で育つた為、反動で平穩無事を好み波乱を嫌う性格に。そのせいか調整能力に長けており、クラス内でのトラブルの芽は基本的に彼女が摘んでいる。副長の君江以下癖の強いメンバーを上手く回せるのはつむぎしかいない、とクラスメート達から信頼されているのだが、本人に出世欲は無い。将来は喧騒を離れて静かな海の上で働きたい、平穩に働けるなら地上勤務でも構わないとすらおもっているという、ある種の変わり者。

特別編では、型抜き of 模擬店を開き、1人でもくもくと型抜きをしていた。競闘遊戯会の図上演習では、亜澄に敗れる。

海賊事件では他の学生艦と共に海上要塞攻略戦に参加する。

長澤 君江（ながさわ きみえ）

役職：航洋直接教育艦時津風副長

出身：石川県輪島港所属総合漁業船

誕生日：2月22日（うお座）

血液型：B型

身長：152cm

性格・特徴：退屈が嫌いで、面白い事が大好き

趣味・特技：流行通（いろんなジャンルの流行に詳しい）

得意科目：英語

苦手科目：数学

好物：たこ焼き

苦手な物：そうめん

好きな言葉：人の心を開かせる魔法は、笑わせる事

ニックネーム：きみちゃん

航洋直接教育艦時津風艦長。兎に角何でも面白くした方が良いに決まっている、という信念の持ち主。ボケて見たり冗談を言ったり、あるいは物事を面白い展開にしようとして珍妙な提案をする。時津風クラス内で発生する君江の面白提案は、その殆んどが艦長のつむぎによって却下されてしまうのだが、君江は面白い事を考えるのが面白い様で、何度却下されても一向に止める気配はない。直そんな君江が「この人がうちのクラスで一番面白い！」と思っている人物が、艦長のつむぎである。

海賊事件ではつむぎと共に海上要塞攻略戦に参加する。

大谷由美子（おおたに ゆみこ）

役職：航洋直接教育艦時津風水雷長

航洋直接教育艦時津風水雷長。

賀茂つつじ（かも つつじ）

役職：航洋直接教育艦時津風航海長

航洋直接教育艦時津風航海長。

鈴木 セリカ（すずき せりか）

役職：航洋直接教育艦時津風給養員

航洋直接教育艦時津風給養員。

高橋 千華（たかはし ちか）

役職：航洋直接教育艦天津風艦長

出身：秋田県羽後町

誕生日：6月15日（ふたご座）

血液型：A型

身長：154cm

性格・特徴：負けん気が強く、やるからには絶対一番を取りたいと思っている。

趣味・特技：ゲーム（特に格ゲー）

得意科目：世界地理

苦手科目：数学

好物：生春巻き

苦手な物：生ハム

好きな言葉：頂点はひとり

ニックネーム：ちーちゃん

航洋直接教育艦天津風艦長。何についても自分が一番でないと気が済まないという難儀な性格の持ち主。それゆえ学年主席のもえか、RATt事件で活躍した晴風クラスを率いる明乃は全く気にせず千華に対しフレンドリーに接している。プライドの高さに比例してリーダーシップには優れており、先頭に立ってクラスを引っ張る。しかし結構抜けているというところが多く、「ツッコまれては赤くなっている」という。尖っているけど根は良い子。

特別編では、金魚すくいの模擬店を開くが、店主と対決して多く金魚をすくったほう

が勝ちという、変わった金魚すくいを開き、ムキになつて勝負をする。
競闘遊戯会の図上演習では、沙千帆に敗れる。

海賊事件では他の学生艦と共に海上要塞攻略戦に参加する。

山辺 あゆみ（やまべ あゆみ）

役職：航洋直接教育艦天津風副長

出身：東京都東村山市

誕生日：3月12日（うお座）

血液型：O型

身長：149 cm

性格・特徴：背が小さいが、艦長の保護者的な立ち位置。

趣味・特技：読書

得意科目：国語

苦手科目：科学

好物：バーベキュー

苦手な物：パン

好きな言葉：君が笑えば世界は君と共に笑う。

ニツクネーム：あゆみちゃん

航洋直接教育艦天津風副長。温厚で優しく、天津風クラスを包み込む様にまとめる副長。見境なくプライドの高さを発揮する艦長の千華を操縦できる唯一の人物でもあり、あゆみが本気でたしなめると千華も逆らえない。自分はリーダーよりも補佐役に向いていると自覚しており、リーダーに向いている千華には立派な艦長になって欲しい、成長して欲しいという目線で接している。そんなあゆみの思いが通じたのか、千華も最近少しは丸くなってきたらしい。

海賊事件では千華と共に海上要塞攻略戦に参加する。

大指紀子（おおさし のりこ）

役職：航洋直接教育艦天津風砲術長

航洋直接教育艦天津風砲術長。

加藤 小百合（かとう さゆり）。

役職：航洋直接教育艦天津風機関長

航洋直接教育艦天津風機関長。

ヴァイルヘルムスハーフェン女子海洋学校

ヴァイルヘルミーナ・ブラウンシュヴァイク・インゲノール・フリーデブルク

役職：小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シュペー副長

出身：ドイツ・バイエルン州ミュンヘン

誕生日：10月1日（てんびん座）

血液型：A型

身長：162cm

性格・特徴：質実剛健

趣味・特技：チェス、テニス

得意科目：ドイツ史

苦手科目：なし

資格・実績：高等乙種海技士、国際丙種二級小型水上免許、日本語検定4級

好物：ザワークラフト、ヴァイスヴルスト（白ソーセージ）

苦手な物：日本食全般

好きな色：緑色

好きな言葉：傲慢は転落の前に来る

ニツクネーム：ミーちゃん、ミーナ

小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シュペー副長。幼少時から優秀で、比較的生意面目かつ勉強熱心であり、物事には真面目から挑む所がある。一人称は「ワシ」で語尾に「じゃ」が付き、広島弁のような口調の日本語で話すが、これは某仁義がない感じの日本映画を見て日本語を覚えてしまったため。また、言葉の上に「ド」をよく付けたりもする。無意識にドイツの技術力を信奉しており、それに伴うドイツ艦艇の先進性を疑っていないかった。ただ、日本との合同演習に向かうため、日本語の勉強を映画によって行い、日本文化にかぶれることでそのようなドイツ至上主義は影を潜めていった。今ではすっかり「仁義の無い」シリーズの熱狂的なファンで同じファンの納沙と良く映画を見たり、一緒に妙なやり取りやモノマネをする。日本に憧れを持っている。ただ、日本食、特に発酵食品は苦手で、定期的に蒸かしたジャガイモとヴルスト(ソーセージ)を食べたくなる模様。また、ホワイトアスパラに関して是非常にうるさく、缶詰は認めない。本人は自分の性格を堅物で面白みがないと思っており、上に立つ人間としてはもう少し洒脱で話の分かる必要があると思っている。そのため一生懸命ジョークの練習をしているが、はつきり言ってジョーク自体が面白くないことに気が付いていない。2年生で、航海経験が明乃たちよりも長いため、その経験を生かしてアドバイザー的ポジションで晴風の航海をサポートする。

RAT事件では、ビスマルクと共に横須賀女子海洋学校の海洋実習に参加すべく合流地点に向かう途中、艦内の異常に気づき、テアと共に艦橋に立て籠もるもテアから救援を呼ぶよう艦の退艦を命じられる。その後は、内火艇で晴風に向かうも流れ弾に当たり、海に放り出されるが、明乃と薫に救助される。救助されてからは、意識不明だったが、伊号第201潜水艦戦中に意識を回復、回避に助力し、明乃達に迎え入れられた。しばらくは、晴風に乗艦していたが、アドミラル・グラフ・シュペーがアドミラルテイ諸島に居るのを確認したので、薫と明乃と共に救出に向かう。アドミラル・グラフ・シュペー救出作戦で突入班として、アドミラル・グラフ・シュペーに向かい、ウィルスに感染したテアを救う。救出作戦後は、艦長帽をテアに返し、正常に戻ったアドミラル・グラフ・シュペーに戻る事となったが、幸子と別れを惜しみ、最後に幸子と再会を約束した。

最終戦では、横須賀女子海洋学校の増援部隊として、武蔵救出に参加する。特別編では、幸子達とは別に海上プラント制圧に参加する。

テア・クロイツェル

役職：小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シュペー艦長

出身：ドイツ、ベルリン

誕生日：11月21日（さそり座）

血液型：A型

身長：140cm

性格・特徴：生真面目

趣味・特技：チェス、パズル（特に数字パズルの早解き）

得意科目：数学

苦手科目：音楽

好物：カリーブルスト、シュニッツェル

ニックネーム：海の妖精、テア

小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シユペー艦長。ミーナの盟友。成績は極めて秀で、その中でも特に砲術と航海術に優れている。生真面目で勤勉ながら常に周囲に目を配って全体を把握する性格と、背が低いながらもカリスマ性があり、人心掌握術にも優れているので優秀な艦長候補と見なされている。無口でまじめなわりには話が分かる人情家の面もあり、包容力もあるので、ない本人曰く「計算で割り切れないものは今一つ分らない」とも。そしてそれが無口さと感情表現の下手さに繋がっているようだ。反面、絵画鑑賞は大好きで、自分でも時折スケッチをしている。また各種パズルが得意で、特にナンバープレイス系はとでも得意としており、日本に行ってパズル雑誌を

買うのを楽しみにしている。母親がブルーマーメイドに入っていたので自らもブルーマーメイドになるべく入学する。入学時の成績が主席だったので、親の名声から「海の妖精」の別名も得たが、本人はあまり気に入っていない。ヴィルヘルミーナとは、中学時代からの親友で、そのせいか元々は、ビスマルクに配属になる予定だったのを本人がそれを蹴って、アドミラル・グラフ・シュペーを希望する。

RATt事件では、ビスマルクと共に横須賀女子海洋学校の海洋実習に参加すべく合流地点に向かう途中、艦内の異常に気づき、ミーナと共に艦橋に立て籠もるも自身もウイルスに感染した事が分かり、ミーナに救援を呼ぶよう艦を退艦させる。その後は、艦に残り、ミーナからの救援を待つ。アドミラル・グラフ・シュペー救出作戦で救援に来たミーナ達に救出される。救出作戦後は、状況報告と補給のために一旦ゼーアドラー基地に帰還する。

最終戦では、横須賀女子海洋学校の増援部隊として、武蔵救出に参加する。特別編では、明乃達とは別に海上プラント制圧に参加する。

クローナ・ゼバステイアン・ペロナ

役職：超大型直接教育艦ビスマルク艦長

超大型直接教育艦ビスマルク艦長でミーナやテアとは、中学以来からの悪友。

RATt事件では、アドミラル・グラフ・シユペーと共に横須賀女子海洋学校の海洋実習に参加すべく合流地点に向かうがウイルスに感染し行方不明になる。その後、次郎と真冬達によつて、救出された。

東舞鶴男子海洋学校

嶋田 太郎（しまだ たろう）

役職：東舞鶴男子海洋学校校長

東舞鶴男子海洋学校校長で、かつては凄腕のホワイトドルフィンだった。真雪とは昔危機的な状況を救ってくれた恩人。

RATt事件では、自校所属の伊号第201潜水艦が晴風を一方的に攻撃した行為に驚愕し、真雪に謝罪した。その後は、真雪に協力し、自校の教員艦隊を派遣して、武蔵と行方不明艦の捜索を行う。

呉女子海洋学校

宮里 十海（みやさと とおみ）

役職：超大型直接教育艦大和艦長

所属：航海科

出身：鹿児島県霧島市

誕生日：12月4日（いて座）

血液型：A型

身長：172cm

性格・特徴：総合的に極めて能力が高く、かといってそれを鼻に賭ける事は無い人格者。

趣味・特技：ヨット、ウィンドサーフィン

得意科目：全部

苦手科目：なし

好物：しゅぶしゅぶ、みたらし団子（両棒餅）

苦手な物：野菜

好きな色：黒

好きな花：桜

好きな言葉：命もいらず、名もいらず

ニックネーム：みやさん

超大型直接教育艦大和艦長。呉女子海洋学校でも最優秀の成績で、決断力にも優れ、

細心な準備の上で大胆に行動し、艦内では決して困った様子を見せない性格で、心技体三拍子揃った優れた艦長と見なされている。高い能力を鼻にかける事も無い為、周囲からも好かれている。表向きは特に欠点らしい欠点が無いが、私生活は比較的ずぼらで食生活が肉類に偏り気味で野菜をあまり食べない為、副長の進愛に無理やり食べさせられている。

特別編では、競闘遊戯会で水上無差別合戦などで圧勝するも凶上演習でましろに惨敗する。

海賊事件では他の学生艦と共に要塞攻略戦に参加。

能村 進愛（のむら しあ）

役職：超大型直接教育艦大和副長

出身：愛知県岡崎市

誕生日：3月26日（おひつじ座）

血液型：O型

身長：167cm

性格・特徴：落ち着いて見えるが、実は情熱家で負けず嫌い。方言を標準語に直すつもりはない。

趣味・特技：クレー射撃

得意科目：国語（古文）

苦手科目：なし

好物：味噌煮込みうどん

苦手な物：そうめん

好きな色：白

好きな花：椿

好きな言葉：理をもって戦うべし

ニックネーム：のむさん

超大型直接教育艦大和副長。基本的に冷静沈着に振舞うが、内心は情熱家で負けず嫌いで副長という立場上冷静でいようと努力している。その為、艦長の十海が好きな物しか食べない時などには冷静さをかなぐり捨てて、本音でぶち当たる。もっとも乗員には本気で艦長にぶつかっていくのが、普段との冷静さと相まって冷血ではない人情家の一面も有るとして好意的に評価されている。方言女子で呉でもお国言葉を変ええる気はない。

海賊事件では十海と共に要塞攻略戦に参加。

舞鶴女子海洋学校

阿部 亜澄（あべ あずみ）

役職：超大型直接教育艦信濃艦長

所属：砲雷科

出身：愛媛県宇和島市

誕生日：4月27日（おうし座）

血液型：B型

身長：156cm

性格・特徴：ブラック企業ばりにクラスメートを働かせるが、自分もそれ以上に働くので人望は厚い。

趣味・特技：釣り

得意科目：日本史

苦手科目：なし

好物：鯛めし、ロールケーキ

苦手な物：ラーメン

好きな色：白

好きな花：椿

好きな言葉：二十四時間対応

ニックネーム：あず社長

超大型直接教育艦信濃艦長。率先垂範をモットーとして、先ずは自分が何事も先んじて行つて、出来る事を周囲に見せてやる様に促すが、本人の能力が高いので、周囲がそれについていけない事に時々気が付いていない。その為、クラスの人間に対してもっと全力を出す様に促す事も有るが、気が付くと本人が先に動いて問題を解決する為に、基本的に人望は厚い。時々寝ないで働く方法を真剣に悩んでいたりを、副長の燕に無理やり止められている。

特別編では、競闘遊戯会で水上無差別合戦などで翻弄するも凶上演習でましろに惨敗する。

海賊事件では他の学生艦と共に要塞攻略戦に参加。

河野 燕（かわの つばめ）

役職：超大型直接教育艦信濃副長

所属：機関科

出身：福井県宇鯖江市

誕生日：10月8日（てんびん座）

血液型：A型

身長：156cm

性格・特徴：艦長の指示を的確に遂行するだけでなく、時には一方引いた視点で助言もできる艦の大番頭。

趣味・特技：アイススケート（スピードスケート）

得意科目：数学

苦手科目：なし

好物：油揚げ、羽二重餅

苦手な物：山芋

好きな色：オレンジ

好きな花：菖蒲

好きな言葉：岡目八目

ニックネーム：つばめ専務

超大型直接教育艦信濃副長。機関科出身で、機械は定期的にメンテナンスして、休ませる時は休ませないと全力を出すのは難しいというのを理解している為、無茶しがちな亜澄にブレーキを掛ける役割を担っている。基本的に普段から冷静で、どっしり構えて

一方引いた立場から全体を見ているので、何か問題が有った時にいち早く気が付く。規則正しい生活が必要だと考えているのと本人もそれが性に合っている為、亜澄が夜更かしをしていると強制的に寝かしつける。

海賊事件では亜澄と共に要塞攻略戦に参加。

佐世保女子海洋学校

千葉 沙千帆（ちば さちほ）

役職：超大型直接教育艦紀伊艦長

所属：砲雷科

出身：福岡県福岡市

誕生日：1月22日（みずがめ座）

血液型：O型

身長：160cm

性格・特徴：太陽の様な底抜けの明るさ。スポーツ万能で空手やキックボクシングも得意。

趣味・特技：乗馬、格闘技

得意科目：体育

苦手科目：なし

好物：ふぐ、あんパン（つぶあん）

苦手な物：大根

好きな色：赤

好きな花：胡蝶蘭

好きな言葉：天衣無縫

ニックネーム：サニー

超大型直接教育艦信濃艦長。情熱的で明朗快活、諦めを知らないポジティブな性格で、何かをやる時はわき目もふらずにまい進する。基本的に身体能力が非常に高く、スポーツ万能で、色々なスポーツで一流の能力を誇る。その為、考えるよりも先に体が動くところがあるので、副長の啓子がブレーキを掛ける事もしばしば。カリスマ性に優れ、単純な座学だけならもっと優秀な人間もいるが、クラスだけではなく校内で慕われている為に紀伊の艦長に推薦された。

特別編では、競闘遊戯会で水上無差別合戦などで翻弄するも凶上演習でましろに惨敗する。

海賊事件では他の学生艦と共に要塞攻略戦に参加。

野際 啓子（のぎわ けいこ）

役職：超大型直接教育艦紀伊副長

所属：航海科

出身：石川県河北郡

誕生日：1月24日（みずがめ座）

血液型：A型

身長：162cm

性格・特徴：アメリカ・フランスへの留学経験がある超インテリだが、人に接する時は優しさに溢れている。

趣味・特技：英語とフランス語が堪能

得意科目：語学全般

苦手科目：なし

好物：フランスパン、メロン

苦手な物：レモン

好きな色：藤色

好きな花：ライラック

好きな言葉：全ての者は生まれながらに知恵を求めろ。

ニツクネーム：けいこさん

アメリカとフランスに留学経験があり、語学に堪能で、座学なら艦長の沙千帆より優れている。だが、沙千帆のカリスマ性と行動力に惹かれ、また艦長に相応しいと判断して、沙千帆を紀伊艦長に推薦した。動の沙千帆、静の啓子とバランスが取れており、普段の温厚さと物柔らかな態度から、クラス内で「姐さん」と呼ばれて慕われている。多趣味な点も沙千帆に似ているが、体を動かす趣味よりも頭を使う方が好み。

海賊事件では沙千帆と共に要塞攻略戦に参加。

ブルーマーメイド

宗谷 真冬（むねたに まふゆ）

役職：ブルーマーメイド強制執行課、保安即応艦隊、弁天艦長

階級：二等保安監督官

出身：神奈川県横須賀市

誕生日：10月2日

血液型：A型

身長：169cm

性格・特徴：さっぱりしていて、理不尽なことが大嫌い

趣味・特技：ウインドサーフィン、格闘術

得意科目目：全教科

苦手科目目：特になし

好物：ナポリタン、かき氷

ニックネーム：真冬姐さん

ブルーマーメイド強制執行課、保安即応艦隊、インディペンデンス級沿海域戦闘艦乗組員で宗谷家三姉妹の次女。姉を見習って一緒に勉強をしていたのと、分らない科目は母や姉に聞いていたので、気が付くと苦手教科が無くなっていた。本来、体育会系で机の前にいるよりは体を動かしている。髪はショートにしており、なぜかマントも羽織っている。黒系の服装を好んでおり、髪色も黒なら身に付けるものは黒系ばかりしている。スポーツ万能で、ウインドサーフィン、棒術、空手が得意。(時々薫から八神流格闘術を教わっている。)スキッパー操縦も巧みで、国際レースの出場経験もある。性格はさっぱりしていて、理不尽なことが大嫌いなことと部下の面倒をしっかりと見ることから、後輩などからは「姐さん」として慕われている。やや短気な切り込み隊長タイプで面倒な手続きや書類整理が苦手でも姉の真霜に怒られている。温泉で日本酒を

飲むのが好き。また、「根性注入」と称して、尻を揉む癖があり、学生の頃からいつも他の学生の尻を揉んでいた。

次郎とは、犬仲で会う時からいつも決闘に成るが、未だに決着が着かない。

RATt事件では、真霜の命令で武蔵以外の不明艦を捜索するが、晴風が比叡と戦闘していると知り、救援に向かうが、次郎に先を越され、後始末をする。比叡戦後は、共にビスマルクを制圧する。

最終戦では、パーシアス作戦の為、ファイリピン沖に向かっていたが、思わぬ武蔵の日本近海出現により、急いで急行するも間に合わなかった。

平賀 倫子（ひらが ともこ）

役職：ブルーマーメイド安全監督室情報調査隊部長

階級：二等監察官

性格・特徴：明るくて面倒見がいい

ブルーマーメイド安全監督室情報調査隊所属の二等監察官で役職は部長。宗谷真霜の直属の部下。マリンスポーツが得意で、国際スキップアーレースーカテゴリーのトップクラスだった。また薫と同じ巨乳。福内とは、学生時代からの親友。

黎明編で福内と共に龍之介達と初めて接触した人物。

RATt事件では、真霜の命令で晴風を搜索する。搜索中に買い出しに出かけていた明乃達を拘束するが、後から来た薫の閃光手榴弾で行動不能になる。その後、野田の部下に拉致されたところを保護、殺生を起こそうとした野田の部下う逮捕する。それから、薫達と共に晴風に向かう。志摩の事情聴衆後は、報告の為、福内と共に横須賀に戻る。

最終戦では、パシシアス作戦の為、第二陣として、九州沖に配備される。

しかし、思わぬ武蔵の日本近海出現により、白鳳と共に急行、ブルーマーメイド艦隊として武蔵と交戦。善戦するが、みくら以外の3隻を戦闘不能にされ、みくらも航行に支障をきたすレベルのダメージを受けてしまう。

福内 典子（ふくうち のりこ）

役職：ブルーマーメイド安全監督室情報調査隊、改インディペンデンス級沿海域戦闘艦みくら艦長

ブルーマーメイド安全監督室情報調査隊。真霜の部下で平賀の同僚。猫耳型のヘッドセットを付けているのが特徴。

黎明編で平賀と共に龍之介達と初めて接触した人物。

RATt事件では、真霜の命令で晴風を搜索する。志摩の事情聴衆後は、報告の為、平

賀と共に横須賀に戻る。

最終戦では、パースィアス作戦の為、第二陣として、九州沖に配備される。

しかし、思わぬ武蔵の日本近海出現により、白鳳と共に急行、ブルーマーメイド艦隊として武蔵と交戦。善戦するが、みくら以外の3隻を戦闘不能にされ、みくらも航行に支障をきたすレベルのダメージを受けてしまう。

寒川 高乃（さむかわ たかの）

役職：ブルーマーメイド安全監督室情報調査隊

階級：二等保安監督正

ブルーマーメイド安全監督室情報調査隊。平賀の部下

志度 琴海（しど ことみ）

役職：ブルーマーメイド安全監督室情報調査隊部長

階級：二等保安監督正

ブルーマーメイド安全監督室情報調査隊。平賀の部下

岸間 董（きしま すみれ）

役職：ブルーマーメイド強制執行課、保安即応艦隊

階級：一等保安監督正

ブルーマーメイド強制執行課、保安即応艦隊。真冬の部下

RATt事件では、しんばし救助にせんだいと共に救援に向かう。

浦賀 鈴留（うらが すずる）

役職：ブルーマーメイド設備研究課 主任研究員

ブルーマーメイド設備研究課、主任研究員。慶介と共に烈風や深山の開発を手掛ける。

また、一方でブルーマーメイド艦の無人化計画を進めている。

古庄とは同期で在学中の時は隣の席だった。

ホワイトドルフィン

野田 邦夫（のだ くにお）

役職：ホワイトドルフィン安全監督室室長

階級：一等保安監督官

ホワイトドルフィン安全監督室室長で田沼の飼ひ犬的存在。性格は、冷酷で卑劣。田沼の為なら、国土安全委員会の幹部達を金で買収したり、邪魔な奴を裏で密かに部下に暗殺させたりしている。かつては、真霜の許婚だったが、本人は、真霜よりも宗谷家の家柄と財産が目的だったので、密かに愛人を作っていたが、結局、真霜にばれ、更には、親の一誠にもばれて、勘当を言い渡されるが、田沼によつて、危機的を救われる。その後は、真霜を奪う為、真霜を奪つた龍之介に復讐する為、裏で暗躍する。

RATト事件では、深町を更迭し自分の父親の後がまに据え置き、教員艦さるしまを攻撃した晴風を反乱艦として、撃沈命令を出す。更に監禁している龍之介に対し功に白剤を注射して、脅し、薫が機密情報を持つている事を聞き出す。聞き出し後は、部下を送り薫達を拉致、明乃達を人質に機密情報を渡せと脅すが、次郎と平賀によつて、阻止され、更に実行した部下が逮捕された。緊急会議で真霜が晴風と龍之介への命令撤回を要求するが、これを拒否するも真霜が逮捕された部下の自白を楯に、仕方なく要求を呑む。その後は、復帰した深町と共に事件解決に努めるが、事件の調査をしていた真霜にアメリカとの裏取引で暗躍していたのがばれ、真霜に逮捕された。

深町 吾郎（ふかまち ごろう）

役職：国土交通大臣↓新生Gフォース総司令

国土交通大臣。真霜や邦夫の上司で真雪の親友。性格は、冷静沈着。異世界の日本に迷い込んだ龍之介達を助けた人物で出身などは、謎で何故か龍之介達の事をよく知っている。田沼とは、総理に成る前から親友だったものの、総理就任後は、意見などで対立する。

白鳳の技術をアメリカに売り渡そうとする田沼に反対し阻止する。

その後は、ゴジラ捜索などに協力する。

正体は、かつて第3次ゴジラ戦で殉職した美由紀の兄、権藤吾郎で異世界に飛ばされた後、真雪に救助された。

救助後は、ホワイトドルフィンに入り、その後は政界に転身し今の地位に着いた。

RATt事件では、邦夫の策によって、職を追放され、自宅で謹慎する。

その後、真霜によって、龍之介達と晴風が無実だと証明され、職務に復帰、事件解決に努める。その最中、事件の調査をしていた真霜から田沼がアメリカとの裏取引していた事を聞いて、田沼を問い詰め、事件解決に協力するよう取引をする。

事件解決後は、田沼の服毒自殺により国土交通大臣を辞任。隠居生活をしようとした

が、龍之介によつて、新生Gフォースの総司令となる。

田沼 忠義（たぬま ただよし）

役職：日本総理大臣

日本の総理大臣でRATt事件を起こした張本人の一人。性格は、清らかだが冷酷的で自分の野心や身内の為に権力を振るつたり、政治資金を密かに私有的に横領をする。そのせいで野党に何時も責められている。かつては、国の為に忠義を尽くしたい信念を持っていて、その関係で深町と親友に成り、深町の援助で総理に就任したが、総理就任後は、疑惑を起こしているせいで、深町と対立している。Gフォースの技術を狙うアメリカに対して、要求を飲み龍之介達を売ろうとしたが、深町に裏金の証拠を掴まれ阻止された。その後は、アメリカの要求を遂行しようと裏で暗躍する。

RATt事件では、晴風の反乱を気に龍之介達を拘束、監禁して、野田親子を使って、技術を奪おうとしたが、真霜によつて、阻止され、更に密かにアメリカとの裏取引で行われたRATtの研究が暴かれ、深町に問い詰められ事件解決の為、協力に応じる。

事件後、野党の追及に会い、更にキング大統領にも裏切られて、自宅で服毒自殺を遂げる。

野田 一誠（のだ いっせい）

役職：国土交通大臣代理↓新生Gフォース総参謀長

元官僚で邦夫の父親。かつては官房長官も務めた履歴が有る。親に内緒で愛人を作った息子の邦夫を勘当するが、田沼の説得によって、戻す。

RATt事件では、田沼と邦夫の策によって、深町の後がまにされる。

だが、真霜によって、邦夫の罪が暴かれると、その罪を嘆き、邦夫に自首する様言う。事件解決後は、新生Gフォースの総参謀長となる。

アメリカ

ジョージ・キング

役職：アメリカ大統領

アメリカ第45代大統領でRATt事件を起こした張本人の一人。元々は、不動産王で金しか頭がない人物。日本の財政を回復しようと翻弄する田沼に財政の回復と借金返済を援助する代わりにRATtの研究を日本で行えるよう裏取引を持ちかけた。Gフォースの技術を使い大儲けしようと企むが、深町に阻止され、その後は、田沼を使って、何とか奪おうと暗躍する。

RATt事件では、裏で行われていたRATtの研究が明るみに出たのを知り、それをもみ消そうと艦隊を差し向け、更に今回の事件を日本政府の陰謀にしようとした。

しかし、突然のゴジラ出現により計画は破綻した。

特別編では、再び日本政府を操ろうと海賊と密かに手を組み、海上プラント及び海上要塞占拠の手引きや極秘裏に開発していた無人戦闘機を提供した。

ウイリアム・ボガート

役職：アメリカ太平洋艦隊司令長官

階級：中将

アメリカ太平洋艦隊司令長官でRATt事件では、キングの命令で密かに出撃する。

最終戦では、Gフォースと横須賀女子海洋学校の増援部隊が武蔵を救助中に奇襲をかけ、武蔵と生徒を引き渡すよう要求するが、突然のゴジラ出現で艦隊の殆んどを艦艇を失う。

その他

黒木翔（くろき しょう）

役職：日本国防軍特殊戦略作戦室室長

階級：准将

日本国防軍特殊戦略作戦室室長で龍之介の元上官。パイロットの資格を失った龍之介を自分の元にスカウトした張本人。第3次ゴジラ戦でゴジラ迎撃を指揮し、サンダーボルト作戦を実施した。

黎明編では、名前しか登場しない。

権藤吾郎（ごんどう ごろう）

役職：日本国防軍

階級：大佐

日本国防軍の大佐で龍之介の元上官。美由紀の兄。普段は物事を斜に構えて見るところがあり、事態を他人事のようにとらえた発言もするなど不謹慎な面も目立つが、実際は冷静な判断力と高い行動力を持つベテラン。所謂、やるときはやる男である。

第3次ゴジラ戦でゴジラに対し、抗核エネルギーバクテリアをゴジラに撃ち込むが、怒り狂ったゴジラによって、潜伏していたビルごと下敷きになって、殉職した。

だが、実際には死んでおらず、国交相の深町として生きていた。

その他

芹沢 大助（せりぎわ だいすけ）

龍之介達が生まれる30年前（真霜達には、50年前）に生きていた科学者でゴジラを倒した唯一の兵器「オキシジエンデストロイヤー（水中酸素破壊剤）」の開発者。

戦争で右目を失い、戦後は科学者として、研究を続け、とある事でオキシジエンデストロイヤーを発見する。芹澤は、オキシジエンデストロイヤーを初めて実験した時、恐るべき破壊力だと知り、その研究を他人に知られない様に密かに研究を続ける。

だが、その研究を元婚約者である山根恵美子に教えた事が芹澤にとって、自分の命を縮める事に成ってしまった。やがて、最初のゴジラ戦で恵美子が惨劇を見てしまい、そのせいで黙っていられなくなり、婚約者である尾形秀人に話してしまい。

尾形にゴジラを倒す為にオキシジエンデストロイヤーを使わせてほしいと頼まれるが、戦争の道具に使われたくないと言った芹澤は、拒むが。ゴジラが破壊した東京の惨状を見せられた事で心が揺らぎ、遂に研究資料を焼却し、使用を許可する。

そして、東京湾について、ゴジラの足元でオキシジエンデストロイヤーを使用。自らもゴジラと共にその若い生涯を絶った。

黎明編では、名前しか登場しない。

スーザン・レジエス

出身：不明

誕生日：6月12日（ふたご座）

血液型：O型

身長：145cm

性格・特徴：人懐っこく、人を疑わない

趣味・特技：竹登り

得意科目：なし

苦手科目：漢字

好物：粉もの全般

苦手な物：なし

好きな言葉：石を投げられたらパンを投げ返そう。

ニックネーム：スーちゃん

競闘遊戯会で出会った少女。父親を捜す為に日本に来たと言うが、大荷物を抱え、家出少女にしか見えないが、実際は腕のいい水先案内人。その腕をテロリストに狙われ、父親に合わせると言う条件で廃棄フロートを操作して、横須賀港を閉塞させる。その後

は、武蔵や晴風に同乗して海上要塞攻略戦に参加する。

海賊リーダー

南太平洋を拠点に海賊行為を行うテロ組織のリーダー。南太平洋を我がままの如く嵐回っていたが、海賊鎮圧に乗り出すGフォース部隊により、活動を抑えられてしまう。何とか打開しようと、日本政府を屈伏させ様と暗躍するアメリカと密かに手を組み、海上プラント及び海上要塞を占拠するが、真冬と林率いる強襲部隊に制圧され、最後は真冬に半殺しにされて逮捕された。

登場兵器

登場兵器

Gフオース

超湾級空母大鳳

全長：340 m

全幅：76.8 m

吃水：11.5 m

基準排水量：81,000 t 以上

満載排水量：102,000 t

ボイラー：ガ号艦本式缶8基

機関：蒸気タービン4基、4軸（スクリュウが2重反転式プロペラ）

出力：280,000馬力

速力：35ノット

航続距離：22,000km(20ノット)

乗員：5700人

艦番号：GF-88(大鳳)

兵装

シースパロー短SAM 8連装発射機2基、RIM-116 RAM 2基、20m
mCIWS 3基、12.7mm機銃多数

レーダー：3次元レーダー OPS-12、対空搜索レーダー OPS-2、対水上

搜索用レーダー OPS-11、航海用レーダー OPS-20、精測進入用レーダー

AN/SPN-46

ソナー：75式探信儀 OQS-101

電子戦：電波探知妨害装置 NOLQ-2、ミサイル警報装置 OLR-9B、M

k. 137 デコイ発射機

搭載機

搭載機数90機(艦上戦闘攻撃機FA-3G春乱78機、早期警戒機E2G3機、対

潜ヘリSH60 G 3機、兵員輸送攻撃ヘリUH-1G3機、対戦車ヘリAH-1G

コブラ3機)

概要

日本国防軍、鳳凰型超湾級空母。第二次世界大戦後に日本が建造した初の超湾級空母（超大型空母）。第二次世界大戦で空母の重要性が強まり、各国（アメリカ、ロシア、イギリス、中国など）は、空母を保有し始めた。その中で日本は、大型でより強力な空母の建造を計画する。だが、戦後で物資が不足した為、止む無く、建造を延期せざる負えなかった。再び建造が再開できたのは、1954年の第1次ゴジラ戦後で国防軍が創設されてからだった。不足していた物資も旧式化した艦船（大鳳の場合は、武蔵と信濃をスクラップにして建造された。）などをスクラップにし、更に最新式の技術（アングルド・デッキなど）も取り入れられた。だが、機関については、原子力機関にしようとしたが、一部の幹部からの反対とソ連のチェルノブイリ原発事故の影響もあり、三菱が製造した超大型艦用の蒸気タービンを搭載する事で解決した。就役した一番艦の鳳凰は、西側盟主アメリカの原子力空母エンタープライズ並の大きさだが、艦載機数は、90機とエンタープライズをうまわっていた。更に艦隊指揮や最前線の航空部隊を指揮する司令部としての機能も保有している。最終的には8隻建造する計画であったが、第2次ゴジラ戦後に対ゴジラ兵器の開発に予算を回した為6隻（同型艦赤城、大鳳、飛龍、翔鶴、瑞鶴）で建造を終了した。残り2隻分の予算はスーパークラス2にシフトしている。就役後は、日本の空母航空団の中核として、各艦隊に1隻ずつ配備され、艦隊の旗艦を務めている。更に5番艦の翔鶴と6番艦の瑞鶴は、これまで建造された鳳凰型を更に改良した

鳳凰改型と呼ばれている。

船体と艦橋は、アメリカの通常空母キティホークをモデルにしている。

艦長：山本 薫中佐（二等保安監督官）、

副長：八神はやて中佐（三等保安監督官）

Gフォース西部方面艦隊旗艦。鳳凰型三番艦。冷戦末期に建造されたので、別名：冷戦の遺物（1番艦から4番艦まで）とも呼ばれている。その名の通り、中東紛争、湾岸戦争などに参加、航空支援や物資輸送、合同演習を実施した。冷戦後は、横須賀を母港とする第5艦隊に配備されたが、Gフォース創設後に龍之介の指揮のもとGフォース西部方面艦隊の旗艦として配備される。その後、5年間もゴジラ迎撃作戦に参加。異世界に飛ばされてもなおも旗艦を勤め。RAT事件では、横須賀のドックでオーバーホール中だったが、武蔵の報を聞いて、急遽修理を完了させて、武蔵などの不明艦を捜索する。アドミラル・グラフ・シユペー戦以降は、搭載している艦載機でウイルスに感染した学生艦を次々と制圧する。

新起動編では、白鳳に代わって、Gフォースの主力を務める。横女の生徒からは、武蔵より最大の艦だと評価される。

特別編では、学生艦隊と共にプラント及び海上要塞の制圧に向かい、航空戦の威力を発揮する。

特殊戦闘艦白鳳

全長 200 m

全高 50 m

全幅 30 m

重量 10,000 t

機関：レーザー核融合炉1基

速度：マッハ5

航続距離：無限

乗員 30人

艦番号 GF-200 (白鳳)

5式ハイパーメーサー砲1門、収納式ミサイルランチャー2基、ハイパーレーザー砲2門、フルメタルミサイル20発、50 mバルカン砲2門、魚雷発射管4門、

試作型対ゴジラ万能護衛艦。別名スーパーXIV。対ゴジラ兵器として建造されスーパーXシリーズや3式機龍の技術や経験が生かし建造された万能護衛艦。装甲は、超耐熱合金NT-1Sが使用され、装甲に施された人工ダイヤモンドコーティングにより、過去の対G兵器と比較してさらに優れた防御力を持っている。(正し艦船による防御力

は、現代の護衛艦と同じ）動力は、レーザー核融合炉1基で空中をメインブースター1基、補助ロケット2基で飛行する。水中（水深1000mまで潜航が可能）と海上では補助ロケット2基で航行する。武装は、3式機龍に搭載された3連式ハイパーメーサー砲を艦船用に改良した5式ハイパーメーサー砲を艦首1門、ハイパーレーザ砲2門や50mmバルカン砲2門更に水中用として魚雷発射管4門を搭載している。

艦長小沢次郎中佐（二等保安監督官）

副長林 三郎少佐（三等保安監督官）

Gフォース西部方面艦隊。ゴジラ戦終了後に就役。廃棄処分される筈だったが、異世界に飛ばされては、極秘の戦闘艦として活動を最小限にしていたが、アメリカなどの他の国に興味を抱かされ、戦争に使わないと言う事で地中海方面のブルーマーメイドに支援に派遣されたが、RATt事件では、急報を聞いて、権藤中佐の命で密かに艦隊から離脱し、薫達、晴風と合流。一度は、横須賀に寄港するが、武蔵の報を聞いて、空母大鳳と共に武蔵などの不明艦を捜索する。比叡戦では、危機的な状態に落ちいた晴風を救い、座礁した比叡を制圧する。比叡戦後は、弁天と共にヴィルヘルムスハーフェン女子海洋学校の大型直接教育艦ビスマルクを制圧する。

最終戦では、平賀艦隊と共に武蔵と交戦、最終的に晴風突入を支援する。

更にゴジラとの戦闘で武器管制と機関部が損傷。

横須賀女子海洋学校の地下ドックで修理と改装中。

高速戦艦高千穂

全長：263 m

全幅：38.9 m

吃水：10.4 m

基準排水量：64000 t

満載排水量：72000 t

ボイラー：口号艦本式改缶12基

機関：艦本式オール・ギヤード・タービン4基4軸

出力：212,000馬力

速力：35ノット

航続距離：7200海里（16ノット）

乗員：2700人

艦番号：GF-20（高千穂）

兵装

40 cm 砲（50口径）4連装3基12門、15.5 cm（60口径）砲3連装3基

9門、Mk 12 12.7cm (38口径) 砲2連装16門、20mm CIWS 4基、ハーブーンSSM 4連装発射筒4基、トマホークSSCL 4連装発射筒4基、フルメタルミサイル28発、D03 掘削弾20発

レーダー：72式射撃指揮装置1型 (FC S—1)、対水上探用レーダー OPS—9、対空搜索レーダー OPS—11、航海用レーダー OPS—20B

ソナー：75式探信儀 OQS—101

電子戦：Mk. 137 デコイ発射機

装甲 舷側410mm、甲板230mm、砲塔前楯650mm、砲塔側楯250mm、砲塔天
 嘩蓋270mm

概要

高千穂型高速戦艦。第二次世界大戦後半に建造された空母直掩高速戦艦で、元は、建造中だった大和型4番艦と5番艦を改良し、主砲は、46cm砲より一回り小さい40cm砲を3基12門を搭載し、対空砲や機銃を増設し、航空機に対処した。第二次世界大戦後は、ソ連や東側に対抗する為、近代化改装、ハーブーンやトマホーク (通常弾頭のみ)、20mm CIWSが新たに装備され、ヘリー離着陸用甲板を増設した。冷戦後は、Gフォースに編入、対ゴジラ兵器として、フルメタルミサイルやD03 掘削弾を装備した。

艦長：権藤美由紀中佐（二等保安監督官）

副長：岸田文夫少佐（三等保安監督官）

Gフォース西部方面艦隊権藤部隊旗艦。第1時ゴジラ戦から第5次ゴジラ戦に参加。異世界に飛ばされてからも権藤部隊旗艦の旗艦を勤めている。海上安全整備局の命令で地中海方面のブルーマーメイドに支援に派遣されたが、RATt事件では、地中海から急いで帰当投中。

イージス汎用巡洋艦さつま、すくね

全長：172.8 m

全幅：16.76 m

吃水：7.46 m

基準排水量：6,997 t

満載排水量：9,763 t

機関：LM2500ガスタービンエンジン 2基2軸

出力：20,000馬力

速度：35ノット

航続距離 6,000海里（20ノット）

乗員：350人

艦番号：GF-120（さつま）、GF-121（すくね）

兵装

62口径5インチ単装砲1基、Mk 41 mod. 0 VLS 122セル、フル
 メタルミサイル20発、D03 掘削弾16発、Mk 15 20mmフアランクスC
 IWS 2基、Mk 32短魚雷3連装発射管 2基

レーダー：多機能レーダー AN/SPY-1D(V)、対水上探索用レーダー AN
 /SPQ-9B、対水上探索用レーダー OPS-28E、航海用レーダー OPS-
 20B

ソナー：艦首装備型 AN/SQS-53C、曳航式 OQR-2D-1、曳航式

AN/SQR-20 MFTA

電子戦：電波探知妨害装置 NOLQ-3、Mk. 137 デコイ発射機

搭載機

対潜ヘリSH60 2機、特殊潜航艇さつま3艇

概要

日本国防軍あいづ型汎用巡洋艦。第2次ゴジラ戦以降に建造された第3世代汎用巡洋艦。外見は、米のタイコデロンガ級を元に設計し艦橋部分はより大型化した。更に特

殊潜航艇さつま搭載格納庫を設置。8隻建造され、その内の4隻がGフォースに編入され、西部方面と東部方面艦隊に2隻ずつ配備された。

さつま

艦長： 田中重雄中佐

副長：梅田 守少佐

Gフォース西部方面艦隊。5年間もゴジラ迎撃作戦に参加。異世界に飛ばされてからもGフォース西部方面艦隊に所属。仮想巡洋艦事件では、機関部や至るところを破壊するも仮想巡洋艦を制圧した。海上安全整備局の命令で地中海方面のブルーマーメイドに支援に派遣されたが、RATt事件では、地中海から急いで帰当投中。

すくね

艦長：十六夜五月中佐

副長：南田志津真少佐

Gフォース西部方面艦隊。5年間もゴジラ迎撃作戦に参加。異世界に飛ばされてからもGフォース西部方面艦隊に所属。権藤部隊が地中海に派遣されている時は、空母大鳳と共に横須賀基地に残留。RATt事件では、空母大鳳と共に武蔵などの不明艦を捜索する。

護衛艦いばらき、せんだい、ながおか、きしゅう

全長：130 m

全幅：13.6 m

吃水：4.4 m

基準排水量：2,900 t

満載排水量：4,000 t

機関：TM3Bガスタービンエンジン2基2軸

出力：22,500馬力

速度：30ノット

航続距離：5,590海里（20ノット）

乗員：200人

艦番号：GF-130、GF-135、GF-132、GF-136

兵装

62口径76mm単装砲1基、シースパロー短SAM 8連装発射機1基、ハーブ
ンSSM 4連装発射筒2基、74式8連装アスロック発射機1基、Mk 15 20
mmフアランクスCIWS 2基、Mk 32短魚雷3連装発射管 2基、フルメタル

ミサイル16発、

レーダー：対空捜索用レーダー OPS-14B、対水上捜索用レーダー OP
S-18

ソナー：艦底装備式 OQS-4、曳航式 OQR-1

電子戦：電波探知装置 NOLR-6C、電波妨害装置 OLT-3、ミサイル警報

装置 OLR-9B

搭載機

対潜ヘリSH60 1機、

概要

日本国防軍はつゆき型汎用護衛艦。国防軍が第1次ゴジラ戦以降に建造した第1世代汎用護衛艦で、旧式ながらもまだ主力の護衛艦として使われている。

いばらき

艦長：十条紫音中佐

副長：高槻 渚少佐

Gフォース西部方面艦隊。5年間もゴジラ迎撃作戦に参加。異世界に飛ばされてからもGフォース西部方面艦隊に所属。海上安全整備局の命令で地中海方面のブルーマーメイドに支援に派遣されたが、RATt事件では、地中海から急いで帰当投中。

せんだい

艦長：原田与力中佐

副長：橋 直気少佐

Gフォース西部方面艦隊。5年間もゴジラ迎撃作戦に参加。異世界に飛ばされてからもGフォース西部方面艦隊に所属。権藤部隊が地中海に派遣されている時は、空母大鳳と共に横須賀基地に残留。RATt事件では、空母大鳳と共に武蔵などの不明艦を捜索する。捜索中にしんばしの救難信号を受信、救助に向かい、しんばしに閉じ込められているましろと薫を救出する為、D-03を発射し、2人を救出する。その後、浪速と共に救出したしんばしの乗員を横須賀まで移送する。移送後は、再び武蔵などの不明艦を捜索する。

ながおか

艦長：片桐士道中佐

副長：一木優作少佐

Gフォース西部方面艦隊。5年間もゴジラ迎撃作戦に参加。異世界に飛ばされてからもGフォース西部方面艦隊に所属。仮想巡洋艦事件では、とよだと共に沖繩諸島を紹介する。海上安全整備局の命令で地中海方面のブルーマーメイドに支援に派遣された

が、RATt事件では、地中海から急いで帰当投中。

きしゆう

艦長：四条那月中佐

副長：高坂天音少佐

Gフォース西部方面艦隊。5年間もゴジラ迎撃作戦に参加。異世界に飛ばされてからもGフォース西部方面艦隊に所属。海上安全整備局の命令で地中海方面のブルーマーメイドに支援に派遣されたが、RATt事件では、地中海から急いで帰当投中。

補給艦せた、とよだ

全長：225.0 m

全幅：32.2 m

吃水：9.0 m

基準排水量：26.118 t

満載排水量：42,528 t

機関：SM1Cガスタービンエンジン 2基2軸

出力：20,000馬力

速度：25ノット

航続距離 9・500海里(20ノット)

乗員：150人

艦番号：GF-200(せた)、GF-201(とよだ)

レーダー：対水上捜索用レーダー OPS-28、航海用レーダー OPS-20

B

ソナー：OQS-4 艦底装備式、OQR-1 曳航式

兵装

なし

概要

日本国防軍せた型補給艦。日本国防軍が4隻建造した大型補給艦で、艦隊の長期活動を目的の為に建造された。

せた

艦長：柴田 徹少佐

副長：松田金太郎大尉

Gフォース西部方面艦隊。5年間もゴジラ迎撃作戦に参加。異世界に飛ばされてからもGフォース西部方面艦隊に所属。権藤部隊が地中海に派遣されている時は、空母大鳳と共に横須賀基地に残留。RATt事件では、武蔵などの不明艦を捜索しているG

フオース西部方面混成艦隊に補給を行っている。

とよだ

艦長：日下部みちる少佐

副長：向島美冬大尉

Gフオース西部方面艦隊。5年間もゴジラ迎撃作戦に参加。異世界に飛ばされてからもGフオース西部方面艦隊に所属。海上安全整備局の命令で地中海方面のブルーマーメイドに支援に派遣されたが、RATt事件では、地中海から急いで帰当投中。

航空機

艦上戦闘攻撃機FA-3G 春乱

全長：18.38 m

全幅：13.62 m

最大全備重量：644.52 kg

エンジン：中島製 F220改 ターボファン2基

ドライ出力：8,790 kg×2

アフターバーナ出力：11,190 kg×2

最大速度：M3.0

航続距離2800 km

乗員 1人

兵装

30 mm機関砲1門、対空装備(90式短距離空対空ミサイル4発、99式中距離空対空ミサイル4発、300ガロン増槽2基)、対艦装備(90式短距離空対空ミサイル2発、93式空対艦ミサイル4発、Mk. 82 500ポンド爆弾4発、航空魚雷ドラゴンアロー1発)

概要

Gフォース専用艦上戦闘攻撃機。元は、日本国防軍が開発した艦上戦闘攻撃機で主力であった艦上戦闘機F-2 巖流の後継機として開発された。機体は、アメリカのFA-18E/Fをベース(機体だけライセンスを取っている)に設計され、エンジンは、陸上の航空部隊で運用されていたLF-2 紫電Ⅲ(F-15の機体をベースに開発された制空戦闘機)のF220を搭載できる様に小型に改良したF220を搭載、更に電子機器も最新鋭の機器を搭載した。航続距離は、2800 kmとFA-18E/Fより短い、武装は、機関砲以外、FA-18E/Fと保々同じ、だが一番の特徴は、紫電Ⅲと同じM3.0の速度が出せる事だ。普通の戦闘機は、如何してもM2.0までしか出

ず、ベースとなったFA-18E/FでもせいぜいM1.8が限界であった。この性能を知った各国は、こぞって、この機体を購入する（理由は、高額で不良品ばかり売り付けるアメリカより日本の方が少々高額だが信頼性が高かった事）。そのせいで、アメリカから、この機体の特許権で訴えられるが、結果的にアメリカが自ら敗北を認め、逆にライセンス生産している。（理由、購入国から圧力を掛けられた。）就役後は、空母航空団や基地航空隊に配備され、今では、主力攻撃機として、王者に君臨している。

早期警戒機E2Gニューホークアイ

全長：17.56m

全幅：24.56m

最大全備重量：25t

エンジン：アリソン T56-A-427 ターボプロップ2基

出力：5,100馬力×2

最大速度：625km

航続距離：2,854km

乗員：5人

兵装

なし

概要

Gフォース専用早期警戒機。ゴジラ索敵用にあらゆるセンサーを装備し、ゴジラ捜索を行う。それ以外では、機動艦隊の目として、哨戒や警戒、また艦載機の誘導を行う。

対潜ヘリSH60G シーホーク

全長：19.8 m

全幅：24.56 m

最大全備重量：8.055 t

エンジン：T700—GE—401C ターボシャフト2基

出力：1.800馬力×2

最大速度：276 km

航続距離：834 km

乗員：4人

兵装

Mk. 46魚雷、Mk. 50 魚雷3発、ハーブーン対艦ミサイル2発、12.7 m

m機関銃1基

概要

Gフォース専用対潜ヘリコプター。E2J同様にゴジラ捜索に使用される。それ以外は、対潜、対艦攻撃に使用されている。

多用途ヘリUH-1G イロコイ

全長：17.5 m

全幅：14.7 m

最大全備重量：4.7 t

エンジン：ライカミングT53-K-703 1基

出力：1,800馬力×1

最大速度：216 km

航続距離：370 km

乗員：13人

兵装

M60 7.62 mm機関銃1基、20 mm機関砲2基、70 mmロケット弾発射筒

2基

概要

Gフォース専用の多用途ヘリコプター。ゴジラ攻撃や対地攻撃を主任務にしている。それ以外では、人員や物資を輸送する。

対戦車ヘリA H—1 G コプラー

全長：16.16 m

全幅：13.4 m

最大全備重量：4,536 kg

エンジン：ライカミングT53—K—703 1基

出力：1,800馬力×1

最大速度：231 km

航続距離：228 km

乗員：2人

兵装

20 mm機関砲1基、TOW対戦車ミサイル2基、70 mmロケット弾発射筒2基

概要

Gフォース専用の対戦車ヘリコプター。ゴジラ攻撃や対地攻撃を主任務にしている。

潜水艇

特殊潜航艇さつま

全長：6 m

重量：基準排水量880 t

速度：水上12ノット、水中20ノット

乗員：2人

兵装

魚雷1発

概要

Gフォース専用の潜水艇。主に原潜などの沈没事故での作業を想定して開発された。為、放射能遮蔽機能を有している。さつまやすくねには、それぞれ3艇が搭載されている。

兵器

フルメタルミサイル

全長：8 m

全幅：3.5 m

全高：4.5 m

重量：40 t

最高速度：時速80 km

対ゴジラ用として開発された特殊貫通弾。弾頭は、特殊金属でできており、爆破せず、貫通を目的としており、厚さ10 mの鉄筋コンクリートを貫通する事が出来る。

D0-3

対ゴジラ用として開発された特殊削岩弾。ミサイルの先端に装着して発射され、命中前に推進起動部と装甲が分離。標的に命中した後、高速回転するドリルによって標的の内部に進行し、破壊する。対艦ミサイルやさつまにも搭載可能な利便性の高い兵器である。

ブルーマーメイド

みくら、べんてん、みやげ、こうづ、はちじょう

全長：127.4 m

全幅：31.6 m

吃水：4.3 m

基準排水量：2.176 t

満載排水量：3.104 t

機関：LM2500ブレイトンサイクルエンジン2基、M71ディーゼルエンジン2基、ウォータージェット推進器4軸、アジマススラストター1基

出力：33,700馬力×2 + 11,000馬力×2

速度：44.0ノット

航続距離：4.300海里（18ノット）

乗員：40人

艦番号：BPF-14、BPF-10、BPF-15、BPF-16、BPF-17
兵装

Mk. 110 57mm単装速射砲1基、12.7ミリ機銃4基他、

レーダー：02式複合近距離探針装置

ソナー：不明

搭載機

Z60S 戦術偵察飛行船1機、高速艇1隻、中型スキップパー2隻

概要

改インディペンデンス級作戦艦艇。各国のブルーマーメイドで採用されている戦闘艦。

みくら

艦長：福内典子

安全監督室、情報調査隊の所属で龍之介のGフォース西部方面艦隊に初めて接触した艦でもある。「パーシアス作戦」で、平賀とも乗艦し、同型の「みやげ」・「こうづ」・「はちじょう」と共に、別動隊として九州に配置されていた。しかし予想に反して武蔵が日本近海に現れたために九州から急行、白鳳と共に武蔵と交戦。善戦するが、「みくら」以外を戦闘不能にされ、「みくら」も航行に支障をきたすレベルのダメージを受けてしまう。

べんてん

艦長：宗谷真冬

強制執行課、戦術執行部隊の所属で船体は、真冬の趣味なのか色は、黒に染めている。不明艦の搜索活動をしていた折、トラック諸島で比叡発見の報を聞いて駆けつけ比叡の確保および收拾後、再びトラック諸島北方で不明艦の発見の報を聞き、搜索に出る。途

中で白鳳と共にヴィルヘルムスハーフェン女子海洋学校の大型直接教育艦ビスマルクを制圧する。その後は、鳥海、摩耶、五十鈴などウイルスに感染した教育艦を次々と制圧した。「パーシアス作戦」では、フィリピン方面に展開していたが、武蔵が日本近海に現れたため、急行した。

みやげ

艦長：不明

安全監督室、情報調査隊の所属。「パーシアス作戦」では、みくらと共に武蔵と交戦するも戦闘不能になる。

こうづ

艦長：不明

安全監督室、情報調査隊の所属。「パーシアス作戦」では、みくらと共に武蔵と交戦するも戦闘不能になる。

はちじょう

艦長：不明

安全監督室、情報調査隊の所属。「パーシアス作戦」では、みくらと共に武蔵と交戦するも戦闘不能になる。

横須賀女子海洋学校

航洋直接教育艦晴風、晴風Ⅱ

全長：118.5 m

全幅：10.8 m

吃水：3.8 m

基準排水量：2,033 t

満載排水量：2,553 t

ボイラー：口号艦本式缶3基

機関：艦本式衝動タービン2基2軸

出力：55,000馬力

速力：37.0ノット（晴風Ⅱ35.0ノット）

航続距離：5000海里（18ノット）

乗員：31人

艦番号：JBNT-Y-467（晴風）、JBNT-Y-469（晴風Ⅱ）

兵装

晴風

50口径12.7mm連装砲3基（第25章以降98式10cm連装高角砲3基に変更、第32章以降Mk.39 5インチ単装速射砲3基に変更、更に墳進弾2基追加）、61mm魚雷4連装発射管2基（予備魚雷8本）、20mm単装機銃4基、爆雷16個、

晴風II

55口径15cm単装砲3基、61mm魚雷4連装発射管2基（予備魚雷8本）、25mm連装機銃2基、20mm単装機銃2基、爆雷16個、

レーダー：55式対水上探知機、69式航海探知機

ソナー：56式遠距離探針装置

搭載艇

中型スキッパー2隻

概要

陽炎型航洋直接教育艦。1929年の世界恐慌によって、各国はブロック経済を推し進めたが、アメリカは中国北東部経営に日本の協力を得る必要があり、アメリカ中心とする経済圏（通称ドル・ブロック）に日本の参加を打診する。また日本も、資源の大部分を輸入に頼っていたので、この打診を受けた。これによって、日本を守るべき航路は大幅に拡大、シーレーン維持のためには従来の艦艇では、性能不足で35ノット以上の速度と、巡航で5000海里の航続距離を持ちつつ、それまでの駆逐艦と同等の武装を

有する艦の建造を決定する。それが、陽炎型であった。1937年に18隻の予算が承認され、39年には更に追加された。3隻は大和型の予算に振り分けられる可能性もあつたが、アメリカとの協力関係が良好であつたため、大和型の排水量を偽装する必要もなく、そのまま建造されている。晴風はその3隻のうちの1隻で天津風に搭載された高圧缶を更に改良した試験用の機材が搭載されている。この高圧缶が不調を頻発し、定期的にドック入りを余儀なくされた。このため色々な新兵器のテストベットとして使用され、後にブルーマーメイド養成学校が設立されると、真つ先に教育用機材へと転用された。

晴風

艦長：岬 明乃

副長：宗谷ましろ

横須賀女子海洋学校所属。明乃達が乗る艦。試験用の機材を搭載しているために同型艦よりも高速だが、機関の高圧缶は故障も多く、その安定性に欠ける。中型スキップアーを2隻搭載しており、搭乗員による高機動活動にも対応。また、人員や物資輸送のための大型ボートも搭載されている。伊201までの戦闘で船体や砲塔を含む装備が損傷し、「明石」と合流した際、損傷箇所を修復。その際、「明石」の乗組員の工作により損傷した砲塔も含め、主砲を長十糧高角砲に換装する。シユペー救出戦で第3砲塔が

全壊し、再度明石の修理を受けると共に主砲は5インチ単装砲に換装され、同時に射撃管制機器も新しいものに変更される。兵装類は主砲以外はモーターフとなった陽炎型駆逐艦に準じているが、レーダーやソナーなどの電子装備は近代化され、砲塔には自動揚弾・装填機構が備わるなど、少人数の女子でも運用できるように各部の自動化が進んでいる。主砲の実弾は艦長と副長の両者が各自で持つ特殊な鍵で同時解錠しなければ発射できない。日本近海での武蔵救出戦にて各所に被害を受けつつ、味方の支援を受けて作戦を成功させるが、横須賀帰港後、任務を全うしたことに満足したかのように静かに沈み始め、5月5日夕刻、晴風クラスが見守る中、横須賀埠頭の海底へ没する。

晴風II

艦長：岬 明乃

副長：宗谷ましろ

横須賀女子海洋学校所属。横須賀女子海洋学校のドックで予備艦として保管状態となっていた陽炎型航洋直接教育艦「沖風」を、晴風から引き揚げた部品や以前改装時に晴風から取り外した部品などを使用して、稼動状態にした艦。主砲は、アドミラル・グラーフ・シュペー用の15cm予備副砲を元に、小改造が行われて搭載されている。この砲は砲身自体は、晴風が最初に搭載していた12.7cm砲よりも重いが、単装砲のため砲塔全体としてはむしろ軽くなっている。また、射程は1.3倍、砲弾が倍近く重くなっ

たこともあり、貫徹力も大幅に向上している。艦自体の最高速度は、機関が初代晴風の高圧缶から、ほかの陽炎型と同じものになったため、出力と共に低下している。だが、それに対して信用性は向上しているので、機関長の麻侖としてはやや物足りなさを感じる可能性がある。なお、出港後幸子が艦内へのTVとBDプレイヤーの増設を要求したが、それは却下された。

教員艦さるしま、てんじん

全長：127.4 m

全幅：31.6 m

吃水：4.3 m

基準排水量：2.176 t

満載排水量：3.104 t

機関：LM2500ブレイトンサイクルエンジン2基、M71ディーゼルエンジン2基、ウオータージェット推進器4軸、アジマススラスタ1基

出力：33,700馬力×2 + 11,000馬力×2

速度：44.0ノット

航続距離：4,300海里（18ノット）

乗員：40人

艦番号：JBNTRY-083、JBNTRY-089

兵装

Mk. 110 57mm単装速射砲1基、12.7ミリ機銃4基他、

レーダー：02式複合近距離探針装置

ソナー：不明

搭載機

Z60S 戦術偵察飛行船1機、高速艇1隻、中型スキップパー2隻

概要

改インディペンデンス級教育艦。各国のブルーマーメイド組織が新型の大型教育艦を求めて、各造船メーカーに競争試作を行わせた結果、アメリカのエレクトリック・シツプ社の設計が優れているとして、まずアメリカで、次いで日本の一部で採用が決定された。三胴式の船体特徴的で、水上を高速で移動可能な上、短い船体にも関わらず内部が広く取れるのが教育艦に適していた。ただ、強い波には弱く、日本周辺での活動には支障があるため、日本向けは重心の低下とスタビライザーの強化などで復原性を向上させた改良を行っている。基本兵装は教育用に最小限となっているが、必要に応じて様々な装備を搭載可能となっている。主砲を垂直発射システムに換装も可能で、更には飛行

船甲板下に教育用区画があり、各種教育モジュールや掃海用装備、各種高速艇、スキツパー、更には車輛までも搭載可能となっている。また、小型艦並みのサイズでありながら、三胴式の船体を生かして大型の飛行船甲板を持っているので、最新鋭のZ60S型戦術偵察飛行船を搭載、緊急時にはもう1機を追加可能で、さらに大型のZ53型輸送用飛行船の発着も可能となっている。但し、大型艦並みのあらゆる任務に対応させるため、小さな船体にあれこれと詰め込み建造費が極めて高額になっているのが最大のネック。

さるしま

艦長：古庄 薫二等監督官

横須賀女子海洋学校所属。海洋実習で合流地点の西之島新島で他の教育艦と共にRATtウイルスに乗員が感染し、遅刻して到着した晴風を突如速射砲で砲撃するが、晴風からの模擬弾頭魚雷の反撃を受け、沈没する。その後の調査で、「さるしま」には海洋生物の生態を研究を名目として研究員のチームが派遣されていたが、実際は西之島新島に打ち上げられた沈んでいたはずの実験艦からRATtのデータを回収して自沈させるための準備であった。しかし「さるしま」はRATtウイルスに感染してしまい、研究員のチームも意識不明となる。沈没するほどの損傷ではなかった「さるしま」が沈没した原因も、乗員がウイルスに感染したことでダメージコントロールができなかった為

である。

てんじん

艦長：古庄 薫二等監督官

横須賀女子海洋学校所属。感染した武蔵を止める。比叡、舞風、浜風、アドミラル・グ
ラフ・シユペーを率いて晴風の支援に駆け付ける。

超大型直接教育艦武蔵

全長：263 m

全幅：38.9 m

吃水：10.4 m

基準排水量：64,000 t

満載排水量：72,000 t

ボイラー：口号艦本式缶12基

機関：艦本式オール・ギヤード・タービン4基4軸

出力：150,000馬力

速力：27.0ノット

航続距離：7,200海里（16ノット巡航時）

乗員：30人

艦番号：JBN T—Y—118

兵装

45口径46cm 3連装砲3基、60口径15.5cm 3連装砲4基、40口径
12.7cm連装速射砲6基、25mm3連装機銃12基、13mm連装機銃2基

レーダー：不明

ソナー：不明

装甲：舷側410mm、甲板230mm、砲塔前楯650mm、砲塔側楯250mm、砲塔天
咂蓋270mm、司令塔500mm

搭載機

Z60J戦術偵察飛行船1機、中型スキップパー4隻

概要

大和型超大型直接教育艦。久しく戦艦を建造していなかった各国が、最新鋭の技術を投入して新型艦を建造する機運が生じて来たことと、一部でささやかれていた日米関係が悪化した際に備えて圧倒的な戦力を持つ戦艦を建造しようとの目的から日本で作られた。しかし、大陸に首までどつぷりと踏み込んでいた米としては、その重要な後方拠点である日本を失うわけにはいかず、懸念された事態は起こらなかった。それでも、沈

滞した経済の活性化のために大規模公共事業の一環として、また分かりやすい象徴としての大和型の建造は必要であった。このような背景から建造は大々的に告知され、国内のみならず世界中へと宣伝されている。ただし、スペックは公表されていなかった。各国ともこれほどの巨艦を日本が建造するとは思っておらず、実際に就役するまで40cm砲を搭載した45・000tクラスの戦艦だと思っていた。そのため、どの国も対抗する艦の建造を検討せず、結果的に主砲口径と排水量は世界最大となる。また、最終的には同型艦を6隻建造する計画もあったが、金剛型の大艦を求める声が強かったため、4隻で建造を終了し、残り2隻分の予算は31cm砲を搭載した超大型巡洋艦にシフトしている。4隻は、ブルーマーメイドの象徴となり、教育艦として4校にそれぞれ1隻ずつ配備され、成績上位の者が乗員に選ばれ、将来的にブルーマーメイドや海上安全委員会などの高官職が約束されている。象徴であると同時に憧れの存在になっている。

武蔵

艦長：知名もえか（宗谷真霜や宗谷真冬が学生時代に艦長を務めていた）

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属で知名もえかが艦長を務めている艦。Gフォースの世界で

は、既にスクラップにされている。かつては、真霜や真冬が学生時代に艦長を務めていた。RATt事件では、乗員がウイルスに感染、偶然もえか達は、当直で艦橋に居たため、感染を逃れた。その後、行方を暗まし捜索中だった東舞校の教官艦隊を航行不能にし、現場に到着した晴風の追尾を振り切り、姿を消す。その後、富士山頂レーダーに捕捉され、北東に針路を取り首都圏に向かおうとしていたところ、白鳳と平賀艦隊と交戦、航行不能にし、更に晴風や後から来た支援艦隊と激戦。晴風の強行接舷で感染した生徒を制圧し、無事に確保された。

大型直接教育艦比叡

全長：222 m

全幅：32.0 m

吃水：9.37 m

基準排水量：32.156 t

満載排水量：27.500 t

ボイラー：口号艦本式缶8基

機関：艦本式オール・ギヤード・タービン4基4軸

出力：136,000馬力

速力：29.7ノット

航続距離：9.800海里（18ノット巡航時）

乗員：30人

艦番号：JBN T—Y—102

兵装

45口径35.6cm連装砲4基、50口径15.2cm単装砲14門、40口径12.7cm連装速射砲4基、25mm連装機銃10基

レーダー：不明

ソナー：不明

装甲：舷側203mm+25mm、甲板102mm、砲塔前楯254mm、砲塔側楯250mm、砲塔天唾蓋154mm、司令塔254mm

搭載艇

中型スキップパー4隻

概要

金剛型大型直接教育艦。金剛型大型直接教育艦の二番艦。金剛型は日本最初の超弩級艦で、一番艦の金剛はイギリスにて建造された。二番艦以降は日本で建造する予定だったので、イギリスのヴィッカーズ社と付き合いの深い坂本商会は、人員をイギリス

に送り込んで技術を習得させていた。その甲斐あって、二番艦の比叡も1911年中に起工され、三番艦の榛名、四番艦の霧島も立て続けに同年中に起工、翌12年には金剛、比叡が進水式、13年になってすぐに残りの二隻も進水式を迎えた。13年に金剛が竣工し日本に引き渡されたが、翌14年中に全艦が竣工し、後に欧州動乱の際にイギリス側の要請に応じて金剛型全艦は欧州に派遣されている。但し、その時は榛名、霧島がまだ細かい艤装中であつたので、工作艦を同行させて工事をしながらシンガポールまで回航、同地で最終工程を行つている。欧州での戦訓を経て、金剛型は速度以外の性能が不足していることが判明、新型艦の設計が開始されたため、一時期全艦練習艦となつている。その後、ドックが空いたこともあり、全艦改修を受けるが、状態の良かった比叡は回収が最後となり、その際に大和型のテスト艦とされたので、艦橋構造がこくち酷似している。各校に1隻つづ配備され、成績優秀者が乗員できる。

艦長：不明

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属。RAT事件では、ウイルスに感染し行方不明になったが武蔵を捜索していた晴風と遭遇、交戦するも比叡がトラック諸島に向かうと分かり、感染拡大を阻止すべく、晴風を囮にして、比叡を座礁させた。その後、救援に現れた次郎の白鳳に制圧され、真冬のべんてんに保護される。その後、武蔵救出戦にて晴風の支援

に駆け付ける。

大型巡洋直接教育艦鳥海、摩耶

全長：203.76 m

全幅：20.73 m

吃水：6.32 m

基準排水量：13,400 t

満載排水量：不明

ボイラー：口号艦本式缶12基

機関：艦本式オール・ギヤード・タービン4基4軸

出力：130,000馬力

速力：35.5ノット

航続距離：18ノットで5,000海里

乗員 30人

艦番号 J B N T | Y | 2 1 1 (鳥海)、J B N T | Y | 2 1 2 (摩耶)

兵装

50口径20.3cm連装砲5基10門、40口径12.7cm連装高角砲4基8

門、25 m 連装機銃4基、13 m 連装機銃2基、61 cm 4 連装魚雷発射管4基（九三式魚雷24本）

レーダー：不明

ソナー：不明

装甲：舷側127 mm、水平46 mm、砲塔25 m m

搭載艇

不明

概要

高雄型大型巡洋直接教育艦。

鳥海

艦長：不明

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属。RATt事件では、ウイルスに感染し行方不明になったが龍之介部隊によって、航行不能になり、その後、真冬部隊に制圧された。

摩耶

艦長：不明

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属。RATt事件では、ウィルスに感染し行方不明になったが、龍之介部隊によって、航行不能になり、その後、真冬部隊に制圧された。

小型巡洋直接教育艦長良、五十鈴

全長：162・15 m

全幅：14・17 m

吃水：4・80 m

基準排水量：5・170 t

満載排水量：5・570 t

ボイラー：口号艦本式缶6基

機関：艦本式オール・ギヤード・タービン4基4軸

出力：90・000馬力

速度：36ノット

航続距離：14ノットで5・000海里

乗員：30人

艦番号：JBNNT—Y—308（長良）、JBNNT—Y—309（五十鈴）

兵装

50口径14cm単装砲 7基、40口径8cm単装高角砲 2基2門、6.5mm
機銃 2基、連装魚雷発射管 4基8門（魚雷16本）、機雷 48個

レーダー：不明

ソナー：不明

装甲：舷側127mm、水平46mm、砲塔25mm

搭載艇

不明

概要

長良型洋直接教育艦。

長良

艦長：不明

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属。RATt事件では、行方不明になった教育艦捜索に赴く。

五十鈴

艦長：不明

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属。RATt事件では、ウイルスに感染し行方不明になったが

龍之介部隊によつて、航行不能になり、その後、真冬部隊に制圧された。

航洋直接教育艦涼風、天津風、磯風、時津風、浜風、舞風、浦風、谷風、萩風

全長：118.5 m

全幅：10.8 m

吃水：3.8 m

基準排水量：2,033 t

満載排水量：2,553 t

ボイラー：口号艦本式缶3基

機関：艦本式衝動タービン2基2軸

出力：52000馬力

速力：35ノット

航続距離：5000海里（18ノット）

乗員：30人

艦番号：不明（涼風）、JBNT-Y-459（天津風）、JBNT-Y-460（磯

風）、JBNT-Y-461（時津風）、JBNT-Y-470（浜風）、JBNT-Y-

471（舞風）、JBNT-Y-462（浦風）、JBNT-Y-465（谷風）、JB

N T | Y | 4 6 4 (萩風)

兵装

50口径12.7mm連装砲3基、61mm魚雷4連装発射管2基(予備魚雷8本)、20mm単装機銃4基、爆雷16個、

レーダー：55式対水上探知機、69式航海探知機

ソナー：56式遠距離探針装置

搭載艇

中型スキップパー2隻

涼風

艦長：不明

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属。R A T t事件では、ウイルスに感染し行方不明。

天津風

艦長：高橋千華

副長：山辺あゆみ

横須賀女子海洋学校所属。R A T t事件では、ウイルスに感染し行方不明。

磯風

艦長：長井穂乃美

副長：唾茅ヶ崎景子

横須賀女子海洋学校所属。R A T t 事件では、ウイルスに感染し行方不明。

時津風

艦長：榊原つむぎ

副長：長澤君江

横須賀女子海洋学校所属。R A T t 事件では、ウイルスに感染し行方不明。

浜風

艦長：本郷理穂

副長：原口美里

横須賀女子海洋学校所属。R A T t 事件では、間宮と明石の護衛をしていたため感染

から逃れた。その後、武蔵救出戦にて晴風の支援に駆け付ける

舞風

艦長：池田アリス

副長：澤村伊月

横須賀女子海洋学校所属。R A T t 事件では、間宮と明石の護衛をしていたため感染

から逃れた。その後、武蔵救出戦にて晴風の支援に駆け付ける。

谷風

艦長：不明

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属。RATt事件では、行方不明になった教育艦搜索に赴く。

浦風

艦長：不明

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属。RATt事件では、行方不明になった教育艦搜索に赴く。

萩風

艦長：不明

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属。RATt事件では、行方不明になった教育艦搜索に赴く。

航洋直接教育艦照月、涼月

全長：134.20m

全幅：11.60

吃水：4.51

基準排水量：2,700

満載排水量：3,888

ボイラー：口号艦本式缶3基

機関：艦本式衝動タービン2基2軸

出力：52,000馬力

速度：33.0ノット

航続距離：8000海里（18ノット）

乗員：30人

艦番号：JBN T—Y—513（照月）、JBN T—Y—512（涼月）

兵装

65口径10cm連装高角砲 4基8門、25mm連装機銃 2基、61cm魚雷4

連装発射管 1基、爆雷 54個

レーダー：55式対水上探知機、69式航海探知機

ソナー：56式遠距離探針装置

搭載艇

中型スキッパー2隻

照月

艦長：早乙女里沙

副長：大村美晴

横須賀女子海洋学校所属。RATt事件では、ウイルスに感染し行方不明。

涼月

艦長：竜ヶ崎 纏

副長：内野雪菜

横須賀女子海洋学校所属。RATt事件では、ウイルスに感染し行方不明。

給糧支援教育艦間宮

全長：150.9 m

全幅：18.6

吃水：5.5 m

基準排水量：15.820 t

満載排水量：15.666 t

ボイラー：口号艦本式缶8基

機関：直立型往復動蒸気機関2基

出力：10.000馬力

速力：16・5ノット

航続距離：12・000海里

乗員：30+30人

艦番号：JBN T—Y—2201

兵装

50口径14cm単装砲 2門、40口径8cm速射砲 2門、25mm連装機銃

2基、25mm単装機銃 2基

レーダー：不明

ソナー：不明

搭載艇

不明

概要

間宮型補給支援教育艦。食糧補給用の艦で、艦内に多数の冷蔵庫や貯蔵庫を持ち、更には色々な食料の製造設備も備えている。製造設備では肉や魚をさばいて加工品にするだけではなく、麺類や日本食に必要な豆腐やこんにやく、更には女子校ではとても好まれるアイスクリームや羊羹などの各種甘味までも作られており、普通の料理で使うような食材は大体揃っている。補給物資の量的には、各校に一隻あれば演習航海中の食料

や水などは、ほぼ補給が可能と考えられている。水や食料だけではなく、燃料となる重油の補給も可能であるが、そこらは専門の艦艇が存在しており、緊急用程度である。他にも治療設備や入浴、洗濯設備も充実しており、それぞれの艦内で生活関連の不足があつても大体対応可能である。そのため、通常の航行に必要な要員以外に、料理専属のクラスが乗り込んでおり、2クラス分の生徒で運営されている。晴風に乗り込んでいる杵崎姉妹も、実家がお菓子屋であるため、間宮配属を打診されたが、本人たちが直接教育艦に乗り込みたいとの希望により現在に至っている。

艦長：藤田優衣

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属。RAT7事件では、西之島新島沖の演習後、「明石」と共に艦隊に合流する予定だったため、ウイルスへの感染を免れている。後にブルーマーメイドの平賀と工作艦「明石」と共に「晴風」の下に現れ、不足物資の補給を行う。シユペー戦後も晴風の補給を行う。

工作支援教育艦明石

全長：158.5 m

全幅：158.5 m

吃水：6.3 m

基準排水量：9,000 t

満載排水量：11,036 t

ボイラー：口号艦本式缶2基

機関 マ式60型複動ディーゼル2基

出力：10,000馬力

速度：19.2ノット

航続距離：8,000海里（14ノット）

乗員：30+30人

艦番号：JBN T—Y—2302

兵装

12.7cm連装速射砲2門、25mm連装機銃2基、

レーダー：不明

ソナー：不明

搭載艇

不明

概要

明石型工作支援教育艦。ブルーマーメイドやホワイトドルフィンなどの艦艇は、さまざまな任務に就いていて、修理のできる港から遠く離れた場所で損傷することも少なくなかった。特に養成校の艦艇は旧式なこともあり、また修理や兵装の交換自体も訓練の一環の一環として、各校に工作艦が最低でも一隻配備されることになった。横須賀女子に配備されたのが明石で、建造当時は艦内に17の工場と大量の工作機械があつたが、配備時に工作機械は大幅に減らされ、修理よりも補給用部品の搭載スペースが増加した。この際に降ろされた機械類は、三原などの他校用の工作艦に配備されている。また、時代に合わせて旧式となつた機械が最新式と置き換えられることもあつたが、それでもかなりの数が当時のままである。操艦用の乗員は1クラス分30名だが、間宮同様に工作専門要員がもう1クラス分乗り込んでいる。

艦長：杉本珊瑚

副長：不明

横須賀女子海洋学校所属。RAT事件では、西之島新島沖の演習後、「間宮」と共に艦隊に合流する予定だったため、ウイルスへの感染を免れている。後にブルーマーメイドの平賀と補給艦「間宮」と共に「晴風」の下に現れ、砲塔や甲板等の修理を行う。シユペー戦後も晴風の砲塔や甲板等の修理を行う。

ヴイルヘルムスハーフェン女子海洋学校

小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シユペー

全長：186.0 m

全幅：21.6 m

吃水：7.25 m

基準排水量：12.100 t

機関：MAN式2サイクルディーゼル機関8基

出力：52.050馬力

速度：28.5ノット

航続距離：19.000海里（10ノット巡航時）

乗員：30人

艦番号：DBNS—W—207

兵装

52口径28.3cm3連装砲2基、55口径15cm単装砲8門、3cm速射砲8

門、53cm魚雷発射管8基

レーダー：不明

ソナー：不明

装甲 舷側80mm、甲板45mm、砲塔前楯160mm、砲塔天唾蓋105mm、司令塔150mm

搭載艇

中型スキッパー2隻

概要

ドイツチユラント級小型直接教育艦。ドイツのドイツチユラント級小型直接教育艦の三番艦。戦艦並みの砲撃力と巡洋艦並みの高速力を兼ね備えており、沿岸保安用艦艇として作られた。重量制限があつたため、防御力はやや貧弱であつたが、重量を軽減するためにディーゼルを採用したことで、長大な航続力も獲得、単なる沿岸保安用から長距離哨戒活動が可能となった。また同じく重量軽減のために、電気溶接やそのための鋼材の開発、高価な軽合金を艦上構造物に使用するなど、当時の新技術がふんだんに採用された。これはその後の艦艇設計と建造に貴重な教訓を多数与え、また世界各国の造船技術者にも大きな衝撃を与えている。結果的に性能は中途半端であり、色々なトラブルも多かったが、逆に魚雷から大型砲まで搭載している点や、手間のかかる機関などから、ブルーマーメイド用の教育用艦艇として非常に適したものとなつた。このタイプの艦艇で教育を受ければ、その後はどのような艦艇でも操れるとして、教える側の人

気は非常に高く、後に追加で3隻の同型艦の建造が検討されるほどであった。

艦長：テア・クロイツェル

副長：ヴィルヘルミーナ・ブラウンシュヴァイク・インゲノール・フリーデブルク

ヴィルヘルムスハーフェン女子海洋学校所属。ヴィルヘルミーナが副長として乗艦。RATt事件では、西之島新島沖でヴィルヘルミーナ以外の乗員がウィルスに感染し、逃走中の晴風と交戦、ヴィルヘルミーナ脱出後、行方不明。その後、アドミラルティ諸島沖で再び発見され、晴風との交戦の末、艦長のテアを始め乗員はRATtウィルスの感染から解放される。その後、補給と精密検査と報告のためゼーアドラー基地へ寄港する。最終回の武蔵救出戦で晴風の支援に駆け付ける。

超大型直接教育艦ビスマルク

全長：251.0 m

全幅：36.0 m

吃水：9.3 m

基準排水量：41,700 t

機関：ワグナー式重油専焼高压型水管缶12基、ブラウン・ボベリー式ギヤード・タービン3基

出力：138,000馬力

速度：30.8ノット

航続距離：9,280海里（16ノット巡航時）

乗員：30人

艦番号：不明

兵装

47口径38cm連装砲4基、55口径15cm連装砲12門、65口径、10.5

cm連装高角砲8基、83口径3.7cm連装機関砲8基

レーダー：不明

ソナー：不明

装甲 舷側320mm、甲板110mm、砲塔前楯360mm、砲塔天唾蓋135mm、司令

塔350mm

搭載艇

不明

概要

不明

艦長：ピアンカ・フオス

副長：ザスキア・ラウデール

ヴィルヘルムスハーフェン女子海洋学校所属。RATt事件では、西之島新島沖でアドミラル・グラフ・シュペーや他の艦船と同様にウィルスに感染し、行方不明になるが、トラック諸島付近で発見。白鳳と弁天によつて制圧され、ゼーアドラー基地へ護送する。

呉女子海洋学校

大和

全長：263 m

全幅：38.9 m

吃水：10.4 m

基準排水量：65,000 t

満載排水量：72,000 t

ボイラー：口号艦本式缶12基

機関：艦本式オール・ギヤード・タービン4基4軸

出力：150,000馬力

速力：27.0ノット

航続距離：7.200海里（16ノット巡航時）

乗員：30人

艦番号：JBN S—K—117

兵装

45口径46cm 3連装砲3基、60口径15.5cm 3連装砲4基、40口径12.7cm連装速射砲6基、25mm3連装機銃12基、13mm連装機銃2基

レーダー：不明

ソナー：不明

装甲：舷側410mm、甲板230mm、砲塔前楯650mm、砲塔側楯250mm、砲塔天
 唾蓋270mm、司令塔500mm

搭載機

Z60J戦術偵察飛行船2機、中型スキッパー4隻

概要

大和型超大型直接教育艦。金剛型、扶桑型などが老朽化、新型艦を建造する必要が生じた為、旧型艦を海援隊へと売却、更には対外貿易の拡大で増加した予算を使用して、それだけで抑止力となる様な大型艦の建造が決定する。それが大和型であった。だが、国

内では大和型を建造可能なドックは存在せず、計画の4隻を同時に起工するのは不可能であり、先ずは呉と長崎にあるドックを拡張するところから開始された。大和は呉にて建造されたが、これだけの大型艦の建造を隠し通せる訳もなく、また諸外国に対する抑止力との観点から告知は必要と判断、性能を8割程度に下方修正して諸外国に対して発表した。唯、この情報を知った諸外国は8割でも当時の常識からすれば過大と判断、基準排水量45,000トンの16インチ砲搭載艦だろうと推定していた。その為、各国ともその推定程度の艦の建造を進めていたが、ドイツだけは8割の情報信じ、50,000トンクラスのH級計画を推進している。結果的に建造直後は世界最大の艦となったが、各国がより大型艦の建造を計画している最中にて誘導式の噴進魚雷が実用化され、世界の趨勢は高価で建造に時間が掛かる大型艦を少数揃えるよりも、小回りのきく中型から小型艦を多数揃える方向へとシフトし、大型艦建造は中止された。

艦長：宮里十海（ブルーマーメイド時代は、宗谷真雪が艦長を務めていた）

副長：能村進愛

呉女子海洋学校所属。Gフォースの世界では、記念艦として飾られている。ブルーマーメイド時代は、ブルーマーメイドの旗艦となり、宗谷真雪が艦長を務めていた。RATt事件では、ドックに入って居た。

舞鶴女子海洋学校

信濃

全長：263 m

全幅：38.9 m

吃水：10.4 m

基準排水量：65.000 t

満載排水量：72.000 t

ボイラー：口号艦本式缶12基

機関：艦本式オール・ギヤード・タービン4基4軸

出力：150,000馬力

速力：27.0ノット

航続距離：7.200海里（16ノット巡航時）

乗員：30人

艦番号：J B N S | M | 119

兵装

45口径46 cm 3連装砲3基、60口径15.5 cm 3連装砲4基、40口径

12. 7cm連装速射砲6基、40mm連装機銃12基、13mm連装機銃2基

レーダー：不明

ソナー：不明

装甲：舷側400mm、甲板190mm、砲塔前楯650mm、砲塔側楯250mm、砲塔天
咄蓋270mm、司令塔500mm

搭載機

Z60J戦術偵察飛行船2機、中型スキッパー4隻

概要

大和型超大型直接教育艦。大和型一番艦の大和と二番艦の武蔵は、保々同時に建造されたが、大和型程の大型艦を建造可能なドックに余裕が無かったのもあって、横須賀に新たなドックを建造して、完成次第本艦の建造を行う事となった。2年3カ月の歳月をかけてドックは完成し、直ちに本艦の建造が開始された。その少し後に大和と武蔵が進水し、建造中に出た諸問題を洗い直し、基本設定はそのままだが改良要求を取り入れて、細かい部分の変更が行われている。舷側など過大と判断された一部の装甲を削減し、逆に不足していると判断された箇所の防御力を向上させ、特に艦底が大和、武蔵の二重底から三重へと強化されている。武装も25mm連装機銃を新型の40mm連装機銃へ更新されたが、教育艦に改装の際に25mmへと戻されている。また、内部設備に関し

ても居住性を重点に大は冷房設備の配置や動線の改良から小はトイレに至るまで改良された為、乗員からは大和や武蔵よりも快適と評判であった。なお後に教育艦へと大改装された際に、久しぶりの大型艦建造で手探り状態だった大和よりも丁寧に作られていたのが判明している。

艦長：阿部亜澄

副長：河野 燕

舞鶴女子海洋学校所属。艦橋などの設備を改良した改大和型。Gフォースの世界では、既にスクラップにされている。RATt事件では、ドックに入って居た。

佐世保女子海洋学校

紀伊

全長：263 m

全幅：38.9 m

吃水：10.4 m

基準排水量：65.000 t

満載排水量：72.000 t

ボイラー：口号艦本式缶12基

機関：艦本式オール・ギヤード・タービン4基4軸

出力：150,000馬力

速度：27.0ノット

航続距離：7.200海里（16ノット巡航時）

乗員：30人

艦番号：JBNS—S—120

兵装

45口径46cm 3連装砲3基、60口径15.5cm 3連装砲4基、40口径

12.7cm連装速射砲6基、40mm連装機銃12基、13mm連装機銃2基

レーダー：不明

ソナー：不明

装甲：舷側400mm、甲板190mm、砲塔前楯650mm、砲塔側楯250mm、砲塔天

咂蓋270mm、司令塔500mm

搭載機

Z60J戦術偵察飛行船2機、中型スキッパー4隻

概要

大和型超大型直接教育艦。大和型の四番艦で、本艦以降は、世界の趨勢が快速で、それなりに重武装だが、小回りのきく超大型巡洋艦の建造へとシフトした為、超大型艦として最後に建造された。一番艦の大和が進水した後、同じ呉のドックで建造が開始されたが、三番艦の信濃同様の設計変更が行われ、レーダーなどの電子設備も最初から搭載され、同時に各種電気設備系も新型が採用された。しかし、大和の艦装に時間が掛かった為、其方に作業が注力した結果、建造は遅れた。結果的に建造中にドイツにて誘導式の噴進魚雷が実用化され、小型艦が大型艦に接近せずに沈めるのが（理論的に）可能となった為、高コストな大型艦を少数建造するよりも、誘導噴進魚雷を多数搭載した中型から小型艦を多数配備した方が有効ではないかとの意見が、世界中で大きくなった。それを受けて、80%の完成状態で工事がストップした。だが、解体するには工事が進み過ぎており、また艦のスペースに余裕があった為、噴進魚雷を含めた各種新型装備のテストベツトとする事が決定し、約10年の間試験艦として使用された。その後、一時期予備艦としてモスボール状態となったが他の大和型と共にブルーマーメイドに移管され、徹底的な改装を施されて超大型直接教育艦となった。

艦長：千葉沙千帆

副長：野際啓子

佐世保女子海洋学校所属。RATt事件では、遠洋航海に出ていた。

東舞鶴男子海洋学校

潜水直接教育艦伊201型

全長：79.0 m

全幅：5.8 m

吃水：5.46 m

基準排水量：1.070 t

水中排水量：1.450 t

機関：マ式1号ディーゼル2基2軸、1.250馬力電動機4基

出力：水上2.800馬力・水中6.000馬力

速力：水上15.8ノット・水中20.0ノット

航続距離：水上58.000海里（14ノット）・水中135海里（3ノット）

乗員：30人

艦番号：JWNS—H—6201

兵装

53 cm魚雷発射管4基（魚雷10本）、25 mm単装機銃 2基

レーダー 不明 ソナー 不明

搭載艇

不明

概要

潜高型潜水直接教育艦潜水艦。は水上ではディーゼル機関などによつて20ノット前後を出せるが、水中では艦内の空気のみでは機関を動かすには不十分であり、蓄電池でモーターを回し6ノット程度しか速度が出せない。その上、水中での稼働時間にもかなり制限を受けるので、「可潜艦」と言われることもあるほどだった。そこで、潜航中でも、エンジンを稼働させるための空気を取り込めるように、シュノーケルと呼ばれる空気取り入れ用の筒を開発するなどするものの、シュノーケルは構造上浅い深度でしか使用できなかった。そのため、各国で水中での速力を向上させる手段が検討され、その一つが大量の蓄電池を搭載する方法であった。本艦は、小型潜水艦などでの試験結果を受けて、本格的に水中高速型として建造されている。またブロック工法と電気溶接を全面的に取り入れ、大量建造と工期短縮を狙っている。建造時は騒音が大きく、計画速力にも達しなかったが、ドイツ製ディーゼルエンジンへの交換や新型モーターと蓄電池への交換により、伊204では水中24ノットを記録するまでとなつている。同時に防振ゴムの設置によつて、艦内からの騒音も大幅に低減され、静粛性や秘匿性が増している。

唯艦内の居住性があまり良くないので女子には、不向きでそのため、ブルーマーメイドやその養成校では、配備できないため、男子中心のホワイトドルフィンやその養成校に配備されている。

艦長：不明

副長：不明

東舞鶴男子海洋学校所属。海中での電波の減衰のために無線機を使えない晴風が、交戦の意思がない事を伝える為にアクティブ・ソナーでモールス信号を送ったが、これを戦闘行為と誤解して攻撃を仕掛ける。初めての潜水艦相手、不慣れな夜間戦闘、さらに使える武装は爆雷一発だけと装備も枯渇していた晴風は苦戦を強いられるが、ヴィルヘルミーナのアドバイスと掃海具を使用した索敵が功を奏し、爆雷を至近距離で爆発させ、追撃を振り切ることに成功する。

大型教員艦あおつき

全長：150.5 m

全幅：18.3 m

吃水：5.4 m

基準排水量：5,050 t

満載排水量：6,800 t

機関：RM1K ブレイトンサイクルエンジン4基

出力：16,000馬力4基

速度：30.0ノット

航続距離：不明

乗員：40人

艦番号：JWNT—H—115

兵装

62口径12.7mm単装速射砲1基、VLS装置(32セル)、20mm近接防衛装置

1基、68式3連装短魚雷発射管2基

搭載艇

Z60J戦術偵察飛行船1機、中型スキッパー2隻

概要

男子海洋学校向け汎用大型教官艦は、それまで他の学校に配備されていた第二世代型では4,500トン前後のサイズを採用していたが、新装備を搭載するのにはややサイズ不足で、第三世代となる新型では拡大した5,000トン型になった。まず旧式の3,500トン型を配備していた東舞鶴校向けに、4隻が同時建造され、徐々に改良を

加えつつ最終的には18隻が建造された。次いで長崎校向けに対潜能力を向上させ、コストダウンを図った改良型が16〜20隻建造される予定となっている。また、大竹校、長浦校向けには、より大型の艦艇の導入も検討されているが、計画艦艇の兵装は過大すぎて運用が難しいとして、計画艦より安価で任務に応じて装備を変更可能な女子海洋学校向けの改インディペンデンス級を、男子校向けに改良したモデルの導入も提案されている。そのため、今後の新型艦がどうなるかは不明であるが、両方を導入し、同型艦多数の方式を変える可能性もある。なお、あおつき以下の同型艦名は、べにづき、あまづき、ゆきづき、おおつき、はつづき、やまづき、うらづき、かぎづき、うすづき、まゆづき、おぼろづき、にいづき、みかづき、もちづき、そらづき、うみつぎ、あわつきである。

東舞鶴男子海洋学校所属。武蔵や他の教育艦の捜索中に武蔵を発見。救助と確保に向かうウイルスに感染している武蔵に逆に砲撃され、その後、交戦するが、電子機器が使用不能となり、更に作動不良を起こした墳進魚雷が誤爆して、航行不能になる。生き残った艦艇は、龍之介の部隊に一時編入する。

その他

汎用貨物船しんばし

全長：134.57 m

全幅：17.3 m

吃水：8.5 m

基準排水量：14,474 t

満載排水量：不明

ボイラー：不明

機関：三段膨張式蒸気レシプロ

出力：2,500馬力

速度：11.0ノット

航続距離：20,000海里

乗員：38人

概要

欧州道乱以降、船舶需要が急拡大したが、各国ともその増大する需要に輸送船の建造が追い付かず、また日本の民間造船所も居住用の大型はしけなどの建造で手一杯であった。そこで、日本はドックに余裕のあるアメリカに輸送船の建造を打診、同じ頃、イギリスからもアメリカ同様の要請が入っていた。そこで、アメリカ側は画一化した輸送船

の規格を定め、構造も簡略化してブロック工法を多用して量産性に優れた輸送船の開発を行った。これが標準型汎用貨物船で、最初はアメリカの民間造船所6社で建造が行われたが、その後多くの造船所が急造され、大量生産が行われた。工期も短縮されていき、中には42日で完成した記録もあるほどである。日本の造船所でも余裕が出来てくると、同型輸送船が生産されるようになった。当初は旧式なレシプロエンジンを搭載していたが、機関に余裕が出来るようになると、ディーゼルやタービンも搭載されるようになり、速力が大幅に上昇した物もある。また、あまりにも多数が建造されたため、「しんばし」のような商店街に改装されることも多かった。

パラオ近海で嵐で座礁。救難信号を受信した晴風によって、乗員は、救助されるが浸水による後部持ち上がりにより破断、救助作業中のましろと薫を乗せたまま沈没する。その後、ブルーマーメイドの浪速と救難信号を受信したせんだいにより無事に救助された。

日本国防軍

超湾級空母鳳凰

日本国防軍鳳凰型超湾級空母。日本国防軍が建造した鳳凰型超湾級空母1番艦。建造には、扶桑、山城、金剛3隻の資材が使われている。第二次世界大戦後、ジェット戦

闘機が続々開発されたが、あまりの性能と大きさに今まで保有していた空母では運用が難しくなった。其処でジェット戦闘機に対応した新型空母を建造する。だが戦後の物資不足や資金不足が問題となり、建造は中止へと追い込まれた。再び建造が再開されたのは日本国防軍になってからだ。国防軍としても朝鮮戦争やゴジラ戦で激減した戦力を回復する必要があった。建造は再開されたものの、最初の設計から数十年経過していたので、直ぐに改善と最新技術を取り入れ、建造された。最初の1番艦が就役すると、その大きさに各国は驚きを示した。特にアメリカが建造したフォレスタル級よりも大きく搭載機数も90機も多かった。ニミッツ級が就役するまでは世界最大の艦になった。

当初は、左右に速射砲が設置されていたが、全て撤去され最新鋭の防御火器に置き換えられている。

冷戦後は、練習艦として、航空隊の育成を行う。

超湾級空母赤城

日本国防軍鳳凰型超湾級空母。日本国防軍が建造した鳳凰型超湾級空母2番艦。建造には、榛名、霧島、伊勢3隻の資材が使われている。鳳凰に続いて、大鳳、飛龍と同時期に建造を開始した。建造中に機関をアメリカの空母と同様に原子力機関にしては如何かとの声があったが、同時期に起きたソ連のチェルノブイリ原発事故を知り、今の

日本の技術では危険と判断し、従来の機関のままになった。だが、何所かで設計ミスをしたせいか、艦橋を左に設置してしまった。やり直そうとするが、既に工事が90%まで進んでいたもので、やむ追えず建造された。就役すると直ぐに問題が出た。艦橋を左に設置したせいで、艦載機の離発着が難しくなり、搭乗員からは苦情が続出し、失敗作の文字が大きくなった。しかし、機動部隊の旗艦に就役すると、それを覆すかの様に中東、湾岸で戦果を上げ、雅に先代と同様な働きを残した。

冷戦後も機動部隊の旗艦のままにいる。

超湾級空母飛龍

日本国防軍鳳凰型超湾級空母。日本国防軍が建造した鳳凰型超湾級空母4番艦。建造には、日向、赤城、加賀3隻の資材が使われている。赤城、大鳳と同時期に建造を開始した。だが、赤城の設計ミスで、我が艦も艦橋を左に設置してしまった。(大鳳は、資材などにトラブル発生で建造が遅れていたので免れた。)此方も既に工事が90%まで進んでいたもので、やむ追えず建造された。就役すると赤城同様に艦載機の離発着が難しくなり、搭乗員からは苦情が続出し、失敗作の文字が大きくなった。しかし、赤城と共に中東、湾岸で戦果を上げ、雅に先代と同様な働きを残した。

超湾級空母翔鶴、瑞鶴

日本国防軍改鳳凰型超湾級空母。日本国防軍が建造した改鳳凰型超湾級空母。

冷戦終結後に伴い、戦力の再編成を行う事に成り、主力だった鳳凰型空母の退役が進められ、その後継として、当艦2隻の建造が決定された。建造に着手すると共に機関を最先端のレーザー核融合にし、設備も最新鋭にした。
現在は建造中。

高速戦艦稻穂

駆逐艦そよかぜ

全長：106 m

全幅：10.5 m

吃水：3.7 m

基準排水量：1,700 t

満載排水量：2,430 t

機関：三菱エツシャーウイス式衝動型蒸気タービン 2基2軸

出力：30,000馬力

速度：30ノット

航続距離 6,000海里(18ノット)

乗員：40名

兵装

Mk. 30 38口径5インチ単装砲3基、Mk. 2 40mm4連装機関砲、54式ヘッジホッグ2基、Mk 2魚雷発射管 2基、54式爆雷投射機（K砲）8基、54式爆雷投下軌条2条

レーダー：US SPS-6B 対空レーダー、OPS-3対水上レーダー、US Mk. 34 射撃用レーダー、スイス・コントラバス社製射撃指揮装置、Mk. 63 Mod 10 射撃指揮装置

ソナー：SSS-30捜索用、SQR-4/SQA-4 攻撃用

電子戦：OLR-3 ECM

概要

日本海軍はるかぜ型駆逐艦。国防軍が初めて配備したはるかぜ型駆逐艦の3番艦。第2次大戦後、最新の兵装や電子機器の普及で保有している駆逐艦が直ぐ旧式化した為、すぐさま最新鋭の駆逐艦の建造を開始する。しかし、直ぐ新造艦の建造と言っても設計に時間が掛かるし、資金も高額だった。其処で米軍との共同開発する事になった。船体は米軍の駆逐艦ギアリング型を参考にして、やや小型化された。しかし、共同開発のせい、水平甲板型や艦橋の左右にある舷楼など米国色の強い艦型をしており、搭載

する兵装も全てが米国製だったため、これまで日本造船界が培ってきた駆逐艦建造技術はあまり役立っていない感がある。大戦中の駆逐艦に比べ武装が少なくなっているが、これは艦内スペースを広くとり兵員の疲労を防ぐためとエレクトロニクス機器の発達により必要となった電力をまかなうために大型の発電機を搭載したからである。

3隻が建造され、第一戦で活躍した。国防軍になると新型の護衛艦が多数配備されると直ぐに旧式化し、2隻は退役したがそよかせだけが練習艦として残された。

練習艦になった後、長く整備されていかなかったせいか、機関は動かないし、船体もボロボロで塗装までが？がれていた。その為、訓練生からは史上最悪の艦と汚名を着せられた。

プロローグ

今から100年前の第一次世界大戦前から遡る。1920年第一次大戦に勝利した日本、アメリカ・イギリスは、これ以上戦争を起こさせないように、ヴェルサイユ条約でアメリカが国際連盟を成立させた。それから各国は、戦後処理にあつたがアメリカで起きた。世界恐慌により、各国の経済が破綻した。そんな中、海軍軍縮条約により、日本は、アメリカ・イギリスより減らされ、3隻ぐらいしか保有を許されなかった。そのため、日本は、アメリカとイギリスの関係が悪くなった。一方のドイツでは、第1次大戦の敗北により、多額の賠償金を稼がれ、経済が破綻し、失業者が増える状態になっていた。そんな中、国民の中にドイツを立て直す指導者が生まれた。その指導者こそ、ナチス党のアドルフ・ヒトラーである。ヒトラーは、ドイツのワイマール憲法を廃止し、ドイツの総統へつと上り詰めた。ここにナチス第三帝国が誕生。再軍備を開始し、その裏で、ユダヤ人を迫害。ソ連でもレーニンからスターリンが指導者になり、軍備増強を図っていた。第一次大戦からわずか20年、ヨーロッパに再び戦火が上がるうとしていた。1931年日本は、満州事変を起こし、満州国を建国した。しかし国際連盟は、満

州国を承認せず、遂に日本は、連盟を脱退、独自に軍備拡大をすすめた。日本海軍は、戦艦を中心とした戦いから、航空機を中心とした戦い方を考え始めていた。その中には、後に日本国防軍の生みの親である。小沢治三郎の姿があった。1937年日中戦争が勃発、日本が優勢に立つが戦鬪は、泥沼化した。1939年ナチスドイツがポーランドに電撃進撃した、第2次世界大戦が勃発した。そんな中、連合艦隊司令長官として、山本五十六が就任した。山本は、小沢と共に空母を中心とした艦隊を編成した。日本政府は、ドイツ・イタリアと同盟を結ぼうとしていた。しかし、米内光政らが反対していた。危機感した。アメリカ、イギリスは、経済封鎖を開始。日本への物資輸入が絶たれる中、事件が起きた。山本五十六が何者かに襲われる事件が起きる。それを機に、クーデターを起こし、近衛内閣は、退陣を余儀なくされた。さらに、陸軍と海軍の強硬派も一掃された。これにより、第2時米内内閣が発足し、中国との停戦協定を結び日中戦争は、終結した。更にアメリカとの再交渉を始めるが、結局、失敗に終わる。その間に、空母の増産や航空隊の育成を開始、建造中だった。大和、武蔵は建造中止には、ならなかったが、左右の副砲が破棄され、高角砲と機銃の増設、さらに機動部隊直掩の戦艦にするため、速力を30ノットに改良することになった。また、日本初の装甲空母大鳳、白鳳の建造を開始。1940年5月、ヨーロッパでの戦争は、災厄の状況に成っていた。イギリス、フランスがドイツに敗北し、フランスが陥落、イギリスは、40万の

派遣軍を本国に撤退させた。そして、世界初の前代未聞航空戦、バトル・オブリテンで、ドイツは、初めて敗北し、イギリス上陸を中止し、海軍による通商破壊戦（水上艦やUボートでの補給戦を遮断すること）を開始しイギリスへの補給路を遮断する作戦を開始。ヒトラーは、次に共産党を打倒するためバルバロッサ作戦を開始、ソ連へ侵攻を開始する。更に砂漠の狐と言われたロンメル機甲師団をアフリカへと侵攻させた。ヨーロッパで、戦火が拡大する中、アジアでも戦火が上がるようになっていた。

1941年11月26日、小沢治三郎の機動部隊（空母赤城、加賀、蒼龍、飛龍、翔鶴、瑞鶴を含む6隻）が択捉島単冠湾に集結、そのまま東に向かう。その目的地は、アメリカ太平洋艦隊根拠地ハワイ真珠湾である。1941年12月8日、日本は、アメリカ、イギリスに宣戦を布告した。太平洋戦争の勃発である。同日、小沢機動部隊がハワイを空襲、戦艦8隻を含む太平洋艦隊が壊滅した。しかし肝心の敵空母撃滅に失敗した。勢いに情事つて南方方面を制圧、これにより、日本は、太平洋の半分を占領した。1942年4月18日アメリカの空母ホーネットから発進した。B25、16機が日本本土を空襲したが日本軍の逆襲に合い、全滅した。（機動部隊の方は、無事に離脱した。）5月には、小沢機動部隊から外された、空母翔鶴、瑞鶴がアメリカの空母レキシントン、ヨークタウンと交戦、史上初めての空母による海戦、珊瑚海海戦が勃発した。この海戦で、日本側は、軽空母祥鳳が沈没、空母翔鶴が中破した、一方のアメリカ側も空母レ

キシントンが沈没、ヨークタウンが中破し、引き分けに終わる。6月、アメリカ空母撃滅を目的とする作戦、ミッドウエー作戦が開始され、小沢機動部隊空母4隻が出撃。更に就役した。大和も小沢機動部隊に編入させた。アメリカも暗号解読でこれを察知し、空母エンタープライズ、ホーネット更に中破した、ヨークタウンを急遽修理し、この作戦に参加した。(一方の翔鶴は、修理が間に合わないため不参加である。)6月5日小沢機動部隊の第一次攻撃隊がミッドウエーを空襲、しかし効果が不十分なため、第2時攻撃用ありと小沢の下に伝わったが、敵機動部隊の出現が予想されるため、第2次攻撃隊は、雷装のまま待機された。(理由は、巡洋艦利根のカタパルトが故障したためと予めの作戦道理)午前6時ついに両機動部隊の偵察機がお互いを発見。交戦を開始した。最初の戦場で日本側は、空母加賀が中破、空母蒼龍が大破、一方のアメリカ側は、空母ヨークタウン大破、空母ホーネットが中破した。2度目の戦場で旗艦の空母赤城が小破し、しかし、空母エンタープライズを大破に追い詰め、更に空母ヨークタウンを撃沈した。この戦いは、日本の圧勝で終わるがミッドウエー攻略は中止せざる終えなくなった。ミッドウエー海戦後、小沢機動部隊は、内地で修理と航空隊の再編成をすることになった。そのため、代わりとして、新たに編成された。大西龍二郎の機動部隊(装甲空母大鳳、白鳳、軽空母隼鷹、龍驤)が当面の作戦を担当することになった。1942年8月日本軍は、アメリカ軍を畏に追い込むため、ソロモン諸島ガダルカナル島に飛行場を建

設する。これを察知した。アメリカ軍は、ガダルカナル島に上陸し、飛行場を占領する。しかし、飛行場は、単なる餌で、アメリカ軍の海兵隊は、罨にはまってしまった。待ち構えていた。陸軍特殊部隊のゲリラ戦に苦しめられた。更に三川軍一の第8艦隊の夜戦で輸送艦隊が全滅した。そのため、日本軍に反撃するための橋頭堡確保が逆に孤立してしまいう有様であった。何とか打開させるため、アメリカ軍は、機動部隊及び増援部隊をガダルカナルに送るが待ち伏せしていた。大西機動部隊と交戦、第2次ソロモン海戦が勃発した。日本側は、軽空母龍驤が大破、アメリカ側は、空母サラトガー大破、エンタープライズが中破、ワスプが潜水艦の攻撃で沈没した。9月には、小沢機動部隊の空母翔鶴、瑞鶴と大西機動部隊の準鷹で編成された部隊と交戦、南太平洋海戦が勃発し、日本側は、空母翔鶴大破、アメリカ側は、空母ホーネット、が沈没、空母エンタープライズが大破し、またもアメリカ側の敗北で終了した。ガダルカナル島を占領していた海兵隊もゲリラ戦と食糧不足で餓死寸前だった。やむ終えず、撤退した。それから、しばらくは、小競り合いの戦闘しがなく、アメリカは、再編成をし、日本は、戦線を縮小、司令部をトラックからパラオに移し、更にマリアナ諸島を要塞化し、米軍の反撃にそなえた。一方、ヨーロッパでは、ドイツがスターリングラードで敗北し、アフリカ戦線でも敗北した。更に、連合軍の反撃は早く、ドイツ同盟国、イタリアが降伏、ドイツ本土は、アメリカのB-17、イギリスのランカスター爆撃機による夜昼空襲で、都市は、壊

滅状態にされる。1943年インド独立を支援するため、大西機動部隊をインド洋に派遣、イギリス軍と戦闘、イギリス軍施設に大打撃を与えるも、軽空母龍驤が沈没した。この戦闘により、インドに独立の気運が高まったため、欧州戦線で独伊相手に手一杯なウインストン・チャーチル英首相は日本軍打倒をアメリカに要請。フランクリン・ルーズベルト米大統領は、戦力がまだ整っていない太平洋艦隊をマリアナ諸島に出撃させる。1943年12月12日日本、アメリカ最後の戦い、マリアナ沖海戦が勃発。戦闘は、双方とも多大な損害を出しながらも引き分けに終わり、更に要塞化したマリアナ諸島の防空体制を破ることもできず、撤退。1943年12月20日数々の失敗によりフランクリン・ルーズベルト米大統領は、辞任し、変わって、トールマンが米大統領に就任した。1944年1月1日、日本とアメリカは、ハワイ、オアフ島の戦艦大和で停戦条約に締結した。これにより、日本は、連合国の一員として、ドイツに宣戦布告、1944年6月日本を含む連合軍がノルマンディーに上陸。日本は、イギリスと共に北に進み、フランスを開放。1945年8月アドルフ・ヒトラー総統は、ベルリンの地下壕で自決し、ドイツは、降伏し、ここに6年に及んだ。第2次世界大戦は、終わりを告げた。第2次世界大戦は、アメリカ、イギリス、ソ連、日本率いる連合軍が勝利した。しかし、戦場になった。イタリア、フランス、ベルギー、オランダは、焼け野原や廃墟の有様、更に敗北したドイツは、国土を西と東に分断されることになった。日本は、アメリカと

の停戦協定により、中国大陸など島々から撤退。すると、それに連携するように、植民地から独立する国が相次いでいた。これに日本以外の国が鎮圧に向かうが失敗に終わり、やむ終えず独立を認めた。各国が独立する中、ヨーロッパでは、更なる事態に陥っていた。アメリカを中心とした資本主義諸国、いわゆる北大西洋条約機構（NATO）とソ連を中心とした共産主義諸国、いわゆるワルシャワ条約機構（OBU）が対立し、ベルリンに壁を作り、西と東の交流を遮断した。これが70年間続く東西冷戦である。各国が冷戦の中、日本は、経済回復と軍備回復に着手していた。しかし、1954年アメリカが水爆実験をしたため、深刻な環境汚染が起こり、更に空想と思われていた伝説の怪獣ゴジラを誕生させてしまったのだ。ゴジラは、相次いで商船などを襲い、遂に日本の首都、東京に上陸した。政府は、再軍備したばかりの軍を出動させた。これが人類最初のゴジラとの戦いである。日本軍は、東京を戦場にして、勇敢に戦ったもののゴジラの前に通常兵器は、歯が立たず、敗北した。しかし、そのゴジラも芹沢博士が開発した。特殊兵器により海底深くに葬ることに成功した。それから、30年後の1985年再びゴジラが現れ、ソ連原潜や静岡の井浜原発を急襲、危機感を覚えたアメリカとソ連は、ゴジラに対して戦術核兵器の使用を強く要請する。特にソ連は原潜撃沈の報復を主張し、アメリカもソ連に同調していたものの、時の内閣総理大臣の三田村清輝はそれをかたくなに拒み続ける。首相の尽力で米ソによる対ゴジラ戦術核攻撃の危機は回避されるが、

日増しにゴジラ東京上陸の可能性が強まる中、政府も新兵器のスーパーXをはじめとする対ゴジラ兵器や、林田博士の提案したゴジラ誘導作戦の準備にかかる。そして、遂にゴジラが東京に向かって侵攻。国防軍の水上部隊や航空部隊が迎撃するも侵攻を阻止できず、ついに上陸、陸上部隊及びスーパーXによる攻撃でゴジラを昏倒させることに成功する。しかし、災厄の事態が発生していた。ソ連の衛星から核弾頭がゴジラ目掛けて誤射してしまったのだ。ソ連から自国ミサイルでは撃墜不可能との連絡を受けた日本政府は、急遽アメリカに核ミサイルの迎撃を要請する。アメリカ軍が発射した迎撃ミサイルがソ連の核ミサイルを捕捉し、撃墜に成功する。新宿都心での核爆発という最悪のシナリオは回避されたが、成層圏での核弾頭撃墜により発生した高高度核爆発が電磁パルスを引き起こし、東京は大規模な停電やスーパーXなどの兵器が使用不能に陥る。ようやく停電の混乱から復旧しようかと思われたそのとき、高濃度の電磁雲により発生した落雷のショックでゴジラが覚醒してしまう。電磁パルスから回復したスーパーXが再び応戦するが、カドミウム弾を失い通常兵器でしか攻撃の手段がないスーパーXにもはやゴジラを止める術はなく激闘の末、遂に撃破される。新宿辺りは、廃墟と化し、もはやゴジラを止めることは、不可能に思えた時、同じくして三原山で超音波発生装置が起動。ゴジラは東京を後にして三原山へと向かい、人工的に噴火させられた火口へ咆哮を上げながら落ちていた。それから、10年、ゴジラとの戦いであらゆる技術が向上す

る。それに加えて対ゴジラ警戒や新兵器の開発（抗核エネルギーバクテリアやスーパーX2など）に着手した。1995年三原山が噴火し、遂にゴジラが復活し再び東京に向かう。日本は、国防軍水上部隊及び新兵器のスーパーX2で迎撃、ゴジラの東京上陸を阻止に成功するがゴジラも護衛艦やスーパーX2を撃退し、続いて小田原へ上陸し、芦ノ湖でビオランテと対決する。ビオランテのさまざまな攻撃に苦しむゴジラだったが、熱線によってビオランテを倒し、駿河湾へ消える。しかし、ゴジラは、エネルギー補給のため、若狭湾の原発群へ向かう。これを察知した国防軍総司令官の黒木准将は、「短経路の名古屋を通るとして伊勢湾に戦力を集結させるが、予想に反してゴジラは紀伊水道に現れる。裏をかかれた国防軍はスーパーX2のみを大阪市に、残りの戦力を若狭湾へ向かわせてゴジラを迎え撃つ作戦へ変更する。刻一刻とゴジラの上陸が迫る中、権藤大佐以下が抗核エネルギーバクテリア（ANEB）をゴジラに撃ち込む準備へと入った。そしてゴジラはついに大阪市に上陸する。スーパーX2と権藤大佐という大きな代償を払いながらも、ANEBの撃ち込みは成功するが、14時間近くを経過してもその効果は現れず、ゴジラは若狭湾を目指す。「ゴジラの体温が低いためにANEBの活性化が抑えられているのではないか」という仮説を受けて、黒木准将は若狭にサンダーコントロールシステムを設置し、人為的な落雷によってゴジラの体温を上げる作戦を立案する。作戦のさなかでようやくANEBは効力を発揮し始めるが、ゴジラの進行は止まら

ない。高浜原発に緊急態勢が発令され緊張が高まる中、ゴジラの前に成長し更なる進化を遂げたビオランテが出現した。ビオランテとゴジラの戦闘は卑劣さを増しやがて熱線を受けてビオランテは後頭部まで貫通されるダメージを負うものの、まもなくゴジラもANEBの効力で昏倒する。そして、ビオランテは失っていた人間の心を取り戻し、最後は自らの意思で黄金の粒子となつて宇宙に消える。やがてゴジラも日本海へと消えた。1996年、留まることのないゴジラ被害に対応すべく、国際連合の三田村事務総長はG対策センター、を筑波に設置。さらに対ゴジラ部隊Gフォースを創設。同じ頃、房総半島沖でゴジラの骨を発見、G対策センターは、これを利用して、究極の対ゴジラ兵器の開発に乗り出た。しかし、開発中にゴジラの襲撃もありGフォースは、水上部隊（龍之介の西部方面艦隊や東部方面艦隊など）や航空部隊、陸上部隊に新兵器のスーパースーパーなどで迎撃する3年後の1999年遂に対ゴジラ兵器攻撃型メカゴジラ「3式機龍」が完成した。同じ頃、ゴジラが浦賀水道に出現、Gフォースは、水上部隊を浦賀水道に航空部隊、陸上部隊を品川沖に集結させ防衛線を張る、しかしゴジラの猛攻の末、防衛線を突破され、品川区に上陸する。Gフォースは、完成したばかりの機龍をゴジラ迎撃に向かわせる。品川区で両者は激突。死闘の末、機龍は、最終兵器3式絶対零度砲（アブソリュート・ゼロ）と右腕を失いながら、胸に大きな傷を負わせ、ゴジラの撃退に成功する。死闘から1年後の2000年再び活動を開始したゴジラは、修復中

の機龍に呼ばれる様に再び東京を目指す。それを察知したGフォースは、機龍の修復を急がせる（右腕は、修復完了、3式絶対零度砲（アブソリュート・ゼロ）は、修復不能のため4式3連装ハイパーメーサー砲に換装した。）更に残存する部隊（龍之介の西部方面艦隊や東部方面艦隊など）を浦賀と再開発途中の品川地区に集結させる。ゴジラとGフォースの最後の戦いが始まった。ゴジラは、防衛線を突破し再び品川区に上陸。ギリギリで修復が完了した機龍がこれを迎撃する。しかし戦闘の最中、ゴジラの熱線を受け右目の駆動系統が破損、一時戦闘不能になるもたまたま居合わせた機龍開発主任の矢野慶介主任の応急修理で戦闘に復帰する（しかし、矢野慶介主任が機龍内部に閉じ込められた。）ゴジラと再び戦闘、4式対獣掘削装置（スパイラル・クロウ）と4式3連装ハイパーメーサー砲の攻撃でゴジラを戦意喪失させ遂に止めという時に機龍のAIに異常が発生。突然勝手に動き出し、戦意が喪失したゴジラを抱えたまま飛行し始めたのだ。危機感を覚えた麻生司令官は、機龍を撃ち落とす様、命令するが機龍内部に閉じ込められた矢野主任が機龍がゴジラと共に日本海溝へ沈む気だと説明する。しかし、機龍内部に閉じ込められた矢野主任は、脱出不可能なため、彼の命は、絶望的に落ちいた。しかし、偶々追跡していた、しらすぎが機銃でメンテナンスブースの扉を爆破。爆破した。扉から脱出するも機体が上の方を向いていたため、脱出は、困難だった。しかし、突然機体が回転する。自我に目覚めたといえ開発主任であり生みの親である矢野主任の

ことを忘れては、いなかった。そして最後にメンテナンスブースのモニターに「SAY
O U N A R A K E I S U K E」という最後のメッセージを送り、彼も「さようなら、今
までありがとう機龍」と言いついて、にぎっていた手を放し機龍と別れるのだった。矢野主任
と別れた機龍は、ゴジラとともに日本海溝深くに沈んでいた。最早もう二度と復活する
こともなくゴジラは、機龍と共に海底深くに姿を消した。

黎明編

第1章 異世界へ

この物語は、ゴジラと機龍の戦いから約1年後の事である。

2001年1月

西太平洋沖

この日、Gフォース所属の水上部隊（西部方面艦隊）が哨戒任務を行っていた。

西部方面艦隊とは、Gフォース部隊の1つで関東方面から九州方面を防衛している。

もう一つの東部方面艦隊は、東北方面から北海道方面の防衛を担当している。

その編成は

第一部隊

旗艦、空母大鳳

巡洋艦すくね

護衛艦いばらき、せんだい

補給艦せた

第二部隊

旗艦 高速戦艦高千穂

特殊戦闘艦白鳳（スーパーXIV）

巡洋艦さつま

護衛艦ながおか、きしゆう

補給艦とよだ

計11隻で編成されている

空母大鳳、艦橋

これは、とある男の夢の記憶

（怖いよお兄ちゃん!!）

廃墟の街を2人は必死に逃げていた。

（心配するな！俺が付いている!!）

しかし、2人の後ろから黒く巨大な物体が吠えながら迫ってきた。

（きやあぁ・・・!!）

「准将！」

男「……………」

「准将！」

男「あっ!？」

男の名は、山本龍之介准将。

彼は、このGフォース西部方面艦隊の指揮官である。

龍之介「参謀？」

功「何だか覺されていましたが・・・如何なさんですか？」

悪夢に覺される龍之介を心配そうに見るGフォース西部方面艦隊の参謀長の徳吉功大佐。

龍之介「いや・・・堆昔の事を思い出してしまつてな・・・」

功「昔の事？」

龍之介「いや何でもない・・・それより何か報告があつたんじやないのか？」

功「はい！・・・現在西太平洋のFポイントを通過・・・これと言つた異常はありません。」

現在、Gフォース西部方面艦隊は、西太平洋のFポイントを通過、異常は何も無かつた。

龍之介「そうか・・・あの戦いから1年・・・遂に我々はゴジラに勝つたんだな！」

功「そうですね・・・雅に我々は勝つたんです。」

薫「2人とも楽しそうですね！」

2人の後ろから空母大鳳艦長の山本 薫中佐が近づいてきた。

龍之介「何だ、艦長か？」

薫「何だは無いでしょ!!」

薫は顔を丸くする。

そんな時

はやて「艦長は、准将の事が心配なんや！」

薫の横から空母大鳳副長の八神はやて中佐がいた。

薫「はやてちゃんたら、それは言わない約束でしょ!!」

冗談を言うはやてに薫がツツコミを入れる。

龍之介「何だ、言う事か！」

薫「だって、兄さんは哨戒任務開始前から何か考え事してるんだし・・・妹として私

は兄さんの事が心配なんです。」

実は、薫と龍之介は、血の繋がった実の兄弟である。

龍之介とは4歳違いだが、成績は学年首席で頭脳もある。

だが、実戦経験が少ない。

その為、欠点も多い。

因みに龍之介が司令部を置く、この空母大鳳は、排水量102,000tで艦載機90機を搭載した鳳凰型汎用超大型空母の3番艦である。

元は、国防軍が冷戦末期に建造した冷戦の遺物である。

同型艦に鳳凰、赤城、飛龍、翔鶴、瑞鶴の5隻が存在する。

ついでに東部方面艦隊には、4番艦の飛龍が旗艦を務めている。

龍之介「余計なお世話だ！」

薫「でも」

功「落ち着くんだ艦長！・・・ゴジラとの戦いは、もう1年も前に終わっている。」

はやて「そうですよ！」

薫「う、うん・・・」

龍之介「全く、どっちが心配性だか、次郎がいないとこれ何だから」

薫「じ、次郎君は関係ないでしょ!!・・・私はもう子供じゃないんだから、最後の任

務ぐらい成し遂げて見せます!!」

と言つて、薫は、持ち場へと戻つて行つた。

龍之介（本当に大丈夫なのか・・・もう直ぐ解散なのに・・・）

龍之介が言う様に、Gフォースは既に解体の時期にあつた。

ゴジラが機龍と共に海底深くに没した後、最早、人類は、ゴジラの恐怖から解放され
た。

その為、G対策センター及び所属部隊であるGフォースは解散が言い渡され、薫や龍

之介達も元の軍に戻される事になった。

龍之介（・・・これで最後だ・・・もうゴジラと出くわす事はないだろう・・・）

龍之介は、もうゴジラと出くわす事はないだろうと思ひ、前方を見る。

艦隊は、ウララ島沖に差し掛かろうとしていた。

功「准将！・・・Gポイントを通過、間もなくウララ島沖を通過します。」

龍之介「よし！進路このまま・・・」

美奈「ヨーソロー!!」

空母大鳳航海長の四葉美奈大尉がウララ島沖を通過する針路を取る。

龍之介「通信主！現在の位置及び異常なしをG対に報告しろ！」

実「了解！」

空母大鳳通信主の滝川 実大尉が現在の艦隊の位置及び異常なしをG対策センター

に報告する。

その頃、艦隊の上空を特殊戦闘艦白鳳が尾翼を広げて飛んでいた。

特殊戦闘艦白鳳、艦橋

次郎「ああ、この任務で最後か・・・」

白鳳艦長の小沢次郎中佐が暇そうに言う。

三郎「そうですね・・・」

側から白鳳副長の林 三郎少佐が言う。

次郎「この任務が終われば……この艦ともお別れか……」

三郎「就役して、早々2年で廃棄処分とは早過ぎます！」

次郎「仕方がない……それが決まりだからな……でも一度で良いから、この艦でゴジラと戦って見たかったよ！」

次郎と薫は、国防軍江田島の海軍士官学校からの同期である。

そして、今彼が乗艦している特殊戦闘艦白鳳は、対ゴジラ兵器として開発された最新鋭艦である。

だが最早無用の長物となり、Gフォース解散に伴い廃棄処分が決定されていた。

三郎「そう言われても……」

次郎「副長！……俺は、こう見えても……あの機龍のオペレーターを目指してたんだぜ！」

三郎「知ってますよ……それであつけなく落ちたんでしょ……もう耳たぼです！」

次郎「そうそう……あの時落ちていなかったら……今頃俺はオペレーターだったかもしれないかった……ああ、つくづくついてない！」

慶介「そう落ち込まないで下さい小沢中佐殿！」

と声を掛けてきたのは、この白鳳の設計者であるGフォース兵器開発主任の矢野慶介

である。

次郎「矢野主任!？」

慶介「この白鳳だって、機龍と同じ対ゴジラ兵器ですよ!・・・まあ、機龍とは違って、万能護衛艦ですが・・・攻撃力と防御力は機龍並みです!」

慶介の言う通り、この白鳳は、対ゴジラ兵器として、ありとあらゆる兵器を搭載している。

中でも強力なのが艦首に搭載されている5式ハイパーメーサー砲である。

元は、機龍に搭載された3連式ハイパーメーサー砲を艦船用に改良したもので、より強力になっている。

他にもハイパーレーザー砲2門やフルメタルミサイル20発、50mmバルカン砲2門、魚雷発射管4門を搭載している。

そして、装甲は超耐熱合金NT-1S、コーティングとして、人工ダイヤモンドに覆われていた。

この強力な艦も少しばかり登場が遅すぎた。

そう遅すぎたのだ。

次郎「そうですね・・・こいつだって、強い艦だったのに・・・少しばかり登場が遅すぎた・・・せめて最後の任務だけは成功させたい。」

三郎「そう言えば矢野主任は、何故、この任務に志願したんですか？・・・やはり自分の設計した艦の最後の姿を見に来たんですか？」

三郎は、慶介が何故、この任務に志願したのか問う。

慶介「まあ、そんな所です・・・私は10年間、対ゴジラ兵器を設計してきた人間として、この艦の最期の任務は如何しても立ち会いたかったのです。」

慶介は、10年間、対ゴジラ兵器をひたすら開発してきた。

だが、ゴジラとの戦いが終わると

これらの開発した兵器は全て廃棄処分になったので、せめて最後に開発した白鳳だけでも正常に動いているか自分の目で見て置きたかったのだ。

次郎「技術者としての意地ですか？」

慶介「いえ、メカへの思いやりです。」

次郎「思いやり？」

慶介「そうです・・・私は4年前・・・機龍の開発を担当していました。」

次郎「そう言えばそうでしたね・・・確か、1年前の戦闘の時・・・機龍の応急修理をしたのも？」

慶介「そう私です！・・・あの時、内部に閉じ込められて、絶対絶命の時、機龍が私を助けてくれた・・・だから、私は機龍のお陰で今此処にいられるのです。」

慶介は、最終決戦の時に損傷した機龍を態々現場で修復するが、その逆に機龍内部に閉じ込められてしまい、最後には絶対絶命へと追い込まれた。

その時、機龍が何故か意思を持った様に慶介を助け、慶介にさよならと言って、ゴジラと共に海中へと没した。

次郎「機龍の意思か・・・」

慶介「メカにも心が有るという事です。」

次郎「成程！メカにも心が有るんですね！」

メカにも心が有るという事に次郎は感心する。

三郎「艦長も勉強になったでしょう？」

次郎「余計な御世話だ！」

『ハハハ・・・!!』

空母大鳳、作戦室

一方、空母大鳳の作戦室では、飛行服を着た2人の女性がいた。
なのは「これで最後だね、フェイトちゃん！」

1人は、第343空母航空団スターズ隊長の高町なのは大尉。

フェイト「そうだね、なのは！」

もう1人は、第343空母航空団ライトニング隊長のフェイト・テストロッサ大尉

である。

なのは「まあ、私はやてちゃん、薫先輩や准将達は、解散後に元の国防軍に戻るけど・・・フェイトちゃんは、アメリカに帰るんだよね？」

フェイト「うん！一度戻ってから日本に移住しようと思ってる！」

なのは「なら、その時に皆で何処かに遊びに行こうね！」

フェイト「うん！薫先輩とはやての4人で遊びに行きたいね！」

2人は、作戦室で任務が終わった後の事を話し合いながら任務に挑む。

薫とはやて、なのは、フェイト・・・3人は、小学校からの友人で、特にはやては、龍之介と薫の従妹である。

空母大鳳、艦橋

龍之介「このままウララ島を通過して、日本に帰還する。」

龍之介は、予定通りウララ島を通過して、日本に帰還するコースを指示する。

空母大鳳の後方を高速戦艦高千穂が航行する。

高速戦艦高千穂、艦橋

文夫「艦長！・・・旗艦からの入電！・・・このままウララ島を通過して、日本に帰還するコースを取れとの事です。」

空母大鳳からの打電を受け取る高千穂副長の岸田文夫少佐。

美由紀「よろしい副長！各艦にも伝達しなさい！！」

彼女は、権藤美由紀中佐、高速戦艦高千穂艦長及び第2部隊指揮官。

5年前に戦死した権藤吾朗大佐の妹である。

そして、薫と次郎の学生時代の教官でもある。

因みに彼女が指揮する高速戦艦高千穂は、第二次世界大戦に建造された空母直掩高速戦艦。

巨砲とも呼ばれた46cm4連装砲を3基搭載。

更に20mmCIWSやハープーン対艦ミサイル。

そして、最大の兵器とも言われるトマホーク対艦巡航ミサイル32発が搭載している。

文夫「分かりました。」

艦隊は、予定通りウララ島を通過しようとしていた。

しかし、彼らは気づかなかった。

ウララ島の地下に天然ウランがあり、それが今、熱水に反応して核分裂を起こそうと
していた。

そして

ピッカ・・・！！

龍之介「何だ!？」

ズドーン……!!

突然、ウララ島が巨大な核爆発を起こした。

『うわぁ……!?!』

一瞬で艦隊が核爆発に巻き込まれて全滅した。

しかし彼らは、その時、別の世界に艦隊ごと転生した。

2015年、3月15日

空母大鳳、艦橋

爆発の衝撃で艦橋にいた者は、殆んど床に倒れていた。

龍之介「……ん……ん……はっ!？」

気を失っていた龍之介は意識を取り戻す。

龍之介「あれ? ……如何なっているんだ? ……俺は……死んだんじゃないのか?」

さっきの核爆発で死んだと思った龍之介は自分の体を見る。

腕も足も付いていた。

龍之介「これは・・・夢か？」

龍之介は、つい夢かと思ひ、ホッペをひっぱて見た。

龍之介「イタ!?!・・・違う・・・夢じゃない！」

痛いを感じ、夢ではなく現実だと分かり、急いで艦橋内を見回す。

艦橋内には、立っている者は居らず、殆んど床に気を失っていた。

龍之介「参謀!・・・艦長!・・・副長!・・・皆起きろ!!」

龍之介は、急いで床に気を失っていた薫や功達を起こす。

功「ん・・・あれ?・・・可笑しい?・・・我々は先の核爆発で死んだんじゃないか？」

薫「い、一体何が？」

気が付いた功と薫は、自分達に何が起きたのか、全く分からないでいた。

龍之介「分からないが・・・不思議にも今この通り生きている・・・各部状況報告!!」

龍之介は、各部の状況を聞く。

美奈「舵正常！」

美奈が舵を左右に動かし、異常が無い事を確認。

信吾「武器管制は異常なし!・・・対空、対艦レーダー、共に異常なし！」

空母大鳳砲雷長の辻 信吾大尉がレーダーや武器管制システムの異常はないと報告

する。

空母大鳳、艦載機格納庫

文雄「此方格納庫！……山崎文雄以下整備班、全員異常なし！……艦載機に異常は見当たらず……」

格納庫で艦載機の整備をしていた空母大鳳整備班長山崎文雄以下全員無事で、艦載機も全機無事だった。

空母大鳳、機関室

夏雄「此方機関室！……篠原夏雄以下、全員無事でえい！……機関も最大速力発揮可能！！」

機関室も空母大鳳機関長の篠原夏雄以下全員無事で機関も最大速力発揮可能。

空母大鳳、艦橋

龍之介「急ぎ、各艦の状況を知らせろ。」

実「了解！」

龍之介は、急いで各艦の状況を伝えるよう命じる。

功「准将！……一体全体如何なっているのか？……死人が蘇る訳ないのに如何して我々は生きていますか？」

功は、何故自分らが生きていますのか、龍之介に問う。

龍之介「恐らく核爆発の瞬間の時に何か起きたんだろう。」

それに対して、龍之介は核爆発の瞬間に何か起きたんだと察する。

一方、艦隊の上空を飛んでいた白鳳は、いつの間にか、空母大鳳の側に着水していた。

白鳳、艦橋

次郎「如何なっているんだ副長!？」

三郎「分かりません・・・何が何だか・・・」

次郎達も何が起こったのか、また、如何やって着水したのかも全く分からないでいた。

慶介「艦長、副長！」

次郎「矢野主任！」

機関などの点検に行った慶介が艦橋に戻ってきた。

慶介「機関には異常が見当たらないが、衛星通信が駄目になっている。」

機関には異常はなかったが、衛星回線が使用不能になっていた。

三郎「故障ですか？」

慶介「原因は分かりませんが、故障ではない様です・・・他の艦艇も同じ状況じゃないでしょうか？」

慶介の言う通り、空母大鳳や他の艦艇の衛星通信機器は完璧に動くが、何故か使用不能になっていた。

そして、後方を航行中だった高千穂でも

高千穂、艦橋

美由紀「如何なっているのこれは？」

文夫「集団幻覚でしょうか？」

美由紀「何寝ぼけているの副長！今は現実なのよ！」

美由紀達も何が起こったか分からなかった。

空母大鳳、艦橋

はやて「如何なっているの？：：確か私達は西太平洋沖を哨戒中だった筈なのに：：」

龍之介達は、未だに何が起こっているのか、全く分からないでいた。

そんな時

『艦長！』

薫「あつ、なのはちゃんにフェイトちゃん！」

作戦室にいたなのはとフェイトが艦橋に上がってきて

なのは「先の衝撃は何ですか？」

フェイト「一体何が？」

薫に何が起きたのか問う。

薫「それが私達にも分からないの!!」

龍之介「高町隊長、フェイト隊長！：：：搭乗員達の方は大丈夫か？」

龍之介は、搭乗員達が無事か問う。

フェイト「記憶がぼんやりしている以外は、全員大丈夫です。」

龍之介「そうか……」

搭乗員達が全員無事だった事にホッとする。

実「准将！……各艦とも異常ないとの事です。」

各艦とも異常はなかった。

龍之介「如何やら各艦、無事の様だな……通信主！……状況及び無事な事をG

対に報告しろ!!」

実「了解！」

龍之介は、直ちに核爆発の発生と艦隊が奇跡的に健在である事をG対策センターに報告した。

その時

薫「准将、大変です!!」

突然、薫が何かに気づく。

龍之介「今度は何だ!？」

薫「島が……消えてる……」

『何!?!』

薫の言葉に驚き、窓の外を見る。

窓の外を見ると薫が言う様に左舷側にあつたウララ島が影も形も無かつた。はやて「そないなアホな!?!?」先まであつた筈なのに如何して?」

島が消えた事にはやては驚愕する。

龍之介「恐らく先の核爆発で消滅したんだろう。」

龍之介は、ウララ島が先の核爆発で消滅したと推測した。

実「くそ!?!? 准将!」

龍之介「如何した通信主! G対に報告したのか?」

実「それが!?!? 以前通信が繋がりません!!」

何故か、G対策センターとの通信が繋がらなかつた。

龍之介「そんな馬鹿な! ちゃんと確かめたのか?」

実「通信機に異常は無いんですけど!?!? 向こうが出ないんです。」

龍之介「呼び続ける!!」

実は、ひたすら呼び続ける。

薫「航海長!?!? 現在の位置は?」

美奈「それが!?!? 先の核爆発の影響か何かで羅針盤とその他の計器が狂つて、此処が何処なのかが見当もつきません。」

核爆発の影響で羅針盤やその他の計器が狂って、現在位置が不明だった。

薫「ええ!」

龍之介「舞ったな羅針盤や計器類が使えないと此処が何処なのか見当もつかん」

功「哨戒機を飛ばして、位置を確認して見たら如何ですか?」

龍之介「そうだな・・・哨戒隊を発進させる!!」

薫「了解!ペガサス隊発艦用意!」

現在地を把握する為、哨戒隊のペガサス隊の発艦用意の号令が出され、甲板では、早期警戒機E2G1機と偵察装備の戦闘攻撃機FX-3春乱1機が発艦準備をする。

はやて「ペガサス隊発進準備よし!」

薫「ペガサス隊発艦せよ!」

空母大鳳からペガサス隊のE2G1機と春乱1機が発艦した。

数時間後

実「ペガサス隊から報告!・・・現在位置が分かったそうです。」

発艦したペガサス隊から報告が入る。

龍之介「何所だ?」

実「位置は・・・嘘だろ!?!・・・硫黄島付近・・・日本近海です!!」

龍之介「な、何!?!」

何と龍之介達が居たのは西太平洋沖ではなく、日本近海の硫黄島付近であった。硫黄島付近だと聞いて、龍之介は驚愕する。

薫「そんな筈は・・・今まで西太平洋沖に居た筈！・・・何かの間違いじゃ？」
薫も間違いじゃないのかと思つたが

実「いえ、ペガサス隊の報告に間違いありません。」

ペガサス隊の報告に間違いはなかつた。

ペガサス隊の報告と三角測定で日本近海の硫黄島付近だと確實になつたからだ。

功「如何します准将？」

功は、如何するのか問う。

龍之介「G対への連絡は？」

実「以前、通信不能。」

以前、G対策センターとの通信は繋がらない。

薫「准将・・・」

龍之介「ん・・・」

如何するのか、龍之介は迷う。

功「取り合えず母校の横須賀に帰投しましょう・・・後の事はそれから・・・」

このまま此処に居てもしょうがない。

通信が繋がらない以上、最大の案は母港である横須賀に帰投する事だった。

龍之介「ん、そうだな・・・それが一番の案だろう・・・全艦に通達！・・・これより横須賀に帰投する!!」

龍之介もそれに賛同し、横須賀に帰投を命じる。

その時

実「ペガサス隊より緊急電！国籍不明の艦隊が此方に接近中!!」

龍之介「何!？」

哨戒中のペガサス隊が謎の国籍不明の艦隊を捕捉。

此方に向かっていた。

これが龍之介達Gフォースと真霜達ブルーマーメイドとの初遭遇となった。

第2章 ブルーマーメイド

今から100年ほど前、日露戦争後の日本はプレートの変みやメタンハイドレートの採掘などが原因で、その国土の多くを海中に没した。

結果、海上都市が増え、それらを結ぶ海上交通などの増大で、日本は海運大国になった。

その過程で、これまで軍用に建造してきた艦の多くが民間に転用され、戦争に使わないという象徴として、艦長は女性が務める様になった。

それがブルーマーメイド始まりである。

因みにブルーマーメイドと同様に男性の方は、ホワイトドルフィンと呼ばれ共に海の安全を守っている。

そんな世界にある邂逅が齎された。

3月15日

小笠原諸島、硫黄島沖

この日、インディペンデンス級沿海域戦闘艦みくら以下4隻を引き入る平賀部隊は、小笠原諸島の硫黄島沖を哨戒中だった。

みくら、艦橋

みくらの艦橋には、2人の女性が神妙な面持ちで水平線を見ている。

1人は、艦隊指揮官で安全監督室情報調査隊の平賀倫子二等監察官。

もう1人は、ネコミミのヘッドセットが特徴のみくら艦長で同じく安全監督室情報調査隊の福内典子である。

平賀「この辺りは、海賊が出没していると聞いていたけど・・・」

平賀は、この海域で海賊がよく出没すると情報を得ていた。

福内「でも異常は無い見たいね・・・」

今のところ異常も無く、穏やかで、引き続き哨戒を続行する。

一方、ペガサス隊の報告で平賀部隊の接近を察知したGフォース西部方面艦隊では

空母大鳳、艦橋

功「如何しますか准将？」

龍之介「総員、警戒態勢！」

薫「了解！・・・総員、警戒態勢発令！・・・スターズ隊及びライトニング隊発艦用

意！」

警戒態勢が発令され、空母大鳳では、スターズ隊及びライトニング隊の戦闘攻撃機春乱 計5機が対艦装備に換装されて発艦準備をする。

白鳳、艦橋

三郎「如何しますか？」

次郎「ゴジラ戦じゃないなら我々の出番じゃないだろうが・・・警戒態勢が発令された以上、戦闘準備をしないと・・・総員配置！・・・コンピューターを戦闘モードに移行しろ!!」

空母大鳳の側の白鳳でもコンピューターを戦闘モードに移行、ハイパーレーザー砲にエネルギーが充填され、発射準備に入った。

次郎「主任は自室に退避して下さい!!戦闘になれば此処は危険です!」

次郎は、民間人である慶介に自室への退避を命じるが

慶介「いえ、出来れば私も此処に残りたいのですが?」

慶介は退避せず、艦橋に残ると言う。

次郎「安全の保証はできませんよ。」

慶介「覚悟は出来ています。」

次郎「覚悟は立派ですが、足手まといにならない様に」

高千穂、艦橋

美由紀「総員、警戒態勢発令！副長！」

文夫「はっ！総員、対艦戦闘用意！」

高千穂も18インチ4連装主砲に砲弾が装填され、いつでも砲撃できる様にし、更にハーブーンやトマホークミサイルの発射準備をする。

はやて「攻撃隊発艦準備完了や！」

功「各部隊攻撃準備完了！」

各艦、戦闘準備が完了し、艦隊は、空母大鳳と補給艦2隻を中心に輪形陣を組む。

その頃、哨戒を続けている平賀部隊でも

みくら、艦橋

寒川「艦長！レーダーに反応！」

レーダーがGフォース西部方面艦隊を捉えたと寒川高乃二等保安監督正が福内に報告する。

平賀「雅か海賊!？」

福内「ん・・・総員配置！」

福内は、直ぐに戦闘配置の号令を出す。

やがて

『目標を肉眼で視認!？』

双方が肉眼で相手を捉えた。

Gフォースの部隊とブルーマーメイドの部隊がこの世界で初めて、相見える事になった。

福内「海賊ではないようね・・・」

平賀「何所の国かしら・・・見た事ない艦ばかりだわ・・・」

平賀達は、Gフォースの艦を見て、今まで見た事のない艦に驚愕する。

志度「攻撃しますか？」

志度琴海二等保安監督正が攻撃するのか問う。

平賀「待つて！・・・相手が分からない以上、此方から手を出す訳にはいかないわ！」

福内「そうね！・・・全艦に通達！・・・此方からの指示があるまで、発砲は控える様に！」

志度「了解！」

流石にブルーマーメイドでも相手が何処の国のかも分からない以上、此方から発砲する事は控えた。

そして、Gフォース西部方面艦隊でも

空母大鳳、艦橋

功「攻撃しますか？」

龍之介「いや待て！」

実「准将！白鳳と高千穂から攻撃命令を待つています！」

次郎と美由紀が攻撃命令を待つていた。

龍之介「攻撃は控えろ！」

龍之介は、攻撃を控えるよう命じる。

功「しかし、向こうは戦闘態勢を整えていますか？」

龍之介「我々は、いかなる理由があつても、自衛以外の戦争行為は禁じられている。」

Gフォースもゴジラの迎撃以外は、自衛の戦闘しか認められていない。

龍之介は、再度攻撃は控えるよう命じる。

しかし、このままでは向こうが攻撃しない限り、此方からも討てない。

双方とも如何なるのか？

みくら、艦橋

福内「不明艦隊に通信！」

志度「了解！」

福内がGフォース西部方面艦隊に向け、通信を試みる。

空母大鳳、艦橋

実「何だ!?・・・准将！」

龍之介「如何した？」

実「向こうの艦から警告の様な通信が入って来ています。」
空母大鳳がみくらからの通信を傍受する。

龍之介「スピーカーに流してみろ。」

龍之介は、スピーカーに流すよう命じる。

実「了解！」

実は、スピーカーに流す。

福内『ブブ・・・此方は、ブルーマーメイド！・・・貴艦隊の国籍及び目的を明らかにせよ！・・・繰り返す！！・・・』

『?』

ブルーマーメイドと聞きいて、頭を？する。

龍之介「ブルーマーメイド？」

功「ブルーマーメイドとは、一体？」

薫「そんな組織、聞いた事が無いわ！」

はやて「ひよつとして、国連が新しく設立した部隊かも！」

龍之介達は、ブルーマーメイドが何なのか分からなかった。

功「如何します？」

相手に対して、功は、如何するのか問う。

龍之介「通信主！……向こうの通信回線を開けろ！」

実「了解！」

それに対して、龍之介も平賀部隊に向けて返信する。

みくら、艦橋

志度「不明艦隊から通信！」

みくらが空母大鳳からの通信を傍受。

福内「スピーカーに流して！」

福内は、スピーカーに流す様、命じる。

龍之介『ブブ……此方はGフォース西部方面艦隊！……貴艦が何者かを明らかにせよ!!……』

『?』

Gフォースと聞いて、平賀達も頭を？する。

平賀「Gフォースって何？」

福内「聞いた事がないわね……如何する？」

平賀「如何するって……一応、宗谷監督官に報告して、指示を仰いだ方が……」

福内「そうね！」

福内は、Gフォース西部方面艦隊発見と如何対処するのか、指示を仰ごうと横須賀のブルーマーメイド庁舎に報告する。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦室

真霜「報告は、受け取ったわ！」

平賀部隊からGフォース西部方面艦隊発見の報告を受け取ったこの女性は、ブルーマーメイド安全監督室情報調査室長の宗谷真霜一等保安監督官で言うなればブルーマーメイドの最高責任者である。

福内『如何対処いたしましょうか？』

真霜「ん：：：不明艦隊に関しては、これから上と協議した後に連絡を入れるわ！：：：貴方達は現状維持のまま現海域で待機し、向こうが発砲するまで絶対に敵対行為をしない様に：：：良いわね！」

福内『了解しました。』

真霜は、取り合えず福内に上と協議した後に連絡すると言って、Gフォース西部方面艦隊への攻撃を控えるよう命じ、通信を切る。

真霜は早速、Gフォース西部方面艦隊の対応を如何するかを協議しようと国土保全委員会に電話会談を開く。

国土交通省、国土保全委員会

真霜からの報告を聞き、国土保全委員会の幹部達は、会議室のスクリーンに映るGフォース西部方面艦隊を見て、如何対処するか協議していた。

委員会幹部A「それで彼らの要求は、宗谷監督官？」

委員会の幹部の1人が龍之介達が何を要求しているのか問う。

真霜『今のところ、その状況には至ってはおりません。』

委員会幹部B「では、ブルーマーメイド本隊を出撃させて、さっさと殲滅すれば良いではないか？」

もう1人からは、ブルーマーメイド本隊をもつて殲滅しろと言う言葉もあったが

真霜『しかし不明艦隊は何所の国籍かも分からないです!!・・・直ぐに殲滅しては国際問題に成ります・・・それに送られた映像や写真から見て、向こうは我々よりも強力な武器を持っているかもしれません・・・此処は交戦を避け、交渉で解決するのが打倒と思いますが・・・』

それに対して、真霜は交渉で解決しよう説得するが

委員会幹部B「ふん、相変わらず甘な宗谷監督官！」

真霜『如何いう意味でしょうか？』

委員会幹部B「テロリストは殲滅あるのみ、交渉での解決など、あり得ないのだよ!!」
委員会の幹部の1人がGフォース西部方面艦隊を勝手にテロリストと断定し、交渉で

の解決はないと真霜に告げる。

真霜『それでは、双方に無駄な犠牲が出ます!!・・・それにまだテロリストとは断定していません!!』

それを聞いた真霜は、Gフォース西部方面艦隊を勝手にテロリストと断定した事に激怒する。

委員会幹部B「我が国の領海を脅かしたのだから、テロリスト断定すべきだ!!・・・それにある程度の犠牲は、君も承知の上だろう宗谷監督官!」

委員会幹部C「その通りだ!」

他の委員会の幹部達も殲滅に同意する。

真霜（くう・・・下衆共め：：）

委員会の幹部達の対応に真霜は呆れてしまう。

委員会の幹部達は、Gフォース西部方面艦隊を勝手にテロリストと断定させて、それを真霜達ブルーマーメイドに殲滅させるつもりなのだろう。

そして、全てを無かった事にし、もし事が公になった時は、全ての責任を真霜に押し付け様と考えていたのだ。

真霜には、委員会の幹部達の腹の内が大体想像できていた。

だが、このままでは双方に無駄な犠牲が出るのは明らか、何とか打開しようとした。

そんな時

「失礼する！」

会議中にとある男が遅れて入ってきた。

深町「遅れて申し訳ない！・・・会合が予定より長引いてしまつて・・・」

男の名は、深町吾郎と言つて、国土交通大臣で有能な政治家でもある。

委員会幹部B「ちよつど良かった深町国交相！・・・今不明艦隊に向けて攻撃命令を出すところで・・・」

深町「ん、それで・・・ん！・・・こ、これは!?!」

深町は、会議室のスクリーンに映し出されている、Gフォース西部方面艦隊の艦影を見て

委員会幹部B「深町国交相？」

深町「あれは・・・雅か!?!」

驚愕する。

深町「宗谷監督官！」

真霜『はい!』

深町「相手は、何所の所属だと言っている？」

真霜『向こうは、Gフォースと言っていますが・・・』

真霜は、深町に龍之介達の所属を告げる。

深町「何、Gフォースだど!?」

Gフォースと聞いて、深町は動揺した。

委員会幹部A「如何したんですか深町国交相?」

深町「た、直ちに先程の攻撃命令は撤回!・・・彼らと交渉するんだ!!」

深町は、突然、攻撃命令を撤回し、真霜が言う交渉を主張した。

委員会幹部B「何を言うんですか深町国交相!?!相手は、テロリストですよ!」

深町の言葉に委員会の幹部達は、驚愕しながら直も殲滅を主張するが

深町「黙れ!相手は敵ではない!!」

それに対して、深町は敵ではないと委員会の幹部達を黙らせる。

委員会幹部B「国交相、何の根拠があつて言つてるんですか?」

深町「それは、私の方が君らより彼らの事を知っているからだ!!」

委員会幹部C「ん・・・」

それを聞いた途端、委員会の幹部達は深町に「反論できなくなった。

深町「宗谷監督官!」

真霜『はい!』

深町「不明艦隊との交渉を君に一任する・・・そして、可能成らば、ある程度の要求

に応じる様に！」

深町は、真霜にGフォース西部方面艦隊との交渉を任せる。

真霜『ありがとうございますございます深町国交相！・・・では！』

真霜は、深町に感謝し通信を切る。

こうして、Gフォースとブルーマーメイドとの戦闘は回避された。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦室

真霜「ふう〜」

国土保全委員会との協議を終えた真霜は、一息着く。

自分の案が通った事に安心したんだろう。

だが本番は此処から、深町から交渉を一任された以上成功させなければならない。

重いふれしやが真霜に申し掛かる。

果たして成功するのか？

それは誰にも分らなかつた。

第3章 交渉

小笠原諸島、硫黄島沖

一方、Gフォース西部方面艦隊と平賀部隊は、相変わらず睨み合いを続けていた。向こうが先に討つか？

それとも此方が先に討つのか？

時間だけが過ぎていった。

そんな時

みくら、艦橋

志度「本部より入電！」

本部の真霜からの通信が入る。

平賀「分かりました・・・その様に伝えます。」

真霜『頼むわよ平賀監察官！』

真霜は、平賀にGフォース西部方面艦隊との交渉を命じ、通信を切る。

平賀「直ちに相手の旗艦に向けて通信回線を繋いで！」

志度「了解！」

真霜からの指示に従い平賀は、Gフォース西部方面艦隊との通信回線を開く。

空母大鳳、艦橋

はやて「もう6時間も立つ……そろそろ限界やわ!」

はやては、数時間続く睨み合いに流石の限界を感じていた。

薫「はやてちゃん! 此処は、辛抱が大事だよ!」

そんなはやてに薫が辛抱する様叱る。

はやて「そやけど……」

その時

実「准将!」

龍之介「如何した?」

実「向こうの旗艦から、此方の指揮官と交渉をしたいと言っていますか?」

平賀部隊からの交渉の通信を傍受した。

龍之介「何!?!……スピーカー流して見ろ!」

実「了解!」

通信主は、スピーカーに流す。

平賀『ブブ……私は、ブルーマーメイド情報調査隊の平賀倫子二等監察官です……

貴艦隊の指揮官と交渉をしたいのですが……応答願います!』

功「如何します准将？」

平賀部隊からの交渉の通信に如何するのか問う。

龍之介「兎に角応答して見よう！・・・通信主！・・・向こうとの回線を繋げろ。」

実「了解！」

龍之介は、平賀部隊からの交渉に応答した。

実「どうぞ准将！」

龍之介「私は、Gフォース西部方面艦隊の指揮官山本龍之介准将だ！」

平賀『貴方が指揮官ですか？』

龍之介「そうだ！・・・濟まないが緊急の為、この事をG対に問い合わせて欲しいのだが？」

龍之介は、今回の報告をブルーマーメイドを通じて、G対策センターに報告しようとしたが

平賀『G対？・・・何ですかそれは？』

龍之介の言葉に平賀は、何かと問う。

龍之介「何って・・・G対と言ったらゴジラ対策センターに決まってるじゃないか？・・・我々は、其処の所属だが・・・」

平賀『貴方、頭が可笑しいですよ！』

龍之介「何がだ！」

平賀『貴方が言っているゴジラ対策センター何てものはありませんし、Gフォースと
いう組織は存在しません!!』

龍之介「そんな馬鹿な事があるか！」

ゴジラ対策センターやGフォースが存在しないと言う言葉を聞いて、龍之介は驚愕す
る。

龍之介だけじゃない

薫「G対が無いって、如何いう事!？」

はやて「さっぱり分からへん？」

薫とはやても驚愕していた。

龍之介「も、もしかして!？」

龍之介は、ある仮設を創造する。

龍之介（俺達は、核爆発を生き延びた訳じゃない!・・・異世界に飛ばされたんだ!?)
龍之介は昔読んだ、あるSF小説に出てくるパラレルワールドの事を思い出す。

パラレルワールド

それは、ある世界から分岐し、それに並行して存在する別の世界を指す。

並行世界、並行宇宙、並行時空とも言われている。

龍之介達は、雅に、そのパラレルワールドの一つの世界に飛ばされたのだ。功「如何しますか准将？」

とは言え、異世界に飛ばされた以上如何するのか

龍之介の判断に委ねられる。

龍之介「ん・・・先ず確認したい事がある。」

龍之介は、一つ如何しても確かめたい事があつた。

龍之介「此方は、山本だ！」

平賀『平賀です！』

龍之介「貴官の上官と話がしたい！」

平賀「分かりました・・・では、直接、繋がりますので、お待ち下さい！」

空母大鳳からみくらを経由して、横須賀のブルーマーメイド庁舎にいる真霜に繋ぐ。

実「向こうとの回線が繋がりました。」

真霜『此方は、海上安全整備局安全監督室情報調査隊の宗谷真霜一等監督官です。』

龍之介「Gフォース西部方面艦隊指揮官の山本龍之介准将だ。」

真霜「交渉を受けて頂き、感謝します山本准将！」

龍之介と真霜

2人の指揮官は、初めてお互いにコンタクトを取った。

龍之介「早速だが！・・・今は何年だ？」

そして、如何しても確かめたい事が、此処が何年後かだと言う事。

真霜「2015年ですが？」

龍之介「2、2015年だって!？」

例え異世界でも何年後かは知りたかったが、雅か14年後の未来の世界とは予想もしていなかった。

龍之介「ん・・・まずは、お互いに状況確認と意見交換をする必要がある見たいだな
宗谷監督官！・・・貴方と直接話し合いたい・・・横須賀への入港を許可して貰いたい
？」

龍之介は、先ずお互いに状況確認と意見交換をする必要があると認め、真霜に横須賀への入港を許可を願う。

真霜『分かりました・・・横須賀への入港を許可します!』

真霜は、Gフォース西部方面艦隊の横須賀入港を許可した。

龍之介「感謝する!では、横須賀で!」

真霜『お待ちしています。』

龍之介は、真霜に感謝し、回線を切り替える。

平賀『横須賀へは、我々が案内しますので、此方の指示に従ってください!!』

龍之介「了解した！指示に従う。」

こうして、龍之介達は、平賀部隊の誘導のもと横須賀へと向かう事になった。

空母大鳳、艦橋

龍之介「これより横須賀に向かう！但し警戒態勢を維持する！」

龍之介は、現在の態勢を維持したまま横須賀に向かうよう命じる。

功「大丈夫ですか？もし畏だったら・・・」

功は、これが畏だったら如何するのか問う。

龍之介「それだったら、それに対応すれば良い事だ！・・・取り合えずは何が起こっているか知りたい！」

龍之介は、もし畏だったら、恐れる事なく、それに対処すれば良い事だ。

まあもし畏だったとしても此方には、無敵の空母航空団の航空機78機と最強兵器白鳳がある限り、簡単にはやられない。

更にトマホークによる遠距離攻撃で向こうの心臓部に打撃を与える事も可能だ。

功「分かりました・・・貴方に従います!!」

龍之介「通信主、各艦にも伝える!!それと白鳳は、水上モードで艦隊の後方に付けと
！」

実「了解！」

龍之介は、横須賀への入港の意思を各艦に伝える。

龍之介「それと哨戒隊を収容しろ！」

ついでにペガサス隊の収容を命じる。

白鳳、艦橋

白鳳の通信主「大鳳から入電！・・・これより横須賀に向かう・・・従って、白鳳は水上モードで艦隊の後方に着く様にと！」

次郎「水上モード!?・・・空中モードの方が上空から艦隊直掩ができるのに・・・」

三郎「機密補充の為じゃないんですか？向こうは、謎の部隊だから・・・」

次郎「成程！副長は頭良いなアハハ!!」

次郎は、三郎の肩を叩く。

三郎（あんたが頭が悪いだけだろ！）

三郎は影で笑っていた。

高千穂、艦橋

美由紀「副長！・・・当艦も戦闘配置まま向こうの誘導に従って横須賀に向かう。」

文夫「大丈夫でしょうか？」

美由紀「訳が分からない以上、従うしかないわ！」

文夫「はっ！」

美由紀（全く、如何なっているの？）

空母大鳳、艦橋

薫「ペガサス隊の收容完了しました!!」

周囲を哨戒していたペガサス隊の收容を完了した。

こうして、長時間の睨み合いは終わり、ペガサス隊を收容したGフォース西部方面艦隊は、平賀部隊の誘導に従い横須賀へと進路を取る。

横須賀基地

その頃、横須賀では、Gフォース西部方面艦隊の入港に備え、真霜は、民間船の湾内への規制を行い、更に念の為、ブルーマーメイドの主力部隊の出動準備を命じた。

午前11時

平賀部隊が先頭にGフォース西部方面艦隊は、浦賀水道に差し掛かろうとしていた。

志度「艦長!・・・横須賀基地入港まで1時間となりました・・・入港準備をさせますか?」

福内「そうして頂戴!」

志度「了解!・・・全艦に次ぐ!・・・入港用意!」

横須賀基地入港まで1時間となり、平賀部隊の各艦は、入港準備をする。

空母大鳳、艦橋

実「みくらから入電！・・・此方の指示に従って、横須賀港に入港されたし・・・」
龍之介「了解した・・・艦長！」

薫「全艦、入港用意！」

平賀部隊の指示に従い、Gフォース西部方面艦隊は横須賀港に入港する。

空母大鳳、高千穂、白鳳以外のすくね、さつま、いばらき、せんだい、ながおか、きしゅう、せた、とよだ以下の8隻が埠頭に停泊し、艦が巨大な空母大鳳、高千穂、白鳳のみ沖合いに停泊する。

こうして龍之介達は、祖国日本に帰投する事ができた。

しかし、油断はできない。

何故なら、異世界の日本である為、自分達が如何なるのかも分からない状況だからだ。

第4章 選択

空母大鳳、艦橋

龍之介「此処が横須賀だ?! ……これが横須賀の町なのか?」

功「陸地が余り無い!」

薫「在るのは、人工島とフロート艦だけ……」

空母大鳳の艦橋から横須賀の町を見た龍之介達は哑然とした。

以前の横須賀の街とは違い、人工的に作られた島やフロート艦が辺りに在るだけで、

陸地の大部分が無かった。

龍之介（信じられないが……如何やら、俺達は異世界に来た様だ……）

今の横須賀の町を見て、龍之介は、本当に異世界に飛ばされたのだと認識した。

横須賀基地

その頃、真霜は龍之介達と会談すべく、沖合に停泊する空母大鳳に向かう為、埠頭へ

と向かう。

向かう途中

ブブ……! ブブ……!

真霜「!?」

突然携帯が鳴り、見て見ると

真霜「真冬からだわ!?!」

それは、自分の妹であり、宗谷家の次女、宗谷真冬からの電話だった。

真霜「もしもし真冬!・・・如何したの?」

真霜は何かと思ひ、電話に出る。

真冬『ああ真霜姉!・・・ちよつと小耳に挟んだんだが・・・何でもつい最近、硫黄

島沖で謎の不明艦隊と遭遇したんだって?』

真冬は、Gフォース西部方面艦隊の事を何故か知っていた。

真霜「貴方何処で、それを?」

真冬『私にもそれなりの情報筋が在るんだよ!』

真冬も真霜と同じブルーマーメイドに所属していたので、硫黄島沖に現れたGフォース

西部方面艦隊についての情報を何処からか得ていた様だ。

真霜「成程!・・・でも真冬!・・・貴方あまりその不明艦隊に関しては、言いふら

さない方が良いでしょう!」

知りたがる真冬に対し、真霜は忠告する。

真冬『それぐらいは分かっているよ!・・・唯、どんな艦隊か気になったから、こう

して真霜姉に直接聞いているんだよ！」

真冬本人もその事は理解していたが、どんな艦隊なのか気になってしょうがなく真霜に電話を掛けて来たのだ。

真霜「そう！」

それに真霜は納得し

真冬『で、どんな艦に乗っているんだ？』

早速真冬は、Gフォース西部方面艦隊の事を問う。

真霜「それに関しては、私から、これ以上、詳しい事は言えないわ！」

それに対して、真霜は、これ以上言えないと答え

真冬『じゃあ乗員は、どんな奴何だ？』

更に龍之介達の事を問う

真霜「それもノーコメントよ！」

それもノーコメントと言って、はぶらかした。

真冬『そ、そうか・・・』

これ以上聞けないと分かった真冬は、それに関して何も聞かなくなり

真霜「じゃ、私は忙しいから切るわね！」

真霜は、真冬との電話を切る。

真霜「さてと……」

真冬との通信を終えた真霜は埠頭へと急ぐ。

空母大鳳、艦橋

龍之介「ん……そろそろ向こうから親玉が来る時間だな……」

龍之介は時計を見て、そろそろ真霜達が来る時間になった事を確認し

龍之介「艦長！ 濟まないが出迎えに行つてくれるか？」

薫「はい！」

薫と護衛のGF隊員2人を出迎えに行かせた。

空母大鳳から内火艇が降ろされ、埠頭へと向かう。

横須賀基地

一方、埠頭では

平賀「宗谷監督官！」

真霜が埠頭に着くと既に平賀と福内の2人が真霜を待っていた。

真霜「2人共、ご苦勞だったわね！……それで、今から彼らの元に交渉へ向かうけど……貴方達2人にも同行して貰うわよ！」

真霜は、今回Gフォース西部方面艦隊と最初に接触した平賀と福内にも同行して貰う

事を告げる。

『はい。』

2人は、それを承知した。

真霜「後は……ん？」

出迎えの船を待っていると、向こうから内火艇が1隻が此方に向かつて来て、埠頭に接岸し、其処から茶色の制服を着た薫と2人のGF隊員が降りてきた。

薫「貴方が宗谷一等監督官ですか？」

真霜「そうですが、貴方は？」

薫「私は、空母大鳳艦長の山本 薫中佐と申します……准将の命で、貴方々をお迎えに上がりました。」

『!?!』

薫「どうぞ此方へ！准将がお待ちです！」

6人は、内火艇に乗り込み、空母大鳳へと向かう。

向かう間、真霜は薫を見る。

真霜（この子が艦長？……以外と若いわね……年は真冬や平賀達ぐらいかな？）

真霜は薫を見て、艦長なら、もうちよつと年上かと思つていたんだろう。

そう思っている間に内火艇は、空母大鳳の元に到着した。

真霜は、内火艇から空母大鳳を見渡す。

真霜（これが旗艦？・・・何って大きな艦なの!?・・・でも武装が無いわね？・・・これ
れで本当に戦えるのかしら・・・）

真霜は、空母大鳳の大きさが海洋学校が保有する大和型戦艦をしのぐ大きさだと感じ
たが、甲板に砲塔などの武装が殆んど無く、車両見たいな物が沢山並んでいただけで、本
当に戦えるのか不思議だった。

内火艇は棧橋に着き、護衛のGF隊員と別れ、タラップを上がり、艦内入口に入ろう
とした時

薫「すいません・・・此処で武器を預かせて頂きます。」

『えっ!?!』

艦内に入る前に薫が真霜達から携帯している拳銃を預かろうとしていた。

薫「念の為なので・・・でも大丈夫ですよ!・・・私を信じて下さい!」

平賀「如何しますか宗谷監督官?」

平賀と福内は、動揺するが

真霜「此処は、大人しく従いましょう。」

真霜達は、薫に従い、携帯していた拳銃を薫に渡す。

渡された拳銃を薫は、側に居るGF隊員に預け

薫「では此方へ!会議室にご案内します。」

薫に案内され3人は、会議室に向かう。

空母大鳳、通路

会議室に向かう途中、GF隊員達が真霜達を白い目線で見たり、驚いた目で見ていた。

福内（宗谷監督官！・・・何だか、先からジロジロ見られてるんですけど・・・）

福内が真霜に耳打ちする。

真霜（私も、先から視線を感じるわ！）

真霜も彼らがジロジロ見ている事は、気づいていた。

薫「こら、貴方達何しているの!?持ち場に戻りなさい!!」

それに気づいた薫が彼らを追い払った。

やがて、会議室に着き。

薫「どうぞ！」

真霜達が会議室に入る。

空母大鳳、会議室

龍之介「来たか！」

真霜達が会議室に入ると其処には、青色の軍服を着た3人の士官と薫と同じ茶色の制

服を着た士官1人がいた。

薫「准将！・・・ブルーマーメイドの方々をお連れしました!!」

龍之介「ご苦勞艦長！」

次郎「おう来たな薫！」

薫「次郎君!?!如何して此処に？」

白鳳に居る筈の次郎が何故此処に居るのか、薫は驚く。

次郎「俺も真意を確かめたいで、堆先着た。」

次郎も状況を知りたくて、態々此処に来た様だ。

薫「もくお勝手に持ち場を離れちゃいけないよ！」

薫は、持ち場を離れた次郎を叱る。

次郎「固い事言うなよ！准将も許してくれたし！」

龍之介「もう来たんなら仕方がない！」

既に真霜達が来た以上、今更次郎を追い返す事は出来ず、龍之介は仕方なく参加を認めた。

美由紀「ご苦勞様！山本中佐！」

薫「権藤中佐!?!」

次郎や美由紀が来ている事に薫は驚いていた。

龍之介「さて・・・」

龍之介は、真霜に視線を向ける。

真霜「ん．．．」

龍之介「ようこそ空母大鳳へ！．．．俺がGフォース西部方面艦隊指揮官の山本龍之介准将だ！」

功「参謀長の徳吉 功大佐です。」

次郎「俺は、特殊戦闘艦白鳳艦長の小沢次郎中佐だ！」

美由紀「私は、第二部隊及び高速戦闘艦高千穂艦長の権藤美由紀中佐。」

龍之介達は真霜達に自己紹介を行う。

『．．．．』

真霜達は、戸惑いつつも

真霜「私は、海上安全整備局安全監督室情報調査隊の宗谷真霜一等監督官です！」

平賀「同じく私は、平賀倫子二等監察官です！」

福内「私は、情報調査隊、みくら艦長の福内典子です。」

真霜達も龍之介達に自己紹介をする。

龍之介（女の指揮官とは珍しい．．．）

真霜（如何やら日本人のようね！．．．でも何か違う様な．．．）

次郎（通信でも聞いたが．．．海上安全整備局で．．．何だ？）

龍之介達が真霜達の所属に疑問を感じたのと同じく、真霜達も龍之介達の所属を聞

き、疑問を抱いた。

薫「皆さん立ってるのも何ですし、どうぞ席にお座りください!!」
立ってても仕方ないので8人とも席に着く。

龍之介「では、先ずお互いに状況確認から話を始めよう。」

先ずは、お互いに状況確認をしようと言う事になった。

真霜「では、此方から・・・」

先ず真霜が龍之介達に、この世界の状況を説明した。

真霜達の世界は、100年ほど前の日露戦争後、日本はプレートの変みやメタンハイドレートの採掘などが原因で国土の多くを海中に没した。

その結果、海上都市が増え、それらを結ぶ海上交通などの増大に依り、日本は海運大国になった事で、海洋航路の重要性が再認識される様になった。

しかし、海洋時代に暗躍するかの如く、海賊行為が目立つ様になった。

それらを取り締まる為、ブルーマーメイド及びホワイトドルフィンが組織された。

そして、軍事に建造された艦を民間用に転用され、戦争に使わないという象徴として、艦長は女性が勤める事になった。

それらを龍之介達に話した。

龍之介「道理で可笑しいしと思つたが・・・やはり此処は、パラレルワールドの一つ

の異世界だな！」

龍之介は、直ぐに納得した。

次郎「パラレルワールド？」

薫「パラレルワールドて何？」

龍之介「言うなれば、別のつまり異世界に着てしまったと言う事だ。」

龍之介は、薫と次郎にパラレルワールドの事を説明する。

薫「じゃ私達！もう元の世界に戻れないんですか？」

龍之介「今のところは戻る方法が無いから・・・そうなるな！」

薫「そ、そんな・・・」

次郎「冗談じゃねえよ！・・・平和を守ってきた俺達が一体何を仕立て言うんだ!!」

元の世界に戻る事が出来ない聞いて、薫は動揺し、次郎は激怒した。

美由紀「落ち着きなさい2人共!!」

薫「申し訳ありません。」

次郎「すいません。」

美由紀に止められ薫と次郎は落ち着く。

龍之介「謝らなくて良い！・・・俺だって、何で此処に飛ばされたか、その理由を知りたい!!」

龍之介も何故、此処に飛ばされたか、その理由を知りたかった。

そして今度は、龍之介から如何いった経緯で此処へ来たのかを真霜達に話した。

龍之介達の世界では、2度に渡る世界大戦が起こり、日本は何とか勝利したものの、今度は、44年間の東西冷戦や核実験が起こり、その影響で地球環境に大きな打撃を与えてしまった。

更に核実験の影響で伝説の怪獣ゴジラを生み出した。

日本は、そのゴジラとの壮烈な戦いで大打撃を受けながら葬る事ができた。

ゴジラ戦後、日本は世界に核兵器廃絶を訴え、平和を維持しようと努力したが、アメリカとソ連が納得せず核実験を続け、そのせいで、30年後にまたゴジラを生み出してしまった。

日本は、再びゴジラとの戦いを強いられた。

国連は、ゴジラの脅威に対抗する為、対ゴジラ部隊Gフォースを組織した。

Gフォースは、超兵器まで使いゴジラを永遠に葬る事に成功した。

それから1年後に龍之介達は、最後の哨戒任務の為、西太平洋沖を航行中、突然島が核爆発を起こし、それに巻き込まれてしまい、気が付いたら此処に居た事を真霜達に話した。

平賀「そんな事が・・・」

福内「信じられないわ・・・」

龍之介の話した内容に真霜達は、そう簡単には信じられなかった。

真霜達から見たら、龍之介の話は架空戦記物の小説の様な内容だったからだ。

真霜「さて、此処からが本代だけ・・・」

『!?!』

お互いに状況確認を終えた後、真霜は、龍之介達に今後についての交渉を始めた。

真霜「貴方々は、これから如何するんですか？」

真霜は、龍之介達に、これから如何するのかわかるのか問う。

龍之介「俺達は、Gフォースの所属だが、最早指揮系統を失った以上・・・これから

如何するかは分からない・・・だが俺には指揮官として、部下を守る義務がある！」

それに対して、龍之介は指揮系統を失った以上、これから如何するかは分からないが、

例え異世界に飛ばされても自分の部下を守る義務を龍之介は果たすと真霜に告げる。

真霜「なら私達の海上安全整備局に所属しては如何でしょうか？」

それに対して、真霜は、自分と同じ海上安全整備局に入らないか提案する。

龍之介「何!?!」

真霜の思わぬ提案に驚く。

真霜「そうしたら貴方々の事は、私が全力で守りますし・・・何よりは、貴方も自分

や自分の部下を守れるでしょ！」

龍之介「悪くない話だが・・・それに関して何か条件があたりだな？」

真霜の提案に何か条件が有ると睨む。

真霜「ええ！・・・私達が持つ技術と貴方々が持つ技術を交換したいの！」

真霜の条件とは、真霜達が持つ技術と龍之介達が持つ技術の交換だった。

『!?!』

美由紀「何ですって?!?! 私達が持つ技術を!?!」

真霜の条件に龍之介達は、動揺する。

平賀「山本准将!?! 話を聞く限りでは、貴方々が元の世界に戻るの事実上不可能だと判断します・・・ですから、如何か宗谷監督官の提案を吞んでください!!」

平賀は、動揺する龍之介達に何とか真霜の提案を吞ませようと頼むが

美由紀「待つて下さい准将!!」

それに対して、美由紀は待ったを掛けた。

『!?!』

美由紀「准将! 私、この条件を呑むのは反対です!!」

と言つて、真霜の条件に反対する。

『!?!』

美由紀の反対に真霜達は驚愕する。

美由紀「准将も知っておられるでしょう！……発達し過ぎた科学を彼らに教えれば、この世界の破滅に繋がります！」

美由紀は、自分達が持つ技術が戦争に使われる事を恐れたのだ。

真霜「そんな事は絶対にさせません!!」

それに対して、真霜は絶対にそんな事はさせませんと言うが

美由紀「貴方がそうしても……何れ誰かが悪用する事になるわ！……もしそうなたら貴方は責任が取れるの？」

真霜「それは……」

美由紀の迫及的な発言に真霜は言い返せなくなる。

平賀（驚いた……あの宗谷監督官が押されている!?)

福内（私達でも敵わないのに……）

美由紀に押されている真霜を見て、平賀と福内は驚いていた。

2人にとって真霜が初めて押されていたからだ。

2人から見て、真霜は厳しさとその厳格ゆえに皆から恐れられていた。

その真霜が美由紀に押されている。

そして、美由紀も、その冷酷さと厳しさに龍之介達から恐れられている。

その美由紀に真霜は勝てないでいた。

龍之介（確かに権藤中佐が言うのも最もだ！……発達し過ぎた技術は破滅を齎す……かつての我々もそれでゴジラを生み出した……だが、この世界では彼らに頼るしかない……ならば此処は……試して見るか……この女が本当に俺達を守ってくれるのか？）

龍之介は、美由紀の意見ももともとだが、この世界では真霜達に頼るしかない。

ならば此処は、真霜が自分達を本当に守れるのか試して見る事にした。

龍之介「海上安全整備局の傘下に入るとしても、艦隊の指揮権においては、今後とも俺が執る……それと、技術交換に関しては、権藤中佐の事も一理あるので、平和利用すると言う条件で、貴方々の上層部に約束願いたい！」

龍之介は、海上安全整備局の傘下に入る条件として、艦隊の指揮権は、今後とも龍之介が執り、技術交換に関しては、平和利用すると言う条件を真霜に提示する。

真霜「ん……分かりました……上層部には、私が説得しておきましょう。」

真霜は、説得すると約束する。

龍之介「ならば所属になりましょう……参謀はそれで良いよな？」

功「私は、准将に従います。」

龍之介の提案に功は賛成した。

龍之介「お前らもそれで良いな！」

薫「私は、異論はありませんよ！むしろ面白そうだし！」

次郎「俺も異論はねえぜ！」

薫と次郎も賛同した。

龍之介「3人一致だな！……まだ異存があるか権藤中佐？」

美由紀「……いいえ……私に異存はありません。」

3人一致でようやく美由紀も承諾した。

龍之介「では、改めて我々、Gフォース西部方面艦隊は、海上安全整備局の所属になります!!」

真霜「ようこそ海上安全整備局へ！歓迎します!!」

龍之介「此方こそ、よろしく頼むぞ、宗谷監督官殿！」

こうして龍之介と真霜との間で交渉が成立した。

しかし、念の為、コンピュータの凍結の準備や慶介の身柄を警護する事にした。

交渉は終わり、真霜達は帰途に就いた。

空母大鳳、艦橋

薫「話が分かりやすい人でしたね！」

龍之介「ああ……だが油断するな！」

薫「はくい！」

龍之介（はあ・・・最後のお勤めがこんな事に成るとは・・・付いていない！）

こうして龍之介達Gフォースの異世界暮らしの幕はあがった。

この先、龍之介達に一体どんな出会いが待ち受けているのか？

この先、どんな事が待ち受けているのか？

それはまだ、誰にも分からない。

第5章 宗谷真雪

3月16日

国土交通省、国土保全委員会

龍之介達との交渉後、真霜は、ブルーマーメイド庁舎に戻り、国土保全委員会に全てを報告した。

真霜『以上が彼らに関する報告書と交渉で得た結果です。』

深町「Gフォース西部方面艦隊か・・・」

委員会幹部A「ふむ・・・宗谷監督官の報告では、彼らの持つ技術は計り知れないものがある。」

委員会幹部C「ええ、雅に天祐ですな！」

真霜からの報告を聞いて、深町以外の委員会の幹部達の腹が不吉な喜びに満ちていた。

何故なら、報告の内容に龍之介達が持つ特殊戦闘艦白鳳の存在が有ったからだ。

深町「それで、その指揮官は、技術交換に対して、何か条件を突き付けてきたかね？」
深町は、真霜に龍之介が何か条件を付き付けたか問う。

真霜『彼らは、自分達の技術を平和利用する事を約束するなら、技術交換に応じると言っています。』

真霜は、龍之介が技術を平和利用をするなら技術交換に応じると報告するが

委員会幹部B「ふん！・・・口約束なら、如何にでも出来る事だ。」

真霜『それは、如何いう意味でしょうか？』

委員会幹部B「なくに、ワザと彼らと約束して、その裏で獲得した技術を我々が独占するのだよ！」

委員会幹部C「その通りだ！・・・そうなれば我が国は、アメリカを超える大国になるぞ！」

委員会の幹部達は、龍之介の条件をワザと受け入れてから、その裏で獲得した技術を独占して、日本をアメリカを超える大国にしようと画策する。

委員会の幹部達の発言を聞き、真霜は激怒し

真霜『それでは、彼らと結んだ条件に反します!!・・・それに、そんな事をすれば、彼等からの信用を永久に失います!!』

真霜は、龍之介の信用を失わない様に幹部達を何とか説得しようと努力したが

委員会幹部B「ふん！・・・相変わらず宗谷監督官は甘いな！・・・この様な技術を持つ者を野放しにしては、折角得た天祐を不意にする様なものだ。」

真霜『求めたくない天祐を得るのも、我々の愚かしさじゃないでしょうか？』

委員会幹部B「何だど!?・・・青二才の小娘が偉そうに!!」

委員会の幹部の1人が真霜に激怒し、対立する。

深町「待ちたまえ!」

その対立に深町が待ったを掛ける。

委員会幹部B「深町国交相・・・」

深町「確かに宗谷監督官の言葉にも一理ある。」

委員会幹部B「しかし!」

深町「下手に彼らの信用を失えば痛い目に遭うのは我々だ!・・・それに、この件に
関しては、宗谷監督官に全てを委ねている・・・此処は、宗谷監督官の言う通りにしよ
うではないか?」

委員会幹部B「ん・・・分かりました。」

深町の言葉に委員会の幹部達はなくなり承諾した。

しかし、委員会の幹部達は口には出さないが、内では、真霜に敗北した事を悔しがっ
ていた。

真霜『ありがとうございます深町国交相!』

こうして協議の結果、国土保全委員会は龍之介の条件を受け入れた。

真霜は、委員会の幹部達から龍之介達を守り抜いたのである。
それから数日後

3月19日

国土交通省、大臣室

40代の女性が深町が居る大臣室に呼ばれた。

トーントーン

深町「どうぞ！」

真雪「宗谷真雪、御用で参りました。」

彼女の名は宗谷真雪。

ブルーマーメイドに所属する真霜と真冬の母であり、現在、横須賀女子海洋学校の校長を務めている。

今は現役を引いているが、かつては、ブルーマーメイドでもあり、現役時は、領海内を荒らしまわっていた大規模な武装船団を単艦で殲滅した。

その功績から「来島の巴御前」と呼ばれる様になり、現役を引いた後は、ブルーマーメイドの育成校の一つである横須賀女子海洋学校の教員を務め、今では校長にまで登りつめた人物である。

深町「よく来てくれた！さあどうぞ!!」

深町は、真雪を部屋の中に入れる。

真雪「失礼します。」

真雪は、大臣室の中へと入る。

真雪「何か御用ですか、深町国交相？」

真雪は、早速、自分が呼ばれた理由を聞く。

深町「実は今回、硫黄島沖で遭遇した不明艦隊の事は、宗谷校長も聞いておられると思うが？」

真雪「はい！・・・宗谷監督官から詳しい事情を聞いております・・・確か異世界から来たと・・・」

真雪は、真霜から詳細を聞いていた。

深町「その艦隊を海上安全整備局が預かる事になった・・・については、その指揮官と艦長の面倒を貴方に任せたいんですが・・・」

何と深町は、真雪に龍之介と薫の面倒を見させ様と真雪に頼みこむ。

真雪「私にですか!？」

それを聞いた真雪は驚く。

深町「実は、国土保全委員会の幹部達の中には、彼らをそう思わない者がいる・・・何とか彼らを抑えているが・・・」

深町は、この前の協議で国土保全委員会の幹部達が真霜に敗北した事で、何かしらの仕返しをしてくるのを恐れていた。

深町「成るべく私の味方であり、良き理解者でもある貴方の所に置いて置けば、私も安心なんだが……」

深町にとって、真雪は良き理解者でもあり、国土保全委員会にも一目置いている人物だ。

また、彼女の旦那さんとは、昔からの友人でもある。

彼女の元で面倒見せれば、委員会の幹部達もそう簡単に手出しは出来ないだろう。

真雪「ん……分かりました……謹んでお受けします!」

深町の頼みに真雪は、易々と承諾する。

深町「引き受けてもらえるか?」

真雪「ええ喜んで!……此方としては、家が賑やかになる事は嬉しい事です。」

深町「それは良かった……資金の事に關しては、私が援助しよう……それから、その指揮官や艦長に關しては余り甘やかさなくて良いぞ!」

真雪「分かりました。」

画して、龍之介と薫の面倒は、真雪が見る事になった。

横須賀基地

空母大鳳、艦橋

その頃、海上安全整備局の所属になった龍之介達は普通に作業していた。

初めは、この世界に飛ばされた事でGF隊員達の中に不安を抱いた者もいた。

中には、自殺を計ろうとする者もいたが、功や美由紀の説得で何とか抑えられた。

それから数日間、その状態が続き

今では、当たり前のような状態に戻った。

龍之介（あれからもう数日か・・・隊員達もようやく落ち着き、今はもう普通に戻っている・・・これも参謀や権藤中佐のお陰だな！）

龍之介「はあ・・・」

龍之介は、艦橋で溜息をする。

薫「兄さん！」

後ろから、おぜんにお茶を乗せてきた薫がやって来た。

龍之介「何だ薫か？」

薫「大丈夫、兄さん？」

薫は、龍之介を心配しながらお茶を置く。

龍之介「俺は、大丈夫だ！」

薫「兄さん、あれから不安を抱いたり、自殺を凶ろうとした隊員達を何とか止め様と

説得したり、希望を持たせたんだよね？」

龍之介「別に持たせてない・・・それに今回の手柄は、参謀や権藤中佐のお陰で俺は何もしていない。」

龍之介は、今回の手柄は、自分ではなく、功と美由紀のお陰だと評価する。

薫「そうだったね。」

龍之介「ん・・・なあ薫！」

薫「何？」

龍之介「お前は、これから如何したい？」

龍之介は、薫にこれから如何するか問う。

薫「えっ？」

龍之介「もうGフォースもないし・・・隊員達にも、自由に退艦する者は退艦せよと伝えてる・・・だから、お前も自由にしても良いんだぞ！」

龍之介はGF隊員達に、これ以上無理について行かなくても良いとGF隊員達に自由に退艦する者は退艦せよと伝えた。

その為、薫にも自由の生き方を与えたが

薫「兄さん・・・私は、GF隊員として、皆と此処に残るわ！」

それに対して、薫は、部隊への残留を選んだ。

龍之介「何故だ!?もうお前を縛る物は何も無いんだぞ!」

龍之介は、何故残留するのか理由を問う。

薫「確かに今は縛られる物はないけど……私には大切な仲間がいる……それを見捨てて、1人だけ自由になる何て、私には出来ないよ!」

薫は、次郎やはやて達を見捨てる事はできなかった。

薫「それに、私がいないと兄さん困るでしょう!次郎君もだけど……」

それに薫がいないと龍之介や次郎が困るだろうと思った。

龍之介「はあ……勝手にしろ!」

薫の頑固に龍之介は折れ、残留を認めた。

龍之介（一度決めたら、首を振らないのが、薫の良いところだが……）

薫の良いところは、一度決めたら、首を振らない事だが、反って悪いところもある。

薫「それより……宗谷監督官が言ってたブルーマーメイドって、どんな所かな?」

薫は、ブルーマーメイドに興味を抱く。

龍之介「宗谷監督官から聞いたろ……女性だけの部隊だってな!」

薫「ああ、そうだったね……忘れてった。」

龍之介「全く!先が思いやられるよ……まあ、俺達には縁が無いが……」

龍之介は呆れ果て、ブルーマーメイドとは、縁が無い事を告げ

薫「あれ兄さん、何所行くの？」

龍之介「お前が知る必要はない！」

艦橋を後にする。

薫「待つて兄さん!!私も行く！」

龍之介「付いてくるな！」

薫「や〜だ〜よ〜！」

薫も龍之介の後を追う。

艦橋を後にし、艦内各部を見回り、隊員達の状態を確認してから、タラップを降りて艦外へと出る。

横須賀基地

艦を降りた龍之介と薫は、横須賀基地内を見て回り、基地の食堂で飯を食っていると

真霜「山本准将！」

龍之介「!？」

薫「あつ!?!宗谷監督官！」

突然、真霜がやってきた。

真霜「こんな所で何をしているの？」

龍之介「別に俺は、飯食ってるだけだが・・・」

飯を食っている途中だった為、龍之介は機嫌が悪かった。

薫「気にしないでください！いつもこんな感じですから！」

薫は、龍之介は、いつもこんな感じだと真霜に言う。

龍之介「余計な事は言わなくて良いんだよ!!」

それに対して、龍之介は余計な事を言うなど叱る。

真霜「ふくん……ところで山本准将!……貴方に合わせたい人がいるの!」

真霜は、龍之介にある人物を合わせる。

龍之介「俺に!?!」

龍之介は、誰かなと思ひ。

薫「私は、お邪魔見たいですね!向こうに行つてます。」

薫は、邪魔にならない様に向こうに行こうとするが

真霜「あつ!山本中佐も居て頂戴!!」

真霜は、向こうに行こうとする薫に居て頂戴と言う。

薫「えっ!?!良いんですか?」

真霜「ええ、貴方にも会わせて置きたいから……」

真霜がそう言うのと、本人の後ろから、1人の女性が近づいてきた

真雪「貴方が山本龍之介さんね!」

龍之介「そうだが、あんたは？」

真雪「貴方は、山本薫さんね！」

薫「は、はい！」

真霜「紹介するわね・・・此方は宗谷真雪！・・・私の母よ！」

真霜は、2人に母の真雪を紹介する。

龍之介「・・・」

薫「えっ!？」

真雪「宗谷真霜の母の宗谷真雪です！」

真雪は、龍之介と薫に自己紹介をした。

龍之介「俺は、Gフォース西部方面艦隊の山本龍之介准将だ！」

薫「同じく空母大鳳の艦長の山本薫中佐です！」

龍之介と薫も自己紹介をした。

その後、真霜と真雪が反対側の席に掛ける。

真雪「娘から：真霜から貴方達の事は聞いたわ・・・この度は色々大変だったわね・・・

でも、もう大丈夫！・・・貴方々2人の事は、私達がちゃんと面倒を看る事になりました。」

真雪は、龍之介と薫に、これからの面倒を見る事を告げる。

龍之介「それは、如何いう事だ？」

薫「如何いう事何ですか、宗谷監督官？」

2人は、真霜に面倒を見るとは如何いう事か問う。

真霜「実は、貴方達2人の監視と保護という形で……一緒に住む事になったの！」

真霜は、2人に監視と保護という形で宗谷家に住む事になった事を告げる。

龍之介「はあ……!? な、何じやそりや？」

宗谷家に住む事になった事を聞いて龍之介は驚愕する。

薫「つまり私と兄さんが宗谷監督官の家同居するつて事ですか？」

真霜「そう言う事になるわね！」

龍之介「い、一体何処で、そう言う風な話になったんだ!？」

龍之介は驚愕しながら何故、そんな事になったか問う。

真雪「龍之介さん!……これは国土交通大臣である深町国交相からの依頼なの！」

それに対して、真雪は、深町からの依頼だと告げる。

龍之介「大臣からの依頼だと？」

真霜「実はね!……深町国交相以外の国土保全委員会の幹部達は、まだ貴方達を信用していないの……もしかしたら何かして来るかも知れない……だから手出しがでない様に……その指揮官と身内を、私が見ている所に置きたいの……」

真霜は何故、自分の家に住まわせるのか、理由を説明する。

薫「成程！一石二鳥って訳ですか？」

真霜の説明に薫は納得する。

龍之介「お前は、何納得してるんだよ！」

龍之介は、納得する薫に呆れる。

薫「でも、私達が急に家に押し掛けて来て、大丈夫なんですか？」

薫は、急に宗谷家に押し掛けて来て、大丈夫なのか問う。

真霜「それは大丈夫よ！……うちは、母と私と姉妹2人の4人家族だし、お金の事は、深町国交相が支援してくれるから心配いらないわよ！」

それに対して、自分の家族は4人しかいないし、お金の事は深町からの支援が有るので、心配いらないと薫に告げる。

薫「じゃ！」

それを聞いた薫は、真雪の話を受けようとしたが

龍之介「お断りだね!!」

龍之介がそれに反対する。

『!?!』

龍之介の反対に真霜と真雪は驚く。

龍之介「そんな行為を受ける義理も無いし！・・・何であんたらと一緒に暮らさなきゃいけないんだよ!!・・・第一俺は、あんたらの事は何にも知らないんだ・・・そんな奴と一緒に住むなんて、御免だ!!」

龍之介は、自分が頼んでいないのに、勝手にそんな事をしたのを怒っていた。それだけじゃない、龍之介は、真霜達がまだ信用していなかったのだ。

薫「兄さん!そんな言い方は失礼じゃないの!!」

余りにも酷い言い方に薫は反論するが

龍之介「お前は、黙っている!!」

薫「ん・・・」

龍之介に黙っているとわれ、薫は黙る。

真霜「ん・・・確かに私も貴方見たいな男と同居する何て、まっぴら御免だわ!」

本当は、真霜も龍之介と同居する事は反対だった。

実は、真霜は何故かは分からないが、男嫌いだった。

真雪「真霜!」

真霜「でも、これは貴方達を守る最善の策なの!・・・私やお母さんと一緒に居れば狙われる心配わないわ!」

だが真霜は、男嫌いを抑えて、何とか龍之介を説得しようとするが

龍之介「ふん！如何だか！」

それに対して、龍之介は、真霜を毛嫌いする。

真霜「何ですって！」

龍之介に毛嫌いされ真霜は怒りを露にする。

『うう・・・!!』

2人は睨み合いを始め、喧嘩寸前であった。

薫「止めて下さい2人共！」

真雪「止めなさい2人共!!」

薫と真雪は、2人の睨み合いを何とか止めさせ様とする。

『うう・・・ふん!!』

2人は睨み合いを止める。

薫「真雪さん！」

2人が睨み合いを止めた後、薫が真雪に

真雪「何ですか、薫さん？」

薫「先の話、謹んでお受けします。」

と言つて、真雪の話を受ける。

龍之介「薫!?何言ってるんだお前!!」

勝手に真雪の話を受けた事に龍之介は激怒する。

薫「良いじゃないの！・・・折角一緒に住むって言ってるんだから、此処は謹んでお受けしようよ！」

薫は、折角一緒に住むって言っている真雪の心遣いを断る事はできなかった。

龍之介「ん・・・勝手にしろ！・・・俺は、もう知らないからな!!」

それに対して、龍之介は、もう勝手にしろと言って、反対しなくなつた。

薫「じゃ真霜さん、真雪さん！・・・失礼かもしれませんが、これからよろしくお願
いします！」

真雪「此方こそ、よろしく薫さん！」

こうして、宗谷家に居候する事になつたが

龍之介「全く何でこうなつたんだか・・・」

真霜「貴方が言う事かしら・・・」

龍之介と真霜の対立が始まつてしまつた。

それから、少し話をした後、真霜と真雪は帰路に就く

真霜「如何だつた母さん？」

真雪に龍之介と薫の印象を尋ねた。

真雪「良い人見たいね・・・特にあのお兄さんの方は・・・」

真霜「そうかしら、私には、そう見えなかったけど……」

真雪「真霜！……貴方には分からないのね！」

真霜「え？」

真霜は真雪が言った意味が分からなかった。

空母大鳳、艦橋

龍之介「たくお前は、余計な事をしてくれたもんだ!!」

龍之介は、余計な事をしてくれたと薫を叱る。

薫「だって……あのままじゃ真霜さんと喧嘩してたかもしれないし……私は、そんなの見たくなかったの！」

薫は、龍之介と真霜が喧嘩するのを見たくなかった。

だからこそ、真雪の話を受け入れたのである。

龍之介「ん……」

薫の言葉を聞いた龍之介は反省する。

薫「それにお母さんの真雪さんは、良い人見たいだし！」

龍之介「お前は見た目だけでそう言うんだが、裏じゃ何考えているのか分らないんだぞ!!」

龍之介は、真雪が裏で何を考えているのか分らないので、信用していない。

薫「その時は、その時で大丈夫！」

龍之介「単純な奴だ！」

こうして、龍之介と薫は、深町の依頼によって、宗谷家に居候する事が決まった。だが、龍之介は納得していない。

第6章 宗谷家同居生活

3月23日

横須賀造船所、6号ドック

この日、白鳳が横須賀造船所の6号ドックで調査に入る。

ドックに入渠した白鳳を見た作業員達は、今まで見た事のない艦だと注目していたが、Gフォースやブルーマーメイドの厳重の監視下に置かれ指示があるまで、作業員達には手を出さないよう指示が出されていた。

作業員達は従い、見るだけで、手を出さなかった。

空母大鳳、通路

一方、停泊している空母大鳳の長官室の前では

薫「兄さん！もう準備できた？」

薫が私服（上は、白の襟高シャツと黒のパーカーで、下は、黒のミニスカートと赤いラインが入ったニーソックスを履いている）に着替え、荷物をもって待っていた。

今日は、龍之介と薫が宗谷家にお世話になる日であった。

龍之介「出来たぞ！」

長官室から龍之介が私服に替えて出てきた。

薫「じゃ行こうか兄さん！」

龍之介「はい、はい……何か嫌な予感がするけど……」

2人は、長官室を後にした。

龍之介以外のGF隊員達も海上安全整備局の所属になってから、海上安全整備局で決められた寮へ交代で水栗をしていた。

2人は、タラップを降りて基地の門へ向かう。

薫「真霜さん!!」

基地の門では、私服姿の真霜が待っていた。

真霜「準備は良い?それじゃ行きましょうか！」

薫「はーい!!」

龍之介（はぁ……逃げたくなってきた。）

龍之介と薫は、真霜の車に乗り、宗谷家へと向かった。

車の中で龍之介は、窓から横須賀の街を見ていた。

龍之介（……平和な町だな……俺達の世界と比べればゴジラのない平和そのものだな……）

しばらくして、タクシーは汐入町にある宗谷家に到着する。

真霜「さつ、着いたわよ！」

宗谷家の門前で3人は車を降りる。

龍之介（何とも・・・）

薫（大きい・・・）

宗谷家の屋敷並みの大きさに龍之介と薫は啞然とする。

だが、真霜は自分の家なので、平然とした様子で門を潜る。

真霜「何しているの？・・・遠慮なく入ったら？」

門前で啞然としている龍之介と薫に気がついて声を掛ける真霜。

薫「あっ!?御免なさい!!」

真霜の声に反応して慌てた様子で真霜の後を追う薫。

龍之介「・・・」

その後ろを、落ち着いた様子で後を追う龍之介。

そして、宗谷家へと足を踏み入れた。

宗谷家、ましろの部屋

その頃、三女の宗谷ましろは、自分の部屋で勉強をしていた。

すると突然、長女の真霜からリビングへ来てと言われ、リビングへと向かう。

宗谷家、リビング

リビングに行くとその処には、ましろと同じ様に真霜に呼ばれた次女の真冬が居て、何かと思ひ、やがて真霜が1人の女性を連れてきた。

「!?!」

真霜が連れてきた女性は、年が真冬と同じで、髪はポニーテールで、黄色い紐状のりボンで結んでいて、しかも美人だった。

ましろ「あっ!?!」

ましろは、一瞬、誰だと思いつつ、姉の真霜が紹介するだろうと思ひ、待ったが

真冬「なあ、真霜姉!そいつ誰だ?」

真冬が、先に薫の事を尋ねる。

真霜「この人は、前に言っていた例の……」

真冬「ああ!?!」

真霜から例のと聞いた途端、真冬はふと思ひ出す。

真霜は、龍之介達の事は、一応、真冬には説明していた。

そして、薫は

薫「始めまして……私は山本薫です……暫くお世話になりますので……どうぞよろしく願ひします。」

と言つて、ましろと真冬に自己紹介する。

真冬「おお！・・・私は宗谷真冬だ！よろしくな！」

真冬は、笑みを浮かべて薫に自己紹介する。

ましろ「あっ・・・」

ましろは、薫を見て、啞然とする。

真霜「ましろ！・・・この人は、ねえ！・・・お母さんの古い親戚の人なの！」

ましろには、一応、真雪の古い親戚の人と言う事になっている。

雅か、異世界から来ましたと言ったところで、まだ中学3年のましろには、そう簡単に信じて貰える筈がない。

それならば、少しでも混乱を少なくする為、嘘も方便だ。

ましろ「ん・・・宗谷・・・ましろ・・・です。」

ましろは、戸惑いながらも自己紹介をする。

薫「可愛いわね・・・まるでお人形見たい・・・これからよろしくね！」

薫は、ましろの頭を撫でる。

ましろ「こ、此方こそ・・・よろしくお願いします。」

撫でられたせいか、ましろは照れてしまう。

真霜「それと後一人！・・・ほら、貴方も入ってきたら？」

『んっ！』

真霜から、もう1人いると言われ、2人は真霜の方を向く。

真霜の後ろに隠れていた龍之介が現れた。

龍之介「はあく」

溜め息しながら、ましろと真冬を見る。

真霜「此方は、薫さんのお兄さんで山本龍之介さん！」

真霜は、2人に龍之介を紹介する。

龍之介「よろしく・・・」

真冬「おお、お前か・・・あたしは、真冬だ！」

真冬は、自己紹介して、龍之介の肩を叩く。

龍之介（こいつ男見たいな奴だな・・・本当にこいつの妹か？）

肩を叩く真冬を龍之介は、本当に真霜の妹かと思っっていると

ましろ「む、宗谷ましろです。」

龍之介の前でましろが自己紹介し、礼儀正しく一礼をする。

龍之介（こいつは礼儀正しい様だな・・・）

龍之介「よろしく・・・」

一礼するましろに龍之介は手を伸ばし、ましろと握手する。

その後、真霜は宗谷家の2室を龍之介と薫の為に用意しており、その部屋へと2人を

案内した。

宗谷家、薫の部屋

真霜「それじゃあ薫さんには、この部屋を使って！」

薫「何から何までありますがどうぞいます。」

薫の部屋は、奇麗でベッドや机、タンス等の家具は用意されていた。

それに比べて

宗谷家、龍之介の部屋

真霜「貴方は、こっちの部屋を使うと良いわ！」

龍之介「ん・・・」

龍之介の部屋は、薫の部屋と違って、少し薄暗くベッドや机、タンス等の家具は有るものの、誰も使っていないなかつた様で、辺りがホコリだらけだつた。

龍之介「何か、ホコリ被っているが・・・毎日掃除しているのか？」

龍之介は、ホコリを被っている机を見て、この部屋は掃除しているのか問う。
すると真霜が

真霜「今から掃除をすれば奇麗になるんじゃないの？」

と言つて、龍之介自身にこれから使う部屋の掃除をさせる。

龍之介「嫌な奴！」

真霜の嫌がらせに龍之介は、嫌味を言いながら掃除道具を借りて掃除する。

夕方には、保々部屋の掃除が終わり、龍之介は一段落する。

宗谷家、リビング

しばらくして、龍之介と薫の歓迎会が開かれた。

飯を食いながら、龍之介は、宗谷家の中で真雪の旦那、真霜達の父親の姿が見えない事に気づく。

龍之介（如何やら・・・この中で男は、俺だけの様だな・・・）

夕食後、龍之介は真雪の後片付けを手伝いをする。

龍之介「すいませんね・・・俺達兄弟に、こういう風に歓迎してくれる何て・・・」

真雪「良いのよ！・・・此処を自分の家だと思ってくれば・・・」

龍之介「ありがとうございます・・・そう言えば真雪さん！」

真雪「何です龍之介さん？」

龍之介「先からあいつらの父親を見かけないが・・・何所に居るんですか？」

龍之介は、真雪に夕食の時に姿が見えなかった父親の居場所を尋ねる。

真雪「ん・・・居ないわ！」

龍之介「え？」

真雪「亡くなったの！・・・あの子達が小さい頃に事故で・・・」

真雪の旦那は、真霜達が小さい時に海難事故の救助中に事故に巻き込まれ亡くなったの事だ。

龍之介「そうだったんですか・・・それは悪い事を聞いたな・・・」

真雪「良いのよ・・・悲しい事も合ったけど、何とか乗り越えてきたわ！」

旦那を亡くして、悲しい事もあったが、真雪は、女一人で真霜達を此処まで育て上げた。

流石は宗谷真雪だ。

龍之介「それは凄いですね！」

真雪「そう言えば、貴方達の両親は如何してるの？」

今度は、真雪が龍之介達の両親について聞く。

龍之介「いや、それは・・・すいません・・・今は言えません。」

真雪「そう・・・」

龍之介は、両親の事は、真雪には伏せた。

何故なら、あまり話題にする話では無かったからだ。

龍之介「真雪さん！」

真雪「ん？」

龍之介「何であいつは、俺を毛嫌いするんだ？」

龍之介は、真雪に真霜が何故自分を毛嫌いするのか問う。

真雪「あの子は、ちよつと訳あって、男嫌いなもの！」

理由は秘密だが、真霜が男嫌いだと言う事を龍之介に打ち明かす。

龍之介「男嫌いね……」

男嫌いと聞いて、龍之介も真霜を毛嫌いする。

その頃、薫は、真霜達姉妹と一緒にゲームをしていた。

ゲームは、トランプでババ抜きだった。

ババ抜きにおいて、真霜と薫は常に笑みを絶やさないとポーカーフェイスでしかも、手札を一切見ない。

薫「上がり!!」

反対に真冬とましろは顔に出るタイプで、これまで成績は真霜と薫がそれぞれ一位と二位を繰り返して、ましろは、その幸運度の低さから四位続きとなっていた。

ましろ「次こそ!……次こそ真冬姉さんに勝つ！」

薫「がんばって、ましろちゃん!!」

ましろは、意気込んで最後の勝負に挑む。

真冬の手札は残り一枚、反対にましろの手札は二枚・一枚はジョーカーだ。

ましろ「ううくん……と……」

真冬の手がジョーカーでないカードに触れようとした時
ましろ「!？」

ましろの顔がマズイといった感じの顔になり、反対にジョーカーのカードに触れ様とした時、それを引けといった感じのニヤリと笑みを浮かべる。

それを見た真冬はニヤリとし

真冬「こつちだ!!」

と、ジョーカーでないカードを引く。

ましろ「っ!？」

ジョーカーが手元に残り、ましろの敗北が決定し、彼女は俯く。

そして

ましろ「如何して!・・・如何して、負けるんだ!!」

と、まるで呪詛でも唱えるかの様に呟いた。

薫「だ、大丈夫よましろちゃん!・・・次は必ず勝てるって!」
そんなましろに薫は励ますが、それでもましろは困惑している。

そんな中、真冬が

真冬「そりゃあ・・・お前は、私同様、顔に出るからな・・・」

と、ましろの連敗理由を暴露した。

ましろ「ん……」

真冬からの暴露を聞き、ましろは

ましろ「ならば次は、この顔でやり続ける。」

と、無理に顔を作り、ばれない様にして再びババ抜きに挑んだ。

しかし、持ち前の幸運度の低さでまた負けた。

ましろが連敗に次ぐ連敗をし、テンションが下がりのましろに最早掛けて上げる言葉が無く、真霜も真冬も時間が経てば治るだろうと判断した。

龍之介「勝負は付いたか？」

龍之介が後付けから戻ってきた。

真霜「ええ、貴方もやって見たら？」

薫「面白いよ兄さん！」

真霜と薫は、龍之介をゲームに誘おうとするが

龍之介「いや、折角だが遠慮しとくよ！……女の子と一緒にやるのは、如何も苦手
で……」

龍之介は、女性らとゲームするのが恥ずかしくて遠慮した。

薫「そんな事言つて本当は、弱いからしたくないでしょう？」

しかし薫が龍之介がゲームを遠慮した訳を暴露した。

真冬「ハハハ・・・!!ほんとか薫!」

それを聞いた真冬は笑い。

薫「うん、だつて兄さん!こういうゲームは苦手何だよね?」

真霜「へく・・・そう何だ・・・」

それを聞いた真霜は、龍之介をあざ笑うかの様に見る。

龍之介「余計な事を言うなアホ!」

ゲンコツ!

薫「あつ痛!」

龍之介は、薫の頭をゲンコツで殴る。

龍之介「ふん!」

龍之介は、不機嫌そうな顔で部屋に戻っていた。

龍之介が部屋に戻り、薫と真霜、真冬の3人は、それぞれの事で会話をする。

その後

真霜「薫さん!・・・そろそろお風呂に入ったら?」

真霜は、薫にお風呂を薦めた。

薫「あつ、もうこんな時間!?・・・じゃお言葉に甘えて・・・」

薫は時計を見て、だいぶ遅くなった事が分かり、真霜の言葉に甘えて、お風呂に入る。

リビングを後にし、薫は着替えを持って脱衣所へと向かう。

宗谷家、脱衣所

薫「♪〜」

脱衣所で着ている服を脱ぎ、後は下着を脱ごうとした時

真冬「おーつす薫！一緒に入ろうぜ!!」

真冬が風呂場に乱入してきた。

薫「真冬さん!?!・・良いけど・・」

一緒に入ろうと言う真冬を薫は何なく受け入れる。

真冬「ほんじゃ入ろうぜ!!・・あそうだ!・・真冬さんって、堅苦しいから、あ

たしの事は、真冬で良いぜ!!」

真冬は、真冬さんって、余りにも堅苦しいので、真冬と呼ぶのを許可した。

薫「じゃ、真冬！お風呂一緒に入ろう。」

真冬「おう!」

改めて、お風呂に入る。

真冬は服を脱ぎ、薫は下着を脱ぐ。

しかし、真冬は、薫の体を見て

真冬「おお・・!!良い体してるな・・」

良い体をしているなど興味を抱く。

薫「えっ!?!・・・そうお・・・」

真冬の言葉に薫は照れる。

真冬の言う通り、薫は、女性としては恵まれており、ふくよかな巨乳と臀部（おしり）、美しい脚は雅に女性としての天賦のものである。

その為、中学の時は新体操をやっていたので、綺麗な体に着る衣装での演技は美しく、人から天女とも呼ばれた。

そんな薫の体に真冬は堆に我慢できず

薫「な、何?」

遂に薫のお尻をモミモミした。

薫「いやああ・・・!!」

宗谷家に絹を割く様な悲鳴が響き

ボン!!

真冬「うえ・・・!!」

その直ぐ後にカエルが潰れた様な鈍い声が響く。

宗谷家、リビング

真雪「如何したの!?!」

真霜「何があつたの!？」

ましろ「もしかして、ゴキブリでも出たのか？」

突然の薫の悲鳴を聞いて真雪、真霜、ましろの3人が急いで脱衣所に向かう。

宗谷家、脱衣所

脱衣所にやつて来ると、其処には、バスタオルで身体を隠し、顔を真つ赤にした薫の姿と、ノックアウトされた真冬の姿があつた。

真冬「な、ナイスパンチ・・・だ・・・ぜ・・・ぜ・・・」

そう一言言つて、真冬はガクツと氣を失つた。

この光景を見て、真霜達は、脱衣所で何があつたのかを大体想像できた。

大方、真冬が薫の尻を狙つたのだらうと推測したのだ。

真雪「御免なさい薫さん・・・うちの娘が・・・」

真冬のしでかしを真雪が代わりに薫に謝罪する。

しかし、薫は

薫「だ、大丈夫ですハハハ・・・」

口からエクトプラズマを出していた。

ましろは心の中で薫に

ましろ（ご愁傷様・・・薫さん・・・）

と、合掌した。

だが、最もヤバいのが来た。

龍之介「如何した!!」

悲鳴を聞きつけ、龍之介が脱衣所に駆け込んできた。

薫「ひっ!?!」

駆け込んできた龍之介を見て、薫の顔が真っ赤になる。

龍之介「悲鳴が聞こえたけど……何か……あつた……のか……えっ!?!」

龍之介は、薫の裸を見て、顔を真っ赤にし、驚愕する。

薫「に……い……さ……ん……!!!」

龍之介に自分の体を見られ、薫は我を怒りに変えた。

龍之介「ご、誤解だ!!……お……お前の裸を見るつもりは……」

怒り狂う薫に龍之介は必死に弁明するが

薫「兄さんのエッチ……!!」

ポーン!!

龍之介「うえ……!!」

薫に思い切り殴られる龍之介。

宗谷家、リビング

しばらくして、龍之介と真冬は、リビングで真雪の前で正座をして、反省していた。

薫「御免ね兄さん・・・痛かった？」

薫もお風呂から上がり、服に着替えてその場に来た。

龍之介「だ、大丈夫だ・・・」

龍之介のほおの辺りには、薫に受けたパンチの傷があざとして、残っている。

真冬「ナイスパンチだったぜ薫!!」

そう言う真冬のおおにも薫に受けたパンチの傷があざとして、残っているが、自分が

騒動の原因だという事を忘れて、薫を褒めていた。

龍之介「何開き直ってるんだお前は！・・・元後言えば、お前が悪いんだ・・・少し

は、反省しろこのバカたれが！」

龍之介は、ゲンコツで真冬の頭を叩く。

真冬「イテえ!?何済んだよ！」

龍之介「やるか!？」

龍之介と真冬が喧嘩を起こそうとしたが

真雪「良い加減にしなさい2人共!!」

真雪が怖い顔で2人を睨む。

龍之介「すいません！」

真冬「御免なさい母さん！」

2人は、真雪に謝罪する。

真雪「よろしい！」

2人が反省してる事を確認し、笑顔を取り戻す真雪。

薫「真雪さん・・・凄い！」

真雪の偉大さを見て、薫は感心する。

龍之介（ああ・・・同居初めから問題を起こして・・・しかも薫に殴られる何て・・・付いてない・・・）

同居初日から真冬が薫の尻を狙う騒動に巻き込まれた龍之介は、つくづく付いていないんだった。

第7章 初陣

1984年

東京、新宿副都心

薫「お兄ちゃん怖いよ!!」

龍之介「大丈夫だ・・・俺が付いている。」

警戒態勢の街の中を避難する都民に交じって親に連れられる幼い龍之介と薫。

国防軍の防衛ラインを易々と突破したゴジラは東京に上陸。

それに対し国防軍は、ハイパーレーザービーム車で新宿副都心の中枢に誘き出し、

スーパードX（首都防衛戦闘機）によるカドミウム弾攻撃が開始された。

龍之介の父「倒したぞ!!」

3発ものカドミウム弾攻撃を浴び、ゴジラは昏倒する。

龍之介「やったねとうちゃん!」

ゴジラを倒した事により、都民達が喜びの顔を表す。

しかし

ブー!

突然、都心に警報が鳴る。

アナウンサー『緊急連絡を申し上げます!』

龍之介の父「何だ!?!」

アナウンサー『……ゴジラ非常緊急対策本部の発表によりまして……ソ連の衛星から核弾頭が誤って発射され……新宿上空で爆発する恐れがあります……』

今度は、ソ連の攻撃核衛星から核ミサイルが誤射され、ゴジラ目掛けて飛んでくるといふ緊急連絡だった。

都民『きゃ……!!』

都民達はパニックを起こす。

アナウンサー『付近の住民のかつたは……係員の指示に従って至急非難してください!!……時間があります、至急非難してください!!……避難場所は、地下鉄丸の内線、新宿駅ホームまたは、線路に……繰り返します!!……』

地下鉄や地下街に避難するよう指示が下る。

龍之介の母「貴方早く!」

龍之介の父「ああ、龍之介、薫!……逸れるな!」

龍之介「ん!」

薫「お母さん怖いよ!!」

龍之介の母「大丈夫よ薫！」

龍之介と薫は、両親と一緒に急いで地下街に逃げるが、殆ど都民が急いで地下街に逃げている為、入口が人で埋め尽くされていた。

龍之介の母「貴方！」

龍之介の父「最早神に祈るしかないのか！」

逃げ道を塞がれ最早絶体絶命の状況となった。

その時

龍之介の父「何だ!?!」

上空でフラツシューが焚く。

『あっ!?!』

誤射された核ミサイルが成層圏でアメリカの迎撃ミサイルに撃墜され核爆発を起こした。

龍之介の父「た・助かったのか?」

これにより、新宿での核爆発は回避された。

だが

龍之介の母「貴方!?!・・・あれは・・・何?」

龍之介の父「ああ・・・!?!」

核爆発の影響か、突然、新宿の空は赤く染まる。

龍之介の父「何だ!？」

薫「お母さん!？」

更に電磁パルスが起き、辺りは停電し、スーパーXなどの武器が使用不能になった。それに乗じて、今度は落雷が起き、ゴジラを蘇生してしまう。

龍之介の父「不味い!?逃げるぞ!!」

『うん!』

ゴジラが復活した以上、最早地下鉄に逃げる事はできないと考え市街を逃げる。

しかし、電磁パルスから復旧したスーパーXがゴジラに対して通常兵器（バルカン砲やロケット弾、ハイパーレーザー砲など）で応戦する。

その結果、辺りは火の海と廃墟と化した。

龍之介の母「もう、逃げる場所が無いわ!」

龍之介の父「諦めるな!兎に角逃げるんだ!!」

廃墟と化した街を龍之介と薫は、両親と一緒に逃げていた。

しかし

優勢を誇っていたスーパーXも堆に撃墜され、更に後ろからビルがゴジラによって倒され

龍之介の父「危ない!!」

龍之介の母「きや・・・!!」

龍之介と薫を庇い、両親は一瞬にビルの下敷きになった。

薫「お母さん!!お父さん!!」

ビルの下敷きから幸い龍之介と薫は助かったが、両親は助からなかった。

龍之介「薫、逃げるぞ!!」

薫「でも、お母さんとお父さんが!」

龍之介「無駄だ!!・・・もう・・・もう死んでるんだ!!」

龍之介は、泣き尽す薫を連れて逃げる。

2人の後ろから、ゴジラが吠えながら迫ってきた。

薫「お母さん!!・・・お父さん!!・・・いやあ・・・!!」

宗谷家、薫の部屋

薫「はっ!?!」

余りの悪夢に魘されて目が覚める薫。

薫「はあ・・・はあ・・・夢・・・か・・・」

自分の胸に手を当てる。

薫「何でだろう?・・・今になって、あの出来事を思い出すなんて・・・」

薫は、何故今頃になって、15年前の悲劇を思い出したのか、自分でも分からなく、自分の胸に手を当てる。

薫「お母さん・・・お父さん・・・会いたいよ・・・」

死んだ両親に会いたいと願う薫だった。

龍之介と薫が宗谷家にお世話になってから2日が経ち、龍之介達も、ようやくこの世界に馴染んできた。

3月25日

国土交通省、廊下

この日、龍之介は、美由紀と真霜と共に国土交通大臣の深町に呼ばれた。

龍之介「ようやく親玉登場か！」

美由紀「そう言えば、何故私まで呼ばれたのか？・・・普通なら徳吉参謀が呼ばれるのに・・・」

確かに普通なら参謀の功なのに、何故自分が呼ばれた事に疑問を抱く美由紀。

真霜「それは、私にも分らないわ！・・・唯、権藤中佐も連れてくる様にと言われたから・・・」

真霜も頭から？を出していた。

龍之介「まあ良いさ！・・・向こうが会いたいわって、言うんだ・・・会わせてやろう

じゃないか!・・・ついでに面も拝んでやる!」

それに対して、龍之介は深町の面を拝んでやると言い張る。

国土交通省、大臣室

真霜「失礼します!」

深町「入れ!」

3人は、大臣室に入る。

真霜「宗谷一等監督官参りました!!」

深町「おお、待ってたぞ宗谷監督官!」

真霜「山本准将及び権藤中佐をお連れしました!!」

深町「御苦労!・・・君が山本准将か?」

龍之介「そうだが・・・あんたが深町国交相か?」

深町「以下にも、私が国土交通大臣の深町吾郎!・・・そして君が・・・」

美由紀「私が権藤美由紀中佐ですが!」

深町「おお君が権藤中佐か!・・・ところで君に兄弟は、いるのかね?」

突然、深町は、美由紀の兄の事を尋ねる。

美由紀「ん・・・5年前は、いましたか・・・今は・・・何故その事を尋ねるんですか?」

何故、深町が、亡くなった美由紀の兄、権藤吾郎の事を聞くのか問うと

深町「いや・・・好みにちよつと聞きたかつただけだ。」

如何やら、自分の好みにちよつと聞きたかつただけの様だ。

美由紀「はあ!?!し、失礼な!」

深町の言葉に美由紀は激怒する。

龍之介（何が好みだ・・・年を考えろ!）

そんな深町に龍之介は呆れる。

真霜「それより深町国交相!・・・今日呼ばれた御用件は?」

それをさて置き、真霜は、早速、今日呼ばれた要件を問う。

深町「あつ、そうそう!」

深町は、仕切り直して

深町「山本准将!」

龍之介に呼ばれた要件を話す。

龍之介「ん!」

深町「准将には、一等監督官として・・・君や君の部隊を今から宗谷一等監督官が指揮するブルーマーメイドに組して貰う。」

真霜「えっ!?!」

深町「それは、君の個人的の問題で彼らには関係ない事だ！」

しかし深町は、個人的の問題と言って、真霜を説得する。

真霜「わ、私は別に……」

深町「それに彼らの部隊は男性だけじゃなく、女性も入っているではないか！……それなら、女性の花形でもあるブルーマーメイドに入れても問題は、起きないと思うが……」

深町の言う通り、龍之介のGフォース西部方面艦隊は、男女で構成されているので、女性の花形でもあるブルーマーメイドに入れても問題は起きないと確信していた。

真霜「ん……分かりました。」

深町の言葉を聞いて、真霜は、不服ながら龍之介達を組する事を認める。

龍之介「待って！」

だが、龍之介がそれに待ったを掛けた。

龍之介「何故、俺達の為に其処までしてくれるんだ……あんたは、一体何者なんだ!!」

龍之介は、何故そこまでしてくれるのか、しかも一体何者だと問うが

深町「それは、君が知る必要が無い事だよ山本准将！」

深町は、そう言って、龍之介に正体を明かさなかつた。

龍之介「……」

深町「話は以上だ！」

『失礼しました!!』

要件は済み、3人は大臣室を出る。

国土交通省、廊下

真霜「言つとくけど!……私の指揮下に入る以上、私に従う事!……良いわね!!」
真霜は、龍之介にそう言つて、顔を丸くして行つてしまふ。

龍之介「全く人を何だと思つてるんだよあいつは!……なあ中佐!」

龍之介は、真霜の態度に呆れ果て、美由紀に声を掛けるが

美由紀「ん……」

だが、美由紀は考え事をしていた。

龍之介「如何した中佐?」

美由紀「い、いえ……あの深町と言う人が、少し気になりました……」

美由紀は、深町に疑問を抱いていた。

龍之介「それを言うなら、俺も奴の事が気になる……まるで俺達の事を知っている様だった。」

美由紀と同様に龍之介も深町に疑問を抱いていた。

美由紀「何者でしょうか？」

龍之介「それは分からないが、俺達を助けている以上、信用して良いだろう。」

美由紀「……」

深町が何者なのかは分からないが、自分達を助けている以上、龍之介達は深町を信用する事にした。

そんな時

真霜「何してるの!? 早く行くわよ!」

先に行った真霜が早く行くわよと龍之介と美由紀を呼ぶ。

龍之介「今行く!! ……全く五月蠅い奴だな! ……先が思いやられるよ!」

龍之介は呆れながら、真霜の元に向かう。

美由紀「フフフ」

そんな龍之介に美由紀は唯笑う。

こうして、龍之介達、Gフォース西部方面艦隊は、真霜が指揮するブルーマーメイドに組する事になった。

そして、この事は龍之介から幹部と隊員達に伝えられた。

隊員達は、最初は戸惑っていたが、結局、組する事に同意した。

まあ彼らにとっては、相手がゴジラから人間に変わっただけで、日本を守る義務は変

わらない。

だからこそ同意したのであろう。

階級も

指揮官

山本龍之介一等保安監督官

参謀長

徳吉 功二等保安監督官

艦長組

権藤美由紀二等保安監督官

山本 薫二等保安監督官

小沢次郎二等保安監督官

他

副長組

八神はやて三等保安監督官

林 三郎三等保安監督官

岸田文夫三等保安監督官

他

航空隊組

スターズ隊

高町なのは一等保安監督正

ライトニング隊

フェイト・テスタロッサー一等保安監督正

他

になったが、隊員達には馴染めが薄い為、今までの階級で読んでいる。

3月28日

横須賀造船所、6号ドック

深町との対面から3日後、龍之介と薫、真霜、真冬、平賀、福内の6人の姿は、白鳳が入渠する横須賀造船所の6号ドックにあった。

この日、龍之介は、真霜達に技術提供をする為、対ゴジラ兵器であり、この世界のオーバーテクノロジーの塊である白鳳を訪れていた。

龍之介「おい、次郎！」

白鳳のドック付近に白鳳の艦長の次郎が立っていて、龍之介は声を掛ける。

次郎「あつ准将!？」

龍之介に気づき、次郎は声を交わす。

龍之介「如何だ調子は？」

龍之介は、白鳳の調子を尋ねると

次郎「ごくごく普通ですよ……」

如何やら正常の様だ。

龍之介「そうか……」

薫「次郎君！」

次郎「よう薫！……それに真霜さんに平賀さん、福内さんまで……」

次郎は、薫を喜ぶが

次郎「ん……」

真冬「ん!？」

次郎は、何故か真冬を睨み。

次郎「お前か……薫が言っていた宗谷真冬ってのは？」

真冬にガン飛ばす。

真冬「何だよ！……あたしに何か用か？」

それに対して、真冬も次郎に何か用かとガン付ける。

次郎「ああ大有りだよ!!」

真冬「何!？」

次郎「お前……風呂場で、薫の尻を触りやがったろ！」

薫「えっ!？」

次郎は、真冬が薫の尻をモミモミした事を問い詰めた。

如何やら次郎は、この前のお風呂の件の事を何所かで耳に下らしい。

『ええ……!?!』

それを側で聞いていた平賀と福内は驚愕する。

次郎「准将から聞いたぞ!!……お前よくも俺の薫に……」

如何やら言ったのは龍之介の様だ。

薫「兄さん!次郎君に何て事言うのよ!!」

次郎の言葉に薫は、驚愕しながら言った龍之介を叱るが

龍之介「俺は、真実を言ったまでだが……」

と言つて、龍之介は全く反省せず

薫「もうお……兄さんには、デリカシーが無いの?」

反省しない龍之介に薫がデリカシーが無いのかと問う。

龍之介「デリカシー?……食いもんか?」

と言つて、食い物と勘違いする。

薫「……はあ……」

真霜「呆れた!？」

それを聞いた薫と真霜は呆れる。

一方、次郎と真冬の方は

真冬「何だよ!・・・先から俺の俺のって!・・・お前は、薫の何なんだよ!？」

先から薫の事ばかり言うので、薫の何なのか問う。

次郎「聞いて驚くなよ!薫は、俺の女だ!!」

次郎は、真冬に薫が自分の女だと告げる。

真冬「えっ!？」

それを聞いた途端、真冬は驚き

『ええ・・・!!』

側に居た真霜達も驚愕する。

次郎「俺は、学生時代・・・ずっと薫と一緒にだったが、そんな事は一度もした事ねんだぞ!!」

薫（次郎君・・・雅かそんな事を考えてたの・・・）

次郎が言う事に薫は顔を赤くした。

次郎「俺より先に良くも触りやがって・・・」

真冬「良いじゃねかよ!女同士のちよつとした触れ合い何だから!」

次郎「何が触れ合いだ!! そう言うのは、セクハラって言うんだよ!!」

ギヤオ

ギヤオ、ギヤオ

2人の猛獣が争うとした時

『ピィ・・・!!』

『!?!』

平賀「ケンカはいけません!」

平賀がフエを吹き2人の喧嘩を止める。

龍之介「良い加減にしろ2人共! 宗谷監督官の目の前で見ともないぞ!!」

そして、龍之介も開き直って、2人の喧嘩を止める。

真霜（はあ・・・最初に暴露した貴方がそれを言うかしら・・・）

開き直った龍之介に真霜は呆れる。

次郎「ふん、命拾いしたな!」

真冬「お前もな!」

2人は、睨みながらも喧嘩を止める。

龍之介「ほんじゃ、全員いるところで白鳳の説明を・・・次郎!」

次郎「はい!・・・じゃ耳の穴をかぼじて、よく聞きながら付いてきな!」

改めて龍之介は、真霜達を白鳳の艦内へと案内する。

白鳳、艦内

『はっ……!?!』

白鳳の艦内を見て、真霜達は驚愕する。

白鳳の艦内は、普通の艦船とは、あまり違わないが最先端の技術で作られている事が分かる。

次郎「凄いだろ!……この白鳳は、対ゴジラ兵器として我Gフォースが開発した万能護衛艦だ!!」

真冬「万能護衛艦!?何だそりゃ?」

万能護衛艦の言葉に真冬は頭を?する。

次郎「お前、頭悪いな!」

真冬「何だと!!」

真霜「つまり水陸両用艦ね!」

龍之介「その通りだ……この艦は、水上だけでなく水中も潜れる……それだけじゃない空を飛ぶ事も可能だ。」

『空を飛ぶ!?!……この艦が?』

白鳳が空を飛ぶ事に真霜達があり得ない顔をする。

龍之介「まあSF見たいで、普通なら艦が空を飛ぶ何て、あり得ない事だからな、驚くのも不思議じゃない！」

小型の乗り物が普通に空を飛ぶのは当たり前だが、白鳳見たいな大型の艦が空を飛ぶのは不可能だと平賀や福内は、そう思っていたんだろう。

しかし、後から重大な事に龍之介達は驚愕してしまふ。

次郎「こいつの装甲は・・・」

続いて装甲の説明に入ろうとした時

慶介「超耐熱合金NTIで普通の耐熱版の数十倍の強さがある。」

次郎の後ろから慶介が現れ代わりに説明する。

真霜「貴方は？」

龍之介「ああ、紹介しよう！・・・白鳳の開発主任の矢野慶介・・・彼もGフォースだ!!」

慶介「矢野慶介です！どうぞよろしく！」

福内「民間人ですか？」

福内は、慶介を見て、軍人ではないのを見抜く。

薫「Gフォースは、ブルーマーメイドと同じ国際機関だから色んな国や軍人、民間人も入れるんです。」

薫の言う通り、Gフォースは、ゴジラの脅威に対抗する為、国連が創設した部隊だから軍人だけではなく、技術者として民間人も入隊する事が可能である。

平賀「へ・・・向こうの世界も私達と同じ何だ・・・」

Gフォースとブルーマーメイドが同じだという事に納得する。

白鳳、機関室

龍之介達と真霜達は、白鳳の心臓部でもある機関室を訪れる。

慶介「此処が機関室です。」

『うわぁ・・・!?!』

今まで見た事がない機関に真霜達は驚きを隠せなかった。

白鳳の機関室は、内部が密閉室になっており、更に自動化されている為、ある程度無人であった。

慶介「凄いでしょ!・・・この白鳳の機関は、レーザー核融合炉です。」

真冬「レーザー核融合!?何じゃそりゃ?」

レーザー核融合と言って、真霜達は分からなかったのだ

慶介「簡単に説明しましょう。」

慶介が簡単に説明する。

慶介「貴方達が良く目にしている太陽は知っていますよね?」

福内「太陽ですか？」

慶介「その太陽の中で4つの水素原子が融合して、1つのヘリウム4原子になる事を核融合と言います……このレーザー核融合もそれと同じです。」

福内「つまり……太陽を利用した機関ですね？」

慶介「ちよつと違うが、その通りです。」

福内「成程！」

慶介の簡単な説明に納得する。

慶介「因みに燃料は、重水素です。」

真霜「海水に含まれてる元素ですね。」

真冬「海水で動くのかよこの艦!?!? ……良いな……こんな機関、うちの艦にも欲しいぞ!!」

海水で動くと聞いた真冬が自分の艦にも欲しいと言い張る。

慶介「お望みなら製造しましょうか？」

それを聞いた慶介は、真冬の要望に答える。

真冬「良いのか!?!」

慶介が作つてくれると聞いて、真冬は喜ぶが

慶介「但し、嚴重に密閉しとかなないと放射能で髪の毛が抜けますよ!」

慶介が取扱いの決まりを言う。

真冬「か、髪が抜けるのか？」

髪が抜けると聞いて、真冬の顔が真っ青になる。

慶介「ええ放射能で・・・」

真冬「えっ、遠慮しとくわ！」

流石に髪が抜けると聞いたら嫌になり、真冬は遠慮した。

龍之介「次に行こう。」

龍之介達と真霜達は、機関室を後にし白鳳の中枢である艦橋に向かう。

白鳳、艦橋

次郎「此処が艦橋だ。」

白鳳の艦橋の内部を見て真霜達は驚く。

白鳳の艦橋は、普通の艦の艦橋とは違い、前方に操縦席が2つと中央に艦長席があり、更に左右に補佐席がある。

前方に窓は無く、大きなモニター画面が3つ設置されていた。

恐らく外の映像は、このモニターに映し出される仕組みになっているのだろう。

龍之介「この白鳳には、対ゴジラ兵器としての武装が多く装備してある。」

龍之介は、補佐席のパネルを操作する。

するとモニターに白鳳の武装が映し出された。

龍之介「見たまえ! : : : 艦首下にはハイパーレーザ砲2門、収納式ミサイルランチャーには、フルメタルミサイル20発が搭載されている・ : : 更には、補助兵器として50mmバルカン砲2門、魚雷発射管4門が搭載されている。」

パネルを操作しながら、真霜達に説明する。

パネルを見て、真霜は思った。

国土保全委員会の幹部達にとって、この白鳳が手に取る程欲しいだろうという事がよく分かる。

龍之介「そして、これが本艦の究極武装! : : : 4式ハイパーメーサー砲だ!!」

艦首の扉が開き、ハイパーメーサー砲が姿を現した。

『ハイパーメーサー砲?』

龍之介「言うなれば、強力な光学兵器だ!!」

真霜「つまりレーザとかビーム砲より強力な兵器ね!」

龍之介「その通りだ!!」

福内「本当にSF見たいだわ!」

平賀「凄いですね!」

ハイパーメーサー砲の話聞いて、福内と平賀が興味を持つが

龍之介「しかし、使い方を誤れば……これらの技術は世界を滅ぼす事もあるんだ。」
それに龍之介が2人に忠告する。

『あつ……!?!』

龍之介の言葉を聞いた途端、2人は何も言えなくなる。

真霜「確かに貴方が言う様に、使い方を誤れば危ないわね……私達も気をつけといけないわね!」

龍之介「意外とあんたも正しい事を言うんだな……」

真霜「如何いう意味よ、それ……」

龍之介「別に……」

薫（今度は、こつちが喧嘩を始めつた。）

次郎と真冬に続いて、今度は、龍之介と真霜が対立する。

一応の白鳳の技術説明は終わり、龍之介達と真霜達は、横須賀造船所を後にし、横須賀基地に戻る。

横須賀基地

横須賀基地に戻った龍之介達と真霜達は、今後の事を協議する為、停泊している空母大鳳に向かう。

平賀「!?!」

タラップを上る途中、平賀が艦載機用エレベータで格納庫に下ろされる春乱に気づく。

平賀「あ、あの……」

薫「如何したんですか平賀さん？」

平賀「あれは何ですか？」

春乱に指を指す平賀。

龍之介「あれか？……あれは春乱だな！……整備に回されるところだろう。」

『シユンラン？』

龍之介「あれの名前だよ！……正式名称戦闘攻撃機FX3G春乱！」

『戦闘攻撃機？』

平賀は首を傾げ、福内、真霜、真冬も訳が分からない表情をしている。

平賀「何に使うんですか？」

平賀が何に使うのか問う。

龍之介「何って……あれも白鳳同様に空を飛んで戦う兵器だが！」

『あれも空を飛ぶ?!』

真霜達は春乱が先の白鳳同様に空を飛ぶ乗り物だと知り驚愕する。

平賀「あれも本当に空を飛ぶんですか？」

平賀が本当に空を飛ぶのか薫に詰め寄る。

薫「え、ええ……」

本当と答える薫。

龍之介「先から可笑しいぞ!!……何で驚くんだ!?……この世界にも航空機は、有るんだろ?」

航空機の事で真霜達が何を驚いているのか、普通ならこの世界にも航空機ぐらいは有るだろうと思つたが

真霜「山本監督官!」

龍之介「何だ?」

真霜「私を知る限りでは、この世界には航空機のように空を飛ぶ乗り物はなく、有人で空を飛ぶ乗り物と言えば、飛行船か気球ぐらいしかないわ!」

真霜は、この世界に航空機が無い事を龍之介に話す。

龍之介「な、何!?……如何いう事だ!?!」

真霜から航空機が無い事を聞いて、龍之介は驚愕し、何故航空機が無いか問う。

真霜「実はね!……100年前に空を飛ぼおと、色んな科学者が航空理論の発明に力を注いだけれど……結局失敗に終わって……結果、機械が空を飛ぶ事は科学的にできないと義務付けられたの!」

真霜が言うには、100年前に空を飛ばおとライト兄弟などが挑んだが、いずれも失敗に終わり、結果、機械が空を飛ぶ事は科学的できないと義務付けられている。

恐らくこの世界で戦争がなかったのも人間が空を飛んで戦う事がなかったからだろう。

龍之介「つまり航空機も衛星も無いという事か・・・」

真霜の話聞いて、この世界に航空機が無い事に納得する。

薫「だから、余り航空機らしいものが、其処ら辺を飛んでいなかったんだ。」

薫も辺りの空を見ても旅客機やヘリらしいものが飛んでいなかった事に気づく。

福内「山本准将！・・・あれも空を飛ぶ乗り物なら・・・私達を乗せて貰えませんか？」

福内が龍之介に春乱に乗せてくれと言うが

平賀「あつ、ずるいわよのりりん!? 私も乗りたい!!」

真冬「2人だけずるいぞ!! あたしも乗せろ!!」

平賀や真冬も平賀同様、龍之介に春乱に乗せてくれと言う。

龍之介「駄目だ!!」

それに対して、龍之介は駄目だと告げる。

福内「えっ?」

平賀「如何してですか？」

真冬「何でだ!？」

何故駄目なのか、3人は、理由を問う。

龍之介「航空機が無いこの世界で、貴重な艦載機を失いたくない!・・・第一、お前から見たいな素人が乗れる白物じゃない!!」

龍之介の言う通り、航空機が無いこの世界では補充が出来ないので、航空機を余り失いたくない。

それに龍之介達が使用している航空機は、素人が簡単に乗れる物ではない。

『そんな・・・』

航空機に乗れない事に3人は、ガツカリする。

次郎「そんなに航空機に乗りたいたなら准将!ヘリに乗せたら如何でしょうか?」
ガツカリする3人に次郎がヘリコプターに乗せたらと龍之介に進言する。

『ヘリ?』

薫「ヘリなら、素人が乗っても大丈夫だと思ふよ。」

次郎の進言に薫も賛成する。

次郎「如何です准将?・・・必要なら、なのはとフェイトにも一緒に乗ってもらたら如何でしょうか?」

次郎は、念の為になのはとフェイトも一緒に乗せては如何かと説得する。

龍之介「ん・・・あの2人が操縦するなら・・・許可してやつても良いぞ！」

それに対して、龍之介は、なのはとフェイトが操縦するなら、真冬達の乗機を許可すると告げる。

次郎「じゃ決まりだな！・・・お前ら喜べ！！・・・へりに乗れるぞ！！」

次郎は、へりに乗れる事を真冬達に告げる。

福内「へりも航空機の種類ですか？」

次郎「そりや、当たり前だろ！！」

『やった!!』

へりが航空機の種類だと聞いて、真冬達は、子供の様に喜ぶ。

龍之介「但し！・・・その時は、俺も同情する。」

龍之介は念の為、自らも乗機する事にした。

真冬「げ、お前も一緒かよ!？」

龍之介も一緒に乗る事に真冬は嫌な顔をする。

龍之介「何か不満か？」

それに対して、龍之介は、真冬を睨みつける。

真冬「べ、別に・・・」

龍之介に睨まれ真冬は何も言えなくなる。

そんな時

真霜「山本監督官！」

龍之介「何だ宗谷監督官？」

真霜「私も同乗させて欲しいんだけど……」

真霜が自分も乗せてほしいと頼みこんできた。

真霜も何だかんだ言つて、本当は、空への未知なる体験を試みたのだらうか

龍之介「乗るんだつたら、お好きにどうぞ！」

それに対して、龍之介は、ふざけた言葉で真霜の乗機を許可する。

真霜（ん……何よこの馬鹿！）

そんな龍之介の態度に真霜は腹が立った。

空母大鳳、会議室

その後、会議室で、龍之介達が持つ兵器について、協議された。

先ず主砲や機銃、魚雷などの弾薬の補給については、ブルーマーメイドでの補給が可能だが、ミサイルやD-03など、更に航空機に関しては、海上安全整備局で協議してから生産される事に決まった。

それと合同演習については、ちかじか行う事も決まった。

会議終了後、龍之介が

龍之介「さて、そろそろ行くか！」

と言つて、席を立ち何所かへ行こうとする。

平賀「何所に行くんですか？」

龍之介「何所つて!?へりに乗るんじゃないのか、お前ら？」

平賀「!?」

龍之介「薫! . . . 俺と次郎は、準備してくるから、先に甲板に行つていてくれ！」

薫「分かった。」

龍之介と次郎は更衣室に向かい、薫や真霜達は飛行甲板へと向かう。

空母大鳳、格納庫

飛行甲板に向かう途中、薫と真霜達は格納庫を通る。

『うわあ．．．!?』

格納庫を見て、真霜達は驚愕する。

格納庫には、翼を折り畳んだ春乱やE2Gなどがずらりと置かれ、その機体を整備員達が整備をしていた。

薫と真霜達は、整備中の機体をつつ切りながら艦載機用エレベーターへと向かう。

格納庫をつつ切っていると

『ええ．．．!?』

艦船が攻撃できるのと2個艦隊ぐらいは相手に出来ると聞いて、真冬達は驚愕するが

真霜「ん．．．」

それを聞いた真霜は、ある事を考える。

真霜（私達は、白鳳だけが脅威かと思っていたけど．．．この艦が積んでいる航空機も最大の脅威ね！．．．もしこれらを一気に相手にしたら、私達の主力部隊は一溜りも無かったかも．．．敵に回さなくて良かったわ．．．）

真霜は、今まで最大の脅威が白鳳だけかと思つたが、艦載機を見て、これらも脅威だと認識した。

もしこれらを一気に相手にしたらブルーマーメイドの主力部隊は全滅していただろうと想像し、敵に回さなくて良かったと真霜はホツとする。

整備中の機体をつつ切つた薫と真霜達は、艦載機用エレベーターで飛行甲板に上がる。

空母大鳳、飛行甲板

真霜「広いわね．．．」

飛行甲板に上がった薫と真霜達は、空母大鳳の飛行甲板の広さを見て、ブルーマーメイドが採用されている飛行船母艦より広い事に驚く。

真冬「おい見ろよ!?!・・さつき見た機体が此処にもたくさん置いてあるぜ!!」

真冬が言う様に飛行甲板にも艦載機がずらりと並んでいた。

そんな時

平賀「あれは、何ですか?」

平賀が格納庫で見た事がない機体を指す。

その機体は、久しぶりに飛行甲板に上げた対戦車ヘリAH-1G コブラであった。

薫「あれがヘリです!」

薫は、ヘリだと答える

『あれが!?!』

ヘリだと聞いて、真冬達は、驚く。

平賀「あれは何をする物なんですか?」

平賀は、ヘリが何をするのか問う。

薫「あれは、ロケット弾などを搭載して戦車などを攻撃する事ができる対戦車ヘリで

す!!」

真冬「すげえ〜!」

戦車などを攻撃する事ができると聞いて、真冬は感心する。

福内「じゃ、私達が乗る機体ですか?」

福内は、AH—1Gがたっぷり自分達が乗る機体だと思っただが

薫「残念ながら違います！・・・私達が乗るのは、あれです！」

薫は、違うと告げ、反対方向をに指を指す。

薫が指を指すところには、兵員輸送攻撃ヘリUH—1Gがあり、側では、いつでも出せる様にはやてとなのは、フェイトが準備をしていた。

薫「はやてちゃん!!なのはちゃん!!フェイトちゃん!!」

薫がはやてとなのは、フェイトに声を掛ける。

『あつ薫先輩!』

薫に気づき3人は、薫の前に集まる。

薫「準備は、出来ている？」

なのは「もう準備バッチリです！」

フェイト「いつでも出られます。」

はやて「上々や！」

3人は、いつでも出せると薫に告げる。

『ああ・・・』

真霜達が3人を啞然と見る。

薫「あつ、真霜さん達には紹介していなかったですね！・・・此方は、うちの航空隊

の高町なのは大尉とフェイト・テストロツサ一大尉です。」

薫は、真霜達になのはとフェイトを紹介する。

なのは「第343空母航空団スターズ隊隊長の高町なのはです!」

フェイト「同じく第343空母航空団ライトニング隊隊長のフェイト・テストロツサ一です!」

なのはとフェイトは自己紹介する。

真霜「私は、監督官の宗谷真霜です。」

平賀「平賀です。」

福内「福内です。」

真冬「あたしは、宗谷真冬だ!!」

真霜達もなのはとフェイトに自己紹介する。

薫「それとこつちが副長の八神はやて中佐!」

そして、最後に薫は、はやてを紹介する。

はやて「おおきに・・・私は、副長の八神はやてと言います!」

はやては、真霜達に自己紹介した後、4人の胸をジツと見る。

平賀「な、何ですか?」

はやて「あの・・・後で触って良いですか?」

はやては、後で4人の胸を揉もと思った。

『えっ!?!』

はやての胸もみに真霜達は困惑する。

薫「はやてちゃん!セクハラは駄目だよ!!」

はやての胸もみを薫は止め様とする。

はやて「セクハラや無いもん!ちよつとした触れ合いや!」

福内(こんなところにも真冬さん見たいな人がいた何て!?)

福内は、はやてが真冬と同じ性格だと悟る。

龍之介「用意はできたか、高町隊長?」

後ろから飛行服を着た龍之介と次郎がやって来た。

なのは「はい准将!準備は万端です!!」

なのはは、龍之介に準備万端だと告げる。

龍之介「よし!じゃ行くこうか!」

龍之介は、UH-1Gに乗り込む。

真冬「やつと乗れるぞ!!」

真冬は、やつと乗れると喜ぶが

龍之介「残念ながら真冬!お前は居残りだ!!」

龍之介は、真冬に残る様告げる。

真冬「なっ、何故だ!？」

何故残らなければいけないのか理由を問う。

龍之介「お前が乗ると一番問題を起こすからだ!!」

龍之介は、乗っている時に真冬がなのはやフェイトのお尻を触るかもしれない。

そうなったら大事故に繋がるかもしれないと思い、あえて真冬には残って貰う事にしたのだ。

平賀（確かに!）

福内（それは、あり得るわね!）

龍之介の言い分に平賀と福内は納得する。

真冬「嫌だ!!・・・あたしも乗り〜たい!!」

だがそれでも、駄々をこねる真冬。

龍之介「はあ・・・仕方ない・・・」

それに対して、龍之介は、薫に顔で合図し

薫「真冬!・・・仕方がないから、私と一緒に留守番しましょう!・・・ねえ、はや

てちゃん!」

はやて「ん〜!」

薫とはやては、真冬の両腕をがっちりホールドする。

真冬「お、おい薫!?!それにお前!?!・・・は、放せ!!」

『やくだよ!!』

薫とはやてにがっちりと腕をホールドされ連行される真冬。

真冬「ちきしよう!!・・・龍之介!・・・覚えてるよ・・・!!」

薫とはやてに連行され真冬は艦橋へと消える。

真霜「ああ・・・」

平賀「あの真冬姐さんが呆気なく連れて行かれるなんて!?!」

福内「流石だわ!?!」

真冬が連行されるのを見て、真霜達は唾然となる。

真冬が連行された後、真霜達は、UH-1Gに乗り込む。

UH-1G、機内

なのは「ローターオン!」

フェイト「スイッチオン!」

なのは「クリア!!」

上部のプロペラが勢いよく回転し始めた。

フェイト「離陸準備完了!」

操縦席のなのはと助手席のフェイトが離陸態勢を整える。

龍之介「しっかり捕まってる!! 離陸するぞ!!」

龍之介が真霜達にしっかり捕まる様に告げる。

『はっ』

真霜「ん!」

真霜達は、未知なる体験にウキウキしながら、離陸に備え捕まる。

次郎がUH-1Gの搭乗扉を閉める。

龍之介「離陸!」

龍之介の号令のもと、UH-1Gは、空母大鳳の飛行甲板を離れ、空へと飛び上がった。

福内「飛んだわ!」

平賀「本当に飛べたんだ!」

真霜「あっ!」

UH-1Gが空を飛んだ事に真霜達は驚いていた。

3人は、UH-1Gが飛び上がるまで、UH-1Gが空を飛べるのか疑問視していたからだ。

フェイト「発進完了!」

なのは「准将！コースは如何いたしましよか？」

なのはがコースを如何するか問う。

龍之介「今日はデモンストレーションだから・・・お前に任せるよ！」

龍之介は、なのはに任せた。

なのは「分かりました。」

なのはは、外海辺りをぐるりと回るコースを通る。

福内「凄く速いわね・・・」

平賀「私達が使っている飛行船よりも速いし、小回りも効きますね！」

外海をぐるりと回っている中、平賀と福内がUH-1Gの性能に感心する。

次郎「そりやそうだ!!・・・だが、春乱には負けるがな！」

平賀「そんなに速いんですか？」

次郎「そりや戦闘機だから、こいつは、それより下になる。」

『へ・・・!!?』

このUH-1Gの性能が春乱より下だという言葉に平賀と福内は驚く。

龍之介「こいつが有れば、ブルーマーメイドの活動範囲も大幅に広がると思うんじゃないのか宗谷監督官？」

真霜「そうね・・・」

龍之介「さつき見た艦載機も改造すれば小さい飛行甲板でも使用が可能だ。」

真霜「ん……」

真霜は、龍之介の言葉を聞いて、ある事を考える。

真霜（……将来的に……これらの航空機をブルーマーメイドに配備したいわ！）

真霜は、将来的に、このUH-1Gや春乱などの航空機をブルーマーメイドに配備を考えていた。

春乱などの航空機は、大型空母を作らないと運用できないが、さつき龍之介が言った様に改良すれば小さいブルーマーメイドの艦や飛行船母艦でも運用可能。

真霜（問題は……国土保全委員会に開発と生産を認めさせる事だけ……）

後は、国土保全委員会の幹部達を認めさせるだけだが

あの幹部達がそう簡単には認めないだろう。

真霜（何か前例があれば良いのだが……何か良い例は無いだろうか……）

真霜が航空機の将来性を考えていると

次郎「准将!？」

次郎が何かを発見し、龍之介に報告する。

真霜「!？」

龍之介「如何した？」

何を見つけたのか問う。

次郎「前方に漂流船です。」

前方に漂流船を発見した。

龍之介「何!？」

『えっ!?!』

それを聞いた龍之介は、次郎から双眼鏡を貰い前方を見る。

すると次郎の言う通り、前方に転覆している漁船らしきものが見えた。

次郎「如何しますか准将?」

次郎は、如何するのか龍之介に問う。

龍之介「如何するって……取り合えず行つて見よう!……目標に接近しろ!」

龍之介は、なのはに目標に接近するよう命じる。

なのは「了解!」

U H—I Gは、目標へと接近する。

龍之介「お前らは、無線で付近の友軍艦に救援要請を連絡するんだ。」

次郎「了解!」

福内「は、はい!」

次郎と福内は急いで付近のブルーマーメイド艦に連絡を入れ、漁船が転覆している事

や位置を急いで伝えた。

やがて、U H—1 Gが目標の上に到着する。

真霜「はっ!？」

龍之介「こりゃ!？」

2人が見た物は

荒波によつて、転覆した漁船の姿と、その上で何とか流されない様に船底に捕まる乗員の姿だった。

漁船の乗組員「な、何だあれは!？」

船底にしがみついている乗員達、ポカンとした顔でU H—1 Gを見ている。

次郎「付近のブルーマーメイド艦に連絡しましたが・・・到着まで時間が掛かります!」

連絡を受け、付近のブルーマーメイド艦が急行していたが、到着まで時間が掛かる。

龍之介「そんなには待てない!今でも沈没寸前だ!!」

それまで漁船は、とても持たない。

直ぐにでも沈没寸前だ。

一度海に落されれば、落ちた人間を探すのは難しい。

ブルーマーメイドの到着は待つてはいられない。

龍之介「こうなったら俺達だけでやるしかない！」

真霜「えっ!？」

近くにいるのは、我々だけ

仕方がなく龍之介は、自分達で救助をする事にした。

真霜「本気なの!?・・・このへりで本気で救助するの?」

真霜は、本気でUH-1Gで救助するの か問う。

龍之介「当たり前だ!!・・・こいつには、それなりの装備が常備されている!」

UH-1Gには、もしもの時に際して、いろんな装備が常備されている。

地上制射用の12.7mm機関銃やロケット砲、そして、救助用の救命フックや救命

胴衣。

それらを装備している。

問題は誰が救助に行くかだ

龍之介「此処は俺が救助に向かう!・・・準備しろ!」

何と指揮官である龍之介が行くと言い出した。

次郎「何も准将が行かなくても、救助なら俺が行きます!!」

救助に向かう龍之介を次郎が代わりに行くと言つて、止め様とするが

龍之介「生意気な事を言うな!!」

次郎「しかし！」

龍之介「良いから黙って、救助の準備しろ!!」

次郎「わ、分かりました。」

龍之介の勢いに負け次郎は準備をする。

龍之介「お前らも次郎を手伝え!!」

龍之介は、平賀と福内に次郎の手伝いを命じる。

『は、はい!』

龍之介に言われ、次郎を手伝う。

その状況を真霜は黙って見ていた。

やがて、準備が整うと、龍之介は降り様とスリングをつかもうとした時

真霜「待って！」

龍之介「ん？」

突然真霜が待ったを掛け

真霜「私も降りるわ!!」

龍之介「な、何!？」

福内「む、宗谷監督官!？」

何と、真霜も降りて救助作業をすると言い出したのだ

おそらく、救助に行こうとする龍之介を見て、自分も負けてられないと思ったんだろ
う。

龍之介「駄目だ!!お前見たいな奴は、足手纏いになるだけだ!!」

だが、龍之介は駄目だと言って、真霜見たいな女性は、足手纏いだと告げる。

真霜「私だって、救助の訓練ぐらいいは受けているわ!!貴方の足手纏いにはならないわ

!!

しかし、真霜は諦めず、龍之介に食い付く。

龍之介「・・・はあ・・・分かったよ!・・・だが俺の指示には従え!・・・良いな

!

真霜「誰にももの言ってるのよ!」

龍之介「生意気な奴だな・・・」

真霜の強気に負け、龍之介は仕方なく、真霜と一緒に降りる事にした。

龍之介「準備は良いか!!」

次郎「いつでも!!」

龍之介と真霜は、降りる準備をし

龍之介「念の為、こいつを被っておけ!・・・お前を守ってくれる・・・」

龍之介は、真霜にライフジャケットを着せ、更に自分が被っていたヘルメットを被ら

せる。

真霜「あつ、ありがとう・・・」

龍之介「礼は良い・・・行くぞ!!」

真霜「ん！」

龍之介がスリングを持って転覆した漁船へと降下し、その次に真霜も降下した。

此処で龍之介と真霜の本領と覇気が試される事になった。

龍之介「おい、お前ら！大丈夫か？」

真霜「ブルーマーメイドです!!貴方々を救助に来ました。」

龍之介と真霜は、大声で漁船の乗組員達に声を掛ける。

漁船の乗組員「ブルーマーメイド？」

漁船の乗組員「良かった!!助けに来てくれたんだ!？」

龍之介と真霜は、乗員達にスリングを着せ、遭難者の体格に合わせてサイズ調整環を調整し、U H I I G から吊り下げられたケーブルのフックに乗員の身体をかけ、それを次郎達がクレーンで引き揚げる。

やがて、殆んどの乗員を救出する。

龍之介「よくし！引き上げるぞ!!」

救助が保々終わり、龍之介は引き上げを命じ、スリングを掴もうとした。

その時

真霜「あっ!？」

突然、漁船が沈み初めつて、真霜が海に引きずり困れ様とした。

『宗谷監督官!?!』

龍之介「手を伸ばせ!!」

龍之介は咄嗟に手を出し、真霜に捕まる様告げる。

真霜「ん!」

真霜は、必死に龍之介の手を掴む。

龍之介「離すなよ・・・」

真霜「ん・・・」

龍之介は、真霜の手をしつかり掴み、手を放さなかった。

2人は、ゆっくり引き上げられ、無事に収容された。

無事に収容された直後、漁船は完全に沈没した。

もしブルーマーメイド艦を待っていたら、乗員達は今頃死んでいただろう。

乗員達を救助したUH-1Gは、現場海域に到着したブルーマーメイド艦へと着艦する。

ブルーマーメイド艦に着艦したUH-1Gに乗っていた乗員達は、甲板で待っていた

医療スタッフの手で医務室へと運ばれた。

幸い大きな怪我也無く、1日の検査入院程度だと告げられる。

龍之介「俺達の仕事は終わった!・・・帰るぞ!!」

救助した乗員達をブルーマーメイド艦に引き渡した後、龍之介達は空母大鳳に帰還する。

そんな中

真霜「ねえ!」

龍之介「如何した?」

真霜「さつきは・・・ありがとう!」

真霜がさつき助けてくれた事に礼を言うが

龍之介「当然の事をしたまでだ・・・礼は要らねよ!」

龍之介は、当然の事をしたまでだと言って、礼拝要らないと告げる。

真霜「ん・・・」

そんな龍之介に真霜は啞然と見る。

その後、UH-1Gは空母大鳳に帰投した。

帰還後、真霜は、今回の事を報告書に纏め、国土保全委員会に提出した。

真霜は、報告書を提出と共にミサイルなどの兵器(光学兵器は除外した。)や航空機の

開発と生産やそれを運用する空母の建造について、国土保全委員会の幹部達と協議をした。

協議の中、真霜は、ミサイルなどの兵器や航空機の開発と生産やそれを運用する空母の建造を主張した。

幹部達は、真霜の主張を受け入れミサイルなどの兵器の開発と生産は了承したが、肝心の航空機については、性能に懐疑的で関心を持たなかつたので開発と生産は先送りされ、また、空母の建造については、あんな大きい艦を造る予算は無いと言って却下した。

真霜は、今回の協議の結果について、苦虫を噛み潰したよう顔で聞いていた。

とは言え、航空機の開発と生産は先送りが決定された。

真霜は、独自で開発する事にし、慶介に協力を申し出る。

慶介は、航空機の開発に喜んで協力する。

後、空母については、あの時龍之介が言つた事を思い出し

現在、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンで運用されている飛行船母艦を航空機の開発が成功した暁には改造を行う事にした。

第8章 宗谷家での生活 1

4月1日

宗谷家、リビング

この日、ましろは学校から帰宅する。

ましろ「……」

学校から帰宅したましろは家の中を見回すと、家には誰もいない。

今日は、母の真雪は仕事で学校に、姉の真霜と真冬も任務に出ている。

当然、龍之介もいないので、家には誰もいなかった。

ましろは、直ぐに自分の部屋へと入る。

宗谷家、ましろの部屋

自分の部屋に入ると、そのまま机に向かい、鞆から今日の横須賀女子海洋学校の模擬試験の結果表を出す。

ましろは、もう中学3年で、受験生でもある。

ましろは、将来、母の真雪や姉の真霜と真冬を追って、ブルーマーメイドになる為、真雪が校長を務めている横須賀女子海洋学校を受験する事になっていた。

その為、学校から帰ったら即受験勉強をしていた。

だが、今回受けた模擬試験の点数は

宗谷ましろ 点数25点

ましろ「な、何故だ!?・・・何故こんな低い結果なんだ!!・・・以前は、9割以上は合っていた筈なのに!?!」

ましろ本人としては、模擬試験後の自己採点は90点代の筈なのに、如何いう訳か、結果表の点数は20点代と表記されている。

その事実ましろは、何かの間違いじゃないかと1人憤慨していた。

ましろ「う・・・ついてない!!」

つくづく付いていないましろだった。

宗谷家、薫の部屋

一方、隣の部屋では薫が休日を利用して、夕食の準備をしようと料理のレシピを読んでいた。

実は、薫は料理が得意なので、真雪に宗谷家でお世話になっっている代わりに自分が今日の夕飯の準備をすと申し出たのだ。

真雪は、それに答え、薫に任せた。

薫「うくん・・・今日は、これに仕様かな・・・」

レシピを見ながら今日の夜の夕飯を考えていた。

薫「ハンバーグも良いわね・・・」

最初はハンバーグ。

薫「でも、肉じやがの方が良いかな・・・」

2回目は肉じやが。

薫「ピラフも良いわね・・・」

3回目はピラフ。

何れにせよ、どれを作るか、薫は迷う。

そして

薫「決めった!!これに仕様!」

夕食のメニューは決まった。

薫「さてと!」

薫は、夕食の準備をしようと部屋から出る。

そんな時

薫「ん!?!」

隣の部屋から、何やら喚き声が聞こえてきた。

薫「何だろう?」

薫の部屋の隣は、ましろの部屋。

薫は、ましろの部屋を覗く。

宗谷家、ましろの部屋

薫「あっ!?!」

ましろの部屋を覗くと、其処には何故かましろが机の前で落ち込んでいた。

ましろ「ああ・・・ついてない!・・・ついてない!」

落ち込み続けるましろ。

薫「如何したの、ましろちゃん?」

其処へ薫が、ましろの部屋を尋ねて来た。

ましろ「な、何ですか!?!」

尋ねて来た薫にましろは声を上げる。

それはまるで、生理中に機嫌が悪かった様で

薫「い、いや・・・その・・・ましろちゃんが部屋の外にも聞こえる程の大声を出していたから、気になって覗いて見たんだけど・・・」

ましろ「えっ!?!」

自分の喚き声が部屋の外まで聞こえていると言われ、ましろは驚愕する。

薫「何をそんなに落ち込んでいるの?」

薫は、ましろが何を落ち込んでいるのか問う。

ましろ「な、何でもありません!!」

ましろは、そう言つて、慌てて結果表を隠す。

薫「何隠してるの？」

だが、薫は、ましろが何かを隠そうとするのを見抜く。

ましろ「こ、これは・・・別に・・・」

ましろは、必死に薫から結果表を隠そうとするが

薫「見せなさい!!」

薫の強硬に負け、ましろは、模擬試験の結果表を見せる。

薫「これは、模擬試験の結果表じゃないの!?!ましろちゃん、何所かの学校を受けるの?」

ましろ「ん・・・横須賀女子海洋学校です。」

薫「横須賀女子海洋学校・・・ああ!?!・・・真雪さんの学校ね!」

薫は、真雪が横須賀海洋学校の校長と言う事は、真霜から聞いていた。

それを知つて模擬試験の結果表を拝見する。

薫「えっ!?!・・・何これ!?!」

薫は、ましろの模擬試験の結果表を見て、驚愕してしまう。

薫「何でこんなに低い点数なの？毎日予習はしてるの？」
予習をしているかどうか問う。

ましろ「はい！・・・毎日尽かさずしてるんですが・・・」

ましろは、毎日尽かさず予習をしていたのに何故、こういう結果になったのか分らなかった。

薫「ん・・・ましろちゃん！・・・今回の模擬試験の問題と解答用紙は有るの？」

ましろ「ええ、有りますが・・・」

薫「見せて頂戴！」

薫は、何故、こういう結果になったか原因を調べる為、ましろに今回受けた模擬試験の問題用紙と解答用紙を見せるよう言う。

ましろ「これです。」

ましろは、鞆から今回受けた模擬試験の問題用紙と解答用紙を出し、薫に見せる。

薫は、問題用紙とましろの解答用紙を見比べる。
すると

薫「ん・・・ましろちゃん！」

ましろ「は、はい！」

薫「これ・・・本来の解答すべき解答欄がズレているけど・・・」

薫は、点数が低くなった原因をましろに告げる。

ましろ「えっ!?!」

点数が低くなった原因を薫から告げられ、ましろは、顔を白くする。

薫「本来なら9割以上が正解していたのに……ましろちゃんが解答欄をズラして、回答したから、今回の結果になったと思うの!」

薫は、改めて自己採点した。

その結果、薫の推測通り、ましろの合格率の数値は高かった。

その事から、ましろの成績には特に問題はなかった。

欠点と言えば、ましろが緊張したのか試験の際におつちよこちよいなミスをした事だろう。

ましろは、解答用紙は見ずに、今回の模擬試験の結果表を見てショックを受けていたのだ。

薫「ましろちゃん、答えを記入する時、ちゃんと解答欄を確かめて記入したの?」

ましろ「そ、それは……」

薫の問いにましろは、顔を赤くして、薫から視線を逸らした。

如何やら、ましろは、問題の答えを記入する時、解答欄をよく確かめずに答えを記入した様だ。

薫「今度から答えを書く際には、手か定規で未記入の解答欄を隠して記入したら如何かな？」

ましろ「そ、そうします。」

ましろは羞恥で顔を赤くしながらそう言いつつ、

ましろ（良かった!!・・・私は、決してバカじゃないんだ!!）

薫「それと、もし不安だったら、私が勉強を教えて上げようか？」

薫は念の為、ましろの勉強を見るとましろに告げる。

ましろ「えっ!?!・・・薫さんがですか?・・・良いです!!・・・そんな無理な事・・・」

薫が教える事にましろは、断るが

薫「大丈夫!・・・これでも成績は主席だったんだから!」

確かに薫は、難関と言われている国防軍の海士学校を主席入校主席卒業している優等

生で、しかも20代でGフォースに編入し艦長に出世している。

ましろ「えっ!?!そう何ですか？」

薫の成績が主席だった事に驚く。

薫「だから、大船に乗った形で私に頼りなさい!!・・・ねえ!」

ましろ「じゃ・・・お願いします。」

薫「任せと言つて!!じゃ、先ず何処から始めましょうか？」

薫は、自分の部屋から椅子を持って来て、ましろの机の横に座る。

こうして、ましろは、薫と一緒に勉強を始めつた。

ましろは、薫の指示通りに回答する。

すると、夢みたいに難しい問題は、すむずに解けて行く。

まるで魔法を掛けた見たいなものだった。

数時間後

試験勉強を数時間やっていたら、もう辺りは夕方になっていた。

薫「もうこの辺でお開きにしましょう！」

薫は、もうお開きにする事にした。

ましろ「ありがとうございます。」

薫「礼は良いわ！・・・その代わり・・・代償を払って欲しいんだけど！」

薫は、ましろに勉強を教えた代償を要求していた。

ましろ「えっ!? タダじゃないんですか？」

ましろは、てつきりタダかと思った。

ましろ「い・・・いくらですか？」

ましろは、鞆から財布を出す。

薫「お金じゃないわ！・・・今日の夕飯の準備を手伝ってほしいの！」

ましろの代償は、今日の夕飯の準備を手伝ってほしい事だった。

ましろ「でも、私は料理をした事が無いんですけど・・・」

しかし、ましろは料理をした事がない。

薫「其処は、私が教えるから大丈夫！」

薫は、ましろに簡単な事をさせる事にした。

薫とましろは、台所に行き夕飯の準備をする。

今日の夕飯は、肉じゃが定食で、薫は、包丁で人参と玉ねぎを切る。

ましろの方は、皮むきでじゃがいもの皮をむく。

流石に初心者には、包丁を持たせるのは危険だと思い最初は、簡単な物からさせる事にした。

大体切り込みも終わり、鍋に入れてしばらく煮込む。

その間にキャベツを斬って、サラダを作る。

しばらくして

『ただいまー！』

真霜と真冬が帰宅した。

薫「お帰りなさい！」

ましろ「お帰り！」

帰宅した真霜と真冬を薫とましろが出迎えた。

真冬「おい、ましろ!!・・・如何したんだ、その格好!?!」

2人が妹のましろのエプロン姿を見て、くすくす笑う。

ましろ「み、見ないでください!!」

ましろは、恥ずかしくて薫の後ろに隠れる。

薫「あつ!・・・実はね、勉強を教えた代わりに夕飯準備を手伝って貰ったの!」

薫は、2人にましろが何故こんな格好をしているのか理由を話す。

真霜「あら、そうだったの!・・・御免なさいね!・・・堆笑ってしまつて・・・」

真冬「ところで今日の夕飯は何だ薫!?!」

真冬は、早速薫に今日の夕飯は、何を作ったのか問う。

薫「今日は肉じゃがだよ!!」

真冬「おお!!肉じゃがか!!」

肉じゃがと聞き真冬は、すごく喜ぶ。

その後、龍之介や母の真雪が帰宅した。

宗谷家、リビング

全員が帰宅したあと薫とましろが夕飯をふるう。

今日の夕飯は、肉じゃがとサラダである。

真雪「美味しい!!」

ましろ「美味しいです!!」

真霜「美味しいわ!!」

真冬「うめっぜ薫!!」

薫の料理を真雪達は高く評価する。

龍之介「……」

龍之介の方は、あまり評価をしていなく、黙って食べていた。

真雪「薫さんは、料理が上手ね……誰から教わったの?」

薫「ああ、小さい頃にうちのはやてちゃんから……」

真霜「そうなの!……お母さんからじゃないの?」

薫「いや、その……それは……」

薫は少し暗い表情をする。

龍之介「よせ!そんな事を聞くもんじゃない!!」

龍之介は、真霜に、これ以上聞くなと告げる。

真霜「御免なさい薫さん!!変な事を聞いちゃって……」

真霜は、龍之介の言葉に違和感を感じ、これ以上聞かない事にした。

薫「いいえ、別に気にしてませんから・・・」

こうして夕飯の仕度は、時々薫がやる事になった。

宗谷家、薫の部屋

それから少し経って、薫は、自分の部屋で小説を読んでいると
コンコン

と、部屋のドアをノックする者がいた。

薫「どうぞ!!」

真霜「ちよつと良い薫さん？」

それは、真霜で

薫「宗谷監督官!? 如何したんですか？」

真霜「ちよつと薫さんとお話をしたくて・・・」

如何やら話に来た様だ。

薫「はあ・・・!? どうぞ!!」

薫は何かと思ひ、真霜を部屋に入れる。

薫「話つて、何ですか？」

真霜「先の事、御免なさい!・・・気にしてない？」

真霜は、さっきの両親の事で薫が気にしてないか問う。

薫「えっ!?!…ああ、別に大丈夫ですよ!…そんなに気にしていませんから…」
薫は、別に気にしていなかった。

真霜「そう…」

薫「…宗谷監督官!」

真霜「何?」

薫「監督官は…本当に幸せな人ですね!」

真霜「えっ?」

薫「だって、お母さんや2人の妹さんがいるんですもん!」

真霜「そうね!…まあ真冬の方には、何時も面倒な事を押し付けられてるけど…」

薫「でも家族は、家族です!!…私見たいに両親がいないのとは、全然違いますか
ら…」

真霜「薫さんのご両親は?」

薫「…亡くなりました…」

真霜「えっ!?!」

薫「15年前…私と兄さんがまだ小学生の時に起きた第2次ゴジラ戦で…」

薫は、真霜に15年前に向こうの世界で起きた第2次ゴジラ戦の悲劇やその時に両親
が死んだ事を打ち明けた。

真霜「そんな事が・・・大変だったわね・・・」

真霜は、薫がどれだけ大変な目に遭った事が分かった様だ。

薫「でもそのお陰で、私は、今此処にいるし・・・何よりも仲間達がいる！・・・それが私の今の幸せですから!!」

真霜「薫さんらしいわね、その言葉！」

薫「そうですか・・・」

真霜「そうよ！」

『フッフ・・・!!』

2人は笑い。

薫は、もう暗い表情から吹っ切れていた。

真霜「そうだわ！」

薫「ん？」

真霜「これから貴方の事は、薫って呼んで良い？」

真霜は、薫の事を呼び捨てする事にした。

薫「それは良いですけど・・・」

真霜「それから私の事は、真霜って呼んで良いわよ！」

そして、真霜も自分の事を呼び捨てして良いと薫に告げる。

薫「だ、駄目です！・・・そんな、私より年上なのに呼び捨て何て！」

薫は、年上の真霜を呼び捨てなんてできないと言うが

真霜「良いのよ別に、もう家族同然なんだから！」

真霜は、別に気にせず呼んで良いと言うが

薫「じゃ・・・真霜姉さんって呼んで良いですか？」

結局、薫は、真霜の事を真霜姉さんと呼ぶ事にした。

真霜「まあ、妹が増えた見たいな感じだけど良いわ！」

真霜は、4人目の妹が出来た見たいだと思いき喜ぶ。

それから、色々な事を話をした。

龍之介「・・・家族か・・・」

龍之介は、2人の会話をこっそり聞いていた。

第9章 合同演習

4月3日

横須賀基地

この日、Gフォース西部方面艦隊は、ブルーマーメイドとの合同演習の為、横須賀基地を出港しようとしていた。

空母大鳳、艦橋

龍之介「そろそろ行くか!!」

薫「はい!」

随伴艦が出港すると同時に空母大鳳も出港準備をする。

薫「出港用意!」

薫が出港用意の命令を出し

はやて「了解!・・・出港用意!・・・錨上げ!!」

続けて、はやてが指示を出し、錨を上げる。

『出港用意よし!』

薫「出港! 両舷微速前進!!」

美奈「両舷微速前進ヨーソーロー!!」

空母大鳳は、ゆつくりと出港していく。

龍之介「目標は、硫黄島沖!・・・演習だっと思つて気を抜くな!!」

『はー!』

艦隊は、演習海域である硫黄島沖を目指す。

そして此方も

弁天の通信主「Gフォース西部方面艦隊が出港します。」

真冬「よろし、予定道理だな!・・・我々も出港するぞ!!」

『はー!』

真冬、平賀のブルーマーメイド艦隊も演習に参加する為、横須賀を出港。

Gフォース西部方面艦隊の後方を航行する。

今回の演習参加艦艇は

Gフォース西部方面艦隊 指揮官山本龍之介准将

旗艦空母大鳳

特殊戦闘艦白鳳

高速戦闘艦高千穂

巡洋艦すくね、さつま

護衛艦いばらき、せんだい、ながおか、きしゅう

補給艦せた、とよだ

計11隻

ブルーマーメイド艦隊 指揮官宗谷真冬二等監督官

旗艦海岸戦闘艦弁天、みくら、みやげ、こうづ、はちじょう、なにわ、

飛行船母艦いずも

補給艦ましゅう

計8隻

演習海域に硫黄島沖を選んだのは、硫黄島が人けのない無人島だった事、それは龍之介達Gフォース西部方面艦隊がブルーマーメイドの中で極秘にされている。

また使用する兵器がこの世界には存在しない飛行兵器などである為、国民や他の国に知られない事が重要視された。

艦隊は、何事もなく演習海域を目指す。

硫黄島沖到着は4月4日の朝

周囲を警戒しつつ航行する。

4月3日

午後8時

各艦艇とも異常なく航行していた。

空母大鳳、艦橋

美奈「異常なし……」

信吾『レーダーも異常なし……』

実「通信障害もなし……」

空母大鳳の艦橋でも当直を残し、残りは明日に備えて休んでいた。

龍之介と薫は、艦内を見回っていた。

空母大鳳、格納庫

格納庫では、整備員達が不眠不休で機体の整備作業を行っていた。

龍之介「諸群、遅くまでご苦労！」

整備員「あつ、准将に艦長殿だ!？」

格納庫にやって来た龍之介と薫に整備員達は敬礼する。

薫「皆、きついのにそう敬礼しなくて良いわよ！」

薫は、不眠不休で疲れている彼らに無理に敬礼させるのは、きついと思い止めさせた。

整備員「は……」

文雄「これは指揮官殿に艦長殿！」

整備員達の後ろから、整備班長の文雄がやってきた。

薫「山崎整備班長!？」

龍之介と薫は、文雄に敬礼し、文雄も敬礼する。

一応、龍之介と薫は、文雄より階級が上だが、文雄の方が龍之介と薫より年上で40代の爺さんでもあり、何しろ、この艦で20年間も整備員として勤務している大ベテランでもある。

その為、龍之介にとっては頭が上がらない為、あまり敵に回したくない人物である。

龍之介「こんな時間まで、ご苦労様です整備班長!」

薫「それにしても・・・班長達整備員は、休みなしで・・・こんな時間まで整備で大変ですね?」

文雄「いえいえ、我々にとって・・・明日の演習に備えつて機体が無事に空へ上げる事が仕事なんです。」

龍之介「あんまり仕事のやり過ぎで体の調子が悪くなったりしないですか!!・・・特に宗方軍医長が五月蠅いですから・・・」

文雄「分かっている!!」

薫「くれぐれも交代で休んでくださいよ・・・特に班長は、もうお年何ですから・・・」

文雄「何を言っている!!ワシやまだまだ若いもんには、負けわせん!!」

薫に年寄り扱いされ、文雄は切れる。

薫「わ、分かりました・・・でも無理しないで下さいよ班長！」

文雄「全くワシを年寄り扱いし寄って、怪しからん!!」

龍之介「そう言わないでくださいよ・・・あいつだって心配してるんだ・・・この前だつて班長は、血圧が上がって倒れたじゃないですか？」

文雄「あの時は、そうでしたが・・・もう大丈夫です!!」

龍之介「それなら良いんですが・・・」

本当に大丈夫なのか、龍之介は、不安でしようがなかった。

格納庫を後にした龍之介と薫は廊下を少し行つたところの作戦室に入る。

空母大鳳、作戦室

作戦室には、搭乗員が2く3人がいる程で、この時間は、あまり居なかった。

薫「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

なのは「あつ、艦長!？」

フェイト「准将まで如何したんですか？」

龍之介「見ての通り各部の見回りだよ！」

フェイト「そうですか・・・」

龍之介は、作戦台に置いてある海図を見る。

龍之介「明日の演習の飛行ルートのチェックしてるのか？」

なのは「はい……一応、演習前に確認したんですが、念には念を入れ様と思いで……」

薫「流石なのはちゃん!!」

なのは「照れるな……」

龍之介「良い心がけだが、あまり夜更かしするなよ!……お前らは、大事なこの艦隊の主戦力だからな!!」

『は〜い!』

薫「またね、なのはちゃん!フエイトちゃん!」

龍之介と薫は、作戦室を後にする。

それから、各部を見回りを保々終えて、2人は部屋に戻る。

薫は、部屋に戻った後、なのは達とお風呂に行った。

空母大鳳、長官室

龍之介は、長官室で1人ベツトで横になり考えていた。

龍之介「明日か……」

龍之介は、明日の演習の事を考えながら眠りに付く。

4月4日

午前8時

Gフォース西部方面艦隊とブルーマーメイド艦隊は、硫黄島の西南海域に進出、共に演習を開始した。

今回の演習形式は、第2次世界大戦で実際に行われた対航空艦隊戦である。

編成は

航空艦隊 指揮官山本龍之介准将

旗艦空母大鳳、

巡洋艦すくね、さつま

護衛艦きしゅう、ながおか、いばらき、せんだい

補給部隊

補給艦せた、とよだ、ましゅう

海岸戦闘艦はちじょう

特殊戦闘艦白鳳

一方、敵役部隊は、美由紀が指揮する事になった。

その為、編成は

敵役部隊 指揮官権藤美由紀中佐、

高速戦艦高千穂

飛行船母艦いずも

海岸戦闘艦弁天、なにわ、みくら、みやけ
で編成された

空母大鳳、艦橋

龍之介「演習開始！」

龍之介の号令のもと演習が開始された。

薫「スターズ隊及びライトニング隊発進用意！」

空母大鳳から全艦に警報がなる。

空母大鳳、飛行甲板

空母大鳳の飛行甲板では、対空装備の春乱10機と対艦装備の春乱30機が待機して
いた。

なのは「それじゃ・・・皆がんばって行くよう!!」

『はいー!』

なのは、フェイト達が待機している機体に乗る。

スターズ隊「やったぜ俺達だけの空だぜ!!」

ライトニング隊「私達の腕を見せてやるわ!!」

搭乗員達は、初めての異世界の飛行に浮き浮きしながら機体に乗る。

春乱4機がカタパルトに前脚を装着し、発艦準備が完了する。

空母大鳳、艦橋

はやて「スターズ隊及びライトニング隊発艦準備完了！」

薫「スターズ隊及びライトニング隊発艦せよ!!」

薫が発艦命令を下す。

薫の号令のもと、スターズ隊及びライトニング隊が次々と勢いづつ発艦して行く。

その光景は、雅に映画トップガン見たいだった。

時を同じくして、敵役部隊も

高千穂、艦橋

美由紀「演習開始・・・予定どおりね!・・・対空陣形展開！」

美由紀の号令の元、艦隊は、対空陣形を組む。

しかし

文夫「ブルーマーメイドの艦艇が遅れています！」

ブルーマーメイドの艦艇が陣形を組むのに遅れていた。

弁天、艦橋

弁天の通信主「高千穂から早く陣形を組めとの事です!!」

真冬「そんな事言ったてよ・・・初めて何だから、仕方ねえだろ!!」

真冬の言う通り、彼らブルーマーメイドにとっては、この対空陣形を組むのが初めて

である。

何故なら、航空理論が発達してないこの世界では、航空機に対する戦術もない。その為、対空陣形を組むのに時間が掛かった。

数分後

さつま、CIC

さつまのリーダー主「敵機捕捉!?!・・機数40!」

警戒していたさつまの対空リーダーが40機の大編隊を捉えた。

高千穂、艦橋

美由紀「対空戦闘用意!」

対空戦闘の警報が鳴る。

その直後、空母大鳳から発艦したスターズ隊とライトニング隊40機が雲の中から姿を現した。

春乱、操縦席

なのは「全機突撃!!」

なのは機が先導し、スターズ隊とライトニング隊は攻撃を開始した。

高千穂、艦橋

美由紀「迎撃始め!」

さつま、艦橋

重雄「シースパロー発射始め!!」

さつまから対空ミサイルが発射される（実際に発射されていない）。

高千穂のレーダー主「命中!!・・・10機撃墜!・・・敵機、直も接近中!!」

敵部隊の半数近くを撃墜したが、直も接近してきた。

美由紀「回避行動!!・・・各艦は、回避行動を取りながら迎撃せよ!!」

高千穂やさつまなどのGフォースの艦艇は回避行動を取るが、弁天やみくらなどのブルーマーメイドの艦艇は、回避行動に遅れる。

その為、スターズ隊とライトニング隊からは、恰好の目標になっていた。

春乱3機がみくらの左舷から水平攻撃を敢行してきた。

みくら、艦橋

寒川「左舷3時方向から敵航空機接近!?!」

福内「回避行動!!」

志度「面舵一杯!!全速退避!!」

福内は、急いで右舷に回避するが

寒川「右舷9時方向からも敵航空機接近!?!」

更に右舷からも春乱が2機接近してきた。

平賀「えっ!？」

福内「と、取り舵一杯!!」

急いで左舷に回避するも、既に遅く2機が両側から模擬爆弾投下、至近について水柱が立ち、更に模擬魚雷による攻撃も受けた。

みくら、艦橋

平賀「は、速い!？」

平賀「何て速さなの!?!・・此方の対応が追い付かない!」

平賀と福内は、高速で攻撃してくる航空機に対応が追い付かなかった。

福内「これが彼らの戦闘なの!?!・・私達が教わった教訓とは、まるで別ものだわ!!」

福内は、龍之介達が行っている対航空機戦闘に驚きを隠せなかった。

それもその筈、この世界には、無い、航空機による戦闘は、彼らによっては、初めての経験であった。

まあ、この世界では、2度の世界大戦が無かったから当然だ。

2度の世界大戦では、航空機による戦闘が多かったから、龍之介達は、学校で航空機の戦術を学んでいる。

その為、こういう3次元戦闘には慣れていないが、真冬達にとっては、対艦戦闘を想定した2次元戦闘しか知らない為、こういう戦闘は雅に初めてだろう。

とは言え、爆弾と魚雷の全弾命中を受けたみくらは、轟沈と言う結果で最初の脱落艦になった。

弁天、艦橋

弁天の通信主「みくら轟沈!!」

真冬「嘘だろ!?!平賀達もうやられたのか!?!」

僅か10分で見くらが轟沈した報告に真冬は驚愕するが

弁天のリーダー主「宗谷艦長!!」

真冬「如何した!?!」

弁天のリーダー主「敵航空機3機!?!此方に向かってきます!!」

今度は、弁天に春乱3機が向かってきた。

真冬「か、回避!!」

弁天のリーダー主「間に合いません!!」

回避運動も空しく、春乱が投下した模擬爆弾が弁天に着弾する。

真冬「くそ・・・!!」

みくらに轟沈から、僅か10分後に弁天も轟沈と言う結果で脱落した。

それから1時間後

敵役部隊は、高千穂以下のGフォース艦を残して、弁天以下のブルーマーメイドの艦

艇は尽く轟沈という形で全滅した。

空母大鳳、艦橋

実「高千穂から報告！・・・我が艦隊の8割が轟沈したとの事です。」

薫「えっ!？」

はやて「あらら・・・」

ブルーマーメイドの艦艇が尽く轟沈した報告を聞いて、薫とはやては驚愕し

龍之介「何だど!?!・・・まだ数時間しかたっていないのに、もう8割も轟沈したのか?」

実「はい!」

龍之介「くう・・・やり直しだ!!」

ブルーマーメイドの艦艇が尽く轟沈した報告を聞いた龍之介は激怒し、演習のやり直しを命じる。

それから、3回も演習を行ったが、3回も同じ全滅と言う結果で、夕方頃には、1日目の演習は、保々終了した。

空母大鳳、会議室

演習終了後、会議室で演習結果を協議した。

龍之介「演習の結果は、余りにも酷い結果だった・・・まあ最初は仕方なかったが・・・

こう2回や3回も全滅しては演習の意味がない!!・・・お前らは、一体何にを教わってるんだ!!」

3回も同じ結果になった事に龍之介は怒り立っていた。

平賀「……………」

福内「……………」

龍之介の言葉に2人は、言い返せなかったが

真冬「仕方ねえだろう!!……………こんな戦闘は……………あたし達にとつては初めて何だし……………」

第1、こんな戦闘が有るとは、限らねえだろう!!」

真冬は、2人を弁明しようとしたが

龍之介「確かにお前の言う通りだ!……………こんな戦闘は初めてだろうし……………この世界では、こんな戦闘は無いだろう……………だが無いこそ、早めに対応しとかなければ、先見たいに対応が1秒でも遅れたら、お前らは全員戦死だ!!」

真冬「ん……………」

弁明しようとしたが、無駄だった。

龍之介「もう良い帰れ!!……………明日もやるからな!……………今度は同じ結果を出すな!……………」

分かったな!!」

真冬「くう……………」

会議は終了し、艦へと戻る。

空母大鳳、通路

真冬「う……」

会議室を出た真冬は、龍之介の態度に腹が立ち、ムシヤクシヤしていた。
『ん……』

平賀と福内は、ムシヤクシヤしている真冬に怖くて何も言えなかったが

薫「真冬！」

後ろから薫が追いかけてきた。

真冬「薫!?!」

薫「御免ね!……兄さんの言った事は、あまり気にしないでね!」

薫は、真冬に龍之介に代わって誤るが

真冬「ん……でもよ、ちゃんとやってるのにあんな言い方はねえだろう!!」

真冬は、あんな言い方はねえだろうと言う。

薫「仕方ないよ……あんな性格だから……」

真冬「……」

薫「それに演習結果で怒られたのは、真冬だけじゃないよ!」

真冬「えっ!?!」

平賀「如何いう事ですか？」

薫から演習結果で怒られたのは、真冬だけじゃない事に驚き、如何いう事か問う。

薫「実はね！・・・攻撃終了後の攻撃隊の離発着訓練でミスがあつて、やり直しを2〜3回もしてるの・・・」

薫が言うには、攻撃終了後、空母大鳳に着艦する時、搭乗員がミスをして、2〜3回もやり直しを行った為、帰還後に全員、作戦室に集められ、龍之介からのきつい説教を浴びた。

福内「そうだったんですか・・・」

薫「でも確かに准将の言う通りかもしれないわよ！」

真冬「薫まで言うのか!？」

薫「だから今度は、しくじらない様にお互いに頑張りましょう!!」

薫は、優しく3人を励ます。

真冬「むう・・・」

しかし、真冬は納得できなかつた。

その為

薫「何、真冬？」

真冬「根性……注入……!!」

真冬は、ストレス解消に薫の尻に根性を注入した。

薫「いやあ……!!」

真冬「ぼげらっ!」

悲鳴と共に薫の拳が真冬に炸裂した。

薫の拳を受けた真冬は、その場に倒れた。

薫「折角、励まそうと思つたのに……もう知らない!!」

薫は、怒って行つてしまった。

福内「少しは自重して下さい!!」

福内にも怒られた。

空母大鳳、会議室

一方、真冬達が帰つた後の会議室では

龍之介「何だ参謀?」

功「先のは、少し言い過ぎです。」

龍之介「言い過ぎ?」

功「宗谷二等監督官の言う通り!……我々の戦闘は、彼らにとって、初めての経験です。」

功は、龍之介にさっきの事は言い過ぎだつと言う。

龍之介「ん・・・確かに参謀の言う通りだ!!少し言い過ぎたな・・・」

龍之介は、真冬達に流石に言い過ぎたと反省する。

功「ですから・・・今度は、ブルーマーメイド艦にオブザーバーを乗せたら如何でしょうか?」

功は、龍之介にブルーマーメイド艦にオブザーバーを同乗させたら如何でしょうかと進言する。

龍之介「オブザーバー?」

功「それなら、彼らも上手く対応できるでしょう。」

龍之介「ん・・・良い解決策だ!」

功の進言に龍之介は、賛成する。

功「では、誰を行かせましょうか?」

功は、誰を行かせるか考えていると

龍之介「何を言ってるんだ・・・こういう時は、言い出しペが行くもんだろ!」

功「はっ!?!」

龍之介が言い出しペである功が行く事になった。

こうして、功がオブザーバーとして、弁天に乗艦する事で、明日の演習を上手くいか

せる事にした。

だが、次の日の演習で彼らに大規模救助要請が来るとは、思いもよらなかつただろう。

第10章 大規模救助要請

4月5日

小笠原諸島、硫黄島沖

この日も昨日と同じ演習が行われた。

空母大鳳、艦橋

龍之介「演習開始！」

空母大鳳から前回と同じスターズ隊及びライトニング隊、約40機が発艦した。

高千穂、艦橋

美由紀「演習開始！対空陣形展開！」

前回と同じ様に艦隊は、対空陣形を組む。

弁天、艦橋

弁天の通信主「対空陣形だそうです！」

真冬「よくし！・・・今度こそ失敗しねえぞ！・・・各艦、陣形展開!!」

今度は、ブルーメイトの艦艇もすむずに輪形陣を組む。

功「流石に昨日のが応えた見たいな！」

真冬の後ろから功が見ていた。

さつま、CIC

さつまのレーダー主「敵機捕捉!?!・・・機数40!」

前回と同様、警戒していたさつまの対空レーダーが40機の大編隊を捉えた。

高千穂、艦橋

美由紀「対空戦闘用意!」

対空戦闘の警報が鳴る。

その数分後

美由紀「回避行動!!各艦は、退避行動を取りながら迎撃せよ!」

前回と同様に高千穂やさつまなどのGフォースの艦艇は回避行動を取る。

しかし、スターズ隊とライトニング隊は、またもブルーマーメイドの艦艇に攻撃を仕掛けてきた。

弁天、艦橋

弁天のレーダー主「右舷9時方向から敵機!?!」

攻撃隊は、弁天の左舷9時方向から攻撃を仕掛けてきた。

真冬「左舷に回避しろ!!」

真冬は、左舷に回避し様としたが

功「待て！」

それに功が待ったを掛けた。

真冬「何だ参謀!？」

功「これは、陽動作戦だ!!」

真冬「陽動作戦だって!？」

功「恐らく右舷から来る敵は、囿で・・・本命は、レーダーを掻い潜る為、水面擦れ擦れで向かってくる筈だ!!」

功は、敵の動きが陽動だと見抜き、本命は、レーダーを掻い潜る為、水面擦れ擦れで向かってくると真冬に進言する。

真冬「何?」

功「操舵主!急いで全速で回避するんだ!!」

弁天の操舵主「えっ!？」

功「早くしないか!!」

弁天の操舵主「は、はい!」

功の言う通りに前方に全速で回避した。

すると右舷から投下された爆弾が艦の後方に逸れた。

弁天の操舵主「はっ!？」

真冬「今のは・・・危なかった・・・」

敵の攻撃を回避した事に真冬達は驚愕する。

功「ぼさつとするな艦長！・・・砲術主は、速射砲と機銃で水面に弾幕を張れ！・・・操舵主は、その間にジグザグで回避するんだ!!」

『はーい！』

功の指示通り、砲術主が主砲と機銃で水面に弾幕を張りながら、操舵主がジグザグで回避し、レーダーを掻い潜った敵機の攻撃を交わした。

真冬達は、功の咄嗟の指示で、この場を切り抜けた。

真冬「すげえぜ!!・・・参謀の判断が無かったら、あたしらは、今頃やられてたぜ!!」

真冬は、とっさの指示をした功を褒めるが

功「本当は・・・一か八かだった・・・」

如何やら功は、この指示は、一か八かの賭けだった様だ。

真冬「何だそっか!・・・参謀って言うから、あたしより頭が良いと思ってたが・・・案外普通なんだな・・・」

功「バカにするな!・・・これでも私は、君より10年上なんだ!」

真冬「わりいわりい、今度酒を奢るからよ!」

功「それは、楽しみだ!」

2人は、何とも面白い状況で演習を続ける。

空母大鳳、艦橋

薫「今度は、上手くいった見たいですね！」

薫は、演習の結果が良好になってきた事に喜ぶ。

しかし

龍之介「ふん、これぐらい出来て、当然だ！」

薫「もう、素直じゃないんだから・・・」

それから2回も同じ訓練をし、昼ぐらいには、一時訓練を中止して、真冬達を白鳳艦橋に呼び寄せ、白鳳の全力運転が行われた。

白鳳、艦橋

三郎「発進用意よし！」

次郎「よし、上昇！上昇!!」

左右のノズルが点火し、艦体は、海上から空中へと飛び上がった。

平賀「す、凄い!？」

福内「本当に空を飛んでる!？」

真冬「すげえぜ!？」

飛んでいる事に真冬達は驚愕していた。

次郎「エンジン点火!!」

続いて、尾翼を広げ、メインエンジンと補助ロケットが点火する。

次郎「発進!」

白鳳は、空中をマツハーで飛んだ。

福内「は、早い!?!」

平賀「この前乗ったUH-1Gより速いわ!?!」

龍之介「当たり前だ!!・・・この速さじゃ、もう戦闘機並だ!!」

平賀「えっ!?!そう何ですか?」

龍之介「本当は、もっと速いんだが・・・今日は、訓練海域を回るだけだから、速力を絞ってるんだ。」

普通ならマツハー出るが

今日は、訓練海域を回るだけなので、あえて出力を絞った。

薫「良かったね真冬!」

真冬「何がだよ?」

薫「だって真冬!・・・この前、ヘリに乗れなくて、駄々を捏ねたでしょ?」

この前、龍之介に居残りを命じられて、駄々を捏ねた事を言う。

真冬「ああ、そうだったな・・・」

何となく、思い出す真冬。

薫「もうこれで乗れたんだから、あんまり迷惑を掛けないでよ！」

真冬「分かっているよ！」

顔を丸くする真冬。

しかし、飛んでいる白鳳に乗れて、笑顔を露にする。

訓練海域を1周した後、白鳳の攻撃訓練が始まった。

三郎「ハイパーレーザ砲及び50mmバルカン砲攻撃準備よし！」

次郎「目標、岩礁！攻撃開始!!」

白鳳から、ハイパーレーザ砲及び50mmバルカン砲が連射され岩礁を吹っ飛ばす。

更に

次郎「フルメタルミサイル発射用意！」

三郎「目標ロック！」

次郎「発射!!」

白鳳からフルメタルミサイル1発が発射され、岩礁に命中したが、そのまま爆発しないで、更に後ろの岩礁にまで貫通した。

そして

次郎「よくし、トドメだ！・・・ハイパーメーサー砲発射用意!!」

白鳳の前方扉が開きハイパーメーサー砲が発射準備をする。

三郎「ハイパーメーサー砲、発射用意よし！」

次郎「発射!!」

ハイパーメーサー砲から強力な光線が掃射され岩礁を一撃で木っ端微塵にする。

平賀「す、凄い!？」

福内「な、何て破壊力なの!？」

真冬「すげっ!!」

ハイパーメーサー砲の破壊力に3人は、恐怖を露にした。

美由紀「これで秘密にしたい理由が分かったでしょう!・・・あの兵器は、余りにも強すぎるから・・・使い方を誤れば、この世界に破滅をもたらす悪魔の兵器にもなりうるの!」

福内「確かに、こんな兵器は、我々の手には、余る物ですね!」

平賀「そ、そうだね・・・」

もし、彼らを敵にしていたら如何なっていたらどうか、福内と平賀は、恐怖に怯える。

真冬「何だか分かんねえが、余は危険な兵器だつて事だろ!」

龍之介「流石真冬!単純な答えだな!」

真冬「それ褒めてんのか怪我してるのか?」

龍之介「俺的に褒めてるんだがな……」

『フッフ』

薫と平賀、福内が隅で笑っていた。

龍之介「じゃ次は……この艦隊のもう一つの戦力の航空攻撃を見せてやろう!!」

白鳳の訓練が終了して、次は、航空攻撃を真冬達に見せる。

龍之介「通信主!……上空のなのは機に航空攻撃の指示を出せ!!」

白鳳の通信主「了解!」

白鳳から上空に待機しているなのは機に攻撃指示が下る。

春乱、操縦席

なのは「准将からの攻撃命令!行くわよ!!」

攻撃指示が下り、なのは機が岩礁に向けて、突撃する。

なのは「目標ロックオン!……誘導弾投下!!」

なのは機から岩礁に向けて、500ポンド誘導爆弾2発が投下された。

投下された500ポンド誘導爆弾2発は、目標の岩礁に向かって降下、岩礁を吹っ飛

ばした。

白鳳、艦橋

白鳳の通信主「岩礁への着弾を確認!」

龍之介「続けてミサイル攻撃!!」

誘導爆弾の着弾後、続いてミサイル攻撃を指示する。

春乱、操縦席

なのは「目標ロックオン!・・・ファイヤー!!」

又もなのは機から岩礁に向けて、93式空対艦誘導弾を発射した。

発射された93式空対艦誘導弾は、目標の岩礁に命中、岩礁を吹っ飛ばした。

白鳳、艦橋

『あっ・・・!?!』

龍之介「これが航空攻撃だ!」

航空攻撃を見て、真冬達は言葉が出なくなる。

そんな時

白鳳の通信主「准将!?!」

龍之介「如何した?」

白鳳の通信主「横須賀のブルーマーメイド本部より緊急入電です!!」

『!?!』

突然、横須賀のブルーマーメイド庁舎から緊急入電が入ってきた。

龍之介「内容は?」

電文の内容は、救助要請であつた。

内容によると、アメリカの大型豪華客船「オマハ号」がハワイの真珠湾から横須賀港に向かう途中、突然、低気圧に遭遇し暗礁に座礁した。

直ぐに横須賀からブルーマーメイドとホワイトドルフィンの救援部隊が出動しているが、時間が掛かる為、現場に一番近い龍之介達に救助を要請してきた。

功「如何しますか？」

龍之介「ん・・・」

救助に向かうか龍之介は悩む。

真冬「如何もこうもないだろう!!」

平賀「直ぐ救助に向かうべきです!!」

真冬達は、直ぐ救助に向かうよう龍之介に進言する。

薫「私も同感です！救助に行くべきです!!」

次郎「俺もだ！」

それに薫、次郎も同意するが

美由紀「待ちなさい!!」

『!?!』

美由紀「准将！我々は、救助に行くべきではないと思います!!」

美由紀は、逆に救助に向かうのに反対する。

次郎「何故だ権藤中佐!？」

薫「理由を説明して下さい!!」

薫と次郎は、何故反対するのか問う。

美由紀「それは・・・相手がアメリカの客船だからよ!」

薫「それが如何したんですか?救助するのに性別なんて、要らないでしょ!」

美由紀「よく考えて見なさい!!・・・我々の事は・・・この世界では、極秘になっているのよ!・・・もし係われれば、白鳳などの兵器の秘密がアメリカに漏れる恐れがあるわ!!」

アメリカの闇の恐ろしさを十分している美由紀は、この世界でも同じだと考えていた。

もし、我々の技術を獲得したアメリカが戦争を起こすかもしれない。

そうなれば我々の世界と同じになる。

美由紀は、恐れていた。

次郎「それは、買取りだろ!・・・第一、救助をただけで・・・俺達の事が漏れる訳無いじゃないか?」

確かに救助しただけでは、漏れる事はない。

だが

美由紀「それでも何れは、アメリカから・・・あれは、何かと聞かれるわ！・・・もしそうなれば、永久に隠す事が出来なくなるのよ！」

美由紀は、もしアメリカからの追及を受けたら、Gフォースの事を永久に隠せなくなる。

そうなれば何れ自分達は、この世界に殺されるかもしれない。

美由紀は、反対し続ける。

薫「じや見捨てるんですか？・・・沢山の人を目の前で助けを待てるのに・・・」

美由紀「それもやもおえないわ！」

次郎「ふざけるな!!俺達にそんな事が出来る訳ないだろ!!」

薫「例え、秘密が知られても、目の前にいる大勢の人々を助ける事が人間としてすべき事じゃないんですか？」

例え、秘密が知られても、目の前にいる大勢の人々を放とける訳がない。

2人は、助けに行くべきだともう一度主張する。

だが、美由紀は、断固として、首を振らなかつた。

真冬「もう良い！」

断固として、救助に向かうのを迷っている龍之介達に呆れた真冬は

真冬「私らだけでも救助に向かう！それが我々ブルーマーメイドの任務だからな！……行くぞお前ら!!」

『はー!』

自分達で救助に向かおうとする。

薫「待つて真冬！私も一緒に行くわ!!」

次郎「俺も行くぜ!!」

薫と次郎も真冬達と一緒に行く事を決意する。

美由紀「待ちなさい2人共!!……勝手な行動は、許されないわよ!!……命令に従いなさい!!」

美由紀は、2人を止め様とするが

次郎「命令なんてクソくらいだ!!……俺達は、救助に向かう!!……行くぞ薫!!」

薫「うん！行こう次郎君!!」

2人は、命令に背き真冬達と共に救助に向かう。

命令に背く事は、厳罰に処される事を意味する。

2人は、それを重々承知で救助に向かう。

その時

龍之介「待て！」

龍之介が2人を止める。

次郎「止めないでください准将!!」

龍之介「誰が止めると言った・・・救助に向かうぞ!!」

何と龍之介は、2人に救助に向かうと告げる。

美由紀「えっ!？」

龍之介の思わぬ言葉に美由紀は驚愕し

次郎「い、今何と？」

龍之介「聞こえなかったか・・・俺達も救助に向かうって言ってるんだ!!」

薫「はあ・・・!」

龍之介の判断に薫は、笑顔を露にする。

美由紀「待つて下さい准将!!・・・我々の秘密が国外に漏れる恐れが・・・」

龍之介「その時は、その時で宗谷監督官が何とかしてくれるだろ!」

美由紀「しかし!!」

龍之介「それに救助を要請しているのに無視する訳にもいかない!・・・俺達Gフォー

スの使命は、ゴジラから世界を守る事!・・・そして、民間人の救助もその一つだろう

!」

美由紀「ん・・・」

功「中佐！……貴方の言いたい事は分かりますが、今は、すべき事をすべきなのは？」

美由紀「ん……分かりました。」

すべき事をすべきの言葉に美由紀は、遂に承諾する。

龍之介「何をしている！……救助任務は、一刻を争うんだ！！……さつさと現場に向かうぞ！！」

『はいー』

龍之介の号令のもと、薫達は、急いで持ち場に戻る。

真冬「なあ、薫？」

薫「何？」

真冬「あいつにも良い所が有るんだな……見直したぜ！」

真冬は、龍之介の判断に感心した様だ。

次郎「そんなの当たり前だろ！！准将は、お前とは違うんだ！」

薫「もお次郎君たら、取り合えず頑張ろう真冬！！」

真冬「おう！」

こうして、Gフォース西部方面艦隊は、ブルーマーメイドの部隊と共に事故が起きている海域へと向かう事になった。

第11章 オマハ救助作戦

4月5日

Gフォース西部方面艦隊とブルーマーメイドの部隊は、事故海域へと急行していた。救助に備え空母大鳳の艦載機は、救助に使うE-2G、UH-1G、SH-60G以外は、全て格納庫に収容し、機密補充の為、民間人の立ち入りを禁止、衛兵を立つた。た。

艦内食堂も重傷者の搬入に備え臨時処置室に変わった。

弁天、みくらもスキッパー隊や内火艇の準備及び重傷者の搬入に備える。

一方、白鳳の方も機密補充の為、後方支援に回された。

次郎本人は嫌がっていたが、機密補充の命令が出た以上従うしかないと承諾した。

数時間後

空母大鳳、艦橋

薫「間もなく遭難海域に入ります！」

Gフォース西部方面艦隊とブルーマーメイドの部隊は、遭難海域へと足を踏み入れる。

はやて「目標を肉眼で確認！」

艦隊は、大型豪華客船オマハを肉眼で視認できる距離までたどり着く。

『!?!』

龍之介達が見たのは、嵐の中暗礁に乗り上げ航行不能となったオマハの姿だった。

オマハは、暗礁に乗り上げ、船体は、左に傾き、甲板には、何百人もの人が救助を待っていた。

その状況は、龍之介達や真冬達も艦橋から視認した。

空母大鳳、艦橋

龍之介「準備でき次第、直ちに救助を開始せよ！」

オマハの乗員救助が開始され、弁天、みくらからスキッパー隊が空母大鳳からUH-1Gが出勤した。他に海に流されている者がいないか確認する為、いずもの飛行船と空母大鳳のE-2GとSH-60Gが捜索に当たった。

UH-1G、機内

GF隊員「間もなく現場に到着します。」

UH-1Gがオマハの甲板の上空に到着し、なのは、フェイト達10人が甲板に降下した。

オマハ、甲板

なのは「ブルーマーメイドです！救助に来ました!!」
オマハの乗客「助かった!？」

フェイト「我々の指示に従ってください!!：：先ず重傷者の方から乗せますので：：」
一応、幼い子供や負傷者を優先にU H—I Gに乗せ、その間になのはとフェイト達は、艦内を捜索にあたった。

オマハ、船内

平賀「ブルーマーメイドです!!貴方々を救助に来ました!!」

一方、船外からも平賀達が内火艇でオマハに乗船、此方も重傷者を優先に内火艇に移す作業を開始、その間に他2人を率いて船内の捜索に当たった。

やがて

なのは「平賀さん!」

平賀「なのはさん!フェイトさん!」

救助隊は、上下から合流、共にオマハの船橋に向かう。

オマハ、船橋

平賀「ブルーマーメイドの安全監督室平賀二等監察官です!：：唯今から船内確認に入ります!」

オマハ船長「船内には、まだ乗員が残っている模様です。」

なのは「被害状況は、如何なっていますか？」

オマハ船長「はい……」

船長が言うには、火災は起きていないが、暗礁に乗り上げた時に船底に亀裂が生じ、其処から浸水している。

また衝撃で電気系統が故障、排水ポンプが作動不能で排水不能に落ちている。

その為、船底区画は保々浸水している。

居住区画あたりとかは、まだ浸水していないが

時間の問題である。

乗客には、既に避難命令を出しているが、区画の奥深くに取り残されている者も居るといふ。

平賀「分かりました……これから搜索に当たります。」

なのは「二つてに別れましょ！……私と平賀さんは、船首方向の搜索するから、フェイトちゃんは船尾方向の搜索をお願い！」

フェイト「うん！脅つけてね、なのは！」

なのは「フェイトちゃんもね！」

なのはと平賀は、船首方向の搜索にフェイトと他2名が船尾方向の搜索に行く。

空母大鳳、艦橋

薫「現状は、如何なってるの？」

その頃、空母大鳳の艦橋では、薫が現場の状況を無線で確認していた。

G F 隊員『甲板は、人で溢れています。ですが、避難は順調に進んでいます。』

薫「高町隊長とフェイト隊長は？」

G F 隊員『平賀さん達、ブルーマーメイド隊と合流し船内の捜索に行きました。』

薫「そう……引き続き避難活動を続行して！」

G F 隊員『了解！』

龍之介「代われ……山本だ……船体の進水状況は如何なっている？」

G F 隊員『船長とブルーマーメイドの救助隊の報告では……船底は、保々浸水して

います……各所でも浸水が広がっています。』

オマハにいるG F 隊員から船体の被害状況を聞く。

龍之介「どのくらいは持つんだ？」

G F 隊員『そんなに長くは、持たないかもしれません。』

龍之介「……引き続き避難活動を続行せよ！」

G F 隊員『了解！』

龍之介は、通信を切る。

もしかして、大惨事になるかもしれない、そんな不安を抱くが

龍之介「通信主！・・・他の艦に救助作業を急ぐ様に伝えろ!!」
実「了解！」

それでも龍之介は、やれる事をやるしかない、例え大惨事になっても隊員達が無事に戻ってくる事を願って

はやて（なのはちゃん・・・フェイトちゃん・・・）

はやても艦橋でなのはとフェイトの無事を祈っていた。

オマハ、甲板

一方、救助作業が行われているオマハ甲板では

GF隊員「落ち着いてください!!順番に乗せますので如何か・・・」

オマハの乗客「何で、俺を乗せない!？」

GF隊員「慌てなくても乗せます!!」

オマハの乗客「早くしろよ!!」

GF隊員「押さないで下さい!!」

甲板に居た乗客は慌てふためいていたが、避難は順調に進んでおり、重症者やお子さんなどを優先にUH—1Gに乗せる。

満員になったUH—1Gは、上空に上がり、そのまま空母大鳳といずれもに着艦し、艦内に収容し、またオマハに戻る。

ブルーマーメイドの方も数隻の内火艇でU H—1 Gと共同して、船側の入り口から乗客を救助し、待機している弁天、みくら、浪速に収容された。

海に投げ出された乗客もE—2 Gと飛行船が搜索し、見つけ次第、S H—60 Gとスキッパー隊に連絡し救助をしてもらう。

G フォースとブルーマーメイド、訓練はしていないが、雅に連携した救助作業である。オマハ、船内

その頃、船首の搜索に行った平賀となのはは

平賀「早く上へ！・・・急いで下さい!!」

乗客を上へと平賀が誘導する。

なのは「もう、こっちには居ないね？」

なのはは、乗客が居ない事を確認する。

ピ・・・ピ・・・

その時、なのはの携帯無線機に連絡が入る。

フェイト『なのはは!』

なのは「フェイトちゃん! 如何したの?」

船尾方向の搜索に行ったフェイトからの通信だった。

フェイト「こっちの方は、保々避難が完了!」

なのは『了解!・・・こつちも保々終わり!・・・今から、そつちに戻るね!』

フェイト『ん!じゃ、甲板で合流ね!』

なのは「了解!」

なのはは、通信を切る。

なのは「平賀さん!・・・船尾方向の避難は、保々終了したとの事です!」

平賀「じゃ戻りましょ・・・」

なのはと平賀が甲板に引き揚げようとした。

その時

なのは「ん!?!」

突然、なのはが立ち止まった。

平賀「なのはさん如何したんですか?」

なのは「今声でしたんだけど・・・」

平賀「え?・・・何も聞こえませんか・・・」

平賀には分からなかったが、なのはには聞こえていた。

なのは「ん・・・やっぱり聞こえる・・・こつちの方から!」

なのはは、声がる奥の方へと向かう。

平賀「な、なのはさん!!」

なのは「先に行って下さい!!直ぐ追い掛けますから・・・」
そう言つて、なのはは、奥へと行つてしまう。

平賀は、仕方なく先に甲板に上がる。

オマハ、甲板

甲板では、乗客が既に各艦に收容され、最早半数しか残っている程で、それも最後の
へりに乗せる途中だった。

G F 隊員「フェイト隊長!」

フェイト「こっちは、どお?」

G F 隊員「乗客の收容は、これで最後です!!」

フェイト「そう・・・」

平賀「フェイトさん!」

フェイト「平賀さん!・・・あれ、なのはは?」

平賀「なのはさんは、後から追いかけるつて、言つて・・・」

フェイト「雅か!?!まだ中に?」

平賀「はい!」

フェイト「ん・・・」

平賀から、なのはがまだ中に残っていると聞いて、フェイトは、不安そうなのはの

帰りを待つ。

オマハ、船内

その頃、なのはは

なのは「何所にいるの？」

なのはは、声がる方向を必死に探していた。

なのは「何所？」

電気系統が破壊されている為、辺りが暗い、探すに困難を招じていたが、それでもな

のはは、必死に探す。

少女「ママ・・・」

なのは「あっ!？」

すると通路の隅に小さいウサギのぬいぐるみを抱いた9歳の少女が蹲っていた。

少女「ん・・・」

少女に近寄る。

なのは「大丈夫!・・・怪我はない？」

少女「ママ・・・」

なのは「あっ!？」

少女は、怪我はないが、如何やら親と逸れたらしい。

少女「ママ……うわあ……!!」

ママが居ない事に少女は、大泣きしてしまう。

なのは「ああ、ほら泣かないで……」

大鳴きする少女を何とか慰め様とする。

なのは「大丈夫だよ!……直ぐママに会えるから……泣かないで!」

なのはは、少女の頭を優しく撫でる。

少女「う……う……」

少女は、撫でられた成果、だんだん泣くのを止め、大人しくなった。

なのは「よし!……取り合えず此処から出ましようね……安全な所まで一直線

だから!!」

その時、大きな揺れが2人を襲った。

なのは「あっ!?!」

少女「……」

なのはは、少女を抱いて、甲板へと急ぐ。

突如、オマハは大きな揺れと共に沈み始めた。

空母大鳳、艦橋

その状況は、空母大鳳の艦橋でも視認した。

薫「准将!? オマハが沈みます!!」

龍之介「各救助隊は、直ちに撤収しろ!! . . . 急げ!!」

このままでは、救助隊が沈没に巻き込まれる。

龍之介は、直ちに救助隊の撤収命令を出す。

オマハ、甲板

G F 隊員「フェイト隊長! 平賀監察官! . . . 急いで下さい!!」

G F 隊員がフェイトと平賀に急いで最後のへりに乗るよう言う。

もう乗客も居ない、全て各艦に収容され、もう残っている者は居ない。

だが

フェイト「待つて!! まだなのはが中に . . .」

なのはがまだ捜索から戻ってきていない。

このままなのはを置いてはいけない。

G F 隊員「時間がありません!!」

平賀「彼女を置いてはいけない!!」

2人は、必死になのはの帰りを待つが、状況は更に悪化しており、最早待つていられない。

G F 隊員「もう待てません!! 早く乗って下さい!!」

フェイト「なのは……」
最早諦めようとヘリに乗ろうとした。

その時

なのは「フェイトちゃん!!」

少女を抱いたなのはが走って戻ってきた。

フェイト「なのは!？」

平賀「なのはさん!？」

フェイトと平賀は、なのはが戻って来た事に少しホツとする。

GF隊員「何をしてるんです!!早くして下さい!!」

4人を急いで乗せる。

GF隊員「いいぞ!!出せ!!出せ!!」

なのは、フェイトと平賀、それに救助した少女を収容したUH-1Gは、急いでオマハの甲板から離れ安全空域へと上昇する。

安全空域へと上昇した後、オマハの船体は急激に左に横転し沈没した。

平賀「危なかった!？」

雅に危機一髪だった。

少しでも引き揚げが遅かったら、巻き添いを食っていた可能性大だった事に3人は唾

然とする。

空母大鳳、艦橋

なのは『此方なのは!』

薫「なのはちゃん!?!」

なのは『救助は無事に完了しました・・・唯今から帰還します。』

なのは達からの通信を聞いて、

はやて「良かった無事で!」

薫「はは・・・了解!」

薫は、喜びながら通信を切り

薫「准将!」

龍之介「・・・」

薫「高町隊長以下救助隊、全員無事です。」

救助隊の無事を龍之介に報告をする。

『!?!』

報告を聞いて、艦橋は歓喜に沸く。

龍之介「そうか・・・ご苦労だった。」

しかし、龍之介は、あまり笑顔にはならなかった。

救助隊無事の報告は、弁天やみくらにも伝えられ、真冬と福内は大喜びした。

その後、ブルーマーメイドとホワイトドルフィンドルフィンの救助隊が到着したが、やはり時間が掛かり、我々が救助を拒んでいたら、大惨事になっていただろう。

空母大鳳やその他の艦艇に収容されていたオマハの乗客は到着した救助艦に移された。

数時間後

乗客の移しが完了した後、Gフォース西部方面艦隊とブルーマーメイドの部隊は、横須賀へと帰還のちに着いた。

第12章 宗谷家での生活 2 (横須賀女子海洋学校見学!)

4月8日

宗谷家、リビング

薫「はあ〜」

オマハの救助から数日後、薫は、1ヶ月間の謹慎処罰を食らっていた。何故なら、今回の救助任務で命令違反と職場放棄があつたからである。

薫だけじゃない、次郎も同じ様に2週間の謹慎処罰を食らっている。

本来なら厳罰だが、今回の命令違反で結果的に大惨事を免れた。

しかし、命令違反と職場放棄の処罰は受けらなければならない。

龍之介は、2人に、1ヶ月間の自宅謹慎を命じた。

薫「まあ、謹慎は仕方がないよね!」

薫は、リビングでテレビを見る。

テレビでは、オマハの座礁事故の事が取り上げられていた。

映像には、救助された乗客や救助を行ったブルーマーメイド達が映っていた。

残念ながら、映像には、薫達Gフォース達の姿は無かった。何故なら、真霜や深町国交相の力により、マスコミや新聞などには、報道管制を敷いて、機密にした。

その為、公開された映像には、Gフォースの姿を削除して、公開している。そんな時

真雪「薫さん！」

薫「あつ、真雪さん!?!」

テレビを見ていると真雪が来た。

真雪「今回の救助では、大活躍したわね！」

真雪は、今回の救助で活躍した事を褒め称えるが

薫「いえ、別に活躍なんて・・・私は、何もしていませんから！」

確かに活躍したのは、なのはやフェイト達救助隊で薫達艦橋組は、何もしていない。

真雪「でも貴方達のお陰で被害を最小限に防いだのよ!・・・これは、貴方達の立派な功績よ！」

薫「ありがとうございます。」

真雪「それで今日は、貴方に見せたい場所があるの！」

真雪は、薫を何所かに連れて行く様だが

薫「私に?・・・でも私は、謹慎中ですけど・・・」

薫は、謹慎中の身で、何処にも行けなかった。

だが

真雪「それなら大丈夫!・・・龍之介さんから許可は貰っているから・・・どうせ謹慎中は、貴方が暇そうにしているから・・・どうぞご自由にだそうよ!」

薫が謹慎中だって事は、真雪は知っていたので、予め龍之介から、許可を貰っていたのだ。

薫「そうですか・・・ハハハ・・・」

(兄さんたら・・・私は、ペットじゃないんだから・・・)

薫は、龍之介の言葉に呆れてしまう。

真雪「それじゃ行きましようか!」

薫「はい!」

こうして、真雪は、薫のある場所へと連れて行く。

宗谷家を出て、港で用意されたクルーザに乗り、ある場所へと向かう。

クルーザ

薫「何所に向かうんですか?」

真雪「着いてからのお楽しみよ!」

何所に向かうと聞いたたら、着けば分かるという。

そして、クルーザーがフロートの民間港エリアの栈橋に接触した。

横須賀女子海洋学校、正門

クルーザーを降りて上へと通じる階段を上がり、とある正門へとたどり着く。

薫「此処は……何所ですか？」

真雪「横須賀女子海洋学校よ！」

薫「此処が……横須賀女子海洋学校!？」

横須賀女子海洋学校

ブルマーメイドの養成学校であり、真霜や真冬、平賀、福内が学んでいた場所である。

真雪「そうよ。」

真雪と薫は、校門を抜け学校の敷地に入る。

すると

女性教員「校長！」

真雪「!？」

1人の女性教員がやって来た。

薫「あの真雪さん!……其方の方は？」

薫は、誰かと尋ねる。

真雪「此方は、この学校の指導教官の古庄 薫二等監督官!」

古庄「初めまして、古庄です。」

彼女の名は、古庄 薫。

横須賀女子海洋学校の指導教官で、後に薫に大きな影響を与える人物である。

薫(薫って・・・私と同じ名前!)

薫は、古庄と同じ名前だと言う事に驚きながら

薫「初めまして!私は、山本薫です!」

古庄に自己紹介する。

古庄「ああ、貴方が!校長から話は聞いています!」

薫「はあ・・・」

真雪「古庄教官!・・・彼女に校内を案内して頂戴!」

古庄「分かりました。」

真雪「じゃ私は、要があるから、薫さんまた後で・・・」

薫「あつ、はい!」

真雪は別の用事がある為、学校案内を古庄に任せ、校舎内に去って行き、薫と古庄だけが残った。

古庄「では、校内を案内しますね薫さん!」

薫「よろしくお願いします。」

古庄「フフフ」

薫「何が可笑しいですか？」

古庄「いえ、御免なさいね！……真霜から聞いた通りの人物ね！」

薫「えつ、真霜姉さんから!?……失礼ですが、貴方と真霜姉さんは、如何いう関係なんですか？」

古庄「学生時代の後輩よ！」

実は古庄は、この横須賀女子海洋学校の出身であり、真霜の先輩でもある。

薫「そうだったんですか!?……すみません。」

古庄「良いのよ！それよりも……」

薫「あつ、そうでした……学校見学お願いします。」

古庄「じゃあ行きましょうか？」

そう言うと薫は古庄の案内の元、横須賀女子海洋学校の学校案内が始まる。

古庄「先ず我が校について説明します！」

歩きながら横須賀女子海洋学校の説明をする。

古庄「この横須賀女子海洋学校は、ブルーマーメイドの養成学校の一つで……此処では、ブルーマーメイドになる為に必要な知識や艦の技術などを3年間学びます……他

にも呉、舞鶴、佐世保に4校あります。」

薫「これと同じ学校が4校も!？」

ブルーマーメイドの養成学校が4校ある事に驚く。

薫達の世界にも、国防軍の学校が4校ある。

江田島の海士学校、岩国、太刀洗の航空士学校、久留米の陸士学校がある。

因みに薫は、次郎と同じ江田島の海士学校の出身である。

薫「航海実習は無いんですか？」

古庄「勿論!・・・入学して、直ぐに海洋実習があります・・・艦に1クラスが乗って共に学びます」

薫「大体私が学んだ所とカリキュラムは同じですね・・・」

薫は、横須賀女子海洋学校のカリキュラムが江田島の海士学校と同じだと理解する。

古庄「向こうの世界の学校ですか？」

薫「えっ!？」

古庄からとんでもない言葉を聞いて、薫は驚愕する。

古庄「惚けなくても大体の事情は、宗谷校長から伺っているから・・・」

薫「えっ!・・・じゃ私達が別の世界から来た事ですか？」

古庄「ええ!」

薫「ええ・・・!?」

古庄が薫達の事を知っていたので、機密情報が漏れているとビックリする。

古庄「大丈夫!・・・私は、機密に触れる資格を持っておりますので・・・」
如何やら、機密に触れる資格を持っている様だ。

薫「そうですか・・・良かった・・・」

機密が守られてるのを知り、薫はホツとし、見学を続ける。

古庄「そして、此処が我が校の本校舎です。」

薫は、本校舎を見て驚愕する。

薫（これが校舎!?!・・・私が学んだ江田島の海士学校の校舎に似てる・・・）

レンガ造りの校舎、正しく薫や次郎が学んだ向こうの世界の江田島国防軍の海士学校の校舎に似ていた。

古庄「如何したんですか？」

薫「いえ、その・・・私が学んだ校舎によく似ていたので・・・」

薫は、校舎内に入る。

横須賀女子海洋学校、廊下

校舎に入ると、其処で見た物は、懐かしの江田島の海士学校の廊下と教室。

薫は、教室のドアからそつと覗くと、其処には、可愛いセーラー制服を着た女子生徒

が一生懸命勉強してるのが見えた。

薫「皆・・・頑張ってるの勉強してますね・・・」

古庄「彼女達は、来年で卒業なのよ・・・」

薫「そう何ですか・・・」

そう言つて薫はバレない様に彼らを見る。

薫(真霜姉さんや真冬も・・・此処でこうやって勉強してたんだ・・・私達と同じ様に・・・来年は、ましろちゃんが此処に入学するけど・・・大丈夫かな・・・)

薫は、この前のましろの模擬テストの点数を見た時の事を思い出した。

一応対策は教えたけど、後は、本人の頑張り具合。

古庄「では、次の場所に参りましょう。」

薫「はい!」

薫と古庄は、教室を後にする。

それから教員室や校長室を案内して、2人は校舎を出る。

校舎を出て講堂へと向かう。

横須賀女子海洋学校、講堂

古庄「此処が講堂です!」

薫「こ、これは!?!」

この講堂も向こうの江田島と同じ鉄骨煉瓦石造の大講堂によく似ているが、中は、まるでスポーツを行うスタジアム見たいな作りになっていて、下には、インベーターゲームの様なテーブル機器が3つ設置されていた。

薫は、講堂の中を見ながら、そのテーブル機器をまじかで見ると

薫「これは、一体何ですか？」

古庄「これは図上演習用のシミュレーションシステム機器です。」

如何やら、このテーブル機器は、図上演習用のシミュレーションシステム機器の様だ。

薫「図上演習!?!」

薫は、図上演習用の機器だと聞き、機器を操作して見た。

機器を操作すると画面には、演習に使う艦艇や編成が記載されていた。

薫「空母が無い……まあ当然か!」

薫は、演習に使う艦艇の中に空母が無い事に気づく。

まあこの世界では、航空機が無いので、空母を基準とした図上演習が無いのだろうと薫は理解する。

実は、薫は図上演習は得意分野で、特に空母を使った航空戦術が得意である。

だが、薫より一番航空戦術が得意なのは、龍之介である。

その理由は、後から分かる。

薫は、講堂を後にし、先に向かう。

横須賀女子海洋学校、地下ドック

そして、古庄に案内されエレベーターに乗って地下に降りた。

薫「今度は何ですか？」

古庄「見てからのお楽しみです！」

そう言うのとエレベーターは地下に到着して、エレベーターから出た薫が見た光景は

薫「これは!?!・・・地下にこんな施設が有るなんて・・・」

薫が見た光景は、横須賀女子海洋学校の地下にある内部ドックだった。

古庄「驚きましたか？」

薫「え、ええ・・・」

広大な広さの内部ドックには、多種多様な艦がドック入りをしており、修復点検作業が行われていた。

古庄「このドックは、教育艦が浦賀水道を通る民間船や貨物船やタンカーなどの邪魔にならない様に作られ・・・学生達に自分が乗る艦の点検もできる様に最高の施設を用意しています。」

薫「こんな施設は、私達の世界にはない!・・・雅に先を行っているわ!?!」

航空技術や光学技術は、薫の世界が先を行ってるが、フロート技術やこの様

な施設を作る技術は、あまり無い。

古庄「では次に行きますか？」

薫「そうですね・・・」

そう言うのと次に行ったのは、学生寮で此処も立派で薫も関心してた。

学生寮を見学して、その後、各術科の先生教育棟の見学をした。

横須賀女子海洋学校、食堂

見学を終えた薫は、学生食堂で古庄と昼食をとる。

古庄「今回の学校見学は、如何でしたか？」

薫「ブルーメーメイドの養成校あって、中々良い学校ですね・・・まあ、流石に私達の学校には及びませんけど・・・施設の一部分などが雅に未来的な物ばかりで驚きました。」
確かに授業や実習のカリキュラムについては、国防軍の養成校の方が上であるが先見た地下ドックなどは、国防軍の養成校にはない施設ばかりがある。

古庄「それは、良かったですね！」

薫「はい！」

2人は、学生食堂で注文した横須賀女子特製カレーを食べる。

古庄「・・・」

古庄がカレーを食べる薫をジッと見る。

薫「何か付いてますか？」

古庄「真霜が良いを通りの人ね！」

薫「何がですか？」

古庄「気にしなくて良いわ！・・・大した事じゃないから・・・」

薫「はあ・・・」

古庄「そう言えば！」

薫「はい？」

古庄「貴方見たいな人が、何故軍人に？」

古庄は、薫が何故軍人になったのか聞く。

薫「私がGフォース隊員になった理由ですか？・・・聞いてもあまり面白くない話ですよ・・・」

古庄「ちよつと興味があるから・・・」

薫「じゃ、話しますね！・・・私は、元々軍人には、なる気はなかったんです。」

薫は、本当は、軍人になる気はなかった。

古庄「やっぱりね！」

薫が元々軍人の器ではない事は、古庄は、見抜いていた様だ。

薫「え？」

古庄「そう言う風な感じに見えたから……で？」

薫「あつ、兄さん……私の上官何ですけど……その人にいつも守られているのが、私なりに嫌になつて……」

古庄「それで？」

薫「それで、私も強くなるうと思つて……兄さん見たいな軍人になろうと勉強して……その成果のお陰で江田島の海士学校に主席で入学しました。」

古庄「優秀なのね！」

薫「でも無いです……主席なのに、編入したクラスがそよかせクラスと言う落ちこぼれなどを集めたクラスで……いつも他のクラスと衝突してたし、実習に使う練習艦もオンボロで……」

古庄「貴方見たいな人が、何故、その落ちこぼれクラスに？」

古庄は、何故薫見たいな成績優秀者が落ちこぼれなどを集めたクラスに編入されたのか聞く。

薫「それが……何と言うか……編入させた教官が……私や他の連中が自らクラスをまとめられるか、試したかたんだそうです。」

薫は、編入された理由を説明する。

古庄「成程！……その教官は中々の優秀ね！……でその後、如何なつたの？」

薫「勿論、色々大変でしたよ!・・・特に副長とは仲が悪くて何時も喧嘩ばかりしてたけど・・・一緒に行動していると・・・段々、そんな事が無くなってきて、気づいたら、仲が良くなってたんです!!・・・そのお陰でクラスも段々まとまる様になって・・・卒業の時には、他のクラスより成績は、主席に成ってたんで・・・」

古庄「結局、その教官の目論みは、見事に成功したという事ね!」

薫「まあ、そうなんですよね・・・卒業して直ぐにGフォースに入りましたけど・・・」
古庄「大変だったけど、例外と頑張ったのね!」

薫「ありがとうございます・・・じゃ同じ事を聞きますけど・・・古庄さんは、何故教官になったのですか?」

今度は、薫が古庄に何故、何故教官になったのか聞く。

古庄「私が教官になった理由ですか?・・・私は、元々この横須賀女子海洋学校に入学した時は成績とかもあまり良くなかったのです・・・」

薫「えっ?!そんなんですか?」

薫は、古庄を見て、とてもそうわと思えなかった。

古庄「必死に努力しても上に上がって、一度挫折を味わいました・・・でもその時、私に救いの手をかけてくれたのが・・・今の宗谷校長です!!」

薫「真雪さんが!」

古庄「ええ・・・その時、宗谷校長は、ブルーマーメイドの実働部隊から教官に転職したばかりで、まだ校長ではありませんでした・・・宗谷校長は、私に救いの手をかけてくれて、それから宗谷校長のもとで必死に勉強をし・・・そして、どんどんと成績も上がっていき、最後には教育艦の艦長になれるまで指導して頂いて・・・艦長になつてからも宗谷校長からブルーマーメイド時代の艦長経験談などを聞かせてもらつて艦長の心得も教えてくれました。」

薫「そうなんですか・・・因みにその艦長の心得は、どんな心得なんですか？」
薫は、真雪が言う艦長の心得とは何か問う。

古庄「そうですね・・・『艦のトップになるものは人をよく見極めて、その人が最大限に力を発揮できる仕事に就かせるようして力を発揮させる』ですね！」

薫「成程！真雪さんらしい言葉ですね！」

薫は、真雪が言う艦長の心得を聞いて、関心する。

古庄「それから私は卒業して、ブルーマーメイドの任務部門で勤務になり・・・其処で実務経験を積んで・・・その後、指導力の高さを買われて救難支援部門に移動・・・育成学校の教官となり・・・そして宗谷校長から此処の教官にならないかと誘われました。」
薫「古庄さんも良い人に恵まれましたね！」

古庄「そうですね・・・私も宗谷校長が居なければ、今こうして生徒に教鞭も取る事

はできなかつたでしょう。」

薫「私も今の仲間達が居なければ、今こうして艦長として居なかつたかも・・・」

古庄「お互い似た者同士ね!」

薫「そうですね!」

2人は、雅に同じ名前の似た者同士だった。

その後、残りの学校見学を終え

薫「では、古庄さん!・・・今日は、ありがとうございました!!・・・とても良い学校見学ができました。」

古庄「此方こそ・・・また会える日を楽しみにしています・・・では!」

そう言つて、古庄は、校舎内へと去つていった。

薫「さて、私も・・・あれ?」

薫も校長室に行こうとした時、近くに一匹の大きなドラ猫がいた。

「ぬう!」

ドラ猫は据わつた目つきで薫をジツと見ている。

薫(学校で飼われている猫なのかな?)

野良猫にしては体格が大きいので、薫は、学校で飼われている猫なのだと思つた。

これが薫と五十六との出会いであつた。

薫は、五十六に手を伸ばし、頭を撫でて見た。

五十六「ぬう・・・ぬう・・・」

五十六は、気にする様子も無く、その場に寝転がる。

薫（やっぱり学校で飼っている猫か・・・それにしても可愛い猫・・・）

薫は、大の猫好きだったから、しばらく五十六を撫でると、五十六は寝転がるのを止め、何所かへと行ってしまった。

薫「さて、私も行かないと・・・」

薫も校長室へと向かう。

それから校長室で真雪と教頭から色々話を聞き、宗谷家へと帰宅する。

宗谷家

龍之介「ただいま！」

龍之介が帰宅する。

今日は、横須賀のブルーマーメイド庁舎で真霜達と協議しただけなので、普通に帰宅した。

薫「お帰り兄さん!!」

帰宅した龍之介を薫は笑顔で迎える。

龍之介「何か良い事でもあったのか？」

薫「うん!・・・今日は、ありがとうね兄さん!!」

龍之介「礼は良い!・・・お前の再就職候補として、真雪さんをお願いしたまでだ!」
薫「えっ!?!・・・如何いう意味よ再就職候補って・・・」

龍之介「お前がGフォースを辞めた時に再就職先として考えているんだが・・・」

実は、龍之介が何故、薫に横須賀女子海洋学校を見学させたのか

それは薫がGフォースを辞めた時の再就職候補として、龍之介が真雪に頼んだ様だ。

薫「勝手に決めないでよ!私は、まだ辞めないわ!!」

如何やら薫は、辞める気は無い様だ。

だが、何れ薫の力が横須賀女子海洋学校の海洋実習で必要になる時が来るだろうと

は、薫自身思いもよらなかつた。

第13章 命の理由 前編

4月10日

薫と次郎が1ヶ月間の謹慎処分を受けている頃

ブルーマーメイド庁舎の専用車、車内

なのは「すみません平賀さん！・・・車出して貰っちゃって・・・」

なのはは、平賀と一緒に横須賀の病院に向かっていた。

目的は、救助した少女のお見舞いである。

平賀「いえ、どうせ車は庁舎の借り物ですし・・・それに私が仲介した方が良いでしょう。」

なのは「それにしても平賀さん！・・・検査が終わったら、あの子は如何なるんですか？」

少女の今後について問う。

平賀「ん・・・大抵は・・・親戚に引き取られるんですけど・・・あの子には、親以外親戚がないそうですから・・・」

実は、救助した少女の両親については、平賀さんに生存者名簿を調べてもらったが、生

存者名簿に名前は無く、念の為、死亡者名簿を調べたら、その子の両親の名前が記載されていた。

それを知ったなのは、平賀さんに頼んで少女のお見舞いに行く事にした。

なのは「じゃ養護施設に送られるんですか？」

平賀「そう成りますね・・・」

なのは「ん・・・」

平賀の話聞いて、なのはは、不安を抱く。

会って、如何するの？

自分に何が出来るの？

そう考えていたからだ。

横須賀病院

やがて、車は病院に着き、平賀となのはは、受付まで行くと

横須賀病院、受付ロビー

女性看護師「平賀監察官!!」

『ん!?!』

受付中に突然、女性看護師が訪ねてきた。

平賀「如何されたんですか!?!」

平賀は、看護師に如何されたのか問う。

女性看護師「すみません!!・・・此方にふてぎあが有りまして・・・」

なのは「何が有ったんですか?」

女性看護師「検査の間に・・・例の少女がいなくなりました!!」

『えっ!?!』

如何やら、検査の間に看護師が少し離れた隙に逃げだした様だ。

女性看護師「申し訳ありません!!」

女性看護師は、深々と頭を下げる。

それを見て、なのはと平賀は

なのは「頭を挙げて下さい。」

平賀「取り合えず状況を説明して下さい!?!」

女性看護師から状況を聞く。

女性看護師「はい!」

それを聞いて、女性看護師は、状況を説明する。

女性看護師「既に・・・この病棟一帯の搜索は終えたんですが・・・未だに見つ

ていません。」

病棟の搜索は終えていたが、少女は、未だに見つかっていなかった。

なのは「入口には、警備員がいますから、外には出られないんですよ？」

病院の入口には、防犯の為、警備員が巡回している。

万が一、少女が外に出る事は、あり得ない。

女性看護師「はい！・・・この近辺に居るのは、間違いありません。」

後は、この近辺に居る筈。

それを聞いた2人は

平賀「分かりました・・・私達も捜索に加わりませう。」

女性看護師「お願いします！」

なのはと平賀は、捜索を開始した。

平賀と女性看護師は、もう一度、病棟を

なのはは、中庭を探す事にした。

横須賀病院、中庭

中庭は様々な植物が植えられていて、入院患者の精神を癒す役割があった。

なのはは、中庭周辺を隈なく探す。

そして、ベンチの下などを探していた時だった。

なのは「!？」

前の草むらのが突然、動き

なのは「あっ!？」

すると、草むらの中から、1人の少女がウサギのぬいぐるみを抱えて現れた。
金髪の少女!？」

間違はなく、あの時に保護した少女だった。

なのは「ああ、こんな所にいたの?」

なのはは、少女に近づく。

少女「ん・・・」

少女は、怯えていた。

なのは「久しぶりだね!心配したんだよ!」

なのはが笑顔で、その少女に近寄ろうとした時

平賀「なのはさん!」

と声が聞こえて、平賀と女性看護師が割り込んできた。

少女「はっ!？」

突然、割り込んだ平賀に驚いたのか、少女は尻餅を突いた。

少女「うあ・・・うあ・・・」

少女は尻餅を突いたのと、初めて見る大人が怖かったらしく、少女は泣きそうになる。
それを見たなのはが

なのは「待つてください平賀さん！……此処は、私に任せて貰えますか？」
自分に任せてほしいと平賀に頼む。

平賀「は、はい……」

少女の事をなのはに任せて、平賀と女性看護師は後ろに下がった。
それを見て、なのはが落としたウサギのぬいぐるみを拾い。

なのは「御免ね……怖がらせたね……大丈夫？」

優しく言いながら、少女に落としたウサギのぬいぐるみを渡す。
すると

少女「ん……あっ！」

泣くのを止め、落ち着いた顔をする。

なのは「立てる？」

なのはは、優しい表情で問うと、少女は自力で立つ。

なのはは、少女の服に付いた土を叩く。

なのは「如何やら……突然知らない大人が来たから、びっくりしてしまった様です
！……子供って、人に対して敏感ですから……」

平賀「はあ……」

そして、なのはは、少女に視線の高さを合わせて

なのは「初めましては、ちよつと変よね、一度会つてるから……私は、高町なのはつて言います……お名前、言える？」

少女に自己紹介をする。

すると、少女は

少女「ヴィヴィオ……」

眩く様に、名前を告げた。

それを聞いたなのは

なのは「ヴィヴィオ!? ……良いね! ……可愛い名前だね!」

優しくヴィヴィオの頭を撫でた。

なのは「ヴィヴィオ! 何所か行きかけたか?」

なのはは、ヴィヴィオに何故姿を消したかを問うと

ヴィヴィオ「ママ! ……居ないの?」

如何やら、ヴィヴィオは自分のママを探してた様だ。

なのは「あっ!?!」

それを聞いたなのは

なのは（両親が死んだ事は、まだ知らないんだ……なら今、言わない方が良いでしょう

ね……）

両親が死んだ事は、ヴィヴィオには黙っておく事にした。

なのは「ああ、それは大変！……じゃ一緒に探そうか？」

ヴィヴィオ「うん！」

なのはは、ヴィヴィオの手を優しく握り、平賀の元に行く。

なのは「平賀さん！……検査が終わった後は、寮に連れて帰って良いでしょうか？」

検査が終わったらヴィヴィオを寮に連れて帰る事を平賀に許可を貰おうとする。

平賀「それは構いませんけど、如何するんですか？」

なのは「里親が見つかるまで、私が預かります。」

このまま、養護施設に送られても、幼いヴィヴィオの精神が耐えられないだろう。

ならば、里親が見つかるまで、なのはが寮で預かる事を平賀に提案する。

平賀「分かりました。」

なのはの提案に平賀は承諾する。

横須賀基地

その頃、横須賀基地では

はやて「はあゝ」

基地の廊下を歩きながら、はやては、何故か溜息をしていた。

Fayette「如何したのははやて？」

はやて「いやなあ．．．薫先輩が謹慎してもうたから．．．副長として、私が艦の指揮を取らなきや行けなくなつてもうた。」

はやては、薫が謹慎を言い渡されてから、艦長代理として、指揮を取っているが、やる事が多くなつて、駄々をこね始めていた。

フェイト「仕方ないよ!．．．それが副長としての務めなんだから．．．」

はやて「フェイトちゃんは、厳しいなあ．．．」

『フフフ』

2人は、お互い意気投合した。

はやて「そう言えば、今日は、なのはちゃんは、一緒とちやうん?」

フェイト「今日は、平賀さんと一緒に病院だけど．．．もう帰つてきていると思うよ!」

フェイトは、携帯でなのはに連絡しようとした。

その直後

『ああああ．．．!!いつちややだああ．．．!!』

女の子の泣き声?

ヴィヴィオの泣き叫ぶ声が聞こえた。

『あっ!?!』

余りに予想外だった為に、2人は固まった。

しかし、よく聞くと

平賀『ほら、お姉さん達と遊びましよう!』

福内『だ、大丈夫だからね!』

と平賀と福内の焦っている声も聞こえた。

すると、一番早く立ち直ったフェイトが

フェイト「えつと・・・何の騒ぎ?」

するとなのはが、困った顔で

なのは『えつと・・・助けて!!』

それを聞いた2人は、なのはが居るブルーマーメイドの寮に向かいながら、状況を聞いた。

病院からヴィヴィオを引き取り、ブルマーの寮の自分の部屋に連れて行き、其処で寮母の愛奈さんに連絡して、ヴィヴィオの事を任せようと仕事に戻ろうとしたが、それに気づいたヴィヴィオがなのはの足にしがみ付いて、泣き叫び始めてしまったのだという。

なお福内だが、平賀がヴィヴィオに顔合わせの意味も兼ねて呼んだのだが、ヴィヴィオの大泣きに、右往左往する事しか出来なかった。

フェイトが携帯を繋げたのは、雅にその直後だったのだ。

ブルーマーメイドの寮、なのはとフェイトの部屋

部屋に到着し、状況を見たはやてが

はやて「エースにも、勝てない事があるんやねえ!」

と情けない表情を浮かべているなのはを見て、そう告げた。

すると、なのはが

なのは「フェイトちゃん! はやてちゃん! . . . お願い助けて!!」

なのはは、フェイトとはやてに救援を求めてきた。

それを聞いたフェイトは、足下に転がっていたうさぎのぬいぐるみを持って

フェイト「こんにちは!」

とヴィヴィオに声を掛けた。

ヴィヴィオ「えっ!?!」

それは明らかに、慣れた様子だった。

その証拠に、ヴィヴィオに視線を合わせるためにしゃがんでいる。

それを見て、平賀と福内が

平賀「うわあ!?! . . . フェイトさん、慣れてるわ!!」

福内「本当ね!?!」

子供の面倒に馴れているフェイトに驚く。

はやて「フェイトちゃん！・・・面倒見良いからねえ・・・」

平賀「そうなんですか？」

はやて「昔はお孫さんの面倒も見たそうやし・・・」

福内「へえ・・・」

2人は、フェイトを見て、感心する。

こうしている間に、ヴィヴィオは泣き止んで、なのはから離れていた。

如何やら、フェイトが説得に成功したらしい。

その後、慌てて寮母の愛奈さんが来て、ヴィヴィオの事を任せ、なのは達5人は仕事に戻る。

横須賀基地、空戦シミュレーション室

此処は、横須賀基地の一部に設けられたGフォースの搭乗員の訓練用空戦シミュレーション室。

訓練に必要な機器や道具は、真霜の許可を得て、設備開発部から必要な物と戦闘データは、空母大鳳からこれまでゴジラ戦で経験で取得した戦闘データを持って来て、慶介の協力で完成した仮の訓練施設。

今日は、なのは達がレベル5の空戦シミュレーションを受けていた。

なのは「じゃ、今日は此処まで！」

『お疲れさまでした!!』

シユミレーション訓練を終えた、なのはが寮に戻ろうとした時

功「高町大尉!!」

後ろから、功が近づいてきた。

なのは「参謀？」

功「准将から至急、指揮官室に来る様にと・・・」

なのは「准将が！何でしょうか？」

功「詳しい事は、行けば分かる。」

なのは「ん・・・分かりました。」

何かと思ひ、なのはは、基地の指揮官室に赴く。

横須賀基地、指揮官室

指揮官室の部屋は、唯の空き部屋を改造した部屋で中は、必要な机やパソコンが置いてあるだけで大部分は、空母大鳳でやっている為、あまり不要な物は置いていない。

なのはは、指揮官室のドアをノックすると、中から

龍之介「入れ！」

なのはは、指揮官室に入る。

なのは「失礼します!!」

龍之介に一礼をする。

なのは「高町なのは大尉参りました!!」

龍之介「良く来たななのは!」

龍之介は、パソコンの操作を止め、なのはを見る。

なのは「呼ばれた理由は何ですか?」

龍之介「いや、実はな・・・」

龍之介は、要件を言う。

龍之介「この前、春乱などの航空機についての量産の件の事だが・・・」

要件は、この前、真霜達に披露した航空機の件についてだった。

量産については、既に国土安全委員会の幹部から見送られているが、それでもブルー

マーメイドの設備開発部で角一機ずつ調査中である。

なのは「はい!・・・確か今は、予備の一機をブルーマーメイドの設備開発部で調査

中でしたよね?」

龍之介「そう・・・それでそれを元に矢野主任が設備開発部の協力の元、ハイブリッ

ド試作機を製作するそうだ!」

量産は許可されていないが、一応試作機を製作している。

なのは「もう制作しているんですか？」

龍之介「基本的には、駄目な部分だけを改良するだけで……大部分は、こっちで使っている機と保々変わらないらしいだが……完成まで時間が掛かる……後は、お偉い連中の許可が要るだけだ……」

国土安全委員会の許可なしで制作中な為、完成には何年か掛かる。

龍之介「其処で、お前には……もし完成したら、テスト飛行をして貰おうと宗谷監督官から要望が合ってたな！」

龍之介は、真霜からなのはをテストパイロットとしてテスト飛行を頼まれていた。

なのは「私ですか？」

龍之介「嫌なら別に他の奴にでもさせるが……如何だ？」

如何するのか、なのはに問う。

なのは「ん……分かりました……お引き受けいたします。」

真霜の申し出をなのはは、素直に引き受けた。

龍之介「そうか!……じゃ宗谷監督官には、引き受けると言って置くぞ!!」

なのは「お願いします……では!」

なのはが指揮官室を出ようとした。

その時

龍之介「待て！」

なのは「はい？」

まだ何かあると、出るのを止められる。

龍之介「平賀監察官から聞いたんだが・・・お前、この間、救助した少女を病院から連れ帰ってきたそうだが・・・」

龍之介は、なのはにヴィヴィオを病院から連れ帰ってきた事を問う。

なのは「あっ!？」

龍之介「如何するんだ・・・その少女？」

龍之介は、なのはにヴィヴィオの今後の事を問う。

なのは「一応、受け入れ先が見つかるまで、私が面倒を見ようと思ひまして・・・」
なのは、一応、受け入れ先が見つかるまで面倒を見ようと龍之介に告げる。

龍之介「大丈夫なのか?・・・相手は、まだ幼い子供だろ!・・・面倒が大変だぞ!!・・・」
第1、任務の時は、如何するんだ?」

確かにまだなのはは若いし、子供の面倒も見た事が無い、それに任務の時には、面倒が見れない時には、如何するんだろうか?

なのは「一応、フェイト隊長もいますから、何とか大丈夫ですし・・・任務の時には、寮母の愛奈さんに預かって貰おうと思ひまして・・・」

面倒の方は、フエイトと一緒に面倒を見るし、任務の時には、寮母の愛奈さんに預かって貰う事にする様だ。

龍之介「なら良いが、あまり関わるなよ！・・・別れる時が辛くなるからな！」

それに対して、龍之介は、あまり関わるなど注意する。

なのは「相変わらず心配症ですわね！」

龍之介「当たり前だろう!!・・・お前ら飛行機乗りは、一番に死ぬ確率が多いんだ!!」

なのは「ん・・・」

確かに、なのは達航空士は、一番に死ぬ確率が多い。

何故ならパイロットになる以上、危険は着き物

例えば戦闘で落とされて死ぬ事もあるが、特に上空を飛んでいる時、機械の故障や機の不具合で事故って、死ぬ事が一番多い。

その事は、龍之介も十分知っていた。

なのは「大丈夫です!・・・私は落ちませんよ!・・・絶対に!!」

それに対して、なのはは、自分は絶対に落ちないと告げる。

龍之介「ん・・・もう良い!・・・寮で待っているんだろう・・・早く行ってやれ!」

なのは「ありがとうございます・・・失礼しました!!」

なのはは、指揮官室を後にする。

龍之介「全く……薫と次郎と言い！……今度はなのはか……頭が痛くなってきた……」

更に問題が増えた事に龍之介は頭を抱える。

ブルーマーメイドの寮、なのはとフェイトの部屋

愛奈「そして次は、隣町のパン屋さんに出かけ……」

寮では、寮母の愛奈さんがなのはの帰りを待つヴィヴィオに絵本を読んで挙げていた。

『ただいま!!』

ヴィヴィオ「!?」

なのはとフェイトが帰って来た事に気づき、ヴィヴィオは、2人の元に向かう。

なのは「ただいまヴィヴィオ!!……良い子にしたか?」

なのはは、ヴィヴィオを抱きかかえる。

すると

なのは「あっ!？」

ヴィヴィオは、突然なのはに抱き付く。

ヴィヴィオ「ん」

如何やらお伶俐に帰りを待っていた様だ。

なのはに抱きついているヴィヴィオをフェイトは、優しく撫でる。

フェイト「ありがとうございます愛奈さん！」

愛奈「いいえ、ヴィヴィオ良い子にしましたよ！」

なのは「そうですか！」

その後、なのは、ヴィヴィオ、フェイトの3人は、仲良く食事をする。

ヴィヴィオの方は、食事中やお風呂の時もなのはにべったり懐いている。

宗谷家、リビング

同じ頃、宗谷家の食卓では

龍之介「はあく」

龍之介のテンションは物凄く低かった。

頭が痛いせいだろう。

ましろ「真霜姉さん・・・龍之介兄さんやけにテンションが低い見ただけで、何か

あったんでしょうか？」

ましろが真霜に何故、龍之介のテンションが低くいのか問う。

真霜「知らない！」

真霜は、冷たい言葉を言う。

薫「兄さん如何したの？・・・先からテンションが低いけど、何かあったの？」

薫が龍之介に何故、テンションが低くいのか問う。

龍之介「別に何でもない！」

それに対して、龍之介は何でもないと告げる。

薫「そうお・・・何だか難しい顔してたけど・・・」

龍之介「後で話す・・・」

龍之介は後で話すと言って、夕食後、部屋で今日の出来事を薫に話す。

宗谷家、龍之介の部屋

龍之介「と言う事だ！」

薫「つまり、なのはちゃんの子を引き取ったて事!？」

龍之介「そうだ!!・・・全く、次から次へと問題が起きるから、頭が痛くなる・・・」

薫「それで先、テンションが低かったわけだ!・・・それで、なのはちゃんは、何て

言ってるの？」

薫は、それに対して、なのはは、何て言っているのか龍之介に聞く。

龍之介「里親が見つかるまで、面倒を見るそうだ・・・フェイトもいるから大丈夫と

は、思うが・・・」

薫「まあ、なのはちゃんの事だから、ほっとけなかつたんだよ！」

薫は、なのはがヴィヴィオを引き取った理由は大体分かる。

昔から、なのはが困っている子をほっとけないたちなのは、薫も分かっていた。

薫「それで、何か問題でも？」

薫は、それで龍之介が何を悩んでいるか問う。

龍之介「問題は・・・任務の時になのはを実戦に出せなくなるかもしれない事だ!!」

龍之介が何を悩んでいるか、それは任務の時になのはを実戦に出せなくなるかもしれない事だった。

ない事だった。

薫「えっ!？」

それを聞いた薫は驚愕する。

龍之介「お前も分かっていると思うが・・・Gフオース隊員である以上、肉親などの事を考えていたら、任務に支障が起きる・・・最悪の場合、なのは隊長を任務から外す事に成る可能性がある!」

確かにGF隊員である以上、肉親などの事を考えていたら、任務に支障が起きる。

もしそれで殉職したら、他の隊員の士気に関わる。

龍之介は、それを恐れていた。

薫「そんな!？」

龍之介「まだ決まっていないが、本人の状況次第だとそうなるかもしれない。」

薫「ん・・・なのはちゃんには?」

薫は、その事をなのは本人に告げたのか問う。

龍之介「無論本人には、まだこの事は告げていないが・・・だが、いつれは告げなければならぬだろう。」

まだ、なのにはは告げていないが、いつれは告げなければならぬ。

もし、なののはが任務から外れたら、Gフォースの航空戦力は間違いなく半減する。

薫「ん・・・」

薫は、なののはが任務から外れたらと思うとぞつとする気持ちになった。

果たして、なののはは、任務から外されてしまうのか

第14章 命の理由 後編

4月12日

ブルーマーメイドの寮、なのはとフェイトの部屋

なのは「ん……う……ん？」

朝、なのはは、目を覚ます。

フェイト「……」

隣には、ルームメイドのフェイトが幸せそうに眠っていた。

なのは「ん!？」

ふつと何か体がにしがみ付いてると思い、毛布を剥いで見ると

ヴィヴィオ「……」

其処には、なのはにしがみ付いて眠るヴィヴィオの姿があった。

なのは「フフ！」

しがみ付いて眠るヴィヴィオの姿を見て、なのはは笑顔を返し、握っているヴィヴィオの手を放しベットから起きる。

そして、服装を整える。

すると

ヴィヴィオ「あ……あ……あ……」

手を放したか、ヴィヴィオがなのはを探し始めた。

なのはは、探すヴィヴィオをフェイト元に運ぶ、すると、フェイトとヴィヴィオがお互い抱き合いながら眠る。

なのは「フフフ！」

抱き合いながら眠る2人を見て、なのはは笑う。

横須賀基地、空戦シミュレーション室

なのは「じゃ午前の訓練は、此処まで!!」

『お疲れさまでした!!』

今日もなのは達は、空戦シミュレーション室の訓練をしていた。

本当は、実際に戦闘機に乗って訓練するのだが、航空理論が発達していないこの世界では、飛ばす為の滑走路もない。

空母から飛ばす方法もあるが、今は、空母大鳳は、停泊中で外海に出ないと飛ばせない。

その為、シミュレーション室で交代で訓練を賄うしかなかった。

時間が昼になり、午前の訓練が終了し、GF隊員達は食堂へと向かう。

なのはもシユミレーション室を出ると

横須賀基地

なのは「あっ!?!」

ちようどフェイトと手を繋ぎ食堂へと向かうヴィヴィオの姿を見かけ

なのは「ヴィヴィオ!!」

なのはは、2人に声を掛ける。

『!?!』

すると、此方に気づいたのか、2人は、なのはの方を振り向く。

そして、なのはの方も2人の所に走って行く。

ヴィヴィオは、走って来るなのはの元に行く。

なのは「おはようヴィヴィオ!ちゃんと起きられた?」

あれからちゃんと自分で起きられたか問うと

ヴィヴィオ「うん!」

如何やら自分で起きられた様だ。

なのは「おはようフェイトちゃん!」

フェイト「うん、おはようなのは!」

なのはとフェイトは、お互いに挨拶する。

フェイト「ヴィヴィオ、なのはさんにおはようって……」

ヴィヴィオ「おはよう」

そして、ヴィヴィオもなのはに挨拶する。

なのは「うん、おはよう！」

なのはも挨拶を返す。

フェイト「お昼は、一緒に食べられるでしょうか？」

なのは「うん！」

ヴィヴィオ「お昼ご飯？」

なのは「そう、さあ行こう！……今日のメニューは、何だろうね？」

3人仲良く基地の食堂に向かう。

その様子を龍之介と功、美由紀が遠くから見ついていた。

龍之介「あれじゃ保護者と少女と言うより、親子だな！」

あれから、ヴィヴィオを引き取って数日経ち、ヴィヴィオは、すっかり元気になり、なのはやフェイトにもうべつたり懐いている。

しかしながら、ヴィヴィオを引き取った事でなのはの任務に支障が生じるのではないのか

今は何とも言えないが、いづれは、そうなるかも知れない。

その時は、なのはを任務から外すかもしれない。

美由紀「如何するんですか？・・・このままあの子を高町隊長に任せて大丈夫なんですか？」

美由紀は、このままヴィヴィオをなのはに任せて良いのか龍之介に問う。

功「しかし、本人が里親が見つかるまでと言っているですし・・・このまま任せて良いんじゃないんでしょうか？」

功は、なのはに任せる事に賛成している。

美由紀「参謀は甘すぎます!!」

しかし、美由紀は、それに反対する。

美由紀「大体我々は、この世界の人間では無いんですし・・・余りの関わりは危険の元に成ります！」

功「じゃ中佐！・・・あの時、救助要請を拒否した方が良かったのですか？」

美由紀「いいえ！・・・あの時は、私の判断が間違っていました・・・もし拒否していたら、山本中佐や小沢中佐が勝手に救助に行っていたでしょう・・・でも、これは別な問題です！」

功「では、あの子を養護施設に送った方が良いと、そう言うんですか？」

美由紀「その方があの子の為です！・・・このままでは、高町隊長の体が持つか如何

か・・・」

子育てと仕事の両方をするのは、G F 隊員としては難しい。

ましてやなのは、航空士であり、隊長である以上に問題である。

龍之介「2人の考えは、よく分かった！」

美由紀「では・・・」

龍之介「少し考えさせてくれ！」

2人の考えは、どちらとも正しいのだが、どちらの判断を選ぶか、迷っていた。

もし、美由紀の意見を尊重すれば、ヴィヴィオをなから取り上げ、養護施設に送る事になる。

しかし、今それをすれば、折角、元気になったヴィヴィオをまた孤独に追いやる事になる。

そんな事をすれば、なのはとフェイトは許さないだろう。

そうなれば、隊員の士気が下がる。

かと言って、功の意見を尊重すれば、なのはを任務から外す事になる。

そうなれば、Gフォースの航空戦力は間違いなく半減する。

どちらを選んでも結果は、失うという事に変わりはない。

龍之介（このままでは、どちらかを選ばなければいけない・・・何か良い方法はない

のか……)

如何するのか、龍之介は考えると

龍之介(そうだ!……あの人なら!……この問題を解決できるかもしれない!!)
何か思い付き、ある場所へと向かう。

宗谷家、薫の部屋

その頃、宗谷家の薫は、部屋で謹慎している次郎に携帯で電話をしていた。

薫「そう言う事なの……」

薫は、次郎に事情を説明する。

次郎『成程な!……俺がいない間に……そんな事になっていたとは……』

薫「何とかならない次郎君!……このままだとなのはちゃんGフォースを辞める
かもしれないわ!」

薫は、なのはがGフォースを辞めるかもしれないと心配していた。

次郎『いや、いくら何でもなのはが辞めるわけないだろ!……それに謹慎している
俺達には如何する事もできない。』

次郎の言う通り、いくら何でも空一筋のなのはが辞めるわけない。

それに謹慎している自分達には如何する事もできない。

薫「でも……」

次郎『大丈夫だろう・・・いつもの通り何とかなる。』

次郎は、龍之介が解決してくれるだろうと信じている。

薫「うん！分かった。」

薫も納得する。

次郎『ところでお前、謹慎中何してるんだ？』

話は変わり、謹慎中何をしているのか問う。

薫「別に色々やってるわよ！・・・そっちは？」

次郎『実は謹慎中何もする事が無いから、ネットゲームをしてっただ。』

薫「ネットゲーム!?!」

次郎の方は、最近ネットゲームにはまってる様だ。

彼的には、珍しい物にはまることがある。

それもその筈、龍之介がいた世界では、まだネット環境がそんなに発達していない。

その為、ゲームと言ったら、携帯のゲーム機や普通のゲーム機ぐらいいしか無いだろう。

ましてやPCでリアルゲームなどなら尚更だ。

次郎『これが面白くてな、堆はまちまってるんだよ！』

如何やら完全にはまってる様だ。

薫「アハハハ・・・そうなんだ。」

薫は、答えを出せず唯笑う。

次郎『薫もやって見ろよ！面白いぜ!!』

薫「いいよ、私は勉強があるから・・・」

次郎『そんなに勉強が面白いのか?』

薫「うん・・・だって、この前、宗谷校長から横須賀女子海洋学校を見学して貰ってから・・・私!・・・ブルーマーメイドに近づこうと思って、色々勉強しているの!」
薫は、あれ以来、真雪見たいなブルーマーメイドに近づこうと参考書を読んで勉強している。

次郎『ふうん、まあ程々にしろよ!』

薫「次郎君もね!」

次郎『じゃあな!・・・今度デートしようぜ!』

薫「ん・・・ん・・・」

薫は、照れながら電話を切る。

ブルーマーメイドの寮、なのはとフェイトの部屋

なのは「さて!・・・私は、午後の訓練があるから戻るけど・・・ヴィヴィオ!!・・・大人しく寮で待っててね!」

ヴィヴィオ「うん!」

なのは「じゃ、ヴィヴィオの事をよろしくお願いします。」
愛奈「任せて下さい。」

お昼後は、なのはは、訓練に戻り、ヴィヴィオは、寮で寮母の愛奈と一緒になのはの帰りを大人しく待つ。

その光景をフェイトは、後ろで見ていた。

美由紀「フェイト隊長！」

フェイト「あつ、権藤中佐!？」

後ろから美由紀が来た。

美由紀「あの子は、どお？」

フェイト「もうなのはにべったり懐いています。」

美由紀「そう・・・」

ヴィヴィオが笑顔で寮母の愛奈と一緒に寮に帰る姿を美由紀は見つめる。

フェイト「あ・・・先参謀から聞きましたけど・・・」

美由紀「ん？」

フェイト「ヴィヴィオを養護施設に送った方が良いと准将に進言したそうですが・・・」

フェイトは、功から自分がヴィヴィオを養護施設に送った方が良いと龍之介に進言し

た事を聞いた様だ。

美由紀「ええ・・・その方が高町隊長の為にもなるわ！」

美由紀は、なのはの為になると言うが

フェイト「それは、違うと思います。」

フェイトは、違うと言う。

美由紀「違う？」

フェイト「今、ヴィヴィオには、なのはが必要なんです!!・・・それは、なのはにも分かっていきます。」

ヴィヴィオには、なのはが必要だと美由紀に強く進言する。

美由紀「でも、それじゃ！」

フェイト「もしなのはから離れたら、ヴィヴィオは、対切れないかもしれません!!：ましてや親が死んでる事は、まだヴィヴィオには言っていないんです!!」

フェイトは、美由紀に親が死んでる事は、まだヴィヴィオには言っていないと告げる

美由紀「えっ!?!・・・親が死んだ事、まだ告げていないの？」

美由紀は、親が死んだ事は、ヴィヴィオには伝えていない事に驚く。

フェイト「なのはが、何れ自分から話すと言って・・・」

如何やら、なのはは、ヴィヴィオがもう少し落ち着いてから、自分から話す様だ。

美由紀「自分から話すね・・・なのは隊長らしいわね！」

フェイト「だから、今は、なのはに任せて欲しいんです！」

フェイトは、今は、なのはに任せる方が賢明だと言う。

美由紀「ん……」

フェイト「もし不足なら、私が責任を持ちます！」

フェイトも責任を取ると言っている。

美由紀「分かったわ！……貴方達に任せるよう准将に進言しとくわ！……でももし、貴方達2人に何かあったら……その時は、あの子を！」

フェイト「はい！」

もしなのはとフェイトに何があれば、その時は、ヴィヴィオを容赦なく施設に送る事にフェイトは了承する。

横須賀女子海洋学校、校長室

一方、龍之介は、横須賀女子海洋学校校長の宗谷真雪の元を訪ねて行った。

真雪「龍之介さん！」

龍之介「ああ、真雪さん!?お忙しい所を申し訳ない！」

真雪「良いのよ!……調度職員会議が終わったところだから……」

真雪は、調度職員会議が終わって、戻ってきたところだった。

真雪「それで話とは?」

龍之介「実は……この前の救助でうちの航空隊の隊長が1人の少女を救助したんです。……成り行きで……その子の面倒を見る様になってしまつて……」

「これまでの経緯を真雪に話す。」

真雪「それで、この前、夕食の時にテンションが低かつたのね!？」

この前、夕食の時に龍之介が何故テンションが低かつたか分かつた様だ。

龍之介「今、その事で、幹部の意見が分かれてしまつて……」

真雪「成程! それで?」

龍之介「1人は、本人に任せれば良いと言つてますが、もう1人の方は、児童施設に送る方が良いと言つているんです!!……それで、後は、俺の判断に委ねられて……」

自分の判断で決まる事を真雪に言う。

真雪「それで、貴方の判断は……」

真雪は、龍之介の意見を聞く。

龍之介「正直、俺には、如何すれば良いのか分からないんです。」

真雪「えっ?」

龍之介「俺は、今までゴジラを倒す事しか考えた事が無かつたのに、今度は、部下を選ぶか唯の少女を選ぶかで迷っている……俺には、選ぶ事が出来ない!……ましてや、高町隊長は、航空士で薫の大事な友人だ!!……もしなのは隊長からあの子を取り

上げたたら：：高町隊長は俺を恨むだろう：：薫も俺の事は嫌いになるかもしれない：：かと言つて、このまま高町隊長に任せても、任務と子育ての両方はできないから、高町隊長を任務から外す事で大事な戦力を失う事になる。」

龍之介は、なのはを外すのに反対であつた。

なのはを外す事は、部隊にとっては、手や足を外す事に他ならない。

龍之介「真雪さん！・・・俺は、如何したら良いんでしょうか？」

龍之介は、真雪の意見を求めた。

何故なら、真雪は、ブルーマーメイドの中で伝説の歴戦の勇士でもあり、来島の巴御前という異名を持つ。

だからこそ意見を求めている。

真雪「なら、その高町さんに任せたらどお？」

龍之介「えっ？」

何と真雪は、なのはさんに任せられた方が良いんじゃないかと言うのだ。

真雪「上手くは言えないけれど・・・その高町さんが自分が保護したのを自分で面倒を見ると決めたなら、任せたらどお？」

龍之介「しかし、それでは権藤中佐の言う通り、高町隊長を任務から外す事になる!!」

真雪は、功の意見を尊重するが、それをすれば、なのはを任務から外す事になる。

真雪「其処は、貴方や貴方の部下がカバすれば、良いじゃないの！」

龍之介「そうか・・・何でその事に気づかなかったんだ!？」

真雪のお陰で龍之介は思い付く。

龍之介「ありがとうございますございます真雪さん!!・・・お陰で何かを得た様な気がします！」

真雪「迷いが解決した見たいね！」

龍之介「はい！では、失礼します!!」

龍之介は、校長室を出る。

校長室を出る龍之介を見て真雪は

真雪「ん・・・真霜と同様に龍之介さんも人の子ね！」

真雪は、龍之介を見て、真霜と同じだと思ふのだった。

横須賀基地、空戦シミュレーション室

なのは「じゃ、今日此処まで!!」

『お疲れさまでした!!』

午後の訓練を終えたなのは、ヴィヴィオが待っている寮に戻ろうとした。

その時

龍之介「高町隊長！」

後ろから、龍之介が近づいてきた。

なのは「准将!? 如何したんですか?」

龍之介「話がある! 少し良いか?」

なのは「はい・・・」

龍之介は、なのはを指揮官室に連れて行く。

横須賀基地、指揮官室

なのは「准将!! 話とは何ですか?」

龍之介「この前のヴィヴィオの件だが・・・」

龍之介は、ヴィヴィオの件の事をなのはに告げる。

なのは「その件は、私に一任されていると思っていましたが?」

なのはは、てつきり自分に一任されていると思っていた。

龍之介「だが、権藤中佐から直ぐに養護施設に送るよう要望があった。」

なのは「えっ!」

美由紀からの要望になのはは、驚愕する。

龍之介「幸いその事は、お前の同僚のフェイトが中佐を説得してくれたから・・・中佐もお前とフェイトに何があれば・・・その時は、容赦なく施設に送る事で考えを変えた。」

フェイトの説得で美由紀は、考えを変えた事をなのはに告げる。

なのは「フェイトちゃんか!？」

龍之介「で後は、俺の判断だが・・・」

龍之介は、なのはに自分の決断を告げる。

なのは「ん・・・」

龍之介「正直、俺も迷っていたが・・・俺もフェイトと同様、ヴィヴィオの件は、お前に任せる事にした。」

龍之介は、ヴィヴィオの事をなのはに任せる事に決めた。

なのは「あつ、ありがとうございます。」

龍之介の驚きの決断になのはは、驚きながら礼を言う。

龍之介「礼なら、フェイトに言え!・・・フェイトが中佐を説得してくれたお陰だ!」
なのは「はい!」

龍之介の決定に喜び、なのはは、指揮官室を後にする。

龍之介「真雪さん・・・ありがとうございます・・・お陰で解決できました。」
龍之介は、真雪に感謝する。

ブルーマーメイドの寮、なのはとフェイトの部屋

フェイト「それで、准将は?」

なのは「私に全部任せるそうだよ!!」

龍之介がなのはに任せた事をフェイトに報告した。

フェイト「じゃ、なのはがヴィヴィオのママになったて事だね！」

なのは「まあ、そう言う事になるのかな・・・」

ヴィヴィオ「ママ？」

なのは「そうだよ！・・・私がヴィヴィオのママだよ！・・・ヴィヴィオは、それでも嫌？」

ヴィヴィオ「うつ・・・うつ・・・」

なのは「ん？」

ヴィヴィオ「うわああ・・・!!」

なのはがママになった事にヴィヴィオは突然泣き出した。

なのは「何で泣くの？・・・大丈夫だよヴィヴィオ！」

ヴィヴィオ「うわああ・・・!!」

如何やら余りに嬉し泣きした見たいだ。

フェイト「良かったわねヴィヴィオ！」

ヴィヴィオ「うん！」

フェイト「でもフェイトさんも実は、ちよつとだけヴィヴィオのママになったんだよ

!!」

なのは「えっ!？」

ヴィヴィオ「ん？」

フェイト「実は、准将からヴィヴィオの後継人になる様に言われて・・・私は、素直に承諾したわ!!・・・だから、私もヴィヴィオのママになったんだよ!」

フェイトも龍之介から後継人と言う形でヴィヴィオのママになった。

なのは「御免ねフェイトちゃん!・・・私のせいでフェイトちゃんまで巻き込んだじゃあ!」

フェイト「うんうん・・・私は、なのはの友達として、当然の事をしたまだよ!」

フェイトは友達として、当然の事をしたと言う。

ヴィヴィオ「ママ？」

『は〜い!』

ヴィヴィオの返事に2人揃ってはいと返事をし、2人のママが出来た事にヴィヴィオが凄く笑顔で喜ぶ。

こうして、ヴィヴィオは、なのはとフェイトが引き取る事が決まり、後日、真霜から引き取りに必要な書類が龍之介を通して、なのはに渡された。

手続きが完了し、正式になのはの養女となり、名前も高町ヴィヴィオと改めた。

第15章 仮想巡洋艦 前編

6月5日

東シナ海、尖閣諸島沖

さつま、艦橋

重雄「中佐！・・・現在、尖閣諸島沖を順調に航行中です。」

さつま艦長の田中重雄中佐が美由紀に現在地を報告する。

美由紀「宜しい艦長！・・・このまま、この海域を哨戒する！」

さつまは、現在、尖閣諸島を哨戒警備航行中だった。

何故、さつまが尖閣諸島を哨戒警備をしているのか

時系列は、遡る。

6月1日

横須賀ブルーマーメイド庁舎、宗谷真霜の執務室

龍之介「武装船の摘発!？」

真霜「ええ！・・・最近、海賊らしき武装船が南西諸島沖に出没していて、民間船を

襲っている！・・・しかも相手は、正体が不明ときたわ！」

龍之介「正体不明だ?!」

真霜が言うには、海賊らしき武装船が南西諸島沖に出没し、民間船を襲っている。

しかも相手は、正体不明の武装船らしい。

功「目撃情報は無いんですか?」

平賀「勿論有りますが・・・それが幾つも異なった情報何ですか?」

美由紀「異なった情報?」

真霜「これは極秘なんだけど!・・・如何やら相手は、民間の商船に偽装している可能性があるわ!・・・また、襲うのが夜間だから・・・」

民間の商船に偽装して、しかも夜間に活動する。

まるで、第二次世界大戦で活躍した仮想巡洋艦にそっくりである。

龍之介「それで、俺達にも協力しろと言う事か、宗谷監督官?」

真霜「まあ、そう言う事になるわね!」

龍之介「何か嫌な依頼ばかり、こつちに押し蹴られている様な・・・」

龍之介は、この頃、真霜が自分達にばかり危険な仕事を押し付けている様な気がした。

真霜「気のせいじゃないの?」

それに対して、真霜は、気のせいじゃないのと答える。

龍之介「ん・・・」

真霜の言葉に龍之介は納得できなかつた。

真霜「兎に角！・・・ブルーマーメイドの傘に入っている以上、武装船の摘発に協力して貰うわよ!!」

龍之介「分かっている!!・・・今の俺達は、ブルーマーメイドの傘に入っている以上！・・・お前の命令には、従うしかないからな!」

こうして、龍之介達は、正体不明の武装船の摘発に協力する事になった。

しかし、摘発には、空母大鳳や白鳳、高千穂の大型艦は使えない。

何故なら相手がもしその仮想巡洋艦なら、神出鬼没で動きも速い。

戦艦や空母を投入すると、相手が出てこなくなるし、逃げられる可能性がある。

それは、ブルーマーメイドも同じである。

龍之介「取り合えず巡洋艦と護衛艦の少数で編成した方が良いな・・・」

龍之介は、巡洋艦と護衛艦の少数で編成した哨戒部隊で向かう事にする。

真霜「此方からも保安即応艦隊から応援を出すわ!!」

真霜は、万日に備え保安即応艦隊から応援を出す構え。

龍之介「後は、哨戒部隊の指揮官だが・・・当然、俺が行くしかないか・・・」

龍之介は、自分が哨戒部隊の指揮官になろうとしたが

美由紀「いけません!!」

美由紀がそれに反対する。

美由紀「准将は、私達にとつては、大事な指揮官ですから、此処に残つて下さい!!」

龍之介「だが・・・」

美由紀「それに准将は、航空隊の出身で、艦の指揮を執つた事無いでしょ!」

美由紀は、龍之介の欠点を言う。

『!?!』

それを聞いた真霜と平賀は驚く。

龍之介「そうだった・・・忘れてった!」

龍之介は、自分が艦の指揮を取れない事を忘れていた。

真霜（へえ・・・こいつ、パイロットだったんだ!?!・・・それでよく艦隊の指揮を執れたものね・・・）

龍之介の欠点を聞いて、真霜は興味を持つ。

龍之介「じゃ、誰が行くんのだ?」

龍之介は、誰が良いか美由紀に問う。

美由紀「私が行きます!!」

何と美由紀が自ら指揮官に成ると名乗り出た。

『えっ!?!』

美由紀が名乗り出た事に4人は驚愕する。

美由紀「何かご不満ですか？」

龍之介「い、いや別に……珍しく中佐がこの任務に志願する何て……何時もブルーマーメイドの任務の時には、反対ばかりしているのに……」

何時もブルーマーメイドの任務参加に反対している美由紀が自ら志願した事に驚愕していた。

美由紀「私もGフォースの隊員です!……嫌な任務でも志願するのは、当たり前です!!」

真霜「それでは権藤中佐!……お願いします!」

美由紀「分かりました。」

画して、美由紀が哨戒部隊の指揮を取る事になった。

龍之介達は、基地に戻り哨戒部隊の編成に取り掛かる。

決まった編成は

旗艦巡洋艦さつま

護衛艦ながおか

補給艦とよだ

そして、ブルマーメイドの保安即応艦隊から真冬の弃天、浪速が参加し、計5隻で編成された。

時系列は、戻る。

南西諸島に着いた5隻は、各艦とも単艦で索敵を開始した。

八重山列島沖には、弃天、宮古列島沖には、浪速、沖繩諸島には、ながおか、とよだ。

そして、尖閣諸島には、旗艦のさつまが

6月10日

東シナ海、尖閣諸島沖

この日、尖閣諸島は霧に覆われ、周りは、全く見えない状況だった。

さつまは、霧の為やむ追えず、低速で航行、探照灯を灯射、磁力電波を出し、他の船舶との衝突を避けた。

さつま、艦橋

美由紀「・・・」

守「霧とは厄介ですね！・・・神出鬼没の武装船には有利ですが・・・」

さつま副長の梅田 守少佐は、そう言いながら、双眼鏡で辺りを見る。

美由紀「怖じ気づいたの副長？」

守「いえ、中佐！」

美由紀「冗談よ、副長！」

美由紀は、守を辛かい、レーダの画面を見る。

美由紀「どお、反応は？」

さつまのレーダ主「ありません・・・この数時間、ずっと同じです。」

美由紀「通信主、各艦から発見の知らせは？」

さつまの通信主「いえ、まだ何も・・・」

レーダも反応もなく、各方面沖で活動している艦からの武装船発見の報告もない。

美由紀「ん・・・」

此処に来て5日

もう出てきても良い筈なのに、此処までしても出てこないとは、流石の美由紀も苛立ちが目立っていた。

重雄「如何しますか中佐？」

美由紀「ん・・・このまま哨戒を続行する！」

重雄「了解！」

しかし、その苛立ちをあえて押さえ、哨戒を続ける。

例え苛立ちが目立っても、部下にそれを見せる訳には行かない。

彼女もGF隊員としての意地がある。

美由紀「ん……艦長！……私は、部屋にいるから……何かあったら、報告をお願い！」

重雄「りよ、了解！」

美由紀は、艦橋を後にする。

彼女のには、少し落ち着く必要があった。

さつま、美由紀の部屋

艦橋を後にした美由紀は部屋に戻り、ベッドの上で考え事をする。

美由紀（……私は何を考えているの！……まだ迷っているのか……この世界に干渉する事を……）

美由紀にも他に、苛立ちがあった。

それは、自分達がこれ以上干渉する事に迷いを始めていたのだ。

美由紀は、GF隊員としては、龍之介より5歳年上で国防軍の時代からゴジラ戦の経験がある。

そんな時、美由紀は、部屋の机の上にある写真立てを取る。

美由紀「兄さん……貴方が生きていれば……私がどれだけ楽になるか……」

それは、今から5年前の第3次ゴジラ戦での事だった。

1994年

大阪市

三原山から出現したゴジラは、東京に向かって浦賀水道で国防軍の機動艦隊やスーパーX2の猛攻によりゴジラの東京上陸を阻止に成功する。

小田原から上陸後に芦ノ湖でビオランテと戦闘。

その後、ゴジラは、エネルギー補給の為、若狭湾の原発群へと向かう。

これを察知した国防軍の特殊戦略作戦室室長の黒木准将は、短経路の名古屋を通るとして伊勢湾に戦力を集結させる。

だが、予想に反してゴジラは、紀伊水道に現れる。

裏を掛かれた国防軍は、スーパーX2のみを大阪市に向かわせ、残りの戦力を若狭湾へ終結させゴジラを迎え撃つ作戦へ変更する。

刻一刻とゴジラの上陸が迫る中、美由紀の兄、権藤吾郎大佐以下が抗核エネルギーバクテリア（ANEB）をゴジラに撃ち込む準備へと入った。

そしてゴジラは、遂に大阪市に上陸する。

国防軍総司令部地下オペレーションルーム

国防軍の通信主「権藤大佐が抗核バクテリアをロケット弾に搭載して出発しました。」

黒木「よし！・・・スーパーX2！」

龍之介「大阪ビジネスパークに待機中！」

まだ、国防軍の中佐だった龍之介も黒木の補佐として、此処に居た。

伊勢湾に展開していたスーパーX2は大阪へと急行、今、ゴジラの目の前に立ちはだかる。

国防軍総司令部、地下オペレーションルーム

黒木「正面から攻撃して、ゴジラを進行方向右の高層ビルに誘い込む！．．．出来るか、ファイヤーミラー無しで？」

スーパーX2オペレーター「ありったけのミサイルとバルカン砲で何とか．．．」

スーパーX2からスーパーミサイルが掃射、続いて40ミリバルカン砲でゴジラを大阪ビジネスパークに誘い込む。

攻撃を受け、怒り狂うゴジラは、囷となったスーパーX2に向かってきた。

龍之介「良いぞ！」

黒木「よし！そのまま追い込め!!」

大阪ビジネスパークに誘い込むのに成功しつつあった。

しかし、そう長くは続かなかった。

スーパーX2オペレーター「もうミサイルがありません!!」

スーパーX2のミサイル及びバルカン砲の残弾は、もう0で、これ以上の攻撃は、不可能だった。

国防軍の通信主「権藤大佐他3名、特殊部隊配置完了！」

その時、吾郎以下3名の特殊部隊は、既に4か所の高層ビルでゴジラを待ち構えていた。

黒木「あと少しだ・・・」

あともう少しだというのに黒木准将は、最早最後の手段を使うしかなかった。

黒木「ファイヤーミラー、セットオン！」

スーパーX2オペレーター「いや、しかし？」

龍之介「准将！・・・ファイヤーミラーは、破損部分からいつ溶け出すか!？」

黒木「ゴジラを釘付けにするには、それしかない!!」

前回のゴジラ戦でファイヤーミラーは、破損し修復が不可能だった。

それを知って、あえて黒木は、ファイヤーミラーを展開。

最早、残弾がないスーパーX2には、ファイヤーミラーしか武器がなかった。

そして、展開したファイヤーミラーをゴジラの熱線が直撃。

中央ミラーが爆発を起こしスーパーX2は大爆発した。

大阪ビジネスパーク、高層ビル25階の部屋

吾郎「討て！」

ボン!!

ボーン!!ボーン!!ボーン!!

スパーX2の犠牲にして遂にゴジラに抗核バクテリアが撃ち込まれた。

国防軍総司令部、地下オペレーションルーム

黒木「やった!」

龍之介「成功だ!!」

4発の内、2発がゴジラに命中した。

大阪ビジネスパーク、高層ビル25階の部屋

吾郎「よし、戻れ!!」

ゴジラへの抗核バクテリアの撃ち込みに成功し、吾郎達は、安全圏へと退避をする。

だが、吾郎に気づいたのか、ゴジラは、吾郎が居る高層ビルへと向かってきた。

黒木『権藤大佐!!・・・権藤大佐!!・・・ゴジラが其方に!・・・危険です!・・・早く

逃げて下さい!!・・・権藤大佐!!・・・権藤大佐!!』

黒木は、急いで吾郎に退避を命じるが

時既に遅く、吾郎が後ろを振り向くとゴジラの顔が目の前にあった。

吾郎「く!」

ボーン!!

吾郎は、咄嗟に再装填していた抗核バクテリアをゴジラの口に打ち込んだ。

吾郎「薬は注射より飲むのに限るぜ！・・・ゴジラさん!!」

怒り狂ったゴジラは、吾郎ごと高層ビルを破壊した。

国防軍総司令部、地下オペレーションルーム

龍之介「駄目だ・・・!!」

吾郎は、ビルの倒壊に巻き込まれ死んだ。

黒木「権藤大佐!」

龍之介「大佐!・・・大佐!・・・」

吾郎の死に黒木は、啞然とし、龍之介は、その場に泣き倒れる。

だが、吾郎の死は無駄ではなかった。

それから、1日後のサンダーコントロールシステムを使用したサンダービーム作戦で抗核バクテリアの効果が発揮し、ゴジラの活動を抑える事に成功した。

しかし、

兄の死で美由紀の心は、悲しみに溺れ、葬儀の時は、誰もいないところで泣き叫んだ。

その後、ゴジラ戦の担当が国防軍からGフォースに移行し、美由紀もGフォースに志願し、ゴジラと戦い続ける事を決意した。

それから5年後、ゴジラとの戦いが終わり、Gフォースも解体が決まり、隊員達も元の軍に戻される事になったが、美由紀は軍を辞めるつもりでいた。

ゴジラとの戦いが終わった以上、彼女には、もう戦う気力は無く、このまま死んだ兄をともらいながら、静かに暮す事を望んでいた。

だが、龍之介と共に、この世界に飛ばされてからは、辞める考えを変え、あえて、龍之介達と行動を共にし、この世界に干渉しない様にしていたが、もう大部分は干渉していた。

さつま、美由紀の部屋

美由紀「兄・・・さん・・・」

美由紀は急激な睡魔に襲われ、目を閉じた。

それから、どのくらい時間が経っただろうか？

暫くして、ベッド横の内線電話が鳴り、その着信音で美由紀は目を覚ました。

美由紀「ん・・・如何したの？」

守『申し訳ありません・・・もう夜になるので・・・そろそろ、武装船が活動する時間です。』

美由紀「そう・・・すぐ行くわ！」

美由紀は部屋を出て、急いで艦橋に向かう。

さつま、艦橋

艦橋に着くと外は、もう霧は晴れ、既に夜になっていた。

美由紀「艦長！」

重雄「あつ中佐!？」

美由紀「状況は？」

重雄「異常はありません・・・唯・・・」

美由紀「唯、何？」

重雄「中国の漁船が・・・」

重雄は、美由紀に睡眠している間の状況を報告する。

報告によると、霧が晴れてから、夜までの間、変わった事は何も無く。

唯、2〜3隻の中国漁船が国境すれすれで漁業をしているぐらい。

一応、すれすれでも国境を越えていないから違法漁業でない為、取り締まる事が出来ない。

数時間後、中国漁船は、中国方面へと姿を消した。

美由紀「全く迷惑な漁船団ね！」

数時間後

今度は、国籍不明の商船がさつまの目視できる範囲に入ってきた。

美由紀「こんな夜中に単独航行?・・・怪しいわね！」

一応、正体不明の武装船の情報は、民間の企業にも連絡している為、単独航行を控え

させているが

それでも、単独航行をしている商船は、事前にブルーマーメイドに連絡している。

守「旗から見て、ノルウエーの貨物船見たいですね・・・」

貨物船のマストには、ノルウエーの旗が掲げられていた。

美由紀「通信主！・・・相手の艦名と目的を聞き出して見て！」

さつまの通信主「了解！」

ノルウエーの貨物船とはいえ、何故、単独航行をしていたか、理由を聞き出す。

一方、ノルウエーの貨物船では

ノルウエーの貨物船、船橋

謎の集団「おい、やべえぜ!!・・・ブルーマーメイドの巡洋艦だ!?!」

さつまと接触した事で、何故か乗員達が慌て始める。

謎の集団「慌てるな!・・・向こうは、まだ俺達の正体に気づいていない・・・捕ま

えた乗員を船底に移せ!!」

如何やら、唯の乗員ではない様だ。

見た目は、唯の乗員見たいだが、普通に禁じられている拳銃やソ連製のAKM自動小

銃を隠し持っていた。

貨物船も見た目は、唯の貨物船だが、内部には、15cm単装砲6門や12,7mm機

関砲、更に魚雷発射管も搭載されていた。

雅にこれは、美由紀達が探していた正体不明の武装艦だった。

さつま、艦橋

さつまの通信主「中佐！……向こうから通信です。」

美由紀「読んでみて……」

さつまの通信主「はっ……ワレ……ノルウエー貨物船ナルヴィク……モクテキハ……佐世保へ物資ノ輸送……だそうです。」

正体不明の武装艦から佐世保へと物資を輸送中だと偽の通信が入る。

美由紀「輸送ね！……ブルーマーメイドの方には、連絡が入っているの？」

美由紀は、一応、ブルーマーメイドの方には、連絡が入っているのかを確認する。

さつまの通信主「はい！……2日前にノルウエーの企業から連絡は入っていますと宗谷一等監督官からも確認は取れています。」

美由紀「そう……」

相手の船がブルーマーメイドの方にも連絡されているなら、別に怪しくないが何故か美由紀には、相手の船が唯の貨物船じゃないと勘が訴えていた。

美由紀「ん……念の為、臨検をしましょう、艦長！」

美由紀は、念の為、正体不明の武装艦への臨検を行う様、重雄に進言する。

重雄「臨検ですか!？」

守「ですが中佐!・・・確認が取れている以上!・・・別に臨検しなくても良いのでは?」

美由紀「確かに確認が取れている以上、臨検しなくても良いかもしれない・・・けど、私には、あれが唯の貨物船とは思えないの!」

守「その根拠は?」

守は、美由紀がそれを思う根拠は何なのか問う。

美由紀「根拠はないわ!・・・だけど、何故か私の勘が訴えている!」

守「そんな不可解な根拠で臨検など出来ません!!」

根拠なしで正体不明の武装艦への臨検を行う事に守は反対する。

美由紀「副長!・・・もしあれが我々が探している武装艦だったら・・・貨物船に偽装しているかもしれないわ!・・・もし、此処で取り逃したりしたら・・・」

守「ん・・・」

重雄「良いでしょう中佐!・・・臨検を行いましよう!・・・しかし、念の為、古野少尉の特殊部隊も同行させますよ!」

重雄は、特殊部隊を同行させるという条件で臨検を行う事にした。

美由紀「ありがとうございます艦長!」

こうして、正体不明の武装艦への臨検を行う事になった。

一方、ノルウエーに偽装している正体不明の武装艦では

正体不明の武装艦、艦橋

謎の集団「おい、向こうから臨検しに来るそうだ!？」

さつまからの臨検を行うという通信で乗員は、動揺をし始めた。

謎の集団「くそ・・・よし、隙を見て強襲するぞ!!」

正体不明の武装艦は、さつまから一定の距離を保ったまま、隙を窺っていた。

第16章 仮想巡洋艦 後編

6月5日

東シナ海、尖閣諸島沖

さつまでは、臨検に備えて乗り込み準備をしていた。

その時

さつま、艦橋

さつまの見張り員「貨物船からロケット弾!」

美由紀「何!?!」

正体不明の武装船から行きなり、RPG-7（ソ連製携帯式対戦車ロケット弾）がさつまに向かって放たれた。

重雄「回避しろ!!」

守「間に合いません!!」

RPG-7の攻撃を回避しようとしたが、間に合わず、さつまの後部に命中した。

『うわあ!?!』

衝撃が艦橋にも伝わり、乗員達は困惑する。

さつまの見張り員「後部に着弾！」

さつまの機関長『此方機関室!!機関損傷!!』

機関室からの連絡でRPG-7の一発の直撃で機関が損傷した。

美由紀「何ですって!?!」

重雄「総員戦闘配置！」

被弾後、直ぐに配置に着く。

美由紀「通信主！急いで各方面の各艦に連絡を！」

さつまの通信主「りよ、了解！」

正体不明の武装船との遭遇と戦闘に入った事を急いで、各方面に散開している各艦に知らせる。

重雄「機関室！・・・機関の損傷状況は如何か？」

重雄は、機関の損傷状況を聞く。

さつまの機関長『損傷は軽微ですが・・・速度は、低速しか出せません。』

機関の損傷は軽微だったが、速度が低速しか出せなかった。

重雄「そうか・・・」

守「低速では、回避は不可能です!!」

美由紀「副長！・・・相手が携帯式のロケット弾で撃ってくるなら、全速でも、どの

みち回避は不可能よ！」

例え全速でも相手がRPG―7を撃ってくる以上、回避は不可能だった。

正体不明の武装船、甲板

謎の集団手下B「やったぞ、命中だ!!」

謎の集団手下C「良いぞ、どんどん討って!!」

一発目の命中で勢いづいたか、正体不明の武装船から、RPG―7を続けて撃ってきた。

さつま、艦橋

さつまの見張り員「貨物船から再びロケット弾!!」

美由紀「迎撃せよ!!」

回避が不可能なら迎撃するしかない。

正体不明の武装船から次々と発射されるRPG―7を20mmフアランクス及び12,7mm機関銃で迎撃するが、更なる攻撃がさつまの右舷すれすれに着弾した。

美由紀「この衝撃は!?!・・砲弾!?!」

RPG―7に続いて15cm砲弾を連射して来た。

正体不明の武装船の攻撃にさつまも負けていられず

20mmフアランクス及び機関銃でRPG―7を迎撃するが、撃ってくる15cm砲

弾の方は、忽ち、さつまの至る各所に着弾し、応急要員が対処に当たっていた。

守「くそ！好き勝手に撃ちやがって・・・艦長、反撃命令を？」

重雄「は・・・」

重雄が攻撃命令を出そうとしたが

美由紀「待つて艦長！・・・攻撃は、控えるべきよ！」

突然、美由紀が攻撃を控えるよう言う。

守「何故ですか中佐!?!・・・このままでは、被害が拡大します!!」

美由紀「副長！冷静に考えなさい！・・・相手は、ブルーマーメイドが登録している貨物船に偽装していた・・・と言う事は、もしかしたら・・・相手の艦には、その船の乗員が捕らわれてるのかもしれないわ!!」

美由紀の言う通りである。
攻撃してくる正体不明の武装船の船底には、ブルーマーメイドが登録している貨物船の乗員が捕らわれていた。

彼らは、佐世保に向かう途中、フィリピン沖で正体不明の武装船に襲われ、船は、ばれない様に撃沈され、しかも積まれていた物資は強奪され、乗員達も捕虜にされてしまった。

ついでに、何故此処に正体不明の武装船が来たか

それは、先、さつまが遭遇した中国漁船と関係があつた。

正体不明の武装船が偽装して、貨物船を襲い積まれていた物資を強奪し、乗員達も捕虜として捕まえて、国境すれすれで取引相手の漁船と合流。

強奪した物資を渡し、捕虜にした乗員も商品として、裏市場に売られる予定でいた。だが、さつまとの遭遇が彼らにとって思わぬ事態を招じた。

守「では、如何すれば良いんですか？・・・このままでは、被害が拡大するばかりです!!」

乗員を人質に取られている以上、攻撃は出来ない。

しかし、このままでは、被害が拡大する。

美由紀「通信主！各艦には、此方の状況は連絡したの？」

さつまの通信主「はい中佐！・・・既に弁天や浪速が此方に急行中ですが・・・到着まで時間掛かりますと！」

救援に向かっている真冬の弁天と浪速の到着まで時間が掛かる。

それまで、此方は、持ちそうにない状態だ。

美由紀「如何すれば良いの・・・」

他の手がないか、美由紀は、悩む。

接触から僅か30分で、戦闘は泥沼化していた。

正体不明の武装船からは、次々とRPG-7や15cm砲が連射され、さつまからは、20mmフアランクス及び12.7mm機関銃で迎撃するが、15cm砲弾が何ヶ所かに命中して応急班は、あちら此方で手を焼いている。

更に応急員に向かって、連中がAKM自動小銃を撃つて来ている。

反撃したくても人質を取られている為できない。

何とか打開策はないのか

その時

「権藤中佐!!」

艦橋に駆け上がってくる1人の男がいた。

美由紀「古野間隊長!」

艦橋に駆け上がって来たのは、第21対生物特殊部隊第6小隊長の古野間 卓少尉だった。

古野間「中佐!・・・我々に武装艦への強襲乗り込みをさせて下さい!!」

何と、古野間は、特殊部隊を率いて、正体不明の武装船に強襲乗り込みをするという。

守「強襲乗り込み!?それは、危険だ!!・・・相手は、15cm砲を連射しているんだぞ!!」

古野間「この状況を打開するには、それしかないでしょう・・・一か八か・・・賭け

に出るべきです!!」

古野間の言う通り、人質を取られている今、反撃もできない。

なら、特殊部隊を送くつて、一か八か強襲を掛け、この状況を打開するしかないだろ。しかし、相手は、15cm砲やAKM自動小銃を連射している今、特殊部隊をボートで送ろうとしたら、忽ち餌食に成る。

美由紀「それなら良い方法があるわ!」

『えっ!?!』

それに対し美由紀は、ある策を提示する。

美由紀「接舷強襲よ!」

『接舷強襲!?!』

美由紀「そう!・・・全速で武装艦に体当たりで突入し、白兵戦を仕掛けるの!」

接舷強襲とは、相手の艦に全速で突っ込んで、相手の艦に白兵戦を仕掛ける方法。

守「それなら、行けるかもしれません!!」

美由紀の策に守は賛同するが

重雄「しかし中佐!・・・機関が損傷して、速度も低速しか出せません・・・接舷強襲など不可能です!!」

最初の攻撃でさつまの機関は損傷している。

その為、低速しか出せないうえ、今は、応急処置の作業中である。

この状態での接舷強襲は不可能である。

美由紀「ん……艦長！……一瞬だけ……機関を全速出せる？」

美由紀は、一瞬だけ全速出せるか如何か問う。

重雄「ちよつと待つて下さい!!」

重雄は、機関長と相談する。

重雄「ん……ん……分かった……10秒だけなら、出せます!!」

機関長と相談した結果、10秒だけなら機関を全速にできると言う。

美由紀「それだけあれば、十分よ!……古野間隊長!」

古野間「はっ!」

美由紀「隙を見て、奴らの武装船に接舷強襲を行う!……接舷したら、直ぐに突入

し、各所を占拠する事!……良いわね!!」

古野間「任せて下さい!!」

古野間は、艦橋を降りる。

美由紀「艦長、奴らに気づかれない様にゆっくり、艦首を敵艦に向けて!……私の

合図で機関を全速に……」

重雄「分かりました。」

こうして、両者が戦闘している中、一か八かの接舷強襲作戦が実行されようとしていた。

さつまは、気づかれない様に艦首を正体不明の武装船にゆっくり向け、機関室では、機関の一応の応急処置は終わり、艦内では、古野間率いる特殊部隊が89式 5.56mm小銃やM84スタングレネード（閃光手榴弾）などを装備し、接舷強襲に備える。

一方、正体不明の武装船の方は

正体不明の武装船、船橋

謎の集団幹部「一体奴らは、何をやる気だ？」

謎の集団手下A「こっちは、人質がいるんだ！・・・下手な真似は、できないだろう。」

正体不明の武装船の乗員は、さつまが行おうとしている接舷強襲に全く気づかずに、攻撃を続ける。

やがて、さつまの艦首が正体不明の武装船に向き

さつま、艦橋

美由紀「今よ艦長！」

重雄「両舷全速前進!!」

美由紀の号令のもとさつまは、正体不明の武装船に全速で突入する。

正体不明の武装船、甲板

謎の集団手下B「や、奴らの艦が突っ込んでくるぞ!」

謎の集団手下C「ひ、怯むな!!撃って!!撃って!!」

さつまの体当たり突入に正体不明の武装船の乗員は慌てて応戦する。

さつま、艦橋

美由紀「主砲!・・・甲板の15cm砲に向け砲撃せよ!」

さつまの砲雷科「目標ロックオン!ファイヤー!!」

さつまの5インチ単装砲が甲板の15cm砲を粉碎する。

重雄「総員!衝撃に備え!!」

さつまは、正体不明の武装船の右舷に体当たりした。

美由紀「突入!」

さつま、甲板

古野間「行くぞ!!」

右舷に接触と同時に古野間率いる特殊部隊が正体不明の武装船に強襲を仕掛けてきた。

正体不明の武装船の乗員が制圧部隊に対して応戦し、双方で銃撃戦になった。

正体不明の武装船、甲板

古野間「閃光手榴弾を投げろ!!」

GF隊員「これでもくらえ!!」

敵の抵抗が激しく、閃光手榴弾を投げ、活路を開く。

謎の集団手下『うわあ!?!』

閃光手榴弾を受けて、正体不明の武装船の乗員は、目と耳を潰され、その場で体勢を崩す。

古野間「今だ!!」

その機を逃さず体勢を崩した乗員を拘束する。

突入から5分、古野間達は、あつという間に甲板を制圧し、続いて、二手に分かれ一方は、船橋にもう一方は、船内えつと向かう。

途中、抵抗を受けたが、特殊部隊には、敵わず次々と投降していった。

さつま、艦橋

美由紀「如何やら、成功ね!」

特殊部隊の突入制圧を美由紀達は、艦橋で見守っていた。

正体不明の武装船、船橋

謎の集団A「駄目だ!あつちこつち制圧されている。」

謎の集団幹部「うう・・・」

各所を次々と制圧されて、慌てふためく中、船橋のドアが吹っ飛ばされ、古野間達が突入してきた。

古野間「動くな!! 武器を捨てろ!!」

謎の集団幹部「う、撃たないでくれ!! ……こ、降伏する!!」

直ぐに武器を足元に捨て、手を挙げて降伏した。

さつま、艦橋

さつまの通信主「古野間隊長から連絡! ……艦橋を制圧したとの事です。」

美由紀「如何やら……ひとまず終わった見たいね……」

最初の戦闘からわずか10分で艦橋を制圧したことにより、正体不明の武装船との戦闘は、ひとまず終結した。

さつまの被害はひどい様であった。

機関は損傷し、しかも無理な全速と衝突の衝撃で修理は不可能な為、自力での航行は出来なくなった。

また、敵の15cm砲弾が命中している為、至る所穴だらけで、飛行甲板もめくれ上がった状態だった。

負傷者は、50人程度で死者はなかった。

一方、艦内に突入した特殊部隊は、船底へと辿り着く。

正体不明の武装船、船底

GF隊員「おい、此処に誰がいるぞ!!」

船底を調べてみると、ある部屋に人の気配がした為、扉を突き破る。

GF隊員「動くな!!」

ノルウエー船の乗員「撃たないでくれ!!・・・我々は、ノルウエー船の乗員だ!!」

扉を突き破ると其処には、ノルウエー船の乗員達が閉じ込められていた。

ノルウエー船の乗員だと聞いて、銃を伏せる。

GF隊員「船長は、誰だ?」

奥から船長がやってきた。

ノルウエー船の船長「私が船長だ!君らは?」

GF隊員「我々は、ブルーマーメイドだ!!君たちを救助に来た!!」

ノルウエー船の乗員「助かった!!」

ノルウエー船の乗員「家に帰れるぞ!!」

ブルーマーメイドの名を聞いて、ノルウエー船の乗員達は涙を流して喜ぶ。

よく見ると、彼らの衣服は、ボロボロで食事もロクに与えられなかったか、体もボロボロで、栄養失調を起こしている者もいた。

直ぐに救護班を呼び、担架でさつまの医務室へと運び出され、救助された乗員もさつ

まに収容された。

やがて、日が昇り、真冬の弁天と浪速が救援に到着し、正体不明の武装船に接舷する。真冬が宙返りで正体不明の武装船の甲板に着地、美由紀が出迎えに来た。

正体不明の武装船、甲板

真冬「ブルーマーメイドの宗谷真冬だ!! 救援に来たぞ!!」

美由紀「ご苦労、宗谷二等監督官! でも、もう戦闘は終わったわよ!」

真冬「くそ!! 遅かったか・・・」

遅れた事に真冬は、悔しがる。

美由紀「でも、来てくれただけでも嬉しいわ!・・・今此方の負傷者と救助した乗員の負傷者の手当てで手がいっぱいなの!・・・それに拘束した連中を其方に引き渡したいんだけど・・・」

真冬「おお、任せろ!!」

美由紀「助かるわ!」

真冬「それにしても酷くやられたな・・・」

美由紀「仕方ないわよ!・・・人質を取られて、しかも不意打ちを受けたんですもの!・・・

これぐらいの被害は当たり前よ!・・・死者が出なかった事が何よりの喜びよ!」

真冬「へ・・・」

美由紀「何ですか、宗谷二等監督官？」

真冬「以外とそんな事言うんだな、あんたも！」

美由紀「如何いう意味？」

美由紀は、真冬を睨む。

真冬「い、いや、何でもないよ……」

真冬は、向こうへと逃げて行く

美由紀「何あれ！……失礼な子ね！」

恐らく美由紀が若い頃の母、真雪の姿に見えたのだろう。

それから間もなく、ながおか、とよだが合流。

ノルウェー船の乗員を弃天や浪速に移乗させ、鹵獲した正体不明の武装船を弃天が曳航した。

損傷したさつまは、ながおかが曳航して横須賀へと帰還する事になった。

6月13日

国土交通省、廊下

真霜は、正体不明の武装船を制圧した事を海上安全整備局に報告し、横須賀のブルーマーメイド庁舎に戻ろうとしていた。

そんな時

真霜「ん!？」

真霜の前にある男が立ちはだかった。

邦夫「これは、これは、宗谷監督官!・・・武装船の制圧、お見事でしたね!」

男の名は、野田邦夫

ブルーマーメイドと並ぶ、ホワイトドルフィンの安全監督室室長で階級は、一等保安監督官、言うなれば真霜がブルーマーメイドの最高指揮官ならば邦夫は、ホワイトドルフィンの最高指揮官でもある。

邦夫は、真霜に皮肉を言う。

真霜「・・・」

真霜は、そんな邦夫を無視して、先へと向かう。

邦夫「酷いな宗谷監督官!・・・許婚である男を無視するとは・・・」

邦夫は、そう言つて、真霜を止めるが

真霜「ふん!・・・冗談じゃないわ!!・・・誰が懐かしいと思うの!・・・それに貴

方とは、もう許婚でも何でもないわ!!・・・今は、忙しいの!・・・失礼するわ!!」

実は、真霜と邦夫は、かつて、許婚の関係であつた。

だが、今は、もう許婚ではない。

理由は、いざれ説明する。

とは言え、真霜は、邦夫を振り切ろうとする。

邦夫「そう言えば！・・・お前の部隊に・・・妙な連中が配属されていたな？」

邦夫は、龍之介達の事を出す。

真霜「ん!？」

邦夫「しかも、その指揮官とお前は同居しているんだよな・・・」

真霜「えっ!？」

何処で知ったかは、不明だが、龍之介と薫が宗谷家に同居しているのを邦夫が知っていた事に真霜は驚愕する。

邦夫「まあどうせ口でもない奴なんだろうな！・・・そんな奴の面倒を押し付けられるとは・・・お前も付いてないな・・・」

邦夫は、龍之介の事を馬鹿にし、更にその面倒を押し付けられた真霜も馬鹿にする。

真霜「そうね！・・・少なくとも、貴方見たいに愛人を作る人より、ましかもね！」

それに対して、真霜は、邦夫の弱みを言って、逆に邦夫を馬鹿にする。

邦夫「何だ?!？」

それを聞いた邦夫は、態度を露にする。

真霜「御免なさ〜い!!・・・私、貴方と違って、遊びで付き合わないんで・・・では、失礼します!!」

そう言つて、真霜は、その場を去る。

邦夫「ふん……まあ良い！……どうせお前は……俺の元に戻つてくるのだから……」

去つていく真霜を見て、邦夫は、そう言う。

何れ邦夫は、龍之介や真霜の前に立ちはだかる事になる。

6月14日

横須賀基地

この日、ながおかが航行不能になつたさつまを曳航しながら、横須賀へと入港した。

薫「あつ……!?」

帰還したさつまを見て、薫達は驚いていた。

機関は損傷し、更に至る所穴だらけ、飛行甲板もめくれ上がっている。

次郎「酷い有様だな！」

薫「そうだね、それよりもこんな状態で、接舷強襲した事が驚きだわ!!」

次郎「そうだな！……聞いたところ、機関も損傷してたつて話だぜ!!」

薫「えー!?!……それで接舷強襲何て!?!……やっぱり、中佐は、私達より凄いわ!!」

その後、さつまは、修理の為、ドックに入ろうとしたが、空いているドックが無かつ

た為、仕方なく、横須賀女子海洋学校の地下ドックに入渠する事になつた。

ドックに入渠する時、学生達が珍しそうに入渠するさつまを見て、驚いていた。如何やら、学生艦以外の艦が入渠するのが珍しいんだろう。

さつまの修理は、数ヶ月は、掛かるらしい。

それから、今回の活躍で美由紀にブルーマーメイドから感謝状と勲章を贈られるそうだが、美由紀は、これを丁寧にお断りした。

何故、お断りしたか理由を聞くと

美由紀「私は、あくまで任務を遂行したまで、感謝状を贈られる程の事はしていないわ!!」

流石は、美由紀だった。

第17章 岬 明乃

7月10日

宗谷家、龍之介の部屋

龍之介「ぐう・・・ぐう・・・」

この日、龍之介は、休暇で部屋で寝ていた。

ついでに部屋の中は、読んだ本や脱いだ服が散乱していた。

実は龍之介は、仕事では、厳格、真面目のだが、日常生活では、ずぼらで、部屋の中は、何時も散らかっている。

その為、何時も薫に世話を焼かされている。

とは言え、読んだ本や脱いだ服が散乱している中で龍之介は寝ている。

そんな時

ドーン!!

真冬「おーっす龍之介!!」

突然、真冬が龍之介の部屋に入って来て

真冬「いい加減・・・起きろ・・・!!」

寝ている龍之介の鼻に指を入れて、上へと引つ張る。

龍之介「イテテ・・・イテえ・・・!!」

真冬に鼻を引つ張られ龍之介は、嫌々ながら起こされた。

真冬「起きたか龍之介！」

ポーン!!

真冬「イテえ!？」

起こされた龍之介に真冬は、頭を殴られる。

真冬「何すんだよ!!」

龍之介「それは、こっちのセリフだ!!・・・人が良い気で寝ていたのに何すんだ!!」

いきなり起こされ、龍之介は腹が立っていた。

宗谷家、真霜の部屋

同じ頃、真霜の部屋でも

真霜「すう・・・すう・・・」

真霜が部屋で寝ていた。

唯、龍之介の部屋と同じ様に真霜の部屋も読んだ本や脱いだ服が散乱していた。

実は、真霜も龍之介と同じ、仕事では、厳格、真面目なのだが、日常生活では、ずぼ

らで、部屋の中は、いつも散らかっていた。

その中で真霜が寝ていると

ましろ「姉さん……！」

ましろが部屋に入って来て

ましろ「いい加減起きろ……!!それと服は、脱いだら洗濯機!!」

と真霜を起こし、散乱している服や本を片付ける。

まるでましろが真霜の世話役の様だ。

それから数分後

宗谷家、リビング

『ん……』

起こされた両者は、リビングに集う。

真冬「はっはっはっ……家では、相変わらずだな真霜姉!!……それにしても、お

前もずぼらだったんだな龍之介!」

龍之介「もお少し寝かせろ……」

真霜「休みの日くらいのんびりしたいの……」

全くのだらしなさだ。

ましろ「のんびりとだらしないの違うよ……はいお茶!」

ましろは、だらしない真霜に呆れながらお茶を渡す。

真霜「ありがとう。」

ましろ「龍之介さんにも……」

ましろは、龍之介にもお茶を渡す。

龍之介「ああ、すまねえ……」

真霜「それにしても……皆揃って、休み何て、偶然ね！」

宗谷家全員揃って休みとは、真霜は、珍しく思う。

真冬「母さんは、仕事だけどね！」

母の真雪だけは、仕事で居なかった。

龍之介「薫も休みだが……そう言えば、薫は何所だ？」

龍之介は、休みの薫が居ない事に気づく。

ましろ「薫姉さんなら、図書館に行くって言って、出かけましたよ！」

ましろから薫は、図書館に出かけていたと聞く。

龍之介「図書館に？……通りで真冬が起こしに来た訳だ……」

龍之介は、何故、薫の代わりに真冬が起こしに来たか大体分かった。

真霜「そう言えば、ましろ!!……貴方、受験勉強は、進んでるの？」

真霜は、ましろに横須賀女子海洋学校の受験勉強は、進んでいるのか問う。

ましろ「ま……まあ、ぼち、ぼちだけど……」

それに対して、ましろは、ぼち、ぼちと答える。

真霜「そう！」

真冬「大丈夫かましろ!!・・・お前は、変な所でミスするからな・・・」

真冬は、ましろの運が付いていない事を知っていた。

ましろ「大丈夫だ!!・・・模擬の結果も良いし、間違っているところは、薫姉さんが教えて貰っているから、心配いらぬ!!」

ましろは、慌てふきながら心配いらぬと言い張る。

真冬「そ、そうか・・・折角、根性注入してやろうと思ったのに・・・」

如何やら、真冬は、ましろが受験勉強で手こずっているなら、尻に根性を注入し様と思っていた様だ。

龍之介「本人が大丈夫だって、言ってるんだ!・・・此処は、本人の好きな様にさせたら如何だ真冬?」

龍之介は、真冬にましろの好きな様にさせたら如何だと告げる。

真霜「へ・・・」

龍之介「な、何だよ!」

真霜「貴方からそんな言葉が出るなんて驚きね!」

真霜は、龍之介に皮肉を言う。

龍之介「如何いう意味だ？」

真霜「別に・・・」

龍之介「相変わらず嫌な奴だな！・・・部屋にいるからな!!」

龍之介は、皮肉を言う真霜に嫌な感じを思いながら自分の部屋に戻る。

ましろ「じゃ・・・私、部屋で勉強しているから・・・」

真霜「頑張ってね！」

ましろ「!!」

真霜から応援され、ましろは、照れながら自分の部屋に戻る。

真霜「・・・」

2人がいなくなった後、真霜は、急に顔色を悪くする。

真冬「如何したんだ真霜姉？」

急に顔色を悪くする真霜を真冬が如何したのかと問う。

真霜「ねえ真冬！・・・私、この前・・・あいつに会ったわ!!」

真霜は、この前、国土交通省で邦夫と会った事を真冬に話す。

真冬「あいつって!?!・・・野田か？」

野田つと聞いて、真冬は、態度を変える。

真霜「ん！」

真冬「あいつがまた、何かしてきたのか？」

真冬は、邦夫が真霜に何かをしてきたのか問う。

真霜「んん・・・唯、あいつ・・・私達と山本さん達が同居している事を知っていたわ!!」

真霜は、邦夫が、龍之介と薫が宗谷家に同居しているのを知っていた事を真冬に言う。

真冬「何だって!？」

それを聞いた真冬は驚愕する。

真冬「それで、あいつは何か企んでいるのか？」

真冬は、それで邦夫が何かを企んでいるのか問う。

真霜「それは、無いわ!!・・・今のあいつに何もできるわけないのだから!!」

それに対して、今の邦夫には、何もできないと真霜は推測する。

真冬「そうだよな・・・」

真冬も納得する。

真霜「御免ね真冬!・・・心配かけてしまつて・・・」

真霜は、真冬に心配させた事を謝罪する。

真冬「何言つてんだよ!!・・・真霜姉がすっかりしていないとあたし等が上手く動かねだろぅ!!」

それに対して、真冬は、真霜を激励する。

真霜「うん・・・そうね！」

真冬に激励され、真霜は、笑顔を取り戻す。

真冬「そうだ!?! 龍之介に助けて貰おうぜ!!」

真冬は、龍之介に助けて貰おうと言うが

真霜「な、何であいつに助けて貰わなきゃならないの!?!」

龍之介に助けて貰おうと聞いて、嫌がる。

真冬「嫌なのか?」

真霜「嫌よ!・・・どうせあいつも同じよ!」

真霜は、龍之介が邦夫と同じ人間だと思っていた。

真冬「それは、違うと思うぜ!!」

だが、真冬は、違うと言う。

真霜「えっ!?!」

真冬「上手くは、言えねえけど・・・この前のオバマ救出戦の時・・・あいつの判断が無かったら、あんなに大勢の乗員を助けられていなかったかもしれないんだぜ!!・・・まあ、真霜姉が言う通り!・・・あいつには、嫌な所が有るけど・・・根は良い奴だぜ

!!」

真冬が龍之介の良いところを真霜に言う。

真霜「・・・以外ねえ・・・貴方からそんな言葉が出るなんて・・・」

真霜は、真冬が珍しく龍之介を褒めている事に驚く。

真冬「あたしだって、言う時は、言うんだぜ!!」

真霜に言われ真冬は照れる。

真霜「フフフ」

そんな真冬に真霜は笑う。

真霜（真冬の言う通りかもしれない・・・でも、私は・・・まだ、あいつを信用できない・・・）

真霜は、まだ龍之介の事を信用できていなかった。

横須賀市のとある図書館

一方、薫は、横須賀のある図書館にいた。

薫「やっぱり!？」

薫は、休暇を利用して、この世界に関する歴史書と技術書関連書を読み、我々の世界の歴史とどの辺から違うかを調べていた。

薫「幕末から変わり始めている・・・」

薫が調べた結果、坂本竜馬の暗殺が未遂で防いだ事で、この世界は、平和の筋書き

へと変わったのだろうか。

自分達の世界では、坂本竜馬は暗殺され、世界は、争いの筋書きへと進んでしまった。我々の世界に比べれば、この世界は、最も平和な世界だろう。

薫（はあ：：前にも思ってたけど：：私達は、この世界で何を求めているんだろう：：）
美由紀同様、薫もこの世界に飛ばされて、今やブルーマーメイドの傘で動いている。でも本心は、やっぱり自分達が、この世界で何を求めているんだろうかと悩んでいた。
そんな時

薫「ん？」

薫の目の前で、とある少女が柵の上にある参考書を取ろうと背伸びしていた。

少女「んん．．．あと、5cm身長が欲しい．．．」

しかし、少女の身長では手が届かなかった。

少女「少し、柵低くしてくれば良いのに．．．利用する皆が身長高い訳じゃないの．．．」

文句を言いながら必死に参考書を取ろうとする少女。
すると

———スツ

少女の後ろから腕が伸び、少女が必死に取ろうとしていた参考書にその腕触れる。

少女「えっ!？」

少女が驚くのは当然だと思う。

少女は慌てて後ろを振り向くと、薫が背伸びをして参考書を手に持っていた。

薫「はい、この本で良い？」

薫が少女に参考書を差し出すのが、少女は驚いたまま見上げているだけだった。

薫「違う?」

少女「えっ!?!は、はい、すみません、合っています!!……ありがとうございます!!」

少女は薫にペコリと頭を下げて礼を言う。

薫「礼は、良いわよ!……それよりも……貴方が取ろうとしたその本は、高校生向けの海洋関連の難しい本だけど……貴方見たいな小学生が見ても分からないわよ?」
少女が取ろうとしていた参考書は、高校生並の海洋関連の本で、少女見たいな小学生が読めるものじゃなかった。

だが、薫は、飛んだ勘違いをしていた。

少女「あの私……中学生何ですけど……」

何と小学生だと思っていた少女は、中学生だった。

薫「えっ!?!」

薫は、それを聞いて驚愕する。

薫は、少女の見た目が小学生並みの身長だったから、雅か、中学生だったとは、思わなかった。

薫「ご、御免なさい!!・・・私、堆、背が低いから、てつきり小学3年生かと・・・」
薫は、少女に謝罪する。

少女「いいえ、大丈夫です!!」

薫「そう!・・・私は、山本 薫!」

少女「私は、岬 明乃です!」

お互いに自己紹介をする。

これが薫と明乃との出会いであった。

2人は、机に座り、お互いに話す。

薫「へ・・・岬さんは、中学3年生なんだ!」

明乃「はい!・・・今日は、受験勉強に来ました!」

薫「そっか!・・・中学3年だから、高校受験は、当然だね!・・・何処を受験するの?」

薫は、明乃が中学3年だと聞いて、何所の高校を受験するのか問う。

明乃「横須賀女子海洋学校です!」

それに対して、明乃は、横須賀女子海洋学校だと答える。

薫「えっ?!?・・・じゃ貴方、ブルーマーメイドを目指しているの?」

明乃「はい!」

薫「その身長差で、ブルーマーメイドを目指しているなんて、驚きだわ!!」

薫は、小学生並みの明乃がブルーマーメイドを目指している事に驚く。

明乃「いいえ・・・実は、約束しているんです!!」

薫「約束?」

明乃「私が小学生の時、2人でブルーマーメイドになろうって、約束したんです!!」

明乃は、自分とおさ馴染みの知名もえかとの約束を薫に話す。

薫「なれると良いわね・・・」

それを聞いて薫は、なれると良いわねと明乃に告げる。

明乃「はい!」

明乃は、喜ぶ。

明乃「そう言えば・・・薫さんは、何をしているんですか?」

明乃は、薫の職業を問う。

薫「えくと・・・海上安全整備局で働いているわ!」

明乃「えっ!?!」

薫が海上安全整備局で働いていると聞いて、明乃は驚愕しながら

明乃「もしかして、薫さん……ブルーマーメイドの人なんですか？」

薫がブルーマーメイドの人なのか問う。

薫「いや、その……」

それに対して、薫は、答えられない。

異世界の事やGフォースの事は、極秘になっているので、一般人には、言えない。

なら

薫「そ、そうだよ!!私は、ブルーマーメイドで働いているわ!」

とブルーマーメイドだと素直に認める。

明乃「やつぱり、そうなんですわね!」

明乃は、薫がブルーマーメイドだと知り、大いに喜んだ。

憧れていたブルーマーメイドの人と知り合えたのだから

しかし

図書館の係員「すみません……他の人の迷惑になるので、大声ではしゃぐのは止めて下さい。」

余りにも大声でわめいたせいとか、係員に注意された。

『御免なさい!!』

2人は、係員に謝る。

宗谷家、龍之介の部屋

その頃、龍之介は、部屋で本を読んでいた。

龍之介「……………」

先まで寝ていたが、真冬に起こされて、もう寝る事が出来なくなつたので、仕方なく部屋で参考書を読む事にした。

龍之介「……………」

因みに読んでいるのは、航空関係の本だった。

この前、美由紀が言った通り、龍之介は、かつては、なのはやフェイト達と同じパイロットだった。

その腕は、雅にエース並みで、何れは、トップガンの教官になると思ったが、機体の事故で、僅か1年でパイロットとしての夢を絶たれてしまったのだ。

龍之介（もし、俺が……パイロットとして存命だったら……空を飛び続けただらうな……）

龍之介は、そう思いながら見ていると

真霜「何しているの？」

真霜が部屋に入つて来た。

龍之介「ロツクもしないで、勝手に入ってくるな!!」

勝手に入って来た真霜に龍之介は怒る。

しかし、真霜は勝手に入って来て、龍之介が読んでいる本を見る。

真霜「へ・・・こんなものを見るなんて・・・やっぱり権藤中佐が言った通り！・・・貴方パイロットだったのね！」

真霜は、この前、美由紀が言っていたのを聞いていたので、龍之介がパイロットとは知っていた。

龍之介「悪いか？」

真霜「いいえ、唯・・・それで、よく艦隊の指揮を取れているものね？」

龍之介「この世界と違って・・・向こうの世界では、航空戦の経験があれば、誰でも指揮を執れる。」

龍之介は、真霜に向こうでの制度を告げる。

真霜「そうなの!？」

それを聞いて、真霜は驚く。

真霜「でも何故、パイロットに？」

真霜は、何故、龍之介がパイロットになったのか問う。

龍之介「・・・憧れだった。」

真霜「えっ！」

龍之介「憧れだったんだ!!・・・小さい頃・・・俺は、国防軍の航空祭で戦闘機が自由を飛んでいるのを見て、感動したんだ・・・自分もあんな風に空を飛べたら・・・だから、パイロットになった。」

龍之介は、真霜にパイロットになった理由を言う。

真霜「・・・」

龍之介「逆に聞くが・・・お前は何故、ブルーマーメイドになった？」

今度は、龍之介が真霜に何故、ブルーマーメイドになったのか問う。

真霜「うちは、代々ブルーマーメイドの家系だったから・・・私もならなければと思つて・・・」

龍之介「何だ成り行きか？」

真霜「悪い？」

龍之介「いや・・・むしろお前には、合っているのかもしれない！」

真霜「えっ!？」

龍之介「上手くは言えないが・・・お前には、その才能が有るのかもな・・・」

龍之介は、真霜のブルーマーメイドとしての才能を認める。

真霜「!!!」

それを聞いた真霜は照れる。

龍之介「それに比べたら俺は、航空戦しか才能が無いからな・・・」

龍之介は、艦船の知識が無い事に悔やむ。

真霜「なら・・・私が教えてあげましょうか？」

龍之介「何!？」

何と、真霜が龍之介に艦船の知識を教えると言い出した。

真霜「その代わり、私にも航空戦の事を教えて頂戴！」

その代償として、航空戦を教える事を条件に着きだして来た。

龍之介「お前が俺から航空戦を教わりたいだど!?!?・・・如何いう風の吹きまわしだ？」

龍之介は不思議だった。

普通なら、男嫌いの真霜が龍之介を教えるなんて、あり得なかった。

真霜「私だって、航空機の事ぐらい知つとかないといけないし・・・」

真霜は、航空時代の幕開けを予測したせいか、航空機の事を知つとかないといけないと思つた。

龍之介「ふくん・・・やつとお前もその機になつたか・・・だが、俺の教わりは、厳しいぞ！」

真霜「それは、こつちのセリフよ！」

2人は、競い合う。

こうして、龍之介は、真霜から艦船の知識を真霜は、龍之介から航空戦を教わる事にした。

ヴェルニー公園

一方、図書館で出会った薫と明乃は、係員に騒がしいと注意され、もう少し語り合える場所に行こうと図書館を出て、横須賀のヴェルニー公園のベンチで2人と語り合う。

明乃「へ・・・薫さんは、艦長なんですか？」

薫「そうだよ！」

薫は、自分が艦長を務めている事を明乃に話す。

明乃「艦長か！・・・良いな・・・」

それを聞いた明乃は、艦長に憧れを抱く。

薫「岬ちゃんも多分入学したら、艦長になれるかも知れないわよ！」

明乃「でも私は、入学できるか如何か、不安なんです。」

明乃は、横須賀女子海洋学校に入学できるか不安だった。

薫「一生懸命勉強すれば、必ず入学できるよ!!・・・私だって、入学前は、一生懸命勉強したんですもの・・・だから、諦めないで！」

そんな明乃に薫は、勇気づける。

明乃「はい！」

その後、日が落ち始め、それぞれ帰途に着く。

薫「また何所かで会えると良いわね！」

薫は、明乃と再会できる事を楽しみにした。

宗谷家

薫「ただいま!!」

薫は、宗谷家に帰宅する。

そのまま、部屋に戻ろうとした時

薫「ん!?!」

龍之介の部屋から騒がしく声が聞こえてきた。

薫は、恐る恐る部屋を覗くと

薫「あっ!?!」

何と龍之介が真霜から何かを教わっているではないか

薫は、よく見ると

如何やら艦船の知識を真霜から教わっている様だ。

だが、今度は、真霜が龍之介に何かを教わっている。

こつちの方は、航空戦の様だ。

薫（珍しい!?!・・・あんだだけ兄さんを毛嫌いしていた真霜姉さんが、お互いに知識を

交換してゐるなんて・・・)

薫は、2人がお互いに知識を教わっている事に驚いていた。

普通ならそんな事はあり得ないのに、これは、如何いう事なのか、2人が仲良くなっている。

薫は、邪魔せず、そのまま部屋に戻る。

宗谷家、脱衣所

薫「ましろちゃん!!」

ましろ「か、薫さん!？」

ましろは、お風呂に入ろうと服を脱いでいたら、突然、薫が入ってきた。

ましろ「如何したんですか？」

薫「今日は、ましろちゃんと一緒に入ろうと思って・・・」

ましろ「は、はあ・・・」

薫と一緒にいる事になったましろは、服を脱いでいる時、薫の大きな胸を見て、思わず自分の胸を見つめてしまう。

まあ、ましろは、まだ成長期だから何れ薫と同じぐらいになるかもしれない。

宗谷家、風呂場

薫「ましろちゃん、背中洗ってあげる。」

ましろ「良いです、自分でできますから・・・」

薫「良いから！良いから！」

薫の言葉に負け、背中を洗って貰う事になった。

背中を洗っている時

薫「ねえ！・・・ましろちゃんは、ブルーマーメイドを目指しているんだよね？」

ましろ「当たり前です!!・・・私は、その為に勉強をしているんですから・・・」

薫「そうだったね！」

ましろ「如何したんですか?・・・急にそんな分かり切った事を聞いて・・・」

薫「別に何でもないわ！」

薫は、ある事を考える。

薫（もしかしたら、ましろちゃんと岬ちゃんと一緒になったりして・・・・・・考え

過ぎかな・・・）

薫は、雅か、ましろと明乃が入学したら、クラスが一緒になるかも知れないと思った。だが、それが現実になるとは、薫は予測もできなかった。

第18章 ブルーマーメイドフェスター 前編

8月

ブルーマーメイドフェスター

それは、ブルーマーメイドが主催する一大イベントである。

当日は、普段一般人は立ち入り禁止となっている基地の一部を開放して、BPF隊員達が案内をしたり、使用艦艇も基地同様、一部を一般開放したりする。

この他にも音楽隊の演奏やパレード、スキップーショー、ゲストで呼んだアイドルショー、一般客の参加のアトラクションに縁日では定番の露店も出店し、またブルーマーメイドフェスター限定のグッズの販売など、文字通り、当日は基地がお祭り騒ぎとなる。

また、ブルーマーメイドだけではなく、横須賀女子海洋学校の生徒達も参加し、ブルーマーメイドの先輩方に負けじと、教育艦の一般開放や露店を出す予定となっている。

千葉県、館山港

一方、Gフォース西部方面艦隊は、ブルーマーメイドフェスターに備え、艦隊を一時的に横須賀基地から館山港に本拠を移した。

空母大鳳、艦橋

龍之介「ああ……いくらブルーマーメイドフェスターとはいえ……こんな所に避難するとは……」

功「仕方ないですよ……極秘とは言え、我が艦隊を一般人に見られる訳にいきません。」

Gフォース西部方面艦隊は、ブルーマーメイドで極秘になっている為、ブルーマーメイドフェスターの時に一般人に見られる訳にもいかない。

其処で、横須賀から離れた館山湾に停泊する事になった。

此処なら、ブルーマーメイドの管理下の基地だから、一般人に見られる心配はないだろう。

龍之介「そんな事は分かっている。」

極秘にしている事は、龍之介も分かっている。

龍之介「唯、俺的には、邪魔者を基地から一時的に追い出したとしか思えないんだが……」

功「えっ？」

龍之介「最初の任務で大規模な救助作戦をしたり……この前の仮想巡洋艦事件を解

決したりで、連中から活躍の場を奪っているから・・・連中がこっちの内情を理由に一時的に追い出したんじゃないのかな・・・」

龍之介達が余りにも活躍しているから、ブルーマーメイドの連中が嫉妬して、こっちの内情を理由に一時的に追い出したんじゃないのかと思った。

功「考え過ぎでしょう・・・」

龍之介「如何かな・・・」

功「ん・・・」

龍之介「そうだ!?!・・・これつと言った任務もないから・・・停泊している間、全部の艦載機の総点検をして置こう!!・・・此処に飛ばされて、半年!・・・そろそろ全機を点検しないと!」

うさばなしに停泊している間、空母大鳳では艦載機の解体整備を行う事にした。

山崎整備班長の指示のもと、整備員達は艦載機を格納庫に下し、機体を分解し、一つ一つ部品を整備する。

整備中、手空き乗員は、半舷休暇になった。

宗谷家、龍之介の部屋

龍之介「何!?!ブルーマーメイドフェスターに行かないかだと・・・」

薫「そう!・・・折角のイベントなんだから・・・当日は、はやてちゃんやなのはちや

ん、フェイトちゃんも行くよ!・・・一緒に行くよ兄さん!」

薫は、龍之介にブルーマーメイドフェスターに行かないかと誘うが

龍之介「折角だが、遠慮する。」

龍之介は、行くのを断る。

薫「何で?」

龍之介「俺は、お前らが遊びに行っている間、艦隊の留守番をしとかなきゃならない。」
龍之介は、薫達が遊びに行っている間、艦隊の留守をしとかなければならなかった。

薫「そんなの参謀に任せれば良いじゃないの!!」

薫は、功に任せれば良いじゃないと言うが

龍之介「薫!!俺の立場は何だ!?!」

それを聞いた龍之介は怒り、自分の立場は何なのか問う。

薫「か、艦隊の指揮官です・・・」

龍之介「そうだ!・・・その指揮官が!・・・仕事で残っている隊員をほったらかして!・・・自分だけ遊びに行く訳には、いかないだろう!!」

龍之介は、Gフォース西部方面艦隊の指揮官であり、その指揮官が残っている隊員をほったらかして、自分だけ遊びに行く訳には、いかなかった。

薫「あつ!?!」

薫もその事に気づく。

龍之介「権藤中佐も行かないみたいだから・・・俺も残らなければならぬ・・・俺が言っている事・・・分かるよな？」

龍之介は、その他に残っている美由紀達を抑えると言った使命もあった。

薫「そ、そうだね・・・御免なさい・・・」

それを聞いた薫は謝罪する。

龍之介「分かれれば良い!!・・・その代わり、お前達だけで楽しんで来い!!」

薫「ありがとう。」

薫は、少し暗いながら、部屋を出る。

宗谷家、廊下

真霜「薫!」

薫「ああ、真霜姉さん!」

真霜「如何したの、暗い顔をして？」

薫「いいえ、唯兄さんにブルーマーメイドフェスターと一緒に行かな言って誘ったけど、断られたんで・・・」

真霜「ふくん、そうなの!」

薫「まあ、仕方ないですよね!・・・指揮官は、留守をあづかる身だから・・・」

真霜「そうね・・・」

薫「それより、真霜姉さんもブルーマーメイドフェスタに行くんですよ？」

真霜「ええ！当日は、お母さんや真冬にましろも行くわ！」

薫「そうですね・・・まあ、ましろちゃんには、ブルーマーメイドになる為の良い勉強になるかも知れませんね！」

真霜「まあ、そうだと良いけど・・・」

真霜は、ブルーマーメイドフェスタで、真冬がまた、何か仕出かすかもしれないと不安になる。

薫「ん？」

薫は、真霜が何故不安になるか分からなかった。

ブルーマーメイドフェスタ当日

横須賀基地

真冬「おい、シロ！ましろ!!・・・着いたぞ？起きろ！」

ましろ「ん、んん・・・ふああ・・・」

真冬に起こされて、ましろが寝不足ながら目を擦りながらスキッパーを降りる。

早朝から照りつける真夏の太陽と、吹き抜けていく海風。

此処、横須賀基地には。ブルーマーメイドフェスタに備え、滅多に見られない程の数

の艦艇が集結していた。

ましろ「うんうん、今年も先輩方は皆、張り切っているな！」

一般客の入場開始まではまだ1時間以上あるこの時間だが、ブルーマーメイドの隊員達や横須賀女子海洋学校の生徒達も、開場の準備に所狭しと駆け回っている。

ましろはその光景を見ながら感心する様にそう言う

真冬「先輩方と言うのはまだ気が早い・・・シロが後輩になれるとは限らねえんだぞ?・・・何しろお前の受験はまだこれからだ！」

真冬はましろの頭をくしゃくしゃと撫でながらツツコム。

ましろ「そんな事は分かかってるって、姉さん!!・・・良いじゃない、それくらい」

ましろは、真冬の手を払いのけながらムキになった様に真冬に言った。

いくら年が離れているとは言え、ましろも現在中学3年生。

いつまでも子ども扱いは嫌なのだろう。

真冬「まあ、良いけどよ!・・・シロは肝心な所が抜けてっからなあ!」

真冬がましろに哀れむ様な心配そうな目で語る。

ましろ（わ、私は抜けている訳じゃない!!唯ちよつと、運が悪いだけだ!!）

ましろは、自分は決して間抜けでは無いと心に主張する。

とは言え、受験の事を考えると、やはりプレッシャーを感じる。

曾祖母の代からブルーマーメイドを輩出していた宗谷家の娘の一人である自分が横須賀女子海洋学校を受験して落ちましたでは、洒落にならないし、あつてはならない事だ。

ましろのそのプレッシャーとそれに打ち勝とうとする決意が空回りしない事を祈るしかない。

真冬「・・・いくら、母さんが校長だからって、最良はされないからな？」

ましろ「だから、そんな事くらい分かっているから！」

真冬は憤慨するましろを笑って手のひらであしらった。

やはり真冬にとって、いつまで経ってもましろは小さな妹なのだろう。

釈然としないものがありつつも、そんな真冬の態度には諦めをつけて、ましろは再び会場を見渡した。

続々と集まる艦艇。

その中には横須賀女子海洋学校の所属艦の姿もちらほらと見える。

ましろ「あれ姉さん？・・・武蔵の姿が見あたらないんだけど・・・」

毎年楽しみにしているこのイベントだが、その中でも、ましろが一番の目玉といえる催し物があった。

それが『武蔵の体験航海』である。

旧大和型戦艦、現大和型超大型直接教育艦二番艦 武蔵

現在は、横須賀女子海洋学校に所属しており、成績優秀者だけが乗艦が許される艦。ましろの姉である真霜と真冬がかつて横須賀女子海洋学校の学生の頃、艦長を務めていた艦で、同型艦の大和はブルーマーメイドの総旗艦であり母、真雪が艦長を務めていた。

将来を嘱望される宗谷家の娘に生まれたからには、横須賀女子海洋学校に入り、武蔵の生徒に、いや、むしろ艦長として座乗するべき、しなければ、したい、取り合えず武蔵に乗ってみたい、にやらなければならぬ。

そんな気持ちが逸っている時に、「今年も武蔵の体験航海をやるそうだ」と聞き、数ヶ月も前から気もぞろぞろな状態が続いていた。

そんなましろにとっては憧れのある艦の姿が見えなかった。

真冬「あん？まだ来てねーか？何かトラブルって到着が遅れるとは聞いてんだが……」頭をかきながら武蔵がまだ会場入りしていない理由を零す真冬。

ましろ「トラブル？……武蔵のクルーはエリート揃いなんじゃ？」

真冬「はっ、エリートだろうがなんだろうが海にはトラブルがつきものだ！……とはいえ今回ののは、武蔵自体のトラブルじゃない……同じくこのイベントに向かっていた艦が不意のエンジントラブルで立ち往生しちまってたんだと……それを近くにいた

武蔵が、曳航してくる事になったって話だ!!」

ましろ「成程!」

真冬の話聞き、ましろは武蔵の生徒達を感心した。

自分達にも大事な役目があるにも関わらず、困っている他の艦を見捨てない。

学業や技術だけではなく、武蔵の生徒は、その心根までもが素晴らしいのだ。

ましろは唯武蔵に乗る事ばかり考えていたが

ましろ（体験航海では、当前武蔵の生徒達の様子も見られる訳だ!!・・・その素晴らしい乗組員の先輩方には話しかけて見ても良いのだろうか・・・良いよな?・・・体験航海だもの・・・それくらいは許される筈!）

真冬「わくわくするのは結構だがシロ、先ずは、本部席に行くぞ!!」

ましろ「本部席?・・・私は、早速見回ってきたいんだけど・・・」

武蔵以外にも見て回りたいものはたくさんある。

何より、この開場前の独特の雰囲気は、此処でしか味わえない高揚感の様なものがある。

真冬「良いから来い!!・・・あたしは母さんじゃねえからな、シロを鼻屑して、特別にブルーマーメイドとしての経験を積ませてやる!!」

ニヤリと笑う真冬。

夏の盛りだということに、ましろの背筋には、雅に真冬の風が吹き抜けた。嫌な予感しかしない。

此処は、戦術的撤退の一手。

逃げる、逃げよう、逃げるべき。

ましろ「やつ、やつぱり鼻根はよくないから、遠慮し……にぎゅっ!!」

ましろが本能に従ってその場から逃げようとしたが既に遅く、いつの間にか、ましろは、真冬の手でがっしりと首根っこを掴まれていた。

ましろ（こういう時には、いつも思うのだが、私の不運は、真冬姉さんの下に生まれ付いた時から、既に始まっていたんじゃないだろうか？）

自分の不幸の始まりを思いながら、ましろは、真冬に開催本部へと引きずられていった。

ましろ「スケジュールの調整役!?! 私?!?!」

真冬の手で本部へと連行されたましろは、ブルーマーメイドフェスターのスケジュール調整の役を押し付けられた。

真冬「調整役つっても基本的には本部が決めた事を伝える!!……まあ伝令役つてとこだな!」

ブルーマーメイドフェスター本部席にて真冬がましろに言い渡したのは、武蔵の入港

が遅れた事によるスケジュールの変更を各部署に直接伝えに行けと言う事だった。

ましろ「そんなのいくらでも連絡する方法があるんじゃないや・・・」

真冬「もちろんあるし、此方から連絡もする・・・だが、それは、こつちからの一方的なものだ!・・・シロは、其処で出た問題点なんかを聞いて、こつちに折り返してくれりゃあいい!!」

ましろ「それだつて、電話でも無線でもできる様な・・・」

真冬「あのな、相手は人間なんだよ!!・・・予定が狂えば、それだけで不満が出る・・・それが一方的な命令なら尚更だ!!・・・だが、其処に実際に顔を付き合わせて、文句が言える相手がいれば話は変わってくる・・・それが人間つてもんだ!!」

ましろ「そ、それはつまり、私に緩衝材になれと?・・・」

真冬「スケジュールは、もうずれてんだ!・・・お前が早く調整してこねえと、武蔵の体験航海もできなくなっちゃうかもなあ・・・」

ましろ「何その脅迫!?!・・・くうっ!・・・行けば良いんでしょ!?!」

ましろは、真冬から、このままでは、武蔵の体験航海も潰れてしまうと脅しをかけられて渋々手伝う事になった。

真冬「おう、ちよつと待った!!これを着てけ!!」

ましろ「これは?・・・」

真冬「お前があたしの名代だって、分かりやすい様にな……その格好じゃ一般客と見分けがつかねーだろ!!」

それは、やけに古いタイプの体育着だった。

横須賀女子海洋学校の校章と、大きく『宗谷』と書かれたゼツケンが付けられていた。ましろ「これ、もしかして姉さんの? ……何でこんな物を?」

ましろが「何でこんな物が?」と尋ねると、真冬は

真冬「アツハツハ、そりゃあ、初めから着せて手伝わせるつもりだったからに決まってるだろ!!」

と、悪びれる様子も無く、ましろに言い放った。

如何やら、トラブルが起きなくても何かしらの仕事をましろに手伝わせる気満々だった様だ。

ましろ「せめて制服にしてよ!!」

ましろの悲痛な叫びが開催本部の部屋に響いた。

真冬「アツハハ……!!」

ましろの抗議は真冬の笑い声と共に潰えた。

ブルーマーメイドフェスターのとある会場では

洋美「ん……」

黒木洋美が機嫌を悪くしていた。

洋美の母「洋美、そう何時までも膨れてんじやねっぺさ!!」

洋美「膨れてない!!」

洋美の母「まったく、この子ときたら・・・」

そう言つて嘆息する母親をじろりと一瞥する。

膨れているつもりはなかつたが、洋美の機嫌は確かに悪かつた。

今日は、朝起きた時から、映画でも観に行きたい気分だつたのだ。

恋愛モノにしようか、アクションモノにしようか、幼馴染みの麻論にも声をかけるとするとやっぱりコメディとかになつちやうのかなとか、洋美は、そんな事を考えていたら、「良いところに連れてつてやる」と行き成りスキツパーに乗せられてやつて来たのが、此処『ブルーマーメイドフェスター』だつたという訳だ。

洋美（知り合いから招待状を貰つたからとの事だつたが、お父さんは、一体私が今いくつだと思つているんだらう・・・中学3年にもなる娘が、両親とのお出かけにそんなにワクワクする訳ないじゃない・・・映画を観に行く予定がすっかり台無しだ!!・・・麻論にだつて・・・まあ、麻論とも別に約束とかしてた訳じゃないけど・・・）

洋美「私、一人で見て回るから・・・」

兎も角、機嫌が悪かつた洋美は、両親にそう言い残して、さつさと一人で歩いてきて

しまった。

両親がやれやれと溜め息を着くのを背中に感じて、ちよつぱり罪悪感は覺えたが、歩き始めた足は、今さら止まりはしなかった。

洋美「ん、しょう油の匂い・・・」

その時、漂ってきた香ばしい匂いに、ふと首を巡らせる。

洋美は、その屋台ブースの方へと足を向けた。

一方、ましろは、スケジュールの変更で一番問題がありそうなのが音楽隊によるパレードだった。

ましろに限らず武蔵の姿を一目見たいと考える一般客は多い。

音楽隊によるパレードは最終地点を武蔵の前とし、其処で盛大に盛り上げた後で体験航海に参加する一般客の乗艦が始まる流れだ。

パレード自体が体験航海の時間に左右される上、パレードが通る箇所にある各ブースとも調整しなければならぬ。

ましろ「と言う訳で、連絡は来ていると思うのですが、何か問題点など有れば・・・」
BPF隊員「は、はあ・・・」

体育着姿で現れたましろに面食らつたのだろうがBPF隊員は、少し驚いた様子でましろの体育着の胸の部分に貼られた『宗谷』と書かれた名札を見て、「あつ」と声を上

げた。

B P F 隊員 「失礼いたしました!! …… 宗谷ましろさんですね! …… 姉君の真冬さんには大変お世話になり ……」

ましろ 「あのつ、そう言うのは良いので! …… 私は、唯の使い走りですから ……」
年上の、しかも、B P F 隊員に畏まった態度を取られ、恐縮するましろ。

B P F 隊員 「 …… 成程! …… 真冬先輩も格式張った事を嫌う豪放磊落な方でしたが、流石、その妹君と言うところでしょうか? 」

ましろ 「私をあんな傍若無人な人と一緒にしないでください!! 」

B P F 隊員 「失礼しました!! 」

B P F 隊員は、ましろに敬礼し、謝罪するが、やがて、敬礼ポーズのまま口元を引きつらせ、肩がフルフルと震えている。

B P F 隊員 「ぷっ …… ちよ、ちよつと失礼 …… ぷははっ、くーくっ …… ダメ、我慢できない! …… アハハ …… ! やだ …… !! 可愛いっ! …… ちつちやい真冬先輩がいるう! …… 超可愛い …… !! 」

ましろ 「は、はい? 」

突然大爆笑したB P F 隊員の態度に付いていけず、ポカンとした顔で大爆笑をしているB P F 隊員を見ている。

BPF 隊員「ちよつとちよつと！・・・真冬先輩の妹さんが来てるんだけど、超可愛いの！・・・皆来て来て！・・・よりによって、あの頃の体育着着ててさあ！」

ましろ「あ、あの!？」

流れに全くついていけないましろは、恐る恐るBPF 隊員に声を掛ける。

BPF 隊員「あ、御免なさいね！・・・私もそうなんだけど、うちの音楽隊って学生時代に真冬先輩にお世話になった子が何人かいてね！」

BPF 隊員が理由を話すと、他のBPF 隊員がましろの下に駆けよつてきた。

BPF 隊員「真冬先輩の妹さん!？」

BPF 隊員「わあ!!ホントに可愛い!!」

BPF 隊員「今何年生?」

BPF 隊員「何に乗ってるの?」

ましろ「えつと、あの・・・」

大勢のBPF 隊員に囲まれてあわわと困惑するましろ。

BPF 隊員「ばっか、妹さんまだ中学生だって・・・そもそもこの体育着も真冬先輩のお下がりだし!!」

『あの伝説の体育着!?!』

BPF 隊員らは、今、ましろの着ている体育着に驚いている。

それを聞き、真白自身も驚き、BPF隊員に尋ねる。

ましろ「伝説うつ!?・・・伝説って何が有ったんです!?姉は一体何を!」

BPF隊員「宜しい!伝説の生き証人である我々真冬先輩の後輩ズが語り尽くしましょう!!」

ましろ（しまった!?!）

ましろは、自分の発した言葉が悪手だと此処で気づいた。

しかし、既に時遅く、音楽隊の楽屋にはパイプ椅子が円陣で組まれ、ついでお菓子と飲み物まで用意され、ましろは、逃げる事ができない状況へと追い込まれていた。

数十分後

ましろ「ええと、それでは、パレード時間前の人払いについてだけでもう一度確認してほしいと言う事で・・・」

BPF隊員「はい!後は、此方で何とか出来ると思います!・・・それでは、ましろさん、真冬先輩にもよろしくお伝えください!!」

ましろ「ハハハ・・・了解しました!!」

姉・真冬の話の散々聞かされたましろは、乾いた笑みを浮かべそう言った。

開場のアナウンスも、結局此処で聞く事になってしまった。

ましろ（相手が年上で、しかも複数だったとはいえ、私は、もしかしたら押しに弱い

のだろうか・・・いやいや、そんな事では、宗谷家の娘は名乗れない!!・・・母や姉たちに並び立つブルーマーメイドになろうというのなら、そんなものに負けてはいられないのだ!!)

如何もましろは、押しには弱いのではないだろうかと自分自身でそう思ったが、それでは、この先、宗谷家の名を背負ってはいけないぞと自身を奮い立たせた。

B P F 隊員「あつ、それと・・・」

ましろ「は、はい!」

たった今、自分を奮い立たせたましろが、突如、B P F 隊員にまた声を掛けられて、ビクツと身体を震わせるましろ。

B P F 隊員「ましろさんに来てもらって正直助かりました!!・・・あの子達さつきまで『武蔵は、何やってんだ!!』とか不満たらたらだったので・・・」

B P F 隊員は、小声でましろが来る前の楽屋の様子をこつそりと教える。

真冬の予想通り、かなり不平不満が溜まっていた様だ。

ましろ「・・・それなら、姉が直接来た方が良かったかもしれないね!!」

ましろは不満があるので有れば、彼女らが慕う真冬が来た方が、彼女らを喜ばす事が出来たのではないだろうかと思う。

B P F 隊員「ううん、でもそれだとほら、プレッシャーが強すぎるから・・・」

苦笑するBPF隊員を見て、姉が自分を伝令役にした理由が分かった気がした。

確かに真冬が来れば、その場での不平不満は収まるが、彼女がその場からいなくなつた時にまた再燃焼しかねない。

しかも1度目の燃焼以上に

そうなれば、現在の武蔵や航行不能になつた学生艦の乗員である横須賀女子海洋学校の生徒にその矛先が向けられ、彼女らがブルーマーメイドになつた時、新たな溝や確執を生む結果となる。

真冬は、それを防ぐ為にましろを伝令役としたのだろう。

普段の姉の様子からは信じられない考えの深さであるが、やはり真冬も宗谷家のブルーマーメイドなのだ。ましろはそう思った。

ましろ「つと、いけない！急がなくちゃ!!」

ましろは、音楽隊の楽屋を後にし、次なるブースへと急いで向かった。

その頃、屋台ブースでは、

横女の学生「いらっしやいませー!!・・・其処の素敵なお姉さん、焼きトウモロコシなんて如何ですか？」

洋美「えっ!？」

横女の学生「す、素敵なお姉さん・・・?」

焼きトウモロコシの屋台の売り子からの声で洋美は思わず、辺りをキョロキョロと見渡すが、売り子が言う「素敵なお姉さん」は自分の事を指しているのだと分かった。

横女の学生「そうそう、お姉さん、貴方ですよ！．．．ああん、クールな瞳も素敵っ！．．．えっと、大学生とかですか？」

確かに洋美は、中学生にしては背が高いがよりによって大学生に間違われるとは。

そもそも、そう言つて私を指さす屋台の人も、私よりせいぜい1、2年上という程度の女のんだ。

よく見れば、焼いてる人も、後ろで何か整理している人も同じくらい女の子ばかり。洋美（あれ、こういう屋台つて大人がやってるつて訳じゃないの？．．．ブルーマーメイドの人か、普通に業者とかが入つてやってるものだと思つてた。）

洋美「い、いえ、あの．．．私、中学生で．．．」

横女の学生「へ．．．？」

洋美「だからその、中学、3年生なんです．．．御免なさい!!」

横女の学生「と、年下あつ!!?．．．御免なさい!!．．．でも素敵なのは、ホントだから．．．焼きトウモロコシ!．．．どう!?!?．．．美味しいよっ!」

洋美「あ、あはは．．．じゃ、あの、一本!」

互いに気まずい空気の中、洋美は、焼きトウモロコシを一本購入した。

横女の学生「ホント!? ……ありがとうー! 御免ねえ、何か無理矢理買わせちゃったみたいで……」

売り子は、申し訳なきように焼きトウモロコシを洋美に手渡し、洋美は、売り子に焼きトウモロコシの料金を支払う。

洋美「いえ、あの……この辺の屋台は皆高校生の方々がやっているんですか?」

洋美が辺りの屋台ブースを見渡すと、売り子の殆どは目の前に居る売り子と変わらぬ年代の子が多くセーラー服を着用している。

横女の学生「うん、あたしたち横須賀女子海洋学校の生徒なんだ! ……毎年このブルーマーメイドフェスターにはこうやってブルーマーメイドの人達に交じってお店出したりしててね? ……文化祭の予行演習みたいなノリで……」

売り子の横須賀女子海洋学校の生徒は何故、ブルーマーメイドの基地に高校生がいるのかを説明した。

洋美（横須賀女子海洋学校……ブルーマーメイドの養成学校で有名などこだよね。）
洋美も今年は受験生。

一応無難な進路希望は担任に提出してはいるけど、正直に言っただけで本当に良いのかは、未だに考えあぐねているところだった。

洋美「あ……もしかして!」

焼きトウモロコシを齧りつつ、洋美は、ふと思に至る。

洋美（もしかして、お父さん達は、私が進路の事で悩んでるのに気がついて、今日此処に連れ出してくれたのかな．．．ん．．．それは、無いか．．．そこまで繊細な両親じゃない．．．そんな事よりこの焼きトウモロコシ、本当に美味しい．．．トウモロコシ自体の甘みやシャキツとした歯ごたえもさる事ながら、これ結構いい醤油を使ってる．．．そうなのがする．．．それとも、何か良い出汁を合わせてる？．．．ちよつと知りたいな．．．でも、その為にあの屋台まで戻るの微妙だし．．．）

焼きトウモロコシの味はとても美味しかったのだが、高校の事と焼きトウモロコシに注意が集中していた為、周囲への注意が散漫になっていた様で、洋美は、艦と艦の連絡橋を渡ろうとした時だった。

ましろ「うわつと!？」

洋美「きゃっ!？」

洋美は、随分ぼんやりとしていたらしい。

洋美は突然現れた誰かにぶつかってしまった。

ぶつかつた相手は、何とスケジュール調整をしていたましろだった

ぶつかつただけならまだ良かったけど、その拍子に焼きトウモロコシを手から離してしまった。

反射的にソレを追いかけて、焼きトウモロコシは、無事に落とさずに済んだのだが、洋美の身体の方はまだぶつかった衝撃から立て直しが出来ていない状態で橋の外へ落ちていた。

このままでは、バランスを崩して海へ落ちてしまう。

ましろ「おっと、危ない!!」

すんでのところで、ましろがサツと洋美の身体を掬いあげ、洋美は海へ落ちずに済んだ。

洋美は助かった後も目をぱちくりさせていた。

ましろ「ぶつかっちゃって御免なさい!!大丈夫?・・・怪我はない?・・・痛いところはある?」

洋美「は、はぁ・・・大丈夫です!!」

ましろ「そう、それなら良かった!!」

洋美が無事だと分かると、ましろは、ホッとした様子で笑みを浮かべた。

その笑みを見て、洋美の胸はドキッと高鳴る。

ましろ「それじゃ、急いでいるから、本当に御免ね!!」

そう言って、ましろは、颯爽とその場を去って行く。

洋美は、ましろの後ろ姿を呆然と見ていたが、そしてその姿が見えなくなってから

ハツとする。

洋美「何で、体育着？・・・じゃなくて、結構危なかったし、もうちよつと何か有つても良いんじゃない？」

一歩間違えれば、海へ落ちていたのかも知れないのにあんな投げやりな謝罪じゃ気が済まない。

洋美「決めた！・・・今の子追いかけて一言文句を言ってやる!!」

黒木は慌ててさつきぶつかった体操服の女の子を追いかけた。

洋美（姿は見失ったけど、あの格好なら直ぐに見つけられる筈・・・胸に書いてあったから名前もバツチり分かつてる・・・覚悟しなさいよ、『宗谷』さん・・・ちよつと奇麗でかつこよくて、私より背は低いのになんか大人の余裕みたいなのが有るからって、絶対にそれだけじゃ済ませないんだから!!）

類は友を呼ぶと言う言葉がぴったりなましろと洋美だった。

第19章 ブルーマーメイドフェスター 中編

横須賀基地

ブルーマーメイドフェスターの会場入口

ヴィヴィオ「うわぁ・・・!?!」

なのは「ヴィヴィオ、はしやいじや駄目だよ!」

ヴィヴィオ「うん!」

その頃、ブルーマーメイドフェスターの会場入口前では、なのはとフェイトがヴィヴィオを連れて、薫とはやて、次郎を待っていた。

なのは「薫先輩とはやてちゃん遅いね?」

フェイト「ん・・・もしかしたら、また次郎君が寝坊したんじゃないかしら?」

なのは「もう次郎君たら、肝が据わってないんだから・・・」

フェイトは、次郎が寝坊しているせいで、薫達が遅れているんだろうと確信している。

ヴィヴィオ「ママ・・・」

会場内に入れないのにヴィヴィオは、なのはに駄々を捏ねる。

なのは「あつ、ヴィヴィオ!もうちよつと待っててね!」

ヴィヴィオ「うん……」

ヴィヴィオは、なのはとフェイトが保護者になってから、あまり駄々を捏ねてないが、やっぱり今日は、折角のお祭り何なので、ママに甘えたいんだろう。

なのは「如何しようフェイトちゃん？」

フェイト「薫さん達が来ないと会場に入れないから、もう少し待とうよ！」

なのはとフェイトは、仕方がなく薫達を待つしかない。

何故なら、招待券は、薫が持っている為、会場内に入る事が出来ない。

3人が困っていると

はやて「なのはちゃん!!フェイトちゃん!!」

なのは「あっ!?!はやてちゃん!!」

ようやく、薫とはやてが現れ、次郎も眠い中、2人に引つ張られて、連れて来られた。

薫「御免、遅くなっちゃた!!」

フェイト「薫先輩も次郎君もようやく来たね！」

次郎「ふあくん……御免御免……つい寝坊しちゃった……」

大きいあくびをしながら答える次郎。

なのは「もう……寝坊するなんて、肝が据わってない証拠だよ！」

次郎「ん……後輩に言われる筋はないんだけどな……」

薫「その後輩に言われてるんだよ！少しは、反省したら次郎君！」

次郎「はいはい、反省してます。」

薫「はいは、一回で良い！……それと今日ぐらい、サングラス外したら……煙草も……」

薫は、次郎にサングラスと煙草を止めるよう言う。

次郎「これは、俺のトレドマークなの！……あと、この煙草は、お前に言われて、電子煙草だから、大丈夫！」

それに対して、次郎は、拒否する。

フエイト「まあ、2人共！それより、早く入りましょう……ヴィヴィオも待ちくたびれてる事だし……」

薫「そうね！それじゃあ、中に入ろうか？」

薫が入場を促す。

そして、入場券を受付で見せて会場入りをする。

会場入りした6人が先ず、最初に行ったのは、横須賀女子海洋学校の生徒達が主催している屋台ブースであった。

それを見て、腹声が鳴っているのに気づく。

次郎「そう言えば、急いで来たんで、朝何も食べていないな……」

薫「じゃ何か食べようよ！」

次郎「そうだな、俺も腹減ったし！」

はやて「賛成や！」

薫とはやては次郎を起こしに朝早くから出てきた為、朝食を食べていなかった。

そこで、何かを食べる事にした。

薫とはやては、横須賀名物のネイビーバーガーを食べ、次郎は、ホットドックを食べ、なのは、フェイト、ヴィヴィオの3人は、仲良くチョコバナナを食べる。

食べながら、屋台ブースで売り子や客の呼び込みをしている横須賀女子海洋学校の生徒達を見て

はやて「ホンマ、懐かしいわね！」

薫「そうだね！・・・私達の学生時代の学園祭もあんな風だったもんね・・・」

2人は、海士学校時代の学園祭を思い出す。

国防軍の海士学校には、年に一度の学園祭がある。

学園祭の時は、訓練で使用されている練習艦が一般公開され、学生達がクラスごとに出し物をやっている。

特に薫と次郎がいた、そよかぜクラスは、当時流行っていたメイド喫茶をやっていた。ちなみに後輩のはやてのクラスは、お化け屋敷をやっていた。

次郎「ん．．．そうだったけ．．．何だか嫌な思い出しかないけどな．．．」
『くっ!』

それを言つたせいにか、薫とはやてに殴られる。

次郎「イテ!? 何すんだよいきなり!」

薫「五月蠅い!!」

はやて「折角の乙女の思い出を．．．」

次郎「．．．すいません．．．」

2人を相手には、多勢に無勢である。

なのは「まあ、まあ、薫先輩もはやてちゃんも．．．今日は楽しいお祭りなんだから、
楽しもうよ!」

薫「そうね!．．．今日のところは、大目に見てあげる! ねえ、はやてちゃん!」

はやて「そやね!」

次郎「はくあ．．．逃げたくなってきた。」

屋台ブースにて、食事を終えた6人は、次に回る。

その時

アナウンス『間もなく、ブルーマーメイドによるスキツパーショーを開催いたします
!!』

と、ショーの案内が放送された。

はやて「スキツパーショーやて!？」

薫「行ってみようよ!!」

6人は、スキツパーショーが行われる会場へと足を運んだ。

スキツパーショーの会場では、色とりどりのスキツパーが居り、やがて開催時間になると、一斉に走り出した。

一糸乱れない動きや交差、更には空中一回転など、難易度が高い技もBPF隊員達は、行い観客を圧倒させた。

『わぁ……!!』

5人は、BPF隊員達の見事な曲技に釘付けになる。

合同演習で、スキツパーの訓練を見ているが、空中一回転など、難易度が高い技を初めて見た。

だが

次郎「ふん!……あんなのうちの航空隊がやる曲技飛行に比べたら、赤子の手を捻る様なものだ……」

まあ、確かに航空機の曲技飛行は、スキツパーの曲技に比べれば、雅に神技である。

スキツパーの曲技と違って、空を曲技飛行をするのだから、だが今は、航空機の補充

が出来ない以上、曲技飛行は許されないのだ。

なのは「まあ私は、Gフォースに入る前は、松島の教導隊にいたから・・・」

フェイト「私は、空軍の士官学校の時によくやってましたし・・・」

なのは、Gフォースに入る前の国防軍松島基地の教導隊で、フェイトもアメリカ空軍の士官学校の時に曲技飛行をよくしていた。

今は、やらないが曲技飛行は、大の得意である。

ヴィヴィオ「ママたち、凄いの？」

はやて「そやよ！なのはママもフェイトママもうちの部隊じゃ、凄いねん！」

ヴィヴィオ「私もなる！」

ヴィヴィオも興味を抱いた様だ。

だが、航空機とスキップパーのどちらに興味を抱いたかは、不明だが、なのはとフェイト見たいになりたいと言いつ出した。

なのは「ヴィヴィオは、先ず小学から勉強しないとね！」

ヴィヴィオ「はーい！」

まだヴィヴィオは小学生である為、先ず中学まで卒業してからじゃないとなのはやフェイトがやってる事は学べない。

5人がヴィヴィオと話をしている時、薫は、スキップパーショーの続きを見ていたら

薫「あれ!・・・あそこにいるのは!？」

向こう側で同じくスキップパーシヨーを見ている明乃を見かける。

薫は、急いで向こう側に行く。

薫「岬ちゃん!!」

薫は、手を振りながら、明乃に声を掛ける。

明乃「あつ?!薫お姉ちゃん!？」

明乃も薫に気付いた様だ。

薫「岬ちゃんもブルーマーメイドフェスターに来てたんだ。」

明乃「はい!」

2人が話しをしている時、ブルーマーメイド達が空中一回転ジャンプを披露した

『わぁ・・・!?!』

つい最近、中型スキップパーの免許をとった明乃は、BPF隊員の見事な曲技に釘付けになり

明乃（私にも出来るかな?）

と、あまりにも無謀な思いを抱いていた。

特に空中一回転ジャンプの時などは明乃の周囲からキラキラした何かが出てきた様子にも見えた。

中学1年の頃、明乃は新聞配達のため、小型スキツパーの免許を取得したのだが、免許取得以降、スキツパーの出すスピードに魅了されていたのだった。

ちなみに龍之介や薫達もつい最近、スキツパーの免許をとった。仕事の合間に教習所に受けに行った。

この先、スキツパーの免許が役に立つと思ひ、免許を取得したのだ。

薫「あつ、そうだ!?!皆にも岬ちゃんを紹介してあげないと・・・」

スキツパーショーが終わり、明乃と一緒に次郎達の元へ戻ろうとしたが

薫「あれ?・・・皆・・・何所行っちゃたの?」

薫が次郎達の元に戻ったら、もう既に次郎やはやて達の姿はなく、薫は、あつちこつち向いて探すが見や足らず。

如何やら、スキツパーショーを明乃と見ている間にはぐれてしまった様だ。

薫「如何しよう!?!次郎君やはやてちゃん達とはぐれちゃった!!」

薫は、如何すれば良いか考えていたら

薫「そうだわ!携帯で連絡すれば、居場所が分かるかも!」

薫は、携帯で連絡しようと携帯を探すが

薫「あれ!?!・・・あれ!?!・・・あれ!?!」

携帯が何処にも無い。

薫「あつ、そうか!?・・・急いで出たんで携帯を家に忘れてきたんだ!?」

次郎を起こしに行く時に慌てて家を出た為、携帯を忘れた事に気づく。

明乃「薫お姉ちゃん、如何かしたの?」

明乃が心配そうに薫を見ていた。

薫「岬ちゃん・・・だ、大丈夫だよ!!・・・あ、そうだ!?」

薫は、ある事を思い付く。

薫「岬ちゃん、良かったら一緒に回らない?」

薫は、次郎達が見つかるまで、明乃と一緒に回る事にした。

明乃「良いんですか?」

薫「調度連れとはぐれちゃた事だし!・・・一人で回っても面白くないから、如何を
?」

明乃「あつ・・・はい!!」

薫の提案に明乃も同意し、一緒に回る事になった。

そんな時

薫「ん!?!・・・あれは?」

薫が明乃と回っていると、体育着で走っているましろの姿を見つけた。

薫「ちよつと、御免!少し、此処で待っていてね!」

明乃「あつ、はい！」

薫は明乃に声をかけた後、ましろを追い掛けた。

ましろ「えつと、次は……」

ましろが真冬に渡されたスケジュール表を見ていると、

薫「ましろちゃん!!」

ましろは突如、声を掛けられた。

ましろ「薫さん!?!」

ましろが振り返ると、其処には、薫の姿があつた。

薫「ましろちゃん!……その恰好、如何したの?」

薫は、ましろが何故、体育着で会場を走り回っているのか理由を尋ねる。

ましろ「そ、その……ま、真冬姉さんが……」

ましろは薫に何故、体育着姿なのか理由を話す。

薫「また!?!……真冬たらもう……手伝う?」

ましろ「い、いえ大丈夫です!!……薫さんは連れがいるのでは?」

薫「ま、まあ……そう何だけど……」

ましろ「でしたら、その人達に付いていてあげて下さい!!……私の方は、大丈夫で

すから……それじゃあ……」

ましろはそう言って再び走り出した。

唯、ましろの後を1人の女の子がまるでましろを尾行する様に後を追って行ったが、その子からは、特に悪意的なモノは感じられなかったし、見た所ましろと同一年ぐらいの子だったので、薫は

薫（ましろちゃんの友達かな？）

と、思い明乃の下に戻った。

薫と分かれたましろは、次なる部署へと向かった。

スケジュール変更のある各部署に赴き、問題点を聞いてそれを姉の真冬に連絡する。自分で問題を解決する必要はないし、単に話を聞いて回れば良いだけの事だろう。

だが、この仕事では、一瞬でもそんな風に考えたら負けだった。

何しろ相手の殆んどは、このスケジュール変更にうんざりしているのだ。

即ち、機嫌が悪い。

その不満をぶちまける相手が始ましろになる訳で、そのましろが楽な仕事だと決め込んだ態度を少しでも見せようものなら火に油をそぐようなもの。

そう言う意味では、この胸に書かれた『宗谷』の名と体育着姿は、相手の氣勢を殺ぐには格好の格好（？）と言えた。

悔しいが、真冬の知略に感心せざるを得ない。

だが、それはそれ

そんな事だけで済まされない問題だつて起こる事はある。

BPF隊員「やつ、それだどこちの人数が足りなくなる！」

横女の学生「そう言われても、元々そつちは、時間が被らないからつて事でOKして
た訳で……」

何かで問題が発生したため、BPF隊員と横須賀女子海洋学校の生徒が口論をしてい
た。

ましろ「あの……BMF本部からの使いの者なんですが……何か有りましたで
しょうか？」

口論していたBPF隊員と横須賀女子海洋学校の生徒がましろを見る。

そして、体育着の胸部分の『宗谷』を見て、少しきよんとした。

横女の学生「宗谷さん！校長の娘さんの!？」

ましろ「あ、はい！宗谷真雪の娘の宗谷ましろです！」

横女の学生「うちのスケジュールが繰り上げられたんですが、それでちよつと問題が
出てまして……」

BPF隊員「掛け持ちしていた子たちが出られなくなつちやつたんです!!時間被つ
ちやつて……」

如何やらスケジュール調整のせいで、イベントを掛け持ち出場する予定の子が参加するイベントの時間が重なってしまい、どちらか一方に穴が開いてしまった様だ。

一応、出し物単位での時間や場所は本部でも把握しているし、それを元にスケジュールの変更も考えられているが、その出し物に関わる人間達の動きまで全てを把握している訳ではない。

特に「助っ人」の様な扱いの場合、本人達同士の口約束だけで他の誰も把握していない事などざらにある事だった。

ましろ「えっと、その場合は、どちらかに諦めてもらうしか……」

ましろは、どちらかを切り捨てなければならぬと言いが

BPF隊員「今年のBMFは今日しかないんですよ!?!……この日の為に今日まで準備してきたのに……」

ブルーマーメイドフェスターに参加する生徒達は、この日の為に猛練習をしてきたのだ。

それを参加メンバーが足りないから中止では、あまりにも報われない。

こうした生の感情を目の前でぶつけられてしまうと人間、如何しても感情に左右されやすくなる。

ましろ（いや、ダメだ!!……私は、唯の伝令役……心情で動いてしまつては、規

律は保てない!!・・・此処は、心を鬼にして・・・)

ましろ「ちよ、ちよつと待つてください!!今、姉に相談してみますから・・・」

BPF隊員「待つて!・・・姉つてあの宗谷真冬・・・さん・・・よね!?!・・・そんなの一刀のもとに切り捨てられるに決まつてるじゃないですか!!」

本部に連絡を入れて指示を仰いでも良かったのだが、あの真冬が聞けば、あつさり切り捨てるか、もしくは、ましろに問題を丸投げするかのどちらかだ。

ましろ(これならば、やはり薫さんについて来てもらいたかった!!・・・しかし、今更薫さん呼び戻す訳にはいかない!!)

確かに薫ならこういう経験もあるから解決出来るかも知れない。

しかし今更呼び戻せない。

そんな時

BPF隊員「あ、そうだ、ましろさん!!・・・貴方、脚には自信ある?百メートル何秒で走れる?」

ましろ「百メートルですか?・・・えつと確か13秒切るか切らないかくらいだったと思いますけど・・・」

BPF隊員「よし、決まった!それだ!」

ましろ「はい!?!」

成り行きとは、いえ、ましろが代わりに出る事になった。

被っていた出し物は舞台劇と甲板走。

甲板走はブルーマーメイドフェスターで一般開放されているインディペンデンス級教育艦の甲板で行われる艦上競技で、毎年、名うての脚自慢が揃う伝統ある出し物。

唯、今年は立候補者が少なく、頼みこんで何とかギリギリ人数を揃えたというところに、突然のスケジュール変更で候補者の1人が舞台劇と被つてしまい今回の問題が起きたという訳だ。

ましろ「くっ……分かりました！……私でよければ走ります！」

ましろ（今の自分は、あくまで伝令役だ。）

と、ましろは、あくまで自分に与えられた職務に忠実にあれを貫こうとしたが、先輩方に頼まれ、ましろは、自らが助っ人となる事でこの事態を収める事にした。

横女の学生「ありがとう、ましろさん！……舞台劇の方、私の代役いないのよ！……良かった……!!」

BPF隊員「ありがとう、ありがとう！……さあ皆！……ましろさんを讃える歌を歌いましょう!!」

BPF隊員『ありがとうましろさん　我らの救世主♪』
ましろ「ちよっ!?そっ、そう言うのは良いですから……」

洋美「可笑しいな?・・・こっちに行つたと思うんだけど・・・」

ましろを追いかけて来た洋美は、行く先々でましろがBPF隊員や横須賀女子海洋学校の生徒達と何やら話をしている姿を目撃した。

その姿を見て、洋美は心の中で、

洋美（大人とも物怖じしないであんなに話せてて凄い・・・それに何だか頼りにされている様な・・・）

ましろは、年上相手でも物怖じせず話をし、彼女が立ち去つた時、皆笑顔でましろを見送っている。

洋美は、ましろに対して尊敬の眼差しを何時の間にか彼女に向けていた。

しかし、そんな彼女に洋美は、中々声を掛ける事が出来ず、此処まで来ちやつた訳だ。

そんな中、洋美は、ましろの姿を見失つてしまった。

洋美は辺りを見渡してましろの姿を探していると

洋美「あ、居た!?!」

彼女の姿は、インディペンデンス級教育艦の甲板で行われる艦上競技のスタート地点に居た。

アナウンス『第五コースの宗谷ましろ・・・今回の競技は特別参加となります・・・ただ中学3年生との事ですが、な何と何と、横須賀女子海洋学校校長宗谷真雪の娘であり、

同じく娘である宗谷真霜・真冬姉妹の妹でもあります!・・・早速中学校の体力測定の結果を取り寄せましたが、期待に違わぬ素晴らしい数値!・・・尚、この測定の結果は匿名希望の宗谷真冬さんからの提供になります!!」

アナウンスを受けて俄に盛りあがる観客。

洋美「そっか、凄い人なんだ・・・」

自分と同じ年なのに、ましろと自分の人柄が天と地ほどの差がある様に思えた。

ぶつかった事実は消えないが、自分は、ケガもしていないし、海に落ちてもいない。

ついでに買った焼きトウモロコシも落していない。

ましろの様子を見ると、本当に忙しい様だったし、あの時ちゃんとましろは、自分に

謝った。

だから、今更彼女に文句なんて言う筋合いなんて無い。

洋美「何だろう、私・・・ちっちゃすぎ!」

そう思うと自分の人としての器が小さ過ぎると惨めな思いがこみ上げて来た洋美は、

スタートするましろの姿に釘付けになる。

ましろ「何が匿名希望だ、あのバカ姉・・・!!」

ましろは、自分の情報を他人に流した真冬に咆哮する。

やがて、競技が始めると、ましろは、あまりにも自然な、完璧なスタートを切って飛

び出していた。

何しろ、飛び出したましろ自身が「いつスタートしたっけ？」と思う程の無意識振りだった。

後方で言葉にならない声が聞こえる。

驚きなのか、悔しさなのか、それとも新たに焚きつけられた闘争心の発露なのか、だけどそれを気にしている暇はない。

ましろは、更に加速する。

甲板を蹴り、前へ前へと力強く漕ぎ出す。

ましろ（脚は權だ！・・・甲板は大海原だ！・・・目指す港にたどり着け！・・・誰よりも、速く！）

ましろは年上の：しかも横須賀女子海洋学校の生徒相手にも関わらず、勝利を収めた。

アナウンス『ゴオオオオル！！・・・速い速い宗谷ましろ！・・・並み居るブルーマーメイド候補生を置き去りにして、中学3年生が雅かの大逃げ、大逃げ切りを決めました！』

ましろ「はあつ、はあつ、はあつ・・・はあ・・・」

アナウンス『宗谷ましろさん！・・・勝利者インタビューです！・・・この勝利の感想を一言！』

ましろ「つ、次の……」

『次の?』

ましろ「次の頼まれごとがあるのでこれで……」

勝利者インタビュを振り切ってましろは、次の会場へと向かう。

何時の間にか横須賀女子海洋学校の生徒達の間で「宗谷家のお嬢さんが代打を引き受けてくれるらしい」という噂が立ち始めていて、既に何件か引き受けざるを得ない状況になってしまっていた。

ましろ（心情で動いてしまつては、規律は保てない!!……だが、一度心情で動いてしまった以上、同じ状況にあるところには同じ対処をしなければ、公正が保てない!!）
スケジュール調整の伝達は、既に済んでいた。

だが、引き受けた代打をこなすべく、ましろは、会場内を更に駆け巡らなければならなくなっていたのだ。

ましろ（次はクイズ大会らしい……ありがたい……少しは、身体を休ませられる……）

次の会場は、クイズ会場で1人がクイズに答え、もう1人は、滑り台の上に乗ると言うモノで、解答者が間違えると、滑り台が上がり、乗って居る者が滑り台から落ちたら、負けとなるルールである。

そして、ご丁寧に、その滑り台の先は海に向けられていた。

アナウンス『三十六歌仙の1人で万葉集の編纂に携わったと言われる・・・』

ピンポン!

横女の学生「大伴家持!」

アナウンス『・・・ですが、キリスト教の洗礼を受けた豊後の大名と言えは? 大友

宗麟が正解でした!!』

横女の学生「前半関係ないじゃん!? 御免、ましろさん!」

ましろ「がっ、がんばりますっ!」

ましろは、自分のチームパートナーとなった横須賀女子海洋学校の生徒を励まし続けた。

ましろ「大丈夫ですから答えてください!! 例え間違えても耐えきってみせます!!」

横女の学生「ましろさん・・・うん、がんばる!」

例えパートナーが答えを間違えても怒ったりはせず、最後までパートナーを信じ続けた。

洋美(凄い!?!・・あんなエネルギーは、私は愚かマロンにだって無い。)

そんなましろの姿勢は、観客や洋美に好感を与えたのは言うまでもなかった。

クイズ大会でも見事に勝利したましろは、其処から更に栈橋に向かった。

其処では、ブルーマーメイドによる2回目のスキツパーショーが行われていて、ましろは、何故か司会役としてマイクパフォーマンスを見せていた。

ましろ（何でこんな事まで……）

横女の学生「あ、さっきの……」

ましろ（声を引つ込めるのが遅かった!?!……気まずい。）

横女の学生「あ、え、えつと……さっきのクイズ大会、おめでとうございます!!」

ましろ「わつ、見ててくれたんだ!ありがとう!」

横女の学生「すみません……さっき向こうに居たのに何でもう? って思っちゃつて……」

ましろ「アハハ、それは私じゃなくて、今司会やつてる方に言うべきかな……急に相方になってもらった手前、ちよつと心配で……」

横女の学生「急に相方に? どういうことなんです?」

ましろ「ああ……ハハ……あんまり他の人には言わないでね? 実はね……」

到着が遅れていた武蔵が漸く到着したとの連絡が入った。

ましろ（大丈夫だ……まだ時間はある……私だつて馬鹿じゃない……無制限に代打を引き受けたりはしていない。）

武蔵自体は到着したが、体験航海までもう少し、時間的余裕が有る。

ましろ「はあ……はあ……はあ……くそつ、脚が……もう……」
しかし、ましろは、此処でも大きなミスを犯した。

ましろ（脚が重い……力が入らない……喉もガラガラだ。）

自分の体力の限界を考慮していなかったのだ。

汗も滝のように流れていて、体育着がそれを吸いこんでぐっしりとしていた。

ましろ（諦めるのか？……自分が引き受けたことを？……諦めるのか？……あの憧れの武蔵に乗る事を？）

最早憧れの武蔵に乗る事を諦めかけていたが

ましろ「諦めたく……ない……!!」

しかし、今諦めれば、これまでした事が全て水の泡になってしまう。

重くなる身体を引きずりながら、次の助っ人会場へと向かうましろ。

ましろ（あそこだ……あの……甲板に設けられた特設プール……プール？）

会場を見て、ましろは固まる。

ましろが助っ人に来たのは、何と400m水泳リレーだった。

体力は、既に限界に近い中、400mも泳げない。

ましろ「だが……引き受けた以上は……!」

しかし、コレに出なければ、スケジュールが乱れ、武蔵に乗れない。

だが、この競技に出ても、体力が尽きて、その場に倒れるかもしれない。

倒れたら医務室へ運ばれ、当然武蔵に乗る事が出来ないかもしれない。

ましろ（やっぱり、付いていない・・・）

ましろは、自分の不幸体質を呪ったが、どちらにしても武蔵に乗れないのであれば、少しでも先輩方の役立つ方を選んだ。

しかし、此処でましろにとつて奇跡が起きた。

横女の学生「ましろさん！良かった、間に合った！」

それは、本来甲板走を走る筈だった横須賀女子海洋学校の生徒だった。

横女の学生「御免ね？・・・私の代打引き受けたせいで、他の子のも受けなきゃいけないよ？大活躍だったんだって？・・・本当に御免！・・・それから、ありがとう!!・・・聞いたよ？」

ましろ「いえ、それより、其処のプールに行かなくちゃいけないんで・・・」

ましろは、フラフラな状態で会場に向かうが

横女の学生「何言ってるのよ、そんなフラフラで！・・・私が何の為に来たと思ってるの!？」

ましろ「・・・え？」

横女の学生「競泳だつて? . . . まあ、私も午前午後の公演終えて疲れてないとは言わないけどね、此処は、私に任せてましろさんは休んでて! . . . あ、競泳スタッフの人 . . . !」

如何やら、その横須賀女子海洋学校の生徒は、自分の代わりに甲板走に出てくれたましろの恩に報いろうと彼女の代わりに出てくれる様だ。

その先輩は、特設プール付近にいたスタッフに駆けよつた。

ましろ「私は」

横女の学生「あ、ましろさんが居たわ!」

横須賀女子海洋学校の生徒が3人やってきた。

横女の学生「代打をいっぱい引き受けちゃつて大変だつて聞いたわ!! . . . それでね、わたくし達3人でお力になれないものかと思つて探してましたの」

横女の学生「そうそう、それに武蔵の体験航海に乗りたいつつ話も聞いたんだ!! . . . だつたらそろそろ向つておかないと」

横女の学生「何をぼーつとしてるのかね、ましろくん! . . . さあ、残りの依頼は我々素敵な先輩に任せて、君は、もう1人の一般客に戻りたまえよ!」

ましろ「せ、先輩方」

先輩方は、ましろに精一杯の感謝の言葉をかけ、ましろは、その言葉を聞き、思わず

涙が出る。

横女の学生「わっ?!? ……あ、あのつ、泣かないで! ……え、えっとハンカチ!」

ましろ「ありがとうございます!!」

ましろは、感謝し、こうべを垂れた。

横女の学生『ひやっ!?!』

突然の感謝に驚いてしまう。

横女の学生「ううんっ、ありがとうございますはこつちの言葉! ……来年には、後輩になる子にお世話になりっぱなしじゃ横須賀海洋の生徒としては目立たないからね!」

横女の学生「その通り!! さあ、向かいたまえましろくん! ……近い将来、きみの艦になるであろう、あの武蔵の下へ!」

ましろ「はいっ! では、よろしくお願いします!」

やはり、母が校長を務める横須賀女子海洋学校の生徒は素晴らしい生徒達だ。

自分は、何が何でも横須賀女子海洋学校に入ってみせると意気込んだましろだった。

洋美「凄い!?!」

ましろの活躍を見て、洋美は感動した。

彼女の行動は、横須賀女子海洋学校の生徒達の心も動かした。

ましろが横須賀女子海洋学校の校長の娘、ブルーマーメイドでは有名な姉妹の妹だと

言う面もあるかもしれないが、唯それだけでは、人の心は動かせない。

ましろの自らの犠牲も厭わない行動に皆感謝したのだろう。

洋美「如何して、私は唯の中学生なんだろう・・・」

ましろと自分は、同じ中学生なのに、如何してこうも違うのだろう。

洋美は、自分の非力さを嘆いたが、それでも自分は、ましろの力になりたいと思う自分が其処には居た。

洋美「ブルーマーメイドになれば、私も宗谷さんの力になれるのかな・・・」

洋美はそう呟き、ブルーマーメイドフェスターの会場を見渡す。

同じ会場なのに最初見た時と今見ている時、それが何だか違って見えた。

洋美「横須賀女子海洋学校か・・・」

今年受験生にも関わらず、明確な進路をまだ定め切れていない自分に明確な進路が導き出せた気がする。

それは雅に濃霧の中で、陸地を求めている時、一筋の灯台の明かりを見つけた様な感覚であつた。

その頃、薫と明乃は、はぐれた次郎達を探しながら模擬店やイベントを回っていた。模擬店で薫は、生徒達がやるメイド喫茶に興味を持ち、明乃と一緒に入る。

明乃は、初めて見る顔をし、薫の方は、生徒達を見て、まだまだねという顔をする。

まあ、薫も学生時代に学園祭でメイド喫茶をやっていた経験がある為、まだまだこなもんじゃなかったと思うんだった。

メイド喫茶を後にし、次に行こうとした時

明乃「ん・・・」

屋台ブースで売り子や客の呼び込みをしている横須賀女子海洋学校の生徒達を見て

明乃「私：来年、あの制服を着れるかな・・・」

明乃は不安そうに言う。

薫「あれ、如何したの岬ちゃん？雅か、今さらおじけずいたの？」

不安そうに思う明乃に薫は、少し馬鹿にした言葉を言う。

明乃「いいえ、絶対成ります!!ブルーマーメイドに、もかちゃんと約束したから!!」

薫の少し馬鹿な言葉が明乃の心に火を付ける。

薫「もかちゃん？」

明乃「あつ、もかちゃんて言うのは、この前、言っていた私の幼馴染です。」

薫「そのもかちゃんは、成績は、どの位なの？」

明乃「成績は、私よりトップクラスです・・・それにいつも試験勉強の対策問題集を

送ってもらってますし・・・」

薫「じゃ、岬ちゃんは、諦めないでがんばらないとその子が送ってくれた折角の問題

集も無駄になるわね！」

薫の言葉に明乃の心に更に火を付ける。

明乃「私はきつと、絶対、絶々対に横須賀女子海洋学校に入ります!!」

薫「よし、その活きよ岬ちゃん!じゃ、けいきずけにブルーマーメイドの誓いの言葉を言ってみようか!?!」

明乃「はい!」

薫「海に行き」

明乃「海を守り」

薫「海を行く」

『それがブルーマーメイド!!』

ブルーマーメイドの標語で気合を入れるが一般客の目の前でやったせい、注目の的になる。

2人共赤面し、急いでその場を去る。

逃げる途中、武蔵が到着し、その体験航海がある連絡を聞く。

薫「武蔵って一体どんな艦なんだろう?」

明乃「え、薫さん知らないんですか?・・・これですよ!・・・これが武蔵です

!!」

明乃が薫にパンフレット見せ、武蔵についての詳細を教える。

大和型戦艦の二番艦で、現在は、横須賀女子海洋学校所属の超大型直接教育艦として使用されている艦、乗員は、横須賀女子海洋学校の中でも優秀な生徒が選ばれている。

武蔵の艦影を見て、薫は

薫（ああ、この艦知っている!?!?・・・確か、今は、スクラップになって・・・その資材は、私が乗る空母大鳳に使われている。）

龍之介達の世界では、武蔵などの旧式艦は、既に時代遅れとなっていた。

日本国防軍は、新型の空母や護衛艦を建造する為には、資材が不足した為、そこで武蔵などの旧式艦をスクラップにして、その資材を再利用する事で建造が可能となり、鳳凰型空母を6隻建造する事ができた。

特に鳳凰型3番艦の大鳳は、武蔵と信濃の資材を再利用して建造された空母である。

明乃「この後、体験航海があるみたいですし、乗りませんか?」

明乃が武蔵に乗ろうと言う。

薫「そうだね、乗ってみようかな!」

薫も自分が乗る大鳳の親である武蔵に興味を持ち、折角だから乗ろうと決めた。

そして、2人は、武蔵の体験航海が行われる埠頭へと向かった。

第20章 ブルーマーメイドフェスター 後編

千葉県、館山港

その頃、館山港に停泊しているGフォース西部方面艦隊では、居残りの隊員達が暇潰しをしていた。

空母大鳳、長官室

龍之介「航海日誌……現在の艦隊状況は……さつまが入渠以外は、異常なしと……」

空母大鳳の長官室では、龍之介が書類仕事を終えて、航海日誌を記録していた。

龍之介「はあ……」

航海日誌を書いている途中、龍之介は、ある事を思う。

龍之介「この世界に飛ばされて、半年……何も起きていない……まだ大丈夫だと言う事か……」

龍之介達がこの世界に飛ばされて半年、何も起きず、まだ大丈夫だと言う事を感じるが、何れは、何かが起きると予測する。

その時に何ができるのか、龍之介の決断に係っていた。

空母大鳳、艦橋

美奈「平和つて、良いね・・・」

艦橋では、航海長の美奈が週刊誌を見ながらそう言う。

実「そうだな・・・」

通信主の実は、そう言いながら何かを書く。

信吾「ああ・・・はあく」

砲雷長の信吾は、煙草を吸う。

実は、この3人は、学生時代の同期で通称、江田島の三羽ガラスとも言われた。

美奈「実ちゃんは、さつきから何を書いているの？」

美奈は、実が何を書いているのか気になる。

実「此処からの景色だ。」

如何やら此処から見た景色を書いている様だ。

信吾「相変わらず絵の天才だな、お前！」

美奈「そうだね！・・・こんなに上手なら画家になれたのに・・・」

実「仕方ない！・・・うちが貧乏で、学費が高かった美術学校には、通えなかったかな・・・通えたのは、江田島の海士学校ぐらいだけだった。」

2人が言う様に実には、画家の才能が有った。

だが、家が貧乏だったので、学費が高かった美術学校には通えず、仕方なくタダで学べて、給料が貰える江田島の海士学校を受験した。

信吾「確かに！・・・タダで学べて、給料が貰える場所と言ったら国防軍の学校しかないからな！」

美奈「でも卒業できなかつたら学費を全額返済しなきゃならないんだよ!!」

美奈の言う通り、国防軍の学校の殆んどが学費はタダで給料も貰える。

だが、卒業して、軍人にならなければ、それらを全額返済しなければならない。

信吾「そんなところを・・・俺達、よく卒業できたもんだぜ!？」

信吾は、そんなところをよく卒業できたもんだと感心する。

『ん、ん』

2人もそう思うのだった。

美奈「そう言えば、艦長と副長は、今頃、ブルーマーメイドフェスターを楽しんでいるだろうね・・・」

実「ああ、高町隊長や、テストタロツサ隊長、小沢中佐を連れてな・・・」

信吾「それに比べて、俺達3人は留守番か・・・はあく・・・暇だ・・・」

3人は、薫達がブルーマーメイドフェスターに行っているのを羨ましくなる。

美奈「そうだわ!？」

美奈が閃く。

美奈「私達も次の休みの日に何処か遊びに行こうか!!」

信吾「ん・・・そうだな!」

実「それも良いな!」

こうして、3人は、次の日に遊びに行く事にした。

空母大鳳、格納庫

格納庫では、艦載機の解体整備が行われていた。

戦闘攻撃機春乱も機体はバラバラに解体され、エンジンが外され、30mm機関砲も外された。

普通に見られない電子機器や機首のレーダーアンテナがむき出し状態で整備員が点検や部品の交換を行っていた。

その整備員を直接指揮しているのが我らの誇る整備班長の文雄である。

文雄「よくし、其処は、新しいパーツと交換しておけ!・・・おい其処!!・・・誰がクレーンの使用を許可したんだ!!」

空母大鳳の整備員A「誰って、自分じゃないですか?」

文雄「・・・ああ、そうだった。」

空母大鳳の整備員A「しっかりと下さいよ整備班長!!」

空母大鳳の整備員B「唯でさえ血圧が悪いんですから・・・」

文雄「喧しい!!・・・お前ら、人の事考えてないで、手を動かせ!!」

『は、い、い!!』

何は兎も角、解体整備作業は、順調に進んでいた。

空母大鳳、炊飯所兼食堂室

炊飯所兼食堂室では、機関長の夏雄が機関員達と一緒に遊び丁半博打ちをしていた。

夏雄「さあ、どうでえい!」

夏雄がサイコロが入った壺を回すのを止め、丁か半か

空母大鳳の機関員A「丁!」

機関員達の代表が丁と出し。

夏雄「勝負!」

夏雄が壺を開くとサイコロの数字は、1、6と6、1と出て、イチロクの半だった。

夏雄「よっしゃー!」

半が出て、夏雄が勝ち、負けた機関員達から賭け金を巻き上げる。

『くそー!!』

丁を出した機関員達は、悔しながら、夏雄に賭け金を差し出す。

夏雄「はははあ・・・もうひと勝負いこうかあ・・・」

夏雄は、もうひと勝負する事にした。

空母大鳳の機関員A「ううう」

負けた機関員達は、もうひと勝負を受ける。

今度は、機関員達がサイコロを振るう。

夏雄「丁!」

夏雄は、丁と出し。

空母大鳳の機関員A「勝負!」

機関員達の代表が壺を開くとサイコロの数字は、1, 5と5, 1と出て、グイチの丁だった。

空母大鳳の機関員C「丁だと!」

空母大鳳の機関員B「嘘だろ!」

機関員達は、またも夏雄に敗北し、賭け金を空しく差し出す。

夏雄「残念だったな・・・勝負は、時の運ってんでい!」

勝負に勝ち気である夏雄。

歳郎「たく、よく勝つな、あいつは・・・」

勝どきを上げる夏雄を見ながら酒を飲むのは、機関助手の大山歳郎大尉、通称トチローである。

悟郎「機関長は、機関の腕だけじゃなく、博打の腕も強いからな・・・」

歳郎の隣で夏雄の腕を認めながら一緒に酒を飲む空母大鳳軍医長の宗方悟郎少佐。

2人は、仲良くを酒を飲む。

そして、足元にもう1人。

「ニャーッ！」

いや一匹の猫である。

ミーくん「ニャーッ！」

この猫の名前は、ミーくん。悟郎の愛猫である。

ミーくんも2人に釣られて酒を飲む。

そんな時

功「失礼します！」

功が炊飯所兼食堂室にやってきた。

功「また2人で、昼間から酒を飲んでいるんですか？」

歳郎「功も飲むか？」

歳郎が功と一緒に飲もうと誘う。

功「いや、まだ仕事中だ!!」

功は、仕事中だと言って断る。

歳郎「たく・・・付き合い悪いな・・・」

功に断られて、歳郎は、機嫌を悪くする。

功「お前が昼間から酒を飲むからだろ!!・・・大学の同期とは、言え・・・情けないぞ!!」

実は、功と歳郎は、大学からの同期で一緒に教鞭を取った中でもある。

功「ところで・・・桐野料理長!」

歳郎達は、置いとして、功は、空母大鳳主計科長兼料理長の桐野俊秋少佐を呼ぶ。

だが

俊秋「今仕込みの最中なんだ!!邪魔をするな!!向こう行つてろ!!」

如何やら、仕込みの最中で機嫌が悪いようだ。

功「酷いな折角来たのに・・・」

俊秋「何!?!」

仕込みをしている最中、俊秋は、振り向くと

俊秋「こ、これは・・・し、失礼しました!!・・・参謀とは、思わず、とんだごぶれいを・・・」

怒鳴った相手が功だった事に俊秋は、驚愕しながら謝罪する。

功「頭を上げて下さい!!突然出向いた私も悪いんです・・・ところで今日のメニュー

は？」

功は、今日は、何のメニューか聞く。

俊秋「はい！・・・今日は、特製辛子ラーメンとゴモクチャーハン、特製シューマイです。」

功「また、中華料理ですか？」

また中華料理と言うのは、俊秋がいつも料理すると何故か中華料理になってしまう。

彼は、日本人何だが、此処に来る前は、横浜中華街で働いていた経歴がある。

その為か、彼が料理すると中華料理になってしまうのだ。

このままでは、毎日が中華料理になってしまう。

その為の対策として考えられたのが、薫が学生時代に駆逐艦そよかぜでやっていた当番制（理由は、そよかぜに配属された主計科が料理が下手だった事）を採用する事にした。

当番制とは、指揮官と参謀以外の航海科、整備科、航空隊、機関科が交代で食事作業を行う事である。

これのお陰で毎日中華料理を食わなくて済んだが、今日は、薫達などが休みな為、仕方なく中華料理を食うしかなかった。

功「あまり中華料理ばかり作りますと嫌われますよ！・・・私は、良いですけど・・・」

俊秋「はぁ・・・努力は、していますが・・・」

俊秋も直そうと努力しているが、直すには、まだ時間が掛かる様だ。

この様に留守を預かっているGF隊員達は、色んな暇潰しをしているのだった。

横須賀基地

その頃、ましろは、横須賀海洋学校の生徒に頼まれ事を代わって頂いたお陰で、極限まで来ていた心身に少しずつ余裕が出てきていた。

ブルーマーメイドフェスターの会場を改めて見渡すと、1人1人の笑顔がはつきりと分かる。

ましろは、今この時まで、会場内にこんなに溢れている人々の笑顔が何一つ目に入っていないかったのだ。

余裕が無いのにも程があるだろう。

ましろ（今になつて思うが、代打を引き受けた数々の競技やアトラクションを、私は、ちやんとこなせていただろうか・・・人々にこんな笑顔を提供できていたのだろうか・・・）
きっと私は、横須賀女子海洋学校の生徒だと思われていた筈だ・・・先輩方の顔に泥を塗る様な事になっていなければ良いのだが・・・

強めの海風が吹いて、ましろが髪を押さえた時

小学校低学年くらいの女の子の声が聞こえた。

少女「あっ!?紙が!」

ましろ「髪?いや、紙か!」

半分に折られた紙が風が煽られて甲板を転がっている。

ましろ（あれは・・・そうだ!・・・入場の時に配られるスタンプラリーの台紙だ!?）
会場の各艦艇でスタンプを捺し、スタンプを全部揃えた人には、ささやかな景品がプレゼントされるといったものだ。

ましろは、その台紙を拾うべく、走り出す。

しかし、身体が忘れていた疲労を直ぐに思い出し、ビキビキとした痛みを伝えてきた。
また少し強めの海風が吹きつけられ、台紙が舞い上がった。

ましろ（ああ、もう十箇所以上のスタンプが捺してあるじゃないか!）

ましろは台紙に手を伸ばす。

小癩にも台紙はヒラリとそれを躲し、更に舞い上がった。

ハラハラした女の子の顔が目に入った。

ましろ（必ずキヤッチしなければ!）

ましろは、なけなしの体力を振り絞り、舞い上がる台紙に飛びついた。

ましろ（キヤッチ!!）

だが、其処でましろは、着地するべき足場が其処にはない事に気がついた。

その代わりに海がある。

ましろ（付いていない時は、とことん付いていない……それがこの私、宗谷ましろの運命だというのか！）

ましろは、海へと落ちた。

ましろ「御免ね？スタンプラリーの台紙、ビショビショにしちゃった」

ずぶ濡れになって戻ったましろは、直ぐにその女の子に謝った。

少女「ううん！お姉ちゃん、ありがとう……ぐすつ」

だが、女の子は、突然泣き出す。

ましろ「ああ、泣かないで！……お姉ちゃんは大丈夫だから……ところで、貴方

は、一人？……お父さんやお母さんは？」

少女「あ……分かんない!!」

ましろ「えつと……迷子？」

少女「さつきまで、お母さんと一緒に居たんだけど……紙追いかけてるうちに……」

如何やら、髪を追いかけてるうちに両親とはぐれた様だ。

ましろ「そっか……それじゃあ、まだこの近くに居そうだね！……お姉ちゃんと

一緒に探そうか？」

ましろは、少女と一緒に両親を探す事にした。

少女「うん！」

すっかりと頷いた女の子にましろも笑顔で返す。

だが、海へのダイブを敢行した上、迷子の親探しときては、流石に武蔵の体験航海は諦めなければいけないだろうか。

こうしているうちにも時間は3時を回っていた。

既に武蔵への乗艦は、始まっている。

出航時間は、アナウンスされていなかったが、どれくらい余裕があるだろう。

ましろ「この子のお母さんはいませんか……!?」

ましろ（内心では涙を流しつつ、努めて平静に迷子の母親を探す……この子に無用な心配をさせてはいけない!!……今一番不安なのは、この女の子なんだ!!）

少女の母親「あずみ！」

少女「あつ、お母さんっ！」

ましろ「この子のお母さんですか？良かった……」

少女の母親「あずみの面倒を見てくれたんですよね……本当にありがとうございます……います!!……それに、あずみの為に海に飛びこんでくれたとか？」

少女「うん!……お姉ちゃん、スタンプラリーの紙、必死になって取ってくれたの……ビシヨビシヨになっちゃったけど、凄く嬉しかった……」

ましろ「あ、あはは……飛びこんじゃったのは、私が間抜けだっただけで……ところで、何故その事をご存知なんですか？」

少女の母親「この子を探していたら、お母さんを探してましたよって教えてくれた女の子が居て、その子から……あ、それと、これも渡してあげてほしいと……」
女の子の母親は、ましろにタオルを渡す。

ましろ「え、誰だろう？……お礼を言わなくちゃ……」

少女の母親「今はまだ顔を合わせる資格がないのかなんとか……それより、ご自分の為に急いでください、と……」

ましろ「ご自分の為？……そうだ！武蔵！……では、タオルはありがたくいただきます!!……もしまたその方に会えましたら、宗谷ましろが心から感謝していたとお伝えください!!」

少女「お姉ちゃん、ありがとう!!ばいばい……」

ましろは、親子にお辞儀をし、武蔵目指して走り出す。

洋美「これで少しくらいは、お役に立てたのかな……」

ふらつきつつも走っていくましろの背中を見送って、洋美も歩き出した。

洋美「今からじゃ武蔵は流石に無理そうだけど、私もちよつとがんばらないと!!」

洋美の父「洋美」

ましろの事を考えながら、メッセージに来ていた待ちあわせ場所に向かうと、両親がさつそく洋美の姿を見つけて手を振っていた。

洋美の母「如何だった、洋美？・・・何か良いものでも見られた？」

洋美「ん・・・そうね！」

洋美は、今朝の不機嫌などすっかり忘れた振りをして微笑む。

洋美「ブルーマーメイドも良いかもね！」

洋美は、ブルーマーメイドに入ろうと横須賀女子海洋学校へと進路を決める。

一方、薫と明乃は、武蔵の体験航海が行われる埠頭へと辿り着いた。

薫「これが武蔵!」

初めて武蔵を見て、薫は驚きを隠せなかった。

何しろ、龍之介達の時代には、こんな大きな艦は、空母か補給艦のみだからだ。

薫（真霜姉さんや真冬が艦長務めたと聞いているけど・・・来年には、ましろちゃんが艦長として乗るのかな？）

明乃「薫お姉ちゃん！急いで乗らないと・・・」

薫が驚いていると明乃が急いで乗るよう言う。

武蔵の体験航海に参加するべく、殆どのお客様が急いで乗り始めていた。

アナウンス『間もなく、超大型直接教育艦、武蔵は出港いたします!!・・・ご乗船の

お客様はお急ぎください!!』

武蔵の出航を知らせる放送も流れ

薫「あつ、うん！」

薫と明乃も乗艦する為、急いでタラップを上る。

その頃、武蔵の体験航海に参加したがっていたましろは、何とか埠頭に着くと

ましろ「すみません！乗ります！宗谷ましろです！乗せてください！」

声を張り上げてましろは、埠頭の横須賀女子海洋学校の生徒達に声を掛ける。

ましろ自身、こんな私事で『宗谷』の名前を使うのは好ましく思っていなかったが、時間ギリギリで武蔵に乗れるか乗れないかの瀬戸際にもはや恥や外聞もない。

乗れるのであれば、『宗谷』の名前でもなんでも使つてやる。

成り振りなんて構っていられないましろ。

タラップを仕舞おうとしていた乗員を押し切り、ましろは、何とか乗る事が出来た。

ましろ「はあ：：はあ：：はあ：：はあ：：な、何とか間に合った：：：」

息を整えながら、ポケットからハンカチを取り出し、額に浮き出た汗を拭う。

やがて、ほんの少し体力と呼吸が回復し、楽になり、辺りを見回すと、ましろは違和感を覚えた。

甲板上に一般客の姿が無かったのだ。

既に艦内に入ったのだろうか？

スケジュールが変わったとは言え、武蔵に乗りたいたいと思う一般客が少ない筈がない。やがて、少し離れた所で音楽隊が演奏する音楽が聴こえて来た。

その音楽を聴いてましろは、

ましろ（あれ？・・・この音楽が終わってから武蔵は出航する筈・・・と言うか、音楽隊は武蔵の前で音楽を演奏する筈・・・）

スケジュール調整をしていたので、ましろは、武蔵がどのような経緯で出航するのかを知っていた。

音楽が終わり、出航ラツパが鳴り響く。

ましろの本能が自分に呼びかけている。

ましろ（これは、武蔵では無い!？）

しかし

ガコンと、ましろが乗っている艦が揺れる。

ましろ「ん？んんっ？」

突如、乗っていた艦が揺れた事により、

ましろ（何だ、やっぱり、出航するんじゃないか、やはりこの艦で間違っていないか
た・・・）

ましろがやはり、自分が乗っているのは武蔵だと確信を持ったその瞬間

横女の生徒「明石、接舷完了しました！」

状況を報告する乗組員の声を聞いて、ましろはピシッと固まった。

何故、今から出航する筈の武蔵に支援教育工作艦明石が接舷する必要がある。

武蔵同様、横須賀女子海洋学校に所属する支援教育工作艦明石は、主に艦船の整備・修繕を主目的としている艦だ。

その整備・修繕を主目的としている艦が今、自分の乗っている艦に接舷していると言
う事は

ましろは、恐る恐る今、自分が乗っている艦の艦橋や周囲を見渡す。

すると

ましろ「……比叡だこれ!？」

ましろは、声を絞り出しながら今、自分が乗っている艦が武蔵では無い事を察する。

エンジントラブルを起こした比叡の修理を行う為、明石と比叡の生徒達が修理作業を開始し始めている中、ましろは自分の名前通り、真っ白になり、膝から崩れ落ちた。

ましろの周囲では明石と比叡の生徒達の声が聞こえる。

そして、比叡と接舷した明石の横を、一般客を大勢乗せた武蔵が通過して行くのをましろの視線が捉えた。

全ての不幸は未来への踏み台の布石に過ぎない。
今日の出来事を自分は僥倖と思もうぞきだ。

ましろ（確かに苦難の連続だったが、その分ブルーマーメイドへのそして、横須賀女子海洋学校への思いもより強固なものにすることができたのだ!!・・・それが分かっただけでもいいじゃないか!!）

ましろは、そう割り切り、出航して行く武蔵に対してまるで宣言するかの様に

ましろ「待っているよ武蔵!・・・私は、お前に絶対に乗って・・・ふあ・・・ふあ
あつくしよいつ!!」

両手を高々に上げて、ましろは、武蔵に向かって叫んだ。

この時の誓いの言葉が、くしやみによって中断されたのがいけなかったのだろうか。
横須賀女子海洋学校の入学式の時に配属される艦が武蔵ではない事は、ましろは、この時、知るよしもなかった。

艦首で出向して行く武蔵に対して、叫んでいるましろを明石と比叡の生徒達は、怪訝
そうな顔で見ている。

武蔵が埠頭を離れ、出航して行く際、甲板上に居た薫は、比叡の艦首にて薫の知る人
物が武蔵に向かって叫んでいるのが見えた。

薫（ましろちゃん!?・・・何で比叡に乗っているの?・・・何か用があったのかな?）

薫はましろが比叡に乗っている事に驚いたが、今日のましろは、フェスターの運営を手伝っていると先程本人に聞いていたので、比叡に何か用があつたのだろうと判断した。

雅か、本当の理由が武蔵と比叡を間違えた事など知る由も無かつたが

武蔵の体験航海は順調で、先ず最初に生徒が一般客達を艦内に案内した。

其処で、設備の説明や一般客からの質問に丁寧且つ分かりやすく答えていった。

流石、横須賀女子海洋学校の成績上位者と言うべき生徒達で、薫と明乃は、武蔵の生徒達を尊敬の眼差しで見っていた。

一通り、艦内の案内が終わると、後は、フリータイムとなつた。

其処で、薫と明乃は、後部甲板に設けられたテーブル席で談笑した。

明乃は、幼馴染のもえかのことや受験の進み具合を薫に話し、薫は、明乃に艦の事やブルーマーメイドの事を話す。

一応、自分が別の世界から来た事は、明乃には話さなかつた。

この前も言った通り、Gフォースや別世界の事は極秘になっている。

それに明乃に話しても分からないだろう。

薫は、水平線を見る。

薫（そう言えば……今ごろ、兄さん何してるのかな？）

やがて、武蔵の体験航海が終わり、一般客達がタラップを使い、次々と武蔵から下艦し、薫と明乃も下艦した。

下艦した薫と明乃は、会場に戻ろうとすると、何やら大規模なイベントが開催されようとしていた。

薫「何だろう？」

明乃「行ってみましょう！」

大規模なイベントが開催されるのを聞いて、一般客達が集まり、薫と明乃も行って見る。

BPF隊員『さあ、やってまいりました!!・・・ブルーマーメイドフェスター恒例の腕相撲大会!!』

ブルーマーメイドフェスター恒例の腕相撲大会が開催されていた。

司会役を務めるBPF隊員がイベントの開催を宣言すると、会場は歓声で盛り上がる。

BPF隊員「この競技は、ブルーマーメイド、高校生、一般来場のお客さん達の中で腕に自信のある方なら、誰でも出場可能な大会!・・・今年も数多くの猛者達が集まってくれました!!・・・では、勇敢なる猛者達を紹介します!!・・・皆さん!!・・・拍手で出迎えてあげてください!!・・・では、どうぞ!!」

会場にあふれんばかりの拍手が鳴り、ステージに挑戦者達が登場する。しかし、その中に薫の知っている人物がいた。

薫「次郎君!？」

ステージの挑戦者達の中に次郎がいた事に薫は驚愕する。

薫「何で、次郎君が出てるのよ!？」

何故、腕相撲大会に次郎が出ているのか、ステージの周りを見ると、はやてとヴィオオを連れたなのはとフェイトを見つける。

薫「はやてちゃん!なのはちゃん!フェイトちゃん!？」

薫は、手を振りながら、大声で叫ぶ。

『あつ薫先輩!?!』

4人は、それに気づく。

はやて「何所行ってたんでっか?・・・探したんやねんわ!」

薫「御免、御免!!ついスキツパーションーに見とれてしまつて・・・」

なのは「もう、駄目ですよ先輩!」

薫は、はぐれた言い訳を説明し、3人のお説教を受ける。

フェイト「あら薫先輩!・・・その子は?」

明乃「・・・」

3人は、明乃に注目する。

薫「ああ！この子は、岬 明乃で、この前、図書館で知り合った子なの！」

はやて「ああ!?前に言ってた受験志望の子やね！・・・始めまして、八神はやてとい
いますう!!」

なのは「私は、高町なのはだよ！」

フェイト「私は、フェイト・テスタロッサと申します。」

3人は、明乃に自己紹介をした。

明乃「み、岬明乃です。」

明乃も3人に自己紹介をした。

なのは「あつ、それと、この子は、ヴィヴィオ！」

ヴィヴィオ「初めまして、高町ヴィヴィオです!!」

ペロペロキャンディを持ちながら、ヴィヴィオは、明乃にきちんとお辞儀をする。

明乃「岬明乃です。」

明乃もお辞儀で返す。

はやて「ヴィヴィオと同じで可愛いやな明乃ちゃんは・・・」

はやては、そう言いて、明乃の頭を撫でる。

明乃「あ、ありがとうございます。」

はやてに撫でられ、明乃は照れる。

薫「それより、はやてちゃん！・・・何で次郎君がステージにいるの？」

次郎が何故出場しているのか、はやてに理由を問う。

はやて「それが・・・実は・・・」

はやての説明によれば、薫とはぐれた後、次郎達は薫を探しながら、模擬店など回っていた様だ。

その証拠にヴィヴィオの手には、ペロペロキャンデイが握っていた。

しかし、会場は広く、何所を探しても薫を見つけられなかった為、仕方なく会場放送で呼び出し仕様と本部席に行った時、真冬とバツタリ会ってしまった様だ。

何故本部席に来たかわ、はやてが真冬に事情を説明したらしいが、それ以上にヤバいのは、次郎と真冬である。

前の通り2人は、犬猿の仲である。

だから、当然喧嘩になるのだが、今日は、ブルーマーメイドフェスターであまり揉め事は起こしたくない。

ならそれ以外で対決する事になった。

それで、調度、腕相撲大会が開催される予定だった為、両者は、それで決着を付ける事にした。

薫「と言う事は……」

BPF隊員「では、挑戦者の方々が集まりましたので、いよいよチャンピオンの登場です!!……どうぞ!!」

司会役がチャンピオンの登場を促すと、プシューという白いガスが出てそれが収まると

真冬「とお!!」

黒いマントに黒いブルーマーメイドの制服を着た真冬がステージに立った。

BPF隊員『チャンピオンの宗谷真冬さんの登場です!!』

司会役がチャンピオンである真冬の紹介をすると、会場は再び歓声に包まれた。

薫「ああ……」

真冬の登場に薫は、言葉が出なくなった。

BPF隊員『では、チャンピオンが登場したので、ルールを説明させていただきます!!……ルールはいたって簡単!!……腕相撲で決勝まで勝ち抜く事!!……以上です!!……では、皆さん準備は、良いですか!!……では、始め!!』

チャンピオンの真冬以下、挑戦者達は、それぞれ双方で腕相撲大会を始める。

そして、ゲームが進んで行く内に、挑戦者の者達は次第に脱落していき、次郎と真冬は、勝ち進んで行く、やがて、決勝に残ったのは、次郎と真冬の2人になった。

BPF隊員『さあ、いよいよ決勝戦!!・・・残ったのは、チャンピオンの宗谷真冬さんと初出場の挑戦者のみとなりました!・・・それでは、今回初出場の挑戦者にインタビューして見ましょう!』

司会役が次郎にインタビューをする。

BPF隊員『あの、決勝まで勝ち進んで今の気分は如何ですか?』

次郎は、電子煙草をしまい、司会役からマイクを奪う。

次郎『最高だね!!・・・あいつをぶちのめすなら、良い気分だぜ!!』

如何やら、相当真冬の事が嫌いの様だ。

BPF隊員『如何やら、今回初出場の挑戦者は、宗谷真冬さんとは、何やら因縁があるようです!!・・・それに対して、宗谷真冬さんは、如何お答えしますか?』

司会役が今度は、真冬にインタビューをする。

真冬『同じ言葉を返すぜ!!・・・このあたしに喧嘩売った事を後悔させてやる!!』
両者とも睨み合いする。

BPF隊員『では、両者は位置に着いてください!!』

両者は、位置に着き手を組む。

薫「何でこうなるの?」

薫は、何でこうなったか嘆く。

BPF隊員『では、決勝戦！よーい．．．始め!!』

決勝戦がスタートし、両者は奮闘する。

戦闘は、左に下がろうとしたら、右に下がる。

雅に両者とも譲らず長期戦が続く。

次郎「この野郎！いい加減に落ちろ．．．!!」

真冬「お前こそ落ちろ．．．!!」

BPF隊員『戦闘開始からもう2時間は立ちました！．．．両者とも相変わらず譲ら

ず、戦闘は長引きそうです!』

戦闘から2時間は立っていた。

次郎、真冬、両者は更に奮闘する。

その状況を薫達は見ていた。

明乃「あのサングラスのお兄ちゃん凄いいね!．．．ブルーマーメイドの人と互角にやっ
てる。」

薫「そ、そうね．．．」

出来れば勝ち負けなど如何でも良い、このまま勝負が着かなければ良いと薫は思っ
た。

もうあれから更に2時間が経過した。

両者とも既に体力が限界に達し、腕がどちらかに落ちかけていた。

次郎「ま、負ける訳にわいかね……!!」

真冬「か、勝つのは、あたしだ……!!」

苦し紛れに最後の力を振り絞る。

戦闘開始から4時間、ついに勝敗が決まるのかと思いきや

『わあ!?!』

ドーン!!

突然、台が崩れ、両者は、その場に倒れる。

如何やら勝負に使っていた台が古かった事と余りに長期戦で両者の力に持たなかった事で倒れた。

当然勝負も

BPF隊員『こ、これは……両者とも手を放した為、この勝負、引き分けです!!』

台が崩れた瞬間に両者は、手を放した為、引き分けになり、結局、双方の決着は、着かなかった。

腕相撲大会が終わり、薫達は、力尽きた次郎と真冬を本部席まで連れ帰った。

腕相撲で体力を使い果たしてしまい手足が動けなくなっていた。

薫「ふう……全く、世話が焼けるんだから、2人共!!」

真霜「そうよ！・・・薫と私がいたから良かったもの・・・あまり人に迷惑を掛け過ぎなんだから!!」

いつの間にか、真霜も本部席にいた。

実はあの後、勝負が引き分けだった為、一般客が罵声を浴びせ始め、司会役が如何すれば良いか、困ってしまい、仕方なく、薫がステージに上がり、司会役を補佐し、それに乗じて、真霜が応援として駆けつけてきた。

2人の対応で何とかその場を収めた。

真冬「御免よ、真霜姉！」

流石の真冬も姉の真霜には、頭が上がらず本部席の後ろで正座をする。

薫「次郎君も反省しなさい!!」

次郎「ご、御免よ薫!!」

次郎も真冬と共に正座をする。

明乃「あの、薫お姉ちゃん!!・・・私は、もうこれで・・・」

薫「あれ、もう帰るの？」

明乃「はい!・・・今日は、一緒に回ってくれてありがとうございます!!」

薫「此方こそ、私の我儘に付き合ってくれてありがとね!・・・横須賀女子海洋学校・・・受かると良いわね!」

明乃「はい！」

明乃は、帰っていった。

何時かブルーマーメイドになる為、そして、幼馴染のもえかや薫との再会を果たすべく、今日の事を頭に刻みながら横須賀女子海洋学校の受験に挑むのであった。

真霜「あの子は？」

薫「ああ、あの子は……未来のブルーマーメイドですよ！」

真霜「未来のブルーマーメイドね……」

明乃に手を振りながら、見送っている

ましろ「ま、真霜姉さん……」

もう一人のブルーマーメイドを目指しているましろがへつとへつとになって、戻ってきた。

薫「あつ、ましろちゃん!？」

真霜「ま、ましろ!?!……やだ……如何したのよ……そのかつこ!?!」

真霜は、ましろの体育着を見て、堆笑う。

ましろ「実は、その……これは……真冬姉さんが……」

ましろは、何故体操着を着ているか理由を言う。

真霜「真冬!……これは、如何ゆう事かしら?」

真冬に着せられた事を聞き、真霜は、怒りを露に真冬を睨む。

真冬「こ、これはその……特別にブルーマーメイドとしての経験を積ませようと思つて……スケジュールの調整役を……」

それを聞いた真霜の怒りが頂点に達した。

真霜「貴方また、ましろをだしに使つたわね!!」

真冬「ひい……!!」

ましろをだしに使つた事が真霜にバレってしまった、真冬は、キツイ説教を受ける事になった。

ついでに次郎も

次郎「何で俺まで……」

こうして、ブルーマーメイドの一大イベント、ブルーマーメイドフェスタは終わりを告げた。

第21章 Gフォース危機一髪！ 前編

9月5日

ブルーマーメイドフェスタが終わり、季節は、もう秋である。

国土交通省、国土保全委員会

この日、国土保全委員会では、深町国交相及びブルーマーメイドの真霜やホワイトドルフィンの邦夫、その他の幹部達が揃って、来年度の予算会議を開いていた。

会議は、どちらとも予算を譲らず意見は別れ、会議は難航した。

真霜は、今回の会議で航空機の開発と量産を幹部達に認めさせるべく挑んだ。

だが、幹部達は、オマハ号の遭難事件では、あれ程の活躍を見せた航空機には興味を示さなかった。

更に邦夫から「そんな補助見たいな玩具に予算を回す事は、金をゴミ箱に放り投げるのと同じ」だと言われ、開発と量産は、またしても先送りされ、結果は敗北であった。

敗北の結果に真霜は、腹が立ってならなかった。

それを見た邦夫は、嘲笑っていた。

国土交通省、大臣室

会議終了後、真霜は、深町に呼ばれ大臣室を訪れていた。

真霜「それは、如何いう事ですか!？」

真霜は、深町からとんでもない報を聞く。

深町「聞いた通りだ!・・・アメリカのキング大統領が我が総理にGフォースの白鳳などの最新技術を渡せと勧告してきた。」

何とアメリカの第45代大統領であるジョージ・キングが日本の第98代内閣総理大臣である田沼忠義にGフォースが所有する白鳳などの最新技術を渡せと勧告してきたのだ。

真霜「如何して、そんな事に?」

真霜は、何故そんな事になったのか理由を問う。

深町「如何やら・・・この前のオマハの救助をした時に向こうの諜報部員に見られたらしい・・・その情報を知ったキング大統領が我が総理に彼らの技術を渡せと言って来て、拒否すれば、断固たる処置に出ると脅された!!」

オマハの救助作戦の時、偶々乗り込んでいたアメリカの諜報部員が一部始終を目撃していた。

その情報は、キングの耳にも入り、CIAを使って、情報収集を行い。

Gフォースの存在や彼らの未知の技術を知った。

キングは、田沼にGフォースの白鳳や航空機などの最新技術を渡せと言ってきたのだ。

田沼もGフォースの事は、深町から聞いて知っており、拒否すれば国交や貿易などに制裁を加えると脅して来たのだ。

真霜「総理は、何と?」

真霜は、深町に田沼は、何と返答したか問う。

深町「まだ、返事はしていないが、当然、渡すだろう。」

深町は、田沼がまだ、返事はしていないが、既にGフォースの白鳳や航空機などの最新技術を渡す事を決めていると真霜に告げる。

真霜「しかし、そんな事したら、彼らが黙ってはいないでしょ!!」

深町「無論だ! : : : 山本准将達は、自分達の技術が悪用されるのを一番恐れている : : : その為、何をするか分からない!」

確かにこれは、既に龍之介達と交わした技術交換の決まりに違反する行為だ。

だが、この事は、まだ、龍之介達は知らないが、何れ耳に入るだろう。

そうなれば何をするか、分からないだろう。

最悪の場合、彼らが敵になるかもしれない危険性がある。

航空機や光学兵器を持つ彼らと戦って勝てる見込みは薄い。

その事は、真霜や深町も重々承知している。しかし、アメリカの要求にも逆らえない。

如何するか、判断が重く押し掛かっていた。

深町「取り合えず総理の説得は、私が何とかする・・・君は、彼らがバカな事をしない様に抑えてくれないか？」

真霜「分かりました。」

真霜は、龍之介達を抑え様と大臣室を出るが

国土交通省、廊下

邦夫「深町国交相と何を話していたんだ？」

出た時に邦夫が待ち構えていた。

真霜「別に・・・貴方には、関係ないわ!!」

真霜はいつも通り、振り払って、その場を去ろうとするが

邦夫「どうせ奴らの技術の事だろ！」

それを聞いた途端、真霜の足が止まる。

真霜「如何してそれを？」

邦夫が何故それを知っているのか問う。

邦夫「おいおい！・・・俺は、政界にも顔が利く人間だ・・・そんな情報ぐらいは耳

に入る。」

実は、邦夫の父親は、衆議院の議員で、息子である本人も政界に顔が利いている。だから、その情報ぐらいいは耳に入っていた。

真霜「……」

邦夫「何なら、俺が助けても良いんだぜ！」

邦夫は、真霜に救いの手を差し伸べるが

真霜「お断りよ！ 貴方の助けなんていらぬわ!!」

それに対して、真霜は、助けは要らないと断る。

助けを乞って、その条件として、許婚に戻れと言うのだろうと邦夫の魂胆が分かっていたからだ。

邦夫「相変わらず冷たいな！……だが、そんな事言っていられるかな？」

真霜（確かに……そんな事は言っていられない……でも、この男には、頼りたくない……如何すれば良いの？）

確かに邦夫の言う通り、そんな事は言っていられない。

かと言って、邦夫には頼りたくない。

でもこのままじゃ、龍之介達が危ない。

如何すれば良いのか、真霜は悩む。

小笠原沖

一方、龍之介達Gフォース西部方面艦隊は、小笠原沖で哨戒と訓練を行っていた。

上空

なのは「計器も異常ないし・・・今日も快調ね！」

小笠原上空をなのは機が飛んでいた。

なのは「此方なのは！・・・現在、時速マツハーで順調に飛行中！・・・計器その他、異常なし！」

実『了解！・・・そのまま、後一回往復してから帰還してください!!』

なのは「了解！・・・よし、エンジン全開!!」

なのは、速度をマツハー3に上げる。

フェイト「なのは！・・・整備したばかりなんだから、あんまりスピードを上げると危ないよ!!」

後方からフェイト機が速度を上げてなのは機を追いかけていた。

なのは「大丈夫だよ！・・・班長が徹夜で整備した機だよ！・・・そう簡単に壊れないよ・・・」

フェイト「それは、分かってるんだけど・・・」

なのは「もう、心配症だな、フェイトちゃんは？」

フエイト「な、なのはだつて、いつも危ない事ばかり・・・」

なのは「私は、隊長だよ!・・・いかなる任務でもこなさないと行けないんだから!!」
フエイト「私だつて、隊長だけど・・・それ以上になのはの事が心配なんだから!!」

2人が無線で喧嘩をしていると

功『こら、2人共!・・・無線での私語は慎め!!』

『す、すいません。』

余りの無線での私語に功から怒られてしまった。

空母大鳳、艦橋

薫「准将!・・・なのは機及びフエイト機は、予定通り順調に飛行中!・・・機体及

び計器類には、異常がないとの事です。」

龍之介「よろしい!・・・事故やこれと言った事は特に起きていないな・・・」

薫「はい!・・・今のところ応援要請などは出ていません。」

龍之介「平和だな・・・事故や海賊の襲撃もない。」

薫「そうですね!でも油断は出来ないんじゃないの兄さん!」

龍之介「こら、任務中だぞ!・・・むやみに兄さんと呼ぶな薫!」

薫「何よ!自分だつて、むやみに言ってるじゃないの!!」

龍之介「俺は、上官だから、良いんだ!」

薫「そんな関係ないでしょう!!」

艦橋でも任務とは、全く関係ない事で喧嘩をする2人、だがそれを止める者がいた。はやて「はい、はい、2人ともお楽しみのところ悪いんですが、そろそろ任務に戻りませんか?」

『……はい』

2人は、顔を真っ赤にして戻る。

数時間後、なのは機とフェイト機が空母大鳳に無事に着艦する。

白鳳、艦橋

その光景は、随伴の白鳳の艦橋でも

次郎「良いね!……雅に艦載機が着艦するのは、光景な眺めだな!」

三郎「そうですね!……私には、いつもの同じ光景にしか思いませんけど……」

次郎「何で副長は、こう男のロマンを壊すんだ!」

三郎「そう言うキャラですから……」

次郎「それジョクか?……意味分からねえよ!」

その後、訓練と哨戒を終えたGフォース西部方面艦隊は、横須賀へと帰投する。

9月6日

横須賀ブルーマーメイド庁舎

横須賀に帰投した龍之介は、突然、真霜に呼ばれ、横須賀のブルーマーメイド庁舎を訪れていた。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

真霜「どうぞ!」

龍之介「失礼する!」

横須賀のブルーマーメイド庁舎を訪れた龍之介は、そのまま真霜の執務室に入る。

龍之介「急に呼び出して、何だ!?!」

龍之介は、突然の呼び出しの理由を問う。

真霜「いえ別に・・・唯、貴方達の任務に支障がないか、聞こうと思つて!」

真霜は、例の件を龍之介には、隠しておこうと思つたが

龍之介「そんなの報告書を見れば分かることだろ?・・・態々呼ばなくても・・・」

真霜「でも、貴方の意見も直接聞きたいの!」

龍之介「ん・・・宗谷監督官!・・・良い加減、誤魔化すのを止めろ!」

真霜「私は、別に誤魔化してはいないわ!」

龍之介「俺を見くびるなよ!・・・その顔で誤魔化していないと言い切れるのか!?!」

流石に龍之介には、真霜の考えはお見通しだった。

真霜「ん・・・分かったわ・・・貴方に隠しても無駄のようね!」

真霜は、隠すのを止め

龍之介「何が合ったんだ？」

真霜「実は・・・」

龍之介に全てを打ち明けた。

龍之介「そうか！・・・そう言う事になっていたのか!?・・・いづれは、来るとは分かっていたが・・・」

真霜から事情を聞いて、龍之介もこんな事態が来る事は分かっていた。

龍之介「で、お前は如何するつもりだ？」

龍之介は、真霜の意見を問う。

真霜「私は、反対よ！あの技術を渡すのは！」

真霜も今回の不可解な要求には、反対していた。

龍之介「ふくん・・・口では、そう言いながら・・・本心では、俺達をアメリカに売りたくてウズウズしているんじゃないのか？」

だが、龍之介は、真霜を疑う。

真霜「違うわ!・・・私は、決して貴方達を見捨てる様な事はしない!!・・・どんな事をしてでも貴方達を守って見せる!!」

龍之介に嘘をついていると言われ、真霜は、怒りながら、反対してる事や守る事を本

心だつと訴える。

龍之介「じよ、冗談だよ!・・・本気かどうか試ただけだ。」

龍之介もさっきのは、冗談で言った様だ。

真霜「もう・・・変な事言わないでよ!」

真霜は、不機嫌そうに答える。

龍之介「さうて、如何するか?」

真霜「今は、深町国交相が総理を説得しているから、大丈夫だと思うけど・・・」

真霜は、深町が田沼を説得していると龍之介に言うが、成功するかどうかは、分からない。

なんせ日本の総理は、アメリカからお金を支援して貰っている為、そう簡単には、考えを変えられないだろう。

龍之介「それだけじゃ不足だろう?」

龍之介もその事は分かっていた。

真霜「じゃ如何すれば良いの?」

ならば如何するか

龍之介「ん・・・なら、俺を総理に会わせてくれ!」

真霜「えっ!?!」

何と龍之介は、真霜に田沼と面会させろと言ってきた。

真霜「貴方！何を言ってるのか、分かっているの？」

龍之介「勿論分かっている！」

真霜「貴方見たいな、いち指揮官がそう簡単に総理に面会できる訳がないでしょう!!」
確かに田沼見たいな上級官僚にGフォースのいち指揮官である龍之介が面会できる訳が無い。

龍之介「だからこそ、お前に頼んでいるんだ宗谷監督官!・・・お前が深町国交相を通して、総理に面会を頼むんだ!!」

Gフォースのいち指揮官が面会できないのは、龍之介も分かっている。

だからこそ龍之介は、国土交通大臣であり、総理と面会できる深町に橋渡しをするよ
う真霜に頼んだ。

真霜「そんなの無理よ！」

真霜は、無理だと言うが

龍之介「それをやるんだ!!・・・もしこの技術がアメリカの手に渡れば、この世界は、俺達の世界と同じ戦争の渦に巻き込まれてしまう!!・・・そうなれば、日本は、真つ先にゴジラの脅威を受けるんだぞ!!・・・そうなつてからでは、遅いんだ・・・頼む、宗谷監督官!!」

それでも龍之介は諦めず、真霜に必死に頼む。

真霜「ん・・・分かった・・・無理かもしれないけど何とかやって見るわ。」

龍之介の必死の頼みに真霜も折れ、総理と面会できるよう深町にお願いする事を龍之介に約束した。

龍之介「ありがとう宗谷監督官！」

画して、龍之介と田沼の面会が出来るように、真霜の裏工作が始まった。

横須賀基地

空母大鳳、会議室

横須賀のブルーマーメイド庁舎から戻った龍之介は、例の件を薫や他の幹部達に説明する。

次郎「如何いう事ですか？」

龍之介「聞いての通りだ！・・・日本政府が俺達が持つ白鳳や航空機などの技術をアメリカに渡すつもりだ！」

美由紀「やつぱり、そうなると思ったわ!!・・・あの宗谷監督官が其処まで守れるとは、思えなかつたんですもの！」

例の件を聞いた美由紀は、真霜が守れるとは、最初から思っていなかつた様だ。

薫「何でそんな事を言うんですか!!・・・宗谷監督官は、本当に私達を守ろうと必死

で・・・」

それに対して、薫は、何でそんな事を言うんですかと美由紀に反論する。

美由紀「情が移し過ぎよ山本中佐！」

だが、美由紀は、真霜に情を移し過ぎだと逆に薫に反論する。

薫「私は、別に常が移した訳じゃありません!!・・・唯そう簡単に人を見ないでほしいと言ってるんです!!」

薫も負けずに反論するが

美由紀「中佐!・・・貴方は、どっちの人間なの?・・・ブルーマーメイド、それともGフォース?」

薫「それは・・・」

美由紀の言葉に薫は答えられなかった。

美由紀「答えられないのならGフォースにいる資格はないわ!!・・・今直ぐ辞めたら!・・・貴方見たいな人は?」

美由紀は、答えられない薫にGフォースにいる資格はないと告げる。

薫「はっ・・・!?!」

資格がないと言われ、薫は驚愕しながら落ち込む。

次郎「そんな言い方は無いんじゃないのか、権藤中佐!!」

それを見た次郎は、薫を庇うかの様に美由紀に反論する。

美由紀「何か、私の言い方に不服の様ね小沢中佐？」

次郎「ああ不服だね!・・・確かに薫は、優柔不断で直ぐには答えられない事もあるけど、それ以外にでも、がんばっているんだぞ、こいつは!!」

今まで薫は、准将が困ってる時に艦長として支えている。

それだけじゃない薫がいたからこそ、はやてやなのは達ががんばれるのだからしかし

美由紀「そんなの何の意味もないわ!!」

次郎「何だと、この野郎!!」

美由紀の余りの無礼に、遂に次郎が切れ、美由紀に殴り掛かってきた。

薫「止めて次郎君!!」

それを薫とはやてが抑える。

次郎「離せ!!・・・この野郎には、1発分殴らない時が済まねえ・・・離せ!!」

薫「私の為に其処までしなくて良いから!!お願い止めて!!」

龍之介「止めろ!!」

2人の争いを龍之介は止める。

龍之介「話を最後まで聞け、馬鹿共!!」

2人は、争いを止めて、龍之介に注目する。

龍之介「今これを打開する為に、宗谷監督官が深町国交相を通して、総理と会談できるように取り次いでいるところだ・・・その会談で俺は、何とか渡すのを辞めるよう説得するつもりだ!!」

龍之介は、真霜に頼んで田沼と会談できる様に取り計らっていると告げる。

『えっ!?!』

それを聞いた薫と次郎、美由紀は驚愕する。

はやて「そないな事をして大丈夫なんでつか?・・・第一にそれで上手く行くんでつか?」

はやての言う通り、田沼と会談しても上手く行くかどうかは分からない。

龍之介「確かに、駄目かもしれない、だがやらないよりはましだろ!!」

美由紀「それで勝敗の見込みは、有るんですか?」

美由紀は、薫に見せた同じ目で龍之介に勝敗の見込みは有るのかと問う。

龍之介「正直のところ・・・無い!だが、成るより成るさ!!」

龍之介は、勝敗の見込みはないが、成るより成るさと告げる。

美由紀「ん・・・」

龍之介の言葉に美由紀は言い返せなかった。

その後、状況が回復するまで、隊員達は、停泊中の艦で過ごす事になった。もし、何かあった時に素早く行動できる為である。

龍之介も薫も状況が回復するまで宗谷家に帰宅できない為、艦に残る事になった。

空母大鳳、艦橋デツキ

薫「何故、私は答えられなかったんだろう・・・」

薫は、美由紀から言われた時に、何故、直ぐに自分は、Gフォースですと言えなかったのか、自分に腹がたつたってならなかった。

そんな時

次郎「薫!」

薫「次郎君!」

次郎がやって来た。

次郎「如何したんだ、こんな夜中に?」

薫「んん、別に!・・・次郎君は?」

次郎「俺は別に・・・唯、外の空気を吸いたかっただけで・・・」

本当は、嘘で美由紀に言われた薫が落ち込んでいないか、確かめに来た。

如何やら確かめてきて正解だった。

薫「ねえ、次郎君!」

次郎「何だ薫？」

薫「私は、やっぱりGフォースとして失格なのかな？」

次郎「はあく？お前、何言ってるんだよ!？」

薫「だって私は、あの時、適切な判断ができなかった……やっぱり私は、兄さん見たいな人間にはなれないかも……」

次郎「ん……」

如何やら、薫は、自信を失ってる様だ。

こんな時は、特效薬が必要だ。

次郎「おい、薫！」

薫「イタ!？」

次郎は、薫のおでこにデコピンを一撃加えた。

薫「なっ、何するのよ!？」

おでこにデコピンをくらい、薫は困惑する。

次郎「バクカ!……お前みたいな奴が、そう簡単に准将にはなれねよ!……第一器が全然違うし!」

次郎に馬鹿にされる

薫「如何いう意味よそれ？」

次郎「言葉道理だよ! : : 准将と違つて、お前は運が良いし、何より頼りになる! : : : それにあぶなつかし所も少しあるしな。 : : :」

次郎本人は、馬鹿にしているつもりで慰めているんだろう。

薫「次郎君! : : : 私を慰めているの?」

薫にも次郎が慰めている事が分かり、表情を変える。

次郎「上手く言えないけど : : : 薫は、他の事で頼りになつていると思うぞ : : : マジで!」

薫「ありがとう! : : : 私頑張つて見る!」

次郎の言葉に元気を取り戻した薫は、部屋へと戻つていた。

次郎「はあ : : : 全く! : : : ああ言うところは、昔から代わつてねんだから : : : まあ、俺も昔は副長として、艦長だつたあいつといつも対立してたから言えねえけど : : :」
次郎も学生時代は、薫と同じ駆逐艦そよかぜで副長として、配属された経歴がある。その為、薫については、いつも対立しながら手を焼いている。

例えば、救助活動の時、薫が先ばして、勝手な事をする為、副長である次郎が「俺が行くと言つて」自分が出る。

雅に対立しながら支えている様なものだ。

だが、それで薫にいつも心配を掛けている。

次郎「薫も、もう大丈夫だし、准将の方も何とかなるだろう．．．ん!？」
次郎が考えていると突然薫が戻ってきて

薫「ありがとう次郎君!．．．チュー!」

次郎に迫り、次郎の唇を奪う。

次郎「えっ．．．」

薫「おやすみ!!」

薫は、元気に部屋に戻る。

次郎「ふひ．．．」

突然、薫にキスされて、デレてしまう次郎。

空母大鳳、炊飯所兼食堂室

ヴィヴィオ「ママ!!」

なのはとフェイト、はやてが夕食を取っていると、寮に居る筈のヴィヴィオが目の前にいた。

なのは「ヴィヴィオ!？」

なのはとフェイト、はやては、ヴィヴィオに近づき

はやて「何で此処に？」

愛奈「御免なさい、なのはさん、フェイトさん!!」

ヴィヴィオの後ろには、寮母の愛奈さんや平賀と福内までがいた。

なのは「愛奈さん、それに平賀さんと福内さんまで……」

愛奈「この子が如何してもママに会いたいて、言うんで……」

如何やら、なのは達が帰れないと寮母の愛奈さんが電話を貰った時、それを聞いたヴィヴィオが駄々をこねて、態々、こんな所まで連れて来てくれた様だ。

なのは「もう駄目だよヴィヴィオ!! 愛奈さんに我ままを言っちゃ!」

ヴィヴィオ「御免なさい。」

我まま言った事を謝るヴィヴィオ。

フェイト「仕方がないよ! ……なのはは、ブルーマーメイドフェスタ―以来、出撃する事が多くなってるし、それに今日は、帰れると思つたら、急に帰れなくなつてしまったんだから……」

はやて「ヴィヴィオが我ままを言うのは、無理ないよ!」

なのは「あつそつか、御免ねヴィヴィオ!! 帰れなくて、でも会いに来てくれて、嬉し

いよ!」

なのはは、嬉しそうにヴィヴィオを抱きしめる。

何だかんだ言って、なのはもヴィヴィオに会いたかったのだ。

はやて「で、平賀さんと福内さんは、何で此処に?」

平賀「私達は、宗谷監督官の命令で貴方達の監視を命じられました。」

一方の平賀と福内は、真霜の命令で龍之介達がバカな事をしてないか監視に来ていて、その途中で愛奈さんと会った様だ。

フェイト「それは、ご苦労様です。」

なのは「そうだヴィヴィオ、夕食まだでしょ、食べる？」

ヴィヴィオ「うん！」

なのは「平賀さん達も如何です？」

平賀「では、お言葉に甘えて・・・」

はやて「と言つても・・・今日は、当番が料理長ですから・・・出されるのは、中華

料理だけですさかい、いた!？」

いきなりおたまで叩かれる。

俊秋「そげん言うなら食うな!このちびダヌキめ！」

おたまで叩いたのは、主計科長兼料理長の俊秋であった。

はやて「あつ、料理長!？」

俊秋「全く!・・・俺が中華料理しか作れねから文句を言う・・・あんたらも飯を食いたいんなら、文句を言うんじゃないやねえぞ!!」

『は、は、は!』

俊秋に睨まれ平賀と福内は、生きてる心地がしなくなる。

愛奈「あの、よろしければ私が作りましょうか？」

愛奈さんが代わりに料理を作ると言う。

俊秋「何、あんたが？」

はやて「それ良いかも!・・・こう料理長の時は、いつも中華料理だから、愛奈さんが作ってくれば、皆喜び・・・」

俊秋「何だ!・・・俺の飯より、この女の飯が食いたいだ?・・・お前、俺に喧嘩売る気か!!」

愛奈「べ、別に喧嘩を売ってるんでは・・・」

そんな時

G F 隊員『俺も食いたい』

G F 隊員『私も』

食堂室から愛奈さんの料理が食べたいとG F 隊員達の声が聞こえてきた。

俊秋「お前から俺を裏切るのか？」

G F 隊員達の声に怒りを露にする俊秋。

ギャオ、ギャオ

G F 隊員達と俊秋は、既に戦闘モードに移行していた。

美由紀「何をやってるの、貴方達!!」
それを止めたのは、美由紀だった。

俊秋「ご、権藤中佐、い、いられたのですか?」

機嫌が悪そうな美由紀を見て、桐野とGF隊員達はビビてしまう。

美由紀「全く我々の技術が悪用されるといふ瀬戸際なのに、貴方達は・・・」

俊秋「も、もうし訳ありません!!」

美由紀「貴方達もこんな時に監視とは、ご苦勞な事ね!」

『・・・・・・・・』

機嫌が悪い美由紀に平賀と福内は何も言えなかった。

平賀「随分機嫌が悪いですね・・・権藤中佐は?」

フェイト「仕方ないですよ!・・・今回の件で裏切られたんで、気が立ってるんで

す。・・・さつきは、薫先輩や次郎君ともやりやりましたし・・・」

平賀「そうなんですか?」

福内「取り合えず如何します。」

俊秋「仕方ない、あなたに半分手伝って貰うぞ!!」

愛奈「良いんですか?」

俊秋「これ以上、中佐の機嫌を損ねたくないからな・・・」

結局、愛奈さんが俊秋の代わりに作る事になり、GF隊員達は、喜びながら食う。

それを見た俊秋は、その後、愛奈さんをスカウトしたが寮の仕事やヴィヴィオの面倒を見る仕事もある為、あっさり断られた。

空母大鳳、会議室

慶介「そうですね・・・私がない間にそんな事に・・・」

海上安全整備局の設備研究課から戻ってきた慶介は、龍之介から事態を聞き唖然とする。

龍之介「すまない矢野さん!・・・俺の考えが甘かったばかりに貴方に不可解な思いをさせる事に・・・」

この事態で一番危ないのがGフォースの技術部にいた慶介でもあり、彼にとっては、辛い目に合わせてしまう事に龍之介は深く頭を下げる。

慶介「頭を上げてください!!・・・こうなる事は分かっていました・・・だが、私は、悪魔にはならない!!・・・悪魔になるぐらいなら死んだ方がましだ!!」

功「待つてください矢野主任!!・・・まだ望みは有ります!」

慶介「それは、如何いう事ですか?」

功は、慶介に龍之介が直接総理を説得すると説明した。

慶介「それで上手く行けるのですか?・・・相手は、この国の最高指導者何ですよ!」

龍之介「本当のところ上手く行くかは、分からない……だが、誰かがやらないと……この世界の滅びの結末を作ってしまう……そうなつては、俺達は、何れこの世界から殺される運命になるかも知れない!!」

龍之介が言う様に、この世界では、龍之介達は、単なるイレギュラーにしかすぎない。もしこの世界の方針に反する事をすれば、この世界から抹殺されてしまう。

龍之介「だから、この事は、俺に任せてくれないか矢野主任?」

慶介「ん……分かりました……私は、GF隊員ではありませんが……この世界では、貴方達と共に行動している身!……何所へなりとも貴方に従いましょう!!」
こうして、Gフォースの命運は、龍之介に委ねられる事になった。

第22章 Gフォース危機一髪！ 後編

9月9日

首相官邸、廊下

龍之介「遂に此処まで来たか！」

真霜「ええ！」

龍之介と真霜は、首相官邸の廊下を歩いていた。

真霜「私に感謝しなさい!!・・・あの後、総理に面会できる様・・・深町国交相を説得するのにどれだけ大変だったか！」

真霜は、龍之介に頼まれた後、龍之介が田沼と面会できる様に深町に取り次いだ。

深町は反対したが、真霜は屈せず説得を続け、深町は、それに折れ、田沼と面会できる様、取り計らう事を真霜に約束した。

それから数日後、深町から田沼が自ら龍之介に面会したいと言って来て、真霜は、龍之介を伴い、田沼がいる首相官邸にやって来たのだ。

龍之介「宗谷監督官には感謝している。」

龍之介は、真霜に感謝する。

真霜「で！・・・総理に会って、何か良い策は有るの？」

真霜は、龍之介に田沼を説得できる策が有るのか問う。

龍之介「特にない！・・・だが、何とかなるさ!!」

それに対して、龍之介は、何とかなるさと答える。

真霜「何それ!?・・・そんなので大丈夫なのかしら・・・」

それを聞いた真霜は、呆れながら心配する。

龍之介「ところで、宗谷監督官は、何で一緒に来るんだ？」

龍之介は、何故、真霜と一緒に来るのか問う。

真霜「私は、貴方が総理に無礼を働かない様に監視しないとイケないから！」

真霜は、龍之介が田沼に何かしない様に監視する為について来た様だ。

龍之介「そいつは、ご苦労さま・・・」

真霜「その言い方、ムカつくわね！」

真霜は、龍之介の言い方にムカつきながら、龍之介と共に田沼のもとへと向かう。

横須賀基地

空母大鳳、会議室

一方、龍之介と真霜が首相官邸を訪れている頃、空母大鳳の会議室では、薫達が如何なるか、行く末を見守っていた。

薫「もうにい、じゃなくて准将と宗谷監督官は、今頃もう着いているだろうか？」
コーヒーを継ぎながら、薫は、考えていた。

福内「ええ、大体そうだと思います。」

薫が入れたコーヒーを飲みながら福内は答える。

Gフォースの命運が決まろうとしているのに薫や功は落ち着いていた。

しかし落ち着かない奴もいた。

次郎「ん・・・」

次郎である。

会談の結果が気になって、しようがなく室内をウロウロしていた。

功「おい小沢!・・・そうウロウロするな!・・・まるで動物園の猿だぞ!!」

次郎「だって、如何なるか気になって、しようがないんだよ!!」

功「別に如何なろうと我々は、准将に着いて行くだけで、あまり変わりない!」

例え状況が如何なろうと隊員達は、龍之介に忠実である事に変わりはない。

次郎「そうだよな!」

功の言葉によく落ち着きを取り戻したが

功「だが、一番気掛かりなのが・・・」

功は、もし会談が決裂すれば一番危うくなるのが慶介の身柄である。

慶介「分かっています。」

次郎「すいませんね矢野主任！……准将の命令で！……主任がバカな事をしない様に見張るよう命令されたので……」

もし説得が上手くいかなければ、田沼は、慶介を必ず引き渡せと要求してくるだろう。それは、慶介も分かっていた。

もし、そうなれば彼は、必ず自殺するだろう。

そうならない様に龍之介が次郎と功に慶介を見張るよう命じた。

平賀「あの！……何でそんなに技術を渡すのを拒むのですか？……アメリカは友好国ですよ！……そう簡単に悪用する事はないと思うんですけど……」

慶介「甘いな平賀さん！……人間とは、恐ろしい生き物だ……自分の良くの為に平気で悪魔にもなる……それが友人でもな……」

慶介の言う通り、人間は、欲深くて、恐ろしい生き物。
自分の欲の為に平気で人を裏切りやすい。

功「取り合えず何としても成功して貰わないと……もしアメリカに渡せば他の国も欲しいと要求するだろう……そうなれば、こつちの世界と同じ東西冷戦が起きるかもしれない！」

功は、向こうの世界で起きた44年間の東西冷戦が起きるかもしれないと恐れる。

次郎「冷戦か！・・・15年前のゴジラ戦だけは、避けたいな・・・」

薫「はっ!？」

バギーン

次郎の言葉を聞いて、ついコーヒカップを地面に落としてしまい、更に震えが止まらなくなってしまった。

薫「あ・・・」

震えている薫の側に平賀が心配そうに寄ってきた。

平賀「如何したんですか薫さん!? 顔色悪いですよ!」

薫「だ、大丈夫!」

次郎「あっ!?! 悪い薫!・・・この事は、言わない約束だったな・・・御免!」

薫「良いよ次郎君! 気にしてないから・・・私、ちよつと外に出ているから・・・」

次郎「薫・・・」

薫は、気分を落ち着かせる為、外に出っていた。

次郎も後を追う様に出ていった。

平賀「如何したんですか、薫さんは・・・」

功「無理もない・・・彼女にとつては、15年前のゴジラ襲撃は、思い出したくない出来事だから・・・」

15年前に起きた第2次ゴジラ戦は、薫にとっては、辛い記憶しかない。それは、幹部の皆も知っていた。

第2次ゴジラ戦の戦闘は、雅に最初のゴジラ戦以上の壮絶な戦いであった。核の恐怖

核が生み出した怪獣

人類は、その恐怖に怯えながらひたすら戦うしかなかった。

それがこの世界で再び起き様としている。

止めなければならない。

何としても

首相官邸、応接室

その頃、龍之介と真霜は、遂に田沼がいる応接室に入ろうとしていた。

コン、コン

真霜は、応接室のドアをノックする。

田沼「入れ！」

田沼が入室の許可を出し

真霜「失礼します!!・・・あっ!？」

龍之介「ん？」

真霜と龍之介は、応接室に入ると、応接室には、田沼の他に深町もいた事に驚く。

真霜「深町国交相!」

深町「やあ、宗谷監督官!!」

真霜「何故此処に？」

真霜は、深町が何故此処にいるのか問う。

田沼「深町国交相も君等の話を聞きたいそうだから、私が許可した。」

深町も龍之介と田沼の会談が如何なるか見たいので、田沼にお願いして、参加を認めさせた。

田沼「で、君が例の？」

田沼が龍之介に視線を向ける。

龍之介「初めまして総理!!・・・Gフォース西部方面艦隊の山本龍之介准将と申します。」

総理「あの艦隊を率いる指揮官がどんな人か、一度会って見たかったよ!・・・会えて光栄だよ山本准将!!・・・私が総理の田沼忠義だ!!」

龍之介と田沼は、お互いに自己紹介をする。

龍之介「恐れ入ります!・・・私もこの国の最高責任者に会えて、嬉しいです!!」

田沼「で、貴重な時間を削って、私に話とは、何だね山本准将？」

田沼は、早速、龍之介に今日訪ねた理由を問う。

龍之介「では、率直に申し上げます!!・・・総理!・・・貴方は、我々がブルーマーメイドに提供する技術をアメリカに黙って渡そうとしている・・・しかも、我々が禁じている技術までも渡そうとしている・・・違いますか？」

龍之介は、田沼に何故、白鳳や航空機などの技術が無断でアメリカに渡すのか問う。

田沼「君の言う通りだ!!・・・だが、我々は、アメリカには、逆らえない!!・・・もし、拒めば、当然制裁などの圧力を掛けてくるだろう・・・それだけじゃない、国交断絶もあり得る・・・そうなれば、長年の平和も無になるだろう・・・資源の大半を依存している我が国には、到底勝ち目がない！」

それに対して、田沼は、資源の大半をアメリカに依存している我が国に逆らう事は出来ないと答える。

田沼の言う通り、龍之介の世界と同じ日本の資源の殆んどは、輸入に頼っている。唯、違うのは、アメリカに勝った勝利国じゃない事である。

この世界では、世界大戦が無かった為、日本は、勝利国ではなく唯のアメリカの同盟国である。

従って、アメリカが渡せと要求したら、無条件で渡さなければならぬ。

渡さなければ制裁などの圧力を掛けてくる。

それだけじゃない、国交断絶もあり得る。

そうなれば長年の平和も無になるだろう。

そう思い仕方なく渡す事に同意してしまっただらう。

龍之介「だから、それよりも! . . . 我々の技術を大人しく渡してしまえば解決できる?」

田沼「その通りだ!! . . . それに向こうの大統領がそうしてくれるのなら . . . 今掛けている関税を下げる事や来年度にブルーマーメイド、ホワイトドルフィンに配備する最新鋭の戦闘艦を唯で譲ってくれるとまで約束しているのだ!」

何と、技術を渡す代わりに裏取引までしていた事を龍之介や真霜に暴露した。

更にブルーマーメイドとホワイトドルフィンに来年度、購入する筈だった最新鋭の艦を無償で提供すると言ってきた。

真霜「お待ち下さい総理!! . . . それではまるで! . . . 私達が、その欲しさに要求を呑んだと言う事ですか!」

関税を下げる事や来年度にブルーマーメイドとホワイトドルフィンに配備する最新鋭の戦闘艦を唯で譲ってくれる裏取引を聞いて真霜は激怒した。

田沼「その通りだよ宗谷一等監督官! . . . アメリカが我が国に掛けている関税は、通

常の50%も上がっている……このままでは、牛肉や鉄鉱石などの資源を他国からの輸入に頼らないといけなくなる……それよりも、技術を大人しく渡してしまう方が安いものだ……それにブルーマーメイド、ホワイトドルフィンに配備する最新鋭の戦闘艦は、コストが高い!……唯で譲るなら、君等にとつては、良い事だろうか?」

真霜「それでは私達は、唯の武器商人ではありませんか!!……私は、ブルーマーメイドとして、彼らや彼らの技術を手放す事はできません!!」

真霜も来年度にブルーマーメイドとホワイトドルフィンに配備する最新鋭の戦闘艦は、手が出る程、欲しかった。

だが、その代わりに龍之介達を売るなんて、そんな真似は、自分自身であるブルーマーメイドの理に反するおこないだ。

そんな事をすれば、母である真雪を失望させてしまう。

真雪だけじゃない宗谷家の名に傷が付く。

真霜は、断じて反対する。

田沼「では、君は、これを断れと言うのか?……この様な美味い話を……」

反対する真霜に田沼は、この話を断るのかと問う。

真霜「そ、それは……」

それに対して、真霜は、答えられなくなる。

田沼「山本准将!・・・如何か、この日本を救うと思つて、我々に協力してくれないか?・・・協力すれば、貴官達の身柄の安全は保証するし、総理として何でも与えるつもりだ!」

田沼は、龍之介達を何としても協力させ様とした。

協力すれば龍之介達の身柄は保証すると言うが

どうせ嘘だと言う事は、龍之介は分かつていた。

ならば選択は、一つのみ

龍之介「お断りだね!!」

龍之介は、あつさり和田沼の申し出を断る。

田沼「何だと!」

龍之介が断つた事により、田沼の顔色が変わる。

深町「何と!」

真霜「えっ!」

田沼の要求を蹴つた事に深町と真霜は驚く。

龍之介「総理!!・・・あなたは、国の為に協力しろと言つてるが・・・結局は、自分の利益の為にしか考えていない!!・・・その為に大勢の人が、罪のない人が死んでいく!!・・・あなたは、その事を考えた事があるのか!」

龍之介は、田沼が単に自分の利益を得る事しか考えていないと告げる。

確かにこの行為は、自分の利益の為に大勢の人が、罪のない人が死んでいく事になるのは明らかだ。

田沼「ふん！・・・そんな事を考える必要などないのだよ！・・・我々は、唯、利益を得る為に国に尽くしている・・・その為なら多少の犠牲は、やも得ない事だ!!」

それに対して、田沼は、そんな事を考える必要などない、利益を得る為に多少の犠牲は、やも得ない事だと龍之介に告げる。

唯、利益を得る為に多少の犠牲を払っても良いとは、何とも無責任な回答である。

龍之介「確かに多少の犠牲は、やも得ない!!・・・だが、俺達は、彼らの犠牲の上に成り立っている!!・・・だから、彼らの為に、より良い平和を作る為に今までゴジラと戦ってきた!!・・・俺だけじゃない、俺の部下もその為に命張って闘ってきた!!」

Gフォースは、ゴジラ襲来や平和の為に戦う為の創設された国連組織で戦争する為の組織ではない。

龍之介達は、配属以来その理想を守ってきた。

龍之介「改めて申し上げます・・・我々Gフォースは、協力を拒否します!!」

総理「ん・・・」

協力を拒否された事で田沼は、益々不機嫌になった。

龍之介「そして、これより・・・我々は、ブルーマーメイドから離脱する。」

何と龍之介は、ブルーマーメイドから離脱すると宣言した。

真霜「な、何ですって!？」

それを聞いた真霜は驚愕する。

龍之介「これ以上あんな達に迷惑は掛けられないだろ!!・・・離脱する事を許してくれ宗谷監督官!!」

龍之介自身、これ以上、真霜達に迷惑は掛けたくなかった。

田沼「待ちたまえ!!・・・君達は、ブルーマーメイドから離脱すると言うが・・・そうなれば君達は!・・・国も持たない唯の漂流者になってしまんだぞ!!・・・その後は、如何するつもりなのかね?」

確かにブルーマーメイドを離脱すれば、龍之介達は、一生海をさま迷う漂流者になってしまう。

そうなつては、補給もなく、唯死を待つだけ

龍之介「先の事は、俺にも分からん!・・・だが、例えばそれが・・・大変な道のりでも・・・何とか元の世界へ帰る術を見つけるだけだ!!」

例えば漂流しても元の世界へ帰るといふ希望を捨てない限り、二元の世界へ帰る術を探す。

雅に龍之介らしい考えだ。

龍之介「では総理！……貴重な時間を削って頂き、ありがとうございます……では！」

龍之介は、田沼に一礼をして、応接室を後にする。

真霜「待つて、山本准将!!」

真霜は、龍之介の後を追った。

田沼「食えぬ男だ！……高々、一門にもならない理想の為に己を犠牲にするとは……」

深町「それが正しいのかもしれませんが。」

田沼「何!?!」

深町「彼の言う通り！……我々は、唯自分の為だけしか考えていなかったかもしれませんが。」

田沼「如何したのかね、深町君？」

深町「総理！……何故気づかないのですか!!……昔の貴方は、理想に溢れていたのに……今の貴方は、唯の……」

田沼「黙れ!!君は、私に異議を唱えるのかね?」

深町「総理!!……私は、もう貴方には、つくづくウンザリしました!!……私は、国土交通大臣の職を辞します!!」

何と深町が国土交通大臣の職を辞すると言い始めた。

田沼「ふん!・・・辞職したからと言って、私の考えは変わらんぞ!!」

だが、田沼の考えは変わらない。

しかし、次の言葉が田沼の態度を変えた。

深町「良いんですか!・・・私は、貴方が密かに汚職をしている機密を握っていると知ったら如何しますか?」

田沼「何!?!」

深町「貴方が知らないうちに色々調べさせて貰いました・・・貴方は、総理就任以来、官察や企業から多額の裏金を貰っている様ですね・・・私がこれをマスコミに漏らしたら、貴方の政治生命も終わりですよ!・・・それだけじゃない!・・・犯罪者として刑事裁判に裁かれるでしょう・・・」

深町は、如何やら説得している間に田沼の内情を探っていたらしい

田沼「際確かなのか、深町君!・・・そんな事をすれば、君も道連れだぞ!!」

裏金の証拠をマスコミに漏らすと言う事は、深町の命も危なくなる。

最悪の場合殺されるかもしれない。

深町「昔の仲間を救うならば覚悟は出来ています!!」

龍之介達を救う為なら命も惜しまない覚悟だ。

今、田沼は、夫人の問題で野党に叩かれている。

その状況で裏金の証拠を突きつけられたら、田沼でも辞職を迫られるだろう。そうなれば刑事裁判も免れない。

田沼「くう・・・何が望みだ？」

深町の脅しに屈し、田沼は、深町に何が望みか問う。

深町「私の望みは、唯一つです!!」

深町は、田沼にある要求を付き付ける。

首相官邸、廊下

一方、真霜は、龍之介に追い付き

真霜「待ちなさい山本准将!!」

行くのを止める。

真霜「本気なの!ブルーマーメイドを離脱するなんて!」

龍之介「ああ、本気だ!!」

真霜「分かっているの!・・・そんな事をすれば!・・・私は、貴方達を捕まえなければならなくなるのよ!!」

真霜は、今までお世話になった龍之介や薫を捕まえたくない。

龍之介は嫌いだ、薫は、妹見たいに接して暮れていた。

何よりも三女のましろには、姉のように仲が良い。

龍之介「だが、他に方法はない！・・・もうこれ以上、無駄な戦いで血を流すのは御免だ。」

龍之介は、もうこれ以上、無駄な戦いで血を流すのは嫌だった。

真霜「准将・・・」

それを聞いた真霜は、龍之介の気持ちがよく分かった様な気がした。

龍之介「なあ、宗谷監督官？」

真霜「何？」

龍之介「最後の頼みを聞いてくれるか？」

龍之介は、最後に当たって、真霜にある頼み事をする。

それから東京から横須賀まで1日で帰り、真霜と別れて、龍之介は、空母大鳳に帰還した。

横須賀基地

空母大鳳、会議室

龍之介「と言う事になった・・・」

帰還した龍之介は、会議室で外に出ている薫以外の幹部に説得が駄目だった事を告げる。

功「そうですか・・・」

次郎「やっぱり、そうだったか！・・・大体政治家のやる事は分かっていたけど・・・雅か売国奴見たいな事をしていたとは驚きだ!」

説得が駄目だった事に功以下の殆んどが驚かなかつた。

やっぱり上手く行くとは、思わなかつた様だ。

美由紀「これから如何するんですか准将?」

美由紀がこれからの事を龍之介に聞く。

龍之介「分からない。」

『!?!』

龍之介の言葉に幹部達が息を飲めた。

龍之介「分からないが、取り合えず何とか成るだろう。」

龍之介は、さつき、田沼に言つた事を告げる。

功「貴方らしい答えですね!」

功は、龍之介の言葉に感心する。

龍之介「先ずは横須賀を出て!・・・それから見つからない様に姿を消す!・・・後の事は、それから考える。」

『はっ!』

龍之介「それから!・・・退艦したい者は、直ぐに退艦させておけ!・・・行きたくない者を無理して行かせたくないからな!・・・その事は、宗谷監督官に既に頼んでい
る。」

龍之介は、予め真霜に最後の頼みとして、退艦したGF隊員達の面倒をお願いすると頼んでいた。

功「はい!」

龍之介「では諸群!かいさ・・・」

会議は終了し、解散しようとした。

その時

薫「待つてください!准将!!」

不在していた薫が突然、会議室に入ってきた。

龍之介「何所に行つてたんだ艦長!?!こんな大事な時に・・・」

龍之介は、会議中に不在していた事を問い詰め様とした。

「山本准将!」

だが、薫の後ろには思わぬ人物が現れた。

龍之介「宗谷監督官!?!さつき別れて帰つたんじゃ?」

何と帰還の時、別れた筈の真霜が立っていた。

真霜「そうだったけど……状況に変化があったの！」

龍之介「何!？」

真霜の言葉に皆が注目する。

真霜「さつき、深町国交相から連絡があつて……准将!……如何やら、貴方達の技術を渡す事は駄目になつたそうよ!」

何と真霜から龍之介達が持つ技術をアメリカに渡す事が駄目になつた事を告げる。

龍之介「えっ!？」

次郎「マジか!？」

それを聞いた龍之介と次郎は驚愕する。

真霜「本当よ!……深町国交相の説得と貴方の言葉で総理がアメリカに渡すのを拒否したそうよ!」

薫「だからもう大丈夫よ!!」

功「ははあ……!!」

次郎「てつことは!……もう離脱しなくつて言いて事だよな?……やったあ!!……万歳!」

成功した事に次郎は、万歳三唱しようとしたが

美由紀「待ちなさい!!」

次郎「えっ!？」

美由紀が待ったを掛けた。

美由紀「罨かもしれないわね・・・」

次郎「罨?」

美由紀「我々を喜ばしと言つて、逆に先手を取ろうとしたりして・・・」

美由紀は、そう上手く行くのに疑問があつた為、罨だと思つた。

薫「何を言つてるんですか権藤中佐!!そんな事はありません!!」

それに対して薫は、そんな事はないと美由紀に言うが

美由紀「貴方は黙つてなさい!!」

薫「ん・・・」

美由紀は、薫の言葉を信用せず、薫は黙つてしまふ。

「心配しないで下さい・・・それは、私が保証します!」

だが、それを覆す者が現れた。

真霜「お母さん?」

何とそれは、真霜の母、宗谷真雪であつた。

龍之介「ま、真雪さん!?!如何して此処に?」

真雪「深町国交相から、宗谷監督官だけじゃ信用されないと言われて、赴いたの!」

如何やら、深町が真霜だけでは、説得は無理だと思い、一番の説得力が有る真雪を向かわせたのだ。

龍之介「如何やら本当に回避された様だな！・・・これでも疑うのか、権藤中佐？」

真雪も来て、龍之介は、まだ疑うのかと美由紀に問う。

美由紀「・・・いえ、失礼しました・・・私の勘違いだった様です。」

美由紀は、真雪を見て、本当だと分かり、頭を下げる。

次郎「やったぜ畜生!!・・・万歳!!万歳!!万歳!!」

やっと本当だと分かり、改めて万歳三唱する。

この後、色々する事はあるが、後の事は、功と美由紀に任せて龍之介と薫は、真霜と真雪と一緒に宗谷家に帰宅する事にした。

宗谷家

宗谷家の玄関に着いた途端

龍之介「くう!？」

薫「如何したの兄さん？」

龍之介は、目まいを起こす。

龍之介「疲れた・・・もう駄目・・・寝る・・・」

龍之介は、目まいを起こして、その場に寝ってしまった。

薫「ああ、兄さん!!こんな所で寝ないでください!!」

龍之介「ぐう……ぐう……」

薫と真霜が起こそうとしたが、完全に爆睡している為、起きなかった。

仕方なく薫が腕を勝井で部屋まで連れて行った。

当然、真霜と真雪も手伝い何とかベツトに寝かせた。

薫「もう……世話が焼けるんだから……」

真雪「仕方ないわ!……色々あつて疲れていたのよ!……無理もないわ!!」

真霜「お疲れさま……」

真霜は、クスリと笑つて、そう言う。

こうして、アメリカへの裏取引は完全に駄目になり、当然アメリカからの制裁があると思つたが、如何やら向こうも状況が変わり、何も制裁は無かつた。

これにより、龍之介達は、最悪な危機を脱したのである。

龍之介「ぐう……ぐう……」

安心して爆睡する龍之介、全く運が良いのか悪いのか

第23章 宗谷家での生活 3

9月20日

龍之介達が最悪の危機を脱してから、数日後。

宗谷家、リビング

真霜「……」

真霜は、久々の休みで、コーヒーを飲みながら寛いでいた。

だが、久々の休みを貰っている奴がもう1人あった。

龍之介「ふあゝ」

龍之介であった。

龍之介「ふあゝ、おはよう……」

寝間着姿で頭ボサボサながら、大あくびをする龍之介は、リビングでコーヒーを飲む真霜に挨拶する。

真霜「何寝ぼけてるの？もうお昼よ！」

真霜に言われ、時計を見ると

もう昼の12時である事に気づく。

如何やら相当寝ていた様だ。

真霜「全く！寝ぼけて時間も忘れてしまったの？」

真霜は、寝ぼけた龍之介に呆れる。

実は、真霜もさつき起きたばかりで、人の事は言えない。

龍之介「五月蠅いな！……あれから色々あったから、こっちは疲れてるんだよ！」

真霜「情けないわね……こっちは、折角の最新鋭艦の配備をファイにしてまで、貴方達を助けたんだから！……その責任は取って貰わないと！」

真霜は、来年に配備される筈だった最新鋭艦の話ファイにしてまで、龍之介達を助けたので、その責任を龍之介に取らせようとした。

龍之介「責任って!?!……お、お前だつて!あん時、裏取引には反対してたんじゃないか?」

龍之介は、真霜に自分だつて、反対したじゃないかと言うが

真霜「そんな事したかしら？」

真霜は惚ける。

本当は嘘で、内は、ホツとしていたのだ。

龍之介（相変わらず嫌な奴!!）

顔を丸くする龍之介。

龍之介と真霜は、Gフォースが保有する技術をアメリカから何とか守れた。だが、技術をこれ以上、日本だけで独占する事は、危険だと判断。

其処で、深町国交相の提案により、白鳳以外の航空機やミサイルなどの技術を各国のブルーマーメイドやホワイトドルフィンのみを提供する事にした。

平和を愛する国際機関であるブルーマーメイドやホワイトドルフィンに提供する事を各国に約束した。

しかし各国は、まだ航空機の開発には興味が薄く、実用化には程遠いものだった。

真霜「それよりも・・・今日は、折角の休みなんだし・・・如何過ごすの？」

真霜は、龍之介から今日の予定を問う。

龍之介「別に・・・昼飯食って、寝るだけだが？」

真霜「何それ・・・相変わらず、ずぼらね・・・」

龍之介の予定を聞いて、呆れる真霜。

龍之介「じゃ、他に何か有るのかよ？」

それに対して、他に何か有るのか問う。

真霜「普通・・・折角の休みなんだから、何所かに遊びに行かないとか言うもんじゃないの？」

龍之介「そんな事、言つたて・・・薫は、次郎や真冬達と一緒に何所かに出かけてるし・・・俺と行く奴なんていないだろ！」

薫は、朝早く次郎と真冬やはやて達と一緒に出かけているし、真雪さんは、仕事でましろは、学校に行つてゐる。

今、家にいるのは、龍之介と真霜の2人だけである。

真霜「あら居るじゃないの？」

龍之介「居る!?!?・・・何所に？」

真霜の言葉に龍之介は、家の中を見回すが

真霜以外誰もいない

一体誰がいるんだと龍之介は、真霜に問う。

真霜「眼の前に居るじゃないの！」

龍之介「えつ・・・」

そう言われもう一度辺りを見回すと

龍之介「お前が!?!」

何と目の前にいる真霜が龍之介に何所かに連れつてくれと頼んできたのだ。

龍之介「如何いう風の吹きまわしだ！」

龍之介は、真霜が何所かに連れつてくれと頼むなんて、普通は、あり得なかつた。

いつもなら、龍之介を嫌って、薰しか相手しなかったのに、今日は、何故か龍之介に接して来ている事に、龍之介は不気味に思った。

真霜「別に！・・・貴方が寝て手ばかりで暇そうだから、何所かに連れてて貰えるのかしらって・・・」

龍之介「別に暇じゃないけど・・・お前は、何所かに行きたいのか？」

真霜「そうね・・・一応買いたい物とかあるけど・・・」

真霜は、如何やら今回の事で、龍之介の事が気に入ってしまった様だ。

龍之介「じゃ・・・一緒に行くか？」

何と龍之介が真霜を誘う。

真霜「えっ!?・・・本当に?・・・本当に一緒に来てくれるの?」

龍之介「この前、助けてくれた借りもあるし・・・埋め合わせをしとかなきゃ・・・」

真霜「フフ！」

龍之介の言葉に真霜は喜ぶ。

龍之介「じゃ、準備して、待つてるから・・・」

真霜「なら20分後!・・・玄関で！」

龍之介「ああ、了解した。」

龍之介は、一度部屋に戻り、服装と髪型を整えてから玄関で待った。

20分後

真霜「お待たせ〜！」

龍之介「ん？・・・あっ!？」

龍之介が振り向くと其処には、長い黒い髪に薄めのメイク、胸のボリユームが良く分かるカツトソーの上に、黒の長袖シャツ、更に腰より少し上までの白いスカートを着た真霜が立っていた。

龍之介「あっ・・・!？」

真霜「何、見てるのよ？」

龍之介「いや・・・別に・・・」

奇麗な真霜を見て、つい見とれてしまった。

真霜「さあ、行きましょう！」

龍之介と真霜は、宗谷家を出る。

龍之介「取り合えず何所に行くんだ？」

真霜「そうね・・・何所に行こうかしら？」

真霜は、何所に行くかは不明で、取り合えず考えるより、行動あるのみと思いき行くだった。

2人は、先ず腹ごしらえに横須賀の有名な飲食店に入る。

真霜は、チェリーチーズケーキを頼み、龍之介は、コーラを頼む。

コーラを飲みながら、チェリーチーズケーキを食べる真霜を見て思う。

龍之介（・・・以外と甘党なんだな・・・）

龍之介も真霜と同じ甘党で、唯少し違うのは、下戸の甘党で、お酒が飲めずその逆にお菓子屋や飲料水を食べ飲む。

しかし、余り体に悪いと薫によく言われている。

真霜「何よ！先からジロジロ見て・・・気持悪い！」

龍之介「べ、別に・・・唯・・・ほっぺにチェリーチーズケーキが着いてるぞ！」

真霜「えっ!?!・・・やだ・・・」

真霜は、側にあるペーパー布巾で顔を拭く。

龍之介「クツ・・・クツ・・・ク・・・！」

龍之介は、それを見て、クスクスと笑う。

真霜「もう、笑うなんて、酷いわ!!」

真霜は怒って、顔を丸くする。

龍之介「いや、すまない!・・・お前も、そう言う顔をするんだと思って・・・いつも厳しい性格であまり、そんな顔を見せた事が無いからと驚いてるんだ!」

真霜「私だって、いつもこう言う顔してるわよ・・・」

龍之介「そうかな・・・」

龍之介には、いつも真霜は、厳しい性格しか思いつかなかった。

その後、飲食店を後にし

龍之介「で買ひ物は、何所でするんだ？」

真霜「良いから着いてくる。」

龍之介「お、おい、そんなに腕を引つ張るな・・・!!」

龍之介は、真霜に連れられて、服屋に入り、其処でお互いに服の着せ替えをし、どちらがに合うか競い合い、今度は、娯楽施設でボウリングやクレイゲームなどで遊んだ。

横須賀のとある公園

しばらくして、2人は、横須賀のとある公園のベンチに座る。

真霜「いや、以外と楽しかったわ!!」

龍之介「お楽しみのとこ悪いが・・・買いたい物があつたんじやないのかな？」

真霜「えっ、別に買いたい物とかないけど・・・」

龍之介「何!？」

真霜「ちっ・・・ちっ・・・ちっ、いやね・・・女の子は、買いたい物がなくても、お

買ひ物に行く物なのよ!」

如何やら買ひ物に行くと言うのは口実で、本当は、唯遊びただけの様だ。

龍之介（全く分からん!!・・・要は、買ひ物は口実で、ただ遊びた方だけじゃないか!?!・・・まあ、それを見抜けなかった俺も馬鹿だけど・・・）

真霜の策略にマンマトはまってしまった事に龍之介は、ガクリと頭を下げる。

それを見た真霜は

真霜「何よ！私と一緒に楽しくないと思ってるの？」

真霜は、厳しい表情で龍之介を見る。

龍之介「いや、楽しいよ・・・唯・・・こういう風に女の子と遊んだり喋った事が無

いんだ・・・」

真霜「えっ!?!・・・向こうの世界じゃ、友達と一緒に遊んだ事無いの？」

龍之介「全然!!・・・仕事ばかりしていたから、友達と一緒に遊んだ事は、無い！」

真霜「あつ・・・」

龍之介「薫から聞いているだろ!・・・俺達兄弟は、第2次ゴジラ戦で両親を失った事！」

真霜「知ってるわよ!・・・大変だったわね！」

龍之介「あの時、親の工場も焼けてしまっただけ！」

真霜「お父さんは、何の仕事をしていたの？」

龍之介「新宿で小さな町工場を経営していた。」

龍之介の父である英二は、新宿で小さな町工場を経営していた。

主に航空機の小さな精密部品を製作していた。

龍之介「それが一瞬にして失った・・・残ったのは多額の借金だけで、俺は、薫を養おうと必死で働くしかなかった・・・学校も学べながら給料が貰える国防軍の海士学校を受験して、更に給料が高い航空士学校に転校しパイロットになった。」

真霜「・・・」

龍之介の過去を真霜は、静かに聞く。

龍之介「だが、事故で右目の視力が低下してしまつて、俺は、もう二度とパイロットに戻る事ができなくなつた・・・正直、もう国防軍を止め様と思つた時もあった。」

龍之介は、右目に手を当て、事故の事を思い出す。

真霜「ええ!？」

国防軍を止め様と思つたと聞いた真霜は驚く。

龍之介「だけど、俺の上官が・・・今辞めたら、妹や養っている親戚は、如何するかと言われて・・・結局、残る事にした・・・それから、その上官の勧めでエリートばかりの特殊戦略作戦室に入って、その上官の下で働いた。」

龍之介のかつての上官である黒木准将は、龍之介の才能を失うのは、惜しいと思ひ、自分の部署に入れる事によって、国防軍を止めるのを思い留まらせたのだ。

真霜「そうだったの……悪い事を聞いてしまったわね……御免なさい！」

龍之介の辛い過去を聞いて、真霜は、悪い事を聞いてしまったと龍之介に謝罪する。

龍之介「良いんだよ！……それに、お前には感謝しているんだ!!……俺や薫達の為に働いてくれた事を……だけど、俺は、お前を誤解していた!……数々と疑って、すまなかつた!!」

逆に龍之介も真霜に数々と疑った事を謝罪した。

真霜「……フフ……フフ!!」

龍之介「……ハハ……ハハハ!!」

2人は、何故か意気投合する。

龍之介「ちよつと俺、向こうでジュースを買ってくる!!」

龍之介は、飲み物を買ってこ様と、自動販売機へと向かう。

真霜「ん……」

1人になった真霜は、急に何故か胸が痛くなり、手で押さえた。

真霜（……何だろうこの痛み?……如何したんだろう私……）

何故胸が痛いのか、真霜は分からなかった。

そんな時

「お嬢さん!」

真霜「!？」

突然、真霜の前に2人の男性が現れた。

『へっへっへ』

真霜の前に現れた男性2人は、年は20代ぐらいで、服装から、此処ら辺を縄張りしている不良少年の様だ。

真霜「ん・・・」

そうだと分かった真霜は、厳しい表情で彼らを見る。

不良少年A「こんな所で何してるんだい？」

不良少年B「暇なら俺らと遊ばねえか？」

2人は、真霜に絡むが

真霜「・・・残念だけど!・・・私には、連れがいるから、失礼するわ!!」

真霜は、2人に構わず、龍之介の元に向かおうとした。

だが

不良少年A「良いじゃねえか、ちよつとぐらいよ・・・」

不良少年の1人が、真霜の行く手を阻んだ。

真霜「退いて!!私は、貴方達と構ってる暇わないの!!」

真霜は、構わず龍之介の元に向かおうとするが

不良少年B「おい、お嬢さん!!・・・人と話す時は、相手の顔を見ると教わらなかつたのか?ええ、おい!」

もう1人の不良少年が真霜の手を掴もうとする。

真霜「い、いやっ!!」

真霜は反射的に、その手を振り払う。

不良少年B「くそ!こつちが下手に出てりや、凶に乗りやがって、このアマ!」

真霜に振り払われて、腹をかいいた不良少年が真霜の手を無理やり掴む。

真霜「い、いや、は、離して!!」

真霜は、必死で不良少年の手から逃れようと抵抗する。

不良少年A「面倒くせえ!此処でやっちまおうぜ!!」

不良少年B「へへ、そうだな・・・」

不良少年の1人が懐からナイフを取り出し真霜に向ける。

真霜「はっ!?!」

ナイフを見た瞬間、真霜は恐怖に陥る。

真霜「だ、誰か・・・」

ナイフを向けられ、真霜は必死で助けを呼ぶが、公園には、人の姿が無かった。

その為、助けを呼ぼうとしたが、誰も助けに來ない。

不良少年A「へっへっへ、たっぷり可愛がつてやる……」

真霜（このままじゃ……いたぶられて……殺される……）

真霜は、恐怖に怯える。

怯える真霜に不良少年2人が迫ってきた。

最早、もう駄目かっと思っただ。

その時

龍之介「おい！」

不良少年『あん!?!』

突然、後ろから龍之介が現れた。

龍之介は、自動販売機で飲み物を買っていたら、突然、真霜の悲鳴が聞こえて、何か遭ったと思い、急いで戻ってきたのだ。

真霜「あっ!?!」

不良少年B「あんだっお前?」

龍之介「俺は、そいつの連れだ!!お前らこそ、俺の連れに何しているんだ!?!」

龍之介は、不良少年2人を睨みながら、真霜に何をしてるんだと問い詰める。

不良少年A「俺らは、このお嬢さんと遊んでいるだけなんだよ!」

それに対して、不良少年の1人が真霜と遊んでいるだけなんだと言うが、龍之介は、彼

らがナイフをかざしているのを見て、龍之介は、そうではないと見破る。

龍之介「成程！・・・ナイフを持って遊ぶのが、お前らの趣味か？」

不良少年A「何だと!!」

龍之介「悪趣味で、言っただよ!!この進歩が無いシヨンペンハゲ共め!!」

龍之介は、不良少年2人にそう告げる。

不良少年A「この野郎!!」

不良少年B「言わせておけば!!」

それを聞いた不良少年2人は怒り狂って、真霜を放り出し、ナイフを振りかざしながら、龍之介に向かってきた。

真霜「イタ!？」

放り出された真霜は腰が抜け、その場に尻を着く。

龍之介とナイフを装備した不良少年2人の戦いは、先ず不良少年の1人が龍之介に殴り掛かってきた。

龍之介は、それをかわして、相手の腹に一発、拳をお見舞いした。

不良少年B「うっ!？」

龍之介の拳の一撃を喰らって、その場に倒れる。

それを見たもう1人の不良少年が

不良少年A「てめえ・・・よくも!!」

怒り狂って、持ってたナイフで龍之介を刺そうとした。

真霜「危ない!!」

真霜は、危ないと叫ぶ。

だが龍之介は、巧みにかわし、不良少年がナイフを振り回している最中に、下から顔面目掛けて、再び拳をお見舞いした。

不良少年A「ぐはっ!!」

龍之介の拳を受けて、その場にノックアウトした。

龍之介「何だ?・・・偉そうに言っといて・・・弱いな・・・」

彼らを見て、呆れた顔で龍之介は、その場に落ちてつたナイフを拾い、不良少年の1人に向けてた。

真霜「!?」

真霜は、雅か、ナイフを拾った龍之介がああ2人を殺すのではないかと思ひ、何とか止め様と声を掛けようとしたが

龍之介「こういう危ない玩具持ち出すと!・・・如何ゆう事になるか!・・・きちり教えてやろうか!!」

ナイフで不良少年の片方の眉毛を剃った。

不良少年A「ひ・・・!!」

眉毛を剃られ不良少年2人は、龍之介にビビってしまふ。

龍之介「にぞと面見せるな！」

不良少年『す、すいませんでした・・・!!』

不良少年2人は、逃げ去っていった。

龍之介「全く!・・・近頃の奴らは・・・ああ、このナイフ如何しよう?・・・後で交番にでも届けておくか？」

龍之介は、不良少年2人が置いていったナイフを後で交番に届ける事にし、真霜の元へと向かう。

龍之介「大丈夫か？」

その場に尻を付いた真霜に龍之介は、手を差し向ける。

真霜「う、うん！」

真霜は、龍之介の手を握り、何とか立つ。

立った真霜を龍之介は見て

龍之介「如何やら、怪我は無い様だな！」

怪我が無い事を確認したが

真霜「ええ・・・あつ、血!?!」

先のナイフの攻撃を受けたか、龍之介の左手から血が出ていた。

龍之介「えっ?・・・ああ、大丈夫だ!・・・こんなのかすり傷程度だから・・・」
傷が浅かったので龍之介は、大丈夫だと言うが

真霜「駄目よ!・・・ちゃんと手当てしないと・・・」

真霜は、バッグからハンカチを取り出し、怪我した龍之介の左手を応急処置する。

龍之介「ああ・・・」

龍之介は照れる。

真霜「これでよし!」

龍之介「あ、ありがとう・・・」

真霜から手当てを受けて、龍之介は、照れながらお礼を言う。

真霜「さあ、帰りましょう!」

龍之介「あつ、ああ!」

公園を後にし、龍之介と真霜は、先のナイフを交番に届け、宗谷家に帰宅する。

宗谷家

真霜「ただいま!」

薫「お帰り!」

ましろ「お帰り、真霜姉さん!」

帰宅した龍之介と真霜を薫とましろが迎える。

薫「遅かったわね!・・・2人共、何所行つてたの?」

真霜「ちよつと買ひ物に・・・」

薫「へ・・・兄さんは?」

龍之介「俺も買ひ物だけど・・・」

薫「何だ・・・2人揃つて行つてたから・・・てつきり、デートかと思つた。」

薫は、2人揃つて出かけたから、てつきりデートかと思つたらしい。

『!?!』

それを聞いた2人は驚愕し

龍之介「な、何言つてるんだよ薫!!・・・そ、そんな馬鹿な事・・・」

真霜「そ、そうよ!・・・そんな事、有る訳ないでしょ!」

誤魔化すが

薫「あつ!?!」

薫が龍之介の手を見て

薫「ちよつと兄さん!!その手、如何したのよ!?!」

龍之介の手に巻かれた血の滲んだハンカチに驚いた。

ましろ「あわ・・・!?!」

ましろの方は、血が滲んでいたと言う事で狼狽した。

龍之介「あつ、ああ：これ！・・・これは・・・」

龍之介は手の負傷した経緯を話そうとした。

後から、ましろの狼狽に気づき、真雪と真冬が駆けつけてきた。

龍之介は、2人にも経緯を話した。

龍之介が真霜の買い物に付き合っている途中に、真霜が不良少年2人に絡まれて、それを助け様と手に傷を負った事を話した。

その話を聞いた真雪は

真雪「そうだったの！大丈夫だった真霜？」

真霜が不良少年2人に絡まれた事を聞いて、心配そうな顔をする。

真霜「大丈夫よお母さん！龍之介さんが守ってくれたから・・・」

真雪「そう・・・ありがとうございませう龍之介さん！・・・うちの娘を助けてくれて
！」

真雪は、真霜を助けた事を龍之介に礼を言う。

龍之介「い、いや、男として当然の事をしたまです。」

真冬「へえ、流石、龍之介!!良い根性してんじやん！」

真冬は、龍之介の行動を褒めた。

真雪「でも、あまり無茶な事は、しちや駄目よ！」

真雪は龍之介に無茶な行動は控える様にと言う。

龍之介「は、はあ……」

龍之介は、静かに頭を下げる。

しばらくして、皆は、揃って、夕食を取る。

夕食の最中、龍之介は、怪我で不自由な手を使って食事をとるが、途中から薫が加勢して、その場を凌ぐ。

その光景を見た真霜は

真霜「……」

加勢している薫を見て、何故か浮かない顔をする。

ましろ「姉さん、大丈夫？」

横から、ましろが訊ねてきた。

真霜「あっ!?!何、真霜？」

ましろ「先から全然、箸が止まっているんですけど……如何したんですか姉さん？」
ましろは、先から箸が止まったままの真霜が気になってしょうがなかった。

真霜「な、何でもないわよましろ!!……ハッ、ハハハ……」

慌てて、飯を食べる真霜。

この日から真霜は、龍之介の事が気になって、しよ^うがなくなつてしまった。
何やら、嫌な事が起きるかも
果たして、如何なるだろうか？

第24章 龍之介と真霜 前編

9月25日

横須賀ブルーマーメイド庁舎、宗谷真霜の執務室

この日、真霜は、執務室で書類整理の仕事をしていたが

真霜「はあく」

何故か、捗っていない様子。

真霜「ああ、もう・・・!!」

仕事が捗らない事にイライラしていた。

実は、この前、龍之介に助けられて以来、龍之介の事が気になってしょうがない気持ち
ちが真霜の心を一杯にしていた。

その為、書類整理の仕事や大事な会議でも全然、集中できなかつた。

そんな時

平賀「失礼します!!・・・あのう・・・」

書類を両手に持った平賀が真霜の執務室に入ってきた。

だが

真霜「何!!」

真霜は、イライラしている成果、つい平賀にそのイライラをぶつけてしまう。

平賀「ひい!」

いきなり怒りをぶつけられ、怯える平賀。

真霜「あつ!?!・・・ご、御免なさい平賀監察官!!・・・私たら・・・」

真霜は、堆イライラをぶつけた事に謝罪する。

真霜「で、何?」

真霜は改めて、平賀に伺った理由を問う。

平賀「い、いえ、その・・・此方の書類に署名を・・・」

平賀は、必要な書類に上司である真霜の署名を貰う為、真霜のもとに持って来たのだ。

真霜「そう!・・・なら、其処に置いといて!・・・後で署名しておくから・・・」

平賀「はい・・・」

平賀は、机の横に書類を置く。

平賀「あ、あの・・・如何したんですか、宗谷監督官?」

真霜「な、何が?」

平賀「先から変ですよ?」

真霜「えっ?」

平賀「だって、全然、仕事が捗っていない観たいですけど……」

真霜「大丈夫よ！……ちよつと気持ちが悪くないだけだから……」

平賀「そうですか……なら良いんですが……では、明日までに、この書類に署名をお願いします。」

真霜「ありがとうございます！」

平賀「では、失礼します!!」

書類を置いた平賀は、退出する。

平賀が退出した後も真霜は

真霜「くう！……一体如何してしまったの私!?!」

自分が如何してしまったのか分らなくなっていた。

結局、仕事は捗らず、そのままに残業になってしまった。

宗谷家

一方、龍之介と薫は、何事もなく普通に帰宅した。

龍之介の方は、部屋に籠って、映画（航空戦に関する映画）を見る事にした。

そして、薫の方は

宗谷家、薫の部屋

薫「ふん！」

部屋でストレッチをしていた。

この頃していなかったせいか、体に脂肪が付き始めた為、毎日空いた時間にストレッチをして、体を鍛え直す事にした。

そんな時

真冬「薫、居るか？」

突然、真冬が訪ねて来た。

薫「居るわよ！」

真冬「んじや入るぜ!!・・・と・・・何やってるんだ？」

真冬が薫の部屋に入ると薫が床で何をしているのかと尋ねる。

薫「ちよつと体に脂肪が付き過ぎているからストレッチしていたの！」

真冬「へ・・・以外と体を鍛えているんだな！」

薫が以外と体を鍛えている事に真冬は感心する。

薫「ん・・・中学の時に新体操をしていた癖なのかな？」

真冬「新体操していたのか、お前!？」

新体操をしていたと聞いて、真冬は更に関心を持つ。

薫「ん！」

真冬「確かに最初見た時から何か体の作りがそうだと思ってたんだ。」

真冬は、薫とお風呂に入った時、薫の体が新体操をしている体だと見抜いていた様だ。

薫「まあ・・・中学の時までだけど・・・これでも全国大会に何度も優勝した腕前よ!!」

前にも言った通り、薫は、中学の時に新体操をしていた。

その実力は、全国大会に何度も優勝する腕前で、美しい体に着る衣装での演技は美しく、人から天女とも呼ばれた。

将来は、スポーツの名門校に推薦が約束されていた事もあった。

真冬「すげえな・・・!!」

真冬は、薫の腕前に凄いと思った。

薫「そう言えば、何か要が有ったんじゃないの?」

薫は改めて、真冬が部屋を訪ねた理由を問う。

真冬「あつ忘れてった!?!実は、頼みが合ってた?」

如何やら、頼み事が有って訪ねて来た様だ。

薫「何、頼みって?」

真冬「実は・・・報告書作成を手伝ってくれ!!」

何と頼み事とは、報告書の作成を手伝ってくれとの事だった。

薫「報告書って!? 雅か、また忘れたの?」

真冬「実は・・・ドック入りする前に不審船の追跡遣ってたんだけど、その報告書を艦長室に忘れてきちゃって・・・それで、真霜姉にお願いたんだが・・・」

如何やら、薫に頼む前に先に姉の真霜に頼みに行った様だ。

薫「如何だったの?」

真冬「あつさり断られて、ついでに説教だぜ!!・・・全く、今日の真霜姉は、何か変だぜ!」

結局、真冬も平賀と同じ様に真霜にイライラをぶつけられた様だ。

薫「そう言えば!・・・今日、平賀さんに会ったら、何か真霜姉さんイライラしてたって聞いたわ!」

薫は、今日、お昼に平賀さん達と食事をしていたら、平賀から、真霜がイライラしている事を聞いていた。

真冬「あの真霜姉がか?・・・信じられねな・・・」

真冬は、真霜がイライラしているなんて、信じられなかった。

薫「まあ、何か思い詰めているのかも知れないわよ!」

薫は、真霜が何かを思い詰めているのかと思う。

真冬「何を思い詰めてるんだろう・・・明日聞いてみようか?」

真冬は、真霜が何を思い詰めているのか、明日聞いてみようかと思ったが

薫「ん．．．それは、止めた方が良いかも．．．」

流石に聞いたところで、また、真霜にイライラをぶつけられると思い、薫は、止めた方が良いと真冬を諫める。

真冬「そっか．．．」

薫に諫められ、真冬は聞くのを止める。

薫「それより真冬！報告書の作成をするんじゃないの？」

真冬「ああ、そうだった!!そうだった!!」

薫「でも、あんまり忘れると、また真霜姉に叱られるわよ!」

真冬「げっ!」

こうして、薫は、真冬の報告書作成を手伝う事になった。

手伝う中、薫は、ある事を思う。

薫（雅か、真霜姉さん!?!．．．兄さんの事を?．．．雅かね．．．）

薫は、真霜が龍之介の事で思い詰めているのかと思いつつ、真冬の報告書作成の作業を始めた。

宗谷家、玄関

真霜「ただいま．．．」

しばらくして、残業していた真霜が帰宅した。

真雪「随分と帰りが遅かったわね？」

帰宅した真霜を母の真雪が出迎える。

真霜「ちよつとね・・・」

真霜は、真雪に遅くなった理由を言わない。

真雪「夕食は？少しでも食べとかないと！」

真雪は、真霜に何か食べさせ様と進めたが

真霜「んん要らない！・・・しばらく一人にさせて・・・」

真霜は、要らないと言って、そのまま部屋に籠ってしまった。

真雪「如何したのかしら・・・」

それを見た真雪は、如何したのかと心配する。

午前12時

皆が寝静まった頃

宗谷家、龍之介の部屋

龍之介「さて、風呂に入るか！」

龍之介は、お風呂に入る事にした。

龍之介は、あの出来事以来、いつも皆が寝静まった時にお風呂に入っている。

龍之介「ああ、今日は疲れた……」

龍之介は、何事もなく脱衣所の扉を開ける。
すると

宗谷家、脱衣所

龍之介「えっ!?!」

真霜「ひい!?!」

其処には何故か、裸姿の真霜が立っていた。

龍之介「えっ……ええ……!?!」

脱衣所に真霜がいた事に龍之介は驚愕してしまう

何故、真霜がこんな時間に風呂場に入ろうとしていたか

実は今日、仕事が捗らず残業になり、帰りが遅くなった事、そして帰宅したら、そのまま部屋に戻り、ベットに飛び込み、いつの間にか寝てしまった。

目を覚ましたら、もう12時だった事に気づき、このまま寝ようと思ったが、せめて、お風呂にだけでも入ろうと風呂場に向かい脱衣所で脱いでいたら、突然、其処にお風呂に入りに来た龍之介と鉢合わせしたのだ。

真霜「きや、う!……う!……!」

龍之介と鉢合わせてしまい、おまけに自分の裸を見られてしまった真霜は、悲鳴を上

げようとしたが、龍之介は、急いで真霜の口を手で塞ぐ。

龍之介「し、静かに！．．．こんな所を誰かに見られたら如何するんだ．．．」

龍之介の言う通り、こんな所を真雪達に見られたら、取り返しが着かない。

特に薫にでも見られたら、即殺されるだろう。

真霜「ん．．．ん．．．」

龍之介の言葉を聞いて、真霜は落ち着く。

それを見た龍之介は、真霜の口から手を退ける。

龍之介「ご、御免！．．．こんな時間に誰か入っているとは思わなかった．．．」

龍之介は、後ろ向きで真霜に謝罪する。

真霜「う、うん．．．」

真霜も体をタオルで隠しながら、龍之介の謝罪を受け入れる。

龍之介「じゃ、俺は部屋に戻る．．．今日の事は忘れろ。」

龍之介は、自分の部屋へと戻る。

真霜「ん．．．」

真霜は、その場で、自分の唇に手を当てた。

真霜（やっぱり．．．私!?!）

この時、真霜の中のスイッチが起動した。

それから30分後

宗谷家、龍之介の部屋

龍之介「ああ全く！今日は、何て日だ!!」

事故とは言え、脱衣所で真霜の裸を見てしまい、龍之介は困惑していた。

龍之介「ああ、もう寝よう！寝よう!!」

全てを忘れ様と寝ようとした時だった。

コンコン

部屋のドアをノックする者が居た。

龍之介「だ、誰だ!?こんな時間に?」

突然、起こされた龍之介は、恐る恐るドアを開けると

真霜「今晚は!」

何と、ノックしたのは、先、脱衣所で裸を見られた真霜本人だった。

龍之介「む、宗谷監督官!」

突然の真霜の訪問に龍之介は驚愕する。

龍之介「な、何だよお前!こんな時間に?」

真霜「ちよつと良い?」

龍之介「えっ!?・・・ああ、どうぞ・・・」

龍之介は、恐る恐る入室を許可すると、2つのマグカップを持った真霜が部屋に入つて来た。

入れた途端

真霜「実は、ん？」

龍之介「先の事なら済まない！俺が悪かった!!……あの時、ちゃんと確認してなかったせいで……」

龍之介は、真霜に向かって、さっきの事を頭を下げて、謝罪する。

真霜「頭を上げて!!別にその事で来たんじゃないの！」
如何やら、先の事で訪ねてきた訳じゃなく

龍之介「え、違うのか？」

真霜「ちよつと、お話をしたくて……」

何かの話をしに来た様だ。

龍之介「何だ話か！」

話と聞いて、龍之介はホツとする。

2人は、床に座る。

真霜「はい！」

真霜は、龍之介に2つのマグカップの内、1つを龍之介に手渡す。

マグカップの中身はココアだった。

龍之介は、落ち着いた表情でココアを飲む。

真霜が淹れたココアを飲みながら、龍之介と談笑し、ココアを飲み切った後も談笑は続いた。

そんな時

龍之介「な、何だ?・・・急に体中が火照って来て熱い・・・それに何だか頭がポオ
くつとしてきた・・・」

龍之介の身体に異変が生じた。

急に体中が火照って来て熱いし、頭がポオくつとしてきた。

龍之介「流石に夜遅く起きているせいかな・・・」

流石に夜更かしをし過ぎて眠くなってきたのだろうか、龍之介は、頭を押さえるが

真霜「フッフ・・・如何やら効いてきたみたいね!」

目の前の真霜が突然、とんでもない事を口走った。

龍之介「き、効いてきた!?!・・・ココアに・・・何を入れたんだ!!」

龍之介としては、真霜が何を言っているのか理解できなかつた。

宗谷家、台所

実は、龍之介の部屋に入る5分前の事、宗谷家の夜の台所で真霜は、何かを密かに作っ

ていた。

真霜「後はこれを入れて……つと……フフ、待っていなさい。」

真霜は、ニヤリと口元を緩めた。

如何やら龍之介の部屋に入る前から何かの陰謀を始め様としていた様だ。それが今、実行されたのだ。

宗谷家、龍之介の部屋

真霜「フフ……先、貴方が飲んだココア！……その中に媚薬を入れたのよ！」

ココアの中に入っていたのは、媚薬と言う惚れ薬であった。

龍之介「び、媚薬!?! ……な、何でそんなモノを入れたんだ!!」

龍之介は、何で媚薬を入れたのか、真霜に問う。

真霜「決まっているじゃない!?! ……貴方を抱く為よ!」

何と真霜は、龍之介と快楽をしようと企んでいたのだ。

龍之介「だ、抱く!?!」

真霜の発言に思わず驚愕する。

龍之介「な……何……ふざけた事……言ってるんだ!?!」

真霜「ふざけて何ていないわ!! ……私は、本当に貴方の事が好きなの!!」

龍之介「えっ!?!嘘だろ!?!」

真霜が自分の事が好きだと聞き、龍之介は、つい冗談かと思ったが

真霜「嘘じゃないわ!・・・もう、この気持ちが抑えられないの!」

如何やら本気で好きになった様だ。

既に真霜の心は、龍之介が好きで一杯になっていた。

真霜は、龍之介ににじり寄る。

龍之介「ふ、ふざけるな!!・・・俺は、お前を抱く気は・・・く、くるな!」

媚薬で動けないとは言え、龍之介は、必死で拒む。

真霜「抵抗しても無駄よ!」

だが、龍之介の抵抗も空しく、真霜は、龍之介の前で寝間着を脱ぐ。

龍之介「ひい!」

真霜が寝間着を脱いだのを見て、龍之介は驚愕する。

寝間着を脱いだ真霜の姿は奇麗だった。

胸の大きさは普通だが、奇麗で魅力で、下の方は、白いショーツを履いていたが、そ

の中に隠れる秘所も雅に魅力的。

龍之介（き、奇麗だ・・・）

その魅力的な誘惑に龍之介は骨向きになってしまふ。

その隙を狙って、真霜は、龍之介を抱く。

龍之介「う!？」

行き成り真霜に抱かれ、龍之介は、真霜の胸に顔を埋める。

龍之介（も・・・もう駄目だ・・・）

真霜の胸に顔を埋められたせいで、龍之介は、抑えていた本心が目覚めてしまった。

龍之介は、そつと真霜の胸から離れる。

真霜は、龍之介が自分の胸から離れた途端、今度は龍之介の唇を奪う。

『んっ・・・ちゅっ・・・んむっ・・・ちゅっ・・・んんっ・・・ちゅっ・・・んんっ・・・ちゅっ・・・んっ・・・んむっ・・・』

長い口付けをして、離れた時にお互いの口から唾液が糸となって、2人の唇の間に引かれた。

次の瞬間

真霜「きゃ!？」

龍之介は、真霜をベツトへと押し倒す。

真霜「りゅ、龍之介さん？」

いきなりベツトに押し倒された真霜は驚いた顔で龍之介を見る。

龍之介「うう・・・」

真霜が見た龍之介は唾然とした顔で、真霜を見降ろしていた。

そして、真霜の目の前で、龍之介は寝間着を脱ぎ、生まれた姿になった。
真霜「はっ!？」

真霜の目の前で、龍之介は、ブラジャーを剥ぎ取り、乳房を責め始めた。

真霜は、途端にけたたましい叫び声を上げて一気に絶頂する。

龍之介は、真霜がどれだけ悶えようと構わず責め立てる。

乳房を責め始めた後、今度はショーツを捲り、秘所を優しく撫でた。

優しく撫でた後に自分の肉棒を真霜の秘所に挿入する。

挿入した後、龍之介は、上下に肉棒を動かしながら真霜を責め立てる。

真霜「りゅ、龍之介さん!・・・もう駄目・・・!!」

やがて、激しい責めに真霜は、耐えられなくなり、それを見た龍之介は、真霜の唇に静かに口付けする。

『んっ・・・ちゅっ・・・んむっ・・・ちゅっ・・・んんっ・・・ちゅっ・・・んんっ・・・ちゅっ・・・んんっ・・・んむっ・・・』

次の瞬間

真霜「はあ!？」

激しく口付けする中、龍之介は、真霜の秘所に盛大に射精した。

龍之介「あ・・・あ・・・」

射精した後、龍之介は、そのまま気絶してしまう。

龍之介が気絶した後、真霜は、自分の秘所から肉棒を抜く。

抜いた時、秘所から精がたっぷり出ていた。

それを見た真霜は

真霜「フッフフ・・・龍之介さんの大事なものを頂いちゃたわ!!・・・これで貴方は、私
のものよ!」

龍之介の大事なものを奪い、龍之介を自分のものにした。

真霜「フッフフ・・・」

真霜は、龍之介の胸もとで眠りに着いた。

9月26日

カーテンの隙間から朝日の光が差し込む。

龍之介「ん：：う：：ん？」

朝日の光で龍之介は目を覚ます。

龍之介「ふあくもう朝か？」

龍之介は目を覚まし、大あくびをしながら起きる。

龍之介（ああ、酷い夢だった・・・雅か俺が真霜を犯すなんて・・・変な夢を見たも
んだ!・・・）

龍之介は、昨日、自分が真霜を犯した出来事が全部夢だと思っていたが

龍之介（いや待てよ！・・・夢にしてはリアル過ぎる？・・・そもそも何で俺は裸何だ？・・・もしかして!?!）

龍之介は、恐る恐る毛布を捲ると、其処には、幸せそうに眠る真霜の姿があった。

龍之介「はっ!?!」

それを見た瞬間、龍之介の顔は、真っ白になり

龍之介（夢じゃない!?!・・・俺は、何て事をしたんだ!?!）

いくら真霜が自分を求めて迫って来たとはいえ、それを抑えられなかった自分は、堆本能に従って、大切な宗谷家の長女を傷物にした。

龍之介は、真霜にしてしまった事をつくづく後悔する。

とは言うものの、このまま真霜を此処に置いて置く訳にはいかない。

龍之介「おい、宗谷監督官!!・・・朝だぞ!!・・・起きろ!!」

龍之介は、真霜を起こそうと身体を揺する。
すると

真霜「う・・・ん・・・もう朝?」

真霜が瞼をゆつくりと開けて、目を覚ます。

龍之介「お：おはよう宗谷監督官殿!」

真霜「おはよ……」

龍之介と真霜は、互いに挨拶をする。

真霜「りゆうのくすけく……んっ！」

龍之介「んっ!？」

真霜は、寝ぼけた様に龍之介に迫り、龍之介の唇を奪う。

真霜「んっ……ん、ご馳走様！」

龍之介と口付けしたら、一気に覚醒した様子の真霜。

龍之介「ああ……!？」

真霜にまたしても奪われた事に龍之介は困惑する。

その後、真霜はベッドから降り、床に散らばった下着と寝間着を着る。

その時、更に最悪な事が起き様としていた。

コンコン

『!？』

突然、部屋のドアをノックする音が鳴った。

真霜「はっ!？」

龍之介「だ、誰だ!？」

ドアをノックする音を聞いて、龍之介と真霜は動揺する。

薫『兄さん朝だよ!!起きないと・・・』
何と、ノックして来たのは、薫だった。

龍之介「か、薫!？」

真霜「えっ!？」

薫『兄さん、聞いてるの?・・・早く起きないと遅刻するよ!!』

薫は、ドアの向こうから、龍之介を起こそうとノックしながら叫ぶ。

龍之介（ま、不味い!・・・こ、こんなところを薫に見られたら・・・こ・・・殺される!?)

今、この部屋にいるのは、龍之介と真霜の2人だけである。

もし、薫が入ってきたら、不味い事になる。

やる事は、唯一つ。

龍之介「か、隠れろ真霜!!」

真霜を何所かに隠す事、それしかなかった。

真霜「え、でも何所に？」

いきなり隠れると言われても、何所に隠れば良いか、真霜は戸惑う。

龍之介「良いから・・・兎に角、此処に隠れろ!!」

龍之介は、真霜をベットの隙間に押し込み、その上に毛布を被せて隠した。

薫「返事しなさい!!・・・返事しないなら・・・開けるわよ!!」

返事がない為、中に入ろうとする薫。

龍之介「ま、待ってくれ!!今開ける!!」

真霜を隠して、急いで服を着て、ドアを開ける。

薫「おはよう、兄さん!!・・・何だ、起きてるなら、返事してよね?」

笑顔で返事をする薫。

龍之介「御免!御免!・・・ちよつとズボンを履くのに手間取ってしまった・・・」

薫「ふくん・・・ねえ兄さん?」

龍之介「何だ?」

薫「真霜姉さん知らない?」

龍之介(ギク!?)

いきなり真霜の事を聞かれ、龍之介は動揺する。

薫「さつき部屋まで起こしに行っただけど・・・返事がないから中に入って見たら、部屋にはいないし、制服は有ったから、まだ仕事には出勤していないと思うんだけど・・・」

実は、昨日、真霜がイライラしながら、夜遅く帰宅して、夕食も何も食べなく、そのまま部屋に閉じ籠った為、それを見た真雪が心配になり、朝早く尋ねようとしたが、薫

が代わりに行くと言い張り、真雪も薫に任せ、薫が龍之介の部屋に来る前に真霜の部屋を訪れたが、部屋に真霜の姿は無く、制服もハンガーに掛けてあつた為、何所かに行つたかと思ひ、そのまま、龍之介の部屋に来たと言う訳だ。

龍之介「さあ・・・俺は、知らないけど・・・」

龍之介は誤魔化し、真霜が此処に居る事を隠そうとするが

薫「そう・・・ん!?」

薫は、ベットの向こうで、何か動いた様な気がした。

薫「兄さん?・・・先後ろで何か動いた様な・・・」

龍之介「な、何でもない!!何でもないぞ薫!!」

龍之介は、必死で誤魔化すが

薫「兄さん・・・何か、私に隠してない?」

薫は、恐る恐る龍之介の部屋に入る。

龍之介「何も隠してないぞ!!」

龍之介は、それを阻もうと薫の前に立ちはだかる。

薫「じゃ見せてよ!」

龍之介「駄目だ!!」

薫「んん・・・良いから、見せなさい!!」

龍之介「よ、よせ!!」

阻む、龍之介を押し退けて、ベットに向かい、毛布を退けると

薫「え!？」

真霜「お、おはよう薫！」

其処には、手を振りながら挨拶する真霜がいた。

薫「お、おはようございます真霜姉さん……」

挨拶する真霜に薫は笑顔で返すが

薫「に……い……さ……ん……こ……れ……は……ど……い……う……こ……と!？」

龍之介の方を向いた途端、表情を怒りに変えて、恐る恐る龍之介に迫ってきた。

龍之介「か、薫……ち、違うんだ!!……こ、これは……」

薫「説明して!……如何して、兄さんの部屋に真霜姉さんがいるの?」

薫は、龍之介を問い質す。

龍之介「そ、それは……」

流石に龍之介も真霜を傷物にした事は言えない。

しかし

薫「雅か!?!兄さん、真霜姉さんを!？」

薫は、龍之介が真霜を誑かして、無理やり快樂を迫ったんだろうと思った。

龍之介「ご、誤解するな薫!!お、俺は決して、そんなやばな事はしていない!!」

龍之介は決して、そんなやばな事はしていないと言いき張る。

だが、半分は合っている。

真霜「そうよ薫!!・・・龍之介さんは悪くないの!・・・これは、私が望んだ事なの!!」

真霜も自分が望んだ事だと言うが

薫「望んだ事って・・・ええ・・・!?」

真霜の言葉を聞いて、驚愕する薫。

薫「兄さん、何て事を!!」

龍之介と真霜が快楽をした事に薫は、遂に怒りが頂点に立つ。

いくら真霜が望んだ事でも、それを抑える事ができなかった龍之介を許さなかったのだろう。

龍之介「お、落ち着け薫!・・・は、話せば分かる・・・」

最早、問答無用である。

薫「この・・・馬鹿変態!・・・死ね・・・!!」

ポーン!

龍之介を思い切り殴る。

龍之介「ぎやあ・・・!!」

龍之介は、薫の鉄居パンチを受ける。

雅に、薫の死の鉄居が再び炸裂したのだ。

薫の鉄居パンチを受けて、龍之介は、その場に倒れる。

真霜は、それを啞然と見ていた。

宗谷家、リビング

しばらくして、3人は、そのまま朝食の席に着く。

朝食の席では、3人共、お互い何事も無かった様に普段通りの態度を貫いた。

一応、昨日の事や先の事は、真雪や真冬とましろには、黙って要る様に薫に口止めされた。

真雪「そう言えば真霜！今日は、大丈夫なの？」

真霜「えっ、何が？」

真雪「昨日は、大分イラついてたけど・・・」

真霜「ああ、もう大丈夫よ！すっかり元気になったから、心配させて御免ねお母さん！」

龍之介と快樂したせいか、真霜のイライラはすっかり治っていた。

真雪「そう、ならもう心配は要らないわね。」

真霜が元気になった事を聞いて、真雪はホッとする。

しかし、隣では

龍之介「ああ・・・」

元気になった真霜とは、反対に龍之介は機能不全を起こしていた。

龍之介と真霜。

2人の恋は、一体如何なるのか

続く

第25章 龍之介と真霜 後編

9月26日

横須賀ブルーマーメイド庁舎、宗谷真霜の執務室

この日も真霜は、執務室で書類整理の仕事をしていた。

真霜「♪♪」

唯違うのは、昨日のイライラは無く、仕事もスムーズに捗り、笑顔を見せていた。

そんな時

平賀「し、失礼します。」

平賀が恐る恐る部屋に入ってきた。

真霜「あら平賀監察官！何か御用？」

真霜は、昨日見たいないイライラの態度では無く、明るく笑顔で問う。

平賀「い、いえその・・・昨日の書類を取りに参りました。」

真霜に突然、明るく笑顔で問れ、平賀は驚くが、落ち着いて、昨日、署名を頼んだ書類の回収に來たと告げる。

真霜「ああ、昨日の！・・・はいこれ！・・・署名は終わっているから後で確認し

といてね！」

真霜は、書類を平賀に渡す。

平賀「はい・・・では、お預かりします。」

平賀は、真霜から書類を受け取る。

平賀「あの・・・宗谷監督官？」

真霜「何、平賀監察官？」

平賀「今日は、機嫌が良いし、何だか雰囲気も変わった見たいですけど・・・何かあったんですか？」

平賀は、真霜の突然な変りがえに、何かあったのかと問う。

真霜「えっ、そう?・・・別に何もなかったけど・・・」

流石に昨日の事は、職場の平賀達にも言えない。

平賀「そうですか・・・では、失礼しました。」

平賀は退出する。

しかし、退出後も平賀は、真霜の突然な変りがえに疑問を抱く。

平賀「ひよつとして・・・もしかして!？」

平賀は、何故、真霜が変わりがえしたのか分かった。

そして、この日からブルーマーメイド内で『宗谷真霜に彼氏が出来た』と言う噂が広

まった。

BPF隊員達は、あの宗谷真霜の彼氏がどんな人なのか気になり

BPF隊員『あの人じゃない?』

BPF隊員『いや、彼じゃない?』

と、真霜の彼氏が誰なのかと言う噂でもちきりになった。

雅か、それが龍之介とも知らず。

横須賀基地

空母大鳳、会議室

一方、その龍之介は、空母大鳳の会議室で開かれている幹部会議に参加していた。

龍之介「ああ・・・」

だが龍之介は、さっき宗谷家の朝食の時と同じ様に完全に機能不全状態だった。

功「では、以上で会議を終了します・・・准将!・・・准将!!」

功は、会議が終了を龍之介に告げようとしたが、龍之介が機能不全状態だった為、功

は、龍之介に声を上げた。

龍之介「あっ!?!何だ、参謀?」

龍之介は、ようやく気が着く。

功「何だではありません!!会議を終了しますと申してるのです。」

龍之介「ああ、すまない!!では、これで会議を終了する。・・・解散!!」
会議は終了し、幹部達は部署に戻る。

功「大丈夫ですか、准将?」

龍之介「何がだ?」

功「さつきから変ですよ!・・・気分が悪いなら軍医の元に診察に行きますか?」

余りの龍之介の可笑しさに功が吾郎の診察をお薦めした。

龍之介「ありがと参謀・・・だが、その必要はない!」

流石に昨日の事は、龍之介も言いたくない為、診察を断った。

功「なら良いんですが・・・」

大丈夫だと聞きくが、功は安心できずにいた。

龍之介「じゃ俺は部屋に戻る・・・何か有ったら呼んでくれ!!」

功「分かりました。」

龍之介はそう言つて、長官室へと戻る。

功「准将・・・」

長官室へと戻る龍之介を見て、功は、疑問を抱き始める。

そして、もう一人

美由紀「ん・・・」

美由紀も龍之介に疑問を抱き始めていた。

空母大鳳、通路

会議室を出た龍之介は、そのまま通路を歩き、人気がなくなった瞬間

龍之介「くそ！」

壁を思いつきり叩く。

龍之介「俺は、一体、如何したって言うんだ!!」

自分の態度に嘆いていた。

空母大鳳、炊飯所兼食堂室

その頃、炊飯所兼食堂室では、薫、はやて、次郎の3人が休憩していた。

普通なら、なのはとフェイトも居るのだが、2人は、寮でヴィヴィオと一緒に昼飯を食べているので、今日は、3人で食べていた。

次郎「なあ!・・・今日の准将は何か変じゃなかったか？」

薫「え!？」

はやて「せやな!・・・今日は何だか、機能不全やったけど？」

食事中、2人は、龍之介が何故、機能不全状態になっているのか疑問を抱く。

次郎「なあ薫!・・・何か知らないか？」

次郎は、薫に問う。

薫は、龍之介と一緒に宗谷家に同居しているのだから、当然知っているのだと思つたが？

薫「さあ・・・知らないけど・・・」

次郎「そうか、薫なら知つてるかと思つたけど・・・」

薫（流石に兄さんが真霜姉さんにした事は、次郎君やはやてちゃんには言えない。）

薫は、龍之介が真霜と快樂した事は、流石に次郎達には言えない為、あえて知らないと答えたのだ。

しかし、それに気づく者がいた。

はやて「もしかして!？」

次郎「何か心あたりでもあるのか？」

はやて「准将に・・・好きな人が出来たんじやない？」

薫（ギク!?)

はやての言葉に薫は動揺する。

余りに本當の事を言っているからだ

次郎「雅か・・・あの准将を好きになる奴なんて、早々いないと思うんだけどな・・・」

はやての考えに次郎は否定的であつた。

はやて「絶対そうや!だから准将は元氣なかつたんや!!」

次郎「そうなのか薫!・・・准将に女が出来たのか?」

薫「し、知らない!知らない!!・・・知らないわよ!!」

次郎の問いに薫は、知らないと怒鳴る。

次郎「何怒ってんだ?」

いきなり怒鳴られ次郎は怯える。

薫「えっ!?!・・・ああ、何でもない!何でもないわよ!!」

堆怒鳴ってしまった為、戸惑う薫。

次郎「変な奴だな!」

薫「はあ・・・」

薫は、何とか誤魔化した。

横須賀ブルーメイト庁舎、宗谷真霜の執務室

一方、真霜は相変わらずのルンルン気分で書類整理をしていた。

そんな時

トン、トン

真霜「ん?」

誰かが真霜の執務室を訪ねてきた。

真霜「どうぞ!!」

誰かと思いつつ真霜は、入室を許可する。

美由紀「失礼するわね！」

真霜「権藤監督官!?!」

何と真霜の執務室に入って来たのは美由紀だった。

真霜「何か御用ですか？」

突然、訪ねてきた美由紀に真霜は何か御用できたのか尋ねる。

美由紀「ええ、おお有よ!!」

ドーン!

美由紀は、そう言いながら机を叩き真霜を睨む。

真霜「はっ!?!」

美由紀「宗谷監督官!?!・・貴方一体、うちの准将に何をしたの?」

美由紀は、龍之介に何をしたのか、真霜を問い詰める。

真霜「私は、何も・・」

真霜は、流石に昨日の事は、美由紀には言えず、あえて誤魔化すが

美由紀「惚けないで!!・・昨日の准将は何事も無かったのに・・今日の准将は何か可笑しかった!?!・・これは、貴方が准将に何かしたと言う証拠よ!!」

だが、美由紀には誤魔化しは効かなかった。

此処に来る前、空母大鳳の会議室で美由紀は、会議に挑んでいた龍之介の態度が可笑しい事に気づき、これは、真霜が龍之介に何かをしたと思ひ。

それを問い詰め様と態々、真霜のもとに乗り込んできたのだ。

美由紀「さあ一体准将に何をしたの？・・・答えなさい宗谷監督官!!」

美由紀は、更に真霜を問い詰める。

真霜「ん・・・権藤監督官！・・・私は決して、山本監督官には何もしていません!!」

しかし、それでも真霜は何もしていないと言ひ張る。

美由紀「はあ・・・そう・・・分かったわ!!」

何もしていないと言ひ張る真霜に美由紀は嘘だと気づくが、納得する。

美由紀「でも、これだけは覚えて置きなさい!!・・・貴方が何を企んでも・・・私がそれを全力で阻止する事!!」

美由紀は、これ以上問い詰めても無駄だと思ひ、此処はあえて納得し、真霜が何を企んでも、自分がそれを全力で阻止する事を真霜に告げ、執務室を出て行く。

真霜「ん・・・」

美由紀が出て行った後、真霜は浮かない顔をする。

横須賀基地

空母大鳳、長官室

一方、龍之介は、空母大鳳の長官室で

龍之介「ああ、俺は何て事をしたんだ!!・・・事故とは言え、宗谷監督官を犯してしまつた!!」

自分が真霜を犯した事を深く悔いていた。

龍之介「いつそ・・・死んで償うしかないのか・・・」

龍之介は深く悔いた末、いつそ死んで償うしかないと思つた。

そんな時

功「やっぱり!」

龍之介「参謀!」

功が長官室に入つて来た。

功「何か可笑しいかと思ひ、追いかけて来ました。」

功は、龍之介の態度に疑問を持ち、態々、長官室まで追いかけてきたのだ。

龍之介「そうか・・・すまない!!」

功「何が有つたのか、話してください!!」

龍之介「じ、実は・・・」

龍之介は、功に昨日の事を全て話した。

功「成程!!・・・それで悔やんでいたのですか?」

全てを聞いた功は、動揺せず納得する。

龍之介「ああ・・・俺は居候とは言え、真雪さんの大切な長女を傷物にしてしまった!!・・・この上は、死んで真雪さんに償うしかない!!」

龍之介は、自決しようと机の引き出しから拳銃を出す。

功「待つてください!!」

自決しようとする龍之介を功が止める。

龍之介「止めるな参謀!!死んで詫びるしかないんだ!!」
だが、それでも龍之介は自決しようとする。

功「死ぬ以外にもまだ方法はあります!!」

何と功は、死ぬ以外にもこの問題を解決する方法が有ると言うのだ。

龍之介「何!?!」

それを聞いた龍之介は、自決するのを止める。

龍之介「教えてくれ?・・・死ぬ以外の方法とは何だ?」

龍之介は、死ぬ以外の方法とは何かと問う。

功「それは・・・宗谷監督官と・・・付き合う事です。」

何と功が言う死ぬ以外に、この問題を解決する方法とは、龍之介が真霜と付き合う事

だった。

ガーン!!

それを聞いた途端、龍之介の顔は、また真っ白になり

龍之介「お、お前!・・・自分が何を言ってるのか分かってるのか?!」

そして、功を責める。

功「勿論分かってはいます!・・・ですが・・・こうなった以上、そうするしか、この問題を解決する方法はありません。」

確かに、もう既に快樂までしてしまつた以上、真霜を自分の女として、付き合うしか、この問題を解決する方法はない。

龍之介「だが、俺と宗谷監督官とは身分あまりに違う・・・向こうは、代々ブルーマーマイドの一族で、俺は唯の町工場・・・所詮付き合うのは、無理だ!!」

龍之介の言う通り、真霜の家は、代々続くブルーマーマイドの一族、龍之介の家は、唯の町工場。

そんな2人が付き合うのは、所詮無理な話だ。

功「そんな事は関係有りません!!・・・向こうは、本気で貴方の事が好きで、あんな事をしたんです!!・・・それなら貴方は、それに報いなければなりません!!」

だが功は、家柄とか関係なく、真霜自身が龍之介を選んだ。

だから、真霜は龍之介と快樂した。

龍之介「ん……その通りだ……だけど俺達は、Gフオースだ!!……いづれ死ぬ運命が訪れても可笑しくない!!……そんな運命にあいつを巻き込みたくない!!」

確かに、龍之介達は、いづれ死ぬ運命が訪れても可笑しくない状況だ。

そんな運命に真霜を巻き込みたくなかった。

功「確かに我々には、死ぬ運命が訪れても可笑しくはありません!!……ですが……それを乗り越えてこそ、恋は充実するもの……准将は、唯それを言い訳に逃げているだけです!!」

功もその事は、重々分かっていた。

それでも、それを乗り越えるこそ、恋は充実するもの。

龍之介は、唯それを言い訳に逃げているのだと功に告げられる。

龍之介「逃がっている?……俺が?」

自分が逃がっている事に全く理解していない龍之介。

功「そうです……此処は、一気に宗谷監督官に好きだと言うべきなのです!!」

此処は、一気に真霜に好きだと告白するべきだと言う功。

龍之介「ん……少し考えさせてくれないか?」

それに対して、龍之介は、少し考える時間をくれと功に告げる。

功「分かりました……准将の判断に期待しています!!……では、私はこれで……」
功は、龍之介の判断に期待しながら長官室を出る。

功が出て行つた後、龍之介は

龍之介「はあくやはり俺は、唯逃げていただけかもしれないな……」

ようやく、自分が真霜の好きな思いから逃げていただけだと気づくのだった。

宗谷家

その後、全員が宗谷家に帰宅した。

夕食後、真霜は、薫の部屋に呼ばれた。

宗谷家、薫の部屋

真霜「そう……貴方達の所でも、そんな事になつていた何て!?!」

真霜は、薫から今日の出来事を聞いて、自分の所だけじゃなく、薫達の所でも噂が広がっていた事に驚いていた。

だが真霜は、美由紀に責められた事は薫に言わなかった。

薫「そうなんですよ!……もう大変だったんですから……」

真霜「御免ね、薫!」

真霜は、こんな事になつた事を薫に謝罪する。

薫「何で謝るんですか?」

真霜「だって私のせいで、薫に迷惑を掛けてしまったから……」

薫「別に迷惑なんて、むしろ私的には嬉しいんですよ！」

実は、薫は嬉しかったのだ。

真霜「えっ？」

薫「だって、兄さんと真霜姉さんは、いつも喧嘩ばかりで対立していたから……」

真霜「べ、別に対立していた訳じゃないわよ！……唯、男と言うだけで嫌だっただけよ！」

薫「でも、それ以上に好きになったんですよね？」

真霜「う、うん！」

いつも職場や家では対立していた龍之介と真霜が仲直りしてくれた。

それだけじゃない、それ以上の関係になってくれた。

薫「じゃ、それで良いじゃないですか!!」

薫は、真霜に感謝していた。

真霜「……」

真霜は何も言えず、唯、顔を赤くするのだった。

薫「でも……」

真霜「まだ何かあるの？」

薫「真雪さんには、いつ言うんですか？」

真霜「あっ!？」

確かに、母の真雪は、この事実を知らない。

真霜「ん・・・お母さんには、いづれ時期を見て話すわ！」

真霜は、いづれ時期を見てから真雪に話すと言う。

薫「ん・・・許してくれるかな、真雪さんは？」

真霜「それは、分からない？」

真雪が龍之介と真霜の関係を許してくれるのか分からない。

真霜は、真雪にとっては、ブルーマーメイドのエリートで大事な宗谷家の跡取り、そ

して龍之介は、Gフォースの唯の指揮官で居候の身だ。

そんな奴との関係など、真雪は、とても許してはくれないだろう。

真霜「でも、許してくれなくても・・・私は、龍之介さんとは、別れない!・・・そ

れが例え親子の縁を切ったとしても・・・」

真霜は、例え親子の縁を切られても、龍之介とは別れない覚悟を決めていた。

薫「いや、親子の縁を切るまでしらないと思いますけど・・・」

薫は、流石に、あの真雪が真霜と親子の縁を切ると言う事はしないだろう。

薫「まあ、私は、如何なろうと2人を応援していますので、頑張ってください真霜姉

さん!!」

それでも薫は、2人を応援するのだった。

真霜「ありがとう薫!」

真霜は、嬉しく感謝する。

その後、皆が寝静まった頃

真霜は、龍之介の部屋を訪れる。

宗谷家、龍之介の部屋

この時間、龍之介は、もう寝ているだろうと思っていたが、部屋の電気がついていたので、まだ起きているだろうと思い、ドアの隙間からそつと覗く。

真霜「ん・・・」

部屋を覗くと、龍之介は机の上で考え事をしていた。

真霜は、静かに部屋に入り、龍之介の方へと向かい。

真霜「龍之介さん!・・・龍之介さんたら!!」

龍之介を起こす。

龍之介「はっ!?!」

龍之介は気が付き、真霜の方を向く。

龍之介「む、宗谷監督官!?!い、いつから其処に?」

真霜「たった今よ！何をそう難しく考えていたの？」

真霜は、龍之介が何を考えていたのか問う。

龍之介「ん……」

それを聞いた途端、龍之介は机から立ち、ベッドに座り

龍之介「ちよつと此処に座つてくれないか！」

真霜に自分の横に座れと言う。

真霜「ん!？」

真霜は何かと思ひながら、龍之介の横に座る。

龍之介「……宗谷監督官！」

真霜「真霜で良いわ！」

真霜は、呼び捨てを許可する。

龍之介「じゃ、真霜……昨日は、すまない事をした……俺は、本能とは言え、お前を犯してしまつた……この上は、どんな事でも罪を償う所存だ。」

龍之介は、真霜に対して、どんな事でも罪を償うと言う。

真霜「そんな償いはいらぬ!!」

だが真霜は、償いはいらぬと言う。

龍之介「だ、だが……」

真霜「私は、そんな事をさせる為に貴方と快樂した訳じゃない!!・・・昨日も言ったけど・・・私は、本当に貴方の事が好きなの!!」

真霜は、龍之介に償いをさせる為に快樂をしたのではなく、本気で龍之介の事が好きなのだ。

龍之介「だけど俺は、お前を幸せにする自信が無い!・・・俺には、死ぬ運命が取り付いている・・・いつ死んでも可笑しくもないんだぞ!!」

しかし、龍之介には、真霜を幸せにする自信が無い。

前にも言った通り、龍之介には、死ぬ運命が訪れても可笑しくない。

真霜「それでも私は諦めない!!・・・そんな運命が来たら私は、全力で貴方を守る・・・だから・・・私を愛して・・・」

だけど、真霜は諦めず、そんな運命が来たら、全力で龍之介を守ると宣言し、龍之介の手を握る。

龍之介「・・・はあ・・・本当に・・・お前の強がりには呆れるよ・・・だが、其処が好きだ・・・」

真霜の強がりには龍之介は遂に負けを認め、真霜の方を向き

龍之介「こうなったら、はつきり言おう!・・・俺も真霜の事が・・・好きだ!!」

そう言つて、真霜に告白する。

それを聞いた真霜は

真霜「私も・・・龍之介の事が・・・好きよ！」

そう言つて、龍之介に近寄り

龍之介「ん!？」

龍之介の舌を奪う。

『んっ……ちゅっ……んむっ……ちゅっ……んんっ……ちゅっ……んんっ……ちゅっ……んんっ……んむっ……』

お互いに長い口付けをし、口を離すと、またしてもお互いの口から唾液が糸となって、2人の唇の間に引かれていた。

そして服を脱ぎ、お互いに見つめ

龍之介「じゃ・・・いくぞ!!」

真霜「うん！」

肌を合わせ、快樂を始めた。

先ず龍之介が背後から真霜の胸と秘所を攻めた。

胸と秘所を攻められた真霜は荒い息を出しながら絶える。

龍之介が真霜の秘所を攻めていると、真霜の秘所から愛液が漏れ、龍之介の手に着く。

真霜は、それを見た途端

真霜「やだ・・・漏らしちゃったわ・・・」

と言つて、恥ずかし顔をするが

龍之介「構わないよ・・・お前にとっては、愛の証しだ。」

龍之介は、真霜の愛の証しだと思い、気にもしなかった。

今度は、真霜が龍之介の肉棒を胸で包んで攻める。

肉棒を胸で攻められた龍之介は、苦しみながら絶える。

だが、胸で攻められている中、龍之介は、堆真霜の顔に精を漏らしてしまふ。

真霜「フフフ・・・頂いちゃたわ！・・・龍之介の愛の証！」

真霜は、笑いながら自分の顔に着いた精を舌でなめる。

龍之介「・・・」

龍之介は、恥ずかしながらそれを見る。

最後の仕上げとして、真霜は、龍之介に馬乗りになり

真霜「これを・・・入れるのね？」

龍之介の肉棒を握る。

龍之介「ああ」

真霜は、自分の秘所に肉棒を挿入する。

挿入後、肉棒は、どんどん真霜の中に押し込まれ、きつく締め付けられていく。

その締め付けに龍之介は心地好さを感じた。

肉棒を中へと押し込んだ後、真霜は、硬さを確かめながら、ゆっくりと腰を動かし、やがて激しく腰を動かした。

きつい締め付けと柔らかな腰使いに龍之介はもだえ苦しむ。

やがて、きつい締め付けと柔らかな腰使いに龍之介は

龍之介「いいい、いくっ！・・・もう出る・・・!!」

限界になる。

それを聞いた真霜は、優しく龍之介に口付けをする。

真霜に優しく口付けされた瞬間

龍之介「はっ!？」

龍之介は、盛大に真霜の中に射精した。

射精後、2人は、生まれたままの姿でベッドの上で抱き合っていた。

月の光が2人を照らし、実に神秘的な光景だった。

真霜「中々の不器用なのね・・・全然やった事ないの？」

真霜は、龍之介の不器用差に、他の女と快樂を全然やった事がないのかと問う。

龍之介「俺は・・・まだ、こんな事をした事は、一度も無い・・・」

龍之介は、快樂を一度もした事が無かった。

真霜「そうなの! ……じゃ、私の大事なものを奪ったんだから……責任は、ちゃんと取ってくれる?」

それを聞いた真霜は、自分の大事なものを奪ったとして、龍之介を脅す。

龍之介「お、お前だつて!! 俺の大事なものを奪ったじゃないか?」

それに対して、龍之介も自分の大事なものを奪ったんじゃないかと逆に真霜を脅す。

真霜「フ、フフフ……何てね! ……冗談よ!」

如何やら、冗談だった様だ。

龍之介「たく……冗談が過ぎるんだよ……お前は!」

真霜の冗談に龍之介は呆れてしまう。

真霜「んっ!」

龍之介「ん!」

『んっ……ちゅっ……んむっ……ちゅっ……んんっ……ちゅっ……んんっ……ちゅっ……んんっ……ちゅっ……んんっ……んむっ……』

龍之介と真霜は、再び長い口付けをし、その口付けは数十分にも数時間にも感じた。

その後、2人は互いの温もりを感じ合うかの様に眠りに着いた。

9月26日

宗谷家、龍之介の部屋

龍之介「んっ……うう……ん？」

龍之介は眠りから目覚める。

あれから、何時間立ったのだろう。

外を見てみると既に朝で、横の時計を見てみると、時刻は午前6時だった。

龍之介「そうか……あれから寝てしまったんだ。」

龍之介は、昨日の事を思い出しながら、隣で幸せそうに眠る真霜を見る。

龍之介「全く……こいつは幸せそうに寝てるな……おい真霜……起きろ!!」

そう言いながら、龍之介は真霜を起こす。

真霜「うう……んう!？」

真霜は、ゆっくり目を覚ます。

真霜「あれ私たら、いつの間に寝てしまったんだろう?」

真霜も寝ぼけている様で、龍之介の方を向く。

龍之介「おはよう!」

真霜「おはよう!」

そして、お互いに挨拶をした。

この時から龍之介と真霜の交際が始まった。

勿論、自分の部署に気づかれない様に

まだ、先は長いが、いつか幸せになれる様にと
だが、それを望まない男がいた。

9月29日

国土交通省、廊下

真霜「♪」

この日、真霜は、ルンルン気分で、いつもの様に国土交通省の海上安全整備局に報告をして、横須賀のブルーマーメイド庁舎に戻ろうとしていた時だった。

邦夫「随分とご機嫌斜めだな・・・宗谷監督官！」

真霜「はっ!？」

突然、邦夫が真霜の背後に現れ、あざ笑うかの様に真霜を見る。

真霜「ん・・・」

邦夫「何か良い事でもあったのかな？」

真霜「別に・・・貴方には関係ないわ！」

真霜は、邦夫が何と言おうと相手にしない様に、その場を去るが

邦夫「ふん・・・やはり・・・噂は、本当だったか！」

真霜「噂？」

邦夫の言葉を聞いて、真霜は足を止める。

邦夫「お前・・・男が出来たんだな・・・」

邦夫は、最近、BPF隊員達が『宗谷真霜に彼氏が出来た』と噂をしていたのを聞いていた。

邦夫は、どうせ噂だろうと信じなかったが、やはり真実だろうか確かめたかったので、態々真霜を問い詰めに来たのだ。

真霜「ん!？」

それを聞いた真霜は振り向かずに聞く。

邦夫「一体誰だ?・・・雅か!?!・・・例の居候の・・・」

邦夫は、真霜の表情を見て、直ぐに相手が龍之介だと分かった。

真霜「だとしたら如何する?」

邦夫「お、お前!!・・・俺が有りながら・・・他の男を好きになるとは如何いう了見だ!!」

真霜が龍之介を好きだと分かって、邦夫は、我を怒りに変えて、真霜に如何いう了見だと問い詰める。

真霜「如何いう了見ですって?・・・笑わせないでよ!・・・貴方とは、そう言う関係になった覚えも無いし・・・第一、私が誰と付き合おうと貴方には関係ないでしょ!!」
それに対して、真霜は邦夫を嘲いながら、自分が誰と付き合おうが、貴方には関係な

いと言い張る。

邦夫「そ、そんなに、その男が良いのか？」

言い張る真霜に邦夫は、自分より龍之介が良いのかと問う。

真霜「ええ・・・少なくとも・・・貴方見たいに汚い手を使って、私腹を肥やす人間とは違うわ!!」

それに対して、真霜はYesと答え、しかも汚い手を使う邦夫とは違うと決めつける。

邦夫「くう・・・」

それを聞いた邦夫は悔しくなり

真霜「分かったのなら、もう私の事は諦めて!・・・その方が貴方の身の為よ!」

更に真霜から、もう自分の事は諦めてときっぱり言われる。

真霜「では、失礼します!・・・くれぐれも親に恥を欠かせない様にね・・・野田監
督官殿!」

と言つて、真霜は嘲笑いながら、その場を去る。

真霜が去つた後、邦夫は

邦夫「くう・・・認めない!・・・認めないぞ!!」

そう言つて、真霜と龍之介の関係を確認ず

邦夫「今に見ている!!・・・必ずお前を俺のものにするからな・・・!!」

更に必ず真霜を自分のものにするると宣言した。
何れ、これが現実のものになろうとは、龍之介と真霜は知るよしもなかった。

第26章 妙な物体

10月3日

静岡県、駿河湾

この日、Gフォース西部方面艦隊のすくね、さつま、いばらきとブルーマーメイドの弁天、浪速以下の5隻は、静岡県駿河湾にいた。

すくね、艦橋

すくねの航海長「両舷微速ヨソロー!!」

駿河湾に入った5隻は、速度を落とす。

五月「駿河湾・・・」

艦橋から駿河湾を啞然と見ながら、すくねの艦長の十六夜五月中佐。

志津真「訓練には持って来いの場所ですな艦長!」

訓練には持って来いの場所だと、すくねの副長の南田志津真少佐は、そう言う。

五月「ええ!」

5隻は、ある訓練を行う為、駿河湾を訪れていた。

すくね、特殊潜航艇格納庫

駿河湾に到着後、すくねとさつまの後部の特殊潜航艇格納庫に薫と次郎以下のGF隊員（服装は、Gフォース専用の特殊装備）と真冬と平賀、福内以下のBPF隊員達（服装は、ダイバースーツ）が集合していた。

集合後、訓練指揮官の美由紀が前に出て

美由紀「これより特殊潜航艇の乗艇訓練を行う!!」

特殊潜航艇の乗艇訓練を行うと宣言する。

此処で行う訓練とは、特殊潜航艇さつまを使用した特殊潜航艇の乗艇訓練である。

特殊潜航艇さつまとは、Gフォースが開発した深海特殊潜航艇の事である。

全長6m程の大ききで、主に原潜などの沈没事故での作業を想定して開発された為、

放射能遮蔽機能を有している。

乗員2名、武装は、魚雷が1発のみ搭載可能。

すくねとさつまには、それぞれ3艇が搭載されている。

次郎「潜航艇の乗艇訓練なんて、何年ぶりかな？」

薫「ん・・・もう4年ぐらいかな・・・」

次郎「もう4年か・・・随分と久々だな・・・」

薫達にとつては、乗艇訓練は久々であった。

何故なら、薫達、GF隊員は、必ずこの訓練を受けているからだ。

その為、今回の乗艇訓練は、雅に久々の訓練だった。

しかし

B P F 隊員 「潜航艇の乗艇訓練!」

B P F 隊員 「嫌だ・・・暑苦しい・・・」

薫達とは、反対にB P F 隊員達は、潜航艇の乗艇訓練を何だか嫌がっていた。

次郎 「なあ薫!・・・隣の奴ら・・・何か嫌がつてるぜ!」

薫 「うん、何だろう?」

B P F 隊員達の嫌がりに薫と次郎は気づく。

薫 「福内さん!」

福内 「何です薫さん?」

薫 「先から福内さんの所から、何か嫌味が聞こえてきますけど・・・」

薫は、何故、B P F 隊員達が嫌がるか福内に問う。

福内 「ああ、実は私達!・・・潜航艇に乗った事が無いんです。」

何と真冬や平賀、福内以下のB P F 隊員達は、潜水艦に乗った経験が無かった。

薫 「えっ!?!潜水艦とかに乗った事が無いんですか?」

平賀 「潜水艦は、男性しか乗れないんです・・・私達、女性は、乗る機会が全くありません。」

薫「ええ、そうなんですか!?! 私、ブルーマーメイドだから……つつきり潜水艦に乗った経験ぐらいいあると思つてました。」

経験がない事や潜水艦は、男性しか乗れない事に薫は驚く。

ブルーマーメイドなら、潜水艦勤務もあると思つていたのだろう。

福内「薫さん、潜水艦に乗った事があるんですか?」

薫「勿論ありますよ!……一ヶ月の研修で乗艦した事が……」

『え……!?!』

薫達が研修でだが、潜水艦に乗った事があると聞いて驚く平賀と福内。

平賀「潜水艦つて、艦内は狭いでしょ!……それに暑苦しくないんですか?」

薫「別に艦内は狭くなかつたし……空調が効いてて、快適でしたよ……」

平賀「でも、お風呂とかシャワーは無かつたでしょ?」

薫「お風呂は無いけど、シャワーは有つたわよ!」

『え……!?!』

薫「そんなに驚く事何ですか?」

福内「驚くも何も、普通潜水艦に空調やシャワーは付いていないわ!!」

薫「え……嘘でしょ!?!」

この世界の潜水艦に空調やシャワーは付いていない事に驚愕する。

薫「私達が研修で乗っていたのは、アメリカのロス級原潜だったから艦内の生活は快適だったけど・・・そんなに、この世界の潜水艦は酷いんですか？」

福内「詳しい事は知らないけど・・・大抵酷いわ!!」

向こうの世界でも潜水艦は、男性しか乗れないのは同じで、唯違うのは艦内生活が昔より充実している為、女性も乗れる様になっただけである。

福内「だから女性には、あまり向いていないから、男性しか乗れないんです。」

薫「成程!」

大体の理由に納得する。

薫「でも今回乗るのは潜航艇だから、そんなに長くは潜らないわ・・・それに中は狭いけど快適だから!!」

まあ今回乗るのは潜航艇で、潜航時間は精々9時間ぐらい、普通の潜水艦とは違い、そんなに長くは潜航出来ない。

しかも中は、放射能を防ぐ為に頑丈に作られているが狭いが決して窮屈ではない。

BPF隊員「大丈夫かな・・・」

BPF隊員「やっぱ無理だわ!!」

だが、それでもBPF隊員達の嫌がりは、続く。

真冬「何言ってるんだ!!此処は、根性で乗り切るんだ!!」

BPF 隊員達の嫌がりに真冬が根性で歯止めする。

薫「真冬・・・根性では何も解決しないのに・・・」

根性では、何も解決しないのだが

はやて「真冬姐さんの言う通りや!!・・・此処は根性で乗り切るんや!!」

真冬に釣られて、はやてまでが根性で歯止めした。

薫「はやてちゃんまで・・・」

はやてまでもが真冬と同じになった事に薫は呆れてしまう。

美由紀「静かに!・・・では、これより訓練を開始する!!」

とは言え、訓練は実施される。

実施に基づき未経験のBPF隊員だけでさつまを動かすのは危険だ。

其処で、経験豊富なGF隊員と未経験のBPF隊員の中から2人ずつコンビを組ん

で、訓練に挑む事になった。

編成は、こうである。

1回目

1号艇

次郎&志度

2号艇

薫&寒川

3号艇

はやて&真冬

2回目

1号艇

なのは&平賀

2号艇

フエイト&福内

後は、取り合えず適当にコンビを組ませた。

美由紀「訓練内容は、海底に沈めてる目標をサルベージして戻ってくる事・・・潜航時間は1時間・・・それ以上は、危険と見なし直ちに浮上する様に・・・」

訓練内容は、護衛艦いばらぎから投下された目標をサルベージして戻ってくるという簡単な作業である。

美由紀「では・・・乗艇！」

美由紀の号令の元、GF隊員とBPF隊員がそれぞれさつま3艇に乗艇する。

さつま1号艇

次郎「よし、一兆行くか!!」

志度「あのう？」

次郎「何だい志度さん？」

志度「私は、初めて潜航艇に乗るんですけど・・・本当に大丈夫ですか？」

次郎「大丈夫だよ！こんなのスキッパーの操縦と同じだよ！」

志度「違うと思いますけど・・・」

次郎「兎に角・・・行くぞ!!」

さつま2号艇

薫「寒川さん、補助お願いします。」

寒川「は、はい！」

薫「さあ、行くわよ!!」

さつま3号艇

はやて「真冬姐さん!!フォローお願いします！」

真冬「おう!・・・任せておけ!!」

さつま1号艇は、クレーンでつり上げられ、そのまま海上へと降ろされた。

その次にさつま2号艇も降ろされ、更にさつま3号艇も降ろされ、合計6艇が降ろされた。

『潜航開始!!』

各艇は潜航する。

駿河湾の水深は2500m、

さつまの限界深度は3000mで、酸素は9時間

水中速度は20ノットで海底まで15分で着く。

さつま2号艇

潜航している間、薫は考え事をしていた。

薫（目標は、いばらぎから投下されたブツ・・・所要時間は1時間・・・1時間以内に
戻らないと・・・）

いくら簡単な訓練でも薫は緊張していた。

そんな時

次郎『此方1号艇！』

突然、さつま1号艇から通信が入る。

薫「此方2号艇！如何したの？」

次郎『もう直ぐ海底だ!!』

薫「ん、そうだね！」

次郎『良いか・・・目標は、海底に沈んでいるブツを回収する事だ!!・・・忘れるな
！』

薫「分かつてるわよ！」

次郎『本当に分かつてるのか？・・・心配だな？』

薫「それは次郎君じゃないの？」

次郎『如何いう意味だよ!?』

薫「いつも変な所でへましてるし・・・」

次郎『お、俺はへましねよ!!・・・確かに・・・いつも准将には怒られてるけど・・・』

薫「フフフ・・・」

次郎『笑うなよ・・・もう・・・』

はやて『あの・・・お取り込み中すいまへんが・・・訓練に戻った方がええんでは・・・』

2人の会話中に突然、さつま3号艇のはやてから訓練に戻った方が良いのではないかと怒られる。

次郎『ん・・・取り合えず訓練だ!!・・・お互いに頑張ろうぜ!!』

薫「うん！」

次郎『よくし、行くぞ!!』

兎も角、さつま3号艇は海底に到着。

さつま1号艇は左舷をさつま2号艇は右舷、さつま3号艇は中央を、それぞれ目的のブツを搜索する。

さつま1号艇

次郎「志度さん、反応は？」

志度「……駄目です……反応ありません。」

さつま2号艇

薫「寒川さん、反応は？」

寒川「ん……まだ向こうの方かも……」

薫「じゃ、もうちよつと先に行ってみましょう。」

志度と寒川がセンサーや計器を見ながら、薫と次郎に指示する。

さつま3号艇

はやて「真冬姐さん、反応は？」

真冬「ん……ねえな！」

15分が経過、残り時間30分

さつま1号艇

次郎「くそ！何所にあるんだ？」

さつま2号艇

薫「駄目だわ！見つからない!？」

さつま3号艇

はやて「ん・・・何処にあるんやろう・・・」
いくら搜索しても見つからず、時間だけが過ぎていく。

そんな時

さつま2号艇

寒川「セ、センサーに反応!？」

突然、さつま2号艇のセンサーに反応が出た。

薫「方向は？」

寒川「右舷20度の方向です!!」

薫「分かりました・・・直ぐに向かいます!!」

さつま2号艇は、反応が合った右舷20度の方向に向かう。

薫「目標を視認!」

やがて、さつま2号艇が目標をモニターに捉えた。

薫「何これ?・・・これが探していたブツ?」

薫が見た物は、古い機械の様な物で、表面は貝やフジツボがびっしり付いていた。

寒川「しかし反応は、これから出ています!」

寒川の言う通り。

センサーを見ても、反応はこの古い機械を示している。

恐らく、機械の一部がまだ生きているのだろう。

でも、一体、これは何なのか？

薫「ん……」

考えていると

次郎『此方1号艇』

さつま1号艇から通信が入る。

薫「此方2号艇！」

次郎『こつちもブツを見つけた!!……直ちに回収する。』

如何やら、さつま1号艇が本命を見つけた様だ。

薫「2号艇了解！」

寒川「如何しますか、これ？」

薫「ん……取り合えず回収しましょう!!……まあ、後で調べれば何か分かるかも知れませんか……」

折角見つけたのに、このまま放置する訳にはいかない。

取り合えず、回収しようとアームを伸ばす。

しかし、その時

ザア……ザア……ザア……

寒川「な、何です!？」

突然、大海流がさつま2号艇を襲う。

薫「大海流よ!？」

大海流でさつま2号艇は、バランスを崩し流され始めた。

薫「くっ!？」

薫は、必死に操縦桿を握り、立て直そうとするが

薫「だ、駄目だわ!!」

『キヤア………!!』

さつま2号艇は流され、ブツも一緒に流されてしまう。

真霜の執務室

バギイ!

龍之介「あっ!？」

龍之介はその頃、真霜の執務室で真霜と一緒に報告書の整理をしていたが、突然、ポールペンの先が折れ

真霜「如何したの?」

龍之介「嫌な予感がした!」

真霜「えっ!？」

龍之介「もしかしたら、薫達の身に何かあったんじゃない?」

真霜「雅か!・・・きつと思いすごしよ!」

龍之介「ん・・・そうだと良いんだが・・・」

兄弟の結びか、龍之介には、薫が危ないめに合っている事を感じていたが、単なる思
いすごしでいてくれるよう祈るのだった。

さつま1号艇

その頃、さつま1号艇は無事にブツを回収していた。

次郎「よくし、回収した。」

志度「意外と簡単でしたね・・・」

次郎「いや、結構難しいぜ!・・・何なら操縦代わるか?」

志度「い、いえ遠慮しておきます。」

流星に経験もないのに急に操縦を代わると言われたら普通遠慮するのが当たり前。

次郎「ハハハ冗談だよ!」

いきなり未経験の志度に操縦させるのは、無理だと次郎は分っていたので、つい冗談
を言った。

次郎「それより、薫の奴何やってんだ?・・・もうこつちに着いても良い頃何だが・・・」
薫達が来ない事に、次郎は何か嫌な予感がした。

薫達、さつま2号艇が大海流に遭遇して、流されている事に次郎は全く気づかなかつた。

志度「取り合えず、通信をして見たら如何ですか？」

次郎「そうだな、通信して見るか？」

取り合えず通信を試みる。

次郎「此方、1号艇から2号艇へ……2号艇？……2号艇如何した……
応答しろ!!」

志度「如何したんですか？」

次郎「応答が……ない！」

志度「えっ!？」

次郎「もしかして……何か遭つたんだ!くそ!」

志度「ど、如何するんですか？」

次郎「2号艇に向かう。」

さつま1号艇は回収したブツを破棄して、2号艇の元に向かう。

残り時間10分

すくね、特殊潜航艇格納庫

すくねの後部の特殊潜航艇格納庫では、美由紀が訓練に出ている艇の帰りを待ち続け

ていた。

美由紀「あと10分……もう殆どこの艇は帰還している……残るは、3艇のみ……」
既に他のさつま3艇は、訓練を終え、すくね、さつまに無事に收容されていて、平賀や福内も無事に帰還し、残るは、次郎と志度、薫、寒川、はやて、真冬の6人だけであつた。

美由紀「何をやっているの……」

美由紀は心配そうに海上を見る。

そして、此処にも

平賀「大丈夫かな……真冬姐さん！」

福内「そうね……でも……それよりも私は、志度と寒川が心配だわ！」

美由紀と同じ様に平賀や福内も心配していた。

特に福内は、部下の志度と寒川の身を心配していた。

だが、今2人に出来る事は無事に帰ってくる事を祈るだけだ。

その頃、海流に流されたさつま2号艇は

薫「……ん……ん……はっ!？」

海流に流された衝撃で気絶していた薫は意識を取り戻し、辺りを見る。

薫（如何やら……生きてるようね!）

自分が生きてる事を確認すると

薫「寒川さん！・・・寒川さん！」

直ぐに後ろの寒川を起こす。

寒川「・・・ん・・・ん・・・はっ!？」

寒川は意識を取り戻す。

薫「気が着きましたか？」

寒川「此処は?・・・私・・・生きてるの!？」

薫「如何やら、そう見たいです。」

お互いに無事である事を確認し、各機器をチェックする。

一応、各機器は正常に作動している。

寒川「通信は如何ですか？」

薫「試してみるわ。」

薫は、通信機で通信を試みる。

薫「此方2号艇!・・・すくね応答願います!・・・すくね応答願います!・・・応

答願います!・・・駄目だわ!!」

如何やら通信機が故障した様だ。

これでは海上の艦艇に救援を呼べない。

寒川「如何しますか？」

薫「ん……仕方がない！……上に戻りましょう。」

通信機が使えない以上、訓練続行は不可能で浮上するしかない。

薫は機関を起動し、海上に上がろうとしたが

ブウ……ブウ……

薫「ん……」

寒川「如何したんですか？」

薫「……駄目だわ!!……スクリューが土砂に埋まって動けない!!」

寒川「ええ!？」

先の海流に流されたせいで、2号艇は艇体部分が土砂に埋まっていたのだ。

これでは左右に動く事もできないし、バラストを排出して浮上する事もできない。

薫「困ったわね……」

スクリューは土砂に埋まって動けない、通信も駄目、雅に絶体絶命である。

寒川「いやだ!!私こんな所で死にたくない!!」

絶体絶命だと分かって、寒川はパニックを起こす。

薫「落ち着いて寒川さん!!まだ死ぬとは決まって無いんですから!？」

確かに絶体絶命となって、早々に死ぬとわ限らない。

寒川「でも動けないし、通信も使えない……このままじゃ私達死ぬしかないんじゃないか？」

薫「そうとは限らないわよ。」

寒川「えっ!?!」

薫「よつと!」

薫は通信機をバラして、故障箇所を確認し、無事な機器を弄り始めつた。

寒川「何をやるんですか?」

薫「必要ない機器から部品を取って、通信機を修理するの……」

寒川「それで上手く行くんですか?」

薫「成る様に成るのを祈るだけね!」

今やれる事をすべきだ。

それを見た寒川は

寒川「私も手伝います!!」

薫「ん!」

2人は、一緒に通信機を修理をする。

酸素の残りは8時間。

一方、さつま1号艇は

次郎「如何だ・・・2号艇の反応は？」

志度「まだ反応はありません。」

次郎「くそ！・・・何所に居るんだ薫！」

「さつま1号艇は、必死にさつま2号艇を探していた。

さつま2号艇

薫「よし！これで何とか・・・やった!？」

応急修理だが、通信機が回復した。

寒川「治ったんですか？」

薫「一応ね・・・でも近距離の通信しかできないけど・・・」

通信は近距離の範囲しか使えない。

これでは海上の艦艇に救援が呼べない。

寒川「じゃ、修理した意味がないんじゃない？」

近距離しか使えない事を聞いて、寒川は、また表情を暗くする。

薫「ん・・・あっ!？」

その時、薫は、ある事を思い出し、通信機を動かす。

寒川「何をするんですか？」

薫「もしかしたら、1号艇と連絡できるかもしれない！」

海流に遭遇する前に次郎と連絡を取った事を思い出し、通信機を作動させる。

寒川「でも、1号艇は、多分浮上してるのでは？」

薫「そうとは限らないわ。」

寒川「えっ？」

薫「海流に遭遇する前に、次郎君に直ぐに向かうと言ったから、きつと向こうもこっちの事に気づいて探している筈！」

寒川「成程！」

薫「此方2号艇！・・・1号艇応答願います！・・・応答願います!!」

薫は、必死で1号艇に通信を試みる。

薫（お願い・・・繋がって・・・）

さつま1号艇

その頃、さつま1号艇は、さつま2号艇を必死に搜索していた。

次郎「くそ！・・・何所に居るんだ薫！」

次郎は、必死で探していたが、さつま2号艇の影も見つからず

そんな時

志度「こ、これは!？」

微弱な通信を傍受した。

次郎「如何した？」

志度「微弱な通信が聞こえます。」

次郎「何!?!・・・スピーカーカに出して見ろ!!」

志度「はい!」

志度は微弱な通信をスピーカーカに流す。

『レイ・・・・・・此方・・・・・・2号艇・・・・・・1号艇・・・・・・応答・・・・・・願います!・・・・・・』
応答・・・・・・願います!!・・・・・・』

次郎「これは間違いない!・・・・・・薫の声だ!?!」

次郎は傍受した通信を聞いて、薫の声だと確認する。

次郎「位置は？」

志度「待つてください・・・・・・右舷30度の方向です。」

次郎「よし、行くぞ!!」

さつま2号艇からの通信を傍受したさつま1号艇は、右舷30度の方向へと向かう。

さつま2号艇

薫「此方2号艇!・・・・・・1号艇応答願います!・・・・・・応答願います!!」

一方、薫は1号艇に通信を続けていた。

寒川「やつぱり、駄目なのかな・・・・」

一向に通信が繋がらない事に寒川は諦めかけていたが

薫「諦めないで、寒川さん！1号艇は必ず来るわ!!」

それでも薫は諦めず、続ける。

寒川「如何して、そう言えるのですか？」

薫「だって次郎君は、どんな時でも決して諦めない!!・・・そう言う人だから、うちの元副長は！」

薫は、昔学生時代に危ない所を当時、副長だった次郎に救われている。

その経験がある為、次郎の事を信用している。

その時

『!?!』

次郎「居たぞ!!」

薫「1号艇!!」

さつま1号艇は、土砂に半分埋もれた2号艇を発見した。

さつま2号艇

寒川「助かったんだ!!」

薫「ほら、言った通りでしょう!!」

さつま1号艇が救援に駆けつけて来た事に2人は喜ぶ。

さつま1号艇

次郎「薫!! 薫無事か?」

薫『ええ、大丈夫!・・・でも艇体が土砂に半分埋まってて動けないの』

次郎は状況を見て、艇体が土砂に埋まっている事を確認し

次郎「待てろ! 今何とかする!!」

志度「寒川! 寒川!・・・大丈夫?」

寒川『志度さん! 助けに来てくれたんですね?』

志度「無事なのね?」

寒川『はい!』

志度「よかった無事で・・・」

寒川が無事な事に志度は安心する。

次郎「よし行くぞ!!」

次郎は、さつま1号艇をさつま2号艇の上に移動する。

志度「何をするんですか?」

次郎「アームを使って、2号艇を土砂から引つ張り出す。」

作戦は、こうである。

先ずさつま1号艇がアームでさつま2号艇を掴み、そして両艇共機関を全開にして、

土砂から脱出する。

志度「そんな無理です!!」

次郎「確かに無理かもしれない!だが、この方法しかない!!」

志度は反対していたが、次郎の言う通り、状況的には、この方法しかない。

次郎「薫、こつちがアームで引つ張り出すから、そつちは、エンジンを全開にしてくれ!」

薫『うん、分かったわ!!』

次郎「じゃ、行くぞ!!」

さつま1号艇は上から、さつま2号艇を掴み

次郎「エンジン全開!!」

両艇共機関を全開にして、土砂から脱出を試みる。

次郎「くそ……!」

両艇共機関を全開にしているが、さつま2号艇は中々土砂から脱出出来ない。

このままでは、さつま1号艇のアームが持たない。

しかし、現状では、この方法しかない。

さつま2号艇

寒川「もう駄目だわ!!」

薫「諦めないの、必ず助かるんだから……」
どんな時でも諦めない。

だが、その願いも空しく、さつま2号艇は土砂から脱出出来ない。
やがて、アームが限界に近づき

さつま1号艇

ブー……ブー……ブー……

アームの限界を知らせる警報が鳴り

次郎「くそ……駄目か……」

最早、駄目かと思った。

その時

『諦めては駄目やで、次郎君!!』

次郎「何!?!」

突然の誰かの声に次郎は気づき、上を向くと

さつま3号艇

はやて「お待たせ!!」

何とさつま1号艇とさつま2号艇と同じくブツを搜索していたさつま3号艇が現れたのだ。

さつま1号艇

次郎「3号艇!？」

さつま2号艇

薫「はやてちゃん!？」

突然のさつま3号艇の出現に2人は驚愕し

さつま3号艇

はやて「遅くなって、御免!」

さつま2号艇

薫「来てくれて嬉しいわ!!」

さつま3号艇

真冬「待たせたな!!」

『真冬姐さん!？』

そして、嬉しく感謝する。

だが、感動も束の間

さつま1号艇

次郎「感動は後だ!!早く手伝え!!」

さつま3号艇

はやて「了解や!」

真冬「折角、決め台詞してたのに・・・」

さつま3号艇は、急いでさつま1号艇と共にさつま2号艇を掴み

さつま1号艇

次郎「行くぞ!!」

機関全開でさつま2号艇の救出を試みる。

今度は、さつま3号艇の協力も得ているので、成功するかも

そして

ズゴオ・・・ズゴオ・・・

さつま2号艇

薫「う、動いた!?!」

2艇の努力のたわものか、さつま2号艇が動き始めた。

さつま1号艇

次郎「よくし、もう少しだ!!」

あと少しで脱出できると分かり続ける。

さつま3号艇

はやて「あと少しや!!」

やがて

さつま2号艇

薫「や、やった!!」

さつま2号艇は土砂からの脱出に成功した。

さつま1号艇

次郎「や、やったぞ!!」

さつま3号艇

はやて「救出成功や!!」

さつま2号艇が土砂から脱出でき、両者とも喜ぶ。

さつま1号艇

次郎「よくし、このまま浮上するぞ!!」

さつま3艇共浮上するが

さつま2号艇

薫「待て、あれを回収しないと?」

そもその原因となった謎のブツは、さつま2号艇の近くに転がったまま、このまま置いて行く事は、薫には、できなかつた。

さつま1号艇

次郎「分かった・・・こっちで回収するから、2号艇は、3号艇と共に、そのまま浮上してくれ!!」

取り合えず、さつま1号艇が回収する事にし

さつま2号艇

薫「うん、後で会おうね!」

さつま1号艇

次郎「後頼むぜ、3号艇!!」

さつま3号艇

はやて「は〜い!」

真冬「任せろ!!」

さつま2号艇は、さつま3号艇と共に浮上する。

さつま1号艇の方は付近に転がった謎のブツを回収後、浮上する。

すくね、特殊潜航艇格納庫

美由紀「遅い!!」

すくねの後部の特殊潜航艇格納庫では、美由紀がさつま3号艇の帰りを待ち続けている。た。

美由紀「もう、15分は、経つ・・・連絡ぐらいいは、有る筈なのに・・・」

制限時間を15分も過ぎても、さつま3艇は浮上しない。

普通、何か遭ったのなら連絡ぐらい有る筈なのに、15分経っても連絡が無い事に美由紀は苛立っていた。

福内「何か遭ったのでは？」

もしかしたら、不測の事態が起きたのかも、福内は不安になった。

美由紀「ん・・・潜航艇の用意！・・・私が調べに行く!!」

平賀「私も行きます。」

美由紀と平賀は、帰還したさつままで調べに行く事にした。

その時

すくねの見張り員「中佐！潜航艇浮上!!」

すくねの見張り員が海上に浮上するさつまを視認した。

すくねの見張り員「間違いありません、2号艇です!!」

浮上した潜航艇をさつま2号艇だと確認する。

すくねの見張り員「3号艇の浮上も確認!!」

更にさつま3号艇も浮上した。

美由紀「1号艇は？」

さつま2号艇とさつま3号艇は浮上したが、1号艇は、まだ浮上してこない。

やはり、不測の事態が有ったのか？

その時

すくねの見張り員「待つてください!!……1号艇浮上!!」

さつま2艇の後方にさつま1号艇が浮上した。

美由紀「はぁ……全く、いつもヒアヒアさせるんだから!!」

さつま3艇が無事な事に美由紀は安心した。

やがて、3艇は、すくねに収容された。

無論、例の不明なブツも

薫「2号艇、唯今帰還しました。」

次郎「1号艇も唯今帰還しました。」

はやて「3号艇、唯今帰還しました。」

帰還した事を美由紀に報告する。

美由紀「ご苦労!……とは言うもの!……制限時間を15分を過ぎて今まで何
していたの!?!」

美由紀は何故遅れたか、事情を問う。

薫「す、すいません!!……訓練中に突然、大海流に遭遇して、艇が土砂に半分埋まっ
てしまつて……」

薫は、訓練中に大海流に遭遇して、艇が土砂に半分埋まった事を美由紀に説明する。

美由紀「それなら何故通信で救助を呼ばなかったの？」

何故通信しなかったか、それを聞くと

薫「衝撃のショックで通信機が故障したので、救援が呼べませんでした。」

衝撃のショックで通信機が故障した事を言う。

美由紀「それなら仕方ないわね・・・それで1号艇の方は何故遅れたの？」

今度は、次郎に事情を聞く

次郎「そ、それは2号艇の応答が無かったので・・・様子を見に駆けつけたら、2号艇が土砂に埋もれて脱出不能に落ちいていた為・・・止む無く、自分の判断で救出をかんこうしました。」

さつま2号艇がロスとした事と救助をかんこうした事を言う。

はやて「同じく3号艇もです!!」

はやても同じ事を言う。

美由紀「なら何故1号艇は、その時、救助を呼ばなかったの!?!?!? 3号艇も!!」

2号艇の危機を何故通信で救援を呼ばなかったか問うと

はやて「そ、それは・・・」

次郎「忘れてました。」

美由紀「え？」

如何やら、さつま2号艇の事で頭が一杯だったのか、通信で救援を呼ぶ事を忘れていた様だ。

次郎「兎に角、良いじゃないですか！……こうやって無事に帰って来た事だし……」
兎も角、6人が無事に戻って来た事は喜ばしい事だ。

しかし

美由紀「何を言ってるの小沢中佐!!……勝手な事をして下手したら死ぬ所だったのよ！」

反省の機が無い次郎に美由紀は怒りを露にする。

美由紀の言う通り、勝手な事をして、下手したら死ぬかも知れなかったのだ。

美由紀「全く、貴方達は昔からそう!……問題ばかり起こして私がどれだけ心配したか、考えた事がないの？」

『す、すいません!!』

怒る美由紀に3人は何も言えず、唯反省するしかなかった。

美由紀「もう良いわ!……取り合えず……」

叱るのを止め

美由紀「これが例の不明なブツね！」

さつま1号艇が回収した正体不明の物体を見る。

薫「はい！」

美由紀「何かの探査機見たいね・・・」

状態は錆付いていて、表面は貝やフジツボがびっしり付いていたが、間違いなく探査機である事は確認できた。

しかし、これが一体何の探査機かは不明だった。

次郎「如何しますか？」

美由紀「こんな状態じゃ・・・一体何なのかは不明だわ？・・・取り合えず持つて帰って、矢野主任に解析して貰うしかないわね！」

今此処では判断する事できず、取り合えず横須賀に帰投してから、慶介に解析して貰う事になった。

そして、これが何れ悪夢を呼ぶ事になる。

第27章 宗谷家での生活 4

訓練から数日後

10月10日

宗谷家、ましろの部屋

ましろ「……………」

薫「そう……………それで良いわよ……………」

薫は、ましろの受験勉強を手伝っていた。

横須賀女子海洋学校受験まで、あと3ヶ月。

薫「ん、良いわ……………この点数を見る限り……………ましろちゃんは横須賀女子海洋学校に入学出来る事が保々確実にになったわね！」

ましろ「あ、ありがとうございます。」

ましろは、あのブルーマーメイドフェスターの一件以来、受験勉強を熱心に励み、その成果が実り何とか、入学出来る程の成績に上がる事が出来た。

薫「礼は良いわ！それにしても、よく此処まで頑張ったわね！」

ましろ「あつ、はい！」

ましろは、嬉しそうな表情をするが

薫「でも、これで安心しちや駄目だよ！」

ましろ「えっ!？」

薫「あんまり安心していると肝心な所でましろちゃんの手を抜いてしまうんだから、安心しちや駄目！」

薫は、ましろがいつもついていない事は知っていたので、本番の時に手を抜く可能性があるので、あえてましろを安心させなかった。

ましろ「ん……」

薫の厳しさにましろは暗い表情をする。

薫「まあ、受験まで、あと3ヶ月……取り合えず、このまま予習を続ける事……良いわね！」

ましろ「はい！」

気を取り直して、ましろは受験勉強を続ける。

邪魔にならない様に薫は、自分の部屋に戻ろうとした。

その時

ピン……ポ……ン……！

呼び鈴が鳴り

薫「誰だろう？」

誰か来たど知り、薫は玄関に向かう。

宗谷家、玄関

ピン・・・ポ・・・ン・・・！ピン・・・ポ・・・ン・・・！

薫「はい、はい、今開けます!!」

玄関の戸を開けると

次郎「ようう薫!!」

薫「次郎君!？」

来たのは次郎だった。

薫「如何したの次郎君、今日は休みじゃなかったの？」

次郎「実は、准将に漫画本を借りに来たんだけど・・・」

如何やら、龍之介から漫画本を借りに来た様だ。

薫「ああ、そうなんだ・・・でも、御免なさいね!・・・兄さん今お出かけ中なの

!

だが残念な事に、肝心の龍之介は外出中だった。

無論、真霜も一緒に出かけている。

龍之介と真霜が付き合っている事は、薫以外は内緒にしている。

その為、次郎にはあえて言わなかった。

次郎「そうかあ、准将居ないのか・・・じゃ、またにするよ!」

龍之介が居ないなら、帰る事にしたが

薫「あつ待て!・・・折角来たんだから、上がって行って、本ぐらいなら、別に勝手に持ち出していいから!」

折角、来たんだから、上がって行くよう薫は、次郎に告げる。

次郎「い、いや、それは不味いだろう!!・・・いくら何でも准将の部屋に勝手に入ったら・・・」

確かに龍之介は、次郎の上官。

そんな上官の部屋に勝手に入ったら、怒られるだろうと次郎は思った。

薫「大丈夫だよ、それぐらい・・・どうせ兄さんは、次郎君には何も文句は言わないから・・・」

まあ、龍之介は、次郎の事は嫌っていないから、勝手に部屋に入っても大丈夫だろう。

次郎「ん・・・そうか・・・じゃ、上がらせて貰うぞ!!」

薫のお言葉に甘え、家にかかる。

次郎「それにしてもデカイな宗谷家は・・・ん?」

デカイ家を見て、驚いていると向こう側からこつちを見ているましろに気づく

次郎「なあ薫、あれ誰だ？」

薫「ああ、この子は、宗谷ましろ……真霜姉さんと真冬の妹さんよ！」

ましろ「宗谷ましろです。」

ましろは、次郎の前で自己紹介をする。

次郎「ええ!?!あの真冬の妹か!？」

薫「そうだよ！」

ましろが真霜と真冬の妹だつと知って、驚く次郎。

次郎「嘘だろう!?!あの真冬に、こんな可愛い妹が居るなんて、信じられねえ!？」

確かに長女の真霜は兎も角、次女の真冬にこんな可愛い妹が居るとは、誰も思わないだろう。

ましろ「ん・薫さん、この人誰ですか？」

それを聞いたましろは、少し不機嫌そうな顔で次郎を見る。

薫「ああ、この人わね!・・・私の仕事の同僚の小沢次郎君！」

次郎「小沢だ、よろしくな!!」

ましろ「えっ!?!・・・薫さんの同僚と言うとブルーマーメイドの人ですか？」

次郎「まあ、そう言う事になるな！」

次郎が薫と同じ部署だと知って、驚いた表情をする。

ましろ「ブルーマーメイドは、女性部署の筈じゃ？」

薫がブルーマーメイドである事は、ましろは、知っているが次郎も入っている事は知らない、しかも男がブルーマーメイドに入っている事に可笑しいと思うましろ。

薫「あつ?!?それは、その・・・あつ、そうだ!?!ましろちゃん試験勉強の予習遣らないと・・・」

ましろ「ええ、でもまだ、話が・・・」

薫「良いから、早く勉強しないと・・・落第するわよ!」

ましろ「がくん・・・!!は、はい!・・・も、戻ります!!」

落第すると聞いて、ましろは、自分の胸に矢が刺さった様な不安が露になり、急いで自分の部屋に戻る。

流石にましろには、龍之介達Gフォースの事は言えない。

その為、あえてキツイ言葉で誤魔化した。

次郎「相変わらず、お前怖いな・・・」

キツイ言葉を言う薫に怖がる次郎。

薫「兄さんの部屋は2階上がって、直ぐ向こうだから、次郎君もさっさと行きなさい!」

睨み顔で告げる。

次郎「は、はい！」

薫に睨み顔で言われたら、流石に次郎も従うしかない。

次郎は、2階に上がり龍之介の部屋に向かう。

薫「さて・・・私は、と・・・」

薫は、自分の部屋に戻る。

宗谷家、龍之介の部屋

次郎「失礼しまゝす！勝手に入りまゝす！」

次郎は、龍之介の部屋に入り、本が並べている棚に向かう。

次郎「えくと、ここらへんの筈だが・・・有った!!」

棚から目的の本を取り出す。

漫画のタイトルは、SF漫画のクラッシュジョウ。

次郎「有った、有った!!」

目的の本が有った事に喜ぶ。

しかし、次の瞬間

次郎「えっ!?!・・・わあ・・・!?!」

ズドン!

宗谷家、薫の部屋

薫「な、何!？」

突然、もの凄い音が鳴ったのを聞いて、薫は、急いで龍之介の部屋に向かう。

そして、ドアを開けると・・・其処には・・・

宗谷家、龍之介の部屋

薫「な、何しているの次郎君?」

薫が見たのは、本棚から落ちてきた本の山に埋もれた次郎の姿だった。

次郎「う・・・う・・・」

如何やら、本を取りだしたのは良いが、その瞬間、棚に収まっていた全部の本が一斉に次郎の前に落ちてきて、流石の次郎も避けられず、本の下敷きになった。

薫「ああ、大丈夫?」

次郎「だ、大丈夫・・・少しドジった!」

薫は、仕方なく、本に埋もれた次郎を救出して、それから散らばった本を元の棚に戻す。

次郎「いや、薫が手伝ってくれたお陰で元通りだ。」

薫「気にしなくて良いよ・・・次郎君は、この前の訓練で助けてくれたじゃないの!」

次郎「ああ、そうだったな・・・」

この前の訓練を思い出していると

薫「次郎君……えい!？」

薫は、次郎にいきなり抱き付く。

次郎「な、何だよ薫!?! ……いきなり抱き付いてきて?」

いきなり抱きつかれ、戸惑う次郎。

薫「だくて、こういう事したかったんだもん、フヒヒヒ……」

実は、薫は、以前、龍之介と真霜の快樂を見て、そろそろ自分も次郎と快樂がしたくなつたのだ。

だが

次郎「いや、こういう事をされても……」

薫「何よ! 次郎君こういう事されるの嫌なの?」

薫は、不機嫌そうな顔をするが

次郎「いや、そうじゃなくて……」

薫「じゃ何?」

次郎「唯……こういう事をするなら……場所を変えた方が良いんじゃないのか
なつて……」

次郎は、薫との快樂が嫌だった訳じゃない、唯、場所が悪かった。

薫「えつ……そうか! ……此処は、兄さんの部屋だった。」

薫は、辺りを見渡すと、此処が龍之介の部屋である事を思い出す。

薫「じゃ、私の部屋に行こうか？」

次郎「ああ、それが一番だな・・・」

2人は、薫の部屋へと移動する。

宗谷家、薫の部屋

薫「此処なら、問題ないでしょ・・・キヤア!?」

いきなり次郎に後ろから抱き付かれ、そのままベッド直行した。

薫「な、何するのよ!？」

いきなり抱き付かれ、驚愕する薫。

次郎「何って!?!お前だって仕様としたじゃないか?」

薫「それはそうだけど、いきなりは卑怯よ!!」

次郎「何言ってるんだよ!こういう事に卑怯も何も無いぜ!」

確かに今から仕様とする事に卑怯も何も無い。

次郎「何なら止めるか?」

今ならまだ止められる。

しかし

薫「ううん、やる!此処で止めたくない!!」

次郎「じゃ覚悟しろよ!・・・今さらこんな嫌な奴と一緒になるなんて事を・・・」

薫「別に次郎君は、そんな嫌な奴じゃないし、そんな次郎君、好きだよ!」

次郎「え、本当に?」

薫「本当よ・・・んっ」

次郎「んっ!?!」

薫は、次郎に迫り、次郎の唇を奪う。

『ちゅっ・・・んんっ・・・んむっ・・・』

口付けを終えたら、薫は、突然、着ていた服を脱ぎ始めた。

次郎「な、何やってるんだ薫!?!」

薫「何って、快樂する時、服が邪魔でしょ!」

次郎「それは、そうだけど・・・」

薫「ほくら、次郎君も服を脱ぐ!」

次郎「えっ!?!いや、でも、俺は?」

薫「つべこべ言わずにさっさと脱ぐ!」

次郎「は、はい!」

薫に言われ次郎は服を脱ぐ。

そして、お互い生まれた姿のまま、ベットに寝転がる。

次郎「ん……」

次郎は、薫の胸を見て、恥ずかしそうな顔をする。

そんな次郎を見た薫は、次郎の手を

ムニャ!

自分の胸に当てる。

次郎「な、何するんだよ薫!」

薫「だって、戸惑っている見たいだから、その気にさせたのよ!」

これは、雅に真霜が龍之介に媚薬を飲ませた事と同じ、いや、それ以上に次郎をその気にさせている。

次郎「ん……」

最早、返す言葉も無く。

そして、龍之介が真霜にした様に次郎も薫の乳房を責め、薫は、真霜見たいにけたたましい叫び声を上げず、次郎は責め立てる。

今度は、薫が次郎を仰向けにして、その上に乗る、責め立てた。

そのような状態が、しばらく続き、やがて、快感を味わった。

数十分後

しばらくして、お互いに脱いだ服を着る。

次郎「それにしても、お前、俺に責められても、あんまり悲鳴出さなかつたな……」
薫「だって、あんまり悲鳴を出すと、隣で勉強中のましろちゃんにばれちゃうでしよ
う。」

確かに悲鳴何か上げたら、隣で受験の勉強中のましろに感づかれる恐れがあつた為、
薫は、あえて悲鳴を出さず、我慢して、一気に絶頂した。

次郎「それもそうだな……」

次郎も納得する。

それから数時間後

宗谷家、玄関

真霜「ただいま！」

時刻は、もう夕方、龍之介と出かけていた真霜が帰つて来た。

薫「お帰りなさい!!」

真霜の帰りを夕食仕度中の薫が出迎える。

真霜は、玄関辺りを見渡し

真霜「……今……誰も居ない？」

気づかれない言葉で薫に聞く。

薫「大丈夫！今ましろちゃん以外誰も居ないよ！」

薫の言葉を聞いて

真霜「ふう……大丈夫よ！」

後ろに合図をする。

そして、門の影から龍之介が現れ

龍之介「……はあ……よし！」

龍之介は、玄関に入り周りを見て、誰も居ない事を確認してから家に入った。

龍之介「あれ、誰か来ていたのか？」

龍之介は、リビングに空になった湯のみとお菓子が置いてあった事に気づき誰か居た形跡があった事を視認する。

薫「ん、先まで次郎君が居たよ！」

薫は、次郎が来た事を龍之介に報告する。

しかし、あの事は、龍之介には黙る事にした。

龍之介「そうか……で次郎は？」

薫「それが……ほんの少し前に帰えちやつて！」

龍之介「何だよ、もう少しゆっくりしていれば良かったのに……」

真霜「多分、向こうもそんなに長く居ては駄目だと思っただんじゃない！」

薫「そうだと思いますよ……それに今次郎君が居たら、兄さんと真霜姉さんの関係

がばれちゃうんじゃないの……」

『確かに……!!』

2人は納得する。

真霜「それより、今日の夕食は何？」

薫「うぬ、今日は、私なりにアレンジした特性野菜シチューです!!」

今日の夕食は、薫がアレンジした野菜のシチューだ。

龍之介「野菜シチューか、あんまり好きじゃないんだよね……」

真霜「指揮官たるもの何を言ってるの！好き嫌いは駄目よ！」

好き嫌いうる龍之介を指導する真霜。

龍之介「お前は、俺の先生かよ真霜？」

真霜「あら、私は、貴方の恋人なんだけど……」

龍之介「ん……」

龍之介は、真霜に負けてしまい。

真霜は、笑う。

龍之介（とんでもない恋人を持ったもんだ俺は……）

今さら後悔しても遅い、龍之介は唯笑う。

しかし、その光景を隅こで見ている者がいた。

ましろ「ん……」

それからしばらくして、真雪と真冬が帰宅し、夕食をとる。

夕食の席の中、ましろは、龍之介と真霜を見て、

ましろ（真霜姉さんは、龍之介兄さんと付き合っているのかな？）

如何やら、宗谷家の中で龍之介と真霜の關係に気づいた者が出た様だ。

ますます隠せなくなる。

その間に次郎と薫は、ますますな關係になるだろう。

第28章 アメリカ大統領

10月25日

横須賀基地

空母大鳳、艦載機格納庫

この日、龍之介とその幹部達は、空母大鳳の艦載機格納庫にいた。

龍之介「……………」

何故、龍之介とその幹部達が艦載機格納庫に居るか

それは

功「整備班長！」

文雄「ん!?!ああ参謀に准将!?!」

龍之介「どうだ、こいつは？」

文雄の後ろには、この前の訓練で薫達が回収した例のブツが有った。

功「何か分かりましたか？」

文雄「いや……最初は何なのか分かりませんでしたけど……主任のお陰で、こい

つの正体がようやく掴めそうです。」

実は、この前の訓練で回収して以来、慶介と文雄達が調査をしていた。

表面は錆付いていて、最初は何なのか分からなかったが、時間を掛けて、調査した結果、ブツの正体が判明した。

龍之介「ところで主任は？」

調査している筈の慶介が何処にも居ない。

文雄「ああ、それなら先、慌てて、コンピューター室に行きましたよ・・・ブツから取り出したブラックボックスを持って・・・」

龍之介「コンピューター室？」

空母大鳳、コンピューター室

その頃、慶介は、コンピューター室で例のブツから取り出したブラックボックスを解析していた。

慶介「こんな・・・馬鹿な!？」

ブラックボックスを解析した内容を見て、慶介は驚愕する。

慶介「急いで准将に報告しないと！」

慶介は、コンピューター室を後にし、艦載機格納庫に戻る。

艦載機格納庫に戻ってきた慶介は、例のブツに参謀の功や薫が居たのを確認し、龍之介が居ると思ひ、近づく。

慶介「徳吉参謀!!」

功「ああ、主任!」

慶介「このブツから取り出したブラックボックスを解析したところ・・・驚くべき事が分かりました!!」

慶介は、功にブラックボックスの解析結果を報告する。

功「それで、このブツの正体は?」

慶介「それは准将にも報告したいのですが・・・准将は?」

慶介は、功の周りを見るが、其処に龍之介の姿は無かった。

功「それが・・・先まで居たんですけど・・・急に国土交通省の方から呼び出しを受けて、そっちに行ってしまわれたので・・・」

慶介「そ、そんな!? 折角、大事な情報を掴んだのに!!」

実は、慶介がコンピューター室で解析中の間に

10分前

功「如何しますか准将?」

龍之介「仕方がない待つか?」

龍之介は、解析に行った慶介を待つ事にしたが

GF隊員「准将!」

龍之介「何だ？」

GF隊員「国土交通省の役人が来てますが？」

龍之介「国土交通省？・・・通せ！」

龍之介は、国土交通省だと聞き、深町の使いだと思い、艦載機格納庫に通す。

GF隊員「お連れしました。」

お連れしましたと聞いて、龍之介は、振り向くと

龍之介「ん!？」

謎の黒ずくめの男「山本監督官ですね！」

龍之介の前に現れた深町の使いの役人は、黒いスーツ姿をした男性が2人、しかし、彼らの表情は怪しげな顔をしていた。

龍之介「そうだが・・・」

龍之介は、怪しげながら答える。

謎の黒ずくめの男「我々は、深町国交相から直接命令を受けて・・・山本監督官！貴方をお迎いに上がりました。」

龍之介「迎え!?何要でだ？」

謎の黒ずくめの男「それは、此処では申せません・・・如何か、ご同行を？」

龍之介「ん・・・分かった。」

大事な用件で話したいそうなので、龍之介は、2人の黒ずくめの男達に同行する事にしました。

功「准将、私も行きます!!」

謎の黒ずくめの男「深町国交相の指示で山本監督官お一人だそうです。」

2人の黒ずくめの男達は、龍之介一人を連れてくるよう指示されているが

それに対して功は納得しない。

功「しかし、私は、参謀です!参謀は、指揮官と同行できる資格があるのですが!」

確かに功は、龍之介の参謀で言わば補佐役でもある。

普通なら同行するのが当たり前である。

しかし、2人の黒ずくめの男達は、如何しても龍之介だけを連れて行きたい様だ。

それを見た龍之介は

龍之介「参謀!・・・此処は、大人しく指示に従おう。」

功「いや、しかし!」

龍之介「後を任せるぞ参謀!!」

功「ん・・・分かりました。」

龍之介は、功に艦隊の全権を任せて

薫「兄さん!」

龍之介「艦長、大丈夫だ！・・・直ぐ戻る。」

薫には、直ぐ戻ると言つて落ち着かせた。

その後、龍之介は、外に迎えが来ていた車に乗り、国土交通省に向かう。

龍之介が行つた後、薫は、直ぐに携帯で真霜に連絡する。

国土交通省の専用車、車内

龍之介「で・・・何所へ連れて行くんだ？」

龍之介は、車内で改めて、何所へ向かうか問う。

謎の黒ずくめの男「国土交通省です。」

龍之介「隠すのを止めろ!!お前らが国土交通省の人間だと言う事は御見通し何だ!!」

龍之介は、黒ずくめの男達が深町の使いではない事を見抜いていた。

だが、黒ずくめの男達は何も答えない。

龍之介「おい！聞いているのか？・・・おい！」

何も答えない黒ずくめの男達を責めると

ガチャ！

龍之介「!？」

突然、横から拳銃の様なものを付き付けられる。

謎の黒ずくめの男「あまり反論せず、我々の指示に従ってください！」

龍之介「やはりお前ら！・・・国土交通省の人間じゃないな！・・・何者だ？」
やはり、この連中は、深町の使いの者では無い様だ。

謎の黒ずくめの男「それは貴方が知る事ではありません・・・唯黙って、我々の言う通りにして下さい。」

龍之介「ん・・・」

龍之介は、連中を叩きのめして、逃げ様と思つたが、こいつらが何者か、正体を暴く為、大人しく指示に従う事にした。

車は、港まで行き、其処でクルーザに乗り換えて、東京へと向かう。

東京に着くと今度は待っていた別の車に乗りある場所へと向かう。

龍之介（一体何所に向かうんだ？）

一体何所に向かうのか、龍之介は全く分からなかつたが

謎の黒ずくめの男「着きましたよ！」

車は、目的地に着き、龍之介は、車を降りると目にした其処は

龍之介「此処は・・・首相官邸!？」

龍之介が連れて来られた場所は、何と日本の最高指導者である総理が居る首相官邸だつた。

だとすると、龍之介を呼び出したのは紛れもない、あの男だ!!

そして、龍之介は、黒ずくめの男達に連行された状態で首相官邸の裏口から入り
首相官邸、廊下

謎の黒ずくめの男「此方へ！」

そのまま、ある部屋に着く。

龍之介「この部屋に何がある？」

謎の黒ずくめの男「貴方に会いたい方がおらしやれます。」

それを聞いて、大人しく入る。

首相官邸、応接室

謎の黒ずくめの男「失礼します・・・山本監督官をお連れしました。」

龍之介「・・・」

龍之介が部屋に入ると、其処には龍之介が思っていた通り、龍之介を呼び出した張本人の田沼総理と2人の側近が立て居て、隣の応接用のソファーには、体格の大きい謎の外国人が座っていた。

田沼「ご苦労だった。」

龍之介を連れてきた謎の黒ずくめの男達は、龍之介を残して、部屋を去る。

彼らの正体は、おそらく要人警護のSPか公安の連中だろう。

龍之介「やっぱり、あんただったか、田沼総理！」

田沼「久しぶりだね山本君!・・・1ヶ月振りかな?」

龍之介と田沼の再会は、あの1件以来、実に1ヶ月振りである。

龍之介「俺は、2度と会いたくありませんでしたけど・・・」

側近「無礼だぞ!!」

田沼「良い!・・・私も君見たいな人間は嫌いでね!・・・この前の1件で君や深町君のお陰で私は、窮地に立たされてしまった。」

この前の技術取引で龍之介に拒否され、更に深町に多額の裏金疑惑の証拠を突き付けられ、止む無く敗北を認めた。

そのせいで、アメリカとの裏取引もご破算になり、今後の政治政策に亀裂が生じてしまったのだ。

龍之介「それはお気の毒ですわね・・・でも総理!・・・貴方は、我々の技術を無断でアメリカに売り渡そうとした・・・言うなれば自業自得だ!!」

龍之介に一方的に攻められ田沼は悔しがる。

田沼「ふん!・・・相変わらず、食えぬ男だ。」

龍之介「で、俺を態々此処に連れてきた用件は?・・・前の事でしたら、お断りですよ!」

龍之介は、自分を此処に連れてきた用件を問う。

田沼「……」

謎の外国人「彼を責めないでくれ！……私が君を此処に連れて来るよう彼に頼んだのだ。」

龍之介「何!?!」

如何やら今回、龍之介を呼び出したのは、田沼では無く、隣の応接用のソファに座っている謎の外国人が要が有る様だ。

龍之介「誰だあんたは?」

龍之介は、生意気に言う

側近「無礼だぞ山本監督官!!……この方は、アメリカ大統領閣下で在られますぞ!!」

龍之介「な、何だと……ア、アメリカの大統領!?!……この男が……」

何と座っていた謎の外国人は、アメリカのジョージ・キング大統領本人だった。

龍之介「し、失礼しました!!……来日していたと言うニュースは聞いていましたが……雅か、お目にかかれるとは……」

アメリカ大統領キングが来日していた事は、龍之介は、ニュースで知っていたが、雅か、直にお目にかかれるとは、龍之介は、思いもよらなかった。

龍之介「で……その大統領が、俺に何のご用件で?」

龍之介は落ち着いて、用件を問う。

キング「話が速いね!・・・では、率直に言おう!・・・ミスター山本!・・・私は、君達が持っている技術が欲しい!・・・我国に譲ってくれないか?」

今度は、アメリカの大統領直々で、また技術提供の事を協議しに来た様だ。

龍之介「ん・・・大統領閣下!・・・技術を渡せと言うが・・・この前の深町国交相の提案で・・・各国のブルーマーメイドやホワイトドルフィンの上に提供する事が決まっている事は、閣下も知っている筈?」

確かに、この前の一件以来、日本だけで技術を独占する事は危険だと判断し、白鳳の技術以外の航空機などの技術を各国のブルーマーメイドやホワイトドルフィンの上に提供する事で、各国は同意している。

しかし、まだ各国は、航空機の開発には興味が薄く、実用化には程遠い。

キング「勿論、知っている・・・だが、我々が欲しいのは、もっと優れた技術だ!!」
如何やら、航空技術の独占じゃない様だ。

龍之介「優れた技術と言いますと?」

田沼「言わなくても分かる筈だろう・・・君等が保有している白鳳だよ!!」

龍之介「な、何!？」

何とGフォース艦隊の対ゴジラ兵器の要である白鳳が目的だった。

目的が白鳳だと言うと狙いは、白鳳の動力源でもあるレーザー核融合の技術。

龍之介「ん……何の目的に使用されるのですか？」

龍之介は、怪しげに何の目的に使用されるのか問う。

田沼「勿論、平和利用の為だよ、山本監督官！……今現在、我が国は、エネルギー開発でアメリカとの共同開発に同意している……しかし、まだ開発には保々遠いだろう……だが、君が保有している白鳳のレーザー核融合の技術を提供してくれるなら、開発は進む……そうなれば、我が国とアメリカは、他国を超えるエネルギー大国になる。」

キング「イエス、その通りだ!!……核融合の開発は、我国の研究者が何年もかけて研究しているが、まだ実用化には到らない……だが、君達が保有しているスーパー兵器を我国に提供してくれるなら、大いに助かる。」

今、現在、使用されているエネルギーは、水力や火力などのクリーンエネルギーで、その上の原子力は、まだ研究段階で日本とアメリカが共同で開発中だが実用化は保々遠い。

だが、核融合の技術が手に入れば何年もかけて研究していた核融合の開発が可能だろう。

そうなれば、日本とアメリカは、途轍もないエネルギーを手に入れる事になる。

それで田沼の意見とキングの意見が一致した。

キング「さあ、ミスター山本！……白鳳を渡してくれ！……渡す事を約束するな

ら我国は、何でも提供を惜しまない。」

田沼「如何だね山本君！・・・こんな美味しい話はないだろう・・・さあ、我々に白鳳を素直に渡してくれ！・・・渡してくれるなら、此方も相應の地位を授ける事を約束しよう・・・例えば、今宗谷監督官の指揮下で動いているが・・・ならば宗谷監督官より更に上の地位にして上げよう・・・それだけじゃない、金やそれに似合う豪邸もくれてやろう。」

またしても、金や地位で揺すろうとしている。

あの1件の敗北で全然懲りっていない。

しかし、龍之介の答えは

龍之介「残念ながら答えはNOだ!!」

『!?!』

2人の申し出を龍之介は拒否した。

田沼「如何して断るのだ山本君?・・・金や地位が手に入るんだよ・・・悪い話じゃないだろう。」

龍之介「別に金や地位に興味はない・・・俺が渡したくない理由は、あんた達が危険だと言う事だ!!」

キング「何を言っているのだ!?!・・・我々は、平和の為に使用するのだよ!」

龍之介「そんなウソに誤魔化せるとでも思ったのか、この大バカ野郎共!!」
キング「何!？」

龍之介「あんた達は、平和利用に使用すると言っているが……あんた達は、必ず、この技術を使つて、最終兵器を作るだろう……そうなれば平和利用ではなくなる……その時になつたら如何するのですか？」

確かに今、この世界は、戦争を知らない世界。

もし、この技術を渡せば、人類の最終兵器水素爆弾の開発が可能になる。

そうなれば、この各国は互いに争い、最後には破滅するだろう。

そうなつたら、取り返しが着かなくなる。

田沼「そうなるなら好都合だよ!……そうですな大統領閣下!!」

キング「その通りだミスター田沼!……そうなれば、我国は挙つて、各国とのビジネスが可能になる……我国が莫大な利益を得られるのは明らかだ……アメリカファーストの第一目的にもなる。」

やっぱり田沼と同じで、この大統領も人の命より利益しか考えていない。

人が死んでも何とも思わない。

雅に悪魔だ。

それに対して、龍之介は、

龍之介「総理！あなたは全く懲りていないな！」

田沼「何だと!？」

龍之介「この前、俺が言った事を忘れたか!・・・俺は、あの時、結局、自分の利益のためにしか考えていない・・・その為が大勢の人が、罪のない人が死んでいく・・・あなたは、その事を考えた事があるのか!!・・・俺は、そうあなたに言った・・・考えを改めてくれる事を信じて・・・だが、あなたは、全く変わっていない!!」

田沼「ふん!・・・そんな奴らは、どうせ自業自得の人間だろう・・・そんな奴ら、死んでも構わん!」

キング「その通りだ!!そんな奴らは、金も無い貧困層の連中だ!!」

富裕層の事しか考えていない、貧困層の連中は如何でも良いのか?

龍之介「あなた達は、人の人生を何だっと思っっているんだ!!」

貧困層の連中を馬鹿にする言葉を聞いて、龍之介は切れた。

側近「失礼だぞ山本監督官!!」

龍之介「五月蠅い!!総理!・・・今この国が繁栄しているのは、貧困層の連中が血や汗を流して、気づき上げた努力で繁栄しているんだ!!・・・そんな彼らを馬鹿にする権利があんたに有るのか!？」

田沼「黙れ!!貴様、雇われの分際で・・・」

龍之介「ああ、今の俺達は雇われだ!!・・・だが、それでも人類の為に尽くしているんだ!!」

龍之介は黙らず、それに田沼は怒り狂う。

一触即発の事態になろうとしていた。

その時

S P 「失礼します!!」

突然、部屋の外に待機していたS Pが入ってきた。

側近「何だ!!今は取り込み中だ!!」

S P 「申し訳ありません・・・深町国交相が来ておられますが・・・」

『!?!』

田沼「深町君が!?!後にしろと伝えろ!!」

深町「いいえ、待てません。」

S Pを避けて、強引に入る深町。

田沼「深町君!?!」

深町「こんな事だと思ってましたよ総理!」

田沼「何しに来た深町君!・・・君を読んだ覚えはないぞ!!」

深町「突然、押し込んで申し訳ありません総理!・・・しかし、私に一言も無く、山

本監督官を招集させるとは何事ですか？」

田沼「私は、総理だ！君にとやかく言われる筋合いはない！」

深町「それでも山本監督官は、宗谷監督官の指揮下に入っている……つまり私の指揮下も同然です。」

確かに龍之介は、真霜の指揮下で動いている。

招集するなら、その上の上司である深町に一言、言わなければならない。いくら総理でも

深町「おや!?……キング大統領閣下が居られるとは奇遇ですね？」

深町は、直ぐ田沼の横に居た男がキングだと分かった。

深町「何故、キング閣下が此処に?……雅か総理、また、この前の1件のお話か？」
田沼「……」

深町「この前の1件の事なら各国のブルーマーメイドやホワイトドルフィンのみに提供する事で同意した筈です……それとも、また、黙って、密かに優れた技術を獲得しようとしていたのではないでしょうね？」

田沼「そ、それは……」

深町「お答えください総理！それともお答えできないんですか？」

深町の前では、流石の田沼も何も言えない。

それは、当然だ。

この前の一件で田沼は、深町に弱みを握られている。

だから、言い返す事が出来ない。

田沼「……」

キング「ノンノン、ミスター深町！……ミスター田沼は、その事で、ミスター山本と協議していた訳じゃない！」

責められている田沼をキングが庇う。

深町「では、何の協議をしていたんですか？」

キング「別に大した話ではない。」

深町「ほうう……では、山本監督官を連れて帰っても宜しいですね総理？」

深町は、龍之介を連れて帰ろうとするが

当然、易々と帰れる訳がないと思つたが

田沼「ん……勝手にしたまえ！」

深町が居ては、これ以上、話を続ける事ができない。

此処は、素直に帰すしかない。

深町「では、失礼します……行くぞ山本君！」

龍之介「は、はい！」

深町は、龍之介を連れて、退出しようとする

キング「ミスター山本!!」

龍之介「ん！」

キングは、突然龍之介を引き留める。

キング「私は決して諦めない! . . . どんな事をしても手に入れるつもりだ!!」

そうキングは、龍之介に告げる。

龍之介「. . . .」

キングの言葉に不安を抱きながら退出した。

田沼「申し訳ありません、ミスターキング！」

キング「気にする事わないミスター田沼! . . . しかし、思わぬ所で邪魔が入ったね。」

田沼「大統領! . . . もう少しだけ私に任せて下さい!! . . . 必ず落して見せます!!」

キング「いや、今動いては、ミスター深町の思うつぼ . . . 今は、機会が来るのを待つのだ。」

田沼「はい！」

キング「それより、例の研究は如何なっている？」

田沼「はい、予定通り、順調に進んでいます。」

キング「おお、そうか . . . ハハハ」

深町や龍之介達の知らない所である研究が密かに進んでいた。

その研究とは

アメリカ軍が生物兵器として密かに開発したウイルスを海上安全整備局、海洋研究機関の研究員が実験用のマウスで試し兵器としての威力を研究していた。

結果、ウイルスの支配に耐えきれず、殆んどが全滅したかに見えたが驚くべき事に死んだマウスの中にウイルスの影響下で生き残っているマウスが現れた。

そのマウスは、通常のマウスと違いハムスターに似た形状と色をしていた。

恐らくウイルスの影響下で突然変異したのだろう。

それを聞いた田沼は、そのマウスを処分せず繁殖させる事に決め、繁殖した後、この突然変異したマウスの調査・研究する事を命じた。

しかし、この判断が後に起こるあの事件の引き金になるとは、まだ、知らない。

一方、退出した龍之介は

首相官邸、廊下

深町「大丈夫だったか？」

龍之介「はい、大丈夫です・・・ところで何故此処に？」

深町「宗谷一等監督官から知らせを貰ってね・・・君が見知らぬ男2人が私の命令で連行されたと聞いて、直ぐ総理の差し金だと分かって、此処に来たんだ。」

実は、龍之介が連行された時、薫が携帯で真霜に連絡し、それを聞いた真霜は、直ぐに深町に問い合わせたのだ。

龍之介「そうだったんですか・・・申し訳ありません何から何まで助けてくれて・・・」
深町「いや、私も迂闊だった：：雅か、総理があんな真似をするとは思わなかった：：これは、益々警戒を強めないといけないな・・・取り合えず、1度、宗谷監督官と今後の対策を練ればならんな！」

龍之介「はっ！」

龍之介と深町は、宗谷監督官と今後の対策を練る為、国土交通省に戻る。

国土交通省、大臣室

国土交通省に戻って来た龍之介をある人物が待っていた。

真霜「龍之介!？」

龍之介「む、宗谷監督官!？」

真霜だった。

真霜「大丈夫だった?・・・連行されたって聞いたから心配したのよ!」

真霜は、龍之介に迫り、心配そうな表情で龍之介を見る。

龍之介「あ、ああ大丈夫だ!この通り無事だよ!」

それに対して、龍之介は、驚愕する。

真霜「そう・・・良かった・・・」

真霜は、龍之介の無事な姿を見て安心する。

それを見た深町は

深町「ごほん！・・・お忙しいところすまないが、本題に入らせて欲しいのだが・・・」

真霜「す、すいません!!」

深町「君達がそんな仲になっているとは驚いた・・・雅か、もう肌を合わせる付き合
いまで行ったんじゃないだろうね？」

!!!
!!!

深町「何だ凶星か！・・・まあ良い。」

龍之介と真霜の関係を聞いて、深町は、今後が面白くなってきたと思った。

それから、しばらく今後の対策を協議し、龍之介は、横須賀基地に帰還した。

横須賀基地

龍之介「ただいま!!」

!?!
!?!

龍之介が戻って来た事を知り、G F隊員や幹部達が龍之介の元に集まった。

はやて「准将!!」

なのは「お帰りなさい准将!!」

フエイト「准将ご無事で！」

龍之介の無事な顔を見て、はやて、なのは、フエイトやGF隊員達が喜ぶ。しかし、そうじゃない者もいた。

美由紀「全く准将は、どれ程皆を心配させれば気が済むのですか？」

そう美由紀である。

功「まあまあ、兎に角、無事に帰って来たんですから、喜ぶべきでは中佐？」

龍之介を叱る美由紀を功が宥める。

美由紀「私は、怒っているんです!!・・・危険な場所に態々1人で乗り込むから、こうなるのです反省して下さい!!」

美由紀は、龍之介が自分に黙って、お供を連れずに1人で行った事に怒っていた。

美由紀にとって龍之介は、指揮官で上司であるから、指揮官としての自覚を持つよう言いたかったのだろう。

龍之介「は、はい！」

それに対して、龍之介は深く反省する。

だが、その反対に一番心配している者もいた。

薫「兄さん！」

それは、妹の薫である。

薫「良かった、無事で!!」

薫は、龍之介に抱き付く。

龍之介「お、おい薫!？」

薫に抱き付かれ、驚愕する龍之介。

薫「もう心配したんだからね!」

薫は、龍之介が連れて行かれた後、心配して、食事も咽が通らなかつた状態になつていたが、龍之介が無事戻つて来た事により安心した。

龍之介「分かつた、分かつたから、良い加減離れろ!・・・皆が見ているだろう・・・それに・・・ほら、次郎だつて、悔しがつてるぞ!!」

薫「ん?」

薫が振り向くと

其処には、次郎が立つており、背後からとつもないオーラを出していた。

次郎（准将!薫から離れて下さい!!・・・いくら兄でも薫は、俺の物だ!!）
如何やら、薫に嫉妬している様だ。

まあそれもその筈、薫と肌の付き合いになつて以来、薫は、もう次郎の物。

そして、真霜は、龍之介の物。

今、此処で不倫したら、真霜に殺される。

だから、龍之介は、薫に離れるよう命じた。
薫もそれに従い離れる。

まあ、龍之介が無事に戻ってきたので、皆バン万歳をする。

それから、龍之介は、指揮官室に戻る。

横須賀基地、指揮官室

慶介「失礼します!!」

しばらくして、慶介が入ってきた。

龍之介「如何した主任？」

慶介「准将!!・・・急ぎお耳に入れたい事が・・・」

龍之介「何だ？」

慶介「これを見て下さい!!」

慶介は、龍之介に例のブツから回収したブラックボックスの解析した資料を渡す。

龍之介は、その資料に目を通す。

龍之介「ん・・・こ・・・これは!？」

資料を見た龍之介は、驚愕する。

龍之介「この資料に間違いはないのか？」

慶介「はい、間違いありません!!・・・艦長達が回収した例のブツは紛れもなくSG

Sです。」

SGS、通称Search Godzilla System

Gフォースが開発した対ゴジラ自動追尾装置。

ゴジラの音や熱を感知し、人工衛星を通じて、Gフォースにそのデータと映像を送信する機器である。

薫と次郎、はやてが回収したブツは、紛れもなく龍之介達の世界で使用されていたSGSその物だった。

しかし

何故、この世界にゴジラを追尾する装置が有ったのか

龍之介は、疑問に思った。

慶介「それと・・・」

龍之介「まだ何か？」

慶介「表面に放射能の反応がありました。」

龍之介「放射能!?!・・・大丈夫なのか？」

慶介「ごく微量だったので、人体への影響はありません。」

龍之介「そうか・・・」

慶介「ですが・・・普通放射能は自然界に存在しません・・・それに、発見された付

近には放射性物質の反応もありませんでした……ですから、この放射能は……ある生物から出たものと思われます。」

龍之介「雅か……奴か？」

慶介「断定はできませんが……恐らく！」

2人の脳裏にゴジラの存在が露になった。

しかし、ゴジラの存在が確認できた訳ではない。

あくまで推測である。

第29章 ゴジラの亡霊

11月1日

国土交通省、国土保全委員会

この日、国土交通省では、真霜の要請で緊急会議が開かれ、深町国交相以下、国土保全委員会の幹部達が招集された。

深町「諸群！・・・お忙しい中集まってくれて申し訳ない！」

委員会の幹部達は、何故招集されたか疑問に思ったが

深町「実は、宗谷一等監督官の要請で・・・宗谷一等監督官！」

真霜「はい！・・・実は、此処に居る山本一等監督官から、ある重大な報告が上がった為、皆さんを招集させました。」

真霜の隣には、龍之介の姿が有った。

真霜「山本一等監督官！」

龍之介「はい！・・・実は、この前の駿河湾での潜航艇の合同訓練で、あるブツを回収しました。」

龍之介は、この前の訓練で回収したSGSの事を委員会の幹部達に報告する。

何故龍之介が此処に居るか

実は、この前の慶介の報告書を見て、脳裏にゴジラの存在が露になった為、真霜にこの事を報告した。

しかし、まだ推測に過ぎず真霜も信じられなかったが、それでも対策を練る為、深町国交相に相談。

深町も龍之介と同じ考えで、直ぐ対策と支援を協議しようと、この会議を招集させた。会議室のスクリーンに回収したSGSが表示され、委員会の幹部達は、手元にあつた報告書に目を通す。

龍之介「お渡しした資料の通り・・・解析と調査をした結果、驚くべき事が分かりました。」

委員会幹部A「何が分かったのかね？」

龍之介「あくまで推測ですが・・・ゴジラの存在が浮かび上がってきました。」

『・・・・』

ゴジラの存在が確認できたと言う事を聞いた深町は驚愕するが、委員会の幹部達は、あまり驚愕しなかった。

龍之介「まだ、あくまで推測ですが・・・もしゴジラの存在が確認できたら・・・我々は、相応の対策を練らなければなりません!!」

龍之介は、もしゴジラの存在が確認できたら、Gフォース西部方面艦隊の総力を挙げて、これに対応しようとしたが、Gフォース西部方面艦隊だけでは戦力が少ない、その為、海上安全整備局の支援が如何しても必要だった。

だが、委員会の幹部達から反って来た言葉は

委員会幹部C「何を言ってるんだ！そんな化け物が居るわけ無い!!」

委員会幹部B「その通りだ!!・・・仮にそんな化け物が居たとしても・・・我が国には、大和を始め18インチ砲搭載の戦艦や最新鋭の艦艇を多数保有しています・・・怪物の1匹や2匹簡単に倒して見せましょう。」

委員会幹部A「それに・・・こんな不確かな情報で海上安全整備局や政府を動かす訳にはいきません。」

委員会の幹部達は、不確かな理由で龍之介からの支援要請を拒否

更に例えゴジラが現れても大和や武蔵などの戦艦で撃退できると思っただけだ。

龍之介「くう・・・」

龍之介は、黙って聞いていたが

委員会幹部A「全く!・・・人騒がせな話は、いい加減にして貰いたいものだな、ハ

ハハ・・・!!」

『ハハハ・・・!!』

委員会の幹部達は、人騒がせな話だと言つて、龍之介と真霜を笑い物にした。

ドーン!!

それに対して、龍之介は切れた。

龍之介「お言葉ですが!!」

真霜「止めて!」

真霜は、龍之介を止め様としたが

龍之介「もしゴジラが現れたら、そんなところの被害ではすみません!!・・・必ず多大なる被害が出ます!!・・・それに対して、我々は、相応の対策を練らなければ・・・」

それでも龍之介は、相応の対策を練ればならないと委員会の幹部達に訴える。

だが

委員会幹部A「止めたまえ!!」

それに対して、委員会の幹部達は、龍之介に止めろと命じる。

龍之介「ん!?!」

委員会幹部A「君は、オブザーバーだ!!反論する権利はない!!」

龍之介「くう・・・!!」

会議は、早々に終了した。

だが、龍之介は、暗い表情で会議室を出る。

それを後ろで見ていた真霜は

真霜「元氣出して！・・・1度負けたからって・・・」

真霜は、慰め様と声を掛けたが

龍之介「慰めは要らねよ!!」

と、真霜の慰めを跳ね退けて、行ってしまふ。

龍之介は、ゴジラの恐怖を過小評価している委員会の幹部達の余りの無能さに呆れて腹が立っていたのだ。

真霜「龍之介・・・」

真霜は、何も言えず唯見ている事しかできなかつた。

そんな時

「随分と浮かない顔しているね・・・宗谷監督官！」

真霜「!?!」

突然、後ろから嫌な声が聞こえたので、後ろを向くと

邦夫「良い気味だ！・・・高々存在しない生物の為に上を動かすなど・・・所詮は、下賤な人間の悪あがきだ。」

其処には、邦夫が立っていて、負けつた龍之介と真霜を嘲笑っていた。

真霜「・・・貴方には分からないわ・・・」

それに対して、真霜は、一言だけ言って、龍之介の後を追う。

邦夫「ふん!・・・何さ・・・」

横須賀基地、会議室

横須賀基地の会議室には、Gフォースの功、美由紀、薫、次郎とブルーマーメイドの真冬、平賀、福内の面々が集まっていた。

功「そうですか・・・やはり向こうは、何の対策も練らないんですか?」

美由紀「仕方ないわ!・・・こんな情報だけじゃ、向こうもそう易々とは動かないでしょう。」

龍之介と真霜から、国土保全委員会との協議の結果を聞いて、功と美由紀は、愕然とする。

真冬「ん・・・なあ!・・・何でゴジラが出たって言うだけで、そんなに難しく考えるんだ?・・・たかが生き物だろ!」

愕然としている功と美由紀に真冬が何故そう難しく考えるのだと言う。

次郎「お前は、ゴジラ戦を経験してないから、そんな口が言えるんだ!!」

真冬「何だよ!!・・・第一、あたし等は、ゴジラの事なんか、何も知らないんだぜ!!」

真冬の言う通り、真霜達は、ゴジラに関しては何も知らない。

功「ああ、そうか!・・・君達には、ゴジラの事は、あまり詳しくは話していません」

たね。」

真冬「そうだよ！・・・いきなりゴジラの事を言われても、あたし等には全く分からないんだぜ!!」

龍之介「次郎、薫！・・・すまんが、大鳳の資料室からゴジラに関する資料を全て持ってきてくれ！」

龍之介は、薫と次郎に空母大鳳の資料室からゴジラに関する資料を全て持って来るよう命じる。

しばらくして、2人が空母大鳳の資料室からゴジラに関する資料をダンボール箱2個分運んできた。

福内「こんなに!?!」

平賀「随分一杯あるんですね・・・」

大量の資料に平賀と福内は驚く。

美由紀「こんなんで驚いちゃ困るわよ！」

そう言つて、美由紀は、持ってきた資料から、古いフィルム箱を出す。

古いフィルム箱には、昭和29年と記載されていた。

フィルム箱からフィルムを取り出し、映写機に設置し、映写機を動かす。

やがて、映写機から50年前の第1次ゴジラ戦の映像が映し出された。

『あつ・・・!?!』

その映像を見て、真霜や平賀、福内は驚愕する。

100mぐらいのある生き物が建物を物ともせず壊しながら進んでいく。

更に何門もある地上砲や航空機の攻撃にはビクともせず、熱線で一瞬で破壊されていく。

都市部は火の海になり、市民は、その中を逃げ惑う。

美由紀「これが50年前の最初のゴジラ戦の戦闘・・・見ての通り・・・私達が使用している武器、頭脳を結集してもゴジラに対抗する事が出来なかった。」

映像を見ながら、美由紀は、自分達が、ゴジラに対して無力だった事を語る。

平賀「そんな、じゃ私達の戦力では全くの無力ではないですか？」

それを聞いた平賀は、自分達の戦力も一緒だと思った。

薫「そうとは言いきれないわよ平賀さん!!・・・最初のゴジラは、抹殺に成功したって、聞いているわ!!」

だが、薫から最初のゴジラは抹殺に成功したと告げられる。

平賀「えっ!?!」

福内「如何やってですか？」

如何やって、ゴジラを倒したか、平賀と福内は注目する。

薫「確か……ある科学者が開発した物質でゴジラは死んだって聞いているけど……」
平賀「その物質とは？」

薫「確か……」

慶介「オキシジエン・デストロイヤーだ!!」

薫に代わって、慶介が説明する。

『オキシジエン・デストロイヤー!?!』

オキシジエン・デストロイヤーの言葉に真霜達は注目する。

慶介「通称、水中酸素破壊剤!……物理学者の芹沢大助博士が開発した兵器で……特殊な物質を電磁的に反応させる事により水中の酸素を一瞬で破壊し、その場にいる全ての生物を一瞬のうちに死に至らしめるうえ、完全に液化する……それを使用してゴジラ抹殺に成功している。」

『あっ……』

平賀「凄いですね……」

慶介からオキシジエン・デストロイヤーの威力を聞いて、真霜達は驚愕する。

慶介「残念ながら、この兵器の製造は不可能だ!」

だが、慶介は、オキシジエン・デストロイヤーの製造は不可能だと告げる。

『えっ!?!』

平賀「何故ですか？」

何故、不可能か理由を問う。

慶介「あまりの破壊力に芹澤博士が自らの命と共に研究を消し去ってしまったんだ……だから、資料も残っていないから製造する事が出来ない。」

福内「資料が無いって事は、どんな兵器かも分からないんですか？」

慶介「そう、全く分からない。」

オキシジェン・デストロイヤーの破壊力に恐れをなした芹澤博士が自らの命と共に研究を消し去ってしまった。

真冬「ゴジラを倒せる唯一の切り札を何で消し去ったんだ？」

美由紀「それはね……兵器としての転用を恐れたからよ！」

『!?!』

美由紀「考えても見なさい!!……こんな物を開発したら、誰だって兵器として使用する……そうなれば、人類は破滅してしまう。」

平賀「破滅!?!」

真冬「破滅は嫌だな……」

美由紀「だから、我々はゴジラ戦後、核兵器の開発を止め、核の平和利用や核兵器廃絶の原則を制定して、更に世界にゴジラの被爆国として核兵器廃絶を訴えたの……再

びゴジラの悲劇が起きない様に……」

平賀「そうなんですか？」

美由紀「でも残念ながら……各国は、日本の申し出を無視したわ!……特にアメリカとソ連は……その為に第2のゴジラを生み出す結果になったわ!」

真霜「それが貴方達と戦ったゴジラね!」

美由紀「そう!……今から15年前の出来事……その時は、アメリカとソ連がゴジラに対して戦術核攻撃で対抗しようとしたけど……当時総理であり、後に国連事務総長となる三田村清輝が、これを拒否したのよ!」

真冬「何でだ?」

次郎「核で生まれた生物が核で死ぬ訳がないと思っただろう……まあ、ゴジラは、水爆実験で生まれた生物だからな!」

真霜「でも如何やって対抗を?」

慶介「其処は、最初のゴジラ戦から30年経っている……それぐらいの兵器は有るし、ゴジラの生態の研究も進んでいた。」

美由紀「そのお陰で我々は、ゴジラを撃退する事に成功した。」

真霜「撃退!? 撃退はできなかったの?」

美由紀「抹殺までは不可能よ!……第一、通常兵器が効かないから、ゴジラの生態

の特長を利用して、三原山に落とすぐらいしかなかったの! . . . それから10年! . . . 世界は、やっとゴジラを脅威と認識して、国連でG対策センターが設立され、そしてゴジラに対抗する部隊として、我々Gフォースが組織された . . . それが今の我々よ!」

第2次ゴジラ戦からGフォース創設を語る。

真霜「成程! . . . 50年も経って、やっと世界がゴジラを脅威と認識して、今の部隊が誕生した。」

美由紀「その通りよ宗谷監督官! . . . しかし、それでもゴジラの戦いは卑劣さを増した . . . 其処で我々は、ある究極兵器の開発に乗り出した。」

『究極兵器?!』

美由紀「そう! . . . 通常兵器では、ゴジラに太刀打ちできない . . . 其処で考えたのがゴジラには、ゴジラ . . . 生体ロボットの開発よ!」

次郎「三式機龍だな!」

真霜「三式機龍!」

平賀「三式機龍とは、どんな兵器ですか?」

美由紀「その質問には . . . 矢野主任!」

慶介「はい!」

スクリーンに映像が映し出され、慶介は、三式機龍の説明をする。

慶介「三式機龍とは、別名メカゴジラとも言われ、房総半島沖で発見された最初のゴジラの骨を利用して、完成させた対ゴジラ用戦闘マシンです。」

福内「こんな兵器が？・・・貴方達、白鳳だけじゃなく、こんな物まで作っていたの？」

三式機龍の映像を見て、平賀や福内は驚愕する。

次郎「相手は、ゴジラだぞ！・・・究極兵器なら、これぐらいは凄くないと・・・」

美由紀「こら、威張らない！」

次郎「すみません。」

美由紀「まあ、兎に角・・・我々は、ゴジラに対抗する兵器を手に入れた。」

福内「それでゴジラを倒す事は出来たのですか？」

美由紀「ええ！・・・究極兵器を失いながらもゴジラを海底深くに葬る事に成功した・・・」

それがつい1年前の事。」

真霜「そうだったの・・・」

真霜は聞きながら、龍之介の方を見る。

龍之介は、ボーと窓の外を見ていた。

あらかたの説明が終わった時

次郎「で如何するんです准将？」

龍之介「如何するとは、次郎？」

次郎「決まっているだろ・・・上の支援が得られないなら、俺達だけで対処しようぜ!!」

次郎は、海上安全整備局の支援が得られない以上、Gフォースだけで、対処しようとして龍之介に告げる。

美由紀「何を言ってるの小沢中佐!・・・今の少ない戦力で一体何が出来るの?・・・しかも対抗できる武器も数が少ない・・・ましてや当てもないゴジラ搜索は、かなりの時間と遠出にもなる・・・それに使える物資も限られているのよ!」

次郎の提案に美由紀は反対する。

美由紀の言う通り、今のGフォース西部方面艦隊の戦力は、大型空母1隻、高速戦艦1隻、巡洋艦2隻、護衛艦4隻、補給艦2隻、航空機100機、特殊艦1隻

ゴジラに対抗するには戦力が少ない、そして、対ゴジラ兵器の在庫（フルメタルミサイル、D-03 掘削弾）も少ない。

また、ブルーマーメイドから供給されている物資も限られている。

これでは、ゴジラ搜索は不可能である。

次郎「だが、ゴジラの存在が浮かび上がってきた以上、俺達は、俺達が出来る事をすべきじゃないのか?」

だが、それでも次郎は、ゴジラ搜索をすべきだと訴える。

薫「私も賛成です!!」

薫も次郎に同意する。

美由紀「山本中佐まで!」

薫「確かに私達の戦力は少ないけど、私達は、Gフォースです……どんな困難に有つても決して諦めず戦う事が私達の使命ではないですか?」

どんな困難に有つても決して諦めてはならない。

それがGフォースのもつともある。

美由紀「そうね!……諦めず戦う事が我々のもつとだったわね……でも、それは、此処では通用しないのよ山本中佐!」

薫「しかし、このまま手をこまねいては、私達は、何の為に此処に来たのか分からなくなるじゃないですか?」

次郎「薫の言う通りだ!!……このまま手を拱いては、俺達は、何の為に此処に来たのか分からなくなる……此処は早々に動くのみ!」

薫と次郎は、早々に動くのに賛成し、美由紀は、それに反対する。

意見は、二つに分かれ

美由紀「私が言えるのは此処まで……後は、准将にご決断して貰いましょう。」

後は、龍之介の決断に全てを委ねる事になった。

龍之介「……はあ……難しいな……今、我々は、孤立している……武器も物資も足りない……それに数も少ない……この状態では、とてもゴジラ搜索やゴジラ戦は、不可能に近い……だが、このまま手をこまねく事もできない……さて如何するか?……難しい決断だな!」

龍之介は悩んでいた。

普通なら、ゴジラ戦で直ぐ決断を出せるのに、今は、出せない状態になっていたのだ。

真霜（龍之介……）

真霜は、龍之介が悩んでいた事に疑問を抱く。

普通なら直ぐ決断できるのにそれが出来ない。

やはり、あの会議での屈辱が龍之介を悩ませているんだろう。

龍之介「すまないが考えさせてくれ。」

結局、直ぐには決断できず

この問題の結末は、明日へと先延ばしされた。

真霜は、横須賀のブルーマーメイド庁に戻ろうとしたが、龍之介の事が心配になり、指揮官室に戻ろうとしている龍之介を追いかけ様としたが

平賀「如何したんですか宗谷監督官?」

真冬「如何したんだ真霜姉？」

真霜「えっ……うん、うん……何でもないわ。」

真霜は、結局、戻る事にした。

宗谷家

真霜「ただいま！」

夜、真霜は仕事を終え、宗谷家に帰宅する。

真雪「お帰りなさい！」

帰宅した真霜を母、真雪が出迎える。

真雪「疲れたでしょう真霜！先にお風呂に入ったら？」

真霜「うん、そうするね。」

真霜は、お風呂に入るため部屋に戻り、着替えてからお風呂場に向かう。

しかし、途中、龍之介の事が気になり、龍之介の部屋に寄る事にした。

部屋を覗くと

部屋の中に考え込んでいる龍之介の姿が有った。

今日は、薫は、当直で居ない。

その為、今日は、龍之介一人で帰ってきた。

しかし、龍之介の表情は、暗かった。

真霜は、今入るのは不味いと思ひ、そのままお風呂場に向かう。

宗谷家、リビング

その後、夕食の時間になり、5人は食卓を並べながら食事をする。

食事中、真霜は、食べながら龍之介の方を向く。

龍之介は、あまり喋らず、表情は暗いまま食事をしていた。

その光景を真雪が心配そうに見て

真雪「ねえ真霜！・・・龍之介さん如何したの？・・・何か暗いけど何か遭ったの？」

何か遭ったのか真霜に問う。

真霜「うん、ちよつとね・・・後で説明するね。」

流石に龍之介の前では、説明できず、夕食が終わってから説明する事にした。

しかし

真冬「よう龍之介！・・・そんな暗い顔をして・・・明るく行こうぜ、明るく！」

暗い龍之介を慰め様と真冬が声を掛ける。

真霜「全く、あの子つたら余計な事を・・・」

真霜は、今の龍之介は、機嫌が悪いから切れるかも知れないと思つたが

龍之介「はあ・・・お前は、のてんきで良いな・・・」

暗いだけで切れていない様だ。

真霜が慰めた時は、機嫌が悪かったのに如何してだろう。夕食後、真霜は、真雪に今日の出来事を説明する。

真雪「そう、そんな事が有ったのね・・・」

真霜から事情を聞いて、真雪は、あらかた理解する。

真雪「それで貴方は如何したいの？」

真霜「ん・・・もし、龍之介さん達が海上安全整備局の協力なしで独自に動くかも知れない・・・私達は、いつも彼らに助けられていたから・・・出来れば支援したいけど・・・国土保全委員会の許可なしでは、勝手に動く事は出来ない。」

真雪「そうね!・・・貴方は、安全監督室の室長であり、ブルマーメイド艦隊の指揮官でもある・・・そう勝手に動く事は許されないわ。」

真霜も龍之介達を助けたいが国土保全委員会の許可なしに緊急以外に艦隊を動かす事は出来ない。

それは、真雪も分かっていたが

真雪「でも、真霜!・・・龍之介さんが大変な目に会おうとしているのよ!・・・貴方は出来る限り、それを助けるべきよ!!」

真雪は、例え動けなくても、出来る限り支援をしないとイケない。

真雪「じゃないと肌を合わせた事が無駄になるでしょ!」

話してる途中で突然、妙な事を言い出した。

真霜「わ、私は、別に何も!?・・・あんな奴と肌を合わせたなんて無いわ!!」

真霜は、誤魔化すが

真雪「嘘は、駄目よ真霜!」

真霜「私は、嘘なんて付いていないわ!!」

真雪「じゃ聞くけど・・・真霜!・・・この前、龍之介さんと何をしてたの?」

真霜「えっ・・・別に何も・・・」

何とか隠そうとするが

真雪「とぼける気なの!・・・私は見てたわよ・・・貴方と龍之介さんが・・・」

真霜「ああ・・・その先を言わないでお母さん!!!」

如何やら、真雪は、龍之介と真霜の関係を知っていた様だ。

いつ気づいたかは、不明だが

真雪「じゃ認めるのね?」

真霜「はい!・・・認めます・・・」

これ以上隠す事が出来なくなり、真霜は空しく認める。

話を変えて

真霜「取り合えず・・・この件は、私が直に聞いて見るわ!」

真雪「頑張りなさいよ真霜! . . . 貴方だけが頼りなんだから!」
それからしばらくして、真霜は、龍之介の部屋を訪れた。

宗谷家、龍之介の部屋

真霜「龍之介!」

龍之介「誰だ?」

真霜「私よ!」

龍之介「真霜! . . . 入れよ!」

真霜は、部屋に入る。

部屋に入ると龍之介は、机の上に座っていた。

龍之介「如何したんだ真霜? . . . こんな時間に訪ねてきて . . .」

真霜は、龍之介の隣に来て

真霜「うん、ちよつと気になってね . . . 今日的事で貴方が決めかねていると思つて . . .」

龍之介「ああ、そうか . . .」

真霜「私にできる事が有れば、相談に乗るけど . . .」

龍之介「そんな事しても今の情勢は変わらないだろう。」

真霜「でも」

龍之介「それに . . . そう言つてる奴は、お前だけじゃない!」

真霜「えっ!? 如何いう事?」

龍之介「実はな……」

時系列は、遡り

それは、会議の後、真霜達が横須賀のブルーマーメイド庁に戻って、数時間後の事だった。

横須賀基地、指揮官室

突然、指揮官室に電話が掛かってきて、龍之介は受話器を取る。

龍之介「もしもし……」

田沼「やあ、山本監督官!……私だよ!」

龍之介「田沼総理!」

電話の相手は、総理の田沼だった。

龍之介「何の様だ?……今、あんたと話してる暇はない!……要が無いなら切るぞ!」

龍之介は、電話を切ろうとすると

田沼「良いのかな……私が君に手を貸すと言ってもかね?」

龍之介「如何いう意味だ?」

龍之介は切らず、田沼の言い分を聞く。

田沼「今日、君は、ゴジラ搜索の為、国土保全委員会に支援を要求したが、断られたそうだね？」

龍之介「何でその事を？」

田沼「私は、総理だよ！・・・国土保全委員会で何の協議をしているぐらいは、分かるし、君が何をしているかも知っている。」

如何やら、龍之介がしている事は、全部田沼には筒抜けの様だ。

総理だから当然だな。

龍之介「それで、俺に手を貸すと言うのは？」

田沼「聞いているの通りだ！・・・私が彼らを説得して、君の要求を通る様にして上げよう。」

龍之介「何!? 支援要請に協力してくれるのか？」

ゴジラ搜索に田沼が協力してくれると言う。

田沼の力を使えば国土保全委員会の幹部達も文句なしに龍之介に協力するだろう。しかし

田沼「但し、条件がある。」

龍之介「条件!？」

協力してくれる代わりに条件を突き付けてきた。

田沼「君が白鳳を我々に大人しく渡す事が条件だ。」

条件の内容は、龍之介達が持っている白鳳を渡す事だった。

龍之介「ふざけるな!!そんな条件を呑めるか!!」

龍之介は即拒否した。

田沼「良いのかね?・・・そんな事をすれば国土保全委員会の支援を得られなくなるぞ!」

龍之介「余計な御世話だ!!・・・支援を得られなくても、こつちにも考えは有る・・・あんたの思い道理にはならない・・・話は、これで終わりだ!!」

龍之介は、電話を切る。

時系列は、戻る。

宗谷家、龍之介の部屋

龍之介「と言う事だ。」

真霜「何よそれ!?!結局技術が欲しいだけじゃないの!!」

田沼のやり方に真霜は呆れてしまう。

龍之介「俺もそう思う・・・もしかしたら、委員会の幹部達も総理に告げ口されてるから、俺達に手を貸さないのだろう。」

龍之介は、国土保全委員会の幹部達が田沼に買収されて、真霜や龍之介達に手を貸さ

ない様に告げ口されているのだろう。

真霜「そうかも知れないわね・・・あの田沼総理の事だから、それぐらいは、やりかねないわね・・・」

真霜も同意見だった。

龍之介「だが、田沼総理のお陰で俺の腹は決まった！」

真霜「如何するの？」

龍之介「支援が得られないなら、俺達は、独自にゴジラ搜索に動くつもりだ！」

龍之介は、これ以上、国土保全委員会の幹部達と協議しても無駄だと思い。

独自にゴジラ搜索する事に決めた。

真霜「そんな、支援もなしに、この広い海を探すなんて、無理よ!!」

龍之介が決めた事に真霜は反対する。

真霜の言う通り、この広い海をGフォースの少数艦隊で搜索するなど不可能だ。

ましてやまだ、ゴジラの存在は推測に過ぎない。

龍之介「確かに無理だ!・・・だが、やるしかない!!」

しかし、龍之介の判断は変わらず

真霜「本気なのね？」

龍之介「ああ、本気だ！」

真霜は、龍之介が本気だと知り。

真霜「ん・・・なら、私達も手伝うわ!!」

自分も協力を申し出たが

龍之介「それは、駄目だ!!」

龍之介は拒否した。

真霜「如何して？」

龍之介「これは、俺達Gフォースの務めであつて、お前達ブルーマーメイドには、関係ない事だ!!」

真霜「それでも、私は、龍之介の役に立ちたいの！」

龍之介「駄目だ真霜!!・・・勝手にそんな事をしたら、お前は、海上安全整備局から処罰される・・・最悪の場合は、左遷されるかもしれないんだぞ!!」

真霜「構わないわ!!貴方の為なら何だつてするわ!!」

龍之介「馬鹿な事を言うな!!・・・お前には、家族も友達も居る・・・それにブルーマーメイドとしての誇りは如何したんだ？」

龍之介は、自分が決めた事に真霜を巻き込みたくなかつた。

もし巻き込めば、自分だけじゃなく真霜にも責任が及ぶ、最悪の場合、管理職の窓際に左遷かクビになるかも知れない。

そうなれば、真雪や真冬、ましろに影響を及ぼしかねない。

龍之介は、それを恐れ、自分が決めた事に真霜を巻き込みたくなかったのだ。

龍之介「俺達には、もう何も無い！・・・此処に飛ばされてから、俺達は、如何なつても構わないが・・・せめて、この世界が平和である事を願うつもりだ！・・・それだけは、分かってくれ真霜！」

龍之介の思いを聞いて、真霜は

真霜「・・・分かった！・・・でもせめて、深町国交省と相談して、から決めて欲しいわ！」

龍之介「ああ、むろんその積りだ!!」

一応、深町国交相に相談してから決める事に2人は同意した。

そして、話は終わり、真霜は、突然、服を脱ぎ始めた。

龍之介「ま、真霜!?!・・・な、何やってるんだ?」

服を脱ぐ真霜に龍之介は驚愕する。

真霜「何って、服を脱いでるのよ!」

龍之介「それは分かっているが、服を脱いで何する気だ!?!」

真霜「鈍いわね!・・・服を脱いでやる事は、一つでしょ!」

服を脱いでやる事は、一つ・・・快樂だ!

龍之介「おい、おい・・・今そんな気分じゃ・・・」

龍之介は、流石に今は、そんな気分じゃなかったが

真霜「私は、今したいの！」

龍之介「ん・・・それなら・・・俺も脱ぐ！」

真霜の行為に結局、龍之介も脱ぐ事にした。

お互いに服を脱いで生まれた姿のまま、ベットに横たわる。

そして、ベットの上でお互いに快楽を楽しむ。

龍之介が真霜の綺麗な胸や褄を責め、真霜が龍之介の根元を責める。

雅に弱肉強食だ。

やがて、事が終わり、2人とも荒い息遣いで、ベットの上で互いにぐったりしている
と、

真霜「龍之介！・・・今日は、流石に一気責めるわね！」

龍之介「これぐらいは、当たり前前だろ！」

真霜「それでも、少し痛いわ！」

真霜は、責められた褄を優しく撫でる。

龍之介「それぐらいは、俺の心の痛みだと思って、我慢しろ！」

それに対して、龍之介は、真霜の頭を撫でる。

真霜「意地悪！」

龍之介「俺は、意地悪的な事が好きなんだ！」

真霜「もう・・・フフフ・・・んっ」

龍之介「んっ・・・」

『んっ・・・ちゅっ・・・んむっ・・・ちゅっ・・・んっ・・・』

『ちゅっ・・・んっ・・・ちゅっ・・・んっ・・・んむっ・・・』

最後に長い口付けをして、幸せそうに眠る。

11月2日

国土交通省、大臣室

龍之介と真霜は、深町国交相に相談すべく国土交通省を訪れていた。

そして、大臣室の扉をノックして

深町「入れ!!」

『失礼します!!』

龍之介と真霜は、大臣室に入る。

深町「おお、山本監督官！それに宗谷監督官まで・・・如何したんだ？」

龍之介「実は、深町国交相にお願いがあつて参りました。」

龍之介は、深町にゴジラ搜索の許可を貰おうとするが

深町「お願いと言うと・・・ゴジラ搜索の許可かね？」

真霜「えっ!？」

龍之介「何故、ご存知で？」

深町「君ら2人が此処に来るのは、それぐらいしかないだろう。」

何と深町は、既に龍之介が何出来たのか存じていた。

龍之介「では、率直に申し上げます!・・・ゴジラ搜索を・・・」

龍之介は、改めて、ゴジラ搜索の許可を貰おうとするが

深町「許可する!」

龍之介「えっ!?!今何と?」

深町「ゴジラ搜索を許可すると言ったのだよ!」

何と深町は、ゴジラ搜索を許可したので。

真霜「本当ですか?」

深町「鈍いぞ! 本当だ!!」

真霜「やったわ!・・・これで動けるわね!」

ゴジラ搜索の許可が出たので、真霜は大喜びした。

深町「但し、条件がある。」

しかし、喜びも束の間、ゴジラ搜索には条件が有った。

龍之介「何ですか？」

深町「1つは・・・搜索期限・・・搜索に与えられる期限は、3ヶ月だ!!」

条件の1つは、ゴジラ搜索期限が僅か3ヶ月しかない事。

龍之介「たった3ヶ月では、十分な搜索はできません!!・・・もう少し、余裕をくれますか？」

龍之介の言う通り、たった3ヶ月では、十分な搜索はできない。

もう少し、有余をくれますかとお願ひするが

深町「残念ながら、これ以上は伸ばせない。」

深町もこれ以上は伸ばせなかった。

龍之介「ん・・・分かりました・・・他には？」

それを聞いた龍之介は仕方なく承諾する。

深町「2つめは・・・この搜索には、Gフォースだけで行う事・・・ブルーマーメイドの支援は、物資の補給のみ・・・それ以上は認められない。」

そして、2つめの条件は、ゴジラ搜索は、あくまで龍之介達Gフォース西部方面艦隊のみで行う事、真霜達ブルーマーメイドは、物資の補給のみ以外は、支援を認められない。

真霜「そんな!?それでは、我々は、唯見ているだけですか？」

それに真霜は、不服を申し立てるが

深町「そうしないと委員会の幹部達が納得しないのだ……これ以上、君達が関われば、向こうもどんな事をするか分からない……だから、この任務は、Gフォースだけで行う事で許可を得られたのだ。」

深町も本当は、ブルーマーメイドも搜索に刈り出そうと思ったが、それでは、国土保全委員会の幹部達が納得しなかったので、仕方なく、Gフォース西部方面艦隊のみで行う事で、了承を得たのだ。

真霜「しかし！」

それでも真霜は、反論するが

龍之介「もう良いよ真霜！」

真霜「でも」

龍之介「補給だけで十分だ！」

龍之介は承諾する。

龍之介「では、深町国交相！……許可を得たので、早速、ゴジラ搜索に出撃します。」

龍之介と真霜は、大臣室を出るが

深町「山本監督官!!」

深町が突然呼び止める。

龍之介「ん!？」

深町「私もゴジラの存在は、明らかだと思っている。」

龍之介「え!？」

深町「ゴジラは、人類にとっては最大の脅威だ!!・・・良い報告を期待している。」

龍之介「ん・・・」

深町の言葉に疑問を持ち始めた。

龍之介（・・・委員会の幹部達を納得させるとは・・・この男は、何者なんだ!・・・何故其処まで、俺達を助けてくれるんだ?）

アレだけ馬鹿にしていた国土保全委員会の幹部達を承諾させるとは、一体何者なのか、龍之介は疑問を抱く。

横須賀基地、会議室

国土交通省から帰ってきた龍之介と真霜は、功、美由紀、薫、次郎、はやて、真冬、平賀、福内を横須賀基地の会議室に集めた。

功「本当に許可してくれると言ったんですか?」

龍之介「ああ、これで俺達は、晴れてゴジラ捜索に望めると言う訳だ。」

美由紀「しかし、驚きですね!・・・一体如何やって、深町国交相は、委員会の幹部達を納得させたんですか?」

真霜「詳しい事は、分からないんですけど……条件付きで納得させたそうです。」
薫「条件？」

龍之介「1つは、ゴジラ搜索の期限が3ヶ月しかない事だ。」

『3ヶ月!?!』

はやて「3ヶ月では、めっさゴジラ発見はできまへん!!」

龍之介「しかし、それをやるしかないんだ八神中佐！」

はやて「せやけど……」

薫「仕方ないよはやてちゃん!……准将もそれは、分かっている事だから、私達は、その期間で出来る限りの搜索を行おう。」

次郎「そうだ、はやて!! いざと言う時は、白鳳で倒してやるさ!!」

美由紀「止めなさい!! 楽観的は、禁物よ!!」

次郎「すいません。」

龍之介「とは、言え、3ヶ月は短い期間の為、通常の搜索は難しい……その為、部隊を2つに分けて、搜索する。」

龍之介の搜索方法は、先ず部隊を2つに分け、一方の部隊が北を搜索し、もう一方の部隊が南を搜索すると言う方法だ。

北を搜索する部隊は、美由紀が担当し、南を搜索する部隊は、龍之介が担当する事に

なった。

そして、2つめの条件では

真霜「そして、2つめの条件は、私達ブルーマーメイドは、物資の補給のみ支援できない事。」

平賀「えっ!?!じゃ私達は何もできないんですか?」

真霜「そうよ!」

真冬「何でだよ真霜姉!?!何で支援できねんだよ?」

真霜「これは命令だから、仕方がないの!・・・分かってよ真冬!」

真冬「ん・・・」

龍之介「真冬!・・・お前の気持ちも分かる・・・だが、お前も命令には従え・・・良いな!」

真冬「分かったよ!」

真霜と龍之介に言われて、真冬は、空しく返事をする。

11月2日

Gフォース西部方面艦隊は、横須賀を出撃した。

空母大鳳、艦橋

龍之介「ゴジラか・・・推測であってほしいな・・・」

薫「……」

画して、Gフォースによるゴジラ大搜索は開始された。

海上安全整備局、国立海洋医科大学先端医療研究所

その頃、海上安全整備局の国立海洋医科大学先端医療研究所内では

研究員達が突然変異種のマウスを調査、研究を続けていた。

その結果、特殊な生体電流が確認された。

この生体電流に関しては、まだ調査中で、如何いった電流なのかは、不明だったが、それ以上の研究目的として、「密閉環境における生命維持及び低酸素環境に適応するための遺伝子導入実験」と言う研究が行われる事になった。

この実験に何故、このマウスが使用されたのかと言うと、ウイルスの影響下にも生き残ったのだから、この実験にも耐えられるか如何かと言う理由で使用される事になった。

実験は、先ずマウス達を実験艦（潜水艦）に乗せ、その実験艦がある程度の深さの海底へ一定期間沈めた後、その後浮上させ、マウスの状態を見ると言うモノだった。

マウスを乗せた実験艦は、現在海底火山の動きがみられ、現在船舶、潜水艦の航行が禁止となっている小笠原諸島の西之島新島付近の海域に沈められる事になった。

この海域ならば、船舶及び潜水艦の航行が無いので、誰にも邪魔されずに実験を行え

ると言う為、この海域が選ばれたのだ。

マウスを乗せた実験艦は予定通りの深さで海の底へと沈められ、後は浮上時期に生き残っていたこのマウスと搭載されている計器のデータを回収し研究、解析をするだけだった。

勿論実験艦の位置はビーコンで常にその位置は探知されており、見失う心配はなかった。

しかし、選んだこの海域が現在海底火山の動きがみられる海域であり、ある日、その海底火山の活動により、実験艦は、サルベージ不可能な水深1500mまで沈没してしまつた。

深海深くへと沈んだ事で実験艦からのビーコンも届かなくなり、その事から、実験艦は水圧で圧潰し、マウスは全滅したものと推測された。

国立海洋医科大学先端医療研究所は、この結果を田沼総理に報告した。

報告を受けた田沼総理は、失敗に愕然とした。

そして、実験データや資料を焼却や削除処分を命じ、存在を闇へと葬つた。

研究員達も失敗の責任を問われ、他の部署に左遷させられた。

しかし、中には、諦めない研究員達も居て、廃棄される筈だった実験データや資料を秘かに盗んで研究を続けていた。

第30章 恋の進展

12月1日

ゴジラ搜索から1ヶ月半が過ぎようとしていた。

今だにGフォース西部方面艦隊は、ゴジラ発見には、至っておらず、巡洋艦すくね、さつまの対潜哨戒ヘリやゴジラ索敵用に改造したE2Gの超音波カメラでの海面下撮影では、発見できず、それどころか痕跡すらも見つからなかった。

時間だけが過ぎていき、龍之介は、もしかしたら、ゴジラは、この世界に存在しないのではないのか、そう疑う様に成りかけるが、それでもゴジラ搜索を続けるのだった。

12月20日

横須賀基地

ゴジラ搜索中だったGフォース西部方面艦隊は、物資補給、整備修理と隊員達の休息の為、横須賀へと帰投した。

帰投した龍之介は、突然、真雪に呼ばれ、功と共に横須賀女子海洋学校へと向かう。

横須賀女子海洋学校、廊下

龍之介「こんな忙しい時に一体なんだろう？」

功「分かりませんが、余程重要な事でしょう。」

2人は、何故真雪に呼ばれたのか、分からなかった。

校長室に通じる廊下を歩いていると、前から1人の女性教官がやってきた。

功「あっ!?!」

その女性教官を見た功は、足を止める。

「あっ!?!」

反対側の女性教官も功を見て、足を止めた。

女性は、指導教官の古庄薫だった。

古庄「貴方は!?!」

功「此処の教員でしたか!?!」

2人は、顔見知りの様だった。

龍之介「何だ参謀!?! 知り合いか?」

功「ええ、まあ……」

古庄「申し送れました……私は、指導教官の古庄 薫です!」

龍之介「ああ、貴方が!?! ……薫が言ってた熱血教師って言うのは……」

古庄「え!」

龍之介「失礼、俺は、Gフォースの山本龍之介、こっちは、参謀の……」

古庄「徳吉 功さんでしょう。」

何故か古庄は、功の名前を知っていた。

龍之介「何で知ってるんだ？」

何故、古庄が功の名前をしているのか問う。

古庄「寮が隣同士なので、それで、名前を知っていました。」

龍之介「そうなのか参謀？」

功「ええ、まあ、なりいきで・・・」

如何やら、功は、なりいきで古庄と寮が隣同士になってしまい、それで知り合いになつてしまった様だ。

龍之介「なりいきね・・・」

だが、龍之介は、2人を見て、唯寮が隣同士の関係じゃない様だ。

もしかしたら、それ以上の関係になっているかも

龍之介「ちよつど良い参謀！・・・しばらく古庄教官と話をしていると良い。」

それを見抜いた龍之介は、功と古庄を2人だけにする。

功「えっ!?!しかし・・・」

龍之介「俺1人で十分だよ！・・・じゃあな！」

そう言つて、龍之介は、1人で向かう。

古庄「随分と変わった人ですね。」
功「其処が良いんです。」

横須賀女子海洋学校、校長室

校長室のドアをノックすると、中から「どうぞ」と、真雪が入室の許可を出す。

龍之介「山本龍之介一等監督官参りました。」

龍之介は校長室に入り、真雪に一礼する。

真雪「待つていたわ！・・・さつ、どうぞ・・・座つて・・・」

龍之介「はっ」

真雪は、龍之介を応接用のソファアールへと座る様に促すと、龍之介はソファアールへと座る。

龍之介「それで、お忙しいところを態々呼び出した御用件は何でしょうか？」

龍之介は、早速真雪に今日、自分を呼んだ件について尋ねる。

真雪「実は、貴方達が保有する航空機に関してだけ・・・」

龍之介「ああ、その事ですか！」

如何やら、今回呼ばれたのは、龍之介達が保有する航空機に関しての事の様だ。

現在、航空機は、ブルーマーメイドの設備研究課で慶介の主導のもと、試作機を製作中であつた。

真雪「実はね・・・ブルーマーメイドの育成校とホワイトドルフィンの育成校が協力

して、航空士の育成校を創設を計画してるの！」

何とブルーマーメイドの育成校とホワイトドルフィンの育成校が協力して、航空士の育成校を創設する事を計画してるとの事だ。

龍之介「育成校ですか!？」

航空士の育成校の創設を計画している事に龍之介は驚く。

龍之介「いつ創設を？」

いつ創設されるのか問うと

真雪「まだ検討中よ！」

如何やら、まだ検討中の様だ。

まあ確かに創設するとなると、創設場所を何所にするか、また飛行場の建設場所や空母の建造が必要になる。

龍之介「そうですねか・・・」

真雪「それで、呼んだのは、他の事よ！」

龍之介「何ですか？」

真雪「もし育成校が創設した暁には・・・そちらから教官として、隊員を何人か派遣してほしいの！」

真雪の依頼は、育成校に必要な隊員を教官として派遣してほしいと言う事だった。

龍之介「構いませんが……此方も戦力の温存の為、そんなには派遣できませんよ！」
確かに今、現役のエース航空士は、なのはとフェイトの僅かしか居らず、後は、普通
に操縦できる者しかない。

それに補充が出来ない為、戦力の削減も出来ない。

真雪「それは、知っているわ！だから、其方が派遣できる人数で良いわ!!」

如何やら、派遣できる人数は、此方で決めて良いそうだ。

龍之介「ん……分かりました……創設した暁には、其方に協力しましょう。」

龍之介は、協力を承諾する事を真雪に告げた。

真雪「助かるわ。」

龍之介「では、私は、これで……」

要が終わり、龍之介は、校長室を出ると

真雪「ああ、待て！」

龍之介「まだ何か？」

真雪「最近どお……真霜は？」

龍之介「な、何の事ですか？」

真雪「しらを切る気なの？……知ってるわよ！……貴方と真霜が付き合っている

事ぐらい！」

龍之介「えっ!？」

いきなり真霜との関係を言われ、龍之介は、顔が真っ白になる。

龍之介「ど、如何してそれを!？」

真雪「あら、私があつつかないとも思つていつたの？」

龍之介「ん……いつからですか？」

真雪「この前の夜に、ちよつと……」

龍之介「す、すいません!!……真霜との関係は、何れ真雪さんに話すつもりでした

けど、話す勇気が無くて、その……」

真霜に手を出した事を謝罪する。

真雪「謝らないで良いわ!!……貴方も遊びで付き合っている訳じゃないみたいだし、

真霜も嫌で付き合つてる訳もない見たいだし!」

真雪は、龍之介や真霜の気持ちも分かっていた。

龍之介「じゃ、許してくれるんですか？」

真雪「ええ……でも1つだけ約束してほしいの!」

真雪は、真霜とこれからずっと付き合うなら、1つだけ条件を付き付けてきた。

龍之介「何でしょう。」

真雪「決して、あの子を裏切るマネはしないで、それだけよ!」

真雪が突き付けた条件は、決して真霜を裏切るマネはしないと言う事だった。

しかし、龍之介は

龍之介「ん・・・それは、難しいですね。」

難しいと答える。

真雪「如何して？」

龍之介「真雪さんも知っているでしょう・・・今、俺達は、ゴジラ捜索に全力を尽くしています。」

真雪「それは、知っているわ!!・・・それと何か関係あるの？」

龍之介「俺は、指揮官です!・・・もしゴジラが現れば・・・俺は、真霜より任務を優先するかもしれません・・・何故なら、ゴジラを倒す事が俺達の使命ですから!!」

龍之介は、真雪が着きつけた条件を守る事が難しかった。

何故なら、龍之介は、ゴジラと最前線で戦う指揮官でもある。

もしゴジラが現れば真霜の事より、其方に行くだろう。

それは、真霜を捨てる事と同じである。

真雪「酷い事を言うのね。」

それに対して、真雪は、不機嫌になる。

龍之介「確かに酷いですが・・・俺は、1人の幸せより、何100人の幸せを願って

いるのです……だから、俺は、ゴジラと戦う。」

例え真霜を捨てる事になっても龍之介は、戦わなければならなかった。

龍之介「もし事が終われば、俺は、真霜のところに戻るつもりです……でも、それまで、真霜が待っていていればの事ですが……」

ゴジラとの戦いが終われば龍之介は、真霜のところに戻るつもりでいる。

だが、真霜もまだ若い、他の男の元に行くかもしれない。

真雪「ん……それは難しいわね……あの子の事だから、龍之介さんを追いかけて来るかもしれないわよ！」

真雪は、真霜の事だから、諦められず追いかけてくるかもしれない。

龍之介「それは、ちょっと判断できないな……」

そうなったら、龍之介でも判断が難しかった。

真雪「フフフ……まあ良いわ！……兎に角、貴方が何事も無く真霜を幸せにしてくれる事を祈るだけよ！」

真雪は、それでも龍之介と真霜の幸せを願っていた。

龍之介「そうなれば良いと、俺も祈りたいです。」

龍之介もそれを願っていた。

龍之介「では、これで……」

真雪との会談を終えて、龍之介は、校長室を後にする。

真雪（あの人なら・・・今度こそ真霜を幸せにしてくれるかも知れないわね・・・）

真雪は、龍之介を見て、今度こそ真霜を幸せにしてくれるのかもしれないと思った。

横須賀女子海洋学校、廊下

校長室を後にした龍之介は、古庄と会話している功の元へ向かう。

龍之介「参謀!!」

功「あつ!?もう話は終わつたんですか?」

古庄「・・・」

龍之介「ああ、終わつた。」

古庄「では、私は、これで・・・また後ほど・・・」

功「ええ、今度は、ゆくつり何所かで飲みながら話し合ひましょう。」

古庄「ええ、楽しみにしています。」

功と飲みに行く約束をして、古庄は去っていた。

龍之介「やったな参謀、デートの約束が出来て・・・この!!」

古庄とデートが出来る事になり、龍之介に責められる。

功「いえ・・・その・・・」

それに対して、功は照れる。

2人は、そのまま基地に戻る。

宗谷家、龍之介の部屋

宗谷家に帰宅した龍之介は、夕食後に薫と真霜を自分の部屋に呼び寄せ、今日の事を話した。

龍之介「と言う訳だ！」

薫「詰まり、真雪さんは・・・兄さんと真霜姉さんの関係を知っていたと言う事!？」

龍之介「そう言う事になるな！」

薫「嘘・・・!?」

真雪が龍之介と真霜の関係をしていた事に薫は驚愕する。

薫「い、いつ知ったんだろうね真霜姉さん!？」

真霜「そ、そうね・・・」

薫は、驚愕していたが、真霜は、余り驚かなかった。

薫「もしかして!？・・・真霜姉さんも知ってたんですか?？」

真霜「う、うん！」

薫「知らなかったのは、私だけ・・・」

真霜も知っていて、薫は、自分だけ知らなかった事に落ち込む。

龍之介「良いじゃないか!・・・これで真雪さんに隠さず済むし・・・俺的には、喜

んでいる。」

龍之介は、真雪の顔を気にせず、真霜と付き合える事に喜んでいた。

薫「まあ、そうだけど……」

薫もまあまあ納得する。

まあ、ともあれ、2人の関係は、何とか真雪に伝わり、龍之介と真霜は、ホツとする。

しかし、あと1つの問題があつた。

それは

龍之介「それより、お前の方は如何なんだ？」

薫「私？」

薫の事だつた。

龍之介「最近……次郎とは、何所まで行つたんだ？」

最近、次郎との関係は、如何だと問う。

薫「べ、別に良いでしょ！……関係ない事なんだから！」

それに対して、薫は、隠そうとするが

龍之介「関係ないだろう!!……俺は、お前の兄だぞ!……兄として、お前の

事は、ちゃんと知る権利がある！」

龍之介は、兄として、知る権利が有ると尊重する。

薫「ん……」

真霜「確かに龍之介の言葉にも一理あるわね！」

それに真霜も同意する。

薫「真霜姉さんまで……」

龍之介「で、如何なんだ？……次郎とは、上手く言ってるのか？」

薫「うん……そこそこ……」

2人に責められ、薫は、泣く泣くそこそこと言う。

龍之介「雅か!?……肌を合わせるところまで行つてないよな？」

ギク!?

龍之介「行つたのか？」

薫「……うん！」

薫は、快樂した事を認める。

龍之介「お、お前は……」

薫と次郎が快樂まで行つた事に龍之介は怒る。

真霜「怒らないで!……薫だって、分かつてる事なんだから……」

龍之介「しかし！」

真霜「薫も大人よ!……もうそれぐらいは、する年頃なんだから、そうでしょう薫

！」

真霜の言う通り、薫も、もう21歳だから、それぐらいは、する年でもある。

しかし、龍之介は認めていない、付き合うまでは、許しても快樂までは、許していない。

それに対して、薫は

薫「そうだよ・・・私は、大人だよ！・・・兄さんに指図される言われわないわ!!」
関係を認めない龍之介と対立する。

龍之介「薫!!」

薫「兄さんは、ずるいよ!!・・・自分だけ真霜姉さんといちやいちやして、私と次郎君の事は許してくれないの?」

龍之介「俺は・・・」

薫「もう良い!!・・・兄さんが何と言をと私は、次郎君と別れる気はないからね!・・・これだけは譲れない!!」

龍之介「か、薫!!」

薫は、怒つて、部屋を出ていった。

龍之介「はあ・・・俺は、馬鹿だな!・・・薫の事になると、直ぐこれだ!!」

薫が出ていった後、龍之介は、自分が馬鹿な事をしたと、つくづく悔やむ。

真霜「仕方がないわ！それが兄弟と言うものよ！」

龍之介「それだけじゃない・・・俺は、もしかしたら・・・あいつを不幸にしているのかもしれないな・・・」

真霜「えっ!？」

龍之介「俺は、いつもあいつに何もしてやれない・・・あの時だってそうだ・・・両親が死んだ時も・・・」

真霜「龍之介・・・」

龍之介「あの時、まだ俺は、小学生のわんぱく坊主で薫は、まだ幼稚園児だった・・・俺達2人は、親父が経営する下町工場で暮らしていた・・・貧乏だったけど決して不自由はなかった・・・薫も赤ん坊みたいにお袋に甘えていた・・・だが、あのゴジラ戦で何もかも失った・・・家や工場、そして、親父とお袋も死んだ・・・それだけじゃない・・・俺は・・・俺は・・・」

昔の事を思い出し、龍之介は、泣き叫ぶ。

真霜「もう良いよ龍之介！」

龍之介「真霜!？」

それを真霜が抱きしめる。

真霜「貴方は、十分苦しんだ!!・・・だから、もう苦しまないで・・・」

龍之介「真霜！」

真霜「私が貴方を支える……だから、もう苦しまないで……」

龍之介「すまない。」

真霜の言葉を聞いて、龍之介は、落ち着く。

真霜「今日は、もう寝よう……私も一緒に寝て挙げるから……」

真霜は、このまま龍之介を一人にさせる訳にはいかないし、何しろ今日は、久しぶりに顔を合わせたのだから、今日は、一緒に寝たい。

12月21日

横須賀基地、指揮官室

次郎「小沢次郎中佐、参りました!!」

龍之介は、突然、次郎を指揮官室に呼び寄せた。

龍之介「休め！」

次郎「今日は、何かご用件でも？」

龍之介「別に要と言う訳ではない……唯お前に聞きたい事がある。」

次郎「な、何でしょう。」

龍之介「お前、俺の許しなく、薫に手を出したな？」

龍之介は、次郎に薫と快樂をした事を問う。

次郎「うっ!？」

それを聞いた次郎は、不味い顔し

次郎「すみません、堆なりいきで我慢できなくて、その……」

快樂した事を謝罪する。

龍之介「はあ……お前には呆れるよ……お前のせいで、また薫と喧嘩してしまつたじゃないか!!」

次郎「それは……申し訳ない事をしました!!……この償いは……」

次郎は、償いをすると言うが

龍之介「償いは、俺の代わりに薫を幸せにしてくれる事だ!!」

次郎「えっ!？」

龍之介は、次郎の償いは、自分の代わりに次郎が薫を幸せにして欲しいと告げる。

龍之介「俺は、もう薫を幸せにする事が出来ない……だから、お前が俺に代わつて、薫を幸せにして欲しい!!」

次郎「准将!」

龍之介「薫もそれを望んでいる……俺に対しても「これだけは譲れない!」まで言っている。」

次郎「あいつ、そんな事まで!？」

龍之介「だから、お前が俺に代わって、薫を幸せにして欲しい！」

次郎「しかし、それでは、准将が？」

龍之介「俺の事は気にするな！・・・お前は、俺から、薫を託されたんだから、その命を果たせ・・・良いな!!」

次郎「は、はい！」

こうして、薫は、龍之介から次郎の手に託される事になった。

龍之介「話は以上だ！行け!!」

次郎「失礼しました。」

次郎は、指揮官室を後にする。

それから数日後、補給と整備を終えたGフォース西部方面艦隊は、再びゴジラ搜索に出撃した。

第31章 初詣

1月1日

年が明けた新年

横須賀市、諏訪神社

横須賀近くにある諏訪神社は、初詣の参拝客で大変な賑わいを見せていた。

そんな参拝客達を巫女衣装に身を包んだ八木鶴と鶴の幼馴染である宇田慧は眺めていた。

慧は今日、鶴の神社が初詣で混雑する事が予想されたので、手伝いに呼ばれたのだ。しかし、今の慧は巫女装束でなく、私服の上にコートを羽織っている姿だ。

慧「お・・・お・・・相変わらず、凄い人数だね・・・」

鶴「大きい神社だからね！」

慧は大勢の参拝客を見て呟く。

そして、鶴は神社が賑わっている理由を話す。

鶴「それにほら横須賀女子海洋学校の受験で、こつち来てる人も多いから・・・この中にも受験生の子いると思うよ！」

慧「そう言えば、もう直ぐだね……」

慧はもう直ぐ横須賀女子海洋学校の入学試験が近づいている事を指摘する。

鵜の神社は、横須賀女子海洋学校の直ぐ近くにあり、しかも学業成就の神社であり、この時期は大変賑わうのだ。

慧からの指摘で鵜も受験が迫っている事を自覚する。

慧「受験勉強は進んでる？」

慧は鵜に受験状況を尋ねる。

鵜も慧も共に横須賀女子海洋学校を受験する受験生なのだ。

鵜「言わないで〜」

慧からの質問に鵜は視線を逸らし、やや落ち込んだ様に言う。

如何やら、あまり芳しくない様だ。

鵜「兎に角、今は、巫女としての奉仕を頑張らなくちや……」

慧「そうだね……」

鵜は気分を切り替えて、受験よりも今は目の前の仕事に集中する事にした。

鵜が社務所でお守り売っている時、慧は鵜の後ろで小さな旗を振って鵜を応援し、鵜がお使いで神社の彼方此方を駆けずり回っている時、慧はカルガモの雛の様に鵜の後を追う、案内所での仕事の時は

慧「声出していこ……」

と、慧は鶇を励ますが、

鶇「手伝って欲しいんだけど……」

慧の声援はたいして役に立ってはいなかった。

むしろ手を出してくれた方が鶇としては助かった。

その間にも神社の参拝客は増々増えていく。

慧「それにしても、どんどん人が増えてくるね！」

鶇「どんどん忙しくなるよ……」

この後も仕事量を考えるとただで、モチベーションが落ちてくる。

慧「手伝いにももう少し人手が欲しいんじゃない？」

慧がこのままの人数で運営できるのかちよつと心配になる。

鶇「まあね……というか、宇田ちゃんが手伝ってくればいいだけの話なんだけど

……そのへんどうお考え？それに今から人手を増やすとなると巫女経験者じゃないと

……今から教える時間はないし……」

慧「そっか……じゃあ私が探してあげよう!!これだけ人がいれば、1人くらい見

つかるかも」人探し宇田リーダー……!!」

慧は変なポーズをとり、参拝客の中から巫女経験者を探し始める。

鶯「何そのポーズ……そんなに都合よく……ん？」

鶯がふと、手水舎の方を見ると、其処には、一人の少女が手水を使っていた。

鈴（寒いな……早くお守り買って帰ろ……）

知床鈴は、今年、横須賀女子海洋学校を受験する予定の受験生で、受験成就と名高いこの神社の御利益にあずかろうと一人で神社に参拝に来ていた。

鈴は、手水舎に一礼した後、右手で柄杓を取り、手水を掬い、その手水で左手を清め、次に柄杓を左手に持ち替え、同様の動作で右手を清めた。

慧「如何したの？」

鶯「あの子……」

次にもう一度右手に柄杓を持ち替え、左の手のひらに手水を溜めて口に含み音を立てずに口をゆすいで清め、左手で口元を隠してそっと吐き出す。

その後、最初に左手を清めた動作で左手を清め、最後に柄杓の柄を片手で持ち、腕部が上になるよう傾け、柄に手水をしたたらせて洗い流し、柄杓を元の位置に静かに戻し、一礼した。

鶯「完璧な手水作法……!!」

それは洗礼された手水作法であり、それらの動作から彼女が巫女または神職の関係者だと鶯はすぐに分かり、彼女の方へと近寄った。

鵜「お嬢さん！」

鵜は手水舎にて、手水作法をしていた鈴に声を掛けた。

鈴「はい？」

鵜に声を掛けられ、鈴は、振り向く。

鵜「貴方もしや・・・神職関係者では・・・？」

と、鈴が神社の関係者ではないかと鵜は、尋ねた。

鵜は笑みを浮かべているが、彼女の後ろでは、

とても忙しくて人手が足りない。

お手伝いが欲しい。

手伝って

人手欲しい

お願い

等の煩惱が鈴には見えた様な気がした。

鈴「ち、違います・・・!!」

本能以危険を察知した鈴は無意識のうちにそう答えた。

鵜「その歳で手水作法を完璧にこなす素人なんて限りなくゼロに近いですよ。お願いしますす〜!!」

鶯は鈴が逃げ出さない様に抱き付いて、彼女に懇願する。

しかし、鈴は

鈴「ぐ……偶然です！奇跡です！テキトーにやってみただけです!!」

面倒事に巻き込まれるのは御免だとあくまで白を切る。

鈴「わ……私は、唯お守りを求めに来ただけで……」

そして、今日この神社へ参拝しに来た目的を鶯に話す。

すると

慧「あら？自分の神社じゃ駄目だったんですか？お守り？」

慧が鈴に尋ねる。

鈴「いやあくうちの御利益はどちらかと言うと縁結び系で……合格祈願は別神社が

いいかなあくと……」

慧「ほうほう、成程！」

と、背後から現れた慧の質問について正直に答えてしまった。

慧は鈴の答えを聞き、何故自分の家の神社では無く、他の神社に参拝してきたのか納

得した様子。

鶯「やはり、神社生まれでしたね……言質取ったり」

鈴（しまった……!!）

鈴が鶴の手で社務所に連れられて言った時、境内では、一人の少女が参拝客の列をジツと見ていた。

参拝客を見ている少女、立石志摩はあまりの混雑に啞然としている。

志摩も今年、横須賀女子海洋学校を受験しようとしている受験生で、この神社に合格祈願をしに来たのだった。

志摩「・・・にぎやか・・・参拝・・・行列・・・ながい」

こんなに長い列だとお賽銭箱に辿り着くのにかかなりの時間を掛ける事になる。

志摩としては、人ごみの多い列には並びたくない。

でも、お賽銭は入れたい。

志摩「ん」

其処で志摩はある事を思いつき、参列から少し離れると、

志摩「とど・・・け」

賽銭箱に向かって百円玉を投擲した。

志摩（入ります様に）

志摩は投擲した位置から、かしわ手を打ち、神頼みを行った。

近くに居た人は志摩の行動を見て啞然としている。

彼女の願いである「入る」とは賽銭箱に賽銭が入る事を指しているのか？ それとも

志望校に入る事を指しているのか？それとも両方か？それは彼女しか分からない。

投げられた1000玉は参拝客の頭上を飛んでいき、賽銭箱へと向かって行く。

その賽銭箱がある境内の最前列では、合格祈願に来ていたましろが今雅に賽銭箱に賽銭を入れ様としていた。

今日は、ましろは、1人で参拝に来た。長女真霜や次女真冬、そして母の真雪は、仕事事が忙しく一緒に行けなかった、龍之介も薫もゴジラ捜索でいない。

その為、ましろは、1人で参拝に来た。

ましろ（凄い行列だったな・・・お賽銭、お賽銭・・・）

時間をかけて並んだ為、ましろは、少し疲れていたが、学業成就として名高い諏訪神社を参拝するのは、受験生であるましろにとっては、物凄く意味の有る事だった。

そして、財布を取り出し、御縁がある様に5円玉を取り出し、賽銭箱に放ると、先程立石が投げた1000円玉が失速して落ちて来た。

このままでは、志摩の1000円玉は賽銭箱前に落ちるかと思いきや、1000円玉はましろが投げた5円玉に当たり、再び勢いを取り戻すと、賽銭箱の中に見事入った。

一方、志摩の投げた1000円玉に当たったましろの5円玉は急に失速し、賽銭箱前にチャリーンと音を立てて落ちた。

ましろ「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

「何だ？何が飛んできたぞ！」

「鳥か？」

ましろの後ろの列の人がざわついているが、ましろ本人は、神から見放された様な気分となる。

自分が入れ様とした賽銭が、弾き落とされたのだから

先程の光景は受験生であるましろにとつて決して縁起の良いモノとは言えないモノとなつた。

ましろ「新年早々ついてない・・・」

5円玉を拾い、賽銭箱に入れ直したましろは重くなる様な気分で境内を歩く。

すると、目の前にはおみくじが売っていた。

唯、おみくじを売っているツインテールで同じ年ぐらいの年齢の巫女さんは、何故か泣いている様にも見えたが、今のましろには、そんな事を気にしている余裕はなかった。

ましろ「・・・おみくじか」

引いてみようかと思つたが、どうせ引いても大凶か凶だろうと思つた。
しかし

ましろは頭を振つて、思考を振り捨てるかの様におみくじを引いた。

ましろ「よしっ」

勢いよくおみくじが入った箱に手を入れ、その中から1つを取り出し、開く。

其処に書かれていたおみくじの結果は、『大凶』……だった。

ましろ「分かってた……分かってたさ……」

大凶のおみくじを引いたましろは、跪き頭を垂れる。

ましろ「待て……細かく読んでみよう……こう言うのは、大抵不幸への対処が記してあるものだ。」

ましろは、これまで大凶や凶のおみくじを引いて来た経験からおみくじをよく読んでみる事にした。

鈴「はあく帰りたい……」

ましろがおみくじを見ている間、鈴は相変わらず、仕事はしているのだが、何だか嫌々でやらされている様にも見えるがましろは、それに気づかなかった。

ましろがおみくじの用紙をよく見て見ると、印刷ミスのせいで肝心の部分がよく読めなかつた。

ましろ「今年は家から出ない方がいいのかな……」

ましろはおみくじを神社の枝に結ぼうとその場を離れた。

ましろがおみくじ売り場を離れてすぐ後、

明乃「あつ、大吉だ」

ましろ、志摩、鶯 鈴、慧ら同様、受験生である明乃も本日、この神社に来ていた。昼近くになると、混雑していた神社も参拝客が次第に減り始めた。

鶯「うーん、大分参拝者の数も落ち着いてきたけど、あの子は何所に行ったんだろ
う……？」

慧「つか……れた……」

鶯は鈴の姿が見えない事に気付き辺りを見渡す。

神社関係者「ツインテールの……？ああその子なら、さつきお手洗いに行くつて出てつてから、それつきり……」

社務所に居た他の巫女さんが鈴の事を鶯に伝える。

鶯「いなくなっちゃったの？」

神社関係者「でも随分助かりましたよ！」

慧「ね〜」

鶯「何も言わずいなくなってしまうなんて、なんて謙虚なのかしら？もしかしたらあの子は忙しい私達を助けるために神様が与えてくれたお使い様だったのかも……」

鶯は鈴が神からの使いなのではないかと思つた。

その鈴は、人知れず帰路についていた。

鈴「はあ……また逃げて来ちゃった……怒つてないかな……できる事はやつた

し、大丈夫だよね。」

鈴は神社の人達が怒っていない心配だったが、鵜達は怒るところか鈴に感謝していた。

しかし、鈴にはそれを知る由も無かった。

鈴「お守りを貰ってすぐ帰るつもりが随分遅くなっちゃったな・・・」

鈴の手の中には社務所の巫女さんから貰ったお守りが握られていた。

まあ、お守りをタダで貰ったと思えば、お守り代は浮いたので、鈴はそれで『よし』とした。

鈴「ま、いつか・・・早く帰って受験勉強でもしよつと」

鈴はお守りを手に家路へと急いだ。

その頃、神社では、

鵜「あの子を称える像を造ろう!!」

鵜は鑿と木槌を手に鈴の像を作ろうと意気込んでいたが

慧「勉強したら?」

そんな鵜に慧は一言ツツコンだ。

第32章 中止命令

1月1日

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

晴風乗員達が初詣をしている頃、横須賀のブルーマーメイド庁舎では

真霜「今何と？」

深町『聞いている通りだ・・・ゴジラ搜索を中止する！』

深町は、ゴジラ搜索を中止する事を真霜に告げた。

真霜「待つてください!!・・・期限は、3ヶ月と決まっていたのでは？」

真霜の言う通り、搜索期限は、3ヶ月、つまりあと1ヶ月残っていた。

それを早めに切り上げた。

深町『残念ながら、直ちにゴジラ搜索を中止する様、内閣から通達が来た。』

元々、ゴジラ搜索は、深町国交相が独断で許可を出したもので、それに不満を抱いていた幹部達が田沼総理に告げ口をし、田沼は、深町に直ちにGフォースのゴジラ搜索を中止するよう通告した。

真霜「そんな!?!・・・何とかならないんですか？」

深町『私も総理に継続を申し上げたが……これ以上無駄な搜索に資金は出せない……もし続けるなら、辞表を提出しろと言われた……今、私も辞める訳には行かない……もし辞めれば、総理を抑える事が出来なくなる……それで仕方なく搜索を中止する事に決めた。』

深町も今、国土交通大臣の座を辞める訳には行かなかつた。

今、辞めれば、田沼総理は、間違ひなく龍之介達が持つ技術を悪用するだろう。

そうなれば、龍之介達は、反乱をして何処かへと逃げるだろう。

そんな事をさせない為、仕方なく搜索を中止する事に決めた。

真霜「そうですね……しかし、山本監督官には、何と？」

真霜は、龍之介には、言い難かつたが

深町『事情は、私から伝える……君は、山本監督官に直ちに帰還するよう命じてくれ!!』

真霜「分かりました。」

こうして、ゴジラ搜索中止は、真霜から直接伝えられる事になった。

その頃、Gフォース西部方面艦隊は、小笠原諸島の西之島新島沖を航行していた。

空母大鳳、艦橋

はやて「凄いね!……1度この海域を哨戒した事があるけど、その時は、まだ小さ

かったのにもうあないに成長しとる・・・流石は、自然やね。」

薫「本当ね!・・・自然は侮れないわね!」

付近では、火山活動で島が誕生していた。

まだ小さいが何れは、大きな島へと成長するだろう。

その凄さに薫とはやては、感動していたが

龍之介「こら艦長に副長!!・・・感動余りに任務を忘れるな!!」

薫「すいません!!」

はやて「す、すいまへん!」

龍之介「全く・・・まあ、2ヶ月のゴジラ搜索で気が緩むのも仕方がないが・・・通

信主!・・・その後、搜索機からの報告は?」

実「いえ、まだ何も・・・」

空母大鳳からは、3機のE2Gがゴジラ搜索の為、発艦している。

しかし、4時間近く経っても発見の連絡が無い。

またしても、発見できないまま時間だけが過ぎていく。

その時

実「准将!」

龍之介「見つけたか?」

実「いえ、その・・・横須賀のブルーマーメイド庁からの緊急電です。」

龍之介「宗谷監督官から・・・何事だ？」

いきなりの真霜からの通信に龍之介は、何かと思いながら、通信を受ける。

龍之介「何!?!・・・ゴジラ搜索を中止して直ちに帰還しろ・・・如何ゆう事だ!?!」

行き成りのゴジラ搜索を中止の命令を聞いて、龍之介は、激怒し、理由を問う。

真霜『聞いているの通りよ!・・・直ちに搜索を中止して、横須賀に帰還して!』

龍之介「何故中止何だ!?!」

真霜『それは、戻ってから説明するわ・・・兎に角今は、帰還して!』

龍之介「ん・・・分かった。」

龍之介は、虚しく、通信を切る。

龍之介「聞いているの通りだ・・・全ての搜索を中止し、直ちに横須賀に帰投する。」

薫「そんな!?!・・・今中止したら、永遠にゴジラ発見が出来なくなります!!」

龍之介「これは、命令だ!!」

薫「ん・・・」

龍之介「通信主!・・・出ている搜索機は、直ちに本艦に帰還せよ・・・収容が終わ

り次第、権藤中佐の部隊と合流、横須賀に帰投する。」

実「了解!・・・やれやれか!」

龍之介の部隊は、直ちに航空機を収容し、権藤中佐の部隊と合流すべく北方に針路を取る。

そして、権藤中佐の部隊も

高速戦艦高千穂 第一艦橋

美由紀「任務を中止して、帰還せよとは如何いう事ですか!？」

龍之介の通信を受けて、美由紀は激怒する。

龍之介『聞いている通りだ・・・搜索を中止して、横須賀に帰還せよ・・・宗谷監督官からの命令だ!!』

美由紀「何ですか、その命令は、結局、反論もせず承諾したんですか?」

龍之介『元々この任務は、此方が勝手に頼んだ事だ・・・我々に反論する権利はない!』

美由紀「くう・・・結局、無駄でしたね!」

龍之介『ん・・・兎に角、搜索を中止して、此方と合流せよ・・・これは、命令だ!!』

美由紀「分かりました・・・直ちに合流します。」

美由紀は、通信を切る。

文夫「命令では、仕方ありません。」

美由紀「はあ・・・いちいち指図されては迷惑よ!」

文夫「此処は、我々の世界とは違うんです！・・・勝手なマネはできません。」

美由紀「そんな事は分かってるわ!!」

自由にゴジラ搜索が出来ない事に美由紀は、イラついていた。

向こうの世界なら、国連所属の肩書で自由にゴジラ搜索や殲滅が可能だったのに、此方の世界に飛ばされて、ブルーマーメイドの所属な為、上からの許可なしでは、自由にゴジラ搜索や殲滅ができない。

美由紀（何故こう指図されなければならないの？・・・我々は、ブルーマーメイドではなくGフォースなのに・・・）

その仕組みに美由紀は、イラついていた。

しかし、指揮系統を失っている以上、龍之介達は従うしかない。

美由紀は、直ちに海中を搜索している白鳳を呼び戻し、龍之介の部隊と合流する。

しかし、帰還の途中、空母大鳳に異常が発生した。

空母大鳳、艦橋

薫「速度が落ちている!?!?・・・如何したの航海長?」

美奈「分かりません・・・何が何だか?」

突然、空母大鳳の速力が低下していた。

薫「機関室!!?・・・如何したの!?!?・・・速度が低下してるけど・・・」

薫は、急いで機関室に状況を問う。

夏雄『此方機関室!!・・・蒸気調整バルブ破損!!・・・蒸気調整が不能でい!!』

薫「何ですって!?!・・・急いで機関を停止して、直ぐに蒸気排出して!!」

機関室の状況を聞いた薫は、直ちに機関を停止して、ボイラーの火を落として蒸気を抜くよう命じる。

このままでは、ボイラー室の圧力が上昇して、水蒸気爆発を起こしかねない。

そうなれば機関室の近くにある格納庫や弾薬庫が誘爆する危険性があった。

夏雄『言われなくても今やってる!!』

だが、既に夏雄は、作業を開始していた。

薫「流石機関長!!・・・急いで応援を遣します!!」

夏雄『頼む!!』

薫「整備班は、機関室へ!!」

薫は、急いで整備班を機関室の応援に向かわせる。

薫「准将!!・・・機関室でバルブが破損!!・・・蒸気調整が不能!!・・・現在、篠原

機関長が作業中!!」

龍之介「何としても食い止めるんだ!!」

薫「了解!!」

龍之介「通信主！・・・高千穂に現在の状況を伝えろ!!」
実「了解！」

状況は、直ちに先頭の高千穂に伝えた。

空母にとって、一番の危険は、火災による被害である。

何故なら、空母には、弾薬の他に格納庫に置かれている航空機や航空燃料が搭載されている。

もし火災が起きれば、それらに引火して、大爆発を起こす。

最悪の場合、轟沈の恐れもある。

それを避ける為、整備員、機関員は、必死に対応する。

数時間後、整備員、機関員の必死の作業で一応水蒸気爆発は避けられた。

溜まっていた蒸気も艦外へと排出され、空母大鳳は、一時白い雲を引きながら航行し、停止する。

しかし、ボイラーの調整が出来ない以上、機関を始動させる事はできない。
その為、通常の航行は不可能。

仕方が無く、巡洋艦すくね、さつま2隻が空母大鳳を曳航する事になった。

1月4日

Gフォース西部方面艦隊が横須賀に帰投する。

空母大鳳も曳航されながら、横須賀造船所の6号ドックへと入渠する。

横須賀に帰投した龍之介は、功と美由紀を連れて、そのまま真霜の元に向かう。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

真霜「どうぞ！」

龍之介「入るぞ!!」

真霜「良く戻って来てくれたわ、山本監督官！」

帰投した龍之介達を真霜は、笑顔で迎えるが

美由紀「任務の途中で戻ってきたんですけど・・・」

美由紀からキツイ目線で言われる。

功「口が過ぎるじゃないんですか権藤中佐!!」

功は、抑え様とした。

美由紀「私は、唯事実を述べただけです。」

龍之介「はあ・・・それで、何故急にゴジラ搜索を中止して、帰投しろと言う命令を出したんだ。」

功でも流石に美由紀を抑える事は出来ない、ともあれ、龍之介は、真霜に中止命令を出した理由を聞く。

真霜「その事は、私からも申し訳ないと思っっている・・・でも、その事は、私と一

緒に深町国交相から直に聞いた方が良いわ！」

龍之介「分かった・・・だが、この2人も一緒に連れて行く。」

真霜「えっ？」

龍之介は、同行するならば、功と美由紀も同行させると言ってきた。

龍之介「そうしないと納得しないだろう・・・特に権藤中佐は・・・」

龍之介は、ひそひそと指で指す

美由紀「当たり前です!!・・・いきなり帰れて言われたら、いくら私でも納得できる

説明を!!」

真霜「分かりました権藤監督官！」

真霜は、机に向かい、机の上にある電話で深町国交相に電話してから、龍之介達と共に国土交通省へと向かう。

国土交通省、大臣室

国土交通省に着いた真霜と龍之介達は

真霜「安全監督室室長の宗谷です!!・・・山本監督官以下3名をお連れしました!!」

深町「入れ！」

真霜「失礼します!!」

大臣室に入る。

深町「おお、山本監督官！よく戻って来てくれた!!」

帰還した龍之介達を深町は、笑顔で迎えるが

美由紀「失礼します深町国交相！」

深町「何かね権藤監督官!!」

龍之介が口を出す前に美由紀が先に深町につかかった。

美由紀「深町国交相!・・・何故ゴジラ搜索を中止するんですか?・・・まだゴジラの手がかりも何も見つけていないのに!・・・このままでは、納得できません!!」

美由紀は、自分の意見を深町に着き付ける。

深町「ん・・・権藤監督官の言う通りだ!!・・・まだゴジラの手がかりも何も見つけていないのに搜索を中止するのは馬鹿げている・・・しかし、権藤監督官!・・・中止命令が出た以上、それに従うのが道理じゃないのか?」

それに対して、深町も美由紀と同じ意見だが、中止命令が出た以上、それに従うのが当たり前だと言う。

美由紀「確かにその通りです・・・ですが!・・・ゴジラ搜索と殲滅は、我々Gフォースの使命・・・使命を全うする事も道理じゃないのですか?」

命令に従うのも道理、使命を全うするのも道理。

どちらも正しい。

だが

深町「権藤監督官！……君は、使命だと言っているが……本当は、個人的な感情でゴジラに復讐しようとしているのじゃないのかね？」

深町は、美由紀が個人的な感情でゴジラに復讐しようとしていると見抜く。

美由紀「私は、個人的な感情など有りません!!」

美由紀は、個人的な感情などないと言い張るが

深町「なら、従ってくれないか権藤監督官！……私も個人的な感情で君らにゴジラ搜索をさせてしまった……そのせいで君らに迷惑を掛けてしまった……何とお詫びしたらいいか……」

深町は、美由紀の前で頭を下げ、謝罪する。

美由紀「そ、そんな事で私は……」

謝罪する深町に美由紀は戸惑う。

龍之介「もう良いだろ権藤中佐！……深町国交相も反省している……それに、この任務は、俺達がい出した事だ……俺達に責める資格はない！」

龍之介も元々自分達がい出した事だからと深町を庇う。

美由紀「……」

それに対して、もう美由紀は何も言えなくなつた。

功「それで深町国交相!・・・我々は、これから如何すれば?」
話が落ち着き、功は、今後の事を聞く。

深町「その事だが・・・君達は、しばらく此方からの指示があるまで、そのまま待機してくれ。」

田沼総理が睨みを利かせている以上、勝手なマネは出来ない。

その為、深町からの指示があるまで、大人しくしているしかない。

龍之介「分かりました・・・どうせ此方も旗艦の大鳳が機関故障で動けないので・・・」
深町の指示なしでも、龍之介達は動けない。

何故なら、旗艦の空母大鳳は、機関が故障して、航行不能の状態で艦載機も発進不能になっている。

深町「故障!・・・修理は、どのくらい掛かるのかね?」

功「詳しい事はまだ分かりません。」

深町「そうか・・・」

龍之介「では、指示があるまで待機しています。」

深町「そうしてくれ。」

龍之介「では、これで・・・」

龍之介達と真霜は、大臣室を後にする。

国土交通省、廊下

龍之介「なあ真霜！」

真霜「何？」

大臣室を出ると龍之介は、真霜にある事を聞く。

龍之介「今回の中止命令は、深町国交相が出したもののじゃないんだろ？」

龍之介は、真霜に本当の事を聞く。

真霜「ええそうよ！……中止命令を出したのは、深町国交相ではなく田沼総理よ！」

龍之介「やっぱり、あの欲深い野郎の仕業か！」

真霜「もし続けるなら、辞表を提出しろとまで言われたそうよ！」

龍之介「あの野郎！……其処までして、俺達を追い込ませる気だな！」

田沼の汚いやり方に龍之介は腹が立つ。

功「如何しますか准将？」

龍之介「如何しますかって……此処は、大人しく従うしかないだろう……これ以

上は、深町国交相を辞任に追い込む事になる……俺達を守っている人を其処まで追い

詰める事はできない!!」

龍之介は、今まで助けてくれた深町を追い込む事だけはしたくない。

美由紀「あ……」

美由紀は、落ち込んでいた。

龍之介「ん？・・・如何した権藤中佐？」

美由紀「准将！・・・私は、如何やら、個人的な感情で動いていたかもしれませぬ。」
『え！?』

美由紀「深町国交相が追い詰められている事も知らずに私は、国交相に使命だとか言つて、酷い事を言いました・・・何と謝罪すれば良いか・・・」

真霜から本当の事を聞いて、美由紀は、申し訳ない事をしたと反省していた。

龍之介「はあ・・・別に良いじゃねえか・・・向こうもそれぐらい分かっているんだろうし！」

美由紀「しかし、私は！」

龍之介「相変わらずひっこいな権藤中佐！」

美由紀「別にひっこくありません!!」

龍之介の馬鹿な言い方で権藤中佐の機嫌も直り、艦隊へと戻る。

横須賀造船所、6号ドック

機関が故障した空母大鳳は、横須賀造船所の6号ドックに入渠していた。

龍之介「よう薫！」

飛行甲板で作業をしている薫、はやてに声を掛ける。

薫「あっ!? 准将!!」

龍之介「如何だ状況は？」

はやて「如何もこうもないよ、状況は、最悪やねん！」

龍之介「そんなに悪いのか？」

薫「ん・・・実は・・・」

薫は、龍之介に状況を説明する。

薫が言うには、調整バルブの故障原因は、バルブに使用している部品の老朽化が原因で蒸気の熱に耐えられなく破損した。

直ぐに新しい部品と取り換えたが故障は、それだけで済まなかった。

他にも故障が無いか調査したら、ボイラー室とタービンを繋ぐパイプの2、3本に亀裂が見つかり、更には、艦載機用エレベーターの4基のうち2基が故障し、至る所で故障が見つかる事態になった。

真霜「故障したのは、機関だけじゃなかったの？」

薫「最初は、機関だけでしたけど、後から、後からと至る所で故障が見つかり・・・それで整備班長や機関長と話した結果・・・艦のオーバーホールをする事になりました。」

至る所で見つかった故障を直す為、整備班長の文雄や機関長の夏雄と相談した結果、艦のオーバーホールをする事に決まった。

龍之介「そうか、まあ仕方がない……何せ30年前に作られた冷戦の遺物だ……後に作られた5番艦の翔鶴や6番艦の瑞鶴とは違うからな……」

龍之介の言う通り、空母大鳳は、冷戦時に建造された超大型空母で1番艦から4番艦と共に冷戦の遺物と言われ、数々の作戦に参加した。

だが、冷戦も既に終結し、艦体は、老朽化していたのだ。

今回の故障は、そのツケが来たのだろう。

龍之介「で、期間は？」

薫「およそ1年」

何と修理期間は、1年も掛かるとの事だ。

龍之介「1年!？」

薫「でもそんなに余裕がないから、機関長は、半年でやり遂げるとの事です。」

だが、そんなに余裕がないので、夏雄は、半年で完了すると薫は言う。

真霜「半年でやり遂げられるの？」

1年掛かるオーバーホールを半年でやり遂げると聞いて真霜は驚く。

薫「大丈夫です!うちの機関長がああ言うんですから……」

龍之介「そうだな!……あの機関長がそう言うんだから、信じよう。」

真霜「え、ええ……」

2人は、薫が言う事を信じる事にした。

ともあれ、しばらくは、動けない状態な為、GF隊員達には休暇が与えられた。

宗谷家

龍之介「ただいま！」

龍之介と薫は、久しぶりに宗谷家に帰宅する。

真雪「お帰りなさい!!」

帰宅した龍之介と薫を真雪が笑顔で迎える。

真雪「大変だったわね！」

龍之介「大変と言うよりは、無駄な任務でしたよ！」

真雪「そう・・・」

龍之介「取り合えず今は、ゆっくり休みたい！」

薫「私も疲れた!!」

これ以上、龍之介は、何も言いたくなく、薫も修理作業とかで、もうヘトヘトだった。

真雪「まあ、2人共、兎に角上がって、ゆっくり休みなさい!!」

真雪もこれ以上あまり聞かなかった。

龍之介は、そのまま部屋に入る。

薫も部屋に入ったが、着替えてから、ましろが居る部屋に向かう。

薫「ましろちゃん居る？」

薫は、ましろの部屋をそつと覗く。

覗いて見ると、ましろは、机に向って、試験勉強中だった。

横須賀女子海洋学校の入学試験まで、あと20日ぐらいに迫っていた。

その為、ましろは、試験勉強を徹夜で頑張っていた。

薫は、そんなましろの邪魔をしない様に、そつと部屋から離れる。

しばらくして、真霜と真冬が帰宅する。

夕食後、真霜は、龍之介の部屋へと向かう。

宗谷家、龍之介の部屋

真霜「龍之介居る？」

龍之介「おお真霜か！入れよ!!」

真霜は、龍之介の部屋へと入る。

龍之介「如何した？」

真霜「ん・・・龍之介、大丈夫？」

龍之介「何がだ？」

真霜「その・・・任務が中止になって、悔しがってないかなっと思ってる？」

今回の任務の中止で龍之介が悔しがっていないだろうか、美由紀や功が居たため聞け

なかったので真霜は、気になっていた。

それに対して龍之介は

龍之介「そりや悔しいき・・・任務は、途中で中止になるし、委員会の幹部達の鼻を明かす事もできなかった・・・腹が立つほど悔しい！・・・でも、本当は、ホツとしているんだ。」

今回の任務の中止で龍之介は、悔しがっていたが、でもそれとは、反対に実は、ホツとしていた。

真霜「何で？負けたのに如何して？」

何故、負けたのにホツとしているのか真霜は問う。

龍之介「確かに俺は負けたが、2ヶ月の搜索でゴジラの存在は確認できなかった・・・これは、ゴジラが存在しないと言う事だ・・・と言う事は、ゴジラの恐怖に怯える事はもうない。」

国土保全委員会の幹部達には負けたが、ゴジラが存在しない立証は、これではつきりした。

それだけでも龍之介は喜んでいた。

真霜「それもそうだけど・・・」

しかし、真霜は、不機嫌になる。

龍之介「何だ、嬉しくないのか真霜？・・・ゴジラが存在しないと言う事に・・・」
真霜「それは嬉しいは、でも、龍之介悔しくないの？・・・あんなに馬鹿にされながら、任務を全うしたのに結局、上からの理由で中止に追い込まれて・・・」

龍之介「そりゃあ、最初は悔しがったさ・・・でも、それは、乗り越えなければならぬ・・・乗り越えなければ、それは、指揮官失格だ！・・・指揮官は、どんな事が当ても、それに耐えなければならぬ・・・そうしないと正しい判断が出来ない・・・それは、分かるよな真霜？」

真霜「うん！」

龍之介の言葉に真霜は何も言えなくなる。

指揮官は、どんな事が当ても、それに耐えなければならぬ。

そうしないと正しい判断が出来ない。

真霜もそれは、分かっていた。

真霜も安全監督室室長であり、ブルーマーメイドの最高指揮官なのだから
でも、真霜の不機嫌は、治らず

龍之介「仕方ないな・・・」

仕方なく龍之介は

龍之介「そう言えばお前、明日、休みだったな？」

真霜「そうだけど……」

龍之介「じゃ、遅くなったが……2人で初詣に行かないか？」

真霜「え!？」

龍之介は、真霜の不機嫌さを直す為、明日、諏訪神社に初詣に行こうと真霜を誘う。

龍之介「行けば、不機嫌さも治るだろ!如何だ？」

真霜「そうね……久しぶりに龍之介と一緒に出かけたいし!」

それに対して、真霜は承諾する。

真霜も龍之介とは、久々にデートをしたかったのだ。

龍之介「なら決まりだ!……さあ、明日に備えて、今日は、もう寝るぞ!!」

真霜「うん……おやすみ!」

明日に備え今日は、早く寝る。

真霜が出た後、龍之介は、ベッドの上である事を考えていた

龍之介「ゴジラは居なかった……となると俺達は、もうこの世界では、必要ない存在なのだろうか?……そうなると解散も有るかもな……」

龍之介の頭には、解散の文字が浮かび上がっていた。

しかし、ゴジラは、本当に居なかったのだろうか

太平洋のとある海域

漁船員「ん!?・・・何だあれは？」

太平洋の日本領海内で漁業をしていた日本の漁船が夜、漁業をしていると、突然、海中から謎の岩礁が現れ、数分で海中に没した。

漁船員は、急いで、無線で海上安全整備局に連絡したが、イタズラだと思われ、相手にされなかった。

漁船員も数分だった為、証拠の写真も撮れなかった。

もしかしたら幻覚でも見たんだろうと思い、そのまま、漁業を終え、港へと帰還した。しかし、漁船員が目撃した岩礁は、岩礁ではなく、ある生物の背びれであった。

その生物は、海面に姿を現さず、そのまま海底に没した。

第33章 遅い初詣

1月5日

諏訪大神社

龍之介「うう……寒いな！」

真霜「そうね……」

寒い中、龍之介と真霜は、諏訪大神社の石段を上っていた。

初詣から5日も過ぎていた為、神社には参拝する客もいない。

雅に今参拝に来ているのは、龍之介と真霜の2人だけである。

石段を上がり、神社に参拝する。

参拝後、龍之介は、おみくじを買おうと、神社の隣の売店に行く。

龍之介「すいません!!」

龍之介は、ちょうど当番であつた八木鶴に声を掛ける。

鶴「はい、何か？」

龍之介「おみくじを二つください!!」

鶴「あつ、おみくじ二つですね！」

鵜は、おみくじ二つを龍之介に渡す。

龍之介は、お金を渡し、おみくじ二つを受け取り、そのまま真霜の所に戻る。

鵜「カップルでの初詣かな?・・・随分と遅い初詣だね!」

鵜は、龍之介と真霜を見て、随分と遅いカップルの初詣だと思った。

おみくじを買った龍之介は、一つを真霜に渡し、恐る恐るおみくじを開く。

開くと、2人とも小吉だった。

おみくじの下には、災厄と功運の両方が降りかかると書かれていた。

如何いう意味か2人には全く分からなかった。

その後、2人は、上の裏山へと更に石段を上がる。

真霜「・・・」

石段を上がる途中、真霜は、ある事を思い出す。

真霜（此処に来るのは、何年振りだろう・・・お母さんの引退の日以来かな・・・）

真霜が思い出に浸っていると龍之介は、ふっと止まり真霜の方を向く

龍之介「如何した?」

真霜「あつ!?うんうん、何でもないわ!」

龍之介「そうか、まだ先は長い・・・行くぞ!」

真霜「ええ!」

2人は、改めて、石段を上がる。

石段を上がり、裏山の頂上に着く。

頂上に着いた龍之介と真霜は、其処から横須賀の風景を見る。

龍之介「良い眺めだな！」

真霜「ええ！」

龍之介「なあ、真霜！」

真霜「何？」

龍之介「俺は、Gフォースを解散させる。」

真霜「か、解散!？」

突然、龍之介は、真霜にGフォース解散を言い出す。

真霜「何で？」

突然、解散を言いだし、理由を問う。

龍之介「もうこの世界に俺達Gフォースは無用の長物だ!・・・解散して、隊員や艦船をブルーマーメイドやホワイトドルフィンに編入させる。」

ゴジラも居ない世界にGフォースが有っても仕方がない。

いっそ解散して、乗員や艦船をブルーマーメイドやホワイトドルフィンに編入させる。

しかし、真霜は

真霜「でも、貴方は如何するの？」

Gフォースが解散したら、指揮官である龍之介は如何なるのであろう。

真霜は、それを気にしていた。

龍之介「さあな・・・俺的には、真雪さんが新しく開校する航空士の育成校の教官になろうと思っっているんだが・・・まだ分からない・・・だが、俺には、まだやる事がある。」

以前、真雪が龍之介に航空士の育成校の創設を検討していると云った。

その時、育成校に必要な航空士を教官として派遣してほしいと言われ、龍之介は、自ら、志願しようと考えていた。

龍之介も元は、パイロット。

パイロットとしての経験は、十分にある。

だが、その前に龍之介には、まだやる事があつた。

真霜「何、やる事って？」

龍之介「白鳳の処分だ！・・・あれだけは廃棄しなければならぬ!!」

そう龍之介達が保有する白鳳の事だ。

あれだけは、龍之介達の手で処分しなければならない。

真霜「あの凄い艦を破壊するの？」

龍之介「真霜！・・・お前、こう思った事はないか？・・・自分に突然、世界を動かす力が手に入った時、その力を思うがままに使いたいと思った時があるだろう。」

真霜「わ、私は、そんな事・・・」

龍之介「例えばだ！・・・だが、そんな力など持つてても意味がない。」

真霜「えっ!？」

龍之介「いくら力を持つていても、同じ過ちを起こす・・・だから、持つてても何の意味がない・・・人間は、自然に生きなきやいけないんだ。」

以前、龍之介が真霜達に白鳳を見せた時、龍之介は、真霜達に使い方を誤ればこれらの技術は世界を滅ぼす事もあると言った。

その言葉通り、白鳳の存在は、既に日本の総理だけじゃなく、アメリカの大統領にまで影響を及ぼしている。

だから、龍之介は、Gフォースを解散する場合、白鳳を完全に破壊する。

この世界に白鳳の様な技術はいらない。

龍之介は、そう決めていた。

真霜「ん・・・」

それを聞いて真霜は、不安な顔をする。

龍之介「そんな顔をするなよ!・・・別に直ぐ解散する訳じゃないんだ・・・それに解散したら、薫やはやて達がお前の部下になるんだぞ!!・・・まあ、権藤中佐は嫌がるだろうし、参謀や次郎は、ホワイトドルフィンに行くだろうが、お前的には良い事じゃないか?」

解散すれば、薫やはやて達は、ブルーマーメイドに編入するだろう。

美由紀は、拒否するだろうし、功や次郎は、ホワイトドルフィンに行くだろう。

真霜的には、嬉しい事であるが

真霜「い、良い事じゃないわ!!」

しかし、真霜は怒る。

龍之介「真霜!」

真霜「貴方は、勝手に無用の長物だと言うけれど・・・私には、必要な部隊よ!・・・例え、ゴジラが居なくても、貴方達は、今まで私達を助けてくれたじゃないの!!・・・それなのに解散する何て、私は反対よ!!・・・解散なんてさせない!!・・・貴方は、まだやれる!・・・あきらめちゃ駄目よ!!」

真霜は、龍之介が勝手にGフォースを無用の長物だと解散させようとしている事に怒っていた。

今までいろいろしてくれたのに、いきなり解散させるなんて、龍之介は、まだやれる。

それなのに簡単に諦めるのを真霜は、許さなかった。

龍之介「お前・・・其処まで、俺を・・・」

龍之介は、真霜の事を全く分かっていなかった。

真霜「だから、貴方の部隊は今でも必要なの！解散なんてしないで!!」

改めて、龍之介に解散をしないでと訴える。

龍之介「・・・はあ・・・お前に言われたら、逆らえないな・・・」

それに対して、龍之介は、思い留まる事にした。

龍之介「だがな、何れは解散しなければならぬ・・・その時は・・・」

真霜「分かっている・・・その時は・・・」

何れは、解散を宣言する。

その時は、真霜は、龍之介の要求どおりする。

だが、それは永遠に無いかも知れない。

横須賀市街

その後、裏山を降り、諏訪大神社を後にした龍之介と真霜は、横須賀の街をぶらぶらしていた。

真霜「ねえ龍之介！」

龍之介「何だ？」

真霜「気分転換に何所か寄らない？」

流石に難し話をした後だから、気分を変えようと何所かえ寄る事にした。

龍之介「それなら、さかくら総本家にでも行くか？・・・薫から聞いた話じゃ・・・あ
その和菓子は美味しいらしい。」

真霜「ええ！」

2人は、さかくら総本家へと向かう。

しかし、向かう途中の交差点で、ある2人組がいた。

平賀「はあ・・・もう1年か・・・」

福内「今年は、随分忙しかったわね・・・」

平賀と福内は、休暇で横須賀の街をぶらぶらしていた。

平賀「ねえ、のりりん？」

福内「何、ともちゃん？」

平賀「私ら、いつになったら、結婚できるんだろう？」

福内「えっ!?!・・・そんなのいきなり言われても・・・」

平賀「だって、私の友達、此間結婚したんだよ!・・・それなのに、まだ私ら、男すら出来ていないし・・・このまま取り残されるかも・・・のりりん如何したら良い？」

如何やら、平賀は、知り合いに先をこされ、自分は、このまま取り残されるかもと悩

んでいた。

福内「そんな事、私に聞かないでください!!…全くともちゃんは、変な事を…えっ!？」

平賀「如何したのともちゃん？」

悩みを聞かされ福内は、受け流そうとした時、反対側の歩道である人物を目撃する。

福内「あ、あれ…宗谷監督官じゃ？」

平賀「えっ？」

福内に言われ平賀は、その方向を見ると

平賀「ほ、本当だわ!？」

反対側にいる人物が真霜だと認識した。

福内「そ、それに隣に居るのは…」

『山本監督官!』

更に隣を歩いているのが龍之介だと認識する。

2人は、偶然にも龍之介と真霜がデートしているのを目撃してしまったのだ。

それを見た2人は、後を付ける事にした。

2人は、さくら総本家に入り、平賀と福内は、2人に気づかれない様にドアの向こう側から様子を伺う。

平賀「宗谷監督官と山本監督官・・・デートかな？」

福内「そうだと思うわ・・・信じられないけど・・・」

龍之介と真霜がデートしている光景は、2人には、信じられなかった。

それとその筈、仕事場では、あまり関係など話さず、普通にしているから分からなかった。

それからしばらくして、2人がさかくら総本家から出る。

平賀と福内も気づかれない様に後を付ける。

横須賀市、ヴェルニー公園

2人は、横須賀の海が見えるヴェルニー公園のベンチに座り、お互いに和菓子を食べながら話をする。

その光景を平賀と福内は、草むらからの隅っこで見っていた。

福内「やっぱりデートだわ!？」

平賀「宗谷監督官と山本監督官はできてたんだ!？」

龍之介と真霜の関係がこれで明らかになった。

それから、3日後の事だった。

横須賀ブルーマーメイド庁舎

BPF隊員達内で『宗谷真霜が山本龍之介と付き合っていると』と言う噂があったとい

う間に広がってしまった。

当然、その事は、真霜本人の耳にも入り

B P F 隊員「山本監督官とは、どこまでいったんですか？」

B P F 隊員「如何やって、山本監督官を口説いたんですか？」

とB P F 隊員達に責められる。

真霜「そんなの関係ないでしょ!!・・・貴方達、仕事は、如何したの?・・・持ち場に戻りなさい!!」

真霜は、彼女達を追っ払う。

真霜「全くもう・・・それにしても私と龍之介の関係を如何やって知ったの?」

真霜は、噂の根源が平賀と福内とは知らない。

そして、龍之介の方でも

横須賀基地

次郎「ま、マジかよ!」

はやて「本当よ!・・・平賀さんと福内さんから聞いたの・・・此間、准将と宗谷監督官が一緒に歩いてるのを見たんやって!」

次郎「信じられねえ、あの准将と宗谷監督官が!」

なのは「本当!」

フェイト「ビツクリだよね！」

ブルーマーメイドと同様、Gフォース内でも噂が広まっていた。

薫「如何したの、皆揃って？」

4人が話してる時、後ろから薫が声を掛けてきた。

次郎「薫？」

薫「何を話してったの？」

はやて「薫先輩、知ってましてん？」

薫「何を？」

はやて「准将と宗谷監督官が実は、密かに付き合つとつたて言う事を・・・」

薫「げっ!?だ、誰がそんな事を？」

はやてから話を聞いて、薫は驚愕する。

何故なら、薫が秘密にしていた事が皆にばれてしまったからだ。

ともあれ、薫は、噂の元を問う。

次郎「此間、交差点辺りで平賀と福内が目撃したらしい。」

薫「ハハハ・・・そうなんだ・・・」

(やばい!!)

噂の元が平賀と福内だと知り、もう真霜の部署でも噂になってるだろうと思った。

薫の予測通りである。

薫「あつ、ちよつと私、用事を思い出したから……じゃあね！」

薫は慌てて、その場を去る。

次郎「何だあいつ？」

『ん？』

慌てて去る薫に4人は頷く。

美由紀「ん……」

そんな次郎達を隅っこで美由紀が睨んだ目付きで伺っていた。

横須賀基地、指揮官室

薫「兄さん!!」

薫は慌てて、龍之介が居る指揮官室に入る。

龍之介「な、何だ薫!?!慌てて入ってきやがって……ノックぐらいしろ!!」

ノックをせず慌てて入ってきた薫に龍之介は、怒鳴るが

薫「それど頃じゃないよ!!大変よ兄さん!!」

龍之介「そんなに焦って如何した？」

薫は、少し落ち着いてから話す。

薫「此間、真霜姉さんと初詣に行ってたよね？」

龍之介「ああ、それが如何したんだ？」

薫「実は、その事が皆で噂になってるわよ!!」

龍之介「な、何!？」

薫から此間の事が噂になっている事を聞いて、龍之介は驚愕する。

龍之介「な、何で知ってんだ!？」

龍之介は、噂の元を問う。

薫「如何やら、平賀さんと福内さんが目撃した様なの!」

龍之介「えっ!?!・・と言う事は・・真霜の部署でも?」

薫「当然、噂になってるかも・・」

真霜の部署でも噂になってる事を聞き、龍之介は愕然とした。

龍之介「あぢや・・如何すれば良い?」

愕然とした龍之介は、如何すれば良いか、薫に聞くが

薫「そんなの私に聞くより、直接、真霜姉さんに聞いて見たら、携帯で!」

龍之介「ああ、そうだな!」

龍之介は、携帯で真霜に電話をする。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

一方、噂をする連中を追っ払った真霜は、執務室で書類仕事をしていたが、途中で携

帯が鳴り、ポケットから出すと

真霜「あれ、龍之介からだわ!?・・・何だろう?」

画面に山本龍之介と出ていたので真霜は、恐る恐る出て見ると

真霜「はい、もしもし!」

龍之介『もしもし、真霜か?』

真霜「如何したの急に掛けて来て?」

龍之介『実は・・・お前の所で、俺達の関係が噂なっていないか?』

真霜「えっ!?もしかして、貴方の所でも?」

龍之介『ああ・・・今薫から聞いたところだ!!・・・不味い事に成なった!・・・如何

何しよう?』

真霜「如何するって・・・取り合えず何所か落ち着いた場所で話しましょう。」

龍之介『そ、そうだな、じゃお昼に此間のヴェルニー公園で如何だ?』

真霜「うん、分かったわ!!」

真霜は、携帯を切り、仕事に戻る。

しばらくして、お昼になり、真霜は、誰にも気づかれずに執務室を出て、ヴェルニー

公園へと向かう。

龍之介も誰にも気づかれずに基地を出る。

横須賀市、ヴェルニー公園

真霜「龍之介!？」

龍之介「真霜!？」

2人は、ヴェルニー公園のベンチに座り、お互いに噂になつてゐる事を話す。

真霜「そう・・・それ程噂に成つてゐるの？」

龍之介「ああ、お前の所でもさうとう噂になつてゐるな・・・」

真霜「うん・・・部下から色々と質問攻めに遭つたわ!!」

龍之介「最悪だな!・・・如何しよう？」

2人は、如何するのか考える。

そんな中、草むらからの隅つこで見ていた連中がいた。

平賀「2人は、何を話してゐるんだろう？」

はやて「さあ、此処からじゃ分からへん、もつと近くに寄らんと・・・」

フェイト「これ以上、近くになると見つかりますよ!」

なのは「取り合えず、もう少し近づいて見ようよ!」

何とそれは、平賀とはやて、フェイト、なのはの4人だった。

真冬「くそ・・・龍之介のヤツ!!・・・うちの真霜姉に手を出しやがって!!!」

福内「落ち着いて下さい真冬さん!!見つかったら如何するんですか?」

真冬「くう……」

更にその後ろには、怒り寸前の真冬がおり、それを抑える福内の姿もあつた。

6人は、見つからない様に近づく。

真霜「ねえ！」

龍之介「何だ？」

真霜「後悔してない？」

真霜は、龍之介に後悔してないのか問う。

龍之介「ん……まあ、この前、いきなり媚薬を盛られ……抱かれ……最後には噂になる……俺的には、もうこんなの嫌だね……別れたいよ！」

それに対して、龍之介は別れたいと言い出す。

真霜「そんな……」

龍之介から別れたいと言われ、落ち込む真霜。

龍之介「何てね、嘘だよ!!……お前と一緒に居て、嫌な事など全くない!……むしろお前が居ないと寂しい……もし居なくなったら……俺は、もう耐えられなくなる!!」

だが、龍之介がさつき言った事は全部嘘で、本当は、真霜とは別れなくなかった。今、別れたら、龍之介は生きていけない

真霜「龍之介……私も貴方が居なくなったら困る！……貴方が居なくなったら……私は生きていけない!!」

真霜も龍之介と同じ気持ちだった。

真霜「龍之介……」

真霜は、龍之介に泣きながら抱きつく。

『!?!』

その光景を見た6人は、ビツクリする。

龍之介「泣くなよ!!……俺は、絶対にお前を裏切らない!……これまで同様、俺とお前は、恋人同士だ!!……だからもう泣くな!!」

真霜「うん……うん……」

真霜は、泣きながら頷く。

真霜は嬉しかった。

これまで同様、一緒に居られるのが嬉しかったのだ。

平賀「何だか、宗谷監督官……嬉しそうな顔してますね……」

福内「そうね……」

はやて「准将もええ事を言うね!」

なのは「流石に准将もやるね!」

フエイト「うん！」

5人は、その光景を見て、感動していた。

そして、もう1人、側で感動していた奴がいた。

真冬「ん・・・良く言った!!」

感動のあまり真冬は、草むらから飛び出す。

真霜「ま、真冬!？」

龍之介「お、お前!?! な、何で此処に!?!」

後ろから、突然出てきた真冬に2人は驚愕する。

真冬「聞いたぞ龍之介!!・・・これまで同様、恋人同士だつて!!・・・良く言ったぞ

!!・・・龍之介!・・・真霜姉を幸せにしろよ!!」

龍之介「あ、ああ、ありがとう。」

龍之介は、礼を言うが

真霜「ちよつと真冬!!何で貴方が此処に居るの!?!」

真霜は、真冬を睨む。

真冬「えっ!?!・・・ああ、それは・・・」

真冬は、自分が見つかっている事によろやく気付き戸惑う。

平賀「駄目ですよ真冬姐さん!!」

横から、平賀と福内が顔を出すか

真霜「貴方達!？」

平賀と福内も見つかり、更にはやて、なのは、フェイトまで見つかった。

龍之介「お前らまで何やってるんだ!？」

そのまま6人は、2人の前に正座させられた。

真霜「貴方達!・・・いつから其処に？」

平賀「いや、その・・・後悔してないって、ところから・・・」

龍之介「そんなところからかよ!?!・・・全くお前ら・・・」

龍之介は呆れてしまう。

はやて「だって、気になちやって、ねえ平賀さん!」

平賀「そうです・・・宗谷監督官は、私達の大事な上司です・・・何か遭ったら、私

達の責任になります!!」

真霜「だからと言って、盗み聞きは良くないわ・・・反省しなさい!!」

『す、すいません!!』

6人は、それから2人にキツイ説教を受ける事になった。

当然、此処での事は、外部に漏れない様に固く機密にするよう言い渡された。

横須賀基地

その頃、薫と次郎は

薫「遅いな・・・はやてちゃん達！」

薫と次郎は、書類整理をしていた。

次郎「さ、さあな、ハハハ・・・」

薫「次郎君！・・・何か隠してない？」

次郎「な、何も・・・」

薫「そうお、変だけど・・・」

次郎（くそ・・・はやての奴、俺に薫を足止めしろだと・・・無茶苦茶だ!!）

実は、はやてから薫を足止めするよう言われていたが、流星に相手が薫じゃ無理な相談だ。

薫「そう言えば次郎君！」

次郎「な、何だ？」

薫「この頃、ゴジラ搜索で忙しかったから、全然一緒に居られなかったね！」

次郎「そう言えば、そうだな!？」

薫「ああ、次郎君とまたしたいな・・・」

薫は、快樂をしたいと言いだす。

次郎「お前、こんな時に言う事か？」

次郎は、驚愕する。

薫「こんな時だからこそしたいのよ！」

次郎「ああ、分かった分かった・・・そのうちにな！」

薫「やった!!絶対だよ！」

次郎「ああ、二言はない！」

次郎は、空しく承諾する。

龍之介と真霜、そして、薫と次郎の恋は進んでいる。

だが、龍之介と真霜の關係に複雑する者がいた。

横須賀基地、指揮官室

しばらくして、龍之介は、指揮官室で書類仕事をしていた時

美由紀「失礼します！」

龍之介「ん？」

美由紀が突然、指揮官室に入つて来た。

龍之介「何か要か権藤中佐？」

突然入つて来た美由紀に何か要かと尋ねると

美由紀「准将!・・・本当なんですか！」

龍之介「何がだ？」

美由紀「宗谷監督官との関係・・・本当なんですか？」

美由紀は、龍之介に真霜との関係が本当なのか問う。

龍之介「その事か・・・本当だ！」

それに対して、龍之介は素直に認めた。

美由紀「ん・・・そうですか・・・その件に関しては、私は何も言いません・・・ですが!!・・・私達を裏切る様なマネはしないでください!!・・・私が言いたい事は、それだけです。」

素直に認めた龍之介に美由紀は責せず、唯一言、自分達を裏切る様なマネはしないで欲しいと告げた。

龍之介「心配するな権藤中佐!・・・俺は、仲間を裏切る様なマネはしない!・・・絶対に!!」

それに対して、龍之介は、絶対に裏切らないと約束する。

龍之介「それに・・・宗谷監督官は良い奴だ!!・・・俺は、あいつを信用している。」
更に龍之介は、真霜を信用していると告げる。

美由紀「・・・はあ・・・それを聞いて安心しました・・・では!」

それを聞いた美由紀は安心して、指揮官室を出る。

だが、指揮官室を出た美由紀は、何故か、涙を流していた。

美由紀「……」

本当は、美由紀も龍之介の事が好きだった様だ。

だが、龍之介は、美由紀より真霜を選んだ。

それに対して、美由紀は嫉妬したが、いつまでも気にはいけない。

そう思い、泣くのを止めて、職務に戻った。

第34章 横須賀女子海洋学校入学試験

1月19日

横須賀女子海洋学校の入学試験までもう間もなく。

受験生達は本番の試験に向けて最後のラストスパートをかけた。

そして、いよいよ横須賀女子海洋学校の入学試験の前日。

宗谷家、ましろの部屋

真冬「ましろ、明日はいよいよ入学試験だが、大丈夫か？」

真冬がましろに明日の本番について尋ねる。

ましろ「だ、大丈夫だよ真冬姉さん!!」

真冬「そうか?・・・お前は、肝心な所で抜けているからな・・・」

ましろ「わ、私は抜けている訳じゃない!!唯ちよつと、運が悪いだけだ!!」

ましろはあくまで自分は間抜けでは無く、不幸体質なのだと言張する。

薫「大丈夫!・・・試験会場まで私が付いて行くから!」

薫は、真冬とましろの会話を聞き、薫もましろの不幸体質を予見し、試験会場までつ

いて行く事にした。

薫「ついでに荷物チェックに関しては、私が確認するから・・・ましろちゃん、受験票を忘れそうだし！」

真冬「確かにシロならありえそうだな！」

ましろ「・・・」

薫の指摘に真冬はあり得そうだと口にし、ましろ自身も自分の不幸体質からあり得ると思った。

ましろ「お、お願いします。」

ましろは薫に頼る事にした。

荷物整理の時、ましろは、受験票をカバンに入れ忘れており、薫が確認しなければ、受験票を忘れているところだった。

そして、受験票を入れたと思ったら、今度は試験問題に出そうな問題を纏めたノートや筆記用具を入れ忘れ、何かもうグダグダだった。

薫「取り合えずこれでよし、受験票や受験に必要な物は入れたし、後は、当日忘れな
い事ね！」

ましろ「本当、何から何までありがとうございます。」

薫「礼は良いは！・・・取り合えず明日の試験は頑張ってね！」

ましろ「はい！」

そして、翌日の横須賀女子海洋学校入学試験当日

1月20日

ましろは、薫の運転するスキッパーの後ろに乗っていた。

薫「もうすぐ着くけど、ましろちゃん？」

ましろ「何です？」

薫「試験の時、解答欄の記入ミスは気をつけてね・・・あと受験会場の場所もよく確認する様に・・・特に実技試験の方は・・・」

ましろ「わ、分かっています。」

薫は、以前ましろがした模擬試験でのミスを指摘する。

本番で解答欄の記入ミスなんて起こしたら、不合格の確立もグツとあがるからだ。

そして、筆記試験の後に有る実技試験で、ちゃんと受験する実技科の試験会場の場所もチェックしておくように言う。

横須賀女子海洋学校、門前

薫「着いたよましろちゃん！」

ましろ「あ、ありがとうございます。」

薫の運転するスキッパーは無事に受験会場である横須賀女子海洋学校に到着した。

時間に余裕を持って早めに宗谷家を出たので、ましろ以外の受験生の人数もまだ少数

だ。

薫「良いって・・・それじゃあ受験、頑張つてね！」

ましろ「は、はい・・・行つてきます。」

薫「行つてらしゃい!!」

ましろは、緊張した面持ちで受験会場の中へと入つて行つた。

薫は、ましろを見送ると門前に立っている第21回 横須賀海洋学校入学試験と書いてある看板を見る。

薫「入学試験か・・・私もあんな風だったわね・・・」

薫は、辺りを見回し、昔の江田島の海士学校の入学試験を思い出す。

江田島の海士学校の入学試験も横須賀海洋学校の入学試験と同じで、入試に合格できるのは、ほんの僅かである。

だから、薫は、ましろと同じ様に入試の猛勉強をし、それが実つて、主席入学をしている。

言わばこれは、前哨戦でもある。

1度潜れば、2度目はない。

やがて、時間が経つにつれ、受験生の人数も増えてくる。

薫「ん・・・あれは!？」

その中に薫が知っている受験生がいた。

明乃「人がたくさん……皆、私と同じ受験生かなあ？」

岬 明乃だった。

明乃「流石ブルーマーメイドの登竜門……！」

明乃は、沢山の受験生を見て驚く。

明乃「よくしつ、今日は、頑張るぞ……っ！」

薫「岬ちゃん!!」

薫は明乃の姿を見つけると声を掛けた。

明乃「あっ!?!薫お姉ちゃん!!」

明乃も薫に気づき、声をかける。

薫「岬ちゃん！」

明乃「薫お姉さん、如何して此处に？」

薫「私は、友達の付き添いで……岬ちゃんは、これから入学試験でしょ!?!」

明乃「はい!……合格して、立派なブルーマーメイドになります。」

薫「そうお、頑張ってるね!……横須賀女子海洋学校の入学の門は狭いから悔らない

様に……ん!?!」

薫達が門前でやり取りをしていると、

麗緒「ほら、早く・・・っ!!」

留奈「待つてよっ!!」

麗緒「試験に遅刻とか、シャレにならない・・・っ!!」

留奈「時間は、もう大丈夫だつてばっ!!」

空「汗かいちゃった。」

桜良「折角朝シャワー浴びたのに・・・」

慌てて受験会場に飛び込んできた4人の受験生がいた。

それは、後に機関員四人衆と言われる。

若狭麗緒、伊勢桜良、駿河留奈、広田 空の4人であった。

留奈「もくレオちゃんてば、大丈夫つって言つても止まらないんだもん。」

青みがかかった黒髪にツーサイドアップの髪型の女の子が息を整えながら愚痴るかの

様に言う。

麗緒「もとはと言えばルナがお寝坊するからでしょ・・・」

4人のリーダー的な存在の麗緒が急いでいた理由を言う。

如何やら、4人の中で一番下の留奈が寝坊したのが原因の様だ。

空「あくなんか全力で走したから数式忘れちゃったかも」

空が息を整えながら嘆く。

桜良「あつつくい……コート脱いじやおうかしら……」

4人の中でも背の高い桜良は手で仰ぎながらコートを脱ごうとする。

空「サクラそう言うのエロいから止めなつて！」

桜良「えっ……!?」

空が桜良にコートを脱がせるのを止めた。

エロいと言われ、シヨックを受ける桜良。

4人はワイワイと談笑しながら会場の中へと入っていった。

明乃「賑やかだなあ……」

薫「そ、そうね……」

薫と明乃が笑みを浮かべて今の4人の感想を言った。

薫「それじゃあ、これ以上引き留めるも悪いから、私はこの辺で失礼するね……岬

ちゃん、試験頑張つてね！」

明乃「はい！」

明乃は、受験会場の中に入って行った。

薫「さつて、私は……」

試験が終了するまで、薫は、何所かで待つ事にした。

取り合えず学校の寮エリアの広場のベンチで待て居ると

薫「ん!？」

薫の足元に一匹の大きなドラ猫がいた。

薫「ああ、この前の猫!？」

それは、五十六だった。

薫は、五十六を膝の上に乗せる。

薫「如何したの?・・・こんな所で日なたごっこ?」

すると、五十六は、薫の膝の上で寝転がる。

薫は、寝転がる五十六のお中を指でくすぐり遊ぶ。

横須賀女子海洋学校、教室

その頃、筆記試験会場の教室では、続々と受験生が集まりかけていた。

そんな中、例の4人組は

留奈「もうすぐ試験始まるね!・・・私、昨日は、緊張して眠れなかったから、ずつ

と本開いてたよ・・・」

桜良「ちゃんと寝ないとお肌が荒れるわよ・・・」

試験まじかになって、緊張する留奈に寝ないとお肌が荒れると桜良が言う。

空「筆記はともかく実技試験が気になるよね・・・」

麗緒「何するか分かんないもんね。」

筆記より実技が気になる2人。

留奈「実技より筆記だよ……う……また、緊張してきた……」
実技より筆記が問題だと言い、緊張する。

桜良「一十五は？」

留奈「いちご」

麗緒「落ち着け！」

空「駄目かも分からんね……」

これから、筆記試験なのに4人は、全く落ち着きがない。

その後、筆記試験が開始され、受験生は、配られた問題用紙と回答欄を開く。

明乃（本番でも模擬試験の時みたたく、いつも通りに行けば……）

明乃は模擬試験の時の様に落ち着いて問題を解いて行き

明乃（あつ、コレ、もかちゃんが試験対策で教えてくれた問題だ……あつ、コレ

は昨日やった問題と同じ公式でやれば……）

明乃はその生まれながらの幸運と受験勉強の成果があったのか、順調に問題を消化していき、

ましろ（ちゃんと定規を当ててやっていけば……）

ましろは薫から言われた定規戦法で解答欄を間違えない様に慎重に問題を解いて行

く。

やがて、2時間15分が経過し、筆記試験終了時間が迫る。

各受験生は、問題用紙と回答欄を見直し、明乃、ましろも問題用紙と回答欄を見直す。それから、15分経過し、筆記試験は終了する。

問題用紙を残し、試験官が回答欄を回収していく。

試験官「では、これで筆記試験は終了です・・・それでは、此処からは、各自、受験する専攻の実技試験会場に移動してください!!」

試験官が答案用紙を纏め、実技試験の予定を受験者達に告げると教室を去って行く。筆記試験が終わると各受験生は、それぞれが専攻する科の実技試験会場に向かう。

明乃「航海科の試験会場に行かないと!」

ましろ「砲雷科の試験会場は、どっちだろう。」

明乃は、航海科の実技試験会場に向かい、ましろは、砲雷科の実技試験会場に向かう。

そして、例の4人組も

麗緒「ん・・・っ!何とか一つ終わった・・・っ」

空「移動するよ・・・機械科は機械実習室だっ!」

4人は、機関科の実技試験会場である機械実習室へと向かう。

その4人を後ろで見る2人がいた。

1人は、この前のブルーマーメイドフェスターでましろに憧れを抱いた黒木洋美、もう1人は、彼女の幼馴染の柳原麻命である。

麻命「お？あの五月蠅え四人組もあたし等と同じ機関科志望か？」

4人に感心する麻命。

洋美「流石のマロンも今日は静かね。」

いつもは騒がしい麻命も入学試験の今日はいつもより大人しく静かだ。

麻命は麻命なりに緊張しているのだろうと黒木はそう思っていたのだが

麻命「女つてなあ、3人集まりや姦しく2人だけなら女々しくなるもんなんでない！」

洋美「女々しくないと思うけど・・・」

やつぱり麻命は麻命で、一応受験会場だから周りに配慮している様だった。

ともあれ、2人は、4人が向かう機械実習室へと向かう。

各受験生が、それぞれの専攻する科の実技試験会場に移動する中、1人の受験生が通路で迷っていた。

主計科志望の等松美海である。

美海は辺りを見回し、今日自分と一緒に来た受験仲間を探すが、その姿は見当たらない。

美海「うーん・・・困ったなあ・・・試験の会場は何所かしら・・・」

美海は筆記試験の後、一人お手洗いに行つた後戻つたら、受験仲間は誰もいなかった。

これは、別に美海がはじめを受けて居ると言う訳では無く、受験仲間はお手洗いに行つた美海が先に会場へへ行つたのだと思ひ、それぞれの専攻する科の実技試験会場へと向かつたのだ。

美海「慣れない学校は、迷路みたいで意味分かんないわね。」

自分が通う学校とは違ひ、案内図を見ていない為、受験する学校の中に詳しくなかつた。

美海「あ……どうしよ……このままじゃ試験に間に合わない……」

美海の脳裏に試験放棄により不合格と言う思ひが強くなり、思わず泣きたくなる。涙は見せられないと通路で蹲る美海。

その時、

マチコ「如何かした？」

一人の受験生が美海に声をかけて来た。

美海が顔を上げると其処には背の高い眼鏡を掛けた受験生がいた。

それは、航海科志望の野間マチコであつた。

マチコ「きみ受験生？」

美海（イケメン・・・!?）

声を掛けて来たマチコに美海は思わず赤面してしまう。

マチコ「私も受験生なんだ航海科：筆記試験の教室に忘れ物をして戻ってたんだ：君は？」

美海「あ・・・あの・・・主計科・・・です。」

マチコ「主計科ね、確か・・・」

マチコは、美海を主計科の試験会場へと案内する。

案内する中、美海は、マチコと居る時間が、雅に至福の時間になっていた。

マチコ「あつた、主計科の実技試験は此処だよ！」

教室の扉には『主計科 実技試験会場』と書かれた張り紙が張られていた。

マチコ「じゃ、頑張つてね！」

美海を案内したマチコは、自分の受験する航海科の実技試験会場へと去って行った。

美海（カツコイイ・・・!!）

美海はマチコの後姿に見とれていた。

そんな美海に主計科担当の試験官が見つけた、

試験官「貴方受験生？試験始まるよ。」

と、試験が始まる事を告げるが

美海「お構いなく……」

と、返答する。

試験官「いや、いや」

試験官は美海の手を引いて、彼女を会場へと入れた。

航海科の実技試験では、海図の上に船の駒を乗せて、想定された様々な天候や海上におけるケースの中、船の駒を動かし、運用方法を試験官に説明する。

試験前は緊張していた明乃であつたが、いざ試験が始まると、先程までの緊張は一体何だつたのかと言うぐらい、まるで人が変わった様に試験官に説明しながら駒を動かす。

砲雷科の実技試験では、砲弾や魚雷の種類、それに乗じた戦術を試験官に説明する。ましろも自分の持っている知識をフル稼働して実技試験に望んだ。

主計科の実技試験では、会計能力や用意された材料で調理する。

美海は、会計能力を生かす。

美海の他に伊良子美甘や杵崎姉妹が用意された材料で調理を披露する。

横須賀女子海洋学校、機械実習室

一方、機関科の実技試験は

試験管「機関科の実技試験は……目の前にある分解された機関を時間内に正常に機

能させること、不具合を見つけた場合は、それらを修理し、できる限り理想の状態まで組み立ててください!!」

機関科の実技試験は、分解された小型の機関を時間内に正常に機能させる事、不具合を見つけた場合は、修理し、できる限り理想の状態まで組み立てる内容だった。

麻侖「思ったより簡単そうだなあ。」

洋美「そう?」

実技試験の内容を聞いた麻侖は問題ないと自信がある様子。

そんな中

試験管「コラ其処!・・・筆記試験の答え合わせは家に帰ってからやれ!!」

実技試験の最中にも関わらず、筆記試験の自己採点をしている者達がいた。

それは、例の4人組みだった。

『すみませ・・・ん!』

『気になって他の事が手につかなくて・・・』

試験官に注意を受けて、筆記試験のテスト用紙を仕舞う。

試験管「既に決まっていると思いますが、試験はいくつかのグループに分かれて行っ

てもらいます・・・それでは始め!!」

試験官が試験の始まりを告げる言葉を言うと、教卓の上のタイマーがカウントを始め

る。

機関科の受験生達は一齐に工具と部品を手に機関を組み立て始めた。

そんな中、4人組は同じグループで

桜良「そう言えば、この学校、試験の成績で所属するクラスが決まるんだってね……」
桜良が横須賀女子海洋学校の合格後のクラス分けについて話しながら機関を組み立てていた。

麗緒「あ……らしいね……」

麗緒もそのシステムについては知っていた様子。

麗緒「此処で良い点取れば、特待クラスも夢じゃないかも？」

麗緒のその発言に空は

空「へたに夢見ても足元をすくわれるから！」

と警告し

空「大企業のヒラ社員より小企業の社長、特待クラスのビリより一般クラスの首位。」
微妙な選択肢を突きつける。

留奈「ソラちゃん頭いい……！」

留奈はそんな空を褒めるが

麗緒「いや頭よかったら、普通に特待行くべきでしょ！」

特待に行くのは、当たり前だと言う麗緒。

一方、洋美と麻侖のグループは

洋美「マロン、こっちはできたよ！」

麻侖「おうよ……！あとはコイツをこうして、チョチョイのチョイ……つとくらあ。」

麻侖が最後の仕上げをし、機関の始動ボタンを押すと

ドドドルルルルルル……

洋美と麻侖が組み立てた機関は音を上げて動き出した。

麻侖「ほおら動いた！」

洋美「流石だねマロン！」

感心しているとある事に気づく。

洋美「あれ？まだ部品余ってるけど……」

台の上に置かれたままとなっている機関の部品を見つめる。

麻侖「部品は少ない構造の方が優秀なんでい！」

洋美「いやいや、試験だから、どうか何で動いてるの!？」

本来部品が足りない筈の機関が問題なく動いている事にツツコム洋美。

留奈「すごーい、あの班もう動いているよ……」

麗緒「マジ!?まだほとんど時間経ってたくない!？」

留奈と麗緒は麻侖達のグループが既に機関を組み立て動かしている事に驚く。

空「ほんとだ！」

留奈「凄い子がいるね・・・」

桜良「特待クラスになるとああいうのがゴロゴロいるのかなあ？」

3人は、麻侖達のグループを見ながら呟く。

空「あんな小さいのに凄いわね・・・」

留奈「ほんとだ！すごい小さい。」

そんな中、空と留奈は麻侖の身長につっこむ。

空「人は見かけによらないねえ。」

留奈「ちつちや・・・い。」

桜良「可愛い・・・」

空は麻侖の外見と中身の違いを指摘し、留奈と桜良は麻侖の外見の感想を言う。

麻侖「うるせ・・・やい!!何でアイツら!？」

彼女らの会話は麻侖に聞こえており、麻侖は失礼な4人に抗議する。

試験管「私語は慎んでください・・・い！」

しかし、麻侖の声もデカかったので、試験官に注意された。

やがて、全ての実技試験は終わり、受験生達はそれぞれ帰路に着く。

横須賀女子海洋学校、門前

試験が終わるのを知り、薫は、門前でましろが出てくるのを待っていた。

薫「もう試験は、終わっているから、そろそろ……あっ!!」

薫は、会場から出てきた明乃を見つける。

薫「岬ちゃん!!」

明乃「あっ?!薫お姉ちゃん!!」

薫「試験お疲れ様!……如何だった?」

薫は、試験のごたいは、如何だったか聞く。

明乃「思ったより、大丈夫でした!!」

日ごろの勉強やもえかの試験対策が役に立ち、明乃は、何なりと解けた。

薫「それは、良かったわ……じゃ、後は、数日後の合格発表で合格しているか確

かめるだけね!!」

明乃「はい!」

薫「じゃ、帰りは、気をつけてね!」

薫は、手を振り、明乃を見送る。

明乃が帰った後から、ましろが会場から出てきた。

薫「ましろちゃん!!」

ましろ「あっ!? 薫さん!!」

薫「如何だった試験?」

ましろ「いや・・・何とか・・・解けました。」

ましろは、不機嫌そうな顔で答える。

薫「そう・・・それは良かったね!」

薫は、ましろの不機嫌な顔を見て、もしかして落第しているのかも知れないと思い、これ以上詮索しなかった。

薫達が帰って、数分後

例の4人組が会場から出てきた。

留奈「終わった!!」

留奈は両手を高く上げて背伸びをする。

空「いや・・・疲れた疲れた・・・やるだけやったね・・・」

麗緒「まあまあやったよね・・・」

桜良「ぼちぼちでん・・・」

留奈「自信まんま・・・ん!」

空、麗緒、桜良はまあやるだけの事はやったという感じだったが、留奈だけは自信満々の様子。

空「駄目な子ほど、自信はあるのよね……」

留奈「ひど……い！」

空のジnkクスに留奈はツツコんだ。

桜良「4人で受かるといいね……」

桜良はそんな留奈をフォローする。

留奈「一人だけ落ちたらど……しよ……」

空のジnkクスを聞き、不安になる留奈。

そんな四人の横を主計科の試験を受けた美海が通り過ぎる。

美海「あの人と……また会えるかしら……そう言えばお礼も言いそびれちゃった

し……受かっていると良いな……あの人も私も……それで同じクラスにな……り……

た……い……!!」

思わず叫ぶ美海に周囲の受験生達は驚く。

美海「そう言えば、あの人に名前すら聞いてないし、自己紹介もしていないし……あ……

も……私のバカ!バカッ!」

美海はそんな周囲の受験生達が引いているのも知らず、頭を抱えていた。

しかし、彼女は後に再会する事になる。

自身が運命の人だと思っていた野間マチコと。

画して、難門と言われた横須賀海洋学校の入学試験は終了し、後は、数日後の合格発表を待つのみ。

果たして、合格するや否か

第35章 合格発表!!

2月2日

横須賀女子海洋学校入学試験から2週間後。

薫「ほら、ましろちゃん、早く!!早く!!」

ましろ「待ってください、薫さん!」

薫は、ましろを連れて、横須賀女子海洋学校に向かっていった。

この日、横須賀女子海洋学校の合格発表が行われた。

横須賀女子海洋学校、門前

合格者の受験番号が掲示されている掲示板の前には、多くの受験生達が集まっていた。

掲示板の前では、喜んでいる者、涙を流している者、緊張した面持ちで掲示板を見ている者、様々なリアクションをとる受験生達の姿があった。

そんな受験生達の中に明乃の姿があった。

明乃は、受験票(番号100313)をギュツと手で握りしめながら緊張した面持ちで掲示板を見る。

そして、明乃の受験番号（番号100313）は掲示板に表示されていた。

明乃は、自分の受験番号（番号100313）が表記されていた事にほほ笑んだ。

明乃が自分の合否を見ている頃

薫もましろを連れて、合否結果を見に来ていた。

薫「ましろちゃん・・・番号は？」

ましろ「えっと、100426です。」

ましろから番号を聞いて、掲示板に表示されている番号を見る。

薫「100426・・・100426・・・あっ!？」

100426の番号が掲示板にあった事を薫は、探し当てる。

薫「あつた!?!・・・有ったよましろちゃん!!・・・ほっら見て!」

ましろは、掲示板を見る。

ましろ「あっ!？」

掲示板に自分の番号が表示されているのを見て

ましろ「!!!」

ましろは、目から涙が出てきた。

薫「ましろちゃん・・・如何したの？」

ましろ「・・・何でもありません・・・何でも・・・」

如何やら、合格した事にましろは、言葉に出なく、涙が止まらないほど嬉しかった。薫（おめでどう！・・・これで、ましろちゃんも晴れて、横女ね！）

ちようどその頃、麻侖と洋美は、横須賀女子海洋学校の合格発表を見に向かっていった。
屋台船

この時、彼女らは屋台船にて、千葉の実家から横須賀へと向かっていった。

屋台船の持ち主は、麻侖の実家の近所で和菓子屋を営んでいる杵崎家の移動販売船で、杵崎家の双子の姉妹、杵崎ほまれ、あかねの2人も横須賀女子海洋学校を受験しており、今日の合格発表を見に行くので、麻侖と洋美、そしてほまれ、あかねの友人である伊良子美甘は、便乗させてもらったのだ。

5人は、顔馴染みの仲であったが、船の中の緊張の為か空気は重かった。

洋美は平然としているのだが、麻侖は少し落ちつきがないし、美甘はじつと黙って顔を俯かせている。

ほまれ（空気が重い。）

便乗した4人の様子を見て、少し引くほまれ。

洋美「杵崎さん、ありがとね・・・私達まで船に乗せてもらって・・・」

洋美はほまれに礼を言う。

ほまれ「気にしないで・・・同じ目的地だし！」

あかね「緊張するなっつて方が無理だよね……」

ほまれ「今日で進路……もとい、未来が決まるかもなんだし。」

何だか人事の様に言うほまれとあかね。

ほまれ「そうだ、新作スイーツがあるんだけど食べてみない？……甘いモノを食べれば落ち着くかも……」

ほまれが麻侖に新作スイーツを薦める。

麻侖「おつ、そんならお言葉に甘えるとすつか。」

麻侖はほまれに薦められるまま、その新作スイーツを注文する。

あかね「はーいつ、新作スイーツはいりま……す。」

あかねは、オーダーの確認を取ると厨房へと向かう。

ほまれ「あ、因みにサービスタイヤないからね？」

ほまれが注文した後でちやんとお金は取ると言う。

麻侖「しつかりしていやがんなあ？」

洋美「商魂たくましい……」

ほまれとあかねの商人としてのたくましさがちよつと引きつつも、麻侖は、杵屋の新作メニューを食べ、少しは、気分を落ち着ける事が出来た。

横須賀女子海洋学校、門前

杵崎家の移動販売船が横須賀を目指している頃

麻侖達と同じく機関科の試験を受験した麗緒、桜良、留奈、空の四人組も他の受験生同様、合格発表を見に来ていた。

結果は

『あつた!』

桜良「受かつてたあ……」

桜良は自分の受験番号が掲示板にあつた事に胸を撫で下ろす。

『イエーイ!!』

その後ろでは、麗緒と空が互いにハイタッチしており、この3人が合格したのは、3人のリアクションを見れば、一目瞭然だった。

留奈「皆、良かったね……」

そんな3人を留奈は祝福する。

空「ルナは、如何だった?」

留奈「今探しているところ……」

残っている留奈はまだ自分の結果を知らない。

其処で、皆で留奈の受験番号を探す事にした。

空「番号は?」

留奈「これ」

留奈は3人に自分の受験番号が書かれた受験票を見せる。

彼女の受験番号は、1000005で、1000000番代を探すと、掲示板に表記されていたのは1000000 1000001 1000003 1000008 だった。

留奈「!?!」

この結果を見た留奈は真っ白になった。

留奈が合否の結果を見て真っ白になっている時、麻侖達も横須賀女子海洋学校に着いて合否を確認した。

麻侖達の番号はあっさり見つかり、麻侖、洋美、美甘、ほまれ、あかねの5人は全員合格していた。

ほまれ「皆合格してて良かったね・・・」

ほまれがホツとした様子で言う。

麻侖「と・・・ぜんの結果でい!」

移動販売船であれ程動揺していた麻侖は完全にいつものモチベーションに戻っていた。

合否を確認し、実家にいい報告が出来る、皆は笑顔で家に帰ろうとしていると

留奈「うわ・・・ん!!」

留奈が麻侖達の列の横を走り抜けていく。

留奈「人間なんて辞めてやるう……!!!」

麗緒「待つて、ルナ……っ!!」

桜良「ルナ、人間辞めるつてよ。」

空「意味ワカラン？」

走り抜いていった留奈を追つて麗緒、桜良、空の三人が後を追いかけていく。

麻侖「なつ、なんだあ……？」

突然の出来事に麻侖は首を傾げる。

麻侖達が哑然としている間も留奈は栈橋の方へと走つていく。

留奈「私は、今日からお魚さんとして生きる。」

空「何言つてんの肺呼吸のくせに」

麗緒「お魚さん舐めんな……!」

後を追いかける3人も何かズレている事を言う。

留奈「母なる海よ……!!」

そう言つて留奈は栈橋から海へと飛び込んだ。

どぼ……ん!!

『ルナ……ッ!!』

留奈「あばばばばばつ冷たいし寒いよ……!!助けて……!!母まで私を拒絶するの……!!」

まだ、2月の冬で海も当然、冷たいのに何の躊躇も無く、海へと飛び込んだ留奈は、溺れ、助けを求める。

聡子「……何ぞ?」

ちようど帰りにその光景をスキップパーに乗って、見ていた勝田聡子がいた。自分から海へ飛び込んだのに、助けを求める留奈に若干引いた。

すると、栈橋の方から桜良が

桜良「あ、すみませ……ん!!それちよつと助けてもらえます……?」

と、聡子に救助を頼んできた。

留奈は、辛うじて、聡子に救助された。

『ど……も、お騒がせしました』

麗緒と空は海に飛び込んだ友人の留奈を助けた勝子に頭を下げて礼を言う。救助を終えた聡子は、そのまま帰路に着く。

留奈「寒い……」

冷たい海に飛び込んだ為、留奈は寒さで身体をガタガタと震わせる。

桜良「も……ずぶ濡れじゃない。」

桜良がハンカチで留奈の身体を拭くが焼け石に水である。

空「何所かで乾かさないと……」

空が心配そうに言う。

其処へ

麻命「何でえ、誰かと思えば実技試験で隣にいた四人組じゃねえか？」

麻命達、5人が現れた。

麗緒「あつ、小つちやい凄い人！」

麻命の声に気づいた四人が振り返る。

麻命「小つちやいは余計でい！」

小つちやいと言われ麻命は、切れる。

ほまれ「あの……良かったら、うちの船で休んでいきますか？……そのままだと

風邪をひいちゃうし……」

ほまれが自分の家の船に留奈達を誘う。

屋台船

そして、案内された杵家ツチノの船にて

麻命「取り合えず、着てるもん脱げ、全部な！」

麻命は留奈に來ている服を全部脱げと言う。

すると

『変態だ……!!』

4人は、声を揃えて麻侖に変態だと叫ぶ。

麻侖「バツキヤロー!!……濡れた服なんか脱いだ方がマシだってんでい!!」

麻侖は、自分に変態では無いと言う事を含めて服を脱げと言った訳を話す。

杵家の船の中に有るストープの上には濡れた留奈の服が干され、留奈は桜良から借りたコートを羽織る。

ほまれ「は……い、和菓子屋杵特製蜂蜜生姜ゆず湯……」

あかね「取り合えず温めないかね。」

留奈「ありがと……」

ほまれは留奈に体の温まる飲み物を出す。

麻侖「すっかり、1人試験に落ちて、そのショックで魚になろうと海にまで落ちるたあ……すつとこどつこいかお前エは？」

麻侖は留奈が海に飛び込んだ理由を聞き呆れる。

しかし、そんな麻侖に洋美は

洋美「マロンも、もし駄目だったら似た様な事をしそうね。」

流石に麻侖と付き合いの長い洋美も、もし、麻侖が試験に落ちていたら留奈と同じ事

をしたと言う。

洋美の発言を聞き

『何となくそんな気がするわ。』

麗緒と空も洋美の意見に同調した。

麻侖「するか！」

麻侖は必死に否定する。

麗緒「まあでも正直意外だったよね……」

空「まさか3人も受かるとは……」

麗緒と空は自分達が合格出来た事を奇跡の様と言う。

ほまれ「えっ、そっち!？」

ほまれは留奈が落ちた事に驚いたと思っていたのに、その逆でまさか、受かる事に意

外性を感じていた2人に思わずツツコム。

麗緒「私たちって大体同じ学力なのよね……」

空「受かるなら皆受かるし、落ちるなら皆落ちると思ってたからね……もちろん

全員受かる気で勉強はしていたけど……」

麗緒と空は自分達の学力について語る。

桜良「多分私たちもギリギリ通過だったんだと思うよ。」

桜良が自分達だけが受かった事についての予見を言う。

麻侖「紙一重だったってえことか・・・残念だったなあ、約一名は」

麻侖はチラツと落ちてしまった留奈を見る。

留奈「いくら積めば裏口入学できるかな？」

留奈は重いため息と共にとんでもない事を口走る。

『人生詰む気か?』

麻侖「金を積むより徳を詰め徳を」

大体、横須賀女子海洋学校の裏口入学など、あの真雪が許す筈が無い、だとすると、裏口入学など到底無理である。

もう打つ手はないのかと思っていると

美甘「あの・・・」

其処へ美甘が声を掛ける。

美甘「さつき言ってた学力が大体同じって話が本当なら、ルナちゃんも補欠合格枠くらいには入ってるんじゃないかな？」

空「補欠・・・」

麗緒「合格・・・?」

4人は、美甘の言う補欠合格にポカンとする。

洋美「見てないの？」

洋美がてつきり補欠合格枠を見ても番号が無かったから、此処まで落ち込んでいたのだと思っていたのだが、如何やら、4人は補欠合格枠を見ていなかった様だ。

ほまれ「補欠合格者は通常の合格者とは別に貼り出してあると思うけど・・・」
ほまれが補欠合格者の掲示板の位置を伝える。

留奈「うっそ、見てない!!」

やはり、4人は補欠合格枠を見ていなかった。

麻侖「なにい!!全員立てえ!!今すぐ見に行くぞオ！」

それを聞いて麻侖は4人に補欠合格枠を見に行くぞと奮い立たせる。

『イエッサー!!!』

ほまれ「随分息が合ってきたわね・・・」

麻侖と4人の様子を見て、ほまれはポツリと呟いた。

9人は、補欠合格者の掲示板を見に行った。

留奈「あつた！」

そして、補欠合格枠には留奈の受験番号100005が表示されていた。

留奈「ほんとうにあつた・・・！」

桜良「良かったね・・・！」

補欠とは言え、合格して居た事に留奈は、桜良に抱き付いて喜んだ。

麗緒「てか補欠合格って何？」

麗緒が補欠合格の意味を尋ねる。

洋美「簡単に言えば、現合格者から辞退する人が出た時の穴埋めね！」

美甘「練り上がりで合格になれば改めて連絡が行くと思うよ。」

洋美と美甘が補欠合格の意味を教える。

留奈「私にもまだ希望が……！」

まだ、自分にも横須賀女子海洋学校の合格枠に入れるチャンスがあると言う事で先程までの重い空気から一転した。

洋美「まあそうそう辞退者なんて出ないと思うけど……」

洋美は折角受かった横須賀女子海洋学校の合格枠を捨てる者がいるとは思えないと言うが

麻侖「まあまあクロちゃん、無粋な事は、言いつこなしなしでい！」

麻侖が洋美に折角喜んでいるのだから水を差すなど言う。

洋美が4人の様子をチラツと見ると、互いに抱き合っている4人を見て

洋美「……そうね。」

と、ポツリとそう呟いた。

それから数日後

麻侖「クロちゃん!! あいつらからメールだ!!」

麻侖が洋美に自分の携帯を見せながら走り寄って来た。

洋美「あいつら・・・?」

洋美は麻侖の言う『あいつら?』の言葉に首を傾げる。

洋美「・・・ああ。」

そして、麻侖が携帯の画面を見せると、彼女の言う『あいつら』の意味が分かった。

麻侖の携帯の画面には『無事合格』と言うメッセージと嬉し涙を流している例の4人の画像が添付されていた。

如何やら、留奈は補欠合格枠で合格できた様だ。

携帯の写真からはその嬉しさが伝わってくる。

洋美「・・・同じクラスになれたら良いわね。」

洋美は、合格したなら、自分と同じクラスになれる様願うが

麻侖「それとこれとは、話が別でい!」

それとこれとは、話が別だと言う麻侖。

画して、晴風乗員は、横須賀女子海洋学校に晴れて全員が合格した。

明乃、そして、ましろも合格し、薫は、大いに喜んだが、ましろの合格に関しては、実

は、有る裏があつた事に薫は、知らなかつた。

国会議事堂

その頃、国会のある一室では、内閣の会議が行われていた。

田沼総理をはじめ、官房長官や産業大臣、外務大臣、そして、国土交通大臣の深町などの議員が集まり、今年の課題や野党の対策が協議された。

議論は、難航したが、殆んどの協議が終了した時

外務大臣「総理！・・・ヨーロッパ方面から我が国に派遣要請が出ています。」

田沼「外務大臣説明を・・・」

外務大臣は、説明をする。

外務大臣が言うには、地中海で海賊による被害が多発していて、ヨーロッパ方面のブルーマーメイドが手を焼いている。

このままでは、地中海航路が安全に航行できない。

そればかりか輸出も制限されてしまう。

その為、日本から支援として、派遣部隊を送るよう要請があつた。

最初は、防衛省で協議される様だったが、治安目的の為に軍を派遣すると忽ち問題が起きる。

其処で極東方面のブルーマーメイドかホワイトドルフィンの増援を送る事になり、国

土保全委員会で協議される事になった。

国土交通省、国土保全委員会

協議中、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンの強制執行課、保安即応艦隊を派遣すればと言う意見があつたが

委員会幹部B「此処は、Gフォースの連中にやらせたら如何でしょう？」

一部の委員会の幹部から、龍之介達Gフォースにやらせれば良いと言う意見が出てきた。

委員会幹部A「良い考えだ！・・・この前の搜索で要らん金を出させた彼らにやらせるべきだ!!」

他の委員会の幹部からも同じ意見が出てきた。

深町「待ちたまえ!!・・・そんな理由で、彼らに、この任務を押し付けるのは如何かと思う・・・此処は、ブルーマーメイドかホワイトドルフィンの保安即応艦隊を派遣すべきじゃないのか!」

それに対して、深町は、反対し、あくまでブルーマーメイドかホワイトドルフィンの保安即応艦隊を派遣すべきだと主張する。

しかし

委員会幹部B「甘いですよ深町国交相！・・・それでは、彼らは、また勝手な行動を

許す結果となつてしまいます!!・・・此処は、彼らに懲罰を与えるべきです!!」

委員会幹部A「その通りだ!!」

委員会幹部C「そうだ!!そうだ!!」

この前のゴジラ搜索以来、龍之介達Gフォースは、国土保全委員会の幹部達から完全に嫌われ者になっていた。

画して、龍之介達Gフォースに地中海への派遣要請が決定され、真霜に通達される。

第36章 しばしの別れ

2月12日

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

龍之介「派遣要請!？」

美由紀「何ですか、その命令は？」

真霜から派遣要請の任務を聞き、龍之介達は驚愕する。

真霜「聞いている通りよ!・・・最近、地中海で海賊の被害が多発しているの・・・ヨーロッパ方面のブルーマーメイドが出勤しているけど、手に負えない状態になっているの・・・それで、政府が私達に依頼して・・・協議した結果・・・貴方達に白羽の矢が立ったと言う訳なの!」

真霜は、今回の経緯を説明する。

功「地中海で海賊退治とは、何とも可笑しな任務ですな!・・・まるで、嫌な任務を押し付けられた様な・・・」

真霜「徳吉監督官の察しの通りよ!」

龍之介「如何いう事だ?」

真霜「実は、この前の任務で貴方達は、国土保全委員会の幹部達から完全に嫌われたわ！・・・言うなれば、これは貴方達への腹いせよ！」

真霜は、国土保全委員会の幹部達が腹いせの為に今回の任務を龍之介達Gフオーースに突き付けたと言う。

美由紀「やはり、来ると思っていたけど、雅か、こんな形で来るとは・・・」

国土保全委員会の幹部達の腹いせが来るのは、美由紀は予測していた。

真霜「御免なさい！・・・私の不甲斐無さで貴方達に迷惑を掛けてしまつて・・・」

真霜は、龍之介に謝罪する。

しかし、それに対して、龍之介は真霜の前に行き

龍之介「頭を上げろよ！・・・誰もお前の事を責めたりしてない！・・・お前は、よくやつてる!!」

と言つて、真霜を慰める。

美由紀「何で貴方が謝るの？・・・貴方は何もしていない・・・私達は、貴方を責める権利はないわ!!」

功「まあ、これは元々我々の責任ですから・・・」

龍之介の言う通り、美由紀や功は、真霜を責めなかった。

むしろ、責める権利が無いのだから

とは言うものの、今、派遣要請など受けられない。

何故なら、旗艦である空母大鳳は、横須賀造船所の6号ドックでオーバーホール中、艦載機も降ろされ、横須賀基地の敷地に置かれている。

とても動かせない状態。

白鳳もとても出せない。

後残っている艦艇は

高速戦艦高千穂

巡洋艦すくね、さつま

護衛艦いばらき、せんだい、ながおか、きしゅう

補給艦せた、とよだ

計9隻

戦力としては問題が無いが、空母が無い以上、航空支援を受ける事が出来ない。

航空支援が受けられない以上、何の危険があるか分からない。

果たして

美由紀「此処は・・・私が行きます。」

突然、美由紀が自らこの任務に志願した。

龍之介「いや、俺が・・・」

美由紀「何を言っているのですか!!・・・准将は、大事な指揮官!・・・指揮官は此処に残って下さい!!」

龍之介「しかし、これは元々、俺が言い出した事から始まったんだ!!・・・だから、此処は俺が行くべきだ!!」

美由紀「何度も言いますが・・・派遣任務は私が行きます!!・・・それに貴方には、他にやるべき事が有るのではないのですか?」

龍之介「えっ?」

美由紀に言われ、龍之介は真霜を見る。

真霜「あっ!?!」

龍之介「・・・はあ・・・分かったよ!」

美由紀の言葉に龍之介は理解し、承諾する。

派遣する艦艇も

高速戦艦高千穂

巡洋艦さつま

護衛艦いばらき、ながおか、きしゆう

補給艦とよだ

計6隻

龍之介「あと白鳳も派遣した方が良いな！」

美由紀「でも、白鳳は、派遣するのは、あまりに危険すぎるのでは？」

龍之介「いや、大鳳が使えない以上、航空戦力は必要不可欠・・・なら、水中を航行でき、空を飛べる白鳳は、是非とも派遣すべきだ!!」

白鳳の派遣に美由紀は反対するが、空母大鳳が今使えない以上、権藤艦隊には如何しても航空戦力が必要になる。

ならば、特殊戦闘艦である白鳳も派遣するのが同意であろう。

白鳳なら、空も飛べるし、水中も自由に航行できる。

何よりの支援艦ではないか

横須賀基地

そして、薫や次郎以下のGF隊員に、この事が伝えられた。

薫「派遣任務か？」

次郎「仕方ねえよ・・・この前の任務でしくじったツケあるからな・・・」

薫「そんな事言つて、次郎君、本当は嬉しいんでしょ！」

次郎「何が嬉しいんだよ？」

薫「派遣先が地中海で・・・地中海と言えば、マルタや南フランスの観光地があるで

しょ・・・」

次郎「有るけど、それが如何した？」

薫「鈍いな・・・そう言う場所があるなら、次郎君の狙いは、当然ギャル狙いでしょ？」

薫は、次郎が任務と偽って、外人のギャル美人に興味を抱いているのだと言う。

次郎「ああ、それもあるな・・・」

それに対して、次郎は、つい馬鹿な事を考えてしまい。

薫「け!？」

そんな次郎に薫が蹴りが炸裂する。

次郎「イテ!？」

薫の蹴りが次郎の急所に命中する。

薫「次郎君のスケベ、変態!!」

薫は怒って、その場を去る。

次郎「あちや・・・怒らせちまたよ・・・」

薫を怒らせた事に次郎は反省する。

海外に派遣する人員や艦艇の編成表は、真霜から海上安全整備局に提出され、国土保全委員会に達した。

編成表を見た国土保全委員会の幹部達は、白鳳を派遣するな、と言う反対の意見が来

だが、深町は、人員や艦艇の編成は、龍之介に一任されていると言つて、結局、却下された。

如何やら、国土保全委員会の幹部達は、白鳳が海外に派遣されるのが不味いらしい。

深町や真霜の知らない所で何かの思惑が進んでいる様だ。

2月15日

横須賀基地

派遣される艦艇は、それぞれ出撃準備を終え、明日の出撃に備え、殆どどのGF隊員が最後の束の間の安らぎを過ごしていた。

次郎「明日は、出撃か・・・はあ・・・」

いよいよ出撃が明日だと言うのに次郎は浮かない顔をしていた。

それは薫と喧嘩して以来、今日まで会っていない。

しばらく会えなくなるのに、このまま喧嘩したままで良いのか、しかし、薫に会つて、何て言えば良いか分からなかった。

そんな次郎は、寮へと帰える。

ブルーマーメイドの寮、次郎の部屋

寮に帰つた次郎は、自分の部屋に入ろうとした時

次郎「あれ!・・・カギが開いている?」

部屋に入ろうとした時、カギを掛けた筈のドアにカギが掛かっていなかった。何故だと思い、恐る恐る中に入る。

女性の声「お帰り!!」

中に入ろうとしたら、部屋の奥から女性の声が聞こえてきた。

次郎「だ、誰だ!?!」

次郎は、誰だと思つたが

しばらくして、その女性が両手で鍋を持って、次郎の元に来た。

次郎「か、薫!?!」

何と、両手で鍋を持っていた女性は薫だった。

次郎「な、何で俺の部屋に居るんだ?」

自分の部屋に薫が居る事に驚愕する。

薫「ああ、それね……寮母さんにカギ開けて貰つたの!」

次郎「そ、そうか……」

次郎は驚愕していた。

薫「何を驚いているの?……自分の部屋だから、早く上がったら?」

次郎「え……ああ、そうだな……」

次郎は、気を取り直して、部屋に上がる。

そして、薫の夕飯を御馳走になる。

次郎は、上手そうに食べる。

次郎「そう言えば、薫、如何して？」

食べながら、次郎は理由を聞く。

薫「実は・・・この前の事、私も少し言い過ぎたから仲直りしようとして・・・」

薫は、この前喧嘩した事に少し反省していた。

それで、仲直りしようと、態々、部屋で夕食を作りに来たのだ。

次郎「なら、そう言えば良かったじゃないか？・・・言える時は十分にあつたのに・・・」
確かに態々、部屋に来なくても任務以外、ちよくちよく顔を合わせる事があつたのに、

何故だろう。

薫「だって、恥ずかしくて言えなかつたんだもん・・・だから、私なりに仲直りしようとして、態々こうやって、泊まりがけで夕食を作り来たの！」

如何やら、恥ずかしくて、人前では言えなかつた様だ。

次郎「そうか、泊まりがけで夕食を作り・・・っっておい!?!・・・お前此処に泊まるのか？」

泊まると言う言葉に次郎は驚愕する。

薫「そうだよ！」

次郎「待てよ!・・・勝手に此処に泊まったたら不味いんじゃないのか?・・・第一、
将には・・・」

確かに勝手に男の部屋に泊まったら、龍之介に怒られるだろうと思つたが

薫「ああ、それなら大丈夫!・・・兄さんがしばらく会えなくなるから、今日は、次郎君のところに泊れつて・・・」

次郎（兄きの癖に良いのかよ?）

如何やら、龍之介も承諾して要る様だ。

それもその筈、薫の事に関しては、次郎に一任してあるのだから

宗谷家、リビング

一方、その龍之介は

ましろ「薫さんは、今日は帰らないんですか?」

龍之介「今日は、知り合いの所に泊まるだそうだ。」

ましろ「そうですか・・・」

薫が居ない事にましろは、何だか寂しそうな顔をする。

龍之介「何だ寂しのか、ましろ?」

ましろ「い、いえ、別にそ言うのじゃないんです。」

龍之介「お前、もう直ぐ高校生なのに、薫が居ないと何もできないのか?」

そんなましろを龍之介は、馬鹿にする。

ましろ「出来ませぬ!!馬鹿にしないで下さい!!」

龍之介に馬鹿にされて、顔を丸くするましろ

真霜「駄目よ、ましろをからかつちゃ!」

龍之介「別にかからかっていないよ・・・俺は、唯事実を言ったまでだ。」

真霜「それでも、ほら!ましろは、困ってるじゃないの?」

真霜に言われ、龍之介は、ましろを見る。

そんなましろを真霜は庇う。

だが、龍之介は、そんな真霜に

龍之介「何だ、やきもち焼いているのか?」

今度は、真霜を馬鹿にする。

真霜「べ、別にやきもちなんて・・・」

龍之介「嘘付け、顔に出てるぞ!」

真霜「もう意地悪!」

龍之介に馬鹿にされて、真霜も顔を丸くする。

真雪「龍之介さん、あまりうちの子で遊ばないで・・・」

龍之介「いや、別に遊んでるんじゃない・・・唯、薫が居なくて、しけてるから、少

しからかつて場を明るくしようと思っただけです……だが、少しやり過ぎたな、すまん。」

龍之介は、唯遊んでいた訳じゃない、余りにもましろがしいから、少しからかつて、場を盛り上げようとしただけだった。

しかし、少しやり過ぎた事に龍之介は反省する。

反省する龍之介を見て、真霜やましろは許す。

真冬「良いな、龍之介は……真霜姉とあんな事をしたり……」

龍之介と真霜があんな事をしているのを見て、真冬は羨ましくなる。

龍之介「そう言うなら真冬……お前も早く、好きな男見付けろ!!……このま

まじゃ、真霜や薫に先を抜かれるぞ!!」

龍之介の言う通り、真霜は、龍之介を薫は、次郎を取った。

宗谷家で男が居ないのは、高校生のましろ以外で次女の真冬だけである。

真冬「お前に言われなくても分かってるよ!!……唯、あたしを見ると何故か逃げる

んだよな……」

真冬も分かかっていて、何とか好きな男を探しているが、何故か断られる。

その理由は、極めて単純である。

龍之介「そりゃ、お前がいつも人の尻ばかり揉むからだろ!!」

そう、理由は、人のお尻を揉む癖である。

だから、真冬と関係を持つとうとする男性は尽く逃げるのだ。

『うん、うん』

龍之介が言う理由に3人も認める。

ブルーマーメイドの寮、次郎の部屋

その頃、次郎と薫は

次郎「ああ、食った食った・・・相変わらず薫の飯は上手いな!!」

美味しい夕飯を御馳走に成り、満足する次郎。

薫「ありがとう。」

薫は、後片付けをする。

その間に次郎は風呂を沸かし、布団の準備をする。

次郎「そろそろ風呂が沸くから、薫先に入れよ!」

そろそろ風呂が沸くから、先に入るよう勧めた。

薫「うん、じゃお言葉に甘えて・・・」

後片付けを終えた薫は、お風呂に入ろうとするが

薫「な、何だよ」

突然、次郎の腕を掴む。

薫「何って、一緒に入るの！」

薫は、一緒に入ろうと言う

次郎「そうか、一緒に入るのか……って、何!？」

一緒に入る事に次郎は驚愕する。

次郎「じよ、冗談だろ!？」

流石に冗談だと思つたが

薫「いいえ、本気よ！」

如何やら、本気の様だ。

次郎「ちよつと待つてくれ!!……何も一緒に入らなくても……」

薫「ええい、口答え無用!……兎に角入る!……良いわね!!」

次郎「は、はい！」

薫の強引差に次郎は、空しく承諾する。

先に次郎が入り、薫が来るのを待つ。

次郎（何で、こんな事に……）

次郎が考えていると

次郎「!？」

突然、電気が消え、真つ暗になり、ドアが開き、裸姿の薫が入ってきた。

薫「む、向こう向いてよ！」

次郎「ご、御免！」

1度快樂をしているとはいえ、流石に恥ずかしくて向こうを向く。

そして、薫も反対側を向いて入る。

お互いに後ろ向きで風呂に入る。

薫「だ、黙ってないで、何か喋ったら？」

一緒に風呂に入っても黙っている為、何か話したらどうと薫は言うが

次郎「そ、そんな事言ってたて・・・何話せば良いんだ？」

次郎は、流石に恥ずかしくて、話せなかった。

しばらくして

薫「ご、この前は御免ね！」

次郎「え？」

薫「だから、この前の事だよ・・・私も少し言い過ぎた・・・本当御免！」

この前の事を謝罪する薫。

次郎「その事なら俺も悪い！・・・御免な薫！」

それに対して、次郎も謝罪する。

薫「ねえ、次郎君！」

次郎「何だ？」

薫「明日は、いよいよ出撃！．．．しばらく会えなくなるね？」

次郎「そうだな、薫ともしばしのお別れになるな！」

明日は、地中海に向けて出撃。

そうなれば、次郎ともしばし離れ離れになる。

それを聞いた薫は

次郎「か、薫!？」

突然、次郎に抱き付く。

薫「お願い．．．少しこのままでいさせて．．．」

次郎「薫．．．」

薫「しばらく会えなくなる．．．だから責めて、次郎君を感じていたい．．．」

次郎「薫！」

薫「お願い．．．して．．．」

次郎「ん．．．」

次郎は何も言わず、唯、薫の要求どおりに快楽をする。

風呂の中で薫の乳房を責め、薫は、感じていたが我慢し、その後、風呂から上がる。

今度は、壁に両手を付けて、薫を背後から責める。

背後から責められた薫は我慢するが、遂に絶頂してしまふ。

しばらくして、2人は、その場で荒い息を吐きながら腰を降ろしていた。

薫「流石にお風呂での快樂は、ちよつとキツイわね。」

次郎「そうだな。」

薫「でも、感じるわ!・・・次郎君の温もりが・・・」

薫は、責められた褻を愛優しく撫でる。

それを見た次郎は、よそ見をする。

そして、薫は、そんなよそ見する次郎の唇を奪う。

『んっ……ちゅっ……んむっ……ちゅっ……んんっ……』

『ちゅっ……んんっ……ちゅっ……んんっ……んむっ……』

風呂から上がったばかりか、お互いに濡れていたが、その光景は、天女が好きな男に口付けした光景だった。

深く熱い口付けをした後、2人は、風呂から上がり、タオルで体を拭いて、下着と服を着る。

それから、ベットで次郎は薫の乳房に顔を埋めて、薫は、そんな次郎を抱いて眠る。雅に次郎にとっては最高の安らぎであった。

2月16日

横須賀基地

美由紀「総員整列!!」

派遣される権藤艦隊の面々が出港前に整列をする。

反対側には、薫達居残り組の面々が整列していた。

龍之介と功が前に出て来て、

龍之介『お前達は、今から地中海に派遣される・・・厳しい任務だ!・・・辛い事もある・・・だが、俺が言いたい事は、一つだ!!・・・どんな事が有っても生きて帰って来い!!・・・以上だ!!』

と言つて、権藤艦隊のGF隊員達を激励する。

美由紀「総員解散!!直ちに帰港準備!!」

GF隊員達は解散し、各面々で別れの挨拶をする。

龍之介の方は

龍之介「地中海の海賊退治は、難易だ!!くれぐれも気を付けて・・・」

美由紀「准将も宗谷監督官をくれぐれも困らせない様に・・・」

龍之介「な、何を言ってるんだ!?!」

そして、次郎の方でも

はやて「次郎君、体に気い付けるんやで・・・」

次郎「分かつてるよ！」

なのは「本当に分かつてるのかな、次郎君って、大事な所がいつもねけているからね！」

フェイト「うん、そうだね！」

次郎「2人揃って何だよ……先が思いやられるよ。」

『フッフ』

3人は笑う。

次郎「薫！」

3人のお別れが終わり、後は、薫だけとなった。

薫「次郎君！」

薫は、次郎に抱き付く。

次郎「か、薫!？」

薫「続き……帰ってきたら、また続きしようね……」

次郎「ああ……帰ってきたら、絶対に！」

薫と次郎は約束をする。

GF隊員達の面々がお別れを済ますと

美由紀「出港用意!! 錨上げ!!」

号令の元、錨が上げられ、旗艦高千穂を先頭に次々と出港した。

そして、白鳳も

白鳳、艦橋

次郎「出港する!!微速前進!!」

林「了解、微速前進!!補助ロケット点火!!」

補助ロケットが点火し、出港していく

高千穂、艦橋

美由紀「目標は地中海!」

横須賀を出港した権藤艦隊は、地中海を目指し出撃していった。

横須賀基地

岸壁で薫は、最後まで見送った。

龍之介「如何した薫?」

薫「ん、何でもない!!」

画して、権藤美由紀率いる艦隊、計7隻は、海賊が出没する地中海へと出港していった。

そして、龍之介達居残り組は、今後如何なるか

まだ先は分からない。

第37章 臨時教員

2月18日

首相官邸

田沼総理は、ある男と電話会談をしていた。

田沼「申し訳ありません．．．私の努力が至らなかつた為に．．．」

キング『まあ、その気を落とさないでくれミスター田沼!!．．．海外に出たのは予想外だったが．．．』

電話先は、アメリカの首都、ワシントンのホワイトハウス。

と言う事は、電話の相手は、アメリカ大統領ジョージ・キング。

田沼は、今回の海外派遣で白鳳が地中海に派遣された事を報告する。

田沼「如何いたしましたしょう?．．．海外に出では、そう簡単に手は．．．」

日本国内に留めて置き、気が熟すのを待つて、彼らを外海に追い出して、アメリカ軍に強制拿捕させる筈だった。

だが、深町の妨害で実行できず、更には、予想外に白鳳が地中海に派遣されてしまつた。

地中海は、大西洋に向かう船舶が何隻も通り、ヨーロッパのブルーマーメイドが海賊退治や航路の安全の為、日夜警戒している海域でもあった。

いくらアメリカ軍でも迂闊に手は出せない。

しかし

キング『心配はいらない・・・海外に出たのは、むしろ好都合だ！・・・如何にでもなる・・・我々が大きい力を手に入れられるのも近い・・・』

流石は、世界の警察アメリカ、侮れない。

田沼「その時は、是非我が国にも・・・」

深町と龍之介の苦難は続く。

3月15日

美由紀達が地中海に派遣されて、1ヶ月。

横須賀造船所、6号ドック

空母大鳳は、横須賀造船所の6号ドックでオーバーホールが行われていた。

入渠して、2ヶ月半が過ぎ、機関員、艦載機整備員の協力で作業は順調に進んでいた。

錆びた艦体の改修と故障していた機関及び艦載機用エレベーターの修理は順調に進み、更にレーダーの改修や新システムへの移行が行われた。

その作業を監督するのは

夏雄「おらおら、手を緩めるな!!・・・どんくさい奴は、ケツにスパナーをぶち込むぞ!!」

機関長の夏雄だった。

その上で

はやて「作業は、予定の50%まで進んでいます。」

薫「予定は順調!・・・良い事ね!」

薫とはやてが見守っていた。

はやて「このまま行ったら6月中旬には、改修作業は予定通り完了します。」

空母大鳳の改修作業は、6月中旬には完了する予定。

次郎が海外に派遣されて1ヶ月、薫は、いつも通りに仕事に励んでいた。

はやて「薫先輩は、本当頑張りますね・・・次郎君が地中海に派遣されて、もう1ヶ

月経つのに寂しくないんですか?」

薫「何を言ってるの・・・居ない時だからこそ、私達居残り組がちゃんとしつかり留

守を守らないとイケないでしょ!」

はやて「そやね!」

薫は、順調に仕事を捗らせていた。

しかし、本当は

薫（次郎君・・・早く帰ってこないかな・・・寂しいよ!!）

口には言わないが、心の内では寂しがっていた。

ブルーマーメイド、設備研究課、兵器開発工場

その頃、龍之介は、ブルーマーメイドの設備研究課の兵器開発工場であつた。

龍之介「如何だ？」

慶介「順調ですよ！・・・どうぞ此方へ!!」

慶介は、龍之介を工場のある建物に案内する。

建物の中は、電気が付いて無く、真つ暗だった。

中に入ると慶介が電気を付け、部屋に明かりが付き。

明かりが付いた部屋には、一機の試作機が置かれていた。

龍之介「こ、これは!？」

その試作機を見た龍之介は、機体に手を当てる。

慶介「ハイブリッド戦闘攻撃機・・・烈風です!!」

ハイブリッド戦闘攻撃機烈風。

Gフォースで現在使用されている戦闘攻撃機春乱の技術と海上安全整備局の技術を組み合わせて、開発した戦闘機。

機体は、春乱をベースに作られているが、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンで使用されている飛行船母艦の短い飛行甲板で使用できる様に機体をVTOL機（垂直離着陸機）に改修した。

エンジンも垂直離着陸用に新しく開発した物を使用している。

その為、噴射ノズルが後方に2基と垂直離着陸用の噴射口が胴体側面に2基備えられている。

つまり離着時には、後方のノズルが下に90度回転し、更にエンジンから抽出した圧縮空気を胴体側面の噴射口から排出して、離着する。

武装は、春乱が搭載できる兵器と殆んど変わらない。

機体に手を当てた龍之介は、更に機体の操縦席へと行く。

操縦席の造りは、春乱の操縦席と何ら変わらないが、ある程度は、海上安全整備局の技術が使用されている。

操縦席に座り操縦桿などを見た後、機体から離れた。

龍之介「素晴らしい機体だ！」

烈風の出来前を褒める。

慶介「おほめの言葉、ありがとうございます。」

龍之介「ところでこの機体は、もう量産できるのか？」

慶介「いいえ……エンジンの燃焼試験は済んでいます、まだ最後の試験飛行をしていません……試験飛行をしない限り、まだ量産化には移せません。」

烈風のエンジンの燃焼試験は済んでいたが、最後の試験飛行は終えていなかった。

龍之介「いつぐらいに試験飛行できるんだ？」

慶介「それがまだ未定なんです。」

龍之介「何故だ？」

慶介「国土保全委員会から許可が下りないんです……一応深町国交相が幹部達を説得していますが……残念ながら、まだ、そう簡単には……」

最後の試験飛行を残すのみに、国土保全委員会の幹部達は、中々試験飛行の許可を出さなかった。

何故なら、幹部達は、航空機に全く興味を抱かず、白鳳の技術にしか興味が無い。

その為、航空機の開発には、全く協力せず、予算も譲らず、邪魔ばかりしている。

龍之介「何て事だ!!……これ程の機体があるのに奴らは、見向きもしないとは……情けない!!」

国土保全委員会の幹部達のやり方に龍之介は呆れてしまう。

龍之介「一体如何したら認めって貰えるんだ!!」

慶介「まあ、大規模な戦闘で航空機が活躍するのであれば、多分……」

慶介は、真珠湾攻撃や南太平洋海戦見たいな大規模な戦場で航空機が活躍すれば幹部達も認めざるおえないだろう。

しかし

龍之介「此処は、我々が居る世界とは、違い戦争が無い世界だ!!・・・そんな大規模な戦場ある訳が無い!!」

龍之介が居た世界と違い大きな大戦が無い為、大規模な戦場もない。

よつて、航空機がその強さを発揮できない。

龍之介「難問だな!」

果たして、烈風がその強さを発揮できるのは、いつか?

宗谷家

龍之介や薫、そして真霜達は何事も無く、宗谷家に帰宅した。

宗谷家、ましろの部屋

薫「ましろちゃん居る?」

薫は、ましろの部屋を訪ねる。

ましろ「か、薫さん!?!・・・い、今は・・・」

薫「入るよ!」

薫は、部屋に入る。

ましろ「!!」

薫「!?」

部屋に入ると、其処には、何と横須賀女子海洋学校の制服を着たましろの姿だった。

薫「ましろちゃん、それ!」

ましろ「見、見ないで下さい!!」

如何やら、注文していた制服が届いたから試着をしていた様だ。

これから着る制服に成れない為、恥ずかしくて、隠そうとするましろ。

薫「何隠してるのましろちゃん? ・ ・ ・ 恥ずかしくないよ! ・ ・ ・ むしろ可愛いわ!!」

ましろ「えっ!」

薫「ほら、もっと良く見せて ・ ・ ・」

薫は、ましろに近づき、ましろの制服姿を鏡に映し出す。

薫「よく似合うわ!! ・ ・ ・ 制服姿のましろちゃんも可愛い!!」

ましろ「あ、ありがとうございます。」

ましろは、顔を赤くする。

薫（良いな ・ ・ ・ 私もこんな制服着たかったな ・ ・ ・）

ましろのセーラー服姿について憧れてしまう。

薫が居た江田島海士学校の制服は、セーラー服ではなく、男女とも紺色でキチンとし

た背広の制服であつた。

だから、薫は、横須賀女子海洋学校の制服に憧れてしまったのだ。

ましろ「薫さん!!・・・薫さん!!」

薫「あつ?!」

我に戻る。

ましろ「如何したんですか?」

薫「御免、御免・・・ましろちゃんの制服姿に堆看取れてしまつて・・・」

ましろ「あんまり看取れないで下さい!!」

薫「・・・」

薫は、ニコリと微笑む。

すると其処へ

真冬「何だ!!何だ!!2人揃つて何楽しい事してんだ!」

真冬が入ってきた。

薫「あつ真冬!今ねえ、ましろちゃんの着せ替えをしていたの!」

真冬「面白そうだな、あたしも混ぜてくれ!!」

真冬も混ざり

ましろ「止めて、姉さん!!」

真冬「ついでに根性を注入してやろうか？」

薫「それだけは止めなさい！」

ましろの試着は、賑やかになった。

宗谷家、龍之介の部屋

真霜「龍之介！」

真霜は、龍之介の部屋を訪れていた。

龍之介「如何した？」

真霜「入って良いかな？」

龍之介「ああ！」

真霜は、部屋に入る。

真霜「如何したの？・・・この書類の山は？」

中に入ると龍之介は、机の上に座っていた。

机の上には書類の山が載っていた。

龍之介「いや、ちよつとな・・・試作機の性能表を見ていた。」

真霜「試作機？」

如何やら、今日視察した試作機に関する書類を見ていた様だ。

龍之介「ほら、お前の所で開発していた奴だ！」

真霜「それなら、こつちにも報告は入っているわ！．．．だけど肝心の最後の飛行試験の許可が出ないそうよ！」

龍之介「ああ．．．クソ幹部達が邪魔するんで．．．中々、深町国交相が許可を出しにくいらしいな！」

真霜「如何するの？」

龍之介「如何するって？」

真霜「それに関しての対策よ！」

真霜は、それに関しての対策を考えているのか問う。

龍之介「それは、今、資料を見て考えている。」

龍之介も今考えている。

真霜「ふう．．．ん、そうなの．．．じゃ、私も手伝うわ!!」

龍之介「え？」

真霜「2人で考えれば、何か対策も自ずと出るでしょ!!」

龍之介「ん．．．それもそうだな！．．．1人で考えるより、2人で考えた方が良いな!!」

こうして、2人は、烈風を如何やったら、国土保全委員会の幹部達に納得させるか、気が済むまで考える事にした。

真霜「ねえ！」

龍之介「何だ？」

真霜「龍之介は、航空士経験あるよね！」

龍之介「ああ、俺は、元々航空出身だからな、それが如何した？」

真霜「じゃあさ、今でも航空機の操縦は出来るんでしょ！」

真霜は、龍之介が元航空士である事は、以前龍之介から聞いて知っていた。

その為、真霜は、今でも龍之介は、航空機の操縦が出来ると思っていた。

龍之介「前にも言ったが……俺は、もう5年前の右目の負傷で2度と操縦は出来ない!!」

だが、龍之介は、5年前の右目の負傷以来、2度と航空機の操縦は出来なかった。

真霜「でも手術すれば、右目も治るかも知れないわ!!……私が良い医者を紹介して挙げるわ!!」

真霜の言う通り、この世界の医術は、かなり発達している。

龍之介の右目ぐらい、手術すれば直す事も可能だ。

龍之介「それは無駄な事だ!!」

しかし、龍之介は拒否する。

真霜「如何して?……悪いのは目だけでしょ！」

龍之介「そうじゃないんだ。」

真霜「じゃ何がいけないの？」

龍之介「・・・怖いんだ・・・」

真霜「え？」

龍之介「俺は、事故の時に右目を負傷しただけじゃなく、一瞬、恐怖に怯えたんだ。」

真霜「恐怖？」

龍之介「死ぬと言う恐怖だ・・・事故で俺の機体は墜落しかけていた・・・何とか脱しようとして、必死に機体を直そうとした・・・だが、駄目だった・・・機体はドンドン降下していき・・・やがて、俺は、脱出しようとして、脱出装置のレバーを引いて、脱出した・・・脱出した俺は、海上に着水した・・・俺は、直ぐ救援が来ると思っていた・・・だが、2日経っても全然救援は来なかった・・・捜索に時間は掛かるとは知っていた・・・だが、何日も漂流していた俺は、死ぬと言う恐怖に襲われた・・・その後、何とか救助が来て助かったが・・・それ以来、右目の負傷と精神に後遺障害が残ってしまったんだ。」

龍之介の負傷は、右目だけじゃなかった。

何日も海を漂流していたせいで精神に障害が残ってしまった。

つまり、戦闘機を飛ばそうとすると以前の恐怖が蘇り、手足が震え、脅えて、何もできなくなる。

心的外傷後ストレス障害と言うものだ。

真霜「そんな事が・・・」

真霜も心的外傷後ストレス障害の事は知っていた。

ブルーマーメイドだから、事故などでそう言う障害を負った人を何度も見ているからだ。

勿論、直す方法も知っていた。

だが、それは難しい。

何故なら、直す方法は、自分で恐怖を克服するしかないからだ。

龍之介「航空機を飛ばそうと操縦しようとしたら、あの恐怖が蘇って、何もできなくなる・・・怖いんだ。」

しかし、龍之介は、中々克服出来ない。

その時

真霜「負けちゃ駄目！」

真霜は、龍之介に対して、激励する。

龍之介「真霜!？」

真霜「私この前言ったよね!・・・貴方は、私が支える・・・だから、死ぬ恐怖に負けないで!!」

この前、薫の事で悩んだ時、真霜は、龍之介に「私が龍之介を支える……だから、もう苦しまないで」と言つて、龍之介を励ましてくれた。

今、真霜は、恐怖に脅える龍之介を勇気づけた。

龍之介「……分かつたよ！……何とかやってみる。」

龍之介は、何とか克服する事を約束した。

真霜「ん、もし克服出来たら……その時は、私も一緒に乗せてね！」

龍之介「それは良いが大丈夫か？……戦闘機は、ヘリとは違つて、大変なんだ……いくら2人乗りが出来るとわいえ……もしかしたら目が回るかも知れないぞ!!」

真霜「貴方が一緒なんだから、大丈夫よ！」

龍之介「まあ、期待はするなよ！」

真霜は、いつか克服出来たら、その時は、戦闘機に乗せてもらう事を約束した。

それに対して、龍之介は、あまり期待しないでくれと言う。

画して、何事も無く夜を過ごす宗谷家の家族と居候2人であった。

3月30日

横須賀女子海洋学校、廊下

この日、龍之介は、真雪に突然呼びだされ、薫とはやてを連れて、横須賀女子海洋学校を訪れていた。

はやて「薫先輩！」

薫「何、はやてちゃん？」

はやて「私達2人、何で呼ばれたんやろう？」

薫「それは私にも分からないわ！……でも、真雪さんに呼ばれるぐらいだから、きつと大事な話よ！」

はやて「何ぞ、緊張する。」

薫「何言ってるのはやてちゃん！……今から会うのにそんなんじや、身が持たないわよ！」

はやて「もう薫先輩は、意地悪や！」

薫に意地悪され、顔を丸くするはやて。

薫「だって、はやてちゃん、可愛いんだもん……チビダヌキ顔が……」

はやて「そのチビダヌキって言い方、止めて下さい!!……何で皆、私をそう言うんやろう……この顔、結構可愛いのに……」

はやては、自分がチビダヌキと言われるのが嫌いの様だ。

チビダヌキとは、はやてのあだ名で顔がタヌキの顔に似ている事と本人がタヌキグッズを所有している事から付けられた。

龍之介「こら!!2人とも何やってんだ!!……置いてくぞ!!」

余りに2人が無駄話をしている為、龍之介が2人を叱る。

薫「あ、御免ね兄さん!!・・・はやてちゃんをちよつとからかっていたの!」

龍之介「からかうのも良いが、チビダヌキが拗ねてるぞ!」

はやて「准将まで!」

龍之介「嫌なら、顔の整形でもするんだな!・・・ほら行くぞ!!・・・あんまり真雪

さん待たせたせるもんじゃないぞ!!」

『は〜い!』

横須賀女子海洋学校、校長室

トン、トン

龍之介は、校長室のドアをノックする

真雪「どうぞ!!」

真雪が入室の許可を出す。

龍之介と薫、はやては、校長室に入り

龍之介「山本龍之介一等監督官参りました。」

薫「同じく山本薫二等監督官参りました。」

はやて「八神はやて三等監督官参りました。」

真雪に一礼する。

真雪「待つていたわ。」

真雪は、3人を応接用のソファアールへと座る様に促すと、3人は、ソファアールへと座る。

龍之介「それで、本日の御用件は何でしょうか?・・・自分だけじゃなく、山本二等

監督官や八神三等監督官も連れて来る様に言われて、連れて来ましたが・・・」

龍之介は早速、真雪に今日、自分を呼んだ件について尋ねる。

それと何故、薫とはやてを呼んだのか。

真雪「実は、薫さんと八神さんに折り入って、お願いがあるのよ!」

薫「私達に?」

真雪「4月に我が校の入学式が執り行われるの・・・」

薫「それと私達と何か関係が?」

真雪「実は、入学式が終わり次第、新入生達は新たなクラスメイトとの親睦を深めると言う事で、2週間の海洋実習を行う事になっているのよ・・・だけど、今年の海洋実習に参加する教員2名が病気でしばらくの入院する事になったから教員2人ほど不足しているの・・・」

薫「それで、私とはやてちゃんに白羽の矢が・・・」

真雪「そう・・・2人には、臨時教員として、この実習に参加してほしいの!」

真雪は、海洋実習の臨時教員として、薫とはやてを指名した。

薫「ん．．．一応、私達、教員免許は持ってますけど、良いんですか？．．．私達は、ブルーマーメイドじゃないから．．．船の技術と戦術の事しか教えられませんけど．．．」
教員資格は、国防軍に在泊していた時に取得しているが、龍之介達は、ブルーマーメイドではなくGフォースであり、対ゴジラ戦の戦術以外は、船の技術と戦術の事しか教えられない

真雪「それだけで十分よ！．．．新入生は、まだそれだけの知識はないから大丈夫！」
真雪の言う通り、新入生は、まだ入学したばかりのひよつこだ。

船の技術と戦術の事だけなら、薫とはやてで十分やれる。

『．．．．』

それに対して、薫とはやては考え込む。

その時

龍之介「待ってくれ真雪さん!!．．．そう勝手に決められては困る．．．第一に宗谷一等監督官の許可が必要でわ？」

確かに、そう勝手に決められては、龍之介も困る。

それにこの事は、真霜に相談して、許可を貰う必要がある。

真雪「それに関しては、宗谷一等監督官から既に許可は頂いているわ！」

如何やら、真霜に相談して、許可を貰っている様だが

龍之介「ああ、そうですか・・・」

(あの馬鹿、何勝手な事を決めてるんだ?)

真霜が勝手に決めた事に少し腹が立った。

真雪「後は、貴方の許可しだい?」

つまり、行かせるか行かせないのは、龍之介の判断に委ねられた。

龍之介「ん・・・2人を行かせるのは、俺としては困るんだが・・・」

はやて「え、准将!全然困らなくないやないでつか?」

龍之介「何を言ってるんだ!!このチビダヌキ!」

薫「そうね、今のところ書類仕事ぐらいしかないし、どっち道、暇だから引き受けて

もいんじゃないかな・・・」

薫とはやては、考えた結果、引き受ける事にしたんだが

龍之介「お前まで・・・俺は反対だ!!」

龍之介は、断固として反対する。

薫「如何して?・・・たかが臨時教員ぐらい引き受けて、良いじゃない?」

はやて「そうや、そうや」

龍之介「とか言つて、お前ら書類仕事から逃げたいだけじゃないのか?」

龍之介には、薫とはやての魂胆は分かっていた。

(ギク!?)

2人は、ヤバイ顔をする。

龍之介「そんなんじや、許可は出せねな!」

薫「そんな・・・」

海洋実習に行かせてくれないと言われ、2人は、カッカリする。

しかし、龍之介は、流石に言い過ぎたと思ひ。

龍之介「まあ、行かせないとは言っていないが・・・」

『え!?!』

龍之介「特別に許可してやっても良いぞ!」

如何やら、許可を出してくれる様だ。

薫「本当に行かせてくれるんですか?」

龍之介「但し、条件がある!」

『条件?』

海洋実習に参加する代わりに条件を突き付けた。

龍之介「2人とも海洋実習から帰ったら、2週間分の報告書を提出して貰う。」

『え・・・!?!』

条件とは、2週間の海洋実習から帰還したら、2週間分の報告書(2週間の海洋実習

のレポート)を提出しなければならぬ。

それを聞いた2人は嫌がるが

龍之介「嫌なら、その分の書類仕事と雑用仕事をして貰う。」

断れば、その分の書類仕事と雑用仕事(2週間の食堂での食事作りなど)が待っている。

龍之介「どっちが良い？」

つまり、行くも行かないのも、2人の答え次第。

薫「私・・・行く!!」

先に根を上げたのは、薫だった。

はやて「薫先輩!」

薫「私、海洋学校の海洋実習に参加したい!!・・・はやてちゃんも参加しようよ!!」

はやて「ん・・・まあ、確かに書類仕事と雑用仕事よりは、報告書を書くぐらいええかもね!」

はやても同意する。

龍之介「で、如何するんだ?・・・行くのか、行かないのか?」

薫「勿論、行きます!!」

はやて「私も引き受けます!!」

2人は、海洋実習に参加する事にした。

龍之介「よろし!・・・じゃ後の事は、真雪さんに任せます。」

海洋実習に参加する事を決めた事を聞いて、龍之介は、真雪にバットンタッチする。バットンタッチされた真雪は

真雪「なら2人とも今日だけで、我が横須賀女子海洋学校の臨時教員とします。」

『はい!』

こうして、薫とはやては、横須賀女子海洋学校の臨時教員となった。

古庄「校長!」

その直後、古庄が校長室に入ってきた。

龍之介「古庄教官!」

薫「古庄さん!」

古庄「あら、薫さん、龍之介さん!」

龍之介「久しぶりだな!」

お互いに挨拶する。

挨拶した後、古庄は、誰かを探す見たいに辺りを見回す。

古庄「徳吉さんは、一緒じゃないんですか?」

龍之介「ああ、今日は、参謀は留守番で居ない。」

古庄「そうですね・・・其方の方は？」

薫「ああ、此方は、私の後輩で副長の八神はやて・・・はやてちゃん、此方は、この学校の指導教官の古庄薫さん!!」

古庄「初めまして、八神さん!・・・私は、指導教官の古庄です。」

はやて「八神はやてです!・・・古庄教官の事は、薫先輩から聞いています。」

真雪「古庄教官は、今年の新入生担当の教官なの・・・分からない事があつたら、彼女に聞くと良いわ!」

『はい!』

自己紹介が終わったところで古庄は、ある書類を真雪に渡す。

真雪「ありがとう・・・薫さん、八神さん!」

『はい!』

真雪「薫さんには、晴風クラスを八神さんには、武蔵クラスをそれぞれ担当して貰います。」

真雪は、2人に担当するクラスの書類を渡す。

2人は、書類に目を通す。

書類には、クラスの名簿と生徒の入学試験の成績表と志望動機が書かれた履歴書が記載されていた。

薫（岬ちゃんが艦長、何だ!?）

晴風の艦長が明乃だと知り、嬉しくなる。

更に

薫「え、ましろちゃん!？」

薫は、晴風クラスの名簿の中にましろの名前を見つける。

薫「真雪さん!・・・如何して、ましろちゃんが晴風クラスに!?!・・・武蔵じゃないんですか?」

真雪にましろが何故、武蔵ではなく、晴風なのか問う。

真雪「ああ、それね・・・実はねえ!・・・入学試験の時・・・あの子、回答欄を一つずらして、回答してしまったの・・・まあ、実技の方は満点だったけど、結果的には不合格：：：だけど、流石にアレだけの才能を不合格にしては余りの損失だと思って：：：今回だけ晴風クラスに編入すると言う条件で合格になったのよ!」

薫「そうですか：：ましろちゃん、あんなに武蔵に乗るの楽しみにしていたのに：：：残念です。」

ましろの特別合格を聞いて、薫は、残念そうな顔をする。

真雪「まあ、そう気を落とさないで・・・ましろから見れば貴方も同じだったでしょ!」

薫「え？」

真雪「権藤中佐から聞いているわ！……貴方も昔は、学生の頃、乗っていたのが駆逐艦だそうね！」

薫「はい、駆逐艦そよかぜです！」

真雪は、薫が駆逐艦そよかぜに乗艦していた事を美由紀から聞いていた。

真雪「なら、貴方がやる事は……分かっているでしょ！」

薫「やる事……はあ!?……そうですね！……分かりました……やってみます!!」

真雪は、薫に自分がすべき事をしなさいと言い、薫も自分なりに指導する事に決めた。

はやて「なら私も……」

はやても薫を見て、自分のクラスの書類を見て、自分なりに指導する事に決めた。

打ち合わせが終わり、3人は、横須賀女子海洋学校を後にし、横須賀基地に戻った。

横須賀基地

横須賀基地に戻った3人は、功やなのは、フェイトに臨時教員になった事を説明した。

龍之介「そういう事になった。」

なのは「凄いよ!!薫先輩、はやてちゃん!!」

なのは、薫とはやてが横須賀女子海洋学校の教員に成った事を聞いて嬉しがる。

薫「ありがとうなのはちゃん!!・・・でも、2週間の臨時教員だから驚く事じゃないわ!!」

フエイト「でも、臨時とは言え凄いです!!・・・頑張つてきつて下さい先輩!」

薫「ありがとうフエイトちゃん!!・・・でも、御免ね!・・・貴方達2人に仕事押し付けちゃつて・・・」

なのは「それは大丈夫!!」

フエイト「後の事は、お任せ下さい!!・・・しつかりやりますので・・・」

はやて「本間、2人が居て助かるわ!」

2人が行つて本当に助かった。

しかし

功「本当に良いんですか・・・2人を行かせて?」

薫とはやてを行かせる事に心配する功。

龍之介「たかが臨時教員で2週間居ないだけだ・・・大丈夫だろ!」

功「それは、そうですが・・・」

龍之介「如何した参謀?」

功「いえ、何か嫌な予感がするんですよ・・・このまま2人を行かせて良いのか?」

薫とはやてを行かせる事に功は、不安に成っていた。

今、美由紀達が居ない状況で2人を行かせて良いのか

龍之介「真雪さんや古庄教官も居るんだ!!・・・大丈夫だ!!」

だが、真雪や古庄が付いているから、大丈夫だろうと龍之介は言う。

功「なら良いんですが・・・もし、何か遭っても・・・我々は何もできませんから・・・」
龍之介「ん・・・2人とも!!・・・後で、ブルーマーメイドの庁舎に行くぞ!!」

『は〜い!!』

説明が終わったところで龍之介は、2人を真霜の元へと連れて行く。

何故、連れて行くかと言うと、これから横須賀女子海洋学校の海洋実習に必要な物を渡す為である。

それは

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

薫「これは!？」

はやて「これって!？」

真霜「それは貴方達が実習で着る制服よ!・・・流石にその制服じゃ不味いでしょ!」
真霜は、薫とはやてにブルーマーメイドの制服を手渡す。

流石に今着ているGフォースの制服では不味いと思ひ、真霜が態々二人の為に用意してくれたのだ。

薫「態々制服まで用意してくれるなんて、真霜姉さんありがとうございます!!」

真霜「後で試着して見ると良いわ!!」

龍之介「すまないな真霜! 態々制服まで用意してくれて・・・」

真霜「気にしないで! : : お母さんから頼まれた事だし、私が許可した事だから : :
龍之介「それについては帰ってから、ゆっくり話し合おうな!」

流石に勝手に許可した事に龍之介は切れていた。

海上安全整備局、国立海洋医科大学先端医療研究所

その頃、海上安全整備局の国立海洋医科大学先端医療研究所では、マウスの研究を諦めきれなかった研究員達が密かに研究を続けていた。

そんな中、パソコンの画面にあるパソコンの反応が突如現れた。

調べた結果、それは紛れもなく、西之島新島付近の海域に沈められた例の実験艦からのビーコンであった。

研究員達は驚きつつも喜んでいた。

全滅していたマウスが生きていたのだから、実験は成功し、研究は再開される。

しかし、実験の総指揮の田沼総理は、既にこの研究については、打ち切っており、研究を再開させるには、確たる証拠が必要だ。

それには、実験データと実験サンプルを密かに回収しなければならない。

もし、世間にこの実験の事がバレたら厄介な事になる。

下手すれば、田沼総理の責任追及は免れない。

例え責任追及を免れても、今度は、我々が田沼総理によって、消されてしまうかもしれない。

研究員達は早急な話し合いの結果、密かに実験データと実験サンプルを回収した後、実験に使用した実験艦を今度こそ、海の底へ自沈処分させ、全て無かつた事にする。

あおつらえむきに今度、横須賀女子海洋学校の海洋実習での集合場所が西之島新島付近と言う情報を手に入れた研究員達は、真雪に海洋生物の研究と銘打って今度の海洋実習の際に便乗させる事を届け出る。

届け出の書類を受け取った真雪は、書類に何も問題も無く便乗の許可を出す。

しかし、この便乗許可を出した事で、やがて、悪夢を呼ぶとは、真雪は知る好も無かつた。

最終章 旅立ち

4月1日

横須賀基地

次郎『凄いじゃないか、臨時教員なんて!』

薫「ありがとう次郎君!!」

薫は、携帯電話で地中海に居る次郎と連絡をしていた。

次郎『良いな薫とはやては・・・俺もやりたかったな・・・』

薫「次郎君は、駄目だよ!!」

次郎『何でだよ?』

薫「次郎君が教員になったら、若い子に手を出すでしょ!」

薫の言う通り、次郎は女に弱いから、もし教員だったら、間違いなく生徒に手を出しているだろう。

次郎『だ、誰がそんな事するか!?!』

それに対して、次郎は、真っ向から否定する

薫「本当に・・・」

しかし、薫は、怪しいと睨む。

次郎『何だよ！……大体、俺の彼女は、薫一筋だ!!……薫以外他はない!!』

薫「ふう……御免ね次郎君!……疑って!」

次郎『全く……まあ良いあ』

2人の仲は、相変わらずの様だ。

マルタ島、バレッタ港

薫『ところで、そつちは、どお?……任務は順調?』

話は置いといて、任務の状況を聞く。

次郎「ああ、ある程度は片付いた……海賊も俺達相手じゃ歯が立たないみたいだ。」

如何やら、地中海の海賊退治は順調の様だ。

まあ海賊が相手にしているのは、ブルーマーメイドではなく対ゴジラ部隊のGフォー

スだから、相手にもならないだろう。

薫「じゃ、もう直ぐ帰ってくるのね?』

もう直ぐ帰ってくると思いき喜ぶ。

次郎「いや、まだ後始末が残っているから帰ってくるのは、5月ぐらいになるだろう。」

薫『そうか、まだ掛かるんだ。』

帰るのがまだ1ヶ月掛かると言われ、少しガツカリする。

次郎「だが、終われば帰れる!!・・・その時は、分かっているだろう薫?」

薫『ん!・・・例の続き!!』

次郎「じゃ、またな!」

次郎は、電話を切る。

美由紀「今の電話、山本中佐から?」

次郎「ええ・・・如何やらあいつ今、臨時教員で、もう直ぐ海洋実習に出るそうですよ!」

美由紀「そう・・・」

次郎「あれ・・・薫とはやてが臨時教員を受けた事に反論しないんですか?」

美由紀「反論して、何か変わるの小沢中佐?」

次郎「いいえ別に・・・唯、権藤中佐が珍しく反論を言わないので・・・」

美由紀「たまには、そう言う事もあるわ!・・・まあ、私は、もう貴方達に反論する事は出来ないかも知れないわね。」

次郎「それは如何いう事ですか?」

美由紀「何れ分かるわ!!」

それは何れ皆がそれぞれ別々の道に進む事を美由紀は分かっていたのだろう。

4月4日

宗谷家、薫の部屋

薫は、明日の横須賀女子海洋学校の入学式に向かう準備をしていた。

一応、持って行く物は、着替えと必要な物と僅かな私物のみ。

それを全部、大きいバッグに入れ込む。

薫「これでよしと！・・・後、持っていく物は・・・」

真霜「薫！」

薫「ああ、真霜姉さん!？」

真霜が部屋に訪ねてきた。

真冬「よう薫!!」

ましろ「薫姉さん!!」

薫「真冬!?!それにましろちゃんまで!?!」

その次には、真冬とましろが訪ねてきた。

真霜「明日の準備は、もう出来た？」

薫「はい、一応・・・ましろちゃんの方は大丈夫？」

薫は、一応は準備したと言い、ましろの方も準備は出来たか問う

ましろ「は、はい、大丈夫です。」

それに対して、大丈夫と言う。

薫「そう……」

ましろには、薫が臨時教員になった事は話している。

だが、肝心の特別入学の事は言っていない。

今、言えばましろは、ガツクリするだろう。

それだけじゃない、入学自体辞めるかも知れない。

その為、薫は、あえて言えなかった。

ましろ「薫姉さん如何したんですか？」

薫「あ!?! ……んん何でもないわ!!」

真冬「良いな、薫は! ……あたしも行きかけたな……」

自分も行きかけたかったと駄々を捏ねる真冬。

真霜「貴方は駄目でしょ真冬!!」

真冬「何でだよ真霜姉？」

真霜「貴方が行くと問題が起きるから！」

確かに真冬が行けば、必ず生徒のお尻を揉むだろう。

『確かに!!』

2人は納得する。

真冬「何納得してんだよ!!」

薫「まあ、まあ、真冬も行きたかったけど……これは私とはやてちゃんが受けた仕事だから勘弁して!!」

薫は、真冬に謝罪する。

真冬「ん……まあ、薫が言うなら仕方ないな。」

薫に頭を下げられては、流石に何も言えない真冬。

真霜「まあ、取り合えず……薫!……ましろの事お願いね!」

ましろ「真霜姉さん!!……そんな事言わなくても私は、もう高校生です!!……自分の事は、自分で出来ます!!」

真霜「それが心配なの……貴方いつも運が悪いじゃないの!」

真霜は、運が悪いましろを海洋実習に行かせる事が心配だった。

ましろ「……」

薫「大丈夫です真霜姉さん!!……ましろちゃんの事は、私がちゃんとするので心配しないで下さい!!」

真霜「それなら安心ね!」

薫が付いている事に安心する真霜。

ましろ「ん……」

だが、ましろは、あまり嬉しくない顔をする。

それからしばらくして、明日の準備をして寝ようとした時

龍之介「薫！」

薫「あつ、兄さん!？」

今度は、龍之介が訪ねてきた。

龍之介「もう明日の準備は終わったのか？」

薫「ん、持っていく物は取り合えず入れた。」

龍之介「忘れものはないな？」

薫「だと思ふ。」

龍之介「まあ、お前なら大丈夫だろう・・・なんせ其処が抜けて無いからな・・・」

龍之介は、薫をカラカウ。

薫「何それ・・・私がバカだと言いたいのか？」

龍之介「そうとも言う。」

薫「フフフ・・・ハハハハ!!!」

龍之介「ハハハ・・・!!」

2人は笑ふ。

龍之介「そうだ薫!・・・これ・・・」

龍之介は、薫にある物を渡す。

薫「何これ？」

渡された物は、古いお守り。

龍之介「俺が航空士時代から持っていたお守りだ・・・何か遭った時に守ってくれるだろう。」

如何やら、龍之介が航空士だった頃から持っていたお守りの様だ

薫「ありがとう兄さん!! 終ったらちちゃんと返すね！」

薫は、託されたお守りを大事にする。

龍之介「早く寝ろ!!・・・明日は早いからな！」

薫「ん!・・・お休み兄さん!!」

龍之介「お休み薫!!」

龍之介は、薫の部屋を後にする。

龍之介（俺は、もうお前を守る事が出来ない…だから、お前は、自分の道を行け…）

龍之介「さて、俺も寝るか！」

自分の部屋へと戻る。

宗谷家、龍之介の部屋

部屋へ戻ると

真霜「遅いわよ！」

龍之介「ま、真霜!」

部屋に戻ると其処には、何故か真霜が居た。

龍之介「如何したんだこんな時間に?何か用か?」

真霜「何って・・・貴方と一緒に寝るのに決まってるじゃない!」

龍之介「ああ、そう言う事か!」

真霜「久々だから今日は、たつぷり可愛がつて上げるわ!!」

いつも忙しくて、一緒に寝る事もできず、快樂もできなかつた。

その為、真霜は飢えていたのだ。

龍之介「はあ・・・程々にしろよ。」

それから、2人は、久々の快樂を楽しんだ。

特に真霜は、久々だった為、攻めが強く、龍之介も強く攻める。

雅に束の間の夜であつた。

4月5日

当日の朝

宗谷家、薫の部屋

薫「・・・」

薫は、真霜から支給された制服を着ていた。

薫「流石に初めて着る制服だから、まだ慣れないな・・・」

薫にとっては、流石に初めてのブルーマーメイドの制服な為、直ぐには、馴染めない。だが、鏡で見ると、流石に似合っていた。

特に胸部分が平賀と同じ大きさや綺麗な足を黒のタイツを履いて隠し、更に髪型は、今までの通り、黄色いリボンで留めたポニテール。

雅にBPF隊員らしい姿だ。

薫「さて、そろそろ行こうか・・・」

着替えを終えた薫は、荷物を持って、リビングに向かう。

龍之介「おはよう薫!!」

薫「おはよう兄さん!!」

真霜「おはよう薫!!」

薫「おはようございます真霜姉さん!!」

リビングには、龍之介と真霜が既にいた。

真霜「制服似合うわよ!」

薫「ありがとうございます。」

龍之介「確かに似合うぞ・・・特に・・・胸部分は、お前が負けてるがな・・・」

確かに薫と真霜の身長は、一緒だが胸部分が薫の方が巨乳で、真霜の方は、普通乳で

負けている。

真霜「何ですって……」

自分の胸の事を言われて、真霜は不機嫌さを露にする。

龍之介「あつ!?!……俺が悪かった!!悪かった!!……許してくれ真霜様!!」
流石に真霜を怒らせたらヤバいと思ひ謝罪する。

真霜「フツ!……フフフ!!」

龍之介の謝罪に笑う真霜。

薫「フハハハ……」

薫も笑う。

龍之介「ん……」

流石に2人に何も言えない龍之介。

薫「ところで真雪さんは?」

真霜「お母さんなら、もう先に出たわよ!……色々と準備があるから……」

真雪は、もう既に出かけていた。

入学式の準備があるからだ。

薫「そうですか……まあ、校長だから当然か……」

薫も分かっていたが、真雪にも自分の制服姿を見せたかったのだ。

龍之介「なあに、どうせ入学式の時に見せれば良いじゃないか!!」

別に今見せなくても入学式の時に見せれば良いと龍之介は言う。

薫「そうだね!」

薫もそうする事にした。

ましろ「おはようございます。」

話していると、横須賀女子海洋学校の制服を着たましろが入ってきた。

薫「あつ、おはようましろちゃん!!」

龍之介「お!?来たか!!」

真霜「製服似合うわよましろ!」

ましろ「ありがとう真霜姉さん!!」

真霜に褒められて、照れるましろ。

それから、4人は、玄関先まで行く。

龍之介「良いか薫、くれぐれも無茶するな!!」

薫「分かってるわよ!!」

真霜「ましろ、くれぐれも自分の事は、ちゃんとするのよ!!」

ましろ「姉さん!!・・・私は、もう子供じゃないです!!・・・自分の事ぐらいちゃんと出来ませ!!」

真霜 「本当にできるのかしら？」

真霜は、今になって心配する。

薫 「じゃ、行つてくるね兄さん、真霜姉さん!!」

ましろ 「行つてきます!!」

薫とましろは、横須賀女子海洋学校に向けて、出発する。

龍之介 「ああ、行つて来い!!・・・帰ったらレポートの提出忘れるな!!」

薫 「それは言わないで!!」

真霜 「2人とも体に気を付けるのよ!」

龍之介と真霜は、2人を見送る。

龍之介 「・・・行つたな!」

真霜 「ん!」

龍之介 「さて、俺達も行くか!」

真霜 「ん!」

龍之介と真霜も職場に向かう。

真霜 「龍之介!薫が居なくなつて寂しくない?」

龍之介 「お前が居るから全然寂しくないよ!」

真霜 「フフ・・・嬉しいわ!」

龍之介には、薫が居なくても真霜が側に居るから大丈夫の様だ。

画して、薫とましろは、横須賀女子海洋学校の入学式へと向かった。そして、この先何が待ち受けているのか、それは誰にも分からない。

だが、龍之介達は行く。

其処に何が待ち受けて言おうとも・・・

黎明編は、これで終了です。

此処からは、主人公が龍之介から妹の薫に交代します。

それでは、次は本編でお会いしましょう。

本編

第1章 入学式

これは、ある少女の記憶。

9年前

広島県、呉市

この日、2人の少女が息を切らし、林を抜け、海が見える岬に向かって走っていた。

1人は、岬 明乃ともう1人は、知名もえか。

この時、まだ2人は共に両親を事故で亡くして、呉にある児童養護施設に保護されていた。

明乃「はあ・・・はあ・・・もう直ぐ通るよ、もかちゃん！」

もえか「うん！」

明乃ともえかが岬に来ると

『あっ!!』

ポオオオと船の汽笛が聞こえ、目を向けると1隻の軍艦が2人の横を通り港に入ろうとしていた。

明乃「来た……!!」

2人の目の前を通過するのはブルーマーメイドの旗艦大和だった。

明乃「おーい!!」

明乃は、目の前を通過する大和に向かって手を振る。

もえか「凄いね、みけちゃん!」

明乃「お……い!!」

すると、大和の艦首に立っている女性が明乃ともえかの姿を見付けたのか、帽子を片手にゆつくりと手を振り返した。

明乃「あつ……手、振ってくれた!」

手を振り返した事に明乃は、大いに喜んだ。

そして

明乃「もかちゃん……私達……絶対……ぜーったい……ブルーマーメイドになろうね
!」

もえかにブルーマーメイドになる事を約束した。

もえか「うん!」

萌香もそれに同意し

明乃「海に生き!」

もえか「海を守り」

『海に行く・・・それがブルーマーメイド!!』

2人は、誓いの言葉を発し、ブルーマーメイドになる事を誓うのだった。
それから9年後

4月5日

神奈川県、横須賀市

明乃は、スキツパーで横須賀女子海洋学校を目指していた。

明乃「・・・」

明乃の片手には朝食代わりとしてのバナナがあり、彼女はバナナを食べながらスキツパーを運転していた。

余所に明乃は、スピードを上げる。

横須賀女子海洋学校、棧橋

その頃、横須賀女子海洋学校の民間港エリアの棧橋では明乃同様、スキツパーで来た者、水上バスで来たもので、棧橋は賑わっていた。

宗谷家を出た薫とましろは、水上バスで横須賀女子海洋学校に辿り着いていた。

2人は、水上バスから降り、棧橋を歩いていると

ましろ「？」

ましろは、突然足を止める。

薫「如何したのましろちゃん? . . . あっ!？」

薫も何故ましろが足を止めたか、同じ方向を向くと、目の前に1匹のドラ猫が居り、此方をジッと見ていた。

五十六であつた。

薫「ああ、貴方は、この前の猫!？」

薫は、目の前の猫が五十六だと分かり、思わず抱きかかえる。

薫「こんな所で何しているの . . . もしかして今日、入学する生徒を観に来たの? . . . 雅かね?」

何故此処に居たのか、それとも入学する生徒を観に来たのかと思つた。

薫「ほら猫だよ、ましろちゃん!! . . . ん?」

そのまま薫は、五十六をましろに見せようとしたが

ましろ「うわあ . . . !？」

五十六を見た途端、何故か、ましろは固まり、五十六を近づけると突如悲鳴を上げて後退する。

薫「如何したの? 何で逃げるの?」

何故、後退するのか、薫は分からなく。

其処へ

明乃「あ、猫だ！」

五十六の存在に気付いた明乃が駆け寄るが

明乃「あっ!?!」

ましろ「? いっつ!」

その際、明乃は転んでしまい、そのまま前に居たましろにタツクル形でぶつかつてしまう。

その際、手に持っていたバナナが棧橋へと落ちる。

薫「ん・・・あっ!?!」

いきなりの出来事で薫は、瞬間的に目をつぶってしまった、目を開けると明乃とましろがお互いにぶつかつたせいかわ、側にしゃがんでいた。

抱いていた五十六も薫が目を開けた時には、既に薫の手から逃げ去っていた後だった。

薫「ちよ、ちよつと大丈夫2人とも!?!」

薫は、慌てながら2人に掛け合うが

明乃「いったあ・・・う・・・ん・・・あっ!・・・御免なさい!・・・あっ!?!」

薫「あっ!?!」

2人は、お互いに目が合い。

薫「岬ちゃん!」

明乃「薫さん!」

薫と明乃は、久しぶりに再会する。

薫「久しぶりだね・・・入試以来だったわね?」

明乃「はい!入試以来です。」

2人が会うのは、雅に入試の時以来である。

ましろ「薫さん、知り合いですか?」

ましろは、立ち上がり薫に問う。

薫「ん、ちよつとね・・・」

ましろ「そうですか・・・」

知り合いだと聞き、ましろは制服についたホコリを手で掃う。

明乃「あつ、大丈夫?」

ましろの事を忘れていた事に気づいた明乃は、ましろに掛け合うと

ましろ「大丈夫だ!・・・全く・・・気をつけろ・・・ふん!」

それに対して、冷たい言葉を言い校舎へと向かおうとしたが

ましろ「わわっ!・・・」

その際、先程、明乃の手から落ちたバナナの皮を思いつきり踏んづけた。

ましろ「とつとつとつ・ん・ん・ん」

ましろは何とか、バランスを保とうとするが

ましろ「うわっ！」

バシャ・・・・!!

『!?!』

結局、無駄な努力となり、カバンを明乃に放る様な形で、自身は栈橋から海に落ちた。

明乃「あっ！」

ましろ「ぶはっ!・・・ついていない・・・」

海に落ちたましろは、お決まりの台詞を呟いた。

薫「1度ある事は2度ある・・・流石ましろちゃん・・・」

1度ある事は2度ある。

薫は、海に落ちたましろの災難を評価した。

明乃「捕まって！」

明乃はましろに手を伸ばすが

ましろ「いいっ!・・・着衣泳は得意だ！」

ましろは、折角の明乃の行為を断り、自力で栈橋の上上がった。

明乃「うわあく濡れちゃったね……」

ましろ「ずぶ濡れだ……はあ……これから入学式だというのに……」
海に落ちたせいでましろの着てた制服は、ずぶ濡れ状態になってしまう。

明乃「ついてないね……」

ましろ「お前が言うな！」

明乃「ひっ！」

明乃は、自分の落したバナナの皮でましろが落ちたのに、その責任意識が無い言葉を言つた為、ましろに怒られびびる。

薫「止めなさいましろちゃん!! 喧嘩なんて見つとも無いわよ！」

いくらまきぞいになつたとは言え、余りにも明乃を責め過ぎだと思ひ止める。

ましろ「でも、これは、こいつが……」

しかし、ましろは、怯まず明乃を責めるが

薫「そんな事は如何でも良いから、さっさと制服を乾かしに行つて来なさい!!……入学式には、まだ時間があるから……」

まだ時間があるから、薫は責任の擦り付けより、ましろ自らの制服を先に乾かすべきだと主張する。

このままだと乾かす時間が無くなり、見つとも無い状態で入学式に出る事になる。

ましろ「・・・はい」

ましろも濡れた状態で入学式に出る訳には行かない。

此処は、薫の言う通りに仕方なく明乃を責めるのを止める。

薫「岬ちゃんも付いて行ってあげて、シャワー室の場所は分かるわよね？」

薫は、はやてと待ち合わせをしているので、ましろに付いて上げられない。

その為、明乃にエスコートを頼んだのだ。

明乃「はい！大体は分かりますので・・・」

明乃も承諾する。

まあ、明乃にとつては、ましろに対しての罪滅ぼしと考えている。

薫「じゃ、後は任せたから、私は、先に職員室に行かないと・・・後で入学式で会い

ましょうね！」

薫は、ましろの事を明乃に任せ、先に職員室へと行ってしまった。

行った後、明乃は、ましろと共にシャワー室へと向かった。

横須賀女子海洋学校、シャワー室

ましろがシャワーを浴びている間に濡れたましろの制服と下着を洗濯及び乾燥機にかけてきた。

明乃「下着も制服も乾いたよ・・・」

洗濯と乾燥が終わった頃、シャワー室の脱衣所へと行くと、ましろもシャワーを浴び終えたのか、ドライヤーで髪を乾かしていた。

明乃「此処に置いておくね・・・プレスもしておいたから・・・」

明乃が制服と下着を渡すと、ましろは恨めしそうな目で明乃を睨む。

明乃「良かった・・・間に合いそうだね・・・それにしてもバナナの皮って本当に滑るんだね。」

明乃なりのフオローを入れるが

ましろ「・・・着替えるから出てつてくれないか？」

明乃「あつ、あああ、御免！御免！」

明乃は、慌てて脱衣所から出るが

明乃「あっ!？」

一度、顔を出して

明乃「折角同じ学校になったんだから、これからよろしくね！」

一言声を掛けた後、入学式会場である武蔵に向かった。

横須賀女子海洋学校、職員室

一方、薫は、はやてと合流する為、職員室を訪れていた。

職員室では、入学式に備え教員達が既に集まっていた。

薫「はやてちゃん!!」

はやて「あつ、薫先輩!」

薫「遅くなつて、御免ね!」

はやて「いえ、調度まや、時間があるさかいに・・・」

薫「そう・・・それにしても結構似合つてるわね、その制服!」

はやて「薫先輩も!」

薫「フツ・・・」

はやて「フツ・・・」

『フハハハ・・・!!』

2人は、お互いの制服姿を見て、意気投合する。

古庄「お楽しみのもので、ちよつと良いかしら・・・」

2人が意気投合している時、向こうから古庄がやつて来た。

薫「古庄さん!」

古庄「2人来たところで、スケジュールの打ち合わせをするわね!」

『はっ!!』

薫とはやてが居るところで、2人に学校所有のタブレット端末（青の端末は、薫が赤の端末は、はやてが）を渡し、海洋実習のスケジュールの打ち合わせをする。

スケジュールによると

4月5日

9:00

武蔵の甲板で入学式

10:30

各所属艦内教室にてクラス結成式

13:00

各教育艦、西之島新島に向けて出港

4月7日

10:00

各教育艦、西之島新島に集合

13:00

各艦乗員での交流会とオリエンテーション

4月8日～4月10日

西之島新島近海で航海演習

4月11日

スキッパーやカッターなどのクラス競技

4月12日～4月17日

艦隊合同演習

4月18日

15:00

横須賀女子海洋学校に帰投

16:00

各艦、教室にてオリエンテーション後、解散

と組まれていた。

はやて「随分ハードなスケジュールやな・・・」

薫「ん！」

スケジュールがハードに組まれている事に驚く。

古庄「確かにハードだけど・・・これぐらいは組まないと生徒は成長しないし、何よりも生徒の間に友情が芽生えないわよ！」

古庄は、唯ハードに組んだ訳では無く、ちゃんと生徒の事を考えて、スケジュールを組んでいた。

薫「成程！・・・生徒に厳しく教育して、生徒を育てる・・・それだけじゃなく、生徒の間に友情を芽生えさせる・・・流星は古庄教官！」

薫は、古庄を褒める。

古庄「ありがとう薫さん・・・ん？」

腕時計を見て、入学式が始まる時間が迫っていた。

古庄「そろそろ入学式が始まる時間ね・・・では、2人とも！」

『はいー！』

3人は、入学式会場である武蔵に向かった。

超大型直接教育艦武蔵、前甲板

武蔵の前甲板上とその周囲では、既に新入生の他にその家族も何人かおり、娘の晴れ姿をカメラに収めていた。

明乃は、その前甲板を歩いていると

明乃「あっ！」

明乃は、ある人物と再会する。

明乃「もかちやくん！」

その人物とは、明乃の幼馴染である知名もえかである。

もえか「ミケちゃん！」

もえかも明乃に気づく。

もえか「もう式始まるよ。」

明乃「ちよつと色々あつて．．．」

もえか「間に合わないかと思つたじゃない！」

明乃「御免、御免」

もえか「相変わらずだね．．ミケちゃん！」

明乃「へへ．．」

もえか「フツ．．!!」

『アツハハハ．．．!!』

久しぶりに再会したのに、余り変わっていない事に2人は意気投合する。

明乃「久しぶりだね．．」

もえか「小学校以来だもんね．．」

明乃「うん．．」

2人は、抱き合いながら改めて再会を祝う。

もえか「クラス発表は、最後みたいだよ！」

明乃「もかちゃん、一緒に艦だと良いな．．」

もえか「そうだね！」

2人が仲良く会話していると

古庄『間もなく、入学式を開始します．．．新生は、整列して待機．．』

入学式の開始を知らせる放送が流れ、新入生達は、武蔵の前甲板に整列する。

やがて、古庄以下の教員達も整列する。

その中に薫とはやてもいた。

そして、武蔵のマストに横須賀女子海洋学校の校旗が掲げられ、入学式が始まった。

古庄『では、宗谷校長よりご挨拶です。』

校長の真雪が艦首に設置された壇上にかかる。

真雪『皆さん・・・入学おめでとうございます・・・学校長の宗谷真雪です・・・皆

さんは、座学、実技で優秀な成績を収め、この横須賀女子海洋学校に晴れて入学しました・・・直ぐに海洋実習が始まりますが、あらゆる困難を乗り越え、立派なブルーマーメイドになって下さい。』

薫（流石真雪さん！・・・凄い事を言う。）

真雪の言葉に薫は、つい惚れてしまう。

やがて真雪の話が終わり、古庄教官から今度の予定が伝えられ、入学式は終わる。

生徒達は、それぞれの艦の配置が書かれている掲示板を見る。

薫とはやても提示板を見ようとするが

真雪「薫さん、はやてさん!!」

真雪が声を掛けてきた。

薫「あつ真雪さん!」

真雪「2人とも制服似合っているわよ!」

薫「ありがとうございます。」

真雪「今日が教員としては初めてだけど、落ち着いて対処して・・・」

薫「任せて下さい真雪さん!・・・まあ、大変ですけど、何とかやってみます!!」

真雪「頼もしいわね!」

薫「では!」

薫は、行ってしまふ。

はやて「薫先輩なら多分かまへん・・・昔から期待だけは裏切らん人やから・・・ほな・・・」

はやても薫の後を追って、行ってしまふ。

2人の後ろ姿を見て、真雪は

真雪「本当に遅い人達だわ!」

と薫とはやてが今回の海洋実習に参加して、良かったと心から思う。

一方、隣の方では

明乃「んん・・・っ・・・入学式終わった・・・っ」

もえか「宗谷校長、格好良かったね!」

入学式が終わり、明乃ともえかは一段落する。

明乃「うん！・・・あとは、クラス発表か・・・」

残りは、クラス発表の掲示板を見るだけとなった。

明乃「このクラス分けでどの艦の所属になるのかも決まるんだよね。」

もえか「うん、そうみたい・・・艦種に関わらず、一クラスの約30名・・・それぞれに所属する艦に乗って海洋実習・・・」

明乃「楽しみだね！・・・ねえ、もかちゃん！・・・どの艦が良いな・・・とかって希望ある？」

もえか「えっ？」

明乃は、もえかに教育艦の中で希望がある艦があるか問うと

もえか「うくん・・・如何だろう・・・あんまり気にした事ないかも・・・」

本人は、そんなに気にしていない様だ。

明乃「そうなんだ!？」

もえか「ミケちゃんは、あるの?・・・乗りたい艦?」

今度は、もえかが明乃に問うと

明乃「ん・・・ん・・・私もそんな有る訳じゃないけど・・・」

如何やら、明乃自身も考えていない様だ。

もえか「なんだ、何かあるのかと思った。

明乃も同じ考えてない知り

もえか「ふっ……」

水平線を見るもえか。

もえか「……懐かしいね！……こういうの……」

明乃「ん？」

もえか「ミケちゃんと他愛ないと話をして笑い合ったりとか……」

明乃「うん、そうだね！」

もえか「乗りたい艦は、分からないけど、強いて言うなら、ミケちゃんと同じ艦に乗

りたいな……」

明乃「それ、入学式の前に私からも言った。」

もえか「うん、お返し！」

どうせ乗るなら、2人とも同じ艦に成れば良いと明乃が入学式前に言った事を口にする。

もえか「フツ……」

明乃「アハハハツ……！」

2人は意気投合する。

そんな何気ない会話をしながらクラス分け発表が貼られた掲示板の前に立つ。

明乃「それじゃあ、せーので見よっか！」

もえか「うん！」

互いに目を閉じて

明乃「いくよ……っ」

『せ……のっ！』

2人は、目を開いて掲示板を見る。

果たして、2人が配属される艦は？

第2章 晴風出港

『せ．．．のっ!』

2人は、目を開いて掲示板を見る。

掲示板には

『超大型直接教育艦 武蔵 艦長 知名もえか』

『航洋直接教育艦 晴風 艦長 岬明乃』

と記載されていた。

明乃「凄い、凄い!．．．もかちゃん、武蔵だよ!．．．しかも艦長!．．．凄い!!」

明乃は、もえかが、武蔵の艦長になった事を知ると嬉しそうにはしゃぐ。

確かに武蔵の艦長に指名されると言う事は、もえかが新入生の中で最上級生である事を意味する。

将来、真霜の後を継ぐ事になるかも

もえか「ミケちゃんだって、艦長さんになったじゃない．．．晴風の．．．」

一方、明乃は、もえかとは、反対に一番下である晴風の艦長になった。

明乃「う・・・だけど、晴風は、航洋艦クラスだから、正式には、艦長って言わないらしいよ。」

自分が晴風の艦長に指名された事を明乃は、残念そうな表情で言う。

もえか「でも、艦長は艦長だよ・・・小さい艦の方が、隅々まで目が行き届いて、良いんじゃないかな。」

例え航洋艦でも艦長に变りは無い筈、もえかの言葉を聞いて、明乃は、笑顔を取り戻す。

明乃「そつか、一クラスの人数は、武蔵も晴風も一緒だもんね・・・ある程度自動化されてるとは言え、大きい艦は大変だね。」

確かに明乃の言う通り、いくら自動化されているとは言え、小型艦の晴風とは違い、武蔵見たいな大型艦は扱いが大変である。

例えば、Gフォース艦隊の総旗艦艦空母大鳳もある程度、自動化されているが、航空機を取り扱っている為、搭乗員や整備員を入れて、5000人以上は乗っている。

指揮と統率が大変である。

だから、武蔵も大鳳と違い人数が少ないが保々同じであろう。

艦長と副長の能力が試される。

もえか「やりがいは、有るけれど・・・」

明乃「でも私で大丈夫かな：：：艦長の仕事つて、受験勉強でやっただけだし：：：艦長と言う重みに明乃は、急に怖気付く。

もえか「ミケちゃんは、きつと良い艦長さんになると思うよ．．．ほら．．．あれが晴風だよ．．．」

もえかは、そんな明乃に希望を抱かせながら、教育艦が並べてある方向を指す。

インディペンデンス級沿海域戦闘艦が沖に出るにつれ見えてきたのは、Y467と書かれ、停泊している航洋艦晴風の姿である。

明乃「何か、可愛い．．．」

明乃は、晴風を見て可愛いと言う。

明乃「へえ．．．あそこが、家になるんだな．．．」

明乃は、目をキラキラさせながら言う。

もえか「．．．やつと会えたのにまた、離れ離れだね。」

もえかは、残念そうな表情で言う。

そう言うもえかに明乃は、もえかの手に手をおく。

明乃「大丈夫だよ！．．．艦は別々だけど．．．でも同じ海の上だもん！」

もえか「ミケちゃん．．．」

明乃の言葉にもえかは少し微笑む。

明乃「私には晴風の、もかちゃんには、武蔵の新しい仲間ができるし・・・」

もえか「・・・そうだね、海の仲間は、家族だもんね!」

明乃「頑張つて卒業して、ブルーマーメイドになろうね!」

もえか「うん!」

2人は、例えクラスが分かれても、新しい友人もできるし、明乃とは、実習の時に会える。

それを理解して、2人は、いつもの

明乃「海に生き!」

もえか「海を守り!」

明乃「海を行く!」

『それがブルーマーメイド!』

ブルーマーメイドの標語を言う。

横女の新生A「ブルーマーメイドの標語だ!」

横女の新生B「懐かしいね・・・」

横女の新生A「私達も子供の頃やったよね・・・」

2人は、ブルーマーメイドの標語を言うと、それを聞いていた他の新生生が懐かしがる。



2人とも赤面した。

薫「岬ちゃん!!」

明乃「あつ、薫さん!」

もえか「ん?」

2人が赤目しているところに薫がやってきた。

薫「掲示板は、もう見た?」

明乃「はい!」

薫「そう、じゃこれから一緒に艦ね!」

明乃「え?」

薫「実はね・・・本日付けで、私は臨時の教員として、岬ちゃんが艦長を務める艦に乗る事になったの・・・だから、これからよろしくね岬ちゃん!」

薫が教員として、晴風に乗艦する事を明乃に告げる。

明乃「ああ・・・はい!・・・此方こそよろしくお願いします!!」

もえか「ミケちゃん、お知り合い?」

明乃「ああ、えつとね・・・この人は、山本薫さん・・・こう見えて列記としたブルー

マーメイドなんだよ!」

明乃は、もえかに薫の事を紹介する。

薫「貴方がもえかさんね・・・初めまして、山本薫です！」

もえか「私は、知名もえかです。」

お互いに自己紹介をして、薫は、もえかをチラチラ見る。

もえか「何か？」

薫「やつぱり岬ちゃんが言った通りの人だね！」

もえか「ん？」

もえかは、明乃が薫に如何いう自分の印象を教えたのか分からなかった。

薫「まあ、それは置いといて、知名さんの配属先の艦は？」

もえか「私は、武蔵です。」

薫「えっ?!じゃ貴方がはやてちゃんのところの艦長さん!？」

薫は、はやてが乗る武蔵の艦長がもえかだと知り驚く。

もえか「はやてさん？」

薫「私と同じ貴方の艦に乗る教員よ！」

その時

はやて「薫先輩!!」

今度は、向こうからはやてがやってきた。

薫「あつ、噂をすれば・・・」

はやて「もう先に行くなんて酷いねん。」

薫「御免！御免！」

はやて「全く・・・あつ・・・貴方が知名もえかさん？」

もえか「はい」

はやて「初めまして、今日から、ウチは貴方の艦に教員として配属される八神はやてです。」

もえか「知名もえかです。」

はやて「岬ちゃんは、久しぶり！ブルーマーメイドフェスター以来やね！」

明乃「はい、お久しぶりです八神さん！」

はやてと明乃が会うのは、ブルーマーメイドフェスター以来、半年振り。

薫「岬ちゃんはねえ、私が乗る晴風の艦長なの・・・」

はやて「そうなの!？」

明乃「はい！」

はやて「薫さんのところに配属されるなんて、本当ラッキーだよ！岬ちゃんは・・・」
確かに明乃が薫のところ配属されるのは運が良いんだろう。

4人がちよつと色々話していると

薫「あっ!?・・・そろそろ行かないと荷物とか古庄教官との打ち合わせがあるんだっ
た。」

まだ時間があるが、一応、自分が乗艦の下見や荷物の整理をしないといけない。

薫「はやてちゃんもまだ、時間があるけど、早く行った方が良いよ!」

はやて「そやね!」

薫「じやまたね! 岬ちゃん、知名ちゃん!」

薫とはやては、去って行った。

もえか「何だか、面白くて、優しい人だね!・・・ミケちゃんが友達になるのも分かる。」

もえかは、明乃が薫とはやてと友達になったのは、何か縁があるのだと思った。

その後、講堂へと向かった。

その頃、ましろはクラス分けの掲示板を見て、唖然とする。

ましろ（ふ、副長：・・・わわわわ私が晴風の副長だ?!）

自分が乗る艦が武蔵ではなく、晴風だという事と、しかも副長と言う事実ましろは愕然とした。

ましろ（な、何故だ!?!：：：試験は完璧だった筈なのに：：：何故：：：）

ましろは、自分が特別入学に成ったのを知る由も無く、暫くの間ベンチに座り、その

ままシヨツクを受けていた。

講堂では、艦長と副長に艦長服と艦長帽及び飾緒が支給されていた。

艦長の生徒全員に艦長帽は配られるが、制服については中型教育艦以上の艦長に支給され、飾緒は、副長のみ支給される。

もえかは、艦長帽と同じく白い詰襟タイプの艦長服を受け取り、明乃は、艦長帽のみ受け取り。

明乃ももえかも終始笑みを浮かべていた。

横須賀女子海洋学校、敷地

講堂を後にした2人は、学校の敷地を歩いていた。

もえか「入学式が終わったら、直ぐ海洋実習なんだね……」

明乃「荷物を揃えて各クラス艦の教室に集合だつて……ああ……!!」

明乃は、道端で何かを見つけた。

明乃「さっきの猫だ！」

それは栈橋で薫が抱いていた五十六だった。

五十六「ぬっ……」

明乃「何か偉そうだな……」

もえか「先誰かが五十六って呼んでつたよ。」

明乃「五十六!？」

もえか「この辺りをうろうろしている猫みたい。」

明乃「五十六なんて、私より艦長ほいね!」

明乃は、そんな五十六の頭を撫でる。

横女の新入生A「比叡どっちだけ?」

横女の新入生B「第3埠頭だつて……」

その他の新入生達がそれぞれ自分が乗る艦に集まり始めていた。

もえか「私達も荷物もつて集合しないと……」

それを見たもえかもそろそろ自分の艦に行く事にした。

明乃「うん!……じゃあまた2週間後……海洋実習終わったらだね。」

もえか「うん……2週間なんて、あつという間だよ!」

明乃「それじゃまたね!」

2人は別れ、もえかは武蔵へ、明乃は晴風へと向かうのだった。

その光景を見て、五十六は、どちらかの方を追うのだった。

航洋直接教育艦 晴風

陽炎型航洋直接教育艦で見た目は、他の陽炎型教育艦と変わらないが、機関に試験的に高温高压缶を採用している為、速力が他の陽炎型教育艦より速い。

また、他の教育艦と同様に対水上レーダーと航海レーダーを装備している。

晴風、教員用居室

一方、薫は、晴風の教員用居室にいた。

教員用居室は、10畳ほどで、引き出し型のイスとテーブル、本棚、ベッド、クローゼットがある以外は何もない簡素な部屋である。

薫「よいしょと・・・」

荷物をベットのの上に置き部屋を見渡す。

薫「此処で・・・2週間過ごすのか・・・何だか昔を思い出すな・・・」

薫は、学生時代のそよかぜの生活を思い出す。

しかし、思い出も束の間、時計を見ると既に教室集合時間の5分前になっていた。

薫「ああもうこんな時間!?!急がないと・・・」

薫は、急いで教員用居室を後にし、教室へと向かう。

晴風、教室

教室には、既に生徒達が集まっていた。

生徒の中には、友達同士で話し合っている者や携帯をいじくる者。

しかし、この中に浮かない顔をしている生徒がいた。

ましろ（はあく）

ましろである。

ましろ（何で晴風なんだろう・・・これじゃ私、落ちこぼれだ・・・）

ましろは、今だに自分が晴風に配属された事を嘆いていた。

洋美「宗谷さん！」

ましろが嘆いていると声を掛けて来る生徒がましろの目の前にいた。

ましろ「はっ!?!」

ましろは、慌てて前を向く。

其処に居たのは、麻侖の親友で機関科の黒木洋美であった。

洋美「久しぶりだね!・・・元氣出して!・・・宗谷さんが艦長じゃないなんて、何

かの間違いだよ!・・・成績トップクラスなのに・・・」

そう言いながら洋美は、ましろの両手をとり励ます。

しかし、ましろは、黒木の最後の言葉を聞いて、口をへの字にする。

如何やら、ましろにとっては、あまり励ましには、なっていない様だ。

その時

明乃「ああ!?!」

教室の扉から明乃が入ってきた。

『!?!』

明乃「一緒に艦なんだ!」

明乃は、自分が乗艦にましろが乗っていた事に驚く。

ましろ「ついてない……」

ましろは、明乃と一緒にになった事を悔やむ。

明乃「縁があるのかな……」

栈橋での出会いや配属先の艦も一緒に、翌々縁があるのかと思った。

ましろ「絶対、ない!」

しかし、ましろは、全力で否定する。

明乃「あはは……」

否定するましろを見て、明乃は苦笑いをする。

明乃「あつ!……私、岬明乃……2人は?」

明乃は、2人に自己紹介をする。

洋美「宗谷さん、知り合い?」

洋美は、明乃がましろの親友かと思ったが

ましろ「知らない……知らないったら、知らない!!」

ましろは、断じて違うと言い張る。

明乃「宗谷さん?……宗谷ましろさん?……副長さんだよね……貴方は?」

ましろの名前を聞いて、手に持つてるクラス名簿を見て、副長だと確認し、今度は、洋美の方を向く。

洋美「私は、機関助手の・・・「黒木洋美さん？」あつ・・・うん」

機関助手と聞いて、黒木洋美だと分かった。

明乃「よろしくね！」

洋美「此方こそよろしく」

明乃「一緒にがんばろうね。」

お互いに自己紹介する。

ましろ（岬・・・明乃・・・）

そんな中、ましろは、明乃のを見て心の中で呟いた。

しばらくして、集合時間に成り、生徒達は、全員着席する。

やがて、教室に古庄が入ってきて、その後から薫が入ってきた。

ましろ（薫さん!?!）

ましろは、薫を見て驚く。

古庄「晴風クラス・・・全員揃ったか？」

そう言つて古庄は教壇に立ち。

薫は、古庄の横に付く。

そして、古庄は、晴風クラスの生徒を見渡してから

古庄「艦長！」

明乃の名前を呼ぶ。

明乃「はい！」

明乃は即答える。

ましろ（かあんちよう!?）

明乃が艦長だと聞いて驚く。

雅か、明乃が艦長だとは思わなかったのだろう。

それは置いといて

明乃「起立！」

明乃の号令でクラスの生徒達は皆立つ。

ましろは、立つと明乃の方を見た。

古庄「指導教官の古庄です・・・今日から貴方達は、高校生となつて、海洋実習に出る事になります・・・辛い事もあるでしょうが、穏やかな海は、良い艦乗りを育てないと言ふ言葉があります・・・仲間と助け合い、厳しい天候にも耐え、荒い波を越えた時に、貴方達は一段と成長してる筈です・・・また陸に戻つた時、立派な艦乗りになつた貴方達と会える事を・・・楽しみにしています。」

古庄は、自分の自己紹介と今回の海洋実習の意義を晴風クラスの生徒達に伝える。

古庄「それと貴方達の臨時教員を紹介します。」

古庄がそう言うと、生徒達は、薫に注目する。

薫は、注目されながら落ち着いて、生徒達を見ながら

薫「始めまして！……このたび臨時教員として、晴風に乗艦する事になりました・

山本薫です。」

自己紹介をする。

古庄「彼女は、2週間だけ貴方達の特別教官として、一緒に乗り込みます……分からない事がありましたら彼女に聞く様に……」

薫の紹介が終わると、古庄は、晴風クラスの生徒に次の指示を伝える。

古庄「では各自、出航準備！」

そう言つて古庄と薫は、教室を出る。

晴風、艦内廊下

古庄「では、後は頼むわよ……薫さん！」

薫「はい！」

古庄は、晴風の事を薫に任せて、次の教育艦へと行こうとした。

その時

明乃「あの！・・・古庄教官！」

後ろから、明乃が追いかけてきた。

古庄「何？・・・岬さん？」

薫「ん？」

明乃「あの、如何して私が艦長なのでしょう？」

薫「え!？」

古庄「・・・」

明乃「その・・・私は、艦長なれる程の成績では・・・」

明乃は、何故自分が艦長に選ばれたのか、成績は偶々良かっただけなのに、何故だろうか、そう言い神妙な面持ちで俯く。

それを聞いた薫も驚いていた。

雅か、いきなり明乃がそんな事を言うなんて、艦長になった事がそんなに不安なんだろうか、堆考えてしまう。

それに対して、古庄は

古庄「では、聞くけど・・・貴方の理想の艦長とは？」

明乃に自分にとって理想の艦長とは何かと問う。

明乃「えっ・・・それは・・・艦の中の・・・お父さん？・・・見たいな・・・」

あの、船の仲間は、家族なので!!」

明乃は、理想の艦長を告げ、それを聞いた古庄は

古庄「ソフツ・・・では、そうなれば良いわ・・・この晴風に相応しい艦長に・・・」

明乃にそう言つてその場を後にする。

明乃「・・・」

そして、それに対して薫も

薫「私も岬ちゃんは、成績とか関係なく、きつと優れた能力があるからだっと思うよ

！」

明乃の優れた能力を評価する。

明乃「ありがとうございますございます山本教官！」

薫「どう致しまして！」

2人が話していると後ろからもう1人。

ましろ「薫さん！」

ましろがやって来た。

薫「ましろちゃん・・・如何したの？」

ましろ「あの・・・薫さんは知ってたんですか?・・・私が晴風に配属された事を・・・」

ましろは、薫に自分が晴風の配属になった事を知っていたのか問う。

薫「うん、知ってた・・・貴方が特別入学で、この晴風に配属された事を・・・」

ましろ「特別入学・・・私が？」

薫「そう・・・実はねえ・・・」

薫は、ましろにある事を話す。

それは、ましろ自身が本当は、入試の学科の問題を回答欄一つずらして、回答した為、本来は、不合格のところ、その反対に実技が合格していた事と優れた才能を不合格にしては、余りの損失だと言う事で今回だけ晴風クラスに編入すると言う条件で合格になった事実をましろに告げる。

ましろ「わ、私が・・・フ、不合格・・・」

ましろは、自分が回答欄を一つずらして回答した事で不合格になっていた事実を告げられ、愕然とする。

薫「運が悪いんだから仕方ないわよ！・・・でも、その代わりに実技と優れた能力で折角、此処に入学できたじゃないの！」

学科では、残念だったが実技と優れた能力で合格できた事は、何よりもめでたい事だが

ましろ「良くありません!!」

薫「ん・・・」

ましろ「実力で合格したのならまだしも、そんな理由で合格できた何て、私は嬉しくなんて……」

ましろは、自分が実力で合格したのではなく、真雪の計らいで合格できたのが気に入らなかった。

薫「じゃ、辞める？……今此処で古庄教官に自主退学を申し出る事もできるんだけど……」

薫は、そんなに気に入らなければ自主退学を申し出る様、ましろに告げた。

確かに今なら、まだ入学式を終えただけで艦も出港していない。

古庄教官に自主退学を申し出れば、学校を辞める事もできる。

だが、それは、ましろ自身、ブルーマーメイドになる夢を諦める事を意味する。

ましろにそんな判断を出来るのだろうか

ましろ「わ、私は……」

続けるか、それとも自主退学して辞めるか。

ましろは、判断に戸惑う。

薫「何してるの……時間がないから早く言いなさい!!」

ましろ「わ、私は……」

言おうとした。

その時

明乃「駄目だよ!!」

『!?!』

それに待ったを掛けたのは、隣で聞いていた明乃だった。

明乃「折角合格できたのに今辞めたら、ブルーマーメイドになれなくなるんだよ…

宗谷さんは、それで良いの?」

明乃は、ましろを必死で説得する。

明乃「お願いします山本教官!…宗谷さんを退学にしないで下さい!!」

薫「…はあ…分かったわ!…岬ちゃんに免じて…これは保留にしと

きます…それで良いわねましろちゃん?」

ましろ「…はい」

薫「じゃ私は、ちよつと部屋に戻るから、後で艦橋で会おうね!」

この問題は、明乃の説得で一先ず保留になり、薫は、部屋と戻っていた。

明乃「良かったね宗谷さん退学にならなくて…」

明乃は、ましろが退学にならなくて、良かったと喜んでいたが

ましろ「余計な事をするな!」

明乃「えっ!?!」

ましろ「私は、お前なんか・・・艦長とは、認めてないからな!!」

ましろは、助けてくれた明乃に礼を言わず、逆に余計な事をするなど言われ、怒って行ってしまった。

明乃とましろ、この2人の仲は、対立的な状態だ。

横須賀基地、指揮官室

その頃、龍之介は、指揮官室で、いつもの書類仕事をしていた。

龍之介「ん！」

龍之介は、ふつと部屋の時計を見て

龍之介「もう入学式も終わって、海洋実習に出る時間か・・・」

時計を見て、既に海洋実習に出たと思っていた。

龍之介「・・・順調に進んでいるなら2週間で帰ってくる・・・何事も無ければ良いが・・・」

龍之介は、薫とはやてが無事海洋実習を終えて、帰ってくるを祈っていた。

晴風 艦橋

明乃は、艦長帽を持って、艦橋に上がる。

他にカーディガンを着て、両手にタブレット端末を持った書記の納沙幸子と砲術長の立石志摩が後ろに付いていた。

3人が艦橋に着くと

明乃「あれ!?!・・・・・五十六?」

五十六「ぬっ」

艦橋の磁気羅針盤の上に何故か五十六が殿様座りをしていた。

志摩「ね・・・・・・・・こ・・・・・・・・?」

幸子「可愛い・・・・・・・・!」

志摩と幸子は、五十六を見て、直ぐ気にいった様だ。

しかし、気に入らない奴もいた。

ましろ「うえっ!・・・・・また・・・・・・・・」

ましろである。

そして、その後ろから志摩と同じ身長で猫のパーカーを着た水雷長の西崎芽衣がやって来た。

ましろ「お前が、いえ、艦長が連れて来たんですか!?!」

ましろは、明乃が五十六を晴風に連れて来たのだと思ったが

明乃「勝手に乗り込んだみたい。」

如何やら、いつの間にか、この晴風に乗り込んだ様だ。

そんな中

カーン！、カーン！

出港を知らせる鐘が鳴り響き。

明乃「あっ!! 出港用意しないと……」

出港の鐘が鳴り響き、明乃は、急いで出港準備に入ろうとしたが

ましろ「この猫、如何するんだ!?!」

ましろは、指さして、五十六の処遇を如何するか問う。

幸子「もう降ろせないですし、鼠を退治してくれるから、良いんじゃないんですか？」
確かにタラップを降ろされた今、五十六を降ろす事は出来ない。

なら、このまま一緒に連れて行く事にましろ以外の5人は、賛成しているが

ましろ「そんな！猫と一緒に航海するのか？」

如何してもましろは、五十六と一緒に連れて行く事に反対していた。

薫「如何したの?……出港の鐘は、もう鳴ってるわよ!」

五十六の処遇を話していると薫が入って来た。

明乃「あつ、教官!」

薫は、艦橋に入ってきて、何故出港準備をしないのか、辺りを見回すと

薫「あっ!?!」

磁気羅針盤の上の五十六に目が合う。

薫「何で貴方、此処に居るの？」

明乃「勝手に乗り込んだみたいなんです教官！」

薫「あらまあ、この子つたら・・・」

薫は、五十六を抱く。

ましろ「如何しましょうか山本教官・・・この猫降ろした方が良いでしょう？」

ましろは、薫に五十六の処遇を問う。

薫なら、自分と同じ反対すると思っていたが

薫「そうね・・・貴方、お名前は？」

明乃「五十六です。」

薫「では、五十六・・・晴風への乗船を特別に許可します。」

薫は、五十六の乗船を自分の判断で正式に許可した。

ましろ「えっ!？」

明乃「ありがとうございます教官!!」

ましろ「そんな!?!・・・教官まで・・・」

薫が下した五十六の処遇に不満を言うが

明乃「じゃ、五十六は、大艦長という事で！」

あつという間に五十六は、明乃達の上官になる。

ましろ「しかも私より階級が上？」

ましろは、自分より五十六の方が階級が上に成った事で少し落ち込む

明乃「あっ！・・・そうだ・・・改めまして、艦長の岬明乃です！・・・よろしくね！」

明乃は、ましろに改めて自己紹介をする。

ましろも気を取り直して

ましろ「副長の宗谷ましろだ。」

自己紹介をする。

そして、幸子もタブレットを操作しながら

幸子「私は書記の納沙幸子です。」

自己紹介をする。

芽衣も

芽衣「水雷委員の西崎芽衣よ！」

そこまで言ったところで

鈴「すみませくん・・・遅れました・・・御免なさい!!」

右舷デッキの方から知床 鈴が走りながら艦橋に入ってきて

鈴「はあ、はあ・・・わ、私・・・こ、航海長の知床鈴です。」

息吐きしながら自己紹介をする。

鈴「あ、貴方は？」

自己紹介後、鈴は、前に居た志摩に名前を聞こうとするが

志摩「ほ……ほ……」

自分の役職と名前を言おうとしているが上手く言葉にできない。

明乃「砲術委員の立石志麻さんだよね？」

志摩が答えられないので明乃は、ガバーした。

志摩「うん！」

志摩は、如何やら極度の人見知りらしい。

薫「私は、臨時教員の山本 薫です……何か困った時は、いつでも相談に乗ります。」

ある程度の紹介が終わったところで

薫「では、艦長……出航の指示を……」

明乃「はい、よし……じゃ、皆……定位置に着いて……出航準備！」

明乃は、出港準備の命令を出す。

明乃「前部員描鎖詰め方……出港用意……錨を上げ……」

艦首で錨が上げられてゆくのを確認した水測員の万里小路 楓がラツパを吹くが余り上手と言えるようなレベルのものではなかった。

薫（これは、練習が必要ね！）

薫は、心中でそんな事を考えていた。

前甲板でラッパに気を取られていた主計長の等松美海が青旗を上げて用意よしも知らせる。

明乃「両舷前進微速150度ヨーソロー……晴風出港！」

出港の命令が下り、鈴がテレグラフを操作し、針を前進微速に合わせる。

晴風 機関室

麻命「前進微速！」

艦橋のテレグラフからの指示を得て、機関長の柳原麻命は、前進微速の命令を出し麗緒「蒸気タービン艦って、確かバルブを……」

機関員の若狭麗緒と伊勢桜良がバルブを操作する。

やがて機関が始動し、晴風は出港する。

出港した事を確認したところで

明乃「航海長操艦！」

明乃は、鈴に艦の操艦を任せる。

『航海長操艦!!』

その場にいる全員の複勝を確認し、更に指示を出す。

明乃「両舷前進原速、赤黒なし！……進路150度」

鈴「頂きました、航海長・・・両舷前進原速赤黒なし、進路150度」

明乃の指示を復唱しその通りに操艦を始める鈴。

明乃「あっ！」

そんな中、明乃は、晴風の横を航行する武蔵の艦橋に手を振っている女性2人の存在に気づく。

明乃「もかちゃん！」

1人は、武蔵艦長の知名もえか。

そして、もう1人は

薫「はやてちゃん！」

武蔵の臨時教員の八神はやてだった。

明乃「もかちゃん!!」

薫「はやてちゃん!!」

それに気づいた明乃と薫はもえかとはやてに向かって手を振り返した。

こうして、晴風以下11隻の教育艦は、海洋実習へと出港した。

目指すは、西之島新島沖

だが、これが1ヶ月にも及んだ事件の幕開けになるとは、誰も想像していなかった。

第3章 視察

4月6日

日本近海

横須賀女子海洋学校を出港した晴風。

途中、他の教育艦と別れ、集合地点である西之島新島沖に向けて航行中だった。

今のところ艦内に異常も無く、機関も順調に作動している。

後は、生徒達が上手くいっているかだけである。

其処で、薫は、生徒達の不自由がないかと親睦を深める事を含め、晴風の巡回視察をする事にした。

晴風、射撃指揮所

晴風の射撃指揮所は、艦橋の上であり、そのタイプは、94式方位盤照準装置である。

薫は、先ず晴風の射撃指揮所を訪れていた。

扉を開け中に入ると、中は意外に狭く、照準用の双眼鏡が何ヶ所に置かれていた。

光「あつ教官だ!」

薫が入って来て、最初に声を上げたのは、砲術員の小笠原 光である。

薫「こんにちは、小笠原さん！」

薫は、光に挨拶をする。

そして、光の後ろに同じ砲術員の武田美千留と日置順子がいた。

薫「えくと、貴方が武田美千留さんね！」

美千留「はい！」

薫「そして、貴方が日置順子さん？」

順子「はい、教官！」

薫「狭い指揮所の生活はどお、窮屈とかない？」

狭い指揮所の生活で不自由がないか問うと

美千留「いえ大丈夫です・・唯・・」

順子「主砲を早くバキユンと撃ちたい!!」

不自由はない様だが、順子は早く、主砲を撃ちたいと駄々を捏ねていた。

薫「ぎ、残念だけど・・しばらくは、主砲を撃つ事はないわよ！」

順子「ええ、そんな・・主砲をバキユンと撃ちたかつたのに・・」

しばらく撃つ事がないと言われ、順子は残念がる。

薫「あつ、でも6日後の合同演習では、撃てるかもしれないよ！」

順子「本当ですか教官!？」

6日後にある艦隊合同演習を聞いて順子は、気を取り直す。

美千留「本当ですか？」

光「本当に撃てるんですか？」

それに釣られて、他の2人も反応する。

如何やら、主砲を撃ちたいのは、順子だけでは、無かった様だ。

光と美千留も内心では撃ちたかった様だ。

薫「ほ、本当よ……多分……」

3人の勢いに薫は、指揮所の生活に不自由は無く、むしろ威勢が良い見たいと思った。

晴風、海図室

指揮所を後にした薫は、続いて、海図室を訪れる。

此処は、航海に必要な海図を保管しており、航路の確認や伝達用の穴から艦橋に必要な海図を渡す部屋でもある。

薫「勝田さん居る？」

聡子「ん!?・教官ぞな！」

薫「勝田さん、今のところ航路に異常ない？」

薫は、航海員の勝田聡子に航路に異常がないか確認する。

聡子「今のところ異常はないぞな！」

如何やら、今のところ航路に異常はない様だ。

薫「そう・・・勝田さん今のところ体調とか大丈夫？」

聡子「大丈夫ぞな！・・・初の海洋実習で、もうウキウキぞな！」

薫「そう・・・元気が有って良いわね！」

晴風、無線室

続いて隣の無線室を訪れる。

此処は、晴風の中で常に状況が分かる部屋である。

薫「八木さん！」

鶯「あつ、教官!？」

薫「学校及び古庄教官から何か連絡は・・・」

薫は、電信員の八木 鶯に学校及び古庄教官から何か連絡が入ってないか確認する。

鶯「いえ、今のところ何も・・・」

薫「そう・・・ところで八木さんは、確か巫女さんをやっていたわよね？」

連絡がないと聞いた後、薫は、ある事を鶯に聞く。

鶯「はい・・・」

薫「もしかして諏訪神社で巫女さんをやっていなかった。」

鶯「そうですね・・・」

薫「やつぱり!?!?……初詣に行った時、貴方と同じ顔をした巫女さんを見かけたから、もしやと思ったけど……此処で会うなんて、偶然ね!」

鵜「そうですね……」

実は、薫も龍之介と真霜が行った後に次郎達と諏訪神社に初詣をしに訪れた時、巫女姿の鵜を偶然目撃したので、もしやと思ったのだ。

薫は、鵜が諏訪神社で巫女さんをやっていた事を確かめ納得する。

晴風、電探室

そして、電探室を訪れる。

此処は、先の無線室と同じで常に状況が分かる部屋である。

薫「宇田さん!」

慧「ああ、教官!?!」

薫「レーダーに近づいてくる艦影はない?」

電測員の宇田 慧に晴風に近づいてくる艦船はないか確認する。

慧「いえ、今のところ接近する艦影はありません。」

薫「そう……ところで宇田さんは、八木さんとは、友達だったわよね?」

慧「はい、幼馴染です。」

薫「じゃ宇田さんも巫女さん?」

薫は、慧が鶴と友達と知り、もしや同じ巫女さんだと思ったが

慧「いえ、私は、巫女さんではなく、唯の幼馴染で・・・」

薫「な・ん・だ、八木さんと知り合いだから、てつきり巫女さんだと思った。」

慧が鶴と同じ巫女さんではない事を聞いて残念がる。

慧「はあ・・はあ・・ところで教官！」

改めて、慧は、薫にある事を聞く

薫「何、宇田さん？」

慧「教官って・・・胸が大きいですね！」

薫「えっ？」

慧に自分の胸の大きさを聞かれて動揺する。

薫「そ、それは、極秘です!?!・・貴方には言えません!!」

詳しい事は極秘と言って、自分の胸を手で隠す。

如何やら、慧は、はやてと同じ女性の胸に興味を懐いている様だ。

晴風、見張り台

薫「よつと」

続いて、晴風の見張り台に行く為、薫は、晴風のマストを登っていた。

晴風の見張り台は、マストの上方にあり、薫は、巧みにマストを登る。

薫「野間さん！」

マストの上方の見張り台に到着し、ドアを開けて、中の見張員である野間マチコに声を掛ける。

マチコ「ああ、教官！」

薫「見張りは、大丈夫？」

マチコ「今のところは、何も……」

薫「そう……御免ね野間さん！……一人での見張り仕事大変でしょ……後で航海科の誰かを代わりに呼びましょうか？」

薫は、マチコが見張り台を一人で切り盛りしているから大変だと思い、航海科の誰かを代わり回そうと思ったが。

マチコ「いえ大丈夫です！……私は、こういう仕事は慣れてますので……」

如何やらマチコは、不自由なく見張りの仕事にやりがいを覚えた様だ。

薫「なら、良いけど……何か有ったら遠慮なく申しでてね！」

マチコ「すいません教官、何から何まで……」

薫「何言ってるの……生徒の安全を守る事が私の役目なんだから……」

晴風、工作室

マストを降り、艦首部分にある晴風の工作室を訪れる。

此処は、主に損傷を負った時に応急員が作業する場所でもある。

薫「和住さん！青木さん！」

媛萌「ああ!？」

百々「教官ツス!？」

工作室には、応急員でジャッジ姿の和住媛萌と漫画家の帽子を被った青木百々がいた。

薫「今のところ以上はない・・・あれ!？」

薫は、工作室の周りを見ていると台の上に何故か漫画の原稿とボトルシップ用のボトルが有った。

薫「成程!？」

如何やら航行中何もする事が無いので、趣味で遊んでいた様だ。

それを見て、媛萌と百々が

媛萌「あの・・・実は・・・」

百々「教官・・・」

薫「趣味も良いけど、ホドホドにね!？」

2人は、薫に怒られると思ったが、薫は、怒るところか、見て見ぬ振りをして、工作室を後にした。

百々「助かったツス！」

媛萌「教官、心が広くって良かった。」

2人は、薫に怒られなくて、ホツとする。

晴風、主計室

続いて、主計室を訪れる。

此処は、艦内の庶務、経理をする部屋である。

薫「等松さん居る？」

美海「あつ教官!？」

中に入ると主計長の等松美海が荷物の山の整理をしていた。

薫「こんな荷物の山、如何したの？」

美海「いえ、調度購買に出す物品の整理をしていたところです。」

如何やら、購買に出す物品の整理をしていた様だ。

晴風には、乗員の為に売店が設けられている。

それを販売や管理しているのが主計長の美海であり、その準備をしていたのだ。

薫「こんな山を整理するなんて大変でしょ・・・手伝おうか？」

美海「いえ、大丈夫です。」

薫「無理言わないの手伝ってあげるわ！」

美海「ありがとうございます教官！」

薫は、美海の物品の整理を手伝う事にした。

30分後

物品の整理が大部分が終わり

美海「ありがとうございます教官！」

美海は、薫に感謝をする。

薫は、につこりと笑うが、購買の壁に何か貼つてあるのに気づき見ると

マッチの写真買い取ります

と書いてあった。

薫（こんなのを貼つてるなんて、等松さんは、野間さんに興味を抱いてるのかな？）

薫は、美海がマチコに興味を抱いてるのだと思つた。

晴風、水測室

荷物整理を終え、続いて艦底にある水測室を訪れる。

此処は、艦底に設置されているソナーを使って、潜水艦の探査を行う部屋である。

薫「万里小路さん！」

楓「あら教官ごきげんよう。」

薫の挨拶に社交的な挨拶を返すのは、水測員の万里小路 楓。

薫「万里小路さん、何か水中に異常とかない？」

楓「いいえ、今のところ何もございせんわ」

薫「そう……ところで万里小路さんって、ひよつとして何処かのお金持ちのお嬢様？」

楓「あら、よく分かりましたわね。」

薫「いや、会話の中に社交的な言葉が出ていたから、もしやと思つて……」

楓「お気づきの通り、わたくし万里小路 楓は、万里小路重工のご令嬢です。」

薫「万里小路重工って、あの財閥の万里小路重工!？」

楓「はい」

薫は、楓が万里小路重工の令嬢だと知り驚く。

薫「そんな財閥のお嬢様が何故、海洋学校に？」

何故、万里小路重工の令嬢の楓が海洋学校に入学したのか理由を問う。

楓「実は、わたくし……強いて言うなら……音楽家は、旅をするものなのです。」

薫「？」

楓の言葉に薫の頭は？ してしまふ。

薫「つまり万里小路さんは、音楽家として旅をしたかったから海洋学校に入学したつて事？」

そして、何とか理解する。

楓「はい、ご想像の通りですわ」

薫「なら、別に海洋学校に入らなくても普通に音楽学校に入れば良かったんじゃない？」

確かに音楽家として旅をしたいなら普通に音楽学校に入れば、何所の国のコンクールに呼ばれるのに

楓「確かにそうですけど、わたくしは、海を渡りながら音楽を学びたかったので……如何やら、海を渡りながら音楽を学びたいかった様だ。

薫「それで、海洋学校に入学したんだ。」

楓「はい」

薫「聞くけど、音楽は、どのくらい才能あるの？」

薫は、楓がどの位、音楽の才能が有るか聞く。

楓「ある程度の楽器は、幼い頃に習っておりまして、多少、腕に自信もあるんですが……管楽器だけはどうにも不得手なようで……」

薫「成程！……つまりラッパや笛が上手く吹けないのね！」

楓「はい、その通りです。」

ピアノやヴァイオリン、お琴に三味線など、ある程度は、才能が有るが、管楽器、つ

まり笛類が苦手の様だ。

薫「道理で出港の時、気が抜けるラツパが聞こえたけど、あれ万里小路さんが吹いてたんだよね！」

薫は、楓が出港の時、気が抜けるラツパを吹いていた事を思い出す。

楓「気が抜けますでしようか……」

薫の言葉を聞いて、楓は、暗くなる。

薫「ああ、御免ね万里小路さん、別に気が抜けてないから、大丈夫よ……唯、少し練習が必要だけど……」

楓「やはりお口の修業が足りませんわね……」

薫「大丈夫！……練習すれば吹けるわよ……万里小路さんなら……」

晴風、炊飯所兼食堂室

水測室を後にし、続いて艦橋の下に有る炊飯所兼食堂室を訪れる。

此処は、乗員の食事を養う事と晴風乗員の憩いの場でもある。

薫「こんにちは!!」

美甘「あつ教官!?!」

薫が入ると給養員及び砲水雷運用員の伊良子美甘と同じ給養員及び水雷運用員の杵崎ほまれとその妹のあかねが食事の仕度をしていた。

薫「調子はどお、伊良子さん！・・・何か困ってる事ない？」

薫は、美甘に食事の支度で何か困っていないか問うが

美甘「いえ何も・・・」

如何やら何も不足はない様だ。

薫「そう・・・ん？」

薫は、炊飯所のキッチン台の上に作りかけの料理が置いて有るのに気づく。

薫「美味しそうね！何作ってるの？」

美甘「ああそれ、実は、初航海の記念として、皆に振舞おうとお菓子を作っていたんです。」

薫「お菓子？」

ほまれ「杵崎屋特性!!」

あかね「落花生だんご!!」

如何やら、3人は、初航海の記念として、晴風乗員達の為に杵崎屋特性落花生だんごを作っていた様だ。

薫「だんごか・・・どっちかって言う私、どら焼きが食べたいな・・・」

薫は、だんごよりどら焼きが食べたかった。

それを言う

美甘「じゃ教官だけ杵崎屋特性どら焼きを作ろう。」

美甘が突然、薫の為に杵崎屋特性どら焼きを作ると言い出した。

『作ろう！』

それに釣られて、ほまれ、あかねも言い出す。

薫「い、良いわよ！……私の為に其処までしなくても……」

ほまれ「そうですね……残念！」

いらなと言われ3人は、残念がる。

薫「あつ、でも時々で良いから、その時に作ってくれと嬉しいな……」

あかね「じゃ、その時に作って良いですか？」

薫「ええ」

『やった!!』

3人は、やったと嬉しがる。

晴風、一番魚雷発射管及び二番魚雷発射管

続いて、晴風の魚雷発射管へと向かう。

晴風の最大の武器、魚雷発射管は、中央に2基置かれている。

薫が来ると2基の発射管の間で水雷員の松永理都子と姫路果代子がお互いに話していた。

薫「松永さん！姫路さん！」

理都子「あつ教官だ!？」

果代子「教官・・・」

薫「発射管に異常はない？」

理都子「発射管は異常なくし！」

果代子「まあ魚雷が一本しか無いのが寂しいけど・・・」

発射管は両方とも異常はなく、一番魚雷発射管に訓練用の魚雷が一本装備されてるの

み

薫「まあ、確かに魚雷が一本しか無いのは仕方がないわ姫路さん・・・でも集合地点

に着いたら補給できるから・・・」

理都子「本当ですか？」

薫「本当よ！」

理都子「やった!!・・・かよちゃん聞いた？」

果代子「うん、聞いたよりっちゃん！」

補給できると聞いて、2人は、嬉しがる。

晴風、機関室

続いて、晴風の心臓部とも言える機関室を訪れる。

薫「こんにちは!!」

麗緒「あつ教官だ!」

声を上げたのは、機関員四人衆の1人、若狭麗緒。

その後ろに伊勢桜良、駿河留奈、広田 空の3人もいた。
そして

麻命「おつ教官、何か用でえい?」

機関長の柳原麻命とその助手の黒木洋美もいた。

薫「ちよつと艦内視察を・・・柳原さん、機関に異常はない?」

麻命「機関は順調、何所も故障はねでえい!!」

薫「そうお・・・ところで皆、体調はどお・・・狭い艦内での生活に何か不自由ない?」

洋美「いいえ、不自由は、別に・・・唯・・・」

薫「唯?」

『熱い!!』

薫「えっ!?!」

空「熱い!」

留奈「熱いよ!!」

麗緒「汗かいた!!」

桜良「あつつ……い……」

如何やら、機関から発する熱で機関室は、蒸し暑さに成っていた。

その為、4人は、体中が汗だらけに成り、駄々をこねていた。

麻命「何でえ……何でえ……」

麗緒「何だはないよ機関長!」

空「機関長、熱くないんですか?」

麻命「これぐらいの暑さで江戸っ子は、勤まらねえでえい!!」

空「意味分からない……」

桜良「暑くて、もう汗だらけ……」

留奈「も……お、駄目……」

薫「……分かったわよ!!……そんなに駄目なら水着に着替えて、作業しなさい

!!」

駄々をこねる4人に薫は、水着での作業を許可した。

『やった!!』

水着での作業を許され、4人は、早速、学校指定の水着に着替える。

洋美「すいません教官・・・我ままを聞いて頂いて・・・」

薫「良いのよ!・・・機関仕事だから熱いのは仕方ないわ!」

麻侖「たぐどいつもこいつもすつとこどつこいだな・・・」

薫「そう言う柳原さんは、水着に着替えなの?」

麻侖「ふん、こんな暑さ、へっちゃらでえい・・・」

薫「無理しちや駄目だよ柳原さん!・・・無理だったら水着に着替えなさいよ!」

洋美「マロン!・・・教官がああ言ってるんだから、そおしたらどお?」

麻侖「クロちゃんと言うなら・・・」

麻侖も最後まで頑固だったが、洋美に言われ結局、水着に着替える。

薫は、静かにその場を去る。

洋美「教官!!」

ドアを出て、機関室を後にした時、洋美が待ったを掛けてきた。

薫「何、黒木さん?」

洋美「一つお聞きしたいんですけど・・・」

薫「ん?」

洋美「何故、宗谷さんが艦長じゃないんですか?」

薫「あつ!」

洋美「成績も優秀なのに何故、艦長じゃ……」

洋美は、何故ましろが艦長じゃないのか、薫に確かめる。

それに対して

薫「それは、貴方が考える事じゃないわ！」

洋美「でも」

薫「大丈夫よ黒木さん！……あの子なら、自分が副長になった理由も分かる筈よ！」

薫は、ましろ自身、副長になった理由も分かる日が来ると信じていた。

洋美「……」

それに対して、洋美は、何も言えなかった。

晴風、医務室

機関室を後にし、最後の視察場所、医務室を訪れる。

薫「鏑木さん居る？」

美波「……教官」

薫が医務室に入ると医務室の机に座る衛生長の鏑木美波が居た。

薫「鏑木さん！……誰か怪我人とか居ない？」

美波「今のところ誰もいない。」

薫「そうお……ところで鏑木さんは、何か困った事とかない？」

美波「……ない」

薫「何かあるなら、遠慮なく言つてね！」

美波「感謝する。」

晴風、艦橋

全ての視察を終え、薫は、艦橋へと戻る。

艦橋に戻ると艦橋後部の左右に航海管制員の山下秀子と内田まゆみが見張りに付いていた。

そして、艦橋中枢に艦長の岬 明乃、副長の宗谷ましろ、書記の納沙幸子、水雷長の西崎芽依、砲術長の立石志摩、航海長の知床 鈴が居る。

薫「状況は、艦長！」

明乃「あつ教官!?!」

各部署に異常はなく。

晴風は、予定通りに進んでいる。

その筈だったが

ド・・・ン・・・!!

ましろ「な、何だ？」

薫「何事？」

突然のドーンと言う音に機関が停止してしまった。

明乃「機関室!!・・・マロンちゃん、如何したの？」

麻命『艦長、機関故障でえ!!』

薫「故障!?!・・・先まで異常は無かったんじやないの？」

明乃「修理にどのくらい掛かるの？」

麻命『詳しく調べねえと分かんねえ・・・』

幸子「万事休すですね！」

鈴「感心してる場合じゃないよココちゃん!!・・・機関が動かなければ航行できない

よ・・・!!」

薫「仕方がない・・・機関の修理まで、此処で足止めね！」

機関の故障の為、晴風は止む無く停止せざるおえなくなった。

第4章 世にも奇妙な晴風の夜

4月6日

日本近海

横須賀を出つて、集合地点の西之島新島沖を目指す晴風。

だが、途中機関が不具合が発生し、修理の為、立ち往生を余儀なくされた。

雅に晴風は、速力は速いが、故障が多いのが欠点である。

夕方には、修理は保々完了し、集合地点の西之島新島沖に急いで向かう。

晴風、艦橋

航行中、艦橋では、書記の幸子が怪談話をしていた。

幸子「これは、とある大型戦艦で起きた本当にあつた事なんです……」

そう言つて幸子は声のトーンをスツと落とした。

幸子「その大型戦艦は係留中に突然、火薬庫が爆発して沈没してしまいました……火薬庫にあつた三式弾や、他の艦がその地点に落としてしまつていた魚雷が原因とも言われたんですが、調査の結果、それらは否定され、真の原因はついぞわからないまま……けれど、その予兆だつたんじゃないかって言われるものはあつて……艦長も含めた複

数名が、事故が起こる前日の夜にそれを目撃していたんです。」

芽衣「何？何を見たの？もったいじゃないでよ！」

芽衣がそわそわとした様子で先を促し、幸子がこくりと頷く。

夜の海を航行する晴風。

その艦橋にいる面々は、書記の話を聞き逃すまいと彼女の口元に視線を集中させていた。

幸子「その大型戦艦の第3砲塔の上でね、2人の女性が争っていたんだって」

鈴「2人の……女性……」

鈴がゴクリと生唾を飲み込む。

幸子「そう……1人は、白い衣服に赤い袴の巫女のように……もう1人は……般若の様な形相の血まみれの女ッ」

「ヒッ」

今の小さな悲鳴は誰のものだろうか。

艦橋内の空気が数度下がったような気がした。

幸子「『おい、あれは何だ!?』『分かりません！砲塔との比較から3メートルはある様に見えます……少なくとも人間とは思えない……船を守護する船霊というやつでしようか?』『1人が船霊だしたらもう1人は何だというんだ?』『それは……』」

ましろ「いい加減にしろ!!」

幸子「何ですか副長、良いところなのに・・・」

ふくれ面を向けてくる幸子。

ましろは、それに怖じる事なく続けた。

ましろ「今は、航行中だぞ?・・・唯でさえ遅れ気味だというのに、いつまでこんなくだらない雑談を続ける気だ。」

幸子「そんなこと言って副長、実は怖くなつてきちやつたんじやないですか?」

ましろ「そ、そういう事じやなくてだなつ。」

明乃「まあまあ副長、落ちつこう?」

此処最近、ましろの不機嫌の原因を一手に引き受けるかの様に入る明乃。

明乃「別に航行中っていつても何か問題が起こつてる訳じやないし、良いんじゃないかな・・・こういう話が出てくるのも、皆に余裕がでつてきた証拠だよ!」

ましろ「しかし艦長、艦橋だけではなく艦全体ですよ!?!・・・あつちでもこつちでも怪談怪談!・・・縁起が悪いにも程があります!・・・教官もそうでしょう?」

薫「私は、別に楽しいけど・・・」

ましろ「教官まで何言ってるんですか!?!」

幸子「やつぱり怖いんだ!!」

キツと幸子を睨みつけてから、コホンと一つ咳払い。

ましろ「もちろん、私はそう言ったオカルトの類は一切信じてはいませんが……」
薫「まあまあ、ほら、そろそろ就寝時間だよ！……当直以外は各自の部屋に、ね！」
晴風、副長室

ましろ「全く……たるんでいるとしか思えない……」

ましろは、苛立ちの言葉をブツブツと呟きながら、扉を閉めベッドに潜り込む。

ましろの自室であるこの部屋は本来2人部屋なのだが、幸いにもましろ1人で使うことができています。

質素で殺風景ではあるが、ましろ1人の小さな城の様なものだ。

ましろ、1人の

ましろ「……ッ!？」

その時、コオオオツツという感じの音がして、ましろはビクリと肩をすくめた。

ましろ「か、風が随分強い様だな……うん」

ましろは、胸に手を当てて、自分の言葉に深く頷く。

ましろ「……別に、この程度の風なら、航海に問題はないだろう……」

ましろは、お気に入りの鮫のぬいぐるみをたぐり寄せ、それをぎゅつと抱きしめた。

ましろ「だ、大丈夫だよな、ブルース！……お前もいるもんな……そう、私は

1人じゃない、1人じゃない……」

コオオオオツ!

ましろ「ヒツ!」

何時もなら何でも無い筈の風の音に、小さな悲鳴を上げる。

ましろ「落ちつけましろ、落ちつこう……もう落ちつこう……もう晴風に乗れ込んで何日目になるというんだ!!……ずっとこの部屋で1人の夜を過ごしてきたじゃないか?……いや、違う……ブルースもいる……私は、1人じゃない……大丈夫だ!……何も問題は……」

コオオオオツ!

ましろ「……ツ!!」

思わず飛び起き、ましろは自室の扉を開けた。

ましろ（誰でもいい……誰かいる所へ、早く。）

晴風、艦橋

艦橋にあがると幸子と芽衣の2人がいて、きよとんとした様子で此方に目を向けた。

ましろ（よりによって、この2人が当直か……）

幸子「あれ、副長?寝たんじゃなかったんですか?」

ましろ「ああ、ちよつと……」

曖昧な返事だったが幸子はそれほど興味はなかつたらしく、小さくあ頷いてから芽衣の方に向き直った。

幸子「え．．と、何処まで話したっけ？」

芽衣「船釣りをしている間に居眠りをして、つてとこ．．それで？それで？」

何の話をしているのだろうか。

芽衣は、やけにワクワクした様子で幸子に続きを促している。

幸子「そうそうそう．．何時の間にか居眠りをしちやつてたその男は、目を覚ましてすっかり日が暮れちやつてることに気がつくの．．それで船を借りる時に、この辺りの海じゃ決して夜釣りはしちやいけないと言われていた事を思い出して．．『よる釣りをすると如何なるんだい？』『そりやあアンタ、呼ばれるんですよ！．．おい、おい、つてね．．でも万が一呼ばれたとしてもそれに応えちやいけない。』
やっぱりまた怪談だった。

ましろ「あ、あー、話の最中に失礼した．．私は、少し艦内の見回りをしてから寝る事にする。」

幸子「はい、お疲れさまです。」

芽衣「お疲れ．．」

ましろは、逃げ出す様に艦橋から離れて壁にもたれる。

晴風、通路

ましろ「ふう……逃げる為の方便だったけど、折角だから見回りをしてから寝るか……」

態々口に出してから狭い通路を歩き出す。

必要最低限の常夜灯だけが灯る通路は、暗闇ではないものの、決して雰囲気の良いものではない。

若干見える分、見えない暗がりから何かが這い出てきそうな、そんな恐怖。

いや、その暗がりこそ、そんな恐怖そのものが息を潜めていて、取って喰らわんとましろを睨めつけているのではないだろうか

ましろ「ツ!?!」

その時、ましろは、何かを感じて歩みを止めた。

ゴクリと唾を呑みこんでから、感じたその気配に意識を集中する。

——ギシッ。

音がした。

先程からの強い風の影響だろうか

だといいな。

そうに違いない。

不審な音などなかった。

「……おーい!!」

ましろ「ヒッ!?!」

今、確かに「おーい」と呼ぶ声が聞こえた。

さつき幸子が何かそんな話をしていなかったか!?

『でも万が一呼ばれたとしてもそれに応えちゃいけない』

応えると如何なるんだ。

ちやんと最後まで話しを聞いておいた方がよかったのか

何か、何か対処策はないのか

「……おーい!!」

また聞こえた。

少し抑えた様な女の声で、何か、足音も聞こえた様な。

明乃「あ、副長!?!」

ましろ「ヒッ……!?!」

ましろが最大限に見開いた瞳で見た物は、晴風艦長・岬明乃その人だった。

明乃「如何したの?寝たんじゃなかったの?」

ましろ「か、艦長こそ何を……何か今、呼ぶ様な声が聞こえましたが……」

ドツドツ・・・

激しく高鳴る？ 動を何とか抑えつけて、冷静さを装う。

明乃「あ、あはは・・・え、えっと・・・何か物音が聞こえたから誰かいるのかなーって思ってた声かけたんだけど、宗谷さんだったんだね？・・・あはは・・・」

ぎこちない笑いでましろに話かける明乃。

ましろ「そうでしたか？」

ましろは思わず満面の笑みを浮かべる。

ましろ「艦長！・・・私は、艦内を一通り見回ってから寝ようと思っていたのですが、もし寝つけないのでしたら、艦長も一緒にいかがですか？」

明乃「え!？」

明乃はきよんととしてましろを見た。

ましろ（何かヘンな事を言ったか？・・・いや、確かに私の普段の言動からしたらフレンドリー過ぎるかも知れない・・・いやいやしかし、小動物の様に怯える艦長を副長である私が支えねば誰が支えるというのだろうか？・・・可笑しな事などにもない・・・不審な行動など私は、一切していない!）

と、思ったかったが一応確認する事にした。

ましろ「何か変でしたか？」

明乃「ううん、ううん・・・全然ヘンじゃないよ!・・・うんつ、宗谷さん一緒に見回りしよつ!」

明乃は心底嬉しそうな表情でましろの手を取り、ぶんぶんと振ってきた。

やはり変ではなかった。

そうとも。

ましろが変であろう筈がない。

そして、明乃もやはり1人で心細かったのだと確信が持てた。

ましろ「・・・ところで艦長、何時まで私の手を握っているつもりで?」

明乃「折角だし、このまま手繋いで行こうよ!」

ましろ「なっ・・・」

ましろは慌てて明乃の手を振り解く。

ましろ「お、お断りです!!：規定外の見回りとはいえ、遊びではないんですから・・・」

明乃「え・・・」

ましろ（確かに、手を繋いでいた方が怖くないと思うけれども!・・・艦長のその気持ちは、良く分かるけれども!・・・しかし、私も副長として、晴風の規律を守らなければいけない立場・・・公私の別はきちんとなつけないければ・・・だがしかし、艦長が如何してもそうしないと不安だというのなら、今だけは、手を繋いでおいても・・・）

明乃「ま、しょうがないか・・・それじゃ行こう。」

ましろ「え」

明乃「ん？」

ましろ「いえ、行きましよう。」

明乃「うん！」

ましろ（もう少し粘ってくれてもよかったのに・・・）

ましろ、明乃と2人で艦内をつかず離れず歩いていく。

艦長と副長という役職柄、艦橋で一緒にいる事は多いが、それ以外でこうして2人でいる事は実はそんなに多くはない。

もしかしたら、入学式のあの日以来な気も

ましろ「むう！」

明乃「如何かした？」

ましろ「いえ、何でも・・・」

海に落とされた事を思い出して、つい苛立った声を漏らしてしまった。

やはり誰かと一緒に居る事で心に余裕ができてきたのだろう。

さつきまでは、こんな風に昔の事を思い返したり、その事で苛立ったりするような余裕なんてなかった。

あんなに気になっていた強い風の音も、今では単なる外の音でしかない。

明乃「でも、良かった。」

ましろ「はい？」

明乃「私なんかが艦長になっちゃって、最初は如何なっちゃうのかって不安も有ったんだけどね……各科の皆、結構仲よくやってくれてるみたいで安心したな……って……」

ましろ（そういう不安なら、私は、今だって充分不安だ！……果たして、この脳天気な艦長の下で私は、ちゃんと副長としての職務を遂行できるのだろうか？……だいたい今だって、初めての海洋実習の集合に間に合うかどうか怪しい状況なんだ。）

明乃「宗谷さんはまだ不安？」

ましろ「……まあ、不安といえば不安ですね！」

言つてしまつてからハツとする。

明乃「大丈夫だよ！……晴風の皆はきつと仲よくやっついていける……だって、皆もう家族なんだから!!」

ましろ「家族、ですか？」

如何やら明乃は、ましろの不安が、乗員の仲について言っているのだと思つたらしい。訂正するまでもないかと思つたその時、通路の向こうで何か言い争う様な声が聞こえてきた。

見れば通路の先のドアが僅かに開いていて、中から室内の明かりが漏れている。

明乃「何だろ？あそこ烹炊室だよね？」

まして明乃は頷きあい、そのドアの隙間から中の様子を伺った。

晴風、炊飯所兼食堂室

あかね「絶対有ったんだって！私ちやんと此処に置いたもん！」

ほまれ「そんなこと言っても、無い物は無いじゃない！」

美甘「待つて待つて、ほっちゃんも落ちついてば！」

ほまれとあかねが言い争っているのを美甘が諫めている、という構図の様だ。

まして「……仲よくやっついていないみたいですが？」

明乃「そんなこと言ってる場合じゃないよ！」

明乃は一瞬ましてと視線を合わせて頷くと、ドアに手をかける。

ギギギギイと気味の悪い音を立てて開くドア。

烹炊室にいた3人は、驚いた様子で此方に目を向けた。

明乃「こんな時間に如何したの？……就寝時間はとくに過ぎてるけど……」

美甘「あ、艦長……」

ほまれ「副長も……」

明乃とましての姿を確認して、気まずそうに縮こまるほまれとあかね。

美甘「御免なさい!!・・・新しいレシピを研究してたらこんな時間になっちゃったんです。」

美甘が2人を庇う様に前に立って頭を下げる。

ましろ「熱心なのはいいが就寝時間にはちゃんと自室で寝てくれ・・・それと、今の様子だと何か問題が有った様だが?・・・何か口論をしていた様な・・・」

ほまれ「いえつ、口論という訳ではないんです・・・えつと、実は・・・」

あかね「食材が無くなっちゃって・・・」

ましろ「無くなつた?」

ましろが聞き返すとほまれの方が顔を上げた。

ほまれ「作っていたのはパイなんですけど・・・無くなる筈がないんです・・・下拵え中のものだったから、私の気のせいっていう事もあり得なくて・・・」

明乃「3人とも此処に居たんだよね?・・・誰か他の人が入ってきたとか、そういうのではないの?・・・つまみ食いされちゃったとか?」

と明乃。

しかし、美甘は首を横に振る。

美甘「誰も来てないです・・・こつそりっていうのも流石に難しそうだし・・・」

ましろ「ドアは、少し開いていたぞ?・・・誰かが出入りした可能性はあると思うが・・・」

ほまれ「蝶つがいのところが壊れちゃったみたいで、きつちり閉まらないんですよね……和住さんには、頼んであるんで明日にでも直してもらえる筈なんですが……此処、開け閉めするとギーギー音しちゃうんで、誰かが入ってきたら気がつかない筈ないと思うんですよ!」

『そう言えば!』

と明乃とましろは揃って、入ってきたばかりのドアに目を向けた。

さつき覗きこんだ隙間を考えれば、確かに音を鳴らさずに入りこむのは難しそうだ。

明乃「あ」

ましろ「艦長、何か?」

明乃「う、ううん、何でもない!!」

あかね「やつぱり、これは、アレよ!……中学校の時にもそんな話あったでしょ?……

家庭科室のヤツ!」

あかねの方が口を開いた。

ほまれ「家庭科室?……あー、アレ?……七不思議の……」

あかね「そうそう、消える食材の話……この話、オチが怖いんだよね……」

明乃「え……如何いう話?」

あかね「何度も食材が無くなるから、絶対につまみ食いしてる犯人がいる筈だって話

になって、カメラを仕掛けるんだけど、其処に映っていたのは・・・」

ましろ「いや待て！・・・今は、如何して食材がなくなつたのか、その食材は何所にいつたのかという話をしてるんだらう？・・・もつと真面目にだな・・・」

あかね「私真面目だよ！・・・今回も同じ理由かもしれないじゃない!!」

続きを話す気満々の杵崎妹だが、その楽しそうに光る瞳の煌めきからは真面目さは感じ取れなかった。

明乃「一応最後まで聞いてみようよ！」

明乃にまでそう言われ、ましろはやむなく頭を垂れる。

あかね「んじや続きね？・・・其処に映つたのはね、キッチン台の下から伸びてきて、ひよいつと食べ物を取っていく誰かの手だったの。」

ましろ「・・・何だ・・・つまりキッチン台の下に誰かが隠れていた訳だな！」

つまらなそうに言いつつ、ましろは、内心胸を撫でおろしていた。

あかね「もちろん、誰もがそう考えて、その台を調べた・・・」

ましろ「え・・・？」

あかね「そのキッチン台は流し台がついてるヤツなんだけど、どう見ても人が入れるスペースなんて無かつたの・・・配水管が通つてるだけの所だったから・・・」

ましろ「・・・い、いやいや・・・無理だと思つても意外と入れたりするだらう？・・・」

エスパーとか名乗ってカバンに入る芸人さんだっているじゃないか!!」

ましろの反論も虚しく杵崎妹はゆっくりと首を横に振った。

あかね「確かに、無理すれば入れたのかもね……でも、皆があまりにも気持ち悪いって言うんで、そのキッチン台を撤去して、新しいのに入れ替える事になったの。」

ましろ「続くのか!?!」

あかね「そしたら、そのキッチン台あつた床下から発見されちゃったのよ!……死体が……」

ましろ「……ッ!!」

あかね「解剖の結果、死因は餓死!……如何いう訳か床下に入りこんだまま抜けだせなくなってしまったらしいの……きつと如何してもお腹が空いて、キッチン台の上の食材に手を伸ばしてしまつたらしいの……きつと如何してもお腹が空いて、キッチン台の上の食材に手を伸ばしてしまつたんでしょね……」

ましろ「……っ。」

思わず調理台の側から後じさるましろ。

ほまれ「あつちちゃん、盛りすぎだよ……其処まで判明しちやつたら七不思議にならなくなつちやう。」

あかね「あ、そつか!……失敗失敗。」

美甘「でもでも、結構怖かったよ……」

人の気も知らないできやつきやと話しあう炊事委員の3人。

流石の明乃も呆気にとられた顔をしている。

前言撤回。

主計科の3人は、非常に仲よくやっている。

ましろ「やつぱり関係のない話だったんじゃないか!!……しかも盛ったという事は、その、嘘なわけだよな?……皆、もつと真面目にその犯人探しをだな……」

美甘「え……でも、私達3人の誰かじゃなければ、他には無理ですよ?……それこそ、人が入れる様な場所なんてないですし……」

ほまれ「あ、こんなパターンもあるよね!……実は、私達3人のうちの誰かが偽物だったとか……例えば、あつちやんが私だと思つて食材を手渡した相手が実は、この世ならざるものだったとか……」

あかね「あ……そのパターン!」

ましろ「だから、もつと真面目にだな……」

明乃「えつと、無くなった食材というのはどれくらいの量?……食料の在庫などに問題はあつた?」

気を取り直した様子で明乃が質問した。

美甘「1人分の更に半分つてところです……お試しだつたんで……在庫には、全く影響はありません。」

明乃「では、この件は特に大ごとではないという事で終わりにしませんか? ……もしまた、同じ様な事が起こった場合には、改めて対処するという事で……」

明乃の提案に3人は、顔を合わせて頷きあう。

美甘「分かりました艦長!」

明乃「それから、新しいレシピの研究は嬉しいけど、ちゃんと寝てくださいね!」

『は……い』

そうして明乃とましろは烹炊室を後にした。

晴風、通路

ましろ「良かったんですか? ……ちゃんと犯人を探さなくて……」

明乃「家族を犯人扱いしちゃうみたいで、あんまり気分よくなって……あはは、つまみ食いつて言いだしたのは、私なんだけどね!」

ましろ「私も真相が知りたいだけで犯人探しをしたい訳ではありませんが……」

明乃の後に付きつつ。

ましろ(というか、心靈現象的な原因というのを否定したい……いや、そうか……艦長も怪談が怖くて寝つけず、艦内をうろろろしていたんだ……うんうん、やつ

ぱり怪談は怖いものな・・・私も真冬姉さんに怖い話をされてよく泣かされたものだ。）
ましろは、そんな事を考えていた。

その時

トンタンツ、トンツ、タンツそんな音が聞こえて、ましろは、足を止めた。

明乃「シロちゃん？」

ましろ「艦長、今の音、聞こえませんでしたか？」

明乃「音？如何いう？」

ましろ「足音・・・というか、何か跳ねる様な・・・」

明乃「どつちから？」

ましろは、聞こえてきた方向をそのまま見やる。

明乃「この上・・・？上甲板って事になっちゃうけど・・・」

ましろ「ま、まあ、何所か他の部屋とかの足音がたまたまそんな風に聞こえただけか

もしれません・・・あるいは、外の風の音とか・・・」

明乃「んー、もしこんな時間に上甲板に出てる子がいるなら注意しなくちゃ！・・・念
の為、上がって確認してみよ？」

ましろ「・・・おっしやる通りです！・・・行きましよう!!」

明乃「そう言えば、さつきココちゃんが船霊のお話してたでしょ？」

ましろ「はぁ……」

明乃「私もね、怪談とかはあんまり得意じゃないんだけど、そう言うお話じゃなくて……」

ましろ（良かった、怪談じゃなかった。）

そう思ったのも束の間の事。

明乃「船霊って船の守護霊っていうか、一説には船の魂そのものみたいなので、それが抜けちゃうと船が沈んじゃうんだって……ココちゃんのお話も、死神みたいのに船霊が負けちゃって……それで戦艦が謎の大爆発を起こしたってお話だったんだ。」

ましろ（怪談のお話じゃないって言いましたよね!?)

ましろの気も知らず、何やら楽しそうに話す明乃。

明乃「だからね!……船霊自体は怖いものじゃないんだよ!……むしろ、私達、船乗りの命を預ける大切な仲間なの……ほら、この艦にも艦内神社がちゃんと有るでしょ?」

ましろ「あの、艦長? 一体何が言いたいんです?」

明乃「いやあ、あの……あはは……実はその……絶対見間違いだとは思うんだけど、私、ちらつと見かけちゃった事があって……」

ましろ「な!?!」

ましろは、言葉を詰まらせながらも、それを尋ねた。

ましろ「何を、です……?」

明乃「晴れやかな天気で、とつても気持ちの良い風が吹いてた時んだけど、その時にね?……甲板で軽やかに踊る白い服を着た女の子の姿をね……」

自ずと息が荒くなり、心拍数が上がる。

明乃「や、やっぱり私の見間違いだよね……?クルーの誰でもなかったし……密航者とか、あり得ないし……何より、私以外の誰も見てなかったし……」

明乃の話にましろは、怖くなり泣き出したくなるが

明乃「宗谷さん? 宗谷さん、大丈夫?」

ましろ「わ、わ、わ」

明乃「わ?」

ましろ「私は、そんなオカルト信じないと言っているでしょう!」

明乃「ひやいつ!」

ましろ「何所もかしこも怪談怪談で気が滅入ってるのに艦長までなんです!……そんな事だから海洋実習にだって間に合うか怪しいみたいな状況になってるんじゃないですか?……良いですか!……艦長は、それを余裕だとか言いますが……それは、私からしてみれば単なるたるみです!……この艦は!……教官も!……艦長も!……」

乗員も皆！……たるんでるんです！しっかりと下ささい艦長！……お願いしますから！」

明乃「わ、分かった！分かったからシロちゃん、落ちついて……今就寝時間だから……皆、何事かかって起きちゃうから……」

ましろ「は……つ、は……つ、は……つ……お、おわかりいただけのなら……は……つ……良かったです……ふーっ……」

つい取り乱してしまった。

確かに今は、就寝時間。

あまり大きな音を立てるのはよくない。

そんな会話をしている間にも、明乃は上甲板に上がる扉に手をかけた。

ましろ（そうだった……これから甲板に誰か出ていないかを確認しなくちゃいけないだった……何で艦長は、今から甲板に出ようという時に、あんな話をしたんだろう？）

明乃『甲板で軽やかに踊る白い服を着た女の子の姿をね……』

先ほどの艦長の言葉が脳裏に再生される。

そして

ましろ「艦長、待つ……」

ましろが止めようとした時に

明乃「うわあ！」

ましろ「っ！」

既に明乃は、上甲板への扉を開き外へと出ていた。

晴風、甲板

そして、何時もの脳天気な笑顔で振り返って、はしやぐ。

明乃「見て見て！お月様がとっても綺麗！」

明乃に引っぱられて外に出ると、大きな月が雲一つない夜空を煌々と照らし出していた。

上空の雲を散らしたであろう。

強風もすっかり落ちつき、穏やかなものになっている。

明乃「確かに、こんなにいい月夜なら、甲板に出て眺めたくなくなっちゃう子もいるかもね！」

ましろ「その気持ちは分からないではありませんが、規則は規則・・・こんな夜更けに、甲板から落ちていた何て事になっても、誰も気がつかないし、助けようもありませんよ！」

明乃「う、そう言うのはやつぱり怖いよね！・・・夜の海って吸いこまれるとかいう

し……あ、えと、今は……」

ましろ「コホン、それくらいは、別に構いません……私だつて口五月蠅くしたい訳じゃ……」

明乃「あはは、うん……いつもありがとね、シロちゃん！」

不意の感謝の言葉に、ましろは、言葉を詰まらせ、明乃から視線を逸らしてしまう。

明乃「ん……誰も行けないね！」

ましろ「……そうですね！」

ましろは、返答の機会を失った。

確かにましろは、明乃に対して不満がある。

だが、別に仲違いしたい訳ではないし、友好の窓口を閉ざしたい訳でもない。

唯、ましろは、副長として、明乃の言動にももの申したい事があるんだが

そう考えてる時

ましろ「あれ？艦長？」

甲板をほぼ一周した時、直ぐ側で一緒に歩いていた筈の明乃の姿が見えなくなつてい
る事に気がついた。

ぐるりと見回しても何所にもその姿はない。

ましろ『こんな夜更けに、甲板から落ちていた何て事になつても、誰も気がつかない

し、助けようもありませんよ!』

自分で明乃に言ったばかりの台詞が蘇り、ましろは、首を激しく横に振って浮かんでくる最悪の想像を振り払った。

ましろ「艦長……?」

そんな希望がましろにもう一度その名を呼ばせる。

ましろ「雅か、先に艦内に戻ったとか、ですか……?」

本当にその台詞の通りだとしたら、返事がある筈がないのだが、声に出さずにはいられなかった。

ましろ「ははは、か、艦長の気まぐれにも困ったもんだ……」

ましろの中で、どんどん『あり得る可能性』が排除されていく。

そして、その逆に『あり得ない可能性』がムクムクとその頭をもたげはじめ。

ほまれ「実は、私達3人のうちの誰かが偽物だったとか……例えば、あつちゃんか私だと思って食材を手渡した相手が実は、この世ならざるものだったとか……」

ほまれが何の気なしに言った言葉が蘇った。

ましろ「ま、雅か、今まで一緒に歩いてきた筈の艦長が、に、に、偽物……だったとか……そういう話じゃないだろうな……」

『甲板で軽やかに踊る白い服を着た女の子の姿をね……』

その言葉が思い出された時、やけに生温かい風がましろの首筋を撫でていった。
ましろ「……………っ」

「!?」

その時、ましろは、視界はあり得ないものを捉えた。

ましろ「嘘、でしょ……………!?」

艦内に戻るべきだと、ましろの本能はそう訴えていたが、その物体を確認しないわけにはいかなかった。

ましろが見つけたのは、きちんと揃えられた明乃の靴。

ましろ「ま、雅か!?」

あるそうぞうが頭に浮かぶ。

ましろ（さっき私がこっぴどく叱ったせいで自殺を!?……………いやいやいやいや……………落ちつけ、落ち着いて、落ちつくんだましろ……………あの艦長に限って自殺はない……………しかも、そんな繊細な理由でという事は、先ず考えられない……………私は今混乱している……………冷静に考えて、冷静に……………ほら、さっきまで一緒にいた艦長は偽物だから……………偽物じゃ駄目だろ!!……………いやでも、偽物だったら自殺する可能性があるのか?……………いや待て、多分前提から可笑しい!……………落ちついて!……………ホントに落ちついて私……………そ、そうだ!……………先ずは、やっぱり艦内に戻って状況の報告をしなくちゃ!……………報

告つて誰に?・・・そりやもちろん艦長に決まつて・・・)
怖気が走つた。

ましろ「そうだ!?まだ教官が居る!・・・教官に報告してから指示をおおご!!」
そう意をけして顔をあげた、

薫「あら、副長?」

ちようど、甲板の見回りをしていた薫とでくわした。

ましろ「教官!」

薫「如何したの?そんな顔して、何かあつたの?」

ましろ「じ、実は・・・」

ましろは、明乃が自殺をした事を薫に報告しようとした。

その時

明乃「捕まえた・・・!!」

ましろ「ぎやあ・・・!?」

突然のその声に驚いたましろは、あろう事か、情けない叫び声を上げてその場にへなへなどへたり込んでしまった。

薫「ちよ、ちよつと大丈夫、副長!」

へたり込んでしまったましろを心配する薫。

それからしばらくして

明乃「本当に、御免なさい!!」

五十六「う……」

明乃が深々と頭を下げ、序に猫の五十六の頭も下げさせた。

ましろ「……」

恥ずかしいところを見せる事になってしまったましろは、即座に許す事などできず、
プンと唇を尖らせたまま。

薫「つまり……五十六を捕まえる為に靴を脱いだって事?」

明乃「こつそり近づいて捕まえ様と思ひまして……ほら、この靴で甲板歩いたら、
結構足音立つちゃうから?」

ましろ「私が見回した時、何所にも見あたりませんでしたか……」

明乃「だって、五十六が砲塔の陰の方に行っちゃうんだもん!」

ましろ「はぁ……」

薫「なら、最初に靴を脱ぐ時にましろちゃんにそう言えば良かったのに……」

明乃「ホントに御免なさい!!」

五十六「う……」

再び五十六と一緒に頭を下げる明乃。

ましろ「もしかして、艦内をうろついていたのもその猫を探して？」

明乃「あ、うん！……寝ようと思っただけに急に部屋から出ていつちやつてね？……ほら、あの時は、まだ凄く風が強かったから、ちよつと心配になつて……」

ましろ「何でそう言う事をちゃんとやつてくれないんですか……」

明乃「もしかしたら怒られちゃうかな……とか思つちやつて……あ、後ね……シロちゃんと一緒に見回ろうつて誘われて凄く嬉しくなつちやつて、そう言う事で良いやつて……」

ましろ「そう言う事でいいやじやないでしょう!?!……何へらへら笑つてるんのです!?!へらへら笑う明乃をましろは叱る。

明乃「は、はいっ、御免なさい！反省してます!」

薫「まあ、まあ、ましろちゃん！……岬ちゃんも反省している事だし、此処は穩便に……」

薫は、2人の間に割つて入る。

ましろ「……他には特にありませんね？……それなら、もう今日の事は良いですから、さつさと寝ましょう。」

薫に言われ、ましろは、明乃を許す。

薫「ふう……」

明乃「あ、一つだけ……」

明乃は、ぼつが悪そうに小さく右手を差し出す。

明乃「烹炊室の盗難事件、多分犯人この子……」

ましろ「はい？」

差し出されたその手には、頭がついた魚の骨があった。

肉の部分はすっかりしゃぶり尽くされている。

ましろ「……魚？……いやしかし、パイを作っていた事……」

明乃「お菓子作り大好きなあの子たちが新しいメニューの研究で『パイ』を作ったんだよ？……外国じゃニシンのパイとか普通にあるみたいだし、そういうのにチャレンジしてたんじゃないかな？」

ましろ「成程……そして、五十六ならあの隙間も音を立てず……」

明乃「そうそう」

ましろ（良かった！……心霊現象なんて無かったんだ！……ありがとう五十六！……全部お前のせいと言えはお前のせいだが、ありがとう！ありがとう！ありがとう！）
ましろは、初めて、五十六に心から感謝した。

明乃「いいお月様だったし、月見酒ならぬ月見魚と洒落込んでたんだね、五十六！」
五十六「う……」

ましろ「そうですね．．．いや、成程！．．．全て合点が이었습니다．．．よかったですよかったです。」

ましろは、久しぶりにスツとした。

ましろ「そう言う事なら艦長！．．．明日炊事委員に事の次第を確認して、ちゃんと謝つて置いて下さいね．．．その猫の管轄は艦長、と言う事で良いんですよね？」

明乃「うん、それはもちろん．．．それと、宗谷さん、ありがとう。」

ましろ「．．．何がです？」

明乃「宗谷さんが甲板の方で音がするって言ってくれたから、もしかしてって思ったんだ．．．お陰でちゃんと五十六を見つけられたから、ありがとう。」

ましろ「ど、どう致しまして．．．」

ましろは、少しつかえ気味だったが、今度はちゃんと返せた。

その事にもホツとする。

薫「さ、そろそろ戻らないと睡眠時間がちよつとになつちやうわよ2人とも．．．」

明乃「はい！」

ましろ「了解しました。」

明乃は、五十六を抱えながら、トントンと軽やかな足音を立てて歩く。

その足音を聞いて、ましろは、ハツとした。

ましてろ（そう言えば、私があの際に聞いた、甲板の方からした音は結局なんだったんだ……五十六が立てた物音とは、とてもじゃないが考えられない……そう、あれは、軽やかなステップを踏む様なリズムだった。）

其処まで考えて、ましてろは頭をブンブンと横に振るう。

薫「如何したのましてろちゃん？」

ましてろ「何でもありません!!」

明乃「それじゃ、おやすみ……」

ましてろ「おやすみなさい!!」

薫「ん、おやすみ……」

2人は、自室に戻る。

薫は、そんな2人を見送り、改めて、奇麗な月を見る。

薫「……今頃……兄さんと皆、何してるのかな……」

龍之介とその仲間が何をしてるかと思ひ、月を眺める。

第5章 異変

4月6日

日本近海

その頃、武蔵は、晴風と同じ様に集合地点の西之島新島沖へと向かっていた。

武蔵、艦橋

親子「明日から他のクラスと合流ですね！」

海図を見ながら当直中のクラスメイト、吉田親子がもえかに声を掛ける。

もえか「うん！」

海図から吉田に笑みを浮かべながら言うもえか。

はやて「フフフ・・・何だか楽しそうやね、知名さん！」

もえか「はい！・・・もう直ぐ合流だと聞いて、もう居ても経っても居られなくて・・・」

はやて「その割には、晴風と合流するのが嬉しんやろ！」

もえか「えっ!？」

はやて「やっぱり、凶星やろ！」

もえか「もうく教官たら・・・」

はやてにからかわられて、もえかは、顔をムツとしながら見張りをする。

もえか「航海艦橋へ連絡!!……左60度、距離10000に貨物船……注意して……」
親子「了解しました。」

近くに貨物船が航行しているのを見つけ、報告すると、その貨物船の動向に注意しろと指示を出す。

親子が艦内電話にて、航海艦橋へ電話を入れるが

親子「もしもし……」

受話器を耳に当てながら、親子は眉を顰める。

もえか「ん?如何かしたの?」

親子の様子を見て、もえかは、彼女に尋ねる。

親子「艦長、応答ありません。」

もえか「えっ?」

その直後

はやて「知名さん、あれ!」

武蔵の第一砲塔が何故か、右に旋回し、突如、近くを航行していた貨物船を砲撃し始めた。

『?!』

突然の貨物船への砲撃に艦橋に居た皆は啞然とした。

もえか「射撃指揮所、応答して!!」

もえかは、何故突然貨物船に砲撃したのか、その理由を聞く為、伝声管で射撃指揮所を呼び出すが、応答がない。

はやて「ちよつと替わつて……此方は、艦橋……何故貨物船を砲撃したの?……
応答しなさい!!」

はやてが替わり、射撃指揮所を呼び出すが、此方も応答がない
もえか「っ!?!」

親子「教官、艦長!!」

もえか「ちよつと見てくる。」

何か遭つたと思ひ、もえかは、様子を見に艦橋を降りた。

はやて「待つて、艦長!……それなら私も……」

親子「私も行きます。」

はやてと親子も、もえかの後を追ひ、艦橋を降りて射撃指揮所へと向かう。

その最中に武蔵は予定針路からズレ始めたが、この時点でそれに気づいた艦橋員は居なかつた。

武蔵、通路

射撃指揮所へと向かっていると、通路の向こうからまるで何かから逃げているかの様に走って来るクラスメイトの角田夏美がいた。

はやて「角田さん？」

夏美「教官、艦長!!」

はやて「落ち着いて！一体何が？」

夏美は、はやてに飛びついて涙を流す。

夏美「皆が・・・皆が・・・」

もえか「皆って？」

3人が、夏美が逃げて来た通路の先を見ると、其処には大勢のクラスメイトの姿があった。

夏美「ひいっ!?!」

夏美はそんなクラスメイト達の姿を見て怯える。

はやて「如何したの貴方達!?!・・・何を・・・」

はやては、恐る恐るクラスメイト達に声を掛けるが、彼女達は、無口無表情のまま何も言っていない。

もえか「貴方達!?!・・・一体・・・」

もえかも恐る恐るクラスメイト達に声を掛けるが、やはり彼女達は、無口無表情のまま

ま何も言つてこない。

すると、彼女達は、無口無表情のままゆっくりとはやて達に近づいてくる。

それは、まるでゾンビの行進の様にも見えた。

はやて「不味い艦長！・・・急いで艦橋に・・・」

もえか「は、はい・・・走して!!」

夏美「え？」

もえか「こつち！」

本能的に危機感を感じたはやては、急いでもえか達を艦橋へと避難させる。

亜衣子「あれ、艦長如何したんですか？」

逃げる途中、偶然、艦橋に報告しに通路を歩いていたクラスメイトの小林亜衣子と出

くわした。

もえか「小林さんも急いで上に!!」

亜衣子「何か遭つたんですか!？」

もえか「良いから上に・・・付いてきて!!」

はやて「早く艦橋に・・・急ぐんや!!」

亜衣子は、理由も聞けず、何事かと思ひ、もえか達と共に艦橋へと避難する。

武蔵、艦橋

艦橋に避難したはやてともえか達は、急いでドアに鍵を掛け、ついでにバリケードを構築し、階段（ラツタル）のハッチを閉め、モップの柄とロープを使い、階段（ラツタル）のハッチを開かない様にした。

はやて「これでしばらくは、誰も入って来られない！」

誰も入って来られないと聞いて、5人は、安心する。

亜衣子「何が何だか分かりませんが、そもそもこうなつた原因は何ですか？」

はやて「それは私にも分からへん．．．角田さんは、何か知ってる？」

夏美「わ、私にも分かりません．．．機関の調子を見に行こうと機関室に行こうとした時、急に皆に襲われて．．．その後、何も考えず逃げたんです!!」

はやて「と言う事は、原因は、全く分からへんと言う事やな！」

親子「これから如何しますか教官？」

はやて「取り合えず、やるべき事は．．．先ず状況の把握と必要な物の調達や．．．」

はやては、状況の把握と必要な物の調達を指示した。

先ず、はやてともえかが状況の把握の為、辺りを確認してくると残りの3人は、必要な物の調達を命じられた。

もえか「じゃ、3人とも危なくなつたら直ぐ戻ってきて．．．」

親子「分かりました。」

はやて「それから私と艦長のどちらかが戻らなかつた場合、探しに来ないで……」
夏美「何故ですか？」

はやて「まだどんな危険が有るか分からへん……貴方達を危険に巻き込む訳にはいかへん……私は、宗谷校長から貴方達をどんな事から守つてほしいと言われてるさかい……」

夏美「教官、艦長……」

はやて「それじゃ……行こうか……」

ミッシヨンが開始され、はやてともえかは、階段から、他の3人は、エレベーターから下へと降りて行つた。

そして、武蔵から位置を知らせるビーコンが途絶え、行方不明になつた事にははやてともえか達は気づかなかつた。

第6章 初航海でピンチ!

4月7日

小笠原諸島、西之島新島沖

西之島新島の沖では、教官艦のさるしま以下、多数の教育艦が集結していた。

さるしま、艦橋

古庄「全艦集合した?」

さるしまの艦橋で古庄は副官に学生艦が全て揃ったかを尋ねた。

副官「いえ武蔵と晴風がまだです・・・晴風は通信によると・・・遅刻です。」

副官は気まずそうに報告した。

古庄「まあ、初航海だから仕方ないわね!」

副官「しかし、このままでは、当初のスケジュールに支障が生じます!」

副官の言う通り、武蔵と晴風の遅れで既に当初のスケジュールに支障が出ていた。

古庄「大丈夫よ!・・・あの2人なら・・・」

しかし、それでも古庄は、薫とはやての2人を信じていた。

だが、古庄は気づいていなかった。

調度さるしまに乗艦していた例の研究員が密かに島影に隠れていた潜水艦から黒いブラックボックスを回収していた事、そして、そのブラックボックスの中から2と3匹のネズミに似た生き物が飛び出し、艦内に拡散した事により、更なる事態が起きた。

そんな事も知らずに晴風は、急いで合流地点に向かっていた。

途中、機関が不具合で停止と幸子と鈴が怪談話で夢中になつて変針点を過ぎても変針する事なく、そのままの針路を進んでしまった為、航路を大きくズレてしまい、幸子と鈴がそれに気づいたのは当直が間もなく終わろうと言う時だった。

急いで晴風を予定のコースに戻したが、大幅なロスは免れなかった。

その結果、晴風は、海洋実習の集合時間に遅刻確定となった。

晴風、艦橋

ましろ「現在位置は!？」

鈴「28。10,50"N(ふたじゆうはちど　じゆつてんごふんノース)、139。3
3,30"E(ひやくさんじゆうきゆうど　さんじゆうさんてんさんふんイースト)あと
72,4マイル!」

ましろが晴風の現在位置を鈴に尋ねると、やや震えた声で晴風の現在位置を報告する

鈴。

ましろ「あと何分で集合場所に着く!？」

鈴「じゅ、巡航速度18ノットで4時間……」

薫「あと3時間から4時間は掛かるね……大遅刻決定……お疲れさん。」

鈴「そんなぁ……」

泣きそうな鈴の声（実際半泣きなのだが）を聞きながら欠伸をかみ殺す薫。

ましろ「はあく始めての海洋実習に遅刻するなんて、ついてない……」

ましろの溜息が響く。

鈴「ご、御免なさい!……私が方向間違えたから!」

幸子「エンジンも一度停止しましたしね……」

芽衣「晴風は、高圧艦だからね……速度は、速いけど、故障が多いんだもん」

ましろ「ついてない」

薫「まあ、そう言わないの副長!……始めての海洋実習にしては、仕方が無いわ!」

そんなましろを薫は、何とか慰め様とする。

ましろ「……」

薫「遅れる旨の連絡はしてあるわよね、納沙さん?」

幸子「はい!……通信員の八木さんが打電済です。」

薫「取り合えず……報告は、入れてるから、着いたところで私が古庄教官に事情を説

明するけど……お説教は覚悟しといた方が良くもしいわね！」
『うう……』

鈴「古庄教官つてそんなに怖いんですか？」

古庄から怒られるかもしれないと言う事で鈴は萎縮する。

薫「う〜ん……私もそんなに詳しくないから分からないけど、教育熱心な人つて言う印象は受けたかな……」

薫が鈴に古庄の印象を話す。

ましろ「はあ……ついてない……そう言えば艦長は？」

薫が古庄の印象を話している最中、ましろは、明乃がいない事に気づく。

幸子「先まで居たんですけど……」

ましろ「遅刻しそうな時に何所、ほっつき歩いてるんだ!!」

薫「副長! ……艦長も遅刻の事は知ってるから、大丈夫よ!」

薫は、ましろに今の状況は、明乃にも説明している事を言うが

その言い方に何処か不満げな表情をするましろ、それを見て薫は何処か面白そうな顔をした。

ましろ「お言葉ですが山本教官! ……現在我々は、海洋実習に遅刻寸前何ですよ! ……そんな時に艦長が艦橋に居ないのは、可笑しいと思いませんか!?!」

生徒を教育する立場の薫が逆に生徒に教育されてしまう。

まあ、確かにましろの言葉にも一理ある。

今は、戦闘じゃないが危機的な状態なのは確かだ。

そんな時に艦長は、艦橋にいなきやいけないのは当然だ。

薫「分かったわ!・・・もう、ましろちゃんには適わないな・・・西崎さん!・・・悪いんだけど・・・艦長を呼んで来てくれる?」

ましろに逆に教育されて、薫は仕方なく、芽衣に艦長を呼んでくるよう頼む。

芽衣「わかりました!呼んできま〜す!!」

薫に頼まれ芽衣は、明乃を呼びに行こうと元気に艦橋を後にした。

晴風、右舷甲板

その頃、当の明乃は、右舷甲板で五十六に餌を上げていた。

明乃「今日は、良い天気だね・・・五十六・・・」

五十六「う・・・」

明乃「やっぱり海つていいなあ・・・」

明乃が背伸びしていると突然

芽衣「艦長・・・!!」

誰かに呼び出された。

芽衣「副長と教官が呼んでるよ……!!」

それは、薫に頼まれて、明乃を呼びに艦橋を出た芽衣だった。

明乃「あつ芽衣ちゃん!？」

芽衣「このままだと集合時間に間に合わないって……」

芽衣は、勢いで梯子を降りる。

明乃「さるしまには、通信員のつぐちゃんが遅刻の連絡をしてもらたよ？」

芽衣「でも呼んで来いってさ……」

明乃「あ、うん」

五十六「う……う……」

明乃は、帽子を取り艦橋に戻る。

晴風、艦橋

明乃「如何したの……?」

明乃が艦橋に着くと

ましろ「何処へ行ってたんですか!？」

ましろがカンカンに明乃を問い詰める。

明乃「ちよつと甲板に……」

ましろ「遅刻しそうな時に何を……」

明乃「遅れるって連絡は、もうつぐちゃんに送って貰ったし、だから五十六に餌を……」

明乃は、そう言い、五十六の手を振るう。

ましろ「全く、艦長は、たるんでいます!!」

明乃のたるみにましろは、呆れる。

薫「まあまあ、副長!……此処は穩便に……」

薫は、ましろを眺め様とした。

その時

ドーン!!

一発の砲声が鳴り響いた。

晴風、見張り台

マチコ「!?!」

見張り台で見張りをしていたマチコは、突然の砲声を聞き、眼鏡をはずし、目を細める。

マチコ「はあ!?!」

彼女の耳にはヒュ〜と空気を切り裂く音が水平線の彼方から聴こえて来たと思つたら、突然、砲弾が晴風の右舷側付近に着弾する。

晴風、艦橋

『きゃあ．．．!?』

ましろ「くっ!．．．何だ!」

薫「如何したの．．．い、一体．．．何が!」

突然の着弾の衝撃で艦橋の全員は驚愕する。

マチコ『着弾!．．．右30度、3000!』

『えっ!?着弾?』

マチコからの着弾の報告を聞いて、薫と明乃は驚愕する。

マチコ「また、着弾．．．!!」

そんな中、再び砲弾が晴風の左舷側付近に着弾する。

晴風、艦内通路

媛萌「如何したの．．．!」

美海「120%、分かんない．．．!」

突然の着弾に晴風の乗員は何が起きたのか分からずパニック状態になる。

媛萌『至近弾、後部甲板に浸水!』

美甘『烹炊室で茶碗が割れちゃったよ．．．!』

各部署から被害報告がなされ

明乃「シロちゃん!」

ましろ「?」

明乃は、突然、ましろをニツクネームで呼んだ。

明乃「シロちゃん!」

ましろ「?」

突然、明乃からニツクネームで呼ばれ、ましろは、誰を呼んでいるかと思っただが、自分だと気づく。

明乃「宗谷さんの事だよ……ましろだからシロちゃんでしょ?」

ましろ「シロちゃん! ……艦長……宗谷さんもしくは、副長と呼んで頂きたい!」

明乃にニツクネームを付けられ、嫌がるましろ。

それに対して、普通の呼び方で言うよう明乃に要求するが

明乃「え……他人見たいだよ……」

普通の呼び方の要求に明乃は、他人見たいだと嫌がる。

ましろ「他人でしょう!」

しかし、ましろは、他人だと言い張るが

明乃「海の仲間は、皆家族でしょ?」

ましろ「家族何かじゃ!」

明乃「それよりシロちゃん、ちよつと肩車して貰つて良い？」

ましろ「……人の話、聞いてますか？」

ましろが言う事に全く耳を貸さず、明乃は、状況を確認する為、ましろに肩車をしよう要求する。

薫「今は、言い争つてる暇じゃないよ！……副長、良いから此処は、素直に負けを認めて、肩車をしなさい!!」

ましろ「教官まで……はい」

薫にまで素直に負けを認めて、要求を飲みなさいと言われ、ましろは、仕方なく肩車をする。

確かに今、砲撃されている時に言い争つてる暇じゃない。

明乃「ありがとう！私だけじゃ届かないから……」

ましろに肩車され、明乃は、艦橋の天盤から上半身を乗り出して、双眼鏡で前方を見る。

薫「野間さん！何処からの砲撃？」

薫も窓から双眼鏡で前方を見る。

マチコ「艦長、教官！さるしまからの砲撃です!!」

薫「な、何です手て!？」

さるしまからの砲撃と言う報告を聞いて、薫は驚愕する。

明乃「えっ?!? 古庄教官!?!? 如何して……」

そして、明乃も双眼鏡でさるしまを指揮している古庄の姿を見て驚愕する。

まして「遅刻したからだ!!……怒られて当然だ!」

まして「遅刻したからだ!!……怒られて当然だ!」

明乃「そんな……それで砲撃なんて……」

しかし、そんな理由で古庄が砲撃するとは、明乃は思えなかった。

薫「そんな筈はないわ……遅刻程度でこんな砲撃は、あり得ないわ!!」

薫も明乃と同意見だった。

しかし、現に砲撃されている。

マチコ『右前方に着弾……!』

その時、3発目の砲弾が晴風の前方の海面すれすれで炸裂した。

それは、雅に訓練用の模擬弾では無く、攻撃用の実弾の爆発だった。

明乃「爆発した!?!? これ……実弾!?!?」

まして「このままだと怪我人が出るぞ……」

実弾だと分かり、明乃とましては、動揺する。

薫「そんな!?!?……古庄教官は何を考えているの?……生徒相手に実弾なんて……」

そして、薫も古庄が何故、実弾で砲撃してくるのか、全く分からなかった。しかし動揺も束の間

明乃「リンちゃん！回避運動を！」

明乃は、素早く鈴に回避運動を促す。

鈴「り、了解・回避運動、と〜り〜か〜じ〜」

鈴は、左に舵を切って、回避運動を取る。

明乃「あつ！．．．そうだ！．．．シロちゃん降ろして貰えるかな？．．．ココちゃん、遅刻に関しての謝罪を打電で！」

回避運動の中、明乃は、肩車を止め、直ぐに通信員の鶴にさるしまへの遅刻に関しての謝罪を打電せよと幸子に指示する。

幸子「了解です．．．八木さん！．．．さるしまに打電を．．．」

幸子は通信室に居る鶴に謝罪文をさるしまへ送信する様に指示を出す。

その間、明乃は、艦橋の艦内電話、受話器を取り

明乃『あ．．．あ．．．遅刻してすいませーん!!』

艦内電話でさるしまに謝罪を促す。

しかし、謝罪を促してもさるしまの砲撃は止まず

鈴「ま、まだ撃って来るよお．．．！」

鈴が涙目と涙声で言う。

芽衣「唯の脅しでしょ……決める気ならとつくに決めているわよ、さるしまなら……」
芽衣は、やや余裕がある様子で鈴に言う。

確かに芽衣の言う通り、さるしまは、現在ブルーマーメイドで使用されているイン
ディペンデンス級沿海域戦闘艦と同じ艦だ。

ならば、精密なレーダー射撃が可能であり、さるしまが本気で晴風へ攻撃しているの
であれば、とつくに命中弾があつても可笑しくはない。

それに

幸子「艦長！……打電、返答無しだそうです！」

さつき送信した謝罪文も無視された。

明乃「そんなに怒ってる!？」

送信した謝罪文も無視された事に明乃は動揺する。

そんな時

ましろ「代われ！」

明乃「？」

急にましろに代われと言われ

ましろ「私が遅刻した理由を説明する。」

ましろは、明乃から受話器を受け取り

ましろ「航洋艦晴風、集合時間に3時間と2分遅れましてまことに申し明けありません……しかしながら、機関にトラブルが発生じ、いたしかつたなかつたんであります……これは高圧艦特有のトラブルで有り……つまりは、予想できない事態で有つた為……」

改めて、さるしまに謝罪を促す。

幸子「始末書のお手本みたいですね。」

『うん』

雅に始末書のお手本を呼んでいる見たいな光景だった。

だが、ましろの謝罪も空しく。

マチコ『右舷に着弾!!』

またもや晴風の右舷付近に着弾する。

芽衣「くっつ!……さつきより位置が正確になっている!……もうこうなつたら反撃しようよ!」

さるしまも徐々に精密な射撃へとなり、着弾距離も徐々に迫りつつある。

そんな中、芽衣は、一か八か反撃に打って出ようと言う。

薫「駄目よ!……そんな事したら、大変な事になるわ!!」

しかし、それに対して、薫は、断固反対した。

芽衣「で、でも……」

薫「副長、代わって!」

ましろ「はっ、はい。」

薫は、ましろから受話器を受け取り

薫「此方は、晴風教官の山本薫二等監督官です!……古庄教官お願いですから砲撃を止めてください!……このままでは、死者が出ます!……お願いです砲撃を止めてください!!」

さるしまに対して、最後まで交渉による解決を模索する。

そして、明乃も同様に

明乃「野間さん!……手旗信号を!」

今度は、手旗信号で謝罪文を送ろうとマチコに指示する。

マチコ『了解!』

マチコは、手旗信号にて、さるしまに謝罪文を送るが、それさえも無視してさるしまは、更に砲撃を続ける。

晴風、見張り台

マチコ「着弾……!!」

そして、その1発が晴風中央左舷側付近に着弾する。

晴風、機関室

麻侖「機関室浸水でえい!!」

晴風、第2魚雷発射管

果代子「次発装填装置が壊れたよ!」

晴風、炊飯所兼食堂室

美甘「炊飯器が故障しちゃたよ!!」

着弾による衝撃で各部署から被害報告が上がる。

晴風、艦橋

薫「はっ!?!・・・そんな・・・」

砲撃が止まない事と各部署からの被害報告を聞いて、薫は動揺する。

明乃「怪我人は?」

薫が動揺している中、明乃は、冷静に各部署に怪我人が出ていないか確認する。

晴風、機関室

麻侖「機関室、柳田麻侖、他全員無事でえい!」

晴風、第2魚雷発射管

果代子「第2魚雷発射管、姫路、大丈夫です!」

晴風、炊飯所兼食堂室

美甘「炊飯器以外は、伊良子美甘他2名無事です……」

今のところは、怪我人は、出ていない様だ。

しかし、さるしまからの砲撃は続く。

晴風、艦橋

マチコ『着弾……!』

芽衣「狙いが正確になつてきたんだけど!」

鈴「方向転換しても、撃ってくる!!」

芽衣の言う通り、最初は、目標を外してきたさるしまも段々と狙いが正確に迫つていった。

鈴は、方向転換しながら回避運動を続ける。

まして「本気で攻撃しているのか?……あの砲なら毎分22発撃てる筈……レーダー照準にしては、狙いが甘いし……砲の旋回速度が遅い……」

最早、さるしまが何を考えて晴風へ攻撃して来るのか、薫以下の艦橋組は、全く理解できなかった。

そして、これはもう演習と呼べるものではなく、一方的な戦闘であった。

マチコ『着弾!!』

とは、言うものの、さるしまの砲撃は、なおも続き。

薫「……如何すればいいの……?」

この状況で薫は、何もできず、唯見ている事しかできなかった。
そんな時

明乃「……魚雷を撃とう!」

薫「えっ!」

皆が動揺してる中、明乃は、突然、魚雷を撃とうと言い出す。

ましろ「魚雷!」

ましろは、明乃の言葉を聞いて、目を見開いて固まった。

鈴「!」

明乃が言った事は、雅に砲撃してくるさるしまに對する反撃行為だ。

芽衣「えっ!・・マジ!?!・・撃つ!?!・・撃つの!」

魚雷を撃つ事に芽衣は、はしやぎながら喜ぶ。

まあ、芽衣にとつては、自分が水雷長で魚雷を撃つ担当だから、撃てると分かつてウキウキしているんだろうが

ましろ「しかし!・・我々は、あえてこの砲撃に耐えるしかない立場では!」

明乃の攻撃命令にましろは反對するが、砲撃は、刻一刻と晴風に命中寸前。

明乃「私も、出来る事なら攻撃したくない……でも、晴風の皆を護らないと!……私は、晴風の艦長なんだから!」

明乃も本当は、さるしまへの攻撃を躊躇っていたが、このままでは、命中弾を受けて、乗員に死傷者が出る。

それを恐れた明乃は、艦長として乗員を護る為、さるしまへの攻撃を決断したのだ。

明乃「訓練弾だったら、絶対沈まないから大丈夫……うまく動きを止めてその間に逃げよう。」

攻撃には、訓練用の魚雷を使う事に、訓練弾なら爆発も無く沈む事はない。

魚雷でさるしまの動きを封じた後、その間に全速力で海域を離脱する作戦だ。

『うん』

明乃の作戦にましろと薫以外の艦橋メンバー全員が頷く。

そして

明乃「教官、攻撃許可を?」

明乃は、薫にさるしまへの攻撃許可を求める。

薫「岬艦長……分かりました……岬艦長!……さるしまへの魚雷攻撃を許可します……但し、攻撃は1度のみ……使用弾頭は、模擬弾のみ限定!」

明乃の真意に遂に薫も攻撃を許可した。

明乃「ありがとうございます．．．戦闘用意！」

明乃は、戦闘用意の号令を出す。

ましろ「教官も本気で攻撃を!?!．．．相手は、古庄教官なんですよ!」

ましろは、断固反対したが

薫「今は、この状況を打開しないとイケないし．．．それに私は教員として、生徒を

守る立場だから！」

ましろ「ん．．．分かりました。」

薫の言葉に遂にましろも賛同した。

明乃「弾頭模擬弾！」

芽衣「戦闘右魚雷戦！」

理都子『魚雷発射まであと30秒』

芽衣「目標よし．．．方位核左90度、敵速18ノット、距離6000」

明乃「3000まで寄せて！」

理都子『あと20秒!．．．あと10秒．．．発射用意よし!』

芽衣「発射用意よし！」

魚雷発射準備が全て整った。

明乃「攻撃始め！」

明乃の命令の下、晴風から訓練魚雷が発射され、その魚雷は、高速でさるしまの左舷後部へと命中した。

芽衣「よっし!!・・・命中!!」

魚雷の命中に芽衣がガッツポーズを決める。

幸子「さるしまの速度が落ちました!」

幸子の報告通り、晴風の魚雷攻撃を受けたさるしまは、左舷に半分ほど傾斜し、速力が低下した。

薫「艦長、今のうちに離脱を!」

さるしまが攻撃できない今、薫は、直ぐに離脱するよう明乃に指示する。

明乃「ん、取り舵一杯!・・・最大戦速!!」

明乃も急いで、この海域からの離脱を指示した。

鈴「取りく舵一杯!」

麻侖『出力全開!』

明乃「戻くせく零度ヨウソロー・・・鳥島南方10マイルまで退避!」

明乃の指示に鈴は舵を切って、一刻も早くこの海域からの離脱を執行する。

晴風、機関室

その頃、晴風の機関室では

麻論「ああ、もうあつついな……何脱いでんでえい！」

桜良「暑くって……」

麗緒「汗だく……」

離脱のせいで機関の出力を全開にしている。

その為、機関室がサウナ状態になり、麻論と洋美以外の4人は、制服を脱ぎ水着に着替える有様になっていた。

戦闘から、数十分後

晴風は、海域からの離脱に成功する。

離脱する晴風の艦橋から薫は、遠くで煙を出して、被弾したさるしまを見る。

既に遠くで煙しか見えなかったが薫は、

薫（何故ですか……古庄教官……何故こんな事を……）

その疑問が膨らむが、今は『なぜ』を追及する余裕はない。

晴風が西之島新島沖の海域から離脱した後、さるしまでは、古庄が無表情のまま、瞬息もせずひたすら電文を打電。

そして、打電後、古庄はそのままその場に倒れた。

さるしまは、艦尾からの浸水で航行不能のまま漂流し、数時間後に沈没した。

唯、その際にさるしまの被弾部分から例の研究員が回収したブラックボックスが海へ

と流出していった。

この事が何れ新たな騒動の火種となる事をこの時、誰も予見はしていなかった。古庄以外のさるしまの乗員は、沈没前に脱出したが肝心の古庄は行方不明となり、後から海を漂流しているところを意識不明で救助された。

東京湾、羽田港港湾管理局

一方、さるしまから打電した電文は、本土の羽田港港湾管理局へと受信された。

港湾職員A 『横須賀女子海洋学校・・・教官艦さるしまより受信・・・学生艦晴風より攻撃を受け大破!』

港湾職員B 『学生艦が攻撃!?!』

港湾職員C 『至急、海上安全整備局へ連絡を!』

港湾職員B 『此方、羽田港港湾管理局・・・只今、さるしまより受信!・・・以下早急の対応を求む・・・繰り返す、此方羽田港港湾管理局・・・只今、さるしまより受信・・・』
羽田港港湾管理局からの緊急伝は、瞬く間に国土交通省と海上安全整備局へと知らされた。

日本近海

晴風、艦橋

その頃、海域を離脱した晴風は、第二集合地点である鳥島沖に向かっていた。

幸子「それにしても……あの砲撃は、何だっただんじやう……」

幸子が、何故さるしまが砲撃をして来たのかを尋ねる。

しかし、真実を知り、答えられる者など居る筈も無く。

芽衣「ちゃんと逃げられるかどうかの抜き打ち特訓だったんじやない？」

芽衣は、あくまでもアレは、演習内容の一つなのではないかと言う。

ましろ「その可能性もくはない。」

鈴「それにしては、本気過ぎだよお……」

鈴が幾ら演習でもアレはあまりにもやり過ぎだと言う。

ましろ「教官は、何かご存知ですか？」

ましろは、教員である薫が何か古庄から知らされているか聞くが

薫「私にも分からないわ……こんなのスケージュールにはない行動よ……」

薫もさるしまの行動が予め、打ち合わせから外れてる行動だつと言う。

志摩「あう……」

志摩は疲れたのか、少しぐったりしている。

そんな中、幸子が突拍子もない事を言いだす。

幸子「もしかしたら、さるしまがクーデターを起こしたとか？……『我々は、ブルー

マーメイドの教官艦と言うちつぽけな存在ではない！……宣言する！……我々は、独

立国家、さるしま!」

幸子が声を変え一人妄想芝居を始めた。内容がまるで。某アニメの原子力潜水艦の艦長が言ったような台詞。

ましろ「真面目に考えてるのか!」

その一人妄想芝居をやる幸子に、ましろがツツコミをいれる。

明乃「でも、大きな怪我の子が、出なくて良かった・・皆掠り傷程度で済んだみたいだし・・被害状況まとめたら学校に報告した方が良いよね?」

ましろ「どれだけ、叱られる事か・・」

ましろは、学校にどれだけ叱られる事かと悲しそうに言う。

そんな中、艦橋の無線電話が鳴る。

幸子「あ、無線ですね、とりまゝす。」

そうやって幸子が無線電話の受話器をとり無線内容を聞く。

ましろ「説明して分かってもらうしかない。」

薫「そうね、でもそれは、私が校長に直に説明するわ!」

しかし、だんだん無線内容を聞いている幸子の顔色が悪くなっていく。

一体何事か

幸子「大変です・・」

明乃「え？」

そして、幸子は皆に無線内容を伝えた。

幸子「晴風が……我々の艦が反乱したって！」

ましろ「反乱!？」

明乃「……！」

薫「な……何ですって!？」

晴風反乱と言う内容を聞いて、薫以下明乃達は、深刻そうな顔をする。

さるしまから攻撃を受けた晴風が一変して、反乱艦になってしまった。

一体如何いう事なのか、全く分からなかった。

続く

第7章 濡れ衣と拘束

時系列は、遡り

4月7日

国土交通省、国土保全委員会

晴風反乱の報が入る数分前、国土交通省の会議室では、完成した試作ハイブリッド機烈風の飛行テスト及び量産について国土保全委員会が協議を行っていた。

委員会幹部B「私は反対だ!!・・・考えても見たまえ、完成した試作機は、元々奴らが使っていた戦闘機と言う物を似せて作った物だ・・・そんな物を量産する方が余程、金の無駄ずかいだ!!」

委員会の幹部の一部は、烈風の量産に反対。

委員会幹部C「しかし、彼らの兵器をコピーしたものだから、かなりの性能を持つているのかもしれない。」

だが、一部には、賛成もあった。

委員会幹部B「ふん・・・とてもそうは思えんがね・・・深町国交相も同意見でしょ？」

深町「いや、私は賛成だね！」

委員会幹部B「何を言ってるんですか深町国交相!？」

深町の賛成に驚く委員会の幹部。

深町「今我々に必要なのは・・・空を守り水上部隊を支援できる戦闘機だ・・・だが、我々には、今それが無い・・・だからこそ、烈風の飛行テストと量産が必要ではないのかね？」

深町の言葉に委員会に幹部達は、沈黙する。

その時

国交職員「失礼します!!」

突然、国交職員の一人が会議室に乱入してきた。

委員会幹部B「何事だ!?会議中だぞ!!」

国交職員「申し訳ありません!!ですが、唯今羽田港港湾管理局から緊急電が・・・」

深町「内容は?」

国交職員「小笠原諸島、西之島新島沖につて、横須賀女子海洋学校所属の航洋艦晴風が突如反乱を起こし、教官艦さるしまを攻撃!・・・撃沈したとの事です。」

深町「教育艦が反乱!？」

晴風反乱の報に委員会の幹部達は、愕然する。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

そして、その報は、横須賀のブルーマーメイド庁舎の真霜のもとにも知らされた。

真霜「晴風が反乱!? 何かの間違いでしょ?」

晴風の反乱の報を聞いた真霜は驚き、何かの間違いじゃないかと問う。

BPF隊員「いえ・・・残念ながら・・・」

だが、BPF隊員は、間違いないと答え

真霜「薰・・・ましろ!?!」

それを聞いた真霜は、愕然とする。

横須賀女子海洋学校、校長室

一方、晴風反乱の報は、横須賀女子海洋学校にも届く。

真雪「晴風が叛乱!?!」

教頭「はい、集合時間に遅れて到着した晴風は、突如教官艦さるしまを攻撃・・・撃沈したそうです。」

教頭から晴風反乱の報を聞いて、真雪は驚愕した。

真雪「!!・・・何故そんな事態に!?!」

教頭「さるしま艦長、古庄教官は、意識を失った状態で・・・まだ詳しい事は、分かっています。」

真雪の表情は唾然としていた。

真雪（・・・薫さん・・・一体、如何したと言うの？）

真雪は、不吉な予感に惑わされたが

真雪「直ぐに対策会議を設置し、海上安全整備局とは、独自に調査を行えるよう準備を・・・」

教頭「はい！」

不吉な予感を押さえ、海上安全整備局とは、独自に晴風への対策会議の設置を命じた。

そして、晴風反乱の報は、此処にも届いていた。

首相官邸

側近B「総理!？」

突然、総理の執務室に総理の側近の1人が入ってきた。

側近A「何だ？」

田沼「!？」

側近B「唯今、羽田港港湾管理局から、急報で横須賀女子海洋学校所属の教育艦が反乱したとの事です。」

田沼「!？」

側近A「それが如何したんだ!!そんなちっぽけな報告をイチイチするな!!」

晴風反乱の報に田沼ともう1人の側近は、あまり驚かず、そればかりかそんな報告をするなど嫌味を言う。

まあ、連中にとつては、晴風の反乱などちっぽけな事なのだろう。

しかし

田沼「待つて！」

側近A「総理？」

田沼「確か今、横須賀女子海洋学校所属の教育艦と言ったな？」

側近B「は、はい！」

田沼「ふん、横須賀女子海洋学校、宗谷真雪の失態か・・・それで・・・」

横須賀女子海洋学校所属の教育艦が反乱と知り、田沼は、宗谷真雪の失態かとにこりと笑う表情をする。

側近B「はっ！・・・現在晴風は、教官艦さるしまを攻撃、撃沈した後、逃走したとの事です。」

側近A「逃走!?・・・海上安全整備局は何をしてるんだ!!」

側近B「現在、対応の対策を練っているとの事です。」

田沼「ふん、深町め!・・・たかだか教育艦一隻如きに何をゆうちようにしているんだ!」

深町の対応の手緩さに田沼は呆れる。

だが、もう一つの報告を聞いて、呆れを止める。

側近B「それと、この報告には、まだ続きが……」

田沼「ん？」

側近B「反乱を起こした晴風には、例のGフォースの隊員の1人が乗り込んでいます。うです。」

側近A「何!？」

側近B「情報によれば山本監督官が宗谷校長に頼まれて、2人ほど教育艦に乗せたところで、その1人が反乱を起こした晴風に……」

側近A「と言う事は……総理!」

田沼「これは、天が我々に与えてくれた好機!」

側近から齎された情報を聞き、田沼は、直ぐに行動を開始した。
しかし、田沼は知らなかった。

雅か、自分が研究を命じていた兵器が事件を引き起こしていた事を
横須賀基地

その頃、龍之介達は、晴風反乱の事は知らず、平凡に過ごしていた。

横須賀基地、艦載機置場

基地の敷地にある艦載機置場には、整備中の空母大鳳から降ろされた艦載機が置かれ、それを整備班長である文雄以下の整備士が整備をしていた。

文雄「よし・撃て！」

春乱の30m機関砲が用意された標的に向かって、掃射する。

しかし、弾は、標的に当たらず付近に着弾する。

文雄「撃ち方止め！」

春乱は、掃射を止める。

文雄「駄目だな・・・全的に命中していない・・・」

文雄は、機関砲が的をそれ、左に命中していたのを確認する。

文雄「もう少し右に10度ずらしてみろ。」

如何やら、機関砲の調整整備の様だ、調整をやり直して、今度は、命中した。

横須賀基地、ブルーマーメイド女子寮

ブルーマーメイド女子寮では、なのはとフェイト、ヴィヴィオの3人でご飯にしていた。

なのは「はい、ヴィヴィオ！」

なのはは、おやつであるキャラメルミルクを作り、それをヴィヴィオに渡す。

ヴィヴィオ「わあく!!なのはママありがとう。」

キャラメルミルクにヴィヴィオは、大喜びしながら食べる。

フェイト「美味しい？」

ヴィヴィオ「うん！」

3人は、笑顔でご飯を食べていた。

横須賀基地、運動場

横須賀基地の運動場では、矢代中尉らGFの航空兵がマラソンをしていた。

矢代「あと3周だ！」

GF隊員「あと3周!?!」

GF隊員「もう駄目・・・」

あと3周だと聞いて、GF隊員達は、疲れ果てる。

矢代「何だ、そのザマは！」

たるんでるGF隊員達を見て、矢代は激怒する。

横須賀基地、医務室

横須賀基地の医務室では、軍医の悟郎が昼間なのに大酒を食らっていた。

悟郎「ん・・・ん・・・あつ・・・いや・・・昼間に飲む酒もまた格別だな・・・」

今日は、急病や診察の患者もいない為、昼間から大酒を食らっていた。

悟郎「ん・・・ん・・・あつ・・・今日は、診察する患者もいない・・・暇だな・・・」

そんな時

「ニヤーン」

一匹の猫が悟郎の側に寄ってきた。

悟郎「おお、ミーくん！お前も飲むか？」

ミーくん「ニヤーン」

悟郎は、酒を注ぐ、猫は、両手でお酒を酌み、舌でなめる。

この猫の名前は、ミーくんで悟郎の愛猫である。

悟郎「美味しいかミーくん？」

ミーくん「ニヤーン」

ミーくんは、嬉しそうに酒を飲む。

横須賀基地、指揮官室

そして、此処指揮官室では

龍之介「今頃、薫とはやては、仲良く海洋実習中か・・・」

功「そうですね・・・今頃は、かお、いや、古庄教官にめつちり生徒の教育の仕方をお教えられてるでしょ・・・」

龍之介「参謀!?!・・・今、薫と聞こえたが、古庄教官とは、下の名前を呼ぶ程の中になつたのか？」

龍之介は、功が古庄と寮が隣の事や付き合っているのは知っているが、雅か下の名前を呼ぶ程の中になつてゐるのは知らなかつた。

功「そ、それは……いくら准将でも言えません。」

それについては、秘密の様だ。

功「准将こそ、宗谷監督官とは、何処まで行つたんですか？」

それに対して、功も同じ事を聞いてきた。

龍之介「そ、それは秘密だ!!」

龍之介も功と同じ事を言う。

如何やら2人とも肌を合わせたところまで行つた事は、お互い言えない様だ。

そんな中、基地内が何だか騒がしくなつてきた。

龍之介「ん……何だか基地内が慌ただしくなつてきたが……」

功「何か遭つたんでしょうか？」

その時、指揮官室のドアが開き

功「何だ、お前達は!?!」

其処から、黒ずくめの男2人と武装した兵士4人が入つてきた。

黒ずくめの男「山本一等監督官及び徳吉二等監督官!……貴方々2人を逮捕します。」

いきなり2人に逮捕状を突き付ける。

龍之介「逮捕だ?!? 何の容疑で?」

黒ずくめの男「容疑は、国家に対する反逆罪です!」

容疑は、国家反逆罪だった。

龍之介「反逆!?!」

反逆だと聞いて、龍之介は驚愕する。

功「何かの間違いだ! . . . 我々は、反逆に値する事は何もしていない!!」

功は、断固抗議するが

黒ずくめの男「何もしていない . . . では、晴風の事については、如何説明するので
すか?」

龍之介「何!?! . . . 晴風が . . . 薫が如何したんだ!?!」

晴風の事を聞いて、龍之介は、黒ずくめの男を問い詰める。

黒ずくめの男「晴風は、反乱を起こした!」

龍之介「は、反乱!?!」

反乱だと聞いて、龍之介の表情は啞然となる。

功「と言う事は、八神中佐も . . . 古庄教官も . . .」

龍之介「そんな馬鹿な!?! . . . 薫が . . . 反乱をする訳がない! . . . いや、あり得ない事だ!!」

龍之介は、薫が反乱するわけ無いと言い張るが

黒ずくめの男「良い訳は、牢の中で言うんだな・・・連行しろ!!」

黒ずくめの男は、側にいた兵士4人に拘束を命ずる。

功「如何しますか准将？」

龍之介「ん・・・まし、宗谷監督官は、この事をしているのか？」

龍之介は、真霜は、この事を知っているかと聞くと

黒ずくめの男「当然知っている・・・それに逮捕を命じたのは、深町国交相だ!!」

黒ずくめの男は、当然嘘を言ったが

功「雅か、深町国交相まで・・・」

功は、ガツカリする。

龍之介「ん・・・」

それに対して、龍之介も何も言えない。

黒ずくめの男「これで、分かったでしょ・・・貴方々を助ける者は、もう誰もいない：

おい！」

兵士4人は、龍之介と功に手錠を掛け、連行する。

龍之介と功が逮捕される中、GF隊員達も黒ずくめの男達が連れてきた兵士達に拘束

されていた。

G F 隊員 「これは、何の真似だ!？」

G F 隊員 「私達は、何もしていかないわ!!」

いきなり取り囲まれ、銃を突き付けられた状態で彼らも無実を訴える。

そして、彼らだけじゃない。

B P F 隊員 「何なんですか貴方達は!？」

B P F 隊員 「何故、彼らを拘束するんですか？」

基地に居た B P F 隊員達も彼ら G F 隊員達の無実を訴えていた。

そんな中

G F 隊員 「あつ 准将!？」

彼らの前に手錠を掛けられた龍之介と功が差し出された。

龍之介 「……」

功 「……」

拘束された G F 隊員達を見て、2人は、啞然とする。

なのは「准将!？」

フェイト「参謀!？」

そして、拘束されている G F 隊員の中にヴィヴィオを連れたのはとフェイトの姿もあつた。

龍之介「大丈夫だ！・・・これは何かの間違いだから心配するな!!」

龍之介は、不安になっている隊員達を安心させる。

ヴィヴィオ「准将さん・・・」

ヴィヴィオが龍之介を見て、不安そうな表情をする。

龍之介「大丈夫だヴィヴィオ！・・・お兄ちゃんは、直ぐ戻ってくるから・・・」

それに対して、龍之介は、優しい表情で慰める。

しかし、それを見かねた兵士が

兵士「おい！・・・犯罪者がきあすく触るんじゃない!!」

と龍之介と功を強制的に連行する。

G F 隊員「准将!!」

G F 隊員「准将!!」

強制的に連行される龍之介と功を見て、G F 隊員達が必死で叫ぶ。

龍之介「心配するな!!・・・これは何かの間違いだ!!・・・俺は、必ず戻ってくる・・・」

だから、抵抗せず大人しく待っていてくれ!!・・・良いな!」

龍之介は、隊員達に自分が戻ってくるまで、決して馬鹿な事をするなど言明した。

それを聞いた、なのは達や他のG F 隊員達は、抵抗せず啞然とした表情で2人を見る。

そして、2人が車に押し込まれようとした時

『山本監督官!』

声を掛けられ振り返ると平賀と福内がその場にいた。

2人は、龍之介と功が拘束されたと基地で部下から聞き、急いで此処に来たのだ。

2人の拘束姿を見たせい、平賀と福内は、驚きな表情だった。

しかし、龍之介は、そんな2人に何も言わず、そのまま車に押し込まれ、連行される。その後、平賀と福内は、急いで、この事を真霜に連絡する。

龍之介と功が連れて行かれた後、海上安全整備局の設備研究課に居た慶介も拘束され、なのはやフェイトの他のGF隊員達も基地の留置所や所属艦艇の食堂などに押し込まれる。

しかし、それだけでは済まなかった。

横須賀造船所、6号ドック

横須賀の6号ドックで整備中だった空母大鳳も占拠され

夏雄「てめえら何所のもんでえい!?!・・離せこのやろう!!」

整備を監督していた夏雄達も強制的に拘束された。

そして、内部にあるコンピュータ室から機密情報を抜き取ろうとしたが、徹底したセキュリティシステムに妨害され機密情報の抜き取りに失敗する。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

一方、真霜は、晴風反乱の対策を練っていた。

真霜「一応、晴風反乱については・・・宗谷校長と早急に対策を練る必要が有るわね！」

BPF隊員「はっ！」

真霜は、晴風の対策を真雪と練ようとしていた。

そんな中、突然、真霜の携帯が鳴る。

真霜「ん、誰だろう？」

真霜は、ポケットから携帯を出す

真霜「ああ、平賀監察官！ちようど良かったわ！」

画面を見ると平賀からだだったので、真霜は、ちようど平賀に晴風反乱で動いて貰おう

と頼もうと出て見ると

真霜「もしもし！」

平賀『あつ宗谷監督官！大変です!!』

真霜「ど、如何したのよ平賀監察官!?!・・・そんなに慌てて・・・」

しかし、出て見ると、平賀は何か慌てていたので、真霜は、理由を聞く。

平賀『今、山本監督官と徳吉監督官が拘束されました。』

真霜「こ、拘束!?!」

龍之介と功の拘束を聞いて、真霜は驚愕する。

真霜「な、何故そんな事態に!？」

平賀『理由は、晴風反乱の件でだそうです。』

真霜「あり得ないわ!・・・その件については、まだ捜査も対策を練っている途中なのよ!」

平賀『ですが、現にその件で2人は拘束されました。』

真霜「ん・・・分かったわ平賀監察官!・・・取り合えず、その件については、私が調べるから、貴方は、こっちに戻ってきて!!」

平賀『はい!』

真霜は、携帯を切る。

真霜（如何してなの?・・・何で龍之介が拘束されなければならないの?・・・確かに薫と八神中佐に臨時教員の許可を出して乗艦させたけど・・・でも、その件について、まだ何にも調べていないのに・・・如何して・・・）

何故、龍之介が捕まったか、彼だけじゃなく功や他のGF隊員まで拘束される何て、真霜は、自分が知らない内に何故そんな事になっているのか、全く分からなかった。

だが、躊躇している訳には行かない。

真霜は、理由を聞く為、直ぐに深町に電話をする。

真霜「深町国交相！」

深町『如何したんだ宗谷監督官!?!』

いきなりの真霜の電話に深町は、驚く。

真霜「何故、山本監督官と徳吉監督官を拘束したんですか!?!」

真霜は、そのまま単刀直入に龍之介の拘束の理由を問う。

深町『拘束!?!・・・何の事だ?』

真霜から龍之介の拘束の事を聞いて驚く。

真霜「さつき、平賀監察官から電話で山本監督官とその部下達が武装した兵士に拘束されたとの連絡が入っています。」

深町『何だと!?!・・・私は、何も知らんぞ!!』

龍之介達の拘束については、あくまで知らないと言う。

真霜「ですが、現に・・・」

深町『待て、宗谷監督官!?!・・・それについては、私は何も知らないし、命じてもない!!』

深町は、取り合えず真霜を落ち着かせてから、自分が何もしてない事を説明する。

真霜「では、誰が?」

深町『ん・・・君や私じゃなければ・・・後は・・・』

真霜「……はぁ……ま、雅か!？」

真霜の脳裏にある人物の存在が浮かび上がる。

そして、深町も

深町『田沼総理!』

脳裏に田沼の存在が浮かび上がる。

真霜「しかし、何故、田沼総理が？」

真霜は、何故、田沼が龍之介達を拘束したのか理由を聞く。

深町『それは分からん……兎に角……この件は、私から直接、総理に聞く……君は、晴風の反乱の対策と捜査を続行してくれ!!』

しかし、深町も理由は分からず。

取り合えずこの件は、深町が直接聞く事にし、真霜には、このまま晴風の反乱の対策と捜査を続行するよう命じた。

真霜「分かりました。」

真霜も不安な面が有ったが深町を信じ、このまま捜査を続行する事にした。

そして、時系列は、水平に戻り

日本近海

一方、晴風は、さるしまを航行不能にし、戦闘海域を離脱。

その後、第二集合地点である鳥島沖に向かっていた。だが、その途中、自分達が反乱の首謀者になった事を知る。

晴風、艦橋

『……ザー……学生艦が反乱さるしまを攻撃……さるしまは沈没、艦長以下乗組員は全員無事……』

薫「……」

無線で流れている様に晴風が反乱の首謀者になっているのは、保々確定だった。

芽衣「何で叛乱した事になってんの!?!…先に攻撃したのは、さるしまでしょ!!」

芽衣は無線を聴き、怒気を露わにする。

鈴「ええ……!?!…わ、私に言われても……」

鈴は芽衣に責め当たられ涙目する。

ましろ「知床さんに言っただって、仕方ないだろう……」

ましろは、鈴に責め当たる芽衣を引き離す。

芽衣「あ……御免御免……」

芽衣は、ましろに引きずられながら謝る。

それを素直に受け取った鈴が艦橋を見回す。

鈴「で、でも、如何して沈没しちゃったんだろう!……模擬弾、だったのに……」

薫「……………」

明乃「……………」

鈴の言葉に薫も明乃も何故、さるしまが沈没したのか、分からなかった。

鈴「もしかすると、これも演習の一環なんじゃ……………」

鈴は、ふつとこれも演習の一環と思つたが

ましろ「演習で沈没するか!？」

確かに演習の一環なら沈没もしないし、我々も反乱の首謀者にはならない筈。

だが、現にさるしまは、沈没し、自衛の為に反撃した晴風は、反乱の首謀者として、追われている。

ましろ「教官! ……この事に付いて、何か知ってるんですか?」

ましろは、薫が何か知っているのか聞く。

『ん!？』

皆が薫に注目する。

薫「御免なさい……………私にも何が如何なっているのか、分からないわ……………」

しかし、薫も何故こういう事になっているのか全く分からず、皆は、不安になる。

そんな時

幸子「ならわざと沈没したとか!?! ……私達、偶然にも何かさるしまの黒い秘密を知つ

てしまったんですよ！」

幸子が何故か此処でヒートアップする。

ましろ「始まった……」

芽衣「私ら遅刻しただけじゃん……」

ヒートアップした幸子とは反対に他の艦橋メンバーは白けている。

その為、艦橋内には幸子の声のみが大きく響く。

幸子『「お前ら……見たな……」』『私達、何も見てません!!』『ええい、このまま生かしてはおけん!』『ズドン!』『あ、逃げられた。ええい、このまま秘密と共に沈んでやる……!!』』

幸子は、声色と共に顔芸で独り芝居をする。

芽衣「全部、妄想でしょ……」

芽衣が呆れた様な表情を浮かべながら言う。

薫「フフフ……ハハハ……!!」

しかし、薫は、何故か幸子の独り芝居に笑う。

ましろ「教官、笑うところじゃないですよ!」

薫「御免!御免!……納沙さんの独り芝居が面白くって、堆我慢できなくなつて……フハハハ……!!」

如何やら、幸子の独り芝居が薫には受けた様だ。

ましろ「たく教官たら・・・それより納沙さん、そのタブレット、通信切つてあるの？」

笑う薫に呆れながら、ましろは、幸子にタブレット端末の通信を切つてあるのか確認する。

幸子「大丈夫です・・・さつき教官の指示があつた時にOFFにします。」

薫は、追撃と無駄な戦闘を避ける為、艦の位置情報のビーコンも切り、生徒達には携帯のGPS機能を切るか電源を切りつてもらい、通話・メールの使用を禁止する旨を伝えた。

勿論、幸子の愛用しているタブレットも例外ではない。

ましろ「通信機器が使えないのは、不便だけだな・・・」

芽衣「ま、今発見されたら面倒・・・だしね・・・仕方ないよ。」

携帯が使えない分、彼女らにとつては、不便だろうが仕方がない。

明乃「御免ね・・・不便だと思うけど・・・第2合流地点の鳥島沖までだから・・・」

鈴「い、位置情報のビーコンも切つてあるけど・・・私達お尋ね者つて事だよね・・・高校生になつたばつかりなのに犯罪者になつちやつたんだよね・・・こんな嘘だよね・・・嘘だと言つて・・・え・・・!!」

舵輪を握りながら号泣する鈴。

志摩「う、う……」

すると志摩が何かを言いだそうとする。

幸子「如何かしましたか？……立石さん？」

志摩が何かを求めているのかと思つた幸子が志摩に声をかける。

志摩「嘘……」

鈴「あ、ありがと……言つてくれて……あつ私の事は鈴つて呼んでくれていいよ……」

志摩「りん……」

立石の「嘘」と言う言葉を聞き、安心したのか泣き止む鈴。

しかし、例え志摩が否定しても事態は何も変わらないのに、何故か嬉しそうな鈴だった。

ましろ「はあ……」

そんな志摩と鈴の会話を見て、ましろは、呆れてしまう。

薫「皆！ちよつと聞いて!!」

その時、笑つていた薫が気を取り直して、明乃達に言う。

明乃達は、薫に注目する。

薫「今、現状は、あまり良くない……でも、私達は反乱などしていない……これだけは肝に銘じてほしいの……そして、これから、どんな事態が待ち受けているか分からない……けど、決して諦めず私を信じて付いてきて欲しい……」

晴風は今、反乱艦として追われる身、どんな事態が待ち受けているかも分からない、だが、決して、諦めないで付いて来て欲しいと薫は、明乃達にそう宣言する。

まして「……」

芽衣「そりやま、教官が言うのもね……」

幸子「確かにそうですね……」

鈴「付いてきてつて言われても……」

志摩「うい……」

やはり事情も知らない薫の言葉に5人は、疑いの表情をする。

明乃「皆、教官を信じようよ！」

だが、真つ先に教官を信じたのは、艦長の明乃だった。

明乃「確かに教官の言葉に疑わしいところもあるけど、教官だつて、皆を守ろうと必死なんだから……そうですよ？」

薫「そ、そうよ、当たり前じゃない……私は、教官として、皆を守る責任が有るの……」

明乃「だから、皆、教官に付いて行こうよ！」

明乃は、何とか皆を説得する。

芽衣「まあ、艦長が言うなら……」

志摩「うい……」

幸子「今、疑つてもしようがないですからね……」

鈴「そうだね……ちよつと怖いけど……」

それに対して、4人は、薫に付いて行く事にした。

ましろ「……」

しかし、ましろは、やはり薫の言葉を信じられず1人艦橋の窓から水平線を見る。

薫「ん……」

そんなましろに薫は、何も言えなかつた。

それからしばらくして、艦橋には、当直のましろと明乃を残し、薫以下3人は、それ

ぞれ部屋に戻る。

部屋に戻る途中、薫は、他の生徒の様子を見ようと食堂室に向かう。

晴風、炊飯所兼食堂室

食堂室には、美甘と杵崎姉妹に機関科の機関員四人衆もいた。

留奈「炊飯器大丈夫だったの？」

美甘「ヒメちゃん達が何とかしてくるって……」

ほまれ「何かお礼しないとね……」

如何やら、さっきの戦闘の時に炊飯所にある炊飯器が故障したので応急員の媛萌が修理を請け負っている様だ。

薫は、食堂室に入らず隅っこから彼女らの様子を見る。

空「それにしても結局、あの攻撃は何だったの？」

桜良「遅刻したくらいじゃ普通撃たないよね……」

麗緒「古庄教官って結構キレやすいのかな？」

3人は、何故古庄が攻撃してきたか、疑問に思っていた。

薫は、何も言えず、唯、黙って見ていた。

留奈「古庄教官はそんな人じゃないよ！キレイだし！」

それに対して、留奈が関係ない事にかばおうとする。

空「あんま関係なくない？」

麗緒「まあ綺麗な人だし、優しそうではあるけどね。」

綺麗は、関係ないがそれ以外なら空と麗緒は同意する。

留奈「私も将来あんな感じになりたい！」

空「あんな感じって……」

桜良「見た目だけならわりと様になってるわね。」

2人は、留奈の教官姿をイメージする。

麗緒「でもさ、山本教官も綺麗だよね！」

薫（えっ!?!）

麗緒が突然、薫の方に話題を変える。

留奈「そうだね、古庄教官に比べれば山本教官も綺麗だよね！」

空「それにあの胸の大きさ・・・サクラより大きいよね！」

空は、薫の胸の大きさが桜良よりデカイと言う。

『うん』

それに対して、桜良以外の2人は、頷く。

麗緒「あれは、別格だよね！」

留奈「うん、別格だね！」

薫（そんなに私の胸は、大きいのかしら・・・）

薫は、自分の胸に視線を向ける。

確かに薫の胸は、桜良より大きい。

大きさは、平賀と同じぐらいの巨乳。

しかし、薫は、そんな事は全く気にしていなかった。

薫は、その場を去る。

晴風、教員用居住室

部屋に戻りベットに横になる。

薫「はあ……」

色々あり過ぎたせいか薫も疲れていった。

薫「如何して、こんな事になっちゃったんだろう？」

横に成りながら薫は、何故こんな事になってしまったか、薫は考えていた。

薫（兄さん……私は、如何したら良いの？……皆には、ああ言ったけど、本当は、怖い！……）

薫は、不安になりながらポケットに仕舞って置いた携帯を取り出す。

そして、携帯で龍之介に連絡をしようとした。

薫は、一応、龍之介達の安否を確かめる事と如何したら良いか聞こうと思ったが

薫「駄目だわ！」

今、通信したら晴風の位置がバレてしまう事に気づき、操作を止める。

薫「こんな時、次郎君が居てくれたら……」

こんな時、次郎君やはやてちゃんが居れば、少しは明るくなるのかもしれないが、次郎君は、任務でいないし、はやては、今は武蔵にいる。

そんな時

薫「五十六!？」

部屋に五十六が入ってきた。

五十六「ぬっ」

薫は、入って来た五十六を抱き

薫「五十六あたしを慰めてくれるんだ・・・嬉しい・・・」

五十六を抱きしめる。

薫「そうだね!・・・例えそうだとしてもとして、私は、教員として、皆を守らないといけない・・・兄さん、皆無事でいてね・・・」

薫は、晴風の生徒を守る事を決心しながら龍之介達の無事を祈った。

第8章 それぞれの決意

4月7日

12:00

晴風が反乱艦として追われてる頃、武蔵では

武蔵、艦橋

親子「教官、艦長！」

もえか「吉田さん！」

はやて「3人共、無事やった？」

状況の把握に行っていたはやてともえかが艦橋に戻ってきた。

親子「はい！・・・何度か危ない目に遭いましたが、一応、必要な物は調達できました。」

親子達は、エレベーターで下に降り、生徒達の目を掻い潜りながら、倉庫から水と食料を調達した。

亜衣子「まずまずかな・・・教官、艦長！・・・常食と水は確保しました。」

亜衣子は、調達した缶詰の一つを開いて、試食する。

親子「それで、状況は？」

親子は、はやてともえかに各部がどんな状況かを聞く。

はやて「2人で見回ってきたけど……」

はやてともえかは、3人に状況を説明する。

はやてともえかが言うには、艦橋以外の航海艦橋、工作室、無線室などが占拠され、更に生徒は、艦橋に居る4人以外の殆んどは、最初遭遇した通り、無口無表情でゾンビ見たいにあつちこち放浪している状態。

夏美「此方も見回って来ましたが、射撃官制、機関操舵、全て占拠されています!!」
親子「まともに会話ができない何て、皆まるで、何かに操られてる様な……」

親子も同期の生徒の状態に疑問を抱いていた。

はやて「とは言え、この状況では、艦の奪還は不可能やな!」

はやては、5人での武蔵奪還は、不可能と判断する。

はやて「せめて、無線さえ使えれば、救援を呼べるんやけど……」

もえか「無線室は、占拠されています。」

はやて「非常用無線機は？」

もえか「有りますけど……吉田さん、何所にあつたけ？」

親子「確か、無線室の机の下に……」

夏美「奪還不可能、おまけに救援も呼べないなんて、私達如何すればいいの……う……うああ……!!」

救援も呼べない事に夏美は、思わず泣く。

もえか「角田さん！」

はやて「だ、大丈夫やで！……今頃、宗谷校長が武蔵の異常に気づいとるはず……

救助部隊は、必ず来る！……せやから、安心して角田さん!!」

はやては、何とか安心させる。

夏美「はい……」

夏美は、泣くのを止める。

亜衣子「問わ言うものの、これから如何するんですか教官？」

亜衣子は、はやてにこれから如何するかを問う。

はやて「そやね……取り合えず……皆少し休もうか？」

『えっ!?!』

はやて「いきなり色々あって、皆全然休んでないやろう……この先、何が有るか分からへんから今のうちに皆休んどこう。」

昨日の夜から今日の昼まで、5人は、休む暇なく行動していたので、殆んど疲れて

もえか「そうだね、教官の言う通り、取り合えず皆休もう！」
はやての決断にもえかも賛同する。

はやて「じゃ、私が起きとるから、皆は、先に休んで・・・」

親子「はい、分かりました。」

はやて「4時間後に知名さんと交代や・・・」

もえか「はい！」

はやてが見張りに付き、4人は、お互いに寄り添って寝る。

4人が寝ている間、はやては、ある事を考えていた。

はやて（4人には、ああ言うたけど・・・結局のところ分からへん・・・ほんまに武蔵の搜索は行つとるのかな・・・もしかして、気づいておらんのかな・・・せめて、無線さえ使えれば、助けを呼べるんやけど・・・何とかしいひんと・・・）

はやては、何とかして、助けを呼べる様、策を考えていた。

首相官邸

一方、首相官邸では

田沼「良くやった！」

側近A「いえ」

田沼「これで、奴らの技術は、我々の物だ!!・・・キング大統領にも良い土産ができた!!・・・フフフ・・・ハハハ・・・!!」

龍之介達を拘束し、更に彼らが隠していた技術の情報も手にいれ、田沼は、嘲笑っていた。

しかし

側近B「そ、それが・・・」

田沼「何だ!?!」

側近B「実は、空母大鳳を占拠したのには成功しましたが、その際、コンピュータ室を抑えようと侵入した時、嚴重なセキュリティシステムのせいで、抑えるのに失敗しました。」

田沼「それで、データは?」

側近B「ぎ、残念ながら、彼らの機密情報を得るまでは至っておりません。」

田沼「くう・・・この・・・役立たずが・・・!!」

機密情報の奪取に失敗した事を聞き、田沼は、怒り狂い、机に置いてあった、ブロンズ像を側近Bに投げ付けた。

側近B「も、申し訳ありません!!」

側近Bは、怯えながら謝罪する。

田沼「まあよい……どうせ拘束している山本監督官から解除方法を吐かせれば済む事だ。」

側近B「それと……」

田沼「何だ、まだ有るのか？」

側近B「それに関して、深町国交相から事情を聞きたいと、何度も電話が来ています
が……」

実は、龍之介達の拘束に関して、深町から何度も電話が鳴り響いていた。

田沼「深町から……今は、忙しんだ後にしろ!!」

しかし、深町からの電話を田沼は、後回しにしてしまう。

その為、深町は、待ち惚けを食らう事になる。

東京拘置所、特別牢

その頃、拘束されている龍之介と功は、東京拘置所の特別牢の中にいた。

龍之介「……」

2人は、拘束されてから、拘置所の取調室で取り調べを受けていた。

役人が今回の晴風反乱に付いて、あれこれ聞かれても2人は、知らん存ぜずと無実を
言い張る。

その為、取り調べは、厳しくなり、既に疲れ果てていた。

龍之介（全く、いつまで、此処に閉じ込めて置くきだ？・・・薫は、大丈夫だろうか？・・・アイツの事だ・・・大丈夫だろうが生徒と一緒にだから、上手く動けないだろうな・・・）

監禁されている中で薫の身を案じていると

特別牢の扉が開き、中から

龍之介「参謀!？」

功「取り調べを終えて、特別牢に戻ってきた。」

功「准将・・・」

だが、その表情は、龍之介と同じ厳しい取り調べを受け、既にヘトヘトな状態だった。

龍之介「大丈夫か参謀!？」

ヘトヘトな状態の功を龍之介は、介護する。

功「だ、大丈夫です！准将の方は？」

龍之介「俺は、この通り・・・大丈夫だ!」

2人とも厳しい取り調べを受け、ヘトヘトな状態だったが、何とか無事だった。

10分後

功「それにしても・・・何でこんな事になったんでしょう?」

功は、何でこんな事になったか、疑問を抱いていた。

龍之介「分からん……唯言える事は、無実の罪で牢に入れられていると言う事だけだ。」

功「雅か、宗谷監督官が我々を裏切るとは……」

功は、真霜を疑うが

龍之介「違うな！」

功「えっ？」

龍之介は、違うと答える。

龍之介「あいつがこんな事をする筈がない……少なくとも……アイツは、こんな事は絶対にしない!!」

龍之介は、真霜を信じていた。

何故なら、真霜は、信頼できる人間であり、何より龍之介とは、恋人で肌を合わせた中でもある。

そんな真霜が龍之介達を騙して、裏切る事は絶対しないと言う事は、龍之介も分かっていた。

功「じゃ、誰が？」

龍之介「こんな真似が出来るのは、俺が知ってる中で、あの男だけだ!!」

功「深町国交相？」

龍之介「いや、田沼総理だ！」

功「田沼総理が、何故？・・・雅か、我々の技術を得る為に・・・」

龍之介「恐らくな・・・あの男は、利益の為に俺達の先端技術が欲しかったからな・・・機会を狙ってたんだろう・・・それが今、実行されたんだ。」

功「何て事だ・・・その為にこんな事まで・・・」

田沼の利益の為に拘束された事を聞き、功は、悔しがる。

龍之介「まあ、大丈夫だろう・・・白鳳も今は、地中海に居るし、それに少なくとも、あの嚴重なセキュリティは破れないだろう・・・後は、俺達2人が口を割らなければダメな・・・」

この時、龍之介は、もしかしたら、次で2人の内のどちらかに自白剤を投与される恐れが有る。

と思った。

そんな時

功「そう言えば、地中海に派遣されている権藤中佐の部隊は、大丈夫でしょうか？」

功が地中海に居る美由紀達の心配をしていた。

龍之介「多分大丈夫だろう・・・今は、まだ向こうも手出しは出来ない筈・・・それに此方からの定時連絡が途絶えたら、権藤中佐達も危険を察知するだろう。」

そう言つて、龍之介は、功を安心させる。

龍之介「後は、薫だな・・・」

功「反乱と言つていましたが、本当に反乱したんですか？」

功は、薫が反乱したのか疑問を抱く。

龍之介「あの馬鹿が、そんな事出来るわけ無いだろう・・・ましてや真雪さんの大事な生徒を巻き込んでまで・・・」

それについて、龍之介は、断固否定する。

功「じゃなぜ、反乱と言う事に？」

龍之介「分からん・・・だが、確か、晴風反乱を報告したのは、さるしまの艦長の古庄教官らしいと聞いたが・・・」

功「う、嘘でしょう!？」

晴風反乱を報告したのが、古庄と聞いて、功は、驚愕する。

龍之介「嘘じゃない、本当だ！」

功「そんな馬鹿な!?!古庄さんがそんな事をする訳がない!!」

古庄がそんな事をしないと功は、言い張る。

龍之介「俺もそう思うよ・・・しかし、今は、それを確かめるすべはない！」

功「何故ですか？」

龍之介「古庄教官は、現在晴風との戦闘で意識不明らしい。」

功「意識不明!?・・・大丈夫なんですか?」

古庄の安否を聞いて驚愕する。

龍之介「それは分からない・・・だが、宗谷監督官が居るから大丈夫だろう・・・取り合えず、俺達がする事は・・・」

功「何ですか?」

龍之介「先ずは・・・休む事だ!」

功「えっ!」

龍之介「この先まだ、取り調べが続くかも知れない・・・今のうちに休んどいた方が
良い・・・」

龍之介は、一応、取り調べが続くと察知し、今のうちに休む事にした。

龍之介と功の監禁は続く。

宗谷家、リビング

一方、真霜と真雪は、晴風反乱の対応に追われていた。

真雪は、急ぎ学校内に対策室を設け、今回の事件を協議した結果、哨戒と搜索の為、小型巡洋直接教育艦長良と航洋艦谷風、萩風、浦風を向かわせる事にし、更に海洋実習後に合流予定だった工作支援教育艦明石と給糧支援教育艦間宮と航洋艦舞風、浜風も搜索

に加えさせた。

真霜も晴風捜索に対して、平賀達を向かわせる事にした。対応やら対策室の設立やらで帰宅時間が夜遅くとなった。

『…………』

しかし、2人とも家に帰っても空気が重かった。

何故なら、今回の晴風の反乱で真雪は、晴風に乗艦しているましろや、薫とその他の生徒の安否を心配していた。

そして、真霜は、拘束されている龍之介を心配していた。

真霜「ねえ、お母さん！」

真雪「何、真霜？」

真霜「私は、如何したら良いの？」

真雪「えっ!？」

真霜「晴風が反乱になって……龍之介がそれに関わっているとわれ……彼を助ける事も出来ない……私は、如何すればいいの？」

真霜は、今頃になって、弱気になっていた。

それもその筈、無実の罪で追われている晴風を捕まえなければならぬし、しかも、愛している龍之介も捕まった状態、そんな不安が一杯で、真霜は、弱気になっていた。

真雪「真霜！……しつかりしなさい!!」

真霜「えっ!？」

真雪「貴方が弱気になって、如何するの！」

真霜「お母さん……」

真雪「ましろと薫さんや晴風の無実を証明できるのは……真霜！……貴方だけが頼りなの……それに龍之介さんは、多分、貴方を信じつて、待っているわ!……だから、決して諦めないで!!」

真雪は、真霜を元気付けさせる。

確かに真雪の言う通り、今、晴風と龍之介達の無実を証明できるのは、ブルーマーメイドの最高指揮官の真霜しかない。

その真霜が弱気になっていては、助ける者も助けられない。

真霜「お母さん……ありがとう！」

真霜は、弱気になるのを止め、改めて、晴風と龍之介達の無実を証明する為、動くのだった。

地中海

マルタ島、バレッツタ港

その頃、次郎と美由紀達は、地中海のブルーマーメイドの部隊と共に海賊退治をして

いた。

リンゴル「今回は、本当にありがとうございます……お陰で此方も海賊退治が保々固ず来ました。」

権藤に礼を言う、地中海のブルーマーメイドの代表のリンゴル。

美由紀「礼を言われる程の事じゃないわ……大部分は、其方の手柄じゃないリンゴルさん！」

地中海に巣くっていた海賊も権藤部隊の戦艦高千穂や白鳳に叶うわけがなく次々と摘発された。

リンゴル「それは、そうですが……しかし貴方達との連携が無かったら、こうは行かなかつたでしょう。」

リンゴルは、今回の手柄は、美由紀達にあると言うが

美由紀「私達は、唯のブルーマーメイドの派遣部隊……今回の任務は、貴方達の支援が目的で手柄は、目的じゃないわ!……だから、この手柄は、貴方達の物よ!」

美由紀達は、あくまで支援が目的で派遣された部隊であり、手柄は、目的じゃないと言う。

リンゴル「それにしても……」

美由紀「何ですか、リンゴルさん?」

リングル「気になってたけど、貴方達Gフォースは、一体何者なんですか？・・・」
応、日本のブルーマーメイドの部隊なのは、分かりますが・・・」

リングルは、気になっていた。

何故なら、普通のブルーマーメイドの部隊と違って、女性は少なく、男性が多いのと美由紀達が乗る艦艇がブルーマーメイドで普通に使用されている艦艇と違い特殊な艦艇ばかり、本当にブルーマーメイドの部隊なのか、気になって、しようがなかった。

美由紀「それは、貴方々が知る必要はないことよ、リングルさん！・・・でもこれだけは言えるわ・・・平和を守る任務は、私達も貴方達と同じよ！」

例え目的が違っても、平和を守る事は、Gフォースもブルーマーメイドも同じだと言う事を美由紀は、そうリングルに言う。

次郎「権藤中佐も中々の役者だな・・・」

リングル「権藤さん・・・貴方は、まるで私の憧れてる人に似ています。」

美由紀「私か？」

リングル「はい、その人は、まるで聖母みたいな人でした。」

リングルは、美由紀がティアの母マリア・クロイツェル見たいな聖母だつと言った。

しかし

美由紀「残念だけど、私は、貴方が思ってる憧れの人じゃないわ！・・・私は、人類

を脅かす悪魔と戦ってきた人間なのだから・・・」

リングル「悪魔と戦ってきた？」

リングルは、権藤が何を言ってるのかわからなかった。

美由紀「あつ、今の言葉は、忘れて、リングルさん。」

その時

文夫「艦長！」

美由紀「如何かしたの副長？」

突然、文夫がやってきた。

文夫「緊急電です!!」

美由紀「緊急電!?!・・・・・リングルさんちよつと失礼します。」

緊急電と聞き、美由紀は、直ぐに次郎以下主だった幹部を直ぐに集めた。

高千穂、艦橋

美由紀「電文の内容は？」

文夫「それが・・・直ぐに現地から撤収して、日本に帰還せよとの事です。」

緊急電の内容は、“直ぐに現地から撤収して、日本に帰還せよ”との内容。

次郎「何だ、引き上げの命令か・・・でも、これでようやく、俺達も日本に帰れるぜ

!!」

日本に帰還せよという内容を聞いて、次郎達は喜ぶ。しかし

美由紀「可笑しいわね・・・」

次郎「えっ!？」

電文の内容に美由紀は、不振に思う。

美由紀「予定では、引き上げは、まだ1ヶ月後なのに・・・」

文夫「何か不測の事態でも起きたんじゃないでしょうか？」

美由紀「それなら、直接、准将から連絡が入る筈・・・それなのに何故、こんな電文を・・・」

確かに普通なら龍之介から直接、連絡が来る筈だが

美由紀「発信元は、Gフォースから？」

美由紀は、発信元を確認する。

文夫「いえ、海上安全整備局からです。」

電文の発信元の名は、Gフォースではなく、海上安全整備局からだった。

美由紀「海上安全整備局?・・・普通なら、発信元は、Gフォースなのに、ますます怪しいわね!」

発信元まで可笑しいと美由紀は、気づく。

そして、

次郎「雅か!?何か遭つたんじゃ!？」

美由紀の反応に次郎は、龍之介達に何が遭つたのかと思うい驚愕する。

美由紀「まだ、そうだと決まつた訳じゃないわ!」

次郎「しかし!」

美由紀「落ち着きなさい小沢中佐!・・・今、私達が動いては、かえつて怪しまれるわ!」

確かに今、下手に動いては、リングル達に怪しまれてしまう。

次郎「じゃ如何するんです?」

美由紀「取り合えず、此処は、大人しく引き上げ命令に従いましょう。」

次郎「何だつて!?!あんた正気なのか?」

美由紀「話は、最後まで聞きなさい!!・・・私達は、大人しく引き上げ命令に従っている内に小沢中佐!・・・貴方達は、密かに此処を離脱して、直ぐに日本に向かつてちようだい!!」

美由紀は、あえて、命令に従い、その裏で次郎達の白鳳を逃がす懇談だ。

白鳳なら直ぐに龍之介の元に向かう事が出来る。

次郎「しかし、中佐達は、如何するんだ?」

美由紀「私達は、貴方達が無事逃げられる様に、何とか時間を稼ぐわ!!」

次郎「そんな!?!・・中佐達を置き去りにはできません!!」

美由紀「良いから、此処は、言う通りにしなさい!!これは、命令よ!」

次郎「分かりました。」

美由紀「小沢中佐・・直ぐに向かえる貴方達だけが頼りなの・・何か遭っても決して、無茶はしない様に・・」

次郎「権藤中佐も如何か、ご無事で・・」

美由紀の命令に次郎は、虚しく従う。

その夜、美由紀達は、リングル達を送別会に招き寄せて、白鳳に気づかせない様にしこたまお酒を飲ませた。

警戒が緩んでる好きに次郎達の白鳳は、密かに潜航して、マルタ島湾外に脱出する。その速さは、雅に普通の潜水艦では、あり得ない速さで湾外に出た。

地中海に出た白鳳は、ある程度のところ浮上し、其処から飛行モードで日本に向かった。

次郎「薫、無事でいてくれ・・」

次郎達が向かっている頃、薫達に更なる脅威が迫ろうとしていた。

第9章 追撃されてピンチ!

時系列は、少し遡る

4月7日

5:00

小笠原諸島、西之島新島沖

この日、晴風とは、別にドイツのヴェルヘルムスハーフェン海洋学校所属のアドミラル・グラフ・シュペーが小笠原諸島、西之島新島沖に向かって、航行中だった。

目的は、横須賀女子海洋学校の海洋実習に参加する事。

今回の横須賀女子海洋学校の海洋実習には、特別にドイツのからヴェルヘルムスハーフェン海洋学校、ビスマルク、アドミラル・グラフ・シュペーの2隻が参加する事になっていた。

しかし、その事は、明乃以下の生徒達には告げられておらず、知っているのは、薫やはやて、古庄の教員だけであった。

ドイツ、ヴェルヘルムスハーフェン海洋学校所属、小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

ローザ「現在西ノ島新島近海を航行中、あと一時間で合流地点です。」

タブレットを操作する書記のローザ・ヘレーネ・カールス

ミーナ「ご苦労到着するまでこのまま航海を続ける。」

そして、晴風にとつては、補佐的人物になる副長のヴェルヘルミーナ・ブラウンシュヴァイク・インゲノール・フリーデブルク、通称ミーナ。

ローザ「了解しました。」

テア「予定道理の様だな!」

ミーナが順調に指揮を取っていると艦長のテア・クロイツェルが艦橋に上がってきた。

ミーナ「おはようございます艦長!」

テア「おはよう・・・お陰で良い睡眠がとれた・・・私が休んでる間、問題はなかったか?」

テアは、ミーナに現状を聞く。

ミーナ「問題ですか・・・それならさつきから隣の艦が五月蠅くて困ってます。」

ミーナの隣の艦が五月蠅いと言う事を聞いて、隣を向くと。

『アハハハ!!』

隣には、アドミラル・グラフ・シュペーと同じく海洋実習に参加する大型直接教育艦

ビスマルクが航行していた。

クローナ『御免なさうい．．．ちよつと其処退いてくれない？．．．豆艦艇は小さくて潰してしまいそうで怖くて怖くて．．．』

そして、アドミラル・グラフ・シユペーに向けて、嫌味を言うのは、ビスマルク艦長のクローナ・ゼバステイアン・ペロナ。

ミーナ、テアにとっては、悪友でもあり、ライバルでもある。

ミーナ「お前らの方から近寄つて来たんだろぅが！」

嫌味を言うクローナに対して、ミーナは、言い返す。

ローザ「相変わらずですね。」

嫌味を言う2人を見て、ローザは、苦笑いをする。

テア「まあ．．．程々にしておけよ。」

しかし、テアは言い返さず、艦長帽を被る。

ミーナ「！」

テア「ふう．．．」

ミーナ「艦長、その艦長帽は．．．」

ミーナは、何故か、珍しくテアが艦長帽を被るのが気になっていた。

テア「ああ、元々の私の艦長帽だ．．．普段から余り被らないのだがな、この艦長帽

に相応しくならねばなるまい。」

テアは、これまで自分と共に付いてきたミーナや生徒達に感謝していた。

その為、テアは、自分が持つ艦長帽に相応しい艦長になるべく、努力すると宣言した。

ミーナ「今でも充分お似合いですよ!」

そんなテアにミーナは、眩しく見えた。

レオナ「艦長、航海科から連絡です。」

突然、機関助手のレオナ・ベックナーが連絡してきた。

レオナ「レーダーや無線の調子が可笑しい様で・・・」

レオナが言うには、レーダーや無線が突然、フリーズを起こしたり、雑音が多くなっ

たと言う。

リーゼロッテ「私が行って差し上げますわ!」

それに対して、砲術長のリーゼロッテ・フォン・アルノーは、自分が修理に向かうと

言う。

ミーナ「リーゼロッテ」

リーゼロッテ「電子機器もそれなりに分かりますし・・・アウレリア、貴方も来な

さい!」

アウレリア「はいっ!」

リーゼロッテは、水雷長のアウレリア・ブランディを引き連れて、修理に向かう。

ミーナ「最近一段と仲が良いな、あの2人？」

ローザ「何だか、雰囲気が変わりましたよね。」

中が良い2人を見て、ミーナとローザは、不思議に思う。

それもその筈、2人は、昔から付き合いが長い。

レターナ「さくて、引き継ぎも終わったし、私ら休憩に入るよ・・・」

航海長のレターナ・ハーデガンが交代に引き継ぎを終え休憩に入る。

テア「ああ、ご苦労だった・・・副長も交代だ少しだが休んでくれ！」

ミーナ「分かりました。」

ミーナとローザもテアと交代して、休憩に入る。

小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シュペー、甲板

レオナ「折角ですから、日本艦と交流しませんか？」

ロミルダ「良いですね!!」

部屋に行く途中、レオナと機関長のロミルダ・ハンネ・カールスが日本の艦と交流に付いて話していた。

そんな2人を見て、ミーナは、ある事を思う。

ローザ「如何したんですか？ニコニコして・・・」

そんなミーナにローザは、気になる。

ミーナ「ローザ・・・いや、艦長の悩みも晴れて、全て上手く言っているなと思つてな、これからの航海が楽しみで仕方ない。」

ミーナは、テアが母親と無事に和解した事や乗員と親しくなった事で、全てが上手く行っている事に感心し、これからの航海が楽しみで仕方がなかったのだ。

ローザ「そうですね・・・私もです。」

それに対して、ローザも同じ気持ちだった。

サンドラ「あつ副長!？」

部屋に戻る途中、会計のアレクサンドラ・テイエレ、通称サンドラが訪ねてきた。

サンドラ「艦長見ませんでした?」

サンドラは、テアに要が有る様だ。

ミーナ「艦長なら艦橋に戻ったが、如何した?」

サンドラ「次の補充品のリストを確認してもらいたかつたんですが・・・困つたな・・・如何やら、補給される補充品のリストの確認をテアにして貰おうと思つたが、テアが

艦橋に戻つた為、それが出来なく困っていた。

ミーナ「それなら私がやろう。」

困っているサンドラにミーナは、自分がやろうと言う。

ローザ「えっ!?でもミーナさんは今から休憩では?」

休息に入る筈のミーナが突然、引き受ける事にローザは、驚く。

ミーナ「これぐらい直ぐ済む・・・艦長の手を煩わせるのもなんだからな・・・」
確かにリストの確認ぐらいなら、直ぐに済むだろう。

ローザ「私も手伝います。」

ローザもミーナを手伝う形で引き受ける。

ミーナ「助かる。」

手伝うローザに感謝する。

そんな中、やがって、水平線に日が昇り、夜が明けてきた。

ミーナ「んっ!」

水平線に日が昇りを見て、ミーナは、眩しく見えた。

ミーナ「空が明るんできたな・・・」

(船の上から見る朝日は綺麗だな)

水平線に日が上がって行くのをミーナは、奇麗に見えた。

2人が話している中、サンドラは、何かに気づく。

サンドラ「?今、物音が・・・」

それは、何者かが、壁影からこつちを見ていた。

数時間後

小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シユペー、ミーナの部屋

「……ナさん!」

あれから、どのくらい経ったか、分からない。

突然、何者かの呼ぶ声が聞こえてきて

「起きてください、ミーナさん!」

ミーナ「はっ!?!」

ミーナは、目が覚め、辺りを見回すと、其処には、ローザが立っていた。

ミーナ「いかん……眠ってしまったか?」

如何やら、作業中に寝ってしまった様だ。

ミーナ「すまないな全部やらせてしまったか?」

自分がつい寝てしまい、ローザ、1人に作業を押し付けてしまった事にミーナは、申し訳ないと謝罪しようとしたが

ローザ「それどころじゃないです!」

しかし、ローザは、何故か、脅えながら、それどころじゃないと言う。

ミーナ「わっ!?!」

ローザの言葉に眠気が覚める。

ローザ「皆の様子が変なんです……！」

ミーナ「……如何いう事だ？」

皆の様子が変だと聞き、ミーナは、理由を聞く。

ローザ「それは、分からないんですが……無線も通信不可になって……」
しかし、詳しい事は、ローザにも分からず、更に無線も通信も使用不可能になつて
た。

そんな時

ドン!!ドン!!ドン!!

『!!』

いきなり、ドアを乱暴に叩く音が部屋に響く。

ミーナ「鍵を掛けているのか？」

誰か来たと思ひミーナは、立つ。

ミーナ「ちよつと様子を見てくる。」

扉に近づき開け様としたが

ローザ「扉を開けちゃ駄目です!ミーナさん!!」

ローザは、ミーナに扉を開けない様に言うが、状況が分からないミーナは、確かめる
べく扉をそくと開けてみると

ミーナ「誰かいるのか・・・？」

更に開くと

ミーナ「!!」

其処には、1人の学生が立っていた

ミーナ「レターナっ!!」

其処に立っていたのは、ミーナと一緒に休憩にはいていた筈のレターナだった。

ミーナ「お前か・・・驚かせるな！」

レターナだと気づき、ミーナは、安心するが

ミーナ「他の皆はいるか？」

更に、他の者は、如何したかと聞くがレターナは、答えようともせず

次の瞬間

レターナ「うがああっ!!!」

レターナは、突然、野人見たいにミーナに襲い掛つて来た。

ミーナ「この馬鹿者・・・冗談が過ぎるぞ！」

ミーナは、途さにレターナを投げ飛ばした。

ローザ「ミーナさん！大丈夫ですか!?!」

ローザはミーナに問い掛ける。

ミーナ「私は、大丈夫だ！」

ミーナの方は、どうやら大丈夫の様だ。

ミーナ「気絶したな……」

レターナは、床に叩きつけられて、気絶してしまった様だ。

ミーナ「しかし一体何が起こってるんだ……!?!」

2人が考えていると後ろから2人の学生が現れた

ミーナ「レオナ！サンドラ！」

現れた2人は、先程のレターナと一緒に休憩に行っていたレオナと補充品のリストを
確認していた筈のサンドラが立っていた。

ミーナ「良かった、この状況は、一体……」

2人は、喜ぶ言葉で問うが

ミーナ「!!」

しかし、2人もレターナと同じ様に様子が可笑しかった。

ローザ「……こっちだローザ！」

それに気づいたミーナは、ローザを連れて、急いで逃げた。

小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シユペー、甲板

ミーナ「!!」

ハッチを開き甲板に出ると其処は、もう合流地点の西ノ島新島沖だった。

ミーナ「もう西ノ島新島に着いているのか?」

ミーナは、辺りを見回すと周りには、他の艦船もいた。

ミーナ「ローザ、外の艦と通信は取れないのか!」

ミーナは咄嗟に他の艦船と連絡する。

ローザ「駄目です・・・ビスマルクにも教員艦にも通信できません!」

しかし、他の艦船との連絡はできなかつた。

ミーナ「本当に如何なつて・・・」

如何して、こんな事態になつたか、ミーナには、全く掴めなかつた。

そんな中、ミーナは、ある事を思い出す。

それは、艦長、テアの安否だ。

ミーナ（艦長は・・・如何なつたんだ?）

ミーナは、今この状況でテアの安否が心配になつた。

ミーナ（嫌な予感がする・・・）

考えていると

ローザ「ミーナさん!!」

ミーナが振り向くと2人の後を追ってきたレオナ、サンドラが扉を開け様とするが

ローザが開けさせぬ様に扉にしがみ付き防いでいた。

ミーナ「ローザ！」

ミーナが駆け寄ると

ローザ「此処は、私が防ぎます！ミーナさんは艦長を．．．!!」

ミーナ「!!」

ローザは、しがみ付いて、防ぐ間にミーナにテアの元に行く様に言う。

ミーナ「分かった．．．!!直ぐ戻る!!」

ローザが防いでいる間にミーナは、急いで艦橋に向かう。

ミーナ「艦長．．．テア．．．!!」

テアの安否を心配しながら、艦橋へと急ぐ。

小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

ミーナ「テア!!!」

梯子を昇り艦橋に着くが、其処には、艦長や交代の見張りもいなかった。

ミーナ「．．．誰もいない!?!何所に．．．!?!」

ミーナは、辺りを見回していると

「正気なら早く上がれ副長!」

上から誰かが呼ぶ声がしてきて、上を向くと

ミーナ「テア!!」

其処には、ミーナが心配していた艦長のテアが立っていた。

テア「お前の声があったから鍵を開けていた・・・無事で良かった・・・」

ミーナ「私も艦長が無事で良かったです。」

テア「ああ・・・皆が守ってくれてな、私だけ何とかな・・・」

ミーナ「・・・」

テアの無事な姿を見て、ミーナは、安心した。

テア「この異変の原因は分からないが・・・我らの艦からの通信が途絶えたら普通はもつと動きがある筈だ・・・周りの船も同じ状況になっている可能性がある・・・もしかしたら、正気なのは私達だけかもしれない・・・」

突然の通信途絶や乗員の異常なる振舞い、そして、他の艦船の異常な行動は、テアにも全く説明が着かなかつた。

甲板には、生徒達が武蔵と同様、無口無表情でゾンビ見たいにあつちこち放浪うしている状態。

2人は、そのまま艦橋の上部の射撃指揮所で夜を過ごした。

4月8日

首相官邸、総理執務室

一方、首相官邸では、待ち惚けを食らっていた深町が田沼と面会していた。

深町「総理！・・・何故、無関係の山本監督官とその部下達を拘束したんですか!？」

深町は、何故、無関係の龍之介達を拘束したのか、田沼を問い詰める。

田沼「無関係とは、不本意だね深町国交相!・・・第一、彼らが反乱したと言う証拠も上がってるんだよ!」

深町「その証拠が本物なのか、確認したんですか総理?」

田沼「あ、当たり前だ!」

上がっている証拠が本物だと田沼は、言い張るが

深町「・・・嘘ですね!」

深町は、証拠が偽物だと見抜く。

田沼「何を言うか!確かに本物だ!!」

深町「総理!・・・貴方は、邪魔な山本監督官を排除して、彼らの技術を奪いたかったんでしょ?」

深町は、田沼の動機も見抜く。

田沼「そ、それが如何した!・・・技術を得るのは、我が国家の為だ!!」

自分の動機が深町に見抜かれ、それが国家の為だと言い張る。

深町「総理、貴方と言う人は・・・」

そんな動機で龍之介達を拘束した田沼に呆れる。

そして

深町「総理!・・・この件については、国交相として、徹底的に調べますので、覚悟して下さい!!」

深町は、この件については、徹底的に調べ、龍之介達の無実を証明すると宣言した。

田沼「き、貴様!」

深町「では」

深町は、執務室を後にする。

田沼「くそ!・・・忌々しい奴め!」

深町から宣言され、田沼は切れていた。

その時

「ホント、忌々しい男ですね・・・深町国交相は・・・」

隣の部屋のドアから20代ぐらいの男が現れた。

田沼「おお野田君!・・・君か?」

男の正体は、真霜の元許婚でホワイトドルフィン野田邦夫一等監督官だった。

邦夫「総理!・・・ああ言う忌々しい奴は、さっさと解任すればよろしいのでは?」

邦夫は、田沼に深町の解任を要求した。

田沼「私もそう思う・・・だが、今、あの男に代わる後任が・・・」
それに対して、田沼も同意見だが、深町に代われる程の人材がいなかった。

邦夫「それならご心配なく・・・とっておきの後任がおります！」
だが、野田は、深町に代われる人材が居ると言う。

田沼「誰だね？」

邦夫「かつて官房長官を務めた履歴を持つ、私の父・・・野田一誠です。」
何と、後任に自分の父親である野田一誠を推薦した。

田沼「何!?野田一誠か！」

自分の父親を推薦した事に田沼は、驚く。

田沼「しかし野田君!・・・君の父上は、深町と同じ正統派だ!・・・そう簡単には
引き受けないし、それに彼は、我々に従うか・・・」

田沼の言う通り、邦夫の父親である一誠は、深町と同じ正統派で欲もなく、曲つた事
が一番嫌いでもある。

そう簡単には、後任を引き受けないだろうし、第一、田沼や邦夫の言いなりにはなら
ない。

邦夫「それは大丈夫です・・・あの男を従わせる物を私は、持っていますので・・・」
それに対して、邦夫は、一誠を従わせる物を持っていると言う。

田沼「おお!・・・何かね!・・・その物とは?」

邦夫「これです・・・」

邦夫は、田沼にある書類を見せる。

田沼「こ、これは・・・成程!・・・これなら、あの男も嫌とは言えないね・・・
ハハハ・・・!」

書類を見た途端、田沼は、驚き、そして、一誠を従わせる事が確実にになると嘲笑い始める。

邦夫「恐縮です・・・ところで、拘束している山本監督官は、情報を吐きましたか?」
話を変えて、邦夫は、捕えている龍之介は、如何なっているか問う。

田沼「しぶとい男だ!!・・・あれだけ責めても、まだ吐かない!・・・このままでは、
キング大統領に言い報告が出来ない」

田沼は、焦っていた。

何故なら、龍之介が反乱の罪を認めず、それどころかコンピュータ室への嚴重なセキュリティシステムのパスワードも吐かない。

更に追い打ちを掛ける様に地中海にいる白鳳も、何時の間にか行方をくらませていた。

このままでは、キングに機密情報を渡す事が出来ない。

邦夫「それならば、私に任せて下さい……私は、あの男とは、因縁があるので……」

田沼「ほお、君があつた男と因縁が有るとは驚きだな!?」

邦夫「別に気にする事ではないので……」

田沼「では、この件は、君に任せよう……良い報告を期待しているよ。」

邦夫「はっ!」

画して、深町や捕らわれている龍之介に邦夫の魔の手が迫ろうとしていた。

そして、薫が居る晴風にも

時系列は、晴風に戻る。

これは、とある人物の夢

9年前

横須賀市、諏訪大神社

真冬「ましろ……!……走ると転ぶぞ……!」

ましろ「大丈夫だよ……おかくさん、おねくちゃん、早く……!」

これは、ましろがまだ小学生の頃の夢。

この頃、母の真雪は、まだ現役のブルーマーメイドで、長女の真霜は、横須賀女子海洋学校の学生で卒業後は、真雪の後を追ってブルーマーメイドへ歩むつもりであり、次女の真冬は、中学生だが、まだ中学卒業後の進路は決めていなかった。

そんな過去の自分は、諏訪大神社の石段を駆け上っていた。

後ろを振り向くと、真雪と真霜、真冬の3人が石段を登って来る。

真霜「昔は、横須賀の街も此処みたいに陸地が多かったんでしょ? ・ ・ ・お母さん」

真雪の隣を歩く真霜は、昔の横須賀の街並みを尋ねる。

真雪「ええ、学校で習ったと思うけど、日露戦争の後メタンハイドレードの採掘を機に日本は地盤沈下を始めた ・ ・ ・水没した都市部に巨大フロート艦を建造してフロート都市が変わって海上開発が進んだ。」

真霜「それで日本は海洋大国になったんでしょ ・ ・ ・軍用に建造された多くの船が民間用に転用されたけど、戦争に使わないという象徴として ・ ・ ・艦長は女性が務める様になったんだよね。」

真冬「それが、ブルーマーメイドの始まり ・ ・ ・だよね真霜姉?」

真霜「そしてその第一号が: : :」

真雪「貴方達の曾お婆様よ ・ ・ ・それから代々、宗谷家の女性はブルーマーメイドになっっているの ・ ・ ・お母さんもね!」

真雪は、歩きながら、宗谷家の成り立ちを語る。

それから、4人は、石段を上がり、裏山の頂上に着き、真雪は、ある事を娘達に告げる。

真雪「……でも、お母さんは次が最後の航海になるの……」
それは、突然の現役引退だった。

真霜「えっ!?!」

真冬「え……!?!」

ましろ「……」

その発言にましろを始めとして、真霜、真冬も驚き、啞然とした表情で真雪を見る。

真雪「これからはね、お母さんブルーマーメイドの先生になるの……こんな広い海のように、豊かで清々しい海に生きる女の子を育てていくのよ。」

真雪は諏訪大神社の裏山の頂上から見える海を見つめながら現役を退いた後の事を娘達に語る。

真霜「私……そんな女の子になりたい!!」

真雪の言葉に真霜もそうなりたいと言い出す。

真冬「お母さんが先生になる学校に入る。」

真冬も今此処で横須賀女子海洋学校に入学すると決めた。

まあ、真冬らしいと言えば真冬らしい。

ましろ「わ、私も!……私も入る……!!」

そして、ましろも小学生ながら、真冬と同じ横須賀女子海洋学校を目指す。

真雪「楽しみにしているわ!」

そう言つて真雪は、自分が被つていたブルーマーメイドの制帽をましろに被せる。

ましろは嬉し恥ずかしそうな表情をする。

その時

ましろ「あつ!?!」

『ああ……!!』

突然、風が吹き、ましろが被つていた帽子が飛んで行つてしまった。

ましろ「ああ……!!」

ましろが慌てて帽子を追いかけるが、当時まだ小さいましろには、その帽子を掴む事は出来ず、真雪の帽子は空の彼方へと飛んで行つた。

ましろ（思えば、あの頃からずっとついていなかった……私は、いつも運が悪かった……そして、初航海と思いきや……ついていない……）

真雪の帽子を無くした事に先祖が怒つたのか、それともあの帽子の様にツキが逃げて行つたのか、この日以降、ましろの身の回りには不幸な事が起こる日々が続く。

そして、今初航海でも運悪く追われる身

4月8日

日本近海

その頃、晴風は、第二合流地点の鳥島沖を目指していた。

此処までの航海でブルーマーメイドも学校側の接触も無く、合流地点の鳥島沖では、学校側の艦艇もいるかもしれない。

艦橋組で話し合った結果、事情を説明して、保護して貰おうと言う意見で一致した。

それについては、薫は、不安になったが、生徒達の安全を含め、これ以上、危ない目には、合わせられないと思いい同意した。

鳥島沖まで10マイル、晴風は、順調に進んでいた。

晴風、後部甲板

媛萌「うわー大変・・・後部甲板も応急修理しないと・・・」

百々「こりやメチャクチャツス・・・」

媛萌と百々が後部甲板の被害状況を視察していた。

後部甲板の被害は、軽微ながら甲板の一部が捲られた状態で応急修理の必要があると判断した。

そんな時

美海「先輩、マジかつこいい・・・」

2人が被害状況を調べている時、美海は、マチコに夢中になっていた。

百々「ミミちゃんは、野間さんに夢中ツス！」

媛萌「等松さんも暇なら手伝って……」

マチコに夢中なる美海に媛萌は、手伝うよう言う。

美海「マツチ……!!」

しかし、完全に夢中状態になっていた為、媛萌の言葉は通じなかった。

媛萌「はあ……」

百々「はあ……メロメロッス……」

そんな美海を見て、2人は呆れる。

美海「ああ、マツチと撮った写真、妹に送りたいんだけどな……今携帯の通信禁止だしな……」

美海は、マチコと撮った画像を妹に送信しなかったが、現在、位置を知られない様に完全な無線封鎖をしている為、携帯の通信は、禁じられていたので送信する事が出来なかった。

そんな時

明乃「ひめちゃん、もちちゃん、ミミちゃん、お疲れ様!……被害状況は?」

薫「……」

薫と明乃が各部の被害状況を確認する為、視察にやって来た。

媛萌「見ての通り、応急修理しないとね、艦長、教官!」

媛萌は、2人に後部甲板の応急修理が必要だと報告する。

明乃「分かった、後で手伝うね！」

薫「御免ね3人共・・・今、全部の被害状況を確認中だから、終わったらね！」

薫と明乃も流石に今は、各部の被害状況を確認中な為、後で手を貸すと言って、その場を去る。

百々「艦長、教官、バタバタつすね・・・」

百々は、今、薫と明乃の大変苦勞している事が分かった様だ。

晴風、機関室

後部甲板を後にした薫と明乃は、機関室を訪れる。

明乃「マロンちゃん、状況どう？」

機関室のドアを開いて、明乃は、麻侖に機関の具合を確認する。

麻侖「前進一杯にしたせいで、総点検が必要になちまったんでえい！」

如何やら、無理な機関全開をしたせいで機関の総点検が必要になってしまい麻侖は拗ねていた。

薫（・・・今此処に篠原機関長が居たら、こんな故障直ぐ修理できるんでいと言うんだけど・・・）

薫は、機関室のドアの前から会話を聞いていた。

そして、今此処に夏雄が居たら、こんな故障は、直ぐに修理できると思う。

そんな時

洋美「全く・・・無理させるわね！」

それに関して、洋美も怒っていた。

明乃「クロちゃん、御免ね！」

怒っている洋美に明乃は、謝罪するが

洋美「馴れ馴れしく呼ばないで！黒木さんって呼んでくれる？」

ニツクネームで答えたせいで洋美は、更に怒り、普通に呼ぶよう明乃に言う。

薫（良いじゃないのニツクネームぐらいで・・・まあ黒木さんは、ましろちゃん派だ

から、岬ちゃんには厳しいのは、仕方ないか・・・）

明乃「分かった、クロちゃん！」

洋美に対して、明乃は、理解したと言いながら、洋美をニツクネームで呼び、機関室を出る。

麗緒「全然分かってないじゃん・・・」

桜良「あれで艦長・・・？」

そんな明乃に麗緒と桜良は、呆れてしまう。

薫は、機関室に入らず、そのまま明乃の後を追う

晴風、医務室

続いて、医務室を訪れる

医務室には、先の戦闘でか、光が足を負傷していて、美波が手当てをしていた。

そして、光の付き添いか、其処には、留奈と空もいた。

明乃「光ちゃん！・・・大丈夫？」

手当てを受けている光に対して、明乃は、大丈夫かと心配する。

明乃「ルナちゃんとソラちゃんも怪我不い？」

そして、付き添いの2人にも大丈夫かと心配する。

留奈「えー、もう名前覚えたの・・・？すごーい!!」

空「流星艦長殿！」

もう皆の名前を覚えた明乃に留奈と空は、感心する。

薫「他に怪我人は、居ないよね鑑木さん？」

感心する中、薫は、美波に他に負傷した者が居ないか聞く。

美波「ない」

薫「そう」

如何やら、居ない様だ。

薫は、安心する。

明乃「良かった……でもこんな事になるなんて……」
それに対して、明乃も安心するが、こんな事態になってしまった事に申し訳ないと思
う。

美波「青天の霹靂！」

そんな明乃に美波は、青天の霹靂、つまり予想もしなかったような事件や変動が、突
然起きると言う。

明乃「これから如何したら良いんだろう……」

明乃は、4人の前でこれから如何するか不安になる。

薫「ん……」

それに対して、薫は、何も答えない。

本当は、明乃に対して、何も知らない生徒に対して、艦長がそんな事を言っ
てはいけ
ないと言いたかったが、自分もこの先、如何なるか分からないので言えな
かった。

そんな時、美波が

美波「知者は惑わず」

『ん!?!』

美波「仁者は憂えず、勇者は恐れず」

『……?』

美波の言葉に6人は、意味が分からなかったが、美波なりに薫と明乃を元気づけてい
るんだろう。

その時

ましろ『艦長、教官・・・至急艦橋にお戻りください!』

ましろからの艦内放送が医務室に響く。

明乃「?」

艦内放送を聞き、薫と明乃は、艦橋に戻る。

晴風、艦橋

明乃「御免!・・・お待たせ!」

薫と明乃は、艦橋に戻り

幸子「被害状況、如何でした?」

戻つて来た薫と明乃に各部の被害状況を聞く。

明乃「後部甲板が結構やられて、爆雷があと1発、魚雷もないし・・・機関室も総
点検だつて・・・」

被害甚大と弾薬のない事を幸子に言うが

幸子「可愛い・・・!!」

そんな幸子は、自分のタブレットで双眼鏡の上で昼寝をする五十六を写真に撮るのに

夢中に成っていた。

ましろ「そんなもの撮っていないで、被害状況を記録しろ!!」

しかし、横からましろが叱る。

明乃「学校側から連絡は？」

明乃は、ましろに横須賀女子海洋学校からの連絡はないか問う。

ましろ「ない!」

今のところ横須賀女子海洋学校から何も連絡は無く。

明乃「そう」

芽衣「私達、見捨てられたんじゃないの・・・」

横須賀海洋学校からの連絡が一切無い事に芽衣は、見捨てられたと思い、それを聞いたましろは、不安になる。

薫「そんな訳無いでしょう!」

それに対して、薫は、違うと否定する。

明乃「今、事実確認中なのかも・・・」

明乃も見捨てたんじゃないかと、事実確認中なんだろうと考える。

鈴「こ、このまま鳥島沖10マイルまで退避で良いんだよね?」

鈴は、は、明乃にこのまま鳥島まで退避で良いのか聞いた。

明乃「うん：私達が反乱を起こしてさるしまを攻撃したみたいと言われてるけど、違
うってこと説明しなきゃ・・・」

薫「私もその時は、晴風が反乱していないと証言するつもりよ！」

明乃「ありがとうございます。」

薫の言葉に明乃は、お礼を言う。

鈴「合流地点に着いたとたんに捕まっちゃわなかな・・・」

鈴は、涙目になってそう言う。

すると

幸子「『お前ら何故さるしまを攻撃した!?!』『ちがうんです！先に攻撃したのはさるし

まの方で』『嘘を言うな!』」

突然、幸子が一人妄想芝居を始めた。

志摩「ひっ・・・」

幸子の最後の台詞の大声で近くにいた志摩がビツクとする。

芽衣「信じて貰えないって事？」

ましろ「だが我々に反乱の意思などない・・・このまま逃げ続ける事は出来ないのだ
から・・・速やかに近くの港に入ろう艦長！」

明乃「うん、そうだね・・・港に入れば攻撃される事もないだろうし・・・」

明乃は、港に入ればそう簡単に攻撃されないと考えた。

明乃「教官もそう思いますよね？」

薫「そうね・・・今は、それしかないかもね！」

明乃の考えに薫も同意する。

明乃「リンちゃん、横須賀までどれくらい掛かりそう？」

明乃は、鈴に横須賀までのくらい掛かるか聞く。

鈴「巡航で38時間かな・・・」

薫「約1日30か・・・」

薫は、鈴の巡航で、38時間を約1日30と計算する。

ましろ「全く、こんなクラスになったバカっかりに、ついてない・・・」

ましろは、このクラスになった事への不満を言う。

芽衣「何よ、こんなクラスって！・・・そりや晴風は合格した生徒の中でも最底辺が

配属される艦かも知れないけど・・・それは、あんたも一緒でしょ！」

それを聞いた芽衣がムツとした表情をして、ましろに言う。

ましろ「一緒にするな！・・・私は、入学試験は全問正解していた筈なのに解答欄を

一つずらして回答したから・・・」

ましろは、解答欄を一つずらして回答した事を赤くして暴露した。

『あ……』

すると薫以外の艦橋にいる全員が口を開いていた。

幸子「ついてないんですね……」

ましろ「五月蠅い！」

ましろは、幸子に言われ恥ずかしくなり意地を張る。

薫（……その話は、今関係ないんじゃないの……）

薫は、今その話は、関係ないと心で思う。

すると明乃が

明乃「そ、そっかー、私なんて受かっただけでも奇跡なんだけどね……たまたま勉

強してたところが出て、ましてや艦長なんて……」

明乃は、手を頭の後ろに回し少し照れた様にそう言う。

幸子「此方は、強運の持ち主ですか……」

志摩「うい」

薫（確かに岬ちゃんは、幸運差が強いのかもね……）

艦橋に少し和やかな空気が流れる。

薫（如何して、真雪さんに、このクラスの臨時教員になってほしいと言われたのか……

何だか、分かって来た様な気がしてきた。）

薫は、皆を見て、何故、真雪が依頼したか、大体理解できた。

そんな時

志摩「鳥……」

志摩が横を飛ぶ鳥に気づく。

すると幸子が空を飛ぶ鳥を見て

幸子「こんな時、あんな風に学校に、戻れたら良いんですけど……水素やヘリウムを使わない空飛ぶ船って、作れないですかね？」

と水素やヘリウムを使わない空飛ぶ船、つまりガソリンで動く航空機が出来ないかと言う。

ましろ「はあ……あんなもの空想の産物だ！……馬鹿馬鹿しい……」

しかし、ましろは、水素やヘリウムを使わない空飛ぶものなど空想の産物だと言う。

薫（いや、本当は、空想じゃないんだけどね。）

薫は、ましろに空想じゃないと言いたかったが、極秘の情報を教える訳にもいかない為、そのまま黙っていた。

そして、今、艦載機さえあれば、直ぐに戻れるのにと後悔した。

時刻は昼時となり

美甘『みなさ〜ん、食事の用意が出来ました……』

炊飯所から食事の用意ができたと言う放送が流れる。

晴風、炊飯所兼食堂室

美甘「本日のメニューは・・・晴風カレーです！」

今日の昼食の献立が伝えられた。

晴風、艦橋

志摩「カレー……」

すると、それを聞いて、真つ先に反応したのは、志摩である。

普段あまり反応しない彼女の目は、カレーと聞いた瞬間、キラキラと輝かせていた。

幸子「今日は金曜日でしたね！」

志摩「カレー!!」

旧海軍時代からの伝統は、失われておらず、毎週金曜日にカレーを食べる習慣はこの

世界の今でも続いていた。

明乃「じゃあ交代で食べに行こっか！」

志摩「うい！」

芽衣「うちの艦のカレーどんなのかな!？」

晴風、機関室

留奈「お風呂とカレーどっち先にする!？」

麗緒「カレーじゃない？」

空「カレー!!」

桜良「カレーでしょ？」

洋美「宗谷さん、一緒にカレー食べに行かない？」

洋美がましろを誘おうとした時

麻侖「むう!・・・クロちゃんは、マロンと一緒に行くんでいい!!」

突然、麻侖が洋美にヤキモチをやいてしまう。

各部は、カレーの話で盛り上がっていた。

しかし、その中で薫だけが呆れていた。

薫（はあ・・・こんな時に、よくカレーなんて食べられるわね・・・一体、その盛り上がりは何所から来るんだろうか？）

今、晴風は、追われている。

こんな状態で晴風の生徒が、よくカレーにうつつを抜かせられるとは、一体その盛り上がりは、何処から来るのか、薫は、呆れてものも言えなかった。

そんな時

明乃「教官!?!」

薫「何、艦長？」

何、呆れている薫に明乃が問う。

明乃「教官は、カレー楽しみじゃないんですか？」

薫「まあ・・本当は、楽しみだけど・・この状況じゃ、あまりね・・」

明乃「あっ!？」

この状況じゃ盛り上がらないのを聞いて、明乃は、不安になる。

薫「あっ!?!?・・別に嫌いなわけではないから、私もカレー食べたい…アハハハ…!!」
不安になる明乃に薫は、苦笑いして、誤魔化す。

そんな盛り上がりしている時、

晴風、見張り台

マチコ「はっ!？」

見張り台にいるマチコが眼鏡を外し、水平線の彼方から一隻の艦影を肉眼で捉えた。

マチコ「右60度。距離30000、接近中の艦艇は・・アドミラル・シュペーです!」

何とそれは、ドイツ、ヴイルヘルムスハーフェン海洋学校所属の小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シュペーだった。

晴風、艦橋

『えっ!?!』

見張り台からの報告が艦橋に響き。

『アドミラル・シユペー!?!』

薫と明乃は、驚愕する。

幸子「ドイツからの留学生艦です!」

明乃「取り合えず総員配置に……」

明乃は、驚愕しながら総員配置の号令を出す。

ましろ「総員配置!」

艦内に警報が鳴り響き、晴風の生徒達は、折角のカレーがお預けとなった。

明乃「えっ!?!」

鈴「速度20ノットで接近中……」

幸子「見つかったちやいました!?!」

ましろ「その様だな……」

アドミラル・グラフ・シユペーの僅かな動きの報告から、完全に向こうに捕捉された事をましろは認識した。

晴風、見張り台

マチコ「シユペー、主砲を旋回しています!!」

何と今度は、アドミラル・グラフ・シユペーの主砲の28cm砲が晴風に向けたと言

う報告が入る。

晴風、艦橋

明乃「えっ!?!」

ましろ「撃つてくる!?!」

幸子「問答無用ですわね……」

主砲旋回の報告を聞いて、一気に緊張した空気へと変わった。

薫「何故!?!……(もしかして、上から命令されてるの?……ならば、助かる方は、一つしかない!!)……艦長!……直ぐに降伏命令を!!」

薫は、直ぐに明乃に降伏の指示を出す。

明乃「はい!……野間さん!……白旗を!」

薫の指示に従い、明乃は、直ぐにマチコに白旗を上げるよう指示する。

晴風、見張り台

マチコは、直ぐ白旗を上げる。

しかし

マチコ「スーパー主砲発砲!?!」

白旗を上げるのも空しく、アドミラル・グラフ・スーパーは、主砲を斉射。

晴風、艦橋

薫「えっ!？」

明乃「何で……」

ましろ「エンジンも止めないと駄目だ!!」

幸子「確かに白旗だけでは、降伏になりませんね……」

鈴「でも逃げるんだよね？」

明乃「う、うん、180度反転する……面舵いっばい、前進いっばい！」

明乃は、降伏を諦め、逃走を決意する。

薫「……」

それに対して、薫は、何も言わず、明乃の指示を尊重する。

鈴「面舵いっばい！」

鈴は、舵を右側に切る。

マチコ「着弾……!!」

その直後、アドミラル・グラフ・シユペーから放たれた砲弾が晴風の左側に着弾した。

晴風は、砲撃を回避しながら、海域からの離脱を図る。

マチコ『シユペーも速度を上げました!!』

ましろ「追つてきた……」

鈴「早く逃げようよ……」

逃走する晴風に対し、アドミラル・グラフ・シュペーは、追撃してきた。

幸子「シュペーは基準排水量12100t、最大速度 28.5ノット、28cm主砲6門、15cm砲8門、魚雷発射管8門、最大装甲160mmと小型直教艦と呼ばれるだけあつて巡洋艦並のサイズに直教艦並の砲力を積んでいます。」

マチコ『着弾!!』

幸子がタブレットでアドミラル・グラフ・シュペーのスペックを話している間にもアドミラル・グラフ・シュペーからの砲弾がまたもや晴風の周囲に着弾する。

幸子「しゅ、主砲の最大射程は約36000m、重さ300kgの砲弾を毎分2.5発発射可能で、一発でも当たれば、一瞬で轟沈です……まあ、15cm砲副砲でも、うちの主砲よりも強いんですけど……」

ましろ「砲力と装甲は、向こうが遥かに上……」

薫「確かにシュペーは、別名ポケット戦艦って言われてるから、装甲は、巡洋艦並だけど、攻撃力は、戦艦並……」

明乃「うちが勝っているのは、速度と敏捷さだけ……」

鈴「このまま機関全開にし続けたら完全に壊れちゃうよ……」

さっきの戦闘で晴風は、機関の調子があまり良くない、その為、出せる速力も限られていた。

芽衣「魚雷撃つて足止める？」

芽衣が魚雷で足を止める事を提案するが

ましろ「もう無い！」

芽衣「ちや・・・!! そうだった!!」

さつきの戦闘で魚雷は、使い果たした事をましろに指摘され、芽衣は、頭を抱え叫んだ。

明乃「こつちの砲力は？」

志摩「70で5」

明乃「70000で50mm!?・・・シユペーの舷側装甲は？」

幸子「80mmです！」

志摩「30」

明乃「30000まで寄れば抜けるのね？」

芽衣「ちゃんと会話が成立してる!!」

芽衣は、この会話を聞いて会話が成立している事に驚いた。

幸子「これが艦長の器って、やつですか・・・」

ましろ「そんな分けないだろ!!」

薫「いや・・・案外そうかもしれない・・・」

幸子の言葉にましろは、否定する薫は、案外あるんじゃないかと言う。

明乃「マロンちゃん!・・・出し続けられる速度は?」

麻侖『第4戦速まででえい!』

ましろ「第4戦速・・・27ノットか・・・」

幸子「向こうの最大戦速と保々同じです。」

明乃「如何したら・・・」

アドミラル・グラフ・シユペーから逃げ切るにしても速力は、向こうの方が上なので、
いずれは追いつかれてしまう。

明乃は、如何したら、この危機を乗り越えられるのか必死に考える。

そんな時

志摩「ぐるぐる」

志摩が何かを呟く。

志摩「・・・ぐるぐる」

明乃「はっ!?!・・・リンちゃん取り舵一杯!」

志摩の言葉に明乃は、名案が浮かんだか、鈴に左に舵を切る様を命じる。

鈴「と、取り舵いっぱい!!・・・取り舵30度!」

鈴は、左に舵を切る。

ましろ「何をやる気ですか!？」

明乃「煙の中に逃げ込むの!」

明乃は、艦をグルグルと回転させながら、煙幕を展開させ、その中に逃げ込む事を思いつく。

薫（そっか、煙の中に逃げ込めば、向こうは、照準がし難くなる!・・・流石は、艦長・・・良くそれに気づいたわね!）

薫が気が着かない戦法を逆に明乃が気づいた。

雅に艦長の器だと褒める。

明乃「戻らせろ面舵一杯!」

鈴「戻らせろ面舵いっぱい!!・・・面舵30度」

アドミラル・グラフ・シュペーの砲撃を晴風は、8の字を描きながら回避行動する。

明乃「一発でも当たればやられる!・・・速度と小回りが効くのを生かして、逃げ回れるしかない!・・・マロンちゃん!・・・機関を不完全燃焼させて!」

麻侖『合点承知!』

ましろ「・・・」

明乃の指示の速さにましろは、唯、口を開いて見ているしかなかった。

晴風、機関室

麻命「黒煙が煙幕代わりだな！」

明乃の作戦を麻命は、理解する。

明乃『それから逃げ回るんで、機関には負担をかけるけど、よろしくね！』

洋美「よろしくって：：」

麻命「やるしかねえんでえい！」

洋美は機関に負荷がかかるのが少し不安な様子なのだが、逃げるには致し方ないと麻命は割り切る。

晴風、艦橋

明乃「リンちゃん、不規則に針路を変えて！．．．出来たら速度も！．．．但し、出来るだけ速度は落とさない様に．．．」

明乃は、鈴に速度を落とさず、不規則な針路を取って、回避運動するよう命じるが

芽衣「停めるには実弾使うしかないよお！」

芽衣は、明乃に実弾を使用し、アドミラル・グラフ・シユペーを止めようと言う。

薫（西崎さんの言う通り．．．このまま逃げてても燃料が切れてしまい撃沈されてしまう．．．でも、例え砲撃しても晴風の主砲では、シユペーを止めるどころか無力化できない．．．如何するの岬艦長！）

薫が気づかなかった戦法に気づき、その通りに回避した。

しかし、回避だけでは、アドミラル・グラフ・シユペーから逃げられない。

薫は、明乃が次は、どんな作戦にでるか、横でじつと見ていた。

『わあ……!!』

その間にもアドミラル・グラフ・シユペーからの砲撃は続き、また直ぐ近くに着弾する。

着弾に晴風の生徒は、啞然とする。

明乃「戦闘、左砲戦30度、同航のシユペー!」

着弾に啞然とする中、明乃は、砲戦指示を出す。

ましろ「何を言っている!……さるしまの時と同じになるぞ!」

ましろは、アドミラル・グラフ・シユペーを撃てば、さるしまの時の様に今度こそ、晴風は、反乱艦として、無実が証明できなくなると、砲戦に断固反対する。

明乃「実弾でスクリューシャフトを打ち抜くの……そうすれば足止めできるかも?」

しかし、明乃は、アドミラル・グラフ・シユペーを直接砲撃せず、艦の推進機を破壊し、逃げるましろに言う。

ましろ「これ以上やたら、本当に反乱になる!」

ましろは、断固反対し続ける。

明乃「このままだつと……怪我人が出る……」

だが、明乃は、このまま砲撃が続けば、いづれ負傷者が出ると危惧し、断固砲撃すると決意を示す。

その時、横から

薫「砲撃しなさい!!」

ましろ「えっ!?!」

明乃の決意に突然、薫が砲撃しなさいと言い、ましろが驚く。

薫「教官として命じます!・・・シユペーのスクリューシャフトを撃ちなさい!!」

ましろ「何を言ってるんですか教官!・・・撃てば、我々は、反逆罪になるんですよ!!」

砲撃を支持する薫にましろは、反逆罪になると訴えるが

薫「今、この状況で・・・副長!・・・何か他に提案が有るの?」

魚雷も無く、更に速度も上がらず、巡航速度で逃げるのがやつと

こんな状況で他に逃げる手が有るのか、薫は、ましろに問う。

ましろ「そ、それは・・・」

しかし、ましろは、答えられない。

薫「なら、艦長の作戦に乗るしかないじゃないの!・・・例え反逆罪に問われても、罪に問われるのは、私だけだから・・・私は、その覚悟は出来ているわ!!」

薫も晴風が反乱艦として、追われる様になってから、生徒をどんな事をしても守ると決意していたので、自分が反逆罪に問われる覚悟は出来ていた。

それを聞いたましろは、遂に明乃の作戦に乗ると決意する。

そして、2人は、一緒に実弾装填キーを回す。

明乃「実弾、りようだん始め!」

実弾装填キーが回され、主砲の砲身に実弾が装填された。

志摩「まる」

志摩が、砲撃準備が完了した事を明乃に伝える。

光『装填良し、射撃用意良し!』

あとは明乃の発射命令を待つだけとなった。

明乃「スクリュー撃つには、どれだけ距離を詰めれば良いかな?」

明乃は、幸子にアドミラル・グラフ・シユペーの推進機を破壊するには、どのくらいの距離が必要なのか、問う。

ましろ「水中だと急激に弾の速度が低下するから、無理だつて!」

しかし、隣から、ましろが晴風の通常弾では、水中だと射速が半減してしまうから不可能だと断言するが

明乃「水中弾てのがあったでしょ?」

明乃が水中弾と言う特殊兵器を思い付く。

ましろ「それは巡洋艦以上で、うちには積んでないから・・・」

水中弾は、巡洋艦以上が積んでいるので、晴風並の小型艦は積んでいなかった。

明乃「通常形状でも、水中は進むって聞いたよ！」

明乃は、通常弾でも水中を進む事を知っていた。

幸子「理論上は、12,7cm砲弾の水中直進距離は約10m・・・最悪、舷側装甲を抜く事を考えれば・・・3000以下まで近寄って下さい!!」

そして、幸子が通常弾で推進機を破壊するには、30m以内に接近しよう指摘する。

薫「かなり至近ね！」

薫も30m以内は、至近距離だと指摘する。

明乃「8の字航行のまま、距離を3000まで詰めて！」

明乃は、鈴に8の字航行のまま、アドミラル・グラフ・シュペーから30m以内まで接近しよう命じるが

鈴「近づくの!?!・・・怖いよ・・・」

砲撃するアドミラル・グラフ・シュペーに接近すると言う事で、怖がる鈴。

ましろ「何を言ってる！」

怖がる鈴に対しましろが叱る。

鈴「だから怖いって言ってるのお……」

一方に撃つてくる相手に対し、近づくのは怖いと言って、中々舵を切らない鈴。

幸子「じゃあ、分かりました!」

それに対して、幸子が

鈴「はっ!?! ……何するの……?」

彼女の目を手で押さえた。

幸子「へへへ!! ……近づいて下さい!」

鈴「前が見えないよ、暗いよ」

目隠しされて砲弾を撃つてくるアドミラル・グラフ・シユペーが見えなくなったこと

で舵を切る鈴。

それでも今度は見えない恐怖が彼女を襲うみたいで体は震えていた。

ましろ「真面目にやれ!」

ふざける幸子にましろが真面目にやれと叱る。

鈴「あ……う……」

恐怖に震えながら、鈴は、舵を左右に切りながらアドミラル・グラフ・シユペーに接近する。

幸子「……距離4000……3800……3600……」

『きゃあ．．．!!』

36 mまで接近したところでアドミラル・グラフ・シュペーの28 cm砲弾が晴風の第三砲塔を直撃、第三砲塔が大破した。

此処で時系列は、晴風からアドミラル・グラフ・シュペーへと移る。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋、射撃指揮所の裏

アドミラル・グラフ・シュペーの乗員が異変をしようじてから1日後、ミーナとテアは、の射撃指揮所の裏で夜を過ごした。

ミーナ（もう丸1日経ったか、夢なら醒めて欲しかったが．．．）

丸1日が経ち、ミーナは、この異変が全部、自分が覚めたら全部夢であってほしいと願う。

すると、突然、砲撃音が響く。

ミーナ「!?!」

突然、砲撃音でミーナは、目が覚める。

ミーナ「砲撃してるのか!?!何を狙って．．．」

突然の砲撃音で目が覚め、辺りを見回すと自分の艦が、何かを砲撃していた。

それは、明らかに薫と明乃達が乗る晴風だった。

ミーナ「艦長見てください！艦です！．．．日本の艦の様ですが．．．これで助けを．．．」

!!

ミーナは、晴風を見て、これで救援が呼べると大喜びし、隣に居たテアに知らせるが
テア「艦長？」

しかし、喜びも束の間、テアの様子が変だった。

手が震え、熱に魘されている様な表情を示す。

テア「副長……今から私の言う事をよく聞くんだ！」

熱に魘されている様な状態でテアは、ある事をミーナに命じる。

ミーナ「はい？」

テア「お前は、この現状を外に伝える為にシユペーから下船しろ！」

それは、アドミラル・グラフ・シユペーから脱出しろという下船命令だった。

ミーナ「えっ!? ……艦長は……」

突然の下船命令にミーナは、驚き、自分が下船したら、テアは、如何するのか問う。

テア「私は、此処に残る艦長が艦を置いて逃げる訳にはいかないからな……」

何とテアは、異常が生じているアドミラル・グラフ・シユペーに残留すると言う。

ミーナ「そんな事……できる訳ありません!!」

テアの下船命令にミーナは、拒否する。

テア「艦長命令だ！」

下船を拒否するミーナに対し、テアは、艦長命令だと言って、尚も下船命令を告げる。ミーナ「命令でもそれだけは、嫌です!!一緒じゃないと私は……」

テアを残して、自分だけ逃げる訳には行かない。

ミーナは、断固、下船命令を拒否する。

テア「副長!」

断固として、首を振らないミーナにテアは、告げる。

テア「……私は、命を捨てる訳ではない……お前が助けを呼んでくるのを此処で待っている。」

テアは、ミーナに自分は、命を捨てる為に残留するは、訳ではない、あくまでミーナが救援を連れてくるのを待つと告げ、被っていた艦長帽を脱ぎ。

テア「これをお前に預ける。」

脱いだ艦長帽をミーナに預けた。

ミーナ「!」

テア「私がこの艦……シユペーの艦長である証だ……必ず此処に戻って私に返してくれ!」

テアの賢明な説得にミーナは、遂に下船命令に従い、テアから艦長帽を受け取る。

それから、後髪を引かれる思いで、小型艇収納庫へと向かった。

そして、小型艇でアドミラル・グラフ・シュペーを脱出したミーナは離れていくアドミラル・グラフ・シュペーを見て

ミーナ（必ず・必ず助けに戻るから：待っててくれテア・・・）

必ず救援を連れて戻って来ると言う決意の元、小型艇を操船し続けた。

しかし、暴徒と化した生徒達はそんなミーナの乗った小型艇に容赦なく副砲弾を撃ち込んできた。

ミーナ「うっ：：くっ：：」

副砲弾をジグザグで躲しながら、目の前の晴風へ救援依頼を伝えに向かうミーナ。

そんなミーナの姿は彼女が目指す晴風からも確認できた。

そして、時系列は、晴風に戻る。

晴風、艦橋

マチコ『アドミラル・シュペーから小型艇が向かってきます!』

明乃「えっ!？」

薫「!？」

アドミラル・グラフ・シュペーから、何故か小型艇が一隻、此方に向かってくると、見張り台から報告が入り、明乃と薫は驚く。

しかし、次の瞬間、アドミラル・グラフ・シュペーの副砲弾が小型艇を直撃、ミーナ

は、衝撃で海に投げ出される。

それをマチコは、逐一報告する。

マチコ『小型艇の乗員が海に落ちました!』

ましろ「味方を攻撃している!?!」

鈴「何で!?!」

マチコからの報告を聞き、何故、見方を攻撃するのか艦橋組は驚愕する。

すると幸子が

幸子『私は艦長の指示に従えませんが……晴風を攻撃するなんて!』『何だと?!』
艦長に逆らう気か!』『ええい、こんな艦、脱出してやる……!』『』

恒例(?)の妄想と言う1人芝居が始まった。

薫(納沙さん真面目にやって)

ましろ「想像でものを言うな……」

薫やましろが呆れながら、アドミラル・グラフ・シユペーとの距離を測っていた。

幸子「私にとつてはノンフィクションよりフィクションが真実です!」

幸子が得意気に言い放つ。

すると、突然、明乃が

明乃「シロちゃん……」

ましろ「宗谷さん、もしくはは副長と読んで下さい!」

明乃「此処任せて良い?」

ましろ「はっ!」

薫「……」

ましろにいきなり艦を預け、艦橋を飛び出す。

明乃「ドイツ艦を引きつけておいてね!……ココちゃん、甲板に保険委員の美波さんをおいでして……」

ましろ「何を……雅か!……」

ましろは、明乃の元へ向かう。

ましろ「何で、敵なのに助ける!」

明乃「……敵じゃないよ!」

ましろ「え!」

明乃「海の仲間は、家族だから……」

ましろ「!」

明乃「言ってくるね。」

そう言う明乃は、ましろに被っていた艦長帽を渡す。

ましろは、明乃の艦長帽を受け取った。

薫「私も行くわ艦長！・・・こんな時は、1人より2人で行った方が良いでしょう！」
そして、薫も明乃に付いてくると言う。

明乃「教官・・・お願いします!!」

画して、薫と明乃は、スキップパーで砲弾を回避しながら、小型艇から落ちたミーナを救出に向かった。

芽衣「艦長と教官、落ちた子助けに行つたの!？」

ましろ「距離3000まで近づけ！」

鈴「う・・・う・・・」

ましろの指揮のもと、鈴は、涙ながら舵を切る。

幸子「距離3200・・・3100・・・」

やがて、アドミラル・グラフ・シュペーとの距離が30mまで達した。

芽衣「撃ちやえ!・・・撃ちやえ!・・・撃ちやえ!」

30mまで達し、晴風の第二砲塔がアドミラル・グラフ・シュペーの推進機に照準を定め。

ましろ「2番砲右、攻撃始め!!」

アドミラル・グラフ・シュペーが晴風の軸線に乗り、ましろが発射命令を出す。

ましろの命令のもと、第二主砲は、砲撃を開始。

放たれた砲弾の1発がアドミラル・グラフ・シュペーの左舷スクリューに命中した。雅に肉を切らせて骨を切る様だった。

片舷の推進機を失ったアドミラル・グラフ・シュペーは急激に速度が低下した。

明乃の作戦は、見事に成功したのだ。

マチコ『目標に命中!・・・シュペー、速力落ちてます!』

『やった・・・!!』

マチコからの報告で艦橋、機関室をはじめとして彼方此方で歓喜の声が上がる。

晴風、艦橋

ましろ「取り舵一杯!第4戦速!・・・ヨーソロー!」

歓喜も束の間、この機を逃さず、ましろは、海域からの離脱を図る。

鈴「取り舵いっぱい!」

ましろの離脱命令に、鈴は嬉々として舵を切る。

そんな鈴に幸子は、

幸子「逃げる時はてきぱきしてますね・・・」

と、呟いた。

一方、小型艇から落ちたミーナを救助に向かった薫と明乃は、

明乃「大丈夫!?!・・・しっかりして!」

板に捕まっている意識不明のミーナを2人は、スキツパーの羽部分に上げる。

ミーナの手には、テアから預かった艦長帽が握られていた。

上げたミーナを薫は、ジャケツトを脱がせ、腕を捲り、脈拍を見る。

明乃「如何ですか教官？」

そして、更に胸に耳を当て、心臓の鼓動を確かめる。

薫「うん・・・大丈夫、生きてるわ!!」

如何やら、生きている様だ。

明乃「良かった!!」

ミーナが無事な事に明乃は、安心した。

薫「さあ、晴風まで運びましょう・・・艦長手伝って!」

明乃「はい!」

ミーナを救助した薫と明乃は、スキツパーで離脱中の晴風に収容される。

晴風、前部甲板

晴風へと戻り、救助したミーナを上甲板で待っていた美波と媛萌、百々に引き渡す。

媛萌「うう〜」

百々「重いつス・・・」

救助したミーナを担架に乗せ、媛萌、百々が愚痴を零しながら医務室へと運んで行く。

明乃「お願いね!」

美波「……」

美波も頷いた後、医務室へと向かった。

明乃と薫は、艦橋へと向かう。

晴風、艦橋

明乃「シロちゃん!」

ましろ「ん!?!」

明乃「……ありがとう」

全身、ビシヨビシヨの状態で明乃は、自分が留守中に指揮を取ってくれたましろにお礼を言う。

ましろ「適切な指示をただけだ……」

それに対し、ましろは、当然な事をしたままでと、拗ねる。

薫「フフフ」

薫は、隣でその光景をニコリと見ていた。

晴風、機関室

明乃『最大戦速、現海域から離脱する!マロンちゃん、よろしくね!』

晴風は、現海域から離脱する為、明乃は麻命に願う。

『はあ．．．．．』

それを聞いた麻侖達は落ち込んだ。

麻侖「ぶつ壊れちまうよお．．．！」

洋美「本当．．．．」

麻侖は、涙目で言うと言美も全くだ、と言うような表情をした。

やがて、数時間が経ち、晴風は、現海域の離脱に成功、そのまま進路を南西へと取る。

しかし、この時、アドミラル・グラフ・シュペーから脱出したミーナが意識を失った為、アドミラル・グラフ・シュペーへの救援はこの後先になってしまった事を晴風の乗員はこの時は、知る由も無かった。

テア「副長!!．．．必ず、お前が助けに来るのを此処で待つているぞ．．．!!」

しかし、ミーナが乗った小型艇が撃沈され、その後、彼女は救助された所を目撃したテアは最後まで希望は捨てず、いつかミーナが自分達を助けに戻って来ると信じ、アドミラル・グラフ・シュペーの艦橋にて、救助が来るのを待つ事にした。

晴風、大浴場

そんな中、明乃と薫は、濡れた服を洗濯に出し、大浴場でシャワーを浴びていた。

明乃「教官!．．．これから如何すれば良いんでしょう?」

シャワーを浴びている途中、突然、明乃がこれからの事を薫に問う。

薫「……まあ、なる様になるしかないわね、取りあえずは、岬ちゃん!」

反乱艦として、追われ、降伏したのに攻撃され、また追われる身、後は、なる様になるしかない。薫は、そう考え、取り合えず艦長である明乃は、不安にならないよう伝える。

明乃「そうですね、私に不安そうにしちゃ駄目ですよね!……私は艦長なんだから!……そうだよ、もかちゃん……」

薫に言われ、明乃は、元気を取り戻す。

薫「フフフ」

入浴後、救助したミーナの様子を見に医務室へと向かった。

晴風、医務室

明乃「美波さん?」

明乃と薫は、ドアをノックし医務室に入る。

美波「艦長に教官」

薫「どう?」

美波「外傷は無い、脳波も正常……後は、意識が戻るのを待つしか……」

明乃「そっか……ありがとう……私、見るから美波さん、食事してきて……」

美波「感謝極まりない」

明乃は、そう言うのと美波は、お礼を言い医務室を出る。

明乃は、ベットで横になっているミーナを見て、微笑んだ。

薫「では、艦長！・・・私は、艦橋に戻るわ。」

明乃「あつ、はい！」

薫も艦橋へと戻って行つた。

時刻は、夕方、機関室で頑張っていた麻侖達も交代で一休みしていた。

晴風、大浴場

麗緒「汗かいた・・・」

桜良「やつとさつぱりしたね！」

麻侖「ああ、本当によつ壊れると思つたぜ・・・」

留奈「さあく待ちに待つた、カレーだ!!・・・カレー!!」

晴風、炊飯所兼食堂室

そして、食堂室では、待ちに待つたカレーがやって来た。

美甘「さあ・・・食べてよ〜！」

美甘がそう言うのと、可愛く盛られた晴風カレーが生徒達に振る舞われた。

鈴「これが晴風カレー!？」

幸子「やつと食べられますね！」

鈴と幸子は、晴風カレーを見て言う。

志摩「う、くまいつ!」

志摩は、待望の晴風カレーを食べ、幸せな顔をする。

幸子「甘がちだけどコクがあります!」

美甘「ブルーベリージャムを隠し味に入れてるから・・・」

幸子は、美甘に晴風カレーの感想を言う。

すると

光「美味しい!」

美千留「うん、美味しい!」

周りでは、美味しいと言う声が飛び交う。

『はあ・・・やったあ!!』

それを隣の炊飯所で見ていたほまれとあかねが喜んでいた。

美海「マツチにも持ってってあげよ・・・」

媛萌「何がマツチよ・・・」

百々「美化委員長はクロちゃん派ツスカ・・・?」

媛萌「はあ!?!」

食堂室で生徒達が和気藹々とカレーを食べ、談笑している中

洋美「あれ?・・・宗谷さんは?」

洋美は、食堂室にましろの姿がない事を確認する。

麻侖「さあ?・・・艦橋じゃねえのか?」

その頃、ましろは、薫共々、艦橋に残っていた。

晴風、艦橋

薫は、台の上で海図を見ながら、位置を確認し、ましろは、鈴と交代で舵を握っていた。

洋美「宗谷さん、お疲れ様・・・カレー持ってきたわ。」

すると、食堂室に居た洋美がましろの為にカレーを持って来てくれた。

ましろ「あ、すまない!」

ましろは、洋美からカレーを受け取る。

洋美「余り、無理しないでね!」

そう言って、洋美は、戻っていた。

そんな洋美にましろは、嬉しかった。

薫「良いな、ましろちゃん!・・・こんな風にカレーを態々此処まで持って来てくれる人がいて・・・」

横で見ていた薫が突然、ましろに嫉妬する。

ましろ「わ、私は、別にそんな積りは……」

薫の言葉にましろは、意地を張る。

薫「何てね、今のは、冗談よ!……さあ、早く食べないと折角のカレーが覚めちゃうよ!」

如何やら、冗談だった様だ。

ましろ「全く、教官は……」

薫の冗談にましろは、ふてくし、カレーを食べようと口に持っただろうとした時、
ビー……ビー……ビー……

突如、通信を知らせるベルが鳴る。

ましろ「通信?……はあ……ついてない……」

突然の通信でカレーが食べられなくなった事にましろは、ガツカリする。

薫「何言ってるの副長!!これも仕事なんだから、ちゃんとしなさい!!」
ガツカリするましろを薫が叱る。

ましろ「は……い……」

薫に叱られましろは、ガツカリしながら、艦内電話の受話器をとって耳に当てる。

ましろ「っ!?!」

その通信内容を聞いたましろは思わず目を大きく見開いた。

薫「如何したの副長!」

ましろ「非常通信です教官!」

薫「非常通信?・・・雅か、宗谷校長?」

ましろ「違います・・・武蔵です!!」

薫「えっ!」

武蔵の言葉を聞いて、薫は、持っていたコンパスを落とす。

そして、医務室に居る明乃にも

晴風、医務室

『艦長!・・・至急艦橋に来てください!』

艦橋からの呼び出しに明乃は、急いで艦橋に向かう。

晴風、艦橋

明乃が艦橋に着くと艦橋には、薫とましろの2人がいた。

しかし、何故か、薫は、驚愕していた表情をしていた。

明乃「シロちゃん如何したの?」

ましろ「非常通信回線が!」

明乃「何所から!」

ましろ「武蔵からです!」

明乃「武蔵!？」

武蔵の言葉を聞いて、明乃は、驚愕しながら、ましろから受話器を受け取る。

もえか『此方武蔵・・・此方武蔵・・・』

明乃「もかちゃん!?! 私、明乃!?! 何かしたの!?! 何があったの!?!」

明乃はもえかに話しかけるが、向こうの無線機の受信感度が低いのか、明乃の応答にもえかは答える事無く、必死に救援要請を伝える。

もえか『非常事態発生：至急、救援を：現在、アスンシオン島北西：アスンシオン島北西：至急救援を：至急救援を：・・・』

やがて、受話器からもえかの声は聴こえなくなり、晴風の艦橋は不気味な程の静寂に包まれた。

明乃「もかちゃん：：：」

明乃は受話器を持ったまま固まってしまふ。

そして、薫も

薫「はやてちゃん：：：」

もえかと一緒に乗艦しているはやての安否が気になり、固まってしまふ。

画して、砲撃してくるアドミラル・グラフ・シュペーから無事脱出に成功した晴風だったが、武蔵からのSOSに驚愕する。

一体、何が起きているのか、
そして、薫や明乃達は、反乱の汚名を無事そそぐ事が出来るのであろうか

第10章 八神はやての最期、決死の無線機奪取

此処で事態を明白にする為、時系列は、遡る。

4月8日

武蔵、艦橋

晴風が第二合流地点の鳥島沖を目指している頃、八神はやたと知名もえか以下3名は、武蔵艦橋に居た。

艦に異常事態が発生してから、もう2日は経っていた。

あれから、はやての指示のもと、長期戦に備え生徒の目を掻い潜って、必要な量の水と食料の確保には成功した。

だが、肝心の非常用無線機の調達ができなかった。

このままでは、状況の報告及び救援が呼ぶ事が出来ない。

とは言え、これ以上、5人で無口無表情でゾンビ見たいにあつちこち放浪うしている生徒達の目を掻い潜って、無線機の奪取に向かう事は難しい。

如何するか、疲れて休んでいるもえか達の前ではやては考えた。

そして、1日経った4月8日の午前5時頃、はやては、亜依子と夏美の2人を艦橋に

残し、もえかと親子の2人を引き連れ、無線室に向かう。

武蔵、通路

はやて「ん……他の生徒は、おらん見たいやね！……この隙に無線室まで行くんや……」

はやては、生徒がうろついていないのを確認し、急いで無線室に向かう。

親子「この通路を右に曲がった先が無線室です。」

はやて「2人共、離れんと付いてきて……」

3人は、放浪うしている生徒達の目を掻い潜りながら無線室に向かう。

通路を右に曲がろうとした時

はやて「!？」

右の奥から放浪うしている生徒2人と出くわしてしまった。

もえか「教官!？」

出くわした途端、3人は、その場で足を止める。

すると

異常な生徒『うがあ……!!』

此方に気づいたか、野人見たいに襲い掛かって来た。

はやて「はっ！」

襲ってきた生徒の1人をはやては、片腕を掴んで投げ飛ばし、更にもう1人の生徒の制服のえりを掴んで、投げ飛ばした。

投げ飛ばされた生徒2人は、その場で床に叩きつけられて、気絶してしまった。

もえか「……」

親子「凄い!？」

その光景を見たもえかと親子は驚く。

野人見たいに襲ってくる生徒2人を難なく倒してしまったのだから、驚いても不思議ではない。

はやて「さあ無線室まで急ぐんや！」

もえか「はい！」

生徒2人を倒し、3人は、無線室へと急ぐ。

武蔵、無線室

もえか「此処が無線室！」

無線室によくやく辿り着いた3人は、無線室に入る。

無線室に入ると中には誰も居らず、無線も無傷のままの状態ではあったらかされていた。

親子は、直ぐに無線機を取り、外部に連絡を取ろうとした。

はやて「どお吉田さん……学校との連絡は取れそう？」

親子「……駄目です!!……雑音が酷くて、通じません!!」

もえか「救難信号は？」

親子「それも駄目です。」

雑音が酷くて、通じず、救難信号も駄目だった。

しばらく待てば、ノイズも消えるかも知れない。

だが、このまま此処に居ても危険過ぎる。

はやて「しやくない、取り合えず非常用無線機だけでも持つて、艦橋に戻るんや！」

仕方なく、はやては、机の下にあつた非常用無線機だけでも持つて、艦橋に戻る事に

した。

はやて「……よし、誰も居ない様や……」

ドアの隙間から通路を除き、誰もいない事を確認し、通路に出て、来た道を通つて、急いで艦橋へと戻る。

武蔵、通路

はやて「此処を通れば甲板や！」

通路を進み来た道を通つて、艦橋へと向かう。

通路を通る中、放浪うしている生徒達と出くわさなかつた。

さっきのだけだったのだろうか、雅に幸運だつと思つた。

その時

はやて「はっ!？」

前から放浪うしている生徒が5人も現れた。

はやて「こつちや！」

はやて達は、急いで左の通路へと逃げる。

来た道から艦橋に戻れなくなった為、やむおえず他の道を通る。

しかし

はやて「はっ!？」

また、前から、3人ほど放浪うしている生徒が現れ、今度は、右の通路に逃げる。

もえか「教官!・・・何所に向かうんですか？」

最早、何所に向かつているか、もえかには分からなかった。

すると

はやて「確か、この先に艦橋に通じるエレベーターが有った筈や？」

はやては、一応、武蔵の艦内見取り図を暗記していたので、この先に艦橋に通じるエ

レベーターが有ると知っていた。

しかも、そのエレベーターは、まだ使用可能だ。

はやて達は、それで艦橋に戻るしかなかった。

左に曲がり、更に右に曲がり、通路を真直ぐ進む。

そして、やっとエレベーターに辿り着く。

もえか「良かった！・・・何とか辿り着きましたね教官！」

ようやく、エレベーターに辿り着き、もえかは安心する。

そして、親子がボタンを押し、エレベーターが下へと降りてくる。

はやて「はよ！・・・はよ来て!!」

しかし、降りてくるのに時間が掛かり、はやては焦る。

もえか「教官!？」

焦っているともえかが何事かとはやてを呼び、はやては、後ろを向く。

すると、後ろから、さつき放浪うしていた生徒が現れ、しかもその数は、先の4と5

人から10人程に増え、ゆっくりとこっちに向かってくる。

もえか「不味いです教官！・・・このままだと皆捕まってしまう。」

エレベーターもまだ降りてこない、後ろから放浪している生徒がゆっくりとこっちに

向かってくる。

最大の危機!!

その時

親子「あつ、間にあった!」

ようやく、エレベーターが降りて来て、3人は、急いで乗り込む。しかし

親子「あれ?・・・あれ?・・・」

はやて「どなんしたの吉田さん?」

親子「スイッチが・・・エレベーターのスイッチが作動しません!!」

何とエレベーターに付いている操作用のボタンが故障していたのだ。

もえか「如何して?・・・先まで動いていたのに・・・」

もえかが代わって操作しても全然反応がない、後ろから、放浪している生徒がどんどん近付いてくる。

このままだと捕まってしまう。

はやて、「そうや!!・・・こっちのスイッチは入るんやろ?」

はやては、ふっと入り口前の操作盤に気づく。

親子「多分、先操作したから動くと思います・・・しかし、それには誰かが此処に残らないと!」

親子の言う通り、入り口前の操作盤はまだ使えるが、それには誰かが残らなければならなかった。

しかし、それは残った者が彼らに捕まると言う選択だった。はやて「なら、私が残って操作する。」

何と、はやてが残って、入り口前の操作盤でエレベーターを操作すると言うもえか「駄目です教官！残るなら私が！」

はやてが残る事にもえかは、反対し、自分が残ると言い出す。

はやて「何を言つとるの知名さん！……貴方は、艦長やろ！……艦長は、皆を守る責任が有るでやろ！……ちやうか？」

もえか「そ、それは……」

もえかは、親子の方を向く。

はやて「これは、臨時教員である私の役目！」

もえか「……」

はやての言葉にもえかは、決めかねる。

すると、そんなもえかにはやてが肩に手を伸ばす。

はやて「優しい気持ち、ありがとう……そやけど、それは、あかん！」

もえか「えっ？」

はやて「初めて会った時から思ってたけど……もしかしたら、私ら、皆よう似とる……過去にずっと寂しくて、悲しい思いをして……一人やったら、できへん事ばかりで……」

もえか「教官……」

はやての言葉にもえかは、堆、涙を流す。

はやて「でも、忘れたらあかん！……今、貴方は、艦長や！……せやから艦長は、皆を守って挙げて……」

はやての別れの言葉を聞いた途端

もえか「きゃ!？」

はやてに思い切り押され、もえかは、エレベーターに無理やり乗せられる。

もえかが乗った後、はやては、急いでエレベーターのボタンを押す。

すると、エレベーターのドアが閉まり、上へと上がる。

もえか「教官!!……八神教官……!!」

上へ上がるエレベーターから、もえかは、はやてを連呼びする。

それが、もえかが見たはやての最期だった。

エレベーターが上へと上がった後、放浪している生徒がマジかにまで接近してきて、はやては、ポケットからある物を出す。

それは、お守り。

実は、龍之介から手渡されたお守りを薫がはやての身を案じ、出港前にはやてに渡したものだ。

はやて「神様……如何ぞ4人をお守りください!!……ほんで、薫先輩……御免なさい！」

そう言つて、はやては、放浪している生徒に囲まれる。

それ以降、はやての安否は分からなくなった。

武蔵、エレベーター内

もえか「……教官……」

上がるエレベーターの中でもえかは、悲しみのあまり、ドアの前で落ち込む。

親子「艦長……」

もえかの悲しむ姿に親子は、声をかける事が出来なかった。

しかし、悲しんでる訳にもいかない。

はやてから託された以上、もえかは、艦長として、3人を守る役目が有る。

そう思い、もえかは、悲しむのを止め、立ち上がる。

武蔵、艦橋

夏美「あれ?……エレベーターが動いている?」

艦橋に残っている夏美が作動しているエレベーターに気づく。

亜依子「如何したの、なっち？」

隣に居た亜依子が夏美の行動に気づく。

夏美「エレベーターが動いているの？」

2人は、エレベーターの入り口前に立ち、一体誰が上がってくるのか、すると、上がって来たエレベーターから

夏美「はあ!?・・・艦長！」

ドアが開き、中からもえかと親子が現れた。

夏美「艦長、無事だったんですね!!・・・良かった!・・・私、艦長達が無線室に行つてから心配してたんですよ！」

もえかが無事な事に夏美は、安心する。

もえか「ん、大変だったけど、何とか無線室まで行けたよ！」

亜依子「それで、無線は、救援は、呼べたんですか？」

親子「駄目だった・・・雑音が酷くて、学校との連絡はできなかつた。」

隣にいた親子が無線が通じなかつた事を2人に説明する。

夏美「そんな・・・じゃ私達、助けを呼べず、一生このままの・・・」

無線が通じない事を聞いて、夏美は、不安になる。

もえか「大丈夫よ角田さん・・・非常用の無線機だけでも何とか持つてきたから、ねえ

吉田さん？」

親子「はい……」

親子は、無線室から持つてきた非常用の無線機を二人に見せ、安心させる。

亜依子「良かった……これで助けを呼べますね艦長！」

ようやく救援が呼べる事に亜依子は喜ぶ。

だが

夏美「あつ……そう言えば……教官の姿が見えないんですけど、艦長、何所に？」

夏美がはやての姿がない事にふつと気づき、もえかに問う。

もえか「……」

しかし、もえかは、何も答えず

親子「……」

そして、親子も何も答えなかった。

夏美「……雅か!？」

夏美は、はやての身に何か遭った事に気づく。

夏美「艦長！教官の身に何か？」

はやての身に何が有ったかもえかに問う。

もえか「……」

しかし、もえかは、何も答えず、唯、首を横に振るう。

夏美「そ、そんな・・・」

もえかが首を横に振るうのを見て、夏美は、最早、はやてに何がったか、ようやく理解した。

亜依子「直ぐに助けに行きましよう艦長!!」

亜依子が直ぐははやての救出に行くべきだと言うが

もえか「それは、駄目よ小林さん!!」

はやての救出に行く事をもえかは反対する。

亜依子「でも、艦長!」

もえか「教官が言っただでしょう!!：私と教官のどちらかが戻らなかった場合、探しに來ないでって・・・だから、行っちゃ駄目!!」

はやての言葉に従い、もえかは、必死に亜依子を止める。

亜依子「教官・・・分かりました。」

もえかの説得で亜依子は、思い留まる。

夏美「これから如何するんですか艦長?」

これからの事をもえかに問う。

はやてを失い、この中で、もえかがリーダーになっていた。

もえか「取り合えず……もうエレベーターは使えない、無線室にも戻れない……此処で、救援が来るのを待とう……吉田さん、急いで非常用無線機を……」

親子「はい！」

親子は、早速、非常用無線機の修理をする。

最早、エレベーターも使えず、無線室にも戻れない、この非常用無線機だけが最後の望みだった。

数時間後

午後5時、作業も終わり、ようやく非常用無線機が使えるようになった。

夏美「これで届くの？」

本当に救援が呼べるか夏美は、不安になる。

親子「問題ない筈……唯電源がバッテリーしかないので使えるのは、数分かと……どうぞ……」

問題はないが、維持できる電力がバッテリーの為、使えるのが数分程度。

しかし、他に手がない。

親子は、もえかに無線機のマイクを渡す。

もえか「此方武蔵、此方武蔵……現在アスンシオン島沖北西10マイル……非常事態が発生しています……現在アスンシオン島沖北西、至急救援を……至急救援を……」

もえかは、電源が切れるまで、救援を呼び続けた。

それをたまたま、退避中の晴風が傍受した。

しかし、ノイズが酷く、横須賀女子海洋学校や海上安全整備局には届かなかつた。

こうして、もえか達は、守護神の八神はやてを失ったが、もえかは、挫けずはやてとの約束を守り、残った3人と一緒に艦橋に立てこもった。

第11章 晴風撃沈命令と龍之介の起訴

4月8日

横須賀女子海洋学校、会議室

晴風がドイツの留学艦アドミラル・グラフ・シュペーと奮戦後、南西へと退避中、武蔵では、八神はやてが自らを犠牲に非常用無線機の奪取に成功し、救援を呼んでいる頃、ある連絡が横須賀女子海洋学校に齎された。

老松「校長！……海上安全整備局より連絡です！」

真雪「読んで……」

真雪の秘書の老松亮は、恐る恐る報告する。

老松「はい……今回の晴風……速やかに学内で処理できない場合……大規模叛乱行為と認定し……その際、貴校所属艦は拿捕……それが不可能であるならば、撃沈するとの事です……」

何と、海上安全整備局から横須賀女子海洋学校に齎されたのは、問答無用の晴風への撃沈命令だった。

真雪「っ!？」

海上安全整備局からの晴風撃沈命令に真雪は驚く。

教頭「このままでは、本当に反乱と見なされて、ブルーマーメイド及びホワイトドルフィンの本隊の治安出動もあり得ます!!」

いくら晴風でもブルーマーメイド及びホワイトドルフィンの本隊を相手にはできない。

最悪の場合は、撃沈され、薫以下生徒は、全員死亡してしまう。

真雪「まだ、真実が分からないのに、生徒達を危険な目に遭わせる訳にはいかない!!」
海上安全整備局からの晴風撃沈命令に真雪は、席を立ち

真雪「私達は、生徒達の安全の為、あらゆる手を尽くしましょう!」

真雪は、晴風を救う為、あらゆる手を尽くすと宣言する。

教頭「はい!」

真雪「先ずは、国交相に連絡を・・・」

こうして、真雪達は、晴風を救う為、深町国交相などの幹部を説得する。

しかし、そんな中、真雪は

真雪（真霜があの命令を下したの?・・・いや、そんな筈は・・・）

海上安全整備局から下されたあの命令を真霜が下した命令とは思えない真雪。

いくらなんでも、自らの後輩達を殺す様な命令を自分の娘が下したとは思えなかった

のだ。

いや、思いたくなかった。

国土交通省、大臣室

その頃、真霜は、突然の晴風撃沈命令に激怒し、何故この様な命令を出したのか、その真意を確かめるべく、深町がいる国土交通省に一人で乗り込んで来た。

真霜「深町国交相!!」

ノックもなしに真霜は、大臣室に殴り込む。

深町「宗谷監督官!?!」

真霜が入ると深町は、机に座ったまま、その表情は、しよぼくれていた。

真霜「これは如何いう事ですか!?!」

そんな深町に真霜は、容赦なしに問い質す。

深町「何がだね?」

真霜「この命令は、何ですかと聞いているんです!?!」

真霜は、深町の前に真霜に送られた晴風撃沈命令書突き付ける。

深町「ああ、これか・・・」

真霜「まだ、事件の内容も分かっていないのに・・・何故、こんな命令を出したんですか!?!」

深町「そ、それは……」

真霜の問いに深町は、答え様にも答えられず

その時

「それは……私が出した命令だ……宗谷監督官！」

真霜「はっ!？」

突然、後ろからの言葉に真霜は振り向く。

真霜「あ、貴方は!?!……野田一誠元官房長官!？」

其処に立っていたのは、邦夫の父で元官房長官の野田一誠だった。

真霜「如何して、貴方が此処に?」

邦夫「失礼だぞ宗谷監督官!……国交相代行に対して、そんな口の言いかつたは!!」
一誠の後から息子の邦夫が現れた。

真霜「国交大臣代行!?!……嘘でしょ!……何故、野田元官房長官が国交相代行に……
雅か!？」

邦夫「察しの通り!……深町国交相は、今回の晴風の反乱で、たた今、国交大臣の任を解任され、自宅で謹慎が言い渡された……そして、今後の任を代行する為、私の父、野田一誠が国交大臣代行に就任した。」

何と、深町は解任され、その後がまに邦夫の父、一誠が国交大臣代行として、座った

のだと言うのだ。

真霜「何ですって!? 何故ですか深町国交相!?」

何故一誠が、真霜は訳を聞くが、深町は何も答えず。

邦夫「彼は、解任された! . . . 要が有るなら直接、国交相代行に言いたまえ、宗谷監督官!」

真霜「五月蠅い!! . . . 深町国交相! . . . 晴風は、拘束されている山本監督官は、如何するんですか!」

拘束されている龍之介達や追われている晴風は如何するの?

真霜は、必死で深町に問う。

だが、横から邦夫が

邦夫「晴風については、もう命令は下っている . . . それに山本監督官については、もう既に反乱罪で起訴する事が決まっている。」

邦夫の口から、晴風については、先の命令どおりに、そして、龍之介達に関しては、反乱罪で起訴を決めている様だ。

真霜「それは、貴方が勝手に決め付けている事じゃないの . . . 私は信じないわ!」

真霜は、邦夫の言葉を信じなかった。

邦夫「君が信じるか信じないかわ問題ではない . . . 命令は、下っているんだ!! . . . 大

人しく従いたまえ!!」

邦夫は、強引に真霜を従わせようとするが

真霜「ん……残念だけど……私は、その命令には従いません!!」

真霜は、拒否する。

一誠「……」

邦夫「貴様!……命令に逆らえば如何なるか分かっているのか?……二度とブルーマーメイドには居られなくなるぞ!!……もう一度言う……素直に従え宗谷監督官!!」
それに対して、邦夫は、命令に逆らえば二度とブルーマーメイドには居られなくなる
と真霜を脅す。

真霜「……私は、独自で晴風と山本監督官の無実を証明します……貴方々の指
図は受けない!!」

邦夫「何!?!」

真霜「では!」

真霜は、断じて従わず、独自で捜査すると邦夫と一誠に告げて、大臣室を出る。

邦夫「忌々しい女め!……国交相代行!……直ぐに宗谷監督官を更迭して下さい
!!」

独自で捜査する真霜を阻止しようと邦夫は、一誠に真霜の更迭を命じさせようとする

が

深町「待て！」

それに深町が待ったを掛ける。

深町「今彼女を更迭すれば、この事件の対策を仕切る者がいなくなってしまう……それだけじゃない……今後のブルーマーメイドの士気に関わる！」

確かに深町の言う通り、今真霜を更迭すれば、事件の対策を仕切る者がいなくなってしまう。

更にブルーマーメイドの士気が低下してしまう。

深町は、真霜の更迭を阻止しようとするが

邦夫「あんたは、解任されたんだから、命令される筋合いはない！……さあ国交相代行！……直ぐに宗谷監督官の更迭を！」

それに対して、邦夫は、解任されていると言つて、深町の意見を聞かず、一誠に真霜の更迭を命じるよう迫る。

しかし

一誠「いや……深町国交相の言う通り、今宗谷監督官を更迭すれば今後の対策が難しくなる……」

一誠は、深町の意見を尊重し、真霜を更迭しなかった。

邦夫「何を言ってるんですか!!……このまま宗谷監督官の独断を許しては、海上安全整備局の威信に関わりません!!」

邦夫は、怒り、真霜の独断を許せば海上安全整備局の威信に関わると言い張る。

一誠「なら、しばらく宗谷監督官の好きな様にやらせて……もし何も成果が得られなかつたら……その時は、堂々と更迭すれば良いのでは、野田監督官!」

それに対して、一誠は、邦夫にしばらく真霜の好きな様にやらせて、もし何も成果が得られなかつたら、その時は、堂々と更迭すれば良いと提案する。

邦夫「くう……この事は、総理に報告します!……おい!」

邦夫は、悔しながら一誠の提案を呑み、側近の2人を呼ぶ。

野田「深町前国交相を自宅まで、お送りしろ!それと監視を怠るな!」
『はっ!』

側近2人に連行され、深町は、自宅に監視付きで謹慎する事になった。

一誠「すまない……」

深町「分かってるよ!」

連行される時、一誠は、深町に謝罪し、それに深町は、分かっていたと一誠を責めず、大臣室を出て行つた。

邦夫「後は、あの男を落とすだけだ……フフフハハハ……!!」

こうして、真霜は、最大の後ろ盾を失い、孤立した。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

国土交通省から戻った真霜は、深く考えていた。

真霜「これから如何すれば……」

深町の後ろ盾を失い、完全に孤立した今、真霜は、これから如何すれば良いか迷っていた。

その時

『宗谷監督官！』

真霜「平賀監察官に福内監督官!?!」

突然、平賀と福内が真霜の執務室に入ってきた。

真霜「如何したの貴方達?」

福内「深町国交相の事は聞きました。」

平賀「私達も晴風と山本監督官の無実の証明に協力します……だから命令を……宗谷監督官!」

深町の解任と一誠の代理就任、更に晴風の撃沈命令や龍之介の反逆罪の起訴を聞き、2人は、邦夫のいい加減な命令に従わず、孤立した真霜を支えようと協力しに来たのだ。更に

「あたしも手伝うぜー！」

もう一人

真霜 「真冬!？」

何と真霜の妹でもある次女の真冬までも命令に従わず、姉である真霜に協力すると言う。

真冬 「さつき、あたしも聞いた……このままあの野郎に従っていたら、ましろや薫が殺されてしまう。」

真冬も真霜と同じ薫と一緒に晴風に乗っている妹の三女のましろが心配で一誠と邦夫が出した晴風の撃沈命令に腹をかいていた。

真霜 「貴方達……」

真霜は、自分が孤立していた訳じゃない、ちゃんと自分を支える身内や部下がいる事に、涙を流したかったが、今は、涙を流す時ではない。

真霜 「じやまず、平賀と福内は、このまま明石と間宮と共に晴風の搜索を……上より、先に晴風を抑えて……」

『はいー!』

真冬 「あたしは、何をすれば……」

真霜 「真冬は、保安即応艦隊を率いて、晴風以外の行方不明の学生艦を搜索して、晴

風が反乱したと同時に位置が不明なの、彼らの安否が気がかりだわ。」

真冬「晴風以外の学生艦の搜索なんて、気が乗らねが、確かに真霜姉の言う通り、他の生徒の安否も気掛かりだ!!・・・分かったぜ真霜姉!!」

真霜「じゃ、3人とも任せたわよ!!」

『はいー』

真冬「おう!」

こうして、真霜達は、晴風救出と龍之介達の無実を証明すべく、行動を開始。

そして

真霜「あつ、お母さん!」

真霜は、真雪に電話を掛ける。

真霜「心配しないでね!・・・晴風の事は、私が必ず助けるわ!・・・そして、龍之介も・・・だから、お母さん!・・・お願い!・・・協力して・・・」

真霜は、真雪にも協力を依頼する。

果たして、真霜は、邦夫より先に晴風を抑えられるだろうか?

そして、反乱罪で起訴される龍之介の無実を証明できるのだろうか?

第12章 パジャマでピンチ!

4月8日

17:00

日本近海、和歌山県沖

真雪や真霜達が行動をしている頃、晴風は、ドイツの留学艦アドミラル・グラフ・シュペーと奮戦後、南西へと退避、もっか行先不明のまま、和歌山県沖を航行していた。

晴風、艦橋

明乃（・・・武蔵からの救援要請・・・如何しよう・・・）

明乃は、先程、傍受した武蔵からのSOSを聞いて、心中は揺れに揺れ動いていた。ましろ「・・・」

心中が揺れ動く明乃をましろは、舵を握りながら見ていた。

だが、心中が揺れ動いていたのは、明乃だけじゃない。

薫（・・・はやてちゃん・・・何が遭ったの・・・）

薫も武蔵からのSOSを聞いて、もえかと一緒に乗艦しているはやての安否が気掛かりで心中は揺れ動きながら、海図を眺めていた。

晴風、甲板

晴風の艦首先では、楓が午後17時を知らせるラッパを吹いていたが、お世辞にも上手いとは言えない程だった。

そんな中、幸子は、被害状況を確認する為、各部を見回っていた。

晴風、第一主砲塔付近

幸子「武田さん!!」

美千留「!?!」

幸子「主砲の状況は、如何ですか?」

幸子は、美千留に各主砲の状況を聞く。

美千留「見ての通り点検中!・・・大部分は、自動化されてるけど、点検が大変だよ!・・・どうー光?」

幸子に状況を言いながら、美千留は、砲塔上で修理作業中の光に声を掛ける。

光「まだぐずずてるんだよね・・・この子・・・」

主砲の修理作業は難航していた。

幸子「あと、どれくらい掛かりますか?」

光「日没までは、何とかするよ!」

日没までには、主砲の修理作業が完了の予定の様だ。

幸子「よろしくお願いします!!」

『は〜い』

幸子は、主砲の修理作業を美千留と光に任せ、次に向かう。

晴風、第三主砲塔付近

美甘「おにぎりできたよ・・・」

晴風の第三主砲塔付近では、美甘が修理が忙しくて、食堂室まで食べに行けない生徒に対して、おにぎりなどを配っていた。

『ありがとう』

美甘「顔になつてるのが梅干が入つての・・・」

理都子と果代子は、美甘が振る舞つてるおにぎりに手を付ける。

幸子「松永さん、姫路さん!」

『ん!?』

2人がおにぎりを食べていると幸子が訪ねてきた。

幸子「こちらは何か以上ありませんか?」

幸子は、理都子と果代子に魚雷発射管の状況を聞く。

理都子「発射管は、異常なくし!」

果代子「ま〜あ、魚雷が1本も無いけど・・・」

魚雷が無い以外、発射管は異常はない様だ。

それを聞いた後、美甘が振る舞っているおにぎりを目を付ける。

幸子「皆さんのお食事は、おにぎりなんですネ！」

美甘「皆修理で食堂まで来れないし、忙しいから・・・」

美甘が幸子に話していると

美甘「あっ!？」

美甘は、ある事を思い出す。

美甘「武蔵から非常通信が着たて、本当？」

何所で聞いたか、美甘は、武蔵からのSOSが着た事を幸子に問う。

理都子「私もそれ聞いたよ・・・」

果代子「他の艦って、如何なってるのかな？」

2人も美甘同様、武蔵からのSOSが着た事は知っていて、他の艦が如何なったか気になる。

『あっ!?!』

そんな時

幸子「世界の全てが敵に回っただと!」『武蔵を沈める訳には、いかない!・・・南の果てまで逃げよう!』

行き成り、幸子が一人芝居が始まった。

『…………』

幸子の一人芝居に固まってしまい。

更に

美甘「そのネタ、あんまり面白くない。」

幸子「え…………!？」

美甘から、あまり面白くないと言われ、幸子は、悲鳴を上げる。

暫くして、各部の被害状況を確認し終えた幸子は、艦橋へと戻る。

晴風、艦橋

幸子「損傷の確認、出来ました。」

艦橋に戻って来た幸子は、各部の被害状況を報告する。

まして「状況は？」

動揺している明乃と薫に代わり、ましてが状況を聞く。

幸子「現在、機関修理中……3番主砲使用不能、魚雷残弾なし、爆雷残弾1発……
戦術航法装置並びに水上レーダー損傷、通信は、受信のみ出来ませんが……」

幸子の報告では、各部の被害状況は、深刻で、特にさっきのアドミラル・グラフ・シユ
ペーとの戦闘で第三主砲は、損壊し修理は、不可能。

更に機関も逃げる時に無理をした為、現在修理中。

弾薬も残り少ない状況。

ましろ「航行に必要な所の修理最優先でどれくらい掛かる？」

各部の状況を聞いて、ましろは、航行に必要な修理最優先場所を問う。

幸子「機関だけなら後8時間くらいですね。」

ましろ「まずは、其処からだな……」

取り合えず、機関から修理を優先にした。

ましろ「……機関長！……動きながらで、大丈夫か？」

ましろは、伝達管で麻侖に確認を取る。

麻侖『何とかするく！でも、巡航以上は、出せねいぜく！』

麻侖は、機関を修理しながら、答える。

ましろ「分かった！」

麻侖からの報告を聞き、ましろは、了承する。

ましろ「巡航で学校に戻る最短コースで良いですね・艦長？」

ましろは明乃に言うが、動揺していて気が抜けている為、全く反応がなく、すると五十六が明乃の頭の上に乗っかるが、反応なし。

そして、

ましろ「艦長!!」

今度は、ましろが大声で呼んだ。

明乃「えっ!?!・・シロちゃん、何?」

ましろの呼び出しに明乃は、ようやく気付く。

ましろ「はあ、すっかりして下さい・・」

明乃「御免、つい・・」

ましろ「全く、艦長は、気が抜けています・・そうですよね教官?」

ましろは、気が抜けている明乃に呆れてしまい、薫に言うが

薫「・・ん!?!・・何、副長?」

薫も気が抜けていた。

ましろ「・・はあ・・教官まで、もう・・」

明乃だけじゃなく、薫も気が抜けていた事にましろは、はあくど呆れてしまう。

数時間後、時刻は夜。

晴風、無線室

鵜「♪」

無線室では、鵜が歌いながら、スマホでオセロをしていた。

そんな時

鵜「!?」

突然、通信を傍受する。

鵜「海上安全委員会・・・」

傍受した内容を鵜は、スマホに記録する。

更にそれを艦橋にいる幸子に報告する。

晴風、艦橋

幸子「八木さんが、緊急電傍受したそうです。」

幸子は、緊急電傍受した事を報告する。

『何所から?』

幸子「海上安全委員会からの広域通信ですね。」

ましろ「広域通信?」

幸子が通信内容が書かれたタブレットを3人に見せ、それをましろが読み上げる

ましろ「えっと・・・現在、横須賀女子海洋学校の艦艇が逸脱行為をしており、同校全ての艦艇の寄港を一切認めないよう通達する・・・また、以下の艦は抵抗するような撃沈しても構わない・・・航洋艦晴風!」

内容の中に晴風の名前が記載されていた事にましろは、驚愕する。

薫「えっ!」

そして薫も驚愕する。

志摩「げ・・げき・・」

撃沈という言葉聞いて志摩は固まり

芽衣「撃つのは、好きだけど・・撃たれるのは、やだあ・・!?」

撃たれると知って、芽衣は、頭を抱えながら叫ぶ。

明乃「何所の港にも寄れないって事?」

ましろ「そう言う事だな・・」

鈴「私達完璧にお尋ね者になってるよ・・!?」

鈴は舵を握りながら大号泣。

そんな中、薫も

薫（晴風撃沈命令!?!?・・嘘でしょ!?!?・・真霜姉さん冗談でしょ!?!?）

薫は、こんな命令が嘘であってほしいと思つたが

これは嘘ではない。

明乃「もしかして、武蔵も同じ状況なのかも・・だから、非常通信を・・」

明乃は、先の武蔵からのSOSを思い出し、晴風と同じ状況だと察するが

ましろ「こつちと違って、簡単に沈む様な艦じゃない!」

ましろは、武蔵は、晴風と違って、巨艦だから大丈夫だと言うが

明乃「でも、助けを求めた!・・・だから・・・」

それでも、明乃は、助けを求めたと察するが

ましろ「我々の方が助けが必要だろ!!」

しかし、ましろは、武蔵より撃沈命令が下されている晴風が一番助けが必要だと明乃に訴える。

確かに今、我々は、反乱の罪を着せられ追われている。

更に撃沈命令が下され、何所の港にも寄港出来ない。

こんな状況で武蔵に構っている余裕は無い。

ましろ「それに、実技演習もしてない私達が如何やって助ける気だ!?!」

更にましろの言う通り、晴風の生徒は、入学したばかりのひよっこ達、演習もしていないのに救助に行くなど無謀である。

ましろ「学校へ戻る方針を変えるべきじゃない・・・武蔵の事は、学校に報告して任せよう!」

武蔵の事は、学校に任せ、我々は、学校に帰投すべきである事を明乃に分からせさせる。

ましろ「教官もそれで良いですね?」

そして、ましろは、薫の意見も聞く。

薫「……そうだね……副長の言う通り……今、私達は、してもいけない罪を着せられ追われている状態……こんな状況では、武蔵救援などもつてのほか!……私達は、急いで学校に戻り、これまでに至った経緯を宗谷校長に説明しなければならぬ……それは、分かるわよね艦長!」

薫も本当は、明乃と同じ武蔵を助けたかった。

しかし、今自分がすべき事は、一刻も早く横須賀女子海洋学校に帰投し、真雪に弁明しなければならぬ、その事を明乃に分からせさせる。

明乃「ん……分かりました教官!……シロちゃんと教官の優等生、学校へ戻ろう。」
2人の説得により、明乃は、横須賀女子海洋学校に帰投する事を決める。

志摩「うい!」

明乃の判断に志摩も同意する。

明乃「じゃあ私が艦橋に入るから、皆は、休んで……」

明乃は、皆に休むように言うが

幸子「今夜の当直は私とリンちゃんです。」

そう言つて幸子は、夜間当直表を明乃に見せた。

今日の当直は、幸子と鈴だった。

ましろ「正しい指揮をする為には、休むのも必要だ。」

明乃「私は大丈夫だから……」

薫「何を言ってるの艦長！……そんな状態で当直するなら、私が責任を問われるわ！！」

ましろ「良いから休んでください！！」

明乃「うん……分かったよ……シロちゃん……教官……」

ましろと薫の勢いに負けてすごすごと部屋に戻る明乃だった。

薫「じゃ、後は頼むわね2人とも……」

『はー』

明乃が部屋に戻った後、幸子と鈴を残し残りの4人も部屋に戻った。

晴風、艦長室

自分の部屋に戻った明乃は、浮かない表情をしていた。

明乃（もかちゃん……助けに行きたい……でも、今は……）

そう内心呟くと机の方を見る。

机の上には、写真縦が置かれていた。

その写真には、子供の頃の明乃ともえかが写っていた。

明乃「はあ〜」

暫くして明乃は、ベットで仰向けになる。

明乃「……もつと艦長として、しつかりしないと……」

明乃は、そう言いながら眠りつく。

その時

コン!!、コン!!

突然、ドアの叩く音がし、誰か来た様だ。

明乃「!?」

突然の訪問に明乃は、目が覚め、起き上がる。
すると

薫「岬ちゃん!……起きてる?」

何と訪ねて来たのは、薫だった。

明乃「はい!」

薫の訪問に何事かと思い、明乃は、返事をする。

薫「入るわよ!」

そう言つて、薫は、艦長室に入る。

明乃「教官……あの……何か用ですか?」

突然何ようか聞くと薫は、明乃の横に座り。

薫「先の事は、御免ね!……気にしてない?」

薫は、さつき明乃に武蔵救援などもつてのほかと言った事で、明乃を傷つけてしまったかと思ひ訪ねて来たのだ。

明乃「いえ、大丈夫です。」

明乃は、大丈夫だと言う。

薫「本当はね・・・私も貴方と同じ様に武蔵を助けに行きたい。」

薫は、自分が本当に思っている気持ちを明乃に言う。

明乃「えっ!？」

薫が自分と同じ気持ちだった事に驚く。

薫「でも今は、教員として、この晴風にいる生徒の事を優先にしないといけない・・・

それは、艦長である貴方も分かるでしょう?」

明乃「はい・・・」

薫の言葉に明乃は、また、浮かない顔をする。

明乃「!？」

すると、薫が明乃の肩に手を乗せる。

薫「大丈夫だよ!・・・向こうには、八神教員だって居るんだから、知名さんもきつ

と無事よ!」

武蔵には、はやてが居る。

はやてが付いていれば、明乃の友人である、もえかは、きつと無事だと明乃を元気付ける。

しかし、はやては、安否が不明の状況、その事は、薫は知らない。

明乃「そうですね!・・・八神教官も居るんだし・・・もかちゃんもきつと・・・」
薫に励まされ、明乃は、元気を取り戻す。

薫「その活きよ岬ちゃん!・・・じゃ、今日は、特別に私が一緒に寝てあげる!」
突然、薫と一緒に寝ると言い出した。

明乃「えっ!?!」

それに驚く明乃。

薫「如何したの?・・・私と一緒に寝るのが嫌なの?」

明乃「いえ、そんな訳では・・・」

堆、照れる明乃。

薫「じゃ、問題ないでしょ・・・」

薫の勢いに結局、一緒に寝る事になった。

ベットの上で2人は、手を繋ぎながら寝る。

その光景は、雅に親子見たいな光景だった。

一緒に寝る中

薫（よつぽど疲れていたのね……良く眠っているわ！……これで当直をするなんて……全く、無理するんだから……）

疲れて眠っている明乃を見て、こんな状態で当直をするとは、呆れた物だと思い眠りに付く。

それから、数時間、経つての事だった。

ビー……ビー!!

突然、ベッド横の内線電話が鳴る。

『!?!』

内線電話の着信音で2人は、目を覚ます。

幸子『艦長!……水測の万里小路さんが、何か海中で変な音がするって……艦長!!……

艦長!!』

明乃「配置つけ!」

艦橋にいる幸子からの報告に明乃は、直ぐ配置の命令を下し、乾いた製服に着替え艦橋に向かう。

薫も急いで教員用居住室に戻り、制服に着替え、明乃の後を追い掛けながら、艦橋に向かう。

晴風、艦橋

2人が艦橋に上がると、艦橋には、幸子と鈴が当直をしていた。

明乃「ココちゃん、報告して!!」

幸子「えつと：：方位30に二軸の推進機音、感2：現在音紋照合中です。」

艦橋に飛び込んできた明乃と薫に幸子は現状を報告する。

明乃「水上目標がないって事は：：」

薫「潜水艦!」

幸子の報告を聞き、2人は、直ぐに潜水艦だと察した。

芽衣「ふあく如何したの?：：こんな時間に：：」

欠伸びながら、まだ寝ぼけ眼な芽衣とアザラシの様なアイマスクを付けた志摩が艦橋に上がって来た。

更にもう1人

『ん!?』

明乃と幸子は、ある人物に注目する。

明乃「シロちゃんそれ!」

幸子「何やってるんですか?」

2人の目の前に立っていたのは、寝ぼけた状態で鮫のぬいぐるみを抱っこしたままのましろだった。

ましろ「ん……わぁ……これは……その、見るな!」

ましろは、慌てて、鮫のぬいぐるみを後ろに隠す。

薫「隠さなくても良いわよ副長! 可愛いわねその鮫のぬいぐるみ……フフフ……」
ましろの恥ずかしい状態を見て、薫は笑う。

光「主砲、配置よし!」

麻侖「機関は、まだ修理中!……巡航以上は、だせねえぜ!」

マチコ「見張り異常なし!……何も見えませんが……」

光、麻侖、マチコが艦橋に報告する。

ましろ「か、各部……配置に着きました……」

ましろは、恥ずかしがりながら明乃と薫に総員配置に付いた事を報告する。

楓「音紋照合いたしました……東舞校所属艦、伊201ですわ。」

音紋照合の結果、接近する艦艇は、東舞鶴男子海洋学校所属の潜水直接教育艦伊号第201潜水艦だと判明した。

明乃「ありがとう万里小路さん!」

楓『どう致しまして……』

芽衣「東舞校?」

聞き慣れない学校名に首を傾げる芽衣。

幸子「・・・男子校ですね!」

幸子が、タブレットで東舞鶴男子海洋学校がどんな学校なのかを説明する。

東舞鶴男子海洋学校とは、ブルーマーメイドと並んで、ホワイトドルフィンの養成学校である。

しかし、水上艦艇の多いブルーマーメイドの養成学校と違いホワイトドルフィンの養成学校は、潜水艦が殆んどで東舞鶴男子海洋学校もその一つである。

秀子「へえー男子校なんだ!」

すると、左舷側の見張りをしていた秀子が横から意外そうに言う。

まゆみ「潜水艦は全部男子校ですもんね・・・でも狭くて暑くて臭くて・・・」

秀子に釣られて、右舷側の見張りをしていたまゆみが潜水艦は、全部男子校の所属だと言う事を説明し、更に潜水艦のイメージ（悪い部分）を言う。

鈴「わ、私には無理・・・!」

鈴が潜水艦のイメージ（悪い部分）を聞いて、涙目で言う。

薫（やっぱり、平賀さんから聞いた通りだ・・・この世界の潜水艦は、向こうの世界の潜水艦と違って、居住性が悪いんだ・・・まあ、私が研修で乗艦した潜水艦は、ロス級だったから、艦内は、快適だったけど・・・）

薫は、前に潜航艇の訓練の時、平賀から潜水艦は、男性しか乗れない事は、聞いてい

たので、3人の話は、理解できていた。

芽衣「絶対追手だよ！・・・撃っちゃおう！」

追つてだと思ひ込み、先制攻撃を仕掛け様と芽衣は言う。

しかし

『・・・・・・・・』

薫（確かに先制攻撃も良いけど・・・もし、あの潜水艦がたまたまこの海域を航行していただけならば如何だろうか・・・航行してただけで此方が先制攻撃を仕掛ければ、正真正銘の反逆者になってしまう・・・それに、今は、あまり戦闘はしたくない・・・）

明乃もましろ、そして、薫も芽衣の意見に対しては、やはり消極的だった。

明乃「ココちゃん、伊201と通信できないかな？」

明乃は、伊号第201潜水艦と交信できないか試みる。

幸子「普通の電波は海水で減衰するので届きませぬね。」

幸子は、普通の電波では届かないと明乃に説明する。

明乃「じゃあ普段、通信は如何してるの？」

明乃は、伊号第201潜水艦が普段通信しているのか、分からなかった。

ましろ「潜水艦だからって、いつも潜ってる訳じゃない!!」

ましろは、潜水艦は、時々、浮上して、交信すると思つた。

大体は、合っているが、ちよつと間違つている部分もある。

例えば、薫の思っている事は、

薫「いや、シュノーケルさえあれば、一日中潜っている事もあるし……それに交信する時は、必ず通信用ブイを上げている筈……」

薫の言う通り、潜水艦は、シュノーケルさえあれば、一日中潜る事も可能だ。

更に交信する時は、必ず通信用ブイを上げて、交信する。

潜水艦での研修が此処で活かされている。

鈴「そうだね、時々海上の様子見ないと怖いよ!」

明乃「シロちゃん、潜つてる時は、向こうも外の様子をソナーで探つてるんだよね?」

明乃は、相手もソナーで外の様子を探っているのかと聞く。

ましろ「当然だ!」

ましろは、当然だと返す。

明乃「じゃあ、此方からアクティブソナーをモールの変わりに使つたら?」

明乃はアクティブソナーをモールの変わりに使う事をましろに提案する。

晴風、水測室

楓「恐らく可能だと存じますが……」

水測室で伊号第201潜水艦を捕捉していた楓も明乃の提案が可能だと言う。

晴風、艦橋

ましろ「そんな事したら間違ひなく砲撃したと思われるぞ!!」

ましろは、アクティブソナーを撃てば、間違ひなく砲撃したと思われ、反撃される可能性が大だと思ひ、明乃の提案に反対する。

芽衣「ソナーでも何でも良いから撃つちやえ!」

芽衣は撃てるモノなら砲弾だろうと魚雷だろうとアクティブソナーでも何でも良い様だ。

ましろ「馬鹿なこと言うな!!」

ましろは、高ぶる芽衣をおさえつける。

薫「艦長!・・・取り合えずやってみたら!」

薫は、明乃の提案を支持する。

ましろ「教官まで何を馬鹿な・・・」

ましろは、断固反対する。

薫「向こうのソナー員だつて、此方が出すアクティブソナーがモールスだつて事は、分かる筈よ!・・・なら、試す価値は、ある筈・・・」

薫は、最後まで希望を諦めなかつた。

明乃「万里小路さん!・・・所属と艦名、戦闘の意思は無い事を伝えて・・・」

晴風、水測室

楓「委細、承りました。」

楓は、アクティブソナーで伊号第201潜水艦と交信を試みる。

それから数十分後、モールルスに気づいたか、伊号第201潜水艦に動きがあった。

晴風、水測室

楓「目標進路変換・・・急速に深度を増していますわ。」

楓からの報告で伊号第201潜水艦は潜望鏡深度から更に潜航している。

晴風、艦橋

ましろ「だから言っただろう!!」

楓の報告を聞いて、怒鳴るましろ。

薫「・・・」

薫は、言い返せず。

明乃「でも、もしこれで、こっちの状況が伝われば・・・」

明乃は、伊号第201潜水艦とのモールルスでの交信は、無駄じゃなかったと言うがましろ「それは、そうだが、私達は、もうお尋ね者なんだぞ!」

ましろは、先程の海上安全委員会の広域通信で晴風撃沈命令の事を思い出す。

芽衣「やっぱり追手なんだって!」

芽衣は、やはり伊号第201潜水艦は、追手だと予測する。

鈴「は、早く逃げようよ……」

鈴は、ブルーマーメイドとホワイトドルフィンの艦艇が来る前に伊号第201潜水艦から逃げ様と言う。

明乃「リンちゃん、両舷前進微速！……ソナーの邪魔にならない速度で……」

それに対して、明乃は、ソナーの邪魔にならない速度で伊号第201潜水艦から逃げる事を選択する。

鈴「りよ、両舷前進微速!!」

鈴は、明乃の指示通り、ソナーの邪魔にならない速度で伊号第201潜水艦から逃げる。

しかし、潜航を続けていた伊号第201潜水艦は、直ぐに潜望鏡深度まで浮上、潜望鏡を出して、此方を見ていた。

晴風、艦橋

明乃「伊201って、どんな艦なんだろう……」

明乃は幸子に伊号第201潜水艦の情報が無いかを尋ねる。

幸子「えつとですね……あつ!?有りました!」

幸子は、タブレットのページをめくり、伊号第201潜水艦の情報を探し当てる。

幸子「基準排水量1070t、水中速力20ノットは出る高速艦ですね。」
幸子は、伊号第201潜水艦の性能を説明する。

明乃「20ノットって、晴風に比べたら、全然遅いよ!」

性能を聞いて、明乃は、水上速力と水中速力を勘違いする。

ましろ「こっちは、水上、向こうは、水中でそれだけ出るが凄いの・・・通常の潜水艦は、6ノット程度だ!」

勘違いする明乃にましろが説明する。

薫「艦長!・・・潜水艦は、水中では、バッテリーで動くから水上艦とは、違って遅いって事を覚えておきなさい!!」

更に薫も説明する。

志摩「20と6」

横から志摩が通常の潜水艦との速力の割合を言う。

明乃「へえく約3倍は、早いんですか・・・」

3人の説明で明乃は、ようやく理解する。

薫「まあ、本当は、50ノットぐらいは、出せる潜水艦も有るけどね・・・」

明乃「武装は?」

更に、搭載武装を聞く。

幸子「53cm魚雷発射管4門、25mm単装機銃2挺、魚雷10本！」
幸子は、伊号第201潜水艦の搭載武装を説明する。

その時

晴風、水測室

楓「魚雷2本いらっしやいました!!」

突然、晴風に向けて、伊号第201潜水艦は、魚雷2本を発射した。

晴風、艦橋

薫「!?!」

明乃「マロンちゃん、出せる限りで最大戦速!!」

楓からの報告を聞いて、明乃は急ぎ回避行動を取ろうと機関室の麻命に指示を出す。

晴風、機関室

その頃、麻命は、まだ、機関の修理に躍りになっていた。

麻命「今は、手が話せてえい、クロちゃん頼んだ!」

洋美「了解!」

麻命は、修理中の為、操作が出来ないので洋美に頼んだ。

晴風、水測室

明乃『万里小路さん!発射音はどっちから!?!』

明乃は楓に魚雷の接近方向を尋ねる。

楓「魚雷音方位270、近づきます!感2……感3……」

楓は、向かってくる魚雷を捕捉しながら報告する。

晴風、見張り台

続いて見張り台で見張りをしているマチコが魚雷の確認をする。

マチコ「了解!」

マチコは目を細めて、楓から指示が来た方向を見張る。

すると、彼女の目には此方に接近して来る2本の雷跡がはつきりと確認できた。

マチコ「雷跡左30度、距離20、此方に向かっている。」

晴風、艦橋

マチコの報告を聞いて、薫は、直ぐ左舷側デッキに出て、双眼鏡で接近してくる魚雷

2本を確認する。

明乃「リンちゃん!取舵いっぱい!」

明乃もマチコの報告を聞いて、左に回避するよう鈴に命じる。

鈴「と、取舵いっぱい!」

明乃の回避命令に従い、鈴は、左に舵を切り、回避運動を取る。

晴風、見張り台

マチコ「魚雷、衝突コースから外れます!!」
全速で左に回避したお陰で魚雷回避に成功。

晴風、艦橋

秀子「艦尾方向で2発爆発!!」

それた魚雷2本が晴風の後方で爆発した。

薫「爆発した!・・・磁気信管の魚雷!?!」

外れた魚雷は、合ったつてもいないのに晴風の近くで爆発した事に薫は、直ぐに磁気信管の魚雷だと分かった。

もし、明乃が全速で左に回避していなかったら、命中しなくても、至近で爆発して、被害を被っていたかもしれない。

明乃「あと8発：：タマちゃん左砲戦準備!」

魚雷回避後、明乃は即座に主砲の発射準備を志摩に命じる。

志摩「うん!」

志摩もそれに従い砲身を魚雷が来た方向へと向ける。

マチコ『目標、見えません!!』

ましろ「撃つたら、今度こそ完全に敵対する事に・・・」

明乃の砲戦準備にましろは反対する。

明乃「分かってる! . . . でも逃げ切るには」

しかし、明乃もそれは、分かっているが、今の現状で伊号第201潜水艦から逃げるには、一戦交えるしかなかった。

薫「そうね、艦長!」

薫も明乃の判断に賛成する。

ましろ「教官まで何を言ってるんですか!?! . . . 撃てば、敵対になります!」

薫「魚雷の迎撃だけすれば、敵対には、ならない筈でしょう副長!」

薫は、あくまで魚雷の迎撃だけすれば、敵対にならないと判断する。

ましろ「」

薫「立石さん! . . . 砲戦の時は、砲弾を魚雷の近くでも良いから合せて . . . 相手

の魚雷は、磁気信管の魚雷だから、近くで爆発させれば、魚雷は、自爆する筈!」

薫は、先程の魚雷が磁気信管の魚雷だと分かり、対応策を志摩に教える。

志摩「うい!」

薫の対応策を理解したと言う志摩。

鈴「ぜ、全速が出せれば、多分振り切れると思うけど」

麻侖『だから全速は出せねえって!!』

鈴「わ、分かっています」

鈴が全速を出せば、逃げ切れるのだが、今は機関の点検中なので全速を出すことが出来ない事を忘れていたのか、そう呟くと、機関室の麻侖から怒声が飛び、縮こまる鈴だった。

明乃「万里小路さん！相手の位置分かる？」

明乃は、伊号第201潜水艦の位置を知ろうとしたが

晴風、水測室

楓「恐れ入りますが、もっとゆっくり進んで頂かないと……」

出せる限りの全速で逃げてゐる為、水音が乱れて、伊号第201潜水艦の正確な位置が掴めなかった。

晴風、艦橋

鈴「速度落としたら、やられちゃうよ！」

鈴の意見も最もだ。

速度を落として、相手の位置を掴む前にやられてしまう。

明乃「兎に角、今は逃げ回ろう！」

薫「そうね！……水中では、向こうが有利だから、三十六計逃げるにしかず……」
相手が水中にいては、手も足も出ない、今できるのは逃げ回る事だけだった。

一時間後

マチコ『周囲、何も見えません・・・』

マチコから周辺に異常はなく、平穏な夜の海が広がっている報告を受ける。

ましろ「1時間経過か・・・速度差からも、十分距離は、開いたかと・・・」

明乃「そうなの？」

ましろ「向こうも、最高速度ですつと水中を動けるわけじゃない!」

最初の攻撃から一時間が経過し、ましろは、伊号第201潜水艦を振り切ったと推測する。

明乃「じゃ、何とか逃げられたかな？」

明乃は、伊号第201潜水艦を振り切った事に安心する。

鈴「逃げるなら任せて!」

鈴が自信満々で答える。

幸子「それって自慢する所ですか・・・」

幸子が茶化す様に鈴に尋ねる。

鈴「こ、ココちゃん!」

鈴と幸子のやり取りに艦橋は笑い声が満ちた。

しかし、薫だけは、安心ができなかった。

薫（本当に逃げ切れたの？・・・もしかして、私達が逃げ切ったと思わせて安心している隙を狙ってるんじゃないや・・・学校では対潜水艦戦を勉強したけど・・・何か大事な事を忘れてるような・・・）

薫は、厳しい表情で外を見ていた。

薫も国防軍で対潜水艦戦を学んでいたけど、薫が所属しているGフォースは、ゴジラ戦が殆んどだった為、研修は、受けても潜水艦戦の実戦経験がない為、経験不足だった。何れ、それが仇になる。

晴風、水測室

明乃『万里小路さん！・・・何か聞こえる？』

明乃が水中にも何か変化がないか楓に尋ねる。

楓「あら、お許しあそばせ!?・・・起きておりますわ・・・」

楓は少しウトウトしながら答える。

晴風、艦橋

明乃「御免ね、こんな遅くまで：でも、もう少しお願い・・・」

本来ならば、寝ている時間であったが、完全に潜水艦の脅威が去っていない中、水測員の楓を任務から外すわけにはいかなかった。

其れに対してすまなそうに言う明乃。

晴風、水測室

楓「畏まりました!」

楓ももう一息と気合を入れて、ヘッドホンを耳に当てた。

晴風、艦橋

志摩「ふわあ……ねむい……」

芽衣「ふわあ……駄目だ……眠い……」

志摩は大きなあくびをし、芽衣も大あくびをし、2人とも寝不足になり、集中力はダ
ダ下がりの中、

ほまれ「そんな、皆さんに杵崎屋特製のどら焼きです。」

ほまれが夜食の差し入れにどら焼きを艦橋に持ってきた。

芽衣「どら焼き!」

特に芽衣の食いつきがものすごく、もし、彼女に尻尾があれば、勢いよく振っていた
だろう。

志摩「……メイ：犬みたい……」

そんな芽衣の様子を見て、志摩がポツリと呟く。

芽衣「い、犬!? ……そう言うタマは猫じゃん!! // // // //」

志摩「うい!」

芽衣と志摩のやりとりに艦橋メンバーは苦笑しつつどら焼きを食べ始める。

薫「他の部署には、もう配ったの？」

薫が他の部署にはもうどら焼きがいきわたったのかを確認する。

ほまれ「はい教官！・・・艦橋が一番最後です。」

薫「そう、遅くまでありがとう。」

どら焼きの登場で艦橋の気が緩む。

晴風見張り台

見張り台で見張りをしていたマチコは、振り切ったと知り、休憩を取って、どら焼きを食べようとした時

マチコ「はっ!？」

突然、魚雷2本が晴風目掛けて、向かって来たのを目視で確認する。

マチコ「雷跡フタ！・・・左120度30！・・・此方に向かう！」

マチコからの報告で艦橋はさっきまでの空気から一転し、再び緊張した重苦しいものへと変わる。

回避運動で揺れは艦全体に響く。

晴風、医務室

ミーナ「・・・な、何じゃ!？」

その揺れと轟音は医務室で眠っていたミーナを起こすには十分の威力だった様だ。

美波「目が覚めたか？」

起きたミーナに美波が声をかける。

美波「意識はしっかりしているか? . . . 此処は横須賀女子海洋学校所属、航洋直接教育艦晴風の医務室だ . . . 私は衛生長の鏑木美波 . . . アドミラルシュペーの乗組員とみるが、間違いはないか？」

ミーナ「う、うむ、ワシはアドミラルシュペーの副長、ヴィルヘルミーナ・ブラウンシュヴァイク・インゲノール・フリーデブルクだ . . . しかし、一体如何して . . . 」

ミーナは、自分が何故此処にいるのか聞く。

美波「シュペーからお前が飛び出してきて、しかもそのシュペーに攻撃されていたのだと聞いている . . . うちの艦長と教官がスキツパーで出て、気を失っていたお前を回収してきたんだそうだ . . . 何か覚えて . . . 」

その時、また逃走に入ったのか、晴風が大きく揺れ、美波はバランスを崩した。

ミーナは、咄嗟に美波の肩を掴んで支える。

ミーナ「大丈夫か? 今、一体如何なっておる? 」

美波「この晴風は現在潜水艦に追われている様だ。」

ミーナ「潜水艦? . . . 潜水艦からの攻撃を受けているのか? . . . だが、これは . . . 」

ええい、此処では拉致があかん！・・・ワシの制服は何処じゃ!!」

美波「此処に有る・・・濡れていたが洗濯し、乾燥機にかけてある。」

美波が机の上に置いてあつたミーナの制服を彼女に手渡す。

すると、ミーナは美波がいるにも関わらず、今着ている検診衣を脱ぎ捨て、制服を着用する。

ミーナ「艦橋はどっちじゃ!？」

美波はほんの一瞬だけ悩んだが、直ぐに頷き医務室の扉を開く。

美波「案内しよう、急げ!!」

ミーナ「分かった!」

美波は、ミーナを艦橋まで連れて行く。

晴風、通路

ミーナ「自分から聞いておいてなんじゃがそう簡単に艦橋まで案内して良いのか?」

美波「今、この艦に沈まれてはお前も困るだろう?・・・孫子に『同舟相救う』という言葉がある・・・例え敵同士や見えず知らず同士であつても、乗り合わせた舟の危機に際してはお互いに助けあうといった意味のものだ・・・私はそれに賭ける!!」

ミーナ「ふむ、成程のお・・・そう言う事なら力になつちやるけん」

美波「広島弁か?・・・まあ、いい・・・艦橋はその先だ!」

ミーナ「ド感謝する!」

ミーナは美波と別れ、艦橋を目指していった。

晴風、艦橋

明乃「あと6本・・・」

ましろ「こんなに直ぐ見つかるとは・・・」

明乃とましろは、向こうの魚雷の残存数を確認しながら双眼鏡で魚雷が爆発した方向を確認する。

薫「如何して!?・・・何でこんなに向こうは正確に撃てるの?・・・まるで私達の位置が分かるみたいにな・・・」

何故、此方の位置が分かるのか、薫は、不思議にも大事な事に気づいていなかった。

その時

ミーナ「このド下手くそな操艦は、何何だ!・・・艦長は誰じゃい!・・・この船はド素人の集まりか!」

突然、誰かの怒鳴り声が艦橋に響き、3人は、デッキから艦橋に戻ると、其処には、前のアドミラル・グラフ・シュペーとの戦闘で救助したミーナがいた。

薫「貴方は!?あの時のシュペーの・・・」

幸子「今、潜水艦と戦闘中ですよ・・・」

ミーナ「そんな事、分かっどる！・・・ならば夜戦中なのに照明が付けっつているとは、何事だ!!」

ミーナは、何故、潜水艦と戦闘中なのに照明を付けているのか問う。

薫「はあ?!・・・しまった!・・・艦長、急いで照明を消して・・・早く!!」

すると、ミーナの言葉に薫は、慌てて、照明を消すよう指示する。

明乃「は、はい、全部照明消して!!」

薫の指示で、晴風の全部の照明が消える。

芽衣「何にも見えない!?!」

いきなり照明を消されうろたえる芽衣。

ミーナ「陽明を鳴らしておかないからだ!」

ミーナの指示で直ぐに赤色灯が付いた。

ミーナ「航海灯も消せ!どま抜けどもが!」

更に付いていた航海灯も消され、これで晴風は、完全に伊号第201潜水艦の視界から消えた。

薫「御免なさい皆!・・・私の経験不足だわ!・・・よりにもよって、照明を消すのを忘れるなんて・・・」

自分の経験の未熟さに落ち込む薫。

鈴「こんな事したら、他の船とぶつかっちゃう……」

ミーナ「戦闘時に自分の姿を晒すドアホがいるか!……取り舵いっぱい!!」

鈴がそう言うのと横からミーナが鈴を怒鳴り、鈴は、驚愕し、更にミーナは、左に舵を切るよう指示する。

鈴「と、取り舵いっぱい!……取り舵20度……」

鈴は、驚愕しながら左に舵を切る。

ミーナ「聴音聞き逃すなよ……」

楓『畏まりました。』

ミーナ「これで、少しは、時間が稼げる筈だ!!」

ましろ「……お前は、誰だ?」

ましろは、ミーナに自分は、誰かと聞くと、艦橋にいる全員が注目する。

ミーナ「ん……ワシは……ヴィル……」

ミーナが名を乗ろうとした時

明乃「あつ!?!……ドイツ艦の子だよ!……目が覚めたんだ!?!」

ミーナが名乗る前に明乃が彼女の正体を言ってしまう。

ミーナ「いや、それより今は、戦闘だ……直ぐに反撃の準備に移る……潜水艦戦ならワシに任せろ!!」

明乃「へ……」

ミーナの心強さに明乃は、感心する。

ミーナ「潜水艦の本場は、ドイツだからな！」

『お……』

更に艦橋にいる者もミーナに感心する。

幸子「流石ドイツ！」

鈴「ドイツ？」

幸子と鈴は、そんなミーナを褒め、ミーナは、照れる。

薫「ならば、貴方も戦闘に参加してください!!」

ミーナ「お主は？」

薫「私は、この晴風の教員の山本薫です。」

ミーナ「分かりました教官殿！」

薫の指示でミーナは、戦闘に参加する。

ミーナ「では、先ずは、どぎほんの爆雷で……」

ミーナは、早速、反撃に爆雷の指示を出す

ましろ「一発しか無い！」

横からましろに爆雷が一発しか無い事を言われ止める。

ミーナ「じゃ、土手版の対潜迫撃砲を……」

ましろ「そんなの積んでないって……」

ミーナ「Mk32対潜魚雷は？」

ましろ「いつの時代だよ、てか、知らん！」

ミーナ「じゃ、何があるんじゃない?!」

ミーナは、ひたすら装備していない武装を言い、ましろがひたすら、それを切り捨てる。

それを聞いた鈴と幸子が面白そうに笑っていた。

明乃「そう、私達には、何も無い……だから、知恵を貸して欲しいの……」

明乃は、ミーナに知恵を貸して欲しいと頼む。

ミーナ「水中で動くものは、何か無いのか？」

明乃がそう言うとミーナは、明乃に水中で使用できる物が無いか問う。

明野「う……ん……」

明乃は、水中で使用できる物が何かないか考える。

ミーナ「何っか？」

考えている明乃にミーナは、急かす。

薫「有るじゃないの！」

明乃「え!？」

突然、薫が水中で使用できるのが有ると言われ、明乃は、何かと頭を?にする。

薫「有るじゃないの・・・あれ!」

分からない明乃に薫は、ヒントにある物を指す。

薫の指さす所には、志摩が付けていたアザラシのアイマスクを付けた五十六が歩いて
いるだけだったが、その上を見ると椅子の上にもしろが持っていた鮫のぬいぐるみが置
いてあった。

明乃「・・・ああ!？」

鮫のぬいぐるみを見て、明乃は、薫が言う事をようやく理解した。

薫が言う水中で使用できる物、それは、殆どどの艦が備え、機雷除去によく使われる
物、掃海具だ。

晴風、後部甲板

明乃『掃海具用ゝ意!』

明乃は、掃海具用意の指示を出す。

美海「掃海具用意!」

美甘「掃海具つて、これ?」

明乃の指示のもと、美海と美甘が掃海具の用意をする。

美海「ほっちゃん、あっちゃん手伝って……」

『分かった!』

更にほまれとあかねが作業に入る。

ほまれ「重い〜!」

あかね「腕痛い〜!」

美甘「頑張つて……」

苦しい言葉を言いながら、掃海具の準備作業を続行する。

晴風、見張り台

マチコ「雷跡1つ、左150度、20、此方に向かう!」

掃海具の準備作業が続く中、またしても、魚雷1本が晴風に向かってきた。

晴風、艦橋

明乃「リンちゃん、面舵一杯!」

明乃は、直ぐ回避行動に移る。

鈴「面舵いっぱい!面舵20度……」

明乃の指示で鈴は、右に舵を切る。

晴風、後部甲板

晴風が右に舵を切る中、後部甲板では、美海が防雷具落下機に登り、防雷具を外そう

とした時

美海「うあ．．．うあ．．．!?」

急な舵切りで思わず手を話してしまい落下する。

晴風、艦橋

明乃「あと5発．．．このまま右に180度回等、発射方向に正対して!」

魚雷の回避に成功する中、今度は、伊号第201潜水艦に向けて転進指示を出す。

鈴「りよ、了解!」

鈴は、転進する為、更に舵を右に切る。

ましろ「艦長! 一体、掃海具で何を?」

転進する中、ましろは、掃海具で一体何をやる気なのか明乃に問う。

薫「まだ分からないの副長!．．．掃海具でやる事と言ったら、あれでしょ!」

すると、薫がましろにあれと言って、ヒントを出す。

ましろ「あれって、何ですか教官?」

だが、薫がヒントを出してもましろは、全く分からなかった。

薫「鈍いわね．．．掃海具を使って潜水艦のスクリーンに絡ませるの!」

仕方なく、薫は、答えを言う。

ましろ「な、成程、魚みたいに釣るんですね教官!」

答えを知って、納得するましろ。

薫「そう……全く、何で分からないんだろう。」

基本的な事しか知らないましろに呆れる薫。

明乃「掃海具どお?」

薫がましろに説明する中、明乃は、艦内無線で掃海具の準備ができたか、確認する。

美海『うわ……!?!』

明乃「ん!?!」

突然、受話器から悲鳴が聞こえ

明乃「ミミちゃん、大丈夫?」

明乃は、何かと思った。

晴風、後部甲板

その頃、美海は、急な舵きりで思わず手を放してしまい落下しそうになったが何とか、防雷具落下機に捕まり、落下を回避したが、今度は、転進した為、艦がぐるりと回等し、その影響で防雷具落下機自体がグルグル回り始めた。

美海「うあ……うあ……!?!」

グルグル回る防雷具落下機にしがみ付きながら悲鳴を上げる美海。

ほまれ「何だか止めないど？」

あかね「でも、船が揺れてって……」

2人は、美海を助けようと防雷具落下機を止め様とするが、艦が揺れている為、できそうになかった。

その時

美甘「掃海具、外して!!」

横にいた美甘が防雷具を外すよう2人に指示する。

『ん、ん』

2人は、急いでレバーを操作して防雷具を外す。

ほまれ「ふう……」

あかね「……ふう……」

美甘「あ、危なかった……」

美海「掃海具よし!!」

4人の努力で防雷具は海中に落下し、準備は完了した。

晴風、艦橋

ましろ「あれで何とかなるのか？」

明乃「多分……」

ましろは、防雷具で敵のスクリューを狙うのに不安を言い、明乃は、多分と告げる。

明乃「機関、一瞬だけ全速出せる？」

更に明乃は、機関室の麻侖に一瞬だけでも良いから、最大速度が出せるか問う。

晴風、機関室

媛萌「つて、言ってるんですけど……」

機関の修理に応援に来ていた媛萌が明乃の問いにできるかどうか麻侖に問う。

麻侖「……しかつたねえ、10秒だけ……それ以上は、責任もつてねな！」

それに対して、10秒だけなら、最大速度が出せると判断する。

晴風、艦橋

媛萌『だそうです。』

明乃「お願い！」

明乃は、ちゃんとお願いをする。

薫「私からもお願い、今は、なるべく逃げ切りたいから……」

薫もちゃんとお願いをする。

媛萌『は〜い』

2人にお願いされ、媛萌は了承する。

暫くして、転進した晴風は、潜航する伊号第201潜水艦の頭上を通過。

通過中、ワイヤーで係留されている防雷具が伊号第201潜水艦の艦橋に衝突する。

明乃「あっ!!?・・・今、当たった?」

衝突音に気づいた明乃。

ましろ「さあ?」

明乃「うゝん、もう少し、速度を落としてみる?」

だが、ましろは、衝突音に気づかなかった。

その為、当たったか如何か、感触が分からなかったので、もう少し速度を落としてみようとしたが

ミーナ「いや、此処は誘い込め!・・・さっきの手応えは、間違いない!」

ミーナは、先の衝突音を聞き逃さなかったので、このままの速度を維持し、誘い込むよう指示する。

芽衣「ほんとに?」

しかし、本当にと艦橋の皆は、迷うが

薫「彼女の言う通りよ皆!・・・さっきの手応えは、間違いないわ!!」

しかし、薫もミーナと同じ先の衝突音を聞き逃さなかったのでミーナの指示を尊重する。

明乃「分かりました教官!・・・リンちゃん、あか15」

明乃は、それを了承し、鈴に強速へと速度を落とすよう指示。

鈴「あか15・・・」

鈴は、第一戦速から強速に落とす。

明乃「そのまま徐々に強速まで落として・・・」

明乃は、更にゆっくり落とすよう指示

鈴「ヨーソロー!」

鈴は、ゆっくり強速まで落とす。

明乃「タマちゃん、砲戦準備!」

そして、今度は、志摩に主砲の射撃準備命令を出す。

志摩「うい!」

薫「主砲は、悪まで魚雷のみを迎撃、立石さん頑張つて!」

志摩「うい!」

薫に励まされ、志摩は、やる気を出す。

晴風が速度を落とす中、後方に回った伊号第201潜水艦は、直ぐに180度回等、其処から4本の魚雷を発射した。

晴風、艦橋

楓『魚雷音、ちようち!』

『はっ!?!』

晴風、水測室

楓「雷数4・・・真後ろからいらしゃいました!」

晴風、艦橋

明乃「おもしろくさじ!」

伊号第201潜水艦が誘いに乗り、魚雷を発射した事により、明乃は、直ぐ回避行動に出る。

ミーナ「探照灯・・・照射始め!」

続いて、ミーナの指示のもと、探照灯が照射され、海面を好走する魚雷が映し出された。

まゆみ「見つけました!!」

明乃「面舵いっぱい!戦闘右砲戦!!」

魚雷発見の報告を聞いて、明乃は、そのまま舵を右に切つたまま艦体をぐるりと回等しながら砲戦に入る。

薫「撃ち方、始め!」

薫が志摩に射撃命令を出す。

志摩「撃て・・・!」

航走する魚雷に向けて、主砲を一斉掃射。

砲弾は、魚雷の至近で爆発し、衝撃で魚雷の磁気信管が誤作動を起こし、魚雷全部が自爆した。

晴風、見張り台

マチコ「潜望鏡視認、右10度25!」

魚雷迎撃に潜航する中、マチコは、海中に没する潜望鏡を発見、伊号第201潜水艦の位置を捕捉した。

晴風、艦橋

薫「爆雷攻撃、始め!」

この機を逃さず、直ぐに薫は、爆雷攻撃の指示を出す。

芽衣「やつと撃てる・・・爆雷投下!!」

やつと撃てると待ち望んでいた芽衣が爆雷投下を命じる

晴風、後部甲板

美海「投下!」

艦橋からの指示のもと、爆雷投下の命令が下り、ほまれとあかねがきつそうにしながら重いレバーを操作し、爆雷を投下する。

明乃「おもしろくじ!」

鈴「ヨーソーロー！」

爆雷投下後、直ぐに退避行動に出る。

伊号第201潜水艦も爆雷の安全深度100mまで急速潜航しようとしたが、運悪く、晴風が係留している防雷具の係留ワイヤーがスクリューに絡みついてしまい、伊号第201潜水艦は潜航出来なくなり、それに追い打ちをかける様に投下された爆雷が頭上で爆発した。

付近で爆発の水柱が立つ。

晴風、艦橋

マチコ『右舷、気泡確認！』

楓『浮上します！』

航行不能となり、更に至近で爆雷を諸に命中した伊号第201潜水艦は戦闘不能となり、沈没を避ける為、急速浮上を開始した。

やがて晴風の右舷に伊号第201潜水艦が急速浮上した。

ましろ「今です！・・・艦長、教官、逃げましょう!!」

幸子「最短コースは既に選定済みです!!」

明乃「ワイヤー切り離して・・・両舷前進強速!!」

伊号第201潜水艦の浮上を確認した途端、明乃は、直ちに現海域からの離脱を指示

する。

晴風、無線室

鶴「伊201、からの国際救難信号の発信と応答を確認・・・現在東舞校教員艦が30ノットで接近中・・・」

戦闘続行が不可能になった為、伊号第201潜水艦がSOSを発信。

それを傍受した東舞鶴男子海洋学校所属の教員艦が、此方に向けて急行中の報告が入る。

晴風、艦橋

明乃「取り舵一杯!20度、ヨーソロー!」

鶴からの報告を受け、明乃は、急いで当海域からの離脱を指示。

鈴「さっさと逃げようよ・・・!!」

鈴は号泣しながら、舵を切り切る。

晴風は浮上した伊号第201潜水艦を放置して、東舞鶴男子海洋学校所属の教員艦が来る前に現海域を離脱した。

4月9日

5:40

数時間後、ようやく海域からの離脱に成功、黙過進路を北に取るが行き先は不明。

そんな中、明乃と薫がミーナの事情聴衆をするべく医務室に向かう。
晴風、医務室

明乃「美波さん、起きてる？」

美波「臣民暁を覚えず、魚雷に砲火の音、一服の茶をきすいする。」
2人が訪ねると美波は、寝不足ながら、難しいことわざで答える。

薫「何だか意味が分からないような・・・」

美波は、持っていたマグカップを明乃に渡す。

明乃「ありがとう」

美波からマグカップを受け取る。

中身は、ココアの様だ。

明乃は、躊躇わず飲む。

すると

明乃「うえ〜！しょっぱい!？」

強烈な苦みに明乃は、吐いてしまう。

薫「ちよつと、大丈夫!？」

薫は、直ぐに明乃の背中をそそぐ。

美波「青人魚名物、塩ココア」

如何やら、マグカップの中身は、塩ココアだった様だ。

明乃「ひよとして、塩だけで砂糖を入れなかったの？」

美波「フフ……」

明乃の問いに美波は、フフと笑う。

明乃「美波さん、わざと!？」

薫「その口ぶりだと、わざととね！」

美波の笑いに2人は、わざとだと察する。

美波「教官も、如何です？」

今度は、薫に飲ませ様としたが

薫「結構です!!」

きちんと断られた。

明乃「あっ!?!……ところでシユペーの子は？」

明乃は、美波にミーナが何処にいるか聞くと

ミーナ「何だ?……ワシに何かようか？」

突然ミーナが医務室に入ってきた。

薫「先は貴方もご苦労様!お陰で助かったわ!!」

薫は、さっきの戦闘での礼を言う。

ミーナ「いえ、こっちは、寝ていたところを、叩き起こされたからな……」
ミーナは、ベツトの上に座る。

薫「それで、今から貴方の事情聴衆をしたいんだけど……良いかな？」

薫は、来て早々にミーナに事情聴衆をしたいとお願いする。

薫は、ミーナの艦が何故、白旗を出した晴風を攻撃したのか？

何故、ミーナ、一人だけが、艦を離れて、此方に着たのか？

その理由を聞いて、今、何が起こっているか、解明したかったのだ。

ミーナ「ワシにですか？……分かりました教官殿！」

薫の事情聴衆にミーナは、素直に受ける。

明乃は、ミーナの隣に座り、薫は、証拠として、会話の内容を記録すべく、持っていたタブレットのボイスレコーダーで、録音しながら事情聴衆を始めた。

薫「先ず、貴方の名前と所属は？」

先ずは、ミーナの名前と所属を聞いた。

ミーナ「ワシの名は、ヴィルヘルミーナ・ブラウンシュヴァイク・インゲノール・フリーデブルクです……所属は、ドイツのヴィルヘルムスハーフェン校所属のアドミラル・シュペー副長……」

ミーナは、自分の名前と所属を言う。

明乃「アドミラル・シュペーの副長!？」

明乃は、ミーナがアドミラル・グラフ・シュペーの副長だと知って、驚く。

薫「……何故、その副長が自分の持ち場である艦を離れたの? ……何故、白旗を揚げた我が艦を攻撃したの?」

薫は、何故、ミーナが何故、自分の持ち場である艦を離れ、此処に来たのか、それと、何故、白旗を揚げた晴風を攻撃したのか、其処ろ辺を聞く。

ミーナ「我等がアドミラル・シュペーですか?」

薫「そう!」

ミーナ「それは、ワシにも全く分からないんです。」

何とミーナは、何故、晴風を攻撃したのかは、自分でも全く分からなかった。

薫「えっ!？」

ミーナの答えに薫は、驚きながら事情を聴く

ミーナ「我らの艦も貴校との合同演習に参加する予定だったのは知っておりますな教官?」

薫「うん、予め、古庄教官から打ち合わせで聞いているわ!」

明乃「そうなんですか!?! ……全くの初耳です。」

薫「御免ね! ……サプライズとしての学校の企画だったから……」

ミーナ「まあ、それは、良い……ワシらは合流地点に向かっていたんだが、突然、電子機器が動かなくなつて調べようとしたら……誰も命令を聞かなくなつた!!」

明乃「叛乱？」

ミーナ「分からん……ワシは、艦長から他の艦に知らせるよう命じられて、脱出してきた……」

薫「そう……大変だつたわね！」

明乃「艦長？」

ミーナ「帽子を拾ってくれたのは、感謝している……これは、我が艦長より預かつた大事な物……シユペーに戻つて艦長に返さなければ……必ず……」

そう話すミーナの瞳には明確な決意が宿つていた。

明乃「分かつた、私も手伝うよ！」

明乃もミーナが戻れるように手伝うと言つた。

ミーナ「おっ!？」

そう言つるとミーナは、明乃の方を見る。

美波「同舟相救う」

突然、美波が2人にことわざで答える

『!？』

美波「その船を同じくして渡りつて、風にあう渡ればその相救うや左右の手の如し!!」
平素は敵どうしでも、いざと言う時には助け合う。

つまり、敵同士でもいざと言う時は、お互いに助け合うべきだと美波に主張する。

薫「……」

薫は、ミーナからある程度の事情を聞き、ボイスレコーダーの録音を切り、自分の意見を言う。

薫「事情は何となく、分かりました……だけど、今は、貴方の願いには応じられません……我々は、これから速やかに横須賀女子海洋学校に戻り、宗谷校長に事の次第を報告、保護して貰い……それから、宗谷校長にシュペーの救助をブルーマーメイドに要請させましょう。」

薫は、ミーナの積極な願いを拒否、当初の予定通り、横須賀女子海洋学校に帰投すべきだと言い、更にシュペーの救援は、ブルーマーメイドに任せるべきだと言う。

ミーナ「でも、ワシは……」

しかし、ミーナは、あくまでもアドミラル・グラフ・シュペーに戻りたいと主張するが

薫「駄目です!!……これ以上、生徒を危険な目に合わせる事はできません!!」

晴風は、既に3度も戦闘している。

これ以上の戦闘は、生徒の犠牲を被るかも知れない。

薫は、それを恐れ、あえてミーナや晴風の生徒を危険な目に合わせない様にミーナの戻りたい主張を思い留める。

ミーナ「ん・・・分かりました。」

薫に積極的に止められ、ミーナは、仕方なく思い留まる。

薫「分かれば良いわ！・・・学校に戻るまで、貴方の身は、此方で預からせて貰います。」

薫は、横須賀女子海洋学校に戻るまで、ミーナの身を晴風で預かる事にした。

その時

幸子『艦長、教官！・・・校長からの全艦帰港命令が出ました！』

『えっ？』

艦橋から横須賀女子海洋学校の全艦帰港命令が出されたと言う報告を受ける。

晴風、艦橋

幸子「えつと・・・私は今生徒を決して見捨てない・・・皆を守る為にも全艦可及的速やかに学校に帰港せよ」との事です。」

横須賀女子海洋学校からの全艦帰港命令の内容に艦橋の皆は、ホツとした表情になる。

晴風、医務室

薫（良かった！・・・まだ、真雪さんは、私達を見捨てていなかったんだ・・・じゃ、あの命令は、誰が出したものの・・・少なくとも真霜姉さんじゃないのは、確かな様だけど・・・）

報告を聞いて、薫は、まだ、真雪に見捨てられて居なかった事に喜ぶ。

だが、前の晴風撃沈命令は、一体誰が出したのか、薫は、其処が謎だった。

晴風、教室

朝食の席にて、明乃は横須賀女子海洋学校からの帰港命令の内容を皆に伝えた。

しかし、伊号第201潜水艦との戦闘が影響しているのか、集まった生徒達の何名かは舟を漕いでいたり、テーパールに突っ伏して寝ている者もいる。

明乃「学校から全艦帰港命令が出ました・・・晴風も学校側が責任をもつて保護するので戻ってくる様になって・・・帰還中は一切の戦闘行為は禁止だそうです。」

『良かった!!』

明乃の説明に皆は、もう戦闘が無い事に安堵する。

まして「だがまだ広域には、晴風に対する警戒は続いている・・・どの港にも寄港できない・・・我々は、密かに学校に戻らねばならない。」

学校に戻っても警戒が必要だと言うましろ。

ましろの言葉に安心していただけなのが、少し不安になる。
すると

薫「大丈夫だよ皆！・・・宗谷校長がそうおつしやているんだから、そんな直ぐ撃沈されたりしないわよ！」

薫は、皆を安心させる。

明乃「それから、新しい友達を紹介します!!」

ある程度の説明を終え、明乃がミーナを皆に紹介する。

明乃「ドイツの・・・ヴィナブラウシユガイゲンマメ・・・あれ、何だっけ？」
名前が長かったせいか、明乃は途中で忘れる。

ミーナ「サイシユン!!」

『あっ!?!』

自分の名前を途中で忘れた明乃に腹が立ち、ミーナは、自分で自己紹介をする。

ミーナ「ヴィルヘルムスハーフェン校から来た・・・ヴィルヘルミーナ・ブラウンシユヴァイク・インゲノール・フリーデブルクだ・・・アドミラル・シユペーでは副長をやっていた。」

明乃「長いから、ミーちゃんの良いかな？」

名前が長いので明乃は、ミーナをニツクネームで答える。

ミーナ「誰が、ミーちゃんじゃ!?!」

明乃の言葉にミーナは、つつこむ

明乃「じゃあ部屋は・・・ココちゃん、何処が空いてたっけ?」

明乃は、ミーナが寝泊まりできる様に空いている部屋が無いか、幸子に問う。

幸子「うくん・・・ベットの空きがあるのは・・・副長の部屋だけです。」

ましろ「えっ!?!・・・私の・・・部屋・・・」

空いている部屋が自分の部屋だけだと知り、ましろは、固まる。

薫と幸子達は、ミーナをましろの部屋まで案内する

晴風、副長室

薫「うわあ!?!」

ミーナ「うお!?!」

ましろの部屋に行くと部屋は、縫いぐるみが一杯置かれ、アンティークの部屋になっていた事に薫とミーナは驚く

芽衣「うわあ!?!すご!?!」

まゆみ「古いたサメさんも居ますね・・・」

幸子「宗谷さんからは、創造できない部屋です!?!」

それを、芽衣、まゆみ、幸子が覗く。

幸子は、ましろの部屋をタブレットのカメラで撮りまくる。

ミーナ「良い部屋だな・・・今日からよろしく頼むぞ!!」

如何やら、ミーナは、気に入ったようで、ましろに礼を言う。

ましろ「はあく」

ましろは、恥ずかしがりながらため息をつく。

薫「じゃ、副長!・・・ミーナさんの事は、任せましたよ!・・・それから、ミーナさんの着替えとかは、皆から借りて・・・ミーナさんのサイズは?」

薫は、ミーナの世話をましろに任せ、あとは、ミーナの着替えを他の生徒達から借りる事にし、下着やブラのサイズを確認する。

薫「取り合えず・・・私のブラと下着を貸してあげるわ・・・後で私の部屋まで取りに来て・・・」

取り合えず、薫のブラと下着を貸す事にした。

まあ、薫の胸の大きさなら、ミーナの胸に合う筈。

少し大きいが

ミーナ「何から何まで、感謝する教官!」

薫「困った時は、お互いさまよ!」

こうして、晴風は、伊号第201潜水艦との戦闘を何とか掻い潜り、予想外のお客、ミーナを乗せ、晴風は一路、横須賀女子海洋学校へと進路を出す。

第13章 龍之介 VS 邦夫

4月9日

10:00

東京拘置所

晴風が無事に伊号第201潜水艦の脅威から脱した頃、東京拘置所に幽閉されている龍之介は、取り調べの為、両手を手錠で拘束されたまま、特別取調室へと向かっていた。

龍之介「……」

拘束されてから、3日が過ぎ、龍之介の顔は、少し寝れ、髪と鬚が伸びていた。

東京拘置所、特別取調室

東京拘置所の特別取調室は、凶悪犯罪者などを取り調べる為に特別に作られた部屋で外を見る為の窓が一切なく、唯あるのは、大きな鏡（マツジクミラー）が有るのと真中に机と椅子が2つあるだけの撒布系の部屋であった。

特別取調室に連れて来られた龍之介は、両手を手錠で拘束されたまま、取り調べを受ける。

しかし、検察官2人がかりで何度も龍之介を問い詰めても、龍之介は、断固として落

ちなかった。

検察官A 「いい加減にしろ!!」

龍之介 「……」

検察官B 「いい加減、認めたら如何ですか、山本監督官!……もう証拠も有るのだし、此処は、潔く罪を認め、刑に服するべきです……そうすれば、いくらかの恩赦を受けられるよう我々が保証してあげましょう。」

今度は、潔く罪を認めれば、いくらかの恩赦を受けられるよう取引を持ちかけてきた。龍之介 「何で、やってもいない罪を認めなければならぬんだ!!……それに、その証拠が本物か如何か見せて貰おうじゃないか!!」

しかし、龍之介は、挫けず無実を訴え、証拠を見せるよう逆に要求する。

検察官B 「な、何だと!」

検察官A 「貴様!! 犯罪者の分際到我々を脅す気か!」

龍之介 「脅すなんて別に……唯、俺は、有罪に出来る程の証拠を見せろと言ってるだけじゃないか?」

検察官A 「ふざけるな!」

龍之介 「ふざけるなは、お前らの方だ!!」

数時間も同じ状態が続き、結局、少し休憩する事になった。

休憩中、龍之介は、ある事を思う。

龍之介（一体、いつまで、こんな事を続ける気だ？・・・いい加減、うんざりしているんだが・・・）

いつまで、こんな事を続ける気か、龍之介は、心中で呆れていた。

龍之介（今頃、皆如何しているのだろうか？・・・無事で居るのか？・・・そう言えば、薫とはやては、大丈夫だろうか？・・・）

更に拘束されて、監禁されている部下達や地中海にいる美由紀達、そして、反乱者として追われている薫とはやての安否を心配していた。

そんな時

龍之介「!？」

突然、ドアが開き、中から、さっきの検察官2人ともう1人、知らない男と部下の2人が入って来た。

龍之介「また続きか？・・・何度やっても同じ事なんだけどな・・・」
また続きかと龍之介は平然と笑う。

「いい気が良いね、山本監督官！」

龍之介「誰だお前？」

邦夫「私は、ホワイトドルフインの野田邦夫だ。」

男の正体は、邦夫だった。

龍之介「そのホワイトドルフィンが何の様だ？」

邦夫「鈍いね・・・私は、野田国交相代行の使い出来ているのだよ！」

龍之介「野田国交相代行だ?! 深町国交相は、如何したんだ？」

一誠の使いだと知って、驚き、深町は、如何したかと聞く。

邦夫「深町国交相は、任を解かれ、今は、謹慎中・・・その代理として、私の父、野田一誠が国交大臣代行に就任した。」

龍之介「謹慎!? 如何いう事だ!!・・・何故、謹慎に？」

深町の謹慎を知り、龍之介は、何故だと問う。

邦夫「それは貴方が素直に我々に協力しないからですよ山本監督官!・・・素直に協力すれば、こんな事にならなかつたものを・・・」

龍之介「ふざけるな!!・・・誰がお前らに協力などするか!!・・・協力するぐらいなら、死んだ方がましだ!!」

邦夫「ふん!・・・本当、馬鹿な男だ・・・それに・・・何でお前なんだ!!」

龍之介「はあ？」

邦夫「何で、あいつは、俺じゃなく、お前を選んだんだ!!」

突然、邦夫は、態度を変え、龍之介を問い詰める。

龍之介「な、何だよ!? 何の事を言ってるんだ?」

突然、妙な事を言われ、龍之介は、何の事か分からなかった。

邦夫「惚けるな!!・・・お前が俺から真霜を取ったせいで、俺がどんな目にあつたか!?」

龍之介「何の事だ!?・・・大体、お前の事なんか知らないし・・・それに、真霜にとつて、お前は何なんだ!」

いきなり、真霜との関係を言われ、何だと問う。
すると

邦夫「俺は、真霜の許婚だ!!」

龍之介「ま、真霜の許婚!!・・・お、お前が?」

邦夫が真霜の許婚だと知り、龍之介は驚愕する。

邦夫「お前さえ現れなければ、真霜は、俺の物になつていたのに・・・」

実は、龍之介がこの世界に来る前から、邦夫と真霜は、許婚の関係だった。
だが、真霜は、邦夫が好きでは無かった。

何故なら、家柄を良い様に昔から悪さをしてきた事や官房長官の息子と言う事で警察にも捕まらず、のほほと善人ずらししている邦夫を真霜は嫌いだったのだ。

そう言う邦夫も真霜の事より、宗谷家の家柄と財産しか目になく、真霜に内緒で密か

に愛人を作っていた。

しかし、その事は真霜も既に知っていた。

その為、真霜は、男が嫌いな性格になってしまったのだ。

だが、龍之介との出会いで真霜は変わった。

自分を本当に好きで守ってくれる人が現れたからだ。

そして、真霜は、邦夫との婚約を破棄し、龍之介の元に行ってしまった。

真霜との婚約が破棄され、更に愛人との関係がばれ、親から勘当を言い渡され、邦夫は、危機的な状態に落ちいたが、田沼の人脈で親との勘当は免れ、邦夫は、田沼の恩に報いる為、今まで悪事を重ねてきた。

いつしか再び真霜を自分の物にし、更に横取りし、自分をこんな目に合わせた龍之介とその部下達に復讐する事を胸に

龍之介（そう言えば真霜の奴！・・・許婚の事は言わなかったな・・・こいつと何か遭って、嫌ってるんだろう・・・だから、あいつは、こいつの名を口にしなかった・・・）

龍之介は、いつも真霜が邦夫の名や許婚の事を言わなかった事に気づく。

邦夫「まあ良い、どうせお前は、もう終わりだ・・・晴風も間もなく、処理される。」

龍之介「な、何だって!?・・・おい!・・・晴風を処理とは如何いう事だ?・・・雅か!」

晴風処理を聞いて、龍之介は、驚く。

邦夫「察しの通り！．．．晴風には、既に撃沈命令が下っている．．．それに貴方には、叛逆罪で起訴が決まっている。」

晴風撃沈命令と龍之介の起訴を龍之介に告げる。

龍之介「お前、何を考えているんだ!!．．．相手は、学生艦何だぞ!!．．．撃沈すれば乗っているうちの隊員や生徒は如何なるか、分かっているのか!？」

晴風撃沈命令を聞いて龍之介は、激怒する。

邦夫「そんなの知った事か!．．．私には、関係のない事だ．．．」

邦夫は、晴風を撃沈しても、何とも思わなかった。

龍之介「お前、それでも人間か?．．．俺は、如何なっても良い．．．だから、晴風を助けてくれ、頼む!!」

龍之介は、自分の身を省みず、晴風を救う様、邦夫に頭を下げて、嘆願する。

それを見た邦夫は

邦夫「フフハハハ．．．!!．．．惨めだね山本監督官!」

と龍之介の姿を見て、嘲笑う。

邦夫「まあ、助けられないと言う訳でもないが．．．」

晴風を助けられると邦夫は言う。

龍之介「本当か？」

晴風を助けられると聞いて、表情を変える。

邦夫「但し条件がある。」

龍之介「条件？」

晴風を助ける代わりに邦夫は、龍之介にある条件を突き付ける。

邦夫「晴風を助ける代わりに大鳳のスーパーコンピュータ室へのパスワードを教え、技術を我々に提供する事だ。」

何と、晴風を助ける代わりに今まで、隠し守っていた白鳳などの技術を渡せと言って来たのだ。

龍之介「ふざけるな!!そんな条件が飲めるか!!」

龍之介は、断じて拒否する。

邦夫「良いのか・・・断れば晴風は救えんぞ!!」

龍之介「ん・・・」

龍之介は、悩む。

邦夫「如何する？」

考えた、結果

龍之介「悪いがそんな条件は呑めない!!」

拒否を選んだ。

邦夫「晴風が如何なっても良いのか？」

龍之介「確かに晴風は心配だが、俺の部下は、タフだ！・・・こんな切り抜けられるさ!!」

龍之介は、薫が晴風の生徒を守りながら学校に戻れる事を信じていた。

邦夫「ふん！・・・そんなに部下を信じるなら、面白い物を見せてやろう・・・おい！」
邦夫は、部下の2人にある物を此処に持つてくるよう命じる。

数分後

暫くして、邦夫の部下2人が龍之介の前にある人物を突き出す。

功「う・・・う・・・」

龍之介「さ、参謀!？」

何と、龍之介の前に突き出された人物は、龍之介と一緒に拘束された参謀長の徳吉功だった。

龍之介「参謀！・・・大丈夫か？」

龍之介は、功に問うが、功は、様子が変で、廃人見たいな状態になっていた。

龍之介「おい参謀!!俺が分かるか？・・・しつかりしてくれ功!!・・・」

龍之介は、必死に功に問うが、功は、廃人の様に答えない。

龍之介「お前!・・・功に何をした!？」

功に何をしたかと邦夫を問い詰める。

邦夫「なぐに・・・我々に協力しなかったので、ちよつと薬をね・・・」

龍之介「薬!?!・・・雅か!?!・・・お前、功に麻薬を飲ませたのか?」

邦夫「その通り・・・こいつに注射したのは、真実の血清と言われるドイツの強力な
自白用の麻薬だ!!」

何と功に注入されたのは、真実の血清と言われるドイツの強力な自白用の麻薬で、かつて、龍之介の世界でナチス・ドイツが使用していた薬で注入されれば、洗いざらいはいてしまうし、副作用として、廃人になる。

最悪の場合、死に至る。

邦夫「さて、そろそろしゃべてくれませんか?・・・でないと、更に注射する事になるんだが・・・」

邦夫の部下は、真実の血清が入った注射器を龍之介に見せつける。

龍之介「や、止めてくれ!!これ以上、注入されれば死んでしまう!!」

龍之介の言う通り、最早、功は、廃人状態になっており、これ以上注射すれば死んでしまう。

邦夫「なら、さっさと吐け!!・・・そうすれば、命は、助けてやる。」

龍之介「ん……」

功の命か、それとも技術を守るか、龍之介は迷う。

邦夫「如何した、早くしないか!!」

邦夫に迫られ、龍之介の答えは

龍之介「分かった……言う……だから、助けてくれ!!」

龍之介は、功の命を選んだ。

渡しては、いけない技術より部下の命を選んだのだ。

それは渡しては、いけない技術より部下の命が大事だからだ。

邦夫「よろしい!では、早速、答えて貰おう。」

邦夫は、喜び、注射器を仕舞う。

邦夫「パスワードは?」

龍之介「聞いても無駄だ!!」

邦夫「何?」

龍之介「スパコンのデータは、修理の時に他に移設した……中には、何にも残っていない!!」

龍之介は、空母大鳳の改修の時、予めコンピューターのデータを他に移していたのだ。

邦夫「データは、何所にある?」

邦夫は、データの在りかを問い詰める。

龍之介「そ、それは……」

邦夫「何所くらく!!」

龍之介「データは……薫が持っている。」

何と、データを持っているのは、現在、反乱艦として追われている晴風に乗っている山本薫が持っていると言った。

邦夫「薫? ……誰だ?」

龍之介「俺の妹だ!!」

邦夫「何所にいる?」

居場所を問い詰める。

龍之介「居場所は……お前が撃沈しようとしている航洋艦晴風だ!!」

薫が晴風に乗っていると言う。

邦夫「何!？」

龍之介「残念だったな……撃沈されればデータは、永久に失われるな……」

邦夫「き、貴様!! ……こ、殺してやる!!」

薫の居場所が晴風と知り、邦夫は、激怒し、龍之介を殺そうとするが

龍之介「良いのか……俺達2人を殺せば、薫の事だ……データのメモリーをその

場で壊すだろう。」

もし、龍之介と功をこの場で今殺したら、薫は、激怒して、持っているデータのメモリーをその場で壊す筈。

いくら薫でもやりかねない。

邦夫「くう……そうだな……今、お前を此処で殺すのは、止めておこう……」
龍之介の言葉を聞いて、流石の邦夫も今、データを失っては、折角の技術を田沼に手渡す事が出来なくなるので、殺すのを止める。

邦夫「おい！……取り合えず牢にぶち込んでおけ……」

全てを聞き出した野田は、龍之介と功を再び特別牢へと戻した。

その後

部下A「如何しますか？」

邦夫「今さら、晴風撃沈命令など撤回は出来ない!!」

データが晴風にあると知って、今さら晴風撃沈命令など撤回はできなかった。

部下B「しかし、このままでは……総理には、何と……」
すると

邦夫「ええい!!!……探せ!!……晴風を探すんだ!!」

気が狂った様に、晴風を探せと部下に命じる。

『は、はい!!』

画して、邦夫は、データを奪う為、晴風の搜索を密かに開始した。

だが、広い太平洋をどう探すのか

其処で、真霜を密かにつける事にした。

そうすれば、いづれ晴風にいきり渡るだろう。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

一方、その真霜の方では、監禁されている龍之介と功を救い出すべく、真雪と協力して、邦夫より先に晴風の保護をすべく、動いていた。

真霜「その後、晴風の情報は？」

真霜は、現在の晴風の情報が無いか、情報を集めていた。

BPF隊員「先程、入ってきた情報によりますと・・・昨夜、晴風は、和歌山沖で東舞校所属の教育艦イ201と戦闘・・・イ201を航行不能にし、その後、逃走したとの事です。」

BPF隊員は、昨夜にあった晴風と伊号第201潜水艦との戦闘を真霜に報告する。

真霜「被害は？」

BPF隊員「艦は、航行不能になりましたが、生徒全員は、無事に救助されたそうです。」

真霜「そう、良かった!!・・・でも、何故、晴風は、イ201を攻撃したの?」

伊号第201潜水艦の生徒全員が無事であった事に真霜は、ホッとする。

しかし、何故、晴風は、伊号第201潜水艦を攻撃したのか、不明だった。

その時

BPF隊員「その事ですが・・・報告には、まだ続きが・・・」

BPF隊員から、もう一つの報告を聞く。

真霜「何?」

BPF隊員「救助された生徒の話によりますと、イ201が先に晴風を攻撃したと主張しているんです。」

何と、救助された伊号第201潜水艦の生徒の話によれば、伊号第201潜水艦が先に晴風を攻撃したと主張していると報告する。

真霜「何ですって!?!・・・何故、イ201は、先に晴風を攻撃したの?」

何故、伊号第201潜水艦が先に晴風を攻撃したのか、理由を聞く。

BPF隊員「それは分かりません!!・・・救助された生徒も何故、先に攻撃したのか、全く覚えていないそうで・・・現在、イ201のブラックボックスを解析中との事です。」

教員も生徒から事情を聴いていた。

だが、何故、攻撃したか、理由は不明。

その為、伊号第201潜水艦からブラックボックスを回収、現在、解析中。

真霜（如何いう事？・・・救助された生徒が全く覚えていないなんて!?・・・さるしまの事と云い・・・一体、何が起きているの？・・・）

一体、何が起きているのか、真霜は全く分からなかった。

真霜「・・・引き続き、晴風の情報収集及び搜索を続行して!!」

BPF隊員「はっ!」

何が起きているのか掴むべく、真霜は、引き続き、晴風の情報収集及び搜索を続行するよう命じた。

真霜（・・・待っていて、龍之介!・・・絶対に貴方の無実を証明してあげるわ!!）

真霜は、龍之介の無実を証明すべく、再び晴風の搜索を続行する。

齎された情報は、全て、晴風の搜索を行っている平賀と福内に送った。

送られた情報を元に平賀と福内は、二つ手に分かれて搜索する。

しかし、平賀と福内は気づいていなかった。

2人の動向は、逐一、邦夫達に筒抜けだった。

その為、邦夫は、2人のうち、どちらかが晴風を見つけたら、直ぐに先に確保するよう命じていた。

その事も知らず、平賀と福内は、晴風搜索を続行する。

横須賀女子海洋学校、校長室

真雪「そうですか・・・」

その頃、横須賀女子海洋学校では、真雪が校長室で今回、攻撃した側の東舞鶴男子海洋学校校長の嶋田太郎と電話会談をしていた。

嶋田『申し訳ありません宗谷校長！・・・我が校の生徒の艦が貴校の生徒の艦を攻撃した事・・・我が校としては、誠に申し訳ない!!』

嶋田は、伊号第201潜水艦が勝手に無抵抗の晴風を攻撃した事を真雪に謝罪する。

真雪「今回の事は、半ば事故ですので、決して、貴校を責めるつもりはありません!!」
真雪も今回の事は、事故として、取り扱うつもりで、嶋田を責めるつもりは、無かつた

嶋田『・・・それにしても今回の事と言い、貴校の教育艦が撃沈された事と言い・・・一体何が起きているのでしょうか?』

嶋田は、今回の事などで、今何が起きているのか、真雪に問う。

真雪「それは、私にも分かりません・・・ですが、これだけは言えます!!・・・我が校の艦は、決して、反乱など起こしてはいません!!・・・海上安全整備局の命令は、デタラメです!!」

真雪にも何が起きているかは分からなかったが、晴風は、決して反乱していない事を

信じ、海上安全整備局から出された撃沈命令に背く。

嶋田『そうですか・・・まあ来島の巴御前と呼ばれた貴方が言うのだから・・・私も晴風の反乱が無実である事を信じましょう・・・つきましては、我が校もできる限り貴校に協力しましょう・・・』

嶋田は、真雪の言葉を信じ、晴風の捜索に協力する事を真雪に伝える。

真雪「それは、ありがたい申し出ですが、貴校にもご迷惑がかかります。」

嶋田『何をおしやるのですか!!・・・貴校が危機的な状態なのに我が校だけが、遊ばせてる訳には、いきません!!』

嶋田は、積極的に協力を申し出る。

実は、彼は、ホワイトドルフィン時代に危機的な状態に遭ったところを真雪に助けられた履歴が有り、その為、今回は、真雪に恩がいしをするつもりで協力を要請したのだ。

真雪「では、改めて、貴校の協力申し出に感謝します・・・はい・・・はい・・・では・・・」
会談が終わり、真雪は、電話を切る。

教頭「嶋田校長は、何と?」

真雪「晴風捜索に協力を申し出てるわ!!」

教頭に電話会談の内容を話す。

教頭「それは、此方にもありがたい事です。」

真雪「艦の現状は？」

教頭「現在、全艦寄港命令で帰投中です・・・間宮、明石、舞風、浜風は、晴風の捜索中・・・」

現在、海洋実習に出ている艦艇は、全て、真雪からの全艦寄港命令に従い帰投中。間宮、明石、舞風、浜風は、晴風の捜索の為、別行動を取っていた。

真雪「そう・・・引き続きブルーマーメイドと協力して、晴風捜索を続行して・・・」
教頭「はっ！」

こうして、真雪は、東舞鶴男子海洋学校の協力を経て、晴風捜索を続ける。しかし、真雪は知らなかった。

武蔵以下、海洋実習に出ている艦艇が密かに次々と通信が途絶え始めていると言う事を

東京拘置所、特別牢

一方、特別牢に戻された龍之介と功は

龍之介「しっかりしろ!!」

功「う・・・う・・・」

真実の血清の自白剤を注射され、中毒状態の功をひたすら看病する龍之介。

龍之介「しばらく薬の副作用が続く・・・我慢してくれ!!」

功「う・う・う・」

薬の副作用に苦しむ功

功「す、すみません准将!!・・・私のせいで・・・」

苦しみながら、龍之介に謝罪する功。

龍之介「気にするな!・・・薬を漏られたんだ・・・仕方がない!!」

龍之介は、仕方がないと言つて、功を宥める。

功「し、しかし・・・」

龍之介「薫の事なら大丈夫だ!!・・・あいつなら絶対に切り抜けられる・・・それより、今は、自分の体だけを心配しろ!!」

龍之介は、功を安心させ、ひたすら看病を続ける。

龍之介（すまない薫・・・お前を窮地に立たせた事を許してくれ!!）

龍之介は、心中で薫に謝罪する。

画して、晴風を保護する者、狙う者が晴風を搜索する。

果たして、晴風を見つけるのは、どちらか？

第14章 乙女のピンチ！ 前編

4月13日

10:00

日本近海、四国沖

伊号第201潜水艦の攻撃を無事切り抜けた晴風は、横須賀女子海洋学校からの全艦帰港命令に従い、一路、横須賀を目指していた。

晴風、倉庫

そんな中、生活物資が保管されている晴風の倉庫にて、媛萌と百々が備蓄物資のチェックを行っていた。

媛萌「お米が120kg、缶詰肉が10箱程……」

媛萌がタブレットに備蓄物資の量を記入していく。

百々「まだまだ余裕つすね……」

百々がこの分なら学校に着くまで物資は持つだろうと思ひ呟く。

だが、倉庫のチェックが進んでいく中

百々「あっ!？」

百々がある段ボール箱を見つける。

『ん………?』

媛萌も気になって、2人は、段ボール箱を覗くと

百々「あれ!？」

何と、段ボール箱の中は、空っぽで、段ボール箱の外側には、トイレットペーパーの絵が記載されていた。

晴風、艦橋

所変わって、晴風の艦橋では、普段と変わらない当直体制が行われていた。

ましろ「……横須賀までどれくらい掛かる?」

ましろは、鈴に今の位置から横須賀まで掛かる時間を問う。

鈴「えっ!? ……えっと、26時間……かな?」

鈴は、大体で1日ぐらい掛かると言う。

ましろ「艦長、可能な限り急ぎませう!! ……学校側から戦闘停止命令が出ているとはいえ、これ以上、他船と遭遇したくない!!」

ましろは明乃に急いで横須賀女子海洋学校に帰投するように進言する。

薫「そうね、副長の言う通り! ……これ以上面倒な事には巻き込まれたくないわよね!」

ましろの進言に薫も同意する。

確かに学校側からは戦闘停止命令が出ているが、大元の海上安全整備局からは、晴風撃沈命令は撤回されていない。

先の戦闘の様な事が、また起きても可笑しくない。

志摩「うい」

芽衣「ああ・・・もう撃てないんだ・・・」

志摩もましろと同意見、それに比べて、芽衣は、大好きなドンパチが出来ないと知り残念がる。

そんな2人を見ていたましろは、明乃が自分の話を聞かず、何かを考えているのか、ぼくとしている事に気づく。

ましろ「艦長？」

明乃「・・・」

ましろは、声を掛けるが、ぼくとしているせいか、明乃は、気づかない。
ましろ「艦長!!」

今度は、大声を掛けた。

明乃「!?・・・あつ、御免・・・」

ましろが声を掛けているのに、ようやく気付く明乃。

薫「大丈夫! : 気分が優れないなら、無理せず休んだら?」

明乃は、余りにもぼくとしてるので、薫が休養を勧める。

明乃「い、いえ・・・大丈夫です・・・」

だが、明乃は、大丈夫だと言って断る。

そんな明乃を見て、幸子が

幸子「『私、本当は武蔵のSOSに応えたいの!』『何を言っている!・・・全艦学校に戻れと言われたろ!』『分かってる、でも・・・』」

と、明乃の気持ちを代弁するかの様に幸子が一人芝居を始める。

『アハハ・・・』

幸子の一人芝居に皆は、苦笑いをする。

明乃「ううん、きつと武蔵は大丈夫!・・・私達は急いで学校へ戻ろう。」

幸子の一人芝居に立ち直った明乃は、武蔵が大丈夫な事を信じ、急いで横須賀女子海洋学校へと帰還しようと告げる。

薫「・・・」

だが、明乃の態度を見て、薫は、大丈夫じゃないと思った。

そして

薫「・・・かん」

何かを言ようとした時だった。

「艦長!？」

「!？」

突然、明乃を呼ぶ声が響き、右を向くと

媛萌「大変!! 大変!!」

百々「一大事ツス・・・!」

何と媛萌と百々が血相を変えて艦橋に飛び込んできたのだ。

薫「如何したの2人とも、そんなに血相を変えて!？」

突然、飛び込んできて、何かと思う薫。

媛萌「と、トイレが……」

ましろ「トイレ？」

明乃「もしかして、トイレに何か遭ったの？」

トイレだつと言って、トイレに何かヤバい事でも起きたのかと問う

百々「と、兎に角、緊急会議の招集を要求するツス!」

ましろ「そんなに深刻な事態なのか？」

明乃「分かった!! じゃあ、皆を教室に集めよう!!」

何が起きているのか分らず、取り合えず、交代と見張りの者だけを残し、大部分の生

徒は、晴風の教室に集められた。

晴風、教室

教室に集まった生徒達は突然の招集に何事かと思ひ、教壇に上がった媛萌と百々が今回、全員を招集した理由を話し始めた。

媛萌「日本トイレ連盟によると、女性が一日に使うトイレットペーパーの長さの平均は12.5m。うちのクラスは30人、航海実習は2週間続く予定だったので、余裕を見て、250ロールは用意していたんです。それが・・・」

薫「つまり何が言いたいの和住さん？」

何が言いたいのか、薫は、答えを迫る。

媛萌「つまり・・・もうトイレットペーパーがありません!!」

『ええ・・・!!?』

トイレットペーパーが無いと言う現実を告げられ、皆は驚愕する。

薫「トイレットペーパーが・・・無い!?!?・・・如何して、そんな事に?」

何故、トイレットペーパーが無くなったのか理由を詮索すると

留奈「誰がそんなに使ったの!?!」

空「このクラス、トイレ近い人ばつかなの?」

辺りで責任の追及を始めた。

桜良「1回10cmに制限すれば？」

麗緒「えー困る・・・!?」

中には、トイレットペーパーの制限案も出たが、直ぐに却下された。

芽衣「誰よ!?!・・無駄に一杯使つてんのは？」

芽衣までもが犯人を探ろうとした時

幸子「あ・・・でも私トイレットペーパーで鼻もかんじやいます・・・」

何とトイレットペーパーの使い過ぎを幸子が自ら自供した。

犯人は、幸子だけかと思つたら

鶴「すいません!・・私、持ち込んだティッシュが無くなったので、1個通信室に持

ち込みました!」

更に鶴が自分の持ち場にトイレットペーパーを持ち込んだことを白状。

果代子「食堂でも見たよ、ロール」

ほまれ「ちよこつと拭くのに便利なんだよね!」

あかね「うん便利!便利!」

続いて、果代子の目撃情報で杵崎姉妹が使った事を白状した。

麻命「全く、どいつもこいつもつとこどつこいだなあ・・・」

そんなやりとりを聞きながら麻命が鼻を鳴らした。

それから、殆どどの生徒がトイレットペーパーを無断で使用した事が明らかになった。

薫「大体、無くなった原因は分かりました……貴方達の忍耐力が無いと言う事が……」
無くなった原因が無断使用と皆の我慢の忍耐力が無い事が分かり、薫は、呆れてしま
う。

鈴「如何しよう……無くなったら、おトイレ行けなくなるのかな……」

鈴が今後のトイレの不安を言う。

志摩「……」

五十六「ぬう」

横では、志摩が今後のトイレ問題が深刻化するかもしれないと言うのに、手製の猫
じゃらしで五十六と遊んでいる。

ミーナ「それもこれも、日本のトイレットペーパーが柔らか過ぎるのが駄目なんだ
!……だからつい沢山使ってしまう!」

ミーナが席から立ち上がり日本のトイレットペーパーの素晴らしさを力説する。

美波「蛙鳴蟬噪」

トイレットペーパーの問題で論争する生徒を見て美波がポツリと呟く。

ミーナ「戦争だ?!」

ミーナが美波の聞こえた言葉の部分に反応する。

幸子「意味は「五月蠅いだけで無駄な論議」って事ですよ！」

幸子がミーナに蛙鳴蟬噪の意味を教える。

更にトイレットペーパーの論争が激しくなり、收拾が着かなくなる。

ましろ「艦長、まとめて下さい!!」

それを見かねたましろは、明乃に皆をまとめる様、指示する。

明乃「あ、うん……み、みん」

薫「静かに!……皆、落ち着きなさい!!」

明乃が皆をまとめようと言おうとした時、薫が替わりに皆の論争を止める。

薫の一声に皆は論争を止め、薫に注目する。

薫「では、艦長！」

注目したところで、直ぐに明乃にバトンタッチする

明乃「は、はい……皆!!……他にも足りない物、必要な物、ない？」

明乃がトイレットペーパーの他に何か不足している物は無いか皆に尋ねる。

すると

芽衣「魚雷！」

ミーナ「ソーセージ！」

媛萌「模型雑誌!」

楓「真空管……」

何とも、今、必要が無い物ばかりが出る。

薫「……はあ……西崎さん!……魚雷は、今は、要らないでしょう……ミーナさん!……ソーセージは無くてもウインナーがあるから、それで我慢して……和住さん!……模型雑誌は娯楽品だから却下します……万里小路さん!……真空管は何に使うの?」

4人から出てきた意見を薫は、呆れながら切り捨てた。

ましろ「これから学校へ戻るとすると、2日は掛かる……何とか物資を補給したいところだ。」

明乃「燃料や弾薬は学校経由じゃないと調達できないから、薬品、食料、最低限必要な日用品だけでも、如何にかしたいな……」

横須賀女子海洋学校まで、まる2日は掛かる。

だが、それまで物資が持つか、分からない。

何とか物資を何所かで調達したいが、今は、追われているので、何所の港にも寄港できない。

鈴「戦闘禁止命令が出ているとはいえ、なるべく他の船には、遭遇したくないよ

ね……」

幸子「位置がバレルんで、通販は出来ないですし……」

鈴も幸子も同意見である。

そうなると、残る手は、一つ

芽衣「買い出し行こう、買い出し!!」

買い出しだ。

明乃「買い出し?」

芽衣が買い出しに思いつき、明乃もそれにいくつく。

薫「買い出しね……それなら、多分大丈夫な筈……納沙さん、何所かこの近く

で買い出しできるところは?」

薫に言われ、幸子は、タブレットで何所か近くで買い出しできる場所を探す。

幸子「えつと……確か此処に『オーシャンモール四国沖店』がある見たいですけど……」

すると、近くにオーシャンモール四国沖店があるのを探し当てる。

鵜「買い物……行きたい!行きたい!」

留奈「日焼け止め持つてくるの忘れちゃったし」

桜良「私もヘアコンディショナー無くなっちゃった……皆、私の使うんだもん!」

買い出しの言葉を聞いて、皆がオーシャンモール四国沖店に行きたくなる。

だが

薫「皆、そう行きたいのは、山々だけど……今が如何ゆう状況か……分かってい
るの?」

『……………』

薫の言葉に、皆は、沈黙した。

薫の優等り、今の状況下で晴風の生徒全員が買い物へゾロゾロと行ける筈がない。

ましろ「確かに、今の状況で皆で楽しく買い物に行く訳には行けません!!」

明乃「だね……目立たない様に少人数で買い出しに行こう!!」

買い物を楽しみにしている生徒達には悪いが、此処は少人数で目立たない様に買い出しに行くしかなかつた。

美海「艦長!……もう一つ重大な問題が!」

オーシャンモール四国沖店へ買い出しに行く事が決まった中、突然、美海が立ち上がり、明乃に、ある重大な問題を言う。

明乃「何?」

明乃が何かと問う。

美海「……………お金が……………足りません……………」

明乃「……………えっ!……………」

何と買い出しに必要な資金が無かったのだ。

美海の発言の内容を聞いて全員が硬直する。

薫「お金……足りないの……全然？」

美海「はい：元々2週間の航海予定で寄港地はありませんでしたし、補給に関しても
実習中に受ける予定だったので……」

ましろ「と言う事は……トイレットペーパーを買いに行けるようなお金も……」

美海「はい、主計科にはありません!!」

お金が無ければ、トイレットペーパーが買えない。

『……』

その事実を知り、皆の顔が絶望に変わる。

お金が無いなら調達するしかない

明乃は艦長帽を脱ぎ、逆さにし

明乃「トイレットペーパー募金、お願いしまーす!!」

明乃は駅前で募金活動を行っている人と同じ様に皆にトイレットペーパーの募金を
呼びかける。

皆もそれに乗じて、ポケットから財布を取り出し、中身を確かめる。

しかし、お金が少ないのか、皆の表情は優れない。

中には不満そうな顔の者も居る。

明乃「麻侖ちゃんは：：：」

麻侖「宵越しの金は持たねえ！」

意味不明、つまりお金を持っていないと言う事なのだろう。

洋美「いや、マロンそれ胸を張って言う事じゃないから．．．それにまだ宵越しでなから．．．杵~~〇~~さん達と初めて会った時も同じ事言っていたし．．．って言うか、あの時立て替えたお団子代、まだ返して貰っていないんだけど．．．」

それに対して、横から洋美が貸したお金の返済を迫る。

麻侖「なんでえクロちゃん文句あんのか？」

洋美「私のお金なんだから、ちゃんと返して!!」

結局は、貸しっぱなしの様だ。

楓「小切手は使えませんわよね：：：」

明乃「うん：多分．．．」

楓は、お嬢様だから、支払いも小切手だったが、本人が行く訳じゃないので、使える訳が無い。

幸子「ジンバブエのお金ですが、良いですか．．．？」

今度は、幸子が外国の紙幣を出してきた。

だが、外国の紙幣は、銀行で日本の紙幣に変えなければならない。当然、本人確認の署名をさせられるので、却下された。

ミーナ「ワシはユーロしかない！」

ミーナは、ドイツから留学生なので、持っているのも幸子と同じ外国の紙幣なので、却下。

『ワシ?』

ミーナの一人称に杵~~〇~~姉妹が聞き違いか?とミーナの顔を見ながら聞き返す。
ミーナ「: : : 何かワシの顔に付いてるか?」

周囲の人が自分の顔を見ていたので、ミーナは周りの人に何かと尋ねる。

空「ワシ・・・!?!」

『きやはは・・・・・!!』

女学生の一人称にしては可笑しかったのか、周囲から笑い声が立ち始める。

ミーナ「な、何が可笑しいんだ・・・!?!」

皆に笑われ、ミーナは両手を上げ、ムキツと声を上げた。

こうして、生徒全員の協力で何とか、お金を手に入れた。

だが、まだ足りない。

其処で、明乃は

明乃「教官!・・・お金ありますか?」

教員である薫にもお金を出すようお願いする。

薫「えっ!?・・・わ、私も・・・」

薫は、自分も出さないといけないのに驚愕する。

それを見た皆は、薫の事をジツと見る。

薫「・・・はあ・・・分かったわよ・・・」

流石の薫も皆だけ出しといて、自分だけは、出さないと言う事はできなかつた。

薫は、空しく懐から財布を取り出し、中から必要なお金を出す。

薫「取り合えず、これぐらい有れば大丈夫でしょう!」

薫は、2万円程、明乃に手渡す。

明乃「こんなに・・・ありがとうございます!!」

余りの大金に明乃は、喜ぶ。

薫(本当は、来月に新しいレオタードを買う為に貯めてたのに・・・トホホホ・・・)

如何やら、今の2万円は、来月に新しいレオタードを買う為の薫のヘソクリだった様だ。

それが駄目になったのを薫は、落ち込む。

とは言え、これで買い出しに必要なお金は調達できた。

後は、行く人選を決定するのみ。

人選は、各自でジャンケンで決め、勝った方が行く事になった。

ある程度、決まった人選は

まず、教員として、山本薫、そして、生徒から岬 明乃、和住媛萌、伊良子美甘、鏑木美波の計4人が選ばれた。

5人は、怪しまれない様に私服に着替え、スキツパーが置いてある前部甲板に集合する。

晴風、前部甲板

明乃「それじゃあ、私と教官、ミカンちゃん、ヒメちゃん、みなみさんとで、買い出しに行ってくるから、晴風をお願いね、シロちゃん!!」

明乃は、自分が艦を離れている間、ましろに指揮を委ねる。

ましろ「艦長!?!・・・副長もしくは、宗谷さんと呼んでください!!」

相変わらずあだ名で言われるのが嫌いなましろ。

幸子「副長、そればかりですわね!!」

後ろから幸子がツツコム。

薫「じゃ副長!・・・私達が帰ってくるまで、晴風の事、よろしく頼んだわよ!」

ましろ「は〜い」

ましろに留守をお願いし、5人は、それぞれ2艇のスキツパーに乗艇する。

スキツパー1号艇

操縦士

岬 明乃

便乗者

山本薫、伊良子美甘

スキツパー2号艇

操縦士

和住媛萌

便乗者

楠木美波

乗艇後、スキツパーが海上に降ろされ、2艇は、オーシャンモール四国沖店へと向かう。

海上

明乃「一度、駅に寄って、バスでオーシャンモールに行くから・・・」

何所にブルーマーメイド、ホワイトドルフィンが目があるか分からないので、直接では無く、駅からショッピングモールへと向かう事にした。

美波「お忍びで行く訳だな！」

美甘「ちよつと、カッコイイね！」

媛萌「艦の話とか専門用語を出しちや駄目だからね！……それと無駄な買い物も駄目。」

美甘「卵と生クリームとイチゴを買いたいんだけど……」

媛萌「駄目に決まっているでしょ！」

美甘「ヒメちゃん、レバーとかチーズとか食べてる？」

媛萌「どっちも嫌いだし」

美甘「やつぱりくびタミンB12が足りないといライラするらしいよ……」

媛萌「してないから！」

2人は、無駄な論争を始める。

薫「はいはい、2人とも無駄なお喋りは其処まで！……全く……半分は、私のお金だと言う事を忘れてるわよ……」

『ん……』

流石に使うお金の半分は、薫から出したお金だと事実を突き付けられ、2人は、論争を止める。

とは言え、スキッパー2艇は、オーシャンモール四国沖店へと向かう。

晴風、前部甲板

明乃達を見送り、ましろ達は、艦橋に戻る。

ましろ「艦長直々にトイレットペーパーの買い出しとは……はあ……艦長は、自分の艦に……」

幸子「副長がジャンケンで負けるからじゃないですか……10回連続で……あれは、見事でしたねえ」

ましろは、本来なら自分が行くべきだったが明乃にジャンケンで10回負けたので、仕方なく艦に残った。

ましろ「艦長にジャンケンで挑んだのが間違いだった……」

ましろは、自分の運が付いていないのに、運が付いている明乃と勝負したのが間違いだった事につくづく自分の行動に呆れてしまう。

幸子「ジャンケンは、ジャンケンでも……負けた方が行くなって事にしてあげれば良かったんじゃないですか？」

ましろ「!?……もつと早く言えっ!」

幸子からの意外な案が出たが、時既に遅く、もつと早く言えとましろは、幸子を怒鳴る。

幸子「きゃ〜コワ〜イ」

ましろに怒鳴られ、幸子は、まるで子供みたいに逃げる。

芽衣「そもそも副長、スキツパー運転できるのかな？」

鈴「さあ・・・」

芽衣と鈴がましろにスキツパーの運転が出来るのか、思い詰める。

本当は、ましろは、スキツパーの免許は持っていないのだ。

だから、行っても、足手まといになるだけである。

その事に本人は、全く気づかない様だ。

晴風、艦橋

その頃、艦橋では、聡子が交代中に秀子とまゆみの3人でクイズをしていた。

聡子「じゃあ次の課題いくぞな・・・パンはパンでも食べられないパンの正しい答え

をいい加減決めるべきぞな！」

秀子「やつぱりフライパンが正解じゃない？」

まゆみ「パンツ、審判、腐ったパン・・・パンが付くもの何て、いくらでも有るから

ね・・・食べられない!!吐く!!穿く!!穿くパンでパンツって事で如何でしょう?」

聡子「目から鱗ぞな・・・」

秀子「パンツ、海パン、短パン、ジーパン、パンプスもありますが・・・」

聡子「議論は常に堂々巡りぞな・・・」

クイズの答えは、結局分からず、議論は難航する。

そんな時

鈴「ただいま……」

協議と見送りに行っていたましろ、鈴、幸子、志摩の4人が艦橋に戻って来た。

聡子「おおつ航海長、待つとったぞな……」

鈴「勝田さん、交代ありがと」

聡子「お安いご用ぞな!」

鈴は、聡子から舵をもらう。

まゆみ「此方特に異常なしです!」

秀子「結局なんの話だったの……?」

秀子は、鈴から先程の召集の内容を聞く。

鈴「えつと……に……日本トイレ連盟によると……」

鈴は、3人に先程の召集の内容を説明する。

ましろ「知床さん、其処から説明しなくても……」

鈴が余りにも長い説明する為、ましろは、率直に言うよう指示する。

まゆみ「トイレットペーパーが無くなったあ!?!」

トイレットペーパーが無いと言う事を聞いて、3人は、ビックリする。

聡子「成程のう、そりや一大事ぞな！」

秀子「まゆちゃん如何したの？」

まゆみ「すみません：私、少し前から、おトイレ我慢してたんですけど：ひよつとして如何にもなりません：？」

トイレトペーパーが無いと言う事を聞いて、聡子は、悩み、隣では、まゆみがトイレに行けない事に困り果てる。

『ええっ!』

まゆみのトイレに行けない事を知って、二人は、戸惑う。

聡子「紙が無ければ如何しようもないぞな：」

確かに紙が無ければ如何しようもない

聡子「：艦：海：：良い事、思いついたぞな！」

そんな時、聡子がとんでもない事を思いつく

聡子「まず水着になつて：」

ましろ「言うな：今トイレにある分は、何とかなる。」

聡子がい思いついたとんでもない事とは、水着を着て、海の中で尿をたそうと言う事で、余りに馬鹿な提案の為、ましろに今ある分だけで何とかなると言われ、却下された。

まだ、トイレに行ける事が分かり、他の2人も安心する。

秀子「それで教官と艦長達は、買い出しに行つたんだ。」

大体の理由は、3人も分かつた。

聡子「ウチも行きたかつたぞな……!」

聡子は、買い出しに自分も行けなかつた事に駄々をこねる

鈴「芽衣ちゃんは？」

隣では、鈴は、芽衣が何所行つたか、幸子に問う。

幸子「さあさつき、かよちゃん達と話してましたけど……」

幸子の説明によると、芽衣は、艦橋に戻る途中で果代子と理都子のもとに行つた様だ。

まゆみ「じゃあ教官と艦長が戻るまでは、自由時間ですか？」

ましろ「うん……まあハメを外さない程度にな……仕事があったら、そつち優先だぞ……」

と言う事で、買い出しの5人が帰つて来るまで、しばらくは、休養になった。

ましろ「そうだ!……見張り台にいる野間さんにも状況を伝えないと……」

幸子「あつ、そうですね……」

聡子「そんならウチが伝えるぞな!……ついでに見張り交代してくるぞな……!」

聡子は、マチコに状況と交代を伝える為、元気よく艦橋を飛び出していた。

ましろ「元気な人だ……」

幸子「進んで仕事を代わるあたり優等生ですよね……」
飛び出していた聡子を見て、2人は感心する。

まゆみ「私達は、如何する？」

秀子「何かやる事、有ったかな……」

自由時間になったので、何をすれば良いのか、まゆみと秀子は、考えていると

秀子「そう言えば、さつき外に鯨……が見えた様な？」

秀子は、先、鯨を目撃した事を思い出す。

まゆみ「鯨!? 見たい! 見たい! ……私達も見張り台行つてみる？」

まゆみは、鯨を見ようと聡子の後を追つて、見張り台に行こうと秀子を誘うが

秀子「あんまり高い所は、ちよつと怖いな……」

高所恐怖症のせいかな、秀子は、高い所に登るのを嫌がる。

まゆみ「それなら……これで！」

高い所に登るのを嫌がる秀子をまゆみは、肩車をする。

秀子「普通に探さない？」

肩車をしたが、結局やめて、普通に探す事にした。

晴風、見張り台

聡子「よつと」

見張り台に行った聡子は、マストに登り

聡子「ひやあ・・・良い眺めぞな・・・!」

見張り台の横から景色を見る。

聡子「野間さん!野間さん!報告ぞな」

聡子は、マチコに状況を説明するが

マチコ「・・・」

暇なせいかな、マチコは、寝ている。

聡子「あれ、寝てるぞな?」

仕方なく聡子は、マチコを起こす。

聡子「・・・そう言う訳で艦長が戻るまで休憩ぞな!」

起きたマチコに聡子は、状況を説明する。

マチコ「ん・・・そうか」

聡子「此処もウチが代わるから、お昼ご飯でも食べてくると良いぞな」

マチコ「すまないな」

聡子「それにしても野間さんて、シャキつとしとー思つとつたけど、意外とあんきま

ごろくなんじやのう・・・」

聡子は、意味不明な言葉でマチコに言う。

マチコ「ああ……それ程でも」

意味が分からないが何となく乗るマチコ。

マチコ「それじゃ少しの間頼むよ！」

聡子「任せるぞな……!!」

と言う事でマチコは、聡子と交代する。

聡子「そう言えば見張りの時は、ようメガネ外し取るけど、それは伊達ぞな？」

聡子は、マチコが良く眼鏡を掛けている事を聞く。

マチコ「ああ……これは遠視用なんだ……普段はこれを掛けて置かないと辛くてね」
如何やら、眼鏡が無いと見えない様だ。

聡子「ほう……ちよつと貸してほしいぞな？」

聡子は、マチコから眼鏡を借りる。

聡子「似合うぞな？」

マチコから眼鏡を借り、自分に掛ける。

マチコ「よく見えん」

すると、マチコは、聡子をじつと睨む。

聡子「顔が怖いぞな……」

聡子を睨むとは、相当、目が悪い様だ。

オーシャンモール四国沖店、無料シャトルバス駅

一方、買い出しに出かけた薫と明乃達は、オーシャンモール四国沖店に無事に着く。

美甘「えくと……無料シャトルバスが有る筈なんだけど……」

付いたそうそう、美甘は、シヨップینگモール方面に向かう無料シャトルバスを探す。

美甘「あつ! …あれ! あれ!」

無料シャトルバスを見つけ、スキツパーを駐艇場に止めてから、5人は、無料シャトルバスに乗り、シヨップینگモール方面に向かう。

暫くして、無料シャトルバスは、シヨップینگモールに着く。

明乃「わあ……!」

初めて着たのか、明乃は、ついはいやいでしまう。

薫「岬ちゃん、はしやがないで」

明乃「あ、御免なさい、きよ、いや、薫お姉ちゃん!」

正体がばれない様に一応、5人は、薫の姉妹として、振舞う事を薫から命じられていた。

美波「平和だ!」

美甘「お茶する時間ぐらいあるよね!」

媛萌「ないから……」

美甘「ヒメちゃん、それ、かえって目立つよ！」

媛萌は変装なのかマスクにサングラスを装着しており、美甘の言う通り怪しさ抜群な姿でかえって目立つ格好だった。

明乃「じゃあ中、入ろうか？」

とは言え、5人は、シヨツピングモールへと歩み出す。

第15章 乙女のピンチ! 中編

此処で時系列は、遡る

4月13日

9:00

日本上空9000m

地中海を脱出した白鳳は、日本上空の高度9000mをマツハ1で飛行中だった。

白鳳、艦橋

白鳳の操縦主「もう間もなく四国沖に到着します!!」

美由紀の命令で単身、地中海を4日を掛けて脱出(速度20ノットでの潜航航行だった)、其処から飛行モードで日本に戻って来た。

次郎「よくし・・・速度を落として、海面に降下しろ!」

白鳳の操縦主「了解!」

速度を落とし、白鳳は、海面にゆっくり降下した。

三郎「ようやく此処まで辿り着いた・・・あれから、もう7日・・・准将達の安否も掴めない・・・如何しますか艦長?」

此処に来るまで、次郎達は、無線傍受で晴風が反乱した事や龍之介達が捕まった事を知った。

その為、横須賀には戻らず、日本近海に潜伏する事にした。

次郎「先ずは、如何なっているかの情報が欲しい・・・これ以上は、無線傍受とは言え、逆探知される恐れがある・・・先遣隊を送つて、情報収集するしか手が無い。」

これ以上の無線傍受は逆探知される恐れがある為、これ以上の情報は掴めず、やむなく、何処かの港に先遣隊を送つて、情報収集するしかなかった。

ちやうど近くにオーシャンモール四国沖店が有るのが分かり、次郎は、其処に先遣隊を送る事にした。

先遣隊には、当然、次郎自身が隊長として行く事になった。

普通なら残るべきだが、本人の希望により、行く事になった。

次郎がいない間、留守は、副長の三郎が務める事になり、白鳳から3人を乗せた高速艇がオーシャンモール四国沖店へと向かう。

次郎達が行つた後、白鳳は、通信用ブイだけを上げて、海底へと潜航して行つた。

時系列は、晴風に戻る。

一方、晴風では、買い出しに行つた薫と明乃達が帰つて来るまで、自由時間になり、生徒達は、それぞれ休養を取る。

晴風、甲板

楓「!!!」

楓が甲板でラッパの練習をする。

光「修理できる?」

美千留「予備砲身も無いし・・・無理かな?」

光と美千留が損壊した第三主砲の修理を話していたが、予備の砲身も無いので、修理は不可能だった。

あかね「持つて来たよ・・・」

ほまれ「ありがとう」

杵崎姉妹は甲板で洗濯物を干す。

美海「はい、目線!」

百々「へい!」

美海「きや!? マツチ・・・!!」

艦首では、百々がマチコと写真撮影をしているが、2人が抱きついてる事に写している美海がヤキモチを焼いている。

理都子「・・・あんまり使える物ないね・・・」

果代子「トイレトトパーとか流れて来ないかな・・・」

左舷側では、理都子と果代子が漂流物をフックに引つ掛けて何か目ぼしい物は無いか探していたが、これと言った物は無かった。

麗緒「マロンちゃんは？」

桜良「機関室の方が落ち着くんだって……」

留奈「え……たまには、太陽を浴びないと……」

空「流石機関長殿……」

いつも機関室に籠っている機関員四人衆も水着になり甲板で日光浴をする。

だが、折角の休みなのに機関長の麻命は甲板には出ず、機関室で鼾をかきながら寝ていた。

晴風、艦橋

艦橋では、見張り体制がとられているのだが、周りの空気に影響されてか、何とも緊張感が無い。

鈴「……平和って……良いね……」

今のところ何の事態も起きていない、平穏な時間が流れている艦橋で鈴が呟く。

志摩「……良い」

志摩も鈴の意見に賛同し、一言呟く。

鈴「今日の晩御飯何がいいかなあ……」

志摩「カレーが……良い！」

志摩「今日は、金曜じゃないよ……」

そんなまつたりムードが流れている

ましろ「……はあ!?……」

ましろは、疲れてるのか眠い状況で艦橋に立っていた。

だが、目を覚まし両手でほつぺたを叩いて起きる。

そんな時、羅針盤の上に置いてある明乃の艦長帽に目を向ける。

ましろは、誰も見てないのを確認し、羅針盤の艦長帽を取る。

ましろ「ちよつとトイレ行ってくる……」

艦長帽を取ったましろは、隠しながら艦橋を出る。

艦橋を出て、マストあたりで、誰も見てないのを確認したら隠していた艦長帽を被った。

艦長帽を被ったましろは、喜びながらはしゃぐ。

しかし、はしゃいでいると横から洋美が現れ、ましろは、慌てて、艦長帽を隠す。

洋美「……宗谷さん、凄く似合ってた。」

ましろが艦長帽を被っていたのを見て、洋美は褒める。

ましろ「えっ!?……」

洋美「私ね……宗谷さんに艦長に成って欲しかったな……」
ましろ「……あつ……えーで、何か？」

何の要か問う。

洋美「ミーナさんが艦内案内してほしいんだって」

如何やら、洋美は、ミーナに晴風の艦内を案内しようとましろを呼びにきた様だ。

ましろ「わ、分かった。」

ましろは洋美と共にミーナに艦内を案内する。

ましろがいなくなった艦橋に芽衣が戻って来た。

芽衣「あれ!？」

戻って来た芽衣は、ましろが居ない事に気づく。

芽衣「副長何所行ったの？」

鈴「さつきトイレ行くなって出て行ったけど……そう言えば遅いね？」

幸子（あれ多分、嘘ですけどね……こつそり艦長の帽子持って行ったし……恐らくは……）

幸子は、ましろの艦長姿を想像しながら

幸子「はっ!? 雅か……っ!!」

ある事に気づく。

そして

幸子「『宗谷さん、その帽子凄く似合ってます!』『そ……そうかな』『やつぱり艦長は、宗谷さんが務めるべきです!』『そうだ……やはり私が艦長を務めるべきなんだ!!……やろう!……艦長が居ない今こそ反旗を翻す時……下克上だー!!』『素敵つ、宗谷さんっ!一生ついて行きます!!』『落ち着いて下さい副長!!……反乱は……反乱はいけませんっ!!』」

一人芝居を始めた。

芽衣「まくた、始まったよ!」

鈴「大変な事になつてゐるね……」

またも一人芝居を始める幸子に2人は、呆れる。

幸子「しりとりでもしますか……?」

すると、一人芝居を止め、今度は、しりとりで切り替えた。

芽衣「切り替わり早っ!……何か怖いよ……」

幸子の切り替えの速さに芽衣は、恐怖を感じた。

とは言え、3人は、しりとりを始めた。

芽衣「えつと……じゃあ『魚雷』」

鈴「い……インク」

それぞれ議論が出る中

幸子「クルンテープ・プラマハーナコーン・アモーンラッタナコーシン・マヒンタラー
ユツタヤー・マハーデイロクポップ・ノツパラット・ラーチャタニーブリーロム・ウ
ドムラーチャニウエートマハーサターン・アモーンピマーン・アワターンサテット・
サツカタツテイヤウイサヌカムプラシット！」

幸子は、意味不明な言葉を言う。

芽衣「何て!？」

幸子「つぎ『と』です！」

芽衣「ドヤ顔やめい!!・・・何それ呪詛!?呪詛か?・・・とうとう呪いに手を染めたか?」

幸子の言葉が呪詛見たいだと言う芽衣。

幸子「えー知らないんですか?バンコクの正式名称ですよ・・・」

芽衣「知るか!!」

如何やら国の正式名称だった様だ。

そんな時

鈴「ココちゃんって、外国好きなの?さつきもジンバブエのお金もってたし・・・」

鈴は、先、幸子が外国紙幣を持っていた事を思い出す。

幸子「うっ」

芽衣「ああさつき盛大にスベってたやつね！」

芽衣も思い出す。

幸子「んもうう、スベったとか言わないで下さい!!……いつかネタに使えるかとずつとお財布に忍ばせていたのに万里小路さんの小切手のインパクトにくわれちゃったんです!!」

如何やら、持っていた外国紙幣は、一人芝居用の道具だった様で、いつか使う筈が、万里小路さんの小切手で堆出した様だ。

鈴と芽衣に言われ、鈴に抱きつく幸子。

鈴「びゃあ!？」

いきなり抱きつかれ、ビックリする鈴。

芽衣「あんま……関係ないと思うけどね……万里小路さんは……」
この話に楓は、関係ないと芽衣は思った。

幸子「古今東西ゲームでもしますか……」

そしたら、いきなり、しりとりを止めて、今度は、古今東西ゲームに切り替わった。

芽衣「だから立ち直り早いって!!」

鈴「めげないところがココちゃんの良いところだよね！」

余りの切り替えの速さに芽衣は呆れ、鈴は褒める。

鈴「平和って・・・良いなあ・・・」

雅に平和に過ごす艦橋組だった。

オーシャンモール四国沖店

一方、買い出しに行つた薫と明乃達は、ショッピングモールのフードコートでお昼を食べていた。

美甘「卵と生クリームと苺を買ってきます・・・文句はないねヒメちゃん？」

媛萌「はい・・・」

美甘の買い物物に空しく承諾する媛萌。

薫「まあまあ、当人も反省してる様だから許してあげたらミカンちゃん！」

明乃「すっかり頭が上がりなくなってるね！」

美波「仕方がなからう余計な事をする時間はないと言いながら・・・当人がホームセンターコーナーで一時間も費やしたのだから・・・」

如何やら、媛萌は、余計な事をする時間はないと言いながら、本人は、ホームセンターコーナーで一時間も暇を弄んだ為、結局、言われた美甘に完全に逆らえなくなった。

明乃「好きなもの見てると時間忘れちゃうよね！」

薫「でもミカンちゃん、卵と生クリームと・・・それ買って如何するの？」

何故、卵と生クリームを買うのか問う。

美甘「あつえつとね・・・ケーキを作ろうかと思つて、ほらドイツ艦の・・・ウインナー・・・ブラウンシュガー・・・インゲンマメさん・・・」

薫「ヴィルヘルミーナ・ブラウンシュヴァイク・インゲノール・フリーデブルクでしょ」
美甘「そうそう!・・・色々あつて突然違う艦に来ちやつて不安もあると思うの・・・私たちが何をしてあげられるかはわからないけど・・・炊事委員としてせめて美味しいものを食べてもらいたいなつて思つて・・・」

美甘は、ミーナに美味しい物を食べさせてやりたいと思ひ、其処でケーキを作る事にしたので。

媛萌「それを先に言えば別に反対なんてしなかつたのに・・・」

美甘「ホントかなあ?」

理由を言えば賛成すると媛萌は、言うが、本当かなと美甘は、怪しそうな顔をする。

明乃「そう言う事なら、ミーちゃんの歓迎会を開くつて如何かな?」

明乃は、ミーナの歓迎会を開こうと提案する。

美甘「歓迎会?」

明乃「うん!・・・と言つても、そう言う形式をとつてケーキ食べるだけだけど・・・」

媛萌「良いんじゃない?そう言うのは、形が大事だからね!」

薫「そうね、人との触れ合いは、大事にしないとね！」

と言う事でミーナの歓迎会を開く事に5人は、賛成する。

媛萌「そうと決まれば早いところ買い出し行きますか・・・」

媛萌は、直ぐ立ち直り、材料の買い出しに行こうと乗り気になる。

明乃「そうだね！」

美甘「あつ・・・サプライズ何だから、この事ミーナさんには内緒だからね！・・・特にヒメちゃん！」

美甘は、ミーナに歓迎会の事は、内緒にするよう言う。

特に媛萌は、厳重を言い渡される。

媛萌「何で私なんだよ・・・!!」

美甘に厳重を言い渡され不服を言う。

美甘「何となくだけど・・・」

余り信用が薄い様だ。

フードコートでの食事を終えた後、5人は、材料とトイレットペーパーを買う為、食料品コーナー及び日用雑貨コーナーに向かう。

薫「ミナミちゃんは、何か見たいものとかある？」

他の2人は、良いとして、美波の方は、何か見たい物とか場所が無いか問う。

美波「・・・良く分からない・・・今まで研究ばかりで、皆で買い物とかあんまり経験が無かったからな・・・」

美波は、あんまり外出しなかったせいとか、こういうところに来たのは、本人も初めての様だ。

明乃「そうなんだ・・・ねえねえ研究ってどんな事するの?」

明乃は、美波がどんな研究をしているのか、尋ねると・・・

美波「・・・聞きたいか?」

それに対して、美波は、恐怖な顔で答える。

明乃「や、やっぱり遠慮しておこうかな・・・」

余りの恐怖に明乃は、聞くのを止める。

そんな時

美波「ところで艦長!」

明乃「何?」

美波「何故、手を繋いでいるんだ?」

美波は、明乃が手を繋ぐのに気になっていたので。

明乃「あつ!?!・・・あはは御免!御免!」

明乃は、慌てて、手を放す。

明乃「こういう所歩いてるとはぐれないようになって、つい昔のクセで・・・」

美波「自分がはぐれるのか：」

とは言え、5人は、各コーナーを回り、最後に食料品コーナーで卵と生クリームを買う。

美甘「お待たせ・・・!!御免ね・・・!!」

材料買いを終えた美甘が4人と合流する。

薫「材料買えた？」

美甘「うん!・・・それでね・・・」

美甘は、ある物をポケットから出す。

美甘「じゃくん!・・・一枚だけだけど抽選券貰っちゃった!!」

材料を買った序に抽選券を貰った。

美甘「これ一回福引できるんだって」

美波「何が当たるんだ？」

何が当たるのか美波は、分からなかった。

美甘「それは分からないけど・・・商品券とか当たったらもう豪華なケーキになるね

!」

美甘も何が当たるとか、分からなかったが、もし当たるとすれば、商品券でケーキなどを買いたいと願うが・・・

媛萌「いや其処は、トイレットペーパーに使うでしょ・・・」

確かに其処は、トイレットペーパーを買うのが当たり前なんだが

媛萌「福引きの賞品と言えば豪華旅行券!」

当の本人は、豪華旅行券が当たれば良いと思っていた。

美波「そんなの当てて如何するんだ?」

美波の言う通り、今、そんな物当てても、何の意味もない。

媛萌「金券ショップに売ればお金にできる。」

如何やら、売って、お金にする事を考えていた。

美甘「うわー夢がない!」

美波「捕らぬ狸皮算用」

手に入るか如何か分からない物を当てにして計画を立てる事、雅にその通りだ。

美波「如何します?」

美波は、如何するか薫に聞く。

薫「取り合えずやってみましょう・・・もし、それでトイレットペーパーか何か当たるなら・・・私があげた2万円・・・返してね!」

薫は、もし商品券か、それに類する物が当たるなら、自分が空しく寄付した2万円を返して欲しいと願う。

媛萌「……教官、其処は、お穩便にあげるのがそうじゃないんですか？」

普通寄付したお金は、あげるべきじゃないかと言うと

薫「何言ってるの！……大体その2万円は、元々、私のへソクリなのよ！」

薫は怒って、2万円が自分のへソクリだと暴露する。

『ええ!』

媛萌「へソクリだったんですか!？」

2万円がへソクリだったのを知り、驚く。

薫「当たり前でしょう!……本当は、衣装を買いたかったのに……!!」

薫は、涙ながら、へソクリの使い道を言う。

明乃「アハハハ……そうだ……薫お姉ちゃん……荷物になるからトイレツトペーパーは最後の方が良いと思いますか？」

薫「……そうね！」

薫は、立ち直る。

美甘「それじゃ早速いってみよーっ」

『おーっ!』

気を取り直して、5人は、露店のくじ引きに向かう。

しかし

次郎「如何だ、そっちは？」

古野間「駄目ですね・・・これと言った情報は有りません。」

次郎「そっちもか？」

GF隊員「はい」

次郎「くそ?!?・・・薫!・・・お前は、今何所にいるんだ!!」

直ぐ近くで次郎達が情報収集していたのに、薫は、彼らに気づかなかつた。

晴風、甲板

その頃、晴風、甲板で日光浴をしていた機関員四人衆は、数時間経過した後、余りに暇を弄んでいた。

『・・・・・・・・』

空「暇だ・・・ルナ何か面白い話して？」

空は、留奈に何か暇つぶしに面白い話をするよう言う。

留奈「何その無茶ぶり!？」

行き成り、面白い話をしろと言われ、驚愕するも何考える。

留奈「そうだな・・・じゃあ落語を一つ」

考えた結果、思わず落語を話す。

空「落語!？」

麗緒「ルナが落語を？」

桜良「テレビで見たのかしら・・・」

留奈が落語を話すのが珍しいのか、3人は、驚く。

留奈「えつとね・・・」

とは言え、留奈は、話を続ける。

留奈「高いお皿で餌をあげてると猫が二両で売れる話なんだけど・・・」

空「オチから言うな!」

留奈「だって、其処以外忘れちゃったんだもん：ていうか皆知ってる話だったの：

？」

空「忘れたのに話そうとしたのね!」

桜良「まあ、それなりに有名な話だからねえ・・・」

如何やら、留奈が言う話は、3人ともしている話だったので止める。

留奈「そーだ!!この前スーパーに行った時の話なんだけど・・・」

話を切り替え、この前、留奈が買い物でスーパーに行った事を話す。

留奈「お魚売ってるコーナーに塩鮭があつたのね?・・・でもその中に何と・・・甘

口が有ったんだよ!!・・・プロでも有るんだね。塩と砂糖間違える事って・・・っ
ていう面白い話・・・」

麗緒「いや甘口って、そう言う意味じゃないから」

空「アハハハ・・・面白いわーこの子!!」

留奈の面白い話に麗緒は、呆れ、空は、面白がって笑う。

そんな時

ほまれ「何の話してるの？」

桜良「ほっちゃん!!あっちゃん!!」

洗濯物を干していた柀姉妹が訪ねてきた。

麗緒「まあ、何でもない話だよ」

空「そうそうルナが可愛いねって話」

留奈「そーだったのー?」

桜良「でも甘口の間違いはちゃんと教えた方が良くと思う・・・この子の将来の為に・・・」

麗緒「育児に悩む母か?」

空「じゃあ代表して、ほっちゃん、あっちゃんに伝えてもらいましょ・・・」

ほまれ「えっ!?!何が?」

あかね「何を?」

何の話なのか、2人の頭に？になる。

その後、2人に先の話の事を説明する。

留奈「甘口は甘い訳ではない・・・よし覚えた!!」

留奈の知識力が上がった。

麗緒「ルナ理解力は結構高いんだよね〜」

桜良「やればできる子・・・」

『偉い!!偉い!!』

留奈の知識力が上がったのを4人は、褒める。

空「取り合えずこれでカレーに砂糖入れて甘口カレー何て未来は起こらなくなったわね!」

それに比べて、空は、皮肉を言う。

留奈「大丈夫、大丈夫!私そんなに料理しないし!」

空「おーっと、根底から覆す解決策!」

何とも無責任の解決策だ。

ほまれ「そうだ!」

ほまれば、ある事を思い出す。

ほまれ「そろそろおやつにしようと思ってたんだけど、一緒にどう?」

如何やら、杵^ツ姉妹は、おやつを一緒に食べようと、機関員四人衆を誘いに來たのだ。

麗緒「おお・・・良いね・・・」

留奈「わくい!!」

おやつを一緒に食べるのに4人は、大喜びで賛同する。

麗緒「機関長も呼ぶ?・・・機関室で寝てると思うけど・・・」

麗緒は、機関室で軒をかきながら寝ている麻命も誘おうとしたが

ほまれ「あー寝てるなら起こさない方が良いかな・・・」

ほまれがそれを止める。

空「何で?」

何故、麻命を起こしては、イケないのか理由を聞く。

あかね「マロンちゃん寝起きあんまり良くないから・・・」

空「機嫌悪いの?」

ほまれ「うくん・・・そうじゃなくて・・・起こした人巻き込んで2度寝しちゃうん

だよ・・・」

あかね「前にお泊り会した時にね・・・」

如何やら、2人の説明によると麻命は、相当、寝起きが悪い様だ。

その為、あえて起こさない様、止めたのだ。

《可愛い……》

麻侖の寝起きの悪さを聞いて、空と麗緒は、想像しただけでも可愛いと思つた。と言う事で機関員四人衆は、杵×姉妹に誘われ、おやつにする事にした。序に甲板で暇そうにしている連中も呼ぶ事にした。

数十分後

杵×姉妹に御呼ばれされ、機関員四人衆は、女子会の様に集まり、更に艦首でマチコと写真を取っていた百々と美海も集まる。

ほまれ「杏仁豆腐作ったから食べて……」

あかね「どうぞ……」

杵×姉妹が作つて来た杏仁豆腐が振舞われ、皆は、おやつを食べながら

麗緒「そう言えば、山本教官つて……臨時の教員何だよね？」

突然、薫の話題になる。

桜良「古庄教官が言つてたから、そうじゃないの……」

何故、薫が臨時教員なのか、麗緒は、気になっていたが、桜良は、別に気にしなかつた。

空「まあ：別に関係ない事だけど……山本教官と言つたら、あの胸の大きさ見た……サクラちゃんの胸よりおつきいよね……」

話を切り替え、薫の胸と桜良の胸を競い始めた。

桜良「別に関係ないでしょ、そんな事・・・」

だが桜良本人は、あまり競う気は無かった。

留奈「それより」

また、話を切り替え、今度は、留奈がある事を言う。

『ん?』

留奈「学校に帰ったら私達、怒られるのかな・・・?」

留奈は、今度の事で帰投したら、真雪に扱かれると思いついて溜息をする。

空「雅か、停学とか退学にならないよね・・・?」

空の方は、今度の事で晴風の生徒全員が停学とか退学の処罰が下されるかと思う。

桜良「ブルマーになれないとか?」

空の言葉を聞いて、桜良は、ブルマーメイドになれないかと略語で問う。

留奈「ブルマー?」

いきなり略語で言った為、留奈には、ブルマーメイドの言葉を略したのが分からなかった。

桜良「ブルマーメイド」

其処で桜良は、留奈に名称で言う。

麗緒「無い無い……だって宗谷さん、校長の娘さん何だって！」

麗緒は、ましろが真雪の娘だから、ましろがいる限り、処罰が下される事はないと思っ
た。

空「えっ本当……！」

桜良「あ、校長も宗谷だ！……宗谷真雪!!……宗谷さん、ましろだよね！」

ましろが真雪の娘だと知って、2人は、驚く。

そんな時

『うん?』

ミーナに艦内を案内していたましろと洋美が偶然、其処に居合わせて、堆、彼女達の
会話を聞いてしまう。

留奈「真雪とましろかあ……雪は白いもんね……」

麗緒「えーでも校長の娘なのに、うちのクラス?……武蔵とかじゃないんだ？」

麗緒は、ましろが真雪の娘なのに何故、成績優秀の武蔵じゃなく、成績不良の晴風に
配属されたのか、気になる。

ましろ「!!」

麗緒の言葉を聞いて、ましろは、落ち込む。

だが、そんなましろを見て、洋美が

洋美「余計なお喋りは止めなさい!!」

と余りに余計なお喋りをする4人に止める様激怒する。

『!?!』

更にミーナも

ミーナ「この、噂好きのドグサレ野郎共!修理する箇所がいくらでもあるだろ!・・・
取り掛かれ!!」

と7人に渴を入れた。

『は、はい!!』

ミーナの一喝を受け、持ち場へと慌てて戻って行った。

洋美「気にしないでね、宗谷さん・・・」

7人が去った後、落ち込むましろに洋美は、慰めようとする。

ましろ「・・・」

だが、さっきの7人のお喋りを聞いて、ましろは、かなり落ち込んでいた。

ましろ自身、本当は、晴風じゃなく、武蔵に乗りたかったのに、入学試験での初歩的なミスで結局、晴風に乗る事になってしまった。

自分の運がついてない事に落ち込むましろ

その時

理都子「あ、アビスの箱だ……！」

漂流物を拾っていた理都子と果代子が通販会社のロゴが書かれた箱を見つけ、2人は、その箱を引き揚げる。

理都子「フツ……」

果代子「通販の箱なんだから雑誌とか入ってないかな……あれ？」

何が入っているのか、蓋を開けると、其処には蓋が開いた飼育箱があり、中から

『!?!』

ハムスターの様なマウスが飛び出して、甲板を走り去っていった。

ちようどその頃、機銃座で昼寝をしていた五十六が、甲板を走るマウスの姿を見つめる。

それを見た瞬間、まるで本能に目覚めたかの様に、そのマウスを追いかけに行った。

『うん!?!』

マウスは、偶々その場にいた、ましろ、洋美、ミーナの足元を通過した。

ミーナ「鼠?!?!」

ミーナが足元を見て、ましろが左を向くと、マウスを追いかけていた五十六が突進してきた。

ましろ「わあ!?!…ひい…ひい…ぐぼっ!!」

驚きの余り、尻もちをつくましろ、更に其処に五十六が腹に乗り飛び越えていった。

洋美「宗谷さん、大丈夫?」

洋美がましろに心配して声を掛ける。

ましろ「全く、猫なんか乗せるから・・・」

ましろは、つくづく自分の運の無さに悔やむのだった。

そんな晴風の生徒が休養を取っている頃

首相官邸、総理執務室

田沼「それは本当か!」

邦夫『はい、拘束している山本監督官が全てを自供しました!!』

田沼は、邦夫から龍之介がデータの在りかを自供した事を聞く。

田沼「しかし、如何するんだ?・・・晴風は、現在行方が分からないし、更に撃沈命令を下しているではないか・・・」

現在、晴風は、行方が分からず、更に撃沈命令を出している状況。

こんな状況で如何するのか、邦夫に問う。

邦夫『その辺は、ご心配なく!・・・こんな事もあるのかと部下に宗谷監督官の監視を命じております・・・彼らは、何れ晴風と接触するでしょ・・・其処を狙って、彼らより先に捕まえデータを奪うのです!!』

邦夫は、予め真霜の行動を部下に監視させ、晴風と接触するところを狙って、真霜より先に捕まえる。

後から来た真霜達など、自らの人脈さえ、あればいくらでも追い払える。

後は、データを回収し田沼に手渡すだけという作戦だ。

田沼「国交相代行には、この事は？」

邦夫「もちろん伏せています・・・余計な事を詮索されたくないのです・・・」

邦夫は、予め、一誠には、この事は報告していない。

その為、一誠は、何も知らない。

田沼「大丈夫なんだな？」

田沼は、邦夫に作戦の支障がないか確認する。

邦夫『私のメンツにかけて、失敗は、ありえませんか!!・・・唯、少々手荒なマネをしてしまいますが・・・』

作戦自体に支障はないが、唯、データを奪う為、少々手荒なマネをするので田沼に許可を頂こうと申し出る。

田沼「・・・良からう!・・・やって見たまえ!!・・・但し失敗は、許さんぞ!!」

田沼は、邦夫の提案を許可した。

邦夫『お任せ下さい!!』

田沼は、電話を切る。

田沼「……フッフ……もう直ぐだ! ……もう直ぐ、我らの物に……フッフハハハ……!!」

もう直ぐ龍之介達が隠していた技術が自分の物になると知り、嘲笑う。

画して、買い出しに出かけている薫達に田沼達の脅威が迫ろうとしていた。

そして

横須賀病院、集中治療室

古庄「……う……う……う……う……う!?!」

集中治療室で意識不明のまま昏睡状態が続いていた古庄が意識を回復した。

古庄「……此処は……何所? ……私は、一体?」

意識を回復した古庄は、自分が如何して、此処に居るのか全く分からなかった。

そんな時

看護師が見回りに古庄がいる集中治療室に入って来た。

看護師「はっ!?!」

入って来た看護師が意識を取り戻した古庄に気づく。

そして、急いでナースコールのボタンを押して、先生を呼んだ。

こうして、古庄の意識は回復した。

これで、何が遭ったのか解明出来る。

更に薫と龍之介達、そして、晴風の生徒達の無実も証明できる。

第16章 乙女のピンチ! 後編

4月13日

16:00

オーシャンモール四国沖店

一方、晴風を搜索している平賀達は、真霜からの情報を頼りにオーシャンモール四国沖店にいた。

平賀「宗谷監督官の情報によれば、晴風は、この付近の海域に潜んでいる筈!」

寒川「間宮と明石、浜風、舞風に、この近海の哨戒を依頼しましょう。」

平賀「そうね!・・・そうして頂戴!!・・・但し、夜まで見つからない様なら、戻つて来るように伝えて・・・」

寒川「はっ!」

平賀「それと私達も哨戒艇にて哨戒を行います・・・準備をして・・・」

志度「はっ!」

平賀達は間宮と明石、浜風、舞風に、この近海の哨戒を依頼する。

更に自らも哨戒艇にて哨戒する為、栈橋へと向かう。

その途中で、前方から4人の高校生を見かける。

平賀「ん!？」

4人の高校生を見て、平賀は、突然、足を止め、その4人の高校生の方を向く。

志度「如何したんですか、平賀監察官!？」

平賀「・・・今、晴風の乗員らしき生徒を見かけたわ!」

寒川「本当ですか?」

平賀「間違いないわ!!後を追うわよ!」

『はっ!』

平賀達は、その4人の高校生の後を追う。

その4人の高校生は、紛れもなく買い出しに来た明乃と美甘、美波、媛萌だった。

4人は、買い物で抽選券を貰ったので、福引する為、福引会場に向かっていた。

オーシャンモール四国沖店、福引会場

4人は、福引会場に着き、そして、誰が引くか協議する。

協議した結果、艦長である明乃が引く事になった。

明乃は、恐る恐るハンドルを回す。

次の瞬間

店員「トイレットパーパー1年・・・分おめでとうございます!!」

金の玉が出て、一等のトイレットペーパー1年分が当たった。カランカランと鐘をならす店員。

明乃「やった・・・!!」

美甘「艦長・・・じゃなくて岬さんすごっ!?」

媛萌「何て運の良い：抽選券1枚しか貰えなかったのに・・・」

3人が明乃の幸運体質に驚く。

美甘「良かったね・・・トイレットペーパーまだ買わなくて・・・」

福引でトイレットペーパー1年分が当たり、美甘は喜ぶ。

福引でトイレットペーパーが当たり、トイレットペーパーを買う必要がなくなったのだ。

美波「でも、1年分なんて如何やって、持って帰るんだ?」

しかし、美波の言う通り、トイレットペーパー1年分は、4人では、到底持つて帰る事は出来ない。

そんな時

店員「ご自宅までお送りしますよ!」

運搬方法を考える4人に店員が家まで配送してくれると言ってくれたが、それは無理な相談である。

『えっ……』

それを聞いた4人は、円陣を組む。

明乃「如何しよう、艦まで送って貰えないし……」

媛萌「持てるだけ持って帰ろうよ！」

取り合えず持つてる分だけ持って帰る事にした。

しかし、4人は、平賀達にマークされていた事に気づかなかつた。

そして、無料シャトルバスの駅まで戻ろうと歩いていると

明乃「ん!？」

前方に平賀達が立ちほだかる。

『……ん?』

4人は、何かと思つた時

平賀「貴方達、晴風の乗員ね！」

『うえっ!?!』

突然、自分達の正体がばれ

媛萌「戦略的撤退よ！」

急いでトイレットペーパーを捨てて、その場から逃げる。

明乃「ま、待って、皆……」

明乃も遅れて、急いで3人の後を追う。

平賀「あ、待ちなさい!!」

逃げる4人を平賀は、急いで後を追いかける。

少年「あっ!」

だが、急いで逃げた為、通行人の少年が逃げる媛萌を避けようとしたせいで地面に尻もちを着く。

明乃「あっ!」

地面に尻もちを着いた少年に気づき

明乃「大丈夫?」

明乃は、咄嗟にその少年を気遣う。

だが

明乃「う・・・うあ・・・!!」

その少年を気遣つてるうちに明乃は、寒川と志度に取り押さえられてしまった。

美甘「あっ・・・艦長!!」

明乃が捕まってしまい、更に他の3人も捕まってしまった。

海上安全整備局、真霜の執務室

平賀『晴風の艦長以下4名を拘束しました。』

平賀は、明乃達を拘束した事を真霜に報告する。

真霜「ご苦労様！……ところでその中におお、いや、山本二等監督官は、居なかつた？」

報告を受けた真霜は、捕まえた4人の中に薫がいないか確認する。

平賀『……いえ、残念ながら……』

真霜「必ず居る筈！……彼女は、決して人に任せる事はしない筈だから……」

真霜は、薫の長所を知っていたので、決して生徒だけで買い出しになんて行かせない事は分かっていた。

平賀『分かりました……取り合えず4人から事情聴衆をして、山本二等監督官の居場所を聞き出します……』

真霜「頼むわよ平賀監察官！」

平賀『では……』

電話を切る。

真霜「薫……貴方は、今……何所に居るの？」

真霜は、薫が今何所に居るか心配していた。

オーシャンモール四国沖店、とある女子トイレ

その頃、薫は、明乃達と別れ、1人トイレに行っていた。

何故、薫が此処に居るのか、それは明乃達と一緒に福引会場に向かう途中、急にトイレに行きたくなり、仕方なく、トイレが済み次第、無料シャトルバスの駅で合流する事で別れたのだ。

ドサ・・・

薫「はあくスッキリした!・・・さて・・・皆の元に急いで戻らないと・・・」

トイレを済ました薫は、急いで明乃達と合流するべく無料シャトルバスの駅へと向かう。

薫「ん!?・・・あれは!?!」

無料シャトルバスの駅に向かう途中、薫は、思わぬものを見てしまう。

薫「ひ、平賀さん!?!」

それは、拘束した明乃達を連行する平賀達の姿だった。

薫は、急いで壁に隠れて、様子を伺う。

薫「な、何で平賀さん達が此処に・・・」

何故、平賀達が此処に居るのか、分からなかった。

だが、明乃達が捕まっている以上、薫がやる事は、一つ

薫は、バックからある物を取り出す。

それは、閃光手榴弾だった。

安全ピンを抜き、それを平賀達に向け思い切り投げた。

カン、カン

平賀「!？」

平賀の足元に閃光手榴弾がコロと落ちてきて

薫「伏せて!!」

明乃「はっ!？」

薫に言われ、明乃達は、その場に伏せる。

次の瞬間

ピーカー!!

閃光手榴弾が爆発

『わあ!?!』

強力な光が発し、平賀達は、一時的に目と耳をやられて、行動不能になる。

薫「今よ!」

薫は、平賀達が閃光手榴弾で行動不能になっている間に捕まっていた明乃達の元に向かう。

薫「皆・・・私に付いてきて・・・急いで!!」

明乃「は、はい!」

薫は、明乃達を連れて、急いでその場を去る。

平賀「ま、待つてください薫さん!!」

平賀達は、何とか薫達の後を追おうとしたが、閃光手榴弾を受けたせいで、暫くは動けなかった。

そして

次郎「な、何だ今の音は!」

古野間「閃光手榴弾の様だ!!」

次郎「行つて見よう!!」

直ぐ近くに居た次郎達も閃光手榴弾の爆発音に気づき、急いで向かう。

数分後

薫達は、何とか平賀達から逃げる事に成功し、とあるビルとビルの間にある路地に逃げこんだ。

路地に逃げ込んだ薫は、路地から辺りを見回し、誰も追つてこないのを確認する。

薫「……如何やら、まいた様ね……」

誰も追つてこないのを確認し、取り合えず安心する。

薫「皆、怪我なかった?」

薫は、平賀達から逃げる時に怪我をしていないか問う。

明乃「だ、大丈夫です。」
如何やら怪我はない様だ。

媛萌「い、今の何!?!」

薫「閃光手榴弾よ!・・・こんな事もあるうかと一応、艦から持つて来たの・・・まゝあ、役には立った見たいだけど・・・」

美波「耳がピンピンする。」

美波は、さっきの閃光手榴弾を受けたせいか、耳がピンピンする様だ。

薫「暫くの間だけよ・・・直ぐ治るわよ!」

美甘「ああ・・・折角のトイレットペーパーを置いて来ちやったよ・・・!」

美甘は、平賀達から無事助けられた事に感謝したが、残念な事に折角、福引で当てたトイレットペーパーを置いてきた事を悔やんでいた。

薫「仕方ないわよ!・・・無事なだけでも感謝しなさい!!」

薫は、悔む美甘を慰める。

薫「取り合えず急いで晴風に戻りましょう・・・トイレットペーパーの事は諦めるしかないわ!!」

薫は、取り合えずトイレットペーパーは、諦めて、急いで晴風に戻る事を提案する。

明乃「そうですね教官!」

薫の提案に明乃も同意する。

媛萌「はぁ・・・トレットペーパーは、いるけど、逃げるしかない・・・」

美甘「そうだね・・・」

媛萌は、トレットペーパーを何としても手に入れたかったが、今は、逃げるのが先決だと思い、美甘もそれに同意する。

美波「三十六計逃げるに如かず」

美波もことわざで言う。

その時

ガチャ!

薫「あっ!?!」

突然、後ろから黒いスーツ姿をした男性が現れる。

謎の黒づくめの男「動くな!?!」

男は、薫の頭にある物が付き付ける。

それは正しく・・・拳銃（アメリカのベレッタ 92）だった。

『うえっ!?!』

薫の頭に拳銃を付き付ける男に明乃達は驚愕する。

薫「何なの、貴方達?」

薫は、手を上げて、問う。

だが、次の瞬間

隙を狙って、薫は、男の急所に蹴りを入れる。

謎の黒づくめの男「う!?!」

急所を蹴られ、その場に体勢を崩す。

そして、今度は、握っていた拳銃の手に蹴りを入れ、男から拳銃を捨てさせた。

薫「女性の頭に拳銃を付き付ける何て、最低よ!」

急所をやられて、薫の前に体勢を崩す男。

男は、甘かった。

薫は、船の技術と戦術だけじゃなく、格闘術も学んでいたのだ。

だから、銃を持った相手を倒すなど、どおさも無かった。

だが、相手に勝利したのも束の間過ぎなかった。

明乃「教官!」

明乃の声に薫は、振り向く。

薫「えっ!?!」

何と男は、1人じゃなかった。

明乃達の後ろにもう2人程隠れていたのだ。

謎の黒ずくめの男B「動くな!・・・妙なマネをすれば、この2人の命は無いぞ!!」
その2人は、明乃と美甘を捕まえて、彼女らの頭に拳銃を付き付ける。

美甘「教官!」

薫「う・・・」

流石の薫も生徒を人質に取られては、手も足も出ない。

此処は、大人しく従うしかなかった。

オーシャンモール四国沖店、解体区

それから、黒ずくめの男達3人は、薫と明乃達を人けの無い廃墟へと連行する。

明乃「教官!」

薫「大丈夫よ?」

媛萌「全然、大丈夫じゃないよ!!」

美甘「私達如何なるんですか?」

美波「万事休す」

明乃達は、恐怖に怯えながら廃墟に入る。

廃墟に入ったところで薫と明乃達を真中に座らせ、男の1人が薫の前に立つ。

謎の黒ずくめの男A「心配しないでください・・・我々に従えれば、危害は加えませ
ん。」

薫「何が危害は加えないわよ! . . . 人に拳銃を付き付けて置いて. . .」

薫は、彼らに向かつて、反論する。

謎の黒づくめの男A「我々は、ある組織の者です!」

薫「組織?」

男は、ある組織の者だと言つて、薫は?する。

謎の黒づくめの男A「我々は、あるお方の命令で、山本二等監督官! . . . 貴方に要
が有つて伺つた次第です!!」

薫「私に. . . 何の要なの?」

如何やら男は、薫に要が有る様だ。

謎の黒づくめの男A「知れた事. . . データを渡して貰いましょう!!」

謎の黒づくめの男達は、薫に持つている、あるデータを渡す様要求する。

薫「データ!? . . . 何の事?」

いきなり何の事を言っているのか薫は、分からなかった。

謎の黒づくめの男B「しらを切る気ですか. . . 山本一等監督官から預かつている筈
! . . . 極秘情報のデータが入ったメモリーカードを. . .」

薫「ま、待つてよ! . . . 何かの間違いよ! . . . 私は、そんな物何か預かつては. . .
はっ!」

薫は、ある事を思い出す。

薫（そう言えば、海洋実習に参加する前・・・兄さん、私にお守りを渡してくれたけど・・・もしかして!?!・・・あのお守りの中に・・・）

海洋実習に参加する前に龍之介からお守りを貰った事を思い出し、そのお守りの中に入っていたのではないのかと気づく。

薫（でも・・・あのお守りは・・・）

しかし、それを今確認する事が出来ない。

何故なら、薫は、今お守りを持っていなかったのだ。

お守りは、薫ではなく、はやてが持っているからだ。

しかし、そんな事は恐らく、この連中は信じないだろう。

でも、今生徒を人質に取られては、下手に抵抗は出来ない。

如何すれば良いのか

謎の黒ずくめの男A「如何したんですか?・・・早く渡して下さい・・・さあ!」

薫「悪いけど・・・今、私は、そのデータを持っていないわ!!」

データを渡す様、迫るに対し、薫は、持っていないと答える。

謎の黒ずくめの男A「嘘はいけませんね、山本二等監督官!」

しかし、黒ずくめの男達は、薫の言葉を信じなかった。

薫「嘘なんて付いていない!! 本当を持っていないのよ!!」

謎の黒ずくめの男B「くうく何処まで、しらを切る気だこのアマ!」

薫「うっ!?!」

頭にきたか、謎の黒ずくめの男の1人が薫を殴る。

明乃「お姉ちゃん!?!」

薫「私は、大丈夫よ!・・・殴りたいなら殴りなさいよ!・・・何度殴られても私は、持っていないわ!!」

殴られても薫は、怯まず持っていないと言い張る。

謎の黒ずくめの男B「くくそ・・・舐めやがって・・・!!」

謎の黒ずくめの男A「待つて!・・・そんなにしらを切る気なら此方にも考えが有ります・・・おい!」

明乃「う・・・うあ・・・!?!」

美甘「艦長!!」

黒ずくめの男は、突然、明乃を薫の前に突き出す。

薫「何をする気!?!」

謎の黒ずくめの男A「こうするんですよ!」

黒ずくめの男は、明乃の頭に拳銃を付き付ける。

明乃「お、お姉ちゃん!!」

拳銃を付き付けられ怯える明乃。

美甘「艦長に何するんですか!？」

媛萌「犯罪よ!殺人罪よ!」

薫「止めつて!!・・・その子は関係ないでしょ!!・・・撃つなら、私を撃ちなさい!!」

薫は、明乃を庇おうと自分を犠牲に仕様とするが

謎の黒ずくめの男A「それは無理な話です・・・貴方を殺しては、生徒を殺した犯人

として、祭り上げる事が出来なくなりますので・・・」

如何やら、明乃達を殺した犯人として、薫にその罪を着せようとの魂胆の様だ。

薫「何て卑劣な!・・・貴方達、それでも人間なの?」

謎の黒ずくめの男A「我々は、手荒なマネをしても手に入れるつもりなのですよ山本

二等監督官!」

黒ずくめの男は、拳銃の引き金を手を入れる。

いつでも殺せる状態だ。

薫「止めつて!!お願い止めつて!!」

謎の黒ずくめの男A「止めつて欲しければ・・・データを渡して貰おう。」

薫「だから、持っていないってば!!」

謎の黒ずくめの男A「では、可愛そうな少女に死んでもらいましょう・・・」
黒ずくめの男は、拳銃の引き金を引こうとする。

薫「止めって!!!」

ポーン!!

廃墟に1発の銃声が鳴り響く。

平賀「今のは？」

寒川「銃声の様です？」

志度「向こうからの様です!!」

後を追っていた平賀達も銃声を聞いて、付近に建っていた廃墟へと急いで向かう。

薫「!?!」

銃声が鳴り響いた後、薫は、驚く表情をする。

何故なら、明乃を撃とうとした男の手から拳銃が離れて、地面に落ちていた。

謎の黒ずくめの男A「うう!!」

黒ずくめの男は、手を傷めたせいとか、その場に体勢を崩す。

一体何が如くなっているのか

すると

「止せよ! . . . 子ども相手に拳銃を向けるなんて、大人のする事じゃないぜ!!」
横から1人の男が現れた。

薫「じ、次郎君!？」

次郎「帰つて来たぜ薫!!」

何とそれは、次郎だった。

謎の黒ずくめの男A「き、貴様!？」

次郎「おつと動くな! お前らもだ!!」

次郎は、拳銃を黒ずくめの男に向け、そして、後2人にも動くなつと警告する。

謎の黒ずくめの男B「何?」

何故なら

GF隊員「動くなよバカ野郎!!」

古野間「動くな!」

『うっ』

次郎の仲間が後ろから2人の黒ずくめの男を取り押さえていたからだ。

次郎「形勢逆転だな!」

あつという間に形勢は逆転し、薫達は、次郎達のお陰で危機を脱した。

薫「岬ちゃん!!」

薫は、助かった明乃に抱き付く。

『艦長!!』

美波「艦長!」

そして、人質になつていた媛萌、美甘、美波も助かった明乃の元に向かう。

美甘「大丈夫? 怪我不い!!」

明乃「う、うん、大丈夫!」

媛萌「全く、一時は、如何なるかと思つたよ・・・」

美波「何と言う幸運・・・」

明乃が無事な事に3人は、安心した。

次郎「おくい、薫!・・・折角、助けたのにお礼もないのかよ・・・」

4人が安心していると次郎が助けた礼もないのかと言う。

薫「あつ!?!・・・御免ね次郎君!・・・でも如何して次郎君達が此処に?・・・地中海に居たんじゃ・・・」

薫は、何故、次郎達が此処に居るのか問う。

次郎「急な帰還命令が出たから可笑しいと思つて、権藤中佐が俺達だけ逃がしたんだ

!!」

次郎は、此処に來た経緯を話す。

薫「権藤中佐は？」

次郎「逃げた後だから、安否は不明だ：：だが、中佐の事だから、多分無事だろう。」

薫「そう．．．」

美由紀達の事を聞いて薫は、啞然とする。

次郎「しかし、お前、何でこんな所に居るんだ？」

今度は、次郎が何故、薫が此処に居るのか問う。

薫「それは．．．話せば長くなるわ!!」

次郎「そうか．．．まあ、それは良いとして．．．こいつらは、何者だ?．．．何

故お前を狙ったんだ？」

話が長くなるので、其処は、後で聞くとして、次郎は、捕まえた謎の黒ずくめの男達

が何故薫を襲ったのか薫に問う。

薫「それは．．．」

薫が黒ずくめの男達の目的を言おうとした時

平賀「居たわ！」

『ん!?!』

次郎に続いて、今度は、平賀達が着た。

平賀「薫さん!!」

薫「平賀さん!？」

平賀「良かった! やつと見つけた!!」

ようやく薫達を見つけて、安心したと思いきや

次郎「くう!」

平賀「!？」

薫「じ、次郎君!？」

次郎は、平賀に拳銃を向ける。

次郎「薫、気をつけろ!・・・こいつらは、敵だ!!」

平賀「待つてください小沢さん!!・・・私達は、味方です!!」

次郎「何が味方だ!! 准将や俺達の仲間を拘束したくせに!!」

薫「拘束?」

平賀「あれは、私達ではありません!!・・・田沼総理と釣るんだもの達が勝手にした事で・・・私達は、宗谷監督官の命令で山本監督官達の無実を証明すべく薫さん達、晴風を助けに来たんです!!」

平賀、次郎に味方だと弁明するが

次郎「助けにだ?・・・殺しの間違いだろ!!」

平賀「本当です信じて下さい!!」

次郎「信用できねえ・・・」

平賀の弁明も次郎は信じず

止む無く平賀は、思わぬ行動を取る。

次郎「な、何のマネだ!?!」

寒川「監察官、何を?」

平賀は、次郎に近づき、向けている拳銃を自分の胸に向ける。

平賀「そんなに私の言葉が信用できないなら・・・撃つてください!!」

平賀は、自分の言葉が信用できないなら撃つよう次郎に告げる。

次郎「お、お前、本気か!?!・・・俺が撃たないと思ってるのか?」

平賀の行動に次郎は、驚愕する。

平賀「いえ、ですが私は、貴方達を保護するよう宗谷監督官から命じられています・・・

ですから、私達は、貴方達を殺しに来たものではありません!!」

次郎に自分の胸に拳銃を付き付けて、弁明する平賀。

次郎「ん・・・」

平賀の命懸けの弁明に次郎は、本当に信じて良いのか悩む。

そんな時

薫「銃を降ろして、次郎君！」

薫が次郎に拳銃を降ろすよう命じる。

次郎「でも、薫？」

薫「良いから銃を降ろして、次郎君！……平賀さんの言っている事は、本当の要よ……」

次郎「ん……薫が言うなら信じよう……」

薫に説得され次郎は、拳銃を降ろす。

平賀「分かってくれましたか!？」

次郎「だが……」

次郎は、黒ずくめの男達の元に向かい

次郎「こいつらは！……お前達の仲間じゃないのか？」

次郎は、黒ずくめの男達が真霜が送り込んだ暗殺者なのか平賀に問う。

謎の黒ずくめの男A「……」

平賀「貴方達は!？」

平賀は、黒ずくめの男達を見て、平賀は驚く。

次郎「顔見知りか？」

平賀「ええ……横須賀基地で山本監督官と徳吉監督官を拘束した人達です!!」

何と黒ずくめの男達の正体は、龍之介と功を拘束した者達だった。

次郎「何だって!!」

平賀「大方、野田監督官の手の者でしょう!!」

平賀は、黒ずくめの男達が邦夫の手の者だと見抜く。

謎の黒ずくめの男A「ち、違う・我々は、個人的に動いている・断じて野田監督官とは無関係だ!!」

黒ずくめの男達は、あくまで野田の手先ではないと言い張る。

平賀「黙りなさい!!・・・貴方達を殺人未遂及び恐喝罪で逮捕します・・・連行して!!」

平賀は、寒川と志度に黒ずくめの男達を連行するよう命じる。

『はっ!』

寒川と志度は、黒ずくめの男達を連行する。

薫「終わったみたいだね!」

悪夢の様な時間がようやく終わり、薫は、安心するが

媛萌「私達、これから如何なるんですか?」

ブルーマーメイドに保護されて、これから自分達が如何なるのか、明乃達は不安になる。

薫「大丈夫!・・・私が付いているから心配ないよ・・・」

不安になる明乃達を安心させる。

次郎「序に俺達も居るから安心しろ！」

媛萌「全然大丈夫じゃないし!!・・て言うかこの人達、誰ですか？」

媛萌は、次郎に何者かと言う。

すると

次郎「ふん・・聞いて驚くなよ!・・俺は、かお・・」

薫「はいはい、それは良いから・・」

次郎「まだ途中なのに・・」

託けて、名のろうとしたが、薫に止められ、次郎は、まだ途中なのに愚痴を言う。

平賀「さあ、此処では、何ですから・・取り合えず、我々の支部に行きましょう・・」

話は、其処で・・」

次郎「ああ、ちゃんと説明しろよ!・・この事態をな！」

薫「さあ、行きましょう皆!!」

薫と次郎達は、事情を説明する為、平賀達と一緒にオーシャンモール四国沖店のブ

ルーマーメイドの支部へと向かう。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

最初の電話から数時間が経過した後、再び真霜のところに電話が入る。

真霜「はい、もしもし……」

平賀『宗谷監督官!……平賀です!』

電話の相手は、平賀からだった。

真霜「如何したの平賀監察官!……先程、報告を終えたばかりなのに……何かあったの?」

平賀『その……山本二等監督官と接触しました。』

真霜「かお……山本二等監督官と!……それで、彼女は今何処に?」

平賀から薫と無事接触した報告を聞き、真霜は、薫が今何所に居るか問う。

平賀『今此処に……支部で小沢監督官達と一緒に状況を説明しているところです。』

真霜「そう……良かった!!」

薫達が無事、平賀と一緒にブルーマーメイドの支部に居る事を聞いて、真霜は安心する。

平賀『それと……報告には、まだ続きが……』

真霜「!?!」

真霜は、平賀から、ある思わぬ報告を聞く。

平賀『山本二等監督官達を保護したとは、別に妙な男達を拘束しました。』

真霜「妙な男達?」

平賀『詳しくは、分かりませんが、おそらく野田監督官の手の者かと．．．その男達は、晴風の乗員を人質にとつて、山本二等監督官に従わなければ乗員を一人ずつ殺すと脅したそうです。』

平賀は、拘束した黒ずくめの男達の事とその男達が明乃達を人質にとつて、薫を脅した事を真霜に報告する。

真霜「何ですつて!?それで、晴風の乗員は？」

真霜は、明乃達の安否を問う。

平賀『殺される寸前で小沢監督官達が彼らを救出しました。』

真霜「そう．．．良かった．．．」

明乃達が無事な事に安心した。

平賀『それで．．．これから彼らと共に晴風の元に向かうつもりです。』

平賀は、これから晴風に向かう事を真霜に告げる。

真霜「そう．．．くれぐれもお願ひね！」

平賀『はっ!』

薫『ちよつと替わつてください平賀さん!．．．．．真霜姉、いや、宗谷監督官!』

平賀は、薫と電話を代わる。

真霜「薫!．．．薫なのね？」

薫『は、はい!』

真霜「何で直ぐ連絡しなかったの!!・・・今まで何所に居たの!!・・・私とお母さんがどれ程心配したか!!」

真霜は、薫に怒りを露にする。

真霜は、怒りを露にする程、薫や晴風の生徒を心配していたのだ。

薫『ご、御免なさい!!』

薫は、真霜に連絡しなかった事や今まで居場所を教えなかった事を謝罪した。

真霜「まあ良いわ!・・・貴方と生徒が無事で・・・」

真霜は、兎に角、薫と晴風の生徒が無事で安心した。

薫『あの・・・平賀さんから聞きました・・・真霜姉さんが私と兄さんや皆、そして、晴風の生徒を助ける為にあっちこっち動いてたそうですね!・・・何とお礼したら良いか・・・』

薫は、真霜が自分や龍之介達と晴風の生徒を助ける為にあっちこっちで動いていた事に薫は、感謝がたりない程、感謝していた。

真霜「当たり前でしょ!・・・私にとつて、貴方やましろ、そして、龍之介は、大事な家族よ!・・・家族を救うのは当然でしょ!!」

真霜は、家族を救うのは、当然の義務だと言う。

薫『うっ……うっ……ありがとうございます!!』

真霜の言葉に薫は、涙ながら感謝する。

話は変わり

真霜「それで今から貴方も晴風の元に向かうのね。」

薫『はい!……取り合えず……間宮と明石を連れて、途中で白鳳と後龍してから晴風に戻るつもりです。』

真霜「ましろには、くれぐれも私とお母さんが心配してつたと伝えて置いてね!」

薫『はい……では……』

真霜は、電話を切る。

支部での事情説明を終えた後、薫、次郎と明乃達（美甘と媛萌、美波は、スキツパーで古野間とGF隊員は、高速艇）は、平賀達と共に明石と間宮を連れてブルーマーメイドの哨戒艇で晴風に向かう。

そして、海底で沈座している白鳳も

特殊戦闘艦白鳳

白鳳の通信主「先遣隊より入電!!」

三郎「艦長から……で内容は?」

白鳳の通信主「はっ!……ワレ、オーシャンモールシコクオキテンニテ……ヤ

マモトチユウサトセツシヨク・・・」

三郎「何!?!・・・山本中佐と接触したのか?」

白鳳の通信主「はい・・・それと・・・コレヨリブルーマーメイドトトモニハレカゼニムカウ・・・キカンモタダチニゴウリユウサレタシ・・・との事です。」

三郎「ブルーマーメイドと共に・・・大丈夫なのか?」

白鳳の操縦主「如何しますか副長?」

三郎「・・・取り合えず艦長を信用しよう・・・浮上用意!・・・これより会合地点に向かう!!」

『はっ!』

次郎からの連絡を受け取り、白鳳は浮上し、晴風へと向かう。

4月13日

18:00

一方、晴風は、荒れ狂海上の中、買い出しに行った薫と明乃達の帰りを待ち続けた。た。

晴風、甲板

理都子「うわ、漂流物漁っている場合じゃなくなってきたね!」

果代子「・・・気持ち悪い・・・」

昼間からずっと漂流物を漁っていた理都子と果代子であったが、荒れてきた海の中で、下を向いて作業をしていた為か船酔いを催した様子。

2人の周りには、漁った漂流物が山ほど置かれていた。

晴風、艦橋

芽衣「そろそろ教官と艦長が戻ってくる時間だよね・・・」

幸子「此処で合流にしたんですけどね・・・」

買い出しに行つた薫と明乃達の帰りが遅いのに2人は、気になっていた。

と其処へ

まして「教官と艦長はまだか！」

もう1人、薫と明乃達の帰りをまだかまだかと待ち浴びていたましてが艦橋に怒鳴りながら戻つて来た。

鈴「ひっ!？」

怒鳴るましてに鈴は、ビックリする。

幸子「まだですね・・・」

まして「何、呑気に買い物してるんだ!」

ましては、余りに帰りが遅い薫と明乃達に呆れ果てる。

そんな時

五十六「ぬう・・・」

五十六が艦橋に突然やって来て、

ましろ「!?・・・ひっ!」

ましろは、何かと思い五十六の方を向くと突然、ビックリな顔をする。

何故なら、五十六がある物を口の咥えていたのだ。

それは、昼間、通販会社の箱から逃げたあのマウスだった。

五十六はマウスを生け捕りにして、まるで艦橋の皆に自慢するかの様に見せた。

志摩「・・・かわ・・・いい・・・」

志摩は、五十六が生け捕りにしたマウスを見て、可愛いとうれしながら五十六が床に置いたマウスを手取る。

五十六「フギャ・・・!!」

すると五十六がまるで俺の獲物を横取りするな!!と言っているかの様にマウスを取り替えようと暴れるが

芽衣「こら、こらあ」

芽衣に抑えられて奪い返す事が出来なかった。

志摩「!?・・・」

マウスは自らを手のひらに乗せてくれた志摩の頬に自らの頬を寄せる。

幸子「人懐っこいですね・・・」

幸子はマウスを見て和む。

ましろ「生き物は持ち込み禁止だろ！」

規律を守るましろは、マウスを持ち込んだ事に腹を立つが

幸子「飼い主が見つかるまで預かっておきましようか？」

幸子が飼い主が見つかるまで、自分が責任を持つて、預かると言うが

ましろ「ん・・・」

それに対して、ましろは、何も反論できなかつた。

晴風、見張り台

ましろと幸子がマウスの処置について話している頃

見張り台で見張りをしていたマチコが双眼鏡で水平線に浮かぶ4つの黒い物体を発

見する。

マチコ「ん!?!・・・」

何かと思い、もう一度双眼鏡を覗くと

マチコ「!!・・・」

何とそれは、晴風と同じ横須賀女子海洋学校所属の給糧支援教育艦間宮と工作支援教

育艦明石、そして護衛の航洋直接教育艦浜風、舞風だった。

晴風、艦橋

マチコ『間宮・明石、及び、護衛の航洋艦2隻右60度、200、此方に向かう!!』

鈴「また攻撃されちゃうの・・・!?」

また攻撃されるのかと鈴は、泣き叫ぶ。

ましろ「・・・いやな予感が当たった・・・」

ましろは、薫と明乃達の帰りが余りに遅かったので、もしや捕まったのではないかと思つたが、それが的中した様だ。

鈴「ど、如何しよう!?・・・教官と艦長まだ戻つて来てないし・・・」

ましろ「ボイラーの火を落としてるから、何れにせよ逃げられない!」

薫と明乃は、まだ戻っていないし、更にボイラーも火を落としている状態なのでエンジンも動かせない。

絶体絶命の危機。

志摩「・・・」

不安そうに事のなり行きを見る志摩。

この時、志摩の手に居たマウスは、先程見せた人懐っこい姿はなく、まるで魔界の使い魔か小悪魔の様な雰囲気を出していた。

とは言え、間宮、明石、浜風、舞風は探照灯と照らしながら二手に分かれ、更に美甘

と媛萌、美波が乗るスキップパー2艇と薫、明乃と平賀、次郎達を乗せたブルーマーメイドの哨戒艇及び古野間とGF隊員を乗せた高速艇が晴風に向かう。

次郎「あれが晴風か？」

薫「そうだよ……」

次郎「何だ……大型艦と思ったが、見て見れば駆逐艦だな……」

次郎は、晴風が最初、大和見たいな大型艦かと思ったが、実際に見たら駆逐艦並だと知り、ガツカリする。

薫「昔を思い出すでしょ！」

次郎「まあな！」

2人が思い出に浸っているうちに晴風は、間宮、明石、浜風、舞風の4隻に完全に囲まれ

晴風、甲板

光「囲まれた!!」

甲板に居た光、美千留、理都子は、不安そうに周囲を見渡す。

果代子「おえ……え……え！」

だが、果代子だけは船酔いでそんな余裕も無く、1人吐いていた。

晴風、艦橋

鈴「逃げられないよ・・・!!」

完全に包囲され鈴は、泣き叫ぶ。

ミーナ「ド間抜け共が何をやってる!・・・艦長や教官は如何した!?!」

その時、ミーナが艦橋に怒鳴り込んだ。

幸子「まだ戻ってきていません!!」

ミーナ「何・・・!!」

薫と明乃が戻っていない事にミーナは、驚愕する。

その時

晴風、見張り台

マチコ「はっ!?!」

晴風の左方向から4隻とは、別に不明艦が高速で接近してくる。

晴風、艦橋

マチコ『左舷より不明艦、此方に向かう!』

『!?!』

ましろ「新手か!?!」

マチコからの報告を聞いて、ましろは、新たな敵かと思つたが

ブルーマーメイド哨戒艇

次郎「来たか！」

接近してくる艦艇は、Gフォースの特殊戦闘艦白鳳だった。

特殊戦闘艦白鳳

三郎「このまま前進し、あの艦艇の横に付けるんだ。」

白鳳の操舵主「本気ですか!？」

三郎「命令だ!・・・補給艦の横に付ける!!」

白鳳は、水上航行しながら問宮に接近する。

晴風、見張り台

マチコ「教官達が戻ってきました・・・!!」

マチコが白鳳とは、別に美甘と媛萌、美波が乗るスキツパー2艇を視認。

マチコ「はっ!?!・・・ブルーマーメイドの哨戒艇及び高速艇もいます!」

更に薫、明乃と平賀、次郎達を乗せたブルーマーメイドの哨戒艇と古野間とGF隊員を乗せた高速艇も確認する。

まして「何!?!」

鈴「ブルーマーメイドって・・・私達を捕まえに来たの!?!」

4隻の艦艇と不明艦に包囲され、更に後ろからはブルーマーメイドの哨戒艇まで現れた。

晴風の艦橋の不安と緊張がピークに達したその時

「カレーなんか食ってる場合じゃねえ……!!」

突如、艦橋に怒声が響いた。

『!?』

何かと思ひ皆が怒声の方向を向くと其処には、志摩が立っていた

しかし、その状態は、大人しい性格とは違い、まるで野人化した状態になっていた。

幸子「た、立石さん？」

幸子は普段の志摩からは考えられない声を出した彼女に困惑する。

ミーナ「何だ、カレーって!？」

ミーナも今日の夕飯のメニューでもないカレーの事を口走った志摩に困惑する。

鈴「そ、それより、逃げないと……」

鈴は何とかしてこの場から逃げようと言うが、

志摩「何言ってるんだ!!逃げてたまるか!!攻撃だ……!!」

志摩は、正気を失って、攻撃だと言い張る。

その態度は余りにも普段の志摩らしからぬ態度であった。

芽衣「おっ!……撃つか!?!……撃つのか!?!」

そんな志摩の態度に疑問を感じつつ砲を撃てるかもしれないと芽衣は少し期待した

目をする。

ましろ「止めろ、戦闘禁止だ!!」

ましろは、絶対に攻撃するなと言うが

志摩「黙れ!!」

完全に正気を失っている志摩は、全く聞く耳を持たなかった。

『?!?』

鈴「タマちゃん如何しちやつたの急に……」

志摩の異常に鈴は、泣き叫ぶ。

幸子「『もう逃げるのは嫌!』『そうよね、逃げちや駄目!私、戦う!』」

幸子がまた一人芝居を始める。

全く空気も読めないのか?

ましろ「良いから、止めろ!!」

完全に正気を失っている志摩をましろと芽衣が取り押さえる

志摩「離せえ……」

芽衣「大人しくしろ……!」

2人に抑えられ志摩は、暴れ出す。

次の瞬間

『うわっ!?!』

志摩の物凄い力にましろと芽衣は、壁に叩き付けられる。

ミーナ「うっ!?!?・・・お、落ち着け!」

ミーナは、志摩に落ち付けと言うが

志摩「!!!」

2人を振り払った志摩は、全く聞かず、猿の姿勢を取りながら艦橋を飛び出す。

そんな志摩をミーナは急いで追い掛ける。

晴風、甲板

艦橋を出た志摩は、まるで猿の様にデツキから魚雷発射官から更に飛び移って行く。

『あっ・・・・・・・・』

甲板で様子を伺っていた光、美千留、理都子、果代子は、飛び移る志摩を見て、何か
 と思い志摩が飛び移る方向を見る。

やがて、志摩は、7・7mm機銃が置かれている場所にたどり着く。

志摩は、何の躊躇いもなく7・7mm機銃の照準を明石へと向ける。

芽衣「本当に撃つ気だ!」

芽衣は、てつきり志摩が冗談で言っているのかと思ったが、如何やら志摩は、本気の様だ。

志摩「明石・・・間宮・・・おめーらにやられるタマじゃねえんだこっちは!!」
ドオン、ドオン、ドオン

志摩は、7・7mm機銃を四方八方に乱射する。

機銃の乱射にデツキに居たましると芽衣、幸子、鈴は、床に伏せる。

更にそれを見た光、美千留、理都子、果代子は、怯える。

ブルーマーメイド哨戒艇

次郎「な、何だ!?!」

志度「晴風から発砲!」

平賀「発砲!?!・・・薫さん、これは如何いう事ですか?」

薫「分からない!!誰なの発砲したのは?」

明乃「タマちゃん!?!」

薫「えっ!?!」

突然の発砲に薫と平賀、次郎達は困惑し、更に発砲したのが志摩だと聞いて、薫は驚く。

甲板で見ていた

特殊戦闘艦白鳳

白鳳の操舵主「目標艦から発砲!?!」

三郎「発砲だ?!」

白鳳の攻撃主「如何しますか?反撃しますか?」

三郎「ま、待て!・・・見たところ相手は、機銃弾だ・・・機銃弾程度じゃ、かすり傷程度しか付かない・・・様子を見よう・・・」

志摩の撃った7・7mm機銃弾は、白鳳にも届いたが、7・7mm機銃弾程度では、かすり傷程度しか付かず、とは言え、反撃も考えたが、様子を見る事にした。

晴風、デツキ

芽衣「ああ、撃っちゃたね!」

ましろ「何て事をしたんだ!・・・」

志摩が撃った事でましろの中にこれで本当に自分達は反逆者になってしまったと言う絶望感が沸き上がる。

晴風、甲板

やがて、機銃弾全弾を討ち尽くした志摩は別の7・7mm機銃へと移動しようとした時

ミーナ「このドアホウの・・・ドマヌケがあ・・・」

追いついてきたミーナが志摩を掴むと思いきり投げ飛ばす。

しかし、運悪く志摩が落ちたところは、冷たい夜の海だった。

ミーナ「しまった!？」

志摩を海へと投げ込んだ後、ミーナは止める為とは言え、冷たい夜の海に人を投げ込んでしまった事の重大さに気づく。

『タマちゃん!!……立石さん!!……大丈夫!!……』

甲板からは、光、美千留、理都子、果代子が海に投げ飛ばされた志摩の安否を心配する。

すると海に落ちた志摩は、何と自ら晴風の甲板へと戻ってきた。

志摩「うっ!!……??」

志摩は、何事もなく甲板に着地した。

理都子「戻って来た!!」

自ら晴風の甲板へと戻ってきた志摩に4人は、驚く。

やがて投げ飛ばしたミーナやデッキに居た4人が志摩の元にかけてつける。

幸子「大丈夫?」

鈴「タマちゃん」

自ら晴風の甲板へと戻ってきた志摩に幸子と鈴が声を掛ける。

ミーナ「よくぞ、ド無事で!」

更にミーナも志摩に泣きながら抱き付く。

芽衣「それを言うなら、ご無事だつて……」

芽衣は、冷静にミーナの間違つた日本語にツツコミを入れる。

幸子「!? ……あら? ……あなたそんな所にいたの?」

幸子は志摩のスカートのポケットに入っていたマウスに気づく。

マウスは、一時的に海水に浸かつたせいかがつたりとしていた。

明乃「タマちゃん大丈夫……?」

明乃が志摩に怪我がないかを尋ねる。

志摩「うい!」

芽衣「あれ、いつもの調子に戻つてる?」

志摩は、先程の様子と違い何時もの無口な状態に戻っていた。

明乃「聞いて! ……補給艦の皆は、助けに来てくれたんだよ……!!」

ましろ「え!」

ましろは、明石のマストを向くと、マストには、救助に来たという信号用の旗が掲げ

られていた。

ブルーマーメイド哨戒艇

次郎「如何やら、終わつた見たいだな……」

薫「ん」

ようやく難が終わり、薫と次郎は、ホツと安堵するが

次郎「それにしても、今のは、何だたんた？・・・なあ薫、お前の生徒は、頭が可笑しくなってるのか？」

次郎は、さっきの志摩の行動を見て、晴風の生徒は、頭が可笑しくなってるのかと問う。

薫「そんな訳無いでしょ！うちの生徒は、皆穏やかな性格よ！」

次郎に対して、薫は、晴風の生徒は、穏やかだと言うが

次郎「でも、あれは・・・」

薫が穏やかだと言っても次郎は、曲げなかった。

薫「バカな事言わないで!!」

しかし、薫は、そんな事を言わないでと言う。

次郎「わ、悪かった。」

流石に言い過ぎたので次郎は、謝罪する。

哨戒艇は、晴風の左舷に接岸、タラップが降ろされる。

高速艇の方は、白鳳に戻る。

薫「それじゃ平賀さん・・・私と艦長が先に皆に状況を説明しに上がりますので、それまで待っていて下さい。」

平賀「分かりました。」

まず薫と明乃が上がり、晴風の生徒に状況を説明する事にした。

2人は、タラップを上がって、ましろ達が居る1番魚雷発射管へと向かう。

明乃「シロちゃん!」

ましろ「か、艦長!?!」

買い出しから出かけて半日、ようやく明乃は、ましろと再会した。

明乃「シロちゃんや皆、怪れない?」

ましろ「・・・はい・・・今のところは・・・」

明乃「良かった・・・」

さっきの発砲で晴風の生徒に怪我が無い事に明乃は、安心した。

そして、ミーナに投げ飛ばされた志摩も無事だが、

薫「立石さん!」

薫は、そのままミーナと一緒に居る志摩の元に行き

志摩「うい・・・」

薫を見て、志摩は、さっきの事で怒られるのかと思ひ困惑する。

ミーナ「きよ、教官殿!・・・こ、これは・・・」

ミーナが志摩を庇おうと代わりに釈明するが

志摩「うい!？」

薫は、志摩に抱きつく

薫「良かった!・・・怪我はない見たいね!」

薫は、志摩に対して、怒るところか、志摩の事を心配してくれた。

志摩「うい」

そんな薫に志摩は、笑顔を露にする。

それを見たましろ達は、安心して、2人を見る。

そして、後ろから次郎が心配になって、薫の後を追いかけてきた。

次郎（何だ心配で追いかけてきたんだが、その必要も無かった様だ。）

次郎は、2人を見て、心配は、不要だったと思う。

そして、薫は、ましろ達にこれまでの経緯を説明する。

やがて包囲が解かれ、明石、間宮は、晴風の左右に接舷する。

明石が横付けされた際、薫は明石艦長の杉本珊瑚より、真雪からの親書を手渡された。

白鳳は、付近に待機し、三郎が高速艇で晴風にやって来た。

三郎も揃ったところで薫は、平賀と次郎、三郎を教員用居室へと案内する。

晴風、教員用居室

教員用居室で薫は、3人の前で真雪からの親書を開けて読む。

真雪からの親書からも海上安全整備局が勝手に晴風撃沈命令を下した事
そして、真雪と真霜が晴風撃沈命令を撤回する事に対し奔走している事
真霜が龍之介達の解放に対し奔走している事

学校側からも今回の事件の原因究明の調査を行っている事
命の危険にさらしてしまった事に関する謝罪が記されていた。

薫「……」

次郎「……」

三郎「ん……確か艦長の言う通り、この親書からも宗谷監督官と平賀監察官が我々の味方だと言う事が証明できます。」

親書を見て、三郎は、平賀と真霜達が味方だと確認した。

平賀「分かって頂ければ恐縮です……それに先程、意識不明だった古庄教官の意識が戻ったと言う知らせがありました。」

薫「古庄教官が!?良かった!!」

古庄の意識が回復した事を知らされ、薫は、喜ぶ。

何故なら、これで薫や龍之介達が無実だと証明出来るからだ。

平賀「については、補給と整備が済み次第、晴風と白鳳は、事情聴衆の為、横須賀に帰還して貰います。」

事情聴衆の為、晴風は、補給と整備が済み次第、白鳳と共に横須賀に帰還する事を告げる。

次郎「承知した。」

三郎「了解した。」

平賀の帰還に次郎と林は、承諾する。

平賀「では、私は、晴風の艦長のところへ参りますので・・・薫さん？」

平賀は、明乃の元に向かおうと薫に声を掛けた時

薫「あつ、平賀さん!？」

薫は、ある事を平賀に問う。

平賀「何ですか薫さん？」

薫「その・・・武蔵は・・・如何になりましたか？」

薫は、武蔵の事を聞く。

平賀「えっ？」

薫「武蔵から非常通信を受信したんですけど・・・」

平賀「武蔵から!?!本当ですか!?!」

薫「はい・・・通信記録も残っているので、確かです!!」

平賀「武蔵は、現在ビーコンを切っていて・・・行方不明なんです。」

薫「行方不明!?!・・それで搜索は、如何なっていますか?」

行方不明の言葉を聞いて、薫は、驚愕し、搜索は、如何なっているのか問う。

平賀「今、真冬姐さん達が搜索を行っています。」

現在、真冬の搜索部隊や応援として、東舞鶴男子海洋学校から教員艦隊が出動し、武蔵以下の不明艦を搜索中

薫「真冬が・・私も搜索に・・」

薫も武蔵搜索に参加しようと願い出るが

平賀「それには、及びません・・東舞校も搜索に参加しているので、薫さん達は、補給が済み次第、横須賀に戻ってください。」

しかし、その必要はなく、平賀は、再度横須賀に帰還する様告げる。

薫「でも」

薫は、搜索に加わりたいと主張を枉げなかった。

平賀「今晴風は、撃沈命令が解けていない状態なんです・・いつ撃沈されても可笑しくありません!!」

まだ、晴風は、危険な状態から脱してはいない。

そんな状況で武蔵の搜索など自殺行為だ。

薫「・・分かりました・・速やかに横須賀に戻ります。」

平賀の言葉を聞いて、最早反論する事は出来ず。

結局、平賀に従い横須賀に帰投を承諾する。

平賀「では、参りましょう！」

薫「はい」

次郎（大丈夫なのか!?・・・本心じゃ偉く落ち込んでいるが・・・）

次郎は、薫が本心じゃ捜索に参加できないから偉く落ち込んでいると察したが、次郎は、何も言えなかった。

とは言え、平賀は、薫を連れて、明乃の元に向かう。

晴風、倉庫

同じ頃、明乃は、ましろと芽衣と共に、勝手に攻撃をした志摩を連行していた。

明乃「御免ね!・・・疑いが晴れるまで少しの間此処に居て貰う事になるけど・・・」

明乃は、疑いが晴れるまで志摩を倉庫に監禁する。

志摩「うい・・・」

流石に監禁されるのに動揺するが

芽衣「あのっ!艦長・・・私も一緒に・・・!」

明乃「メイちゃん・・・」

何と、動揺する志摩に芽衣が一緒に入ると言い出す。

流石に志摩一人だけ此処に置いて置くのも可哀そうだと思ひ同じ砲術科でもある芽衣と一緒にする事にしたのだ

ましろ「何を言つてる・・・意味もなく拘束する訳には・・・」

ましろは、流石に芽衣の我儘に反対するが

明乃「じゃあメイちゃんは、監視役としてタマちゃんの傍に居てくれる?」

明乃は、芽衣の気持ちを察して、志摩の監視役として一緒に居る事を許した。

芽衣「了解!」

明乃に許され、芽衣は、喜ぶ。

ましろ「・・・まあ、そう言う事なら・・・」

芽衣が監視役として居るなら、ましろも許可した。

明乃「お願いね!」

ましろ「取り合えず!・・・やる事ないのも辛いだろうからトイレットペーパーを箱にでも詰めておけ!」

ましろは、監禁されている間、志摩と芽衣に明乃達が福引で当てたトイレットペーパーを箱に補充するよう命じる

芽衣「ほいほい」

ましろ「緊張感に欠ける・・・」

芽衣の緊張感に欠ける態度にましろは、呆れる。

とは言え、明乃とましろは、志摩と芽衣を倉庫に残した後、薫と平賀が待っている甲板に向かう。

4月14日

6:00

晴風、甲板

甲板に出た明乃とましろは、薫と平賀と合流

薫「此方は、私と同僚で、海上安全整備局、安全監督室情報調査隊の平賀二等監察官
!!」

薫は、さっきの落ち込みを2人に見せず、平賀を明乃とましろに紹介した。

ましろ「誠に申し訳ありませんでした!!」

ましろは、志摩が発砲した件について平賀に謝罪した。

ましろ「あ、あの・・・姉さん・・・いや、宗谷真霜がいる部署の方ですか？」

平賀「ええ、私は、宗谷一等監督官の命令で貴方々に接触したんです。」

平賀は、ましろに真霜の命令で接触したと説明する。

明乃「シロちゃんのお姉さんって、ブルーマーメイドだったんだ!？」

明乃は、ましろの姉真霜がブルーマーメイドだった事に驚く。

薫「そうよ、岬ちゃん!」

ましろ「ん」

薫はそうと言い、ましろもそれに頷く。

平賀「海上安全整備局は、さるしまの報告を鵜呑みに晴風が反乱したという情報を流しています……ですが、我々、安全監督室の見解は、異なっています!!」

ましろ「えっ!?!」

平賀「先程、教員の薫さんや艦長の岬さんから聞きましたが、晴風は自衛の為にやむを得ず交戦したのですね?」

平賀は、ましろに真霜達が晴風がさるしまを攻撃したのは、自衛の為にやった事だと見解していると言う。

平賀が説明している途中、間宮の艦長藤田優衣と明石の艦長杉本珊瑚がタラップを渡り、晴風の甲板に降り立つ。

ましろ「はい、その通りです!!」

平賀の説明にましろは、その通りですと答える。

平賀「今回、攻撃した生徒は?」

平賀は、志摩を如何したかと問う。

明乃「取り合えず拘束しています。」

明乃は、倉庫に監禁している事を平賀に言う。

平賀「そう……」

明乃「すみません、普段は大人しくて、あんな攻撃する子じゃないんだけど……」

明乃は、志摩の性格からあり得ないと平賀に説明する。

平賀「また戦闘になると思つて気が動転したのかもしれないわね。」

平賀もこれまでの経緯から志摩も疑心暗鬼になつていたのだらうと思ひ志摩に対して、厳罰を下す様な事はしなかつた。

晴風、倉庫

その当の志摩本人は、芽衣と一緒に倉庫でトイレットペーパーを段ボール箱に詰めていた。

芽衣「しばらく拘束されるのは仕方ないよね……まあ、私も付き合うからさ！」

志摩「うん……」

志摩は、今だに自分のせいで大勢の人に迷惑をかけたと深く落ち込んだままな様子
芽衣「いや……良い撃ちっぶりだったよタマー……引つ込み思案な砲術長だなくつて思つていたけど、見直した！」

落ち込んでいる志摩に芽衣は、元気づけようと励まし？の言葉を掛ける。

志摩「……でも……何であんな事したのか……？」

志摩は、発砲した事は、覚えていたが、何故、自分があんなマネをしたのかは、全く分からなかったのだ。

芽衣「心に、撃て撃て魂があるんだよ!」

志摩「うい?」

安定のトリガーハッピーな西崎の発言に首をかしげる志摩。

そんな時

コン!コン!

2人が居る倉庫のドアがノックされ

『差し入れてくす』

杵[×]姉妹が監禁されている2人の為に差し入れを持ってきたのだ。

あかね「立石さんがカレー食べたがつているって聞いたから・・・」

杵[×]姉妹が持ってきた差し入れは、志摩が好きなカレーだった。

志摩「・・・あ・・・とう・・・」

芽衣「ありがとうって言っている。」

杵[×]姉妹の粋な計らいに志摩は、感謝に言いきれず代わりに芽衣が言った。

晴風、甲板

珊瑚「ホントに教官艦が攻撃してきたの?」

珊瑚は、明乃にさるしまが攻撃した事を確認をするかの様に問う。

明乃「うん」

優衣「我々は、演習が終わった後に合流する予定だったから状況がよく分からなかったの……」

優衣は、演習終了後に合流する予定だったので、詳しい事は、分からないと明乃に伝える。

明乃「あの、じゃあ如何して、私達に補給を？」

優衣「校長先生の指示で……」

ましろ「お母さ……校長の？」

薫「真雪さんが？」

晴風の補給を指示したが真雪だと知って、驚く。

平賀「我々も宗谷校長に依頼を受けたの……海上安全整備局の見解と違って、校長は晴風がさるしまや潜水艦を攻撃したとは思えない……と主張しているわ。」

平賀はましろに先程、薫に手渡した新書と同じ内容をましろに説明した。

平賀「さるしまの艦長、古庄教官の意識がやつと戻ったみたいだから、これで何が起こったのが解明できると思う……」

『……』

明乃、ましろにして見ても、あの時、何故古庄がいきなり実弾を使用して発砲してきたのか?

何故、先制攻撃をしてきたにも関わらず、古庄は虚偽の報告をしたのか?

2人はその事実を知りたかった。

平賀「後程、発砲した生徒には、聴取を行います……それでは、後は頼んだわね、2人共?」

『はい!』

平賀は、補給と補修の指揮を珊瑚と優衣に任せ、志摩の聴取の準備の為、薫と共に一度哨戒艇へと戻って行った。

明乃「ありがとう」

ましろ「!?……何故、私に?」

明乃「だってシロちゃんのお母さんが私達を信じてくれたから、疑いが晴れたんだもん!」

ましろ「……うちの母は自分の信念を貫く人だから……」

ましろは、明乃に礼を言われ、拗ねる。

明乃「それでこそブルマーだよね!」

ましろ「ブルマー?」

明乃の発した言葉に驚くましろ。

明乃「うん、皆ブルーマーメイドの事、こう呼んでいるよ!」

ましろ「ブルーマーメイドを略すな!!」

ブルーマーメイドを略す事に反対するが

ましろ「んっ!?!」

突然、ましろの目の前に

ましろ「んっ!?!え、ええ?」

ポールの上で寝転がる五十六と配下見たいに側で寝転ぶ二匹の猫がいた。

明乃「うあ・・・」

ましろ「な、何故、猫が増えてる!?!」

猫が増えているのにましろは、驚く。

優衣「あ、うちと明石の猫よ!」

明乃「あつ、そうなんだ!」

珊瑚「補給艦はネズミが発生しやすいので飼っているの・・・」

如何やら猫2匹は、間宮と明石でネズミ対策として、2艦で飼われている猫の様だ。

優衣と珊瑚がそう話していると2匹の猫は、突然、寝転ぶのを止めて、如何いう訳か

ましろの元に行き始めた。

ましろ「来るな．．．来るな．．．来るな．．．来るな．．．」

二匹の猫は、恐る恐るましろに近づいてくる。

それを見たましろは、段々困惑して来て

次の瞬間

ましろ「来るな．．．!!!」

ましろは、悲鳴を出しながら逃げていった。

2匹の猫もその後を追う。

明乃「シロちゃんって、猫に好かれて良いな．．．」

明乃は呑気にそんな事を言っていた。

横須賀女子海洋学校、校長室

一方、横須賀女子海洋学校では、真霜が晴風を無事に保護した事が真雪に報告していた。

真霜『艦長、乗員共可笑しな様子はありませんでした。』

真雪「そう．．．ありがとう」

真霜『海上安全整備局にも報告を上げたけど．．．まだ、晴風に危険分子がまだ乗船しているのではないかと疑っているわ．．．学校に戻る前に全員拘束するべきではないかとの意見もあるの．．．これ以上晴風に何かあると、私だけじゃなくお母さんの

立場も危うくなるわ!」

真雪「私の心配はしなくて良いわ……でも……何か異常事態が発生している……貴方はその説明を急いで……それと、龍之介さんの解放もね!」

真霜は、自分の立場が危うくなっても真霜に今回の事件を引き起こした発端を調べるよう要請した。

ついでに龍之介達を救う事も

真霜『分かっているわ!……については、私に考えがあるの!』

真雪「考え?」

真霜『私に任せてほしいの!』

真霜は、平賀が逮捕した黒ずくめの男達を使って、ある作戦を実行に移そうとしていた。

晴風、医務室

その頃、晴風の医務室では

幸子「結局、飼い主が見つからなくて、此処で預かって置いて貰えますかね?」

幸子が美波に例のマウスの面倒を美波に頼んでいた。

美波「無問題（モーマントイ）」

美波はこのハムスターの様な生物の面倒を見ると言う。

美波「……但し、ハムスター……には非ず……」

美波は飼育箱に入っているマウスをジッと見て、この生物はハムスターではないと断言する。

幸子「じゃあ何ですかね？」

美波「調べてみる。」

美波はこの生物が一体何なのかを調べる事にした。

しかし、美波は、気づかなかつた。

このマウスこそが今回の事件を引き起こした発端と言う事を

第17章 龍之介釈放

4月14日

晴風と白鳳が平賀達に無事保護されたと言う真霜の報告が海上安全整備局から野田一誠国交代代行に齎された。

報告を聞いた一誠は、直ぐに緊急会議を招集した。

国土交通省、国土保全委員会

真霜『以上が、私からの報告です！・・・この報告から・・・晴風とそれを助けに来たGフォースにも反乱の意思は無いと言う事が判明されました。』

緊急会議のモニターで真霜から晴風と白鳳に反乱の意思は無いと言う報告が会議室に齎された。

一誠「ん・・・この報告から晴風とGフォースには、反乱の意思の無い事は、これに分かった・・・直ちに晴風への撃沈命令は撤回！・・・拘束している山本監督官、及びその隊員達の拘束を解く事を命じる。」

真霜の報告を聞いた一誠は、直ちに晴風の撃沈命令の撤回と龍之介達の解放を命じた。

国土交通省、廊下

ドーン!!! (壁を叩く音)

邦夫「くそ!!・・・何でこんな事に!」

晴風撃沈の失敗、機密情報の確保に失敗、更に真霜の報告によつて、一誠が国土保全委員会で晴風の撃沈命令の撤回と龍之介達の解放を命じた。

この事により龍之介達がこの事件に関わっていない事が段々浮上して来ている。

邦夫「このままでは、今まで俺が全部した事が明るみになる!!」

このままでは、自分が勝手に田沼に言つて、深町を解任した事や自分の親を使つて、晴風を反乱艦として撃沈する事を命じた事や無実の龍之介達を拘束し、起訴を強制した事が明るみになる。

そうなれば自分だけの責任だけじゃ済まなくなる。

最悪の場合、田沼総理にも責任追及がなされるだろう。

邦夫「急いで命令を撤回しなければ・・・」

邦夫は、必死にそれを阻止しようとはあらゆる手を打とうとしていた。

その時

真霜「随分と慌てていますね野田監督官!」

突然、後ろから真霜が現れた。

邦夫「宗谷監督官!?!? 何の様だ?!!? 今は、お前と話している暇はない!!」

真霜「貴方に話す暇がなくても?!!? 此方には、話す暇が有りますが?!!?」

邦夫「何だ?!?!」

真霜「先程出された命令を撤回させようとしていますが?!!? 先程の報告で晴風は、無事に我々に保護され、乗員達には、反乱の意思はないと確認が取れています?!!? それに教員からの証言で山本監督官達がこの事件に関わっていない事が証明されており、命令を撤回する理由はないと思いますが?!!?」

邦夫「ふん!?!? 何を言っているんだ!!?!? そんなものは、貴様がでつち上げた嘘だ!!?!? 此方には、ちゃんとした証拠が有るんだ!!?!」

邦夫は、あくまで晴風の生徒や龍之介達を反逆者として、認識しているので命令を撤回するのを止めなかった。

真霜「如何しても意見を変える気は無いんですね?」

邦夫「くどい!」

真霜「そうですか?!!? ならば、私にも考えがあります。」

真霜は、ある事を邦夫に告げる。

邦夫「何?」

真霜「私は、野田国交相代行に貴方と総理が裏で暗躍した事や無関係の生徒を殺害し

ようとした事を全て報告します。」

真霜は、一誠に邦夫と田沼がこれまで裏でした事や薫の目の前で晴風の生徒を殺そうとした事を全て報告すると邦夫に告げる。

邦夫「全て報告するだつと!?!?ハハハ!!??.バカな事は止せ!?.??.国交相代
行がそんな報告を信じると思つていいのか??.それに、そんな証拠は、何所にある
?」

邦夫は、嘲笑いながら真霜にそれだけの証拠が有るのか問う。

真霜「証拠ならありますよ!」

何と真霜は、邦夫を告発する程の証拠をにぎっていた。

邦夫「何だ?!」

真霜「実は、晴風の乗員と教員を保護した時、妙な男達を逮捕しましたが:~:これ:~:
貴方の部下ですよね?」

真霜は、邦夫に四国オーシャンモールで拘束した黒ずくめの男達3人の写真を見せ
た。

邦夫「し、知らん!?!??.こんな奴らは、俺は、知らん!!」

邦夫は、拘束した黒ずくめの男達とは、関係ないと言ひ張るが

真霜「そうですか??.??.でも、この男達??.私の厳しい取り調べを受けたら、あつ

さり貴方が命じた事を吐いたんですけど……」

真霜は、黒ずくめの男達が厳しい取り調べで洗いざらい全部吐いたと告げる。

邦夫（こ、この役立たず共め!!!）

黒ずくめの男達が邦夫との関係[!]を洗いざらい吐いた事で邦夫は、困惑する。

真霜「こんな事が貴方の父親である国交相代行の耳に入れば如何なるのかしら……少なくとも唯では、すみませんよ……それだけではありません……無関係の生徒を殺害しようとした事で刑事裁判も免れません!!」

真霜の言う通り、こんな報告が父親である一誠の耳に入れば、唯では、済まない。

また、無関係の生徒を殺害しようとした事で刑事裁判に問われる可能性がある。

最早、邦夫は、真霜に首に縄を懸けられたも同然な状態だった。

野田「くう……何が望みだ？」

真霜「晴風撃沈命令の撤回及び拘束している山本監督官達の釈放を命じる事に賛成する事……それだけが望みです。」

邦夫「……勝手にしろ!!」

真霜の尽力に遂に邦夫は落ち、真霜の進言を呑む。

真霜「では、承知したと言う事で……私は、これで……」

真霜は、喜びながらその場を去る。

邦夫「くそくそくそ……!!……俺をコケにしやがって……」

真霜に負け、ついでに実行した部下にまで裏切られ邦夫は、たけり狂っていた。

邦夫「このままでは、済まさんぞ!!……必ず復讐してやる!!……必ず!!!」

邦夫は、自分を此処までコケにした真霜や龍之介に必ず復讐すると誓うのだった。

国土交通省、玄関

真霜「ふうう……危なかつたわ!!」

国土交通省を出た真霜は、ホツとする。

実は、さっきの報告は、全て嘘だったのだ。

拘束した黒ずくめの男達3人は、自白などしていない。

そうとは、知らず邦夫は、まんまと真霜の策に引つ掛かったのだ。

とは言え、一誠の命令は、何事もなく、実行された。

これにより薫と明乃達は、危機を脱した。

更にもう一つ

東京拘置所、特別牢

龍之介「……あれから3日経ったが……晴風や捕まった皆は、如何なつたんだ

ろうか?」

特別牢の中で龍之介は、晴風や自分の部下達が如何なっているのか心配しながら、隣

で眠っている功を見る。

功「……」

龍之介「さいわい峠は越したが……まだ油断は出来ない状態だ……此処を出たら、直ぐに医者に見せないと……だが、まだこの状況だと、しばらく拘留が続くな……」

龍之介は、しばらく拘留が続くのに申し訳ない気持ちで功を見てた。

そんな時

ガチャ……

龍之介「ん!？」

突然、特別牢のドアが開き、監視員の1人が入って来た。

龍之介「何の要だ?……また取り調べか?……もう話す事は、無い筈だ!!」

龍之介は、また取り調べかと思ひ、もう話す事は無い筈だと告げた。

しかし

監視員「いや……釈放だ!!……出る!!」

龍之介「えっ!？」

また取り調べかと思つたら、何と釈放だと言われ、龍之介は驚く。

龍之介「待て!……如何して、釈放するんだ?」

何故、釈放するのか理由を聞く。

監視員「詳しい事は、知らん!・・・上からの命令だ!!」
詳しい事は、監視員も知らない。

上が釈放と決めたので従がってる様だ。

とは言え、釈放と言われたら出るしかない。

龍之介「おい起きろ功!!・・・俺たち助かるぞ!!」

龍之介は、直ぐに功を起こす

功「ほ・・・ほ・・・」

起きた功は、かすかだが何とか意識はあつた。

龍之介は、歩けない功を担ぎながら特別牢を出る。

東京拘置所、入口

拘置所を出た龍之介は、其処である人物が出迎えに来ていた。

真霜「龍之介!?!」

龍之介「ま、真霜!?!」

出迎えに待っていたのは、龍之介の無実を証明した真霜だった。

真霜「大丈夫?」

龍之介「俺は、大丈夫だ!・・・だが、功が!!」

真霜「しっかりして下さい徳吉さん!!・・・救急隊員!!」

真霜は、一応呼んでおいた救急隊員を呼ぶ。

真霜に呼ばれ、待機していた救急隊員が直ぐに功を担架に乗せて、救急車で横須賀の横須賀病院へと搬送する。

龍之介「取り合えず・・・助かってくれ!!」

功が助かって欲しいと龍之介は祈る。

真霜「遅くなって御免ね龍之介!」

龍之介「なあ真霜!・・・俺が拘留されている間、一体何が・・・」

龍之介は、自分が牢に入っている間の状況や何故、自分達が釈放されたかを真霜に問う。

真霜「貴方が拘留されている間に色々あったのよ!・・・でもそれは、後で説明する

!!・・・兎に角今は・・・お帰りなさい・・・」

龍之介「ただいま・・・」

2人は、久々に抱き合う。

龍之介と真霜にとっては、拘束されてから、雅に8日ぶりの再会であった。

龍之介「なあ、真霜!」

抱き合いながら龍之介は、ある事を真霜に言う。

真霜「何?」

何かと思ひ真霜は聞く。
すると

龍之介「腹減つた〜!!」

真霜「えっ!？」

龍之介「腹減つた!・・・何か食わせてくれ・・・!!」

如何やら、お腹が空いていた様だ。

実は、龍之介は、拘束されてから、あまりロクな物しか食っていなかつたので、すっかり空腹になっていたのだ。

真霜「もう〜世話が焼けるんだから〜!!」

そんな龍之介に真霜は、呆れてしまう。

だけど、本当は、自分の元に戻って来て、嬉しい真霜だった。

こうして、龍之介と功は、疑いが晴れて、自由の身となつたのだ。

更に拘束されていた隊員達も解放された。

そして、その連絡は、四国沖で間宮、明石に補給を受けている晴風の薫達にも齎された。

晴風、教員居住室

平賀「今、宗谷監督官から連絡が有つたわ!!・・・山本監督官と徳吉監督官達が無

事釈放されたそうよ!!」

次郎「それは、本当か!？」

平賀「ええ!」

次郎「やった!!・・・おい聞いたか薫!・・・准将が!・・・准将が釈放されたんだつて!!・・・俺達は、もう犯罪者じゃないんだ!!」

平賀から齎された報告を聞いて、次郎は、大喜びをする。

そして、それを薫にも伝えるが

薫「そう・・・」

だが、薫は、あまり嬉しくなかつた。

次郎「如何したんだ薫!?!・・・准将が釈放されたんだぞ!!・・・嬉しくないのか?」

薫「勿論、嬉しいわ!!・・・でも・・・」

薫は、今、それどころじゃなかつた。

それもその筈、薫は、今、武蔵に乗っているはやての安否が気になって仕方がないのだ。

画して、晴風の撃沈命令は、撤回され、龍之介と功も釈放され事件は、無事に解決したと思われたが

だが、事件は、これで終わりでは無かった。
更なる事態が龍之介達や晴風に待ち構えていた。

第18章 補給の間

4月14日

四国沖

四国沖に停泊している晴風と白鳳は、明石、間宮に修理と補給を受けていた。

真霜からの報告で出されていた晴風の撃沈命令は撤回され、これで晴風の生徒は、無事に横須賀へと寄港できる。

そして、薫や次郎達も龍之介が無実である事が証明されたので、此方も無事に帰れる。だが現在、晴風は、主砲の取り換え作業と各部の補強作業中、白鳳の方は、不足している物資の補給以外は問題ない。

それぞれ今日中に終わる予定。

その為、出港は、明日となった。

晴風、教室

明乃「では改めて、私達を助けてくれた人達を紹介します。」

明乃は、自分達を助けてくれた次郎と三郎を皆に紹介した。

次郎「俺は、白鳳艦長の小沢次郎だ!!よろしく!」

林「同じく副長の林三郎だ！」

2人は、自己紹介をする。

空「男だね？」

留奈「何でブルマーに男が居るんだろう？」

桜良「知らない……」

次郎達を見て、皆は、驚愕する。

特に機関員四人衆が噂をしていた。

まあ、確かにブルマーメイドは、女性主義の部隊だから、男が入っているのが珍しいんだろう。

次郎「おい、お前達!!…ブルマーに男がいて、何か悪いのか!？」

それを聞いた次郎が空と桜良を問い詰める。

『い、いえ!？』

次郎に問い詰められ、2人は、怖がる。

鈴「意外と怖い人なんだね……!？」

次郎の印象を見て、鈴は、怖い人だと思った。

ましろ「全く、ついてない……」

次郎「ん!?!…お前は、真冬とこの妹じゃないか!？」

次郎は、側にいたましろに気づく。

次郎「何で此処に居る？」

ましろ「いや、それは、その……」

明乃「ああシロちゃんは、うちの副長なんです。」

次郎「えー!? ……お前が副長だつて!!」

ましろが副長だと聞いて、次郎は驚く。

ましろ「そうですけど……悪いですか？」

自分が副長で何か悪いか、ましろは、不機嫌になる。

次郎「いや、別に……以外と似合うんじゃないのか……」

ましろ「えっ？」

次郎から似合うじゃないのかと言われ、ましろは、堆赤くなる。

洋美（な、何よあの人!?!?! 私の宗谷さんを……!!!）

それを見た洋美は悔しがる。

三郎「艦長! ……生徒を口説くのは、如何かと思いますが……」

次郎「く、口説くなんて、誤解だ!! ……そもそも俺は、薰一筋だ!!」

三郎「まあ、別に良いですけど……」

次郎「……まあ、そう言う事だ!! ……皆よろしく……」

何とも、そんな風な自己紹介であつた。

晴風、教員居室

その頃、薫は、教員居室にいた。

薫「……はやてちゃん……」

薫は、武蔵に居るはやての事で悩んでいた。

その時

次郎「薫!?!居るか?」

教室に居た次郎が一段落を終え、薫が居る教員居室に入ってきた。

薫「次郎君!?!」

次郎「如何したんだ薫!……教室にもいないでこんな所で……」

教室で自己紹介の時に薫が出席していなかった事に次郎は、可笑しいと思い、薫の部屋である教員居室を訪ねたのだ。

薫「ん、御免ね次郎君……」

その事に薫は、謝罪するが

次郎「何か悩んでいるのか?」

薫「……」

次郎「はやての事か?」

薫「ん……私のせいではやてちゃんを危険な目に遭わせてしまった。」

薫は、自分がこの海洋実習に参加を希望した事によって、はやてを危険な目に遭わせた事に深く落ち込んでいた。

次郎「何言ってるんだ!?!……こんな事態、誰も予想しなかった……お前のせいじゃない!!」

次郎の言う通り、この事態は、予想もできない事態だ。

決して、薫のせいでは、無いと訴えるが

薫「でも、私が誘ったんだから、私の責任なんだよ!……私のせいで……」

薫は、涙ながら自分のせいだと強く訴える。

次郎「薫……」

それに対して、次郎は、何も言えなかった。

薫「私……助けに行きたい!……はやてちゃんを助けに行きたい!!」

薫は、今からでもはやての救助に行こうと言うが

次郎「駄目だ薫!」

それを次郎は、止める。

薫「如何して!?!」

次郎「お前1人が行って何になるんだ!!……それに武蔵の居所も分からないで、如

何する気だ!？」

確かに薫1人で行ったところで何にもならないし、大体、武蔵の居所も分からないのに如何する気なのか

全く無謀だ!!

薫「で、でも……」

次郎「武蔵の事は、宗谷監督官に任せよう!!……俺達は、一刻も早く横須賀に帰還するべきだ!!」

次郎は、武蔵の事は、真霜達に任せ、自分達は、一刻も早く横須賀に帰還するべきだと薫に納得させる。

薫「……」

次郎「良いな!!……決して1人で助けに行こうなんて、馬鹿な事をするなよ!……分かったな!!」

薫「……ん……分かった……」

次郎の必死の説得でようやく薫は承知した。

次郎「それでこそ薫だ!じゃ行こうか!!」

薫「何所に行くの?」

次郎「教室だよ!皆が待ってるぞ!!」

次郎は、安心して、開き直った薫を教室へと連れ出す。

晴風、教室

教室では、三郎と生徒達が次郎が戻ってくるのを待っていた。

幸子「小沢さん遅いですね？」

鈴「そうだね・・・」

三郎「きつと話に時間が掛かっているんだろう・・・あの2人恋人同士だから・・・」

『えー!』

麗緒「きよ、教官と小沢さんが恋人!？」

空「初耳だね!」

薫と次郎が恋人同士だと聞いて、生徒達は驚く

特に麗緒や空あたりが噂を広めそうな感じだ。

ましろ「そんな関係だったのか!？」

明乃「シロちゃん、知らなかったの？」

ましろ「ん・・・全然知らなかった・・・真霜姉さんが薫さんのお兄さんと付き合っ

ているのは知ってたけど・・・」

明乃「へっシロちゃんのお姉さんが・・・」

まあ確かにましろも龍之介と真霜が付き合っている以外、薫と次郎が恋人同士だった

なんて知る訳が無い。

殆んどましろが知らない時にやっている事だから

次郎「やあ、諸群！・・・遅れて申し訳ない！！・・・薫を連れて来たぞ！！」

次郎が薫を連れて、教室に戻ってきた。

『・・・・・・・・』

三郎以外、生徒の全員が2人をジロジロ見る。

次郎「ん!?・・・如何したんだ皆!!・・・薫を連れてきたのに何だよそんなジロジロ見

て・・・」

薫「・・・皆如何したの・・・」

何故、ジロジロ見るのか薫が気になっていると突然幸子が

幸子「教官水臭いじゃないですか？」

薫「な、何が？」

そして、ミーナも

ミーナ「お主も隅に置けぬな・・・」

次郎「何訳の分からん事言ってるんだ金髪!!」

2人が何を言っているのか、次郎と薫は、分からなかった。

その時

留奈「きよ、教官!!」

薫「何、駿河さん？」

留奈「教官は、小沢さんなどのくらいまでいったんですか？」

薫「えっ?!何が？」

麗緒「雅かエツチまでいったんですか!？」

!!!
!!!
!!!
!!!
!!!

麗緒の言葉に2人は、顔を赤くして驚愕する。

三郎「ヤバイ!？」

それを聞いた三郎は、急いで姿を隠す。

薫「な、何よそれ!?!大体、何でそんな事を知ってるの?」

幸子「嫌ですな教官、皆知ってますよ!」

次郎「だ、誰だ!!そんな事を言った奴は?」

薫「そ、そうよ・・誰よ!!そんな事を子供に教えたのは?」

2人は、カンカンに切れて、誰が2人の関係を言ったのか、犯人を探すとすると

次郎「ん!？」

次郎は、三郎がマチコの後ろに隠れているのに気がつく。

次郎「は……や……し……お前だな!!」

三郎「ひひひ……」

三郎は、隠れながら苦笑いをする。

次郎「このお喋り野郎!!」

次郎は、腹をかいて、三郎に迫る。

三郎「だるまさんが転んだく!!」

三郎は、逃げる。

次郎「待……て……!!……完全にバラシテ、叩き直してやる!!」

逃げる三郎を次郎は、追いかける。

暫く、教室の中を追いかけこが続き、やがて、逃げていた三郎も遂に次郎に捕まえられ、頭がぶがぶ噛みつく。

『フハハハ……!!』

2人を見て、生徒達は、笑う。

そして、薫も

薫「フフフ……」

笑う。

全く、呆れた2人だ。

まあ反逆者の疑いが晴れたのだから、これぐらいは良しとしよう。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、幹部食堂

その頃、龍之介は、真霜と一緒に横須賀ブルーマーメイド庁舎の幹部食堂で飯を食っていた。

龍之介「……………」

真霜「!?」

龍之介の食べぶりに真霜は、ビックリしていた。

それもその筈、既に龍之介は、かつ丼10杯ぐらいは、平らげていた。

真霜「釈放されたばかりなのに、よくそんなに食べるわね!」

龍之介「……………仕様がないだろう!!……………監禁されてからロクな物しか与えて貰えな
かたんだから……………」

監禁されてから、龍之介達は、ロクな飯しか与えられていなかった。

真霜「それはそうだけど、もう1杯目よ!……………いい加減、もうその辺で程々にした
ら……………」

真霜は、もうその辺で食うのを辞めるよう言う。

その言葉を聞いた龍之介は、食べるのを止める。

龍之介「なあ!」

そして、ある事を真霜に聞く。

真霜「何？」

龍之介「お前・・・許婚が居る事を俺に隠していたな！」

真霜「ああ!? その事ね！」

龍之介「何故、俺に隠してたんだ？」

何故、龍之介に許婚の事を隠していたのか、理由を問う。

真霜「ん・・・言いたくなかったの・・・貴方には・・・あんな奴が許婚だ何て事を
！」

龍之介「やつぱり、何か有ったんだな？」

真霜「ええ・・・あいつは、私より家柄と財産が目当てだったの・・・それだけじゃない!!・・・あいつは、私に内緒で愛人を作っていたのよ!!」

真霜は、邦夫が宗谷の家柄と財産が目当てで、許婚になった事や真霜に内緒で愛人を作っていた事を龍之介に暴露した。

龍之介「あ、愛人だと!?!・・・お前が居るのに愛人まで作っていたのか!!・・・酷い奴だ!!・・・それでお前は、男が嫌いだったのか・・・」

それを聞いた龍之介は驚き、何故、真霜が男を嫌いになったのか、大体分かった。

真霜「うん・・・男は、皆そうだと思うたから・・・」

龍之介「成程な！・・・じゃ俺の事は、どう思ってるんだ？」

龍之介は、真霜に自分の事は、どう思っているのか問う。

真霜「勿論、最初は、嫌いだったわ！・・・こいつもどうせ、あいつと同じ人間なんだろうと思ってたけど・・・でも、違っていた・・・貴方は、人の命を大事だと思ってる・・・だから、貴方は、田沼総理に反抗して、取引にも応じなかった・・・」

真霜は、龍之介が邦夫と同じ人間だと思っていたが、想像とは違い人の命を大事だと思っている人間だと分かったのだ。

龍之介「そんなの当たり前だろう!!・・・誰だって、人の命は大事だ!!・・・お前もそうじゃないのか？」

真霜「ん、そうだね!・・・その為にブルーマーメイドになったんだから・・・」

龍之介「じゃ、これで仲直りだな!・・・もう何も隠すなよ!!・・・唯でさえお前の事も心配してるんだから・・・」

真霜「もうしかして・・・焼きもち焼いてるの？」

真霜は、龍之介の態度を見て、焼きもちを焼いているのだと思う。

龍之介「ま、まあな・・・」

龍之介は、照れながら答える。

真霜「そうなんだ・・・嬉しいわ・・・」

それを聞いた真霜は、嬉しくなり、心が一杯になった。

話が変わり

龍之介「そう言えば、薫は、無事か？」

龍之介は、薫の安否を聞く。

真霜「大丈夫よ！・・・少々危険な目に遭ったけど・・・」

龍之介「危険な目だど!？」

真霜「不審な男3人に生徒を人質に取られ銃で脅されたのよ！」

真霜は、薫が無事な事を言う。

ついでにオーシャンモール四国沖店での事を話す。

龍之介「何だつて!?!・・・銃で脅された!?!・・・俺のせいだ!!・・・俺が奴の脅しに屈したから、薫達を危険な目に・・・」

龍之介は、薫が銃で脅された事は、自分のせいだと悔やむ。

真霜「生徒を人質に取られたのですもの、仕方がないわ!!・・・でも安心して!・・・小沢さん達が直ぐ助けに来てくれたから、怪我もなく無事保護されたわ!!」

龍之介「次郎の奴が!?!・・・あいつが助けに来てくれたのか!?!・・・そうか・・・」

次郎が助けに来てくれた事を聞いて、龍之介は、ホッとする。

龍之介「そう言えば武蔵は？八神の方は？」

真霜「現在搜索中よ・・・まだ行方が掴めないけど・・・」

龍之介「そうか・・・無事でいてほしいが・・・」

龍之介は、行方不明のはやて達の無事を祈った。

真霜「それでね・・・補給が終わり次第、晴風と白鳳を調査と事情聴衆の為、横須賀に寄港させるんだけど・・・貴方にも協力して欲しいの？」

真霜は、今回の事件の真相を調べる為、晴風と白鳳を調査と事情聴衆の為に横須賀に寄港させる事を龍之介に告げる。

更にその時には、龍之介にも協力して貰うと龍之介に言う。

龍之介「分かっているよ・・・俺達の疑いを晴らさなければならぬから・・・但し、戦闘以外ならな！」

龍之介は、自分達の疑いを晴らす為、戦闘以外で真霜に協力する事を約束した。

横須賀基地

その後、龍之介達は、横須賀基地に向かい、拘束されていたGF隊員達と再会する。

なのは「准将!?!」

龍之介「なのはか!?!」

フェイト「准将!!」

龍之介「フェイトも!?!」

帰ってきた龍之介をなのはとフェイトが出迎える。

そして

G F 隊員 「准将!？」

G F 隊員 「准将!？」

更に監禁されていたG F 隊員達も出迎えに来てくれた。

龍之介 「おお皆無事だったんだな!!」

フェイト 「ええ・・・少しきつかったけど、皆、大人しくしていました。」

なのは 「まあ、私とフェイトちゃんが皆を励ましていましたから、大人しく出来たんですよ!」

龍之介達が拘束されてから、G F 隊員達は、基地内と艦内に拘束されて、不安な日々を過ごした。

だが、なのはとフェイトが隊員達を励ましてくれたお陰で、隊員達は、不安の中を何とか乗り越える事が出来た。

龍之介 「そうか・・・ご苦労だった2人とも!!」

龍之介は、隊員達を励ましてくれた2人に礼を言う。

そんな時

龍之介 「あれ?・・・篠原機関長と山崎整備班長の姿が見えないが・・・」

隊員達の中に夏雄と文雄以下の整備科と機関科の姿が無かった。

吾郎「ああ、あの2人なら釈放されて、直ぐに仕事場に戻りましたよ! . . . また何か起こるかも知れないから喜んでいる暇なんて無いと . . . 」

如何やら、夏雄と文雄は、まるで先を読んでいるかの様に、それぞれ直ぐに作業に戻った。

龍之介「そうか . . . 」

しばらく、隊員達に龍之介は、絡まれる。

それを後ろで真霜は、嬉しく見ていた。

国土交通省、大臣室

その頃、国土交通省では、謹慎していた深町前国交相が国交大臣に復帰していた。

一誠「復帰をお待ちしていました!! 深町国交相! 」

深町の復帰を一誠が出迎える。

深町「私が謹慎している間に色々あった様だね . . . 国交相代行! 」

一誠「その説は、申し訳ありません . . . 私の努力が至らなかつたせいで . . . 」

一誠は、自分が居ながら、息子の邦夫を抑えられなかつた事に申し訳ないと思つていた。

深町「君は、上手くやっていた!! . . . だから山本監督官や晴風が救われ、私もこう

やって、復帰できている。」

だが、深町は、一誠を責めず、むしろ感謝していた。

一誠「ありがとうございます……これで私も貴方に席を譲る事が出来ます!!……では……」

深町に感謝され、一誠は、胸を張って、深町に国交相の席を譲り、大臣室を出るが

深町「待て！」

一誠「!?」

出て行く一誠に深町が待ったを掛ける。

深町「君には、私の補佐役として、此処に居てほしい……」

何と、深町は、一誠に補佐役として、残ってほしいと言う。

一誠「しかし、私は、元々、田沼総理に言われて、代行を引き受けた身です……補佐など勤められません。」

だが、一誠は、元々、田沼と邦夫に脅されて、仕方なく国交相代行を務めるしかなかった。

そんな自分に補佐役など勤まらないと告げる。

深町「そんな事はない……今、私には、君見たいな補佐が必要なんだ!!……頼む!……この通りだ!!」

しかし、深町は、諦めず、一誠に頭を下げてください。

一誠「頭を上げて下さい!!・・・其処までおつしやるなら、私も断る訳には、いきません・・・謹んで、お受けします!!」

頭を下げてくださいする深町に一誠は、遂に受ける事にした。

こうして、深町は、国土交通大臣に復帰し、一誠は、補佐として、国土交通省に残る事になった。

首相官邸

田沼「この役立たずめ!!」

その頃、首相官邸では、邦夫からの報告を聞いて、田沼総理が怒りを露にしていた。

邦夫『申し訳ありません!!』

田沼「君には、失望したよ!・・・自分の父親の首に縄を掛ける事もできないのか!?!・・・雅に飼う犬に噛まれるとは、この事だな!」

田沼は、晴風の処理と技術確保に失敗し、更に一誠を従わせられなかつた邦夫に失望していた。

それだけじゃない、龍之介達の始末にも失敗し、田沼は、たけり狂っていた。

邦夫『総理・・・まだ、手が有ります!!・・・もう一度、私にチャンスを・・・』

邦夫は、再起を図ろうとするが

田沼「もう良い!!・・・君は、これまでの後始末をしたまえ・・・それが君の最後の仕事だ!!」

田沼は、再起どころか、邦夫にある事を命じる。

それは、この事件の後始末と自分に責任が及ばない様に邦夫に身代わりを迫る。

邦夫『・・・分かりました・・・全て私の責任として、処理します・・・』

邦夫は、悔しがりながら承諾し、電話を切る。

田沼「・・・おのれ宗谷め!!・・・やはり、あの男では、駄目だったか・・・」

田沼は、今回の事件で龍之介達だけじゃなく、真霜達が自分にとって、最大の妨げだと知る。

それだけじゃない、真霜相手に邦夫では、荷が重すぎた事を知った。

晴風、甲板

横女の生徒「おくらい!!・・・おくらい!!」

一方、晴風の甲板では、明石の生徒が破損した主砲の取り換え作業を行っていた。

三郎「それにしても、酷くやられたな・・・砲塔が吹っ飛んでるし・・・」

三郎は、晴風の第三主砲を見て、被害が酷い事が分かる。

媛萌「教員艦から攻撃を受けた時は、如何なるかと思っただんですけど・・・」

百々「その次には、シユペーとの戦闘もあつたすからね・・・」

三郎「成程な!・・・平賀さんから聞いていたが・・・それ程の戦闘を良く潜り抜けたもんだ!?!」

媛萌と百々からこれまでの経緯を聞いて、晴風がそれ程の戦闘を良く潜り抜けたもんだと感心する。

百々「それは、教官と艦長が適切な判断をしたお陰ツス!」

三郎「確かに・・・中佐は、駆逐艦での実戦経験があるからな・・・まあ、うちの艦長も同じだがな・・・」

3人が感心しながら、作業は続く。

晴風、通路

その頃、薫は、次郎と一緒にあるところに向かっていた。

次郎「なあ薫!・・・何所行くんだ?」

薫「・・・」

薫は、何所へ向かうかも告げず、取り合えず付いて行く事にした。

晴風、炊飯所兼食堂室

暫くして、着いた場所が晴風の炊飯所兼食堂室だった。

次郎「此処は、晴風の食堂じゃないか・・・こんな所に何の用だ?」

次郎は、飯食う以外要が無い筈の炊飯所兼食堂室に何の用があるのか、薫に問う。

薫「ちよつとね・・・此処に監禁されている2人の様子を見にね！」

薫は、炊飯所兼食堂室に来た目的は、先の発砲で拘束された志摩と付き添いで付いている芽衣の様子を確認する事だった。

2人は、炊飯所兼食堂室に入る。

美甘「あつ!?!・・・教官と小沢さんいらつしやい!!」

訪れた2人を美甘と杵崎姉妹が迎える。

薫「どうも伊良子さん!・・・2人の様子は、如何かな?」

薫は、美甘に監禁されている志摩と芽衣の様子を聞く。

ほまれ「ああ、2人なら、仲良く中で大人しくしていますよ!」

あかね「さつきまで、仲良くカレーを食べてましたし!」

薫「そう・・・」

3人から志摩と芽衣の様子を聞いて、2人が監禁されている倉庫に入る。

晴風、倉庫

晴風の倉庫では、監禁されている志摩と付き添いの芽衣がトイレットペーパーの箱詰めを行っていた。

芽衣「カレー食べられて良かったね!」

志摩「うい!」

監禁されているとはいえ、志摩は、カレーが食べられて、ご機嫌だった。そんな時

芽衣「今更だけどタマってさ……私の名前ちゃんと覚えてる？」

突然芽衣が志摩に自分の名前を覚えているか問う。

志摩「!!」

それを聞いて、志摩は

志摩（イリザキメイよ！……西崎芽衣……）

芽衣の名前は、覚えているが……

志摩「うい！」

何故か口では言えず、堆、ういと答えてしまう。

芽衣「ウイじゃなくてメイよ！」

ペコテ——ンツ!!!

自分の名前を答えられず、ういと言われ、芽衣は、頭にきて、志摩の頭にチョップする。

志摩「うい……」

芽衣からチョップを食らって、下手やられる志摩。

芽衣「タマは話すの嫌いな？」

志摩「う……嫌い……じゃない……けど……苦手……」
如何やら話すのが苦手の様だ。

まあ、そのせいで志摩は、晴風に配属されたのだ。

芽衣「そっかーやりたい事ができないってストレスだよね……」

芽衣は、志摩が喋るの苦手なのが良く分かるみたいだ。

志摩「うい……」

芽衣「……私も撃ちたかった……なあ……」

志摩が発砲した事に同情する芽衣。

志摩「駄目……」

そんな芽衣に志摩は、駄目だと止める。

芽衣「……」

駄目だと止められ、芽衣は、志摩に対して、会話以外で距離を縮める案を模索する。

芽衣「喋るのが苦手なら肉体言語だ！……おりゃー!!」

模索した結果、会話が駄目なら肉体的な対話で距離を縮める事にし、志摩に体当たりする。

志摩は、それを避ける。

芽衣「撃て撃て魂イ……!!」

避けられても、何度も体当たりを繰り返す、それを志摩は、易々と避けるやがて

芽衣「今度こそ!!」

芽衣が最後の突撃を試みる

その時

薫「山本よ!・・・入るわよ!」

其処の様子を見にきた薫と次郎が入ってきた。

薫「2人とも調子ど・・・」

芽衣「おりゃー!!・・・」

次郎「何だ?・・・えっ!?!・・・うわあ!?!」

ドテン!!

入ってきた次郎に芽衣が体当たりした。

その結果、次郎は、地面に尻もちを付く。

薫「じ、次郎君大丈夫!!」

次郎「イテなあ・・・何なんだよ!?!」

芽衣「アイタタタ・・・あつ教官だ!?!」

芽衣は、次郎の腹の上に乗るかかった状態で薫に気づく。

薫「西崎さん何してるの?」

一体何をしているのか問う。

芽衣「いや、その、タマに肉体的言語を……」

薫「肉体的言語って……まあ、良いわ……取り合えず、次郎君の上から退きなさい!!」

理由は分からず、取り合えず次郎の腹の上から退くよう迫る。

次郎「おい、重いから早く退いてくれ!!……俺は、クツションじゃないんだから!!」
本人からも退くよう迫られる。

芽衣「あつ!?! ……はい、はい……」

芽衣は、取り合えず薫に従い退く。

薫「立石さん、調子はどう?」

志摩「うい……」

先程までご機嫌だった志摩も薫の前では、不安になってしまふ。

薫「もう直ぐ平賀さんが福内さんを連れて、貴方の事情聴衆を行うんだけど……」
もう直ぐ平賀が後から来た福内と合流後、志摩の事情聴衆を行う事を志摩に伝える。

志摩「うい……」

それを聞いた志摩は、ますます不安になる。

薫「そんなに不安にならないで……貴方は、ワザとあんな事をする人間じゃない事は、皆分かつているんだから……それに怪我人も出ていないんだから……平賀さんも其処は、大目に見てくれるわ!!……だから、元気出して立石さん!!」

確かにいつも無口で大人しい志摩があんな事をする筈がない事は、誰もが分かっている。

だから、平賀も其処まで、酷い事は、しないでらう。

薫は、何とか志摩を元気付ける。

次郎「そうだ、薫の言う通りだ!!……お前は、誰も傷付けていないんだから、大丈夫だ!!」

芽衣「そうだよ!……タマは、悪く何だから気にすんなって……」

そして、次郎も芽衣も志摩を元気付ける。

志摩「う〜い〜!!」

3人に元気づけされ、志摩は、元気を取り戻す。

薫「その息だよ立石さん!!」

それから、志摩と芽衣に次郎の事を紹介して、倉庫を後にする。

晴風、通路

次郎「なあ薫!」

薫「何、次郎君？」

次郎「お前も教員として、大変なんだな！・・・生徒を守ったり、落ち込んでいる生徒を慰めたりする事は、今のお前にとって、大変だろう。」

先程の事を見て、次郎は、薫が今どれだけ大変なのか分かる様だ。

薫「私は、教員だよ！・・・はやてちゃんの救助に行けない分、私には、晴風の生徒を守る義務があるんだから・・・」

先程、薫が、無断ではやての救助に行こうとしたのを次郎が何とか説得して、止めたので、薫は、救助に行けない分、必死で晴風を守る事にしたのだ。

次郎（・・・そう言っているけど、我慢しているのは、見え見えだな・・・横須賀まで何も起こらなければ良いが・・・そうだ!!）

次郎は、薫の魂胆が見え見えなのは、分かっていた。

このまま横須賀に帰投するまで、何も起こらない事を祈り、ある事を思いつく。

次郎「なあ、薫！・・・今日は、お前のところに泊っても良いか？」

薫「それは構わないけど、如何して？」

次郎「鈍いなあ、お前が別れる時に行つたら・・・帰ってきたら続きをしようって・・・ある事、それは、次郎達が地中海に派遣される時に2人で約束した事、詰まり快樂の

続きである。

薫「ああ忘れてった!？」

薫は、約束の事を思い出す。

次郎「全く!……忙しいのは、分かるが、自分が言った約束だけは、忘れるなよ……」
薫「……分かつてるわよ……でも、そんな気がしないの、だから、今日は……」
薫は、今、はやてや晴風の事で頭が一杯だったので、快樂をする気分では、無かった。
次郎「そんな気だからこそだ!!……今日は、泊まる!!これは、決定だ!!」
それでも次郎は、強引に決める。

薫「……分かった。」

結局、薫は、承諾した。

まあ次郎も薫の気が済むのなら、あえて、自分を犠牲にしたのだ。

それから、しばらく経って夜になり、夕飯は、両艦、交代で間宮の食堂で飯を食った。
間宮で飯を食うのは、晴風の生徒や白鳳の乗員にとつては、大いに喜ばし事だったので、大いに間宮の食堂は、繁盛した。

晴風、教員居住室

晴風の生徒が寝静まった頃、次郎と薫は、お互いに服を脱いで、生まれた姿の状態で責め始める。

先ず次郎が薫の胸に口を付けて、手で褻を責める。

次郎に責められ、薫は、荒い息をしながら快感を感じる。

今度は、薫が次郎の肉棒を自分の胸に包んで、責める。

薫のおりふくよかな乳房に責められ、次郎は、ついいきそうな状態になり、薫は、それを見逃さず、自分の褌に次郎の肉棒を挿入させる。

そして、その状態で薫は、腰を揺らす。

最初は、慎重に腰を揺らしながら、固さを確かめ、だんだん強く腰を揺らし始めた。

薫の腰使いに次郎は、悶える。

それでも薫は、腰使いを止めず続ける。

やがて、

次郎「いいい、イクっ！・・もう出る・・・・・！！」

次郎は、遂にいきそうになり、薫は、トドメの一撃として、次郎に静かに口付けをす
る。

『んっ・・ちゅっ・・んむっ・・ちゅっ・・んんっ・・んっ・・んむっ・・』

口付けされ、次郎は、薫の中で盛大に果てた。

しばらくして、長い精射した後、次郎は、薫の胸の上でぐったりする。

次郎「薫・・少しは、ふつきれたか？」

薫「ん・・ありがとうね次郎君!!・・私の為に此処までしてくれるなんて・・」

次郎「当たり前だろ!!・・・お前の為なら、俺は、何でもするのは、当然だろ!!」
次郎は、自分が薫の為なら、何でもする事を薫に告げる。

薫「ん・・・嬉しいよ・・・次郎君・・・」

それを聞いた薫は、嬉しくなる。

雅に幸せな夜だった。

4月15日

修理中だった晴風も保々修理が完了した。

主砲も新しく長10cm高角砲に全部取り換えられた。

射撃指揮所も94式方位盤照準装置から94式高射装置に更新された。

明乃「明石に長10cm砲のストックがあつたんだって」

『うわぁ・・・』

幸子、光、順子を取り換えられた長10cm高角砲を見て、嬉しくなる。

幸子「凄い!：：前の主砲よりも射程が増えて、発射速度も初速も向上しています!」

幸子はタブレットで性能を比較しながら驚いていた。

ましる「もう戦闘にはならないと思うが、安心だな・・・」

分かりやすいフラグを建てるましる。

珊瑚「晴風艦長・・・」

明乃「!? ……」

取り換えられた長10cm高角砲を見てると珊瑚が来て

珊瑚「此処に修理した箇所を記載しておいた。」

明乃に晴風の補修箇所のデータが入ったUSBを渡す。

明乃「ありがとう！」

珊瑚「それじゃ我々はこれで……これから武蔵の補給に向かう。」

珊瑚は、武蔵補給に向かう事を明乃に告げる。

明乃「武蔵!?! ……」

珊瑚の発言の中の武蔵に驚く明乃。

珊瑚「武蔵もビーコン切つてて位置が分からないんで調査を兼ねてなんだけど……」

明乃「武蔵も……」

明乃は、武蔵からのSOSの事は知っていたが、晴風単艦では、救援には行けないし、ましろの反対もあつて、武蔵の事は、学校に任せる事にしたが、珊瑚から武蔵の状況を聞いて、武蔵に居るもえかの事が心配になる。

武蔵の事を案じているのは、薫だけでは、無かった。

明乃ももえかの安否が気になつていたので。

晴風の修理と補給を終えた明石と間宮は、武蔵の補給、捜索に向けて、出航した。

そして

三郎「それでは、我々は、これで……先に横須賀に戻ります。」

晴風は釜の温度が上がっていない状況なので、先に白鳳が横須賀に帰還する事になった。

明乃「いろいろとありがとうございました。」

ましろ「お世話になりました。」

三郎「別に礼を言われるほどじゃねよ……」

次郎「薫！……此処でしばしの別れだな！」

薫「うん！」

次郎と別れる事になり、薫は、不安になる。

次郎「そんな顔するな！……横須賀に帰還したら再会できるんだ!!」

不安になる薫に横須賀までの間だと言って、励ます次郎。

薫「うん……そうなんだけど……」

薫もそれは、分かっているが、やはり一人では、寂しかった。

そんな薫に

次郎「いいか薫！……帰還するまで、くれぐれも馬鹿な事をするな……」

次郎は、帰還するまで、くれぐれも馬鹿な事をするなど忠告する。

薫「分かつてるわよ……」

薫もそんな事は、百も承知だが、

次郎「その分かっているのが心配なんだよ!!……まあ、良いか……おい其処の2人!!」

やはり心配になり、側に居た明乃とましろに声を掛ける。

明乃「は、はい!」

ましろ「な、何ですか!」

2人は、何かと思いき

次郎「薫の事……頼んだぞ!!……こいつは、何をしでかすか分からないからな……きちり補佐しろよ!」

明乃「は、はい、分かりました!!」

ましろ「……」

次郎は、明乃とましろに薫の事を頼む。

薫「もう次郎君たら、私の生徒に何を言うのかしら……」

薫は、次郎がましろに何を言うのかと思ひ、つい呆れる。

とは言え、白鳳は、横須賀に向けて、発進する。

次郎「発進する!……上昇!!」

左右のノズルが点火し、船体は、海上から空中へと飛び上がった。
明乃「・・・!?!」

幸子「す、凄いです!!」

ミーナ「おお、空を飛んでるぞ!!」

ましろ「私は、夢を見ているのか!?!・・・艦が空を飛んでいる!?!」

鈴「まるで鳥見たい!?!」

空を飛ぶ白鳳を見て、晴風の生徒は、驚愕する。

晴風の生徒にとって、艦が空を飛ぶのを見るのは、初めてだろう。

前の時も平賀達が白鳳が飛んでいるのを見て、驚愕してたぐらいだからな、ビックリするのも当たり前だ。

上昇した白鳳は、格納していた尾翼を広げ。

次郎「エンジン点火!!」

メインエンジンと補助ロケットが点火する。

次郎「目標は、横須賀!・・・発進!!」

白鳳は、横須賀に向けて、マッハー1で発進した。

ましろ「な、何て速さだ!?!」

白鳳の速さに驚くましろ。

こうして、白鳳は、晴風と別れ、先に横須賀へと向かうのだった。しかし、次郎達が戻る中で更なる事態が起きようとしていた。

第19章 武蔵でピンチ!

4月15日

10:30

アスンシオン島沖

真冬率いるブルーマーメイドの保安即応艦隊が行方不明の教育艦を捜索している頃、同じく行方不明の教育艦を捜索している東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊の哨戒飛行船が単艦で航行中の武蔵を発見する。

その報告は、直ちに旗艦あおつきに齎された。

あおつき、艦橋

東舞校の主任「教頭先生!・・・哨戒船から入電です!!・・・発5分隊2号船宛旗艦あおつき 武蔵を発見・・・北緯19度41分東経145度0分で巡行中・・・無線で呼びかけるも応答なし・・・」

東舞校の教頭「・・・」

報告を聞いた教頭は、何故無線で呼びかけても応答がないのか

東舞校の主任「ビーゴンの反応も消えていますし、おそらく無線も含め、電装系の故障

だと思われます。」

主任は、電子機器の故障で応答が出来ないんだと認識する。

東舞校の教頭「武蔵の位置を横須賀女子海洋学校に連絡しろ!!」

武蔵発見の報告を直ぐに横須賀女子海洋学校に連絡を命じる。

東舞校の教頭「まあ見つかって良かった!!・・・随分と心配しているだろうな、生徒の安全確保は、優先事項なのに、複数同時に実習艦が行方不明になるとは……」

教頭は、武蔵が見つかって、ホッとするが、何故、複数同時に教育艦が消息を絶つとは、異例の事態に気になってしまう。

東舞校の主任「幸い伊201に乗艦していた我が校の生徒達は、全員無事に救出できましたが……」

主任も教頭と同じ気持ちだった。

東舞校の教頭「晴風は教員艦とも撃ち合いになったというし……一体何が……」

今回の晴風の反乱から複数の教育艦が消息を絶つ事態、教頭は、一体、何が起きているのか……!?

とは言え、そんな事は、今考える事では無い、今すべき事は、目の前に居る武蔵の保護だ。

東舞校の教頭「いや、何が起きたにせよ、直ちに武蔵の保護に向かおう!……哨戒

船を呼び戻せ!!」

こうして、東舞鶴男子海洋学校の教員艦8隻は、直ちに武蔵の保護へと向かう。とある島の沖合

東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊が武蔵の保護へと向かっている頃、晴風は、明石と間宮と別れ、更に次郎達、白鳳とも別れた後、晴風は現在、釜の温度が上がっていない事と平賀達による志摩の事情聴衆の為、この沖合で立ち往生な状態だった。

その為、暇な晴風の生徒は、終わる12時まで休息を取る事にした。

『うわぁ……ひぁ……』

生徒は、水着に着替えて、海水浴を楽しむ。

「ひぁ……マチ……!!」

マチコはパラセイリングをし、媛萌と百々、美海がスキツパーで快感浴びている時

美海「イルカだ!」

百々「生イルカっす!!」

近くにイルカの群れが通り掛かり、百々が興奮しながらその姿をスマホで撮る。

晴風、甲板

ましろ「こら、準備運動をせすに!!」

晴風の甲板では、ましろが準備運動をせすに海へと飛び込む生徒達に注意を促が

ましろ「そのまま飛び込むのは、止めて下さい!!」

明乃「イ、イルカ・・・!!イルカ・・・!!」

今度は、側に居た明乃が水着を着ずに飛び込むのをましろが取り押さえて、止める。

光「対象まで距離・5・0・・・全長は、2m30cmつてとこ・・・バン!!」

順子「バキユンとくる感じ!!」

美千留「102、10度旋回!!」

光と順子、美千留の3人がイルカの群れに対して、照準遊びをする。

皆が海水浴で遊んでいる中、

ましろ「こんなのにのんびりしてて、良いのか?」

ましろは、志摩が事情聴衆を受けている最中なのに自分達だけこんなのにのんびりしてて、良いのか気が進まなかった。

明乃「入学式から此処までずっと、皆緊張の連続だったしね・・・教官も許可してくれたし、ちよつとぐらい羽伸ばしても良いんじゃないかな・・・」

入学式から此処まで晴風の生徒は、緊張の連続が続いていた。

その為、明乃は、皆の緊張感を和らげようと晴れて、羽を伸ばす事にしたのだ。

幸い薫もそれを許可する。

ましろ「伸ばし過ぎだろ!!」

ましろは、羽を伸ばすと言いながら、伸ばし過ぎだと反論する。

明乃「皆、ホツとしてるんだよ!!・・・私達、反乱したわけじゃないって、わかつて貰えた見たいだから・・・」

ましろ「とは言え、速やかに学校に戻るべきだろう。」

ましろは、直ぐにも横須賀女子海洋学校に戻るべきだと告げるが

明乃「まだタマちゃん、平賀さん達に話し聞かれてる見たいだし、釜の温度も上がってきていないから・・・」

明乃は、志摩の事情聴衆と機関の釜の温度が上がらない限り、横須賀には帰れないとましろに言う。

晴風、機関室

麻侖「う・・・畜生、上がってえんだ・・・!!」

晴風の機関室では、明乃の言う通り、釜の温度が上がりきっていないので、麻侖がうちわで翻弄する。

その状況を五十六が後ろで見ていた。

晴風、甲板

明乃「私達直ぐには、出発できないよ!」

明乃は、ましろに状況を説明しながら、生徒達を見守る。

美海「はくい・・・撮るよ・・・」

快感を浴びて戻ってきた美海が皆の写真を撮ったり、聡子と秀子、まゆみがビッチバレーをし、楓と鶴、慧がスイカ割りも行われており、先程、照準遊びをしていた光と順子、美千留も今度は、ライフル式水鉄砲で遊び始める。

ましろ「しかし、一刻でも早く、着いた方が・・・」

例え出港できない状況でもましろは、一刻も早く学校に帰還すべきだと言うが

明乃「明石と間宮は、着いたかな？」

ましろ「えっ!?!」

明乃「武蔵のところに？」

ましろが問う中、明乃は、明石と間宮が無事に武蔵と合流できたのだろうか、気になっていた。

そんな明乃をましろは、唾然と見る。

そんな中、隣では、

空「今月の運勢は・・・」

桜良「あっ!?!さそり座は、9位!!」

機関員四人衆は、雑誌の占い記事で自分の星座の運勢をそれぞれ確認していた。

麗緒「おうし座は11位・・・」

麗緒は、自分の星座が12星座の内、ブービーだった事に嫌な顔をする。

留奈「ビリじゃないから良いんじゃない！」

そんな麗緒に留奈がフォローを入れる。

ましろ「・・・因みにふたご座は何位だ？」

ましろが気になって、自分の星座の順位を尋ねる。

空「・・・12位：：特に水辺では、運気が下がりますって：：」

自分の星座の順位が最下位だと聞いて、嫌な顔をするましろ

その時

ましろ「わあ・・・!？」

占いが当たったせいとか、光と順子、美千留の3人の水鉄砲のうちの一つが流れ弾として、ましろに命中した。

美千留「あっ!？」

順子「御免、御免」

自分の弾がましろに当たった事に順子は、謝罪する。

明乃「あっ・・・あっ・・・」

ましろ「・・・ついでない・・・」

ましろは、つくづく自分の運がついていない事に悔やむ。

留奈「すごい!? 当たってる!!」

占いが当たった事に留奈は、驚く。

桜良「あつ・・・心理テストもあるよ!・・・宗谷さん、やってみる?」

桜良が心理テストをましろに薦めるが

ましろ「やらん!!」

ましろは、自分の不運に腹かいて、自分の部屋へと戻って行く。

空「知床さんやってみる?」

ましろが心理テストをやらんと言ったので、空は、側に居た鈴に変わりに心理テストを受けてみるかと尋ねた。

鈴「え!? 私!？」

鈴は物は試しとその心理テストを受ける。

晴風の生徒が海水浴を楽しんでいる中、晴風の倉庫では、拘束している志摩の事情聴衆が行われていた。

部屋には、調書を取る平賀と福内の他、志摩の付き添いとして、薫と芽衣が志摩の左右に座っていた。

芽衣「くくあくくなくなく!! あくくなくなく!!・・・私もキャツキャウフフしたいなく!!」
皆が海水浴で遊んでいる事に芽衣がぼやいていた。

ひらが「もう少しで終わるから、頑張つてね。」

芽衣のボヤキを平賀が返す。

薫「こら西崎さん！……今は、大事な事情聴衆のまっただなか何だから、ぼやくの止めなさい!!」

ぼやく芽衣に薫が注意する。

芽衣「は〜い」

薫に注意され、芽衣は、ぼやくのを止める。

福内「立石さん！……もう一度聞くけど……何故、急に攻撃したのか、如何しても思い出せないのね？」

福内が改めて志摩にあの時の事を尋ねる。

志摩「うい……」

しかし、志摩は、自分が何故あんな事をしたか、全く分からず、気づいていたら、既に明石と間宮を発砲した後だった。

芽衣「思い出せないなら仕方ないよ、タマちゃん!!……私だつて撃てるものなら撃つてたし……あの状況だったらさ！」

芽衣もあの状況だったら、自分も撃つてたかもしれないと落ち込む志摩を慰める。

薫「そうね！……確かにあの状況だったら、私も撃つてるかもね……」

そして、薫も芽衣と同じ事を言つて、志摩を慰める。

芽衣「えっ?! 教官も撃つのか?」

薫「……冗談よ!」

今のは、冗談だった。

平賀「ん……終了でしょうか?」

福内「以上の聴取内容をまとめ海上安全委員会に報告します。」

長い志摩の事情聴取は、これにて終了した。

横須賀病院

その頃、龍之介と真霜は、入院している功と古庄の見舞いに横須賀病院を訪れていた。

横須賀病院、病室

病室では、功と古庄が何故か一緒に病室に入れられ、ブルーマーメイドの隊員から事情聴衆をされていた。

BPF隊員「晴風の反乱を最初に報告したのはさるしまですよね? ……何故反乱と断定を?」

何故、晴風を反乱と断定したのか問う。

古庄「晴風が実習の集合時刻に遅れて当該海域に到着し、その際此方から砲撃を行いました……晴風は魚雷で反撃し本艦に命中……これを反乱とみなし報告しました。」

古庄は、晴風が海洋実習の集合時刻に遅刻し、それを攻撃したのを認める。

功「……」

それを功は、横で聞いていた。

BPF隊員「遅刻程度で先制攻撃を行った理由は？」

今度は、何故、遅刻程度で先制攻撃を行ったのか聞かれる。

古庄「それは……」

BPF隊員「他の乗員は、全て艦長が命令したと証言しています。」

古庄「ん……命令したことは……よく覚えています……ですが……何故そう言う判断に至ったか……自分でも……不明なのです。」

古庄以外のさるしま乗員も晴風攻撃を古庄が命令した事を認めているが、命令した古庄自身は、志摩と同じ何故、あんな事をしたか分からなかった。

BPF隊員「本当に分からないんですか？」

ブルーマーメイド隊員は、更に問うが

古庄「……」

功「もうその辺で良いだろう！……古庄教官もまだ意識を取り戻したばかりだから、体調は、まだ万全じゃないだろう。」

功は、古庄の体調を考え、もうその辺で事情聴衆を止めるよう要求する。

其処へ

真霜「監督官の宗谷です!」

真霜と龍之介が2人の病室を訪れた。

功「准将!」

龍之介「よう!」

真霜「ご苦労様!!・・・差し入れを持って来たわ。」

BPF隊員「はっ!恐れ入ります。」

真霜「私も古庄教官から話を聞きたいのだけど・・・少し良いかしら?」

BPF隊員「はい」

真霜は、古庄から話を聞く為、しばらく4人だけにして欲しいと頼み、ブルーマーメイド隊員もそれを受け入れ、退出する。

龍之介「体は、もう良いのか参謀?」

功「はい、お陰さまで・・・」

野田に麻薬を注入され、廃人になっていた功は、もうすっかり意識を取り戻していた。

真霜「大丈夫ですか古庄先輩?・・・救助が来るまでの間、海を漂流してっただて、聞

きましたけど・・・」

古庄「後輩に心配かけるなんて情けないわね・・・ありがとう大丈夫よ!」

真霜「すみません・・・長所が完成するまでは、此処に居てもらおう事になります。」
真霜は、長所が完成するまで病室に監禁される事を告げる。

龍之介「参謀もだ！・・・どうせその体じやまともに動けんだろう。」

功「それは、ありがとうございます。」

当然、功もまだ、体が治っていないので、しばらくは、此処に居る事になった。

真霜「これ2人で食べて下さい。」

真霜は持つて来た差し入れの品を古庄に渡す。

古庄「ありがとう」

古庄は、それを受け取る。

龍之介「参謀にも、なのはとフェイトからの差し入れが有るぞ!!」

龍之介もなのはとフェイトから預かった差し入れを功に渡す。

功「あの2人から？・・・珍しいな、何時も俺に怒られているのに・・・」

功は、何時も自分に怒られているなのはとフェイトが自分に差し入れを送るとは、珍しかった。

とは言え、功は、気にしなく受け取る。

龍之介「なんやかんや言われても、あの2人は、本心じゃ参謀の事が心配なんだよ！」

功「それは、嬉しい事ですね！」

功は、何だか気が乗らなかった。

『フッフ……』

それを真霜と古庄は、笑う。

笑い終えた後

古庄「……生徒に向かって発砲したのに……何故そんな事をしたのか思い出せない何て……自分に腹が立つわ……」

古庄は、先程の事情聴衆と同じ、自分が教官として、あるまじき行為をしたと自覚しているのだが、何故そんな事をしたのか思いだせない事に腹が立っていた。

龍之介「そう悔やむな!……過ぎた事は、仕方がない……それに貴方だけのせいではない筈だ。」

真霜「彼の言う通りです……それに他の乗組員もちゃんと記憶はあるのに何故こんな事をしたのか思い出せないと証言しているんです……先輩だけじゃありません……サルベージしたさるしまの戦術情報処理システムもログが消えていました。」

2人は、今回の事件の責任は、決して古庄だけではないと言って、真霜は、鞆から事件の経緯が纏められた報告書を2人に見せる。

功「報告書か?」

古庄「ログ、消失……13時20分から機能を喪失していたとみられる、か……」

功「ログが消失とは、可笑しいですね?・・・機械の故障ですか?」

功は、ログ消失と聞いて、記憶装置の故障かと問う。

真霜「いえ、故障じゃないらしいわ。」

功「・・・」

故障ではないと聞いて、なら何故、ログが消えたのか気になる。

報告書を見るのを終え、真霜に返した古庄は

古庄「晴風は本当に大丈夫?」

晴風の安否を聞く。

真霜「山本二等監督官のお陰で艦長以下全員無事です。」

古庄「そう・・・彼女にも迷惑を掛けたわ!!」

真霜から晴風は、無事だと聞いて、安心し、薫にも迷惑を掛けた事に申し訳ないと思う。
う。

龍之介「なぐに、危ない事は、俺達Gフォースの仕事内だ!!・・・薫も迷惑なんて思っていないだろう。」

龍之介は、別に危ない事は、自分達の仕事で薫も迷惑なんて思っていないと言う。

その時

ピリリリ：：

突然、真霜の携帯にメールが入った。

真霜「あつ?!ちよつとすいません。」

真霜は、メールの内容を確かめる。

メール差出人は、真雪からで内容は、東舞鶴学校からの武蔵発見だった。

龍之介「何だつて?」

龍之介は、メールの内容を聞く。

真霜「お母さんから?」

真霜は、差出人は、真雪からだと言う。

龍之介「真雪さんから?」

真霜「先輩すいません、ちよつと急用が・・・それ食べてくださいね!」

龍之介「じゃあな参謀!また来るからな!」

2人は、武蔵発見の報告を受け、急ぎ横須賀のブルーマーメイド庁舎へと戻ろうと病室を後にする。

2人が病室を後にした後、古庄は、真霜からの差し入れの箱を開く。

中に入っていたのは、3つのプリンでその上にイルカの絵がかいてあった。

功「ほお・・・美味そうだな・・・どれ、こっちは、何かな?」

功は、真霜の差し入れを見て、自分の方の差し入れは、何かなと箱を開ける。

功「へ・・・クッキーか、しかもハート型だ・・・それに手紙まで・・・どれどれ・・・」
中に入っていたのは、3つのハート型クッキーが入っていて、更に中には、功宛の手紙も入っていた。

功は、なのはとフェイトからの手紙を読む。

功「くっ・・・くっ・・・」

手紙には、参謀が早く元気になってくださいと、このクッキーは、古庄に告白する為に私達からの手土産ですと書かれていた。

功「あの2人・・・全く大きなお世話だ!!・・・退院したら雅気に可愛がってやる。」
手紙の内容を見て、功は、腹かいて、退院したら雅気に可愛がってやると決める。

古庄「フッフ・・・」

そんな功を古庄は、笑う。

場面は、晴風に戻る。

晴風、通路

晴風の生徒達の殆どが水着に着替え、海水浴をしている中、

ミーナ「ん・・・ちよつと小さいの・・・」

ミーナもましろから水着を貸して貰って着てみたのだが、どうも胸のサイズが合わない様だ。

まあ、ましろの胸に比べれば、ミーナの胸は、その倍のデカ差なんだが、兎も角、ミーナが胸の部分を気にしていると、其処へ杵^ツ姉妹が通り掛かる。

『ふっ』

ミーナの姿を見た途端、2人は、咄嗟に手に持っていた物を隠す。

ミーナ「やあ、主計課は遊びに行かんのか？」

ほまれ「うっ、うん、後で行くよ!!」

2人は、急ぎ足でその場から去って行つた。

ミーナ「ワシ：：避けられとるのかな？」

杵^ツ姉妹の対応に首を傾げるミーナだった。

晴風、甲板

福内「聴取を終了したのでこれで失礼します。」

平賀「発砲についての正式な処分は帰港した後で学校から下されると思うけど：：損害もなかったし嚴重注意程度で済むんじゃないかしら：：」

明乃「ありがとうございます。」

志摩の罪が軽い事に明乃は、感謝する。

薫「平賀さん、福内さん！：：内の生徒がご迷惑を掛けて、本当にすいませんでした。」

薫は、志摩に変わって、頭を下げる。

平賀「頭を上げてくください薫さん!!」

福内「薫さんだけが悪い訳では、無いですから・・・」

頭を下げる薫に2人は、決して薫だけじゃないと言つて、頭を上げさせる。

薫「・・・」

平賀「では、横須賀まで、後の事をお願いしますね薫さん!!」

薫「・・・はい」

福内「では・・・」

志摩の事情聴衆が終わり、後の事を薫に任せ、平賀と福内は哨戒艇に乗り、帰って行つた。

薫「では・・・艦長、横須賀まで、私に任せられたのでよろしく!」

明乃「此方こそ、お願いしますね教官!」

薫「ん・・・」

薫は、何だか落ち着かない顔で向こうへと行つてしまった。

薫と別れた明乃は、解放された志摩と芽衣の元に向かう。

明乃「タマちゃん・・・!!お疲れ様!!」

志摩「うい・・・」

表情が乏しい志摩だったが、見るからに落ち込んでいるのが分かる。

明乃「大丈夫だよタマちゃん!・・・学校にはちゃんと説明して私も一緒に謝るから」
芽衣「また私もぼつちり付き添うよ・・・一応、海に落ちたことだし、念のため保健室に見てもらおうか?」

志摩「うい・・・」

明乃と芽衣に励まされて少し嬉しそうな志摩。

その時、

明乃「ん!?!」

明乃は甲板で項垂れている鈴の姿を見つけた。

明乃「ん・・・如何したのリンちゃん?」

鈴「うっ・・・うっ・・・」

明乃は、如何したと問うが鈴は、何故か落ち込んでいた。

明乃「・・・皆と遊ばないの?」

鈴「さ・・・さつき心理テストをやったんだけど・・・」

明乃「ん・・・?」

鈴「私の性格って、真面目系クズって言う結果で・・・」

明乃「えっ!?!」

如何やら、空に勧められた心理テストの結果が良くなかった様だ。

鈴「ふつ、当たっていると思う・・・だって私・・・逃げてばかりの逃げ逃げ人生だし・・・」

明乃「逃げ逃げ人生？」

鈴は明乃に「逃げ逃げ人生」とは、どんな人生かを話した。

鈴「うん・・・小学校の時にね・・・皆で肝試しをしたんだけど・・・友達を置いて逃げちゃったの!!」

明乃「・・・」

鈴「いつもいつも気付いたら逃げてばかりで・・・」

過去を振り返す鈴。

小学校時代、下校時犬に吠えられて、逃げてわざわざ遠回りして帰った事や修学旅行の時、仁王像を見て、怖くなって逃げ出して担任の先生やクラスメイト達に迷惑を掛けた事。

確かにこれまでの人生、鈴本人の言う通り、辛い目や怖い目に会った時は逃げてばかりいた。

鈴「そんな時は、いつも一人で海を見てた・・・不思議と気持ちが落ち着いて・・・それで海が好きになって・・・ブルマーを指して艦に乗っていけば逃げ場はないから逃

げ逃げをやめられると思ってたんだけど……結局また艦ごと逃げ出して……」

自分が逃げ逃げて止めようとブルーマーメイドを目指したが、結局、自分は、逃げてばかりだと痛感する。

明乃「……逃げるのは悪くないと思うよ!」

しかし、明乃は、逃げるのは、悪くない事だと言う。

鈴「えっ!?!」

明乃の言葉に鈴は、驚く。

明乃「だって、私達、3回も戦闘したのに無事なんだよ!……それは、リンちゃん
が逃げてくれたおかげだよ!……的確に状況を見極めてうまく逃げるのはリンちゃん
の長所じゃないかな!」

明乃は微笑みながら鈴の長所を言う。

鈴「……」

鈴は明乃の顔をじつと見ていた。

一方、反対側では、

薫「ねえ、五十六?」

五十六「ぬう」

明乃と別れた薫が機関室から甲板に出た五十六と話していた。

薫「私は、命令に従っていいれば良いのかな？」

薫は、五十六に自分は、このまま横須賀に帰還して良いのか、それとも命令違反して、武蔵に救助に向かうか、如何すれば良いのか、五十六に相談していたが

五十六「ぬうぬう」

薫「と言つても分からないよね、五十六には・・・」

五十六は、猫なので言つても分からない筈だ。

だけど、薫にとって、五十六は、悩みの相談役なのだ。

だから、五十六も多分、薫のしたい事は、分かるんだろう。

五十六「ぬう・・・」

薫「フフフ」

薫は、五十六を抱っこし、水平線を見る。

晴風、医務室

その頃、医務室では志摩が美波に診察を受けていた。

美波「むゆむふ、帰ってよし！」

美波の診察では、何も異常はないと診断された。

芽衣「大丈夫だつてさ、タマちゃん!!」

志摩「うーい」

異常なしと診断され、嬉しがる志摩。

芽衣「うく、チュ、チュ」

芽衣は、美波が預かっているマウスと遊ぼうとするが

美波「触るな!・・・漂流物から拾ったから、菌を持っているかもしれない?」

美波は、菌を持つてるかもしれないと芽衣に注意する。

芽衣「の・・・ほ・・・ん!?!」

菌を持つてるかもしれないと聞き、芽衣は、急いで離れる。

芽衣「やっぱ・・・解剖とかするの?」

芽衣から解剖するのか怪しく聞かれると

美波「・・・フフフ」

美波がマウスに餌を与えて、怪しげな表情で2人を見つめる。

芽衣「うぐい、行こうタマちゃん!」

志摩「うい!!」

2人は、恐怖の余りその場を逃げた。

2人が逃げた後

ビービー

美波「ほっ!?!」

突然、美波が腕に付けていた電波時計がなり、彼女はその時計に目をやると、

美波「はっ!？」

電波時計は、バグを起こした。

美波「ん……」

美波はバグを起こした時計とマウスを交互に見た。

雅かマウスがバグを起こしている原因なのかと

アスンシオン島沖

一方、アスンシオン島沖では、東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊が発見した武蔵へと接近していた。

あおつき、艦橋

主任「武蔵、安定して巡航中ですぬ！」

主任は、双眼鏡で武蔵の状況を報告する。

見た所、特に武蔵には異常を感じられず、動いている事から機関も正常に稼働し、損傷箇所も見当たらなかった。

教頭「皆、無事ならば良いが……」

教頭は、武蔵の生徒が無事でいてほしいと願う。

同じ頃、武蔵の艦橋に立て籠もっていたもえか達も東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊の

接近に気づく。

武蔵、艦橋

親子「か、艦長!・・・見て下さい!・・・救援です!!」

親子が双眼鏡で教員艦隊の救援を視認し、もえかに伝えた。

もえか「えっ!?!」

もえかは、急いで双眼鏡で確認する。

夏美「助かった!?!」

亜衣子「これで私達、助かるんだ!!」

救援が着た事に夏美と亜衣子は、喜んでいた。

はやてを失って7日間、4人は、ずっと不安な状態で艦橋に立て籠もりながら、救援を待っていた。

それがようやく、東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊が救援に駆けつけてくれたのだから、これでやっと悪夢から解放されると喜んでいたので。

だが、喜ぶのも束の間、更なる事態が救援を阻む。

親子「艦長!・・・あれを!?!」

親子が今度は、何事かと思ひ、下を見ると

もえか「はっ!?!」

何と、武蔵の主砲が勝手に旋回しはじめた

次の瞬間

ボン!!

東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊、目掛けて発砲したのだ。

あおつき、艦橋

主任「撃ってきました!?!」

教頭「何、如何ゆう事だ!?! 一体?」

武蔵の突然の砲撃に驚愕しながら、武蔵の砲弾は、教員艦隊の一隻に命中した。

主任「四番艦から受信、機関部被弾! 航行不能!! ・・ 繰り返す! ・・ 機関部被弾

! 航行不能!!」

武蔵の攻撃を受け、幸い沈没は免れたが、機関に被弾し航行不能になる。

それを見た隣の教員艦が急いで武蔵に向けて、発光信号を送るが

主任「発光信号を送っていますが応答ありません!!」

武蔵は、応答せず。

あおつき、艦橋

教頭「我々を脅威と誤解しているのか? ・・ 二番艦は接近し音声にて呼びかけてくれ

!!」

教頭は、武蔵の生徒が、自分達が武蔵に攻撃を仕掛けてくると思い込んでいるのかと思ひ、すぐさま二番艦に発光信号だけでなく、音声信号にて武蔵へと呼びかける様を示を出した。

『武蔵の生徒諸君・・・我々は東舞高の教員だ!・・・君達を保護する為に来ている・・・速やかに停船し指示に従い・・・』

二番艦が音声信号を送るが、武蔵は、応答せず、それどころか武蔵の右舷の副砲が旋回し、音声信号を送る二番艦を砲撃した。

東舞校の教員「防水作業急げ!!」

副砲の攻撃で二番艦は艦首に浸水する被害を受けた。

あおつき、艦橋

教頭「・・・砲撃を止めさせよう・・・何所かに穴を開けて傾斜させれば砲は仕えなくなる。」

最初の砲撃から、既に2隻が被害を受け、更に武蔵の砲撃は続き、教頭は、これ以上砲撃を受ければ、被害が増える一方だ。

其処で、浸水させて武蔵の船体を傾斜させる事により砲塔を使用不能にさせる事にした。

主任「・・・生徒の艦を・・・撃つ事になります・・・?」

主任の言う通り、それは、無抵抗の学生を攻撃する事と同じ事であった。教頭「砲を撃てなくしてから生徒を保護する。」

しかし、それでも被害を最小限にするには、攻撃するしかなかった。

主任「：：了解・・・対水上戦闘用意!!」

主任も遂に教頭の決断を了承し、対水上戦闘用意の号令を出す。

東舞校の教員「対水上戦闘用意！」

東舞校の教員「主砲、配置よし！」

対水上戦闘用意の号令の元、教員艦隊は、戦闘準備をする。

あおつき、艦橋

主任「各部配置よし！非常閉鎖よし！対水上戦闘用意よし！」

各艦、戦闘準備が完了する。

この間にも武蔵の砲撃は続き、

東舞校の教員「三番艦被弾!!」

その砲撃で今度は、3番艦が被弾した。

あおつき、艦橋

教頭「対水上戦闘！噴進魚雷、攻撃始め!!」

主任「噴進魚雷、発射始め!!」

旗艦あおつきから一斉に噴進魚雷が発射された。

墳進魚雷は、全弾、武蔵の右舷に命中する。

主任「命中しました!!・・・目標?・・・速力変わらず、主砲動いています!!」

武蔵への墳進魚雷命中を確認したものの、武蔵は、墳進魚雷命中に物ともせず、教員艦隊への砲撃を続ける。

教頭「演習弾では無理か・・・」

如何やら、先程発射した噴進魚雷の弾頭は、全て演習弾だった様だ。

とは言え、武蔵と教員艦隊の戦闘は続く。

武蔵、艦橋

その戦闘をもえか達は、武蔵艦橋で見ている。

亜衣子「東舞校が!」

夏美「な、何で私達の艦が東舞校を・・・」

自分達の艦が救助に来た東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊を砲撃しているのを見て、人は、シヨックを受ける。

親子「か、艦長・・・」

そして、

もえか「ど、如何して?・・・」

もえかも自分の艦が東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊を攻撃してるのにシヨックを受けていた。

もえか（このままだと助けが来なくなる・・・でも私達には、何も出来ない・・・如何すれば…）

今、東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊が救助に来ているのに、自分達の艦がそれを攻撃している。

しかし、自分達には、それを止める事も如何する事も出来ない。

如何すれば状況が良くなるのか、もえかは、考えながら、戦闘を見守る。

晴風、前部甲板

一方、武蔵と東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊の戦闘している頃、晴風では

明乃『ええ・・・艦長の岬です・・・クラス全員急いで艦首付近の前甲板に集まって下さい以上・・・』

明乃は、突然、生徒達を艦首の前甲板に集合するよう放送を掛ける。

『ん・・・？』

幸子「何ですかね・・・」

突然の召集に何だろうと思ひ、兎に角、前甲板に集合する。

薫「ん？」

ましろ「何だ、急に召集かけたりして？」

ましろは、何故、急に召集掛けたか、明乃を問い質すと明乃は、

明乃「あのね皆!!・・・今から・・・ミーちゃんの歓迎会を始めます!!」

何とミーナの歓迎会を始めた。

『わあ・・・!!』

ミーナの歓迎会に皆は、ミーナに歓迎の拍手で迎える。

ミーナ「えっ!?ワ、ワシの?」

突然、自分の歓迎会にミーナは、驚く。

薫「ああ!?そう言えば・・・」

洋美「そう言えば、まだだったわね!」

麻命「おっくい!!おっくい!!、やちまえてんでえい!!」

今まで、戦闘が多かったので歓迎会を開く余裕が無かった。

皆拍手しながら、美甘と杵崎姉妹が歓迎用のケーキを運んで来て

美甘「今火を付けるからね・・・」

美甘がケーキのロウソクに火を付ける。

ミーナ「も、もしかして、コソコソしてたのは!?!」

麻命「良いから、良いから・・・」

ミーナは、杵崎姉妹が何故、自分を避けていたのか、ようやく分かりながら、麻命と麗緒にケーキの前へと連行される。

ミーナがケーキの前に立つと

明乃「じゃあ、私達の新しい仲間のミーちゃんから、何か一言！」

ミーナ「んっ？」

明乃からミーナに何か一言言う様、言われ戸惑うミーナ。

ミーナ「・・・え・・・晴風乗員諸君！・・・全くこの晴風というのは変な艦じゃ、上下関係は、だらしがない、規律は、いい加減、艦長は、全然艦長らしくない！」

明乃「やつぱり？」

ましろ「異議なし！」

薫「私は、良いと思うんだけど・・・」

ミーナの言葉にましろは、その通りだと薫は、そうじゃないと言う答えを出す。

ミーナ「：：：こんな如何ゆるい艦、見たこと無い・・・だが・・・へ、へペンハイム シュタルケンブルク城見たいで小さいが風情がある。」

幸子「あのう、例えが分かりずらいです。」

幸子は、ミーナの例えが理解できなかつた。

ミーナ「じゃ、ニルンベルクのソウセイジじゃ」

ミーナの例えに皆笑ってしまふ。

ミーナ「それに、こんな風にワシを歓迎してくれるとは……晴風乗員諸君……ワシは、この手厚い歓迎にド感謝する!!」

ミーナは感謝の言葉を述べてケーキの上に立つロウソクの火を消す。火を消した途端、皆は、拍手する。

美甘「はい、じゃあ皆でケーキを食べようね!」

『異議なし!!』

美甘は、ナイフを取り、皆にケーキを配る。

配られたケーキを皆は、それぞれ食べる。

媛萌「ミーナちゃん、何で自分の事を『わし』っていうの?」

媛萌がミーナに何故、自分の事をワシと言うのか、気になっていたので、ミーナに問うと

ミーナ「可笑しいか……?日本の映画を見て覚えてたんじゃが?」

幸子「ああ、仁義がない感じの映画ですね……『あんたは儂らが漕いだる船じゃないの……船が勝手に進める言うなら進んでみいや!!』」

如何やら、ヤクザ映画を見て覚えたらしく、それに釣られて、幸子が何処からかサングラスを取り出し、例の一人芝居をする。

すると

ミーナ「『さささらもささらにしちやれ．．．！』じやな」

ミーナもそれに乗る。

ミーナ「しかし、上手いなあこのケーキ！」

ミーナが再びケーキに口を着けていると

あかね「これ記念品」

ほまれ「貰って」

杵_×姉妹が紅白の達磨をミーナにプレゼントする。

ミーナ「お、おう：ダンケシエーン」

プレゼントされた紅白の達磨にミーナは、驚きながら、杵_×姉妹から、その紅白の達磨を受け取った。

幸子「あの映画シリーズ全部見たんですか？」

ミーナ「見たぞ！」

幸子「私、四作目が好きで!!」

ミーナ「兆件作戦か、あれはええのう」

如何やら、幸子もミーナと同じヤクザ映画が好きなようで、2人は、意気投合する。

薫「美味しい？」

五十六「ぬう」

薫「フフフ」

薫は、五十六と一緒にケーキを食べて、五十六が美味しくケーキを食べているのを見て、堆笑ってしまう。

そんな中、明乃は、ポケットから懐中時計を出して、中に貼ってある写真を見る。

鈴「可愛い」

明乃「んっ?」

隣から鈴がそれに気づき。

鈴「それって、艦長・・・岬さんの子供の頃?」

明乃「んん、卒業式の写真・・・ずっと一緒だったの・・・」

鈴「武蔵の艦長さん?」

鈴が写真に写っているもえかに注目する。

明乃「んそう、武蔵の・・・」

その時

ピーーン

鵜『艦長!!学校から緊急電です!!』

鵜が学校からの緊急伝を伝える。

薫「如何したの？」

ましろ「何事だ!？」

明乃「総員、直ちに配置について!!」

何事かと思ひ、明乃は、直ちに総員配置の号令を出す。

歓迎会から一転、生徒達は、急いで配置に着く。

晴風、艦橋

ましろ「電文の内容は？」

ましろが艦内電話で鶴に学校からの電文内容を尋ねる。

鶴『北緯19度41分東経145度0分地点で武蔵を搜索していた東舞校教員艦との連絡が途絶えた：：周辺で最も近い位置にある晴風は現地に向かい状況を報告せよ：：なお戦闘は禁止。自らの安全を最優先する事：：以上』

薫（武蔵が近くにいる・・・はやてちゃんが・・・）

明乃「武蔵がこの近くに：：」

薫と明乃は、武蔵の方を聞いて驚く。

雅か、探していた武蔵がこんな近くに居たとは予想外だったからだ。

しかも横須賀への帰還命令から武蔵が居る海域へと向かう様、命令が変更された。

ましろ「命令はあくまで状況報告だぞ！」

ましろは、あくまで状況を報告するのみだと明乃に再認識させる。

明乃「そうだね……出航用意! 錨を上げ!!……両舷前進強速ヨーソー!! 見張りを厳に……」

薫(待ってて、はやてちゃん!……直ぐに行くから……)

晴風は、急ぎ武蔵が居る海域へと向かう。

4月15日

17:00

アスンション島沖

主任「増援の8隻到着!……陣形、整いました!!」

あれから、武蔵と東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊の戦闘は、熾烈さをきし、流石の教員艦隊も不利だと認識し、直ぐに増援を呼んだ。

こうして、教員艦隊は、増援8隻を得て、残存艦6隻合わせて、その数14隻になり、武蔵を取り囲む様に陣形を整える。

だが、武蔵の砲撃の前に全く歯が立たず苦戦、晴風が到着した頃には、戦闘は、膠着状態になっていた。

晴風、艦橋

幸子「凄い!?!……凄すぎます!?!……」

幸子が震える声で目の前の光景の感想を口にした。

両艦の戦闘を見て、艦橋に居る者は、息を詰める。

芽衣「夾叉も無しに行き成り命中させる何て……あんなのに狙われたら……」

芽衣が夾叉もしないで目標に命中させる武蔵の砲術の凄さに驚いていた。

鈴「操艦もあんなに大きな艦があつという間に針路を変えている……」

鈴も武蔵の操艦能力を褒める。

やはり、横須賀女子海洋学校の中でも成績優秀者を乗せているだけの事はある。

明乃「如何して!?! ……何でこんな事に……」

明乃は、何故、こんな事になっているのか驚愕しながら、双眼鏡を見る。

そして、もう1人

薫（な、何で!?! ……如何してなの、はやてちゃん……）

薫も武蔵が何故、救援に來た教員艦隊を砲撃するのか、全く分からず驚愕する。

すると

明乃「モカちゃん!!」

行き成り明乃が声を上げた。

『はっ……』

薫とましろが声を上げた明乃を見る。

そして

明乃「シロちゃん・・・悪いけど・・・後は任せて良い?・・・私・・・行つてく
る。」

突然、明乃は、ましろに艦を任せ、何処かへ行くと言い出した。

薫「えっ!?!」

ましろ「行かつて何所にだ!?!」

行き成り何所に行くのか問うましろ。

明乃「武蔵のところへ」

何と、向かう先は、戦闘中の武蔵だった。

何と無謀な

薫「・・・」

ましろ「・・・ば、馬鹿を言うな!・・・状況は、既に把握した確認した報告が最優
先だ:」

ましろは、武蔵に向かう明乃を止めようとするが、明乃は、ましろの言葉を聞かずに
行こうとする

それに対して、思わずましろは、明乃の肩を掴み

ましろ「いい、いい加減にしろ!!・・・毎度毎度、自分の艦をほったらかしにして飛び

出す艦長が何所の世界に居る!!・・・海の仲間が家族じゃないのか!!・・・この艦の仲間、家族じゃないのか!!・・・如何なんだ答える!!」

遂に勝手な行動を取る明乃に切れ、明乃に怒鳴る。

ちやうど艦内放送の無線が入ってて、ましろの怒鳴り声は、艦に響き渡ってしまふ。それを聞いた生徒は、啞然としながら聞く。

明乃「あつ・・・」

ましろ「・・・此処は・・・守るべき家じゃないのか?」

ましろは、必死に止めるが

明乃「モカちゃんか…私の幼馴染があそこに居るの・・・大事な親友なの・・・」
そう言った瞬間、ましろは、肩から手を放し、艦橋は静まり変える。

明乃「晴風は速やかに武蔵の射程外に出て!!」

明乃は、そう言つて、艦橋から飛び出して行つた。

鈴「・・・岬さん」

艦橋の皆が飛び出した明乃に注目していると

薫「んっ・・・」

幸子「きよ、教官・・・」

薫も明乃の後を追うかのように艦橋を飛び出して行つた。

晴風、前部甲板

武蔵へ向かおうとスキツパーに飛び乗る明乃。
すると

明乃「きよ、教官!？」

突然、薫が飛び乗ってきた。

薫「行くんでしょ!!武蔵のところへ……」

そう言つて、明乃と運転を代わる。

明乃「あつ」

薫「私も一緒に行く……私もあそこにはやてちゃんが……私の大事な従妹があそこにいるの……だから!!」

薫も結局は、明乃と同じ考えで、これまでも飛び出して、助けに行こうと思つたが、平賀や次郎に駄目だと言われ、行くのを思い留まっていたが、さっきの明乃の行動を見て、遂に思い留まる事が出来なくなり、明乃の後を追つたのだ。

薫の運転の元、2人は、武蔵へと向かう。

これは、最早、命令違反に等しい行動だ。

後でどんな罰を受けるか

それは、さて置き

晴風、艦橋

薫と明乃が武蔵に行つた後、ましろは、

ましろ「!!えー!!もうく!!取り舵一杯!!」

遂に自暴自棄になり

鈴「取り舵一杯!!」

ましろ「武蔵との距離はこのままを維持し、スキツパーの動きを追う。」

薫と明乃の後を追う。

幸子「教官と艦長を回収しなきゃいけませんからね!」

ましろ「でなきゃ、とつくに反転して、逃げてる!!……応急委員は、即応体勢、手

が足りなかつたら主計科の子にも手伝ってもらつて!!……以上各班に通達!!」

ましろの指揮の元、薫と明乃の後を追いながら、晴風は、武蔵と東舞鶴男子海洋学校

の教員艦隊との戦闘の中に入る。

一方、武蔵と戦闘を続けている東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊は、既に14隻のうち

既に残存艦は、4隻になっていた。

だが、一步も引かず武蔵の前に立ちはだかる。

あおつき、艦橋

教頭「何としても足だけでも止めなければ……噴進魚雷攻撃始め!」

最早4隻だけでは、武蔵を止める事は出来ない、しかし、せめて航行不能にするだけでも、武蔵の行動を制限する事だけはできる。

教頭は、噴進魚雷で武蔵のスクリーシャフトを攻撃しようと発射するが

教頭「何!？」

発射された噴進魚雷は、誘導装置が故障したせい、殆んどが作動不良を起こし、空中をフラフラ飛び、海上に着弾した。

そして

主任「教頭!?!?! 増援艦隊との通信が途絶しました!!?!?! データリンクも止まっています!!」

今度は、通信機器や艦隊ネットワークが機能を停止し、麻痺状態に陥った。

教頭「バカな!?!? そんな!?!?」

突然の事態に教頭達は、驚愕する。

更にそれに追い打ちを掛ける様に

主任「着弾します!!」

武蔵の砲弾が旗艦あおつきに命中、航行不能になる。

残りの3隻も旗艦が被弾や通信機器と艦隊ネットワークが機能を停止している為、混乱する。

その最中に武蔵の砲撃を浴び、航行不能になる。

これにより、東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊は、全滅した。

晴風、見張り台

マチコ「武蔵の主砲、此方に施行中!!」

東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊を全滅させた武蔵は、次に接近中の晴風へとその主砲の照準を向けた。

晴風、艦橋

『?!?!』

芽衣「え．．．!？」

マチコの報告を聞いて、驚愕する。

まして「面舵一杯ヨソロ!!武蔵と反航にして．．．」

即座にましろが鈴に退避指示を出す。

鈴「はい!!」

鈴は、即座に舵を切り退避行動に移る。

芽衣「よく逃げずに頑張っているね、今日は!？」

志摩「うい!？」

芽衣と志摩が鈴にいつもとは違うと言う。

確かに普段の鈴であれば、「逃げようよお〜!!」と騒ぐ筈だが

鈴「艦長が岬さんが戻ってこれる様にしないと!!」

昼間、明乃に褒められて、ちよつとは前向きに取り組む姿勢が芽生えてきた鈴。

それでも目は、やはり涙目だった。

晴風、電探室

慧「感あり!?・・・主砲弾3、此方に向かっています!!・・・10秒後艦首右前方に

着弾!!」

晴風のレーダーが武蔵の砲撃を捉えた。

晴風、艦橋

ましろ「な、何故だ!?!」

慧からの報告を聞きましろは、驚愕する。

そんな中、志摩は、ましろが驚愕しているうちに

志摩「120の60」

伝声管で射撃指揮所に指示を出す。

芽衣「撃つんだ・・・!?やっぱり撃つちやうんだ!!」

主砲を撃つ事に芽衣は、やや興奮する。

志摩「弾で・・・弾を撃つ!!」

志摩は、晴風の主砲で武蔵の砲弾を迎撃するつもりの様だ。

確かに晴風の主砲は、対空用の長10cm高角砲なので、航空機を迎撃する為の砲なもので武蔵の砲弾も迎撃が可能な筈だ。

但し、それには、正確な照準と射撃指示が必要不可欠だ。

果たして可能なのか、全ては、志摩と射撃指揮所の光、順子、美千留の4人に掛かっている。

晴風、射撃指揮所

光「120度、高角60度に備え!!」

美千留「砲塔回す・・・はい回した!!120度」

志摩の指示の元、光が目標の距離を測り、美千留が砲塔を回す。

順子「バキュンと行くよ・・・!!」

そして、順子が引き金を引き、目標に向かって、連続的に発射する。

晴風、艦橋

芽衣「流石、長10cm砲!・・・発射速度が速い!!・・・ガンガン撃てる・・・!!」

芽衣が長10cm高角砲の砲撃速度に興奮する。

晴風、電探室

慧「砲弾まっすぐ、此方に来ます!!」

芽衣が興奮する中、更に武蔵の砲弾が晴風に迫る。

晴風、艦橋

ましろ「面舵一杯、内側に入って!!」

鈴「はっ」

砲弾を回避する為、武蔵の内側に入ろうとするが

秀子「ダメです!!間に合いません!!」

間に合わず、武蔵の砲弾が晴風に迫る。

最早、駄目なのかと思った途端

志摩「110度発射!!」

晴風の主砲が武蔵の砲弾に至近で命中した。

幸子「向こうの見越し射撃に、此方の見越し射撃が当たりました。」

武蔵の見越し射撃に晴風の見越し射撃が命中した事に驚く。

雅に危機一髪とは、雅にこの事、志摩と砲術科の3人のお陰で艦は、救われた。

芽衣「やった・・・!!やった・・・!!」

志摩「うい!!」

芽衣「イエーイ!!」

志摩「うい!!」

命中に芽衣と志摩は、大喜びし、ハイタッチをする。

晴風が危機を脱している頃、武蔵に向かった薫と明乃は、

『んっ』

晴風の無事を確認しながら、武蔵に接近していた。

明乃「あっ!？」

そんな時、明乃が艦橋から手を振る人影を視認する。

薫「如何したの？」

薫は、明乃の反応に気づき何かと問うと

明乃「もかちやーん!!!」

明乃は、大声でもえかの名前を叫ぶ。

さっきの人影は、もえかだった様で薫も思わずはやての名前を叫ぼうとした時だった。

薫「あっ!？」

目の前に小さな岩礁が有るのに気づくのが遅すぎて、岩礁と衝突してしまう。

『.....』

2人は、海へと投げ出される。

薫「ばはあ!？」

海へと投げ出された薫は、急いで海面に顔を出す。

薫が顔を出すすと目の前には、武蔵がその巨体を見せていた。

薫「・・・はやてちゃん・・・!?!」

薫は、武蔵を見て、はやての事を思っていると一緒に居た明乃の姿が無い事に気づく

薫「岬ちゃん!?!・・・岬ちゃん!?!」

急いで辺りを探すが、見つからず

薫「雅か!?!」

薫は、もしやと思い、海に潜る。

すると

薫「あつ!?!」

海中に沈んでいく明乃を見つける。

薫は、急いで明乃を助けようと連れて、海面に浮上する。

薫「ばはあ!?!・・・岬ちゃん!!・・・岬ちゃん!!」

海面に浮上した薫は、急いで明乃の意識を取り戻そうと声を掛ける。

すると

明乃「ん・・・ん・・・はあ・・・」

明乃は、意識を取り戻す。

薫「岬ちゃん!?・・・良かった・・・!!」

明乃が意識を取り戻した事に薫は、安心する。

明乃「はあ、はあ、あっ!?!」

だが、安心も束の間、意識を取り戻した明乃は、直ぐに武蔵の方向を見て

明乃「もかちやーん!!!」

思わず叫ぶ。

しかし、武蔵は、気づかず行ってしまふのだった。

こうして、武蔵は、反乱艦として、その姿を消す。

果たして、武蔵に何が起きているのか

そして

武蔵に立て籠もっているもえか達の運命は

第20章 機雷でピンチ! 前編

4月15日

18:00

横須賀女子海洋学校、会議室

真雪「東舞校艦16隻が航行不能!」

武蔵と東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊の戦闘の報は、直ちに横須賀女子海洋学校の真雪の元に齎された。

真雪「雅か、武蔵が本当に反乱したの?」

報告を聞いた真雪は、驚愕する。

武蔵が反乱した事に信じられなかったからだ。

しかも、それを止め様と交戦した東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊が全て航行不能になつた事に驚いていた。

老松「この報告からは、判りかねます。」

報告した老松も真雪と同じ意見だった。

真雪「武蔵の損害は、軽微、晴風も攻撃から離脱するのが精一杯で、目標をロスト…」

教員艦は最新鋭だった筈!・・・なのに如何して・・・?」

真雪は、何故、最新鋭の艦を持つ東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊が武蔵に敗れたのか疑問視する。

いくら武蔵の生徒が優秀でも高性能の戦闘艦なら、勝てる筈なのに如何して敗北したのか

すると老松が

老松「電子機器と誘導弾が全て機能不全を起こした模様です。」

敗北した原因を告げる。

真雪「乗組員は?」

真雪は、教員艦隊の乗員の安否を聞く。

老松「3重の安全装置は、伊達ではありませんね・・・死者は0、軽傷者数名です。」

3重もの安全装置を装備してたお陰で死者はなく、軽度の負傷者が出たのみだった。

真雪「はあ・・・」

それを聞いた真雪は、はあと安心し

真雪「武蔵の燃料と弾薬は?」

武蔵の燃料と弾薬を確認する。

老松「出航時に満載状態なので、推定で、燃料、弾薬共に8割以上残っている筈です。」

老松の確認で何と武蔵の燃料と弾薬は、満載状態で、しかもまだ8割以上残っている状態だ。

真雪「何故そんなに搭載を？」

何故、満載状態にしたのか理由を問う。

老松「大和型の砲弾を洋上補給するのは困難ですの……」

如何やら武蔵の洋上補給が難しいと考え、あえて満載状態にした。

結果、それが仇になった。

そんな時

トン、トン

教頭「校長!？」

突然、教頭が会議室に駆け込んできて

教頭「比叡、鳥海との連絡が途絶しました!!」

新たに連絡が途絶した学生艦が出たと報告した。

老松「あっ!？」

真雪「何ですって!？」

教頭からの報告を聞いて、2人は、驚愕する。

真雪「……武蔵以外に所在不明の艦艇は？」

真雪は、急ぎスクリーンで行方不明の学生艦を確認する。

教頭「比叡、鳥海、摩耶、五十鈴、名取、天津風、磯風、時津風ならびにドイツより演習参加予定だったアドミラル・グラーフ・シュペー、ビスマルクです。」

行方不明の学生艦は、先の報告を入れて8隻、それにドイツからの留学生艦2隻を入れて、全部で10隻に及ぶ。

真雪「そんなに……今、動かせる艦は？」

行方不明の学生艦が10隻も居る事に真雪は、驚きながら、現在使用可能な学生艦を問う。

老松「補給活動中の間宮、明石、風早、護衛の秋風、浜風、舞風、偵察に出ている長良、晴風、浦風、萩風、谷風のみです。」

教頭「山城、加賀、赤城、伊吹、生駒はドックに入っていて、どんなに急いでも半年以上は動きません……航洋艦は多少前倒し可能ですがそれでもせいぜい三か月か……」

現在、使用可能な学生艦は、小型巡洋直接教育艦1隻と航洋直接教育艦8隻、支援教育艦2隻のみで、他の艦艇は、全てドックに入っていて、半年ぐらいは、動かせない状態だった。

真雪「武蔵との遭遇地点に向かわせられるのは？」

真雪は、使用可能な学生艦の中で現在、武蔵の居る海域に向かえる学生艦を確認する。老松「晴風以外は、他の艦艇の捜索に出ているので少なくともあと数日は……」

使用可能な学生艦の殆んどが行方不明の学生艦の捜索に出払っている状態なので現在、武蔵の居る海域に向かえる学生艦は、武蔵を追跡している晴風1隻のみだった。老松からの報告を聞いた真雪は、深刻そうにスクリーンに映る晴風、武蔵を見る。

白鳳、艦橋

一方、武蔵と東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊が戦闘している頃、晴風と別れた次郎達は、無事に横須賀に戻ってきた。

次郎「帰ってきたな、横須賀に……」

三郎「地中海から9日間、色々ありましたね!」

次郎「何言ってるんだ副長!? ……俺達は、もう反逆者じゃないんだ!! ……これで晴風が帰還すれば、殆んどが好じゃないか……」

三郎「そうですね。」

白鳳の操舵主「着水します!!」

横須賀に付いた白鳳は、翼を折り畳んで海上に着水する。

三郎「それにしても晴風は、如何したんでしょ?」

三郎は、白鳳と共に帰還する筈だった晴風の帰還が遅い事に気づく。

次郎「こつちが早く発進したからな、きつとまだ遅れてるんだろう。」

次郎は、こつちが早く発進したので、晴風は、まだ遅れているんだろうと思っていた。

三郎「そうかもしませんね。」

三郎もそうだと思う。

しかし、2人は、知らなかった。

晴風は、真雪の指示で武蔵の元に向かった事を

次郎「まあ、それは兎も角、皆に会いに行こうぜ!!・・・なんせ久しぶりだからな!」
帰還した次郎達は、真つ先に龍之介達が居る横須賀基地へと向かう。

横須賀基地

次郎が横須賀基地に付いた途端、横須賀基地では、慌ただしく隊員達が作業をしていた。
た。

次郎「何だか、基地内が慌ててるな?」

三郎「そうですね・・・しかも、慌ただしく動いているのは、うちの隊員じゃないですか!?!」

次郎「そういや、そうだな!?!」

三郎の言う通り、慌ただしく動いているのは、次郎達と同じGF隊員達だった。

更にもう一つ

次郎「あい、あれは、大鳳じゃないのか!?!? . . . ドック入りしてたんじゃ?」

三郎「そうですね!?!? . . . 何故此処に?」

次郎達の目の前にドックに入渠中の空母大鳳が停泊していて、しかも基地に置かれていた艦載機を積む作業が行われていた。

一体、何をしているのか?

とは言え、次郎達は、基地施設に入る。

中に入ると其処には、なのはとフェイトがお互いに話している最中だった。

次郎「よう!! . . . なのは、フェイト!!」

そんな2人に次郎は、声を掛ける。

なのは「次郎君!?!」

次郎「帰って来たぜ!!」

『 』

次郎は、声を掛けるが、2人は、何故か深刻そうな顔をしていた。

次郎「如何したんだ2人とも!?!? . . . そんな深刻な顔をして」

何故、深刻そうにしているのか理由を聞く。

なのは「 . . . 次郎君 . . . 落ち着いて聞いてね . . . 実は」

なのは、ある事を次郎に告げる。

次郎「何だよ？」

なのは「武蔵が・・・反乱したんだって!!」

次郎「む、武蔵が!？」

三郎「うっ、嘘でしょ!？」

武蔵の反乱を聞いて、次郎と三郎は、驚愕する。

フエイト「さつき報告があつて、如何やら本当らしいの：もしかして、はやてが：」
次郎「そんな馬鹿な事が有るか！・・・はやてがそんな事をする訳が無い！・・・それは、お前ら2人も分かるだろう!!」

なのは「私達だつて、はやてちゃんがそんな事をする訳が無いって信じてる・・・でも・・・」

フエイト「こんな報告を聞いたら、皆疑つてしまうから・・・」

次郎「・・・」

確かにあの優しいはやてが反乱をする訳が無い事は、隊員達は、信じていたが、武蔵の報告を受けた途端、隊員達は、疑うしかなかった。

次郎「兎に角、この事は、薫には、黙つておけよ！・・・この報告を聞いたら、あいつは、何をしでかすか分からないから・・・」

次郎は、武蔵の反乱の報告を薫達、晴風には、知らせない様に2人をお願いした。

だが、

『……………』

次郎「雅か!？」

なのは「ん、さっきの報告は、晴風からの報告なの!」

次郎「何だって!?! ……如何いう事だ!?! ……晴風は、横須賀に帰還している筈じゃ
?」

次郎は、晴風が武蔵のところに向かっていると聞いて、驚く。

フェイト「それが、途中で命令が変更されたらしいの……」

次郎「んっ!」

なのは「次郎君!」

次郎「准将の元に行く。」

フェイト「准将は、今、宗谷監督官の元に……行っちゃった。」

次郎は、1人で飛び出して行ってしまった。

なのは「私達も行こう。」

フェイト「ん、そうだね。」

なのはとフェイトも次郎の後を追う。

三郎「はあ……私は、如何すれば……」

こうして、3人は、横須賀のブルーマーメイド庁舎へと向かう。
此処で時系列は、武蔵を追跡中の晴風に戻る。

アスンシオン島沖

明乃「……もかちゃん……」

薫「んっ」

2人は、スキッパーから去っていく武蔵を見る。

すると、武蔵の第三主砲の1門が追跡してくる晴風を砲撃。

『はあ!?!』

武蔵の砲撃を晴風は、回避する。

しかし、その為、追跡を断念する。

薫と明乃も急いで晴風に戻る。

戻る中

明乃「……私、やっぱり艦長失格なのかな……」

明乃は、ましろの言葉を思い出し、自分は、艦長失格なのかなと思う。

薫（……それならば、私も教員として、失格だ!!）

薫も明乃の言葉を聞いて、自分も教員として、失格だと思った。

とは言え、2人は、晴風へと帰還する。

晴風、前部甲板

媛萌「用収よし!」

媛萌がスキツパーの収容を終える。

明乃「くちゅん!」

薫「!?!」

帰還した途端、明乃は、突然、クシヤミをする。

鈴「大丈夫?」

クシヤミをする明乃に鈴がタオルを手渡す。

明乃「ありがとう。」

鈴「教官も!」

薫にも鈴は、タオルを手渡す。

薫「ありがとう知床さん!」

2人は、タオルを受け取り頭から拭き始める。

鈴「濡れたままだと風邪ひくよ!お風呂に入ったら?」

鈴が明乃にお風呂に入るよう勧める。

薫「そうね!・・・少しでも体を温めたら・・・」

明乃「うん・・・」

薫もそれに同意し、3人は、大浴場に向かう。

大浴場に向かう時、明乃は、艦橋を見た。

晴風、艦橋

ましろ「……」

ましろは、こつちを見ている明乃をみてクツとなった。

芽衣「あの教官と艦長の事だし、どうせ無事だと思っていたけど……」

志摩「うい！」

芽衣と志摩は、薫と明乃の性格から、大丈夫だと分かっていた様だ。

そんな時

聡子「武蔵く凄かったぞな……!!」

鈴と交代していた聡子は、先の武蔵の戦闘を見て、興奮していた。

ましろ「勝田さん、現在位置は？」

ましろは、興奮する聡子に晴風の位置を問う。

だが

聡子「分からんぞな？」

ましろ「えっ!？」

芽衣「ぞな!？」

志摩「ぞくな?」

聡子の言葉に3人は、注目する。

聡子「逃げるので精一杯で位置を把握する余裕もかけられませんでしたぞ・・・」
如何やら、武蔵からの砲撃を回避するのに頭が一杯だったので、位置の把握を忘れていた様だ。

ましろ「んん・・・被害報告と周辺状況確認!!」

ましろは、呆れながら伝声管で被害報告と周辺状況を確認する。
すると

マチコ『前方何も見えません。』

秀子「左弦何も見えません。」

まゆみ「右弦もです。」

慧『電探真っ白です。』

鶯『通信も駄目でーす。』

楓『水測も聞こえません。』

ましろ「うう・・・一斉に言うな!!」

一斉に報告が来たに對して、一斉に言うなどましろは、怒る。

幸子「何か電子機器が全滅ほいです。」

先程の報告で電子機器が機能不全を起こしたと幸子が察する。

ましろ「壊れたのか？」

ましろは、故障かと問うが

幸子「原因不明のノイズばかりで……」

如何やら故障ではなく、何か電子機器に障害が発生している様だ。

その直後、足元に、この前、五十六が捕まえ、今は、保健室で美波が預かっている筈のマウスが走り去る姿が有った。

保健室から逃げたのか、それともまだ仲間が居たのか、いづれにせよ足元を走り去るマウスにましろと幸子は、気づかなかつた。

その時

マチコ『星が見えまーす。』

見張り台のマチコから星が見えると報告が上がる。

ましろ「天測急いで!!」

ましろは、直ぐに秀子とまゆみに天測を指示する。

『了々解』

2人は天測儀を持って、天測する。

しばらくして

秀子「現在位置でした!!」

まゆみ「北緯35度15分29秒、東経136度4分35秒」

天測された数値を幸子は、タブレットに打ち込んでいく。

やがて、

幸子「現在地は?・・・えっーと!」

2人からの天測で位置は分かっていたが、突然、幸子は、報告しにくくなる。

ましろ「何所だ?」

位置は、何所だとましろは、迫るが

幸子「あの・・・その・・・」

ましろの迫りに更に報告しにくくなり

ましろ「報告は素早く正確に!!」

ましろは、早く言えと迫る。

すると

幸子「琵琶湖中心です!!」

何と琵琶湖中心と言う、まったく見当違いな位置だった。

秀子「そっかー琵琶湖か!」

まゆみ「そうだよね!・・・今入れるもんね!」

聡子「道理で波が静かだと思つたぞな……」

それを聞いた秀子とまゆみは、受けたと思つた途端

『つて!?!……ふんなわけないだろ!!』

4人に怒られ

『スイマセーンもう一回調べまーす!!』

もう一度、天測をやり直す。

こんな時に天測を間違えるとは、情けない。

晴風、更衣室

その頃、薫と明乃は、鈴に連れられ、晴風の大浴場へと向かおうと更衣室に入る。

更衣室では、機関員四人衆の麗緒、留奈、桜良が居た。

麗緒「うわあ、汗でビシヨリ!」

桜良「さ、さとお風呂は入って、サッパリしたいね……」

3人は、機関室で受けた汗を流そうと服と下着を脱ぐ。

そんな時、薫と明乃が更衣室に入ってきた。

留奈「あつ!?!」

留奈が入ってきた薫と明乃に気づく。

留奈「あれ、教官に艦長?……今は、機関科の時間だよ?」

今は、航海科の時間ではないのに何で此処に居るのか留奈が問う。

明乃「ああ・・・」

明乃は、理由を言おうとした途端、隣から

洋美「トツプが順番を守らないのは、如何かと思いますが・・・」
服を脱いでいた洋美に注意される。

明乃「んっ、ん」

洋美に怒られ、言いづらくなる。

鈴「う・・・う・・・」

明乃が洋美に責められるのを鈴は、ドアから怯えて見ていた。

ミーナ「ん?」

隣からミーナもやって来て、様子を見る。

2人が様子を見ていると

薫「止めつて黒木さん!!」

隣に居た薫が横棒を指す。

洋美「教官!?!」

薫「岬さんは、先、海に落ちたから、このままだと風邪ひくと思ったから、教員として、私が命じたの・・・」

薫は、明乃が洋美に責められるのを止め、洋美に事情を話す。

その時

麻命「なんでえい！なんでえい！・・何揉めてえね!?」

先に入っていた機関長の麻命が気になって、3人の間に割って入ってきた。

麻命「ん、艦長・・あらら、びしょ濡れじゃねえか!?・・非常時に、順番も経た暮れもあるか、さっさと入んな!!」

割って入った麻命のお陰でこの場は、凌げた。

鈴「ふう・・・」

この場を凌いだ事に鈴は、ふうと安心する。

すると

麻命「ん!?・・あんたらもそんなところで見てないで、さっさと入んな!!」

『え!?!』

後ろに居た2人に気づき、麻命は、一緒に入ろうと誘い2人は、入る。

薫「ありがとね機関長!・・・では、私はこれで・・・」

薫は、麻命に感謝し、その場を去ろうとしたが

麻命「教官もどうでい?」

麻命は、薫にも一緒に入ろうと誘う。

薫「え、いや私は・・・」

麻侖「そんなこと言わんでえ、教官と色々と話をしたから裸になって、話そうでい
！」

薫「・・・分かったわ機関長!・・・じゃ、お言葉に甘えて・・・」

薫も麻論の誘いに甘んじて受け、風呂に入る。

国土交通省、国土保全委員会

その頃、国土保全委員会では、今回の武蔵反乱の対策を練る為、国交相の深町と一誠以下の国土保全委員会の幹部達が集まっていた。

そして、田沼総理のお目付け役として、邦夫が参加していた。

委員会幹部A「東舞校の教員艦が武蔵の攻撃で航行不能?」

委員会幹部B「やはり学生の反乱なのか?」

委員会の幹部達は、今回の武蔵と東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊の戦闘報告書や戦闘を撮影した画像、また行方不明の学生艦の所在が映ってる図を見ながら、学生の反乱なのか協議していた。

すると邦夫が

邦夫「今のところ断定は、できませんが・・・今回武蔵には、前回の晴風と同様、Gフォースの隊員が教員として、乗艦しているそうです。」

幹部達にはやてが教員として、武蔵に乗艦している事を告げる。

委員会幹部C「それは、本当なのかね？」

邦夫「私の調査の結果、間違いありません。」

『ん……』

邦夫の調査報告を聞いて、委員会の幹部達は、動揺する。

更に邦夫は

邦夫「もしかしたら、今回の武蔵の反乱は、その教員が独自に起こしたのではないかと……」

と今回の武蔵反乱をはやてが独自に行ったのではないかと今度は、はやてを容疑者に仕立てようとする。

邦夫は、まだ龍之介への復讐を諦めてはいなかった。

その為、今回武蔵が反乱した事で、邦夫は、再び龍之介に復讐しようとしたが、龍之介達を再び拘束すれば、またもや真霜に脅迫されるだろう。

其処で龍之介の部下であるはやてを容疑者に仕立て上げて、龍之介達を今度こそ陥れようとした。

だが

一誠「待て野田監督官！……まだ確証も得ていないのに、そう断定するのは、早い

のではないのか?」

邦夫の勝手な推測に一誠が異議を唱えた。

邦夫「しかし、今回武蔵は、保護しに来た東舞校の教員艦を無残にも攻撃しているんですよ!!・・・これを反乱とは、言えないと言いつけるんですか?」

しかし、邦夫は、屈せずはやてを容疑者だと断定させ様とする。

深町「・・・深町監督官!、君は、その教員が反乱を起こしていると言うが・・・前回の晴風の件もそう言い切れるのかね?」

それに対して、深町は、前回の晴風反乱の件を出し、これもそう言い切れるのかと邦夫に問いかける。

邦夫「あれは、其処に居る野田一誠元国交相代行が命じた事で、私が出した命じた事ではありません!!」

邦夫は、前回の晴風反乱の件で撃沈命令を出したのは、父親の一誠の命令であって、自分には、関係ないと言う。

一誠「ん・・・」

それに対して、一誠は、何も反論できなかった。

本当は、あの命令は、息子の邦夫と田沼が一誠に命じて、実行した事なんだが、一誠は、何も反論できない。

それは、当然だ。

いくら邦夫と田沼から脅されて、命じられたとは言え、自分が命じた事に代わりはない。い。

だから反論できない。

邦夫「あの命令を出して、よく此処に顔を出せた者ですよ・・・」

それなのに息子の邦夫は、言いたい放題言う。

自分の父親なのに情けなくて腹が立つ。

深町「もうそのくらいにしておけ!!・・・取り合えず、今は、武蔵による対策が先だ!!」

これ以上の親子喧嘩を見るに見かねた深町は、そのくらいにしておけと邦夫を止め、武蔵による対策へと話を変える。

委員会幹部C「・・・もし反乱だとして、武蔵が都市部に向かって来たら食い止められるのか?」

もし武蔵が反乱したと推測して、現在のブルーマーメイドとホワイトドルフィンで武蔵を食い止められるのか問う。

委員会幹部B「晴風の報告によると誘導弾は効かなかった・・・大量の魚雷を浴びせるか砲撃でなんとかならんのか?」

委員会幹部A「武蔵には成績優秀な生徒が集められている・・・無誘導の魚雷が射程外からそう簡単に当たるか?」

委員会幹部D「難しいな・・・」

晴風の報告を元、武蔵に対して、主力の高性能の誘導弾が使えない。後は、通常魚雷と砲撃による通常攻撃しかない。

だが、武蔵には、優秀な横須賀女子海洋学校の生徒が乗艦している。従がって、射程外からの攻撃は、難しかった。

残る手は

委員会幹部D「だとしたら：同等の戦力をぶつけるしかない。」

委員会幹部C「18インチには18インチか?」

武蔵と同じ火力を持つ艦をぶつけるしかなかったが

委員会幹部B「だが呉の大和も舞鶴の信濃もドッグ入りしている。」

委員会幹部D「佐世保の紀伊は?」

委員会幹部C「駄目だ・・・遠洋航海中で地球の反対側だ!!」

委員会幹部D「16インチ砲や14インチ砲では太刀打ちできん!」

武蔵以外、大和、信濃は、ドックに入渠中、紀伊は、遠洋航海で地球の反対側にいる為、間に合わない。

かと言って、他の艦艇では、武蔵に太刀打ちできない。

武蔵に対して、如何すれば良いのか、委員会の幹部達は悩む。

そんな時

深町「一つだけ手がある。」

それに対して、深町がある提案を持ちかける。

『ん?』

深町「一つだけ武蔵に対抗できる手がある。」

委員会幹部C「それは、何ですか深町国交相?」

深町の提案に委員会の幹部達は、注目する。

果たして、深町の提案とは

深町「武蔵に対して・・・航空攻撃で対処するのだ!!」

深町の提案、それは、武蔵の最大の脅威、航空攻撃、つまり航空機による武蔵への攻

撃だった。

『!?!』

それを聞いた途端、一誠や邦夫と委員会の幹部達は、驚愕する。

それもその筈、深町が言う航空攻撃とは、武蔵の最大の脅威である航空機によって、攻撃する事だが、今のブルーマーメイド、ホワイトドルフィンには、航空兵力はない。

有るのは、龍之介が率いるGフォース西部方面艦隊のみだったからだ。

邦夫「意義あり!」

驚愕する中、深町の提案に邦夫が異議ありと反論する。

邦夫「深町国交相は、航空攻撃で対処するというのが、それは、山本監督官率いるGフォースに助けを求めると言う事では・・・」

邦夫の言う通り、深町が言ってる事は、龍之介達の力を借りて、武蔵に太刀打ちしようと言うもの。

つまり龍之介達を拘束するよう命じた国土保全委員会が、今度は、龍之介達に助けを請うものだった。

委員会幹部D「私も反対だ!!」

委員会幹部B「私もだ!!」

委員会幹部A「第一、そんな事を許せば彼らに反乱を口実を与えてしまわないか?」

委員会幹部C「その時は、如何責任を取るんですか深町国交相!」

邦夫の意義に委員会の幹部達も同意し反対する。

委員会の幹部達は、この機に乗じて、龍之介達がまた、反乱を企てるかも知れないと思ひ、あえて邦夫の意義に同意し反対したのだ。

しかし、それを聞いた途端、深町は

深町「この大馬鹿者共!!」

ついに切れた。

委員会幹部C「こ、国交相……」

切れた深町に委員会の幹部達が驚愕する。

深町「こんな状況で君達は、まだ彼らを疑っているのか!？」

委員会幹部A「……」

深町「他に武蔵に対抗する案が無い以上……此処は、彼らに頼むべきだ!!」

委員会幹部B「……」

委員会幹部D「……」

深町の言う通り、他に武蔵に対抗する案が全く無い以上、龍之介達に頼むしかなかった。

それを聞いた幹部の1人が

委員会幹部B「だが……我々は、彼らを一度、叛逆罪で拘束し、起訴しました!!……」

そんな我々に彼らは、助けてくれるのだろうか?」

確かに龍之介達を叛逆罪で拘束し起訴したのは、国土保全委員会だ。

そんな龍之介達が今度は、助けてくれるのか、委員会の幹部達は、動揺する。

深町「確かに冤罪の罪で彼らを拘束して、起訴した事は、我々の誤りだった……だが、山本監督官もその事は、もう分かっている……だから我々が頭を下げて、お願いすれば、向こうも分かってくれるだろう……これは……我々に突き付けられた最大の危機なのだ!!」

深町は、一誠がした事をあえて、自分達のせいにして、龍之介の前で頭を下げてお願いするよう命じた。

一誠「私も深町国交相の提案に賛成だ!!……今戦力が無い以上……彼らに頼るしかない……」

深町の提案に一誠も賛成し、それ聞いた委員会の幹部達は、最初、艦隊のいち指揮官に頭を下げるのを嫌がったが、国土保全委員会の最大の危機や一誠の賛成もあり、結局、承諾した。

しかし

邦夫（クソ!!……何で俺があいつに頭を下げなきゃいけないんだ!!……こうなったのも全て……あいつのせいだ!!……あいつさえ居なければ!!）

邦夫は、深町に不服だった。

何れ何か企んでくるだろう。

まあそれは、兎も角、国土保全委員会の幹部達は、深町の提案に賛成した。

これで、後は、龍之介が如何判断するかで状況は、代わる。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

一方、その龍之介は、真霜と共に武蔵や他の行方不明の学生艦の対応に追われていた。

真霜「晴風の報告で東舞校艦16隻が航行不能になったそうよ！」

龍之介「武蔵の攻撃でか？」

真霜「ええ」

龍之介「信じられん！・・・現代の最新鋭艦が旧時代の戦闘艦に敗北するとは・・・一体、如何なってるんだ!？」

龍之介は、現代の最新鋭艦の教員艦が武蔵の様な旧時代の戦闘艦に敗北するなんて、信じられなかった。

真霜「報告によると原因は、電子機器の機能不全だそうよ！」

龍之介「電子機器の機能不全!?!・・・そんな事が・・・矢野主任!・・・この事態をどう思いますか？」

敗北の原因を聞いた龍之介は、直ぐに慶介に意見を聞く。

慶介「そうですね・・・恐らく機能不全の原因は、EMPによるものかと・・・」

慶介は、電子機器の機能不全の原因をEMPだと断定する。

真霜「EMP？」

龍之介「電磁衝撃波だ!・・・核兵器による爆発で起きる現象の事だ!!・・・それが起きれば電子機器の殆んどが麻痺してしまう。」

EMP

通称 電磁パルスとも呼ばれ、核爆発や太陽嵐で起きる現象。

かつて第2次ゴジラ戦でもソ連の戦術核弾頭が成層圏内で誤爆した時もEMPが生じ、国防軍のスーパーXやその他の兵器を使用不能にした経緯もある。

真霜「成程!・・・確かに今回の事態も似ているわ・・・でも、近くで核爆発は、起きていないわ。」

真霜の言う通り、武蔵が居た海域で核爆発は、起こっていない。

すると慶介が

慶介「核爆発以外にも太陽嵐や磁気嵐でもこの現象は、起きます・・・天文台に問い合わせています。」

と言つて、太陽嵐が起きていないか天文台に問い合わせてその場を離れる。

龍之介「EMPは兎も角として、そもそも何故こんな事になったんだ!?!」

そもそも、何故こんな事になったのか

すると、真霜が

真霜「それは、私にも分からないわ・・・でも、お母さんが言つてたわ!!・・・何

か異常事態が発生しているって……」

真霜は、以前、真雪が言った何か異常事態が発生しているとの事を龍之介に言う。

龍之介「真雪さんが!?!? ……まるで予言者だな! ……で、その異常事態って?」

真霜「それは、分からないわ……でも……何かが発生しているのは、確かよ!」

龍之介「……とは言え、今動かせる艦艇で武蔵を追跡できるか真霜?」

何かが発生している事は、置いといて、今、武蔵を追える艦艇が有るのか真霜に問う。

真霜「ん……残念だけど……真冬部隊や他の艦艇は、武蔵以外の不明艦を搜索

中で……今、武蔵を追えるのは……武蔵に一番近い晴風だけよ!」

横須賀女子海洋学校と同様に真冬の部隊やその他の艦艇も武蔵以外の不明艦を搜索中。

真霜は、今、武蔵を追えるのは、薫達の晴風のみだと告げる。

龍之介「ん……また、薫や生徒達に無理をお願いしなくちゃならないのか……」

真霜から晴風のみだと聞いて、龍之介は、落胆する。

その時

「どひゃー!」

廊下から何やら騒がしい声が聞こえ

龍之介「ん!?!」

それに気づいた龍之介が後ろを向くとドアが急に開き

次郎「准将!!」

龍之介「次郎!？」

中に入ってきたのは、先程、横須賀に帰投した次郎だった。

龍之介「帰ってたのか？」

次郎「先着いた!!・・・それより、何で晴風を武蔵が居る海域に向かわせたんだ!!」

次郎は、単刀直入に晴風を武蔵が居る海域に向かわせた事を龍之介に問い質す。

龍之介「その事か・・・」

なのは「次郎君!」

直ぐ後からなのはとフェイトが来て、龍之介に絡む次郎を止め様とするが、龍之介が手で手を出すと2人に伝え、2人は、その場に立ち尽くす。

次郎「今、薫は、はやての事で頭が一杯なんだ!!・・・そんな状態で武蔵の元に行けば、あいつは、何をしでかすか分からないんだ!!」

次郎は、帰還する前、薫がはやての事で気持ちが悪く不安定になっていた事を知っていた。だから、武蔵が居る海域に晴風を向かわせた事に怒っていたのだ。

龍之介「次郎!・・・状況をj知る為には、如何してもやらなきゃいけなかった・・・それがGフォース隊員の務めだ!!」

それに対して、龍之介はGF隊員の務めだと言って、次郎に納得させる。

次郎「あ、あんたは!？」

それを聞いた次郎は、更に切れ龍之介を責めようとする。

後ろでは、なのはとフェイトが不安で立ち尽くしていた。

真霜「止めなさい小沢二等監督官!!・・・あの場合、仕方が無かったの!!・・・現状で武蔵に近かったのがたまたま晴風だったから、状況を知る為には、やも得なかったのよ!!」

真霜は、次郎を何とか止めようと説得する。

次郎「・・・だからと言って、何で俺に言わなかったんだ!!・・・聞いたら直ぐにでも武蔵に向かったのに・・・」

次郎は、何故、武蔵の発見の報告を知らせなかったのか、理由を問う。

真霜「それは、此方も予測できなかったの・・・雅か戦闘になつているとは、思わなかったのよ!!」

知らせなかったのは、雅か、武蔵と東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊が戦闘しているとわしわしなかったもので、単に通信が途絶したただけだと真霜、真雪は、そう思い、状況を把握しようとして横須賀に帰還する筈だった晴風を向かわせたのだ。

真霜「だから、晴風に命じた校長と私にも責任があるわ!!・・・決して龍之介だけの

せいじゃないわ!!」

次郎に理由を説明し、改めて自分と真雪が命じた事を次郎に対し頭を下げ、謝罪する。

次郎「んん・・・責めたりして、すいませんでした。」

頭を下げる真霜に対し、次郎は、龍之介を責めるのを止め、責めた事を謝罪する

龍之介「いや、良いんだ!!・・・俺もお前がそんなに薫の事を按じていたとは・・・すまない。」

龍之介は、次郎の無礼を許し、自分も次郎が薫の事をそんなにも心配していた事に謝罪する。

そして、改めて、今後の事について協議する。

真霜「兎も角!・・・晴風には、武蔵の追跡の任に当たらせるわ!!・・・宗谷校長にもそう伝えるわね?」

龍之介「ああ、それと、もし危険と見なしたら、直ぐ逃げるように伝えてくれ。」

真霜「分かったわ!」

真霜は、真雪に晴風を追跡の任に当たらせるよう連絡する。

龍之介「さくて、俺達も・・・」

次郎「何所に行くんですか?」

龍之介「決まっている！・・・行動の準備だ!!」

後の事を真霜に任せ、龍之介達は、一先ず横須賀基地に戻る。

晴風、更衣室

場面は、また晴風に戻る。

薫達は、麻侖達と一緒に風呂に入るべく更衣室で服を脱いでいた。

『…………』

服を脱いでいると何故か、麗緒、留奈、桜良の3人が同じく服を脱いでいるミーナに釘付けになる。

特に注目したのが胸・・・

ミーナの胸は、晴風の生徒の中で一番大きかった桜良よりも大きかった。

3人は、それにシヨックを受けた。

だが、最もシヨックを受けたのが

薫（ん!?!）

薫の胸だった。

特にその大きさは、桜良やミーナの胸を凌ぐ程、大きかった。

前にも言った通り薫は、女性としては、恵まれている。

誰にも負けないふくよかな巨乳と臀部、そして、美しい脚、雅に、この晴風の中でトツ

プであろう。

『…………』

薫の巨乳を見て、3人は、更にシヨックを受ける。

薫（…………何で皆、そんなにガツクリするの？…………）

薫は、3人が何故、シヨックを受けているのか分らなかつた。

本当は、自分の胸のせいなのに

晴風、大浴場

バシャー!!

服を脱いだ8人は、お風呂に入る。

ミーナ「…………今回主砲が5インチから、3，9インチになったんじやろう。」

入浴中にミーナは、晴風の主砲の事を話す。

すると隣で体を洗っている桜良から

桜良「5インチには、5インチの良さがあつたのに…………」

と、10cmより12，7cmの方が良かったのにとガツクリする。

それを聞いた薫は

薫「でも3，9インチにも良いところがあるわよ!」

10cmの良さをアピールする。

桜良「どんなところですか？」

薫「例えば……航空機に対する攻撃に対処できる事かな……」

桜良「航空機つて、教官そんな空想みたいな物は、ありませんよ！」

薫「あっ!?!……」

桜良の言葉に薫は、つい、機密を漏らしてしまい黙る。

留奈「教官つて、時々、私達の知らない事をしてるね！」

麗緒「雅か、神様だったりして？」

それに釣られて、留奈と麗緒は、薫を神様だと思ってしまうが

薫「……私は、神様じゃないよ！」

薫は、自分は、神様じゃないと言う。

そんな時ミーナが

ミーナ「しっかし、これは良いな……うちの艦にも欲しいぞ!!」

晴風の大浴場の良さを褒め、自分の艦にも欲しいと言う。

麻命「6万馬力でたいだ晴風自慢の風呂でえい!!」

ミーナに褒められ、麻命は自慢げに言う。

だが

留奈「錘が大変だけどね……」

桜良「しよっちゅう駄々こねるし・・・」

麗緒「そうそう・・・結局、出力落としてるから、高圧艦とか意味無くない・・・」

洋美「艦橋からは、直ぐ全速って、言ってくるしね・・・」

他の3人からは、逆に不満を言われ、更に洋美から艦橋の悪愚痴を言われる。

明乃「えへ・・・」

鈴「・・・」

薫「・・・」

それに対して、明乃は、笑顔で誤魔化し、薫と鈴は、何も言わず啞然とする。

麻命「で、艦長、上では、如何なってるんでえい？」

話を和もうと麻命が現在の状況を明乃に問う。

明乃「上？」

麻命「うちら釜たきは、外の事は、全然分かんね・・・こんな時じゃねつと話しが聞けねから・・・」

明乃「あ・・・えっと、東舞校の教員艦が武蔵と交戦してって・・・」

明乃は、麻命達に武蔵と東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊が戦闘していた事を言う。

留奈「武蔵って、うちの学校の!？」

桜良「東舞校って、此間の潜水艦の!？」

麗緒「教員艦だから、最新鋭のでしょう!？」

留奈「うちらも先生に撃たれたけど・・・」

それを聞いた3人は、驚愕し、さるしまの時の事を思い出す。

麻侖「それと、同じ状況だったって?」

さるしまの時と同じ状況だったのか、麻侖は、明乃に問う。

明乃「分からない、だから止め様と思っただけ・・・」

それに対して、明乃は、分からないと答え、自分は、止め様と武蔵に行こうとした事を告げた。

だが、そんな明乃に洋美が

洋美「艦長なのに、また飛び出したからよ!・・・スキツパー1隻で止められるわけ無いでしょ!」

明乃「うくん」

洋美「他にもっと艦長に向いている人が居るんじゃない!」

と、またもや明乃の悪愚痴を言い、明乃よりも、ましろを艦長に推薦するなど、責めている一方だ。

薫「ん・・・くろ」

それを聞いているだけでも腹が立った薫は、明乃を責める洋美を止めようと怒ろうと

した時だった。

麻侖「クロちゃん!!」

洋美「あっ!?!」

麻侖「昔から言うだろうみこしは、軽くって馬鹿がいて、アハハハ・・・!!」

何と、薫の代わりに麻侖が洋美を諫めてくれたのだ。

『うん、うん』

他の3人もそれに同調する。

薫（・・・ありがとう柳原さん!!）

麻侖が洋美を諫めてくれた事に薫は、心の中でお礼を言った。

晴風、後部甲板

薫達が入浴している頃、媛萌と百々、美海は、先の戦闘での損傷確認をしていた。

媛萌「左舷、フレーム番号135番、垂線付近に20cm×50cmの発光、僅かな重油の漏れを確認!!」

百々「うえ、結構被害大きいツスうね!?!」

美海が上からライトを照らし、媛萌が損傷部分を確認、それを百々が記録する。

3人が見たところ、被害は、予想以上に大きかった。

麻侖「ああく良い風呂だったなあ〜」

入浴を終え、ラムネを飲みながら麻命は満足そうに戻って行いった。

薫と明乃、ミーナ、鈴も艦橋に戻る。

戻る中、

鈴「心配だよ、武蔵・・・」

明乃「ん・・・」

ミーナ「武蔵の艦長はお主の友人なのか？」

明乃「幼馴染なんだ・・・」

ミーナ「ん・・・教官の方は？」

薫「私の方も艦長と同じ武蔵には、私の従妹が教員として、乗っているの・・・」

ミーナ「そうだったんじゃない・・・お互い同じじゃない・・・」

ミーナは、薫と明乃が同じ思いだと知る。

明乃「武蔵に何が起こってるんだろう・・・如何したら助けられるかな・・・」

明乃は、武蔵に何が遭ったのか、如何したら助けられるのか、言っていると

洋美「人の心配する前に自分の艦の面倒を見るのが先じゃない!!」

洋美が怒りながら、そう言って、戻って行った。

『・・・』

戻っていく洋美に明乃は、何も言わず、唯見ている事しかできなかつた。

それを見た薫は

薫「・・・気にしないでね、黒木さんは、唯貴方にもつと艦長として、やって欲しいと言っているだけだから・・・」

と、何とか明乃を励まそうとする。

するとミーナがある事を話す。

ミーナ「もしかすると我が艦長と同じ様に艦を守ろうとしているのかもしれない。武蔵の艦長とその教員も・・・」

『・・・・・・・・』

ミーナ「我が艦長は、テアはいつも素早く決断し毅然と行動する素晴らしい艦長じゃ・・・艦長が不安になれば、艦内すべてが不安になる・・・だから、いつも艦長は、その不安を胸のうちに押し隠し、一人で全てを背負うと言っておった。」

ミーナは、明乃にテアが以前、言っていた事を明乃に告げる。

明乃「私はそんな立派な艦長じゃないね!」

ミーナの話聞いた明乃は、自分が艦長の器じゃないと思ひ暗くなる。

ミーナ「何を言っておるんじゃ、お主は、ワシを助けってくれたではないか?」

明乃「え!?!」

ミーナ「感謝しておるぞ!・・・こうして此処に居られる事に・・・」

鈴「そうだよ!・・・逃げ逃げだった私だって、頑張ろうって思ったし・・・」
明乃「・・・ん」

2人に励まされ、明乃は、笑顔を取り戻す。

3人を見ながら薫は、ある事を考えていた。

薫（岬ちゃんには、こんなにも慕ってくれる人が居る・・・でも、やっぱり岬ちゃんには、ましろちゃんが必要だ!!・・・如何したら2人を仲直りできるのかな・・・）
薫は、明乃にいくら慕ってくれる人が居ても、やはり明乃には、ましろが必要だと思います、如何したら2人を仲直りできるのか悩む。

そんな4人を洋美は、奥から隠れて見ていた。

晴風、医務室

その頃、晴風の医務室では、美波が顕微鏡である調べ物をしていた。

晴風、艦橋

艦橋へ戻った4人は、それぞれ配置に戻る。

だが、明乃は、ましろの姿を見てちよつと気まづくなっていた。

其処へ

鵜「あの、艦長!・・・ちよつと良い?」

鵜が艦橋へと上がり、明乃に声を掛ける。

明乃「如何したの?」

何事かと明乃は、聞く。

鵜「さつきから全然通信が入らないんだけど艦内から微弱な電波を拾っていて……」
鵜が言うには、通信は、以前不能のまままで、何か微弱な電波が晴風艦内から発生していると言う。

薫「微弱な電波?」

芽衣「携帯じゃないの?」

それを聞いた芽衣は、携帯だと思つたが

鵜「違うんだよね……」

如何やら携帯じゃない様だ。

薫「確認する必要があるわね……八木さん案内して頂戴!」

鵜「は……い」

薫は、調査しようと鵜に案内を頼む。

薫「行くわよ、艦長!」

そして、薫は、明乃を連れ出す。

明乃「はっ、はい……シロちゃん……副長、後は、お願い!!」

ましろ「は、はい!」

明乃は、気まぜいながら、ましろに留守を任せる。

晴風、艦内

こうして、薫と明乃は、鵜の案内の下、謎の微弱な電波が流れている場所へと向かう。そして何故か、五十六を抱いた志摩もついて行く。

その途中、楓と慧も合流し、鵜がダウジングを使って、謎の微弱な電波の発生箇所へと皆を導く。

楓「それでお分かりになりますの?」

楓がダウジングを興味深そうに見る。

慧「無理でしょう・・・そんなので電波が拾えたら……」

しかし、慧は無理だろうと否定するが

鵜「あつ!?!こつち!」

『えっ?』

突然、鵜の持つダウジングが反応する。

その反応先は?

慧「此処?」

何と反応先は、晴風の医務室だった。

薫「此処は、医務室よ!」

5人は、恐る恐る医務室のドアを開ける。

其処には

美波「うふふふ……」

スタンドライトの灯りだけを灯し、怪しい笑みを浮かべ、預かっていた例のマウスを解剖しようとしている美波の姿があつた。

慧「うわあ……!!」

その姿を見た慧は思わず絶叫する。

楓「あら? お化けですわ!」

楓は、お化けと言う割には落ち着いた口調で言う。

明乃「あれは美波さんだから……」

明乃が、冷静にツツコミを入れる。

薫「……何してるの?」

薫は、呆れる。

そんな時、開けられた医務室に解剖している例のマウスと同じマウスが一匹入ってきた。
た。

美波「むっ?」

医務室に入ってきたマウスは、そのまま美波を睨む。

すると、志摩が抱いていた五十六がまたも本能に目覚め、そのマウスに襲い掛かる。
『うあ……』

五十六とマウスの死闘で艦内は、ざわめきあう。

晴風、艦橋

死闘の末、マウスは、五十六に捕獲され、明乃の前に引き出された。

志摩「ちび可愛」

明乃「五十六凄いな！鼠捕まえたんだ!!」

薫「鼠を捕まえるとは、五十六もやっぱり猫ね！」

マウスを捕まえた五十六を3人は、褒める。

だが、

明乃「あれ?……色が違う……」

普通の鼠としては、変だと思った明乃が五十六が捕まえたマウスに手を伸ばそうとした途端

美波「触るな!!」

美波がそれに待ったを掛けた。

美波「それは鼠ではない！」

待ったを掛けた美波は、明乃にこのマウスが普通の鼠ではないと告げる。

その時

鶯『通信回復しました!!』

慧『電探復活、これでなんでも見えます!』

楓『周辺の音がよく聞こえております。』

全ての機能不全を起こしていた電子機器が機能を回復したと報告が続々と上がり始めた。

明乃「え!? ひよつとして・・・」

報告を聞いた明乃は、今捕まえたマウスが原因なのかとマウスを見る。

美波「如何やらコイツが原因だった様だな!」

美波も明乃と同じ、このマウスが電波障害の原因だったと指摘する。

薫「これが!? こんな小さな動物が?」

薫は、マウスを見て、こんな小さいのが電波障害を引き起こしていた何て、驚いていた。

明乃「これ何なの?」

明乃は、このマウスは、一体何なのか美波に問う。

美波「遺伝子構造が鼠とは、僅かに異なっていて、更に変なウイルスに感染している・・・そのウイルスは砲術長の血液からも検出された。」

美波の説明によれば、このマウスは、DNAが鼠とは、僅かに違いがあり、更にマウスから未知の新種のウイルスに感染している事が判明した。

しかも、そのウイルスは、志摩の血液からも検出された。

明乃「ウイルス？」

志摩「うい……」

ウイルスに感染していたと言う事を聞いた途端、志摩は、恐ろしくなったのか思わず明乃にしがみ付く。

美波「砲術長が暴れたのも電子機器が故障したのもそいつが原因の可能性がある。」

更に美波は、今までの事態の原因をこのマウスだと指摘する。

志摩「うい……」

明乃「じゃあそれを調べれば、皆を救えるかも？」

美波「可能性はある。」

薫「ん……美波さん！……早急、このマウスとウイルスに対する抗体の調査に取り掛かって……」

美波「承知した。」

薫「納沙さん、この事を学校に連絡を……」

幸子「分かりました。」

薫は、美波にマウスの調査と新種のウイルスに対する抗体の製造をお願いし、更に幸子にこの事を横須賀女子海洋学校に報告するよう命じた。

明乃「五十六凄い!!お手柄だよ!!」

真つ先にマウスが原因だと発見した五十六を明乃は、大いに褒め。

明乃「今日から提督って呼ぼう!!」

更に五十六を大艦長から提督に昇進させる。

志摩「大!!」

明乃「大提督!」

しかも提督より上の大提督だった。

幸子「勝手に提督とか付けたら不味くないですか?」

幸子は、勝手に昇進するのに反対するが明乃と志摩は、もう五十六を大提督とする事に決めた様だ。

まして「それより学校に報告が先だろう!!」

そんな2人にましてが怒る。

その時、

マチコ『前方に浮遊物?』

『はっ!!』

見張り台のマチコから報告が入る。

晴風、見張り台

マチコ「はっ!?!?・・・機雷です!!」

何と前方に機雷が敷設されていた。

実は、晴風は、電子機器が今まで不調を起こしていたので、知らないうちに機雷原のど真ん中に迷い込んだのだ。

晴風、艦橋

明乃「取舵一杯!!全速後進!!」

明乃は、直ぐに回避するよう指示する。

鈴「と、取舵一杯!!」

鈴は、左に舵を切って、回避行動をする。

だが、時遅く機雷は、晴風の右舷に命中した。

マチコ『右舷にて爆発!!』

ましろ「被害報告!!」

ましろが機雷爆発の被害報告を知らせるよう命じる。

薫「これ以上の夜間航行は危険だわ・・・艦長!!・・・直ぐに機関を停止させ、朝まで待ちましょう。」

薫は、晴風が機雷原のど真ん中に居る為、これ以上の夜間航行は、危険と判断、一時この場に停止し、朝まで待つ事にした。

明乃「そうですね・・・リンちゃん、機関停止!!」

明乃は、薫の指示に従い、直ぐに機関停止させる。

鈴「き、機関停止!!」

晴風は、機関を停止し、夜が明けるまで、この場に待機する事にした。

こうして、晴風は、機雷原のせいで立ち往生する事になり、その間に武蔵から段々距離が開いてしまい、結果、追跡は、より困難になった。

第21章 機雷でピンチ！ 中編

4月15日

20:00

横須賀基地

空母大鳳、会議室

その頃、龍之介は、次郎やなのは達幕僚と共にドックを出た空母大鳳の会議室で武蔵に対する作戦を協議していた。

なお艦長の薫と副長のはやて、参謀長の功が不在の為・・・代理として、艦長に航海長の美奈が航海長兼艦長として就任、続いて、砲雷長の信吾が砲雷長兼副長に就任、更に通信主の実が通信主兼参謀長に就任した。

実「以上がブルーマーメイドから齎された情報です。」

会議室のボードには、ブルーマーメイドから得た情報と行方不明の学生艦の消息を絶った地点が記載された地図が貼られていた。

実「情報によると武蔵は、東舞校艦16隻と戦闘後、晴風の追跡を振り切り・・・現

在、消息不明……」

実は、ブルーマーメイドから得た情報を次郎やなのは達幕僚に告げた。

龍之介「権藤中佐の部隊は？」

実「通信によれば! ……釈放されて、現在、帰投中! ……ですが到着には、かなり掛かるそうです。」

地中海に居た美由紀達も釈放されて、直ぐに横須賀に向けて急いで帰投中。

だが、到着には、かなりの日数が掛かる。

『……』

実から現状を聞いた次郎達以外の幕僚達は、動揺する。

美奈「それで……私達は、如何するんですか准将？」

美奈は、自分達が今後如何するか問う。

すると隣に座っている次郎が

次郎「決まっている!! ……薫を助けに行く!! ……それ以外如何するかもないだろう!!」

真つ先にそう言って、薫達晴風を助ける為に動くのだと主張するが

信吾「そう言うが小沢中佐! ……今の我々に何が出来るんだ!! ……我々の殆んど
の戦力は、地中海に回したから、現在、残っているのは、空母1隻に巡洋艦1隻、護衛

艦1隻、補給艦1隻しかない!!・・・しかもこの大鳳は、まだ修理中で戦力にもならない!!・・・これでは、あの武蔵には、到底太刀打ちできない!!」

信吾は、今の戦力では、武蔵に太刀打ちできないと反対する。

信吾の言う通り、殆どどの戦力は、地中海に回したので、残っている戦力は、空母1隻に巡洋艦1隻、護衛艦1隻、補給艦1隻の僅かで、しかも主力空母の大鳳は、まだ修理中で機関は、動いてもレーダーや防御装置などが今だ整備中で艦載機も発進できるか分からない状態だった。

後は、白鳳だけが

次郎「俺の艦なら」

美奈「白鳳では、武蔵に太刀打ちできないよ!」

白鳳では、太刀打ちできないと主張する。

次郎「何故だ!!・・・武蔵よりも攻撃力は、上だ!!」

美奈「攻撃力が上でも防御力は、違うんじゃない?」

次郎「あっ!?!」

白鳳の弱点を美奈に指摘され、次郎は、あつと、それに気づく。

確かに美奈の言う通り、白鳳の装甲は、対ゴジラ用の超耐熱合金NT-1Sで表面が人工ダイヤモンドでコーティングされている。

これによりレーザーやビーム光線は、跳ね返され、ゴジラの熱線にも十分に耐えられる。

だが、砲撃などの攻撃には、脆いと言う弱点が有った。

信吾「艦長ともあろう方が弱点を忘れるとは、情けないぞ!!」

次郎「ん・・・」

美奈と信吾に言われ、次郎は、何も言えなくなる。

フェイト「次郎君、完全に負けてるね!」

なのは「いくら強くても相手が後輩じゃ・・・勝ち目ないね!」

2人が言うように流石の次郎も後輩達には、勝てなかった。

実「私も今の戦力で行くのは、反対です。」

実も2人と同意見で薫達晴風を助けに行くのに反対だった。

なのは「じゃ、はやてちゃんは、如何なるの?」

フェイト「見捨てるんですか?」

反対する3人に対して、はやてを見捨てるのかと問う。

実「見捨てるとは、言っていない、唯状況を見て、此処は、ブルーマーメイドに任せ

るべきだと言っているのだ。」

実は、あくまでブルーマーメイドに任せると言うが

龍之介「……残念だがブルーマーメイドは、現在、武蔵以外の学生艦を捜索中で手が足りない状況だ。」

美奈「そんな……」

龍之介「我々は、行かなくればならない!!：しかも他の学生艦も捜索しながらな：：例え微弱な戦力でもな……薫や八神の事が心配だ!!……故障箇所は、行きながら修理する……各員は、直ちに配置に戻ってくれ!!」

『はっ!』

龍之介は、例え微弱な戦力でも行かなければならない事や危機に瀕している薫とはやての救援する事を3人に分かせてから配置に戻るよう命令を出す。

会議を終了し、各員は、直ちに配置に戻ろうとする。

しかし会議室を出る途中

真霜「龍之介!？」

突然、作戦本部に居る筈の真霜がやってきた。

龍之介「真霜!!?……作戦本部に居たんじゃ?」

深町「それは、私のせいだね!」

龍之介「深町国交相!?!……こんな所まで、態々何しに?」

一誠「……」

何と真霜の他に深町もやってきた。

深町「実は直接、君に伝えたい事が有ってね!」

龍之介「伺いましょう。」

『…………』

深町「今回の件で国土保全委員会は、武蔵討伐とその他の艦艇の搜索を山本監督官きかの部隊にお願いする事に決定された。」

深町は、龍之介に国土保全委員会で決定された事を告げる。

『…………』

深町からの国土保全委員会の決定事項を聞いた次郎やなのは達幕僚は、驚愕する。

「雅か、自分達を嫌っている筈の国土保全委員会の幹部達が自分達に助けを求めてくるなんて、信じられなかったからだ。」

それに対して、龍之介も

龍之介「…………驚いたな、雅か我々を嫌っている貴方達から、助けを求められると…………一体、如何ゆう風の引き回しで?」

と、決定に驚きながら、何故そんな事になったか、理由を聞く。

龍之介「ふん、俺達見たいなよそ者に助けをこうとは、世も末だな…………だが、そんなのは、無用だ!!…………我々は行く!…………行かなければならない!!」

龍之介は、世も末だと言って、笑い、後からそれは、無用と言って、自分が決断した事を告げた。

真霜「……………」

深町「ほお……拒むかと思つたが、君が其処まで決めているとは、全くの驚きだな!？」

真霜と深町は、龍之介が今回の事で国土保全委員会の依頼を拒むかと思つたが、既に行く決めてる事に驚いていた。

龍之介「付いては、我々が出撃するにあたって、条件が有ります。」

更に龍之介は、出撃するにあたって、条件を付き付けた。

深町「何かね？」

龍之介「我々が出撃している時、後方の安全をお願いしたい!!……我々が出撃している間に田沼総理が何か企むかもしれない?……後方を気にしては、安心して、戦えませんので……………」

条件とは、自分達が出撃している間に田沼総理がまた、要らぬちよつかいを出さない様にして欲しいと言う条件だった。

深町「それは、此方も全力で阻止するから、安心したまえ!!」

深町は、全力で阻止すると約束した。

龍之介「あと一つ」

深町「まだ有るのか?」

龍之介「この件での総指揮ですが」

龍之介は、この事件の総指揮は、誰が執るのか問う。

一応、この事件の総指揮は、国土保全委員会の幹部達と真霜が仕切っているのだが、指揮系統が二つあると混乱する場合は有る。

その為、予め指揮系統を一つにしとかなければならない。

だが、それには、誰が良いのか。

深町「無論、総指揮は、君が取る事になっているが・・・」

深町は、その総指揮を龍之介に任せようとしたが

龍之介「それは、駄目でしょ!・・・俺には、監禁されていたので、状況も知らないし、第一、幹部達から信用されていない・・・そんな奴が総指揮を執れますか?」

龍之介は、あっさり断る。

深町「では誰が・・・」

龍之介「そうですね・・・私は、宗谷一等監督官が適任だつと思います・・・宗谷一等監督官は、我々を助けてくれたし、晴風反乱の時も独自で保護と捜査をした経緯もありますから、この件での総指揮を執る権利がありますが・・・」

龍之介は、総指揮に、これまでの功績が有る真霜を推薦した。

真霜「私が!？」

自分が推薦されるのに驚く真霜。

深町「……確かに君の言う通りだ!!……晴風反乱の時に我々は、唯、田沼総理の言う通りにしかできなかつた……それに比べたら、宗谷一等監督官は、それに反して、独自で君達や晴風の無実を証明した!!……そのお陰で我々は、危うく重大な過ちを犯すところだった!!……宗谷一等監督官には、その権利がある。」

深町も真霜の功績を認め、総指揮を執る権利が有ると告げる。

深町「宗谷一等監督官!!……君は、どう思う?」

それに対して、真霜は

真霜「ん……龍之介!……本当に私で良いの?」

龍之介「他に誰がいるんだ……お前は、あの時、国土保全委員会の命令に反して、俺達を救った!!……そんな奴を誰が嫌がるんだ!!……お前じゃないと俺は、駄目なんだ!!」

真霜「はあく、全く、貴方には何時も苦勞を掛けられるんだから……良いわ!!……その任、謹んでお受けします。」

真霜は、謹んでお受けした。

深町「ん・・・それでこそ、真雪さんの娘だ!!・・・しっかりとやってくれ!!」

こうして、龍之介は、真霜の指揮下で晴風救援と武蔵搜索に乗り出す事になった。

だが、龍之介は、本心では、浮かない顔をしていた。

暫くして、深町は戻り、次郎やなのは達幕僚もそれぞれの配置に戻っていき、龍之介は、1人、指揮官室へと戻っていた。

空母大鳳、指揮官室

指揮官室に戻った龍之介は、1人、テーブルでコーラを飲んでいた。

本当は、お酒を飲みたいのだが、龍之介は、下戸の甘党なので、酒が飲めず、代わりにコーラを飲んでいた。

龍之介「ん・・・ん・・・はあく!!」

飲んでいる間、龍之介は、ある事を考えていた。

龍之介（口では、ああ言ったが、ホントのところは、この少ない戦力で出撃など無謀だとは、分かってているが・・・薫とはやての安否が心配だ!!・・・こんな事になるなら、2人を行かせなければ良かった!!・・・つくづく俺には、運が無い様だ・・・）

今回の出撃、龍之介自身、無謀だと分かっているが、薫とはやてを海洋実習に出した責任が有る。

その為、2人の救援には、必ず行かなければならない。

全く龍之介には、幸運がなく、悪運だけが強い様だ。
そんな時

トン、トン

龍之介「ん!?!」

突然、指揮官室に誰か尋ねてきた。

龍之介（こんな時間に誰だ?）

誰かと思いいドアの側に行く。

龍之介「誰だ?」

龍之介は、恐る恐る声を掛ける。

すると

「私よー!」

龍之介「ま、真霜!」

何と訪ねて来たのは、横須賀のブルーマーメイド庁舎に戻った筈の真霜だった。

急いで龍之介は、ドアを開ける。

ドアを開けると、其処には、真霜が堂々と立っていた。

龍之介「真霜!?!・・・お前、戻ったんじや?」

真霜「ちよつと龍之介の事が心配で戻ったの・・・その後、龍之介、浮かない顔をし

てたから……」

真霜は、龍之介が浮かない顔をしていたのに気づいていた。

だから、心配したので戻らないで此処に来たのだ。

龍之介「……はあく、お前には、お見通しか……入れよ!」

何時までも真霜を立たせる訳にもいかず、取り合え部屋に入れる。

龍之介「待ててくれ、今椅子持ってくるから……」

真霜「ん……龍之介……もしかして、焼き酒してたの?」

テーブルに置いてあつたコーラとグラスを見て、真霜は、龍之介が焼き酒してたのだと思つた。

龍之介「ちよつと違うが……まあ、似た様なものだな……お前も飲むか?」

真霜「ええ……頂くは……」

2人は、コーラを飲む。

真霜「ねえ、龍之介!……何を考えていたの?」

龍之介「……実は、この任務に関しての事だ。」

真霜「やつぱり、龍之介も無謀だと分かっているのね!」

龍之介「ああ、だが、部下の前では、言えない……不安にさせるし、次郎も納得しないだろう……こんな事になるなら薫と八神を行かせなければ良かった。」

真霜「それは、私も同じよ! . . . こんな事になるなら、2人に教員の事を頼まなければ良かった. . . そうすれば、貴方をあんな目に合わせなくて済んだのに. . .」

龍之介「まあ、今さらくいても仕方がない. . . 今俺達が出来る事は、これ以上被害を増やさない事だ!!」

真霜「そうね. . . 私もましろの事が心配. . . だから、早くこの事件を解決しないと. . .」

2人は、お互いに理解する。

龍之介「そう来なきやな. . . だが、焦るなよ真霜!! . . . 焦りは、禁物だ!!」

真霜「そんな事、分かっているわよ!!」

真霜は、顔を丸くする。

龍之介「そう丸くなるなよ. . . 奇麗な顔には、似合わないぞ!!」

顔を丸くする真霜に龍之介は、優しく頭を撫でる。

真霜「.」

そして、2人は、お互いに口づけをする。

『んっ. . . ちゅっ. . . んむっ. . . ちゅっ. . . んんっ. . . んむっ.』

口づけを終えた後、今日は、遅いと言う事で真霜は、泊まる事にした。

2人は、服を脱ぎ、ベッドでお互いに責め始める。

まず龍之介が真霜の乳房を片手で責め、もう一方の手が褌を責めた。

2つを責められ、真霜は、とてつもない快感を感じながら、つい愛液が漏れ。

今度は、真霜が龍之介の肉棒を自分の乳房に包んで責める。

真霜の乳房に肉棒を責められ、龍之介もとてつもない快感を感じながら、つい漏らし、真霜の顔が精液で汚れる。

龍之介は、毛布で精液で汚れた真霜の顔を拭く。

顔を拭いた後、真霜は、龍之介の肉棒を自分の褌に挿入させる。

挿入後、真霜は、腰を揺らす。

腰に揺らされ龍之介は、極限まで責められ

やがて、

龍之介「う・・・」

真霜「はっ!?!」

龍之介は、真霜の中で盛大に果てた。

長い精射後、2人は、そのまま眠りにつく。

首相官邸

その頃、田沼は、野田からの報告を聞いていた。

邦夫「以上が深町国交相が下した決定事項です。」

田沼「んん．．．不味いな．．．これでは、迂闊に手が出せない!!」

邦夫「迂闊に動けば深町国交相に知られる恐れが．．．」

深町によつて、武蔵搜索に龍之介達Gフォースが出動する事になり、更に深町によつて、監視が厳しくなり、邦夫も迂闊に手が出せない。

手を全て塞がれた状態になつた田沼は

田沼「．．．．．こくなつたら．．．．．キング大統領に余力を要請するしかない」

何とアメリカに余力を要請しようとする。

『はっ!?!』

それを聞いた邦夫や側近の2人は、驚愕し

側近A「お待ち下さい!!．．．今、この状況でアメリカに余力を要請すれば、国際問

題になります!!」

側近B「それだけでは、ありません．．．反つて、アメリカに付け入る隙を与える結果になります!!．．．此処は、あくまで控える必要が．．．」

側近の2人は、アメリカの介入を阻止しようと田沼を止めようとする。

野田「私も反対です．．．今、幹部達は、動揺しています．．．そんな時に総理が勝手にアメリカに余力を要請すれば、反つて、幹部達の信用を失う結果に．．．」

そして、邦夫もアメリカの介入によつて、今まで田沼に従っていた国土保全委員会の

幹部達が田沼の信用を失う可能性が有るとして、田沼を説得する。

3人に説得され、田沼は、思い留まる。

田沼「ん……では、如何する?」

邦夫「此処は、しばらく様子を見てから、しかるのち奴らを一網打尽にするのです。」
邦夫は、しばらく様子を見てから、龍之介達を一網打尽にしようが、本当のところは、全く策が無い。

だが、何とか田沼を止めようとあえて嘘を言ったのだ。

田沼「くう……」

田沼は、悔しながらそうせざるおえなかった。

だが、田沼の動きは、CIAによつて、筒抜けだった。

ワシントンDC

ホワイトハウス、大統領執務室

大統領補佐官「以上が情報部から齎された報告です。」

キング「道理で、ミスター田沼からの報告が無いと思つたら、そんな事になっているとは……」

田沼からの定時報告がない事に疑問を抱き、田沼の懐にスパイを送り、状況を探つていた。

大統領補佐官「いかががいたしまししょう？」

補佐官は、今後の事を如何すれば良いか問う。

キング「如何すれば良いと思うかね？」

同じ事を補佐官に問う。

大統領補佐官「今は、我々も動かない方が良いでしょう．．．時を経て、動くのが道理と言えるでしょう。」

補佐官も今は、動かず、時期を見る方が良いと言う。

キング「うむ、君の言う通りだ!!．．．しばらく監視の目を光らせておけ．．．一応、ハワイの太平洋艦隊のボガート中将に出動準備をさせておけ．．．」

大統領補佐官「はっ！」

キングは、田沼や深町の監視を強化し、更にハワイの太平洋艦隊司令長官のウイリアム・ボガート中将に出動待機をするよう命じる。

画して、田沼とキング、双方の思惑は、何れ龍之介や晴風に迫ってくるだろう。だが、彼らは、気づいていない。

事件を引き起こした例のマウスが、実は、彼らが実験で作った生物兵器だと言う事に．．．

そして、それを見つけた晴風の衛生長の楠木美波も、その事実を知らない。

いづれは、知る事になるが、まだ先の事である。

第22章 機雷でピンチ！ 後編

4月16日

7:00

アスンシオン島沖、機雷原

一方、晴風は、機雷原に道を阻まれ、その場で夜を明かす事になった。

晴風、甲板

朝になると、辺りは、濃霧に包まれていた。

媛萌「うわあ・・・奇麗・・・!!」

美海「まるで雲の上見たい・・・!!」

果代子「凄いね・・・」

理都子「でも、周りに機雷が有るんだよね・・・」

辺りが濃霧に包まれているのに生徒達は、その光景を見て、まるで雲の上に居ると錯覚し、浮かれているが、辺りには、今だ機雷が敷設されたまま、とても浮かれては、いられなかった。

皆が景色に浮かれている頃、主計科の美甘、杵崎姉妹は、竹棒で機雷を晴風から遠ざ

ける作業をしていた。

あかね「突つ突いて、大丈夫なの?」

あかねが竹棒で機雷に突つ突いて、大丈夫なのか問う。

美甘「近くにあるのは、古い触発機雷だから、突起を押さなければ問題ないよ!」

美甘が言うには、機雷の突起部分を押さない限り爆発はしないそうだ。

あかね「うえ……!?!」

それを聞いたあかねは、怖がる。

ほまれ「全部爆破すれば良いんじゃない?」

その時、右側に居たほまれが全部爆破すれば良いんじゃないかと提案するが

美甘「霧が晴れないと周辺にどれだけ在るか分からないし、一つ爆発させて、それが連鎖したら怖いから……」

美甘は、その提案を却下した。

今現在、機雷がどれだけ敷設されているか不明な状態。

その状態で全部爆破すれば、更なる被害が出る可能性が大だった。

だからこそ、敢えて、この様な地味な作業をやらなければならぬ

『大変だね……』

美甘の言葉に2人は、感心する。

晴風、教室

暫くして、生徒達は、交代で朝食を取る。

楓「夜のうちにソナーで周辺探索行いました。」

楓は、ソナーで周辺探索をして、機雷の敷設所在を把握し、それを薫と明乃に報告する。

薫「範囲はどれくらい、万里小路さん？」

薫は、教壇で朝食を取りながら、機雷の敷設範囲を聞く。

楓「おそらく、航路阻止を目的としているので比較的狭い範囲です・・・敷設された機雷の種類は不明ですが水深を考えると係維機雷・短係止機雷・沈底機雷だと思われるます。」

薫「結構、色々な機雷が敷設されてるわね・・・」

ネチヨツ・・・

ミーナ「う・・・う・・・」

楓が周辺海域の機雷について話している時、後ろで朝食を取るミーナは、納豆を箸で突つ突いて、何故か、顔を歪めていた。

果代子「係維機雷って何？」

果代子が機雷の種類で係維機雷が何なのか問う。

すると

芽衣「ほらあれでしょ!…ワイヤーで繋がって、ぶつかるとドカー!つていく奴…」
芽衣が果代子に説明する。

ましろ「掃海する必要があるな…」

薫「そうね…このままだつと捜索もできないから…艦長!」

明乃「えつと、掃海手順は?」

幸子「説明させて戴きます!」

幸子が自信満々の様子で掃海手順の説明する。

幸子「先ずは各掃海具を掃海柵で繋ぎ、展開器を水中に落とします!!」

ミーナ「うえ!?!」

幸子が掃海手順の説明している中、ミーナは、納豆がベチャとしたのを見て、ビックリする。

幸子「船が進むにつれ展開器は左右へ広がって沈降具が艦尾から引つ張られていき掃海柵に機雷が引つかかると、ずっと動いていつて…切断機で、ちよきんと切れるのです。」

ミーナ「…うえ…!?!」

幸子が掃海手順の説明している中、更にミーナと納豆の格闘は、続く。

幸子「後は浮かんできた機雷を機銃でドツカーン!!」

芽衣「おお!! 私の出番だ!! 早く撃たせて!!」

機銃掃射が出来るのと知って芽衣は、早く撃たせたと駄々をこねる。

ましろ「今は、周囲を機雷で囲まれている艦を動かすのは無理だ。」

確かに通常の掃海手順では、晴風を動かさなきゃならないが、周囲を機雷で囲まれている現在、艦を動かす事は出来ない。

志摩「き・く・く・ま・ま・い」

志摩も危険だと判断する。

明乃「うん、本格的な掃海機具は、積んでないけど……出来る事はしないと……」

現在、晴風には、本格的な掃海機具は、積んでない。

それでも明乃は、出来る限りをする。

ましろ「人力での水中処分は、危険だ!!」

それに対して、ましろは、人力での水中処分は、危険だと反対する。

明乃「ん……」

ましろに反対され、明乃は、他の方法を考える
すると

明乃「はっ!? ……スキッパーを使つを!!」

明乃は、スキッパーを使うのを思い付く。

幸子「確かにあれなら小さいので音響、水圧、磁器の各種の機雷に非掛かる可能性は、低いです」

幸子もスキッパーなら、機雷に非掛かる可能性は、低いと明乃の提案に賛同する。

志摩「あ、ん、ぜ、ん」

志摩も賛同した。

明乃「スキッパー乗員には、通常装置に加えて重安全具の装着を・・・」

2人の賛同を得て、明乃は、行き良いに自分が出ようとするが

ましろ「艦長は、出ないでくださいね！」

ましろがそれを止める。

明乃「は・・・はい・・・」

ましろに行くなど言われて、明乃は縮こまる。

薫（・・・やっぱり、あの時の事で岬ちゃんには、ましろちゃんには、何も言えなくなっているわね・・・）

あの時の出来事以来、明乃は、ましろに何も言えなくなっており、そんな2人を薫は、難しそうに見る。

大部分は、食事を終え、美甘が食器を片付けていると

美甘「ん!？」

ミーナが納豆を見て、顔を歪めている事に気づく。

美甘「あれミーナさん、納豆口に合わなかった？」

美甘がミーナに納豆口に合わないのか問う。

ミーナ「い、いや・そんな事はないんじゃないか問う、が・・・」

それについて、ミーナは、そんな事はないとつい嘘を言つて、噛んでしまう。

薫「!？」

空「噛んだ!」

美海「噛んだね!」

ミーナが噛んだ事に空と美海が気づき、また、それに気づいた薫がミーナの側に行く。

そして、ミーナの側に着た途端、ミーナが朝食を全く食べていないのを見て

薫「・・・もしかして、ミーナさん・・・日本食が口に合っていないんじゃない?」

ミーナが日本食が嫌いなのに気づく。

ミーナ「い、いや、そんな事は・・・」

それに対して、ミーナは、否定するが

薫「嘘は、駄目よミーナさん!!・・・最近、見ていたけど、昨日の夕食でもパンとサ

ラダーだけ食べて、ご飯とかは、殆んど残していたでしょう?」

薫は、ミーナがいつもご飯や漬物などを残していたのを知っていた。

ミーナの嘘は、薫には、バレバレだったのだ。

ミーナ「……その：実は、その……教官の言う通りなんじゃ……実は日本料理が口に合わなくて……」

薫に嘘がばれ、ミーナは気まずそうに本音を言う。

美甘「ええ……そうなの?……気がつかなくて御免ね!……じゃあ今日はドイツ料理を作ろうか?」

ミーナの本音を聞いて、美甘がミーナの為にドイツ料理を作るとミーナに言う。

ミーナ「え!? ああいやいや!」

それに対して、ミーナは、居候の身なのに態々そこまで、して貰わなくてもと恐縮してしまう。

薫「良いじゃないのミーナさん!……折角、伊良子さんが作ってくれるって言うんだから、此処は、行為に甘えたら……」

美甘「そうだよ! それに私ドイツ料理得意だから……」

2人に強要され、ミーナは、結局、美甘に甘える。

美甘「じゃあ、今日はドイツ料理祭りに決定!!」

『お、おおう・・・!!』

今日の夕食はドイツ料理となり、それを聞いた、教室にいる全員が喜び拍手した。

今日の夕食はドイツ料理と言う事で、美甘と杵崎姉妹の3人は、早速夕食に向けての下拵えを始めた。

その他の部署では、昨日、損傷した部分の修理と掃海作業が始められた。

掃海作業にはスキッパーが使用される事になった。

やがて、日が昇り、霧が晴れていき、

媛萌「修理完了!!」

損傷部分の修理が完了し、

晴風、見張り台

マチコ「周辺の機雷状況も確認完了!」

更に見張り台のマチコが周辺海域の状況を報告し、掃海の準備が整った。

薫「艦長号令を」

明乃「掃海準備!!」

明乃の号令の元、掃海作業が開始される。

ミーナ「うんうん、掃海は安全に航行するのに重要な事じゃからな・・・」

掃海作業にミーナが感心する。

明乃「先ずは、視界内の機雷を処理して」

明乃は、先ず近くにある機雷の除去を志摩と芽衣に命じる。

芽衣「よつしや、やつと出番だ！行くよタマ!!」

志摩「うい！」

2人は、イキイキしながら後部甲板に向かう。

薫「何か、楽しそうだね：あの2人：：」

機雷の掃海に妙に楽しそうな志摩と芽衣を見て、彼女らの態度の様子を語る薫。

幸子「機銃を撃ちたがっているんでしょね・・・あの2人、トリガーハツピーな所がありますからね・・・」

幸子が何故、2人があそこまでイキイキしているのか何となく察しがついた様子。

薫「そう言えば、そうね・・・」

幸子の意見に納得する薫。

芽衣「ヒヤッハー!!」

デツキから様子を窺って見ると、芽衣が声を上げながら機銃を撃っていた。

晴風、後部甲板

芽衣「快感！実感！ジنگスキャン!!」

志摩「ヒイー、ハアー、ラムー」

それに釣られて、志摩も声を上げながら機銃を撃つ。

薫（確かにイキイキね・・・）

それを見た薫は、ちよつと2人の将来が心配になる様子であった。

百々「完成ツス・・・」

2人が機銃を撃っている頃、隣では、百々が掃海器具にペンキでアザラシっぽい顔を書いていた。

美甘「あゝ可愛い!!」

美海「ねえねえ、名前付けようよ!」

美甘「ん・・・アザラシだから…タマちゃん!」

志摩「!?・・・うい?」

みかんの発した「タマちゃん」と言う言葉に反応して、志摩が振り向き、その銃口を美甘達に向ける。

『うわあ・・・!!?』

百々「危ないツス・・・!」

同級生に撃たれては、かなわないので、急いで物陰へと避難する3人であった。

晴風、艦橋

鈴「だけど、誰が機雷なんて敷設したんだろう?・・・危ないよね?」

艦橋では、鈴が何で、この海域に機雷が設置されているのか疑問に思い、それを口にした。

すると、

幸子「『過去に敷設された機雷が時代を超えて蘇ったんだ!・・・サルガツソに巻き込まれ消失した機雷が、あつこんな所に。某国の陰謀に違いない!』」

幸子が一人芝居を始めた。

鈴「陰謀つて・・・」

薫(まあ、ちよつと違うけど似たような経験をしているからね・・・私も・・・でも、言ったところでそう簡単に信じてはもらえないだろうけど・・・)

確かに薫も龍之介達Gフォースも異世界から転生したがコレを言ったところでそう簡単信じてはもらえないだろう。

幸子や百々あたりは、興味を持ちそうだが

ましろ「この辺りの機雷は恐らく・・・各国が自国の権益を守り、活、航路帯防御用に敷設したんだろう・・・20世紀初頭にな・・・」

ましろが幸子に現実を付き付ける。

幸子「現実には浪漫ないですなぁ・・・」

薫「納沙さんはちよつとぶつ飛びすぎな思考を持っている様な気がするわよ・・・」

ルーマーメイドよりも俳優の方が似合っていたんじゃないかな？」

幸子「ええー!!ちよつと酷くないですか、教官!!」

2人に言われ、ちよつとむくれる幸子。

鈴「戦争が起こつていたら大変だったよ・・・」

鈴がもし戦争が起こつていたらその惨状を想像する。

薫「そうね・・・戦争は悲惨なモノよ・・・罪の無い人は、住む土地を奪われ、略奪や虐殺で命を奪われる・・・それだけじゃないわ、戦争が終わつても、また別の戦争が起きる・・・そして、それが最大の過ちを起こす原因になるのだから・・・」

薫は自分の世界で起きた世界大戦や水爆実験などの悲劇。

また、それに乗じて起きたゴジラ戦を思い出して遠い目をする。

鈴「教官?」

幸子「まるで、戦争を経験した見たいな言い方ですね・・・」

薫「ち、違うわよ!・・・もしもそう成るかも知れないと想像したの・・・」

幸子の言葉に薫は、誤魔化す。

幸子「そうですか?」

薫はあくまで自分の想像だと言うが、幸子は想像しただけなのかと疑問に思った。

ましろ「そうならない様、国を超え、海を守る為にルーマーメイドやホワイトドル

フィンが設立されたんだろう?」

ましろがブルーマーメイドやホワイトドルフィンが設立された理由を言う。

明乃「ブルーマーメイドとホワイトドルフィンの主任務は、人命救助や機雷掃海とかの航路を守る事だもんね!」

それについて、明乃もブルーマーメイドとホワイトドルフィンの主任務を言う。

鈴「海に生き・・・」

明乃「海を守り」

幸子「海を」

志摩「往く」

『それがブルーマーメイド!!』

薫以外の全員がブルーマーメイドの標語を高々に言う。

薫（志が高いのは良い事ね!・・・我々Gフォースと同じね・・・だからこそ、貴方達には危険な目にはあつて欲しくないのだけれど・・・）

薫はブルーマーメイドの標語を高々に言う明乃達を見守る様に明乃達の将来を案じた。

スキッパーの助走距離を十分に保てたので、いよいよ針路上の機雷の掃海となり、スキッパーを降ろして、更に掃海具を降ろした。

スキツパーの乗員には、明乃代わりに理都子と果代子が乗る事になった。
スキツパー

薫『安全には十分に注意して!』

薫が掃海作業に出る2人に注意を呼び掛ける。

『りよ〜かい』

2人は、注意しながら、発進する。

スキツパーが進むに連れ、掃海具が展開されて行く。

晴風、艦首

美甘「展開よし!」

美甘が艦首の方で展開を確認した事の無線を入れる。

晴風、艦橋

明乃「掃海開始!!」

掃海開始の号令が出る。

スキツパー

理都子「了解!全速前進・・・!!」

掃海開始の号令の元、理都子は、掃海を開始し、スピードを上げる。

果代子「あんまり飛ばさないでよ・・・!!」

隣から果代子があんまり飛ばさないでよと理都子に注意する。

やがて、掃海具が展開されて行くと、幸子が教室で説明した通りに系維機雷の系維策が掃海具のワイヤーカッターによって切られて海上へと浮いてくる。

果代子「りっちゃん浮いてきたよ・・・」

機雷が浮いてくるのを果代子が理都子に報告する。

理都子「よし、どんどんやる：：はっ!?!」

それを聞いた理都子は、調子に乗って、スピードを上げようとした、その時

ドカーン!!

晴風、炊飯所兼食堂室

『うえ!?!』

前方の海上で爆発が起き、その衝撃は、晴風艦内にも伝わった。

晴風、艦橋

明乃「はっ!?!」

薫「今のは?」

突然の爆発に明乃と薫は、一体何が有ったのか

ましろ「報告!!」

晴風、見張り台

ましろが見張り台に現状を報告させる。

マチコ「前方で水中爆発・・・スキッパーが巻き込まれました!!」

マチコの報告では、如何やらスキッパーが掃海中に機雷と接触、爆発に巻き込まれた様だ。

晴風、艦橋

明乃「えっ!？」

薫「な、何ですって!？」

マチコの報告を聞いて、2人は、驚愕する。

鵜『救難信号が出ています!!』

慧「反応二つ!安全装置です!!」

更に鵜と慧から救難信号が出ていると報告が続く。

明乃「助けにいかない・・・」

明乃は、思わず直ぐに理都子と果代子の助けに行こうとするが

ましろ「また!？」

明乃「はっ!？」

ましろ「また、艦長が持ち場を離れる気か!？」

それを見かねたましろが、また、艦長が持ち場を離れる気かと言い、助けに向かう明

乃を止める。

明乃「えっ……で、でも……」

ましてろに言われ、明乃は、戸惑う。

薫「……ふく」

そんなましてろに薫が言おうとした時だった。

鈴「私が行きます!!」

何と鈴が二人を助けに行くと言い出した。

『えっ!』

鈴の言い出しに3人は、驚く。

普通なら、怖がって、引つ込む鈴なのに

とは言え、鈴は、2人の救助に向かう。

鈴「艦長!手伝ってください!!」

更に鈴は、明乃にも協力を申し出る。

明乃「は、はい!」

明乃は、直ぐに承諾する。

鈴「副長!後はお願いしても良いですか?」

鈴は、ましてろに留守をお願いするが

ましろ「ええ!?!:ああ、い、いや……」

鈴の予期せぬ事にましろは、困惑していた。

薫「副長は、困惑しているから、後の事は、私が何とかするわ!!……2人とも気を付けてね!!」

困惑するましろに代わって、薫が指揮を執る。

明乃「教官、後をお願いします!!……総員、艦の安全が最優先……万理小路さん、他に機雷がないか徹底的に調査を……」

『了解!』

薫に留守を任せ、鈴と明乃は、2人の救助に向かう。

薫（ありがとう知床さん!!）

薫は、鈴が戸惑う明乃を連れ出してくれて、感謝していたが

ましろ「……違う!」

明乃と鈴の行動にましろが

幸子「え?」

ましろ「常に艦で指揮をするのが艦長でしょ!!……オールウエイズオンザデツキつてそういう事じゃないのか……!!」

とまたしても切れ、心の底から叫ぶ。

薫「ん・・・」

それを見かねた薫は

バチ!!

ましろを引つ叩く。

『あっ!?!』

ましろが薫に叩かれたのを見て、艦橋に居る皆は、啞然する。

薫「いい加減にしなさい!!・・・艦長と航海長が2人を救助しようと思つたのに、貴方は、何しているの!!・・・唯見ているだけなの・・・違うでしょ!・・・副長なら、自分がする事ぐらい分かっているでしょ!!」

薫は、ましろに呆れていた。

何か起こつたら、いつも助けに飛び出す明乃に比べて、ましろは、何時も何もせず、唯当たり前の事をしていただけ

何故、自分から行くと言わないのか、そんなましろに薫は、腹が立って仕様なかったのだ。

ましろ「・・・」

薫に怒られ、ましろは、何も言い返せず、薫に叩かれたほつぺを手で押さえる。

薫「ほら・・・早く指揮を取りなさい・・・」

そんなましろに薫は、無理やり指揮を取らせる。

ましろ「……は、はい……」

薫に強制され、ましろは、空しく明乃に代わって指揮を取り、甲板に媛萌と百々と美波を待機させるよう命じる。

スキップー

鈴「私は、嬉しかったよ！」

明乃「え!？」

鈴は、明乃の背中に手と顔を当てながら言う。

鈴「岬さんは、逃げ回ってばかりだった私を認めてくれた!!」

明乃「……」

鈴「私は、理想の艦長がどんなのかは全然分かんない……でも、うちの艦長が岬さんで良かった。」

鈴は、自分を認めてくれた明乃が艦長で良かったと感謝する。

明乃「……ありがとうリンちゃん!!」

鈴の言葉を聞いて、明乃は、嬉しく思い、遭難した理都子と果代子の元に向かう。

安全装置の中

果代子「……ん!？」

その頃、機雷の爆発に巻き込まれた果代子は、爆発と同時に作動した安全装置の筏の中で目を覚ます。

果代子「あれ……? 私如何したんだっけ……? あつ、掃海に出つて……そうか……安全装置の中……」

果代子が何で自分が安全装置の中に居るのかを思い出した。

果代子「りっちゃん! りっちゃん何所……!?!」

そして、果代子は、一緒に乗っていた理都子の事を呼ぶが、彼女の姿は見当たらない。

果代子「はっ……!?!」

そして、波によつて安全装置が大きく揺れ、果代子の不安が恐怖へと変わる。

果代子「誰か助けに来てくれるかな……? くれるよね? 絶対……」

果代子は、恐怖のあまり、肩が震えてきて、このまま誰か助けに来ないんだろうと思つた時だった。

そんな時、出入り口のチャックが開けられる音がして、誰かが中を覗き込んで来る。

果代子「きゃあ……!!」

果代子は、等々耐え切れなくなり、悲鳴を上げる。

明乃「かよちゃん……大丈夫!?!」

出入り口から現れたのは、2人の救助に向かった艦長の明乃だった。

果代子「!?」

明乃「さあ・・・掴まって!!」

明乃が果代子に手を伸ばす。

果代子「あっ・・・艦長……」

果代子が明乃の手を掴み、安全装置から外へ出ると

理都子「かよちゃん!!」

果代子「あっ!?!」

果代子の目の前に一緒に乗っていた理都子の姿が有った。

理都子の方も既に鈴に救助されており、見た所大した怪我はない様子。

果代子「りっちゃん……良かった……」

理都子の無事な事に思わず涙を流す果代子であった。

晴風、艦橋

まゆみ「はっ!?!……救出に成功!!」

『やった……!!』

艦橋から双眼鏡でその様子を見ていたまゆみが報告をすると、艦橋に歓喜の音が沸き上がる。

ましろ「……」

そんな中、ましろは4人が無事に帰ってきた事に喜びを感じつつも、どうも浮かない顔をしていた。

それを見た薫が

薫「そんな顔しないで副長!・・・折角、2人が無事だったんだから、此処は、喜ぶべきよ!」

と言って、ましろを慰めようとするが

ましろ「・・・」

薫「ましろちゃん・・・」

ましろは、薫の言葉に耳を貸さなかった。

やはり、ましろは、明乃のやり方を許さなかったのだろう。

その後、救助された理都子と果代子は、晴風に収容され、2人に代わって、後の掃海は、媛萌と百々が替わりに行い。

数時間後、進路上の機雷は、全て処理された。

残りの機雷は、海図に位置を記録して、横須賀女子海洋学校に報告、その後、学校から残りの機雷については、ブルーマーメイドとホワイトドルフィンが掃海する事になった。

機雷原を抜けた晴風は、再び武蔵の搜索へと進路を南へと取る。

晴風、炊飯所兼食堂室

やがて、時刻は、夕方となり、美甘は、ミーナの為に用意したドイツ料理を出す。

美甘「えーと：：先ず、ドイツ料理と言えばコレ！・アイスパイン！」

まず、最も代表的なアイスパインを出す

ミーナ「うーん：北方の料理でうちの方ではシュバイネハクセ：：つまりローストする事が多かったな・・・」

美甘「えっ？」

同じドイツ料理でも地方によって、作り方が違う様で、ミーナの故郷とは違う作り方をしてしまい、ミーナからいきなり駄目出しを受ける美甘。

美甘「じ、じゃあ次は定番！ザワークラウト！」

だが、1度目では諦めず、次は、定番のザワークラウトを出す

ミーナ「チツ、チツ、チツ、ザワークラウト・それとこれは酢漬けのキャベツじゃな・・・本当は、乳酸発酵させるのが本物じゃあが：：」

またしても駄目出しを食らう美甘。

美甘「うっ、っ、次はカツレツ！」

だが、それでも諦めず、今度は、カツレツを出す。

理都子「とんかつだね・・・」

果代子「カツってドイツ料理なの……?」

理都子と果代子がかつレッツを見て、意外そうに呟いた。

ミーナ「おお、シュニッツェルじゃな! ……我が国では、こんなに厚く切らないぞ!」

ミーナは美甘の作ったかつレッツの厚さを見て、ドイツとは、違い、厚く切り過ぎだと駄目出しを食らう。

美甘「うっ、っ、じゃあこれぞ真打! ドイツ料理と言えばやっぱりハンバーグ!!」

追い詰められた美甘は、遂に最後の料理、ハンバーグを出す。

ミーナ「これは……フリカデレか? ドイツではあまり見かけない料理だぞ……」

美甘「えええ……!!」

ハンバーグは、ドイツ料理だと思っていた美甘であったが、ミーナの駄目出しで彼女の作った料理は全て全滅した。

ミーナ「それよりこの蒸かしたジャガイモとアイントプフは美味しそうじゃな……」

ミーナは、美甘の作った料理より、隣に置いてある誰かが作ったドイツ料理を気にいる。

ミーナ「ワシは、他にヴルストがあれば海では文句は言わんぞ!」

美甘「これ誰が作ったの……!?!」

美甘は、涙を流しながら誰が作ったのかと問う。

『私達です……』

何とこの料理を作ったのは、杵^キ姉妹で、2人は、気まずそうに手を上げる。

美甘「ガ、ガン……!!ま、負けた……」

バターン

その事実を知った美甘は、シヨックを受け、その場に倒れた。

ミーナは美味しそうに杵^キ姉妹が作ったジャガイモを使ったドイツ料理を食べ始める。

薫「まあ、外れはしたけど、十分美味しいわよ伊良子さん!!」

薫が美甘をフォローしようと、彼女の作ったドイツ料理モドキを口にする。

薫「ミーナさんも伊良子さんが折角作ったんだから、食べて見て、美味しいわよ!!」

ミーナ「おお、そうじゃな!」

皆がワイワイとドイツ料理を食べている様子を見ていた明乃は、微笑むのであった。

晴風、医務室

その頃、晴風の医務室では

美波「一応、抗体らしき物は出来た……本当にこれが効けば良いが……」

美波が何かの液体が入った試験管を置き、1本の注射を手に持ち、背後に居る媛萌と

百々の方へと顔を向ける。

百々は、媛萌を羽交い絞めする。

美波「これを知るは、これを行うに如かず・・・学はこれを行うに至りて、止む・・・」

美波は、注射を持ち媛萌に近づく。

媛萌「止めて美波さん!!」

媛萌は、美波が手に持つている注射を自分がやると思い声を上げる。

媛萌「止めて・・・!!」

美波「何かあつたら止めるんだぞ・・・」

媛萌「うつ・・・かあ・・・!!」

媛萌は思わず顔を背けて目を閉じる。

しかし、いくら待っても注射針を刺される様な痛みが来ない。

恐る恐る目を開けてみると、美波は自分の腕に注射をしていた。

媛萌「美波さん・・・注射を打つんなら消毒ぐらいしなよ、バイ菌が入ったら大変だ

よ・・・」

と、百々に羽交い絞めにされながら媛萌は、美波に一言そう呟いた。

そんな時、医務室のドアが開き

薫「・・・何をしているの貴方達!?!」

炊飯所兼食堂室に居た筈の薫が医務室にやってきた。

媛萌『きよ、教官!』

美波「……………」

薫「籾木さん何をしているの!？」

医務室にやってきた薫は、目の前の光景を見て、何をしているのかと美波に問う。

美波「……………人体実験」

薫「何て事を!?!……………貴方達、何で止めなかったの?」

人体実験と聞いて、薫は、何故止めなかったのか、媛萌と百々を責める。

媛萌「私達は、その……………」

百々「やばいッス!」

薫に責められ2人は、困惑する。

美波「2人を責めないでほしい教官……………これは、私が勝手にした事……………」

美波は、これは、全て自分が勝手にした事と2人を庇う。

薫「それなら、何で人体実験をする時、私を呼ばなかったの?」

薫は、人体実験をする時、何故自分を呼ばなかったのか問う。

美波「その必要は、無かった……………人体実験なら、私だけで事足りる。」

しれに對して、美波は、人体実験は、自分だけで十分だと言うが

薫「そんな事を言ってるんじゃないの……私は、鏑木さんが心配なの!……もし鏑木さんに何かあったら、私……」

薫は、そんな事は、関係なく、美波を叱る。

もし人体実験が失敗し、それで美波が死んだら、薫は、それに耐えられなかったかもしれない。

ましてや美波は、大事な生徒なのだから

薫は、美波の事が心配だったのだ。

美波「……教官」

薫「もう絶対に1人で勝手にしないで……良いわね鏑木さん!!」

薫は、もう勝手に人体実験しないよう美波に約束させる。

美波「……分かった。」

美波は、大人しく承諾する。

『……』

その光景を見ていた媛萌と百々は、流星は、教官だと、感心していた。こうして、ウイルスに対する抗体の研究は、着々と進んでいる。

横須賀基地

一方、日本本土の横須賀基地から龍之介率いるGフォース西部方面艦隊が武蔵、その

他の艦艇の捜索に向けて出撃しようとしていた。

空母大鳳、艦橋

龍之介「出港用意！・・・艦長代理！」

美奈「はっ！・・・出港用意！錨上げ!!」

出港用意の号令の元、空母大鳳以下の艦艇は、錨を上げ、出港用意をする。

既に基地に置かれていた艦載機は、全て積み込みが完了し、更にあの新型試作戦闘機烈風も大鳳に積み込まれていた。

烈風は、まだ飛行テストを終えていなかったが、真霜の進言で今回の任務にテスト兼実戦に使用する事になった。

それと今回の出撃に先立ち、先に武蔵と戦闘した東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊の残存艦艇3隻が龍之介のGフォース西部方面艦隊と合流した。

しもつき、艦橋

東舞鶴の主任「教頭先生!!・・・今回の出撃で何故、我々まで・・・」

主任は、今回の出撃に先の戦闘で被害に遭った東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊が何故、駆り出されたか問う。

東舞鶴の教頭「恐らく任務に失敗した我々に対する懲罰だろう。」

教頭は、先の戦闘に敗北した懲罰だと考えているが、実は、今回の教員艦隊の再出撃

は、懲罰ではなく、Gフォース西部方面艦隊への補充だった。

前も言った通り、龍之介が率いるGフォース西部方面艦隊の戦力は、空母1隻に巡洋艦1隻、護衛艦1隻、補給艦1隻しかない。

これでは、空母大鳳の護衛が2隻しかない。

もし大鳳を失えば、武蔵に対抗する唯一の戦力を失ってしまう。

それを考えた深町は、東舞鶴男子海洋学校の嶋田校長に余力をお願いし、武蔵との戦闘の時、遅れて戦場に駆け付けたあきづき型教員艦3隻を合流させたのだ。

空母大鳳、艦橋

実「しかし、深町国交相には、驚きました!?!? . . . 雅か、補充があるとは . . .」

龍之介「それだけ我々に期待しているんだ . . . 最早国内には、武蔵とともに戦闘出来る艦艇は、残っていないからな . . .」

龍之介は、現状を言いながら、ある事を思い出していた。

それは、出撃の数時間前の事、龍之介が出撃前に功と古庄が入院している横須賀病院にお見舞いに行つた時の事

横須賀病院、病室

功「そうですか . . . やはり行かれるのですか?」

龍之介「ああ、もうこれ以上、薫達だけに任せる訳にはいかない、早急に武蔵を捕獲

しなければ……」

龍之介から現状や任務の事を聞き

功「ん……正直悔しいです……私も行かなければならないのに……」

手を拳に変えながら、悔しがる功。

龍之介「参謀は、まだ、体が治っていない、無理は、禁物だ!!」

功「……」

龍之介「ふっ……功の事をお願いします……古庄教官!!」

龍之介は、功を古庄に託す。

古庄「ええ……貴方も如何かご無事で……」

託された古庄は、龍之介にも如何かご無事と言うが

龍之介「心配は、いりません……俺には、あいつが居るから、大丈夫です!!」

龍之介には、真霜が付いているので、心配いらなかった。

時系列は、艦橋へと戻る。

空母大鳳、艦橋

龍之介「さて、そろそろ行くか!」

そんな事が有りながら、龍之介は、武蔵の搜索へと向かう。

美奈「両舷前進微速!!」

機関が始動し、各艦艇は、出港する。

艦が埠頭を離れようとした時

信吾「准将! 埠頭から手を振っていますよ!」

埠頭から誰かが手を振っていた。

龍之介「ん?」

龍之介は、デッキに出て見ると

龍之介「真霜!?!・・・見送りに来てくれたのか?」

何と手を振っていたのは、真霜だった。

龍之介「あいつ・・・こんな忙しい時に態々、俺の為に・・・」

武蔵搜索で忙しい中、態々見送りに来てくれた様で、そんな真霜に龍之介は、嬉しくなり手を振る。

龍之介「目指すは、武蔵!!・・・待っている薫!!」

こうして、Gフォース西部方面混成艦隊は、武蔵とその他の艦艇搜索の為、横須賀を
出撃して行った。

画して、武蔵搜索に龍之介達も加わる事になった。

その頃、とある太平洋沖

ゴオオオオ・・・!!!

海底の地の底から、まるで何かが目覚めた様に、その巨大な生き物は、今動き出そうとしていた。

第23章 嵐でピンチ!

4月19日

小笠原沖

横須賀を出撃した龍之介達だったが、出港して、3日目の事、武蔵搜索の為、哨戒に出そうと早期警戒機E2Gを発進させようとした時だった。

射出用カタパルトの全てが故障してしまい発進不能に陥った。

更と同じくして、今度は、艦載機用エレベーターも故障した。

龍之介「急いで出したとは言え、雅か直ぐ故障するとは……ついていないな……」
龍之介達は、早くもこれらのトラブルに悩まされた。

とは言え、修理に2日が掛かり、修理完了後、ようやくE2G 2機を飛ばし、搜索を開始した。

E2Gが飛ぶ光景を艦橋で見ている東舞鶴男子海洋学校の教員達は、

東舞校の主任「あれが噂に聞いていた航空機ですか!？」

東舞校の教頭「ああ、まだ試作中らしいが、実際見るのは、初めてだ!!」

東舞鶴男子海洋学校の教員達も航空機の事は、知っていた。

まあ、航空機などの技術は、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンのみを提供する事が決まっているのだから、知っているのは、当たり前だが、実際に航空機を見るのは、初めてだろう。

とは言え、トラブルに悩みながら、武蔵を捜索をしている頃、薫が居る晴風でも甚大なドラブルが起きていた。

4月22日

20:30

マリアナ沖

晴風、大浴場

それは、砲雷科の光、美千留、順子、楓、理都子、果代子の6人が、入浴している時だった。

光「くうう……!!」

美千留「んふふ……」

順子「気持ちいー!!」

果代子「全方位、泡わだね……」

理都子「ああもう髪の毛キシキシ!!」

光、美千留、順子が気持ち良さそうにシャワーを浴び、果代子が辺りが泡わだと言い

ながら、隣では、理都子が自分の髪がギシギシになったのを気にしていた。

そんな時

楓「はあ……ん!? ……これは……」

光、美千留、順子と同じくシャワーを浴びていた楓は、ある事に気づく。

光「まりこう、如何したの?」

何かに気づいた楓に如何したかと問う光。

すると、楓は、シャワーを浴びるのを止め、タオルを体に巻いて

楓「お亡くなりになります……」

そう呟くと、シャワーからお湯が出なくなつた。

光「ま……雅か……」

光は、震えながら、お湯が無くなつたのに気づく。

この日から晴風は、深刻な水不足になつたのだ。

その頃、艦橋では、薫と明乃達が海図と睨めっこをしていた。

幸子「マークされたのが、武蔵が目撃された位置です」

海図の上には武蔵の目撃地点に印がされているが、法則性がなく、どの位置に居るか

は、不明であつた。

明乃「何所へ向かうつもりなのかな……?」

幸子「んん・私の推測ですが、本土に近づきたいのかも…」

薫「情報が少ないすぎるから、そう断定するのは、速いわ…」

芽衣「学校からは、武蔵を追いかけろって言われたんだよね！」

まして「救援部隊が出てるとは言え、現在、確実に連絡が取れて、直ぐに動ける艦が我々しかないらしい…」

現在、龍之介達の部隊が増援に出ているが、その他の艦艇は、武蔵以外の行方不明の艦艇を捜索中で、今現在、直ぐに動ける艦は、晴風のみだった。

芽衣「ああ、美波さんが言っていた通り、皆あのネズミっぽいのに如何に課されちゃったのかな？」

薫「その可能性はあるわね……恐らく武蔵も……」

幸子「取り合えずは、この海域で捜索して見るしか無いですね？」

と言う事で取り合えずは、この海域で武蔵を捜索する事になった。

そんな中、お風呂呂に入っていた光達からシャワーが止まったと言う連絡が入り、知らせを受けた薫と明乃、まして、幸子、応急委員の媛萌、百々が艦底の貯水タンク室に向かう。

晴風、貯水タンク室

貯水タンク室に付き、媛萌と百々は、タンクの残水量を確認する。

すると、タンクの残り残水量がかなり減っていた。

媛萌「艦長……!!以上見当たりません……タンクの修理はした筈なんです……」
百々「まだ何処からか漏れてた見たいツス!」

武蔵との戦闘後、貯水タンクの修理はしたものの、何処かで水が漏れてた様だ。

更に運が悪く蒸留装置も今は不調で海水からの蒸留が出来ない状態となっている。

まして「補給を要請するしかないですね、かんちよ……」

明乃「うん……そうだね……」

薫「……」

2人の関係は、まだ修復できていない様で、その様子を横で見ている薫は、2人を見つめる。

幸子「はぁ……補給艦と合流できるのは5日後です!」

まして「それまで節水だな……」

残念ながら、補給艦と合流できるのは5日後でそれまで水は、持たないだろう。

となるとやる事は、水の使用量を減らす事、つまり節水である。

薫「そうね!……しばらくは、皆には、海水で我慢して貰うしかないわね……最も皆が我慢できればの事だけ……」

だが、晴風の生徒が節水に我慢できるか、薫は、不安だった。

何故なら、この前のトイレトペーパーの件で晴風の生徒がトイレトペーパーを無断で使用する生徒が多かったので、2週間分のトイレトペーパーがあつという間に無くなつてしまった。

今回も貯水タンクの水漏れが原因だが、一番の原因は、水の使い過ぎである。

晴風の生徒は、飲み水以外、洗濯や特に入浴に水をかなり使っている。

普通なら、洗濯や入浴には、海水を使うのだが、晴風の生徒の大半が海水を使うのが嫌だった。

今から、海水を使うとして、晴風の生徒が我慢できるのか、答えは、直ぐに出る。

明乃「ココちゃん、天気図見てくれる？」

幸子「はい！」

こうして、晴風の辛い五日間の節水生活が始まった。

4月25日

10:40

晴風が節水を始めてから3日後、節水している晴風の生徒の反応は

晴風、医務室

聡子「ああ、喉乾いた・・・」

医務室では、ベッドで 聡子が横になりながら喉乾いたと愚痴る。

美波「ラムネを飲めば良かろう」

美波はパソコンを打ちながら、ラムネを飲めば良かろうとあっさりと 聡子の愚痴を返す。

聡子「もう飽きたぞな・・・」

如何やら、毎日ラムネばかりだから本人としては、飽きてしまった様だ。

美波「そうか」

慧「太るしね・・・」

慧もラムネを大量に飲めば、太ると理由を話す。

確かに、近頃の乙女は、体重は気にするのだ。

晴風、教室

あかね「お水を使わないメニューってあったかな？」

教室では、媛萌、百々、美甘、杵_×姉妹が節水を呼び掛けるポスターや貼り紙を作っていた。

百々「トイレは如何するツス？」

あかね「ええ嘘!?!トイレ禁止?」

杵_×姉妹がトイレの問題を心配をする。

媛萌「トイレ流すのは海水だから・・・」

百々「ああ、そっか!？」

媛萌がトイレは問題なく使用できる事を伝える。

ほまれ「あんなにトイレットペーパー買い込んだのに……」

オーシャンモールでトイレットペーパーを買い込んだのが何だか無駄になった気分だった。

晴風、便所

洋美「……ヒツ!? ……ヒイイ……!?」

便所で洋美が突然、悲鳴を上げる。

媛萌「ん?」

教室で作った節水ポスターを便所の入口の横の壁に貼ろうとした媛萌が洋美の悲鳴に気づく。

明乃「あつ!」

更に便所に入ろうとした明乃も気づく。

洋美「……誰だ!!塩水使ったのは!!」

『あつ!?!』

洋美「出て来い!!どいつだ!!」

如何やら、まだ海水を使うと言う知らせがまだ行き届いておらず。

それを知らないで洋美が、ウオシユレットを使い、結果、洋美のお尻に海水が合わなかったみたいで洋美は、便所の中から怒声を上げる。

媛萌「忘れてった……」

洋美の怒声を聞いた媛萌は、ヤバイ表情をする。

海水使用の被害は、便所以外でも

晴風、大浴場

芽衣「クロちゃんの話、聞いた？」

志摩「うい！」

大浴場では、芽衣と志摩が入浴する為、服を脱いでいた。

そして、2人は、入浴する準備ができ、入浴しようとした時、扉には、本日より浴槽とシャワーは海水を使用と書かれた貼り紙があった。

芽衣「あっちゃ……」

しま「うう……」

芽衣「3日ぶりなのに：洗うべきか？」

それを見た2人は、海水が使われている為、入浴するのを諦めるのか迷う。

しかし、3日も待ったので、身体や頭を洗いたい。

そんな時

薫「2人とも何してるの？」

後ろから薫が入浴しようとしてきた。

芽衣「でも教官……」

志摩「うん……」

薫「海水が何、こんなんじや、海の女にはなれないわよ！」

薫が強引に2人を入浴させる。

晴風、炊飯所兼食堂室

芽衣「……」

志摩「……」

薫が強引に入浴させられた結果、2人の頭は、ボサボサ状態になった。

ミーナ「何じや、その頭は？」

隣でミーナと幸子が2人のボサボサ状態について尋ねる。

芽衣「見事に爆発しちやったね！」

志摩「うん……」

海水が2人の髪に合わなかった見たいで、そのせいで2人の頭は、ボサボサ状態となった。

そんな2人の横を

薫「うっふるん．．．まだまだ遠いね！」

楓「髪は女の命ですのに：：：」

『あ．．．．．』

同じ海水を使用した筈なのに薫や楓の髪はちつとも痛んでいなかった。

志摩「キラキラ：：：」

芽衣「あれ．．．何で？」

ミーナ「知るか！」

全く痛んでいない薫と楓の髪を芽衣と志摩は、信じられないモノを見た様に見ていた。

数時間後

更に水不足は、生徒達の食事に影響している。

食事に関しては、なるべく水を使わない料理という事で缶詰食品が提供されたが

麗緒「鯖の水煮にトマトの水煮．．．」

留奈「ミックスベジタブルにカンパン：：：」

麻侖「見事な缶詰料理だな．．．おい！」

桜良「贅沢言わない！」

留奈「まつ、しょうがないよ．．．食べよう！」

麻侖「一雨降らねえかな？」

麗緒「もう限界だよ……」

缶詰食品とは言え、生徒達は、嫌がったが、今の状況じゃ贅沢も言つてられないので、仕方なく食べるしかなかった。

晴風、洗濯室

まゆみ「如何しよう……」

鶯「パンツが潮の香りつて嫌だよね……」

まゆみ「うん……」

秀子「何かね……」

洗濯室でも洗濯に海水を使用しているので、特に下着を洗濯に出す事を嫌悪したり躊躇ったりする生徒も居た。

そんな中、晴風の生徒達が海水で苦労しているのに、薫は、難なく海水を利用してゐる。

例えば、自分の制服や下着の洗濯は、洗濯機を使わず、甲板で、たらいに海水を入れて、洗濯をするし、また、先のように入浴など海水なのに平気で入浴する。

そんな薫を皆は、『なぜ、教官は、平気なんだろう』『やっぱりブルーマーメイドだからかな』などと思うが、薫が食堂室で缶詰め料理を平気で食べてると機関科の4人が……

麗緒「あのう教官!」

薫「ん!?・・・如何したの?」

桜良「皆が苦勞しているのに教官だけ、何でそんなに平気なんですか?」

留奈「やっぱりブルーマーメイドだからですか?」

空「違うでしょう・・・」

4人は、何故、薫がそんなに平気なのか、聞いて見た。

すると

薫「んん・・・そうじゃないんだけど・・・私が学生の時、乗艦していた艦が晴風
見たいな艦で、しかも教官から水は、贅沢品だから、必要な時にしか使わない決まりに
したの・・・」

『えええ・・・!!!』

麗緒「何で?」

薫の話聞いた4人は、驚く。

麗緒「何で?」

桜良「如何してですか?」

4人は、理由を聞く。

薫「それは、任務や活動が長い時だと、いざ必要な時に、無かつたら大変でしょう。」

空「成程……」

留奈「でも、水が無くなったら、補給を要請すれば良いじゃない？」

薫「それは、無理よ！……水などの補給は、実習後でしか受ける事が許されていないかつたし……もし無駄に水を使った事で無断で補給を受けたら、減点や罰が待ってたし……」

薫が入籍していた国防軍の江田島海士学校では、美由紀（教官時代の階級は、大尉）が教官をしていて、美由紀は、薫達生徒の忍耐力を試す為、長期間の水と物資の補給を禁止し、更に無断で補給艦と補給したら、減点や重い罰（頭丸坊主と腹筋200回で3ヶ月の外出禁止と反省文の提出）が待っていた。

それに耐えられなかった生徒は、無断で補給艦と補給して、減点や重い罰を受け、更には、自首退学（退学するなら、今までの学費を全額返済する事になる。）する者も居た。薫と次郎が乗艦していた駆逐艦そよかぜ（学校内で最低クラス）は、この試練に耐え抜く事が出来たのは、雅に2人の指揮と乗員の活躍が有つての事だ。

留奈「うわぁ……罰は、嫌だな……」

話を聞いた留奈は、嫌そうな顔をする。

桜良「そうね……」

空「て言うか……一番罰を受けるのは、留奈かもね！」

留奈「何で私よ!!」

空「入学試験で留奈・・・補欠合格だったじゃん!」

ギク!?

麗緒「そう言えば、合格発表の時、留奈・・・確か自分が合格の枠に入っていないかったんで、ショックで人間なんて辞めてやるうとか言つて、海に飛び込んだ事が有ったね!」

2人は、入学試験の合格発表の時の出来事を思い出す。

ギクギク!?

桜良「そうそう・・・それで留奈、溺れたもんね・・・」

留奈「や、止めて・・・!!それ言わないで・・・!!」

思い出したくもない事を思い出され、留奈は、困惑する。

『ハハハ・・・!!』

困惑する留奈に3人は、笑う。

薫（な、何か、この4人の将来不安になってきた・・・）

それを見ていた薫は、4人の将来が不安になった。

晴風、艦橋

ガフ!!!

艦橋では、ましろがラムネを飲んで、堆げつぶをしてしまう。

ましろ「はっ!？」

堆げつぷをして、顔を赤くするましろ。

明乃「あっ!?!・・・炭酸駄目なのシロ・・・副長・・・」

ましろが炭酸ダメなのに気づいた明乃だが、まだましろに言いきれなかった。

隣では、幸子が百々が作った節水に関する同人誌を読んでいた。

すると

鈴「あ、あのう・・・もう直ぐ霧の中に入ります。」

鈴がもう直ぐ濃霧の中に入ると言った。

明乃「あつ、うん!」

晴風は濃霧の中へと入って行く。

明乃「サトちゃん探照灯をお願い。」

濃霧の中で衝突を避ける為、探照灯を照らす。

明乃「ココちゃん霧笛鳴らして!!」

ボオオオオー

更に霧笛を鳴らす。

その様にして、濃霧の中を航行していると

晴風、甲板

ポタ

理都子「ん？」

ポタ

果代子「あっ!？」

ザアアアアー……

『ああ……雨だ!!』

雨が降り始めた。

生徒達は、大喜びし、直ぐに水着に着替えて甲板に出る。

何人かは、雨水を貯めるバケツを置いて、雨水を貯め、それ以外は、塩けだらけの身体を洗う。

薫も黒のビキニ水着に着替えて、身体を洗った。

しばらくして、生徒達が雨に浮かれている時だった。

明乃「私も手伝うよ……!!……あっ……」

雨が段々強くなり、更に強風が吹き、波で艦が大きく揺れ始めた。

晴風、艦橋

志摩「うい……」

ましろ「雨水貯めると傾じゃないぞ！」

晴風は、低気圧の中に突っ込んでしまった様だ。

晴風、甲板

あかね「いたい……」

ほまれ「揺れる……」

艦が大きく揺れ、甲板に立てないほどに強くなり

薫「不味い!? ……皆、急いで艦内に……」

それを見た薫は、皆に急いで艦内に戻るよう告げる。

媛萌「ああ……折角貯めた水が……」

百々「撤収ツス!撤収!大低気圧ツス……!!」

不足していた水は、何とか半分は、確保できたが、後の半分は、甲板に置きっぱなしになり、諦めざるおえなくなった。

バーン!!

低気圧は、酷くなり、マストに雷が落ちた。

明乃「……うわあ……!?!」

雷が落ちた事に明乃は、怖がって蹲る。

其処へ、薫が逃げ込んできて

薫「危機一髪ね!……ん?……艦長?……何してるの?」

扉のところで蹲つてゐる明乃を見つけた薫は近寄る。

薫「如何したの艦長? . . . 具合でも悪いの?」

明乃「だ、大丈夫です。」

明乃はゆつくりと立ち上がるが

バーン!!

明乃「うわあ . . . !?」

待たしても、雷が落ち、怖がる明乃は、堆、薫に抱き付く。

薫「ちよつと本当に大丈夫なの?」

美波「艦長、教官にお話が . . .」

その時カツパを来た美波が来た。

『へっ?』

晴風、艦内

鵜『荒天につき上甲板の通行は禁止します . . . 繰り返します . . .』

鵜が艦内放送で上甲板の通行を禁止する旨を伝える。

そんな中、慧とマチコは、洗濯物を運んでいた。

慧「上通れないと不便だよね!」

マチコ「」

慧「今日のご飯何だろう？」

そう言いながら、洗濯物を運んでいると

麗緒「でその時さ、相手の友達がね・・・」

反対側から麗緒と桜良がやって来て

『あっ!?!』

4人は、出くわしたが

慧「どうぞ！」

慧とマチコは、直ぐに右側に寄り、2人に道を譲る。

麗緒「へへサンキュー!!」

麗緒と桜良は、そのまま通るが

慧「ふう!?!」

桜良「御免ね・・・」

狭い艦内の為、慧の顔が桜良の大きな胸に埋もれる。

『うう・・・』

慧「ぶはあ・・・!!」

桜良「よいしょ・・・」

勢いで何とか桜良の胸から脱出する。

慧「はぁ・・・!?!」

桜良の胸から脱出した慧は、今ので不思議な体験をした。
晴風、艦橋

その頃、艦橋では、当直の明乃と鈴の姿があつた。

鈴「凄い……あっ!?!」

凄い時化に鈴が驚いていると

明乃「うう……」

隣で明乃がカタカタと震えていた。

鈴「岬さん、如何かしたの?」

心配になった鈴が明乃に声を掛ける。

明乃「う、うん……ちよつと……」

明乃がそう答えた瞬間

バーン!!

目の前に雷が落ち。

明乃「うわぁ……!?!」

明乃は悲鳴を上げて、蹲る。

明乃「御免……私もう……当直代わって貰ってくる!!」

最早限界になり、明乃は、艦橋を急いで降りて行った。
バーン!!

明乃「うわぁ……!!」

降りて行く途中、またしても雷が落ち、明乃は、悲鳴を上げながら駆け降りる。

晴風、売店

美海「やだぁ……!! かつこいい!!」

売店では、マチコが寝間着姿のまま歯を磨いていて、側で美海がマチコに見とれてい
ると

バーン!!

再び雷が鳴り

明乃「うわぁ……!!」

更に明乃が悲鳴を上げて、マチコの胸に飛び込んできた。

美海「ああ……!? わ、私のマツチが……!!」

それを見た美海は、驚愕する。

隣で美甘が美海を落ち着かせようとするが

美海「これが落ち着いていられるか!! 成敗する! 其処になおれ!!」

美海は、落ち着いていられず、マチコから離れる様、明乃に命令する。

マチコ「か、艦長!？」

明乃「うう・・・」

だが、明乃は、雷で完全に怯えていた。

晴風、副長室

その頃、ましろの部屋では

ミーナ「マユゲ抜くんも」

幸子「同じ事なんではない!」

ミーナと幸子が任侠映画を見ていた。

ミーナ「此処、ええよな?」

幸子「激しく同意であります!!」

2人が熱心に見ていると

ましろ「如何して、私の部屋で見るんだ?」

隣で勉強をしていたましろが何故、自分の部屋で見るのか尋ねると

幸子「あつ、私の部屋にテレビ無いんで・・・」

幸子の部屋には、テレビが無かった。

ミーナ「副長も見るか?」

ミーナが一緒に見ないかと誘うが

ましろ「いい」

ましろは、あつさりと断る。

しばらくして、

トントン

ましろ「あっ!?!」

ましろの部屋をノックする音が聞こえた。

明乃「副長：その：夜分にすみません：：」

訪ねて来たのは、明乃だった。

ましろ「・・・何です?」

ましろは、不気味な顔で明乃に何の用か尋ねる。

明乃「あ、悪いんだけど：当直代わってもらえる・・・?」

明乃は、ましろに当直を代わってくれる様、頼みに来たのだ。

すると、映画を見ていたミーナと幸子が

ミーナ「如何したんなら?」

幸子「ゆうてみい!」

ヤクザ見たいな言い方で明乃に理由を聞く。

明乃「・・・ちよつと凄くて：：」

ましろ「……」

ミーナ「何がじゃ?」

幸子「ゆうてみい!」

明乃「: : 雷」

ましろ「ん!?!」

幸子「ほうか……分かった。」

明乃から理由を聞いた途端、幸子が立ち上がり

幸子「ほいじゃあ……行つてくるけえの……風下には立たんけえ……」

明乃の代わりに当直に立つと言つて部屋を出る。

明乃は、しばらく落ち着くまで、ましろの部屋に居る事にした。

ましろ「そろそろ寝たいんですが?」

ましろは、そろそろ寝ようとしたが

ミーナ「そんなに雷が怖いのか? 雷はヘソを盗つたりせんぞ?」

ミーナは、何故明乃が其処まで雷を怖がるのかを尋ねる。

明乃「雷が怖いっていうか……」

ミーナ「じゃあ何だ?」

明乃「唯……思い出すの……」

明乃は、ポケットから懐中時計を出し、雷が怖い理由を2人に話す。
此処で時系列は、少し戻る。

晴風、艦橋

一方、薫は、懐中電灯を持って艦に異常発生してないか確認し、艦橋に戻ってきた。

薫「異常はない……あれ?……艦長は?」

薫は、当直に立っている筈の明乃の姿が無い事に気づく。

鈴「岬さんなら、さつき当直を代わると言つて、出て行きましたけど……」

薫「え!? 岬さんが……」

鈴「何か雷を見て、怖がっていましたけど……」

薫「雷……分かったわ……ちよつと探してくるわ!!」

鈴「あつ……教官!」

薫(さつきから艦長の様子が可笑しいわね?)

薫は、雨水の時やさつきの事と言ひ、明乃の様子が可笑しいと思ひ、明乃を探す。

晴風、通路

幸子「あつ、教官!」

明乃を探していると偶然、当直に向かう幸子と出会う。

薫「あら納沙さん、こんな時間に如何したの?」

幸子「艦長の代わりに当直にこれから艦橋に行くところです。」

薫「えっ?! 艦長が……艦長は、今何所に?」

幸子「多分……まだ副長室だと思えますよ!」

薫「副長室ね……ありがとう。」

幸子から明乃の居場所を聞き、薫は、ましろの部屋へと向かう

副長室

薫「此処ね!」

ましろの部屋の前に着きドアをノックしようとしたその時

明乃「唯……思い出すの……」

薫「ん?」

薫はノックを止め、静かにましろの部屋に入る。

明乃「あっ!」

ミーナ「ん……教官!」

薫「その話……もう少し詳しく聞かせてくれない……岬さん!」

薫も明乃の話を聞こうと隣に座る。

明乃は、3人にある過去の事を話す。

それは、明乃がまだ小学生の頃、両親と乗っていたフェリーが嵐で岩礁に座礁する事

故が起きてしまった。

アナウンサー『・・・救難信号を受信中・・・間もなくブルーマーメイド隊がやって来るまで、落ち着いて、誘導員の指示に従ってください』

小学生の頃の明乃「お母さん痛い・・・」

直ぐに乗員には、避難命令が発令され、明乃は、両親に連れられ急いで甲板へと向かう。

甲板には、大勢の乗員が海に飛び込もうと集まっていて、下には、既に救難ボートが海に飛び込んだ乗員を救助していた。

明乃の父「明乃、早く海に飛び込みなさい！」

明乃の母「急いで！」

2人は、急いで飛び込むよう明乃に言うが

小学生の頃の明乃「お父さんとお母さんは？」

幼い明乃は、余りの高さに戸惑う。

明乃の父「早く!!」

それでも2人は、急いで飛び込むよう迫る。

その時

小学生の頃の明乃「うああ・・・」

船が大きく傾斜し、甲板に居た明乃達乗員は、海へと投げ出された。

次に気が付いたら、既に救助に来たブルーマーメイドの救命ボートの上だった。

目の前には、座礁して左に大きく傾斜したフェリーがあった。

だが、それよりも明乃は、ある事に気づく。

小学生の明乃「お父さん・・・お母さんは?・・・何でいないの!?!」

それは、避難の時に一緒に居た筈の両親の姿が無い事だった。

明乃は、必死に隣に居たBPF隊員に何でいないか問う。

だが、BPF隊員は、何も言わなかった。

小学生の明乃「・・・何で・・・」

明乃は、愕然とし

小学生の明乃「お父さん・・・!!お母さん・・・!!」

フェリーに向かって、両親の名前を叫ぶ。

明乃「・・・私がつと早く飛び込んでいたら・・・お父さんも・・・お母さんも・・・

もしかしたら・・・」

『・・・』

話を聞いたミーナとましろは、何も言えなくなる。

だが、薫の方は

薫「それは、違ふと思う。」

明乃「え!？」

薫は、明乃の言葉を否定した。

薫「貴方が早く飛び込んでいても、両親が死ななかつたとは、限らないわ!!」

明乃「でも私が・・・」

薫「そんなに自分を責めては、駄目だよ!・・・死んだ両親もそんな事は、望んでいない・・・死んだ両親が望んでいるのは・・・」

その時

幸子『艦長!・・・救難信号です!!』

突然、伝声管からSOSを受信したと連絡が入る。

『えっ!?!』

知らせを聞いた4人は、着替えて、急いで艦橋へと向かう。

晴風、艦橋

明乃「救難信号って何所から?」

幸子「新橋商店街船です・・・全長135m、総トン数14000、現在、左に傾斜中し船内に浸水している模様!」

SOSを送信していたのは、排水量14000トンの汎用貨物艦で嵐で暗礁に乗り上

げ座礁した様だ。

現在、左舷に傾斜し、船内は、浸水中。

ましろ「乗員は？」

幸子「全乗員552名、現在避難中だとの事です。」

乗員は、全部で552名が乗船していて、現在避難中。

薫「近くに他の船は？」

幸子「我々が一番近いみたいです。」

如何やら近くで一番早く現場に向かえるのは、薫達の晴風のみだった。

明乃「ブルマー本隊に連絡して学校にも！」

『はい!!』

明乃は、直ぐにブルマーメイドと横須賀女子海洋学校に連絡した。

薫は、受話器を持つ。

薫「此方航洋艦晴風、教官の山本薫です。」

新橋船長『此方は、新橋・・・アラロップ南東13マイル地点・・・航行中に暗礁に乗り上げました・・・座礁時刻は15分前・・・現在も船体中央部がしよくていしています・・・』

薫「負傷者は？」

新橋船長『軽傷者が10名』

薫「浸水はありますか？」

新橋船長『左舷側は、あると思われれます。』

薫「火災は、発生していますか？」

新橋船長『まだ確認しておりません。』

薫「了解しました・・・其方までの到達時間は約50分掛かります・・・それまで船長は、避難誘導を続けてください!!」

薫が新橋船長と通信を終える。

薫「艦長！急いで現場に!!」

明乃「はい・・・鈴ちゃん急いで!!」

鈴「りよ、了解!!」

晴風は、急いで現場へと向かう。

明乃『達つすーる!!・・・ウルシー環礁で座礁船発生!!・・・本艦は、これより当該船舶の救助に向かいます・・・海難救助よーい!・・・砲雷科と航海科で手の空いている人は、準備を急いで!!』

明乃は、艦内放送で新橋の救助に向かう事を伝える。

晴風、艦内

媛萌「大変!! 大変!!」

百々「ビビるツス!!」

放送を聞いた生徒は、慌てながら救助準備をする。

晴風、ロツカ室

新橋救助の為、救助に向かう生徒は、ダイバースーツに着替えるが

美千留「キツイ・・・」

光「太った?」

順子「太ちやったかな?」

『うう・・・』

体重が増えた事でダイバースーツがキツクなつてしまい、生徒達は、思い悩む。

救助準備をしながら50分後

幸子「天気晴朗なれども波高し」

晴風は、新橋座礁地点に到着し、新橋が肉眼で視認できる距離まで接近する。

ましろ「晴れたな!」

幸子「低気圧は、西に移動した模様です。」

幸いな事に先まで猛威を奮っていた低気圧は、西へと過ぎ去った模様。

ましろ「傾きは40度くらいか・・・」

薫とましろは、双眼鏡で新橋の現状を確認する。

ミーナ「50度を超えると転覆する危険が高まるぞ！」

薫「確かに・・・いつ転覆しても可笑しくないわね！」

新橋は、左舷に大きく傾斜したまま、いつ転覆しても可笑しくない状況だった。

幸子「新橋の船内図です・・・3階吹き抜けて商店・・・4階が居住区・・・中央が

ブリッジになっています。」

幸子がタブレットで新橋の船内図を開き、船内の説明をする。

船内の説明を聞いた明乃は

晴風、甲板

明乃『救助準備は完了した？』

救助準備は、完了したか確認をする。

甲板では、既に救助に向かう生徒が酸素ボンベやカッターの準備をしていた。

媛萌「準備OKです！」

媛萌は、準備完了の合図を艦橋に示す。

晴風、艦橋

明乃「それと私もスキッパー・・・」

明乃は、またスキッパーで出ようと思ったが

その時、この前、ましろに言われた事が頭に浮かび、一瞬、静止し、ましろを見る。
ましろ「……何ですか?」

明乃が見ているのに気づき、何かと問う。

明乃「……こういう時、艦長って如何したら良いのかな?」

薫「え!?!」

明乃がましろに如何したら良いのかと聞く。

いつも明乃が珍しく戸惑っている事に薫は、驚いていた。

ましろ「私に聞かないでください。」

明乃「分かんなくなっちゃって……」

ましろ「艦長は艦に居て下さい!!」

明乃「救助隊の指揮は?」

明乃は、艦に残るとして、救助隊の指揮は、誰がするのかと問うと

ましろ「んん……!私があります!!」

ましろが自分が行くと宣言する。

ミーナ「ワシも行こう!」

するとミーナがポーリングしながら自分も救助に行こうと言う。

薫「私も行くわ!……艦長は、後の事をお願いね!」

そして、薫も一緒に向かい、艦の事を明乃に任せる。

明乃「分かりました・・・私が此処から指示を出します。」

薫「お願いね！」

まして「・・・」

こうして、明乃は、晴風に残って、救助隊に指示を出し、薫とまして、ミーナは、救助隊と共に新橋へと向かう事となった。

だが、ましては、浮かない顔をしていた。

内火艇

薫とまして、ミーナ達を乗せた内火艇は、新橋に向かう。

まして「私と教官とミーナさん、砲雷科3名で艦内に入る・・・ダイバー隊は海に潜って船体の損傷の確認・・・航海科と応急員は救命ボートに乗ってる乗員を晴風に誘導・・・」

『はー！』

聡子「救命訓練は中学で散々とやったけど、実戦は、初めてぞな・・・」

鵜「ちゃんと出来るかな？」

ミーナ「大丈夫だ！」

薫「訓練をやったのならばちゃんとできるよ！」

果代子「へきへき」

ましろ「私は運が悪いのだが大丈夫だろうか？」

『うう……』

ましろの一言により全員の顔が暗くなった。

ましろ「ん!？」

ミーナ「空気読め！」

薫「アハハハ……」

それに対して、ミーナは、空気読めと言ひ、薫は、苦笑いした。

そして、内火艇は、新橋に到着する。

ましろ「探照灯、照射始め！」

果代子と理都子が手持ちの探照灯を新橋を照らす。

照らした先には、甲板に避難をし、救助を待つ人や海に飛び込んで浮遊物に捕まる人で溢れていた。

それを見たましろは、驚愕してしまふが

ミーナ「副長！」

薫「副長！」

ましろ「はっ!?!……現場に到着しました!!」

薫とミーナに言われ、ましろは、気づいて、直ぐに無線で晴風に状況を伝える。

晴風艦橋

ましろ『甲板は、人で溢れています!』

明乃「甲板は、応急員に任せって、船内の生存者を確認して……救助……開始!!」
画して、晴風の生徒による新橋の救助作業が開始された。

薫、ましろ、ミーナ、光、美千留、順子の6人が船内に入り、楓、理都子、果代子の3人は、潜水具を付けて、船体の破損状況を調査、聡子は救助ボートで待機し、媛萌、百々、鵜の3人は、甲板で救助者の対応する事になった。

新橋、甲板

新橋乗員「救助如何なっているんだよ!!」

甲板では、救助を待っている乗員が救助は、まだかと慌てふためいていた。

媛萌「ま、先ずは、人数の確認よね!」

百々「リストバンド!リストバンド!」

慌てふためく乗員に気を取られながら、媛萌と百々は、人数の確認をしようとするが鵜「先に怪我人の確認じゃない?」

負傷者の確認が先じゃないかと鵜に言われる。

媛萌「うあ……!?マニユアル持つてくれば良かった!!」

初めての救助で慌てて、救助マニユアルを持つて来なかった事に媛萌は、悔む。

新橋、ブリッジ

一方、薫とましろ、ミーナは、ブリッジで船長に状況を聞いていた。

薫「晴風、教員の山本薫です!」

ましろ「晴風副長、宗谷ましろです……只今から船内確認に入ります!」

新橋船長「居住区はまだ乗員が残っている模様です。」

薫「分かりました……私は、此処で状況をモニターしているから貴方達は、船内確認を……」

ましろ「お願いします教官!」

薫は、船長と共にブリッジに残り、ましろ、ミーナ、光、美千留、順子の5人は、船内を搜索する。

船内は、座礁した時の衝撃のせい、窓ガラスが割れていたり、物が散乱している有様でましろ達は、懐中電灯を照らしながら、辺りを搜索する。

ましろ「スプリンクラーが作動していない……」

辺りを搜索していると非常時にも関わらずスプリンクラーが作動していない事に気づく。

光「非常用システムがやられちゃったって事!」

順子「て、事は……」

美千留「この船って・・・」

非常用システムがやられている事に5人は、疑問を感じる。

内火艇

楓「船体は、第4区画前120mに渡って亀裂が入っており、前方の3区画は浸水している模様ですわ！」

船体の破損状況を調査していた楓の報告から船体の破損状況は、深刻でしかも浸水がかなり進んでいる模様。

晴風、艦橋

ましろ『此方宗谷！・・・新橋の非常用システムが動作不良を起こしている。』

ましろから新橋の非常用システムが動作不良を起こしている報告が入る。

明乃「えっ!？」

幸子「何か遭ったんですか？」

ましろ『分からない、でも・・・』

薫『此方ブリッジ！・・・さっきの非常用システムを調べたところ、機械の電源が落ちていた事を確認・・・恐らく衝撃で壊れたんだと思うわ・・・このままだと、恐らく・・・』

薫からもこのままだと災厄な状況になる恐れがあると報告が入り

明乃「新橋に接舷する！急いで!!」

明乃は、直ぐ新橋に接舷しよう命じる。

鈴「りよ、了解!!」

明乃「岩礁に気を付けて、急いで中の人達を甲板へ・・・」

晴風は、急いで新橋に接近する。

新橋、船内

ミーナ「早く上へ・・・急げ!!」

新橋船内では、ましろ達が乗員を甲板へと避難誘導をしていた。

ましろ「乗員まもなく避難が終えます。」

乗員の避難が有る程度済んだ時だった。

八百屋の奥さん「あのお・・・」

ましろ「あっ!?!」

八百屋の奥さん「多聞丸がないんです!」

ましろ「えっ!?!」

八百屋の旦那「気が付いたら傍に居なくて・・・」

新橋のある八百屋の夫婦が自分達の子供がいらないと言って来た。

ましろ「まだ小さい子ですか!?!」

『ほこ』

ミーナ「搜索していないのは第五区画、飲食店街部分だ。」
ましろ「よし！行こう！」

八百屋の奥さん「はっ!？」

ましろは、八百屋の夫婦の子供を探しに第5区画へと向かう。

ましろ「多聞丸ちゃんは任せて！お二人は避難を・・・」

『ああ・・・』

順子「此方です。」

ましろは、順子に任せて、ミーナと共に多聞丸を探しに行つた。

その頃、甲板では、既に接舷している晴風に乗員を移していた。

新橋、ブリッジ

媛萌『乗員の避難は、終了しました。』

薫「ご苦勞様！貴方達も晴風に撤収して!!」

薫は、無線で乗員の避難の完了を聞き、甲板に居た媛萌達に晴風への撤収を命じる。

媛萌『分かりました。』

薫「船長！乗員の避難は、終了したので、船長も急いで避難して下さい!!」

新橋船長「分かりました。」

薫「私は、救助隊の様子を見てきますので・・・」

乗員の避難は、終了したので船長は、急いで晴風へと避難し、薫は、残っているましろ達の元に向かう。

新橋、甲板

薫が甲板に出ると甲板には、避難で溢れていた乗員も既に居らず、救助隊のみが残っている状況だった。

薫「ご苦労様!・・・皆居る?」

薫は、救助隊の元に向かい、全員居るか確認をするが

順子「まだ、副長とミーナさんが・・・」

薫「えっ!?!・・・2人は、何所に?」

順子「まだ中に小さい子が残っているって聞いて、搜索に・・・」

八百屋の夫婦を連れてきた順子が始るとミーナが小さい子を探しに船内に残った事を告げる。

薫「そう・・・分かったわ!!・・・貴方達は、先に内火艇に戻ってて・・・」

順子「教官は?」

薫「私は、2人の元に向かうわ!」

と言つて、薫は、ましろとミーナの元に向かう。

晴風、艦橋

一方、晴風の方でも救助隊から続々と報告が上がっていた。

媛萌『乗員の避難は終了しました！・・・中に入った救助隊も船から出てきたそうです。』

何事も問題なく避難が完了した事に喜ぶが

媛萌『でも、副長とミーナさんが船尾方向の捜索に向かったと報告が・・・』

明乃「えっ？」

媛萌「小さいお子さんが1人、行方不明だそうです・・・それと教官もさつき2人の元に向かったと・・・」

明乃「教官も・・・」

3人がまだ捜索に残っている事を聞いて、明乃は、不安になる。

新橋、船内

ましろ「私はこつちを探して見る!!」

ミーナ「じゃあ、ワシはあつちを!!」

新橋の飲食店街地区へと入ったましろとミーナは二手に分かれて捜索する事にした。

船が沈んでいく中、2人で探すよりも分かれて探した方が、時間短縮になる。

ましろ「多聞丸!!」

こんな暗闇の、まして沈んでいく船の中、一刻も早く両親の下へと連れ戻さなければ

ましろは、そんな思いを抱いて新橋の中を走る。

そんな時

「ニャ〜!!」

突然、何かの鳴き声が何処からか聴こえて来た。

ましろは、辺りを見回すと

右側にあるコンビニの中の出入り口の前に子猫がちよこんと座っていた。

ましろ「：：小さい子って：：子猫の事か：：」

ましろは電源が落ち開かなくなった自動ドアをこじ開けて目の前の子猫を見る。

多聞丸「ニャ〜!!」

子猫が付いている首輪には確かに「TAMONMARU」と文字が彫られていた。

人間の子供ではなかったが、子猫だって生きている。

兎に角、子猫を保護しようとしたその時

ましろ「!?!」

大きな揺れが起き、破孔から海水が流れ出てきた。

ましろ「はっ!?!」

それを見たましろは、驚愕する。

そして

薫「ま、不味い!？」

2人を探していた薫も大きな揺れと破孔から海水が流れ出ている事に気づき、急いで2人を探そうと走る。

新橋は、船体が2つに割れ、左舷から沈み始めた。

内火艇

理都子「ヤバ過ぎる!？」

果代子「大変どころじゃ・・・」

内火艇でその光景を見ていた救助隊は、驚愕する。

晴風、艦橋

幸子「艦長!新橋が!!」

明乃「もやいを解いて!!・・・全速離脱!!」

芽衣「真つ二つじやん!？」

志摩「うう・・・」

鈴「うわあ・・・!？」

内火艇の救助隊と同じ様に艦橋もその光景を見て驚愕しているが、明乃は、巻き添いを防ぐ為、急いで新橋から離脱しよう命じる。

幸子「艦長!まだ中に副長とミーナさんが居るそうです!!」

明乃「えっ!? 教官は？」

幸子「教官もまだ中に!!」

何とまだ新橋には、ましろとミーナ、それに2人を探しに行つた薫の3人が残つていた。

新橋、甲板

ミーナ「えらいこつちや! えらいこつちや!」

その時、先の上甲板に避難したミーナが船の縁を走つて逃げていた。

光「居た!? あそこ!!」

順子「ミーナちゃん!! こつちよ!!」

内火艇に避難していた救助隊が船の縁を走つて逃げているミーナに気づき探照灯で照らす。

美千留「ミーナ、早く逃げて!!」

ミーナ「逃げとるんじやい!!」

楓「宜しいですから飛び込んでください!!」

ミーナ「グツ!」

ミーナは、海に飛び込み、内火艇まで泳ぎ、無事に救助された。

ミーナは、無事救助されたがまだましろと薫の2人が艦内に残つていた。

新橋、船内

明乃『副長!!・・・教官!!聞こえる?』

ましろ「は、はい」

明乃『船体の中央部分で避けたの!このままだと沈没する!早く脱出を!!』

ましろ「りよ、了解!!」

薫『此方薫、もう直ぐそっちに到着するから待てて!!』

ましろ「えっ・・・あっ!?!」

通信中、突然の浸水がましろと多聞丸を襲う。

薫「副長!!・・・ましろちゃん!!」

薫は、無線機でましろの名前を呼び続けながら船内の奥へと向かっていたが

薫「わあ!?!」

2度目の大きな揺れの衝撃で床に転げ落ちて、気を失う。

晴風、艦橋

楓『ミーナさんは脱出されました。』

明乃「副長と教官は?」

楓『まだ確認できていません・・・その・・・連絡が・・・切れましたわ・・・』

明乃「えっ!?!」

2人との連絡が途切れたと聞いて、明乃は、恐怖に陥る。

新橋、船内

一方、突然の浸水に襲われたましろと多聞丸は、何とかコンビニの商品棚の上に避難していた。

だが、先程の浸水の時、無線機を落としてしまった。

多聞丸「ミヤーン」

多聞丸が不安そうに鳴く。

ましろ「怖いよな……」

ましろは、服が濡れて、体が震えていた。

ましろ「私も怖い……何しろ私は……運が悪いし……」

ましろは、恐怖のあまり泣きそうになるが、

ましろ「……このままじゃ駄目だ!!……行こう……」

このままでは、死ぬのを待つだけであり、ましろは天井にあつた通風口から脱出しようと考え通風口の蓋を開け中に入った。

その頃、薫の方は

薫「う……う……此処は？」

2度目の大きな揺れの衝撃で床に転げ落ちて、気を失っていた薫が意識を取り戻す。

薫「そっか!・・・私、さっきの衝撃で気絶してたんだ。」

意識を取り戻した薫は、自分が何故気絶していた事に気づき

薫「あつ、そうだわ!?・・・ましろちゃん!!」

ましろを探していた事を思い出し、探そうと立ち上がろうとした時だった。

薫「イタ!?!」

突然、足から急激な痛みを感じた。

薫「しまった!?!さっきの衝撃で足を・・・」

さっきの衝撃で床に転げ落ちた時に足を挫いた様だ。

薫「でも、ましろちゃんのところに行かないと・・・」

しかし、薫は、ましろの事が気になりになり、怪我した足を引きずりながら、ましろの元に向かう

晴風、艦橋

明乃「副長、教官!副長、教官!シロちゃん!!薫お姉ちゃん!!」

明乃が無線機で何度もましろと薫に向けて呼び続けるが、全く応答がなく、明乃は受話器を置いて艦橋の窓から新橋を見た。

明乃「待つてゐるってこんなに辛いんだね：でもシロちゃんと約束したから・・・」

明乃は、小さく拳を握り。

明乃「救助した人に毛布をそれに食べ物と暖かい飲み物を用意して!」
『はー!』

明乃は、薫とましろの無事を祈りながら、救助した乗員の面倒を見る。

新橋、船内

薫「ましろちゃん!!・・・ましろちゃん、何所に居るの!!・・・返事して!!」

薫は、怪我した足を引きずりながら、ましろの名前を呼び続けながら、探していた。だが、肝心のましろは、見つからず、薫は、更に奥に進む。

すると、浸水のせいで通路の先が水没していた。

薫「雅か!？」

薫は、水没した通路を見て、ましろが浸水に巻き込まれたんじゃないかと思ってしま
い絶望するが

薫「・・・」

数分間、水没した通路を見ていた薫は

薫「あっ!？」

上の通風口に気づき

薫「そうだわ!?!・・・もしかしたら、ましろちゃん・・・まだ生きているかも!!」

薫は、もしかしたら、ましろが通風口に逃げたのかもしれないと思い、急いで足元に

物を置いて段差を作つて登り、通風口に入る。

薫「待つてて、ましろちゃん！・・・今行くから・・・」

薫は、通風口を通りながら、ましろを探す。

内火艇

その頃、救助隊を乗せた内火艇は、新橋から晴風に戻ろうとしていた。

光「皆、居るよね？」

不安そうに新橋を見ながら、全員居るのを確認する光。

美千留「航海科の子達は？」

順子「救助した人と一緒に艦に戻ったよ！」

ましろと薫以外は、殆んど晴風に収容された。

ミーナは、防寒ポンチョを着て、非常食をかじっている。

果代子「後は副長と教官だけ？」

ミーナ「副長、教官……」

ましろと薫の安否を気にしているその時だった。

ミーナ「ん!？」

突如、空から内火艇を照らす無人飛行船が現れた。

『ブルーマーメイドだ!!』

それは、紛れもなくブルーマーメイドの無人飛行船だった。

それを見た救助隊は、直ぐに新橋に戻ろうと内火艇を戻す。

それから直ぐにBPF隊員が乗ったスキッパーが次々と新橋へと向かって行く。

そんな中、一艇のスキッパーが内火艇へと接近する。

岸間「ブルーマーメイド保安観測部隊の岸間です。」

光「晴風! 砲雷科、小笠原光以下救助隊です!」

岸間「ご苦勞様!・・・後は任せて・・・」

光「まだ船内に2人、学生と教員が・・・」

岸間「了解!」

岸間は光に応える様にハンドサインを返した。

岸間「要救助者2名!」

岸間達はスキッパーを全速で新橋に向かう。

岸間「!?!」

すると、後ろから聞いた事もないエンジン音が聞こえてきた。

岸間「この音は!?!」

岸間は、上を向くと物凄いスピードで轟音を立てて新橋に向かうSH60Gの姿だった。

岸間「間違いないわ……彼らが来たんだわ。」

SH60Gを見て、岸間は、Gフォースが来たんだと思い、新橋に向かう。

彼女の言う通り、Gフォース西部方面混成艦隊所属の護衛艦せんだいが新橋が沈む現場に到着した。

せんだい、艦橋

与力「岩礁に気を付けて、進め!!」

せんだいの航海長「了解!」

せんだい艦長の原田与力大佐は、岩礁を避けて、新橋に近づこうとする。

何故、せんだいが此処に居るのかと言うと

実は、空母大鳳が故障した時、すくねとせんだいだけ単独で哨戒せよと言う命令を受けたので、せんだいは、単独で哨戒をしていたが、結局、武蔵を発見できず、艦隊と合流しようとする時とした時に晴風からの救助要請を受信したので直ぐに現場に急行したのだ。

直気「艦長!」

与力「何だ副長?」

直気「浪速から入電!!……現在船内に晴風の学生と教員の2人が船内に閉じ込められていますとの事です。」

せんだい副長の橘 直気少佐から薫とましろが新橋の船内に閉じ込められている報告が上がる。

与力「教員!?! . . . そう言ったのか?」

直気「はい!」

与力「確か晴風には . . . うちの隊員の一人が乗っていたな。」

直気「はい、大鳳艦長山本中佐です。」

与力「 . . . 山本中佐の事だから大丈夫だとは、思うが . . . 心配だ!! . . . 直ぐに救助隊に連絡!! . . . 2人の救助に全力を尽くせ!!」

直気「はっ!」

与力は、2人の安否が気になり、救助隊に2人の救助に全力を尽くせと命じる。

新橋、船内の通風口

ブルーマーメイドとGフォースの救助隊が新橋に向かっていている頃

ましろ「はあ、はあ . . . ん . . .」

ましろは、通風口の中を出口に向かって進んでいた。

その時

ましろ「あっ!?!」

ましろのスカートが通風口の金具に引っかかってしまった。

ましろは、何とか放そうと引つ張るが、外れそうもなく。

ましろ「仕方ない・・・」

ましろは、止む無くスカートを脱ぎ捨て（下が水着姿になった）、先に進む。

晴風、艦橋

晴風では、明乃が生徒に指示を出し続けていた。

明乃「救助した人達に食事は、いき渡っている？」

食堂では、杵~~×~~姉妹と美甘が救助者におかゆ、お汁粉、生姜湯を配っていた。

そして、医務室では美波が救助者のメデイカルチェックを行っていた。

新橋、船内の通風口

ましろ「ん・・・ん・・・」

ましろは、通風口の中を出口は、まだかまだかと進んでいた。

そんな時

ましろ「はっ!？」

持っていた懐中電灯の電源が切れてしまった。

ましろ「ははっ・・・やっぱり・・・付いてない・・・うっ・・・クソツ!!」

ましろは、絶望し、堆懐中電灯で通風口の天井を叩く。

その頃、薫の方は、

薫「これは、ましろちゃんの!？」

通風口の中を進んでいたらましろが脱ぎ捨てたスカートを見つける。

薫「今の音は!？」

更に奥から天井を叩く音が聞こえた。

薫「やつぱり、ましろちゃんは、この先に居るんだわ!!」

ましろがこの先に居る事が分かり、急いでましろの元に向かう。

晴風、艦橋

幸子「艦長、救援艦より連絡・・・現在、ブルーマーメイド隊が副長と教官の搜索を
しているそうです。」

明乃（シロちゃん：：薫お姉ちゃん：：）

明乃は、2人の無事を祈っていた。

新橋、船内の通風口

ましろ「お腹空いた：：」

通風口の中に居たましろは、既に疲れ果てていた。

多聞丸「ミヤーン」

ましろ「私このまま死ぬのかな：：」

最早、もう駄目かと思ひ、このまま死ぬのかなと思つた時だった。

薫「そう簡単に諦めちゃ駄目だよ! . . . ましろちゃん!」
ましろ「えっ?」

ふつと声が聴こえてきて、ましろは、後ろを向くと

薫「ましろちゃん! . . . やつと見つけた!!」

いつの間にか、後ろに薫が居た。

薫は、そのままましろに近寄る。

ましろ「何故、教官が此処に?」

薫「何故って . . . 貴方が小さい子を搜索に戻ったから、心配になって、来たのよ!」
ましろ「何で来たんですか!?! . . . 下手したら死ぬんですよ!!」

薫「生徒の癖に何生意気な事を言ってるの! . . . そんなの言えるのは、10年早い
のよ!!」

ましろ「うう . . .」

薫「それに . . .」

ましろ「えっ?」

薫「真雪さんから預かっている生徒を見捨てられる訳ないから . . .」

薫の言葉にましろは、目からは無意識なのか涙が流れ始め

薫「大丈夫、私達は、生きて帰るんだから . . .」

ましろ「う……う……うあぁ……!!」

その言葉を聞いた途端、ましろは、泣いてしまう。

薫「意地を果てたけど……本当は、怖かったのね!」

泣くましろを薫は、頭を撫でながら慰める。

そして

薫（さて……この状況を如何した事か？）

改めて周りを見る。

転覆した船内の通風口の中で、自分達は何所に居るかも分からない。

外に出る方法もない、いづれ此処にも水が入ってくるだろう。

薫（何とかしないと……）

そう思った時だった。

多聞丸「ニヤーン」

薫「!？」

多聞丸が薫の目の前で鳴く。

薫「そうだね!」

ましろ「え？」

薫「何でもないわ!!」

(そうだね・・・何事も諦めては、行けないんだもんね・・・)

多聞丸に励まされ、薫は、諦めないで何とか、脱出する方法を考える。

新橋、転覆した船底上

その頃、転覆した新橋の船底の上では、ブルーマーメイドとGフォースの救助隊が薫とましろの捜索をしていた。

BPF隊員「こっちは、どう……」

BPF隊員「駄目、見当たらないわ……」

岸間達は、薫達を捜索しているが中々センサに反応がなく、困り果てていた。

そんな時

GF隊員「反応あり!!」

岸間「えっ!？」

そんな中、共に捜索していたGF隊員のセンサーが船内に閉じ込められた2人の反応を感知した。

BPF隊員「確か何ですか?・・・こっちのセンサーには、反応が無かったのに……」

健二「多分、深いところか何か閉じ込められているからだろう・・・それに、こっ

ちのセンサーが特殊だから、探知で来たんだ。」

Gフォースの救助隊の隊長である大石健二軍曹が言う様に薫とましろが居るのは、船底から深い場所に居た。

2人を発見できたのは、彼らGフォースが使用しているセンサーが、あらゆる環境や深さでも探知できる事とブルーマーメイドが使用しているセンサーより高機能であった事。

とは言え、2人を見つけたのは、良かったが

BPF隊員「でも、如何やって救助を、探知したところは、結構深いところですよ……そんなところまで掘る機具は、私達には、ありませんよ……」

GF隊員「彼女の言う通りです！……そんな機具は、我々も装備していません!!」
Gフォースの救助隊が言うに、2人が閉じ込められてる場所は、船底から深いところ
でかなり頑丈にできているところの通風口の中。

其処まで掘る機具は、両救助隊は、装備していなかった。

BPF隊員「このまま2人を見殺しにするんですか？」

岸間「待つて、何か方法は、ある筈よ……」

2人の生命が絶望だという中、健二は、考える。

健二「…仕方がない……アレを使うか！」

岸間「アレ？」

健二「せんだいに連絡を・・・」

健二は、直ぐにせんだいに連絡する。

晴風、艦橋

幸子「艦長、救援艦より通達！・・・現在、ブルーマーメイド隊が副長と教官の捜索を行っているそうです。」

明乃（シロちゃん：：薫お姉ちゃん：：）

明乃は、薫とましろの無事を祈りつつ知らせを待つ。

せんだい、艦橋

その頃、せんだいの艦橋では、救助隊からとんでもない要請入る。

与力「本気なのか!？」

健二『ですから、船底奥深くに居る2人の救助にD―03の使用を要請しているんです。』

何と救助隊からのとんでもない要請は、対G兵器用の削岩弾D―03の使用要請だった。

与力「しかし、D―03は、削岩弾だ!!・・・トンネルとかの岩盤排除に使うならまだしも船底に穴を開ける為に使用すれば、更に被害が大きくなる可能性が有る・・・そう簡単には使用は出来ない!!」

原田の言う通り、D-03は、削岩弾でありながら、爆発力は、強力で船底に穴を開ける為ならまだしも、反って、被害を大きくする可能性が有る為、与力は、使用を躊躇う。

健二『しかし、我々の装備では……このままだと見殺しになりますよ!!』

だが、現在の救助隊の装備では、2人の救助は、出来ない。

このままだと2人は、溺れ死んでしまう。

健二『艦長!お願いします!!』

与力「ん……」

救助隊の再度の要請に与力は、悩む。

その時、副長の直気が

直気「艦長!……それなら爆発力を小規模にセットすれば、爆発しても他に被害を及

ぶ事はありません!!」

と、D-03の爆発力を小規模にして、打ち込めば、爆発しても他に被害を及ぶ事は

ないと説得する。

与力「ん……よし!……それで行こう!!……救助隊は、直ちに安全圏まで退避

しろ!!」

遂に与力は、決断を下す。

健二『了解!!』

そして、ブルーマーメイドとGフォースの救助隊は、一旦搜索を中止し、安全圏まで退避する。

更にレーザー照準器で目標をロックする。

せんだいの甲板では、D—03削岩弾が嚴重に封鎖された箱から取り出され対艦ミサイルに装着された。

せんだい、艦橋

せんだいの砲雷長「D—03発射準備よし!!」

与力「発射!!」

せんだいから新橋に向けD—03が発射された。

内火艇

光「何あれ!？」

聡子「新橋に向かっているぞな!!」

新橋に引き返そうとしていた晴風の救助隊が発射されたD—03を見て、沈めるのかと思ひ動揺する。

新橋、船内の通風口

その頃、新橋の通風口に閉じ込められている薫とましろは

薫「私ね!・・・ましろちゃんが別に武蔵じゃなくて晴風に来て、本当に良かったと思ってるの・・・」

薫は、絶望しているましろの気をまじらわせようとする話をする。

ましろ「えっ!？」

薫「だって・・・ましろちゃんは、もしかしたら・・・」

その時

ズドン

薫「はっ!？」

ましろ「な、何だ!？」

突然、衝撃が走り、薫とましろは、何かと驚愕する。

先程の衝撃は、せんだいから発射されたD-03が新橋の船底に着弾した衝撃だった。

着弾したD-03は、先端のドリルが作動し、後方のブースターに押されながら、船底の奥へと掘り進む。

新橋、船内の通風口

ましろ「何ですか、今の衝撃は?」

さっきの衝撃で動揺する2人、だが、その後からドリルの音が次第に聞こえてきた。

薫（この音？・・・もしかして!?!）

ドリルの音で薫は、直ぐにD―03だと気づく。

そして

薫「ましろちゃん！頭を伏せって!!」

直ぐにましろに頭を伏せる様に言う。

ましろ「な、何故ですか？」

薫「良いから言われた通りにして・・・早く!!」

ましろは、何かと思いき言われた通り、頭を伏せる。

薫「貴方も！」

多聞丸「ミヤーン」

多聞丸もましろの懐に入り、薫も伏せる。

やがて、3分後

ドカーン!!!

D―03は、船内の中央で爆発した。

D―03の爆発で新橋の船底の一部に大きな穴が開き、それ以外に被害は、無かった。

新橋、転覆した船底上

健二「よし！成功だ!!」

成功に喜びながら、ブルーマーメイドとGフォースの救助隊は、直ぐに搜索を再開する。

新橋、船内の通風口

ましろ「今の爆発は？」

薫「行くよ、ましろちゃん!!」

ましろ「えっ!?!」

薫「今の爆発で、多分何処かに穴が開いた筈、其処から脱出するわよ!」

ましろ「は、はい!」

爆発後、海水が流れ込んでくる気配はなく、ましろを先頭に奥へと進んで行く。

ましろ「あっ!?!」

奥へと進むにつれ、奥から光の様なのが見えた。

ましろ「教官、光が!!」

薫「良いわよ!そのまま進んで!!」

ましろ「はい!」

光だと聞いて。薫は、出口が近いと分かり、そのまま先に進む様、ましろに命じる。

やがて

岸間「あっ!?!」

ましろ「えっ？」

上で捜索をしていた岸間が通風口を進むましろを発見する。

岸間「要救助者確認！」

健二「良いぞ、今そつちに行く！」

岸間がましろを発見したと聞き、直ぐに駆けつける。

岸間「聞こえる!!・・・今助けるから・・・じつとして!!」

直ぐに健二達が来て、救助作業を始めた。

ましろ（助かったんだ!!）

助かったんだと思い、ましろは、涙を流す。

薫「・・・」

その様子を見て、薫は微笑んだ。

その後、薫とましろと多聞丸は、無事に救助された。

新橋、転覆した船底上

『副長、教官!!』

やがて、引き返してきた晴風の救助隊が救助された薫とましろに駆け寄る。

光「怪我は、無い？」

光は、怪我が無いか問う。

ましろ「大丈夫……」

ましろは、岸間におぶられた状態で大丈夫だと答え。

美千留「教官は？」

薫「私は、足を挫いただけで大丈夫よ！」

薫も健二に肩を借りて、立ちながら、大丈夫だと答える。

ミーナ「よう生きとつたの、我……」

多聞丸「ニヤ〜」

ましろ「助かったにや〜、良かったにや〜」

『ええ……!?!』

ミーナ「な、何で、ネコ言葉になつとる……?」

堆出してしまった猫言葉に生徒達は、困惑していた。

健二「さあ、此処でも何だから、急いで艦に戻ろう。」

健二の言う通りに救助隊は、それぞれの艦に戻る。

救助隊がそれぞれの艦に戻った後、晴風は、収容していた新橋の乗員をせんだいと浪速に移すべく、2艦と接岸する。

晴風、甲板

ましろ「多聞丸無事救助しました。」

2 艦に移している間にましろは、八百屋の夫婦に多聞丸を無事に救助出来た事を報告する。

八百屋の奥さん「ありがとうございます。」

ましろ「どうぞ！」

ましろは、懐に居た多聞丸を取り出し、八百屋の夫婦に渡す。

八百屋の奥さん「多聞丸・・・あっ!？」

八百屋の奥さんがましろから多聞丸受け取ろうしたら多聞丸は、逃げ出し

多聞丸「ニヤーン・・・ニヤーン」

ましろの足元にすり寄る。

ましろ「多聞丸、行かないと・・・」

ましろは、引き離そうとするが、何故か離れない。

八百屋の旦那「随分懐いてるな・・・!？」

八百屋の奥さん「あっ・・・!？」

ましろに懐く多聞丸を見て、八百屋の夫婦は、驚いていた。

ましろ「ほら、多聞丸・・・」

ましろは、何とか多聞丸を離し、今度こそ八百屋の夫婦に渡そうとした時

八百屋の奥さん「あの・・・」

ましろと多聞丸の様子を見ていた八百屋の奥さんが・・

八百屋の奥さん「良かったら・・」

八百屋の旦那「面倒・・見てもらいますか?」

何と八百屋の夫婦がましろに多聞丸を譲ると言い出したのだ。

八百屋の奥さん「ご迷惑でなければ・・」

突然の多聞丸を譲ると言われましろは、驚きながら

ましろ「で、でも：自分、猫嫌いで：：」

ましろは、断ろうとするが

ミーナ「何を言うとする!!・・沈みゆく船で生死を共にした仲じやろうが・・」

ミーナは、八百屋の夫婦の折角の行為なのだから、受け取つてやれと言われる。

ましろ「で、でも、教官が許可するか如何か?」

だが、薫の許可なしでは、と言うが

ミーナ「何を言とるんじや!・・おぬしは、この際、教官の許可など後回しで、受

け取るべきじやろうが!!」

八百屋の夫婦の折角の行為を、このまま不意にする訳には、行かない、この際、薫の

許可は、後回しにして、多聞丸を受け取るべきだとミーナに言われ

ましろ「ん・・分かった・・多聞丸・・謹んで引き取らせて頂きます!!」

ミーナ「うむ、そう来なきやな・・・」

こうして、猫嫌いにも関わらず、ましろは、多聞丸を引き取る事になった。

一方、薫の方は、せんだい艦長の与力と会っていた。

与力「よう無事で良かった中佐!!」

薫「すみません、心配を掛けて・・・」

与力「何を言っておるんだ!!・・・中佐が無事で我々は、喜んでいるんだ。」

薫「ありがとうございます。」

薫は、今回の救助で単独行動をしたので与力に怒られると思ったが、逆に無事だった事に喜んでいた事にホツとする。

薫「そう言えば、何故此処に？」

横須賀に居る筈のせんだいが何故此処に居るのか薫は、問う。
すると

直気「我々は、調度武蔵を搜索していたんだ!!」

直気が武蔵を搜索していた事を薫に言う。

薫「武蔵を!?!」

武蔵と聞いて、薫は、注目する。

直気「だが、その途中で救難要請が有って、急遽武蔵の搜索を中止して、此処に来た

んだ。」

薫「そうだったんですか……それで武蔵は？」

事情を聞いて、薫は、武蔵は、発見できたのか問うが

直気「残念ながら、まだ行方不明だ!!」

薫「そうですか……」

まだ、不明だと聞いて、薫は、気を落とす。

与力「そう気を落とすな中佐!……まだ見つかつては、いないとは言え、搜索は、これからだ!!……山本准将達も動いているから、見つかるのも時間の問題だ!!」

薫「えっ、兄さんが!? 准将も動いているんですか?」

与力「そうだ!!……国土保全委員会の要請でな、向こうも武蔵相手にお手上げで我々に泣き付いたんだ。」

薫「そうだたんですか……」

与力「……まあ、そう言う事だ!!……我々は、一旦、浪速と共に横須賀に戻る……中佐は、このまま晴風に残留し、引き続き武蔵の搜索せよとの命令だ。」

薫「分かりました!! 武蔵搜索に戻ります!!」

与力「良いか、くれぐれも無茶は、禁物だぞ!!」

薫「はい!」

こうして、薫は、武蔵搜索に戻る為、晴風に残留する事になり、与力達と別れる。その頃、浪速では

美波「お手数ですが・・・それを横須賀女子海洋学校まで届けて下さい。」

美波が例のマウスが入った箱を岸間に渡す。

岸間「了解しました。」

岸間は、それを受け取る。

美波「それとこれも・・・」

箱の他に美波は、ある封筒を渡す。

岸間「これは？」

美波「抗体と・・・私の報告書です。」

美波が渡した封筒の中には、これまでマウスの事を調べた報告書やウイルスに対する

抗体の報告書が入っていた。

岸間は、箱と同じくそれも受け取る。

新橋の乗員を收容した浪速とせんだいは、横須賀へと戻る。

横須賀に戻る前に晴風が不足していた水も2艦から半分ずつ分けて貰い、水不足は、

解消された。

晴風、艦橋

ましろ「ただいま……」

ましろは、汚れた制服を着替え、新しい制服を着て、艦橋に戻ってくる

明乃「っ!?! ……シロちゃん!!」

ましろの声を聞いた明乃は、直ぐに振り返りましろに抱きつく。

明乃「良かった無事で!! ……私、待つてる間ずっと苦しかった!! ……シロちゃんをずっとこんな……御免ね!! ……御免ね!! ……」

明乃はましろの胸元で泣き始めた。

洋美「宗谷さん! ……えっ……」

洋美もましろの事が心配に思い、艦橋に見に来たが、明乃の泣いているところを見て、声を掛けるのを止める。

その時

多聞丸「ニヤ〜」

明乃「あっ?」

何所からか猫の音が聞こえ、すると、

明乃「えっ!?!」

多聞丸「ニヤ〜ン」

ましろの制服の胸元から多聞丸が出て来た。

『ああ……!?!』

雅か動物嫌いのましろが猫を持つてる事に艦橋にいた6人は、驚く。

ましろ「もう1匹……乗せても良いだろうか艦長?……」

ましろは、明乃に多聞丸を晴風に乗艦させて良いか問うと

明乃「もちろん!!」

明乃は、喜びながら乗艦を許可する。

そして

薫「皆大丈夫だった!!」

薫が支え杖を持ちながら、艦橋に戻ってきた。

明乃「かお、教官!?!無事だったんですね!!」

薫が無事な事に艦橋の7人は、喜ぶ。

ましろ「あの教官、実は……」

戻ってきた薫にましろは、多聞丸の事を話そうとしたが

薫「分かっているわよ……その多聞丸は、ましろちゃんが責任を持つて、育てると言うなら、私は、多聞丸の乗艦を許可します。」

薫は、さっきの話を全て聞いていたので、ましろが責任を持つて、育てるという条件で多聞丸の晴風乗艦を許可する。

ましろ「はああ・・・はい！」

それを聞いたましろは、大いに喜ぶ。

「うあああ・・・」

「可愛い・・・」

艦橋に居た7人は、多聞丸に触り始めた。

その光景を洋美は、影で見てた。

そして、機関室に戻ろうとした時

薫「待って、黒木さん!!」

洋美に気づいていた薫が機関室に戻ろうとしていた彼女を呼び止める。

洋美「・・・」

薫「さっきの見た通り、ましろちゃんは、岬ちゃんと仲直りしたわ!・・・だから、貴

方も・・・」

洋美「私に如何しろと言うんですか？」

薫「如何もしないわ・・・唯・・・これで、岬ちゃんの事を艦長と認めて貰いますか

黒木さん？」

薫は、洋美に明乃を艦長と見てめて欲しかった。

洋美「・・・」

だが、洋美は、何も言わず、機関室へと戻っていてしまった。
如何やら、まだ認めて貰うには、時間が掛かりそうだ。

薫（・・・黒木さん！・・・貴方がいつか、岬ちゃんを認めてくれるまで、私は、待つてゐるからね・・・）

戻る洋美を見ながら、薫は、いつか洋美が明乃を認めてくれるまで、待つ事にした。
せんだい、浪速と別れた晴風は、再び武蔵搜索に戻る。

晴風、艦橋

ミーナ「本職のブルマーは流石だったな・・・」

ミーナは、今回の救助でブルマーメイドが自分達より優れていた事に感心していた。
た。

明乃「私も遭難した時、助け合って貰ったから、ブルマーメイドになろうと思ったんだ：：それに船に乗れば家族ができると思つて・・・」

9年前、呉の養護施設

もえか「私のお母さんブルマーメイドだったの!!」

明乃「えっ!?!」

もえか「お母さん言つてた・・・海の仲間は家族みたいなんだつて!・・・だから、私もミケちゃんもブルマーメイドになつたらたくさん家族ができると思うの・・・だ

から、約束しようよ!!」

明乃「うん!」

明乃は幼い時に施設で出会ったもえかと約束した事を話した。

晴風、艦橋

ましろ「だからあんなに海の仲間は、家族だつと・・・」

ミーナ「そのもえかという子が武蔵の艦長か：ワシもうちの艦長・・・ティアとは中学から、ずっと一緒じゃった。」

ミーナはシユペーに残して来たテアの身を案じた。

薫「私も・・・」

ミーナ「えっ!?!」

薫「私もはやてちゃんとは、小さい時、一緒だった・・・」

薫は、明乃とミーナの過去を聞いて、自分も幼い頃にはやてと一緒にだった事を思い出す。

ミーナ「そのはやても・・・」

薫「・・・教員として、知名さんと一緒に武蔵に乗っているわ・・・」

ミーナ「そうじゃったのか・・・まあ、ウイルスの抗体もできた事じゃしな!・・・早く助けに行きたい!!」

薫の話聞いて、直ぐにでもテアの元に向かいたいと思うミーナ。

明乃「うん！」

明乃もミーナの言う事に賛同する。

薫「そうだね・・・問題は、見つければの事だけど・・・」

だが、薫が言う様に問題は、何所に居るかだ。

そんな事を考えているうちに更なる脅威が暗風に迫っていた。

第24章 事件の真相!

晴風に更なる脅威が迫る頃、

此処で時系列は、遡る。

4月20日

横須賀病院、病室

龍之介達が武蔵捜索に出港してから4日後、真霜は、独自で今回の事件の真相をもう一度調査する為、横須賀病院に入院している古庄に再度事情聴取をしていた。

真霜「それでは、先輩!・・・今回の事件に関して、何も覚えていないんですか?」

古庄「ん・・・残念だけど、事件に関する事は、何も覚えていないわ!!」

真霜は、前と同じ事を古庄に問うが、古庄は、全く覚えておらず聴取は、難航する。

功「・・・」

功は、隣で静かに話を聞いていた。

真霜「じゃ先輩!!・・・事件発生の前の日に何か変わった事はありませんでしたか?」

古庄「ん・・・」

真霜から事件発生の前の日に何か変わった事が無いか聞かれると、古庄は、思い出そ

うと悩む。

その結果

古庄「あつ!？」

真霜「何か？」

古庄「そう言えば・・・出港の日に校長の指示で海上安全整備局の研究員を乗せたわ

!!」

古庄は、真雪の指示で海上安全整備局の研究員を乗せた事を思い出す。

真霜「研究員を？」

古庄「確か・・・西之島新島付近の海洋生物の生態を研究という名目で・・・」

真霜「その研究員に何か変わった事は？」

古庄「いえ、別に無かったわ!」

真霜「そうですか・・・」

真霜は、古庄が言った研究員が怪しいと思つたが、それなら真雪が真つ先に怪しいと睨む筈。

真雪が睨まなかつたのだから、問題が無かつたのだろう。

従がつて、事件には、関係無い様だ。

古庄「御免なさい、力に成れなくて・・・」

古庄は、真霜に事件の事で力に成れなくて、申し訳ないと謝る。

真霜「良いんです先輩!!・・・それだけでも十分、お役に立っていますので・・・」
だが、真霜は、それだけでも十分に力に成っていると感謝する。

真霜「じゃ先輩、何か分かったら・・・」

これ以上、古庄に聞いても何も得られないので、真霜は、病室を出ようとする。

古庄「早く武蔵が見つかるの良いわね。」

帰る直前、古庄は、真霜に早く武蔵が見つかるの良いわねと武蔵の事を按じていた。

真霜「はい」

それに対して、真霜も同じ思いで、そのまま病室を後にする。

功「良い後輩だな!・・・准将が好きになるのも分かるよ!」

功は、龍之介達や事件に巻き込まれた生徒を助け様と事件の真相を調べる真霜に感心する。

古庄「・・・」

古庄は、唯病室を後にする真霜に手を振って見送る。

横須賀病院、廊下

真霜(今のところ・・・確たる収穫は、無い!!)

真霜は、古庄から何か聞き出せるかと思つたが、何も得られなかつた事に少しガック

りしていた。

真霜（他の乗員達も先輩と同じ事を言っているし……何が原因なの？）

一体、事件を引き起こしているのは何なのか、真霜は悩む。

そんな時

『予想を遥かに超える感染力だ!!……さるしまだけでは、済まないかもしれない!!』

真霜「ん？」

隣の病室から何かの話し声が聞こえてきた。

真霜は、直ぐに振り向き、その病室の様子を窺う。

その病室には、古庄と一緒にさるしまに乗艦していた例の研究員達が入院していた。

研究員A『うちの研究員全員が入院……こんな事になるとは……』

真霜「はっ!？」

研究員B『上にどう報告すればいいんだ!!……我々の責任問題になるぞ!!』

如何やら、古庄が言っていた例の研究員は、何か自分達には、言えない事を隠している様だ。

彼らの話を聞いた真霜は、直ぐにその病室に入る。

隣の病室

真霜「随分と、面白そうな話をしていますね!!……その話、私にも聞かせて貰いませよ

うか?」

研究員B「だ、誰だ君は?」

突然の真霜の登場に研究員達は、狼狽える。

真霜「もうし遅れました・・・私は、海上安全整備局 安全監督室 情報調査隊の宗谷真霜一等監督官です。」

『!?!』

真霜の名前を聞いて、研究員達は、驚愕する。

真霜「さっきの話、もう少し詳しく聞かせて貰えるかしら?」

真霜は、さっきの話を詳しく聞こうと研究員達を責める。

研究員B「な、何の事だ?」

真霜「あらくさっき言ってたじゃないの・・・予想を遥かに超える感染力だつて!!」

『うっ?!』

研究員達は、さっきの話を隠そうとしたが、真霜に見通しされた。

真霜「さあ何を隠しているの?・・・素直に言えば、貴方達の処遇も考えてあげるわ

!!」

真霜は、素直に言えば、今後の処遇について、考えたと研究員達に言う。

研究員B「だ、駄目だ!!・・・言えば我々は、殺される!!」

しかし、研究員達は、今の話を真霜に全部話せば、自分達は、殺されると思ひ全てを話そうとしない。

真霜「大丈夫よ！・・・私が貴方達を護つてあげるわ!!・・・だから、安心して、全てを話して・・・」

真霜は、自分が護ると言つて、研究員達を落ち着かせるが

研究員B「駄目だ!!・・・それでも言えば・・・殺される!!」

真霜達が護ろうとしても自分達は殺されると言つて、何も話さない。

真霜「一体誰に殺されるの？」

真霜は、誰に殺されるのか研究員達に問うが

研究員B「それは・・・言えない・・・あの方の名前を言えば殺される!!」

名前を言えば殺されると思ひ、それも言えない。

真霜「あの方？」

真霜は、あの方と聞いて、如何やら、研究員達の上に相当の大物がいる様だ。

その大物に脅えて、研究員達は、何も話さない。

このままでは、何も分からないままだ。

何も話さない研究員達に真霜は

真霜「よく聞きなさい!!・・・既に武蔵の反乱で東舞校教員艦16隻が航行不能、更

に行方不明の学生艦が増え続けているわ!!……このままでは、次に何が起きるか分からないのよ!!……貴方達は、それを聞いて、見て見ぬ振りが出来るの?」

と言つて、現在置かれている状況を話し、それを聞いて、見て見ぬ振りが出来るのかと研究員達に問う。

研究員『……………』

真霜の話を聞いて、研究員達は、話すか話さないかで迷う。

真霜「お願い全部話して!!」

真霜は、何とか聞き出そうとお願いする。

研究員A「……………わ、分かった……………話す……………全部話す!!」

真霜の努力が遂に研究員の1人が口を割る事に成功する。

研究員B「何を言っているんだ!!……………言えば殺されるぞ!!」

全てを話そうとする研究員をもう1人の研究員が止めようとするが

研究員A「此処で言わなくても……………どうせ殺されるんだ!!……………なら、いつそ此処で全部話して、彼女らの保護を受けようじゃないか!!」

今此処で真霜に全てを話さなくても、何れは、あの方に口封じで殺される。

ならいつそ此処で洗いざらい全てを話し真霜達の保護を受ける事にした。

研究員B「ん……………」

それを聞いたもう一人の研究者もそれに賛同するかの様に黙認する。

研究者A「全ては……あの研究が……全ての発端なんだ!!」

研究者達は、真霜に全てを話す。

例のマウスとその研究の内容。

全てを聞き出した真霜は、直ぐに携帯で彼らの保護を手配し、病室を出て、急いで彼らが居た研究所に向かう。

海上安全整備局、国立海洋医科大学先端医療研究所

研究所に付いた真霜は、直ぐに研究者が言っていた例の研究についての資料が残って無いか部屋の中をあつきたり、部屋のパソコンの中を調査した。

しかし、彼らが行っていた研究の資料の殆んどが既に処分されていたので調査は、難航した。

真霜「ああ、もう……何所にあるのよ!!」

研究資料が見つからないのにイラつき、机の横にある椅子に座る。

そんな時

真霜「ん?」

イラついていたら、机の上に置いてあったハムスター籠に目が行く。

真霜「もしかして!？」

真霜は、もしかしたらと思い、ハムスター籠の中を調べると

真霜「あっ!?!」

真霜の推察通り、籠の中から1個のUSBメモリーが見つかった。

真霜は、直ぐにパソコンで、そのUSBメモリーの中を見る。
すると

真霜「こ、これは!?!」

中身を見た真霜は、驚愕する。

USBメモリーの中には、例の研究に関する資料が入っていた。

真霜は、USBメモリーの中身を詳しく調べる為、横須賀のブルーマーメイド庁舎へと持ち帰る。

数日後

4月25日

国土交通省、大臣室

国交職員「現在Gフォース艦隊は、マリアナ沖を哨戒中……しかしながら、目下のところ武蔵発見に至らず!!」

深町「ご苦労!!」

深町は、龍之介からの定時報告を受けていた。

邦夫「ふん! . . . いせのわりには、全く役に立たん奴らだ!!」

嚴重な哨戒にも至らず武蔵を発見できない龍之介達を邦夫は、嘲笑う。

一誠「何を言ってるんだ野田監督官!! . . . 彼らだって、嚴重な哨戒をしいているが、そう簡単に発見なんて、無理だ!!」

一誠の言う通り、いくら龍之介達が嚴重な哨戒網を敷いても、完全ではない。

何故なら、武蔵が哨戒機の航続距離圏外に居たら発見は、難しい。

天候も悪ければ、同じである。

後は、艦船での哨戒に頼るしかない。

邦夫「しかし、このままでは、彼らを出した我々の責任になります!!」

邦夫は、このままだと武蔵を発見できない龍之介達の責任を自分達が被る事になる。

深町「何を言うか!! . . . その覚悟で彼らを出したんだ . . . その責任を取れないぐらいで何となる。」

一誠「その通りです。」

それに対して、深町と一誠は、覚悟を決めていた。

だが邦夫は

邦夫（くそ . . . !! コイツと言い、親父まで、俺を巻きぞいにする気だな . . . 冗談じゃない . . . 俺まで巻きぞいになってたまるか!!）

そうやって、巻きぞいに成るのを避け様と策を考えていると

真霜「失礼します!!」

真霜が大臣室に入ってきた。

一誠「宗谷監督官!」

突然、真霜が来た事に驚く。

邦夫（こんな時に・・・何の様だ？）

邦夫は、突然来た真霜をしからしい目で見える。

深町「如何したのかね？」

深町は、真霜が何の要で来たのか問う。

真霜「深町国交相!!・・・実は、事件の真相が分かりました!!」

一誠「えっ!」

邦夫「何!」

深町「おおそうか!・・・それで？」

真霜が事件の真相が判明したと聞いて、3人は驚き、続きを聞く。

真霜「・・・これを見てください!!」

真霜は、例のUSBメモリーから得た資料を深町に提出する。

深町「これは？」

真霜「それが事件を引き起こした原因です!!」

深町「ん……」

それを聞いた深町と一誠は、その資料に目を通す。

深町「……こ、これは!？」

一誠「深町国交相、これは!？」

資料を見た2人は、度肝うを抜く。

そして

邦夫（ば、馬鹿な!!……この資料は、全部処分した筈なのに如何して……此処に……）

提出された資料を見て、何故か邦夫は、知っている様な顔をする。

深町「……宗谷監督官!!これを何処で?」

深町は、真霜に資料の入手先を聞く。

真霜「それは、言えません!!……ですがその資料に関する事は、深町国交相も野田代表は、ご存知じゃないんですか?」

真霜は、あえて入手先を言わず、この資料に関して、知っていたかを聞く。

深町「いや……研究の事は、『密閉環境における生命維持及び低酸素環境に適應するための遺伝子導入実験』と言う事で届け出で知っていたが……こんな裏の内容があつ

たとは、初耳だ!!」

深町は、研究の事は、届け出で知っていたが、裏の内容までは、知らなかった。

真霜「では、この事は、知らないんですね!」

深町「何がだ?」

真霜「これが日本政府とアメリカ政府との裏取引で行われた研究だったと言う事を・・・」

真霜は、研究の裏で行われた政府の裏取引を深町に告げる。

一誠「えっ!?!」

深町「な、何だっつて!?!」

それを聞いた深町と一誠は、驚愕する。

真霜「そして、これには、ある大物が加担していると言う情報があります。」

更に真霜は、研究員達が隠していたあの方の正体を2人に告げる。

深町「誰だそれは?」

真霜「聞いても驚かないで下さいね深町局長」

真霜は、恐る恐るあの方の名前を言う。

果たして、そのお方とは

真霜「その大物と言うのは……内閣総理大臣……田沼忠義!!」

何とあの方とは、今回の事件で龍之介達をはじめ、晴風を反乱に仕立て上げた張本人である田沼総理だった。

一誠「何だつて……張本人は、田沼総理だ?!」

深町「う……そうか……」

それを聞いた深町は、愕然する。

深町は、政府の裏取引だと聞いて、田沼総理だとは、分かっていたが、信じたくなかった。

だが真霜から田沼総理の名前が出て、事実だと知り愕然したのだ。

一誠「そう言えば……総理は、この頃、キング大統領との電話会談が多かった……もしかすると……研究の事で会談していたのか……」

一誠は、驚愕していたが、この頃の田沼の様子を思い出し、納得する。

更にもう一つ

真霜「そして……野田監督官!!……これには、貴方も加担していたのよね?」

邦夫「うつ!」

何と邦夫もこの裏取引に加担していたのだ。

一誠「本当なのか邦夫!？」

息子である邦夫が加担していた事に父親の一誠は、驚愕する。

邦夫「で、デタラメだ!!・私は、知らん!!・・・な、何の事か、さっぱり・・・それに對して、邦夫は、惚けようとするが

真霜「惚けても駄目よ!!・・・この資料には、貴方が田沼総理に言われて、国土保全委員会や海上安全整備局にわいるを渡して、この研究を黙認させる様に仕向けた事は、分かっているんだから・・・」

真霜には、既にバレていた。

一誠「本当なのか邦夫!?!・・・お前そんな事まで!？」

邦夫「くう・・・」

最早言い逃れができない邦夫。

真霜「何故、貴方がこんな研究に加担したの?」

真霜は、何故、邦夫がこの研究に加担した理由を聞く。

邦夫「・・・お前には、分からないだろうな・・・お前に捨てられ、そして、あなたにも捨てられた俺は、全てを失った!!・・・地位、家柄全てをだ!!・・・それを助けてくれて、家柄まで回復してくれたのは、他ならぬ総理のお陰だ!!」

言い逃れできない邦夫は、全てを暴露する。

自分が密かに愛人を作ったせいで真霜に婚約を破棄され、更に親である一誠からも勘当を言い渡され、地位も失った。

だが、それに救いの手を差し伸べたのが、他ならぬ田沼総理だ。

田沼は、邦夫を助けただけでなく、一誠に勘当を許す様、説得して、地位まで回復させてくれた。

真霜「それで貴方は、国土保全委員会や海上安全整備局に、この研究を黙認させたのね・・・その見返りは何？」

邦夫「地位だ・・・研究が成功した暁には、それに似合った地位に着かせてやると約束してくれた。」

全ては、それに似合った地位に付く為、その為に国土保全委員会や海上安全整備局に研究を黙認させる様、金をばら撒いた。

一誠「何て事を!!」

真霜「でも、研究は、失敗に終わり・・・貴方は、総理に命じられ研究資料を処分するよう研究員達に命じた。」

邦夫「全て処分した筈なのに・・・」

真霜「残念だったわね・・・貴方が知らない所で研究は、密かに続けられていたのよ・・・それが、結局、今回の事件を引き起こした。」

邦夫「……自業自得という訳だな……フ……フハハ……!!」

全てを暴露した邦夫は、最早自業自得だと言って、笑う。

その時

一誠「この馬鹿たれ!!」

全てを聞いた一誠は、邦夫をいきなり殴る。

『!?!』

一誠「邦夫!……お前は、勘違いをしている!!」

邦夫「えっ!?!」

一誠「俺がお前を捨てたのは……お前が自ら立ち直る事を願っていたからだ!!……だから、俺は、お前をワザと捨てた……自分で立ち直る事と違って……総理の意向も有って、結局、お前を戻した……だが、あの時、私の判断は、間違っていた……」

一誠は、本気で邦夫を捨てた訳じゃなかった。

本当は、邦夫に自分の過ちを反省して、自分で立ち直る事を思っ

たが、立ち直るところか、益々悪に落ち、拳句の果てには、田沼の犬にまで落ちてしまった。

邦夫「今沙良、遅いよ……」

今沙良、遅いと言う邦夫。

真霜「……哀れね……」

そんな邦夫を見て、真霜は、哀れだと思った。

その後、待機していたB P F隊員の2人が大臣室に入つて来て

真霜「野田邦夫一等監督官！……貴方を職権濫用及び賄賂罪で逮捕します!!……連行しなさい!!」

『はっ!』

一誠「これまでだ邦夫!!……潔く罪を認めるんだ!!」

邦夫「う……」

邦夫は、事情聴衆の為、2人に連行されていった。

一誠「私のせいだ!!……私をもつとあいつの事を見ていたら、こんな事には……」
息子の暴走を止められなかった事を一誠は、悔む。

深町「済んでしまった事は、仕方がない!!……それよりも、この事件を一刻も早く解決するのが先決だ!!……宗谷監督官!……この事を急いで、宗谷校長にも伝えてくれ!!……私は、今から総理の元に向かう。」

真霜「分かりました。」

真霜は、真雪に事件の真相を伝える為、横須賀女子海洋学校へと向かう。

だが、真霜が向かう頃、晴風に更なる脅威が迫まっていた。

マリアナ沖

そして、同じ頃、龍之介達Gフォース西部方面混成艦隊も武蔵搜索の為、各方面に哨戒機を飛ばしていた。

だが、武蔵発見には、至らず、そればかりか低気圧のせいで一部が哨戒に出せない状況になった。

空母大鳳、艦橋

龍之介「哨戒機からの連絡は？」

実「まだ何も……」

信吾「くそ！……一体何所に居るんだ？」

武蔵が発見できない事に龍之介以外の幹部達は、イラ付きが見られていた。
すると

美奈「もしかすると……武蔵は、既に、この方面には、居ないんじゃないんですよか？」

『!?!』

信吾「何で、そう言い切れる？」

美奈「だって、これだけ哨戒の網を張っているのを見つからないなんて、これは、既に、この方面には、武蔵は、居ないという証拠です。」

美奈が武蔵がこの方面に居ないと予測した。

実「そんな馬鹿な!!：：この方面には、武蔵の目撃情報がかかり出ているんだ!!：：居ない訳がない。」

それに対して、実が否定する。

美奈「しかし、これだけ搜索しても発見できないとは、武蔵がこの方面に居ないと言
う事です。」

実「だが、この情報は、作戦本部から齎された情報だ!!」

美奈「その情報が誤りだったら・・・」

信吾「その根拠は？」

美奈「もしかしたら、大型の商船を武蔵と誤認しているのか、それか武蔵によく似た
艦が存在しているんじゃないでしょうか？」

信吾「そんなのある訳無いだろう・・・第一に武蔵の同型艦は、殆んどがドック入り
しているし・・・向こうが見間違える筈がない!!」

美奈「しかし・・・」

2人は、対立し

やがて

龍之介「2人とも止めろ!!」

龍之介が対立する2人を止める。

『…………』

龍之介「2人の意見は、最もだ!!…後一回哨戒したら、今度は、南に向かう…
良いな」

『はい』

龍之介は、あと1度、この方面を搜索したら、南へと進路を取る事にした。

その時

実「准将!!…作戦本部から緊急連絡です。」

龍之介「何事だ?」

横須賀のブルーマーメイド庁舎の作戦本部から緊急連絡を受けた龍之介達は、直ちに支援部隊を晴風の元に向かわせる。

第25章 比叡でピンチ！

4月26日

トラツク諸島沖

ヤップ島沖合でのしんばし救助を終えた晴風は、武蔵搜索の為、南太平洋を航行していた。

だが途中、濃霧の中を航行している時だった。

晴風、見張り台

マチコ「はっ!？」

突然、見張り台で見張りをしていたマチコが前方から一隻の艦影を発見する。

更に電探もその姿を正確に捉える。

晴風、艦橋

慧『新たな目標を確認!!』

マチコ『正面に艦影!』

慧『新艦種!!』

艦橋には、艦影発見の報告が続々と齎され、薫と明乃、ましろは、双眼鏡でその艦影

を見る。

晴風、見張り台

マチコ「艦橋形状から武蔵と思われませんか!？」

更に見張り台のマチコから接近してくる目標の艦橋形状から大和型独特の艦橋だと視認し、武蔵だと断定する。

晴風、艦橋

マチコからの報告を聞いた薫と明乃は、啞然とする。

鈴「ど、如何しよう・・・回避?」

芽衣「撃つちやう? てか、これ撃たれたらヤバイよね、これ?」

志摩「うい・・・」

武蔵だと判明したせいか、3人は、如何すれば良いか迷う。

明乃「・・・武蔵・・・」

明乃もボクとしてゐる。

幸子「艦長、余裕で向こうの射程に入ってます!？」

ミーナ「当たったら一溜りも無いぞ!!」

薫「艦長、早く回避命令を出して!!」

明乃「あつ!?!・・・と、取舵いっぱい!! 340度ヨーソロー!!」

3人に言われて、明乃は、急いで回避命令を出す。

鈴「取舵いっぱい!!、340度ヨーソロー!!」

明乃に従い、鈴は、左へと回避行動を取る。

そんな時、思わぬ報告が電探室から齎される。

慧『目標、距離13マイル!!』

晴風、見張り台

マチコ「13マイル!?そんなに近い筈は……」

電探室の慧からの報告を受けたマチコは、艦影が武蔵に比べて余りに小さく近くに居る事に驚き、もう1度、正確に視認しようと見張り台の上に登り目を凝らしウイングから身を乗り出す。

すると

マチコ「武蔵?・・・じゃない・・・二連装砲主砲!!・・・金剛型!!」

何とマチコが見た艦影は、武蔵ではなく、金剛型高速巡洋戦艦だった。

晴風、艦橋

マチコ『金剛型右30度、方位角70度、進路変わらず』

見張り台のマチコから武蔵ではなく、金剛型高速巡洋戦艦だと報告が入り、薫と明乃、

ましろは、目標を見る。

ましろ「あれは、うちの学校の比叡!」

ましろは、目標を見て、相手が金剛型の大型直接教育艦比叡だと視認する。

薫「比叡!」

幸子「遠くから見ると武蔵そっくりですね・・・でも大きさが全然違いますし・・・野間さんもそのせいで距離感が狂ったのでしょう。」

幸子は、タブレットで武蔵と比叡の艦データを見比べていた。

確かにマチコが見間違えるのもしょうがない。

比叡は、金剛型2番艦として初めて大和型艦橋を採用したテスト艦だ。

その為、武蔵と比叡を見間違えるのは、当たり前だ。

ましろ「行方不明になっていた比叡がこんな所に居たとは・・・」

ましろは、西之島新島で消息を絶っていた比叡がこんな南の海域に居た事に驚いていた時

多聞丸「ミヤン〜」

ましろ「あっ!」

突然、後ろから鳴き声が聞こえてきて、ましろは、後ろを向く。

多聞丸「ミヤン」

すると、其処には、多聞丸が皿の横に座り、餌をくれとおねだりしていた。

ましろ「ん……分かった、分かった。」

ましろは、慌てて餌を揚げる。

薫（あらあら……厳しいましろちゃんも多聞丸には、弱いよね……）

明乃「比叡の位置と進路を学校に連絡して」

明乃は、直ぐに比叡の位置と進路を横須賀女子海洋学校に連絡するよう指示する。

だが、その時

マチコ『比叡発砲!!』

ましろ「何だと!？」

ミーナ「うっ!？」

突然、比叡が晴風目掛けて、砲撃してきた。

薫「緊急回避!!」

明乃「最大船速!!取舵一杯!!」

鈴「取舵いっぱい!!」

晴風は、急いで左に舵を切り、砲撃を回避する。

だが、比叡は容赦なく砲撃を続ける。

晴風、艦橋

ましろ「学校からの指示は？」

幸子「ブルーマーメイドの派遣要請をしてくれました・・・到着は4時間後、それまで可能な限り比叡を捕捉し続けよ・・・但し、晴風の安全を最優先にとの事です。」
横須賀女子海洋学校からは、比叡に対して、ブルーマーメイドに応援を要請しているが、到着は、4時間も掛かるので、それまで晴風は、比叡を見失わない様に捕捉し続けよと指示を受ける。

薫「捕捉?!」

捕捉の命令を聞いて、薫は、難しい命令だと思った。

確かに薫の言う通り、晴風での比叡の捕捉は、難しい。

なんせ比叡の主砲は、武蔵より小さい14インチ砲だが、晴風見たいな駆逐艦などは、一撃で撃沈出来る。

その為、比叡の捕捉は、命がけである。

だが、そんな事、軍人でもない学生にさせる訳にもいかないのだが
そんな事を思っている

ましろ「あっ!?!・・・ん・・・」

隣のましろがある事に気づく。

それは、多聞丸が今度は、艦橋で便を出そうとしていからだ。

ましろ「ああ!? トイレは其処じゃない!」

ましろは、急いで多聞丸を便所へと連れて行く。

明乃「・・・リンちゃん、距離をとって大きく回り込んで比叡の後ろについて・・・」

鈴「はい!」

鈴は、明乃の指示に従い比叡との距離を離し回り込む。

ましろ「撃ってきたという事は、比叡も例のウイルスに・・・」

明乃「うん、感染してるんだと思う・・・武蔵と同じ様に・・・」

薫「・・・」

比叡の行動を見て、3人は、比叡が例のウイルスに感染していると推測した。

そんな時

幸子「待つてください!!」

隣で周辺の海域情報を調べていた幸子がある事に気づく。

幸子「比叡がこのままの進路、速度で航行すると・・・3時間後には、トラック諸島に到達します!!」

『えっ!?!』

薫「な、何ですって!?!」

何と比叡が向かう場所には、最大の要所、トラック諸島があった。

明乃「トトラックって・・・確か?」

幸子「はい、居留人口1万を超えます・・・おまけに海上交通の要所なので1日平均千隻の船が入り出します。」

薫「そんな所に向かえば、一気に感染が広がるわ!」

薫が言う様に居留人口1万を超える場所にウイルスに感染している比叡が向かえば更に感染が広がる。

しかも海上交通の要所なので、下手すれば世界中に、このウイルスが流出する恐れもある。

ミーナ「ブルマーの到着は4時間後、間に合う可能性は、低い。」

ブルーマーメイドの部隊が到着するのに4時間は、掛かる
とても間に合わない。

その時

鵜『緊急通信です!』

『えっ!?!』

突然、何処からかの緊急通信が入ってきた。

鵜『スピーカに流します。』

鵜は、スピーカに流す。

果たして何所から

『……此方は、Gフォース西部方面混成艦隊……晴風応答せよ!!……』

薫「に、兄さん!？」

何と緊急通信は、龍之介からだった。

龍之介『繰り返し返す!!……晴風応答せよ!!……』

薫「兄さん!？」

龍之介からの応答に薫は、急いで受話器を取る。

薫「此方、Gフォース中佐、山本薫……」

明乃「えっ!？」

ましろ「Gフォース?……中佐?」

薫が言った言葉に艦橋の皆は、驚く。

龍之介『薫、いや中佐!……お前なのか?』

薫「はい准将!!」

龍之介『そうか……良いか中佐!……現状は、把握している……現在、我々は、比叡に向けて、攻撃隊を発進準備中だ!!……到着は、30分後……』

何と、龍之介からの緊急通信の内容は、比叡に向けて、攻撃隊を発進準備中の連絡だった。

到着は、30分後、ブルーマーメイドの部隊より到着が早い。

ミーナ「30分で到着!?! . . . そんなに近くにおるのか?」

30分だと聞いて、龍之介達が近くに居るのかと推測するミーナ。

正確には、それより遠いマリアナ沖に居るのだ。

龍之介『従って、晴風は . . . 攻撃隊が到着するまで、比叡を何としてもトラック諸島に近づけさせるな!!』

何と龍之介は、攻撃隊が到着するまで、晴風に比叡をトラック諸島への接近を阻止せよと命じる。

薫「分かりました . . . 30分何とか稼ぎます。」

薫は了解し、受話器を置く。

ミーナ「そんな、無理じゃ!!」

龍之介の命令にミーナが反対する。

明乃「でも感染が広がったら大変な事になる . . . 救援が来るまで、私達で阻止しないと . . . 」

だが、明乃も救援が来るまで、自分達で何とか比叡をトラック諸島に入るのを阻止するしかないと判断する。

ましろ「具体的には?」

トラックに向かう比叡を如何阻止するのか、ましろは問う。

明乃「晴風に引きつけてトラックへの航路から逸らせば・・・」

明乃は、自ら晴風に比叡を引き付けて、トラックへの航路から逸らす・・・つまり晴風が囿になると言う事だった。

ましろ「追尾と比べると被弾の危険性が格段に上がりますが、それでもやりますか？」
ましろは、囿になれば危険性が増すと言って、それでもやるのか問う。

薫「・・・やるしかないでしょ！・・・この状況じゃ・・・」

それに対して、明乃より薫が先にやるしかない判断する。

そして

明乃「・・・うん、教官の言う通り！・・・足はこっちの方が早いし何とか、なると思う。」

明乃も同意する。

ましろ「・・・ん」

2人の判断にましろは、大人しくそれに従う。

明乃「リンちゃん前に出て蛇行して!!」

明乃は、龍之介の指示通り、比叡をトラックへの航路から逸らすべく、晴風を比叡の前に出して、蛇行する様に指示する。

鈴「分かりました。」

明乃に従い、鈴は、全速で比叡へと向かう。

それに対して、比叡は、晴風に向けて、砲撃してきた。

鈴は、舵を左右に切りながら回避し、比叡の前に出る。

画して、攻撃隊到着まで30分間の囷作戦が開始された。

横須賀女子海洋学校、廊下

晴風が30分間の囷作戦を実行している頃

真霜は、例の研究の資料を持って、横須賀女子海洋学校の廊下を校長室目指して歩いていた。

横須賀女子海洋学校、校長室

コン、コン

校長室のドアをノックし

真霜「失礼します。」

校長室に入る。

真霜が入ると真雪は、ちようど晴風の美波から提出された例のマウスとウィルスに関する報告書に目を通していた。

だが、真霜が来て、真雪は、話を聞こうと応接用のソファアールへと座る。

真雪「貴方が此処に来るといふ事は、余程の事ね！」

真雪は、此処に来た事情を聞く。

真霜「ええ」

真霜は、カバンの中から例の研究の資料を真雪に提出する。

真雪「これは？」

真雪は、提出された資料に目を通す。

真雪「あつ!？」

資料を見た真雪は、驚愕する。

真雪「実験艦が深度1500mまで沈降：：制御不能：：サルベージは、不可能：：」

真霜「の筈が、海底火山の活動で押し上げられて、浮上してしまった。」

真雪「・・・西ノ島新島!?!・・・此処は、今年の海洋実習の集合地点よ!・・・教官艦さるしまに、研究員を乗せる手配をしたわ・・・西ノ島新島付近で海洋生物の生態を研究したいという依頼があつて・・・」

真雪は、資料に記載されていた地図に実験艦の沈没地点が今年の海洋実習の集合地点だった事に驚き、教官艦さるしまに研究員を乗せる手配をした事を思い出す。

真霜「それが実は、実験艦からデータを回収して。その後、自沈させる為のチームだったんです・・・」

真霜は、真雪に先日のお古庄と功の見舞いと聴取を取りに至った時の帰りに研究員の妙な話を聞き、彼らから例の研究の事を問い詰め、研究室を調査したところ、ハムスターの籠の中から例の研究の資料が入ったUSBメモリーを見つけた事を話す。

真霜「それで、私が独自に調査したんです。」

真雪「RAT：：？」

真霜「海中プラントで偶然生まれた生物に彼らが付けた名称です。この生物が媒介するウィルスは、生体電流に影響を及ぼします。その為、感染者同士は、一つの意味に従い行動する。」

真雪「一つの意味。まるで軍隊ね。アリやミツバチ見たいな。」

真霜「ええ、だから記憶が在るのに、行動の理由が説明できない。付近の電子機器が狂う原因も、この生体電流の影響です。」

如何やら、EMPの原因は、生体電流の影響だった様だ。

真霜「それと、この研究については、もう一つ驚くべき事実が判明したんです。」

真雪「それは、何？」

真霜「実は、この研究は、日本政府がアメリカ政府との裏取引で行われた研究だったんです。首謀者は、田沼総理。そして、裏で動いていたのがホワイトドルフィンの野田一等監督官!!」

真霜は、研究の裏で行われた政府の裏取引の事実と首謀者である2人の事を真雪に打ち明けた。

真雪「何ですって!?!?・・・それで・・・」

真霜から事実を聞いて、驚愕し、2人については、如何なつたか問う。

真霜「既に野田監督官については、現在聴衆中で、田沼総理の元には、今、深町国交相が向かっています。」

真霜「そう・・・」

邦夫が逮捕されたと聞いて、真雪は、真霜を見て、元許婚が加担していた事に落ち込んでいるのかと思った。

真霜「あと一つ重要な報告が・・・残念だけど、このウイルスには、抗体がないの!!」

真霜は、ウイルスの抗体の開発がまだ行われていない事を伝える。

だが

真雪「それなら心配は、要らないわ!!・・・先程、晴風から報告書が届いたわ・・・この生物が媒介するウイルスあり、試作した抗体を送るので増産されたし、と・・・」

真雪は、晴風の美波から提出された報告書と試作した抗体の事を真霜に言う。

真霜「抗体を学生が?」

真雪「晴風には楠木美波が乗っているのよ!」

真霜「えっ!?!・・・あの海洋医大始まって以来の天才?」

真雪「飛び級でまだ海洋実習をしてなかったから、今年済ませたいと言われて・・・」

真霜「変わり者とは聞いていたけど、でも助かりましたね!」

真雪「ん：・感染後の経過時間が短ければ海水がウイルスに対し有効と推測される：・しかし、時間経過と共にウイルスが全身に行き渡った場合、抗体の投与のみが効果的と思われる。」

首相官邸、総理執務室

一方、首相官邸でも深町が例の研究と裏取引の事を田沼に問い詰めていた。

深町「総理!・・・これは、如何いう事ですか?」

深町は、田沼の前に真霜が提出した資料を出し、問い詰める。

田沼「うう・・・」

処分した筈の研究資料を突き付けられ、田沼は、動揺する。

深町「アメリカ政府との裏取引での研究!?!・・・何故、私に黙って・・・」

田沼「・・・君は、何を言っているんだ・・・そんな研究、私は、記憶にない・・・」

深町の問いに田沼は、記憶にないとしらを切る。

深町「では、これについてもまだ、記憶にないと言えるんですか?」

田沼「何!?!」

深町「宗谷監督官からの報告で総理！……貴方が野田監督官を使って、この研究を幹部達に黙認する様、金を送っていた事……それについては、当の本人が認めています……それでもまだ、記憶にないと言えるんですか？」

しらを切る田沼に深町は、真霜が報告した邦夫の汚職とそれを命じた事を田沼に言う。

田沼「そ、それは……」

深町「認めるんですね！」

田沼「う……」

邦夫に裏切られた事を知り、田沼は、なくなく認める。

深町「何故、こんな裏取引を承知したのですか、総理！……昔の貴方は、そんなのでは、無かった筈……」

深町は、田沼に何故、こんな裏取引を承知した理由を聞く。

田沼「き、君に何が分かる！……財政赤字を抱えている我が国が立ち直るには、アメリカの要求に縋るしかなかったのだ。」

裏取引を承知した理由は、国家財政の回復だった。

2008年のリーマン・ショック以来、日本の景気は、回復していたが、逆に国家財政は、赤字になり、赤字回復で借金が膨らむ一方だった。

田沼は、何とか財政を回復し借金を返済しようと画策していたところに突然、アメリカから財政の回復と借金の返済を援助すると言つて来て、その見返りに例の研究やRATと呼ばれるマウスの実験を日本で行えるよう裏取引を持ち出してきた。

田沼は、最初は、拒んだが、財政の回復と借金の返済の資金援助の額に目がくらみ、裏取引に乗つてしまつたのだ。

深町「……たつたそれだけの為に……こんな事態が起きるのを承知で!？」
財政赤字回復の為にこんな事態が起きるのを承知で裏取引に乗つた事に深町は、呆れてしまう。

田沼「それは、予測ができなかつた……雅か、私が知らない所で研究が行われていたとは……」

だが、田沼は、こんな事態が起きるとは、予測できなかつたし、自分が知らない所で研究が続けられていた事に愕然とする。

深町「それが欲に駆られて身を滅ぼすという事ですよ総理……その欲のせいで、今回の事件が起きた。」

雅に今回の事件は、総理が浴に駆られて起きた事件だ。

田沼「それで……私を逮捕するのか？」

深町は、内閣総理大臣でもある田沼を逮捕するのか

深町「いえ、逮捕はしません!!」

何と逮捕は、しなかった。

それもそうだ。

内閣総理大臣でもある田沼を逮捕する権限は、深町には、無い。

それに今、田沼を逮捕すれば国際問題にもなるし、今抱えている事件も迷宮入りになる可能性もある。

深町「ですが、貴方には、この事件が解決するまで、我々に協力をして貰います。」

深町は、逮捕をせず、協力を持ちかけてきた。

田沼「協力!?!」

深町「貴方には、償う権利がある。」

罪を犯した田沼には、深町の要求を拒否できなかつた。

トラック諸島沖、ピケロット島環礁

そして、場面は、トラック諸島沖で囮作戦を実施している晴風に戻る。

晴風、艦橋

晴風は、比叡の砲撃を避けながらトラック諸島沖のピケロット島環礁海域に逃げ込む。

艦橋には、砲弾がくる警告アラート音が鳴り響いており、操艦してる鈴も泣きながら

回避行動を続ける。

晴風、機関室

麻侖「いつまで一杯なんでえい!!そう長く持たせなねえよ!!」

洋美「油も馬鹿喰いしてるんだけど・・・」

流石の全速での回避行動の連続で機関室から長くは、持たないと報告が入る。

晴風、艦橋

幸子「もとより航続距離は向こうが上ですし、此方は無理な動きを続けてますからね・・・」

機関室からの報告を受け、限界だと言う事を理解する幸子。

ミーナ「まだ、救援はこんのか、早く次の手を打たなければ何れ限界が来るぞ!!」

ミーナは、龍之介が言っていた攻撃隊は、まだ来ないのかと焦る。

ましろ「教官、艦長、気持ちは分かるがこれ以上は・・・」

ましろは、薫と明乃の気持ちも分かるが、最早、限界だと分かり、退避を勧める。

薫「後もう少しだけ待って、もう直ぐ救援が来るから・・・」

だが、薫は、龍之介を信じ攻撃隊が来るまで待つ様、説得する。

しかし、もう既に1時間は、経過しているのに攻撃隊は、一向に現れなかった。

何故なら

空母大鳳、艦橋

龍之介「如何した!?! . . . 何故、攻撃隊を発進させない?」

信吾「カタパルトが故障! . . . 発進不能!!」

何と発進寸前でまたも射出用カタパルトの全てが故障してしまい発進不能に陥った。

龍之介「くそ!! こんな時に . . . 修理にどのくらいは、掛かる?」

信吾「3時間は、掛かるそうです。」

龍之介「3時間だと?! . . . それじゃ間に合わない . . . 急がせろ!!」

龍之介は、射出用カタパルトの修理を急がせろと命じる。

龍之介「通信主! . . . 急いで白鳳に現地へ急行せよと伝えろ!!」

実「はっ!」

更に哨戒中だった白鳳に晴風の元に至急急行せよと命じる。

その事を知らない晴風は、以前、囀作戦を続ける。

晴風、艦橋

薫「あともう少しだけ . . .」

ましろ「しかし」

薫とましろが論争していると

鵜『Gフォースから再び通信!!』

再び龍之介から通信が入る。

『!?!』

鵜 『スピーカに流します。』

鵜 は、スピーカに流す。

龍之介 『・・・此方は、Gフォー ス西部方面混成艦隊・・・晴風応答せよ!!・・・』

薫 「はい此方、山本中佐!」

薫 は、受話器を取り応答する。

龍之介 『中佐、気の毒だが・・・攻撃隊は来ない!』

『えっ!?!』

攻撃隊が来ないと報告を聞いて、驚愕する。

薫 「何故ですか?」

龍之介 『トラブルの為、攻撃隊の発進が出来なくなつた・・・修理に3時間は、掛か

る。』

薫 「そんな・・・」

龍之介 『残念だが、攻撃隊は間に合わない・・・直ちに晴風は、比叡から退避せよ!!』

最早、攻撃隊は、間に合わない。

龍之介は、直ちに晴風に退避するよう命じる。

薫「しかし、比叡は、如何するんですか？」

退避命令を聞いて、薫は、比叡を如何するのか問う。

龍之介『其方には、白鳳を急行させている。』

龍之介は、比叡に対して、白鳳を向かわせていると伝える。

薫「白鳳つて!?!?・・・到着は、どのくらいで？」

龍之介『到着は・・・2時間後だ!!』

薫「それじゃ間に合わない!!・・・後2時間以内で比叡は、トラック諸島に到達するんですよ!!」

白鳳の到着まで2時間後、とても間に合わない。

龍之介『だが、他に方法はない・・・晴風は、急いで安全圏まで退避せよ!!』

攻撃隊が発進できない以上、白鳳の到着を待つしか方法は、無い。

龍之介は、急いで晴風に急いで安全圏まで退避するよう命じる。

薫「・・・」

それに対して、従うのか、でも従えば比叡は、トラック諸島に到達する。

そうすれば、ウイルスが世界中にばら撒かれてしまう。

如何するか、薫は、迷いながら、明乃を見る。

すると明乃は、

明乃「教官!・・・私達が諦めたら・・・」

薫に自分達が諦めたら、トラック諸島が危ない事を伝える。

そして、それにましろが

ましろ「ならば教官!・・・比叡の足を止める以外、方法は、ないんじゃないんですか?・・・例え沈める事にしても・・・」

何と晴風で比叡の足を止めるしかないと言ってきた。

例え沈めても

『えっ?』

ましろの言葉に薫以下艦橋にいる全員が哑然とする。

幸子「・・・比叡の舷側装甲は、武蔵のおよそ半分・・・砲戦では、無理ですが、雷撃なら可能です。」

幸子がタブレットで比叡の装甲強度を調べ、砲撃では、無理だが、魚雷なら沈める事が可能だと言う。

芽衣「よっしやきたあー!!来たよー私の時代!西崎、慎んで沈めさせていただきまーす!あく待ってました・・・この時を、撃って撃って撃ちまくるぞー!」

雷撃と聞いて、芽衣が自分の出番だと興奮する。

薫「それは絶対に駄目!!・・・相手は、貴方達と同じ学生艦よ・・・それを沈めると

は、生徒を殺す事に成り掛けないわ!？」

だが、それに薰は、真つ先に反対する。

ましろ「誰も沈めろとは言つてません、悪まで過程の話です。」

ましろも沈めるとは言つたものの

それは、あくまでも過程の話であつて足を止める方法がないと言うだけの話であつた。

それを聞いた芽衣のテンションは下がる。

明乃「教官の言う通り・・・比叡に乗つてるのは私達と同級生なんだよ・・・もしも
の事があつたら・・・」

ましろ「しかし、このままでは、距離を取りながらの追尾しかないだろ!」
回避も出来ないし、沈める事も出来ない。

ましろの言う通り、距離を取りながらの追尾しかない。

『ん・・・』

如何すれば良いのか、2人は、悩む。

悩んだ結果、明乃が

明乃「・・・何とかして、沈めずに比叡の足を止めよう。」

ましろ「シユペーの時と同じ事を? しかしあの時ですら無理だつたんだぞ!!」

明乃は、先のアドリラル・グラフ・シユペー戦と同じ作戦で比叡を止めようとするが、それにましろが無理だと反対する。

幸子「両舷に副砲7門ずつ・・・此方の射程まで乗せる前に蜂の巣ですわね・・・ましろ「・・・」

薫「やはり退避するしかないのかな・・・」

最早、龍之介の命令に従い退避するしかないのか、艦橋にいる全員が頭を悩ませる。そんな時

聡子『あもく邪魔ぞな!!』

突然、下の海図室から聡子の騒ぎ声が聞こえて来て、下を見ると

多聞丸「ミクミヤン!」

艦橋と海図室を繋ぐパイプから多聞丸が出てきた。

聡子「お前も邪魔・・・!!」

五十六「ぬう・・・う・・・う・・・」

続いて五十六も出てくるが、見事にその出たお腹がパイプに引つ掛かった。

明乃「はっ!」

パイプに引つ掛かった五十六の姿を見て

明乃「比叡を・・・止められるかも!」

明乃は、比叡を止められる案を思い付く。

薫「えっ!?! 如何やって?」

果たして、どんな案か、明乃は、薫に説明する。

説明を聞いた薫は、通信で明乃の案を龍之介に伝える。

明乃の案を聞いた龍之介は、無謀だと反対する。

だが、薫は、これしか方法がないと言い明乃の案を認めさせ様と主張する。

それに対して、龍之介は、学生艦を使つての作戦の許可など自分では、決められない。

龍之介は、校長の真雪に相談して、指示を仰ぐよう伝える。

薫と明乃は、直ぐに横須賀女子海洋学校に連絡する。

横須賀女子海洋学校、校長室

校長室の電話が鳴り響き、真雪は、出る。

教頭『校長、晴風より通信です。』

『あっ!?!』

教頭『繋がります。』

晴風からの通信だと聞いて、真雪は、直ぐに電話をスピーカーモードにする。

薫『此方航洋艦晴風教員の山本薫です。・・・現在、比叡監視の任務に就いていますが、

比叡もさるしまや武蔵と同じ状態になっていると思われます。・・・このままだつと2時

間以内にトラック諸島に到達する未踏視なので、比叡の足を止める作戦実行の許可を下さい。』

薫は、明乃が提案した作戦の実行許可を真雪に要請する。

真霜「晴風一隻で比叡を?しかも昼間に……無理よ!……直ちに退避を……」
一緒に電話を聞いていた真霜は、反対する。

夜戦ならば速力と機動性が有利な駆逐艦でも勝機はあるが、昼間の戦闘は視界もよく戦艦など砲戦が得意な艦が有利だ。

その時

真雪「あっ!?!」

真雪のパソコンに晴風から作戦の概要が送られてきた。

真雪「……よく考えられてるわ……これなら実行可能ね!」

送られてきた作戦の概要を見て、真雪は、可能だと判断する。

真霜「そんな、危険すぎるわ!……Gフォースの艦隊は、如何したの?」

だが、真霜は、危険すぎると断固反対し、救援に駆けつけている龍之介達は、如何したのか聞く。

薫『残念ながら、間に合いません……その為、今この海域に居るのは、私達だけです……やらせて下さい!』

真雪「……燃料は足りる？故障箇所はない？」

薫『はい、大丈夫です。』

真雪「クラスの友達の子達の体調は？」

薫『問題ありません。』

真雪「……分かりました……許可します！……但しクラス全員とよく相談して……」

薫『ありがとうございます。』

真雪から作戦許可を得た薫は、通信を切る。

真霜「……良いの、お母さん？」

真雪「私が見たところ、作戦そのものは、決して無謀なものではないわ……それに……」

真雪は、ある画像を真霜に見せる。

真霜「ん……猫？」

それは晴風に乗艦している五十六の画像であった。

真雪「晴風の報告でね……RATを捕らえた猫にはウイルスは、感染しなかったの

よ。

真霜「あつ……」

真雪「良い風が吹いているのかも知れないわね……あの艦には……」

真雪は微笑みながら晴風の作戦の成功を祈った。

場面は、比叡と戦闘中の晴風へと戻る。

真雪からの作戦許可を得た薫は、明乃に生徒全員に作戦の概要を説明させる。

晴風、主計室

明乃『以上が作戦の概要です。』

明乃は、艦内放送で生徒全員に作戦の概要を説明した。

美海「其処までして、止めなきゃならないの?」

美海は、比叡を止めるのに、其処までする必要があるのでかと疑問視する。

明乃『それは・・・』
すると

美波『比叡はウイルスに感染している。』

明乃の代わりに美波が止める理由を説明をする。

美海「え!？」

晴風、艦橋

美波「先日の砲術長の症状を思い出してくれ、さるしまも武蔵も同じウイルスに感染したと思われる・・・これに感染したものは、自分の意思が制御できなくなる。」

晴風、工作室

美波『しかし、私が抗体を開発した。』

媛萌「あの時のアレ！・・・抗体の実験だったんだ。」

美波の説明を聞いた媛萌は、あの時の人体実験は、抗体の実験だったと納得する。

晴風、艦橋

美波「データは学校に届けた。だから足止めさえして置けば、比叡の生徒は、後日治療出来る筈だ・・・しかし・・・今、比叡を放置すれば、トラックの住民に感染するかもしれない・・・と成ると・・・おのずと世界中に感染が広がる。」

明乃「私は皆助けたい！！・・・比叡の子達もトラックの人達も・・・海の仲間が家族だから！！」

明乃は、比叡とトラックの両方を助けたいと告げる。

晴風、機関室

洋美「で、また一人で飛び出すつもり？」

それに対して、機関室の洋美がまた勝手に単独で飛び出すのかと問う。

だが、明乃は

晴風、艦橋

明乃「うんうん、この作戦を成功させるには・・・皆の力が必要なの！！」

一人で飛び出さず、生徒全員と一緒に戦う意思を告げる。

ましろ「あっ!？」

それを聞いたましろは、驚く。

明乃「だけど、皆にも危険が及ぶから、私一人じゃ決められない……皆の意見を聞かせて?」

明乃は、生徒全員の意見を問う。

ましろ「……」

晴風、機関室

麗緒「比叡クラスって、優等生だよね?」

留奈「私達じゃ……無理っぽくない……?」

晴風、電探室

鶴「大型艦だもんね……」

慧「武蔵の時も怖かったし……」

殆んどの生徒が先の武蔵との戦闘で消極的になっており、作戦に賛同するか疑問に思っていた。

だが、そんな時

晴風、艦橋

薫「お願い皆!……無理は、承知で分かるけど……このままだと手遅れに成る……」

私達に全てが掛かっているの!!」

消極的な生徒に薫は、訴える。

そして

鈴「わ、私・・・やります！頑張ります!!」

突然、鈴がこの作戦をやると涙目ながら声を上げた。

『お・・・』

声を上げた鈴に皆は、注目する。

幸子「引つ込み事案の知床さんが・・・」

いつも逃げると言う鈴がやるなんて、珍しかった。

そして、その勢いに乗じて、

芽衣「ふん・・・如何する？」

志摩「うい、うい！」

芽衣「よし、やるか！」

まゆみ「やるやる!!」

芽衣、志摩、まゆみの3人も賛同する。

幸子「各かではありません！」

ミーナ「ワシも手伝う・・・他人事ではないしな」

幸子、ミーナも賛同する。

『わ、私達も……!!』

理都子「艦長は、私達を助けってくれたし!」

果代子「今度は、私達の番!」

『だよね』

艦橋に來た理都子と果代子も明乃への恩を返す為、賛同する。

明乃「はっ……」

艦橋の全員が賛同した事に明乃は、嬉しくなる。

それに続くかの様に

晴風、射撃指揮所

光「比叡の全長は、222m、全幅は、31m……イケそうじゃん!」

順子「でも、バキユンと着たらヤバくない……」

美千留「ぐるぐる回ってれば平気だよ!」

晴風、水測室

楓「万理小路に名にかけて、最善を尽くします。」

晴風、電探室

鵜「私達も」

慧「やれるだけやってみる。」

晴風、海凶室

聡子「ま、何とか成るぞな！」

晴風、見張り台

マチコ「波飛沫一滴さえも見逃さない！」

晴風、工作室

百々「こうなつたら、覚悟を決めるツスよ！」

媛萌「大変だけどね・・・」

美海「マツチもやる気になっているみたいだし頑張ろう！」

晴風、炊飯所兼食堂室

あかね「私達は・・・」

ほまれ「如何すれば・・・」

美甘「うくん・・・と、兎に角、ご飯を炊こう！」

『ご飯を炊こう』

やがて、各所から作戦に賛同する声が上がってきた。

晴風、機関室

洋美「でもやっぱり無茶よ！・・・機関が持つかどうか…ねえ麻侖？」

だが、洋美だけは、最後まで反対し、麻侖も同じ意見だと思つた。

麻侖「……よろし! やつてやろうつてんでえい!」

しかし、麻侖は、作戦に賛同する。

洋美「ええ?」

麻侖の作戦に賛同に洋美は、驚く。

麻侖「艦長つてのは、神輿よ! 軽くて馬鹿でも神輿を担ぐのが江戸っ子の心意気でえい!」

空「いや、千葉出身でしょ、機関長殿!」

麗緒「でもまあ、機関長が言うなら……」

桜良「やりますか!」

麻侖に続いて、洋美以外の4人も賛同した。

残るは、洋美のみ

晴風、艦橋

洋美『宗谷さんは、無理だっと思うよね?』

洋美は、最後にましろの意見を聞く。

ましろ「……互いの艦の特性を考えれば、不可能ではないと思う……だから……力を貸してくれないか?」

晴風、機関室

洋美「宗・谷・さ・ん．．．分かった．．．」

洋美は、ましろの言葉にシヨックを受けるも、作戦に涉々ではあるが賛同した。これで、殆んどの生徒が、この作戦に賛同した。

晴風、艦橋

ましろ「艦長！．．やるからには、私も全力を尽くします。」

ましろがそう言うのと艦橋に居る生徒達は明乃を見る。

明乃「皆．．ありがとう」

明乃は皆に感謝する。

多聞丸「ニヤン！」

すると多聞丸も賛同した。

明乃「ん！」

明乃は、多聞丸の返事を受け取る。

それを見た薫は、受話器を取り

薫「兄さん、お聞きの通りです．．．私達は、この作戦を実行します。」

龍之介にこの作戦の実行を報告する。

空母大鳳、艦橋

龍之介「ん．．．分かった．．．だが、危なくなったら、直ぐに逃げろ!!いいな．．．」

薫『はい!』

龍之介は、承諾し、通信を切る。

実「准将……」

龍之介「カタパルトの修理を急がせろ!!」

信吾「はっ!」

龍之介(……死ぬなよ薫!)

龍之介は、大急ぎで修理を急がせて、晴風の無事を祈った。

晴風、艦橋

薫「では、これより晴風による比叡座礁作戦を開始します。」

明乃「戦闘よーい!」

画して、晴風による比叡座礁作戦が開始された。

晴風は、比叡の砲撃を避けながら、航行する。

晴風、艦橋

幸子「艦長、教官! 見てください!」

幸子が明乃に手持ちのタブレットを見せる。

タブレットには現在晴風と比叡がいる海域の潮流と水深などの詳細のデータが出されてる。

明乃「・・・凄いねこれ・・・」

明乃は、幸子から見せられたデータに驚いてる。

幸子「データはより多く、より新しくがモットーでして、個人的に収集しています。」

薫「凄いわ!!・・・これだけの情報が揃ってるなら、この作戦は、成功する。」

薫もデータをみて、これだけの情報が揃ってるなら、この作戦は、成功すると確信する。

明乃「助かるよ！ありがとう」

ミーナ「お主やるではないか!!」

幸子「このへんでええとこ見せんともう舞台は回ってきませんけえ！」

ミーナ「間尺に合わん仕事かもしれんなあ・・・」

こんな時でも何故か任侠映画のセリフを吐く幸子とミーナであった。

明乃「メイちゃん、タマちゃん準備を！」

明乃は、芽衣と志摩に砲雷撃戦の準備を命じる。

芽衣「よしきった！」

志摩「うい」

芽衣と志摩は、気合いが入る。

幸子「艦長、教官！進路の候補でました！」

幸子は、2人にタブレットを見せる。

タブレットには、比叡を座礁させる幾つかの針路の候補が表示されていた。

薫「艦長、このルートなら」

明乃「ん……このルートで行こう!」

2人は、一通り目を通すと、針路の候補を決めた。

明乃「リンちゃんお願い!」

明乃は、鈴にその針路に航行するよう指示した。

鈴「は、はい!!」

鈴は、明乃の指示通りに、その針路通り航行する。

晴風、見張り台

マチコ「右舷に着弾!!」

比叡は容赦なく晴風に向け砲撃する。

晴風、艦橋

明乃「とくりかゝじ!」

ましろ「とくりかゝじ!」

明乃は、艦橋の天井部分から身を出し、回避指示を出すとましろがそれを復唱し、晴風が取舵を切る。

明乃「もどくせ〜！」

ましろ「もどくせ〜！」

晴風が元の進路に戻ると、比叡の砲弾は晴風の右舷後方に着弾した。

明乃「シロちゃん！ 砲雷撃の指示、お願い！」

ましろ「分かった！」

此処で明乃がましろに晴風の砲雷撃の指示を一任する。

ましろ「戦闘、右手、砲雷同時戦、発射雷数2、比叡の左舷を狙え！ 当てるなよ！」

芽衣「難しいな・・・」

芽衣は、水雷方位盤を見ながら答える。

ましろ「主砲、砲では抜けないから当てるつもりで撃つて良い・・・但し左舷寄りに着弾させて少しでも右に誘導して！」

志摩「うい！」

ましろ「攻〜撃〜始〜め〜!!」

ましろの攻撃指示の元、晴風の第二、三主砲が比叡に向けて砲撃を開始、更に第二魚雷発射管より魚雷2本が発射される。

同時に比叡も砲撃する。

晴風、水測室

楓「予定のコースをお進みください・・・海底に障害物がありません。」
楓からソナーで進路上の海底には、何も無い事を艦橋に報告する。

晴風、艦橋

ミーナ「勝負どころじゃ・・・狙うもんより狙われるもんの方が強いけえ・・・」

幸子「後がないんじゃ・・・」

台詞どころか顔も任侠を意識している。

薫「・・・」

薫は、それを見て、不機嫌になる。

鈴「あ・・・当たりそお・・・」

鈴は、涙目で操艦する。

やがて、比叡の砲弾が晴風の左舷側の岩礁に着弾する。

ましろ「魚雷左右に1発ずつ・・・」

芽衣「頼むから通ってよ・・・」

それに乗じて、今度は、第一魚雷発射管から2本の魚雷が比叡の両側に向けて発射する。

発射された魚雷は、比叡の両舷を通過し、進路をずらす事に成功した。

マチコ『比叡第一ポイントへの誘導に乗りました!』

マチコから比叡は、予定のコースに乗ったと報告が入る。

ミーナ「ケンジ……」

幸子「リーベリーヒ……」

ましろ「此処で座礁させれば沈めずに足を止められる！」

3人は、双眼鏡で比叡が座礁するのを見守るかのように比叡を見るが

ましろ「抜けられた!？」

薫「まだ早かった!？」

比叡は、座礁せず、そのまま直進して、晴風に向かって再度砲撃してきた。

明乃「撃ってきた!とくりかゝじ!」

明乃は、急いで回避命令を出す。

比叡の砲弾は、晴風の左舷後方の付近に着弾。

『きゃあ……あ……』

着弾の衝撃波が晴風に襲い艦橋に居る全員がよろける。

晴風、見張り台

マチコ「至近弾、左舷後方に着弾！」

晴風、艦橋

明乃「損害は!？」

晴風、機関室

明乃『後もう少しだけ頑張つて……』

明乃は、もう少しだけ持ちこたえる様言うが

洋美「わあ!？」

麻侖「バルブ破損!!」

その時、機関室の圧力バルブが破損し水蒸気が溢れ出てきた。

それを見た麗緒と留奈は、急いで下に降り、手動で圧力を調整する。

洋美「ヤバイって! これ以上の出力維持できないよ!」

麻侖「わくてる! まだか艦長!!」

晴風、艦橋

明乃「あと10分だけ持たせて!」

晴風、機関室

麻侖「分かったけどよ……本当に10分でぶつ壊れるぞ!」

麻侖は、明乃の指示の10分間だけ何とか機関を持たせる。

晴風、艦橋

薫「その10分間が最後の賭けに成る。」

機関室からのあと10分しか持たないと報告で薫は、その10分間が最後の賭けに成

ると思った。

晴風、見張り台

マチコ「比叡、第2ポイント、通過を確認！」

マチコから比叡を座礁させる2つ目のポイントを通過したとの報告が入る。

晴風、艦橋

ましろ「艦長！・・・座礁させるポイントも今度も抜けて来られたぞ！・・・如何する!?」

既に2か所も座礁ポイントを躲されて、ましろが明乃に次は、如何するのか問う。

明乃「まだだよ！・・・まだ終わってない！」

それに対して、明乃は、まだ終わっていないと言う。

ましろ「しかし、艦長！もう・・・」

だが、ましろは、もう駄目かと思ひ。

明乃「超えられない嵐はないんだよ!!」

すると、明乃は、超えられない嵐はないんだよと言ひ、諦めないと主張する。

ましろ「!」

ましろは、明乃の言葉に何かを感じたのか、キョトンとした顔をする。

薫「そうだよ、まだ終わっていない！この10分間が最後の賭けなんだから!!」

明乃に続いて薫も諦めないと主張する。

ましろ「……」

明乃「とくりかじ!」

明乃は、左へと針路を取る。

ましろ「……はっ!」

すると、ましろがある事に気づく。

ましろ「さつきと同じ所に戻ってきた…… 此処じゃ比叡を座礁しなかったぞ!」

何と、最初に比叡を座礁させようとしたポイントに戻って来たのだ。

ましろは、今度も同じように座礁しないと思つたが

明乃「ヒメちゃん、今!」

媛萌『了解、バラスト排水!!』

その時、明乃が媛萌に艦のバランスを取ってるバラスト水の排水を指示した。

ましろ「バラスト捨てたら安定性が……」

ましろの言う様にバラスト水を排水した艦の重さが軽くなり、速力を出しやすくなるが艦のバランスが不安定になる。

薫「いや、これで良いわ!!」

だが、薫は、これで良いと言う。

ましろ「えっ!？」

薫の発言に驚くましろ。

明乃「リンちゃん速度一杯で・・・」

鈴「嘘・・・」

明乃「お願い!」

鈴「は、はい・・・!!」

鈴は、それを覚悟で泣きながら速力を上げる。

晴風は速力を上げながら先ほどの第1ポイントを通過しながら比叡に向けて、砲撃と

魚雷を発射する。

晴風、見張り台

マチコ「比叡、先程と同じコースに入りました!」

比叡は、晴風からの砲撃と魚雷を避ける様に先程と同じコースに入る。

晴風、機関室

麻命「速力下げてくれ! 流石にもう無理だ!!」

機関室から麻命がもう限界だと速力を下げる様言う。

晴風、艦橋

『ん・・・』

だが明乃と薫は、比叡が座礁をするのを願う様に比叡を見つめる。

麻侖『艦長! まだっか!?!』

機関室からまだっかと言ってきたが、

次の瞬間

ドゴツ：ズシヤアアア：：

轟音を立てて先程躲された座礁ポイントにて比叡は座礁した。

マチコ『比叡停止!!』

楓『比叡の機関停止を確認しました。』

とうとう晴風は比叡を座礁させる事に成功させた!

だが

晴風、艦橋

マチコ『比叡、主砲旋回していません!?!』

しかし、比叡は機関を止めたが、武装はまだ使用可能な状態だった。

座礁した状態で比叡の主砲が晴風に向けて、旋回してきた。

明乃「えっ!?!」

薫「まだ戦う気なの?」

最早、座礁して戦意喪失しているのにまだ戦う気なのかと驚く。

ましろ「艦長、退避を・・・」

直ぐに退避するが、既に晴風の機関も限界だったので速度が低速しかでなかった。低速では、直ぐに回避も出来ない。

折角、比叡を座礁させたのに

もう此処で終わりなのか？

絶体絶命な状況

その時

ビィイ・・・

晴風、艦橋

『!?!』

突然、比叡の第一主砲にレーザー砲が直撃した。

レーザー砲の直撃で第一主砲は、大破した。

ましろ「な、何だ!?!」

薫「今のは、ハイパーレーザー砲!?!?でも何所から?」

薫は、今の攻撃でハイパーレーザー砲だと分かったが、何所から撃つて来たのか
薫は、直ぐにデツキに出て、周りを見る。

すると

薫「あれは!?!」

晴風の右舷上空に大型の艦が飛んでいた。

薫「白鳳!?!」

それは、白鳳だった。

白鳳、艦橋

白鳳の射撃主「目標に命中!!」

次郎「よし、次だ!!完全に戦闘力を奪うぞ!!」

次郎は、ハイパーレーザー砲で比叡の戦闘力を奪う。

白鳳からのハイパーレーザー砲の連続攻撃で第一主砲に続いて、残り3基の主砲も大破
した。

晴風、艦橋

マチコ『比叡、戦闘不能!!』

ミーナ「何じゃ?今の武器は?」

幸子「あつという間に比叡の戦闘力を奪うとは……」

芽衣「凄い!!」

志摩「うい!?!」

あつという間に比叡の戦闘力を奪った白鳳に4人は、感心する。

白鳳、艦橋

次郎「乗り込むぞ! 強襲用意!!」

比叡の戦闘力を奪った白鳳は、翼を格納し降下、比叡の右舷に横付けする。

続いて、白鳳の左舷ハッチから武装(対放射線装備)した古野間達が現れた。

鈴「何、あの人達?」

ましろ「比叡に乗り込む気か?」

明乃「……」

明乃達が見守る中、古野間達は、比叡に乗り込む。

乗り込んだ古野間達は、ウイルスに感染した比叡の生徒達を殺さない様に武器は、閃光手榴弾と麻醉銃で比叡の各部を制圧して行く。

暫くして

GF隊員「クリア!!」

古野間「よくし、これで制圧は、保々完了だ!!」

比叡の制圧が保々完了した。

ウィルスに感染した生徒達も麻酔銃で眠らせて、ブルーマーメイドが来るまで全員、食堂室に隔離した。

晴風、甲板

やがて、時刻は、夕方

晴風の甲板では、明乃達や次郎達が比叡を制圧した事で盛り上がっていた。

ミーナ「潮の満ち引きか!」

明乃「ココちゃんのお陰だよ!・・・オンラインの海図だったから水深の変化はリアルタイムで分かったし・・・」

幸子「成程!・・・前に通った時より潮が引いて、水位が下がっていると・・・」

ましろ「其処まで想定していたのか?」

明乃は、作戦開始時に幸子が収集したデータから海域の水深の変化を確認し、それを利用して、比叡を座礁へと追い込んだ。

だが、最初は、何故、比叡は、座礁しなかったのか、それは、最初の時は、まだ、潮が引いておらず水位がまだ下がっていなかったからだ。

だから、明乃は、水位が下がる時間を見計らって、もう一度同じ場所へと比叡を誘い込み比叡を座礁させる事に成功した。

あの時、晴風のバラスト水を排水したのは、座礁を防ぐ為、艦を軽くしたのだ。

鵜「私達が助けたんだよね？」

美千留「トラックと比叡と、両方共！」

G F 隊員「ああ、君達のお陰だ！」

G F 隊員「お陰で他に被害が出なくて済んだ！」

留奈「うちの艦長って、いけるくちなのかな？」

空「その褒め方、可笑しいから・・・」

G F 隊員「貴方は、食べるか喋るか、どちらかにしなさい！」

比叡の生徒、トラック諸島を救った事に晴風の生徒達は、歓喜し、G F 隊員がそれを褒めたたえていた。

明乃「私、今、艦長・・・だったかな？」

ましろ「まあくらしかったです・・・幾分ですが・・・」

今回の作戦成功で明乃は、自分が艦長らしいかと思うとましろは、幾分だが艦長らしかったと褒め、2人は、見つめ合う。

次郎「あの2人、何だか昔の俺達に似てないか？」

薫「そうね！」

後ろで明乃とましろを見た次郎は、2人が昔の自分達に似てると思い。

薫もそうだったと言う。

確かに昔は、薫と次郎も立場上で対立していたが、ある切っ掛けで2人は、仲良くなり、いつしか恋人に成った。

2人を見て、雅にそう感じる2人。

薫「そう言えば、次郎君!?!?・・・何で早くこれたの?・・・到着まで2時間以上掛かるって・・・」

薫は、次郎達は、予定よりえら早くこれた訳を問う。

次郎「ああそれ!・・・実は、機関の調整で2時間以上掛かるって事で准将に報告したんだ・・・だが、調整が思ったより早く終わったんで急いでこれたんだ。」

実は、本当は、もっと早く晴風の元へ行けたんだが、機関の調整で2時間以上掛かると准将に報告した。

だが、調整が思ったより早く終わり、急いで晴風の元へと向かったと言う事だ。

薫「そうだったの」

次郎「遅れてしまって、御免な薫!!」

次郎は、遅れた事に謝罪する。

薫「ううん、来てくれなかつたら、今頃私達は・・・」

だが、薫は、次郎達が来てくれなかつたら、比叡の砲撃で死んでいただろうと感謝す

る。

そんな時

『ん?』

向こうから黒い塗装をしたインディペンデンス級がやってきた。

ましろ「ま、雅か・・・!」

ましろは、黒いインディペンデンス級を見て、雅かと不味い表情をする。

その艦は、ブルーマーメイド所属の弁天だった。

そして、弁天が晴風の横に泊まると黒いマントを着たBPF隊員が宙返りしながら晴風に着地した。

真冬「ブルーマーメイドの宗谷真冬だ・・・後は任せろ・・・」

それは、正しく、宗谷家の次女の宗谷真冬だった。

次郎「何が任せろだ!!今頃来やがって・・・」

次郎は、任せろと言う真冬に拗ねる。

薫「真冬!?!」

薫は、やってきた真冬に声を上げる。

真冬「おう薫!久しぶりだな!」

真冬も声を上げる。

次郎「よお、今頃来たか!」

真冬「げ!お前も居たのかよ!」

次郎「相変わらず、嫌な野郎だ・・・」

次郎と真冬が目を合わせたら、またも対立する。

その時

真冬「おっ!」

突然、真冬は、何かに気づく。

すると

真冬「シロじゃねえか!」

真冬は、明乃の後ろに居た妹のましろに気づく。

真冬「久しぶりだな、おい!」

真冬は、ましろの肩を無理やり抱きながら、再会を祝う。

ましろ「ちよ、止めてよ姉さん!」

だが、ましろは、嫌がる。

幸子「成る程、名字が同じですしね!」

三郎「・・・」

姉妹の再会を皆は、啞然として見る。

真冬「なんだ縮こまりやがって、久しぶりに姉ちゃんが根性注入してやろうか？」
薫「げっ!？」

真冬の根性注入と聞いて、薫は、以前の苦い記憶を思い出す。

明乃「根性・・注入？」

そして、明乃も根性注入に反応する。

ましろ「要らないわよ！」

ましろは、要らないと言うが

明乃「お願いしても良いですか？」

明乃は、真冬に根性を注入してくれとお願いする。

薫「えっ!？」

それを聞いた薫は、驚き。

ましろ「ば、馬鹿やめ・・・」

ましろも止めるが

真冬「おう！任せとけ！」

真冬は、笑顔で任せろと言い。

真冬「覚悟は、良いな？」

拳を鳴らす。

明乃「はい!お願いします!」

真冬「よし、先ずは、回れ右だ!!」

真冬は、明乃に回れ右と命令する。

明乃「はい!」

明乃は、回れ右をする。

真冬「行くぜ!!」

真冬は、明乃に構え

真冬「根性・・・注入・・・!!」

明乃に根性を注入するが

ましろ「・・・」

直前にましろが身代りになり、尻を揉まれる。

『うああ!』

その光景を見て、皆は、驚愕する。

『うう・・・』

薫と次郎もその光景を見て、嫌な顔をする。

真冬「根性、根性、根性・・・ってあれ?何でだ?」

ましろの尻を揉んでいた事に気づく真冬。

ましろ「こんな恥ずかし目は、身内で留めて置かないと・・・」

真冬「ふくん、お前が良いなら構わねえが・・・」

真冬は、ましろの尻を揉む。

真冬「船乗りは、尻が命だからな・・・」

ましろ「う・・・止めて・・・!」

ましろは、尻を揉まれながらも止めてと言うが

真冬「おお!?ちよつと柔になってね〜か?この尻!」

暫く揉まれていなかったのか、ましろの尻の柔さに気づき、揉みが激しくなる。

ましろ「止めて姉さん!」

ましろは、必死に止めてと言うが

真冬「こんな、尻じゃシケる海は、越えられねえぞ!」

更に激しくなり

ましろ「止めて姉さん!」

真冬「おらおら、根性!根性!」

ましろ「止めて!!」

真冬「もう一根性だ・・・!!」

結局、ましろは真冬に尻を揉みくちやにされた。

薫「ああもう!見てられない!!」

次郎「お、おい薫!」

薫「止めなさい真冬!!ましろちゃんが嫌がつているじゃないの!!」

もう見てられないと薫は、真冬にましろの尻を揉むのを止める様に言う。

真冬「良いじゃねえか!!・・・か弱いシロに根性注入してるんだから・・・」

真冬は、薫に止められるが、それでもましろの尻を揉もうとする。

薫「良いから止めなさい!!皆が見ている所ではしたくない!」

それでも薫は、力づくで止めさせようと2人の間に入り

薫「大丈夫、ましろちゃん?」

ましろに大丈夫かと声を掛けた。

その瞬間に

真冬「付きあり!」

薫「ひっ!」

真冬は、隙を付いて、薫の尻を揉む。

次郎「な!」

『うああ?!』

薫「いやああ・・・!!」

尻を揉まれた薫は、悲鳴を上げる。

次郎「て、てめえ!!!」

真冬「おっ!?!」

それを見た、次郎は、急いで薫から真冬を離れさせる。

真冬「何すんだよ!!」

次郎「五月蠅いこの野郎!!」

薫の尻を揉んだせいで、またしても次郎と真冬の決闘が始まった。

薫「……もう知らない……」

尻を揉まれた薫は、もう知らないと2人を止めようとしなかった。

他の皆も止めず、2人の決闘を唾然として見る。

二人の決闘は、熾烈さを増し、結局、引き分けで終わった。

全くの馬鹿だ!!

画して、晴風は、無事に比叡を止める事に成功した。

首相官邸

深町「ん、ん、分かった……ご苦労!」

深町は、真霜から比叡を確保したとの連絡を受ける。

深町「総理!・・・比叡は、無事に確保しました。」

田沼「ん・・・」

深町「こうなった以上、もう選択の余地は、ありませんよ総理!!」

一時的に災厄の状態に落ちいた事により、総理の責任は、更に悪化した。

こうなった以上、田沼は、深町に協力して、事件の解決をするしか選択は、残されていなかった。

だが、この事は、CIAによって、キング大統領の元に報告された。

ホワイトハウス

大統領執務室

大統領補佐官「大統領閣下!・・・我々が、日本と裏で行っていた研究が、知られてしまいました・・・しかも、その研究で、既にいくつかの学生艦に感染しているとの事です。」

キング「ん・・・」

感染者が出た事を聞いて、キングは、悩む。

大統領補佐官「このままでは、我が国までが責任を迫及されます!!」

このままでは、研究を持ちかけたアメリカが日本に責任を迫及される恐れがあると補

佐官は、言った。

すると

キング「早急に探し出して、始末するしかないな・・・」

キングは、研究の被害者の学生達を早急に探し出して、始末すると言い出した。

始末して、被害が無かった事を示す気だ。

大統領補佐官「しかし、今ブルーマーメイドが動いているのは、此方も手が出せません!!」

補佐官の言う通り、ブルーマーメイドが動いている状態では、アメリカも手が出せない。

如何するのか？

キング「それならば、奴らを利用すれば良い!!」

大統領補佐官「何かお考えでも？」

キングは、ある方法で学生艦を一か所に集めて、始末する策を補佐官に告げる。

キングがとつた行動がやがて、災厄な事態を引き起こす。

そして、ハワイで出動待機をしていたウィリアム・ボガート中将の太平洋艦隊に出動命令を出す。

命令を受けたボガート中将の太平洋艦隊は、比叻の確保から五日後にハワイを出撃し

た。

そして

ゴオオオオ・・・！！

海底の地の底から目覚めた巨大生物も、まるで魚見たいに泳ぎながら、晴風が居る環礁付近を通過した。

当然、側に居た白鳳のリーダーも、その巨大生物の反応を捉えていたが、隊員の殆んどが留守だった為、戻ってきた時には、既に反応は、消えていた。

その巨大生物とは

一体何なのか？

何所へ向かっているのか？

誰にも分からなかった。

第26章 ミーナでピンチ！

4月26日

トラック諸島沖、ピケロット島環礁

武蔵を搜索していた晴風は、トラック諸島沖を航行している途中、行方不明になっていた比叡と遭遇した。

比叡がトラック諸島に向かっていると分かり、ブルーマーメイド、Gフォース艦隊の救援が難しい中で晴風は、単独で比叡のトラック侵入を阻止、座礁させる事に成功した。その後、白鳳と弁天が駆け付け、比叡は、完全に制圧された。

晴風、甲板

真冬「比叡は、三原の支援隊が後の面倒を見る事になった。」

座礁した比叡は、後から来るブルーマーメイドの別働隊に任せる事になった。

明乃「よろしくお願いします。」

真冬と次郎に対し、明乃は深く頭を下げる。

真冬「でだ、我々は、引き続き、武蔵以外の不明艦搜索を続ける・・・お前達は如何するきだ？」

真冬と次郎達は、このまま武蔵搜索を続けるが、明乃達は、如何するのか問う。
ましろ「如何しますか、艦長？」

明乃「学校からの指示は、武蔵探索です……皆の依存が無ければ、そのまま続けた
いと思います。」

明乃は、晴風の生徒全員の異存がなければ、このまま武蔵搜索を続けると言う。

真冬「へっ！よくし、よく言った！……唯無理は、しない様に、無理だつと思つたら、我々に連絡を入れつて、避難しろ！……本来これは、私達ブルーマーメイドの仕事だからな！」

明乃「はい！」

次郎「薫、お前は？」

薫「私は、このまま晴風と行動するわ！……それが教官としての勤めだから……」
薫も明乃達と一緒に武蔵搜索を続けると言った。

次郎「そうか……だが無理するなよ！……危ない時は、直ぐに駆け付けるからな
！」

薫「ありがとう」

危ない時は、直ぐに駆け付けると言う次郎の言葉に嬉しくなる薫。

その時

鵜「艦長！」

明乃「ん？」

通信員の鵜が突然、スマホを持って、此方に駆け込んできた。

鵜「広域通信に正体不明の大型艦目撃情報が複数入っています!!」

鵜がスマホで広域通信の内容を5人に伝える。

ましろ「南方200マイル、アドミラルティ諸島と北東300マイル、トラック諸島方面か・・・」

正体不明の大型艦の目撃情報は、二つ。

一つは、此処から南の位置にあるアドミラルティ諸島ともう一つは、此処から北東のトラック諸島付近からだった。

薫「このどちらかに武蔵が居ると言う事ね・・・」

薫は、この目撃情報の二つのどちらかに武蔵が居ると睨んだ。

次郎「そうと決まれば、どっちに行くかだ!!」
果たしてどっちに行くか

真冬「よし!・・・我々は、トラックへと向かう!・・・すまぬが、近場のアドミラルティ諸島を確認して貰えるか?」

明乃「分かりました!」

真冬は、トラック諸島付近に向かう事に決め、明乃には、アドミラルティ諸島の方をお願ひし、タラップを登り、弁天に戻る。

そして

薫「次郎君達も真冬と一緒にトラック方面に行つて!」

薫は、次郎にも真冬と共にトラック諸島付近に向かう様言う。

次郎「でも薫、それじゃ・・・」

次郎は、自分達が向こうへ行つたら、晴風だけになると心配する。

薫「私達は、大丈夫!危なくなつたら准将に救援を呼ぶから・・・」

薫は、もしもの事が有つたら、龍之介に支援を要請して貰うと次郎に告げる。

次郎「ん・・・分かつた!・・・薫が言うなら、仕方なくアイツの尻拭いをしてやるよ!」

次郎ももなく承諾する。

GF隊員「艦長!晴風の機関の応急修理終わりました。」

GF隊員達の協力の元、晴風の機関の応急修理は、完了した。

次郎「おお、ご苦労!」

薫「お願いね!」

次郎「ああ、任せておけ!!」

こうして、白鳳と弁天は、トラック諸島付近へ、晴風は、アドミラルティ諸島へと向かう事になった。

晴風の生徒達は、白鳳と弁天に向かい手を大きく振り、それを見た真冬は、制帽を振り、次郎は、礼砲を複数撃った。

画して、晴風は、アドミラルティ諸島へと進路をとる。

晴風、艦橋

芽衣「よーし！やるぞー！」

聡子「単位よーけ貰えるぞな！」

秀子「ねえねえ！ひよつとして、私達って結構やるんじゃない？」

まゆみ「そうそう！比叡ってすごい艦なんだよね！・・・それを止めたって凄くない？」

志摩「下剋上……」

比叡のトラック侵入を阻止した事で、晴風の生徒達は、自信に溢れているせいか、浮かれていた。

そんな皆を明乃、ましろ、ミーナは、仕方ないと言った表情で見る。

薫「士気が上がるのも良いけど、あまり浮かれない様に……」

薫は、士気が上がるのは、良いが、あまり浮かれない様にと告げる。

それを聞いた5人は、浮かれるのを止める。

その時

鵜『目標が分かりました!!』

鵜から不明艦の正体が判明したと言う報告が入る。

晴風、通信室

ましろ『報告!』

鵜「識別帯は白と黒。ドイツのドイツチユラント級直教艦アドミラル・シユペーです

!」

晴風、艦橋

『えっ!?!』

何と不明艦の正体は、ドイツのヴィルヘルムスハーフェン海洋学校所属、小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シユペーだった。

報告を聞いた薫と明乃達は、驚愕する。

中でも一番に反応したのは、他ならぬミーナであった。

4月27日

晴風、教室

明けて翌日、アドミラル・グラフ・シユペーの報告を聞いた晴風の生徒は、啞然とし

ながら朝食をとる。

ミーナも報告を聞いてから浮かない顔をしていた。

それもその筈、アドミラル・グラフ・シュペーには、ミーナの仲間の生徒が乗艦している。

そして、その中でも特に心配しているのが、自分に退艦を命じた艦長テアの安否だ。

ミーナは、テアの事が心配で仕方なかった。

ましろ「今度はシュペーか：：」

再び晴風の前に立ちはだかるアドミラル・グラフ・シュペーにましろは呟く。

百々「ミーナさんが乗つてた艦ツスよね．．．？」

媛萌「あの時大変だったな．．．」

百々「そうスツよね．．．！」

アドミラル・グラフ・シュペーと戦闘した時の事を思い出したのか、媛萌と百々は、あの時の事を話題にしていた。

ましろ「艦長如何します？」

ましろが明乃にアドミラル・グラフ・シュペーにどう対処するか問う。

明乃「．．．作戦は．．．えつと．．．」

それに明乃が答えようとすると．．．

突然、教室に幸子や楓、美海、理都子、果代子、美甘、ほまれ、あかね、美波の9人が入って来て

幸子「カチコミです！」

『おお・・・!!』

幸子「助けに行きましょう！」

アドミラル・グラフ・シュペーの救出を進言してきた。

幸子がそう言うのと楓が自前の薙刀を出して構え、美甘とほまれ、あかねが戦闘糧食を見せ、続いて美海と理都子、果代子が竹筒水鉄砲を構え、美波が白衣の裏に大量の注射器を備えているのを自慢気に見せ、何時でもアドミラル・グラフ・シュペーの救出に向かえる構えを見せる。

薫「皆やる気ね！」

それを見た薫は、頼もしいと嬉しくなる。

ミーナ「ワシの為に・・・」

彼女らの頼もしさにミーナは、申し訳なきように言う。

朝食を終えた後、薫と明乃達は、教室でアドミラル・グラフ・シュペー制圧救出作戦を練る。

ましろ「具体的な、手順は？」

幸子「ミーちゃん!・・・前に聞いたシユペーの足止めする方法教えてもらえます?」
ミーナ「本気なのか?ド本気なのか?」

ミーナは、自分一人の為に晴風の生徒を危険に晒す様な作戦に気が進まなかつたが
幸子「当然です!」

薫「此処まで来たら、やるしかないでしょ、ミーナさん!!」
既に晴風の生徒達は、覚悟を決めていた。

ミーナ「燃料中間タンクを加熱する為の蒸気パイプが甲板上に露出しておる・・・其
処なら晴風でも破壊可能じゃ、それを壊せば足止めできる筈じゃ・・・」

幸子がタブレットでプロジェクターを操作して、ミーナが映し出されたアドミラル・
グラフ・シユペーの図面を元に足を止める方法を説明する。

ましろ「確かに、シユペーは比叡に比べて砲力も装甲も速力も下だ!」

聡子「楽勝ぼいの・・・」

ましろの言葉に聡子が楽勝だと浮かれるが

ましろ「だが、巡洋艦並みの小さな体に晴風では、抜けない装甲と晴風を一撃で沈め
る強力な28cm砲を搭載している・・・その上、小さいと言う事は、小回りが利くと言
う事だ。危険は、大きい!」

ましろは、アドミラル・グラフ・シユペーは、比叡よりは、小さいが巡洋艦並みの防

御力と戦艦並みの攻撃力を搭載している事を説明し、皆に危険は、大きいと言う。

それを聞いたミーナは、浮かない顔をする。

薫「それは、大丈夫だと思う。」

だが、薫がそれについて、大丈夫だと言った。

ミーナ「えっ!?!」

それを聞いたミーナは、驚く。

薫「支援要請をして置くから……比叡の時は、駄目だったけど、今度は、必ず……」

薫は、念の為、マリアナ沖から南下している龍之介に支援を要請しておいた。

此処で場面は、マリアナ沖から南下しているGフォース西部方面混成艦隊に移る。

空母大鳳、飛行甲板

整備士「急げ、支援要請が来ているんだ!」

薫の言う通り、空母大鳳の飛行甲板では、既に戦闘攻撃機春乱6機にAAM-4(9式空対空誘導弾)4発とMk. 82 500ポンド爆弾2発を装備作業中だった。

何時でも出撃が可能だった。

更に哨戒中のE2Gからの報告で、行方不明だった鳥海、摩耶、五十鈴の発見に伴い、艦載機を発進させた。

これによりGフォース西部方面混成艦隊の反撃が始まった。

そして、場面は、晴風へと戻る。

晴風、教室

ましろ「で如何します、艦長？」

如何するのかましろは、明乃に問うが

明乃「・・・ミーちゃんは如何したい？」

明乃は、ミーナに如何したいかを尋ねる。

ミーナ「・・・ワシは・・・」

ミーナの言葉に皆がミーナに注目する。

それに対して、ミーナは

ミーナ「我が艦アドミラルシユペーの乗員の皆を・・・そして艦長を、テアを助けてほしい・・・晴風の皆を危険に晒す事になってしま・・・」

と言つて、ミーナは、危険を承知でアドミラル・グラフ・シユペーの乗員と艦長のテアの救出を頭を下げて頼みこむ。

だが

幸子「大丈夫!!」

鈴「や、やってみましょう!!」

芽衣「やろう!!やろう!!」

志摩「うい!!」

既に覚悟を決めている彼らに危険など恐れずアドミラル・グラフ・シユペーの乗員と艦長の救出しようと士気が上がっていた。

幸子「一度なめられたら終生取り返しがつかんのが、この世間よのおう・・・時には命張つてでもつちゆう性根がなけりやあ・・・女が廢るんだわ!」

更に幸子がどんな危険な目に遭おうとも、友達の為なら助けると積極的に救出を決意する。

それを聞いた薫は

薫「決まりね!」

明乃「じゃ・・・作戦開始!!」

こうして、晴風によるアドミラル・グラフ・シユペー制圧救出作戦が開始された。

晴風は、アドミラルティ諸島へと向かう。

4月27日

アドミラルティ諸島沖

数時間後、アドミラルティ諸島沖に到着した晴風は、早くも航行しているアドミラル・

グラフ・シユペーを発見した。

晴風は、気づかれない様にアドミラル・グラフ・シユペーの後方に付く。

晴風艦橋

明乃「めぐちゃん！・・・シユペーの位置は？」

晴風、電探室

慧「前方10マイル！」

晴風、艦橋

ましろ「野間さん！・・・向こうの様子は？」

晴風、見張り台

マチコ「砲の仰角はかかってませんが・・・」

晴風、艦橋

ミーナ「確かに、此方に気がついた様子はないぞ！」

薫「ん・・・行動を起こすなら今が絶好の好機！艦長!!」

明乃「よし、戦闘よーい！」

明乃の号令の元、楓が戦闘配置のラツパを吹き、主砲に砲弾が装填される。

明乃「第四戦速！」

鈴「第四戦速!!」

更に速度を27ノットに上げ、シユペーの左側に舵を取る。

ミーナ「ドアホ、もう少し右じゃ、シユペーの艦橋から死角になる様に・・・」

ミーナは、アドミラル・グラフ・シユペーの死角に入ろうと鈴に少し右に舵を切るよ
う命じる。

鈴は、言われた通り舵を少し。右に切る

ミーナ「・・・テア、今行く。」

ミーナが小声のドイツ語でテア、今行くと呟く。

明乃「戦鬪、右魚雷戦! 30度シユペー!!」

アドミラル・グラフ・シユペーの死角に入ったところで明乃は、魚雷戦の号令を出す。

芽衣「敵針180度、敵速20ノット、雷速52ノット、写真角0度。」

芽衣が水雷方位盤でアドミラル・グラフ・シユペーの位置を捕捉する。

明乃「距離2万で遠距離雷撃!」

芽衣「一番管発射雷数4、有りつ丈ぶつ放すよ!」

晴風、一番魚雷発射管

理都子「はい・・・!!」

晴風、艦橋

芽衣「発射準備よし!!」

明乃「攻撃始め!!」

芽衣「撃てえ!!」

晴風から魚雷4本がアドミラル・グラフ・シユペーに向け発射される。

晴風、見張り台

マチコ「はっ!? シユペー! 主砲旋回中!」

魚雷発射された直後、此方に気づいたのか、アドミラル・グラフ・シユペーの主砲が晴風に向けられる。

晴風、艦橋

薫「作戦通り!」

明乃「リンちゃん、回避を・・ おもろかじ!」

鈴「おもろかじ!」

晴風は、右に回避行動をする。

明乃「向こうが魚雷を回避して、速度を落ちたところを主砲で狙うから見張りよろしく」

『はー!』

明乃の作戦は、此方の魚雷をアドミラル・グラフ・シユペーが回避したところで晴風が全速でアドミラル・グラフ・シユペーに突入し、弱点である蒸気パイプを主砲で破壊、その後、接舷して、制圧する作戦である。

晴風、見張り台

マチコ「シユペー発砲!」

予定通りアドミラル・グラフ・シユペーは、反撃してきた。

晴風、艦橋

明乃「もーどせ!」

鈴「もーどせ!」

明乃は、右から左へと舵を戻しながら、アドミラル・グラフ・シユペーの砲撃を回避する。

晴風の周りに3つの水柱が立つ。

芽衣「魚雷、シユペーに向かっている!」

魚雷は、順調にアドミラル・グラフ・シユペーに向かっている。

明乃「魚雷に合わせて、突入!!」

明乃は、予定通りアドミラル・グラフ・シユペーが魚雷を回避したところで突入の命令を出そうとした。

その時

秀子「シユペー回避しません!」

ましろ「何!」

薫「えっ!?!」

何とアドミラル・グラフ・シユペーは、晴風が発射した魚雷を回避せず、そのまま直進をしてきたのだ。

明乃「……けっ！ 主砲！」

志摩「うい！」

魚雷では、回避しなかつたので、今度は、砲撃で回避させようとする。

晴風の砲弾は、アドミラル・グラフ・シユペーの至近に着弾したが、アドミラル・グラフ・シユペーは、全く進路を変えず、そのまま直進する。

ましろ「何故進路を変えない！」

魚雷と砲撃を浴びせているのに何故、アドミラル・グラフ・シユペーは、回避しないのか、ましろは、驚愕する。

芽衣「かよちゃん！次行くよ！」

晴風、二番魚雷発射管

果代子「はいー！」

だが、一度目の失敗で辞める訳には、行かない。

再び晴風から魚雷4本が発射される。

魚雷発射後、アドミラル・グラフ・シユペーの副砲が晴風に向けて連射してきた。

副砲弾は、晴風の左右至近に着弾し、その中の1発がまたしても晴風の第三主砲に命

中した。

晴風、艦橋

ましろ「被害報告!」

媛萌『三番砲大破!』

百々『二番砲被弾射撃可能ツス!』

麻侖『機関全力発揮可能でい!』

副砲の砲撃で第三主砲塔は、大破し、側に合った第二主砲塔も被害を受けたが、砲撃は、可能、機関も今のところは、異常は、無い。

まだ辛うじて、戦闘続行は、可能だ。

だが、続けてアドミラル・グラフ・シユペーの主砲が砲撃してきた。晴風は、全速で回避する。

まゆみ「夾叉されました!」

殆んどが馬路かの至近に着弾したので完全に晴風は、アドミラル・グラフ・シユペーに捕捉されていた。

明乃「リンちゃん、回避して!」

鈴「ヨーソロー」

明乃は、何とか回避しながら捕捉から逃れようとする。

だが、回避中、またしてもアドミラル・グラフ・シユペーは、魚雷を回避せず直進してきた。

晴風、見張り台

マチコ「全魚雷、シユペーの船底を通過！」

魚雷は、そのままアドミラル・グラフ・シユペーの艦底を通過した。

晴風、艦橋

ましろ「回避しなかった：これじゃ弱点を狙うのは、無理だ！」

一度ならず2度までも失敗した事でましろは、弱点を狙うのは、無理だと覚った。

薫「何故なの？・・・作戦通りの筈なのに・・・雅か!？」

薫は、2度の失敗を見て、雅かウィルスが戦術を学習しているのかと察知した。

薫（だけど、ウィルスは、唯の病原体!・・・戦術など学べない筈なのに如何して!）

確かに、そんな事は、あり得ない筈なのに如何してだろうか？

薫は、アドミラル・グラフ・シユペーの行動を理解できなかった。

明乃「・・・如何しよう？」

芽衣「照準もバッチリだったのに：」

志摩「しゅほう・・・」

鈴「逃げるも嫌だけど・・・」

ミーナ「これでは、接舷乗り込みなぞ不可能じゃ……出直すべきじゃ……」

最早、2度の失敗で作戦続行は、絶望的になり、ミーナは、撤退を進言する。

幸子「ミーちゃん諦めちゃ駄目だよ!」

だが、幸子は、それに反対する。

ミーナ「しかし直撃したら、この艦、一瞬で吹き飛んでしまう……これ以上、皆を危険に晒す訳には、いかん!」

だが、ミーナは、これ以上、晴風の生徒を危険に晒す事は、出来ないと断固撤退を進言する。

それを側で聞いていた薫は

薫(確かにミーナの言う通り、一時撤退もあり得るけど、それでは、諦める事になる……如何すれば良いの?……まだ航空隊も到着していないのに……)

そう思い如何すれば良いか迷っていた。

その頃、航空隊は、既に空母大鳳を発進していたが、到着までまだ掛かる。

最早、撤退するのか

その時、幸子が

幸子「でも、前に行けたじゃない！」

と言つて、前回のアドミラル・グラフ・シュペーの戦鬪の事を言う。

芽衣「はっ！・・・艦長、教官、スキッパ―なら行けるんじゃない？」

それを聞いた芽衣は、その時、明乃と薫がスキッパ―で砲撃を回避しながらミーナの救出に向かつた事を思い出し、スキッパ―ならアドミラル・グラフ・シュペーに向かう事が出来るんじゃないかと進言する。

薫「そうだわ!?その手があつたわね！」

芽衣の進言に薫もそうだと思ひ付く。

ましろ「確に小さくて小回りのきくスキッパ―なら砲撃を避けるのは、容易です・・・ですが至近弾でも吹き飛ばされて、もう作戦続行は不可能になります！」

だが、スキッパ―は、小型ゆえ、砲撃を回避するなぞ容易にできるが、至近弾で吹き飛ばされてしまえば、使い物にならなくなるし生徒にも危険が及ぶ。

ましろ「如何します、艦長？」

果たして行くのか、それとも

明乃の決断にかかつていた。

明乃「・・・私は・・・行きたい！」

明乃は、芽衣の進言通り、スキッパ―で作戦続行を決断する。

そして、自らもスキツパーでアドミラル・グラフ・シュペーに向かう事を決める。

ましてろ「・・・どうせそう言うと思つてました・・・行つて下さい!!」

ましてろは、事前に明乃のする事は、分かつていたので、それに反対せず、行くよう薦める。

それを聞くと明乃は、自分の艦長帽を取り、ましてろに渡す。

ましてろは、それを受け取る。

明乃「了解です!・・・以後の本艦の指揮は宗谷ましてろ!・・・貴官に命じます!」

ましてろ「了解です!」

こうして、晴風の指揮権は、明乃からましてろに一時的移譲した。

薫（やっぱりましたろちゃんは、成長しているわ!!）

それを見た薫は、ましてろが以前より成長しているのだと気づく。

明乃「突入班・・・用意!!」

画して、スキツパーによるアドミラル・グラフ・シュペーへの乗り込み作戦が開始された。

明乃とミーナは、突入班の聡子、マチコ、美海、百々、楓、美波、五十六の6人1匹と共にスキツパーでアドミラル・グラフ・シュペーへと向かう。

そして、ましてろは、いつも後ろで留めてる髪留めを外し、艦長帽を被る。

ましろ「先ずは、シユペーの目をこっちに引き付けるぞ!!」
『は、いー!』

ましろは、明乃達をアドミラル・グラフ・シユペーに無事に着かせる為、アドミラル・グラフ・シユペーの目を晴風に引き付けさせる。

薫「ましろちゃんよく似合うわよ!その艦長帽!」

ましろ「!!!」

薫に似合うと言われましろは、照れる。

とは言え、晴風は、アドミラル・グラフ・シユペーの目をこっちに向かせる為、アドミラル・グラフ・シユペーに接近する。

海上

そして、明乃達は、スキッパーでアドミラル・グラフ・シユペーの死角に成っている岩陰を進んでいた。

楓「突入予定時間まで後30秒!」

明乃「了解!」

明乃は、晴風の砲撃と同時に岩陰から出てアドミラル・グラフ・シユペーに突入する行動に出る。

楓「後20秒!」

明乃「サドちゃん、合図を出したら突入して！」

聡子「うちの腕を見せる単騎ぞな!!」

晴風、艦橋

そして、晴風でも明乃達が岩陰から出た同時に砲撃する構えを執っていた。

幸子「10秒前！」

ましろ「艦をシュペーに後200近づけて！」

鈴「任せてー！」

ましろは、あと200程接近させる。

幸子「4・3・3・用意！」

そして、いよいよ

ましろ「撃て!!」

晴風は、アドミラル・グラフ・シュペーに向けて砲撃を開始。

まゆみ「艦長着ました！」

芽衣「どんぷっしや！」

それと同時に明乃達が岩陰から出現。

アドミラル・グラフ・シュペーの反対側から乗り込むべく向かう。

薫「よくし、予定通り!!」

ましろ「あとはシユペーをできる所まで引き付ける！」

あとは、アドミラル・グラフ・シユペーを晴風で可能な限り、明乃達から逸らそうとする。

だが、その時

秀子「副長！ 副砲弾直撃コース!!」

秀子からアドミラル・グラフ・シユペーからの副砲弾が晴風へと向かってくる報告が入る。

ましろ「あつ…かい」

薫「知床さん！ 回避を！」

ましろが報告から数テンポ判断遅れて回避の指示を出そうとした時、薫が判断が遅れたましろに変わって回避の指示をしたが、時遅く、副砲弾は、晴風艦橋の上部に命中した。

『う…』

命中した事により、艦が揺れる。

ましろ「何所に当たった!？」

ましろは、揺れながら被害状況を聞く。

慧『電探室異常ありません』

理都子『第一魚雷発射管被害なし!』

果代子『第二魚雷発射管大丈夫です。』

各所に被害は、無かったが

幸子「副長! 射撃指揮所付近です!」

薫「えっ!?!」

如何やら射撃指揮所に命中した様だ。

ましろ「射撃指揮所! 大丈夫か!?!」

幸子からの報告を聞いたましろは、直ぐに射撃指揮所への伝声管で無事か如何か聞く。

ましろ「はっ!?!」

だが、言っても返事が無い。

射撃指揮所に居た光、美千留、順子の安否は
すると

光「あー聞こえてます!」

ましろ「はっ!」

一瞬絶望的だと思われたが、その時、伝声管から光の声が出た。

晴風、射撃指揮所

射撃指揮所の被弾の時に安全装置が作動、3人は、無事であった。

光「小笠原無事です。」

美千留「武田異常なし」

順子「日置大丈夫です。」

3人は、安全装置のエアバッグに挟まれた状態だったが、元気だった。

晴風、艦橋

ましろ「はぁ・・・」

3人が無事だった事にましろは、安心する。

だが、射撃指揮所が破壊された以上、もう砲撃は、出来ない。

ましろ「これ以上、皆を危険に晒せない！」

ましろは、これ以上、晴風の生徒を危険にさらす事は、出来ないと言する。

薫「そうだね・・・もう十分に私達は、やったから、後は、艦長達に任せましょう！」

そして、薫もましろと同意見で後の事は、アドミラル・グラフ・シユペーに突入した

明乃達に任せる事にした。

ましろ「・・・艦長シユペーを頼みます！・・・最大戦速！進路最短でシユペーの射

程外に出るコースへ!!」

ましろは、最短コースでアドミラル・グラフ・シユペーの射程外へと離脱する。

ましろ「向こうの射程外に出るのに、どれくらい掛かる?」

ましろは、幸子にアドミラル・グラフ・シユペーの射程外に出るのにどれくらい掛かるのか問う。

幸子「主砲射程外まで最大戦速で30分、副砲は20分です!」

主砲射程外まで30分、副砲射程外まで20分は、掛かる。

鈴「ふえ?!あ、後30分も!」

それを聞いた鈴は、驚愕する。

だが、驚愕しているのも束の間

『うあ．．!?!』

またしてもアドミラル・グラフ・シユペーの副砲弾が晴風の後部付近に命中した。

媛萌『第四運用科倉庫に浸水!』

被弾場所は、後部の第四運用科倉庫で浸水も発生していた。

薫「防水作業急いで!!」

薫は、急いで防水作業を命じる。

その頃、明乃達は、アドミラル・グラフ・シユペーへと接近していた。

アドミラル・グラフ・シユペーに接近後、先ずマチコがワイヤー銃で柵にワイヤーを掛けて乗り込んだ。

アドミラル・グラフ・シユペー、甲板

アドミラル・グラフ・シユペーに乗り込んだマチコを待ち受けていたのは、ウィルスに感染したリーデとエリーザ、マリーア、サンドラの4人だった。

マチコ「私を倒せると思うなよ！」

4人に対しマチコは、単独で戦う。

百々「ああ、もうマツチが戦ってる！」

そして、マチコに遅れて百々も梯子を登って

百々「マツチ!!」

単独で戦うマチコに加勢しようとした。

だが、マチコは、4人の攻撃を両手に持っていたライフル式水鉄砲で振り払いながら水鉄砲で先ずエリーザ、マリーアを攻撃した。

海水を受けたエリーザ、マリーアは、その場で意識を失い倒れる。

続いて、残るリーデ、サンドラが背後から攻撃してきたが、マチコは、またも同じ様に振り払い、残る2人も水鉄砲で攻撃し倒した。

ミーナ「・・・見事だ。」

マチコの戦闘を見てミーナはドイツ語で一言そう呟いた。

百々「・・・遅かった・・・」

マチコに加勢しようとした百々は、マチコが1人で4人をあつという間に倒したところを見て、驚愕する。

晴風、第四運用科倉庫

突入隊がアドミラル・グラフ・シユペーに乗り込んでいる頃、晴風の第四運用科倉庫では、媛萌が1人で防水作業をしていた。

媛萌「うわあ!?!こんなに水が・・・」

防水作業をしに来た途端、既に膝辺りまで水が溜まっていた事に驚く。

媛萌「大変だ百々!」

この状態では、とても自分一人では、防げないと思い、同じ応急員の百々を呼ぼうとしたが

媛萌「つて、居ないんだった・・・私1人じゃん!?!」

残念ながら百々は、突入隊として、アドミラル・グラフ・シユペーに居たので、此処には、あいにく自分1人だけだった事に気づく。

媛萌「あ・・・如何しよう・・・誰か助けて!!」

1人では、如何する事も出来ず、媛萌は、誰か助けてと泣き叫ぶ。

その時

「とつー!」

突然上から誰かが降りてきた。

媛萌「えっ!？」

媛萌は、後ろを向く。

其処には

媛萌「砲術科の」

何と砲術員の光、美千留、順子の3人が居た。

光「助けに」

順子「着ましたよ！」

美千留「いや、指揮所を壊れて、暇だし・・・」

如何やら3人は、射撃指揮所が砲撃で破壊されたので、暇になったところを媛萌が1人で防水作業をしていたのを聞いて、加勢に来たのだ。

媛萌「皆・・・ありがとう！」

加勢に来た3人に媛萌は、嬉しく感謝した。

美千留「さっさと直しちゃおう！」

順子「そうそう、ババーンと指示して！」

媛萌「じゃ、こっちお願い！」

3人の協力で防水作業は、順調に進む。

海上

一方、海上では、明乃と聡子が突入隊をアドミラル・グラフ・シュペーに乗り込ませた後、付近で待機していた。

明乃「皆：早く射程外に出て・・・」

明乃は、付近で待機しながら射程外に離脱する晴風を見ていた。

聡子「あないようけん水柱が！ 艦長なんとかならんのかの？ 攪乱とか？」

聡子は、射程外に離脱する晴風を援護しようと明乃に進言する。

明乃「艦はシロちゃんと皆に任せたから私達は突入班に何かあつた時に備えてなきや
！」

だが、明乃は、アドミラル・グラフ・シュペーに乗り込んだ突入隊に何かあつた時に備えて、アドミラル・グラフ・シュペーの付近で待機する。

その時、晴風の前方でアドミラル・グラフ・シュペーの主砲弾が着弾し、大きな水柱が立ち、晴風の艦首が跳ね上がる。

聡子「晴風が!？」

明乃「シロちゃん、教官：お願い皆を守って・・・」

明乃がそう思いつつ突入隊の成功を待つ。

晴風、艦橋

ましろ「……まだなのかあ、艦長？」

ましろも一方的に攻撃されてる状況を我慢しながら突入隊の成功を待つ。

アドミラル・グラフ・シュペー、甲板

一方、アドミラル・グラフ・シュペーに乗り込んだミーナ、マチコ、楓、百々、美海、美波、五十六の6人1匹は、マチコを先頭に次々とウィルスに感染した生徒を倒していた。

倒した生徒は、美波が1人1人、抗体を注射する。

ミーナ「……こっちじや！」

『ん』

ある程度、甲板の制圧が完了したところで、ミーナの案内の元、テアが居る艦橋を指しながら艦内に入った。

晴風、機関室

その頃、晴風の機関室では、アドミラル・グラフ・シュペーの砲撃を回避する為、最大出力が出しっ放し、その結果、サウナ状態に成っていた。

麗緒「ああ……室度90ぱあ超えた……!!」

桜良「送風機止まってない？」

留奈「熱いよ……」

空「温度も40度越えてる・・・ヤバイよ!」

室内の温度は、40度も超え、既に4人は、厚さに駄々をこねていた。

洋美「まだ全開なの? 外は、如何なっているのよ!」

洋美は、まだ全開を続けるのか、外の状況は、如何なっているのか伝声管で艦橋に問う。

すると

ましろ『あと少しだ! 頑張ってくれ!』

洋美「宗谷さん!」

明乃かと思つたが、答えたのがましろだつた事に洋美は、驚愕する。

ましろ『今は、私が指揮中だ! 頼んだぞ!』

洋美「はい! 頑張ります!!」

明乃に代わつて、艦長として、ましろが指揮している状況でましろにあと少しだけ頑張ってくれと頼まれ、洋美は、頑張りますと率直に言う。

洋美「あと少し、頑張ろう!!」

そして、駄々をこねる4人にあと少し、頑張ろうと言ひ。

『おっう!!』

4人もそれに声を上げるが

麻侖「それ……麻侖の仕事なのに……!!」

洋美にセリフを奪われ、麻侖は、顔を丸くする。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦内

一方、ミーナ達は、艦橋を目指すべく、艦内を進んでいたが

ミーナ「はっ!?!」

前方からウイルスに感染したレターナ、ロミルダ、アウレリアの3人が立ちはだかつた。

ミーナは、足を止めた。

ミーナ「ん?」

その時、後ろに居た楓が前に出て来て、持っていた薙刀の布を外し

楓「万里小路流薙刀術!」

3人に向け薙刀を構える。

『うがああっ!!』

3人は、楓に襲いかかてきた。

楓「当たると……痛いですよ!!」

襲ってくる3人を楓は、薙刀で素早く1人ずつ倒した。

百々「うお……! 凄いッス……!」

3人を一瞬に倒した事に百々は、驚きながら感想を呟いた。

美波「兵は敵に因りて勝ちを制す。」

美波もことわざを言いながら、楓が倒した3人に抗体を注射する。

百々「あれ？」

その時、倒した3人の1人の服の中から例のマウス、RATが出て来て、前方へと逃げて行く。

五十六「ぬお〜！」

それを見た五十六は、全速でRATを追いかける。

百々「五十六!!」

RATを追いかけていった五十六を百々が追いかける。

晴風、艦橋

その頃、晴風は、まだアドミラル・グラフ・シユペーの射程外まで退避中であつた。

『.....』

薫とましろは、まだ射程外から出られないのかと思いつつ啞然とする。

幸子「シユペーから11マイル!副砲の射程外に出ました!!」

ようやく副砲の射程外に出たが、まだ主砲の射程内。

ましろ「くっつ.....まだか.....まだなのか.....?」

ましろは、耐えながら突入隊の成功をまだかまだかと待ち続ける。

幸子「主砲射程外まで約10分！」

主砲の射程外まであと10分に成った時だった。

秀子「副長、主砲弾直撃コース！」

アドミラル・グラフ・シユペーの主砲弾が晴風に向かってきた。

ましろ「回避！」

ましろは、今度は、躊躇わず回避の命令を出す

秀子「間に合いません!!」

時遅く、主砲弾は、晴風に命中しようとした。

その時

ボン!!

何故か主砲弾は、晴風に命中せず、上空で爆発した。

『わあ!?!』

爆発の衝撃で艦は、揺れた。

ましろ「な、何だ？」

秀子「空中で爆発！」

芽衣「如何なってるの？」

志摩「うい！」

何故空中で爆発したのか、全く分からなかったが

薫「あれは!？」

薫が艦橋から上空を見ると、6機の飛行物体が飛来していた。

薫「あれは・・・春乱!!」

その飛行物体は、紛れもなくGフォースの戦闘攻撃機春乱だった。

春乱、操縦席

なのは「良かった！間にあつた!!」

春乱を操縦していたのは、なのはとフェイトだった。

晴風、艦橋

鶯『通信です!』

『えっ!?!』

鶯『スピーカーに流します。』

鶯は、入った通信をスピーカーに流す。

なのは『此方スターズ隊の高町なのはです・・・支援要請を受けて、唯今、到着しました。』

薫「なのは!？」

なのはからの通信と知り、急いで受話器を取る。

薫「なのは、此方は、晴風に乗艦している薫よ!!」

なのは『薫先輩!!大丈夫ですか?』

薫「私は、大丈夫!・・・でも晴風は、シユペーの射程外に退避するところなの・・・援護をお願い!」

薫は、なのはに晴風の援護をお願いする。

なのは『了解!』

春乱、操縦席

なのは「行くよフェイトちゃん!」

フェイト「ん」

なのはとフェイト達は、左右からアドミラル・グラフ・シユペーに攻撃を開始した。

なのは「目標ロックオン・・・発射!」

なのは機からAAM-4（99式空対空誘導弾）一発が発射され、アドミラル・グラフ・シユペーの前部にある射撃指揮所に命中した。

それに遅れて、フェイト機からもAAM-4が一発発射され、後部の射撃指揮所に命中した。

攻撃するなのはとフェイト達に対しアドミラル・グラフ・シユペーは、容赦なく反撃

するが前後部の射撃指揮所を破壊され照準が合わず、更にマツハーで突っ込んでくる春乱に対し主砲や副砲の砲弾は、当たらなかつた。

前後部の射撃指揮所を破壊され、更に攪乱するなのはとフェイト達に攻撃が集中したので、晴風への砲撃は、止んだ。

晴風、艦橋

芽衣「凄い、何あれ!？」

志摩「うい!？」

鈴「あんなに砲撃されてるのに、全く当たってない……」

幸子「あんな乗り物のデータがありません!!」

攻撃し攪乱するなのはとフェイト達に3人は、驚愕し、幸子は、春乱のデータを検索するが、全くない。

ましろ「……あれも教官の……」

薫「ん、私の大事な……仲間よ!」

画して、なのはとフェイト達の援護によつて、晴風は、無事にアドミラル・グラフ・シュペーの射程外に出た。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦内

その頃、突入隊は、艦橋目前の所まで来ていた。

ミーナ「此処を上がれば艦橋じゃ！」

ミーナを先頭に楓、マチコ、美波、美海が艦橋に続く階段を登ろうとした時に後ろからウイルスに感染した生徒3人が迫ってきた。

それに気づいた美海は

美海「此処は行かせない!!・・・マツチは私が守る！」

そう言つて、3人の前に通せん坊するが

美海「つて!・・・多いな・・・」

3人に飛び込まれて下敷きになる。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

艦橋に着いたミーナ達は、辺りを見る。

辺りを見ると上には、なのは達によつて破壊された射撃指揮所があつて、その下にミーナと同じ士官服を着てコートを纏つた1人の生徒が立っていた。

ミーナ「・・・艦長!!」

ミーナは、その生徒に向かつて艦長と呼ぶ。

その生徒は、紛れもなく、アドミラル・グラフ・シュペーの艦長であり、ミーナの親友テア・クロイツェルだった。

だが、ミーナが呼んだがテアは、ミーナの方を向いた時、テアの目がウイルスに感染

した生徒と同じ目をしていたので、テアもウイルスに感染していた。

恐らくあの時、ミーナがテアから退艦するよう言われた時からウイルスに感染していたのであろう。

とは言え、ウイルスに感染したテアは、ミーナ達の前に立ちほだかる。

ミーナ「艦長!」

ミーナは、もう一度、テアに呼ぶが、

ミーナ「はっ!」

テア「ううう・・・いや!」

テアは、ミーナに対して、容赦なく回し蹴りをする。

ミーナ「・・・」

テアの回し蹴りがミーナの顔にヒットするが、ミーナは、表情を変えず足を退かす。

テアは、ミーナから離れようとしたが、ミーナは、そのままテアを抱きしめ動けない様にする。

その隙に美波がテアに抗体を注射する。

抗体を注射され、テアは、そのまま落ち着きを取り戻し、ミーナに抱かれたまま気を失った。

ミーナ「・・・遅れて御免なさい。」

気を失ったテアにミーナは、抱きかかえたまま救出が遅れた事を謝罪した。

その後、マストに制圧完了の白旗が上がる。

海上

明乃「あっ!?!」

聡子「艦長! やったぞぞな!!」

海上で待機していた明乃と聡子は、制圧完了の白旗を確認し

晴風、艦橋

ましろ「あっ!?!・・・やった!!」

ましろも双眼鏡で制圧完了の白旗を確認。

それを聞いた艦橋の皆は、それぞれでハイタッチをした。

薫「任務・・・完了!!」

薫も任務完了と言って、喜ぶ。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦内

美海「マツチ・・・私・・・役にたった・・・かな?」

ウイルスに感染した生徒3人の下敷きになり、ボロボロになっていた美海は、やがて階段の上から誰かが降りてくるのを見るが美海は、それがマチコとも気づかず、そのまま意識を失った。

そして、意識を失った美海をマチコは、肩に担いで美波の元に運ぶ。

アドミラル・グラフ・シュペー、甲板

五十六「ぬう！」

甲板上では五十六が捕まえてきたRATを百々の前で置く。

百々「これで10匹目：お手柄ツスね・・・」

艦内に居たRATを全て捕まえた五十六を百々は、大いに褒めたたえる。

生徒の救出と艦も制圧され、作戦は、無事に終了する

上空

フエイト「終わったみたいだね！」

なのは「さあ、帰るよ!!」

作戦が完了した事を確認したなのはとフエイト達は、何も言わず、そのまま帰路に着いた。

その後、晴風は、アドミラル・グラフ・シュペーに接舷する。

アドミラル・グラフ・シュペー、甲板

薫「美波さん、もう抗体の接種、終わった？」

薫は、美波に殆んどの生徒の抗体接種は、終わったか確認する。

美波「これで最後・・・」

美波は、これで最後だと言って、自分に注射する。

如何やら、抗体接種が終わっていなかったのは、美波だけだった様だ。

その時

ミーナ「明乃、ましろ、教官！」

明乃「ミーちゃん!？」

ミーナが薫と明乃、ましろの前に意識を取り戻したテアを連れてきた。

テア「ミーちゃん？」

ミーナの事をミーちゃんと呼んでいる事にテアは、不思議に思った。

ミーナ「紹介する・・・此方が……」

ミーナが前へと手を出すとテアは一步前に出て。

テア「艦長のテア・クロイツェルだ・・・話は聞いた我々を救ってくれて感謝する。」

そう言つてテアは、明乃に手を出して明乃もそれに応えようと

明乃「晴風艦長の岬 明乃です・・・此方が」

明乃も自己紹介をし

ましろ「副長の宗谷 ましろです。」

明乃「そして、此方が」

薫「晴風教員の山本薫です。」

ましろと薫も自己紹介をして、お互いに手を交わす。

薫「全員無事でしたか？」

薫は、テアにアドミラル・グラフ・シユペーの生徒は、全員無事出したかを確認する。

テア「現状は：これからゼーアドラー基地に戻って補給だ。」

それに対して、テアは、攻撃で被害を受けた個所の修理やウィルスに感染してからの物資の不足の為、南にあるゼーアドラー基地に寄港する事にした。

薫「そうですか」

テアが薫と話していると明乃はある事に気付く。

明乃「じゃあミーちゃんも：」

テア「ああ、当然我々に行く。」

それは、ミーナの事でアドミラル・グラフ・シユペーの副長であるミーナは、当然、艦に戻らなければならない。

だが、それに一番シヨックを受けた者が居た。

幸子「えっ!？」

幸子である。

幸子は、テアの言葉を聞いて、目に涙を浮かべて人知れず何処かへと行ってしまった。美波「基地に戻ったら、念の為、精密検査を受けて欲しい。」

美波は、テアにゼーアドラー基地に寄港したら、後遺症がないか精密検査を受けるよう頼む。

テア「分かった。」

テアは、それを受けると約束する。

暫くして

ほまれ「ご飯できました・・・」

あかね「できました・・・!!」

柁箱姉妹がパーティーの準備が出来た事を知らせてきた。

初めての海洋実習でお互い色々あったが、改めて、お互いに交流しようと、交流パーティーをする事になった。

テア「これは、ラックスフイレだな！」

ミーナ「そうです艦長！寿司とも言います。」

様々な料理の中でテアは、中央に置いてあった寿司に注目する。
『我々も手伝いました!!』

この寿司作りには、レオナとアウレリアも手伝った様だ。

テア「・・・」

寿司に注目していると

薫「テアちゃんは、お寿司を見るのは、初めて？」

薫がテアに寿司を見るのは、初めてなのか聞く。

テア「いや、そう言う訳では……」

それに対して、テアは、そう言う訳ではないと言う。
すると横から

レオナ「クネーデルやマチエスも乗せてみました。」

とレオナがそう言うって、クネーデルやマチエスを乗せた寿司を出す。

テア「ああ、スシ、サシミ、カロウシってやつか？」

あかね「最後のは、何か違う。」

テアの最後のカロウシと言う言葉に、あかねが何か違うと思う。

薫「確かに変だわ……」

薫も変だと思った。

テア「これはアイントプフだな？」

続いてテアはおでんに興味を持った。

ミーナ「そうです艦長！おでんとも言います。」

レオナ「お、おでん？」

アウレリア「ん？」

如何やらレオナとアウレリアは、おでんを見るのは、初めての様だ。

ミーナ「うふ・・・艦長、挨拶を！」

ミーナに挨拶をするよう言われ、テアは皆の前に立つ。

テア「我々の不断の努力により、艦と自らの制御を取り戻した・・・このめでたい日に感謝して晴風艦長から乾杯の音頭を頂きたい。」

明乃「えっ!?・・・私・・・が？」

ミーナ「はい！」

テアに乾杯の音頭を任せると言われ明乃は、皆の前に立つ。

明乃「じゃあ・・・皆さん：乾杯!!」

『乾杯ー!!』

『プロースト!!』

明乃の乾杯の音頭を機に薫と生徒達は、一斉にそれぞれ乾杯し、交流パーティーを始める。

パーティーの中で山盛りのザワークラウトを見た美波は、ドン引きしたが、その山盛りのザワークラウトをテアが代わりに貰い、美波は、ホッとする。

如何やら美波は、お子様なのか、野菜の料理が嫌いの様だ。

その他、さつきレオナとアウレリアが作ったクネーデルやマチエスに乗せた寿司を洋

美と百々、麗緒、桜良、留奈の5人が試食したが、口に合わなかったようで不味い様な顔をする。

そして、今回の作戦で勇敢に戦った美海にローザから賞状を送られた。

マチコの方は、アドミラル・グラフ・シュペーの生徒に囲まれ注目の的になっていた。

ミーナ「はい、艦長あーん」

テアは満面の笑みをしながら口を開き、ミーナからブルストを食べる。

明乃「それソーセージ？」

ミーナ「ああ、我が艦特製のブルストじゃ！これがずっと食べたくてな・・・」

楓「はむっ、モグモグ：：なかなかいけますね・・・」

皿に残った2本のブルストの内一本を食べた楓はうっとりしながらブルストを食べる。

それを見て、ましろもブルストを取ろうとした時

五十六「うむ！」

ましろ「あっ!？」

横から五十六にがめ捕られてしまった。

五十六にブルストをがめ捕られましたろは、落ち込む。

その光景を見て、周りは、笑ってしまう。

薫「ましろちゃん・・・私のを上げるわ！」

落ち込むましろに薫が代わりに自分のブルストを上げる事でましろに救いの手を差し伸べる。

そして、その中でミーナは

ミーナ「艦長・・・ずっと預かっていた・・・これ・・・」

そう言つて、ずっと預かっていた艦長帽を脱ぎ、テアに返そうとしたが

テア「被せてくれ！」

テアは、被せてくれと言つて、せがみ、後ろを向く。

ミーナは、テアの後ろから艦長帽をテアの頭に被せる。

その瞬間、テアの中から涙が出てきた。

鈴「艦長さん・・・」

薫「嬉しくて、泣いているのテアちゃん！」

テア「私は泣いてない！」

テアは、そう言つて、手で涙を拭う。

テア「しかし、其方の艦は相当酷い状態だな・・・」

テアは、晴風の損傷箇所を見ながらそう呟く。

芽衣「誰のせいかな・・・でもナイスパンチだったよ！・・・私達を倒すにはちよつ

と足りなかったけど……」

芽衣がテアに健闘を称える言葉を言うとテアは顔を上げ。

テア「我々と共にゼーアドラーに行つて修理を受けたらどうだ？」

テアは、自分達と共にゼーアドラー基地に寄港しないか、明乃に提案するが

明乃「いえ、私達は明石と合流する様に連絡を受けています。」

明乃はこの後、明石と合流する様、学校から連絡を受けていた。

テア「そうか……では此処でお別れだな！」

明乃「はい」

明乃はテアと再び握手を交わした。

そんな時

ミーナ「……あつ?……ん?」

ミーナは、幸子の姿が無い事に気づく。

晴風、士官寢室

その頃、幸子は、晴風の士官寢室で一人、仁義のない映画を布団を被つて、寂しそうに見ていた。

幸子「盃はかえしますけん……以降わしを晴風の者と思わんでつかい……帰るゆうても……帰えれんぞ!」

台詞を言いながら、ミーナとの別れを悲しむ幸子。

いつかは、別れる日が来るのは、分かっていたが、いざ別れる日が来ると悲しくて、本当は、別れたくない気持ちで一杯だった。

やがて、夜に成り、お互いに盛り上がりつつあった交流パーティーも終わり、アドミラル・グラフ・シユペーは、ゼーアドラー基地に向け、出航の準備を整える。

アドミラル・グラフ・シユペー、左舷甲板

左舷甲板では、ミーナがテアの横で何故か、晴風の甲板を見渡していた。

テア「如何したんだ？」

それに対して、テアが声を掛けた。

ミーナ「ココ・・・いえ、何でもありません・・・」

ミーナは、何でもありませんと言ったが、ミーナは交流パーティーに居なかつた幸子を、居ないと気づいた時からずっと探していた。

やがて、アドミラル・グラフ・シユペーは、ゆっくりと進み始めた。

マストには、U、W、Iの国際信号旗が掲げられ「協力に感謝する・・・ご安航を祈る」と言う意味で晴風に感謝と航海の安全を祈る事を伝える。

晴風もマストにU、Wの国際信号旗を掲げ、「貴艦の安全な航海を祈る」とアドミラル・グラフ・シユペーの安全な航海を祈ると伝えた。

ミーナ「楽しかったぞ!!」

ミーナがそう叫ぶと晴風からもましろが

晴風、甲板

ましろ「私達もです! . . . 良い航海を . . .」

ミーナとテアに航海の安全を祈った。

薫「ミーナさん!! また会いましょうね!!」

薫もミーナにまた会いましょうと叫ぶ。

アドミラル・グラフ・シユペー、左舷甲板

ミーナ「グーテ ライゼ . . . !!」

薫や明乃達に見送られ、アドミラル・グラフ・シユペーは、ゼーアドラー基地に向け、出航した。

ボオ . . . !!

アドミラル・グラフ・シユペーが汽笛を上げると

晴風、士官寝室

幸子「はっ!?!」

それを聞いた幸子は、急ぎ部屋から飛び出て甲板に出る。

やはり、このままミーナと顔を合わせずに別れるのはこの先、ずっと後悔すると思ひ、

その思いが彼女を突き動かしたのだ。

アドミラル・グラフ・シュペー、左舷甲板

ミーナは、別れる晴風に向け手を振っていると

ミーナ「あっ!?!」

晴風の艦首に向かう幸子の姿を見つけた。

ミーナ「わしゃあ! 旅いってくるけん!」

艦首に來た幸子に対しミーナは、別れの言葉を投げかける。

晴風、艦首

幸子「体を厭えよ・・・!!」

幸子もミーナに別れの言葉を投げかけた。

アドミラル・グラフ・シュペー、左舷甲板

ミーナ「ありがとう・・・!!」

ミーナは、幸子に手を振り、旅立っていた。

晴風、艦首

幸子がミーナを見送っていると、後ろからましろが肩に手を掛けて

ましろ「間尺に合わん仕事をしたのう」

と言つて、珍しくましろが仁義のない映画の台詞を幸子に言った。

それに対して、幸子も

幸子「……もう一文なしや……」

と台詞で返す。

そして、薫も幸子の肩に手を差し伸べて

薫「大丈夫よ!……出会いがあれば、また必ず会えるわ……別れは永遠ではないから……」

と幸子を慰める。

幸子「教官……そうですね……!」

幸子は、いつかミーナと再会できる日を信じて、アドミラル・グラフ・シユペーが水
平線に消えるまで見送った。

こうして、晴風とアドミラル・グラフ・シユペーの戦闘は、終わり、ミーナも自分の
艦に戻っていた。

トラツク北東沖

同じ頃、晴風と別れた弁天と白鳳は、アドミラル・グラフ・シユペーと同じドイツの
ヴィルヘルムスハーフェン海洋学校所属の超大型直接教育艦ビスマルクを制圧してい
た。

ビスマルク、甲板

ビスマルクの甲板では、ウィルスに感染した生徒が抗体を注射され担架で運ばれていた。

三郎「大変だ、艦長!!」

次郎「如何した副長?」

三郎「今、准将から連絡が有って、晴風が……アドミラル・シユペーを制圧したそうだ!!」

真冬「えっ、あの大型艦を!?!」

真冬は、晴風が比叡だけじゃなくアドミラル・グラフ・シユペーまでも制圧した事に驚く。

次郎「1度ならず2度もやるとは、流石晴風の連中だ!!」

次郎は、アドミラル・グラフ・シユペーまでも制圧した晴風を褒めたたえるが

三郎「いえ……正確には、戦闘機の支援もあつたからだそうです。」

次郎「何だよ、単艦で制圧したんじゃないのか……」

三郎からなのはとフェイト達の支援が有った事を聞いて、単艦で制圧したんじゃない事にガツクリした。

それから、真冬達と別れ、真冬の弁天は、このまま行方不明艦を搜索に次郎の白鳳は、制圧したビスマルクを南のゼーアドラー基地へと護送する。

4月28日

ニューアイランド島沖

一方、アドミラル・グラフ・シユペーと別れた晴風は、予定通り、ニューアイランド島沖で明石と間宮に合流した。

明石、甲板

ましろ「何とか、上手くいきましたね艦長！」

明乃「でも……晴風がこんなにポロポロに……」

明乃は、今回の戦いで晴風の被害がこんなに大きかった事に落ち込んでいた。

明乃は、今回の戦いで晴風の被害を見て、もし武蔵相手だったら、こんな被害では、済まないと心配する。

ましろ「……」

薫「……」

そんな明乃に薫とましろは、何も言えなかった。

何れ、この明乃の心配さが本人の決断力を鈍らせる事に成るとは、この時、2人は、知る好も無かった。

第27章 赤道祭でピンチ！ 前編

4月28日

ニューアイルランド島沖

アドミラル・グラフ・シユペーと別れた晴風は、予定通りニューアイルランド島沖で
間宮と明石に合流し、被弾した各所の修理を受けていた。

そんな時

晴風、艦橋

麻命「てゝへんだあ、てゝへんだあ！」

『ん？』

麻命「てゝへんでゝい!!」

突然、何やら大変だと叫びながら、麻命が艦橋に駆け込んできた。

ましろ「何事だ!？」

明乃「機関部の何所か壊れてた？」

麻命「違ーう!!」

慌てて飛び込んできたので、機関部で問題があったのかと思つたが、違う様だ。

明乃「じゃあ、機関科の誰が体調が？」

麻命「みんな元気でえい！」

次に機関科の誰かが病気にでもなったのかと思つたが、それも違う様だ。

芽衣「だったら何!？」

薫「一体如何したと言うの柳原さん？」

芽衣や薫が麻命に何をそんなに騒いでいるのかを尋ねると

麻命「もう晴風は赤道を越えてるじゃねえか！」

麻命は皆に赤道を越えてる事を目を輝かせて言う。

ましろ「赤道？」

幸子「・・・うん、確かに・・・そうですね。」

幸子がタブレットで晴風の現在位置を確認すると、確かに麻命の言う通り、晴風は赤道を越えていた。

柳原「赤道祭だ!!」

そして、それを知つた麻命は、赤道祭だと言ひ放つ。

『赤道祭?』

赤道祭の言葉に何なのか、明乃達は、分ならず

薫「赤道祭・・・つまりお祓いね！」

それに対して、薫もお祓いかつと思つた。

麻侖「祭りだ!!祭りだ・・・!!」

こうして、麻侖の主張で赤道祭の企画が持ち上がった。

晴風、教室

その後、明乃は、晴風の生徒全員を教室に集め、赤道祭について協議した。

明乃「本艦は補修中でもありますし、赤道祭を行いたいと思います。」

媛萌「赤道祭?」

百々「また適当に名前つけたツスね!」

百々は、赤道祭が安直なネーミングセンスな祭りだと言う。

麻侖「なにいつてえでい!赤道祭は、由緒正しい祭りだい!」

麻侖は決して安直なネーミングセンスの祭りではないと反論する。

楓「何処が由緒正しいのですか?」

其処へ、楓が赤道祭について麻侖に質問する。

麻侖「それはな…クロちゃん説明してくれい!」

麻侖は隣に立っていた洋美に赤道祭の由来の説明をする様に促す。

洋美「風が吹かないと航海できなかつた大航海時代に赤道近くの無風地帯を無事に通過できるように海の神に祈りを捧げたのが始まりだったそうよ…赤道通過の時に乗

員が仮装をしたり寸劇を演じたりと雅にお祭り騒ぎをした記録が残っているわ!!」

洋美は、皆に赤道祭の由来を説明する。

薫（ああ、そう言えば、昔聞いた事がある……確か戦時中にも赤道を越えた艦が艦の安全や敵撃破を祈ったって……）

洋美の説明を聞いて、薫は、昔聞いた戦時中での出来事を思い出す。

順子「ふ〜ん!」

美千留「へ……」

光「そうなんだ……」

だが、洋美から赤道祭の由来を聞いたのに対して、順子や美千留、光は、余り興味が無い様子。

明乃「実行委員には機関長の柳原さんが立候補してくれました。」

赤道祭の実行委員には、言い出しっぺの麻命が自ら立候補した。

まあ当然である。

麗緒「やっぱり!」

留奈「マジかー!?!」

麻命が自ら立候補した事に機関科四人衆は、分かっていた様な表情をする。

麻命「皆の衆盛り上がっていくからな!……それぞれ出し物を考えておいてくれよ

な!・・・祭は明日の明日だからな!!」

赤道祭の開催日は、2日目にする事に成り、麻侖は、やる気満々であった

百々「め、めんどくさいツス:」

だが、百々あたりは、めんどくさいと嫌がっていた。

とは、言え、赤道祭は、2日目にする事が決まり、解散する。

晴風、デツキ

そんな中、間宮、明石による晴風の補給と修理作業は、続いていた。

優衣「必要な物は、補充しといたわ!」

珊瑚「主砲の換装はあと2日ぐらい掛かるけど・・・」

必要な物資の補給は、終わり、損壊していた射撃指揮所も新しく備え付けられ、後は、

主砲の換装だけであった。

明乃「ありがとう・・・また手間かけさせちゃったね。」

優衣「うんうん:晴風の奮闘ぶりは私達も聞いているから、比叡を座礁させたり、シユペーへの乗り込み作戦を成功させたり:」

珊瑚「変わり者を寄せ集めたって印象だけど凄いな・・・」

優衣と珊瑚は、寄せ集めた晴風の生徒が比叡とアドミラル・グラフ・シユペーを制圧

した事に凄いと感じる。

明乃「ハハ：ありがとう：：」

それに対して、明乃は、苦笑いしながら、ありがとうと言う。

2人から作業の状況を聞いた後、明乃は、艦橋に戻って見ると

幸子「出し物、何やります!？」

ましろ「えっ!？」

幸子がましろに赤道祭での出し物は何が良いかを尋ねていた。

如何やら幸子は、赤道祭に出る気満々の様だ。

芽衣「やんなきやいけないの・・・?」

志摩「う・・・」

しかし、芽衣や志摩達は、あまり赤道祭には積極的な様子ではなく、むしろめんどくさいと言う印象が強かった。

それでも幸子は、やる気だった。

幸子「私考えても良いですか?」

出し物について自分が考えて決めようとしたが

ましろ「駄目だ!!」

幸子「え・・・!!」

ましろにあっさり拒否された。

鈴「ココちゃんの考える事に私達きつとついていけない気が…」
鈴もましろと同様の意見だった。

確かに2人の言う通り、幸子がやる物は、どうせ任侠映画に関するものだろうと察していたのだ。

幸子「じゃあ、シロちゃんも一緒に考えてくださーい!!」
そう言つて幸子はましろに抱き付く。

ましろ「離せ!」

ましろは、何とか引き離そうとするが

幸子「離さんよ……!」

幸子は、離れず

ましろ「離さんかい!」

幸子「離さんよ……!」

何度も同じ事が続き

ましろ「離せゆうとるんじやい!」

幸子「離さんよ……!」

ましろ「ワァーもう……!!」

結局、離れじまいだった。

鈴「いつの間にか凄く懐いてるね!」

芽衣「何、このうつつとしい距離感!」

志摩「うい・・・」

鈴「あれ、いきびったり!」

芽衣「うん!」

2人の仲良さそうなところを隣で見てた3人は、2人の距離感がうつつとしく見えるし、いきびったりだと見えた。

そんな時

薫「良いじゃないの、2人とも、仲がよくって・・・」

芽衣「あつ、教官!」

薫が艦橋にやって来て、

薫「納沙さん、私も出し物、何かやろうと思ってるの!」

薫も赤道祭で何かをやる気だった。

ましろ「えっ、教官も!?!」

薫が赤道祭で何かをやるのにましろは、驚く。

幸子「教官は、何するんですか?」

幸子が薫に何をするのか尋ねると

薫「それは・・・ない・しょ・・・」

それは、秘密で当日に明かす様だ。

晴風で補修と補給作業が行われている時、晴風の後方にGフォースの補給艦せたが到着した。

晴風、後部甲板

薫「あれは、せたじゃない・・・何故、此処に？」

それから、次の日に龍之介達が補給の為、このニューアイルランド島沖にやってきた横須賀ブルーマーメイド庁舎、会議室

その頃、横須賀のブルーマーメイド庁舎の会議室では、平賀や福内などのBPF隊員達が集まり、真霜の指導のもと、現在の状況と今後の作戦について、会議が開かれていた。

真霜「検査の結果・・・ウイルスに感染した生徒は正常に戻ったわ・・・Gフォースの支援の下で晴風がシユペーに行った作戦は成功よ！」

スクリーンには晴風が行ったアドミラル・グラフ・シユペーへの救出作戦の映像が流され、更に救出作戦後のゼーアドラー基地で精密検査を受けた生徒達が異常なしだった事を真霜は、報告する。

平賀「凄いですね！」

福内「表彰ものです!」

なのはとフェイト達の支援の下で晴風がアドミラル・グラフ・シユペーを制圧した事を平賀と福内は、大いに評価した。

平賀「やはり、あの戦闘機やヘリは、今後の私達の活動において必要ですね!」

更に平賀は、今回大いに活躍しているGフォースの戦闘機やヘリコプターの必要性を上げる。

真霜「私もそう思うわ!!・・・今回の事態が終息したら、今度こそ、この議題を上認めさせるつもりよ!」

それに対して、真霜も今回の事件が落着いた後に今度こそ、国土保全委員会の幹部達に試作ハイブリッド機烈風の飛行テスト及び量産を認めさせると告げる。

真霜「さあ、彼らや学生達に負けていられないわよ!・・・我々、もこれからパーシアス作戦を展開するわ!・・・抗体の増産は現在急ピッチで進んでいる・・・完了と共に一斉に行動開始よ!」

そして、武蔵や他の行方不明艦に対し、その制圧と救出を目的とした作戦「パーシアス作戦」を実施すると告げる。

真霜の言葉に平賀達は、一瞬で真剣な表情に変わり、作戦の概要を聞く。

真霜「鳥海、摩耶、五十鈴、ビスマルクは、既に真冬部隊及びGフォース部隊によつ

て制圧済み・・・残るのは・・・涼風、天津風、磯風、時津風それから：武蔵！」
『ああ・・・!?!』

武蔵の写真が映し出されると、平賀達に緊張が走った。

まあ、平賀達にとって、今回の作戦で最も脅威なのは、東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊を16隻も航行不能にした武蔵である。

他の巡洋艦、駆逐艦級ならば、今の手持ちの戦力で十分に対処が可能であるが、超弩級戦艦並みの武蔵相手では、流石に手持ちの戦力では、少々頼りない。

だが、武蔵に対抗できる戦力が無い以上、今の現状の戦力でやるしかない。
幸い、龍之介達の部隊からの支援もある。

真霜「真冬部隊とGフォースの哨戒機によると・・・武蔵最終確認地点は、ウルシー南方、進路は西・・・恐らくフィリピン方面に向かったと思われるわ・・・但し現在位置は不明よ！」

真冬部隊やE2Gの哨戒にも関わらず、武蔵の所在地は、不明である。

横須賀女子海洋学校、校長室

一方、横須賀女子海洋学校の真雪の所にもパーシアス作戦の概要が届く。

教頭「今後はブルーマーメイド主導で作戦を展開するとの事ですが、学生艦にも協力
の要請が来ています。」

今回の作戦は、あくまでブルーマーメイドの主導の下で行う事になった。

何故なら、今回の事件でホワイトドルフィンの最高指揮官の野田が逮捕された。

その為、ホワイトドルフィンには、指揮系統を維持できなくなり、回復が望めない状態である為、ブルーマーメイドの主導で作戦を行うしか無かった。

更に作戦に備え、戦力を増強する為、現在協力している東舞鶴男子海洋学校や横須賀女子海洋学校に作戦への協力要請を申し出たのだ。

真雪「生徒に負担はかけたくないけど……感染の拡大は何としても防がなければ……艦の現況は？」

作戦への協力要請に真雪は、生徒に負担はかけたくないと戸惑うが、感染の拡大は何としても防がなければならないと要請を受け入れ、艦の現状を問う。

教頭「風早、秋風、浜風、舞風は、学校に戻って来ております……長良、浦風、萩風、谷風は依然偵察中……そして、晴風は、現在、間宮、明石による修理中です。」

現在、風早、秋風、浜風、舞風の4隻は、学校に帰港し、長良、浦風、萩風、谷風の4隻は、依然、他の行方不明艦を捜索中。

そして、晴風は、間宮、明石による損傷修理と補給が行われている。
真雪「晴風の生徒達の様子は？」

真雪は、アドミラル・グラフ・シユペー救出作戦後の晴風の生徒達の様子を問う。

教頭「山本教官からは、赤道祭の準備中との報告がきています。」

それに対して、晴風に乗艦している薫から赤道祭の準備中との報告が上がっている。

真雪「フフフ」

それを聞いた真雪は笑みを浮かべる。

真雪「修理が完了したら作戦に協力するようにと伝えて！」

教頭「はい！」

真雪（薫さんにはまた、面倒をかけるかもしれないけど、この事態を解決させるには貴方の力が如何しても必要な：：生徒達の事を護つてあげてね：薫さん!!）

パーシアス作戦の準備が着々と進んでいる。

そんな中

4月29日

ニューアイルランド島沖

晴風がニューアイルランド島沖で間宮と明石による修理と補給を受けている時、武蔵を捜索中だったGフォース西部方面混成艦隊の旗艦空母大鳳が艦隊と別れ、航空燃料と弾薬の補給の為、この海域に到着する。

空母大鳳は、晴風と間宮、明石が居る岩礁付近を避け、沖合で補給艦せたと合流する。

空母大鳳、艦橋

美奈「両舷微速!!前方の補給艦」

空母大鳳は、ゆっくりとせたに接近する。

信吾「左舷に晴風他2隻を確認。」

信吾が修理と補給を受けている晴風を確認する。

それを聞いて、龍之介と信吾が双眼鏡で晴風を見る。

信吾「此処からでは、分かりませんが、えらくやられているようですね。」

龍之介「ん……」

(薫が無事で居てくれれば良いんだが……)

遠くからでは、分からないが酷く損傷しているのを見て、龍之介は、薫が無事で居て、

欲しいと祈りながら双眼鏡で見続ける。

やがて、空母大鳳がせたの右舷に到達し

美奈「両舷停止!!整備員は、直ちに補給作業にかかれ」

空母大鳳は、せたの左舷に停止し、整備員達は、補給作業を開始する。

一方、空母大鳳の隣で修理と補給を受けている晴風では

晴風、見張り台

マチコ「……」

見張り台の上から空母大鳳とせたを見ていたマチコは、直ぐに艦橋へと知らせる。

晴風、艦橋

マチコ『所属不明の大型艦一隻、補給艦と合流!!』

ましろ「所属不明の大型艦?」

マチコの報告を聞いて、ましろは、?する。

芽衣「ブルーマーメイドの艦じゃない?」

志摩「うんうん」

それに対して、芽衣は、ブルーマーメイドの艦艇じゃないかと言ひ、志摩もそれに同意するが、

幸子「いえ、違う見たいですわね・・・」

デッキで双眼鏡を覗いていた幸子がタブレットで調べたが、空母大鳳の詳細が載っていなかったたので、ブルーマーメイドの艦艇ではないと判断する。

明乃「・・・何所の艦だろう。」

明乃達が空母大鳳が何所の所属艦か分からなかった時、

薫「心配しないで皆!あれは、私が艦長をしていた艦よ!」

『ええ・・・!?!』

空母大鳳が薫の艦だと聞いて、明乃達は、驚く。

そして、双眼鏡を持って、デッキから、補給を受けている空母大鳳を見る。

明乃「……」

ましろ「あれが薫さんが艦長していた艦!」

薫「そうだよ! 思ったより大きいでしょ!」

芽衣「大きいって、事じゃないよ、結構デカイよ!!」

志摩「うい!!」

空母大鳳の大きさに芽衣と志摩は、驚く。

それもその筈、空母大鳳は、正規空母とは言いえ、大きさは、大和型よりも70m程巨大で、その中には、90機もの艦載機を搭載する艦艇である。

幸子「でも、大きいのに砲塔が無いですね。」

幸子は、空母大鳳の甲板に砲塔が無い事に気づく。

芽衣「あっ!?! ホントだ!」

志摩「うい!」

それに芽衣も志摩も気づく。

ましろ「確かに砲塔が無いし、甲板には、車見たいなものがあるだけ、輸送艦ですか?」

ましろは、空母大鳳が輸送艦だと思ったが、

薫「いいえ、あれは、航空母艦よ!」

『航空母艦!!』

空母大鳳が輸送艦ではなく、航空母艦だと聞いて、明乃達は、驚く。

ましろ「航空母艦って・・・何ですか？」

ましろは、航空母艦とは、何かと聞く。

薫「現在ブルーマーメイドが試作している新しい艦種よ！」

薫は、それに対して、ブルーマーメイドが試作している新しい艦種と誤魔化す。

まあ、明乃達にとって、航空母艦が無い世界では、珍しい艦種だろう。

しかも、それが主力だと言う事も

明乃「新しい・・・艦種・・・」

薫の言葉に明乃は、そのまま空母大鳳を見る。

やがて、空母大鳳から内火艇が一隻、晴風に向かってきた。

内火艇には、龍之介、なのは、フェイトの3人と護衛のGF隊員が乗っていた。

内火艇が晴風に着き、梯子から後部甲板に上がる。

晴風、後部甲板

!!!
!!!

晴風にやってきた龍之介達を見て、晴風の生徒達は、次郎の時みたいにジロジロ見る。
そんな生徒達になのはとフェイトは、小さく手を振る。

そんな時

薫「准将!？」

奥から薫がやって来て、更に後ろから明乃達がやって来た。

龍之介「薫!？」

2人は、抱き付き、再会を喜んだ。

あの日、宗谷家を出てから雅に24日ぶりである。

龍之介「お前が無事で良かった!!・・・反乱と聞いた時から心配してたんだぞ!!」

薫「御免なさい兄さん!!・・・私も兄さんや他の仲間達が拘束されたと聞いて、心配してたの!!」

2人は、お互いに心配していた事を言う。

龍之介「俺は、この通り、ピンピンしてる・・・だが、参謀がな・・・」

薫「徳吉参謀が如何したの?」

龍之介「拘置所で自白剤を強制的に注射されて、中毒になった。」

龍之介は、功が邦夫によって、中毒にされた事を薫に伝えた。

薫「えっ!?!・・・それで徳吉参謀は?」

龍之介「今は、正常に回復して、古庄教官と共に入院中だ!」

薫「良かった。」

薫は、功が無事だった事を聞いて、安心する。

『薫先輩!!』

薫「貴方達も無事でよかったわ!!・・・それから、シユペーの時は、支援してくれてありがとうね!」

薫は、なのはとフェイトにアドミラル・グラフ・シユペーの時に支援してくれた礼を言う。

なのは「いえ、別に感謝される事は・・・」

フェイト「薫先輩達が無事だった事が何よりです。」

薫「ん・・・」

3人が話していると

ましろ「龍之介兄さん!!」

薫の後ろに居たましろが龍之介に声を掛ける。

龍之介「おお、ましろ!?!・・・久しぶりだな!!それと・・・そっちの小さいのは・・・」
龍之介は、ましろに声を返した後、ましろの側に居た明乃の方を向く。

明乃「あつ!?!・・・晴風艦長の岬 明乃です。」

明乃は、龍之介に対し官姓名で答える。

龍之介「お前が艦長か・・・俺は、ブルーマーメイド艦隊指揮官の山本龍之介だ!!言わ

ば・・・この薫の上司だ!!」

龍之介も官姓名で答え、更にGフォースを隠して、ブルーマーメイド艦隊指揮官と名乗る。

龍之介「早速だが、岬艦長!!・・・少し話す事がある・・・すまないが生徒達を招集してくれるか?」

龍之介は、晴風の生徒達に話す事があるので、明乃に召集をお願いした。

明乃「分かりました。」

明乃は、了解し、直ぐに晴風の生徒達に教室に集まるよう招集を掛ける。

晴風、教室

「何だろうね」

「さあ」

教室に集まるよう招集を掛けられた晴風の生徒達は、何かとざわめいていた。

特にその中でも機関科の4人が

留奈「一体なんだろうね・・・」

桜良「また、ブルマーの指揮官から何か言うらしいよ・・・」

麗緒「そう言えばさあ、そのブルマーの指揮官ね・・・さつき見たけど、この前来た人と同じ男の人だったし・・・」

空「えっ!?! 本当!!」

桜良「最近のブルマーって代わってるわね・・・」

この前来た次郎達の事と言い、今来た龍之介達を見て、最近のブルマーメイドは、代わっていると思う4人組だった。

そんな中、教室に薫と明乃とましろが入って来て、更にその後ろに龍之介となのは、フェイトが入って来た。

龍之介は、前に出て、生徒達は、龍之介に注目する。

龍之介「俺は、ブルマーメイド艦隊指揮官の山本龍之介だ!!」

『えっ!?!』

龍之介達を見て、生徒達は、驚きな顔をする。

雅に男がブルマーメイド艦隊を指揮しているなんて、想像もつかなかったろう。

とは言え、生徒達が驚愕する中、龍之介は、驚く事なく生徒達に話す。

龍之介「君達は、困難の中、比叡、シユペーを止めた事・・・誠に素晴らしい成果をしてくれた。」

龍之介は、先ず困難の中、単独で比叡を座礁させた事やアドミラル・グラフ・シユペーを制圧した事、誠に素晴らしい成果をしてくれたと生徒達を褒める。

龍之介「だが、今度の戦闘は、より厳しくなるだろう・・・本部からの作戦指示があ

るが、成功するか如何かは、分からない……怪我人も出るかもしれない……」
褒め言葉は、置いていて、今度の武蔵との戦闘は、より厳しいものになると生徒達に告げた。

明乃「ん……」

龍之介の言葉を聞いた途端、明乃は、俯く。

まして「!?!」

俯く明乃にましては、気づく。

龍之介「それに対して、俺が言いたい事は、唯一つだけ……」

武蔵との戦闘に対して、龍之介が言いたい事は、唯一つだけ

それは

龍之介「……死ぬな……以上だ!!」

死ぬなど言うのは、生きろと言う事、死ぬことは、許さない。

薫「あつ……!?!」

龍之介の発言に薫は、驚く。

普通なら、これ以上、生徒達を危険に晒す事は、出来ないと言って、横須賀に帰還を命じる筈なのに如何して、戦闘に参加させる様な事を言うのか、薫は、全く分からなかった。

晴風、通路

その後、薫は、教室を出た龍之介の後を追う。

薫「ねえ兄さん？」

龍之介「何だ薫？」

薫「如何して、あんなこと言ったの？・・・普通なら生徒達を危険に晒す事は、出来ないと言つて、横須賀に帰還を命じるじゃないの？」

薫は、何故、生徒達に戦闘に参加させるような事を言ったのか、龍之介に問う。

龍之介「ん・・・確かに普通なら、これ以上、民間人を危険に晒す事は、出来ないのは、俺も分かっている・・・だが、戦力が少ない状況では、流石にそれも難しい。」

それに対して、龍之介も分かっているのだが、武蔵に対する戦力が少ない状況では、流石にそれも難しかった。

薫「・・・」

龍之介「それに・・・武蔵に乗っているはやての事も気になるしな・・・」

薫「ん・・・」

はやての事を聞いた途端、薫は、気を落としてしまう。

あれからまだ、はやての安否は、確認できていない。

それだけじゃない、武蔵には、明乃の友人であるもえかも乗艦している。

もえか達も安否は、不明である。

龍之介「まあ、そう気を落とすな! . . . はやてなら多分大丈夫だろう . . . あいつは、そうやられる奴じゃないからな . . . 」

龍之介は、気を落とす薫を励まそうとはやてのタフを言う。

薫「ん . . . そうだね! 」

薫は、気を落としながら納得する。

龍之介「ところで薫 . . . 此処に来る時から生徒がざわめいていたんだが . . . 何かあるのか? 」

龍之介は、教室に入る前に幸子や麻命のざわつきに気づいていた。

薫「ああ、補修作業中で暇だから、機関長の提案で赤道祭の準備中なの . . . 」

薫は、赤道祭の準備中だと答えた。

龍之介「赤道祭か . . . 」

赤道祭の準備中だと聞いた龍之介は、浮かない顔をする。

薫「駄目かな? 」

それを見た薫は、こんな状況で赤道祭を行うのは、駄目なのか問う。

龍之介「いや別に . . . 唯、今のうちにえいきを養う事も良い事だ!! . . . お前の為にもな . . . 」

それに対して、龍之介は、反対しないし、むしろ武蔵との戦闘前にえいきを養う事も良い事だと賛成する。

そう言った龍之介は、甲板へと去っていく。

去っていく龍之介に薫は

龍之介「……ありがとう兄さん!!」

そう言つて、作戦に参加させてくれる龍之介の配慮に礼を言うのだった。

晴風、教室

一方、教室に残っていたなのはとフェイトは、晴風生徒達にたわまれていた。

幸子「あの、お二人は、ブルーマーメイドなんですよね?」

幸子なのはとフェイトにブルーマーメイドなのか聞く。

実は、幸子は、二人が来ている制服が前に来た平賀達と違う事に気づく。

なのは「うん……ブルーマーメイドなのかは、ちよつと言えないけど……」

フェイト「その事については、極秘です。」

それに対して、なのはは、言えず、フェイトは、極秘だと答える。

秀子「じゃ、何で男の人がブルーマーメイドを指揮しているんですか?」

今度は、秀子が何故、龍之介がブルーマーメイドを指揮しているのか問う。

なのは「別に男が指揮して何か悪いの?」

秀子「いや別に悪くないんですけど、普通は、私達見たいな女性じゃないんですか?」
なのは「それは・・・」

フェイト「それも極秘です。」

それも極秘だと答える。

幸子「お二人は、ブルーマーメイドで何をしているんですか?」

更に今度は、ブルーマーメイドで何をしているのか問う。

光「砲術?」

美甘「主計かな?」

桜良「機関じゃない?」

フェイト「それも極秘です。」

それも極秘で押し通すフェイト。

まあ確かに彼ら生徒達に自分達が航空機パイロットって、言っても分からないだろう。

芽衣「何か、極秘が多いね?」

志摩「うい・・・?」

麻侖「ほんとにブルーマーメイドかいな?」

フェイトが極秘ばかりで何も答えないので、2人がブルーマーメイドなのか、怪しく

なる。

そんな時

薫「皆!!・・・そんな怪しい目で見ちゃ駄目でしょ!!・・・彼女達は、あのシユペー戦で窮地に立たされていた私達を救ってくれた恩人なんだから・・・」

薫が2人を怪しむ生徒達に対し、アドミラル・グラフ・シユペー戦での2人のお陰で晴風が危機を脱した事を言う。

『ええ・・・!?!』

ましろ「じゃ・・・あの空に飛んでいた物に乗っていた方ですか？」

それを聞いたましろは、あの時のアドミラル・グラフ・シユペー戦で晴風の窮地を謎の飛行物体が救ってくれた事を思い出す。

なのは「そうだよ!・・・因みにあれは、戦闘機って言うんだけど・・・」

それに対して、なのはがあっさり認めてしまい、更に戦闘機の事をバラしてしまう。

『戦闘機?!』

戦闘機と聞いて、生徒達は、驚愕する。

フェイト「駄目だよなのは!!・・・機密事項を言っちゃ・・・折角、私が極秘で押し通したのに・・・」

秘密をバラしてしまったなのはにフェイトが極秘で押し通したのにと叱る。

フエイト「薫先輩も機密事項を晴らす様な発言は、控えて下さい!!」

薫も機密事項を晴らすような発言は、控えて下さいと叱られる。

薫「・・・御免なさい・・・」

薫は、なくなく反省する。

フエイト「兎に角、これ以上は、話せませんので、場所を変えましょう。」

これ以上教室に居たら機密を漏らす可能性大と考え、フエイトは、場所を変えるよう薫にお願いする。

薫「じゃ、取り合えず私の部屋に・・・」

薫は、取り合えず教員用居室へと場所を変える。

晴風、教員用居室

フエイト「一時は、如何なるかと思いましたがよ・・・」

教員用居室に場所を変えて、ホツとするフエイト

なのは「御免ね、フエイトちゃん!!」

機密をバラしてしまった事をフエイトに謝罪するのは。

フエイト「なのはは、口が軽いんだよ・・・」

なのは「だって・・・」

2人は、親子喧嘩見たいな状態に成る。

それを横で見ている薫が

薫「2人とも仲が良いね・・・」

2人の親子喧嘩を見て、仲が良いねと言う。

『ん!?!』

薫「本当は・・・此処に・・・はやてちゃんが居てくれたら・・・」

薫は、此処にはやてが居たらと思うと表情を暗くする。

『・・・・・・・・』

そんな薫を2人は、黙って聞く。

薫「でも、はやてちゃんは、今武蔵に居る・・・そして、武蔵は、今、行方が分か

らない・・・」

なのは「薫先輩・・・」

薫「だけど・・・それでも、私は・・・はやてちゃんを助けに行かなきゃならな

い・・・それが、今の私の使命だから!!」

そう言つて、薫は、武蔵とはやてを助けに行くことに心を決める。

フェイト「その調子ですよ先輩!!」

なのは「今度は、私達が付いているから・・・」

薫「なのはちゃん・・・フェイトちゃん・・・ありがとう!!」

2人に慰められ薫は、嬉しくなる。

そんな時

五十六「ぬっ」

多聞丸「ニヤッン」

五十六と多聞丸が教員用居室に入って来た。

薫「五十六!?!・・・それに多聞丸まで・・・」

薫は、入って来た五十六と多聞丸に気づく。

フェイト「あれ何で猫が?」

なのは「うわあゝ!?!可愛い!!」

なのはとフェイトは、入って来た五十六と多聞丸に驚きながら、2匹の猫を撫で撫でする。

晴風、後部甲板

その後、晴風を視察した龍之介達は、空母大鳳へと帰っていった。

薫「・・・」

薫は、内火艇で空母大鳳へと戻る龍之介達を見送る。

その見送る中、

ましろ「教官!?!」

突然、ましろが現れる。

薫「何、副長？」

薫は、何かと思いましろの方を向く。

ましろ「前からずっと気になっていたんですが・・・教官は、本当にブルーマーメイドですか？」

ましろは、薫にトンデモナイ疑惑を問う。

薫「あっ!!」

それを聞いた薫は、驚愕する。

ましろ「あの空飛ぶ艦や謎の飛行物体・・・普通は、存在しない物ばかり・・・教官、いえ、薫さん達は、一体何者なんですか？」

ましろは、あの時（白鳳を見た時から）から、薫がブルーマーメイドなのか疑問を懐いていたのだ。

それに対して、薫は

薫「副長、いえ、ましろちゃん!・・・悪いけど、今は、それは、言えない・・・だけど・・・これが終わったら全部話すわ!!・・・だから、ましろちゃんは、今自分がすべき事をして・・・」

残念ながら、今は、大事な作戦が控えている為、ましろの問いには、答えられない。

だが、薫は、この事件が解決した暁には、ましてに全部話すと約束し、それまで、ましてに自分がすべき事をするように言う。

薫が言うましてろがすべき事

それは、いづれ分かる事だ。

第28章 赤道祭でピンチ！ 後編

4月30日

ニユーアイランド島沖

龍之介が視察した後、晴風が間宮、明石から補修と補給を受けている中

晴風、後部甲板

洋美「ん・・・ん・・・はあ・・・」

洋美は、甲板上に提灯を紐にぶら下げる作業をしていた。

炎天下の中だったせいか、洋美は、疲れて、肩が凝っていた。

そんな時

「きゅあ・・・!!」

洋美「ん!？」

何か悲鳴が聞こえたと思ったら破損した第三主砲塔の近くで

光「アハハハ・・・!!」

順子「それバキュン!!バキュン!!」

美千留「ハハハ・・・!!」

光「もうお・・・!!」

順子「おりゃ!!おりゃ!!」

水着に着替えた砲術員の光、美千留、順子が楽しそうに水鉄砲遊びをしていた。更にマチコが前の休日同様、パラセイリングを楽しんでいる。

そして、もう一つ

洋美と同じ機関科の四人衆は、水着に着替えデッキキエアで日光浴をしていた。

桜良「本日の運勢・・・さそり座は、10位だつて!!」

日光浴中に4人は、前の休息の時と同様に雑誌の占い記事で自分の星座の運勢をそれぞれ確認していた。

麗緒「おうし座は11位：：」

麗緒は、又も自分の星座がブービーだった事に嫌な顔をする。

留奈「ビリじゃないから良いんじゃない!」

そんな麗緒に留奈がフォローを入れる。

4人が仲良く日光浴をしている時

洋美「貴方達も手伝ってよ!!」

洋美が赤道祭の準備をさぼって、日光浴をする4人に準備を手伝うよう言うが留奈「暑いから動きたくない!!」

留奈から暑いから動きたくないとおっさり断られた。

洋美「はあ・・・！」

そんな4人に洋美は、呆れてしまう。

結局、洋美だけで赤道祭の準備をしなきゃならなくなり、作業は、捗らなかつた。

そんな中

媛萌「う〜ん、中々、大変、大変・・・」

日光浴をしている4人の隣で媛萌が木箱の上に座り、スケッチブックで何かの図面を描いていた。

一方、間宮、明石から補修と補給を受けている晴風の後方の沖合では、大鳳がせたから補給を受けていた。

甲板では、整備班長の文雄の指揮のもと、整備員達がせたから燃料補給用ホースを伸ばして、航空用燃料タンクに補給する作業を行い、更に消耗したミサイルや弾薬を補給をしたり、艦載機の整備をしていた。

それ以外の隊員達は、補給中は、暇なので、甲板でフットボールをしたり、晴風の機関科の4人見たいにデッキチェアで日光浴をしていた。

空母大鳳、作戦室

作戦室では、なのは、フェイトを含むパイロット達が集まり、龍之介のもと、パーシ

アス作戦に関する打ち合わせを行っていた。

龍之介「宗谷監督官からの情報と哨戒機の報告から武蔵は、フィリピン方面に向かいつつある……従がって、パシアス作戦に基づきブルーマーメイドの主力部隊が武蔵を制圧する……我々の配置は、後方の第二陣に配置された。」

真霜からの指示で龍之介達は主力部隊の後方、第二陣に配置された。

何故、龍之介達を後方の第二陣に配置したのか、

それは、真霜が龍之介達を気遣ったの事だった。

龍之介「だが、我々は、主力部隊に先立ち先陣を切る!!」

だが、龍之介は、独断で主力部隊に先立ち先陣を切る事をなのは、フェイト達に告げた。

龍之介「よって、我が航空隊は武蔵制圧をより確実にする為、武蔵の主砲、副砲その他の火器を制圧する!!」

ブルーマーメイドの武蔵制圧を助ける為、手持ちの航空隊全機を持って、武蔵の主砲、副砲などの武装を破壊する。

武蔵の18インチ主砲や副砲は、ブルーマーメイドにとっては、最大の脅威である。

其処で、18インチ主砲や副砲では、狙え難い航空機で、それらの兵器を破壊してしまおうと言うのだ。

GF隊員「腕が成るな!!」

GF隊員「私達の腕を見せてやりましょ!!」

それを聞いた途端、パイロット達は、大いに士気が上がった。

だが、なのはとフェイトは、真剣な顔をしたまま聞く。

龍之介「士気が上がるのは、大いに結構だが、くれぐれも武蔵の乗員が学生だと言う

事を忘れるな・・・そして、武蔵には、八神中佐が乗っている事も・・・」

龍之介は、士気が上がる隊員達にくれぐれも武蔵の乗員が学生だと言う事や武蔵に乗艦しているはやての事を忘れるなど告げた。

それを聞いた途端、隊員達は、真剣な顔になる。

その後、打ち合わせが終わり、作戦室になのは、フェイトを残して、隊員達は、それぞれ補給の間、自由気ままに過ごす。

フェイト「なのはは、この後如何する?」

なのは「うん、如何しようかな・・・?」

2人が補給の間、如何過ごすか、考えていると

龍之介「お前らそんなに暇なら、今晴風で赤道祭があっているらしいから行ってきたら如何だ!!」

艦橋に戻ろうとしていた龍之介が暇そうな2人に晴風で赤道祭が開催される事を告

げる。

なのは「えっ?!でも私達?」

フエイト「良いんですか?」

龍之介の発言に驚きながら、2人は、晴風に行つて良いのか問う。

龍之介「どうせ作戦開始まで、かなり余裕がある・・今のうちにえいきを養うのも必要だ!!」

それに対して、龍之介は、作戦開始まで、かなり余裕があるので、今のうちにえいきを養うのも必要だと言つて、2人に勧める。

なのは「じゃ、そうします。」

フエイト「ん!」

2人は、龍之介の気遣いをお受けする事にし、晴風に向かう事にした。

龍之介「それと、ついでに暇な奴らも何人か一緒に連れて行け!!・・これまでの戦いで隊員達は良く働いてくれる・・少しでも彼らに楽しみを与えないとな・・」

龍之介は、ついでに2人に同じ暇そうな隊員達も一緒に連れて行くよう命じた。

これまでの戦いで隊員達は良く働いてくれるので、龍之介は、褒美として、彼らに楽しみを与える事にしたのだ。

なのは「分かりました。」

フエイト「じゃ何人か連れて行きます。」

2人は、龍之介の命じるままに暇そうにしている隊員達に声を掛ける。

2人の誘いにGF隊員達は、素直に行くと言え、2人の元に集まる。

集まった隊員達の中には、江田島の三羽ガラスの美奈や信吾、実の3人や差し入れの出前を持った主計科長兼料理長の俊秋にミーくんを連れた軍医の吾郎が居た。

其処に

夏雄「なんでえい、なんでえい!・・・何を騒いでるんでえい!？」

炊飯所兼食堂室で丁半博打ちをしていた夏雄が現れた。

なのは「あつ機関長!？」

夏雄「騒がしいから見て見りや・・・何騒いでるんでえい!？」

夏雄は、なのは達が何騒いでいるのか問う。

なのは「私達今から晴風に向かうところなんです。」

夏雄「晴風?・・・ああ、あの小っこい艦か!・・・それで、その晴風で何が有るんでえい?」

なのは「実は、赤道祭が開かれるらしいんですよ・・・」

夏雄「赤道祭だつて!？」

赤道祭と聞いて、夏雄はそれに飛びつく。

フエイト「機関長も如何ですか?・・・お祭り好きでしょう。」

フエイトが夏雄を誘う。

それに対して、夏雄は

夏雄「行くに決まってるだろ!!・・・祭りと聞いたら、生粋江戸っ子の血が騒ぐんでえい!!」

と言つて、行く気満々だった。

実は、この篠原夏雄は、体格や性格は、あの晴風の機関長柳原麻命と瓜二つである。

出身も麻命と同じ千葉で、しかも小さい頃から実家の銭湯のボイラーを弄くつていた経緯から機関には兆詳しく、機関の整備の腕は、雅に麻命と同じぐらいである。

夏雄「祭りでえい!!祭りでえい!!」

夏雄が騒いでいると

歳郎「おい夏雄!!・・・さつきから五月蠅いぞ!!」

突然、後ろから五月蠅いと言われ、夏雄は、厳しい目で振り向く。

夏雄「なんでえい!トチローかあ!」

歳郎「たく五月蠅いから来て見れば、何子供みたいに騒いでるんだ夏雄!」

歳郎は、何を騒いでいるのか夏雄に問う。

夏雄「お前には、関係ねえだろう!!・・・さつきと自室に戻つて、マスでも数えてろ

!!
」

夏雄は、関係ないと言って、歳郎を追い払うが

歳郎「お前こそ早く家に帰って、ママのオツパイでも吸ってろ!!」
逆に歳郎に追い払われる。

ギイイイ……

2人は喧嘩寸前である。

なのは「ああ、2人とも喧嘩しないで下さい!!」

フェイト「機関長もトチローさんも落ち着いて下さい!!」

2人の喧嘩をなのはとフェイトが止める。

『うう……ふん!!』

なのはとフェイトに言われ2人は、喧嘩を止める。

なのは「……トチローさんも一緒に如何ですか?……私達今から晴風に行くところなんです。」

なのはは、歳郎を誘う。

歳郎「晴風?……ああ、あの小つけい艦か……何が有るんだ?」

なのは「赤道祭です。」

歳郎「赤道祭か……当然酒は、出るんだよな?」

歳郎は、赤道祭と聞いて、当然酒が出るのかと思つたが

なのは「酒つて、学生艦だから当然出ませんよ・・・」

当然学生の艦だから酒が出る訳がない。

歳郎「つまんねな・・・まあ軍医長も行くかなら俺も行くぜ!!」

酒が出ないと聞いて、嫌がつたが結局行く事にした。

ついでに酒を2本ぐらい持つて行く事にした。

画して、なのは達は、内火艇2隻で晴風へと向かう。

晴風、炊飯所兼食堂室

その頃、晴風の炊飯所兼食堂室では、麻侖が美甘と杵崎姉妹と共に赤道祭で何を出す

か話し合いをしていた。

麻侖「やつぱり屋台は欲しいよな・・・」

麻侖は、赤道祭に屋台を出そうと言う。

美甘「焼きそばとか、たこ焼きとか?」

それに対し、美甘は、焼きそばとか、たこ焼きとかの祭り定番になっているのを答える。

麻侖「定番も良いけど・・・スカっぱい感じも欲しいよな・・・」

だが麻侖は、定番も良いが、それよりもスカっぱい感じも欲しいと3人に要望を出す。

ほまれ「スカ?」

スカの文字にほまれが何かとくい付く。

あかね「横須賀の事じゃない?」

それに対して、あかねが横須賀の事じゃないか思った。

美甘「分かった、色々考えてみる。」

麻命の要望に美甘が少し困った笑みで色々と思案を考えると云った。

そんな時

媛萌「ねえねえ、主計科で要らない木箱とかな?」

後部甲板に居た媛萌が炊飯所兼食堂室にやって来て、美甘に要らない木箱とかな無い

か聞く。

美甘「有るよ……!」

美甘は、有ると答える。

麻命「お!出し物で使うのか!」

媛萌が何かを作ろうと思っていたので、麻命は、出し物に使うのかと思つたが

媛萌「ううん、ちよつと個人的に作りたい物があるんだ。」

如何やら出し物ではなく、個人的に作りたい物の材料らしい。

麻命「うむ・何だよ個人的って!」

麻命は、媛萌に個人的に作りたい物とは何かと問うが

媛萌「な・い・し・よ!」

媛萌は、口到人差し指を当てて自分が作りたい物を秘密にした。

麻命「むう・・・」

媛萌の行為に納得がいもなく、麻命は、不機嫌そうな様子で炊飯所兼食堂室を後にし、赤道祭の準備確認しようと甲板に向かう。

晴風、艦首

麻命「なんでえい、なんでえい!内緒つてのはきにいらねえ・・・」

さっきの媛萌の行為で不機嫌そうな様子で前甲板を歩いていると

「ちよ右かな・・・そこそこ・・・」

「びったり!びったり!」

「がんばれ・・・」

麻命「あつ?」

艦首から何やら楽しい声が聞こえて来て、見て見ると其処には、鵜、慧とスイカを前に木棒を持った楓が居た。

麻命「何やってんでえい?」

麻命は、何をやっているのか3人に問う。

鵜 「スイカ割り・・・」

慧 「万里小路さん凄いの！絶対外さないの！」

如何やら、スイカ割りをしている様だ。

しかも割る本人が楓だから絶対に外さない。

麻侖 「赤道祭は如何した？出し物何やるか決めたのか？」

だが麻侖は、スイカ割りと聞いて、逆に赤道祭の方は如何なっているのか問うが

鵜 「まだ・・・」

鵜は、まだだと答える。

それを聞いた途端、麻侖は、

麻侖 「だったらスイカ割りしてねえで・・・」

怒ろうとした時

楓 「参る!!・・・はああああ・・・!!」

楓が木棒を力いっぱい振り下ろし、見事にスイカは、真つ二つに割れた。

『わあああ・・・!!』

鵜 「真つ二つだ!!」

慧 「万里小路さんで色々、達人だね！」

2人は、真つ二つに割れたスイカを見て驚き、楓の達人差を評価した。

だが麻命は、啞然と見ていた。

慧「機関長も食べる？」

慧は、麻命にスイカを一緒に食べないか誘うが

麻命「いらねえ！いらねえ！んなもん！」

麻命は、スイカなんて要らないと言い、その場を後にした。

晴風、第三主砲塔付近

麻命「たつく・・・時間がねえつてのに・・・何のんびりしてんでえい・・・

さっきの3人を見て、遊んでいるばかりで祭りの準備をしていない事に愚痴っている

と

麻命「ぶるる・・・!?!」

横から水鉄砲遊びをしていた砲術員の流れ弾が麻命に直撃した。

光「あっ!?!御免機関長!」

光は、直ぐ麻命に謝罪したが

麻命「遊んでいる暇があつたら祭りの準備しろってんでえい!!」

麻命は、遊んでいる暇があつたら祭りの準備しろと3人を叱るが

光「え・・・」

光は、めんどくさいと嫌がり

美千留「全方位盛り上がってないんですけど……」

更に美千留から生徒全員が赤道祭に盛り上がっていないと告げた。

麻侖「も・盛り上がってない……!?!」

それを聞いた途端、麻侖は、ガーンとなる。

順子「水鉄砲大会の方が面白くない?」

しかも順子から赤道祭より水鉄砲大会の方が面白くないと言われ更にガーンが広がる。

更に決定的打撃を与えたのが言うまでもない。

晴風、後部甲板

麗緒「ふーふーふー……!」

日光浴をしながら麗緒は、雑誌を見ていたが

麗緒「ん!?!」

突然、隣に人影が現れ、麗緒は、隣の方を見る。

すると、其処には、機嫌が悪いかの様な麻侖が日光浴していた機関科の四人衆を見降ろしていた。

麗緒「うえっ!?! ……み、皆何やってるのよ……!!」

それを見た途端、麗緒は、驚愕しながら隣で日光浴をしている3人を起こす。

『ううん?』

突然起こされた3人は、直ぐ隣を見て

『げえっ!?うえ．．!!』

機嫌が悪いかの様な麻命が睨んでいた事に驚愕し

留奈「きゅ、休憩終わり．．!!」

空「準備!準備!」

桜良「え、えーと．．これ何処に付けるんだっけ．．?」

麗緒「祭りだー!祭りだーい!」

4人は、直ぐにサボるのを止め、洋美を手伝う。

更に麗緒よさこいの様な踊りをして、麻命の機嫌を直そうとしたが

麻命「ワザとらしい事しなくて良いんだよ．．」

『えっ!?!』

当然、麻命もそんな事はお見通しだった。

麻命「よく分かったよ．．皆、赤道祭なんか如何でも良いんだな!!」

機関科の四人衆のサボりを見て、遂に溜まっていた不満が爆発した。

洋美「麻命．．そ、そんな事ないってば!．．晴風の皆も楽しみにしてるから赤道

祭．．」

桜良「めっちゃ楽しみ……！」

留奈「わい！わーい！」

皆は、必死に麻侖の機嫌を直そうとしたが、それは、焼け石に水、火に油を注ぐ行為だった。

麻侖「むう……無理すんな……おめえらに慰められたくねえや……!!」

『あっ!?!』

洋美「マロン!!」

麻侖は完全にブチ切れ何処かに走り去って行つた。

晴風、艦橋

その頃、艦橋では、幸子が出し物で演劇をする事にしたので、その演劇のあらすじを考えていた

幸子「シロちゃん！この続きは如何したら良いと思いますか？」

幸子がましろに演劇でのあらすじを如何したら良いか聞く。

ましろ「如何でも良いと思う……」

それに対して、ましろは、嫌な顔しながら如何でも良いと言う。

幸子「ええー！投げやりだな……」

ましろの言葉に幸子は、投げやりだなと言り返す。

明乃「相変わらずだねココちゃん……」

薫「……」

明乃と薫は、その光景に苦笑いをしていると

鵜『艦長!!』

『あっ!?!』

鵜『校長から連絡です。』

突然、伝声管から真雪からの連絡が入ったと言う知らせを聞く。

明乃「鵜ちゃん読んで……」

明乃は、内容を聞く。

鵜『修理が終わり次第ブルーマーメイドが行うパーシアス作戦に協力せよ……後方

第二陣に着くように……だそうです。』

真雪からパーシアス作戦の概要が齎され、晴風は、後方第二陣、つまり龍之介達と同

じ配置だった。

明乃「分かった。」

薫「後方第二陣……つまり予備兵力って訳ね……学生艦だから当然だね!」

薫は、晴風が後方第二陣に配置されたのは、恐らく晴風が学生艦だからなのだと理解した。

真霜も流石に武蔵相手に学生を危険に晒す事は避けたいが、艦の数足りない為、避ける訳にはいかない。

だからあえて、学生艦を安全な後方第二陣に配置したのだ。

鈴「本格的にウイルス退治が始まるんだね！」

芽衣「ほおー後どんだけ覚醒させるんだ？」

芽衣があとどれくらいかの艦がウイルスに感染しているのかを尋ねる。

幸子「5艦ですね！・・・4艦は所在が判明していますが武蔵は不明です。」

幸子が現在、ウイルス感染している艦数を芽衣に教える。

明乃「はっ……」

武蔵と聞いて、明乃は、俯く。

ましろ「あつ……」

薫「ん……」

明乃の俯きに2人は、気にしてしまう。

そんな時

洋美「教官!!艦長!!」

突然、洋美が艦橋に飛び込んできた。

薫「黒木さん？」

明乃「クロちゃん何?」

突然、艦橋に飛び込んだきた洋美に何かと問う。

洋美「あつ! いえ・・・機関長が!」

薫「柳原さんが!」

明乃「マロンちゃんが如何かした!」

2人は、麻侖に何か遭ったのかと洋美に問うが

洋美「・・・拗ねました!!」

洋美は、拗ねたと答えた。

『えっ?』

洋美の言葉に啞然とする。

取り合えず、薫と明乃、ましろ、洋美の4人は、艦橋を後にし、後部甲板に向かう。

薫「拗ねたって・・・何でそんな事に...?」

後部甲板に向かいながら薫は、何故麻侖が拗ねたのか理由を聞く。

洋美「それが・・・」

それに対して、洋美は、拗ねた理由を説明する。

晴風、通路

その頃、晴風のとある通路では、媛萌が何かを作っていた。

すると其処に

光「何作つてんの？」

お手洗いから戻つた光が見つけ、何を作っているのか聞くと

媛萌「できてからのお楽しみお楽しみ・・・」

そう言つて媛萌は、木材に釘を打ち込んでいった。

晴風、後部甲板

一方、洋美から麻命が拗ねたと聞いて、薫と明乃、ましろは、拗ねた理由を聞きながら後部甲板にやつて来た。

ましろ「成程！・・・自分の思う様に盛り上がらなくて拗ねたのか・・・」

洋美「いつもは威勢がいいんですが、一旦ヘソを曲げるとテコでも動かなくて・・・」

明乃「そつか、クロちゃん、マロンちゃんと幼馴染だったね！・・・お祭り任せつばなしにしていた私も悪かつたよ・・・」

明乃は、赤道祭の準備全てを麻命と洋美に任せつばなしだった事に関し謝罪する。

薫「でも一番悪いのは、つまなくてサボっていた私達全員よ！」

それに対して、薫が一番悪いのは、自分とつまなくてサボっていた生徒全員に責任があると言つた。

薫が見たところ、さつきサボつて日光浴をしていた機関科四人衆も先程の麻命の様子

を見てか、赤道祭の準備を進めている。

その近くの甲板では、まゆみ、秀子、聡子の3人がトランプで遊んでいる。だが残念な事に当日には、間に合わない。

遊んでいる生徒を招集させるしかない。

そんな時

明乃「あっ!?!」

明乃は、何かに気づきお水平方向を見る。

薫「ん・・・あっ!?!」

何かに気づいた明乃に薫も水平方向を見ると晴風に向かって内火艇2隻が接近してきた。

なのは「薫先輩!!」

しかもなのはとフェイトが内火艇から手を振っていた。

やがて内火艇2隻が晴風に接舷したのはとフェイトと非番のGF隊員達が晴風へト上がった来た。

薫「皆如何したの?」

薫は、なのはとフェイト達が何故晴風にまた来たのか聞く。

なのは「准将の計らいで・・・赤道祭を見に来ました!」

なのはから龍之介からの計らいだと答えた。

薫「ああそうなんだ・・・でも残念！・・・赤道祭ができないかも知れないの・・・」
それに対して、薫は納得したが、なのは達に赤道祭が出来ないかも知れないと伝えた。

『ええ・・・!?!』

それを聞いたなのは達は、ショックを受ける。

ついでにもう1人

夏雄「な、何・・・!?!」

赤道祭が出来ないと聞いた夏雄は怒って、薫の前に出る。

夏雄「何で祭りができねえんでえい!!」

夏雄は、何故赤道祭が出来ないのか、薫を問い質す。

薫「し、篠原機関長!?!」

GF隊員達の中に夏雄が居た事に驚愕する。

そして

留奈「えっ機関長!?!」

麗緒「機関長が2人!?!」

突然現れた夏雄を見て、機関閥四人衆は驚愕する。

それもその筈、夏雄が麻命とそっくりだったからだ。

服装（上は、Tシャツで下は、長ズボン）は、違うが顔や体格は、雅に麻命に瓜二つだ。

洋美「あっ・・・!?!」

洋美も夏雄を見て、驚愕していた。

明乃「マロンちゃん!?!・・・じゃない!」

明乃も夏雄を見て、つい麻命と思っただが

夏雄「麻命って、誰でえい!!・・・私は、篠原夏雄だ!!」

それに対して、自分は、麻命じゃなく、夏雄だと言い張る。

明乃「あ・・・!」

ましろ「如何やら機関長じゃない様だ・・・」

ましろは、夏雄が麻命ではない事に理解する。

薫「じ、実は、篠原機関長・・・」

薫は、なのは達は何故赤道祭が出来ないのか説明する。

フェイト「そうだったんですか・・・晴風の機関長が拗ねたんですか?」

薫から説明を聞いて、なのは達は納得する。

夏雄「しっかしだかつたかそんな事で拗ねるなんて、その機関長は、すつとこどつこいな奴だな!」

拗ねた麻命を夏雄が呆れる。

その時

歳郎「そう言うお前も同じ様にするんじゃないのか？」

と後ろから両手に酒ビンを持った歳郎が現れ、夏雄に言う。

薫「大山機関助手!？」

歳郎も居た事に薫は、驚愕する。

歳郎「よう艦長殿!!・・・久しぶりだな・・・ん・・・ぶはあ・・・!!」

歳郎は、薫に久しぶりだなと言つて、持っていたお酒を飲む。

薫「は、はあ・・・」

お酒を飲む歳郎を見て、薫は、呆れてものも言えない、

麗緒「あれが機関助手!？」

留奈「クロちゃんみたいな人かと思つた・・・」

歳郎を見た機関科四人衆は、ガツカリした。

4人は、麻命のそっくりさんが居るならば、当然洋美のそっくりさんも居るだろうと

思ったが、残念な事に実際出たのが洋美に似た人じゃなく中年の爺さんだった事に4人

は、ガツカリしたのだ。

夏雄「するかーそんな事!!」

歳郎の言葉に夏雄は、反論する。

フェイト「まあまあ2人とも……先ずは、この状況を如何すべきか考えるのでは？」
側に居たフェイトが2人に、この状況をどう解決するか考えさせる。

薫「ん……そうだわ!？」

薫は、なのは達を見て、ある事を思い付く。

薫「大鳳乗員!!……皆、整列!!」

薫は、なのは達を整列させる。

薫に命令されGF隊員達は、なのはとフェイトを先頭に2列に整列する。

薫「皆遊びに来たところ悪いけど……今問題が起きて赤道祭の準備が進んでないの……」

そこで私達が赤道祭の準備を手伝う事にしました!!」

薫は、遊びに来たなのは達に赤道祭の準備を手伝う事にしたのだ。

それを聞いたなのはとフェイト達は、反論せず薫の話聞く。

薫「では、皆!……作業に取り掛かって下さい!!」

『はっ!』

薫の号令のもと、なのはとフェイト達は、作業に取り掛かる。

明乃「!？」

ましろ「す……凄い!!」

薫の艦長差に驚愕する。

薫「後は、機関長ね！」

赤道祭の準備は、なのはとフェイト達が来てくれた事で解決した。

後は、麻命の事だけである。

洋美「それですけど・・・一晩寝ればすっかり気分も変わるんですが如何やって、機嫌を直したのか・・・」

麻命の機嫌を如何やって直すか頭を抱える洋美。

そんな時

媛萌「あのさ!!・・・私が個人的に作った物で気分が盛り上がるんじゃないかと・・・」

媛萌がさつきから作っていた物で麻命の機嫌を直そうと提案する。

明乃「ヒメちゃんが作った物？」

明乃は、媛萌が何を作ったのか？

取り合えず見て見ると

明乃「これって・・・!？」

夏雄「おお・・・!？」

媛萌が作った物を見た瞬間、明乃と夏雄は、ビックリする。

果たしてそれは

晴風、機関室

一方、拗ねた麻侖は、機関室で椅子を並べて、その上で横になっていた。其処に

洋美「やっぱり此処に居た。」

洋美が機関室にやって来た。

麻侖「よく分かったな・・・」

麻侖は、洋美が自分が此処に居る事が良く分かったなと問う。

洋美「麻侖いつも拗ねると船の下に潜り込んでいたじゃない!」

麻侖「そうだったかな・・・」

如何やら麻侖が考えている事は、洋美には、お見通しだった。

洋美「ちよつと来て、麻侖が喜ぶ物があるから・・・」

麻侖「焼肉?」

洋美「食べ物じゃない!」

麻侖「パイナップル缶・・・?」

洋美「それも食べ物じゃない!」

麻侖「何だよ!?!」

洋美「来れば分かるから・・・」

麻命「むう……?」

洋美に促され麻命ふてくしていると

夏雄「晴風機関長にカツを入れて来て見れば……なぐにふてくしてんでえい!!」

夏雄が機関室にやって来た。

麻命「えっ!?!……お……お前は、誰でえい!?!」

夏雄を見て、麻命は、驚愕する。

麻命と夏雄、2人は、雅に瓜二つだった。

夏雄「あたしは、大鳳機関長篠原夏雄だ!!……お前が晴風機関長だな!」

『ん……』

麻命と夏雄は、お互いに睨んで見る。

麻命「……キヤラ被ってねえか……?」

夏雄「それは、あたしも同じだ!!」

見た結果、お互いにキヤラ被ってねえかと思う

夏雄「そんな事より……お前!!……こんな所で油売ってねえで、一緒に祭りで盛

り上がろうじゃねえか!!」

夏雄は、拗ねている麻命に赤道祭でお互い盛り上がろうじゃないかと誘うが

麻命「ふん……どうせ盛り上がってねえよ……」

麻命は、まださっきの事を気にしている様で、夏雄の誘いに乗らなかつた。

夏雄「くっ?!」

それを聞いた途端、夏雄は切れ、麻命の制服の襟首を掴む。

夏雄「良いかよく聞け!!・・・全員が盛り上がってねえなんて、関係ねえ!!・・・よは、どう盛り上がらせれば良いだけの事じゃねえのか!?!」

夏雄は、赤道祭で全員が盛り上がってないのは関係なく、自分から盛り上がらせれば良いだけの事じゃないのかと麻命を叱る。

麻命「それは・・・」

それに対して、麻命は、夏雄に反論できない。

夏雄「それをお前に見せてやる!!・・・こい!!」

麻命「あっ?!」

夏雄は、麻命の手を掴み、甲板へと強制的に連れて行く。

洋美「ま、麻命!」

夏雄に強制的に連れていかれる麻命を見て、驚愕しながら2人の後を追う。

晴風、甲板

麻命「放せ・・・!!何処へ連れて行くんでえい!?!」

夏雄「良いから来い!!」

夏雄に連れられ麻命は、甲板へとやって来た。

夏雄「あれを見ろ!!」

麻命「!？」

そこで麻命が見た物は？

『ワツシヨイ!!ワツシヨイ!!』

ましろ、マチコ、百々、美海の4人が神輿を担いでいた。

更に神輿の前で楓が笛を吹き、理都子が太鼓を叩き、横でなのはとフェイトがワツシヨイ!!ワツシヨイ!!と声を上げていた。

麻命「何でえい、何でえい！如何したんでえい？」

媛萌「副長、もつと威勢よく！」

ましろ「う・・・」

麻命「神輿なんて何処にあつたんでえい？」

麻命は、何故神輿が有るのか、媛萌に問う。

媛萌「私が作つたんだ。」

麻命「個人的に作っていた物つてのはこれだったのか……」

神輿は、媛萌が個人的に作つた物だった。

如何やら媛萌が個人的に作っていたのは、神輿だった様だ。

媛萌「私両親が神田の生まれで、祭りつて聞くとつい血が騒いじやうんだ。」

麻侖「生粋の江戸っ子!」

麻侖がキラキラした尊敬の目で媛萌を見つめた。

明乃「はっはっ……!! いやーめでたい!めでたい!」

すると、魚雷発射管の上で鼻眼鏡を付けた明乃が踊りを披露していた。

麻侖「かーんちよう!何やってんでい!?!」

普段の明乃からは信じられない光景を見て麻侖は、驚いていた。

洋美「浮かれてんのよ、お祭りだから……」

夏雄「如何でえい!……まだこれでも言うか?」

麻侖「……」

光「何か面白そーだね!」

順子「水鉄砲大会より良いかも!」

この光景を見た晴風の生徒達は、赤道祭に興味と関心を持ち始めた。

薫「ありがとうね機関長……」

薫は、密かに後ろから夏雄にお礼を言う。

夏雄「一件落着でえい……」

夏雄は、一件落着でえいとかっこ付ける。

歳郎「たく、かつこ付けやがって・・・」

夏雄のかつこ付けるのを見て、歳郎は、第二主砲塔の側で吾郎と酒を飲む。

ミーくん「ニヤーン」

五十六「ぬう」

多聞丸「ニヤン」

隣では、3匹の猫が顔を合わせ合う。

明乃「折角のお祭りだから、目一杯楽しんでいこう!!」

麻命「艦長：：よーし！盛り上がっていくか・・・!!」

『オオオ・・・!!』

こうして意外な展開を見せつつも麻命の機嫌は治り生徒達も赤道祭に興味を示しだして、赤道祭の準備もなのはとフェイト達のお陰で何とか間に合い無事に赤道祭を開く事が出来た。

赤道祭の開始は板で作った赤い扉の前に美海が海の神ポセイドンを意識したコスプレをして隣に鍵を持った桜良となのは、フェイトの3人が女神を意識したコスプレをし、赤道を渡るための鍵を艦長の明乃に渡す寸劇から始まった。

美海「これが、赤道を渡る鍵であるぞ・・・！」

美海が明乃に鍵を渡す。

美海「うむ!」

明乃はありがたく受けとる。

『拍手〜!!』

『うああ・・・!!』

麻侖と夏雄が言うのと生徒やGF隊員達が拍手する。

麻侖「じゃ、お次は航海の無事を祈るんでえい!」

晴風、通路

次は艦内神社があるとところで巫女姿になった鈴と鶴が居り、2人の手伝いをする為に楓と慧も同じく巫女の衣装を着て鈴と鶴の少し後ろに控えていた。

そして鈴と鶴は明乃に航海の安全を祈願するお祓いをしていた。

楓「おふたりのご実家は、神社だったんですね・・・」

鶴「そうなの。お諏訪さま!」

ましろ「あの・・・」

『ん?』

明乃のお祓いが終わった時にましろが2人に声を掛ける。

鶴「副長?」

ましろ「何しろ運が悪いもので、いっぱい祓って貰えるだろうか・・・?」

鵜「ああ……」

鈴「は、はい……」

ましろは、誰よりも運が悪い自分をいっぱい祓ってくれと2人に頼む。

その後、ましろは2人によっていっぱい祓って貰った。

ましろのお祓いが終わった後

美奈「うああ!!巫女さんだわ!!」

美奈が2人の巫女姿を見て、感激する。

鈴「あの……」

感激する美奈に鈴が声を掛ける。

美奈「あつ御免なさい!……巫女姿について見とれてしまって……私は大鳳の航海

長の四葉美奈!……航海長同士、仲良くしましょ!!」

と言つて、美奈は、鈴と仲良くする。

鈴「は、はい!!」

鈴は、怯える。

美奈「そんな怯えなくて良いわよ……」

美奈は、鈴の手を握る。

その時

信吾「あっ!?ムカデ!!」

『きゃあ．．．!!』

信吾がつい冗談でムカデと言った途端、2人は、抱き付きながら怯える。

実「何脅えているんだよ美奈!」

美奈「だってムカデが．．．」

実「ムカデなんていないよ．．．ほら．．．」

美奈「．．．あっ．．．ほんとだ．．．もう信ちゃん酷いよ．．．」

相変わらずの江田島の三羽ガラスだった。

晴風、甲板

『ワツシヨイ!!ワツシヨイ!!』

一方、甲板では麻侖と夏雄を先頭に神輿を担いで晴風を一周していた。

『ん!?!』

そんな時、見張り台の柱でマチコが綱一本で何かをしようとしていた。

マチコ「はあ．．．!!」

すると見事なバランス芸を披露した。

『うああ．．．!!』

G F 隊員「おお．．．中々やるじゃん!」

百々「マツチ凄ーい！」

美海「先輩マジかつこいい!!」

マチコのバランス芸を見て、晴風の生徒達やGF隊員達は、驚愕する。

麻侖「ええい!!こつちも負けてらんねえぜ!!行くぞ夏雄！」

夏雄「おーう麻侖!!」

『それわっしょい!わっしょい!』

マチコのバランス芸に負けていられず2人は、大きな団扇を思いつき振りかざす。

『きやあ……!』

その影響で強風が舞い、神輿を担いでいた生徒達は片手でスカートを押さえた。

しばらくして、時刻は夕暮れ時、甲板では各々が出した屋台から良い匂いが立ち始める。

多聞丸「……」

歳郎「うん……ぷはあ……!!」

麗緒「さあー、らっしやい!らっしやい!美味しいたこ焼きだよ……!」

美甘と麗緒がたこ焼き屋の屋台を開き、横で多聞丸とミーくんがたこ焼きを頬張し、隣で歳郎と吾郎と一緒に酒を飲んでいた。

聡子「お祭りの匂いぞな……!!」

まゆみ「何食べよ・・・?」

GF隊員「たこ焼きだわ!!」

GF隊員「金魚すくいもあるぞ!!」

晴風の生徒達やGF隊員達は、各々が出した屋台を回る。

そんな時、桜良がフランクフルトの屋台を開いたのだが

桜良「ん?・・・あー!?ちよつと五十六!!」

其処に五十六がやってきてフランクフルトを一本口に啜えてそのまま走り去って行った。

アドミラル・グラフ・シユペーで食べたソーセージが余程美味しかったのかソーセージが大好きになった五十六だった。

慧「えっ?!これ梅干し?」

あかね「横須賀名物チェリーチーズケーキなの・・・レモン絞って食べても美味しいよ・・・」

杵~~田~~姉妹の屋台では、梅干しを利用した試作のチェリーチーズケーキが振る舞われていた。

秀子「美味しい!」

GF隊員「美味しいなこれ!」

あかねが慧にケーキの説明をし、その横で秀子とGF隊員が美味しそうに食べる。

杵_×姉妹の屋台の隣では、俊秋が珍しそうに焼きそばの屋台を出していた。

GF隊員「料理長が焼きそばなんて、珍しいですね!？」

俊秋「何時も中華料理だとあきるだろお前ら・・・」

俊秋は、この前の愛奈さんに負けて以来、中華料理だけ作るのを止め、他に美味しい料理を試作した。

実は、差し入れとして持ってきた料理も俊秋が試作したもので、晴風に来た時、杵崎姉妹に試食させた。

試食した結果、杵崎姉妹からあまり美味しくないと言われ、更なるメニューを共同試作しようと杵崎姉妹と同盟を結んだ。

一方、砲術員の美千留と順子が射的の屋台を開いたのだが、

芽衣「よっしゃー!!」

志摩「う・・・」

芽衣と志摩がその景品を根こそぎ持って行ってしまった。

順子「ガツンと当てすぎ!!」

美千留「砲雷科は、禁止だね」

その為、砲雷科は出禁となった。

楓、理都子、鶴の3人が笛と太鼓で演奏をして、マチコ、薫が踊りを披露する。それを見た晴風の生徒やGF隊員達が活気に沸く。

そして周りの屋台も盛り上がって気分が最高潮になった時、

麻侖「皆の衆!七時からは教室で出し物をやるぜい!」

媛萌「盛りやがっていくからな!」

夏雄「気合いを見せろ!!」

『オオオオ・・・!!』

晴風、教室

時刻は、午後7時になり晴風の生徒達とGF隊員達は、教室に集まる。

出し物をする為、教室の中を広くしようと机や棚などは外されて、後ろにどかされた状態だった。

空「本日の司会を務めさせていただきます機関課の広田空と……」

麗緒「若狭麗緒です!!」

麗緒と空が出し物の司会を務める事になった。

空「まずは晴風の砲雷科と大鳳の兵器要員さんによるモノマネです。」

最初は、晴風と大鳳の兵器要員達によるモノマネであった。

光「それでは小笠原やります!・・・ズゴオオーン!」

光がある砲音の様なモノマネを披露した。

鈴「何のものまね？」

鈴も一体何のモノマネなのか全く理解出来ず、

幸子「あーコアラの鳴き声じゃないですかね・・・」

幸子は全然興味が湧いていない様子で雑なコメントをする。

光「今のは、イージス艦5インチ砲のマネでした。」

光がイージス艦5インチ砲のモノマネをしたのを説明すると

芽衣「おー、似ている！」

志摩「うま!!」

芽衣と志摩には理解出来た様子。

『えっ!?!』

鈴、幸子は、光のモノマネを理解した2人を見て驚く。

美千留「武田やります・・・ドオン！」

次は、美千留が光と同じ様に砲音の様なモノマネを披露した。

芽衣「長10cm砲!!長10cm砲!!」

志摩「うい！」

美千留のモノマネも芽衣と志摩には直ぐに分かった。

順子「日置やります! ドオーン!!」

順子のモノマネも砲音の様なモノマネだった。

聡子「今のは52口径11インチ砲ぞな!!」

順子のモノマネに今度は、聡子が分かった。

GF隊員「では今度は、我々大鳳兵器要員によるモノマネです。」

晴風の砲雷科が終わり、続けて大鳳兵器要員達によるモノマネが始まった。

GF隊員「行きます! . . . ブブブブ . . .」

芽衣「何?」

志摩「うい?」

兵器要員達によるモノマネに今まで理解していた芽衣と志摩が何かと思った。

GF隊員「M61 20mmバルカン(機関砲)砲だ!!」

だが、他のGF隊員達には、直ぐに20mm機関砲の音だと分かった。

芽衣「バルカン砲?」

志摩「うい?」

芽衣と志摩には、今の音が20mm機関砲だとは、理解できなかった。

GF隊員「続けて行きます . . . バシューン!!」

続けて今度は、聞きなれたモノマネを披露した。

芽衣「魚雷!!魚雷!!」

芽衣も今度のモノマネが魚雷の発射音だと分かったが

GF隊員「残念!・・・今のはAIM-7 スパローミサイルの発射音でした!!」

残念ながら魚雷ではなく、中射程空対空ミサイルのAIM-7 スパローミサイルの発射音だった。

芽衣「何それ!?魚雷じゃないの?」

魚雷の発射音ではなく、空対空ミサイルだった事に芽衣は驚愕する。

薫(全く・・・この子達にそんなのが分かる訳無いでしょう。)

隣で聞いていた薫は、兵器要員達によるモノマネに呆れる。

美海「ハハハ・・・!!なくにそれ全然分かんねえぞ!!・・・へい!」

後ろの方で美海が酔った感じで何かを言う。

媛萌「御免御免、美海マツチ酔いで・・・」

媛萌が言うには、マチコの魅力に見惚れて酔ってしまった様だ。

晴風と大鳳の兵器要員達のモノマネは、これで終了したが、マニアック過ぎてちよつと滑った感があつた。

麗緒「そ、それでは次に参りましょう。」

空「航海科です!」

次は晴風と大鳳の航海科の番となった。

秀子「航海科! 航海ラップをやります!」

秀子、聡子、まゆみ、鶯、慧、美奈、実、信吾の8人がリズムに乗ってラップを歌い始めた。

『私、航海、後悔、公開中! 貴方の後悔何ですか!』

まず歌っている5人がまゆみを指さす。

まゆみ「私の後悔知ってるかい? ついついしちやった日焼けだよ!」

まゆみが後悔した事を暴露する。

『そりやするね! 後悔するね! しちやうよね!』

航海科の 航海ラップを見て、晴風の生徒達とGF隊員達は、盛り上がる。

『私、航海! 後悔! 公開中! 貴方の後悔何ですか!』

美甘「えっ! え... 私!」

次は、美甘が指名された。

美甘「えーと、えーと... 見たいドラマの録画をね... 忘れてきちやったことかしら...」

『貴方の後悔何ですか!』

続いてあかねが指名され

あかね「えつと・・・航海中に425g体重が増えた事!! ああ、言っちゃった・・・」
／／／／

『おつと後悔2倍だね!』

幸子「流石主計科、細かいですね!」

あかねの細かい事に幸子が褒めたたえる。

『貴方の後悔何ですか!?!』

次は、ほまれを指名する。

ほまれ「えやだあ・・・その・・・実習に来る前幼馴染に告られたんだけど返事せずに逃げちゃった事・・・」

『ええ・・・!!?!』

ほまれの後悔の告白は衝撃的だった。

美甘「聞いてない! 聞いてない!」

あかね「誰?! 誰?!」

美甘とあかねがほまれに、誰に告白されたのかと詰め寄る。

なのは「相手は、イケメン!!」

フェイト「ちよつとなのは!」

恋に関して興味あるのか他の生徒やGF隊員達もほまれに如何いった状況だったのかを尋ねる。

美千留「ちよつと今しなよ!」

麻侖「そうでえい!そうでえい!」

『してみな、してみな、やってみな!』

ほまれは、言われた通り携帯で告白された幼馴染みに告白の返事をメールで送る。

ほまれ「・・・と言う事でメールをしたら返事が来ました。」

暫くして、返事のメールが来た。

『返事は?返事は?何なのよ!』

ほまれ「御免:他に好きな子がきたって:」

返事は、NOで既に他に好きな人が出来ていた。

彼女の目には薄っすら涙が見える。

『ええ.....!!』

ほまれの返答にまたもや衝撃が走る。

まゆみ「うわあ:..ご、御免!」

鶯「私達が後悔しているよ.....」

『私達、航海、後悔、公開中.....』

歌いながらほまれに謝る航海科だった。

麗緒「えく．．．次は、大鳳乗員によるライブです！」

次は、なのはとフェイトによるライブ演奏。

なのは「行くよフェイトちゃん！」

フェイト「うん、なのは！」

なのはとフェイトが舞台上がる。

なのは「ちよつと借りるね！」

麗緒「えっ!？」

司会の麗緒と空からマイクを拝借し

なのは「皆．．．!! 此処からは．．．!!」

フェイト「私達2人がお相手します!!」

2人は、晴風の生徒やGF隊員達の前で踊りながら歌を披露した。

『おお．．．．．!!』

2人のライブを見て、生徒や隊員達は、盛り上がる。

GF隊員「なのは隊長最高!!」

GF隊員「フェイト隊長素敵です!!」

GF隊員達の中から2人のファンが最高や素敵だと大声を上げる。

やがて最後に2人がポーズをとると

『うおお………!!』

晴風の生徒やGF隊員達は、大声を上げながら拍手する。

なのはとフェイトによるライブ演奏は、終了した。

麗緒「次は砲術長・水雷長による漫才です。」

空「どうぞ!」

舞台袖から芽衣と志摩が黒いドレスに頭に奇抜な被りものと胸に何かしらの詰め物をして舞台の上に出てきた。

薫（言われないと誰だかわからない格好ね）

薫は2人の衣装の感想を心の中で述べる。

芽衣「初めましてメイタマでーすっ!」

志摩「す……」

美海「待つてましたメイタマでえい……!!」

媛萌「美海ってば!」

百々「酔いぎましに水でもぶっかけるすかね!」

2人のかっこに美海は、相変わらず酔っていたので、百々が酔いぎましに水でもぶっかけようと思った。

とは言え、2人の漫才が始まった。

『51音マンボウ！．．．はあ！．．．ちやちやちやか、あかさたな、はまらわや．．．う！』

芽衣と志摩は、自分達で考えたのか、51音マンボウを歌う。

芽衣「ビックリのア行〜」

先ずビックリの漫才から

志摩「あつ！こんな所にケーキが食べちやお。ムシャムシャ．．．ごつくん」

芽衣「それ腐ってるよ！」

志摩「え！」

芽衣「お腹壊すよ！」

志摩「う！」

芽衣「トイレ一杯だったよ！」

志摩「え！」

芽衣「間に合わないかもね！」

志摩「お．．．」

『ハハハ．．．．．!!』

光「バズーンと来たね．．．!!」

美千留「私達の砲術長が人前であんなに・・・!!」

順子「バキユンと感動した・・・!!」

2人の漫才に生徒や隊員達は爆笑し、特に砲術員の光、美千留、順子の3人には、かなり受けた様だ。

芽衣「あかさたな、はまらわや・・・」

志摩「う!」

芽衣「ヒステリック家業・・・!」

続いてヒステリックな家業の漫才。

志摩「貴方お帰りな・・・」

芽衣「ただいま」

志摩「か・・・!?!肩に女の髪の毛が・・・!?!」

芽衣「でじやれ付いたんだよ・・・」

志摩「キイイ・・・!!女の口紅が・・・!?!」

芽衣「でじやれ付いたんだよ・・・」

志摩「くう・・・!!パンツが裏がつえてる・・・!?!」

芽衣「でじやれ裏返ったんだよ・・・」

志摩「もう結構!」

『ハハハ……!!』

更に2人の漫才を見て、晴風の生徒やGF隊員達は、爆笑から大爆笑に盛り上がる。薫と明乃は、大爆笑する晴風の生徒やGF隊員達を見て、皆が赤道祭を楽しんでいる事に安心した顔をする。

そんな時

幸子「艦長!？」

明乃「あっ!？」

突然、幸子に呼ばれ向くと

幸子「いよいよ次、自分達の番ですね!!」

明乃「あっ!?!……ん!？」

如何やら、次は、明乃達艦橋組の番の様だ。

麗緒「それでは、次は艦橋メンバーによる劇!!」

空「仁義ある晴風です!」

艦橋組の出し物は、幸子の自信作、仁義映画を元にした劇だった。

薫（やっぱり仁義だ!!）

薫は、幸子が考えた出し物が仁義だと分かっていた。

とは言え、舞台は一気に暗転し舞台にスポットライトが照らされると其処には

鈴「くつくつくつ、これで晴風もワシらのシマだ!」

羽織を着た組の頭の役をした鈴がその頭になりながらセリフを言う。

明乃「うまくいきましたね親分!」

鈴の隣で膝を付きながら鈴の部下役をしてる明乃が居た。

其処に

幸子「待てや!」

ましろ「待てや・・・」

今度は、同じく羽織を着た組の頭の役をした幸子と幸子の部下役をしたましろが姿を見せる。

鈴「おお・・・!!何だ・・・晴風のイモか?」

薫（知床さんって、結構この役にあつてるみたい!?）

薫は、鈴がこういった劇に関して恥ずかしいと感じるかと思つたが意外とノリが良く、感心する。

幸子「晴風乗員はイモかもしれんがのう・・・相手の風下に立つた事は一度もないんじゃないあ!」

幸子は、劇画見たいな顔をして、一度もないんじゃないかと叫ぶ。

ましろ「ないんじゃないあ!」

ましろは、緊張しながら叫ぶ。

鈴「ほおくるならこいや・・・！」

明乃「こいや・・・！」

鈴「根性注入しちやる！」

鈴が腰に差していた小道具の刀で幸子に斬りかかろうとした。

ましろ「頭!!」

バサー!!

ましろ「わぁ!!」

幸子を庇ってましろが斬られる。

幸子「しろの!?!しっかりせんかい！」

ましろ「頭：頼むけん：仇討ってくっせえ：」

ましろは幸子の腕の中で息を引き取る。

こうして、やはり仁義のない感じの劇になり、この劇は幕を閉じた。

麗緒「それでは、最後に教官による新体操演技です！」

空「どうぞ！」

最後の出し物として、薫による新体操の演技が披露された。

舞台の上にレオタード（水色の上衣と白のスカート付き）姿で手には、青色いりボン

を付けたスティックと2本の青色のクラブ、青色のボールを持った薫が現れた。

ましろ「教官……」

明乃「はぁ……!」

化粧しているせいか、薫の姿にましろや明乃は、見とれてしまう。

そして、クラブとボールを下に置き、リボンだけを持って皆の前で一礼をし、演技が始まった。

最初の演技は、リボン演技。

薫は、スティックに付けたリボンを巧みに操りながら、演技を披露する。

『あぁ……』

薫の演技は、雅に神技で踊っているのにリボンは、怯まず動かしている。

更に片足を手で押さえ、もう一つの片足で立ったままリボンをグルグル回す。

晴風の生徒やGF隊員達は、薫の演技の美しさに見とれてしまう。

リボン演技が終了し、続いてクラブ演技。

リボンからクラブに換える。

左右のクラブを振りながら、演技をする。

そして、左右のクラブを上投げて、クラブが降りて来るまでに演技を披露し、グルグル回りながら降りてきたクラブを見事にキャッチする。

芽衣「凄い！凄い！」

志摩「うい！」

グルグル回りながら降りてきたクラブを見事にキャッチした事に2人は驚く。

最後は、ボール演技

ボールを足で上に投げ、一回転した後手でキャッチ。

更にボールを片手で持ったまま片足を上げて回る。

その後、ボールを手や足で投げ、踊りを披露した。

全ての演技が終わり、晴風の生徒やGF隊員達は拍手する。

そんな中

麻侖「クロちゃん！」

洋美「何？」

麻侖「さつきささ……クロちゃんが探しに来てくれて嬉しかったよ！」

自分が拗ねた時に洋美が探しに来た事を麻侖は、嬉しかった。

洋美「ん……」

麻侖「晴風に乗ってから……ずっとクロちゃんは、宗谷さん、宗谷さんだったから……」

洋美「麻侖！」

麻侖「だからさ、今のクロちゃんの気持ちよく分かる。」

洋美「あっ……」

麻侖「其処でだ!……クロちゃんかスカツとする様な事考えたでえい!!」

麻侖は、洋美の不満を解消する様な事を思い付く。

洋美「えっ?」

果たして、麻侖が思いついた事とは

晴風、後部甲板

麻侖「最後は、相撲大会で決めるんでえい!」

麻侖が思いついた事とは、晴風生徒達による相撲大会をする事だった。

甲板には、マットで作られた土俵が設置され

麻侖「東くまりこうまるく」

右に冬用体操服とジャツジを着てまわしを付けた楓が立ち。

麻侖「西……くろのふじ……」

左には、夏用体操服を着た洋美が立つ。

理都子「これは、まりここの勝ちだよね……」

留奈「いやいや……」

殆んどは、楓が勝つと思つた。

麻侖「はつきよーい!!……のこつた!!」

麻侖の号令のもと2人は、お互いにな綱を取り合ったが、洋美が咄嗟に楓のまわしを掴み投げ飛ばした。

麻侖「くろのふじの勝ち・・・!!」

勝負の結果、洋美が勝った。

果代子「おおさかてん!? 凄い技使うな・・・」

洋美が披露した技に驚愕する。

理都子「詳しいねかよちゃん!」

果代子「おじいちゃんが相撲好きで」

留奈「クロちゃん地元の女相撲大会で優勝してんだって・・・」

留奈が言うには、洋美は、相撲では相当強いみたいだ。

GF隊員「凄っげ!! あんな譲ちゃんがあんな技を使うとは、驚きだぜ!!」

GF隊員「雅に見ただけでは、侮れませんね。」

GF隊員達も洋美の凄さに驚愕していた。

その後、洋美は連勝し続け、遂に決勝までたどり着く。

空「さあ〜いよいよ決勝戦です!・・・類い真似た技のオンパレードで順調に勝ち抜いた機関科黒木洋美とラッキーラッキーで決勝戦に進んだ艦長! 岬明乃!」

決勝の相手は、ラッキー続きで勝ち進んだ明乃だった。

GF隊員「あの艦長・・・小さい割には、以外と運が良いんだな・・・」

GF隊員達の中には、明乃の幸運に関心を持っていた。

麻侖（ふん・・・艦長の相手は、弱そうな相手が来るよう組んだんでいい!）

如何やら、洋美と明乃を戦わせる為に麻侖が最初から図った事だった様だ。

麻侖「さくあくいくぜ!!」

とは言え相手は、構える。

麻侖「はつきよ・・・い!!・・・のこった!!」

麻侖の号令のもと勝負は、一瞬で決まった。

理都子が言う10年に1度の大技「外無双」で明乃は、投げ飛ばされ土俵に叩き付けられた。

麻侖「優勝!くろのふじ・・・!!」

10年に1度の大技で洋美が優勝した。

投げ飛ばされた明乃は、土俵の上で目を回していたが

明乃「ん!?!」

側に洋美が近づいてきて明乃に手を差し伸べる。

明乃「はっ!?!・・・ん」

差し伸べた洋美の手を明乃は、喜びながら握り起き上がる。

明乃「ありがとう！」

洋美「ん！」

2人は、お互いに感謝し握手する。

薫（良かった！・・・これで黒木さんは、岬ちゃんの事を認めた見たいね！）
薫は、2人を見て、ようやくお互いに認めた様だと喜ぶ。

麻侖「ふむ・・・よし！　じゃあこれで終了!!」

麻侖が赤道祭の終わりを告げると

生徒達の中から美波が手を挙げた。

麻侖「ん?・・・　如何しんでえい美波さん？」

麻侖は、手を挙げた美波に問う。

美波「私だけまだ、何もやってない・・・」

美波は、まだ自分は何もしていないと言う。

確かに美波は、赤道祭でまだ何もしていない。

『えっ!?!』

美波がその事を言うと皆が少し引いた。

空「えーと・・・美波さん何かする気？」

麗緒「ちゅ、注射とか・・・？」

美波は物静かな人ではあるが、マッドサイエンティストな部分がある為、皆は警戒する。

美波「最後に皆で歌いたい・・・我は海の子」

美波の出し物は、皆と一緒に我は海の子を歌いたいと言う事だった。

麻侖「何でえい随分可愛い歌を歌うじゃねえか！」

空「民謡とか演歌じゃないんだ。」

麗緒「もしかして、自分の子供に聞かせてた？」

美波の出し物に皆は、年上なのに随分子供みたいな歌を歌うんだと馬鹿にするが

美波「私はまだ12歳だ。」

『え・・・?えええ・・・!?!』

空「12歳・・・?」

麗緒「マジ!?!」

芽衣「嘘だ!」

志摩「嘘・・・!」

ましろ「てつきり年上かと・・・」

生徒達は、美波の年齢を聞いて驚愕する。

それもその筈、美波は、大学生を出ていたので皆は、てつきり年上かと思っていたの

だ。

薫「あれ?・・・皆、分からなかったの?」

薫は、皆が美波を見て、てつきり年下だと分かっていたかに見えた。

ましろ「教官は、知ってたんですか?」

薫「うん、だつて私・・・生徒の資料を持っているから・・・ほら!」

薫は、資料を記載したタブレットを皆に見せる。

麗緒「ホントだ!?!」

空「でも如何して?」

美波「飛び級して大学に入ったからな・・・兎に角歌うぞ!・・・みなさんのものご唱

和ください!!」

そう言うのと美波が我は海の子を歌い出す。

それに続いて生徒達も歌います。

フェイト「私達も・・・」

なのは「そうだね!」

G F 隊員達も薫や晴風の生徒達を見て、一緒に歌い出す。

暫く我は海の子を歌い続けた後、赤道祭は終了した。

画して、赤道祭は幕を閉じ、いよいよ最終決戦の時が近づいていた。

そして、奴も

太平洋のとある海域

ゴオオオオ・・・！！

例の巨大生物も何かに引き寄せられるかの如く何処かへと向かっている。
果たして、何所へ向かっているのか？

第29章 大艦巨砲でピンチ！

晴風、後部甲板

赤道祭は終わり、甲板には、なのは達は、既に居らず、補給を受けていた空母大鳳も既に出航した後だった。

晴風の生徒達は、赤道祭の飾りなどの後片付けをしていた。

そんな中、明乃は、何かを思い詰めているのかの様に海の方をジツと見つめていた。

ましろ「艦長……」

そんな明乃にましろは、声を掛けた。

明乃「あっ!?!……シロちゃん……」

ましろ「如何かしたんですか?」

ましろは、明乃が何を思い詰めているのか問う。

明乃「うん、赤道祭……楽しかったなうって……」

それに対して、明乃は、赤道祭が楽しかったと誤魔化すが

ましろ「それだけじゃ……ないですよね?」

ましろには、お見通しの様だ。

明乃「……艦の修理が終わったら、パーシアス作戦に参加する事になる……」

明乃は、ましろに自分が思い詰めている事を言う。

ましろ「それは、あくまで協力ですよね?」

明乃「でも……もしかしたらまた……」

明乃の脳裏に前回のアドミラル・グラフ・シユペーでの戦闘の時に被弾した晴風の姿が過る。

明乃「私……私ね、やっと晴風の皆と家族になれたような気がしたの……したのに……」

と言つて、明乃は不安そうに怯える。

今までの戦闘では、晴風の被害は少なかったが、アドミラル・グラフ・シユペーとの戦闘で晴風は、多大なる被害を受けたが死傷者は、出なかった。

だが、次の武蔵との戦闘は、それだけでは済まないだろう。

おそらく死傷者も出るかも知れない。

明乃は、それを恐れていたのだ。

ましろ「……」

不安そうに怯える明乃にましろは、何も言えず、唯黙つて見ているしかなかった。

薫「……」

そんな2人を薫が砲塔の影で見ている。

その後、補給と修理を終えた晴風は、パースィアス作戦参加の為、第二陣の合流地点へと向かう。

5月4日

6:30

紀伊半島沖

一方、富士山頂にある遠水平線レーダーがある大型の不明艦を捕捉した。

それは、紛れもなく行方不明になっていた武蔵だった。

武蔵の発見の報は、直ちに横須賀ブルーマーメイド庁舎の作戦本部へと通達された。

5月5日

1:00

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

フィリピン方面に居る筈の武蔵が突如、伊豆半島沖に出現したと言う報告を受け、本
部内は、慌ただしい状況になっていた。

真霜「はい、此方作戦本部」

福内『福内です・・・其方の状況で変わりはありますか?』

福内は、作戦本部から現在の状況を問う。

真霜「富士山頂の遠水平線レーダーが、武蔵を補足したわ!」

真霜は、武蔵発見の報告を知らせる。

福内『ファイリピンに向かっていた筈では?』

真霜「主力は間に合わない・・・貴方の艦隊で武蔵を止められる?」

真霜は、パソコンのモニターで部隊の配置を確認し、福内に武蔵を止めるよう指示する。

福内『最善を尽くします・・・それでは・・・』

福内は、最善を尽くすと言って、通信を切る。

真霜は、受話器を置き、改めてパソコンのモニターで部隊の配置を確認する。

主力部隊の第一陣は、既にファイリピン方面に展開していた。

だが、武蔵が日本近海の伊豆半島沖に現れたので、主力部隊は間に合わない。

現在残っている戦力で武蔵の元に向かえるのは、九州沖に配備した平賀が指揮する部隊のみであった。

後残っているのは、艦隊との合流を止め、沖縄南方を北上している龍之介の空母大鳳と平賀部隊に全速で向かっている次郎の白鳳、そして、小笠原沖を北上する晴風。

平賀部隊のみで武蔵を止められるのか、真霜は、不安を隠せず受話器を取る。

5月5日

6 : 1 0

小笠原沖

晴風、教室

一方、小笠原沖を北上中の晴風では、武蔵の状況と今後如何するかを説明する為、生徒達は、教室に集まっていた。

教室の黒板には、武蔵の現在地と平賀部隊、晴風の位置が記載した地図が貼られていた。

幸子「現在、武蔵は、伊豆半島の南西10マイルを進路40度、速力18ノットで航行中と推測されます・・・本艦は35ノットで追跡中です！」

幸子は、現在の状況を伝える。

まして「学校からの指示は、ブルーマーメイドの部隊が到着するまで本艦の安全を優先しつつ武蔵を補足し続けよ・・・との事だ!!」

真雪からの指示は、平賀の部隊が到着するまで武蔵を捕捉せよとの命令だった。

美海「今度こそ遅刻しないように、って早めに出発してたのに・・・」

美甘「お陰で私達が武蔵の一番近くになっちゃうなんて・・・」

この前の海洋実習に遅刻した事を悔い、今回は、遅刻しない様、早く出航したが、それが不運か幸運かは分からないが、武蔵が一番近くになってしまった。

美甘と美海が話していると

幸子「美波さん!」

突然、美波が手を挙げた。

美波「武蔵の生徒も比叡やシユペー同様、ウイルスに感染しているとみるべきだ。」

美波は、武蔵の生徒が比叡やアドミラル・グラフ・シユペーの生徒同様にウイルスに感染しているとみるべきだと皆に告げた。

百々「てつことは、この前の見たいに助けられるつて事ツスよね!」

まゆみ「私達も何かできないかな?」

秀子「うん、そうだよね!」

美波の話聞いた途端、皆は、希望が湧いた。

順子「主砲もバツキユンと新しい5インチ砲になったし!」

光「指揮所もバツチリ新品だって・・・」

果代子「そうそう・・・水雷方位盤も新型になったしね!」

この前の補給と修理で晴風の武装は、強力に成っていた。

主砲は、アメリカ製のMk. 39 5インチ砲に換装され、射撃指揮所もMk. 37 砲射撃指揮装置に代わり、更に今まで使っていた九七式水雷方位盤が零式水雷方位盤に置き換えられた。

晴風、艦橋

芽衣「へへへ．．．！」

零式水雷方位盤を見て、涎を垂らす芽衣。

芽衣「この肌触り最高だ!!：：：これのお陰で三角関数からも解放される!：：：ああ：：：早く撃ちたい!」

芽衣は、零式水雷方位盤を早く使いたいと駄々る。

志摩「丸．．．」

志摩は、側で丸と言う。

晴風、教室

それらの事で生徒達は、浮かれるが

薫「皆、浮かれ過ぎよ!!．．．相手は、武蔵何だから、気を引き締めなさい!!」

薫は、余りにも浮かれ過ぎなので、生徒達に気を引き締めなさいと激励する。

薫の言葉に皆は、浮かれるのを止める。

そんな中、明乃は、また思い詰めてるかの様に不安そうな顔をする。

ましろ「艦長!」

そんな明乃にましろは、声を掛ける。

明乃「あっ!」

ましろの声に明乃は、気づき。

ましろ「如何します?」

ましろは、如何するか問う。

明乃「私達は、学校からの指示通りブルマーを支援しよう・・・武蔵は装甲も火力も桁違いに強力だし・・・」

明乃は、真雪からの指示通りに動く事にした。

ましろ「そうだな・・・ブルマーメイド主体で当たるのが打倒だろう!・・・そうですよね教官?」

薫「そうですね・・・今私達がすべき事は、平賀さんの部隊が到着するまで武蔵の捕捉する事!」

明乃の考えに2人も同意した。

まゆみ「そうか!」

秀子「そうだよね!」

美海「相手が武蔵じゃ・・・」

そして、皆も明乃の考えに同意する。

媛萌「けど皆、がんばろうよ!」

美海「もちろん!」

『がんばろう!!』

媛萌の言葉に皆は、湧き上がる。

だが、明乃は、まだ不安そうな顔をしている。

ましろ「・・・」

そんな明乃をましろは、側で見る。

そして、薫は地図を見て

薫（待っててねはやてちゃん！・・・今行くから!!）

と言って、はやての事を思っていた。

5月5日

9:00

沖縄南方

一方、空母大鳳は、沖縄南方を35ノットで北上していた。

当初は、フイリピン海で艦隊と合流すべく向かっていたが、念の為、先行していた白鳳から武蔵らしき艦影の探知が無いと報告が上がる。

それを聞いた龍之介は、かつてのピオランテ戦での教訓を思い出し、もしかしたらと思い、艦隊との合流を止めて、急いで北方へと針路を取った。

それから数時間後、武蔵が日本近海に現れたと言う報告が入り、龍之介の予感、皮

肉にも的中したのだ。

空母大鳳、艦橋

信吾「雅か武蔵が日本近海に居たとは!？」

美奈「准将の読みが当たりましたね！」

雅か龍之介の読みが当たった事に驚いていた。

龍之介「うん．．．雅かとは、思ったが．．．」

実「しかし何故、武蔵が日本近海に?．．．ファイリピンに向かっていたという情報だったのでは．．．」

実は、ファイリピンに向かっていた武蔵が何故日本近海に現れたのか、不思議に思っていた。

龍之介「多分、それは誤報だろう．．．恐らく此方の哨戒機のレーダーで捕らえたのは武蔵ではなく、武蔵と同じ大きさのタンカーだったのだろう。」

それに対して、龍之介は、E2Gのレーダーが捕らえたのは、武蔵と同じ大きさの大型タンカーだと推測する。

実「では、真冬部隊の方は?．．．目撃情報もあつたんですよ！」

龍之介「それは、もしかしたら比叡だったかもしれない。」

『比叡?!』

龍之介「比叡と武蔵は、艦橋が似ているからな……恐らく晴風と白鳳に制圧される前にウルシー辺りを航行していたんだろう。」

目撃情報も恐らく、晴風と白鳳に制圧された比叡と見間違えたのだろうと推測する。

美奈「成程!!」

2つの推測に美奈は納得する。

信吾「しかし、如何しますか? ……我々は、現在、沖繩南方! 一方の武蔵は、伊豆半島の南西10マイル! ……距離から見ても、艦載機の航続距離圏外です!!」

「
災厄な事に今、空母大鳳が居る場所は沖繩南方、武蔵が居る伊豆半島までは、艦載機の航続距離圏外だったのだ。

美奈「兎に角、最大戦速で向かおう!! ……航続距離圏内に入れば攻撃隊を出せる!!」
美奈の言う通り、既に飛行甲板では、78機の春乱が既に爆装を終え、何時でも出撃準備が完了している。

後は、攻撃隊の航続距離圏内に武蔵を捉えるのみ、だが今の距離では、例え攻撃隊を出しても届くが、帰還が出来ない。

これでは、攻撃隊が出せない。

如何するか

龍之介「・・・副長代理!・・・烈風なら此処から出しても届く筈では?」

龍之介は、試作機の烈風の事を思い出す。

信吾「あの試作機ですか!?!・・・確かに此処から出しても届かない訳では有りませんが、しかし帰還が出来なくなります!!」

烈風の航続距離は、春乱と同じだが、今の距離では、片道しか燃料が持たない。

龍之介「その点は大丈夫だ・・・此処から発進しても平賀の部隊に降りれば問題は無い!」

烈風は、VTOL機で平賀部隊の艦艇の甲板に降りられる事は可能だった。

信吾「でも一機しかありません!たった一機で何が出来ますか!!」

烈風は、試作機なので一機しかない。

一機では、武蔵に太刀打ちできない。

信吾「それに・・・そんな任務に誰を行かせるんですか?」

確かに武蔵相手に一機で立ち向かうのは、自殺行為に等しい任務だ。

そんな任務に誰を行かせるのか、龍之介に難しい判断を迫られる。

龍之介「烈風の準備をしろ!!」

兎に角、龍之介は、烈風の準備をする様命令する。

直ちに烈風の換装を開始する。

龍之介「……………後は、白鳳だけか……………」
攻撃隊は、発進できず……………後は、フィリピンからマツハ5で急行中の白鳳のみだった。

横須賀女子海洋学校、会議室

その頃、横須賀女子海洋学校の真雪でも武蔵発見の報が届いていた。

真冬『我々の部隊は、石垣島南方を40ノットで航行中……………兎に角、急行します!!』
真冬との映像通信が切れる。

真冬部隊も武蔵に向けて急行中。

だが、距離的には、間に合わない位置だった。

真雪「はあ……………主力の殆んどがフィリピン東方……………戦力を集中する作戦が裏目にとたわね。」

真雪は、モニターを見て、難しい顔をする。

真霜『間に合うのは、最低限の備えとして九州沖に残してお居た平賀部長の別動隊だけで大鳳は、急いで北上中だけど……………』

真霜は、武蔵がフィリピン方面に居ると思ひ、ブルーマーメイドの主力部隊の殆んどをフィリピン方面に向かわせた。

だが、武蔵は、真霜の予想を大きく覆し、伊豆半島沖合に姿を現した。

主力部隊は、間に合わず、龍之介の空母大鳳も間に合わない。

後は念の為、最低限の備えとして残しておいた平賀部隊で武蔵を止めるしかなかった。

真雪「他に動かせる艦は？」

真雪は、真霜に他に動かせる艦が無いか問う。

真霜『ドックでメンテ中の艦が1隻・・・出せるか如何か・・・』

残っているのは、1隻だけで、しかもまだ整備中だった。

教頭「うーん・・・約3時間で、武蔵は浦賀水道に入ります。」

それを聞いた教頭は、頭を悩ましながら約3時間で、武蔵が浦賀水道に入ると報告する。

真雪「・・・晴風は？」

真雪は、晴風の武蔵到達時間を聞く。

教頭「およそ2時間後に武蔵に追い付きます。」

武蔵到達時間は、2時間後。

真雪（薫さん・・・晴風の生徒達をどうか守って・・・）

真霜は祈る様にモニターを見つめ、心の中で呟く。

5月5日

11:00

伊豆半島東方沖

晴風は、遂に武蔵と遭遇した。

晴風、艦橋

マチコ『艦影1、左舷10度、水平線、同艦不明!!』

『あっ!?!』

武蔵発見の報告を聞いて、薫と明乃は、困惑する。

晴風、電探室

慧「電探でも感知しました!」

電探でも武蔵を捉えた。

晴風、艦橋

マチコ『方位各右90度』

『あっ・・・!?!』

武蔵発見の報告を聞いて、艦橋に居る全員は、困惑する。

マチコ『閃光視認!目標、発砲した模様!!』

マチコが武蔵からの砲撃を確認する。

明乃「回避! 面舵一杯!!」

武蔵の砲撃に明乃は、直ぐに右に回避する様、命じる。

鈴「はい!」

明乃の指示で鈴は、右に舵を切るが、武蔵の砲弾は、晴風の左舷で高い水柱を上げる。

『きやああ・・・!?』

少し遠かったが、着弾の衝撃は届き、艦は揺れる。

明乃「しつかり距離を取って」

鈴「はい!」

明乃は、武蔵との距離を取って、追跡する。

慧『主砲弾撃つ、此方に接近!!』

だが、武蔵の砲撃は、激しくなり、晴風の周りに着弾する。

芽衣「艦長! 撃ちやう?」

美千留『嚇射撃をした方が回避もグルグルしやすいかも!』

志摩「うい!」

武蔵の砲撃に対し芽衣や美千留が攻撃の指示を待っていた。

だが、砲撃の指示はない。

ましろ「艦長! 指示を・・・!?!」

砲撃の中、ましろは、明乃に指示をこうとしたが

明乃「!!!!」

明乃は!何故か塞ぎ込み、脅えていた。

ましろ「!?!」

それを見たましろは、驚いていた。

何時もなら堂々と指揮している筈の明乃が何故か脅えていた事に驚いていたからだ。

薫「……」

一方、薫の方も明乃が脅えているのを見ていたが、それに驚かず、

薫「艦長に代わって、私が指揮を取ります!」

脅えている明乃に代わって、指揮を執る。

その時

幸子「ブルマーです!!」

幸子からブルマーメイド艦隊到着の報告が入る。

『あっ?!』

報告を聞いた薫とましろは、前方を見る。

すると左舷から白煙を描きながら飛翔する墳進魚雷の光景が見えた。

薫（如何にか間にあつた様ね!）

到着したのは、念の為に九州沖に置いていた平賀部隊4隻だった。

鵜『ブルマーより通信! 晴風は、至急この海域から退避せよの事です!』

ましろ「退避…!」

鵜『ブルマーより撤退命令です。』

薫「分かったわ!・・・状況が見える距離まで撤退する。」

薫は、撤退命令に従い、状況が見える距離まで撤退する。

薫(平賀さん・・・4隻で武蔵を止められるかな・・・)

薫は、不安そうに撤退しながら状況を見守る。

みくら、艦橋

福内「本艦隊はこれより右舷前方の武蔵に対し強制停戦オペレーションを実施する・・・突入チームは武蔵乗員が学生である事を留意し極力格闘は避けるように・・・」
艦長の福内が各艦に指示を送る。

平賀の作戦は、武蔵を停船もしくは減速させ、左右の副砲を破壊した後、抗体を持ったスキッパー隊を武蔵に突入させて、制圧する。

そして、もう1隻も

白鳳、艦橋

次郎「如何にか間にあつたな!」

平賀部隊の後方上空に白鳳が飛来した。

晴風、艦橋

薫「次郎君!!」

晴風でも白鳳を視認する。

薫（これなら勝てる!!）

平賀部隊に白鳳が加わった事に薫は、勝利を確信した。

白鳳、艦橋

次郎「総員、戦闘配置!!・・・コンピューターを戦闘モードに移行!!」

林「了解!!戦闘モードに移行!!」

白鳳のコンピューターは、戦闘モードに移行し、武蔵の左舷へと素早く移動する。

みくら、艦橋

福内「オペレーション開始。」

志度「オペレーション開始します!」

平賀部隊は、作戦を開始し、全艦右舷に一斉回頭する。

それに対し武蔵は、平賀部隊に向けて、一斉砲撃をする。

福内「艦隊、左90度。一斉回頭!!」

志度「とっりかっし!」

だが今度は、左舷に一斉回頭し、砲撃を避ける。

武蔵の砲弾は、平賀部隊の後方に着弾し水柱を上げる。

晴風、艦橋

鈴「あんな綺麗に艦隊運動出来るなんて・・・」

武蔵の砲撃にもともせず、綺麗に艦隊運動しているのに鈴は、感心する。

みくら、艦橋

福内「二番艦、四番艦。噴進魚雷、攻撃始め!」

みやけの艦長「噴進魚雷! 発射始め!」

みやけとはちしようから数発の噴進魚雷が武蔵に向けて発射された。

それに対し武蔵は、砲撃するが、的を外れて、平賀の部隊の右舷に着弾する。

その間に噴進魚雷は、武蔵の左舷に全て命中し、水柱を上げる。

白鳳、艦橋

次郎「良いぞ! 良いぞ!・・・その調子で武蔵の気を引き付けていてくれ!」

平賀部隊が武蔵を引き付けている間に白鳳は、左舷から武蔵に接近していた。

平賀部隊の砲撃に乗じて、ハイパーレーザー砲で武蔵の主砲砲塔を素早く破壊する作戦に出る。

晴風、艦橋

芽衣「すごく! 全部当たっているよ!!」

攻撃が全弾当たった事を知った芽衣が思わず声を上げる。

幸子「・・・これで武蔵の足も止まるかも・・・」

薫（後は、砲撃に乗じて白鳳がレーザー砲で主砲塔を潰せば…）

薫と幸子が勝利を確信している時

ましろ「艦長ちよつと！」

幸子「ん？」

ましろ「教官、しばらく此処を頼みます！」

ましろが明乃を連れて、艦橋を後にした。

幸子「ええええ!!？」

ましろと明乃が居なくなつた事に幸子は、驚愕する。

薫（岬ちゃんの事は、任せたわよ、ましろちゃん!!）

薫は、ましろに明乃の事を任せて、指揮を続行する。

みくら、艦橋

福内「武蔵の様子は？」

平賀「砲撃は止まつたけど損傷不明・・・速力変わらないわね・・・」

福内が平賀に武蔵の状況を確認する。

砲撃は、止まつたが、武蔵の速力が変わらない事から致命傷は与えていない事が窺え

る。

しかし、攻撃は通っている。
今さら作戦変更は、出来ない。

攻撃続行あるのみだった。

福内「一番艦、三番艦・・右90度一斉回頭、突撃せよ!」

平賀部隊は、武蔵を追い抜き右舷に回り込み、みくら、こうづが武蔵右舷に向かって、突撃を開始する。

福内「一、三番艦、主砲、攻撃始め!」

志度「撃ち方始め!」

みくらとこうづが武蔵に向けて、砲撃を開始し、武蔵も副砲で応戦するが、2隻は、素早く開始しながら砲撃を続け、

志度「目標右舷副砲破壊しました!」

武蔵の右舷副砲を破壊した。

これにより、突入部隊が武蔵へ突入がし易くなった。

晴風、艦橋

芽衣「おお、やった!!」

志摩「うい!」

右舷副砲を破壊した事に芽衣と志摩は、大喜びしながら腕を組む。

薫「後は、白鳳からの攻撃で主砲塔を無力化すれば!!」

後は、白鳳の攻撃のみ。

その白鳳も攻撃を開始しようとしていた。

次郎「よし、ハイパーレーザー砲発射用意!・・・目標!武蔵、主砲塔!!」

ハイパーレーザー砲の照準が武蔵の第一から第二砲塔にロックオンする。

次郎「発射!!」

発射しようとした時だった。

ボン!!

突然、衝撃が走り、

次郎「な、何が起こった!?!」

突然の衝撃に次郎は、何が起こったのか分らなかつた。

GF隊員「大変です!!・・・ハイパーレーザー砲が破損!!使用不能!」

次郎「な、何!?!」

何と、如何いう訳かハイパーレーザー砲が破損、使用不能に陥った。

何故破損したか、それは、武蔵の副砲による攻撃でだった。

実は、平賀の部隊が武蔵と交戦している時、白鳳は、隙について左舷から接近し攻撃

を仕掛けようとした。

武蔵の目は、全て攻撃している平賀部隊に向けていたと思っただが、左舷の副砲1基だけは、何故か白鳳に照準を向けていて、しかも白鳳が近づきハイパーレーザー砲を発射しようとする寸前を狙った。

雅に学習しているかの様に

とは言え、ハイパーレーザー砲を破壊された事によつて、白鳳は、艦船に対する戦闘能力を一瞬に失った。

晴風、艦橋

薫「そ、そんな!?!・・嘘でしょう!?!」

白鳳の被弾に薫は、驚愕する。

隙を付いたのに何故、気づかれたのか、しかもハイパーレーザー砲の発射口も潰した事に驚愕していたからだ。

みくら、艦橋

志度「白鳳から報告!ハイパーレーザー砲破損!離脱するとの事です!」

最早、ハイパーレーザー砲が破損した以上、離脱するしかなかった。

平賀「そんな!?!」

白鳳の戦線離脱に平賀は、驚愕する。

福内「了解!・・・二番艦、四番艦、噴進魚雷攻撃始め!」

福内は、了解し、攻撃を再開する。

白鳳が素早く離脱行動に入ると、みやげ、はちじょうから噴進魚雷が発射される。

だが、発射した時、突然、空中で分散した。

福内「何!?!」

平賀「作動不良!?!」

志度「誘導システムにエラー発生!!」

噴進魚雷の誘導システムがEMPの影響で作動不良を起こした。

そして、離脱している白鳳にも

三郎「システム及び電子系統に障害が発生しています!?!」

次郎「補助システムに切り替える!!」

電子機器が使用不能になった為、次郎は、急いでEMP対策として、補助システムに

切り替えた。

次郎「くそ!!・・・こんな筈じゃ!!」

次郎は、悔しながら、戦況を見守るしかなかった。

晴風、副長室

その頃、ましろは、戦意を損失している明乃を自分の部屋に連れて行き、ソファに座

らせた。

ましろ「一体如何したんだ艦長……ブルーマーメイドが着てくれたら、私達は、私達の役割を……」

明乃「……判らない……如何すれば良いのか……分からないの……」

明乃は、完全に戦意を損失しており、如何すれば良いのか判断ができない状態になっていた。

明乃とましろの会話は、伝声管で殆んど艦内に流れていた。

晴風、機関室

麻侖「ちよつと此処頼む!!」

洋美「えっ!?!」

明乃とましろの会話を聞いた途端、麻侖は、1人、明乃の元に向かう。

洋美「レオ、機関長に着いて行って!!」

麗緒「了解!!」

洋美の指示で麗緒が麻侖と共に副長室に向かう。

洋美「此処は、4人で持たせるわよ!」

『はー!』

麻侖と麗緒いない間、4人で機関室を持たせる事になった。

みくら、艦橋

一方、EMPの影響を受けていたみくらでは

平賀「電子機器が狂うと言うのは聞いていたけれど・・・」

平賀は、EMPの影響で電子機器が狂う事は、知っていたが、実際にこれ程のものは、と驚いていた。

とは言え、EMPの影響の中では、電子機器が使えない以上、誘導兵器が使えない。如何するのか

福内「・・・魚雷発射管発射準備・・・無誘導に設定！」

寒川「無誘導!？」

電子機器が使えない以上、誘導システムが使えない。

福内は、魚雷を誘導から通常に切り替える。

武蔵、艦橋

その頃、武蔵艦橋に立て籠もっているもえか達は、立て籠もっている艦橋から戦況を見ていた。

夏美「残弾各砲塔、およそ90から100・・・」

夏美は、手帳に武蔵の主砲弾の残弾数を計算する。

親子「進路変わらず、依然として浦賀水道に向かっています！」

親子は、海図を見て、武蔵の進路を把握し、浦賀水道に向かっている事をもえかに報告する。

もえか「ん……」

もえかは、唾然としながら、双眼鏡で戦況を伺う。

夏美「うう……私達の艦が……ブルーマーメイドを……」

夏海は、自分達の艦がブルーマーメイドを攻撃している事に悲嘆する。

そんな夏美にもえかが

もえか「状況把握に勤めよう……艦を止めるチャンスを見つけるの……ね?」

と言つて、ハンカチを渡し、夏美を励ます。

夏美「はい……」

教官であるはやてを失つてから、もえか達は、不安な状態で艦橋に立て籠もりながら、救援を待っていた。

一度は、東舞鶴男子海洋学校の教員艦隊が救援に駆け、これでやっと悪夢から解放されると喜んだが、救援に駆け付けた教員艦隊を自分達が航行不能にした事によつて、まともや長い立て籠もり生活を余儀なくされた。

何日も何日も救援を待ち続ける中、4人の中に、もう救援は、来ないんじゃないのか、私達は、このまま死んでしまうのかなとまで思い始め、不安が増大し、諦め始めていた。

そんな4人にもえかは、何とか希望を持たせる。

実は、自分も不安だったが、艦長として皆を護る以上、不安になっては行けない。もえかは、はやてとの約束を守り続け、何とか立て籠もりを続ける。

それから、21日達、ようやく平賀部隊が救援に駆け付けた。

だが、戦況はおもわしくない。

だけど、不安になっては行けない。

もえかは、何とか武蔵を止めるチャンスを見つけ様と策を練ろうとするが

親子「艦長！ちよつと来てください！」

親子が何かを発見した様だ。

もえか「何？」

もえかは、何かと問う。

親子「うちの学校の艦です。」

もえか「えっ？」

親子に言われもえかは、双眼鏡を覗く。

もえか「晴風・・・ミケちゃん！」

もえかが見たのは、紛れもなく親友の明乃が乗艦している晴風だった。

晴風だと知ったもえかは、今まで抑えていた不安を少し見せ始める。

みくら、艦橋

志度「魚雷、無誘導に設定!」

福内「第一戦速・・・おもくかくじ0度ヨーソロー!」

一方、平賀部隊は、魚雷を無誘導に設定し、再度武蔵を攻撃する。

だが、既に戦況は、平賀部隊にとっては、不利になっていた。

誘導兵器の使用不能。

そして、頼りにしていた白鳳の戦線離脱で平賀部隊の勝算は、薄かったからだ。

それでも武蔵を止めるべく、攻撃を続けるしかない。

福内「全艦!魚雷、攻撃始め!」

全艦、武蔵に向けて、魚雷を発射。

だが、その直後

武蔵、艦橋

もえか「あっ!?!」

武蔵が平賀部隊に向けて砲撃、はちじように主砲弾が命中した。

はちじよの被弾にもえかは、驚愕する。

晴風、見張り台

マチコ「四番艦被弾!」

晴風、艦橋

芽衣「ブルマーが!？」

晴風でもはちじょうの被弾に驚愕する。

武蔵、艦橋

亜依子「ブルマーが・・・」

『きゃあああ!?!』

晴風、副長室

マチコ『ブルマー四番艦速力低下!!』

明乃「あっ」

衝撃は、各自に伝わる。

白鳳、艦橋

次郎「くそ・・・このまま見ている事しかできないのか？」

艦船に対する戦闘能力を失っている白鳳では、戦えない。

このまま見ている事しかできない事に次郎は、悔しながらパネルを叩く。

みくら、艦橋

志度「命中1, 2, 3, 4!」

はちじょう被弾後、発射した魚雷の4発が武蔵に命中する。

寒川「四番艦、艦尾に直撃!」

志度「四番艦から報告!我、航行不能。戦闘続行不可能!!」

寒川「通常魚雷残弾ありません!」

はちじょうが脱落し、更に魚雷を全弾撃ち尽くし、平賀部隊は、追い詰められていく。

福内「艦隊は、目標右艦尾に回り込み突入要員の乗り移りを行う・・・各艦、無人機の準備が出来次第、発艦!!」

追い詰められた福内は、最後の行動に出る。

それは、先ず4隻から無人の飛行船を発進させ、武蔵の射撃指揮所を飛行船で目隠しし、砲撃を出来なくする。

その間に4隻が武蔵の砲塔を破壊する。

その後、突入チームを送り武蔵を制圧する作戦だ。

寒川「一、二、三番艦、無人機発艦しました!」

4艦から4機の無人飛行船が発進した。

福内「武蔵の様子?」

志度「砲、無人機に向けています・・・警戒してる模様・・・」

武蔵の目は、無人飛行船に向けていたので、此方には、向いていなかった。

福内「右180度、一斉回頭と同時に無人機を接近させる。」

この機を逃さず、福内は、作戦を続行する。

志度「ヨソロー！」

平賀部隊は、武蔵に接近する。

武蔵の砲塔は、無人機から接近してくる平賀部隊に狙いを定めるが

武蔵、艦橋

親子「艦長！無人機が!？」

その直後に無人飛行船4機が武蔵の射撃指揮所の全方位を目隠しした。

親子「無人機で目隠しを……」

亜衣子「流石ですね！」

福内の作戦に2人は、感心する。

福内『全艦、射撃開始!!』

無人飛行船がも隠している内に平賀部隊は、砲撃を開始。

武蔵、艦橋

親子「四番副砲大破しました！」

平賀部隊の砲撃で武蔵の後部副砲が破壊され、今度こそ上手くいくかもしれないと

思ったが

みくら、艦橋

福内「速射砲!？」

武蔵の対空砲が目隠ししている無人飛行船4機を撃墜したのだ。

志度「面舵いっぱい!全速退避!!」

思わぬ事態に平賀部隊は、急いで退避行動に出るが

既に遅く、武蔵の砲撃で次々と被弾し、残ったのは、1隻のみだった。

武蔵、艦橋

『あつ．．．!?!』

平賀の部隊が次々と被弾するのを見て、もえか達は、啞然とする。

晴風、艦橋

『あつ．．．!』

鈴「このままじゃ…」

そして、晴風でも薫や幸子達が啞然としながら戦況を見る。

薫「航海長!距離、もう少し取りましょう!」

鈴「は、はい!」

薫は、平賀部隊の戦意損失を見て、今の距離では、危険と判断し、武蔵との距離をも
う少し開ける。

芽衣「ブルマー．．．1隻だけになっちゃったんだけど．．．艦長も副長も早く戻っ

てきてよ!!」

平賀部隊の戦意損失を見て、芽衣は、明乃とましろが早く戻ってきてくれと叫ぶが

晴風、副長室

当の明乃は、今だに戦意を損失したままだった。

ましろ「……………」

明乃「武蔵は、止めなきやいけない……ブルーマーメイドも……助けたい……武蔵に乗ってる……皆も助けたい……でも、それで、もし晴風の皆を……皆に何かあったらと思うと……怖い……凄つく怖い!!」

明乃は、ましろに自分が思っている事を全て打ち明ける。

明乃は、武蔵は、止めなきやいけないし、ブルーマーメイドも助けなきやいけない、武蔵に乗ってるもえか達も助けなきやいけない、でもそれで、晴風の皆に危険が及んだら、自分は、如何すれば良いのか、それが怖かったのだ。

明乃の思っている事は、伝声管で艦内に伝わっていた。

皆は、啞然として聞いていた。

晴風、艦橋

薫（……岬ちゃん……）

薫も啞然として聞く。

横須賀女子海洋学校、会議室

真霜『平賀隊!あと1隻です!!』

その頃、横須賀女子海洋学校の会議室でも真霜が平賀部隊が壊滅状態に追いやられたと報告が入る。

真雪「・・・学校艦に・・・総員退艦命令を!」

老松「承知しました。」

真雪「それから・・・国土保全委員会にホットラインを繋いでください。」

真雪は、校内に退避命令を出し、国土保全委員会に電話を繋ぐ。

国土交通省、国土保全委員会

一方、国土保全委員会では、武蔵接近に伴い東京湾内に避難警報を出していた。

委員会幹部A「避難状況は?」

国交職員「東京湾内全域に警報を発令しました!!・・・しかし間に合うかどうか・・・」
だが、武蔵の予想外の湾内侵入に避難が間に合わなかった。

そんな時

国交職員『横須賀女子学校からホットラインです!!』

突然、真雪からの電話連絡が入って来た。

深町「なに!?!」

真雪『校長の宗谷真雪です……報告します……海上保安法第12条に基づき……横須賀女子海洋学校に……緊急事態を宣言します!!』

海上保安法第12条

つまり横須賀女子海洋学校のフロート艦を使って、武蔵の侵入を阻止すると言う事だ。

委員会幹部A「なん……だと……」

それを聞いた途端、委員会の幹部達は、驚愕する。

真雪『私は、これより艦橋に上がりますので……失礼します!』

真雪は、電話を切り、艦橋へと上がる。

委員会幹部C「委ねるしかないのか……来島の巴御前に……」

委員会の幹部の1人がボソツと呟く。

国交職員「何ですかそれ……」

委員会幹部A「十五年前領海内を荒らしまわっていた武装船団を……単艦で殲滅したのがあの校長だ。」

委員会の幹部が真雪の過去の武勇伝を語り、真雪に託そうとするが

深町「何を言っているんだ!!……まだそう簡単に諦めるな!!」

深町は、諦めなかった。

委員会幹部A「しかし深町国交相!!・・・ブルーマーメイド艦隊は、全滅し、頼みの白鳳もやられ、後は、来島の巴御前に委ねるしか・・・」

しかし、平賀部隊の全滅と白鳳の戦線離脱で委員会の幹部達は、怖気づいていた。

深町「まだ望みはある・・・諦めてはいけない!!」

それでも深町は、諦めなかった。

だが、深町の言う通り、まだ望みは、有った。

九州沖

空母大鳳、飛行甲板

その頃、空母大鳳は、沖縄南方からようやく九州沖に入った。

だが、今だに艦載機の航続距離圏外の為、艦載機は、出せなかった。

例え出せても、燃料は、片道しか持たなかった。

其処で龍之介は、試作戦闘機烈風を使用する事を決断した。

烈風なら、VOL機だから、燃料は、片道でもブルーマーメイド艦に着艦できる。

長い間、格納庫の中にあつた烈風は、格納庫から飛行甲板に引つ張り出された。

格納庫から引つ張り出された烈風は、整備班長の文雄以下の整備士達が発進準備し、

燃料、弾薬（99式中距離空対空ミサイル4発、93式空対艦ミサイル2発、300ガ

ロン増槽2基）を搭載する。

殆んどの作業を終え、発進準備は、完了する。
後は、誰が操縦するかだ。

なのはか

フエイトか

艦橋から出てきた者は

信吾「止めて下さい!!・・・何も准将が行かなくても・・・」

なんと指揮官である龍之介であった。

龍之介「こんな危険な任務に誰が行くんだ?・・・言い出しつぺの俺が行くのが当たり前だろう!」

信吾「それは、そうですが・・・指揮官が行くなど前例がありません!!」

信吾の言う通り、指揮官の龍之介が行くなど前例がない。

龍之介「だから、行くんだ!!・・・後の事は、任せた。」

だが、龍之介はそう言つて、烈風の操縦席に乗り込む。

『・・・』

隣でなのはとフエイトが黙つて、それを見守る。

操縦席に乗り込んだ龍之介は、各装置をチェックしながら発進準備をする。

そんな時

龍之介（……何年振りだろうか……この手で操縦桿を握るのは……手の震えが止まらねえ……）

事故以来の後遺症のせいか、操縦桿を握った途端、手が震えてきた。

龍之介（くそ……負けてたまるか……）

龍之介は、必死に手の震えを押さえながら、エンジンを始動させる。

そして、そのまま艦首カタパルトへと移動、カタパルトに前脚を装着し、発艦準備が完了する。

龍之介「此方レツドー！……発進する！」

信吾『了解！……准将！……如何かご無事で……』

龍之介「発進!!」

烈風は、発艦する。

龍之介「待っている薫！……今行くぞ!!」

空母大鳳から発艦した烈風は、一路、武蔵の元へと急行する。

伊豆半島東方沖

みくら、艦橋

志度「とりか〜じ！」

一方、みくらは、武蔵の攻撃を回避しながら単艦で攻撃を続行する。

晴風、艦橋

その光景を艦橋で薫と生徒達は、啞然としながら見る。

その時

鵜『ブルマーから通信が入っています！．．．そのまま流します。』

突然、単管で先頭を続行しているみくらから通信が入った。

福内『此方が武蔵を引きつける．．．その間に晴風は、退避せよ！．．．繰り返す．．．

晴風は、退避せよ！』

何とそれは、晴風に向けての退避命令だった。

鵜『通信終了しました。』

薫「平賀さん．．．」

みくらからの退避命令を聞いた薫は、退避を決断しようと思った。

みくら、艦橋

平賀「機雷敷設用意！」

武蔵との戦闘を続けるみくらは、遂に最後の策として、武蔵の進路上に機雷を敷設する。

晴風、艦橋

圧倒的な武蔵の火力とみくらからの退避命令を聞いた薫は、退避命令を口にしようとした瞬間

芽衣「私達……何もできないの？」

薫「!？」

芽衣「このまま武蔵を浦賀水道に行かせちゃうの……」

戦闘を見ていた芽衣は、自分達には、何もできないのか、このまま武蔵を浦賀水道に行かせて良いのか

芽衣は、悔しくなる。

そして

晴風、射撃指揮所

光「主砲!……いつでも撃てるけど？」

晴風、機関室

洋美「艦橋!……速力このままでいいの？」

晴風、

美甘「艦長!おにぎりできています!」

ほまれ「カレーもあります」

あかり「おしるこも……」

「艦長！」

「艦長！」

他の生徒達も芽衣と同様の気持ちで、明乃に決断を迫る。

晴風、艦橋

それを聞いた薫は、退避するのを止めて、受話器を取る。

薫「艦長！・・・如何されますか？・・・皆やる気だけど・・・私は、退避を考えているわ！」

薫は、全部所に自分の考えを露にする。

『えっ!?!』

それを聞いた生徒達は、驚く。

薫「だけど私は、貴方の意見が聞きたい・・・如何したいのか聞きたい！・・・お願い答えて岬さん？」

最初は、退避を考えていたが、皆のやる気を見て、薫は、明乃に自分が如何したいのか問う。

みくら、艦橋

志度「艦首B2ブロックに浸水！」

福内「遮蔽急いで!!」

一方、戦闘を続けていたみくもも遂に被弾、脱落した。

最早、武蔵を止める艦はいない。

絶体絶命である。

晴風、副長室

ましろ「艦長：…本艦の行動方針を・・・けつ・・・けつ・・・」

薫から自分の意見を問われる明乃にましろも如何するのか問うが、何も言う事ができない。

その時

麻命「けつ、けつ、て言ってるじゃねえ!!」

部屋の扉が開き麻命と麗緒が入ってきた。

ましろ「違う! 決断をと言いたいんだ・・・」

明乃「決断なんて・・・できないよ!・・・だつて、今まで助かってきつただつて、たまたまついてただけで、あたしのお陰じゃないよ・・・皆は、私の大切な家族だから、皆を失つたらと思うと・・・怖い・・・」

やつと家族になれた晴風の皆を失うと思うと明乃は、怖くて決断が出来ない。

泣き叫ぶ明乃をましろは、啞然と見るしかなかった。

麻命「其処まででえい! 艦長を艦橋に連れて行け!」

麗緒「あ、はい！」

麻侖「お前さん、ちよつと付き合ってもらうぜ！」

麻侖は、2人の話を止め、麗緒に明乃を艦橋へ連れていく様に言い、自分は、ましろを機関室に連れて行つた。

晴風、艦橋

艦橋では、明乃の意見を待っている

幸子「艦長!」

薫「ん？」

突然、艦橋に明乃が麗緒に連れられて戻つて来た。

薫「艦長……」

薫は、直ぐに明乃に近寄る。

だが、完全に戦意を消失している明乃を見て、薫は、何も言わずにポケットからハンカチを出し、明乃の涙を拭く。

薫「副長は何処？」

拭きながら、明乃の側にいる筈のましろがない事に気づき、何所に行つたのか麗緒に問う。

麗緒「機関長がさつき……」

それに対して、麗緒は、麻命がさつき連れて行った事を言う。

薫「機関長が!?!?・・・そう・・・」

それを聞いた薫は、何故麻命がましろを連れて行ったか、分からなかったが、

麻命の事だから、多分ましろに活でも入れているのだと思った。

その時

慧『感あり!・・主砲弾3、此方に向かつてきます!!』

武蔵の砲撃が晴風に迫って来た。

幸子「回避して!」

幸子は、薫に代わって、鈴に回避する様命じる。

鈴「はくい!」

鈴は、回避行動をする。

晴風、機関室

一方、機関室では、麻命がましろを連れて来て、床に座布団を引いて、その上に座らせる。

麻命「これで艦橋には聞こえねえよ・・」

機関室の会話が外に漏れない様に伝声管に布を詰め、声が伝わらないようした。

ましろ「こんな時に何を…」

麻侖「まあ、飲め！」

と言つて麻侖はましろにお茶を差し出す。

だが、ましろは、お茶を飲まない。

仕方なく、麻侖は、お茶を横に置き

麻侖「おう！おう！・・・要するにだ・・・カツオの刺身にマヨネーズつてのは美味

い食い方なんだよ！」

突然、訳の分からない事を言い出す。

ましろ「!?」

ましろは、突然何かを言い出した麻侖の言葉を理解できなかつた。

洋美「つまり、私と機関長は、全然違うけど、違うものが合わさつてこそ独特で良い感じになるつて事だと思ふ・・・」

洋美は、麻侖が言いたいことは、性格や趣味などは全然違えど、それが合わさつてこそ独特な感じがでると言う事を説明する。

麻侖「そう言う事よ！・・・あと祭の太鼓でも皮ばつか叩かないだろ？・・・フチをカツ！つて鳴らさねえと！音が絞まらねえ！・・・マロンとクロちゃんみたいなものよ！・・・なあ、そうだろうクロちゃん？」

洋美「足りないものは補い合うのが本当の仲間だつて、事を言つてるのだと思ふわ・・・」

宗谷さん!・・・艦長を助けられるのはあなたしかいないわ!」

麻侖「如何でえい!分かったか?」

麻侖と洋美の説得を聞いた途端

ましろ「ありがとう!」

ましろは、そう言つて、慌てて機関室を飛び出して行つた。

麻侖「あつ、一件らくちやくく!」

一件落着した事を歌舞伎風に言う麻侖。

空「機関長殿、それがやりたかつただけですよね?」

空は、歌舞伎風に言う麻侖にそれがやりたかつただけと言う。

確かに空の言う通り、やりたかつただけかもしれない。

とは言え、ましろは、一生懸命走り、明乃がいる艦橋に向かう。

晴風、艦橋

『くう・・・』

その頃、艦橋では、武蔵の砲撃を回避し続けていた。

そんな時

ましろ「艦長!!」

ましろが艦橋に戻つて来た。

薫「遅いわよ副長！」

ましろ「す、すいません．．．はあ．．．はあ．．．」

ましろは、全力で走っていた為か、息をきらしながら明乃の元へ歩み寄る。

ましろ「私は！．．．あなたの．．．マヨネーズになる！」

ましろが麻侖に言われた事をそのまま明乃に言う。

晴風、機関室

麻侖「よくし、よく言った!!」

洋美「はあ．．．まんまね！」

ましろの言葉を聞いた麻侖は、よく言ったと褒める。

洋美は麻侖が言った言葉をそのまま、言ってしまった事に苦笑いをしながら頭を抱える。

晴風、艦橋

幸子「マヨネーズ？．．．あの．．．副長は何と言いたいの？」

突然のましろの言葉に艦橋の皆は、分からなかったが

ましろ「艦長の支えになりたい！．．．艦長は今まで通り決断して行動して運を引き寄せて．．．その代わり他の事は私が．．．いや！．．．晴風の皆が何とかする！．．．

そう思ってるのは私だけじゃない！」

ましろは、自分が明乃の支えになりたい
それだけじゃない。

皆だつて、明乃を支えたい。

そう思っているんだと明乃に伝える。

芽衣「そうだよ！私達もつとやれるよ！」

志摩「うい！」

ましろの言葉を聞いて、芽衣と志摩は、明乃に武蔵へ行こうと言う。

鈴「わ、私だつて、もう逃げてばかりじゃありません！・・・何だつてできます！」
そして、鈴も涙目になりながら、明乃に武蔵へ行こうと言う。

晴風、水測室

楓「そうですとも……」

晴風、電探室

慧「できるでできる！」

晴風、医務室

美波「為せば成り」

幸子「副長がマヨネーズなら私は、マスタードになります!!」

ましろの言葉に晴風の皆は、賛同し、皆が明乃について行くと言う！

明乃「!!!」

ましろの言葉に今度は恐怖の涙から信頼というものの涙が溢れてきた。

ましろ「海の仲間に……超えられない嵐はないんでしょ？」

明乃「シロちゃん……皆……」

ましろや皆に支えられ、明乃は、嬉しくなる。

薫「……合格よ！……ましろちゃん！」

『えっ?』

薫「もう貴方は、立派な生徒よ！……もう落ちこぼれでも何でもない！……立派な副長よ！」

そして、薫からましろは、横須賀女子海洋学校の生徒として、認められた。

その時

マチコ『武蔵より発光信号！』

『えっ!?!』

マチコ『読み上げます！』

マチコが武蔵から発光信号があるのを気づき読み上げる。

マチコ「貴艦はそのまま……本艦との距離を開けられたし……接近は危険……主

砲弾……いまだ豊富……」

そして発光信号の最後にある人物の名前があつた。

明乃「も、え、か・・もかちゃん!」

それは、紛れもなく明乃の友人の知名もえかからだった。

明乃「無事だったんだ!」

もえかの無事に明乃は、驚く。

ましろ「なら尚更助けしかない!」

五十六「ぬう」

薫「行きましよう艦長!」

薫は、明乃に武蔵の元へ行こうと言って、五十六が被つていた艦長帽を明乃に渡す。

明乃「教官、五十六・・・ありがとう」

そして薫から帽子を受け取り明乃が帽子を被り、整える。

明乃「戦闘!左砲雷同時戦!・・・300度の武蔵!」

明乃が言うとうと魚雷発射管と主砲が武蔵に指向する。

そして武蔵は晴風に照準を合わせる。

マチコ「目標敵進30度!敵速18ノット!」

明乃「第五船速!340度ヨーソロー!」

晴風は武蔵からの砲弾を回避しつつ武蔵に接近する!

武蔵、艦橋

親子「艦長！晴風から発光信号です！」

もえか「読み上げて……」

親子「……我貴艦の救出に向かう……繰り返す……我貴艦の救出に向かう……」
もえか「ミケちゃん……」

遂に晴風と武蔵の最終戦が始まろうとしていた。

第30章 ラストバトルでピンチ! (前編)

5月5日

11:40

伊豆半島東方沖

白鳳を撤退させ、平賀部隊を壊滅させた武蔵は、浦賀水道へ、あと20分で侵入しようとしていた。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

福内『二番艦、三番艦、四番艦、航行不能・・・一番艦発揮可能速度6ノット・・・』

真霜「このままでは・・・あと20分で武蔵が浦賀水道に侵入する!？」

白鳳は、撤退し、平賀部隊も壊滅した今、武蔵があと20分で浦賀水道に侵入する事に真霜は、愕然とする。

横須賀女子海洋学校

『繰り返します!・・・全員だちに退艦してください!!・・・繰り返します!・・・全員だちに退艦してください!!』

一方、横須賀女子海洋学校では、校内に残っている生徒や職員に退艦命令が発令され

ていた。

横須賀女子海洋学校、艦橋

そして、真雪は、フロート艦の艦橋でフロート艦の航行準備の作業を行っていた。

その時

教頭『校長！』

真雪「あっ!?」

突然、教頭から通信が入り

教頭『晴風から通信です！』

真雪「えっ!?!」

晴風からの通信が入っていると行って、繋ぐ。

薫『航洋艦晴風教員の山本薫です・・・武蔵への作戦行動を許可願います・・・クラ

ス全員の同意は取れています・・・やらせてください!!』

薫は、真雪に武蔵の足を止める作戦実行の許可を要請する。

既に晴風では、明乃以下殆んど生徒が足止め作戦に同意している。

あとは、真雪の決断次第

真雪「・・・武蔵への作戦行動を横須賀女子海洋学校校長宗谷真雪が許可しま

す・・・但し、攻撃は一回だけ・・・地上側でも武蔵への対応を準備しています・・・反

復攻撃の必要はないわ・・・五分…いえ、三分時間を稼いでくれれば十分よ!」

薫『はい!』

真雪は、遂に武蔵の足を止める作戦を許可した。

真雪としては、白鳳は、撤退し、平賀部隊も既に全滅し、ウイルス感染した武蔵が迫っている今、心苦しいがもはや手段を選んでいる暇はなかった。

本音を言えばもうこれ以上生徒を危険な目に遭わせたくはなかったが、このままウイルスに感染した武蔵が横須賀に入れば国家そのものが危機にさらされる。

真雪は断腸の思いで晴風に攻撃命令を許可した。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

真霜「待つてください宗谷校長!!・・・武蔵は、既にブルーマーメイド艦隊3隻を航行不能にしています・・・晴風単独では、あまりにも・・・」

だが、通信を聞いていた真霜は、武蔵相手に晴風1隻では、危険だと判断し、作戦に反対するが

薫『後20分で武蔵が浦賀水道に入ります!』

ましろ『姉さん、いえ宗谷監督官!』

真霜「あ!?!」

突然のましろからの通信に真霜は、驚く。

晴風、艦橋

ましろ「我々でも、武蔵を止められないかもしれませんが、でも少しでも足を遅くして、時間を稼ぐ事はできます。」

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

薫『それに知名さん、いえ武蔵の艦長が艦橋に立てこもって奮戦中なんです!』

真霜「武蔵艦長と連絡が取れるの!？」

真霜は、武蔵に生存者がいる事に驚く。

薫『無線は、通じませんが、発光信号での通信は、可能です・・・やらせて下さい宗谷監督官!・・・今武蔵を止められるのは、私達だけです!!』

真霜「ん・・・」

薫達の覚悟に真霜は、決断し様とした時

次郎『駄目だ!!』

突然、撤退中の白鳳から待ったが掛けられた。

真霜「あっ!？」

白鳳、艦橋

次郎「晴風では、武蔵にかなわない!・・・止めてくれ薫!!・・・死んでしまうぞ!!」
次郎は、必死に止めようとする。

薫『大丈夫だよ次郎君!・・・私達は、絶対に死なないから!!』

それに対して、薫は、死なないと次郎に言う。

次郎「薫・・・」

それを聞いた次郎は、啞然として、薫を心配する。

そんな時

『心配するな!!』

次郎「准将?」

龍之介『今俺が向かっている・・・だから心配しないでくれ!!』

龍之介からの通信が入って来た。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

真霜「龍之介!?!・・・何所にいるの?」

龍之介からの突然の通信に真霜は、驚き、今何所にいるのか問う。

龍之介『今新型機で現場に向かっている!』

真霜「新型機って、雅か例の!?!」

龍之介『そうだ!・・・今単独で武蔵の元に向かっている。』

真霜「単独!?!・・・無茶よ!・・・それに貴方には、後遺症が有るんじゃない?」

龍之介が単独で武蔵の元に向かっていると聞いて、真霜は、驚愕しながら反対する。

烈風、操縦席

龍之介「ん……俺は大丈夫だ！……それより武蔵を何とかするのが先決だ！……俺を信じろ!!」

それに対して、龍之介は、震える手を押さえながら、大丈夫だと言つて、薫の作戦を実行させようとする。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

真霜「ん……分かったわ！……山本二等監督官！……武蔵への接近及び作戦行動を了承します……頼むわね！」

そして、遂に真霜は、晴風による武蔵の足を止める作戦を了承した。

晴風、艦橋

薫「はい！」

『ん！』

作戦は、了承され、薫と明乃、ましろは、一心同体になる。

五十六「ぬう！」

多聞丸「ニヤン！」

鈴「行こう！」

幸子「狙われるものより狙う方が強いんです！」

芽衣「その通り！」

志摩「うい、うい！」

そして、全員が一心同体になった。

薫「では、これより、晴風による武蔵の足止め作戦を開始します!!」

ましろ「艦長、指示を！」

明乃「・・・30度ヨーソロー！」

鈴「30度ヨーソロー！」

明乃「前進いっばーい！」

晴風、機関室

麻命「前進一杯でえい・・・!!」

晴風は、速力を上げる。

こうして、晴風による武蔵の足止め作戦が開始された。

晴風、艦橋

マチコ『武蔵まで30!』

マチコが適時に武蔵との距離を報告する。

武蔵、艦橋

亜衣子「晴風が接近してきます！」

武蔵でも亜衣子が晴風の接近に気づき

もえか「はっ・・・!?」

それを聞いたもえかは、艦橋から外を見る。

夏美「晴風が？」

もえか「近づかないでって、信号送ったのに・・・ミケちゃん・・・」

警告に従わない晴風をもえかは、心配する。

晴風、艦橋

明乃「タマちゃん！武蔵の主砲塔を狙って！」

志摩「うい！」

明乃「絶対に武蔵を絶対止めよう！」

志摩「うい！」

志摩がピースをしながら返事をする。

明乃「うん・・・メイちゃん！武蔵の側面に来たら全魚雷発射！」

芽衣「憧れの全射斉発射…ま、まじ!?!」

芽衣が水雷長としては憧れの全魚雷発射命令が出て興奮する。

明乃「射撃のチャンスはおそらく一回だけ一回でなんとか足を止めたい！」

ましろ「集散的に艦尾を狙いましょう」

薫「スクリューがある艦尾を集散的に狙えば速度は、かなり落ちる。」

明乃「うん！」

明乃とましろ、薫で何所を狙うか指示をする。

芽衣「分かった！絶対命中させる！……りっちゃん、かよちゃんいくよ！」

一番魚雷発射管

理都子「了解です！」

二番魚雷発射管

果代子「はい！」

そして晴風は、武蔵の横に着き全主砲と魚雷発射管を武蔵に向ける。

武蔵、艦橋

もえか（ミケちゃん……雅か!?!）

もえかは、晴風が単独で武蔵を止めようとしている事に気づく。

晴風、艦橋

明乃「目標！……武蔵艦尾！……攻撃始め！」

芽衣「照準点武蔵艦尾！……全弾当てるよ！発射用意！……撃てえ！」

晴風から魚雷8本が発射され

志摩「発射！」

続いて、全主砲が連続して射撃する。

晴風、射撃指揮所

美千留「駄目だ：ビクともしない!？」

砲弾は、全弾武蔵艦尾に命中したが、武蔵の装甲の前に全く効果がない。

そして次に魚雷が武蔵艦尾に全弾命中し、水柱が立つ。

晴風、艦橋

芽衣「よっしゃ！ 全弾命中!!」

魚雷全弾命中に芽衣は、ガッツポーズを決める。

マチコ『武蔵速度低下!』

魚雷によって武蔵は速度が低下した。

だが止まるには至らなかった。

薫（やはり、駄目なのかな・・・）

更に晴風の攻撃に気づき、武蔵の全主砲、副砲が晴風に向けられる。

まして「来るぞ！」

薫「ん・・・」

明乃「全員衝撃に備えて！」

マチコ『武蔵！発砲!』

武蔵は、物凄い発砲炎を出しながら晴風に向けて主砲を放つ。

そして武蔵から放たれた砲弾は晴風の至近に着弾。

『うわぁ・・・!?!』

その衝撃で晴風は大きく揺れる。

明乃「うわっ!」

明乃がその衝撃によって転びそうになる。

ましろ「大丈夫ですか?」

ましろが転びそうな明乃を押さえる。

明乃「あっ!?!ありがとう」

薫「大丈夫、艦長?」

薫も明乃の側による。

幸子「艦長・・・」

幸子が明乃が落とした艦長帽を渡す。

みくら、艦橋

航行不能になっているみくらの艦橋からも武蔵が晴風に向けて発砲してる様子が窺える。

平賀「晴風・・・」

平賀は、晴風の無事を祈る。

白鳳、艦橋

そして、白鳳からも晴風が攻撃を受けている様子がモニターで見えていた

次郎「くそ……薫達が戦っているのに俺達は、唯、見ている事しかできないのか……」
晴風が単独で武蔵に奮戦中を見て、次郎は、何もできないのかと悔しがる。

晴風、艦橋

美海『後部発えんき使用不能！』

秀子『爆雷投射機損傷！』

媛萌『第4運用化倉庫火災発生、消火作業中……』

最初の砲撃で晴風は、各部に多大な損害でていた。

鈴「い、一撃で、此処まで……」

芽衣「やばっ……」

武蔵の砲撃の威力に鈴と芽衣は、驚愕する。

晴風、無線室

鶴「ん……あ、だめだ……壊れちゃてるよ……」

衝撃のせいで無線機が故障、送受信が出来なくなつた。

晴風、艦橋

『無線機損傷!!』

そして、艦橋に無線機が故障した報告が入る。

ましろ「無線も駄目か!」

薫とましろ、明乃は、時計を見つて

ましろ「艦長!・・・5分稼げました。」

武蔵の浦賀水道侵入を5分遅らせた事を確認する。

薫「離脱しましょ!・・・もうこれ以上の攻撃は、危険よ!」

薫は、もうこれ以上の攻撃は、危険と見なし、離脱命令を出す。

明乃「うん!・・・リンちゃん急いで武蔵から離れて!」

明乃もそれに従い鈴に武蔵からの離脱を命じる。

鈴「任せて!」

鈴は、急いで武蔵から離脱を図ろうとするが、武蔵は、それを逃さない様に続けて砲撃をしてきた。

晴風、見張り台

マチコ「武蔵発砲!」

晴風、電探室

慧「着ます!」

マチコと慧の発砲報告があると武蔵の砲弾は晴風の進行方向に着弾する。

武蔵、艦橋

もえか「ミケちゃん!!」

晴風の被弾に武蔵の艦橋で見ていたもえかは、叫ぶ。

晴風、艦橋

光『一番砲自動装填装置故障!』

美甘『烹炊室で火災発生!消火作業に入るね!』

2度目の砲撃で更に被害が増えていく。

幸子「これが武蔵ですか・・・」

ましろ「進行方向を抑えられています!」

鈴「逃げ場が無いよ・・・」

『…!』

武蔵の攻撃になすすべも無かった。

武蔵、艦橋

亜衣子「艦長!」

夏美「如何なさたんですか!」

一方、武蔵艦橋では、もえかが突然、艦橋の入り口を塞いでいたバリケードを外し始

めた。

もえか「砲撃を止めるの……」

何ともえかは、砲撃を止め様と射撃指揮所に向かおうとバリケードを外す。

だが、それは、無謀だった。

夏美「無茶です！」

亜衣子「艦長！」

もえかの無謀の行動に夏美と亜衣子は、止め様とするが

もえか「じゃないと晴風が!!」

もえかは、明乃の事で自暴自棄になりかけていた。

その時

もえか「あっ!?!」

亜衣子「落ち着いてください……艦長！」

自暴自棄になりかけていたもえかを亜衣子が引き留めた。

もえか「………御免なさい……」

今自暴自棄になれば事態をより悪化させてしまう。

そしたら、何の為にはやては、身をていして、犠牲になったんだ。

それを思い出したもえかは、落ち着きを取り戻し、バリケードを外すのを止めた。

晴風、機関室

その頃、晴風の機関室では、災厄の事態が起きていた。

留奈「機関長！水！水！」

麻侖「何だと!?今行く！」

何と砲撃のせいで機関室が浸水していた。

晴風、艦橋

洋美『艦長！左弦機関室に浸水！』

『えっ!?!』

洋美から機関室浸水の報告を受け、薫と明乃は、驚愕する。

晴風、機関室

麻侖「ありたけのポンプ持ってきた、釜の火を消すなよ……」

このままでは、航行不能になる。

麻侖達は、必死に防水作業をする。

晴風、艦橋

明乃「機関室まで……」

機関室まで被害が拡大した事に明乃は、愕然とする。

薫「最早……此処までの様ね！」

薫は、最早此処までだと察し

ましろ「艦長!・・・皆に離艦準備させますか?」

ましろもそれを察し、明乃に総員離艦の準備させ様と進言する。

芽衣「マジ!?此処で逃げるの?」

幸子「蛇は頭が食べられたら生き返るものも生き返らないですよ!」

ましろの進言に芽衣と幸子は、反対する。

鈴「御免なさい!私をもつと操舵できてたら!」

鈴が悔し涙を流す。

志摩「うゝい」

もう無理だと志摩は、首を振るう。

もう如何する事もできない。

そんな時

薫「そんな事ない・・・皆よくやってくれたわ・・・でも・・・もうこれ以上・・・皆

を危険に晒したくない・・・艦長!・・・離艦を・・・命令して下さい!」

薫が涙を流して、反対する2人を説得し、明乃に離艦を命令するよう言う。

明乃「教官・・・」

初めて見た薫の涙に明乃は、心を打たれ

ましろ「……」

更にましろもそれに賛同する。

明乃「総員離艦よう……あっ!？」

遂に明乃が離艦命令を下そうとした時だった。

ズドーン!!ズドーン!!

武蔵の周りに幾つもの水柱が立った。

ましろ「これは!？」

薫「一体如何なってるの?」

突然の事態に薫とましろは、何が起こっているのか分らない。

明乃「鈴ちゃん面舵いっばくい!」

明乃は、直ぐに武蔵から離れるよう鈴に命じる。

鈴「面舵いっばい!」

鈴は、急いで武蔵から離れる。

マチコ『後方!艦影視認!』

晴風の後方から正体不明の艦艇群が現れた。

ましろ「……ブルーマーメイドか?」

ましろは、ブルーマーメイドかと思ったが

薫「雅か!?・・・援軍に出せる艦は、殆んど無い筈?」

薫は、そんな筈はないと言って、デツキへと向かう。

幸子「見てきます!」

幸子もデツキへと向かう。

慧『識別信号確認!・・・比叡・舞風・浜風・・・アドミラル・シユペー・・・それから・・・てんじんです!』

後方から現れた艦艇は紛れもなく、横須賀女子海洋学校の大型直接教育艦比叡と航洋直接教育艦の舞風、浜風の3隻とドイツのヴェイルヘルムスハーフェン海洋学校の小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シユペーだった。

明乃「えっ?」

そして、更に

明乃「てんじん・・・」

幸子「うちの学校の艦です!」

横須賀女子海洋学校のインディペンデンス級教育艦のてんじんも駆け付けてきた。

その指揮を取るの

明乃「古庄教官!」

薫「え!」

病院で入院していた筈の指導教官の古庄だった。

そして、隣には、同じく入院していたGフォース参謀の功もいた。

てんじん、艦橋

古庄「間に合つて良かったわ、遅くなつて御免なさい！」

功「だが、我々が来た以上、もう心配は、要らないぞ山本中佐！」

晴風、艦橋

薫「徳吉参謀！」

てんじんに功も乗つていた事に驚きながら、喜ぶ薫。

明乃「野間さん！・・無線機が使えない事を伝えて!!」

マチコが駆けつけて来た艦艇に向かつて手旗信号で送る。

ドイツ、ヴィルヘルムスハーフェン海洋学校所属、小型直接教育艦アドミラル・グラ

フ・シュペー、艦橋

ミーナ「ココ・・!!皆・・!!」

アドミラル・グラフ・シュペーの艦橋からミーナが手を振っていた。

晴風、艦橋

幸子「来てくれたんですね・・!!」

それに気づいた幸子は、手を振つて返す。

ドイツ、ヴェイルヘルムスハーフェン海洋学校所属、小型直接教育艦アドミラル・グラ
フ・シユペー、艦橋

「テア「今こそ借りを返す時だ！」

「テアがドイツ語にて、今こそ借りを返す時だと宣言する。

晴風、艦橋

「ましろ「艦長如何します？」

「明乃「皆が来てくれたならまだやれる！」

増援部隊が来た以上、離艦する意味はない、このまま攻撃を続けるべきだと明乃は、判
断する。

「ましろ「私に異存は、ありません」

「薫「私もよ！」

「薫とましろもそれに同意する。

「明乃「作戦変更！これより武蔵に乗り込む！」

「明乃は、武蔵の足止め作戦から武蔵への乗り込み作戦に変更する。

「芽衣「よしや！」

「志摩「うい！」

「鈴「頑張ります！」

幸子「はい！」

秀子「やりましょう」

まゆみ「やろやろ!!」

皆もそれに賛同する。

マチコ『シユペーが作戦を尋ねていきます!』

見張り台にいるマチコがシユペーからの発光信号を読み明乃に伝える。

明乃「武蔵に乗り込こみます!晴風の援護を……」

明乃は、増援部隊に武蔵への乗り込み作戦の援護を頼むと信号を送る。

ドイツ、ヴェルヘルムスハーフェン海洋学校所属、小型直接教育艦アドミラル・グラ

フ・シユペー、艦橋

ミーナ「え、ん、ご願う……との事です艦長!」

テア「うむ、了解した!任せろ……」

晴風からの信号を受け、テアは、了承する。

てんじん、艦橋

古庄「これより我々は、晴風の武蔵乗艦作戦に対してこれを援護します……てんじん、シユペーは武蔵右舷から……比叡、舞風、浜風は左舷から攻撃し、晴風を援護!……各艦、突撃準備を成せ!……目標!……武蔵!!」

そして増援部隊は陣形を整える。

武蔵、艦橋

もえか「風が吹いた・・・希望の風が・・・」

増援部隊を見たもえかは、希望の風が吹いたと感じた。

白鳳、艦橋

次郎「よし!・・・これなら武蔵を止められるかも・・・」

そして、白鳳のモニターから見ていた次郎も増援部隊の到着を見て、勝利を確信し

次郎「おい!・・・俺達も行くぞ!!」

武蔵の元へ向かへと命じる。

三郎「無理です艦長!・・・ハイパーレーザー砲は、破壊されているんですよ!・・・それ以外の武器は、使用を禁じられています!!」

いきなり武蔵の元へと向かえと命じる次郎に三郎が反対する。

次郎「それでも行くんだ!!・・・こんなところで見ていられるか!!」

それでも次郎は、武蔵の元へ向かうべきだと言って、命令を変えず

白鳳の操舵主「行きます!」

それに乗じてか操舵主が舵を切って反転、武蔵の元に向かう。

てんじん、艦橋

古庄「全艦突撃せよ！」

画して、武蔵への乗り込み作戦が開始され、てんじんが切り込みの砲撃を開始し、各艦が砲撃と雷撃を始める。

そして砲弾は武蔵の周りに大量に着弾し、武蔵が反撃の砲撃をし、その砲弾がアドミラル・グラフ・シュペーの近くに着弾する。

ドイツ、ヴェルヘルムスハーフェン海洋学校所属、小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

テア「怯むな！」

だが、アドミラル・グラフ・シュペーは、怯む事なく砲弾を続ける。

てんじんからも魚雷が発射され、武蔵に命中する。

それに反応して、武蔵の砲撃がてんじんにも集中する。

てんじん、艦橋

古庄「くう・・・くれぐれも武蔵艦橋付近には、当てないよう全艦に通達！」

副官「分かりました。」

古庄「晴風は？」

そして、その晴風にも武蔵の砲撃が集中していた。

晴風、艦橋

鈴「!!!」

鈴は、怯えながら回避する。

そんな時

ヒュ……ン……ドーン!!

晴風、艦橋

何所からか、ミサイルが飛んで来て、武蔵の中央煙突に命中した。

ましろ「な、何だ!?!」

薫「い、今のは、何所から……」

突然のミサイル攻撃に薫は、何所から撃って来たのか、辺りを見回す。

マチコ『右舷より接近中の小型艦? ……いや高速で向かってくる!!』

マチコから晴風の右舷から正体不明の艦が高速で向かって来ると報告を受けて、薫

は、直ぐに右舷方向を見る。

すると

薫「あれは!?!」

薫が見たのは、高速で飛来する烈風の姿だった。

烈風、操縦席

龍之介「何とか間に合った様だな!」

何とか間に合った事に龍之介は、安心する。

晴風、艦橋

薫「兄さん!?!」

艦橋から烈風が飛んでいるのを見て、龍之介だと確信する。

ましろ「えっ?!?!?・・・龍之介兄さんがあれに?!」

それを聞いたましろは、驚く。

薫「艦長!今飛んでいるのは、味方だと皆に伝えて!」

薫は、直ぐに明乃に今飛んでいるのは、味方だと増援部隊に伝えてと命じる。

明乃「はい!・・・野間さん!・・・今飛んでいるのは、味方だつて皆に伝えて!!」

薫に命じられ、明乃は、直ぐに今飛んでいるのは、味方だと増援部隊に伝えてとマチ

コに命じる。

てんじん、艦橋

功「准将!?!」

てんじんも功が龍之介だと確認し

古庄「各艦に伝えて!!」

古庄も各艦に伝える。

とは言え、龍之介も加わった事で、武蔵との戦闘がより有利になった。

龍之介が乗る烈風は、煙突を攻撃後、前後にある射撃指揮所に99式中距離空対空ミサイルを1発ずつ発射し、破壊した。

攻撃してくる烈風に武蔵の速射砲が蜂の巣みたいに撃って反撃してきたが、先のアドミラル・グラフ・シュペーと同様にマツハーイーで飛ぶ烈風に全く当たらなかった。

前後の射撃指揮所が破壊された事によって、武蔵の射撃精度は、落ちたが、それでも武蔵の砲撃は止まず、周りに多数の水柱が上がる。

晴風、艦橋

ましろ「射撃精度は落ちているのに、まだ撃ってくるのか!？」

明乃「何とかして隙を作らないと・・・」

射撃精度は、落ちているのにまだ武蔵は、砲撃している。

これでは、武蔵には、近づけない。

何か方法は、無いのか

そんな時

幸子「艦長、教官!・・・これ使えないですかね?」

幸子がタブレットを明乃に渡しながら言ってきた。

明乃「噴進弾?」

幸子「役に立つかもって明石が搭載してくれたんですが・・・」

補給の時に明石から四式二十糎噴進弾をおまけとして、搭載して貰っていた。

明乃「うん・・・これで何とかなるかも・・・」

明乃は、四式二十糎噴進弾を見て、ある作戦を思い付く。

薫「イチかバチか、やりましょ!!」

薫も思い付き

明乃「メイちゃん！ タマちゃん！」

芽衣「あっ？」

志摩「ん？」

芽衣と志摩に作戦の概要を言う。

芽衣「よしゃ!!分かった！」

志摩「うい！」

作戦の概要を聞いた2人は、四式二十糎噴進弾が置かれてる後部甲板に向かう。

明乃「リンちゃん！」

2人が後部甲板に向かった後、明乃は、鈴に

鈴「はい！」

明乃「晴風を武蔵の前に出して！」

武蔵の前に出るよう命じる。

鈴「か、艦首の前!？」

武蔵の前に出るよう言われ、鈴は、驚愕する。

ましろ「知床さん！」

薫「ん！」

そんな時、薫とましろが大丈夫だと鈴を安心させ

ましろ「前進！武蔵の前へ！」

ましろも武蔵の前に出るよう命じる。

鈴「ヨ、ヨーソロー！」

鈴は、武蔵の前へと進路を取る。

晴風が進路を変え、武蔵の前に出ようとし、その様子は他の艦にも伝わる。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

ミーナ「武蔵の前へ出るのか!？」

テア「晴風を撃たせるな!・・・武蔵の攻撃を此方に引き付けろ!・・・Volley

!!

それを知ったミーナとテアは、晴風を援護する為、武蔵の砲撃を引き付け様とする。

更に他の艦も同様に武蔵の砲撃を引き付ける。

白鳳、艦橋

次郎「晴風が武蔵の前へ出る！．．．何とかして、武蔵の砲撃を止めさせる事が出来れば．．．」

晴風が武蔵の前に出るのを見て、次郎は、何とか武蔵の砲撃を止めさせる事が出来ればと模索する。

三郎「しかし、ハイパーレーザー砲は、破壊されていますから、それは、できません。」
だが、肝心のハイパーレーザー砲は、破壊され、それ以外の武器は、強力で使えない。
次郎「如何すれば．．．」

折角、武蔵の元に来たのに、唯見ている事しかできないのか
その時

龍之介『次郎！』

次郎「准将!？」

突然、龍之介から通信が入る。

龍之介『お前に任務を与える！』

次郎「俺に？」

龍之介『お前にしかできない事だ！』

龍之介は、次郎にある任務を命じる。

てんじん、艦橋

古庄「行きなさい晴風」

晴風が武蔵の前に出るのを見守る古庄達。

晴風、後部甲板

芽衣「タマ、時間が無いから急ぐよ！」

志摩「うい！」

晴風の後部甲板では、芽衣と志摩が四式二十糎噴進弾の発射準備に取り掛かる。

その間に武蔵と他の艦艇の戦闘は、熾烈を極め。

芽衣「噴進弾！・・・何時でもいけるよ！」

四式二十糎噴進弾の発射準備が完了し

晴風、艦橋

明乃「前進一杯！ 面舵一杯！ 艦尾を武蔵に向けて！」

鈴「前進一杯！ 面舵一杯！」

明乃は、晴風の艦尾を武蔵へと向ける。

明乃「タマちゃん発射準備！」

晴風、後部甲板

そして、芽衣と志摩は、四式二十糎噴進弾の発射準備を終え、安全の確保の為物陰に隠れていた。

芽衣「タマ、魂で撃て！」

志摩がしつかりと武蔵を狙う。

しかし、それに気づいた武蔵は、前部砲塔を晴風に向ける。

晴風、艦橋

薫「不味い!? 読まれているわ!!」

それに気づく薫。

だが、今さら回避は、不可能。

その時

薫「あっ!?!」

突然、白鳳が武蔵目掛けて突撃して来た。

白鳳、艦橋

次郎「これでもくらえ!!」

白鳳は、上から武蔵の前部砲塔に体当たりをして、離脱する。

白鳳の体当たりで、前部の副砲は、砲身が上に折れ、第一主砲と第二主砲は、砲身が下に折れた。

これで、前方の砲撃は、出来なくなった。

晴風、艦橋

薫「今よ立石さん!!」

薫は、これを見過ごさ、志摩に四式二十糎噴進弾の発射を命じる。

晴風、後部甲板

志摩「この弾で・・・チャンスを掴む！」

志摩は、発射ボタンを押す。

晴風から四式二十糎噴進弾が発射され、武蔵の上空を高速で通過する。

その通過で武蔵の前方から煙幕が覆う。

芽衣「艦長！今だ!!」

志摩「うい！」

四式二十糎噴進弾の煙幕で武蔵からは、見えない今、武蔵に突入するのは、今しかない。

晴風、艦橋

明乃「鈴ちゃん、面舵いっぱい!!武蔵の右舷へ！」

明乃は、直ぐに武蔵の右舷へと進路を取るよう命じる。

鈴「面舵いっぱい！」

鈴は、右に舵を切るが

鈴「ん・・・あつ!・・・ん・・・だ、舵輪が回りません!!」

明乃「え・・・!？」

突然、舵輪が動かなくなった。

聡子『艦長、舵に被弾！操舵不能ぞな!!』

如何やら砲撃不能になる前に武蔵の砲弾が晴風の舵に命中していた様だ。

その為、操舵が出来ない。

薫「後もう少しなのに・・・」

このままでは、武蔵の右舷に接舷できない。

絶体絶命になったその時

明乃「あっ!?!パラシユート有ったよね？」

突然、明乃は、パラシユートを言い出す。

ましろ「え、あつ、うん！」

薫「パラシユートで何をするの？」

いきなりパラシユートを言い出して、何をするのか薫には、分からなかった。

明乃「ヒメちゃん、モモちゃん、パラシユート用意！」

兎も角、明乃は、媛萌と百々にパラシユート用意を命じる。

晴風、後部甲板

百々「パラシユート繋いだすけど、如何すんツスか？」

パラシュートを後部の右舷に設置し、如何するのか明乃に問う。

明乃「右舷後方に投げ込んで!!」

明乃は、右舷後方に投げ込めと命じる。

『え?』

右舷後方に投げ込めと命じられ何が何だか分からなかったが

明乃「早く!!」

『は〜い!!』

兎に角、パラシュートを右舷後方に投げ込んだ。

投げ込まれたパラシュートは、海中で開く。

すると

『うあ．．．』

操舵不能になっていた晴風が右へと曲がり始めた。

晴風、艦橋

鈴「回った!」

幸子「やりました!逆転大回等!!」

晴風が右へと回等する事に成功した。

薫「成程!．．．パラシュートを舵の代わりにしたのね!．．．流石は、艦長!．．．」

誰も思い付かない事を思い付くなんて……」

パラシュートを舵の代わりにするとは、誰も思い付かない事を明乃は、さっそうと思
い付いた事に薫は、感心する。

晴風、機関室

麻命「釜の火が如何なっても良いから、絶対に止めるな!!」

機関室では、機関が限界寸前だったが、麻命達が必死に食い止めている。

晴風、艦橋

ましろ「武蔵見えた!」

やがて、武蔵が見えて来て

明乃「パラシュート切り離して!!」

明乃は、パラシュートを切り離すよう命じ、媛萌は、パラシュートを切り離す。

パラシュートが切り離され、晴風は、武蔵に接近して来た。

晴風、艦橋

ましろ「激突するぞ!!」

明乃「備えて!」

明乃は、衝突に備えるよう命じ、生徒達は、衝突に備える。

ド……ン……!!

晴風は、武蔵に衝突。

接舷する。

晴風、艦橋

幸子「やった！突撃成功です・・!!」

接舷に成功した事に幸子は、喜びながらもましろに抱き付く。

ましろ「救出部隊突入準備！」

だが、ましろは、直ぐに救出部隊突入準備の命令を出すか

楓『できておりますわ！』

ましろ「え？」

既にましろが命令する前に前部甲板では、突入メンバーが準備を完了していた。

晴風、前部甲板

楓「行きますわよ！突入・・・!!」

楓が先陣を切る形で突入メンバーは、武蔵へと乗り込んで行く。

晴風、艦橋

そんな中、明乃は、艦橋から動かない。

それもその筈、明乃は、艦長だから、艦に居なくてはならない。

でももえかを助けに行きたい。

そんな時

ましろ「艦長！」

明乃「あっ！」

ましろ「艦長も突入してください！」

ましろが明乃に武蔵に乗り込むよう言う。

明乃「えっ!？」

いきなりましろから武蔵に乗り込むよう言われ、明乃は、驚く。

普通なら艦長は、此処に居て下さいと言うのに、ましろは、変わっていた。

明乃「わ、私は、此処に入る・・・艦長だから・・・」

しかし、明乃は、流石に持ち場を離れては、不味いと思い、行かない。

ましろ「行って・・・岬さん！」

それでもましろは、明乃に武蔵に行くよう言う。

明乃「え!？」

それを聞いた明乃は、驚愕し、ましろを見る。

ましろ「分かっているんだから・・・行きたいって顔に書いてあるよ！」

ましろは、明乃がもえかの元に行きたいと分かっていた様だ。

だから、ましろは、明乃を武蔵へと行かせる。

明乃「……シロちゃん!」

それに応えた明乃は

明乃「ありがとう!」

ましろに感謝する。

薫「行きましたよ艦長!」

そして、薫も武蔵に居るはやての元に向かう為、明乃を誘う。

明乃「はい!」

薫と明乃は、武蔵に乗り込む。

幸子「流石我が友、シロちゃんかつこいい!!」

2人が行った後、その光景を見ていた幸子がましろに抱き付きながら褒め称える。

ましろ「いや、友達じゃないし……」

抱き付いてきた幸子にましろは、いやいやだった。

武蔵、甲板

武蔵の生徒「ぐはっ!」

武蔵の生徒「ぐほっ!」

一方、武蔵に乗り込んだ突入メンバーは、ウイルス感染した武蔵の生徒達を次々と無力化して行く。

そんな中、上空を飛んでいた烈風は、後部甲板に着陸し、乗っていた龍之介は、降りて、薫の元へと向かう。

そして、白鳳も遅れて、武蔵の左舷に接舷し、次郎指揮のもと古野間達が乗り込む。その頃、明乃と薫は、もえか達が居る艦橋を目指した。

明乃「モカちゃん!!」

薫「はやてちゃん!!」

媛萌と百々が水鉄砲で奮戦する中、明乃は、ラツタルを昇っていき、やっとたどり着いた艦橋外部の扉

明乃「モカちゃん!!」

明乃は、扉を叩きながら中に立て籠もっているもえか達に救助しに来た事を告げる。

武蔵、艦橋

もえか「あっ!?!?・・・ミケちゃん!」

それに気づいたもえかは、バリケードを構築している木箱や消火器、鉄パイプをどこか始めた。

そして、それを見ていた3人ももえかを手伝おうとバリケードをどかし始める。

やがて、扉が少しづつ開き

次の瞬間

明乃「う、うわわぁ・・・」

扉が開いて、明乃は、中に倒れこもうとしたが

明乃「あっ!？」

突然誰かが前に現れ、明乃は、押さえられる。

明乃は、誰だろうと思いきる顔を上げると

もえか「やつと会えたね・・・ミケちゃん！」

それは、明乃がずっと助けたかったもえかだった。

明乃「モカちゃん・・・モカちゃん・・・モカちゃん・・・モカちゃん・・・!!」

それを知った明乃は、思わず泣きながらもえかに抱き付く。

もえか「ミケちゃんつてば、無茶するんだから・・・」

明乃「だつて・・・」

もえか「ほんとにもう・・・」

明乃「御免・・・」

もえか「でも、ありがとう」

2人は、再会を祝うのだった。

そんな時

薫「岬ちゃん！」

明乃に遅れて、薫が艦橋にやってきた。

薫「知名さん!? 無事だったのね?」

薫は、もえか達の無事を確認する。

もえか「はい!・・・八神教官のお陰で何とか・・・」

自分達の無事を確認する薫にもえかは、はやてのお陰で助かったと告げる。

薫「教官!?・・・はやてちゃんは?」

はやての名を聞いて、薫は、艦橋の中を見るが、何処にもはやての姿はなく、薫は、もえかにははやての事を問う。

すると

もえか「それが・・・私達を助け様として・・・」

もえかは、無線機奪取の時にははやてが身を持って、自分達を助け様として、自ら残った事を薫に告げる。

薫「そ、そんな!?・・・じゃはやてちゃんは・・・」

それを聞いた薫は、はやてが如何なつたのか問う。

それを言つた途端、もえかは、何も言わず、唯首を横に振るう。

それを見た途端、薫は、言葉を失い。

薫「何処なの?・・・何所に居るのははやてちゃんは?・・・お願い教えて知名さん?」

そして、今はやては、何所に居るのか、もえかを問い詰める。

もえか「た、多分・・・下の艦橋に通じるエレベーター付近かと・・・」

薫に問い詰められ、もえかは、最後に見た場所の事を薫に告げる。

薫「下のエレベーター付近!？」

はやての最後に見た場所の事を聞いて

薫「分かった!・・・此処は、任せたわよ岬ちゃん!」

明乃「教官!」

そう言つて、薫は艦橋を出て行く。

艦橋を後にした薫は、急いではやてを最後に見た艦内のエレベーター付近へと向かう。

武蔵、通路

エレベーター付近に向かう途中、艦内の至る所でウイルス感染した生徒と晴風の突入メンバー及びGFの制圧部隊が戦闘中だった。

薫「はやてちゃん!!」

薫は、その中を掛け走りながらはやてを探す。

そして、艦内のエレベーター付近に着くと

薫「あっ!？」

其処には、誰かは、知らないが1人の女性が立っていた。

薫「はやてちゃん!？」

それは、紛れもなく、もえか達を助ける為に残った八神はやてだった。

はやて「……」

だが、様子が可笑しく、薫が呼ぶとはやては、薫の方を向く。

薫「あっ!?!……はやてちゃん……」

はやてがこつちを向いた途端、はやての目がウイルスに感染した生徒と同じ目をして

いた事に薫は、驚く。

薫に気づいたはやては、ゆっくりと薫に近づいてくる。

薫「はやてちゃん!……私よ!……薫だよ!……助けに来たんだよ!!」

薫は、はやてに助けに来たと告げるが

はやて「……」

はやては、それに答えず、どんどん薫に迫って来る。

近づいてくるはやてに薫は、何もできないまま後ろに下がる。

従妹でもあるはやてに手が出せなかつたからだ。

だが、後ろに壁が有り、これ以上後ろに下がれない。

やがてはやてが薫の側まで来て、手を首に伸ばし、薫の首を絞め様とする。

薫「は……はやてちゃん……や……止めて……」
首を絞められる中、薫は、必死にはやてに止めるよう言うが、はやては、聞く耳を持たない。

このままでは、はやてに殺されてしまう。

何とかしないと

そう思った時だった。

「止める!!」

薫「あっ!?!」

突然、はやてが誰かに押さえられ、薫の首から手を退かす。

薫「はっ!はっ!……あっ!?!」

はやてから解放された薫は、息吐きをして、顔を上げると

薫「次郎君!」

何とはやてを押さえていたのは、次郎だった。

次郎「大丈夫か薫?」

次郎は、はやてを押さえながら大丈夫かと問う。

薫「ん……うん……」

次郎「そっか……」

次郎が押さえている中、はやては、抵抗をする。

次郎「いい加減目を覚ませはやて！・・・お前が殺そうとしているのは・・・お前の従妹の薫なんだぞ!!」

それに対して、次郎は、お前が殺そうとしているのは、薫なんだと言いながら押さえるが

はやて「うがああっ!!!」

ウイルスに感染した生徒と同じ様にはやては、野人みたいに抵抗を続ける。

薫「はやてちゃん！」

抵抗するはやてに薫は、呼ぶが、聞く耳を持たない。

次郎「こうなったら・・・薫！・・・はやてを押さえている!!」

薫「う、うん！」

抵抗を続けるはやてに次郎は、薫にはやてを押さえろと言って、薫は、はやてを押さえる。

薫がはやてを押さえている際に次郎は、ポケットからワクチンを取り出し

次郎「正気に戻れ！・・・チビダヌキ!!」

はやての腕に注射する。

しばらくの間、2人に押さえながらも抵抗を続けていたが、やがてワクチンが効いて

くると、大人しくなりそのまま気を失った。

薫「御免ね・・・はやてちゃん・・・」

気を失ったはやてに薫は、救出が遅れた事を謝罪した。

龍之介「薫!・・・次郎!」

やがて、龍之介がやって来った。

薫「兄さん!?!」

龍之介「大丈夫か2人共!」

次郎「だ、大丈夫です・・・」

薫「何とか・・・」

龍之介「そっか・・・」

2人が無事な事に龍之介は、安心して、はやての元に寄る。

龍之介「すまなかつたな・・・八神・・・」

こうして、龍之介達は、はやてを救出した。

その後、武蔵の右舷側にてんじんが接舷、救出した武蔵の生徒は次々と担架に乗せられて、てんじんへと運ばれて行く。

はやても担架でてんじんに運ばれて行く。

武蔵、甲板

運ばれる中

もえか「八神教官！」

先程、救出されたもえか達と明乃が来て、はやてが救出された事を確認する。

薫「大丈夫・・・ワクチンが効いて、眠っているだけだから・・・」

もえか「そうですか・・・良かった・・・」

はやてが無事だった事にもえかは、安心する。

はやてに危ないところを助けて貰って、もえかは、申し訳なかったのだろう。

みくら、艦橋

真霜『作戦終了・・・全艦横須賀に寄港せよ！』

武蔵救出が無事に完了し、真霜は、全部隊に横須賀への帰投を命じる。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

真霜は、ホツとした様子で椅子にドサツと座る。

真霜「お母さん、伝説を作り損なったね！」

真霜は、真雪に2度目の伝説を作り損ねたと言うが

横須賀女子海洋学校、艦橋

真雪「私の代わりに・・・私の生徒が・・・やってくれたわ！」

真雪は、気にせず、それどころか自分の代わりに生徒達が武蔵を止めた事に感心して

いたのだ。

画して、武蔵との最終戦は、終わりを告げようとした。

だが

ヒュ・・・ン

『あっ!?!』

ドーン!、ドーン!、ドーン!

何所からか砲弾の雨が降って来た。

戦いは、まだ終わっては、いなかったのだ。

第31章 ラストバトルでピンチ！
(後編)

5月5日

13:00

伊豆半島東方沖

フィリピンに居る筈の武蔵が突如、日本近海に出現。

災厄な事にブルーマーメイドの主力の殆んどがフィリピンに展開していたので、直ぐに向かえるのは、九州沖に展開中だった平賀部隊とフィリピンから日本近海に向かっていた白鳳、そして、小笠原沖を航行中だった晴風のみだった。

両艦は、伊豆半島東方沖で遭遇、戦闘へと突入した。

戦況は、平賀部隊と白鳳に有利な状況だったが、RATによるEMPの影響で、電子機器が使用不能に追い込まれてしまう。

戦況は、不利に陥り、白鳳は撤退、平賀部隊は全滅、武蔵の浦賀水道侵入まであと20分を残すのみになった。

戦況不利を知った横須賀女子海洋学校の真雪は、学校艦を使って武蔵を止める作戦に出る。

しかし、残っていた晴風が単独で武蔵を足止め作戦を実行。

だが、武蔵の圧倒的な火力に絶体絶命に陥る。

その時、横須賀女子海洋学校所属の増援部隊が救援に駆けつけて来た。

更に龍之介も駆け付けて来て、絶体絶命から有利に代わるも、武蔵との戦闘は、熾烈さを増し、乗り込む事が出来ない。

其処で晴風は、噴進弾による目暗まし戦術を図る。

結果は、大成功、晴風は、無事に武蔵に接舷、艦橋に立て籠もっていた艦長のもえか以下数人とウイルスに感染した教員のはやと生徒達の救出する。

画して、戦いは、終わりを見せたが

ヒュ……ン

『あっ!?!』

ドーン!、ドーン!、ドーン!

突如、何所からか砲弾が降って来て、付近に水柱が舞う。

戦いは、まだ終わっては、いなかったのだ。

武蔵、甲板

薫「な、何!?!」

次郎「な、何だ!?!」

龍之介「……………」

『…………』

いきなりの砲撃に龍之介達と生徒達は、驚愕する。

てんじん、艦橋

功「な、何が如何なっているんだ？」

古庄「砲撃は何所から？」

副官「分かりません！」

てんじんでも何所から砲撃して来たのか分らなかつたが

てんじんのリーダー主「リーダーに感あり！……右舷方向に複数の艦影!!」

てんじんのリーダーが右舷前方に複数の艦影を捉えた。

それを聞いた古庄達、武蔵の甲板に居た龍之介達は、右舷方向を見る。

すると海上に艦艇らしきものが多数出現した。

出現した艦のマストには、旗が上がっていた。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

ミーナ「雅か、あれは……………」

テア「あ……………」

ミーナが双眼鏡でその旗を見た瞬間、驚く。

その旗は、白と赤の線と50個の星マークが描かれていた。

それは、正しくアメリカの国旗

つまり、出現した艦艇は、アメリカの艦艇だった。

新たに出現したのは、ハワイから出撃したウィリアム・ボガート中將が率いる米太平洋艦隊だった。

米太平洋艦隊

旗艦原子力巡洋艦ロングビーチ

原子力巡洋艦ベインブリッジ

巡洋艦ベルナップ、ジョセフアス・ダニエルズ、ウェインライト、ジョーエット

駆逐艦バリー、ジョン・ポール・ジョーンズ、カーティス・ウィルバー、スタウト、ジョン・S・マケイン、ミッチャー、ラブーン、ラッセル、ポール・ハミルトン、ラメージ、フィッツジェラルド

強襲揚陸艦ワスプ、ボクサー

補給艦サプライ

その数20隻以上、救出した武蔵と増援部隊を包囲する状態で陣形を組む。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

真霜「な、何故米軍が？」

突如出現した米艦隊に真霜達も驚愕し、何故現れたのか分らなかつた。

横須賀女子海洋学校、艦橋

真雪「!!!」

真雪も米艦隊出現に困惑していた。

てんじん、艦橋

てんじんの通信主「米艦から通信が入っています!!」

やがて、てんじんに米艦から通信が入る。

古庄「スピーカーに流して・・・」

ボガート『：：此方は、アメリカ太平洋艦隊司令のウイリアム・ボガート中将だ！：：ブルーマーメイド並びに横須賀女子海洋学校所属艦に告げる：：貴官らは苦難の中、武蔵を止めた・・・我々からもおめでとうを言わせて貰おう・・・ついては、武蔵及びその乗員とRATを此方に引き渡してもらいたい・・・』

何と米軍からの要求は、救出した武蔵とその生徒の引き渡し、更に捕獲したRATも引き渡しを要求して来た。

功「な、何だと!?!」

副官「そんな、勝手に!?!」

武蔵とその生徒の引き渡し、更に捕獲したRATも引き渡しに功と副官は、反発し

古庄「横須賀女子海洋学校の指導教官の古庄です・・・武蔵は、既に我が校が救出しています・・・また、捕獲したRATについては、既にブルーマーメイドに引き渡して処理する事が決まっています・・・引き渡す必要はありません」

古庄もボガートに対して、その必要はないと拒否するが

ボガート『そんな事は問題ではない!!・・・直ちに引き渡せ!!』

ボガートは、そんな事は問題ではないと言って、引き渡せを強行する。

古庄「抗議します!!・・・本作戦の指揮は、私に委ねられております・・・よって、武蔵の生徒及びRATの引き渡す必要はありません!!」

それに対して、古庄は、再度引き渡しはしないと抗議する。

ボガート『・・・引き渡しを拒否するならば・・・此方も実力を持って、強行する・・・抵抗するならば、貴官らを撃沈する・・・』

ボガートは、引き渡しを拒否するならば実力を持って、強行すると言って、更に抵抗するならば、貴官らを撃沈するとまで警告して来た。

武蔵、甲板

次郎「撃沈!?!・・・米軍の奴ら・・・本気なのか!?!」

薫「相手は学生艦なの!?!」

龍之介「・・・」

国土交通省、国土保全委員会

委員会幹部A「これは、如何いう事ですか深町国交相?!」

米軍の要求と警告に委員会の幹部は、驚愕しながら深町を問い詰めるが

深町「私にも分からない・・・だが、米軍は、本気だ・・・キング大統領にホットラインを・・・」

深町にも分ならず、如何いう事なのか分らず、キングとの電話会談を開く。

武蔵、甲板

龍之介「・・・それが奴らのそもそもの目的なのかもな・・・」

薫「如何いう事兄さん?」

龍之介「真霜から聞いたんだが、そもそも事件の原因になったRATは、アメリカが作った生物兵器から生み出されたものらしい・・・」

龍之介は、真霜からの情報を薫と明乃、もえかに言う。

薫「えっ!?!じゃ!」

龍之介「おそらく奴らに引き渡しせば・・・生徒達は、保護と言う形で捕獲したRATと一緒に処分されるだろう・・・運悪ければ実験台にされるかもな・・・」

そして、米軍の魂胆も見抜いていた。

もえか「そんな・・・そんな事が許される訳が・・・」

米軍の企みにもえかは、そんな事が許される訳がないと言ひ張るが龍之介「それがアメリカだ! . . . 何をやっても大国だから許される. . . .」龍之介は、もえかにそれがアメリカのやり方だと言つて、悔しがる。

ホワイトハウス、会議室

一方、ホワイトハウスの会議室では、キングと深町が電話会談を行つていた。

キング「ハローミスター深町! . . . 貴方から直接電話を頂けるとは、驚きですな. . .」

深町『大統領閣下. . . 直ぐに艦隊への引き上げ命令を出してください!!』

深町は、キングに直ぐに艦隊の引き上げ命令を出すよう要求するが

キング「それは、できない相談ですな. . . ミスター深町!」

キングは、拒否する。

深町『大統領閣下! . . . 相手は、学生なんですよ!! . . . それに民間人を殺せば貴

国の国際問題になりますよ!!』

深町は、学生艦を撃沈するば、国際問題になると訴えるが

キング「その事ならご心配なく: . . 既に世界には、横須賀女子海洋学校の生徒は、日本政府が極秘に制作した新種のウイルスに侵されている. . . よつて我国は、全世界の感染を抑える為、横須賀女子海洋学校の艦艇及び生徒を一時的に保護するとね. . .」

それに対して、キングは、既に横須賀女子海洋学校の生徒は、新種のウイルスに感染

している事、そして、それを日本政府が極秘に開発したと偽の情報を世界に流し、手を打っていたのだ。

深町『あ、貴方と言う人は・・・』

キング「では、これで・・・せいぜい他の国との対応に頑張る事ですな・・・」

そう言つて、キングは、電話を切る。

国土交通省、国土保全委員会

委員会幹部B「深町国交相・・・」

深町「・・・最早・・・」

委員会幹部C「えっ!？」

深町「最早・・・総理は不要と言う訳か・・・あれだけ利用するだけ利用しやがって・・・」

この・・・この人間のクズ野郎が!!」

あれだけ田沼を利用するだけ利用して、あつさり切り落とし、更に汚名まで着せて悪者にした。

そんなキングのやり方に深町は、怒りを露にする。

横須賀ブルーマーメイド庁舎

真霜「如何すれば良いの・・・」

この状況では、ブルーマーメイドの主力部隊は、まだフィリピンに展開中で更に付近

にいる平賀部隊は、壊滅状態。

とても米太平洋艦隊とは、戦えない状態だ。

更に空母大鳳もまだ九州沖を北上中で例え艦載機を発進しても間に合わない。

如何すれば良いのか真霜は、迷う。

てんじん、艦橋

副官「攻撃しましょう!!・・・このまま生徒を渡す訳には・・・」

てんじんでも副官が米艦隊を攻撃をしようと言うが

功「冷静に馴れ・・・学生に米軍と戦えと言うのか・・・無謀だ!・・・しかも此方は、旧式で、あちらは、最新式!・・・とても勝ち目はない・・・」

功は、米軍相手に勝ち目はないと言って、副官を止める。

古庄「ん・・・」

古庄も如何すれば良いか迷っていた。

原子力ミサイル巡洋艦ロングビーチ、艦橋

一方、米太平洋艦隊旗艦の原子力ミサイル巡洋艦ロングビーチの艦橋では、ボガートがてんじんからの応答を待っていた。

ボガート「大統領からの指示は?」

副官「ありません・・・判断は、我々に委ねられています!」

キングからの指示がない以上、判断は、指揮官であるボガートに委ねられていた。

ボガート「ん・・・10分後に学生艦1隻を撃沈する!!」

ボガートは、見せしめとして、10分後に学生艦1隻を撃沈を命じる。

武蔵、艦橋

薫「このまま何もしないで生徒を渡すの・・・」

このまま何もせず生徒を渡すのか

『・・・』

隣で明乃ともえかが心配しそうな顔をする。

龍之介「誰がそんな事するか!」

薫「えっ?」

龍之介「これ以上、奴らの思い通りになって堪るか!!」

だが、龍之介は、余りにも好き勝手な米軍に腹が立ち、これ以上、思い通りになって堪るかと言言する。

薫「如何するの?」

龍之介「次郎!・・・白鳳は、まだ使えるか?」

次郎「大丈夫だ!まだ行ける!!」

薫「兄さん雅か!」

龍之介「白鳳のハイパーメーサー砲で敵に打撃を与え、その隙に学生艦を逃がす!!」
龍之介は、白鳳のハイパーメーサー砲で米太平洋艦隊に打撃を与えて、混乱している隙に学生達を逃がそうと言うのだ。

薫「そんな事をしたら、米軍に多数の死者が……」

龍之介「今そんな事を考えている暇はない!!……やるしかないんだ!!……薫は、八神とこいつらを連れて避難しろ!!」

薫「分かった……岬ちゃん、知名さん、手伝って!!」

『はいー!』

薫は、ワクチンで眠っているはやてをおんぶして、明乃ともえか達と一緒に晴風に避難する。

龍之介「いくぞ!!」

次郎「ああ!」

龍之介と次郎が白鳳へと戻ろうとしていた。

その時

ドオオ……!!

突然、地震の様な振動が発生し、周囲が揺れる。

次郎「な、何だ!!」

龍之介「地震か？」

突然の地震に龍之介と次郎は、何事かと分からなかった。

ピ・・・ピ・・・ピ・・・ピ・・・!!

揺れと同時に次郎が持っていた無線機から通信が入る。

次郎「如何した？」

三郎『艦長！・・・レーダーが浮上してくる物体を確認!!』

白鳳のレーダーが浮上してくる物体を探知する。

次郎「物体!?!・・・敵の潜水艦か？」

次郎は、浮上してくる物体が米軍の潜水艦かと察したが

三郎『違います!!・・・こ、こんな巨大な物体は・・・艦船などではありません!!』

浮上してくる物体は、潜水艦ではなく、より巨大な様だ。

てんじん、艦橋

古庄「な、何!?!」

やがて、横須賀女子海洋学校の増援部隊と米太平洋艦隊の間の海面が膨らみ

其処から生物の背びれと尻尾の様なものが出現する。

武蔵、艦橋

龍之介「雅か・・・奴か!?!」

その背びれと尻尾を見た瞬間、龍之介は、奴だと確信する。

そして、龍之介達の前に、その巨大生物は、姿を現した。

その姿は、まるで恐竜で、全身が黒く、青白く光る背びれ、大きさが1000m程の巨大な生物。

次郎「ご、ゴジラ!？」

その巨大生物は、正しく龍之介達が探していたゴジラだった。

てんじん、艦橋

功「ば、馬鹿な!?!?!?! 何故ゴジラが此処に?！」

ロングビーチ、艦橋

副官「何だあれは!?!」

みくら、艦橋

平賀「何なの、あれ?！」

ゴジラ出現に各所が驚愕する。

晴風、艦橋

芽衣「何あれ!?!」

志摩「うい．．．」

ましろ「生き物なのか．．．」

晴風でもましろ達がゴジラを見て、驚愕していた。

武蔵、甲板

もえか「生き物なの？」

明乃「もかちゃん！」

そして、晴風に避難し様としていたもえかと明乃もゴジラを見て、啞然とし

薫「あれは・・・ゴジラ!？」

薫もゴジラを見た途端、恐怖に怯える。

出現したゴジラは、吠えながら、周りを見る。

その目は、まるで獲物を探しているかの様な目だ。

龍之介「次郎、無線機を貸せ！」

次郎「は、はい！」

龍之介は、次郎から無線機を借り

龍之介「・・・此方はブルーマーメイド艦隊指揮官の山本龍之介だ・・・てんじん以下の横須賀海洋学校艦艇及び米艦艇に告ぐ・・・現在出現した巨大生物に対しての攻撃は、控えろ!・・・繰り返す!・・・攻撃は、するな!!・・・」

横須賀海洋学校艦艇及び敵である米太平洋艦隊に対して、ゴジラへの攻撃を控えろと命じる。

龍之介は、ゴジラが攻撃した相手に必ず攻撃してくる事を知っていた。だから、予め現場にいる艦艇にゴジラへの攻撃を控えろと命じたのだ。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

真霜「龍之介・・・あれが・・・貴方が言っていた・・・ゴジラなのね!」

真霜は、龍之介からの警告を聞いて、出現した生物がゴジラだと認識する。

てんじん、艦橋

古庄「全艦に通達!・・・先程出現した巨大生物には、攻撃を控える様に!」

副官「分かりました。」

龍之介の警告を聞き、てんじん以下の横須賀海洋学校艦艇やアドミラル・グラフ・シユ

ペーは、攻撃を控える。

だが、それを無視する部隊が有った。

米太平洋艦隊である。

ロングビーチ、艦橋

副官「いかがいたしましたでしょうか?」

ボガート「たかが巨大なトカゲに何を怯える・・・攻撃だ!!・・・我々の邪魔をする

者は、容赦なく排除する!」

ボガートは、龍之介の警告を無視し、更にゴジラを侮って、攻撃を命じる。

副官「はっ！・・・総員戦闘配置に着け!!」

ボガートの命令のもと、米太平洋艦隊は、包囲を解き、攻撃の照準をゴジラに向ける。そうとも知らずにゴジラは、唯、その場を動かない。

そして

ロングビーチ、艦橋

ボガート「Volley!!」

米太平洋艦隊は、一誠に砲撃を開始！

砲弾が次々とゴジラの頭部に命中する。

てんじん、艦橋

てんじんのレーダー主「米艦が発砲!」

功「馬鹿たれが!!・・・警告を無視しおって!!」

武蔵、甲板

龍之介「警告を無視しやがって・・・」

次郎「馬鹿たれが!!」

警告を無視した米太平洋艦隊に龍之介は、腹をかく。

とは言え、米太平洋艦隊の砲撃は、次々と命中、更に最新式の対艦ミサイルが次々と発射されゴジラの頭部に命中する。

だが、想像通り、そんな攻撃は、ゴジラには、全く通用しなかった。

米太平洋艦隊の圧倒的な火力にゴジラは、ビクともせず、逆に今度は、ゴジラが米太平洋艦隊に向かってきた。

ロングビーチ、艦橋

ロングビーチのリーダー主「巨大生物が此方に向かってきます!!」

副官「なんて奴だ!!・・・あれだけの攻撃をくらっても死なないとは・・・ば、化け物だ!!」

圧倒的な火力にビクともしないゴジラを見て、艦橋にいる者は、驚愕していた。

ボガート「怯むな! 攻撃を続行しろ!!」

それでもボガートは、攻撃を続行しろと命じる。

無駄な足掻きだ。

それを知っているかの様にゴジラの目が攻撃してくる米太平洋艦隊を睨む。

そして、ゴジラの背びれが青く発光し

武蔵、甲板

龍之介「やばい!?!伏せろ!!」

ゴジラの背びれが青く発光した瞬間、龍之介は、熱線が来ると予測し、薰ともえか、明乃に伏せるよう命じる。

薫は、急いで2人を伏せさせる。

次の瞬間

背びれ発光の1秒後にゴジラの口から熱線が米太平洋艦隊に向けて放射され
『うわあ……!!』

熱線によって、艦隊の半数が一瞬で全滅し、辺りが火の海へと一変する。

武蔵、甲板

もえか「酷い!？」

明乃「……」

薫「ん……」

余りの惨酷さに3人は、恐怖に怯える。

てんじん、艦橋

古庄「……」

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

真霜「な、何て破壊力なの!？」

ゴジラの熱線の破壊力に各所は、驚愕する。

国土交通省、国土保全委員会

委員会幹部C「す、凄い!？」

委員会幹部A「あの米軍が一瞬に!？」

委員会幹部B「深町国交相!・・・これが彼らが言っていたゴジラなのですか?」

委員会の幹部達もゴジラの脅威に驚愕し

深町「そうだ・・・我々は、出会ってしまった・・・最大の恐怖に・・・」

深町は、最大の恐怖だと言って、困惑する。

とは言え、ゴジラの熱線で米太平洋艦隊は、半数が全滅し、辺りは、火の海になっていた。

ロングビーチ、艦橋

ロングビーチの通信主「巡洋艦ベルナップ、ジョセフアス、ウェインライト消滅!・・・
駆逐艦バリー、ジョン・ポール・ジョーンズ、カーティス・ウイルバー、スタウト、ジョン・S・マケイン消滅!・・・強襲揚陸艦ワスプ及び巡洋艦ベインブリッジ炎上中!!・・・
生き残った艦艇は、各艦の生存者を救助中!!」

米太平洋艦隊の被害は、甚大で、生き残った艦艇は、各艦の生存者の救助に当たるあり様だった。

ホワイトハウス、会議室

ホワイトハウスでも米太平洋艦隊の被害が報告されていた。

大統領補佐官「大統領閣下・・・完敗です!」

キング「ば、馬鹿な!!」

米太平洋艦隊の壊滅にキングは、驚愕する。

米太平洋艦隊を壊滅に追いやったゴジラは、壊滅した米太平洋艦隊を残し、北東へと向かう。

武蔵、甲板

次郎「何所へ向かうきだ？」

龍之介「このままの進路だと……不味い!」

進むゴジラの方角を見て、龍之介は、ある予測をする。

龍之介「このまま行けば、奴は、東京へ向かう!!」

『えっ!?!』

龍之介の予測は、当たっていた。

ゴジラは、確実に東京へと向かっていた。

横須賀ブルーメイト庁舎、作戦本部

BPF隊員「巨大生物! ……進路を北東へ……東京へ向かう模様!」

真霜「何ですって!?!」

作戦本部でもゴジラが東京へ向かっている事を察知していた。

国土交通省、国土保全委員会

国交職員『宗谷監督官からの報告でゴジラが此方に向かっているとの事です!!』

そして、国土保全委員会でも真霜からの報告が齎されていた。

委員会幹部A「避難状況は、如何なっている?」

国交職員「現在、避難を続行しています・・・」

武蔵侵入以来、警報は、出したままで、市民の避難は、続けていた。

委員会幹部B「何とかならないんですか深町国交相!・・・奴を止めるとか?」

深町「止める!?!・・・如何やって奴を止めるんだ?・・・先のを見ただろう!・・・我々の技術では、奴に太刀打ち出来る訳がない!!・・・ましてや、戦力も無い、この状況でどう戦うんだ?・・・それより今は、1人でも多くの市民を避難させる事が先決じゃないのか!!」

深町の言う通り、今の技術でゴジラと戦うなど自殺行為だ。

ましてや、先の武蔵との戦闘で傷ついているのに、戦う事などできない。

ならば、それより今できる事は、1人でも多くの市民を避難させる事が先決だと委員会の幹部を説得する。

委員会幹部B「分かりました・・・急がせます!!」

委員会幹部も納得し、市民を避難を急がせる。

そんな時

国交職員『横須賀女子学校からホットラインです!!』

またしても、真雪からの電話連絡が入って来た。

深町「ん？」

真雪『校長の宗谷真雪です・・・深町国交相・・・私は・・・横須賀海洋学校を使って・・・ゴジラの侵入を阻止します!!』

真雪は、再び横須賀女子海洋学校のフロート艦を使って、ゴジラの侵入を阻止するつもりだ。

深町「無駄だ宗谷校長!!・・・そのような作戦では、ゴジラは、止められない!!」

真雪の作戦に深町は、反対する。

真雪『しかし、他に方法が・・・』

だが他にゴジラを止める方法は無い。

その時

龍之介『1つだけ方法が有る!!』

『え?』

突然、龍之介からの通信が入って来た。

武蔵、甲板

龍之介「白鳳と烈風でゴジラを迎撃する!」

何と龍之介は、白鳳と烈風でゴジラを迎撃しようと言うのだ。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

真霜「無茶よ!!・・・艦と1機じゃ、あの怪物には、勝てないわ!!」

龍之介の提案に真霜は、反対する。

龍之介『だが他に方法はない・・・それに俺達は、Gフォースだ!・・・Gフォースは、ゴジラと戦うのが使命!・・・今がその時なんだ!!』

龍之介は、Gフォースの使命だと言って、断固やると言い張る。

真霜「龍之介・・・行かないで!」

それに対して、真霜は、行かないでと言う。

龍之介『真霜?』

真霜「行かないで龍之介!・・・行けば龍之介は、死んでしまいそうな気がするの・・・だから行かないで龍之介!!」

このまま龍之介がゴジラと戦えば確実に死ぬ事を真霜には、分かっていたのだ。

龍之介『ん・・・すまないが・・・その命令は、聞けない!』

だが、龍之介は、その命令を拒否した。

真霜「如何して!?!」

龍之介『今やらなければ、誰が奴を止めるんだ?・・・俺達しかいないだろう!!・・・』

それに・・・俺には、守らなければいけないものが有る!」

そして、龍之介は、真霜に自分には、守るものが有ると言う。

真霜「えっ!?!」

龍之介『それは、お前だ真霜!!・・・お前を守る事こそ俺がやるべき事何だ!!・・・だから死なない!・・・絶対に生きて帰って来る!!』

龍之介の守るべきもの

それは、真霜だつと、打ち明け、更に絶対に生きて帰って来ると言つて、通信を切る。

真霜「龍之介・・・」

それを聞いた途端、真霜は、そのまま画面を見て

真霜「・・・必ず・・・必ず生きて帰ってきて!!」

そう言つて、龍之介の無事を祈つた。

武蔵、甲板

龍之介「行くぞ!!」

次郎「何処までも付いて行きますませ准将!!」

次郎は、白鳳へ、そして、龍之介は、烈風へと向かう。

薫「2人とも無事で帰って来てね!!」

薫も龍之介と次郎の無事を祈りながら見送る。

龍之介は、烈風に乗り込み、ゴジラへと向かう。

白鳳、艦橋

次郎「準備は、いいか野郎ども？」

三郎「いつでも行けますよ!!」

次郎「発進!!」

白鳳も武蔵との接岸を切り、ゴジラへと全速で向かう。

一方、ゴジラは、進路変わらず東京へと目指していた。

烈風、操縦席

龍之介「俺が奴の注意を曳き付ける・・・その間に白鳳は、ハイパーメーサー砲で奴の足を止めろ!!」

白鳳、艦橋

次郎「了解!・・・ハイパーメーサー砲発射準備!!」

白鳳の艦首部分が開き、ハイパーメーサー砲の発射準備をする。

烈風は、全速でゴジラに接近

30mm機関砲でゴジラの頭部を攻撃する。

30mm機関砲の射撃に気づき、ゴジラは、動きを止め、此方を向く。

烈風、操縦席

龍之介「気づいたか！・・・よろし！」

此方に気づいたゴジラに対し、龍之介は、更に頭部を攻撃し攪乱する。攪乱する烈風に対し、ゴジラは、熱線で反撃する。

龍之介「!?」

龍之介は、巧みに熱線を避けながら、頭部を攻撃続ける。

龍之介「良いぞ・・・」

ゴジラは、完全に烈風に釘付けの状態

その内に白鳳がゴジラの正面へと移動

白鳳、艦橋

白鳳の射撃主「ハイパーメーサー砲発射準備完了!!」

三郎「遂に・・・この白鳳が・・・我々の艦の力を発揮する時が来たか!!」

白鳳の射撃主「目標ロックオン!!」

次郎「発射!!」

白鳳からハイパーメーサー砲がゴジラ目掛けて発射。

ゴジラの胸部に命中する。

ハイパーメーサー砲を受けゴジラは、転倒する。

次郎「やった!!」

『はっ!?!』

ゴジラの転倒に付近で見えていた者達は、驚愕する。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

BPF隊員「やったわ!」

横須賀のブルーマーメイド庁舎でも、ゴジラが白鳳の攻撃で転倒したのを見て、BPF隊員の1人が歓喜を上げるが

真霜「……」

真霜は、歓喜を上げず、黙示する。

国土交通省、国土保全委員会

『おお……!?!』

現状を映像で見えていた委員会の幹部達は、白鳳の強さに驚くが

深町「……」

驚く幹部達の中で深町は驚かず、まだ終わっていないと現状を見る。

雅にその通りだ。

強力な一撃を食らったとは言え、ゴジラは、まだ生きついていた。

転倒から体勢を立て直し、烈風から強力な一撃を食らわせた白鳳の方を向く。

白鳳、艦橋

次郎「奴がこっちを向いている！・・・再発射用意!!」
ゴジラがこっちを向いた事に次郎も気づき、ハイパーメーサー砲の再発射用意を命じる。

そして

次郎「発射!!」

白鳳から続けてハイパーメーサー砲が発射、それに乗じて、ゴジラも熱線で撃ち返してきた。

双方の攻撃が交差し、強い光を発し、左右へと移動する。

『!?!』

やがて、凄まじい爆発を起こり、ゴジラは、再び転倒し

白鳳、艦橋

G F 隊員「うわあ!?!」

G F 隊員「武器管制及びシステム破損!・・・ダウンします!」

次郎「何!?!」

その影響で白鳳の機器の殆んどが火花を出し、ダウンする。

次郎「ど、如何した!?!」

更に艦が傾き

G F 隊員「艦長!・・・機関室が火災!!機関停止します!!」

さっきの影響で機関室が火災を起こし、レーザー核融合炉が緊急停止した。

白鳳の操舵主「艦長!・・・高度が落ちていきます!!」

機関のレーザー核融合炉の停止でエンジンが止まり、白鳳は、右に傾きながら、降下して行く。

武蔵、甲板

薫「次郎君!」

その光景を見て、薫は、困惑する。

三郎「艦首を上げるんだ!!」

白鳳の操舵主「はっ!」

何とか着水しようと艦首を上げるが

白鳳の操舵主「墜落します!!」

次郎「総員!衝撃に備え!!」

白鳳は、海上に墜落、着水した。

烈風、操縦席

龍之介「はっ!?!」

その光景を見た龍之介は、直ぐに無線で状況を確かめる。

白鳳、艦橋

次郎「うう……全員無事か？」

三郎「いてえ……」

GF隊員「大丈夫です……」

着水の衝撃で殆んどの連中は、頭を打っていたが、無事であった。

龍之介『次郎！……次郎！……無事か!?』

そんな中で、龍之介からの通信が来て

次郎「はく何とか……各部被害状況を報告！」

次郎は、それに応答し、各部の被害状況を問う。

GF隊員「武器管制システム破損！……ハイパーメーサー砲及び各兵装使用不能！」

GF隊員「機関室火災！機関停止！！……現在消火作業中！！」

白鳳の操舵主「操舵もナビシステムも使用不能!!」

武器管制システムは、さっきの影響で破損しており、ハイパーメーサー砲及びその他の兵装は、使用不能。

更に機関も操舵も使用不能。

被害は、甚大だった。

その間にゴジラは、再び態勢を立て直し、ゆっくりと白鳳へと向かってくる。

烈風、操縦席

龍之介「不味い!?・・・次郎!・・・急いで態勢を立て直すんだ!!」

龍之介は、急いで次郎に体勢を立て直すよう言うが

次郎『駄目です!!・・・さっきの攻撃の影響で殆どどのシステムが破損!・・・態勢を立て直せません!!』

白鳳の被害が甚大で体勢を立て直せないと龍之介に伝える。

龍之介「何だって!?・・・くそ!」

それを聞いた龍之介は、何とか白鳳を助け様と30m機関砲を撃ちながらゴジラに突進して行く。

30m機関砲の攻撃を浴びながら、ゴジラは、熱線で反撃し、烈風は、避けるが、右翼を破損

龍之介「・・・ゴジラ・・・」

煙を出しながらも猛スピードでゴジラへと突進して行き

龍之介「うわあ・・・!!」

ゴジラの右目に体当たりした。

体当たりで機体は、木っ端微塵になり、積んでいた93式空対艦ミサイル2発と300ガロン増槽2基も誘爆した。

当然、付近に龍之介の姿は、見当たらない。爆発に巻き込まれた様だ。

その爆発でゴジラは、右目を負傷する。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

真霜「いやあ・・・!!」

それを見ていた真霜は、あまりのショックに悲鳴を上げて、泣き崩れる。

武蔵、甲板

薫「そ、そんな・・・」

そして、薫もショックを受けて、言葉が出なくなつた。

白鳳、艦橋

次郎「准将!?!?」

龍之介の死に次郎も悔し涙を出していたが

三郎「艦長!?!?ゴジラが接近してきます!!」

次郎「くう!」

龍之介の必死の体当たり攻撃で右目を負傷したとは言え、ゴジラは、まだ健在で、白鳳に向かつてきた。

次郎「野郎!?!?次は、俺達ってか?」

龍之介をやったので、次は、自分達だと悟る次郎。

やがて、ゴジラは、白鳳に向けて熱線を吐こうとする。

武蔵、甲板

薫「止めて!!・・・もうこれ以上、私の大事な人を奪わないで・・・!!」

それを見た薫は、もうこれ以上、私の大事な人を奪わないでとゴジラに向かって叫ぶ。

そして、ゴジラが熱線を吐こうとしたその時だった。

ヒュ・・・ン・・・ドーン!!、ドーン!!、ドーン!!、ドーン!!

何所からか、ミサイルが四方向からゴジラの頭部に命中した。

白鳳、艦橋

次郎「何だ!?!」

武蔵、甲板

薫「今のは、何所から?」

行き成りのミサイル攻撃に何が起きたのか分らなかつたが、後から四方向から春乱4機が低空から上昇して来た。

しばらくすると、横須賀女子海洋学校所属の増援部隊の後方から航空機の大編隊が現れた。

薫「あれは!?!」

それは、紛れもなく、空母大鳳から発進した攻撃隊だった。

春乱、操縦席

なのは「皆、行くよ！」

『はっ！』

現れた攻撃隊70機は、ゴジラに対して、ミサイルや爆弾を浴びせた。

春乱の攻撃にゴジラも反撃するも、大量のミサイルや爆弾の命中で身動きが取れず、遂に東京を目指すのを諦めたのか、太平洋へと逃げ始めた。

GF隊員「逃がすか！」

逃げるゴジラに対し、攻撃隊は、追撃する。

数分後、攻撃を受けながら、ゴジラは、海中へと姿を消した。

春乱、操縦席

なのは「攻撃止め！・・・これより帰還する！」

ゴジラが去ったのに乗じて、攻撃隊は、攻撃を止めて、帰還する。

武蔵、甲板

薫「終わったのね・・・」

薫は、ようやく戦いが終わった事を理解する。

そんな時

はやて「う……う……ん!？」

ワクチンで眠っていたはやてが目を覚ました。

薫「はっ!？」

はやて「此処は……」

薫「はやてちゃん!……気が付いたのね?」

はやて「薫先輩!?!……何や?」

はやては、何が何だか、分らなかつた。

国土交通省、国土保全委員会

ゴジラ撃退の映像を見て、委員会の幹部達は、歓喜の声を上げていた。

しかし、その中で深町は、龍之介を犠牲にした事に歓喜を上げられなかつた。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、作戦本部

そして、此処にもBPF隊員達が歓喜を上げている中、真霜は、1人泣き崩れていた。

真霜「……」

それもその筈、自分が愛していた龍之介が死んだ。

しかもゴジラに体当たりして、仲間を守った。

普通なら名誉なのだが、真霜にとっては、悲しみしかなかった。

真霜「何よ!……生きて帰るって、言ったのに……死ぬなんて……」

BPF隊員「宗谷監督官……」

真霜「この……馬鹿……!!」

真霜は、泣きながら馬鹿と叫ぶ。

だが数分後の事だった。

『……馬鹿とは、何だ!!』

突然、誰からかの通信が飛び込んできた。

真霜「えっ!?!」

真霜は、何かと思い顔を上げて聞くと

龍之介『言つたろう!……必ず生きつて帰るて……』

真霜「龍之介!?!」

それは、紛れもなく死んだ筈の龍之介からの通信だった。

真霜「本当に龍之介なの?」

本当に龍之介なのか確認すると

龍之介『他に誰が居るんだよ!』

まさしく本人からだった。

実は、体当たり寸前で脱出していたのだ。

真霜「もう……」

龍之介の無事に真霜は、喜んでいいのか、安心していた。

白鳳、艦橋

次郎「何だよ……准将もタフだよ……」

龍之介の通信を聞いた次郎は、安心する。

武蔵、甲板

薫「良かった……」

薫も後から来た教員達から無線を借りて、聞いて、安堵する。

やがて、後方から空母大鳳が現れ、艦載機を收容しながら、横須賀女子海洋学校所属の増援部隊に合流する。

合流後、SH60 G 3機とUH-1G 3機が発艦し、残った武蔵の生徒の救出及び戦闘不能になった白鳳と平賀部隊への救援を行った。

米艦隊へも救援の要請を出したが、此方でやるとあつさり、拒否された。

救助中、生徒達は、空母大鳳や飛んでいるSH60 GやUH-1Gに驚愕していた。

まあ彼らにとっては、この世界では、あり得ない物を見ているのだから

漂流中の龍之介も無事に救助される。

数時間後、武蔵の生徒全員は、てんじん及び空母大鳳に收容され、武蔵は、比叡とアドミラル・グラフ・シユペーに牽引、晴風は、てんじんで牽引、白鳳は、空母大鳳に牽

引されて、横須賀へと帰還のとに着く。

5月5日

17:00

横須賀港

全艦が横須賀に到着した時は、もう既に空は、夕暮れになっていた。

港には、既に真雪や真霜達が出迎えに来ていて、搬送の為の救急隊も待機していた。

全艦が棧橋に接岸し、はやて達、負傷者を降ろす中、てんじんに牽引された晴風もタグボート2隻に押され、棧橋に接岸される。

棧橋に接岸され、晴風の生徒達が次々と下艦し始める。

皆が続々と下艦する中、明乃は、ふつとある事に気づき、後ろを向くと五十六が1人で降りていた。

明乃は、おいでおいでと言うが、五十六は、助けは、要らないと言っているのか、明乃の上を飛び乗って行った。

明乃達が下艦する中、龍之介は、薫と次郎に担がれて、一緒に下艦する。

真霜「!?」

2人に担がれて、下艦して来る龍之介を見つけ、向かう。

ましろ「帰って来た！」

多聞丸を抱きながら、ましろは、ようやく帰って来たかと理解する。

明乃「陸だぁ・・・!!」

明乃も陸に降りて、ようやく帰って来たかと涙ながら理解した。

鈴「帰ってこれた・・・!!」

幸子「何かまだ信じられません・・・」

芽衣「夢じゃない・・・!」

志摩「うい・・・」

雅にあの出港から32日間ぶりに母港である横須賀へと帰ってこれたのである。

夢じゃないと芽衣と志摩は、喜びながら地面を叩く。

それを見た明乃、ましろ、鈴は、ニッコリとする。

龍之介達も陸に降り

龍之介「もう良いよ!」

と言つて、1人で歩く。

すると

龍之介「真霜!?!」

駆け付けてきた真霜に気づき

真霜「ん・・・」

帰って来た龍之介に真霜は、何も言わない。

龍之介「その……ただいま……」

それに対して、龍之介は、ただいまと言って、笑うが
バシッ！

それを聞いた真霜は、龍之介をピンターする。

『あっ!?!』

それを見ていた者は、驚愕する。

龍之介「!?」

行き成りピンターされた龍之介は、何故かと思ひ真霜を見ると、真霜は、涙を流して
いた。

龍之介「真霜!?!」

真霜「馬鹿!……. どんだけ心配したか…….」

真霜は、心配していた。

なんせ龍之介は、死にかけたのに、平気である。

ちつとも人が心配していた事を考えていなかった見たいだったので、龍之介を殴つ
て、分からせようとしたのだ。

龍之介「御免!……. 御免!」

真霜の心配する気持ちを分かった龍之介は、謝りながら真霜を抱く。

真霜「もう二度つとしないでね！」

龍之介「ああ！」

龍之介は、もう二度つと無茶な事は、しないと約束する。

次郎「良いな准将は・・・」

2人の抱き合いを見て、嫉妬する次郎。

薫「何言ってるの！・・・私が居るじゃない！」

それに対して薫が自分が居るじゃないと次郎に言う。

次郎「そうだな！」

薫の言葉に次郎もそうだなと答え、2人は、お互いに顔を合わせる。

そんな時

真雪「薫さん！」

薫「真雪さん!？」

真雪が薫の元に来て

真雪「よく無事で戻ってきてくれたわね！」

と言つて、無事に帰つて来た事を褒める。

薫「山本薫二等監督官！・・・ただいま晴風の生徒と共に横須賀に帰還いたしました

!!
」

それに対して、薫は、ただいま晴風の生徒と共に横須賀に帰還いたしましたと敬礼しながら真雪に報告する。

その時、晴風に異変が生じる。

ゴゴオ・・・！！

『はっ!?!』

突然の呻き音に明乃と薫は、後ろを向くと

呻き音を出しながら晴風が沈み始めているではないか

龍之介「此処まで俺達を送り届け様と損傷に耐えていたんだな・・・」

数々の戦闘を切り抜け、損傷に耐えながら、自分達を此処まで無事に送り届け、役目を終えたかの様に沈みゆく。

美甘「晴風が・・・」

ほまれ「誰か、止めて・・・」

麻侖「沈むなよお・・・!!」

沈みゆく晴風を見て、生徒達は、沈まないでと叫ぶ。

そんな中、明乃は、沈みゆく晴風に向けて、敬礼する。

それを見た、皆は、叫ぶのを止め、晴風に向けて、気を付けをする。

龍之介も真霜、薫達も晴風に向けて、敬礼をする。
皆に見守られ、晴風は、沈んだ。

こうして、1ヶ月に及んだRAT事件は、終わりを告げた。

新起動編

第1章 新生Gフォース起動！

5月5日

事件を解決し、無事に横須賀に戻った龍之介達と晴風の生徒達は、晴風の沈没を見守った後、事件の事情聴衆は、後日と言う事で、皆それぞれ帰途に着いた。

宗谷家

龍之介は、久々に宗谷家に帰宅する。

真霜とましろも一緒に帰宅。

唯、真雪は、後処理が有ると言つて、横須賀女子海洋学校に戻り、薫の方は、次郎と一緒に寮へと帰つた。

帰宅した後、ましろは、多聞丸を連れ、自分の部屋に入り、そのまま眠つてしまった。多聞丸については、本来宗谷家では、猫を飼つてはいけない事になっているのだが、薫の説得でましろが面倒を見る事で飼う事を許された。

ましろが寝しづまった後、龍之介と真霜は

龍之介「ましろは、寝たのか？」

真霜「うん!ぐっすりだね!・・・結構疲れていたのね!」

龍之介「そりやそうだろう・・・出てから1ヶ月!・・・気が抜ける事がなかつたんだらう・・・疲れるのも当たり前だ!」

真霜「そうね!」

真霜は、そう言つて、龍之介に近寄る。

龍之介「な、何だよ?」

龍之介は、何だろうと思つと

真霜「ねえ龍之介!・・・今日は、久しぶりに・・・やらない!」

真霜は、龍之介に快樂を要求して来たのだ。

龍之介「今事件が終わつて、帰つて来たのにか?」

確かに今事件が終わつて、帰つて来たのに快樂するなんて気が乗らなかつたが

真霜「当たり前でしょ!・・・寂しかったんだから・・・」

真霜は、寂しくて仕方が無かつたのだ。

龍之介「ん・・・はあ・・・分かつたよ・・・」

真霜の我儘に龍之介は折れ、自分の部屋で真霜と快樂をする。

龍之介は、真霜の乳房を責め、真霜は、龍之介の肉棒を責める。

久々とは言え、2人の快樂は、神秘的だつた。

真霜「ねえ龍之介？」

快樂後、真霜は、龍之介にある事を問う。

龍之介「何だ？」

真霜「事件は、終わったけど……ゴジラとの戦いは、これから始まるんだよね？」
それは、今回事件の中でゴジラが出現した事で、龍之介達の戦いが始まるのではない
かであった。

龍之介「これからって!? ……そんなに直ぐには、来ないぞ！」

それに対して、龍之介は、直ぐには、ゴジラ戦は無いと告げる。

真霜「そうなの？」

龍之介「負荷を追っているからな……半年か、それとも数年か……奴の活動が
活発になるのは、いつになるか……分からないんだ。」

龍之介の言う通り、ゴジラの生態は、謎に満ちていて、活動が活発になるのは、いつ
になるのか分らなかった。

唯分かっているのは、生命が不滅と帰巢本能、磁性体がある事しか分かっていない。

真霜「そう……なら良かった……しばらくは、無いんだ……」

しばらくは、無い事に真霜は、安心するが

龍之介「何安心しているんだ! ……ゴジラが出た以上、何かしらの対策を講じなけ

ればならない!!」

真霜「分かっているわよ!」

龍之介「本当に分かっているのか?」

真霜「むう……」

真霜は、顔を丸くする。

龍之介「兎に角だ!……ゴジラ戦の時は、俺に協力しろよ!」

真霜「……いつから私に命令する身分になったの?」

龍之介「ゴジラ戦の時は、俺の方が上だからな!」

真霜「……まあ良いわ!……私は、信じているから……」

龍之介「ありがとう」

何だかんだと言って、2人は、眠りに着く。

ブルーマーメイドの寮、次郎の部屋

その頃、次郎と薫も快楽をした後、お互いに温もりを感じていた。

薫「ねえ次郎君!」

次郎「何だ薫?」

薫「晴風の生徒に私達の事……全部話そうと思うの!……私達の事全てを……」

薫は、前にましろに聞かれた事に答える為、晴風の生徒に自分達の事を全部話す気の

様だ。

次郎「何！俺達の事を全部あいつらに話す気か？」

薫の言葉に次郎は、驚愕し、本気なのか問う。

薫「うん！」

薫は、本気で話す気だ。

次郎「待て薫！・・・あいつらに全部話したところで、俺達の事など分かる訳無いだろう！・・・それに准将から俺達の事は、極秘になっているから勝手に破ったら厳罰だぞ!!」

次郎の言う通り、晴風の生徒に自分達の事を話しても分かる訳がない。

それどころか、勝手に機密情報を生徒に全て話せば、厳罰を受ける事になる。

薫「でもましろちゃんと約束したの！・・・それに向こうも既に薄薄気づいているかもしれないし・・・」

晴風の生徒達は、既に龍之介達の正体に薄薄気づいている見たいだ。

まあ、確かに戦闘機や空母に空飛ぶ艦を見たら、誰だって思うだろう。

薫「だから、私！・・・皆には、はつきりと言おうと思うの・・・向こうの世界の事や私達の目的を・・・」

次郎「薫・・・お前其処まで・・・分かったよ！」

薫の其処までの覚悟に次郎は、折れ

次郎「但し1度准将に相談してからだ……いいな!」

薫「うん!」

こうして、晴風の生徒に全て話す事は、龍之介と相談してからにした。

5月6日

事件解決から翌日、横須賀女子海洋学校では、事件に関わった生徒達の事情聴衆が行われた。

航海日誌や海図などの機密書類は、全て証拠の為、真雪に提出され、徹底的な調査が行われた。

横須賀基地、指揮官室

その頃、薫は、次郎と一緒に昨日の事について、龍之介に相談する為、指揮官室を訪れていた。

龍之介「そうか……やはり気づいていたのか……ましろの奴は!」

薫「!?!」

次郎「准将……もしかして……知ってたんですか?」

龍之介「この前、晴風に乗った時、薄薄だが……」

次郎から事情を聞いて、龍之介もましろが此方の事について、薄薄気づいてる事に龍

之介も気づいていた。

龍之介「で、如何するんだ？」

薫「私は、皆に話そうと思います・・・私達の事全てを・・・」

薫は、龍之介に対し、晴風の生徒に全て話す事を告げる。

龍之介「・・・それは、厳罰覚悟で言ってるのか？」

薫「はい！・・・私は、もうこれ以上、あの子達に隠し事はできません！！・・・それに今回の事件は、私が臨時の教員を引き受けた事から始まったんです・・・私が引き受けなければ・・・」

薫は、今回の事件は、自分の責任だと言い張るが

次郎「それは、違うぞ薫！・・・お前が引き受けようがなくても事件は、起きた！！・・・お前の責任じゃない！！」

それに対して、次郎は、お前の責任じゃないと言い

龍之介「次郎の言う通りだ！・・・今回の事件は、お前が居ても居なくても起きた事だ・・・そう自分を責めるな・・・それに俺も話そうと思うんだよ！」

龍之介も同じように言っ、自分の考えを伝えた。

『えっ!?!』

龍之介の考えを聞いて、2人は、驚愕する。

龍之介「今回の事件で我々の事は、全て明るみに出てしまった・・・まあ、いづれはばれる事だからな・・・この際、一部には、情報を公開し様と思う。」

今回の事件で龍之介達Gフォースの事は、一部には、明るみに出始めている。

ならこの際、事件に関わった生徒達には、情報を公開する事を考えていた。

薫「兄さん・・・其処まで・・・」

龍之介が其処まで考えている事に薫は、もう何も言えなくなつた。

龍之介「だが、まだこの件は、権藤中佐が戻つてから決める・・・薫は、それまで次郎の所に入る！」

だが、生徒に情報を公開するかは、地中海から帰還中の美由紀が帰投してから決める事になり、薫は、それまで宗谷家に帰る事を禁じられ、しばらく次郎の部屋に居候しろと命じられる。

次郎「えつ、俺の所!?!・・・良いんですか?」

それを聞いた次郎は、困惑する。

龍之介「このまま宗谷家に帰つたら薫は、間違ひなく、ましろに話すだろ!!・・・かと言つて、外にほつぽり出す訳にもいかんし・・・なら、お前の所に置いとけば大丈夫だろう・・・それにお前には、薫の事を任せているしな・・・」

このまま薫を外に置いて置く訳にも行かない、ならいつそ次郎の所に置いとけば龍之

介も安心するし、薫の事は、次郎に任せている。

次郎「准将……分かりました……薫の事は、お任せ下さい!!」

龍之介「頼むぞ！」

こうして、情報公開については、美由紀達が帰投してから決める事になり、薫は、しばらく次郎の部屋に居候する事になった。

数日後、今度は、事件を引き起こした裏取引や研究に関わっていた者達は、責任を取って、辞表を提出。

それ以外は、逮捕され、取り調べを受けている。

その中には、ホワイトドルフインの安全監督室室長で真霜の元許婚でもあった野田邦夫の名前もあった。

そして、この事件を引き起こした張本人である内閣総理大臣である田沼忠義にも及んだ。

特にアメリカ政府との裏取引で行われたRATの研究について、野党からかなり反発を受け、総辞職しろとまで意見が出ている有様。

それに対して、田沼は、何も弁解できず、唯、申し訳ありませんと謝罪するしかなかった。

5月9日

横須賀基地

幹部などが次々と肅清される中、地中海に派遣されていた美由紀達が横須賀に帰投した。

美由紀「帰還が遅れて申し訳ありません・・・権藤中佐以下地中海派遣部隊・・・ただいま帰還いたしました。」

美由紀は、帰還が遅れた事を謝罪しながら、龍之介に帰還した事を報告する。

龍之介「ご苦労!・・・無事で何よりだ!」

薫「権藤中佐!」

美由紀「山本中佐!・・・貴方が無事で良かったわ!・・・八神中佐は?」

薫「まだ検査で入院中ですが・・・もう直ぐ退院だそうです。」

はやては、まだ検査で入院中だが、もう直ぐ退院の予定。

美由紀「そう・・・」

美由紀は、2人が無事だった事に安心する。

龍之介「まあ、それは兎も角・・・指揮官室へ行こう!」

龍之介は、情報公開の事を決める為、指揮官室に向かう。

横須賀基地、指揮官室

指揮官室で龍之介は、美由紀に情報公開の事を伝える。

龍之介「と言う訳だ。」

美由紀「そうですね．．．山本中佐が其処まで考えているとは．．．」

情報公開の事を聞いた美由紀は、薫が其処まで考えている事に納得する。

薫「すみません権藤中佐！：私は、もうこれ以上、生徒達に隠す事はできません：

どんな厳罰でも受けるつもりです。」

薫は、美由紀に生徒の情報公開をするなら、どんな厳罰でも受けるつもりだと言う。

美由紀「そう．．．准将は、如何思っているのですか？」

龍之介「俺も薫の意見に賛成だ．．．このまま隠してもいづれは、ばれる事だ．．．な

らこの事件に関わった生徒には、情報を公開し様と思う。」

美由紀「参謀も」

功「私も賛成だ．．．合意的だ。」

龍之介「後は、中佐の意見だけだが．．．」

殆んどの幹部が賛成していて、後は、美由紀だけとなり、美由紀の判断は

美由紀「．．．はあ．．．貴方が其処まで覚悟しているなら．．．私は、もう何も反

対はしません。」

美由紀も賛成した。

薫「権藤中佐!？」

美由紀の賛成に驚く薫。

普通なら反対するのに如何してなのか

美由紀「一時的とは言え、貴方が教えた生徒達ですもの……直ぐには、納得できなくとも、いづれは、理解するでしょう……」

実は、美由紀も既に隠せない事は、分かっていた。

なら事件に関わった生徒だけでも、情報公開すべきだと賛成した。

それに一時的とは言え、薫やはやてが教えた生徒達だから、いづれは、理解するだろうと察したのだ。

薫「ありがとうございます権藤中佐!」

薫は、美由紀に感謝した。

美由紀「話は、変わりますが……肝心のゴジラの方は?」

話は、変わり、美由紀は、ゴジラの方は、如何なっているのか問う。

龍之介「行方は、不明だが……あの負荷では、しばらくは、出てこないだろう……事件の事後処理が終わり次第、RATの対策と共に取られるだろう。」

ゴジラの行方は、不明で対策などは、事件の事後処理が終わり次第、RATの対策と共に取られる予定。

美由紀「事件の事後処理は？」

龍之介「今関係者から事情聴衆が行われているし、それに関わった役人達が肅清されている最中だ……」

美由紀「米国からは、何か言ってきましたか？」

龍之介「まだ何も言っていないが……いづれ何か言ってくるだろう……あれだけの被害を受けているからな……」

太平洋艦隊の大敗後、アメリカ政府からは、何も発表が無い。

恐らく突然のゴジラ出現によつて、計画が頓挫してしまったせいで、如何するのか協議中なのだろう。

龍之介「まあ我々もしばらくは、動けないからな……」

そして、龍之介達Gフォースも事件の事後処理中で、更に現在、空母大鳳は、再び修理に入り、白鳳は、修理と改装（ハイパーメーサー砲から慶介が以前設計していた反射を利用し、増幅して撃ち返すプラズマグレネードに換装中）が行われている。

5月11日

それから2日後の事、田沼は、深町を自宅に呼び寄せた。

田沼邸

深町「失礼します！」

深町は、田沼の自宅に入ると自宅内は、人がいないせいか、静かであった。そのまま書斎へ行き

田沼「ん!?・・・おお深町君!・・・よく来てくれた!」

書斎に田沼が1人居て、その姿は、まるで何もかも失った状態みたいだった。

深町「総理!」

田沼「そんな顔しないでくれ・・・こうなる事は、分かっていた・・・野党に攻められ・・・信じていたキング大統領には、裏切られ・・・政治生命を失った・・・そして、妻にまで逃げられた・・・私は、何処で間違えたのか・・・恐らく・・・あの取引を持ちかけられた時からだろうな・・・」

田沼は、自分が犯した罪に悔いていた。

野党に攻められ、信じていたキング大統領には、裏切られ、更に今まで共にしていた妻にまで逃げられるあり様、既に何もかも失ってしまった。

そんな田沼に深町は

深町「いいえ総理!・・・貴方は、唯、日本を立て直そうが為に取引に同意した・・・例えそれが欲の為だろうと言われても、私は、貴方が必死に立て直そうとしていた事を評価します・・・ですから・・・もう一度・・・ゼロからやり直しましょう・・・2人で一緒に・・・」

例え人から否定されても自分だけは、田沼の味方だと言って、もう一度ゼロからやり直しましょうと田沼に誘いを掛ける。

田沼「深町君！……ありがとう……君のその行為に……私は、感謝してるよ！」
それを聞いた田沼は、深町の行為に感謝した。

深町「総理！」

田沼「すまないが……一人で考えたい……また明日来てくれ……」

それを聞いて、深町は、また明日返事を聞きに来る事にして、田沼の自宅を後にする。だが、これが田沼との最後の会話になるとは、予想もできなかつただろう。

翌日の事だった。

田沼が服毒自殺を遂げたと言う知らせが、深町の所に入つて来たのはそれを聞いた深町は、田沼の自宅に急行した。

田沼邸

田沼の自宅に赴き、書斎に入ると、田沼は、まるで眠る様な姿（近衛文麿の様な死に様）で死んでいた。

深町「総理……」

遺体の隣には、田沼の弟である田沼康弘が兄の死に泣き崩れていた。

康弘「ふ、深町さん！……兄が……兄が……」

康弘は、泣き崩れながら兄の死んだ事を深町に言う。

それを聞いた深町は、唾然となりながら、田沼の遺体に近寄る。

田沼の遺体の上には、遺書と自殺に使用した青酸カリのビンが置かれていた。

深町は、遺書を取り開いて見ると、其処には

「 拜啓深町君

君がこれを読んでいると言う事は、私は、もうこの世にいないであろう。

あの時、君が私に救いの手を差し伸べた事は、本当に嬉しかった。

だが、私は、その行為を受ける資格はない。

私は、己の欲が為にキング大統領の裏取引にに応じてしまった。

取り返しがつかない事を

しかし、日本を立て直すには、仕方が無かった

それだけは、信じて欲しい

事件に関しては、深町君に全てを託す

深町君

最後に君に出会えて、良かった。

友人として忠告しておく

キング大統領は、決して、君達を諦めてはいない

用心して置く様、肝に銘じてほしい

最後に自分の政治生命に汚点を残してしまった事を心より恥じると共に深くお詫びを申し上げます

田沼 忠義 』

と書かれ、自分の罪を嘆きながら、味方をしてくれた深町に感謝していた。

更にキング大統領には、用心して置く様、忠告まで書かれていた。

深町「総理！・・・何故ですか？・・・何故死んだんですか・・・!!」

深町は、遺書を握り締めて、田沼の遺体に泣き崩れた。

画して、第97代内閣総理大臣田沼忠義は、無念の服毒自殺を遂げた。

だが、世間には、自殺とは、公表できないので、病死（心不全）と発表された。

横須賀基地

田沼の死を知った龍之介は、余り喜ぶ気は、無かった。

龍之介「総理が死んだ事で事件の真相は、闇の中か・・・」

龍之介の言う通り、田沼の死によって、キング大統領への裏取引については、追及さ

れず、田沼総理とその他の幹部達の独断犯行として、処理された。

結局、事件の真相は、闇の中へと消え去った。

この事件の真相を知っているのは、龍之介と真霜、真雪、深町のごく僅かで、他は、全

て極秘扱いになった。

5月14日

国土交通省

田沼の死から数日後、深町に呼ばれ、龍之介は、功と美由紀を連れ、国土交通省を訪れる。

国土交通省、大臣室

龍之介「失礼します!」

大臣室に入ると、部屋は、既に片付けされ、深町は、机の上の物をケースに詰めていた。

深町「おお山本監督官!・・・よく来てくれた!!」

龍之介「これは・・・一体?」

深町「見ての通り、荷造りをしているんだよ!・・・私は、本日付で大臣を辞任した。」

『えっ!?!』

何と深町は、本日付で国土交通大臣を辞任したと言うのだ。

龍之介「何故辞任を?」

龍之介は、深町の大臣辞任に驚きながら、辞任の理由を問う。

深町「今回の事件は、私の不手際で起きた様なものだ……幹部の自分も責任を取るの、当たり前だろう。」

深町は、今回の事件は、自分の不手際が起こした様なもので、他の幹部同様、自分も責任を取るつもりの様だ。

美由紀「あれは、総理が元々仕組んだ事、貴方には、責任は、ありません。」

それに対して、美由紀が貴方のせいではなく、田沼の責任だと言い張るが

深町「権藤監督官！……総理の事をそう言わんでくれ……総理は、唯利用されただけ何だ……しかし、私は、総理を死なせてしまった……最早、総理が死んだ以上……私の務めは、終わった……後の事は、次の総理に任せ様と思う。」

深町は、田沼は、唯利用されたと言つて、田沼を死なせた事に嘆き、そして、田沼が居ない以上、自分の務めは、終わったと言つて、次の総理に全てを任せ様とする。

功「待つてください!!……貴方が居なくなつたら……私達は、今後如何すれば良いんですか？」

しかし、深町が居なくなつたら、この先、自分達は、如何すればいいのか問う。

深町「それについては、心配はいらない……君達の事は、宗谷監督官に任せてある……今まで通り、任務を続けたまえ……」

龍之介達Gフォースについては、既に真霜に任せてあつたので今後は、心配いらな

かった。

深町「では、諸群!・・・さらばだ!」

深町は、ケースに詰めた後、龍之介達に別れを告げ、大臣室を出ようとした。

その時

龍之介「待つてください!深町国交相!・・・いや・・・権藤吾郎大佐!!」

龍之介は、去ろうとする深町に対し、美由紀の兄の名前を告げる。

『えっ!?!』

深町「!?!」

その名前を聞いた途端、2人は、驚愕し、深町は、足を止める。

龍之介「そうお呼びびした方がよろしいでしょうか?」

何と龍之介は、深町が美由紀の兄、権藤吾郎だと言うのだ。

深町「・・・突然何を言い出すんだね山本監督官!」

それに対して、深町は、惚ける。

功「いきなり何を言うんですか准将?」

美由紀「そうですよ!・・・深町国交相が私の兄の訳がありません!!・・・だって・・・

だって、あの時、私の兄は、死んだ筈です!!」

功と美由紀も深町が悟郎な訳がないと否定する。

龍之介「確かに2人が言う様に権藤大佐は、6年前のゴジラ戦で死んでいる……だが、もし死んでいなかったら……」

功「如何いう事ですか？」

龍之介「我々と同じ様に……この世界に飛ばされていたら……筋が通るだろう……」
深町が自分と同じ、この世界に飛ばされた人間だとしたら、筋が通る。

功「成程！……ですが、権藤大佐と言う証は、有るんですか？」

それに功も納得するが、深町が吾郎と言う証は、有るのか問う。

龍之介「ない！……だが、俺の感は、彼が権藤大佐と言っている……それに出会った時から俺達の事や内情を最初から知っていた……初めてなのに、何故だ！……可笑しいだろう……そんな事を知っているのは、俺達と同じ世界の出身しかいない！」
証は無いが、龍之介は、薄薄気づいていた。

更に初めて出会った時から龍之介達の事をかなり知っていた。

こんな事を知っているのは、龍之介達と同じ世界の出身の者でしかあり得ない事だ。

功「確かに……普通なら知らない情報の筈！……その確率は、大いに有ります！！」

龍之介「これでもまだ否定しますか……権藤大佐！」

全てが分かった事で、最早否定はできない。

果たして

深町「ふ……ふはは……見事だ山本監督官!」

龍之介「やっぱり!?!……大佐だったんですね!」

深町「いかにも……私は、権藤吾郎だ!」

遂に深町は、自分の正体を明かした。

美由紀「し、信じられません!!……私の兄は、あの時、死んだ筈!」

深町が自分の兄とは、まだ信じられない美由紀。

深町「美由紀が言う様に……私は、あの時、ゴジラの攻撃で死んだ……しかし、気が付くと……何故か、自分が居たのは、海の上だった……後から通り掛かった真雪に救助された……最初は、何が何だか分からなかったが、直ぐに此処が異世界だと気付いた……それからは、ホワイトドルフィンとして、任務に着き、その後は、政治家として、今の地位に着いたんだ……山本監督官の言う通り……私は、権藤吾郎だ!」

深町は、自分が此処に来た経緯を話し、自分が兄だと認めた。

美由紀「本当に……兄さんなんですか?」

深町「ああ!」

それを聞いた美由紀は、深町に近づき

バシ！

深町を殴った。

『!?!』

兄弟の再会と思つたら、いきなり殴るとは

美由紀「この馬鹿!!・・・勝手に死んで・・・今さらのこのこ生き返つて・・・私が
どれだけ悲しんだか・・・貴方に分かるの?」

美由紀は、再会を祝うばかりか、本当は、怒つていた。

自分の前から勝手に居なくなり、そして数年経つて、今さら自分の前に現れた。

その間に自分は、どれだけ兄が死んだ事に悲しんだか、美由紀は、深町に思い知らせ
たのだ。

深町「心配させて済まなかった美由紀・・・私もお前の事が心配だった・・・この2
0年・・・お前の事を忘れた日はない!!」

向こうの世界では、6年だったが此方の世界では、20年が経過していた。

既に60歳になつても深町は、美由紀の事を忘れてはいなかった。

美由紀「兄さん!・・・会いたかった・・・!!」

深町の真意を知つた美由紀は、深町に抱き付き、再会を祝う。

龍之介「で・・・正体が分かった以上・・・これから如何しますか大佐殿？」
龍之介は、これから如何するのか深町に問う。

深町「如何するって・・・私は、もう引退するんだが・・・」

それに対して、深町は、このまま引退すると言うが

龍之介「まだ引退って、早いでしょう！」

深町「何?!」

龍之介「貴方には、これからもまだ働いてもらいます・・・我々と一緒に！」

龍之介は、深町にこのまま引退させる気はなく、自分らと一緒に働いてもらうと告げる。

深町「何をさせる気だ？」

龍之介「貴方には、我々の上に立って、我々の為に働いて貰います・・・今後のゴジラとの戦いを有利にする為に・・・」

深町「私が君達の司令官になれと言うのか？」

龍之介「そうです・・・そして、ブルーマーメイドから独立して、新しい組織を創設するんです!!」

龍之介は、深町をGフォースの司令官に据え置き、ブルーマーメイドから独立を考え
ていた。

深町「新しい組織と言うが・・・本気なのか？」

龍之介「このままブルーマーメイドの下に居ても、真霜に迷惑を掛けるだけだ・・・それに新しく上に立つ大臣も信用できないかもしれない・・・ならあんたを司令官にして、新しい組織を創設すれば良い事だ。」

このままブルーマーメイドの下に居ても、いずれ新しく就任する国交大臣に所有している兵器が悪用されてしまうし、真霜に迷惑を掛ける。

ならいつそ深町をGフォースの司令官に置き、ブルーマーメイドから独立して、新しい組織を創設し様と言うのだ。

深町「君が其処まで考えているなら・・・私に拒否権は、無い様だな！」

龍之介「貴方は、我々を利用した・・・なら今度は、我々が貴方を利用する番だ!!」

深町「・・・はあ・・・分かった・・・君の言う通りにしよう。」

深町は、龍之介の計画を呑む。

龍之介「ありがとうございます深町国交相・・・いや深町総司令！」

美由紀「これからもよろしくお願いしますね深町総司令！」

深町「こら!・・・おだてるんじゃない!!」

『ハハハ・・・!!』

こうして、此処に深町を総司令とした新生Gフォースが誕生した。

ブルーマーメイドやホワイトドルフィンに並び、ゴジラ戦の先方を任せられ、それ以外では、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンと同様、治安維持や救助作業を行う事になる。

組織としては、小さいがいづれは、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンと同等の組織になるだろう。

そして、拠点は、横須賀基地から真雪が校長を務めている横須賀女子海洋学校へと移された。

最初は、教頭などの職員が反対したが、深町が総司令として、就任すると聞いて、真雪は、素直に受け入れた。

横須賀女子海洋学校

Gフォースの本部が置かれると同時に艦船も移動する事になり、学生艦と並んでGフォースの艦艇も停泊する。

当然兵員（但し寮は、今までの通りブルーマーメイドの寮を使っている）も学校へと移動して来たのだ。

そんな中、真雪は、生徒達を中庭へと集めた。

まして「急に招集が掛かる何て、何でしょう艦長？」

明乃「分からないけど・・・校長先生からの急な呼び出しだから・・・多分、学校に

拠点を置く部隊の説明じゃないのかな？」

明乃とましろは、何故真雪が生徒達を招集したのか分らなかった。

そんな時

鈴「ねえ！・・・反対側にいる人達って・・・Gフォースという部隊の人達だよね！」

鈴は、反対側に整列しているGF隊員を見て、ある事に気づく。

幸子「そうですね・・・鈴ちゃん何が言いたいんですか？」

鈴「ううん、そうじゃないけど・・・あの人達、この前の赤道祭で晴風に遊びに来た人達じゃないかな？」

鈴は、GF隊員を見て、この前の赤道祭で遊びに来た連中だと気づく。

『えっ!?!』

それを聞いた明乃達は、驚き、改めてGF隊員達を見ると

芽衣「あっほんとだ!?!・・・あの人達!・・・教官の所の人達だ!!」

志摩「うい!うい!」

薫の仲間達だと気づく。

ましろ「てこつとは・・・薫姉さんも?」

ましろは、周りを見ながら、薫を探そうとする。

事件後から今日まで、薫とは、全く会っていないなかったので、会いたい、会って色々聞

きたいのに

芽衣「いないな……教官何処だろ……」

志摩「うい……」

皆がいくら探しても、薫の姿は、見つからず、校長と教頭達、そして、深町が来たので、探すのを止めて、整列する。

皆が整列する中、真雪は、台に立ち

真雪『皆さん！……事件解決から今日まで、ご苦勞様です！……そんな、皆さんにお伝えしたい事が有ります……実は、我が横須賀女子海洋学校にGフォースの本部が置かれる事になりました……Gフォースとは……この前の事件で出現した巨大生物、ゴジラに対抗する為に……ブルーマーメイド、ホワイトドルフィン並び、組織された部隊です……では、深町総司令！』

真雪は、深町の代わり

深町『横須賀女子海洋学校の生徒諸群！……私は、Gフォース総司令の深町吾郎だ！……さつき宗谷校長が言われた通り……我がGフォースは、ゴジラに対抗する為に組織された部隊である……此処に本部が置かれるに辺り、君達には、迷惑を掛けるが、決して君達の教育の邪魔をしない事を約束する……ついでに言って置くが……この前の事件で君達を救助したのは、他ならぬ彼らだ！……だから彼らには、敬意を表

する様に・・・以上だ!」

深町は、生徒達に対して、決して教育の邪魔をしないと約束し、この前の事件で彼らが救助した事を告げる。

それを聞いた生徒達は、ざわめくが

教頭「静かに!」

教頭が静かにと言つて、生徒達は、ざわめくのを止める。

真雪「それでは、皆さん!・・・おのの教室に戻り、教育に励んでください・・・解散!」

真雪は、解散を言い渡し、生徒達は、教室に戻る。

生徒達が教室に戻る中

古庄「あつ!晴風クラスと武蔵クラス、それとシユペークラスは、残る様に・・・」

明乃「えっ!」

行き成り古庄から残る様に言われた晴風と武蔵、アドミラル・グラフ・シユペーの生徒達は、その場に残る。

そして、GF隊員の一部も彼らの前に残る。

ましろ「何でしょう?」

明乃「ん・・・」

もえか「ミケちゃん!」

明乃「もかちゃん!」

4人は、自分達が何故残る様に言われたのか、考えていると

龍之介「諸群!・・・久しぶりだな・・・」

GF隊員の中から龍之介と次郎が現れた。

ましろ「あつ!?!・・・龍之介兄さん!」

ましろは、龍之介を見て驚愕し

次郎「よう晴風の諸群!!」

ミーナ「お主は、この前の・・・」

ミーナも次郎を見て思い出し

次郎「何だ!金髪も居たのか?」

次郎もミーナの事を思い出し、金髪だと馬鹿にする。

ミーナ「誰が金髪だ!!・・・ワシには、ヴェイルヘルミーナ・ブラウンシユヴァイク・インゲノール・フリーデブルクと言う名前が有るんじゃない!!」

金髪だと馬鹿にされ、怒るミーナは、自分には、ヴェイルヘルミーナ・ブラウンシユヴァイク・インゲノール・フリーデブルクと言う名前が有るんじゃないと言い張るが

次郎「名前が長いんだよ!・・・ミーナで良いだろう!」

名前が長い事にイライラし、明乃が呼んでる様にミーナと呼ぶ。

ミーナ「何かお主に言われると嫌な気がするが・・・お主に面して許してやろう！」

ミーナは、次郎にニツクネームで言われるのは、嫌だったが、結局許した。

龍之介「話を変えて・・・お前達にある人物を紹介しよう・・・出て来い！」

龍之介は、話を変え、ある人物を明乃達に紹介する。

するとGF隊員の中から2人の人物が現れた。

『あっ!?!』

明乃達の前に現れたのは

薫「久しぶりだね!・・・岬ちゃん！」

明乃「薫お姉ちゃん!」

何とそれは、薫と

はやて「お久しぶりやね!・・・知名さん！」

もえか「八神教官!?!」

退院したばかりのはやてだった。

薫とはやてだと分かった途端、2人は、明乃達に囲まれ

芽衣「本当に教官だ!?!」

志摩「うい！」

鈴「教官!今まで何所に?」

幸子「あの後いなくなつてから心配してたんですよ!」

今まで何所で何をしていたか問い詰められる。

薫「心配かけて御免ね!・・・あの後、黙つてずっと皆の前から隠れていたの!」

幸子「如何してですか?」

薫「それは・・・」

ましろ「薫姉さん・・・」

薫「ましろちゃん!」

龍之介「ましろ!・・・お前が知りたかつた事を薫に聞いてみる!・・・薫!・・・皆

に説明を!」

薫「ん!・・・皆!・・・今から言う事は、全て本当の事だからね・・・実は・・・」

薫は、明乃達に自分達が別の世界から来た事や向こうの世界でゴジラと戦っていた事

を告げる。

薫「以上が、貴方達を知りたかつた事よ!」

ましろ「つまり薫姉さん達は、異世界の人間と言う事なんですな!」

薫「そう!・・・黙つていて御免ね!・・・こんな事を話しても貴方達には、信じら

れない事だと思つたから・・・」

薫は、やはりこんな事を話しても明乃達には、信じられないと思つたが

明乃「ん・：確かに・：信じられない話だけど・：私は、教官の話を信じます・：
だつて、教官は、私達を助けてくれたんだから!!」

明乃は、薫の話を信じる。

薫「岬ちゃん!？」

ましろ「・・・私も薫姉さんの話を信じます・・・薫姉さんは、私に副長の何なのかを教えてくれましたから・・・」

ましろも薫の話を信じる。

薫「ましろちゃん!？」

芽衣「私も信じるよ!!」

鈴「わ、私も!」

志摩「うい!」

幸子「まあ何か、面白そうですし!」

そして、全員が薫の話を信じた。

薫「皆・・・ありがとう!!」

皆が自分の話を信じてくれた事に薫は、涙を流す。

次郎「良かったな薫!」

その後、2人は、皆から質問攻めにあつたのは、言うまでもない。

こうして、新生Gフォースは、無事に起動したのだ。

此処から先、何が有るか分らないが

それでも彼らは、ゴジラと戦うであろう。

第2章 納沙幸子がピンチ！ 前編

6月9日

ヴェルニー公園

幸子「航海日誌・・・6月9日、晴風乗員一同が前代未聞と言える海洋実習から生還し、およそ1ヶ月・・・この間、ブルーマーメイド、ホワイトドルフィン、Gフォース、及び国土保全委員会が、ラットと呼ばれる生命体の引き起こした、事件の全容解明、及び背後処理にあたっていた・・・そして、また、万一再度の感染があった場合の対策は、海洋医大で編成された特別チームの立案により、確立されつつあり・・・更に巨大生物ゴジラもGフォース指導の元、対策が協議されつつあった・・・一方、晴風乗員は、この時・・・中間調査を終え・・・今雅に・・・試験休みに入ろうとしていた・・・」

事件から既に1ヵ月、龍之介達がブルーマーメイドから独立し、新生Gフォースを創設して3週間が過ぎようとしていた。

既に事件に関しては、全容解明、及び背後処理を終えつつあった。

更に万が一の再度感染に備え、海洋医大で編成された特別チームの立案で対策が講じられていた。

また、ゴジラへの対策も龍之介達Gフォース指導の元、対策が協議されつつあった。

そんな中、横須賀女子海洋学校では、年に3回の中間考査が行われ試験を終えた生徒達は、試験休みに入りつつあった。

幸子「仁義の無いナレーション風と・・・はあ・・・!」

航海日誌を書き終えた晴風書記の幸子は、一段落すると

「何をしとるんじや!」

隣から誰か声を掛けて来て

幸子「ん!」

幸子は、それがアドミラル・グラフ・シユペー副長のミーナだと気づく。

幸子「航海日誌を付けていたんですよ!」

ミーナ「航海しとらんじやないか?」

幸子「してなくても付けるんです!」

幸子にとっては、航海しても、しなくても日誌を付ける癖何だろう。

ミーナ「お主らしいな・・・」

ミーナも幸子の癖に納得しつつ

ミーナ「ところで!」

幸子「おう、今夜も仁義なき上映会をやるけえのう!」

今夜もまた任侠物の映画をみる約束をする。

『フフフ……』

相変わらぬの仁義好きの2人であった。

そんな時

テア「楽しそうに会話している最中すまない……」

ミーナの親友であり、アドミラル・グラフ・シユペー艦長のテアがミーナに声を掛けてきた。

『ん?』

テア「昼休みが終わったら会議室に来てくれ。」

テアは、ミーナに何かの打ち合わせの為、昼休みが終わったら、会議室に来るようミーナに言う。

ミーナ「分かった、テア。」

ミーナは、了承する。

ドイツ語が分からない幸子には、2人が何を言っているのか分からない。

テア「ん!」

すると、テアがチラツと幸子を見る。

幸子「あっ!?!」

幸子は一瞬ドキッとす。

そして、テアは手をシュツタと上げるとその場を去って行く。

幸子「ん・・・？」

幸子は、テアとミーナの会話の内容が気になる様子でミーナを見ると

ミーナ「ん！」

ミーナは、それに気づき

ミーナ「2学期から如何するか、カリキュラムの組み直しをするそうじゃ！」

幸子に2学期の、カリキュラムの組み直しの事を説明し

ミーナ「例の事件のせいでは？」

港内を見る。

港内には、事件で活躍した晴風が沈んだまま置かれていた。

沈んだ晴風を見ながら、ミーナは、ある事を口にする。

ミーナ「噂で聞いたのじゃが・・・」

幸子「ん？」

ミーナ「晴風クラスの生徒は、このままでは実習が出来ん・・・その為、学校側は何

らかの対策を行うと・・・」

それは、明乃達の今後についてだった。

幸子「え．．．へ!?．．．そ、それって．．．もしかしたらクラスが解隊されることですか!．．．私、この後艦長に呼ばれているんですけど．．．雅か、その件で．．．」
それを聞いた幸子は、脳裏にクラス解散の最悪の事態を予期してしまふ。

ミーナ「あまり悪い予想ばかり、せん事じや!．．．それに今回の事件は、晴風乗員の団結能力で解決したようなものだ!．．．そう簡単に解隊などさせんじやろう!」

不安になる幸子にミーナは、励ますが

幸子「で、ですよね!」

幸子は、不安を完全に拭い去る事が出来なかつた。

横須賀女子海洋学校、図書室

一方、晴風艦長の明乃は、図書室で副長のましろ、武蔵艦長のもえかと一緒に今回の事件の始末書を作成していた。

明乃「う．．．ん．．．う．．．ん．．．」

だが、明乃は、さつきから何か苦手な表情で始末書を作成していた。

明乃「うううううううううううわあ．．．!!分かんなくなってきたよ．．．!!」

それがピークに達したのか、突然喚きだした。

ましろ「艦長!航海中あれだけの無茶をやったんですから始末書を学校に提出しない

と!」

明乃「それは、分かってるんだけどね・・・書類仕事は、本と苦つてで!!」
如何やら明乃は、書類仕事が苦手の様だ。

もえか「みけちゃん! 私の分が終わったら手伝うから、頑張ろう!」
其処にもえかが救いの手を差し伸べる。

明乃「ありがともかちゃん!!」

もえかの救いの手に明乃は目を輝かせる。

明乃にとっては、もえかの救いの手は、雅に地獄で仏と言う感じだった。

ましろ「知名艦長! あまりうちの艦長を甘やかさないで頂きたい!」

しかし、ましろは、明乃を甘やかさない様、もえかに待ったを掛ける。

明乃「ふえ」

もえか「あつ、でもちよつと手伝うだけだから・・・」

ましろ「はあく」

ましろは深い溜め息を付く。

出来れば自分の方を手伝ってもらいたい。

そんな心境だった。

明乃「へへ・・・」

そんな時

幸子「失礼します！」

幸子が図書室に入って来た。

明乃「ココちゃん！」

幸子「艦長・・・あの・・・私が呼ばれたのはもしかして・・・」

幸子は、明乃に呼ばれたのは、クラス解散の事ではないのか問うが

明乃「お願いがあるんだけど・・・」

如何やら別の事で呼んだ様だ。

幸子「へ!？」

明乃「これをクラスの皆に渡して欲しいの！」

そう言つて、明乃は机の上に置いてあつた封筒の束を幸子に手渡す。

幸子「ん!?!・・・ん?・・・クラス全員にですか？」

幸子は、何なのかと思ひ、封筒の束を受け取る。

明乃「校長先生から何だけど・・・大事な物だから、必ずクラス全員に配る様につて・・・」

まして「すまないが!・・・私と艦長は、身動きが取れない・・・頼まれてもらえる

か?」

頼み事と言うのは、2人に代わつて、幸子に封筒を晴風の生徒全員に手渡す事だった。

幸子「ああ!・・・分かりました!・・・艦長の指示かつ、心の友シロちゃん頼みとあれば全力で尽くすのみです!!」

幸子は、笑顔で頼み事を引き受ける。

ましろ「心の友じゃないんだが・・・でも助かる・・・ありがとう。」

ましろは、嫌な感じをしながら、幸子に感謝する。

幸子「はーい!」

横須賀女子海洋学校、校内

幸子は、図書室を後にしたが

幸子「う・・・ん・・・クラス再編の件、聞きそびれてしまいました。」

肝心のクラス解散の事を明乃に聞けなかった。

それを気にしながら階段を降りていると

幸子「あっ!?!」

GF隊員が敬礼をして、幸子の横を通り過ぎる。

横須賀女子海洋学校は、GFオースの本部が置かれてから、校内や敷地内でよくGF隊員を見かける様になった。

男女部隊とは言え、生徒達は、最初は、嫌がったが、規律を守るGF隊員の敬意に感心してしまい、今では、ひたしい関係になっている。

幸子は、気にせず、外へと出る。

横須賀女子海洋学校、敷地内

幸子「ん?・・・あっ!?!」

外へ出た幸子は、ある事に気づく。

幸子「これは・・・密封指示書!?!」

それは、さつき手渡された封筒を見て、其処には、名前の下に開封日時が指定されており、直ぐに密封指示書だと分かった。

幸子は、太陽に封筒を透かして、中身を見ようとしたが、紙が入っているのは、見えたが、何が書かれているかは、見えなかった。

幸子は、封筒を見ながら

幸子「: : 『おはよう、晴風の諸君・・・今回の君の使命は、横須賀女子海洋学校に潜入したスパイのあぶり出しだ・・・成功を祈る』」

お馴染みの一人芝居をする。

幸子「『何と言う困難な任務だ! 雅にインポッシブルな大作戦!!』」

幸子が決めセリフを言った時だった。

「!?!」

幸子「あっ!?!へ!?!」

突然隣から誰かに呼ばれ、幸子は、振り向くと

其処には、晴風電信員の鶴と電測員の慧が立っていた。

鶴「何しているの？」

鶴は、幸子が何をしているのか問う。

幸子「八木さん、宇田さん！」

幸子は、2人が鶴と慧だと分かつて

幸子「丁度いい所に・・・うーん・・・はい！」

2人に封筒を渡す。

『ん・・・ん?』

慧「何これ？」

2人は、何なのか、封筒を受け取る。

幸子「学校からの指示書です・・・開封期日が指定されているので気を付けてください。」

幸子は、学校からの指示書だと説明する。

鶴「ん!・・・ありがとう」

それを聞いた鶴は、封筒を鞆の中に仕舞う。

慧「それ、全部配らなきゃいけないの？」

慧が幸子の手にある封筒の束を見て尋ねる。

幸子「はい！・・・艦長も副長も書類整理に忙殺されてますして・・・」

鵜「艦長達大変だね！」

慧「折角、テスト休みなのにね・・・」

2人は、書類仕事をする明乃達に感心していた。

そんな中、鵜が

鵜「そうだ!?それ配るの手伝おうか？」

幸子に封筒配りを手伝うと提案してきた。

幸子「えっ!？」

鵜「あたし横須賀出身だし、これからめぐちゃんを案内するところだったんだけど
・・・」

慧「うん、ついでだし、皆にそれを配りながら町を歩くのも良いよね！」

幸子「でも、折角の御予定を・・・」

幸子は、流石に2人の予定を潰してまで、手伝わせるのに、申し訳ないと思ったが

鵜「クラスメイト何だから、水臭い事言わない！」

慧「ココちゃんとは航海中あんまりお喋り出来なかつたし、良い機会だよ！」

同じ仲間だし、良い機会だと幸子に言う。

幸子「宇田さん・八木さん……ありがとうございます!」

2人に親切に幸子は、感謝する。

鵜「じゃあ、早速……」

鵜は鞆から自分のスマホを取り出すと物凄い速さでメールの文章を作成する。

その速さは指の動きが残像みたく見えるかの様だ。

鵜の指裁きも凄いが彼女の指裁きに対応できた彼女のスマホも凄いのかもしれない。

幸子「あの?何が早速なんでしょう?」

幸子は、鵜の早速の意味が分からなかった。

鵜「クラスメイト全員にメール出したよ!……居場所教えてって」

如何やら晴風の生徒全員にメールを送って、居場所を教えてもらうよう伝えてくれた様だ。

幸子「流石電信員!」

慧「時期に返事来ると思うし、取り合えず出ちやおうか?」

慧がクラスメイトの返信を待ちながら横須賀の街を歩こうと提案し、

鵜「うん、行こう、行こう!」

2人は、横須賀の街へと向かう。

幸子「えへ!」

幸子も2人の後を追った。

3人が横須賀女子海洋学校を出ようとした時だった。

「頼むよ薫！」

『ん?』

薫「駄目！」

次郎「なあ、溜まっているんだよ・・・手伝つてくれ!？」

慧「あれつて・・・山本教官じゃない？」

鶯「ほんとだ!？」

慧「何してるんだろう？」

幸子「さあ?・・・隣にいるのは、小沢さん見たいですけど・・・」

次郎「頼む!・・・償いをするから・・・」

薫「しょうがないわね・・・私のレポートが終わつてからなら・・・」

次郎「ありがとう薫!!・・・この借りは、必ず返すぜ!!」

薫「じゃ終つたら連絡するからね！」

次郎「待つてるぜ！」

如何やら何かの頼み事をして見た見たいで、結局引き受ける事でまとまった様だ。

次郎「助かった・・・ん!？」

次郎が安心していると、向こうにいた幸子と鶴、慧に気づき

次郎「おくい・・・!!晴風の連中じゃねえか!」

3人に声を掛け、近づく。

幸子「何してたんですか?」

幸子は、次郎に何をしていたのか問う。

次郎「いや・・・報告書の事で薫に手伝って貰おうと思つてな・・・」

如何やら報告書の事で薫に相談していた様だ。

慧「1人でできないんですか?」

次郎「書類仕事は苦手なんだよ・・・」

此処にも報告書の苦手な者が居た。

鶴「え・・・苦手なんだ・・・」

苦手つて事を3人に白目で見られる。

次郎「五月蠅いな!!・・・ところで、お前ら何所行く気だ?」

そんな3人に五月蠅いと言いながら、何所に行くのか問う。

鶴「これから横須賀の街に歩くんです!」

慧「ついでに皆にこれを配るの?」

これから横須賀の街を歩く事や晴風の生徒に指示書を配る事を伝える。

次郎「何だこれ？」

それを聞いた次郎は、幸子が持っていた封筒の一枚を取る。

次郎「まあ良いか・・・ついでだ！・・・俺も一緒について行く！」

封筒の中身が何なのか分らなかったが、まあ良いかと封筒を戻し、3人について行く
と告げる。

幸子「えっ!?でも報告書の作成は如何するんですか？」

次郎「どうせ暇だし！・・・報告書は、薫から電話が来るから、その後でも良いだろう!!」

次郎達は、白鳳が横須賀女子海洋学校の地下ドックで修理と改装中の為、現在は、暇な状態であった。

従がって、書類整理をしている。

鵜「何かめんどくさいって感じがするね・・・」

慧「ん！」

次郎の口ぶりにめんどくさいと言う感じがした2人。

次郎「つべこべ言うな！行くぞ!!」

そんな2人に次郎は、つべこべ言うなど言って、行ってしまふ。

幸子「いつの間にか、仕切ってますね！」

『うんー!』

いつの間にか、仕切られている事に3人は、複雑だったが、結局、4人で歩く事にした。

雀荘いりふね

此処は、横須賀市若松町のとあるビルの3階

麗緒「チイ!」

留奈「ん・・・」

桜良「ようし!」

晴風機関員の麗緒、桜良、留奈、空の4人は、このビルの3階にある麻雀の店である雀荘いりふねで仲良く麻雀をやっていた。

留奈「ん・・・ん・・・何か可笑しい様な?」

ゲームが進むにつれ、留奈は、自分の手札が可笑しい事に気づく。

桜良「うん?」

空「そりやまあ、可笑しいでしょう・・・手牌1枚足りてないし・・・」

留奈「えええっー!!えつと: : :」

空の指摘を受けて駿河は自分の手牌の数を数えると一つ足りない。

留奈「ほんゝだあゝあゝ!!じゅゝーにゝまゝいゝしかなゝいゝよおお!!」

この時点で留奈の負けが決定されており、彼女は頭を抱えて絶叫する。

麗緒「でたよ、留奈の勝敗！」

桜良「配牌の時、一枚取り忘れたんじゃないの？・・・留奈しよちゆう忘れるし・・・
やつとりーちね！」

如何やら留奈のいつものドジで、手牌一枚取り忘れたみたいだ。

留奈「うっううう：：ポ、ポン！」

自分のドジに絶望しながら、留奈は、上がりを出す。

麗緒「上がれないのに何でポンするの!？」

麗緒の言う通り、既に負けが決まっているのに、上がれる訳がない。

空「ツモ」

その間に空が上がってしまった。

留奈「へえ!？」

空「1000、2000」

麗緒「たいようつうのどらい・・・か、たいな・・・」

桜良「折角リーチしたのに・・・」

空「だいによのみのみ麗緒ならまだしも、そんなの、上がられたら大変出し！」

桜良「バレバレなの！」

空「では、罰ゲーム」

留奈「あたしばかりじゃん!」

結局、留奈が負けと言う事で罰ゲームを受ける事になった。

ついでに罰ゲームは、おでこにデコピン1発であった。

そんな時

幸子「おじやまします!」

次郎と幸子達が出来て来た。

空「これはこれは書記殿!」

留奈「あ、いたっ!!」

4人が来た直前にデコピンを受けた。

鶴「レオちゃん!メールありがとう!」

麗緒「ああ、メール気付いたの私だけだったし!」

次郎「何だ!4人で麻雀か?」

空「何で、小沢さんまで一緒に?」

空は、何故次郎まで居るのか問う。

次郎「暇でな・・・しかしドジだねお前え・・・手牌1つ不足で負けてるし・・・」

次郎はそう言って、卓上を見て、直ぐに留奈が負けている事を理解した。

桜良「見ただけで分かるの？」

次郎「ああ……こう見えても……夏雄と一緒に卓囲んだ事が有るしな……まあ、負けたけどな……」

次郎は、夏雄と麻雀した事が有るので、大体は、ゲームの流れが分かっていた。

麗緒「夏雄つて、教官とこの機関長？」

留奈「あの機関長つてそんなに強いのか？」

夏雄がそんなに強い事に麗緒と留奈は、関心を持つ。

次郎「ああ強いぞ！……お前ら直ぐに有り金全部すられるかもな！」

『げー！』

次郎が夏雄と勝負したら、有り金全部すられると発言され、4人は、夏雄と勝負したくないと思った。

幸子「あの……皆さんにお渡しするのがありません……」

話は、変わり、幸子は、4人に封筒を手渡す。

桜良「何コレ？」

慧「学校からだつて……」

留奈「へえくなんだろう？……成績表かな？」

留奈は、何だろうと思ひ、封筒を手で破つて中を見ようとするが

幸子「ああ・・・!?!」

それを見た幸子が大声を出して止める。

幸子「これ、開封日時が定められている密封指示書なんです!・・・今開けたら校則違反で停学ですよ!・・・見てください!」

留奈「ええっ・・・!?!」

幸子に注意されて事の重大さに気づく留奈。

空「開けなくて良かったね、留奈!」

留奈「ん、ご開帳禁止で事か!」

次郎「そう事だな!」

鶴「マロンちゃんとクロちゃん一緒にやないんだ?」

鶴は、麻侖と洋美が一緒にやない事に気づく。

麗緒「ああ!・・・機関長達なら今日は研修するんだって!」

麻侖と洋美は、4人とは、別行動見たいだ。

幸子「研修?・・・はっ!?!・・・雅か:『君達は選ばれしエンジニアだ!・・・この特別訓練をクリアーし、ワンランク上の仕事について貰いたい』『てやんでい!朝飯前でえい!』『ワンランク上とやらを目指そうじゃないの』:見たいな事になったりはしないですよね?」

幸子は研修と聞いて麻侖と洋美がクラスを離れる為の特別訓練を受けているのではないかと麗緒と桜良に詰め寄る。

桜良「・・・それは無いと思うけど・・・」

しかし、桜良は、幸子の考えを否定する。

麗緒「まつ、確かにうちの機関長はずば抜けて腕が立つけど・・・」

桜良「クロちゃんも機関長とは阿吽の呼吸だし！」

麗緒「そうそう」

空「2人揃えば最強だよね！」

3人は、入試の時の実技試験と実習を通じて麻侖と洋美の腕を認めていた。

だが、2人に腕を評価していると

次郎「お前ら、そんなに最強って言うけど・・・うちんとこの夏雄と山崎整備班長の

腕は、凄いで!!・・・なんせ、整備の腕なら、その2人に負けねえぜ!!」

次郎が麻侖と洋美より、夏雄と文雄の腕の方が凄いと評価する。

留奈「そんなに凄いなだ？」

次郎「そりゃ夏雄は、子供の時からボイラーいじくってたらしいし・・・山崎整備班長の方は、20年も整備士をしていたから・・・今じゃ凄腕だ!・・・誰もあの2人には、勝ってねえよ！」

確かに夏雄は、小さい時から実家の銭湯でいつもボイラーの整備をしていたし、文雄の方は、20年も空母大鳳で艦載機の整備をしていた経験が有る。

いくら麻侖と洋美が最強でも夏雄と文雄には勝てないだろうと次郎は思う。

次郎「そう言えば!?!? ああの2人!?!? 今は、忙しいって言ってたけど?!? 何かやつてるみたいだぜ?!? わかんねけど!?!?」

そんな事を言っていると次郎は、2人が今何かをやっている事を思い出す。

だが、それが何かは、分からなかった。

麗緒「指示書、あたしが預かるところか?!? 晩御飯は、機関長達と一緒に食べる約束してるし!?!?」

麗緒が麻侖と洋美の分を渡しておこうかと尋ねる。

幸子「あ、では、お願いします!?!?」

幸子は、お願いし、2人の分の封筒を麗緒に手渡す。

幸子「ところで?!? 例の噂ご存知ですか?!?」

そして、幸子は、麗緒に例のクラス再編の件を知っているかを尋ねる。

麗緒「噂?!?!? とつ、何の?!?!?」

噂と聞いて、目を輝かせて幸子に詰め寄る麗緒。

如何やら、4人は、クラス再編の件については、知らない様だ。

幸子「実は……」

幸子が麗緒に言おうとした。

その時

「お待たせしました!!」

誰かが来た様で、4人は、振り向くと

『あっ!?!』

其処には、お茶をお盆に載せて持って来た

『美甘ちゃん!?!』

晴風給養員及び砲水雷運用員の美甘が立っていた。

美甘「ん?」

美甘は、何が何だか分からなかったが

とは言え、偶然美甘と出会った事は、雅に幸運であった。

さかくら総本家

此処は、先の雀荘いりふねの下にあるさかくら総本家と言う和菓子のお店である。

美甘と出会った4人は、美甘がアルバイトをしている店に行き、其処で同じくアルバイトをしている晴風給養員及び水雷運用員のほまれとあかねと出会う。

美甘「テスト休みってする事ないし……お菓子作りの修行をさせて貰ってるんだ!」

ほまれ「此処、家の親戚のお店なの!」

あかね「バイト代も貰えるし!」

如何やら此処は、杵崎姉妹の親戚の店で、3人は、此処でお菓子作りの修行をしている様だ。

幸子「成程!」

鵜「助かったね!麗緒ちゃんと同じビルで・・・」

幸子と鵜は、納得しながら、3人に封筒を渡す。

美甘「へえ、十三日まで開けちゃ駄目なのね!」

ほまれ「艦長たち凄く忙しい見たいね!」

あかね「図書室に籠もってるんだよね?・・・さつきおやつを差し入れてきたんだけど・・・」

幸子「ええ、その件なんですけど・・・」

あかね「あつ、そうだ!」

幸子が噂の事を3人に言おうとしたら、あかねがお盆に乗った4つのエクレーアを差し出す。

あかね「試作したんだけど食べてみて!」

次郎「美味そうだな!」

慧「いいの?・・・いただきます!」

慧はエクレアの一つを手に取り一口食べると

慧「うっ:::ウググググ:::」

突然顔色を悪くし、顔は忽ち脂汗まみれになり、目を回して失神しそうになる。

倒れそうな慧を鶴が抑え、床に倒れる事は免れた慧。

次郎「おい大丈夫か?」

いきなり慧が倒れた事に次郎は、驚き

あかね「あれ?美味しくなかったのかな?・・・エクレアに甘納豆を入れて見たんだ
けど:::」

如何やらさっきのエクレアには、甘納豆が入っていた様だ。

次郎「甘納豆?・・・本当だよ!・・・これ甘納豆が入ってるし!」

それを聞いた次郎は、エクレアを食べてみると、甘納豆が入っているのが分かった。

ほまれ「あつちゃんは攻めすぎよ!」

幸子「悪くなさそうな組み合わせですけどね!」

ほまれはどう考えてもエクレアと甘納豆は合わないと言うが、反対に幸子は、悪くな
いと言う。

次郎「俺もそんなに悪い組み合わせじゃないと思うぜ・・・」

次郎も幸子に賛同する。

その間に鶴は恵のカバンの中からミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、慧に飲ませる。

鶴「めぐちゃん、甘納豆苦手なの!」

慧は、甘納豆が苦手なので、その為に失神しそうになったのだ。

慧「はあ・・・!」

慧は、何とか生き返った。

幸子「大丈夫ですか、宇田さん?」

慧「な、何とか大丈夫!・・・次行こうか!」

まだ大丈夫じゃないが、そのうち落ち着くだろうと思い、次の場所に行こうと進言する。

鶴「まだ、他の子から返信来ていないんだけど・・・」

それに対して、鶴は、まだメールが来ていないので、居場所が分からないと言うが

幸子「心当たりがあります!」

幸子は、晴風の生徒の誰かが居るであろう次の場所に心当たりがあると行って、其処に向かおうとする。

そんな時

「おいしい美甘！・・・俺特性の焼きそば饅頭ができたぜ!!」

店の調理場から誰かが饅頭をお盆に乗せて現れた。

次郎「桐野料理長!?!」

それは、何と空母大鳳の主計科長兼料理長の俊秋だった。

俊秋「何だ小沢じゃないか?・・・何してんだよ?」

次郎「それは、こっちのセリフだよ!・・・料理長こそ何してるんだ?」

俊秋「見ての通り・・・3人に誘われて、この店でバイトしてるんだ!」

次郎「バイト!?!・・・仕事は、如何したんですか?」

俊秋「どうせまだ任務は、無いし・・・1人で暇を持てやますのもなんだから・・・この3人に弟子入りして、料理を習おうと思つて・・・」

次郎「3人にバイトを使用と誘われたんですか?」

俊秋は、この前の赤道祭で美甘と杵崎姉妹に自分の料理を試食させたが、結果は、余り美味しくなかった。

其処で更なるメニューを作ろうと3人と同盟を結んでいた。

その為、3人に弟子入りしていたら、アルバイトに誘われたと言う事だ。

俊秋「まあそう言う事だ!・・・折角だ、これ試食してくれないか?」

俊秋もそれを認め、折角試作した焼きそば饅頭を4人に試食させ様とするが

次郎「いや、え、遠慮しときます!!・・・行くぞ3人とも!!」

次郎は、やばいと思い、3人を連れて急いで店を出ようとする。

『えっ!?!』

次郎「良いから!!」

3人は、何が何だか分からず、兎に角急いで逃げた。

俊秋「クソ!・・・逃げやがったか!」

逃げた事に俊秋は、悔しながら3人で焼きそば饅頭を試食する。

『うっ!?!』

だが、試食した3人は、顔色を悪くする。

俊秋「やつぱり・・・饅頭に・・・焼きそばは・・・合わない!」

3人は、顔色を悪くしながら、饅頭に焼きそばは、合わないと自覚するのだった。

佐野天然温泉湯処「のぼり雲」

その頃、此処佐野4丁目にある温泉施設、佐野天然温泉湯処「のぼり雲」では、晴風水雷長の芽衣と同じく砲術長の志摩が温泉に入って、のんびりしていた。

芽依「う・・・う・・・ぷはっ・・・いや〜テスト明けはやつぱり、温泉に限るなあ

〜」

志摩「う〜い!」

2人は、牛乳を飲みながら、寛いでいた。

そして、此処にも

なのは「やっぱり温泉は、良いわね・・・」

フェイト「そうだね！」

ヴィヴィオを連れたなのはとフェイトの姿が有った。

なのは「ヴィヴィオ・・・温泉は、如何だった？」

ヴィヴィオ「気持良かった！」

なのは「そう！・・・やっぱり休みに来て正解だったねフェイトちゃん！」

フェイト「うん、そうだねなのは！」

3人は、休暇で此処に遊びに来た様だ。

衣笠山公園

一方、次郎と幸子達の4人は、晴風の生徒の誰かが居るであろう衣笠山公園に来ていた。

そして見事に電波塔の上に居る晴風見張り員のマチコを見つける。

慧「ホントに居た!?!」

慧は雅か本当に居ると思わず、マチコの姿を見て思わず声に出す。

幸子「でしよう！」

鶴「うーん……いい電波が出ている……」

鶴は鶴でなにか変なモノを受信している様子。

慧「ないない」

慧は即座にそれを否定する。

次郎「あんな所で何やってんだ？」

次郎は、マチコが何をやっているのか分らなかつた。

美海「マツチは陸に上がったてもサイコー!!サイコーよ……!!」

そんな時、聞き慣れた声でしたので、声がした方を見ると其処には、電波塔の上マチコをスマホで写真を撮っていた晴風主計長の美海と帆船の模型を作っている同じく応急員の媛萌とスケツチブックに何かを書いている百々が居て、更に空母大鳳通信長の実や砲術長の信吾も居た。

媛萌「あ、細かくて大変!大変!」

媛萌は、細かい部品をピンセットで組み立てつていた。

信吾「ん……」

反対側では、信吾が双眼鏡で横須賀の街を見ていた。

次郎「何見てんだ？」

信吾「覗き……」

如何やら、山の上から双眼鏡で覗きをしている様だ。どうせ山の上なら見つからないと思っただろう。

百々「ん〜ん〜」

鼻歌を歌いながらマチコの似顔絵を書く百々。

慧「カツコイイ！」

慧がデッサン画を見て一言呟く。

百々「マツチ主役のマンガを仕上げて、夏のビッグイベントに頒布するツス！」

慧「はあ!？」

百々は、夏のビッグイベントに備え、マンガを製作中で

次郎「何書いているんだ？」

実「風景を描いているんだ・・・展示会に出品し様と思っただけ！」

実の方は、展示会に出す風景画を描いていた。

幸子「野間さんが高い所に居そうなのは読めていましたが・・・更に3人補足できたのは幸運でした！」

慧「ココちゃん名推理だったね！」

幸子は、3人に封筒を手渡す。

公園からは、沈んだ晴風が見える。

百々「晴風、如何なるツスカね？」

媛萌「私達・・・もう乗れないのかな・・・」

百々と媛萌は、もう晴風には、乗れないのかなと言つて、不安になる。

幸子「あつ・・・機関長と黒木さんは研修・・・主計科の3人も和菓子屋さんで修業・・・態々テスト休み中にですよ！」

慧「言われてみれば、確かにちよつと変化かも・・・」

テスト休みに殆んどの晴風の生徒が他の事をしている。

偶然にしては、出来過ぎている。

次郎「考え過ぎだろう・・・」

それに対して、次郎が考え過ぎだろうと言いうが

幸子「でも2学期から海洋実習、私達は乗る艦が無いんです・・・それを見越して動いているんだとしたら・・・」

幸子の脳裏にクラス再編の件が再び浮上する。

次郎「雅か・・・あの校長が・・・あんなに活躍したお前らを・・・」

信吾「案外そうかも知れないぞ中佐！」

実「人は、見かけによらずだからね・・・」

次郎「余計な事言うな!!・・・唯でさえ不安になるじゃねえか・・・」

信吾と実に言われ、次郎までもが不安になる。

3人が揉めていると

マチコ「あっ!?!」

マチコが何かに気づく。

それは、沈んでいる晴風に大型の船が近づいてきた。

マチコ「あ、あれは!?!」

それは、浮きドック船だった。

横須賀港、 棧橋

浮きドックを見た4人は、急いで晴風が沈んでいる横須賀港の棧橋に向かう。

棧橋には、既に晴風を引き揚げる作業を行う為、万里小路重工の作業員達が来ていた。その中に晴風水測員の楓が執事と立っていた。

鶴「お嬢様だと思っていたけど……」

慧「此処まで凄いとほね……」

次郎「俺の家も財閥だけど、此処までは……」

3人は、楓の凄さに驚愕する。

執事「お嬢様!……そろそろお戻りになっていただかないと……」

隣居る執事が楓に声を掛ける。

楓 「時期に戻りますから、もう少し待って下さい。」

執事 「分かりました・・・お伝えしておきます。」

そう言つて執事はその場から立ち去つた。

『ん・・・』

しばらく様子を伺つていと

楓 「分かつております：：其処にいらつしやるのは・・・」

『えっ!?!』

楓は、物陰から様子を窺つていた4人の気配に気づいていた。

自分達の存在が既にバレているのでは仕方がなく、4人は物陰から出てくる。

幸子 「えつと・・・お渡しする物が・・・」

幸子は楓に封筒を手渡す。

楓 「ご丁寧にありがとうございます。」

幸子 「あの・・・万里小路さん・・・さつき話していた『戻る』って・・・」

幸子は、さつき執事が言っていた意味を問う。

楓 「実は、お父様から何度も言われておりまして・・・」

如何やら、楓は、実家に帰る様、親から呼び出しを受けていた。

幸子 「はっ!?!」

楓の言葉に絶句する幸子。

佐野天然温泉湯処「のぼり雲」

その頃、芽衣と志摩は、温泉上がりに休憩室で将棋をしていた。

芽衣「よし、打つちやうよお」

志摩「うう」

勝負は、芽衣が有利に成り

芽衣「取つちやうよお」ソレ」

志摩「うい」

大事な駒が取られ、志摩は、次の手を打つ。

芽衣「おおつと、また取れちやうねえ」

志摩「うい」!？」

折角打った手も芽衣には通じず、かえって被害が大きくなる志摩。

芽衣「タマの仲間はどんどん減って行く」

志摩が芽衣に将棋で勝つのは、いつになるのか

そして、2人が将棋をしている隣では

フェイト「温泉は、入ったから・・・次は、何所行く？」

なのは「う・・・ん・・・何所行こうかな・・・」

ヴィヴィオ「買い物!」

なのは「ん!・・・じゃ何所かのお店に行こうか!」

ヴィヴィオ「うん!」

なのはとフェイトは、ヴィヴィオいわれて、何処かの店に寄る事にした。

MOAI&CAPI

一方、次郎と幸子達は、ハンバーガーの店であるMOAI&CAPIで昼飯を食べていた。

慧「浮きドックが来てるて事は、やはり引き上げて解体なのかな?」

鶯「いつまでもあ其処に置いとく訳に、いかないしね・・・」

次郎「何だか嫌な気がしてきた・・・」

3人が不安になっている時

幸子「ん?」

鶯の携帯にメールが届いてきた。

鶯「・・・あっ!?!」

それは、晴風砲雷員の果代子からだった。

ボウリング場

果代子と同じく砲雷員の理都子は、横須賀のボウリング場に居た。

理都子「そくれ！」

理都子は、思いつきりボールを投げ、ボールに全弾命中する。

果代子「崩れないねりっちゃん！」

ポジションを崩さない理都子に果代子は、驚く。

理都子「此処のレンコンリシヨンは、もう把握したからね！」

既に理都子は、此処のレンコンリシヨンを把握していたので、何処から行くか分かっていた。

果代子「うゝ」

果代子も負けていられず、ストライクを出す。

理都子「やるね！」

果代子「でしよう！」

流石は、水雷員だ。

それを隣で見ていた晴風砲術員の光、美千留、順子の3人。

光「流水水雷員！・・・恐ろしい角度で命中させるね・・・」

順子「ドキユンと当てたけど、普通ありえないよあれ？」

果代子と理都子の腕に2人は、驚きながらゲームを続ける。

光「次、私の番ね!」

矢は、全弾同じ場所に命中する。

順子「やっぱダーツでは、光ちゃんには、勝てないな・・・」

やっぱりダーツでは、光には、勝てない順子。

美千留「次、ビリヤーダやろうよ!・・・台あるみたいだし!」

それに対して、美千留がビリヤーダを進めるが

順子「此処輪投げないの?」

順子は、得意な輪投げは無いのか問う。

光「無いよね普通・・・」

美千留「有るとこ教えて欲しいわ!」

流石にボウリング場に輪投げは無いだろう。

順子「うゝ輪投げが無いんじや、丘にいるより、艦の方が楽しいかも!」

輪投げが無い事に順子は嘆き、晴風の居た時が良かったと言ひ張る。

光「私も艦の方が良いよ・・・大変だったけど、面白かったし!」

それに光も同意する。

順子「早く治らないかな・・・晴風!」

美千留「直せば良いんだけどね・・・」

3人が考えてると

幸子「失礼します！」

次郎と幸子達がやって来た。

光「あつ！一緒にダーツやる？」

光は、幸子達にダーツをやらないかと誘う。

美千留「ビリヤードでも良いよ！」

理都子「いや、皆でやるならボーリングでしよう!!」

順子「いやいや、此処は、やっぱりドキュンと輪投げで・・・」

『無いから!!』

ボウリング場に輪投げが無い事に対して順子以外の砲術科と水雷科の全員がツッコム。

幸子「いえ、任務が残っているので・・・ですが、近いうちに是非、一緒に遊びたいです!・・・できればクラスの皆で!!」

幸子はまだ封筒配りが残っているので、遊ぶのはまた今度、出来れば晴風全員と

美千留「クラス皆つて大げさじゃない！」

順子「ドキュンと集まるかな？」

陸ではやはり艦と違い、集まる機会が少ない。

現に何人かは固まっているが、基本バラバラになっている。

幸子「『ワシらの組は、如何なるや!・・・稼ぐねこじがなけりや祭りが終わるよ・・・おおやれんわい、別れの杯を用意せんとにや、がく・・・』」

幸子は、そんな現状に恒例の一人芝居をして一人項垂れた。

次郎「何じゃそりや・・・」

次郎には、意味が分からなかった。

慧「大丈夫、ココちゃん?」

そんな幸子を慧は慰める。

光「なんかただ事じゃないのは伝わって来たよ!」

幸子「皆で集まれるのは今の内だけかもしれないので・・・」

鶴「えっ?・・・それって私達!・・・艦が無いから!」

慧「じゃあ、私達のクラス!」

幸子の呟きを聞いて、今まで幸子と行動を共にして来た鶴と慧も此処でやっと自分達のクラスが解体されるかもしれない可能性に気づいた。

幸子「ま、まだ、決まった訳ではありませんから、御内密に・・・」

確かに明乃やましろからも古庄からも真雪からも直接、晴風クラスが解散になるとは言われていない。

あくまでも幸子の予想の範疇である。

しかし、この場にいる皆に与える不安は大きかった。

鵜「あつ、そうだ！……さつきメールが有つて……メイちゃんとタマちゃんの居場所を掴んだんだけど……ちよつと離れているんだよね……」

鵜が芽衣と志摩の居場所を幸子に教える。

慧「じゃあ、私達でメイちゃんとタマちゃんには、届けて置くよ！」

慧が幸子に代わつて芽衣と志摩に封筒を渡しておく伝え、2人の分の封筒を慧に渡す。

幸子「すみません……助かります。」

鵜「航海科はこの後、ドブ板通りのダイナーに集まつて、ご飯だつて……」

幸子「では、航海科には、私が……」

航海科のメンバーの居場所が分かったので、幸子は其方へと向かう。

幸子が去り

次郎「ん!?!」

幸子が去つた後、次郎の携帯が鳴り、見て見ると

次郎「や、やばい!?!……急いで戻らないと……」

それは、薫からのメールだった。

次郎「じゃあな諸群!・・・くれぐれも頑張れ!!」

と言って、急いで戻る次郎。

鶴「行っちゃった・・・」

美千留「やばいよ、クラス無くなるの?」

果代子「そんな・・・」

理都子「折角皆仲良くなったのに・・・」

順子「もう一緒に船に乗れないのかな・・・」

次郎と幸子が去った後、7人がクラス解散の危機かもと言う事実にあれやこれや言っている

留奈「あれ!？」

『ん!?!』

留奈「皆お喋りタイム?」

其処へ、先程麻雀をしていた筈の麗緒、桜良、留奈、空の4人がやってきた。

何故か留奈の方は額おでこを手で抑えていた。

あの後、また罰ゲームを受けたのだろう。

慧「麻雀していたんじゃない?」

麗緒「留奈が負けてばっかで、おでこ痛くなったから他のコトして遊ぼうって!」

やはりあの後、留奈は、連戦連敗した様で、流石にこれ以上は、したくなくなつたので、他の事を仕様と此処に来たと言うのだ。

空「皆さん、仲がよろしい様で何より……で、お揃いで何のお話ですか？」

空が皆で何の話をしているのかを尋ねると

光「いや、それがね、此処だけの話なんだけど……」

7人は不安そうな顔でクラスが解散になるかもしれない噂を機関科の4人に話した。

佐野天然温泉湯処「のぼり雲」

その頃、休憩室では、なのは達が去つた後も芽衣と志摩は、まだ将棋をしていた。

志摩の手には将棋の本があった。

恐らくあまりにも弱い志摩にハンデとして芽衣がOKを出したのだろう。

芽衣「成程！……いぎしよの舟囲いで来たか……」

志摩「うい！」

序盤は将棋の本のお陰で勝っていた志摩であつたが

芽衣「だがしかし！」

志摩「うい!？」

芽衣「ココが急所なんだなあ……これでタマの艦はバラバラだ！」

僅かな隙を芽衣に見破られて、逆転される。

志摩「ういゝ!!!!」

流石の志摩もまたしても不利な立場となった。

とある漁港

此処は、横須賀のとある漁港

晴風機関長の麻侖と同じく機関助手の洋美は、此処で漁船のエンジンの修理をしていた。

洋美「良い自主研修ね、コレ！」

麻侖「だろう? 勘も鈍らねえしな・・・」

機関科の4人が言っていた研修とは学校側が提案した研修ではなく、2人が自主的に行っているボランティアで漁船のエンジンの点検や修理、整備をするものであった。

洋美「マロンと二人で何かをするのって・・・結構久しぶりね！」

晴風に居た時は当然、洋美は麻侖と一緒に居たが、2人つきりではなく、他の機関科の4人もいたので、2人つきりと言う意味では無かった。

麻侖「ああ、たまには良いもんだろう!!」

2人は、楽しく修理をしていると

「やっぱり良い腕してるね！」

突然誰からか声を掛けられ

『ん?』

その声に反応して2人が棧橋を見ると、其処には、明石艦長の珊瑚が立っていた。

麻侖「なんでえ、あんたは?」

珊瑚「明石艦長、杉本珊瑚・・・妙な噂を耳に挟んだんで会いに来た!」

珊瑚は、何かの噂を聞いて、態々2人に会いに来たみたいだ

さかくら総本家

麻侖と洋美が珊瑚と邂逅を果たしている頃、美甘と杵_ツ姉妹がバイト兼修業をしているさかくら総本家でも

美甘「いらつしやいませ・・・あっ!」

『あ』

間宮艦長の優衣が会いに来た。

美甘「貴女は確か・・・」

優衣「話が有るんだけど、良いかしら?」

優衣も珊瑚と同様、美甘達に要が有った。

それを調理場から俊秋が見ていた。

俊秋「ん?」

俊秋は、声を掛けず、唯密かに様子を伺う。

横須賀街外

一方幸子は、横須賀の町を1人トボトボ歩いていった。

既に辺りは、夕焼けに包まれていたが、幸子の顔色は優れず不安に包まれている。

幸子「まだ・・・決まった訳じゃ・・・ん？」

幸子が航海科の4人が集まるYOKOSUKA SHELLELに向かっている最中、前方からセグウェイミニに乗った晴風衛生長の美波がやってきた。

幸子「あつ美波さん！」

美波も幸子に気づいて、彼女の前でセグウェイミニを止める。

幸子「よかった・・・これを！」

幸子は美波に封筒を手渡す。

美波「ん？」

幸子「学校から期日指定密封指示書です！」

美波「・・・感謝する。」

美波が封筒を受け取った瞬間に彼女のスマホが鳴り出す。

美波「もしもし・・・分かった。」

幸子「あの？」

美波「研究室に戻る・・・衣帯不解・・・」

幸子が声をかける間もなく美波は大学へと戻って行く。

研究が忙しい様子で此処には夕食でも食べに来たのだろう。

幸子は美波が去り際に残した『衣帯不解』の言葉の意味を調べた。

タブレットには

幸子「衣服を着替える事もせず、不眠不休で仕事に打ち込む事・・・」

衣帯不解：：衣服を着替える事もせず、ある事に熱中する事。

不眠不休で仕事に打ち込む事。

「衣帯」は着物の帯の意。

と表記されていた。

佐野天然温泉湯処「のぼり雲」

休憩室では、まだ芽衣と志摩が将棋を続けていた。

芽衣「いよおし・・・此処は一気に広げて行こう!!」

芽衣は、志摩に止めを刺そうと志摩の駒を囲む。

志摩「うい!!!」

志摩にはもう打つ手がない。

芽衣「一度火が着くと、うあ!つと言う間にこうなるんだよ・・・!!」

芽衣の腕に志摩は、惨敗した。

YOKOSUKA SHELL

YOKOSUKA SHELLでは、航海科の4人は、まるでお通夜の様な暗い雰囲気を出していた。

『……』

テーブルに置かれた横須賀名物の横須賀海軍カレーを4人は手をつけずにただジツと頷いていた。

美奈「食べないの？」

隣には、空母大鳳の航海長的美奈が4人の様子を伺っていた。

幸子「あの……失礼します……」

其処に幸子が来店した。

『ん!?!』

幸子の声に反応して航海科の4人が一斉に幸子へと視線を向ける。

鈴「ココちゃん……」

幸子の姿を見て鈴とまゆみが涙目になり

『うわぁ……ん!!』

そして、一斉に幸子に泣き付く。

幸子「ど、どうしたんですか? 皆さん!?!」

美奈「何泣いてるの?・・・いつも一緒に居る訳じゃないんだから・・・」

泣く2人に対し美奈は、いつも一緒に居る訳じゃないと平然に言う。

鈴「美奈さんは、平気何ですか?」

そんな事を言う美奈に鈴は、平気なのか問う。

美奈「・・・平気な訳無いでしょう・・・別れは、辛いけど・・・運命には、荒がえないんだもん・・・それが現実!」

実は、美奈も平気な訳が無かった。

本当は、別れが辛いけど、運命には、荒がえないと悟ると素直に受け入れるしかない。それが現実だと2人に言う。

まゆみ「そんな・・・」

鈴「そんなの嫌だ!!!」

しかし2人は、現実を認めない。

横須賀女子海洋学校、寮エリア

その後、暗い面持ちで寮に戻る幸子。

彼女は寮の手前で自分の名前が書かれた封筒を見る。

幸子「これは・・・転属指示書と言う事ですか・・・」

此処までの話を総合するとクラスの解散は既に決定されており、有能だと思われる人

材は他艦の艦長らが直接赴いてヘッドハンティングしてクラスの能力を高めようとしている。

幸子にはそう思えて仕方がなかった。

いずれは自分の下にも他艦の者がヘッドハンティングに来るのだろうか？

それとも封筒の中身には既に今度転属するクラスが既に表記されているのだろうか？

沈んだ気持ちで寮に入る幸子。

横須賀女子海洋学校、寮

ミーナ「……」

寮のロビーではミーナが任侠物のDVDを見ていた。

幸子「……」

ミーナ「ん？おう、帰りが遅かったから鑑賞会先に始めってたぞ！」

幸子に気づいたミーナが片手を上げて声を掛ける。

幸子「ミー……ちゃん……」

ミーナ「ひ！」

幸子「ん……うあ……!!」

ミーナの姿を見て、幸子はこれまで我慢していたモノが一気にあふれ出し、ミーナに

抱き付いて声を上げて泣いた。

ミーナ「ココ!?!」

幸子「うちのクラス・・解体・・されるかも・・・しれないんです・・・」

ミーナ「あつ!?!」
「噂は本当じゃったか・・・」

幸子から聞いて、ミーナは、やはり本当の事だったのかと察する。

幸子「・・・クラスがバラバラに・・・もう、私の居場所無くなっちゃう!!」

最早居場所が無くなるかと分かり、幸子は、泣き崩れる。

ミーナ「・・・もし、そうなったら・・・」

だが、それにミーナが

幸子「えっ?」

ミーナ「お主!・・・ワシの学校に留学せんか?」

留学せんかと救いの手を差し伸べる。

幸子「えっ!?!」

ミーナの提案に暫し呆然とする幸子だった。

空母大鳳、艦橋

一方、横須賀女子海洋学校に停泊している空母大鳳の艦橋では、当直の薫と次郎が居た。

薫「えっ!?! . . . 如何いう事!?!」

次郎「聞いての通りだ . . . 晴風の全員 . . . 解散する見たいだぜ!」

次郎は、薫に今日あつた事を全て話した。

薫「そんなの嘘でしょう!?! . . . だつて真雪さんは、そんな事言わなかつたわ!?!」

薫は、クラス再編など信じられなかつた。

次郎「流石に言いたくなかつたんじゃないか? . . . 教官だつたお前には?」

次郎は、真雪が薫に氣遣つて、言わなかつたんだらうと察する。

薫「ん」

それを聞いた薫は、不安に成り

薫「大丈夫かな . . . 皆」

晴風の生徒を心配する。

次郎「まあ . . . 俺達には、何も出来ないからな」

次郎の言う通り、今の自分達は、唯の部外者、学校の事については、口出しは、出来なかつた。

薫「でも 元教員として 何かしてあげたい」

しかし、薫は、それでも晴風の生徒に何かをしてあげたいと思う。

次郎「薫」

そんな薫の思いに次郎は、ある事を考える。
果たして、晴風の生徒達は、解散されてしまうのか

第3章 納沙幸子がピンチ！ 後編

6月9日

横須賀女子海洋学校、学生寮、幸子の部屋

幸子は、部屋で任侠物のDVDを見ながら、考え事をしていた。

幸子「ドイツに行けばミーちゃんと一緒にでもでも折角シロちゃんとも親友になったのに……それに岬さんじゃない艦長になるんですよ……」

ミーナの言う通りにドイツに留学すればミーナと同じ艦に乗れるが、これまで共にした晴風の生徒達と別れる事になる。

如何すれば良いのか、幸子の心は、迷っていた。

6月10日

横須賀女子海洋学校、正門

翌日、幸子は登校途中にましろと出会い、これまでの事を話す。

ましろ「あの指示書でそんな事が？」

幸子から聞いて、指示書にクラス再編の件が記載されている事に驚くましろ。

幸子「はい……このままだとクラスがバラバラになっちゃいます……急いで艦長

に相談を……」

幸子は、危機感を覚える。

ましろ「分かった!……艦長に直ぐ報告する!……その間にクラス全員を上手く纏めて置いてくれ!」

それに対して、ましろは、自分から明乃に相談すると言つて、その間に幸子には、晴風の生徒をまとめるよう命じる。

幸子「了解しました!……ふう!」

ましろの命令に素直に了承する幸子。

ましろ「ん……」

素直に了承する幸子に気が乗らないましろだが、今は、任せるしかない。

横須賀女子海洋学校、図書室

ましろは、放課後、図書室で書類仕事をしている明乃、もえかの2人に伝える。

ましろ「如何も、晴風クラスが解散になるって噂が流れっている様です!」

明乃「えっ!?!うちのクラスが?」

もえか「そんな話は聞いてないけどなあ……」

明乃は、クラスが解散になると聞いて驚いていたが、親友のもえかは、そんな話を聞いてはおらず、冷静な様子。

明乃「もかちゃん何か知っているの？」

もえか「明石や間宮の艦長が晴風クラスの子を欲しがっていたって噂は、耳にしたけど……」

もえかは、珊瑚や優衣が麻侖や美甘達をスカウトしていた事を知っていた。

明乃「え……！家族がバラバラになるのは嫌だな、唯でさえ、家がきこうなのに……」それを聞いた明乃は、クラスが解散になるのを嫌がる。

もえか「じゃあミケちゃん、うちに来る？」

そんな明乃にもえかは、武蔵に誘うが

明乃「ん……もかちゃんと一緒に、嬉しいけど、私の家は、晴風だから！」

明乃は、あっさり断る。

もえか「フフフ……そう言うと思ってた……じゃ私もちよつと情報を集めて見るね！」

明乃が断る事は、もえかは、分かっていた。

そんな明乃に協力し様ともえかは、スマホを使って情報を集め始める。

明乃「私も皆の所に行かないや！」

明乃も行動しようとするが

ましろ「今、納沙さんに、全員の取り纏めを頼んであります……なので、艦長はま

「ず始末書の提出を急いでください!」

ましろは、明乃に始末書を先に仕上げるよう言う。

明乃「ええ・・・!?じゃあ、シロちゃんも手伝ってよ・・・!!」

だが、流石に始末書が終わらない事に明乃は、ましろに救援を頼む。

ましろ「はあく仕方ありませんね・・・」

明乃の救援にましろは、仕方なく応じる。

明乃「わくい、ありがとう!!」

ましろの救援もあって、明乃は、スムーズに始末書を仕上げて行く。

しかし、3人の会話を密かに聞いていた者が居た。

「.....」

諏訪大神社、諏訪公園

その頃、諏訪大神社の諏訪公園のベンチで幸子は、鶯、慧の3人で、如何やったらクラス解散を阻止できるのかを話し合っていた。

幸子「クラス全員を纏めるなんて・・・如何やったら良いんでしょうか?」

鶯「先ずは、連絡!」

幸子「それだけだと、何か足りなさそうですね・・・」

3人が悩んでいると

幸子「あっ!？」

幸子の視線の先に戦艦三笠の装甲板が目に入った。

幸子「東郷ターンですよ!!・・・東郷ターン!!」

『?』

幸子の言う東郷ターンの意味が分からず首をかしげる鵜と慧。

鵜「直進する艦隊に向け、進路を塞いで、頭を抑える為に敵前で大回頭する。」

鵜はスマホを使い東郷ターンとは何なのかを調べる。

東郷ターンとは、かつて龍之介の世界でも行われた東郷平八郎の戦術。

日露戦争の最後の戦いである日本海海戦で日本の連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を前にして、司令長官の東郷平八郎は全艦に取舵を指示し、敵に横腹を見せる様子をきった。

この時のターンの事を東郷ターンと呼ぶ。

慧「これに何の関係が？」

鵜が調べ、慧は、東郷ターンとクラス解散阻止と一体何の関係があるのか問うと

幸子「敵前で進路変更!的になるだけです!!・・・いや、前撃てる砲に少ない方にこの距離では、簡単には、当たらない!!・・・それより、相手の進路を塞ぎ、両方戦に持

ち込む!!・・・成程、全艦力合わせって砲撃すれば・・・」

恒例の幸子の一人芝居が始まる。

それを鵜と慧は冷えた目で見ると見る。

幸子「そう・・・皆が一つになれば、どんな難関でも打ち破れます・・・その為に署名を集めましょう!!」

幸子は、クラス再編を阻止しようと署名活動を思い付く。

慧「何で署名?」

慧は、何故署名なのか分らなかったが

幸子「全員の一致団結には最適じゃないですか!」

鵜「横須賀市の人にも広く呼び掛けて、晴風存続を学校に訴える・・・一石二大黄土・・・」

鵜は、幸子が何故署名をするのか理解できた。

慧「いや、そのネタ古すぎるよ!」

幸子「それです!」

慧「え・・・」

慧は本当に大丈夫なのか?と疑問視していた。

その時

「いや!・・・その策!・・・案外行けるかも知れないぞ!!」

突然何処からか声が聞こえ

慧「だ、誰!？」

誰かと思いい人、辺りを見回すと

「とお!!」

後ろの石碑から誰かが現れた。

『あっ!?!』

次郎「白鳳艦長小沢次郎!・・・只今参上!!」

それは、次郎だった。

次郎「話は、全部聞いたぞ!!・・・俺も署名活動に協力するぞ!!」

幸子達の話を全部聞いていた次郎は、署名活動に協力すると言う。

幸子「えっ!?!」

次郎の協力を驚く幸子だが

幸子「でも、部外者である皆さんにご迷惑が掛かるのでは?」

流石に自分達とは、関係ない次郎達に迷惑は、掛けられなかったが

次郎「固い事言うなよ・・・事件を解決した友じゃないか!・・・それに・・・ピンチになっている薫の教え子を助けたいしな・・・」

それに対して、次郎は、そんな事は、関係なく、共に事件を解決に導いた晴風の生徒

達がピンチになっているのを見過ごせなかった。

それに実は、次郎は、薫が不安になるのをこれ以上見ていられなかったのだ。

幸子「ありがとうございます!」

次郎の親切に幸子は、感謝する。

画して、クラス再編を阻止する為の署名活動が開始された。

まず、4人が向かったのは

ボウリング場

美千留「勝った・・・!!」

『イエーイー!』

光「次は負けないよ!」

順子「足引つ張って御免・・・」

果代子「大丈夫、フォーム直せばいけるから・・・」

順子「ホント?」

ボウリング場では、理都子、果代子、光、美千留、順子の5人が二チームに分かれてボウリングで対戦していた。

結果は、理都子と美千留のチームが勝ち3人のチームは、負けた。

足を引つ張った事に順子は、落ち込むも果代子がそれを慰める。

其処へ

幸子「楽しそうですね・・・ちよつと良いですか？」

クリツプボードを抱えた幸子がやって来て

美千留「ん？」

光「何これ？」

5人の前に署名書を出す。

順子「晴風クラス解散阻止？」

理都子「真情書？」

果代子「それつと署名簿だつて・・・」

幸子「はい！・・・シロちゃんからクラスをまとめる様に頼まれたので、全員が一致

団結して、晴風クラスの解散を阻止しましょう!!」

幸子は、5人にクラス再編を阻止する為に皆で署名活動し様と誘うが

美千留「でも他のクラスつて、どんな感じなのかな？」

それに対して、美千留が他のクラスは、如何なのか思い付く。

光「ああ、砲術委員としては、武蔵の46サンチ砲とか撃つてみたいよね!!」

順子「ズバーンと憧れちゃうな!!」

美千留の言葉に光と順子が、どうせ代わるなら武蔵の砲術員になりたいと憧れるが

美千留「でも、他のクラスって、もう砲術委員居るよね？」

順子「当然居るでしょう!!」

美千留「そうだったら、あたし達もバラバラに成るのかな？」

幸子「うんうん」

光「それどころか、射撃指揮所に入れるか如何かも分からないよ？」

幸子「ん……」

当然他艦にも砲術員がおり、バラバラに配置されるか人数が多いと射撃指揮所にも入れない可能性に気づく美千留と光。

順子「え……!それは、やっだよ!」

流石に離れ離れになるのは、嫌だと言う順子。

理都子「そもそも武蔵って、魚雷無いよね？」

武蔵には、魚雷が無い事に気づく理都子

果代子「私達、居場所無いよ!」

魚雷が無い事によって武蔵には、自分達の居場所が無い事に気づく果代子。

美千留「やっぱり、皆一緒に良いよね……」

結局5人は、一緒に居る事に同意し

幸子「じゃ署名お願いしますか!!」

『は〜い!!』

それらの要素から砲雷科の5人は署名活動に協力する。

雀荘いりふね

その頃、雀荘いりふねでは、相変わらず機関員の4人が麻雀をしていた。

麗緒「瑠奈、それチョンボ!」

瑠奈「うわあ!!ヤバ・・・!!」

桜良「またなの?」

空「瑠奈!さつきから上の空だよ!」

瑠奈は、さつきから麻雀に集中していなかった。

瑠奈「・・・他のクラスに移ったら、もう一緒に卓囲めないんだよね?」

もうクラスが再編されたら、この3人とは、一緒に麻雀が出来ない事に瑠奈は、不安を抱いていた。

麗緒「えっ!?!・・・一緒に映るんじゃないの?」

それを聞いた麗緒は、4人一緒かと思っていた見たいだが

空「人員足りない艦なんて無いでしょ!」

配置されるとしたら皆バラバラの配置になる事を空が指摘する。

桜良「じゃクラス別れちゃうの!?!」

空の指摘を聞いて、桜良は、驚いて椅子から立ち上がる。

その衝撃で牌が倒れ

瑠奈「うわあ!! チイステンパイ!?!? . . . テン . . .」

自分の手札が丸見えになった。

麗緒「しかも、九面待ちじゃん!?!」

更に桜良の手札は、もう既に上がる寸前であつた。

幸子「あつ! チューレポトンですか!?!」

其処へ幸子と慧がやってきて桜良の牌を見る。

幸子「これ、上がったら死ぬんですよえ . . .」

と縁起でもない事を平然と言つた後、次に来る予定の牌を手に取る。

幸子「あつ! つぎ上がりですよ!」

次の牌は上がりの牌だつた。

あのまま続けていたらどうなつていた事やら?

桜良「ええーっ!?! これまだ大丈夫でしょう!?! 私まだツモつてないし!?!」

幸子の縁起悪い話を真に受けて慌てる桜良。

慧「じゃあ . . .」

そんな彼女に慧は

慧「生きている内に署名を？」

デビルズスマイルを浮かべて桜良に署名を迫る。

その後、事情を説明して機関科の4人も署名に協力するよう申し入れる。

はらどけい

此処は、はらどけいと言う学生御用達の店である。

その店の外で芽衣と志摩は、将棋の再戦をしていた。

芽衣「おお！ 苦しい状況を打開する為にそう来たか・・・」

志摩「うい！」

芽衣「でも、こんな入力じゃ、如何にも成らないよ・・・」

志摩「う〜い！」

戦況は相変わらず志摩の不利であった。

横須賀ポートマーケット

航海科の4人は、横須賀ポートマーケットの屋外フードコートでクラス解散について

考えていた。

鈴「艦長や皆と別れるのは、いやだな・・・」

まゆみ「うちの艦長と鈴ちゃん・・・結構良い組み合わせだったもんね・・・」

秀子「あの艦橋、居心地いいよね・・・」

聡子「皆と一緒に居たいぞな・・・」

やっぱり4人もクラス解散には反対の様子だった。

そんな時

幸子「ソナ、アナタガタニ・・・ビッグニュース!・・・ワタシノハナシヲキケバ・・・」

ソナナヤマイツキニカイケーツ!!」

幸子がチャライナンパ口調か怪しい宗教勧誘口調で航海科の4人に声を掛ける。

鵜「胡散臭い!」

やはり鵜も今の幸子は怪しい宗教勧誘している人にしか見えない。

そしてそんな鵜の手にはあのダウジングに使う金属棒が握られている。

前回と違い、今回はダウジングで晴風の生徒の居場所を探っているみたいだ。

慧「落ち込んでいる時は其処にドンドン漬け込むのが定石」

慧の方は怪しいデビルズスマイルを浮かべてボソツと呟く。

彼女が闇墜ちしたら詐欺師にならないか心配である。

鵜「あれは完全にダメなパターンでしょう!」

しかし、鵜は明らかに幸子の口調、態度は怪しすぎると言う。

幸子「黙って、此処にサインすれば・・・晴風クラスはそのまま、艦長と別れる事も

無く・・各自の立場もそのまま・・その上・・成績もうなぎ上り!!」

幸子は、航海科の4人に署名に協力すればクラス解散はしなくて済むし、その上、成績も上ると言う。

鈴「サインする!!」

聡子「サインするぞな!!」

それを聞いた鈴と聡子がまつさきにサインすると言う。

鶴「するんだ：：」

そんな鈴と聡子の様子を冷めた目で見ると慧と鶴。

幸子「署名は、此処に・・・」

幸子は、4人の前に署名書を出す。

まゆみ「えっ、怪しいですよ?」

秀子「うん、怪しい?」

まゆみと秀子は怪しいと疑う。

そもそも、署名しただけで成績が上がるのであれば苦労はない。

慧「今なら、美白効果も着いてくるし、胸が大きくなるかもしれないよ!」

『しますー!』

其処を慧が美白効果と胸が大きくなると言つて幸子の援護射撃をする。

すると、まゆみと秀子もあっさりと署名した。

鵜 「えっ? それで良いの?」

鵜 も航海科のメンバーの行動を見て、彼女らの将来を心配した。

聡子 「で? これ何の書類ぞな?」

署名した後には書類について尋ねる聡子。

鵜 「勝田さん、絶対に振り込め詐欺とかに引つかかるタイプ」

鵜 は、聡子が詐欺に掛かりやすいタイプだと確信する。

幸子 「……この勢いでどんどん署名を集めちゃおう!」

慧 「おう!」

『おっうー!』

航海科4人の協力を得て次なる獲物を求める幸子達であった。

中央公園

その頃、横須賀の中歐公園では、マチコ、美海、媛萌、百々の4人は、写真撮影をしていた。

美海 「マツチ……!! うっ……」

媛萌 「ああ、もうちよつと下から照らして!」

百々 「こつちツスか?」

媛萌、百々が鏡を持って、左右から照らし

美海がマツチを写す。

そんな時

マチコ「ん！・・・誰か来た？」

マチコは、誰かの気配を感じ、眼鏡を戻すと

其処へダウジングで晴風の生徒を探している幸子達がやって来た。

鶯「居た!？」

『居た!？』

幸子と慧は、雅か鶯のダウジングで晴風の生徒の居場所が分かるとは思ってはおらず、見つかった事に思わず声を上げる。

だが、慧の場合は以前、晴風でも鶯のダウジングは見たのにその事をすっかり忘れているのか、あの時は偶々だと思っていたのだろう。

マチコ「署名活動？」

幸子「そうです！晴風クラス存続の為にお願いします！」

幸子は、4人にクラス再編を阻止する為、署名活動を行っている事を説明する。
すると

百々「ふつつつぶ、成らば、私のコレクションが火を吹くツスよ・・・」

百々が『我に策あり』と言った様子で協力すると言う。

その策と言うのが、マチコにコスプレ衣装を着せて駅前立たせ、注目を浴びせるモノだった。

美海「わあ・・・!?革命だ・・・!!」

しかし、注目する美海だけで、署名活動には何の影響もなかった。

幸子「駄目ですね。」

幸子は、一言でこの策は失敗だと言い切る。

百々「良い案だと思ったツスけどね・・・」

媛萌「釣れるの美海だけでしよう!!」

媛萌も幸子同様この策は失敗だと言い放つ始末だ。

幸子「私、次行きますね・・・」

幸子も此処で無駄に時間を潰す訳にはいかなかったのであつさり¹と他の生徒達を探しに行った。

ヴェルニー公園

水測員の楓は、ヴェルニー公園から浮きドック船が見える所に居た。

幸子「万里小路さん!」

其処へ幸子達がやって来て

楓「あ！・・・納沙さん！・・・それに皆様もお揃いで、如何されたのですか？」

幸子「昨日、つい聞いてしまったのですが・・・万里小路さん、実家に連れ戻されてしまっんですか？」

幸子は、楓に昨日聞いた事を問う。

楓「一旦戻りますが、直ぐ帰ってきますわ・・・オープンパールの準備がありました」
如何やら社交界に出る為に一度実家に戻ると言う事だった様だ。

幸子「そうだったんですね・・・てつことは、万里小路さんもうデビタントなんですか？」

幸子は、安心して、楓が社交界にデビューするのか問う。

楓「いいえ、18に成るまでに、まだ時間がありますもの」

楓は、18歳になるまで社交界にデビューしないそうだ。

幸子「ですよね！」

慧「2人が宇宙語を話している。」

慧は、2人の会話が理解できなかつた。

鶯「オープンパールの、大舞踏会、華族女性が社交界にデビューする場所！」

だが、鶯は、理解できていた。

慧「え！つぐちゃんも知ってるの？」

慧は、鶴が2人の会話が理解できる事に驚く。

鶴「世界中の電波が教えってくれた。」

如何やら鶴は、スマホで調べた様だ。

幸子「で、今署名活動をしているんですけど、協力して貰えますか?」

幸子は、楓にクラス再編を阻止する為、署名活動に協力を申し出る。

楓「まあ・・・!面白そうですね!」

楓は、快く引き受ける。

慧「万里小路重工の協力なら、あつという間に数万人あつまるんじゃない?」

楓の協力は慧は、楓の実家に加われば100人力と思つたが

楓「あら、お父様の力を借りるのでは、本当の協力になりませんわ」

楓は親の力を借りては本当の協力にならないと言つて、個人として協力する。

慧「え・・・其処は借りおうよ・・・」

だが、慧は、其処は借りおうよと駄々をこねる。

幸子「素晴らしいです!」

『ん?』

幸子「自らの力について、逆境を切り開く・・・それこそが晴風魂ですね!」

幸子は、楓の個人としての協力を尊敬する。

慧「そんな魂あつたけ？」

鶴「同然」

2人は、幸子の言葉に呆れながら、署名活動を続ける。

横須賀女子海洋学校、Gフオース区画

此処は、横須賀女子海洋学校のGフオース専用区画

此処には、GF隊員以外は、立ち入り禁止でミサイルなどの兵器が置かれていた。

次郎「じゃ、これ頼むぞ！」

幸子達と別行動をしていた次郎は、龍之介には、内緒で署名活動をしていた。

三郎「良いんですか、こんな事をして・・・准将にばれたら大事ですよ！」

龍之介に内緒で署名活動したら、厳罰になる。

三郎は、恐れていた。

次郎「薫の教え子がピンチになっているのに、そんな事言ってる場合か!?!・・・言われた通り、署名を集めろ!!」

次郎は、そんな事は、関係なく、GF隊員達から署名を集める。

それを見た三郎は

三郎「ああ、全く・・・山本中佐の事になると直ぐこれ何だから・・・まあ、それも良いけど・・・」

呆れながらも、次郎に協力しながら、署名を集める。

しかし、その行動は、龍之介に知られていた。

龍之介「……何やってるんだ……あの馬鹿は？」

功「何か、晴風クラス解散阻止の署名だそうです！」

龍之介「署名!?! ……何余計な事をしているんだあいつは！」

クラス再編を阻止する為の署名だと聞いて、呆れる龍之介。

功「止めさせますか？」

功は、次郎達の署名活動を止めさせますかと問う。

龍之介「ん……いや……そのままにしてやれ……」

功「分かりました。」

しかし、龍之介は、次郎達の署名活動を止めなかった。

実は、龍之介は、既に晴風の事に何かの手を打っていた。

Yデツキ

一方、横須賀中央駅のYデツキでは、晴風の生徒7人が署名活動を行っていた。

美波「……」

其処へ美波がセグウェイミニに乗って通り過ぎると

聡子「其処のお嬢さん！」

美波「ん!？」

聡子「ちよつと寄っていくぞな！」

聡子に呼び止められ、美波は、足を止める。

幸子「美波さん!・・・海洋医大の研究でもう戻ってこれないんじや？」

幸子は、美波がもう学校にも戻ってこないと思っていたのだが

美波「何だそれは?そんなつもりはないぞ！」

如何やら本人は、そのつもりは、無い様だ。

幸子「えっ?」

それを聞いた幸子が驚いていると

秀子「それより美波さん、何でそんなのに乗ってるの?」

秀子が美波に何でセグウェイミニに乗っているのか問う。

美波「揺れ耐える訓練だ！」

美波がセグウェイミニに乗っているのは、揺れに対する訓練の為であった。

秀子「うお！」

美波の訓練に秀子は、驚き

鈴「うわあ!あたしそれ乗るのは、無理だよ・・・」

逆に鈴は、セグウェイミニ乗るのは、無理だと判断する。

幸子「雅か、美波さんまた艦に乗るんですか?」

幸子は、これらの経緯から美波がまた艦に乗る事を察する。

美波「晴風の航海実習は、まだ終わっていない。」

幸子の察し通り、美波の海洋実習の単位は、まだ貰っていないので、また実習を受けなければならぬ。

鈴「じゃ、美波さんも署名お願いできるかな?」

其処で鈴が美波にも署名活動の協力を求めた。

美波「・・・一体何の署名だ?」

いきなり署名と言われ、美波は、何なのかと問うと

幸子「晴風クラスが解散になるかもしれないから・・・」

幸子は、美波にクラス再編の事を言う。

美波「なっ?!・・・それは、困る・・・」

それを聞いた美波は、皆と離れるのは、嫌だと困り果てる。

鈴「うん!・・・だから、ココちゃんが晴風クラス解散阻止署名運動を呼びかけているの!」

それに対して、鈴が幸子がクラス再編を阻止する為、署名活動を行っていると言明す

る。

美波「舵適う、要するに署名が沢山あれば、良いんだな？」

鈴の説明を聞いた美波は、要は、署名が集まれば良いと理解し

美波「これを使えば、何万人でも署名が集まるぞ！」

持っていたタブレット端末でクラス再編をSNSに拡散して、署名を集め様とする。

秀子「ヤバイ!!美波さん手段を択ばない形の人だ!？」

まゆみ「あんな危ない人だったなんて!？」

美波のやり方に秀子とまゆみは、流石にSNSに拡散するのは、危険だと判断する。

鈴「美波さん!不正は、駄目だと思います!!」

そして、鈴も美波のやり方に危険だと判断し、止めさせる。

美波「駄目なのか?凄く残念・・・」

鈴に止められ、美波は、落ち込む。

聡子「気持ちちは、つたわあだから、一緒に頑張るぞな!」

鈴「皆で集めた方が楽しいよ!」

聡子「そうぞな」

落ち込む美波に聡子と鈴は、励ましながら一緒に署名活動をしようとする。

美波「・・・分かった・・・やってみよう。」

2人に励まされ、美波は、一緒に署名活動をする事にした。
とある漁港の倉庫

その頃、とある漁港の倉庫では麻侖が冷凍保存用の大型冷蔵庫の修理をしていた。

洋美「漁港の漁船全部直したのにまだやるの?」

麻侖「機械を弄っていないと落ち着かねえでい」

漁港の漁船全部直しても機械を弄っていないと落ち着かない見たいだ。

そんな時

光「ああ! 機関長やつと見つけた!」

其処へ砲雷科の5人がやってきた。

理都子「港に入たら、今日は、来ていないって言われちゃって!」

順子「空ちゃんに聞いたら多分此処だろうって!」

如何やら5人は、麻侖と洋美を探す為、漁港を探して、空に聞いて、こつちに来た様
だ。

麻侖「おっ! なら調度良い手伝ってくれてえんでい」

麻侖は、調度来た5人に冷蔵庫の修理を手伝うよう言うが

果代子「私達、機関分かんないよ?」

流石の砲雷科に機関の事など無理だろう。

理都子「それより署名を？」

理都子は、麻侖と洋美に署名をお願いするが

麻侖「それよりは、何でい!？」

麻侖は、手伝いより署名が大事なのかと駄々をこねる。

5人は、麻侖と洋美にクラス再編阻止の署名である事を説明し協力を申し出る。

横須賀女子海洋学校、学生寮、ラウンジ

幸子「あ……疲れた……」

1日中署名活動をしていたので、学生寮に帰って来た幸子は、疲れてラウンジのソファ―に座る。

ミーナ「でも元気なつた様じゃな！」

隣で幸子を見ていたミーナは、幸子が昨日見たいに落ち込みが無くなつた事を指摘する。

幸子「はい、晴風クラス解散阻止の為に署名運動をやる事にしたんです！」

幸子は、クラス再編阻止の目標が出来た事にやる気を見せ、署名活動をする事をミーナに言う。

ミーナ「そう言うと思つておつた……で、弾は、何ほ必要なんじゃ？」

それを聞いたミーナは、幸子が署名活動をやる事を察していた見たいに協力を申し出る。

テア「支援砲撃が必要なのか? 我が校も協力を申し出た。」

それに続いてテアも協力を申し出た。

幸子「姉さん方、世話をかけるぞ」

2人の協力に幸子は、仁義語で感謝し

ミーナ「石工一般の恩義、此処で返すのも、渡世の義理中ヤツヤン!」

ミーナも仁義語で受けた借りを返すと言う。

すると

ましろ「何をやっている?」

ましろがクラス再編の事を話し合いに来たのか、学生寮にやって来た。

幸子「シロちゃん!? ・ ・ シュペーの皆も署名に協力してくれる事になったんです!」

幸子は、ましろにミーナとテアが署名に協力してくれる事を伝える。

ましろ「署名? 何の事だ?」

署名と聞いて、ましろは、何の事か問う。

幸子「晴風クラス解散阻止活動です!」

それに対して、幸子がクラス再編阻止活動だと告げる。

ましろ「ふえ!?何でそんな事になってる!!」

それを聞いたましろは、自分が知らない間にそんな事にまで発展していた事に驚愕する。

そんな時

次郎「おゝい書記!」

幸子「あつ小沢さん!」

次郎が署名書を持って、学生寮にやって来た。

ましろ「ん?」

次郎「うち隊員達から署名を集めて来たぜ!!」

次郎は、G F隊員達から集めた署名書の山を幸子に提出する。

幸子「こんなに沢山集めてくれたんですか!」

署名書の山に幸子は、驚愕する。

ミーナ「凄いなお主!」

次郎「皆晴風の生徒には、感謝しているんだよ・・・だから、晴風クラスが解散と聞いたら、皆直ぐ署名に協力してくれたんだ。」

次郎達G F隊員達は、晴風の生徒に感謝していた。

晴風のお陰で自分達の無実を証明する事ができたし、真っ先に事件を解決してくれた

事に感謝していたので、次郎からクラス再編の事を聞いて、隊員達は、恩返し仕様と署名に協力してくれたのだ。

ましろ「何をしているんですか小沢さん？」

次郎「何だ、ましろ？」

こうして、署名は、順調に集まっている。

密封指示書開封まであと3日

6月10日

横須賀駅

翌日、鈴達5人は、横須賀駅でクラス再編阻止の署名活動をしていた。

だが、昨日とは違い、署名が集まらない。

鈴「署名全然集まらないよ・・・!!」

署名が集まらない事に鈴は、涙を流し絶叫する。

まゆみ「日に焼けちやうよ・・・!!」

太陽の下で活動している為、日焼けをしようとするまゆみも嘆く。

聡子「如何すれば良いぞな・・・？」

署名を集めるには、如何すれば良いのか聡子は困り果てる。

美波「人を集めて趣旨を説明し、署名をして貰うしかないだろう」

それに対して、美波が署名して貰うには、先ず、人を集めて趣旨を説明してから署名を貰わなければならないと言うが

鈴「でも、後2日じゃ、そんなに集まらないよ！」

鈴の言う通り、いくら美波の言う通りに署名を集めても、後2日じゃそんなに集まらない。

既に半分は、集まっているが、それでもまだ足りない。

このまま署名が集まらないままなのか

そんな時

もえか「それなら、いい手があるよ……ふう！」

もえかが5人に救いの手を差し伸べる。

それからもえかは、5人にある秘策を言い、明乃とましろ以外の晴風生徒全員に伝える。

さかくら総本家倉庫

此処は、機関科4人が麻雀していた雀荘いりふねの上にあるさかくら総本家の倉庫の一室。

美海「マッチとの別れを防ぐためなら、何でもやる。」

もえか「次は、公園使用申請書を」

この一室で美海は、もえかの秘策に従い、必要な書類を作成していた。

美甘「知名さん!」

もえか「ん?」

美甘「仕込み終わったよ!」

続いて、俊秋と美甘、マチコの3人が何かに使う仕込みが完了した事をもえかに告げる。

百々「チラシもできたツスよ。」

美海がマチコに悲鳴を上げてる中、百々が何かのチラシの作成が完成した事をもえかに告げる。

もえか「じゃ、こっちのレイアウトもお願い」

百々「・・・晴風の真実?」

もえかは、百々にチラシの他に何かの号外見たいな物の作成を頼む。

はらどけい

その頃、はらどけいでは、芽衣と志摩が相変わらず、将棋の再戦をしていた。

芽衣「話しかけないでよ・・・ぜえくつたいに話しかけないでよ・・・」

今度は、積み重ね将棋をやっていた。

普通の将棋だと芽衣ばかり勝っていたので、志摩は、ゲームを変えて、積み重ね将棋をする事にしたのだ。

慎重に一つの駒を山積みになっている駒から引き抜いていく芽衣。
しかし

芽衣「ああ・・・!!しまった!!」

駒が崩れてしまい芽衣は、頭を抱えながら叫ぶ。

志摩「ふう・・・」

だが、志摩は、易々と山積みの駒をスツと持つて行く。

芽衣「嘘でしょう!?!」

これには芽衣も驚く。

志摩「うい!」

志摩は、芽衣に勝った事にドヤ顔をする。

これまで将棋で散々芽衣に辛酸を舐めさせられて来た志摩が遂に将棋で芽衣に勝つ事が出来たのだ。

そんな中

幸子「ああ・・・!!」

志摩「あっ!?!」

幸子が2人の元に来て

「幸子「此方に居たんですね、実は・・・」

現状を説明し、署名活動に協力を申し出た。

三笠公園

夕焼けに包まれる中、此処三笠公園では、晴風の生徒達が屋台の制作やイベントの準備を行っていた。

媛萌「屋台後いくつ?」

美甘「うちのは、これで大丈夫?」

百々「砲雷科も手伝ってほしいツス!」

媛萌「了解・・・」

媛萌は、聞きながら作業を続ける。

美海「何とか協賛してくれるお店が集まったよ!」

既にイベントに備え、協賛してくれるお店を集めた事にホツとする美海。

そんな時

次郎「おっい、晴風諸群!」

『ん!』

次郎がなのは、フェイト、美奈、実、信吾、三郎の6人を引き連れてやって来た。

次郎「署名活動の為のイベントをやるって聞いて、何か手伝える事が無いか、こいつらを連れて来た。」

百々「助かるツス！」

なのは「次郎君に言われてやって来たけど・・・」

フエイト「同じく！」

美奈「助けに来たよ・・・」

信吾「美奈が行くって言うから来たけど・・・」

実「同じく来た。」

三郎「こんな事准将にばれたら・・・」

何だかんだ言いながら、6人は、作業を手伝うんだった。

麻侖「ああ、そっちの様子は、どうでえい？」

麗緒『麗緒、空、設置完了！』

桜良「こつちも準備完了よ、機関長！」

次郎達と晴風の生徒達がイベントの準備に追われてる中

密封指示書開封まであと1日

6月11日

三笠公園、晴風スペシャルカレーフェス、会場

麻命「よし・・・晴風スペシャルカレーフェス・・・開幕でえい!!」

翌日、三笠公園で晴風主催の晴風スペシャルカレーフェスが開幕した。

そう、萌香が考えた秘策とは、このイベントで人を集め、一気に署名をして貰おうと言うのだ。

会場の入り口で鈴、秀子、まゆみ、媛萌、百々、美奈の6人が来場してくる人に署名と号外を配り

美甘「晴風特性カレー・・・さあ、限定300皿です!!」

あかね「甘納豆エクレアもあります!」

ほまれ「ハハハ・・・」

更に美甘と俊秋が晴風カレーを杵崎姉妹がバイトしていた時に作っていた甘納豆エクレアを販売。

光がダーツの店を構え、隣で楓が茶をもてなし、美千留の射的や順子の輪投げ、果代子と理都子の魚雷グッズ専門店が構えている。

ついでにコスプレ衣装を来たマチコとの記念撮影ブースもあった。

『晴風存続にご協力ください!!』

次郎が設営台の上から、メガホンで署名の協力を訴える。

三郎「恥ずかしいから止めて下さいよ艦長!」

そんなやり方に三郎は、恥ずかしくて止める様言う。

その隣で実と信吾が署名活動をする。

もえか「皆、これお願いして良い？」

親子「分かりました。」

夏美「人とうりが多いところで配りますね。」

もえかも親子達に署名活動をさせる。

麻侖「祭りだ！祭りでえい!!」

祭りだと盛り上がる麻侖。

しかし

洋美「でも全然人いないわね・・・」

肝心の人が集まらない為、いまいち盛り上がりにかける。

麻侖「あつあ・・・」

現実を知って、落ち込む麻侖。

密封指示書の開封まであと19時間

幸子「これじゃ署名が集まりません!!」

ミーナ「確かに、このままでは、時間切れじゃ!」

このままでは時間切れで署名が集まらない。

テア「まだ星が足りないな!」

美波「むう…」

署名が足りない事にテアと美波が悔しがる。

次郎「何弱気な事言ってるんだ!最後まで希望を捨てるな!!」

幸子「でも時間が…」

次郎「どんな事が有っても諦めるな!!それが晴風魂だろう!」

弱気になっている幸子達に次郎が気合を入れる。

其処へ

「皆!!」

「ん?」

明乃「遅くなって御免!!」

明乃とましろが始末書の提出を終えて、やって来た。

幸子「艦長!シロちゃん!・・・助けてください!!」

幸子は、涙ながら明乃とましろに助けを請う。

明乃「えっ!何が如何したの?」

明乃は、何が何だかと思ひ幸子から事情聞く。

ましろ「つまり、署名を集める為に人を集めようと・・・」

幸子からあらかた事情を聞いて、ましろは、理解する。

麻侖「祭りも人が居ないと盛り上がらね！」

次郎「何か言い手が無いのか？」

麻侖と次郎が人を集めるが、いかにぼやいていた。

そんな中、明乃は、考えながら、辺りを見回すと

明乃「あつ!？」

明乃は、公園内にある舞台を見て妙案を思い付く。

もえか「もかちゃん、手伝ってくれる？」

もえか「ん？」

もえかは、何かと思い、明乃に協力する。

明乃の妙案とは、公園内にある舞台でライブして、人を集める事だった。

麻侖「よおし、艦長が来たからには、100人力でえい!!」

美甘「艦長来たの！」

鈴「良かった・・・」

明乃が来た事で生徒達の士気は上がり

それに乗じて、西崎と立石が漫才を行い、幸子達や次郎達チラシと号外を配る。

麻侖「お、盛り上がってきやがった！」

その成果があつてか、徐々に人が集まり始めた。

これならば、署名活動も捗るかと思いきや、予想外の出来事が起きた。

美甘「カレー追加できる?」

ほまれ「無理、ご飯終わっちゃうよ・・・」

予想よりも人の集まりが多く、食材が切れかけていた。

その時

慧「チキンバサラ持って来たよ!」

あかね「ランもあるよ。」

聡子「ピロシキ、持って来たぞな!」

麗緒「お好み焼き出来るよ。」

空「具も沢山あるから!」

桜良「たこ焼きも作れるわ。」

あかねと慧、聡子、麗緒、空、桜良の6人が追加の食材を持って来た。

なのは「ご飯もあつたけ持って来たよ・・・」

フェイト「カレーの追加ができるわよ!」

更になのはとフェイトがご飯とカレーの補充を持って来た。

美甘「ああ・・・ありがとうございます・・・晴風新メニュー続々到着です!!」

補充と追加のメニューで、息を吹き返す。

明乃『皆さん帰りに署名所に寄ってください!!』

もえか『晴風クラス解散阻止の署名を集めています!!』

『よろしくお願ひします!!』

もえかと明乃が集まった人々に署名活動の趣旨を説明し、署名の協力を呼び掛ける。そして、夕方になると今まで人が居なかったのがもう人ざかいが出来ていた。

麻侖「大分盛り上がってるな・・・」

幸子「流石艦長！これで何とかなるかもしれません。」

麻侖「景気付けに一丁やるか！クロちゃんやつてくれ!!」

人ざかいが出来て来たのを見て、麻侖が景気付けに花火を打ち上げる。

幸子「花火何て勝手に打ち上げて良いんですか?」

打ち上げ花火は普通の花火と異なり様々な手続きや資格が必要だ。

それを心配して幸子は麻侖に尋ねる。

麻侖「ああ、クロちゃんはなあ、炎火賞非法案手帳持つてるんでえい!」

如何やら洋美が必要な資格を持つてるので、問題は、無い様だ。

洋美「花火は、資格を持っている砲雷科の皆と辻さんが協力して作ってくれたのよ!」

花火玉に関しては、砲雷科と実が協力して作成したお手製らしい。

洋美「解散にならないければ良いわね晴風クラス」

出来るだけの事はやった。

後は運を天に任せるしかない。

明乃「皆!・・・乾杯!!」

『乾杯!!』

晴風スペシャルカレーフェスは大盛況に終わり、打ち上げの際、皆はラムネで乾杯し、成功を祝った。

幸子「凄い数の署名ですね!」

次郎達が集めた署名と更にイベントで集めた署名の数を入れて、沢山の署名が集まった。

ましろ「だが、何所から晴風クラス解散なんて話に成ったんだ?」

ましろは、何所から再編の話になったのか、そもそもの話の出所を尋ねる。

最初は、美甘と杵崎姉妹が優衣にスカウトされていた時

聡子「みかんちゃん達が間宮にスカウトされてたぞな!」

美甘「断ったけどね。」

美甘は、あつさり断った事を告げる。

まゆみ「マロンちゃん達も明石にヘッドハントされて・・・」

続いて、麻侖と洋美が珊瑚にスカウトされた時

麻侖「それも断つたんでえい」

まゆみ「ええっ!?!」

如何やら此方もあつさり断つた見たいだ。

幸子「万里小路さんと美波さんも誤解でしたし……」

理都子「あれ? ……ひよつとして……」

果代子「話広げたのつて……」

楓や美波については、幸子の誤解だとして、後は

麗緒「えっ、私達!?!」

機関科の4人しかない。

ましろ「ん……」

そうだと知つたましろは、4人を睨む。

『御免なさい!!』

4人は、謝罪する。

次郎「でもクラス解散は、本当だろう! ……でなきや、密封指示書なんて渡す訳無いだろう?」

だが、次郎が真雪が密封指示書を渡すぐらいなら、クラス再編は、本当じゃないかと

言う。

ましろ「ん……確かに……」

それにましろは、確証はないが、密封指示書を渡すぐらいなら本当かも知れないと思う。

次郎「だから、こうやって署名も集まった事だし、あん校長もこの署名を見たら、文句も言えんだろう。」

次郎の言う通り、これだけの署名を見れば、真雪とつて、クラス再編は、出来ないだろう。

そんな時

「次郎君!!」

次郎「薫!？」

薫がはやてと共にやって来た。

薫「もういないと思ったらこんな所に……皆で何してたの?」

如何やら薫とはやては、次郎達が居ない事に気づき、態々探しに来た様だ。

次郎「何って、晴風クラス解散阻止の署名活動をしてんだ。」

次郎は、薫にクラス再編阻止の署名活動をしていた事を話す。

薫「しよ、署名活動!?!……何を勝手な事を!!……こんな事が兄さんにばれたら、次

郎君厳罰だよ!!」

次郎が龍之介の許可なしに勝手に署名活動をしていた事を怒る薫。

次郎「かまやしねよ!・・・お前の為なら厳罰なんて怖くないし!」

それに対して、次郎は、薫の為なら何とも思わない。

薫「私の為?」

次郎「お前があまりにもこいつらを心配していたから・・・俺がお前に代わって、こいつらを助け様と思ったんだ!!：：だから、なのはやフェイト達には、責任はない：：悪いのは、俺1人だ。」

次郎は、薫が晴風のクラス再編の事を聞いて、心配していたので、次郎が薫に代わって、彼らを助けた。

だから次郎は、責任を全部1人で被るつもりだった。

薫「次郎君・・・ありがとう・・・でも、次郎君だけ責任を負わせないわ!・・・私も一緒に責任取るから・・・皆で真雪さんの所に署名を持って行きましょう。」

そんな次郎に薫は、感謝したが、次郎1人だけに責任を負わせず、自分も責任を取ると言つて、次郎に協力する。

次郎「良いのか薫?」

薫「私は、艦長であり、貴方の妻です・・・どんな時でも次郎君について行くわ!」

次郎「妻って、まだ結婚してないだろう……まあ、ありがとう。」
薫の思いに照れる次郎だった。

密封指示書の開封まであと14時間

横須賀女子海洋学校、校内

イベントを終えた明乃達は、署名を持って、真雪の元に向かっていた。

次郎も薫だけを伴って付いてきた。

幸子「艦長! ……東郷ターン……成功させましょう!!」

明乃「うん!」

明乃は、校長室へと入る。

それから後は、分からず

6月12日

横須賀女子海洋学校、中庭

そして密封指示書の開封日時となり、晴風の生徒達は、中庭に召集される。

あの後、真雪は、自分達の要望を聞いてくれたのか

集まった生徒達は皆不安そうな表情でざわつく。

教頭「静かに!」

教頭の一声で生徒達は静まる。

真雪の隣では、龍之介と薫、次郎が見守っていた。

真雪「晴風クラス・・・密封指示書を開封せよ！」

真雪は、晴風の生徒達に密封指示書を開封せよと命じる。

生徒達は、次々と封筒を開けて中に入っている書類を取り出す。

皆ドキドキしながらその書類に書かれている事に目を通していく。

幸子「えっ？」

幸子は其処に書かれている内容を見て驚愕する。

書類には以下の内容が書かれていた。

『航洋直接教育艦晴風航行不能に際したクラス編入に関して（通知）

標記の要項について、横須賀女子海洋学校関係者等の審議を踏まえ

6月13日をもって、貴殿に航洋直接教育艦 Y-469 への異動を通知します。

より、一層の能力を發揮して学業に励むことを期待します。

以上』

と書かれていた。

明乃「Y・・・46・・・9・・・ん・・・」

それは、新しい艦への転属だった。

真雪「岬艦長!」

真雪に声を掛けられ、明乃は書類から顔を上げる。

真雪「貴女がたの行動力と団結力を見せてもらたわ：艦が沈んでしまった以上、クラスを分けるべきだと言う意見もあったけど、一緒にしておいて良かった見たいね。」

実は、晴風が沈んだ後、クラス再編の案もあったが、龍之介の要望もあり、真雪は、そのまま新しい艦に転属させる事にしたのだ。

真雪のこの言葉を聞いてまた皆一緒のクラスに慣れた事に喜ぶ晴風の生徒達。

幸子「艦長! シロちゃん! 東郷ターン成功ですよ!! やりましたよ!!」

自分の策が成功した事に涙を出しながら喜ぶ幸子。

まして「クラスを守れましたね、艦長!」

明乃「・・・うん」

その後、生徒達は、乗艦予定の艦、Y-469が係留されている埠頭へと向かう。

横須賀女子海洋学校、埠頭

埠頭に着いて、自分達が乗る艦を見た生徒達は思わず目を奪われる。

其処には晴風と同じ陽炎型の教育艦が係留されていた。

生徒達が目を奪われていると

龍之介「その艦は、俺達からお前らへの贈り物だ!!」

龍之介が晴風の生徒に自分達からの贈り物だと告げる。

明乃「えっ？ 贈り物って如何いう・・・」

明乃は、贈り物って如何いう事なのか問う。

龍之介「聞くより、直接中を見たら如何だ？」

それに対して、龍之介は、自分に聞くより、直接艦を見たら如何だと言う。

明乃「ん・・・」

鈴「岬さん？」

明乃は、言われる通りに艦に乗艦する。

芽衣「タマ！」

志摩「うい！」

続いて生徒達も乗艦する。

教育艦、艦橋

乗艦した明乃は、艦橋に登り、辺りを見回すと

明乃「あっ!?!」

まるで明乃を待っていたかのように羅針盤の上に

明乃「五十六！」

五十六「ぬう」

五十六が乗っていた。

明乃「あ……あつ」

それを見た明乃は、五十六に近づくとあつさり逃げてしまう。

だが、驚く事は、それだけじゃなかった。

芽衣「水雷方位盤、晴風と同じ奴だよ艦長!!」

明乃「えっ?」

何と艦橋に備え付けられていた水雷方位盤が晴風の物だと芽衣が言う。

まゆみ「艦長!! ……これ晴風の双眼鏡です!!」

秀子「ですよ!!」

更に双眼鏡も晴風の物だと言うまゆみと秀子。

志摩「これも……同じ」

志摩も同じだと断言する。

明乃「タマちゃんも……あつ……この羅針儀も?」

明乃も羅針儀が晴風の物だと気づく。

更に艦橋だけじゃなかった。

麻命『艦長!!』

明乃「あっ!?!」

教育艦、機関室

麻侖「操作盤が晴風と同じでえい!!」

機関室も機関の操作系統の部品が全部晴風のも物だった。

洋美「マロン!・・・見てよこれ」

更にもう二つ

洋美「百々と媛萌が作ってくれた奴!」

麻侖「・・・この椅子並べると、昼寝良いんだよな・・・」

それは、前の晴風の時に使っていた手作りの椅子だった。

留奈「機関長!!」

『ん?』

留奈「同じだよ、同じ、冷蔵庫も同じだよ!!」

そして、もう一つは、設置している冷蔵庫も晴風のも物だった。

すると

「あつたりめえでえい!!・・・なんせこのあたしが修理したからな・・・」

『あつ!?!』

機関科6人の前にある人物が機関のドアから現れた。

麻侖「な、夏雄!?!」

それは、何と空母大鳳の機関長である夏雄だった。

洋美「修理したって如何いう事なの？」

夏雄「実はな・・・お前らが艦を失ったと聞いて、可哀そうだと思つて、准将に新しい艦の整備をあたらしにやらせるよう頼んだんでえい！」

実は、この教育艦の製造には、全て夏雄と文雄達機関員と整備員がしていたのだ。

留奈「そうだったんだ!？」

空「流石は、機関長と瓜二つ！」

留奈と空は、夏雄を拜む。

麻侖「夏雄・・・ありがとう」

そして、麻侖は、あまりの嬉しさに夏雄に抱き付く。

夏雄「だ、抱き付くなよ・・・麻侖・・・」

麻侖に抱きつかれ嫌な感じをする夏雄。

教育艦、炊飯所兼食堂室

美甘「炊飯器ちゃん、また会えたね!!」

美甘は、前使っていた炊飯器と再会する。

あかね「美甘ちゃんその炊飯器!？」

ほまれ「この器具も・・・」

2人は、辺りを見回し

『同じだ!!』

同じだと認識する。

教育艦、一番魚雷発射管及び二番魚雷発射管

果代子「りつちゃん、発射管一所だね・・・」

理都子「同じだね、かよちゃん！」

果代子と理都子も魚雷発射管2基も晴風の物だと認識する。

教育艦、マスト

美海「マツチ!!何処までも着いて行くから・・・」

マチコ「全艦異常なし!!」

マチコは、マストに上がり辺りを見回し、全艦異常なしと告げる。

教育艦、第一主砲塔付近

光「新しい主砲だ!!」

美千留「また、大っきくなってる。」

順子「でも、射撃指揮所は前のだよ!？」

砲術員3人は、主砲が強力になっている事に驚きながら、射撃指揮所は、以前晴風に

設置されていた94式方位盤照準装置だと気づく。

教育艦、水測室

楓「ソナー室も保々同じですわ・・・ラツパもいらしゃいます。」

水測室も全て同じで楓が使っていたラツパも据え付けてあった。

教育艦、無線室

鵜「此処も同じだ・・・」

教育艦、電探室

慧「此方も同じです!」

無線室も電探室も同じ

教育艦、医務室

美波「保健室、だいだよしようじ」

医務室も同じだと断言する美波。

教育艦、艦橋

幸子「・・・そう言えば、この電話も・・・」

電話で聞いていた幸子は、受話器が晴風の物だと気づく。

鈴「この舵輪の手触り同じだよ・・・」

鈴も舵輪の手触りで晴風の物だと気づく。

聡子「海図室も同じだったぞな!!」

そして、聡子も自分の居る海図室が同じだと気づく。

そんな中

ましろ「うわあ!!私のブルースが……付いてない……」

ましろは、自分の物である鮫のぬいぐるみを見つけたが、沈んだ晴風から引き揚げたので、表面は、傷だらけだった。

傷だらけだった事にましろは、深く落ち込む。

生徒達が晴風の物だと気づく中

真雪「新しい艦の様子は、如何かしら？」

真雪が新しい艦の様子は、如何か確認しに上がって来た。

明乃「校長先生……これは、一体？」

明乃は、真雪に何故こんなに晴風の物が有るか問う。

真雪「沖風は、艤装前だったから、晴風の部品の一部で完成させたのよ！」

明乃「それで、こんなに晴風の物が……」

如何やらこの教育艦は、偽装前だったので、廃艦になる晴風の物が使用されたのだ。

龍之介「そうだ！」

明乃「えっ？」

そして、龍之介と薫と次郎が上がって来て

龍之介「あの後、お前達がピンチだと聞いて、篠原機関長や山崎整備班長の皆が自分達の代わりに武蔵を止めたお前らに何かできないかと思つて、考えた結果・・・お前達に新しい艦を与える事がせめてもの贈り物だと決断したんだ。」

明乃にこの教育艦の製造の経緯を話す。

さつきも言つた通り、この艦の製造は、夏雄と文雄達がしていたのだ。

実は、晴風が沈んで、生徒達がピンチだと聞いて、夏雄と文雄以下機関員と整備員は、何もできなかった自分達に代わつて、武蔵を止めた晴風の生徒達に何かできないと思ひ考えた結果、彼らにこのまま実習を続けさせようと新しい艦の製造を自分達にやらせてくれと龍之介と真雪に進言したのだ。

明乃「そうだったんですか・・・ありがとうございます山本准将!」

龍之介から経緯を聞いて、明乃は、礼を言う。

龍之介「礼なら皆に言つてくれ!・・・あいつらのお陰でこの艦が完成したからな!」
龍之介は、自分に礼を言われる筋合いはなく、製造に携わつたGF隊員達全員に言え
と言う。

薫「そんなの聞いてないわよ兄さん!」

次郎「酷いですよ准将!俺達に黙っていた何て!!」

薫と次郎が龍之介が自分達に内緒でそんな事をやっていた事に驚き何で言わなかつ

たのか問い詰める。

龍之介「皆に口止めされてたんだ・・知ってたのは、俺と参謀のごく一部だったんだ!!・・それにお前らに話したら即言うだろう!!」

それに対して、龍之介は、皆から口止めされていたので言えなかつたし、言えば即晴風の生徒達に言うだろう。

薫「た、確かに・・」

次郎「俺口軽いから・・」

龍之介に言われ、口が軽い事を2人は、認めた。

龍之介「全くお前らは・・こいつらに面して、今回の事は、全て目をつぶってやる!!」

龍之介は、今回の次郎の勝手な行動を不問にした。

次郎「ほんとですか?」

龍之介「但し・・今回だけだから!!」

『ほい』

不問になった事で薫と次郎は、喜ぶ。

真雪「岬艦長!・・ちゃんと動くか如何か試して見なさい。」

話は、変わり、真雪は、ちゃんと動くかどうか出航させてみなさいと明乃に言う。

明乃「はい! あっ!! でも艦名は?」

明乃は、出港しようとしたがまだ艦名が決まっていない。

真雪「沖風の予定だったけど、晴風でも良いわよ岬艦長!」

それに対して、前の通り、晴風で良いと真雪は、許可する。

明乃「あっ・・・!!」

晴風のままが良いと言われ明乃は、喜ぶ。

薫「良かったね岬さん!」

こうして、晴風は、龍之介達の手で再び蘇ったのだ。

早々に出港準備をしていると

晴風、甲板

媛萌「あれ?」

百々「如何したんツスカね?」

媛萌と百々が埠頭辺りで何かを目撃する。

真雪「機密解除されたとはいえ、勝手に晴風の情報を開示して貰っては、困ります。」

それは、機密情報を勝手に開示したもえか達が真雪に説教を受けていたところだった。

艦首で錨が上げられてゆくのを確認したらツツパ手の楓がツツパを吹き。

晴風、艦橋

明乃「晴風出港！両舷前進微速!!」

晴風は、埠頭から離れ、大海原へと出港する。

埠頭からは、ミーナ、テア、もえか、珊瑚、優衣が反対側に真雪、古庄、教頭、龍之介、次郎が見送った。

明乃「あっ!?!」

そして、引き上げられた初代晴風に向かって、明乃と薫は、敬礼する。

明乃「航海長操艦！」

『航海長操艦!!』

明乃「両舷前進原速、赤黒なし、進路・・150度！」

晴風は、試験航海へと出航して行った。

画して、晴風の生徒は、再び晴風へ帰り着いたのだった。

第4章 雅かの合同演習でピンチ！ 前編

6月25日

Gフオースが横須賀女子海洋学校に拠点を移してから、数ヶ月がたった。

既に艦艇の移動は、終えており、巡洋艦すくね、さつまは、学生艦が停泊する軍港エリアに繋がれ、他の護衛艦と補給艦は、仲良く繋がれ、旗艦の空母大鳳、戦艦高千穂は、武蔵の横に並んで停泊する。

司令部も学園内（殆んどは、空母大鳳の会議室などを使っている）に設置が完了している。

更にゴジラ哨戒に護衛艦2隻が定期的に哨戒任務（但し領海まで）に出撃している。艦隊名と編成も変わった。

Gフオース空母戦闘群

旗艦空母大鳳

護衛艦いばらき、せんだい

補給艦せた

Gフオース打撃部隊

旗艦高速戦艦高千穂

巡洋艦すくね、さつま

護衛艦ながおか、きしゅう

補給艦とよだ

戦力としては、少ないが白鳳が戦列に復帰できるまで、この戦力で対処するしかない。後は、空母大鳳の航空隊が頼みである。

拠点を移してからの隊員達の行動というと

横須賀女子海洋学校、グラウンド

GF隊員『い・ち・ち・に・』

古野間「何だそのへなちよろは、続ける!!」

グラウンドでは、GF隊員達が厳しい訓練を受けていた。

その側を学生が彼らの訓練を見ながら

横女の学生（うあ・結構厳しい・）

横女の学生（私達もブルマーになったら、こんな訓練を受けるのかな？）

そう思いながら通り過ぎる。

横須賀女子海洋学校、軍港エリア

那月「では、予定通り・」

士道「ああ、そっちは、任せた!」

軍港エリアの埠頭では、護衛艦きしゅうの艦長四条那月中佐と護衛艦ながおかの艦長片桐士道中佐が定期の哨戒任務に出撃する為の打ち合わせをし、それぞれの艦に戻る。

横女の学生「あの女性の艦長・・・奇麗な人だわ!」

横女の学生「でも隣の男性も素敵だわ!!」

2人の艦長を見て、学生は、憧れを持つ。

航洋直接教育艦雪風、甲板

同じく軍港エリアに停泊する航洋直接教育艦雪風の甲板では、護衛艦せんだい艦長の原田与力中佐が艦橋を眺めていた。

与力「しかし、驚いたな・・・」

直気「何がですか?」

与力「この教育艦は、俺のじいさんが乗っていた艦だよ。」

与力は、艦橋を見ながら自分の祖父がこの雪風に乗っていた事を語る。

直気「へ・・・そうなんですか!」

与力「子供の頃、よく爺ちゃんに聞かされたよ・・・ワシが若い頃は、この艦で太平洋を暴れ回ったってな・・・」

与力の祖父は、かつてこの雪風の艦長として、第二次世界大戦を戦い抜いた戦歴が有

る。

与力は、小さい頃から祖父にそう聞かされた。

直気「では、祖父に並んで、この艦に足を付けたと言う事ですな！」

与力「ん・・・何だかな・・・」

2人が話していると

「あのー！」

『ん？』

雪風艦長「この艦に何か要でしょうか？」

雪風の艦長と副長がやって来て

与力「いや、何も無いよ！」

直気「我々は、これで去りますので・・・」

与力と直気は、直ぐにその場を去った。

雪風艦長「何だったんだろう？」

雪風副長「さあ？」

一体何しに来たのか、2人には、分からなかった。

至る場所でGF隊員達が学生達に目撃されていて、彼らを見ていると自分達の将来が

絶望か憧れかに動揺していた。

横須賀女子海洋学校、校内

そして、晴風の元教員として活躍した空母大鳳の艦長山本薫中佐は、武蔵の元教員の副長八神はやて中佐と共に校内を歩いていった。

薫「今日は、主立った仕事もないし……」

はやて「そやね……」

2人が仲良く歩いていると

「山本教官!」

『ん?』

後ろから声を掛けられ、2人は、振り向くと

薫「岬ちゃん!?それにましろちゃんも!」

其処には、晴風Ⅱ艦長の明乃と副長のましろがいた。

薫「如何したの?」

明乃「いえ……皆の所に行つてたら、つい教官を見かけたんで……」

薫「そう、でももう私は、此処の教員ではないよ!……今は、唯の中佐だから……」

あの事件から1ヶ月、薫とはやては、既に横須賀女子海洋学校の教員ではなくなつて

いた。

だが、時々、彼女らの授業をよく見かける。

明乃「そうでしたね！すいません。」

薫「謝らなくて良いわ！・・・今は、一緒の場所に居られるんだから、何時でも会いに来てね！」

明乃「はい！」

薫「ましろちゃんも！」

ましろ「はい！」

2人は、教室へと去っていた。

薫「不思議ね・・・」

はやて「ん？」

薫「最初は、宗谷校長に教員として、一時的に彼女らと行動を共にしてきたのに・・・今は、こうやっていつでも会える日々・・・」

はやて「そやね先輩・・・彼女らの将来が楽しみや・・・」
『フッフ』

2人は、明乃達の将来を楽しみにしながら先へと向かう。

横須賀女子海洋学校、Gフォース総司令室

一方、Gフォース総司令室では、艦隊指揮官の山本龍之介准将、参謀の徳吉 功大佐と総司令の深町吾郎、総参謀の野田一誠がこれからの事について会議を行っていた。

深町「現在白鳳の修理と改装は、どのくらい進んでいるかね？」

龍之介「現在、40%進んでおります。」

現在白鳳は、先のRATt事件で発生したゴジラ戦で、甚大な被害を受け、横須賀女子海洋学校の地下ドックで改装と修理が行われている。

龍之介「ですがまだ、戦列には復帰できません。」

深町「やむ追えんな!・・・それまで、今の戦力で頑張るしかない山本准将!」

龍之介「はい!・・・ですが、今の戦力でも十分に戦えます。」

龍之介の言う通り、白鳳がいない今の戦力でも十分に戦える。

何故なら、ミサイルなどを搭載した巡洋艦や護衛艦、更にGフォースが誇る空母大鳳や高千穂は、健在だった。

そして、何よりの最大の戦力が空母大鳳が搭載する78機の航空機である。

これぐらいの戦力ならブルーマーメイドやホワイトドルフィンとは、まだ互角に戦える。

深町「ん・・・何事も無ければ・・・それで、今後の予定は如何なっているのかな?」

龍之介「はい、実は保有していた弾薬が先のRATt事件で不足してしまいました・・・ですが、ようやく補充の目途が立ちましたので・・・3日後の演習で試し打ちをする予

定です。」

Gフォースが保有するミサイルや爆弾（フルメタルミサイル、D-03、トマホーク以外）は、先のRATt事件で不足していた。

だが、既に同じミサイルの開発は、ブルーマーメイドの設備研究科で行われ、完成して、生産に入っていた。

今回の3日後に行われる演習で、その生産された兵器の試し打ちが行われる予定。

深町「よろしい！・・・全て予定通り行いたまえ！」

それを聞いた深町は、全て予定通りに行えと龍之介に命じる。

龍之介「はっ！」

龍之介と功は、深町に敬礼して、司令室を出る。

一誠「不思議なものですな・・・」

司令室を出て行く龍之介を見て、一誠は、不思議に思った。

一誠「一度は、罪に落とし入れた私を彼は易々と受け入れた・・・何故だろうか・・・」
何故なら、一誠は、龍之介に濡れ衣を着せ牢に入れた邦夫の父親だからだ。

普通なら息子と同罪で恨まれて、総参謀見たいな役職に付く事は出来ないのだが、深町の如何しての推薦により総参謀に据える事になった。

まあ本人自身も息子のせいで、窮地に追いやった事を償おうと思っている。

そんな一誠を龍之介は、易々と受け入れた。

それが不思議に思つてならなかったのだ。

深町「宗谷家に居候したせいだろう・・・前は、信用できないとか言つてたのが・・・いつの間にか変わったな・・・」

深町も同じ思いで、おそらく宗谷家に居候した事で、龍之介自身が変わつていゝるので察した。

一誠「これも宗谷監督官のお陰でしょう・・・やはりうちのせがれと一緒にしなくて良かったと思います。」

一誠は、邦夫と真霜と一緒にしなくて良かったと思つた。

深町「そう言えば息子さんの様子は如何かね?」

邦夫と聞いて深町は、現在府中刑務所に服役している邦夫の様子は如何かと問う。

一誠「この前、面会で会いました・・・あいつもそうと変わつていました・・・前総理が亡くなつた事で、出る希望を失つたのでしよう。」

一誠が言うには、邦夫は、田沼が亡くなつた事で既に出る希望を失い、大人しく刑に服する事にしたそうだ。

深町「判決は、懲役20年だったな・・・確か執行猶予なしの・・・」

一誠「はあ・・・あいつにとっては、20年は長いですが、罪を償うには十分な歲月

だと思えます。」

深町「そうだな．．．まあ出来る事は、罪を償って出てきた時に手厚く向かい入れる事だけだな．．．」

深町の言う通り、一誠の出来る事は、罪を償った邦夫を温かく向かい入れる事だけだ。

一誠「はい．．．」

一誠もそうする事になっていた。

横須賀女子海洋学校、廊下

龍之介「さて、忙しくなるぞ！」

龍之介は、忙しいと言つて、ウキウキする。

功「准将ご機嫌ですな？」

龍之介「当たり前だ！なんせ久しぶりの演習だ！．．．ウキウキしてしょうがない！」

龍之介の言う通り、R A T t事件以来、背後処理と新部隊創設で演習が行われなかつた。

その為、ようやく目途が立ち、演習が行われる事になった。

龍之介「まあ、取り合えず忙しくなるぞ．．．先ずは幹部達を集めて打ち合わせだ！」

功「はっ！」

功は、幹部達を集める為、龍之介と別れた。

龍之介「さてと……」

龍之介も空母大鳳に戻る。

横須賀女子海洋学校、棧橋

一方、横須賀女子海洋学校の棧橋付近では、停泊する武蔵と高千穂を見る高千穂艦長の権藤美由紀中佐の姿が有った。

美由紀「……」

美由紀は、じつと自分の艦と武蔵を見比べていた。

美由紀「同じ艦が2艦……」

武蔵、高千穂は同じ大和型戦艦。

唯違うのは、高千穂の方が砲身の数が多く、更にミサイルなどの重武装が積まれている。

美由紀がじつと見ていると

「何を見ているんですか?」

後ろから誰か声を掛けて来た。

美由紀「!?!」

誰かと思いい後ろを向く。

後ろには、武蔵艦長の知名もえかが立っていた。

美由紀「いえ別に……唯ちよつと不思議に思っているの……此処に同じ大和型が2隻がいる事に……」

もえか「そうですね……実は、私も同じ事を思っていました。」

2人は、同じ事を考えていた。

美由紀「貴方名前は？」

もえか「私は武蔵艦長の知名もえかです。」

もえかは、自己紹介する。

美由紀「そう貴方が……RATt事件では、うちの八神がお世話になったわね！」
もえかと聞いて、美由紀は、はやての生徒だと直ぐに分かった。

もえか「八神教官とは如何いう関係ですか？」

もえかは、はやてと如何いう関係か問う。

美由紀「失礼！……私は、高千穂艦長の権藤美由紀……こう見えてもあの山本中佐や八神中佐の元教官です。」

もえか「えっ、そうだったんですか!？」

もえかは美由紀が薫とはやての元教官だと驚く。

美由紀「そんなに驚かなくて良い……貴方の事は八神中佐や山本中佐からいろいろ聞いているわよ……若いのに随分とやるわね！」

美由紀は、2人からもえかや明乃がRATで事件で活躍した事を聞いて、褒める。もえか「・・・ありがとうございます。」

美由紀に褒められた事にもえかは、照れずに礼を言う。

美由紀（ほう・・・如何やら、私が褒めていない事に気づいているわねこの子?・・・これは侮れないわね・・・）

美由紀は、ワザと褒めた様に見せかけ、もえかを試したのだ。

結果は、侮れない存在だと察する。

そんな時

「艦長!」

「!?」

副長の岸田 文雄少佐がやって来て

文雄「准将からの知らせで、直ぐに空母大鳳に集まる様にと!」

龍之介からの伝言を告げる。

美由紀「直ぐに行くわ!」

文雄「はっ!」

美由紀「貴方とは、いづれ相見える時が有るでしょう・・・その時まで・・・御機嫌よう・・・」

美由紀は、もえかに社交的な別れを告げ、空母大鳳へと向かう。

もえか「……」

もえかは、向かおうとする美由紀を見て、挑戦状の様なものを言い渡された様だと感じた。

空母大鳳、会議室

しばらくして、空母大鳳の会議室に薫以下の幹部達が集まり、演習の協議を行う。

演習の海域は、鳥島沖

演習では、お馴染みの航空機による航空攻撃と高千穂率いる打撃部隊による戦闘訓練が実施される。

その中で補充された兵器の試し打ちも入っていた。

龍之介「以上が3日後の演習で行われる訓練の内容だ」

龍之介は、3日後の演習内容を告げた。

次郎「腕が鳴るぜ！」

演習と聞いて、白鳳艦長小沢次郎中佐は、腕が鳴るぜと生き生きする。

薫「次郎君嬉しそうだね？」

次郎「当たり前だろ！……こつちに移つての久々の演習何だ！」

実は、次郎率いる白鳳の乗員達は、艦が修理の為、各艦に分散していた。

次郎は、空母大鳳で艦長補佐へ、副長の林 三郎は、古野間率いる特殊部隊にそれぞれ分散配置された。

その為、今回は、配置転換後の初めての演習になる。

はやて「あんまり浮かれ過ぎて、骨を外さんとな艦長補佐殿!」

次郎「そう言うお前は、大丈夫なのかはやて?」

はやて「何が?」

次郎「完治して初めての演習だろ・・・体の方は大丈夫なのか?」

配置転換した次郎と同じはやても完治後の初の演習だった。

はやて「ウチは、もう大丈夫や!しやんと軍医からOKもらつとるし・・・」

次郎「なら良いが、あんまり無理すんなよ!・・・唯でさえ、薫が心配するからな・・・」

薫「大丈夫!その時は、私が強制的に医務室に連れて行くから!」

もし無理した時は、薫が強制的に医務室に連れて行く事にしていた。

はやて「もう2人しい、いけずする・・・」

2人に意地悪され、はやては、顔を丸くする。

美由紀「貴方達!真面目にやりなさい!!」

あんまり浮かれているので、美由紀に怒られる。

『すみません!』

3人は、久々に美由紀に怒られた。

龍之介「何だか久々に見る光景だな・・・」

龍之介は、美由紀に怒られる姿を久しぶりに見た。

横須賀女子海洋学校、校庭

同じ頃、横須賀女子海洋学校の校庭では、明乃達生徒が集められていた。

幸子「急な召集ですけど・・・一体如何したんでしょうか？」

急な召集に何だと思う幸子。

ましろ「全校生徒を集めるぐらいだ・・・些細な事ではないだろう。」

それについて、ましろは、何か重要な事だろうと察する。

明乃「うん」

明乃も同感だった。

しばらくして、真雪と古庄がやって来て

古庄「静かに！」

古庄は、生徒を静かにさせて、召集させた理由を言う。

古庄「校長から今後のカリキュラムについてお話が有るので、傾聴する様に！」
如何やら招集させたのは、今後のカリキュラムについての事で、真雪と代わる。

真雪「おはようございます！」

『おはようございますー!』

生徒達は、真雪に一礼する。

真雪「先般のいわゆるRATt事件については、生徒の皆さんもよくご存知だと思います。皆さんのお陰で、最悪の事態を免れる事が出来ました。しかし、そのせいで海洋実習がしばらく出来なくなりました。其処で4日後に特別に海洋実習を行います。」

真雪は、前回のRATt事件で海洋実習が出来なくなった事で、生徒達に申し訳ないと思い、其処で4日後に特別に海洋実習をする事を告げる。

ましろ「海洋・実習!?!」

海洋実習が行われると聞いて、ましろは驚く。

真雪「詳細については、古庄教官から説明があります。では皆さん!。くれぐれも怪我のない様に注意し、有意義ある海洋実習にして下さい!」

真雪は、怪我のない様にと忠告してから、古庄と代わる。

芽衣「やった海洋実習だ!」

志摩「うい!」

海洋実習があると聞いて、大喜びする。

古庄「それでは、4日後の海洋実習について説明します。」

古庄は、4日後の海洋実習について説明をする。

古庄「今までの海洋実習では・・・集合地点まで単独で集合していましたが・・・前回のRATt事件での教訓を含め・・・チームごとで集合する事にします。」

4日後の海洋実習では、前回のRATt事件での教訓を含め、チームで集合する事を告げる。

幸子「各チームで集合・・・ですか？」

ましろ「おそらく何かあった時の為に、直ぐ事態に対応できる為だろう。」

明乃「そうだね！」

チーム事に集合させるのは、何かあった時の為に直ぐに対応する為だろうと2人は、察する。

古庄に指示され、生徒達は、各クラスをチームごとに分けられ

幸子「私達のクラスは・・・時津風、天津風、武蔵と同じチームですね。」

明乃達は、時津風、天津風、武蔵と一緒にチームになる。

もえか「ミケちゃん！」

明乃「もかちゃん！」

もえか「久しぶりの海洋実習だね！」

明乃「もかちゃんと一緒にチームになれるなんて良いな！」

もえか「そうだね!」

2人は、一緒のチームになれた事を喜ぶ。

そんな時

「ふん!・・・高々海洋実習で一緒になったくらいで、何喜んでるんだか!」
『ん?』

いきなり誰かから声を掛けられ、2人は、後ろを向くと

千華「あんまり喜び過ぎて、破目を外さないよう気を付ける事ね!」

後ろにいたのは、同じチームの天津風艦長の高橋千華だった。

明乃「あの、貴方は?」

千華「天津風艦長高橋千華よ!・・・晴風はRATも事件で活躍したみたいだけど、実力では私達は負けないわ!」

千華は、明乃に自己紹介し、実力では負けないと言い張る。

明乃「ああ、同じチームの!・・・私は晴風艦長の岬 明乃・・・よろしくね!」

同じチームのクラスだと聞いて、明乃は、言い返すどころか逆に自己紹介する。

千華「うっ・・・何か拍子抜けするわね。」

それを見て、千華は、明乃が思った以上の人でなかった事に拍子抜けする。

そしてもう1人

「あの……この実習って、直ぐに終わるんですね……ふう！」
今回の海洋実習にやる気の無さを見せつける者がいた。

明乃「え？」

つむぎ「時津風艦長の榎原つむぎです……よろしくお願ひします……ふう！」
それは、時津風艦長榎原つむぎで、自己紹介をしながら溜め息をする。

明乃「うん、よろしくね！」

溜め息するつむぎに明乃は自己紹介をする。

ましろ「大丈夫なのか、このチームは……」

余りの情けなさにましろは、心配になってきた。

そして、今回の海洋実習の集合地点が鳥島沖だと言ひ渡された。

これは偶然なのだろうか？

龍之介達の演習場所と明乃達の海洋実習の集合場所が一緒になるとは

これも神様の悪戯なのだろうか

とは言え、龍之介達と生徒達は、準備を進め

6月29日

出港当日

空母大鳳、艦橋

薫「出港用意! 錨上げ!」

出港用意の号令がなり、錨が上げられはやて「近錨、出港準備完了や!」

出港準備が完了する。

次郎「各艦も出港準備完了の信号が上がってる。」

各艦も出港準備が完了の信号が上がり

龍之介「各艦は、予定通り出港せよ!」

龍之介は、各艦予定通り出港せよと命じる。

各艦は、順次出港していき

薫「出港! 両舷前進微速!!」

同時に薫は、出港命令を出す。

美奈「両舷前進微速!!」

出港命令と同時に美奈がテレグラフを操作し

空母大鳳、機関室

夏雄「前進微速!!」

夏雄達がバルブを操作する。

空母大鳳は、ゆつくりと出港する。

空母大鳳、艦橋

次郎「いや、やっぱり古巣は落ち着く……」

出港する中、次郎は、久々に空母大鳳の艦橋に戻って来た事を語る。

薫「そう言えば、次郎君とまた一緒になるなんて、久しぶりだね!」

次郎「ああ!……また一緒に薫とやれるとは思わなかったぜ!……まあ、白鳳が治る間までだけ……」

薫「でも、私は、嬉しいよ!……次郎君とまた、こうやって一緒に居られるのが……」
薫と次郎のコンビ。

雅に2年ぶりの復活である。

はやて「久々のコンビ復活や!」

2人にコンビ復活をはやては、祝うが

龍之介「お前ら、遊びじゃないんだぞ!!……訓練なんだから真面目にやれ!!」
『すいません!!』

龍之介に叱られ、3人は、反省する。

龍之介「全く……まあ、お帰り次郎……」

だが、龍之介も本心では、次郎の帰還を喜んでいた。

とは言え、Gフォース艦隊は、演習先である鳥島沖を指すのであった。

6月30日

Gフオース艦隊に遅れる事1日後、横須賀女子海洋学校の艦艇も海洋実習に向け出港準備を進めていた。

晴風、艦橋

明乃「出港用意! 錨上げ!!」

錨上げと同時に錨が上がり、楓がラツパを吹いて、美海が青旗を上げ出港準備完了の知らせを送る。

明乃「晴風出港!」

出港の命令が下り、鈴がテレグラフを操作し、針を前進微速に合わせる。

晴風 機関室

麻命「前進微速!」

艦橋のテレグラフからの指示を得て、麻命は、前進微速の命令を出す。機関が始動し、晴風は出港する。

晴風の出港と同時に他の艦も出港する。

明乃「航海長操艦!」

『航海長操艦!!』

明乃「両舷前進原速、赤黒なし、進路・150度!」

晴風以下の横須賀女子海洋学校の艦艇は、海洋実習の集合地点である鳥島沖を目指すのであった。

画して、Gフォースと横須賀女子海洋学校の演習が雅か同時に行われるとは、この時
思わなかったろう。

第5章 雅かの合同演習でピンチ!中編

6月30日

横須賀女子海洋学校をを出港したGフォース艦隊であったが、途中、低気圧に阻まれ、止む無く迂回コースを取らざる負えなくなつた。

その為、到着が1日遅れる事になつた。

空母大鳳、艦橋

空母大鳳の艦橋には、薫と次郎が当直に着いていた。

次郎「くそ・・・低気圧とはついていないな・・・」

低気圧のせいで、次郎は、ムカムカしていた。

薫「大丈夫だよ・・・もう直ぐ抜けそうだから・・・」

薫は、大丈夫だと次郎を安心させる。

薫の言う通り、既に低気圧は峠を越え、過ぎ去ろうとしていた。

薫「低気圧が過ぎ次第、元のコースに戻るわよ!!」

美奈「了く解!」

低気圧が過ぎ次第、艦隊は、元のコースに戻る。

その頃、Gフォース艦隊とは別に横須賀女子海洋学校の艦艇は、低気圧に会わず、予定通り航行していた。

晴風、艦橋

晴風の艦橋にも明乃とましろが当直に着いていた。

ましろ「明日は、いよいよ鳥島沖ですな艦長！」

舵を握るましろ。

明乃「そうだねシロちゃん！・・・明日は、もかちちゃんと一緒に・・・」

双眼鏡で辺りを見る明乃。

明乃「そう言えば!?!・・・今頃山本教官達は如何しているかな？」

明乃は、急に薫達の事を考える。

ましろ「確か演習で出ている筈ですから・・・多分、気楽にやっているんじゃないで

すか？」

ましろは、薫達が演習に出ている事は知っていた。

明乃「ああ・・・また、山本教官と一緒に海洋実習したかったね！」

明乃は、薫と再び海洋実習したいと思っただが

ましろ「そりゃ無理でしょ!・・・いくらなんでも向こうは、ブルーマーメイドじゃ

ありませんから・・・」

ましろの言う通り、龍之介達は、既にブルーマーメイドから独立している。

その為、海洋実習には参加できない。

明乃「あつ、そうだね・・・忘れてた。」

明乃は、その事を忘れていた。

ましろ「しっかりと下さい!唯でさえ私が困るんですから!」

明乃「御免ねシロちゃん!!」

RATt事件以降、明乃に対するましろの苦労は、相変わらずだ。

一方、他の3艦では

武蔵、艦橋

親子「明日は、いよいよ鳥島沖ですね!」

もえか「うん!」

明日の実習を楽しみにしているもえか達

天津風、艦橋

あゆみ「艦長!・・・このまま行けば明日は、いよいよ他のクラスと合流です。」

タブレットで明日の合流時刻を確認する天津風副長山辺あゆみ。

千華「ああもう・・・本当は、チームでの合流じゃなかったら、私が一番乗りしたかつたのに・・・」

本当は、合流地点に一番乗りしたい千華だが

あゆみ「無理ですよ！・・・あの事件以来、単艦での合流は、危険だと判断されてますし・・・」

RATt事件以降、単艦での合流は、危険だと判断されていると注意するあゆみ。

千華「わ、分かっているわよ、そんな事!!」

そんな事は、分かっていると答える千華。

だが、本当は、分かっているじゃない。

それに振り回されるあゆみ。

時津風、艦橋

君江「明日は合流ですな艦長！」

明日の合流にウキウキする時津風副長長澤君江。

つむぎ「そうだね・・・ふう！」

だが、それとは正反対にやる気がないつむぎ。

君江「いや、相変わらず、やる気がないですな艦長！」

つむぎ「そう言うきみちゃん、相変わらずウキウキだね！」

君江「だって面白いじゃないですか！」

つむぎ「ああ・・・何事も起きなければ良いけど・・・ふう!」

何事も起きなければ良いと思うつむぎであった。

とは言え、4艦は、順調に合流地点である鳥島沖を目指す。

6月31日

明けて、両部隊は、合流地点である鳥島沖に到着した。

到着した鳥島沖は、霧が発生していた。

空母大鳳、艦橋

龍之介「こう霧が濃くては、味方艦が何所に居るか分らないな?」

余りの霧の濃くさに、味方艦の所在が分からなくなっていた。

その為、その場で停止していた。

薫「位置ビーコンと発光信号で位置を確認します。」

所在を確認する為、位置ビーコンと発光信号で位置を確認する事にした。

旗艦からの発光信号を見て、各艦は発光信号で応答する。

だが、その中に味方艦じゃない艦もあった。

横須賀女子海洋学校の教育艦である。

霧が濃くて分からなかったが、既に他のGF艦の中に紛れ込んでいた。

晴風、艦橋

幸子「こう霧が濃くては、他の艦が何所にいるか分かりませんね！」

ましろ「如何しますか艦長？・・・このまま航行すると衝突の恐れが・・・」

明乃「だね！衝突しない様に此処で駐留しておこう。」

明乃達も衝突を避ける為、その場で停止し

鵜『教員艦から連絡！・・・各艦、位置ビーコンと発光信号で位置を確認せよ！』

明乃「了解！サトちゃん探照灯をお願い！」

此方も位置ビーコンと発光信号で位置を確認する。

これよつて、GF艦と教育艦の見分けがつかなくなる。

霧が濃く中

空母大鳳、艦橋

龍之介「しばらく霧が晴れるまで小休止だ・・・当直は今のうちに休んでおけ！」

霧が晴れるまで小休止する事にし、当直だった薫達に休むよう命令する。

薫「じゃ、はやてちゃん、後よろしく！」

はやて「うん！おやすみや！」

薫は、はやてに指揮を任せ、次郎と共に艦橋を後にする。

艦橋を後にした薫と次郎は、部屋へと向かう。

薫の部屋は、艦長室だが、実は、次郎と相部屋になっていた。

本当は、別々の部屋にするべきだが、空いている部屋が無く。

仕方なく龍之介が自分の部屋を使えと言ったが、薫自身が自分の部屋を使つてと駄々を言うので、仕方なく薫の部屋と相部屋になった。

まあ2人は、もう肌を合わせる中まで行つてゐるから大丈夫である。

本当は微妙だが

空母大鳳、艦長室

次郎「ああ・・・疲れた疲れた・・・寝よう！」

部屋に戻つた次郎は、制服のまま素早くベットに行き眠りに着く。

薫「もう次郎君たら寝るの速いんだから・・・でも私も・・・もう駄目・・・」

そう言う薫も結局、制服のまま眠りに着く。

2人は、一つのベットで仲良く眠りに着いた。

そして、晴風でも

晴風、艦橋

明乃「じゃ、ココちゃん、後よろしくね！」

明乃も小休止し様と、ましろと共に部屋に戻る。

それから1時間後

空母大鳳、艦橋

龍之介「霧が晴れてきたな・・・」
てんじん、艦橋

古庄「霧が晴れて来たわ！」

やがて濃くなっていた霧が晴れて来た。

空母大鳳、艦橋

龍之介「えっ!？」

てんじん、艦橋

古庄「えっ!？」

晴れた途端、両部隊ともお互いを視界に捉え

龍之介「な、何で此処に!？」

何故此処に居るのか、ビックリする。

そして

空母大鳳、艦長室

ブブ・・・!ブブ・・・!

ベッド横の内線電話が鳴り

薫「ん!？」

内線電話の着信音で薫は、目を覚ます。

起きた薫は、直ぐに受話器を取り

薫「もしもし……」

応答する。

すると

はやて『艦長!!直ぐに艦橋に來たつてや!!』

突然、はやてから直ぐに艦橋に來るよう言われる。

薫「如何したのははやてちゃん、何か有つたの?」

いきなりの呼び出しに何が有つたの問う。

はやて『ええから來たつてや!!』

理由は後と言う事で兎に角、艦橋に急いで來るよう言われる。

薫「分かつた直ぐ行くね!」

薫は、そう言つて電話を切り

薫「次郎君起きて!!」

隣で寝ていた次郎を起こす。

次郎「な、何だ……もう時間か?」

突然起こされた次郎は、演習の開始時間かと思つたが

薫「そうじゃないの……艦橋から急いで來るようにと連絡が有つたわ!!」

次郎「何事だ？」

薫「それが分からないの！兎に角、艦橋に行こう!!」

薫も訳が分からず、兎に角、艦橋に向かう。

次郎「ふぁぁぁ・・・そうだな・・・」

次郎もあくびをしながら艦橋に向かう。

晴風でも

晴風、艦長室

ブブ・・・!ブブ・・・!

ベッド横の内線電話が鳴り

明乃「あっ!?!」

内線電話の着信音で明乃は、目を覚ます。

幸子『艦長!・・・直ぐに艦橋に来て下さい!!・・・艦長!!・・・艦長!!』

艦橋にいる幸子からの至急呼び出しに明乃は、直ぐに艦橋へと向かう。

空母大鳳、艦橋

薫と次郎が艦橋に来ると

龍之介以下、艦橋に居る者は、何故か驚いた顔をしていた。

薫「如何したの皆？」

何故驚いているのか問う。

はやて「あれを見たってや艦長!!」

『…………』

薫と次郎は、艦橋から外を見る。

晴風、艦橋

明乃もましろと共に艦橋に來ると

幸子以下、艦橋に居る者は、何故か驚いた顔をしていた。

明乃「如何したのココちゃん？」

何故驚いているのか問う。

幸子「艦長、あれを！」

明乃「…………」

明乃とましろは、艦橋から外を見る。

すると

薫「えっ!？」

明乃「えっ!？」

2人がお互いを見て

薫「岬ちゃん!？」

明乃「教官!？」

お互いに認識する。

空母大鳳、艦橋

薫「な、何で晴風が此処に？」

薫は、何故晴風が此処に居るのか分らなかつたが

龍之介「晴風だけじゃない・・・周りを見る！」

薫「ん・・・」

龍之介に言われ、周りを見る。

周りには、晴風だけじゃなく、武蔵や他の教育艦が高千穂や他のGF艦と混じって、存在していた。

次郎「な、なんじゃこりゃ!？」

ましろ「何でこんな事に!？」

何でこんな事になっているのか、驚く次郎とましろ。

とは言え

てんじん、艦橋

古庄「至急、大鳳との通信回線を繋いで！」

副官「了解！」

空母大鳳、艦橋

龍之介「直ぐに教員艦との通信回線を繋げろ！」

実「了解！」

状況を知らうとお互いに通信回線を繋ぐ。

『此方古庄です！』

龍之介「此方山本！……一体如何なっているんだ……此処は我々の演習海域だぞ！！」

古庄『それは此方のセリフです……我々は、海洋実習で此処に来ているのです！』

龍之介「何だと、如何いう事だ!？」

こっちは演習、向こうは海洋実習と言い、如何いう事なのか、龍之介には分からず。

龍之介「司令部に連絡！」

司令部に如何いう事なのか問い合わせる。

横須賀女子海洋学校、会議室

その頃、Gフォースの司令部が置かれている横須賀女子海洋学校では、校長の真雪と総司令の深町が会議室に詰めていた。

真雪「そろそろ向こうも着いている頃ですな……」

深町「ん……そろそろ連絡が来る頃だろう。」

深町と真雪は、何かを待っていた。
そして

G F 隊員「総司令！・・・山本准将から連絡です。」

深町「お、噂をすればだな・・・繋いでくれ！」

龍之介からの通信が来て、深町は、直ぐに通信回線を繋ぐ。

龍之介『此方山本より深町総司令！』

会議室の画面に龍之介の顔が映し出され

深町「此方深町・・・如何した？」

龍之介『これは何の冗談ですか？・・・演習海域に学生艦が居るとは聞いていません

よ！！』

直ぐに、この事態を問い詰める。

深町「それもそうだ・・・そもそも知らせていなかった事だからな！」

演習場所に教育艦が居る事は、深町は存じていた。

龍之介「如何いう事ですか？」

深町「実はな・・・宗谷校長たつてのお願いで、君の部隊と宗谷校長の学生とで合同演習を企画していたのだよ！」

如何やら2人は、龍之介に内緒で横須賀女子海洋学校の学生達とG F 隊員達との合同

演習を企画していたのだ。

空母大鳳、艦橋

『はい、合同演習!』

それを聞いた龍之介達は驚愕する。

てんじん、艦橋

古庄「合同演習なんて、私は、何も聞いていません!」

古庄達も合同演習については、知らなかった様だ。

真雪『知っていたら、貴方反対したでしょ?』

それに対して、真雪が古庄に内緒にした訳を説明する。

古庄「それは・・・」

如何やら凶星の様だ。

空母大鳳、艦橋

龍之介「冗談じゃない!!・・・これは演習で有って、遊びじゃないんですよ!!」

合同演習と聞いた龍之介は激怒し、断固反対する。

龍之介の言う通り、演習は、来るべきゴジラ戦に備えての大事な訓練であって、遊び

じゃない。

しかも学生達は、まだ高校生になったばかりの新米で、龍之介達見たいなエリートに

は付いていけない。

更に武装も違う。

これでは、合同演習など不可能である。

横須賀女子海洋学校、会議室

だが、深町は

深町「確かに君の言う通り、演習は遊びじゃない……だが、学生達も演習が遊びじゃない事は分かっている筈だ……それに学生達は、この前のRAT事件でかなりの経験積んでいる……そうじゃないのかね……山本准将？」

この前のRAT事件で、学生達は、僅か1ヶ月で、かなりの実戦を経験している。だから、龍之介達の演習にも必ず付いていけるのだと確信していた。

空母大鳳、艦橋

龍之介「そ……そんな無茶苦茶な……」

余りの無茶苦茶に龍之介は、頭が痛くなる。

功「如何しますか？」

如何するのか功が訪ねるが

龍之介「ん……」

如何すれば良いか龍之介は迷う。

そんな時

薫 「取り合えず古庄教官と相談したら如何ですか兄さん？」

薫は、古庄と相談したら如何だと言う。

龍之介 「ん．．．そうするか．．．」

結局、古庄と話し合う事になり、古庄達が空母大鳳にやって来た。

晴風、艦橋

ましろ 「如何になりますかね艦長？」

明乃 「ん．．．私的には、また教官と実習したいな．．．」

武蔵、艦橋

夏美 「如何になりますかね．．．」

もえか 「．．．．」

学生らが進境を窺う中

空母大鳳、会議室

龍之介 「と言う訳で、いきなりの合同演習について、諸群らと話し合う事になった。」

両者は、本艦の会議室で、この合同演習をするかどうか話し合う。

美由紀 「私は、反対です！．．．これは、来るべきゴジラ戦の演習で有って、学生相

手の遊びではありません!!」

最初に美由紀が反対し

副官「私も反対です。」

古庄の副官も反対する。

古庄「確かに権藤中佐の意見も一理あるわ……だけど、私的には、生徒達にこのまま演習をさせてあげたいわ……勿論、貴方達もだけど……」

それに対して、古庄は、何とか学生達に、このまま演習をさせたいと考えていた。

勿論龍之介達もだ。

龍之介「確かに！……古庄教官の言う通り、俺達も演習はしたい……例えば学生艦と組んでも……だが、この演習は、ブルーマーメイドがいつもしている演習とは訳が違う……第一、そっちには、空母や航空機が無い！……これじゃ五分五分の演習が出来ない」

古庄の言葉に龍之介も同じ気持ちだった。

だが、龍之介達の演習は、ブルーマーメイドが、いつもしている演習とは訳が違う。更に学生艦の中には、空母も航空機も無い。

これでは、五分と五分の演習が出来ない。

薫「なら准将！……空母は、後方で演習を見守りながら両方に航空機で支援すると言うのは如何ですか？」

それに対して、薫が空母大鳳は、後方で両方を航空機で支援する案を出す。

龍之介「ん・・・それなら両方とも五分五分だな!」

その案に龍之介は、賛同する。

古庄「艦隊編成については、此方の艦と其方の艦を混ぜて、編成しましょう。」

艦隊編成は、GF艦と学生艦を混ぜて編成する事にした。

薫「後は、艦隊を指揮するものだけですな!」

後は、艦隊を指揮する者の選別である。

龍之介「それならとっておきの奴が居るぞ!!」

選別にとっておきの奴が居ると龍之介が言う。

薫「誰です?」

薫は、誰なのか問う。

龍之介「学生艦に詳しく、生徒にひたしい関係の奴・・・つまりお前だ!」

薫「えっ?!私ですか?」

それは薫だった。

薫「む、無理です!!・・・私が指揮官なんて・・・」

いきなり指揮官に抜擢された事に薫は無理だと言うが

龍之介「お前、この前のRATt事件を解決したんだから・・・それぐらい出来るだ

ろう？」

龍之介は、この前のRAT事件での功績を出し、薫に指揮官をさせようとする。

薫「あれは晴風の艦長がやった事で、私は何もしていません!!」

それに対して、薫は、晴風の生徒の功績だと言って、断固出来ないと言う。

その時

美由紀「あら貴方!・・・あんなに無茶な事をして、それを人のせいにするの?」

薫の言葉に美由紀は、ワザと馬鹿な事を言つて、薫を挑発し始めた。

薫「如何言う意味ですか?」

美由紀「言葉通りよ!・・・例の事件で、あれだけの無茶をしたのに・・・結局貴方は、学生のせいにして、逃げるんだ。」

薫「わ、私は、生徒のせいにしていませんし、逃げてなんていません!!」

美由紀の挑発に反論する薫。

美由紀「なら証明して見なさいよ!」

反論する薫に美由紀は、ある提案を出す。

薫「証明?」

美由紀「この演習で、私に勝たら・・・その時は、貴方の言葉が本当だと言う事を認めてあげるわ!」

それは、薫が美由紀に勝つたら、薫の言う事を認めてやると勝負を申し出て来たのだ。
次郎「な、何だつて!？」

突然の勝負の申し出に次郎は驚愕する。

古庄「権藤中佐!・・・そんな勝手な事を言つては困ります!!・・・第一、これは実習の一環で有つて・・・」

美由紀の勝手な勝負に聞いていた古庄は、止めるよう言うが

龍之介「古庄教官!・・・すまないが中佐の言う通りにさせてくれないか?」

それに龍之介が美由紀の言う通りにさせて欲しいと頼む。

古庄「し、しかし!」

龍之介「頼む。」

古庄「ん・・・」

龍之介の頼みに流石の古庄も黙認する。

美由紀「さ、如何するの?」

薫「ん・・・」

美由紀の勝負を受けるか、薫は迷う。

美由紀「それとも逃げるの?」

迷う薫に美由紀はまたも挑発する。

薫「分かりました……その勝負受けます!!」

美由紀の挑発に薫は勝負を受ける事にした。

次郎「か、薫、そんな無茶な!?!」

美由紀の勝負に薫が受けると言つて、次郎は、無理だと言うが

美由紀「決まりね!……では、准将!もう一人の指揮官は私がやります……それ

で良いですね!」

龍之介「ああ!」

結局、薫と美由紀が指揮官に決まった。

話が終わると

古庄が

古庄「何故、あんな勝負を許したんですか?……下手して、迷惑するのは、私の生

徒何ですよ!」

何故あんな勝負を許したんだと龍之介を叱る。

龍之介「そうしないと駄目なんだよ、あいつは!」

古庄「え?」

それに対して、龍之介は理由を説明する。

龍之介「この頃、薫は、俺より先に解決策を考える様になった……これは指揮官の

素養を十分備えている証拠だ・・・それなのに、あいつは、何故か指揮官をやるのを嫌がる・・・ならいっそ勝負をして、指揮官の素質が有る事を分らせるしかない・・・おそらくそうし様としているんだよ権藤中佐は・・・」

薫は、指揮官の素質が有るのに何故か無理だと拒む。

それを見た美由紀は、単に勝負を挑んでいる訳でわなく。

薫の指揮官の素質を無理やり出そうとしているのだと龍之介は、見抜いていた。

古庄「しかし、それでは生徒が!」

だが、古庄は、それに巻き込まれる生徒を心配する。

龍之介「これぐらいの勝負でばてるなら、実戦では使え物にならない・・・他のブルー

マーメイドに舐められるぞ!!」

龍之介の言う通り、生徒がこれぐらいの勝負でばてるなら、将来ブルーマーメイドに入れても実戦では、役に立たないと言われ、他のBPF隊員から舐められる結果になる。

古庄「ん!!!」

それでも古庄は納得できなかったが

龍之介「生徒を心配するあんたの気持は分かる・・・だが、これは試練だと思ってくれ!」

龍之介は、古庄の肩に手を置き、そう告げる。

古庄「……………」

その言葉を聞いて、古庄は、龍之介の気持ちが分かったような気がし、何も言えずに黙認する。

と言う訳で、話はまとまり、その旨をGF隊員達や生徒達に伝える。

晴風、艦橋

ましろ「結局、合同演習になってしまいましたね艦長！」

幸子「山本教官が指揮官となっていていますが……私達は何所に配置されますかね？」

明乃「ん……………」

武蔵、艦橋

夏美「如何なりますかね？」

親子「山本教官は兎も角……あの権藤中佐と言う人は、どんな人なんでしょう？」

もえか「ん……………」私が見た程度では、そんなに怖い人には見えないけど……………」

天津風、艦橋

千華「どんなのが来ようが、私達が一番になってやるわよ!!」

時津風、艦橋

君江「いや、面白い事になりましたね艦長！」

つむぎ「はあ……………」面倒な事が起きなければ良いけど……………」ふう！」

アドミラル・グラフ・シユペー、艦橋

ミーナ「如何なりますかね艦長？」

テア「・・・」

話を聞いた生徒達は、どんな編成になるか、そしてそれを指揮する2人に不安を持つ。そして、編成は、西と東に別れて

西部隊

指揮官山本薫中佐

超大型直接教育艦武蔵

大型直接教育艦比叡

巡洋艦すくね

小型直接教育艦アドミラル・グラフ・シユペー

大型巡洋直接教育艦摩耶

小型巡洋直接教育艦五十鈴

航洋直接教育艦晴風、天津風、時津風、浦風、谷風

護衛艦せんだい

航空部隊、スターズ隊

東部隊

指揮官権藤美由紀中佐

高速戦艦高千穂

大型直接教育艦ビスマルク

巡洋艦さつま

大型巡洋直接教育艦鳥海

航洋直接教育艦涼風、磯風、浜風、舞風、萩風

護衛艦いばらき

航空部隊、ライトニング隊

演習監視部隊

演習総旗艦空母大鳳

教員艦てんじん

補給部隊

補給艦せた、とよだ

給糧支援教育艦間宮

工作支援教育艦明石

で編成された。

更に使用される砲弾などは、演習用の模擬弾を使用する事になった。演習開始前に各指揮官は、それぞれの艦の艦長と会合する。

西部隊

武蔵、甲板

武蔵の前部甲板に向かう中

次郎「おい薫!」

薫「何?」

次郎「あの榎藤中佐に勝てる見込みは有るのか?」

次郎は、薫に美由紀に勝てる見込みは有るのか問う。

薫「ん・・・はつきり言つて、本当は無いですよ!」

それに対して、薫は、無いと告げる。

実は、薫は、凶上演習で美由紀に勝った事が無い。

何回もしたが、結局、負けている。

次郎「じゃ!?!」

薫の言葉を聞いて、次郎は、じゃ結局、負けるんじゃないかと思うが

薫「でも、負けたくない!!・・・負けたら、あの事件での晴風の皆の働きが全部嘘だと言われるから・・・だから勝つて、嘘じゃない事を証明してみせる!!」

薫は、負けたくないと言い張り、勝つ気でいた。

勝つて、あの事件での晴風の皆の功績を証明させると決めたのだ。

次郎「薫……」

それを聞いた次郎は、何とか薫を勝たせたいと思いながら、西側の艦長達が居る前部甲板に向かう。

武蔵、前部甲板

武蔵の前部甲板には、既に西側の艦長や副長達が集まっていた。

その中には、明乃やましろ、もえか、テア、ミーナ達の姿があった。

薫と次郎がやって来ると

与力「全員整列！」

与力が整列を命じる。

整列と聞いて、五月達は、整列する。

五月達の整列を見て、明乃達も急いで整列する。

薫が壇上上がり

薫「皆さん！……私がこの部隊の指揮官になりました山本薫です……皆さんにとつては、急な合同演習になりましたが……これも何かの縁なので、如何かよろしくお願ひします。」

皆に自己紹介をする。

五十鈴の艦長「大丈夫なのかな、あんな人で……」

摩耶の艦長「何かね……」

薫を見た生徒達は、何故か不安になるが

五月「中佐!……相手は権藤中佐だけど……何か作戦でもあるの?」

そんな不安になる生徒を無視して、五月は、美由紀に勝てる作戦が有るのか、薫に問う。

薫「正直言つて有りません……ですが!……例え有ったとしても、権藤中佐に全て見抜かれていますので、無駄だと思いません。」

美由紀に勝てる作戦など無い。

例え有ったとしても、美由紀には、薫の考えている事は、お見通しである。

比叡の艦長「それじゃ、勝てる見込みなんてないじゃないですか?」

それを聞いた比叡の艦長が勝てる見込みなんてないじゃないですかと告げる。

その言葉を聞いた途端、生徒達は困惑する。

与力「何だ、何だ!もう怖じ気づいたのか?……俺は、中佐殿に着いて行くぞ!!……どうせなら出たとこ勝負だ!!」

困惑する生徒達に与力がもう怖じ気づいたのかと問いながら、自分は、薫に従うと言

い出す。

五月「私も!・・・一度で良いから中佐と勝負して見たいわ!」

与力の乗り出しに五月も賛同する。

五月「貴方達は如何なの?」

五月は、困惑する生徒達の意見を問う。

比叡の艦長「わ、私達は・・・」

それに対して、生徒達は、如何すれば良いか迷う。

五月「雅か、本当に怖じ気づいたの?・・・これぐらいの演習で怖気付くなんて、貴方達本当にブルーマーメイドの候補生なの?」

そんな生徒達に対し、五月は、キツイ言葉を言う。

その言葉を聞いた途端

明乃「いえ、怖気づいてはいません!」

明乃が怖気づいてはいませんと言って

明乃「私達は、皆ブルーマーメイドになる為に此処に居ます・・・皆もそう思わない?」

困惑する生徒達を勇気づける。

それに乗じて

もえか「そうだね!・・・ミケちゃんと言うんだから、そうしようよ!」

千華「そうよ!・・・相手がちよつと手強いだからと言って、このまま引き下がる気はないわ!!」

君江「何だか面白そう見たいですし、私達もやりましょう艦長?」

つむぎ「何で、私達まで・・・はあゝ」

もえかや千華、つむぎ達が名乗り出た。

更に

テア「支援砲撃が欲しいなら、我々も手を貸すぞ!」

ミーナ『此処で逃げたら、下のもんに示しがつかんからの!』

テアやミーナも名乗り出た。

比叡の艦長「そうだ!・・・私達だって、横須賀女子海洋学校の生徒何だから、やつ

てやろうじゃないの!!」

五十鈴の艦長「私も!」

谷風の艦長「私も!」

それを見た他の生徒達も賛同し始める。

薫「皆・・・」

やる気を見せる生徒達を見て、薫は、感謝し

五月「ふん！……今の言葉は、取り消すわ……まあ、精々足を引つ張らない様にして頂戴！」

流石の五月も感心した。

明乃「で、教官！何か作戦は？」

感心も束の間、明乃は、薫に作戦をこう。

薫「そうね……まずは、初めに航空攻撃が来るから、それを凌ぐのが先決……後は、其処から水上戦闘になるけど……」

演習の最初として、航空機による攻撃が両部隊に降り注ぎ、更に其処からお馴染みの水上戦闘に発展すると薫は、察し、作戦を考える。

次郎「なら対空戦闘は、お馴染みの輪形陣で交わすとして、水上戦闘は、武蔵などの大型艦を支援に回して、航洋艦などは、単縦陣で敵に突つ込むってのは如何だ？」

それに対して、次郎が対空戦闘は、お馴染みの輪形陣で交わして、水上戦闘は、武蔵などの大型艦を支援に回し、航洋艦などを単縦陣で敵に突つ込ませる作戦を提案する。

与力「何か、当たり前の作戦だな……」

五月「そんな素人見たいな作戦！……向こうはお見通しよ！」

それを聞いた2人は、次郎の作戦を却下する。

次郎「じゃ、何か他に案が有るのかよ？」

案が却下された次郎は、他に案が有るのか問う。
すると

もえか「なら!」

『ん!?!』

もえか「こう言うのは如何でしょう?」

もえかがある提案をする。

4人は、もえかの案の詳細を記載したタブレットを見る。

薫「ん・・・これなら多分、上手く行くかも!」

もえかの案を見て、薫は、これなら多分、上手く行くかもと告げ、もえかの案を採用する。

薫「後は、旗艦だけ・・・」

作戦は決まり、後は旗艦だけとなった。

皆は、旗艦が当然武蔵だと思っていたが

薫「じゃ、旗艦は・・・晴風!」

明乃「えっ!?!」

何と薫は、武蔵ではなく、晴風を旗艦にした。

『ええ・・・!?!』

次郎達や他の生徒達は、驚愕する。

それもその筈、たいいてい旗艦は、武蔵の様な強力な攻撃力と頑丈な防御力を持つ艦が務めるのだが、晴風の様な強力な攻撃力を持たず、貧弱な防御力しか持たない駆逐艦を旗艦にするなどあり得ない。

しかも駆逐艦は、攻撃力も防御力も弱いので、敵に太刀打ちできるところか、一撃でやられてしまう。

それなのに薫は、何故旗艦を晴風にするのか

薫「晴風なら武蔵と違って、狙われにくいし、何より幸運な艦だから！」

晴風なら武蔵と違って、狙われにくいし、何より晴風は、幸運な艦だ。

次郎「でも薫！・・・武蔵なら兎も角・・・晴風を旗艦にするなんて・・・第一、前例も無い事だ！」

薫「だから良いの・・・向こうは多分、こつちが武蔵を旗艦にすると察している筈・・・ならこつちは、その逆について・・・小さくて小回りが利く晴風を旗艦にするべきよ！」
薫は、こつちが旗艦を武蔵にする事は、美由紀も察している筈だと思い、あえてその逆をついたのだ。

次郎「成程！・・・向こうの逆を突くって事か!？」

薫「そう！」

次郎「分かったぜ薫!」

薫の考えを聞いた次郎は、納得する。

五月「まあ、此方の指揮官は、貴方何だから、此方は従うわ!」

与力「異議なしだ!」

五月、与力も納得する。

薫「では、各自!準備をお願いします・・・解散!」

協議は終わり、各自各艦に戻る。

戻る中

薫「知名さん!」

もえか「!?」

薫「さつきは、ありがとう・・・お陰で何と勝つてそう!」

薫は、もえかに感謝する。

もえか「いえ、でも驚きました・・・旗艦を晴風にするなんて・・・」

それに対して、もえかは、薫が雅か、旗艦を晴風にするとは思っても見なかった。

薫「ん・・・本当は、武蔵にしたかったけど・・・私的には、使い慣れている艦が良

いと思つて・・・御免なさい!」

薫は、もえかに旗艦を武蔵にしなかった事を謝罪する。

もえか「いえ、私的にも晴風を旗艦にするのが合意的だと思います……教官の予想通り……多分、向こうは、此方が旗艦を武蔵にすると思つて、狙つて来る筈ですから！」

それに対して、もえかも薫と同じ考えだった。

薫「流石知名さん！私の考えを呼んでるわね！」

もえかが自分の考えを呼んでいる事に薫は感心する。

そんな時

明乃「教官！」

薫「あら岬ちゃんにましろちゃん!？」

明乃とましろがやって来て

ましろ「本当に私達が旗艦で良いんですか？」

自分達の艦が旗艦で良いのか問う。

薫「勿論!……晴風なら、この勝負を勝利に導く事を信じているから！」

それに対して、薫は、2人に晴風なら、この勝負を勝利に導く事を信じていると告げる。

ましろ「教官……」

薫の言葉に2人は、やる気が出て来る。

だが、最もやる気を見せる者がいた。

千華「ふん!自分の艦が旗艦に選ばれて、良い気になってるんじゃないわよ!!」

『!?!』

それは、千華率いる天津風クラスだった。

薫「えっと、貴方は?」

千華「天津風艦長高橋千華よ!・・・見てなさい、この勝負を勝利に導くは私達なんだからね!!」

薫「い、以外とやる気があるわね・・・感心したわ!」

千華のやる気に薫は、感心する。

だが

つむぎ「あの・・・」

薫「はい?」

つむぎ「この勝負・・・勝たなきゃならないんですか・・・ふう!」

千華とは別に、つむぎは、勝たなきゃならないんですかとやる気ない様な事を言う。

薫「えっ!?!」

千華「何言ってるのよ!勝たなきゃ意味ないでしょう!!」

それに対して、千華が勝たなきゃ意味ないでしょうと言い張る。

つむぎ「別に如何でも良いんだけど……ふう！」

だが、つむぎは、相変わらずやる気が無い様な素振りをする。

薫「まあ、別に勝つとうと思わなくて良いから……兎に角、自分のスペースで、この勝負に挑みましょう！」

バラバラの2人に薫は、兎に角、自分のスペースで、この勝負に挑みましょうと何とかまとめる。

『はいー』

それに明乃ともえかは、納得する。

千華「ふん！優勝は私達何だから！」

つむぎ「ああ……」

それに対して、千華とつむぎは、やはりバラバラだった。

薫（この2人は、大丈夫だろうか……何も起きなければ良いんだけど……）

この2人のバラバラに薫は、何も起きなければ良いと願う。

そんな時

テア「大変だな、指揮官と言うのは……」

薫「あつ、テアちゃん！」

テアとミーナがやって来て、指揮官は、大変だと確信する。

ミーナ「こら、うちの艦長をテアちゃんと呼ぶな!」

薫「御免、御免!でも、嬉しいよ!・・・貴方達と一緒にまた戦える事を・・・」

薫は、改めて、明乃達を見て、また戦える事に嬉しさを抱く。

薫「じゃ、行こうつか!」

『はー!』

とは言え、晴風を旗艦とした西側部隊は、もえかの作戦を主張に準備を進める。

一方、美由紀が指揮する東側部隊では

高千穂、前部甲板

高千穂の前部甲板に集められている東側の艦長と副長に対し

美由紀「私は、権藤美由紀・・・この勝負に対して、私からは、何も言う事はない・・・唯言える事は・・・如何なる事が有ろうとも自分の務めを遂行する様に・・・以上!」

何とも明けない言葉を告げて、終わる。

美由紀「さて、向こうが如何出るか・・・見せてもらおうわ!」

美由紀は、薫が如何出るかを楽しみにしながら艦橋へと向かう。

空母大鳳、艦橋

古庄『それでは、これより合同演習を開始します!!・・・全艦、指定位置に配置に着け!』

合同演習の開始に伴い、全艦指定位置に移動する。

龍之介「攻撃隊の発進準備は、完了しているか？」

はやて「準備万端や！」

既に空母大鳳の飛行甲板では、スターズ隊とライトニング隊が発進準備をしていた。

機体は、格納庫から艦載機用エレベーターで飛行甲板上げられ、爆装（訓練用の模擬爆弾）と燃料が装備される。

実「各艦は位置に着きました。」

各艦は位置に着き

龍之介「よし、ペガサス隊発進用意！」

演習の状況を中継する為、ペガサス隊のE2G1機の発艦準備をする。

はやて「ペガサス隊発艦準備完了！」

龍之介「発進！」

E2G1機が発艦する。

古庄「あれは？」

古庄が発艦するE2Gに興味を持つ。

功「あれはE2Gと言って、周辺の哨戒や航空機や艦船に指示をする……言わば、空飛ぶレーダサイトです。」

興味を抱く古庄に功は丁寧に説明する。

古庄「あれが・・・我々が使っているバルーンとは、比較にならないわね・・・」

古庄は、E2Gを見て、ブルーマーメイドで採用されている飛行船とは、比較にならないと察する。

龍之介「古庄教官、そろそろ演習の号令をお願いしたいんだが・・・」

龍之介は、古庄に演習の号令をお願いする。

古庄「ああ、すいません。」

古庄は、龍之介からマイクを受け取り

古庄『では、各艦は位置に着いたところで・・・演習・・・開始!』

古庄の号令の元、演習が開始され

龍之介「攻撃隊発艦!」

空母大鳳からスターズ隊とライトニング隊が発艦する。

こうして、薫と美由紀の勝負が切って落とされた。

第6章 雅かの合同演習でピンチ！ 後編

6月31日

古庄の号令の元、演習が開始された。

春乱、操縦席

なのは「スターズ1、行きます!!」

フェイト「ライトニング1、テイクオフ!」

空母大鳳からスターズ隊、ライトニング隊の計78機が発艦した。

演習が開始される中、西部隊の旗艦晴風では

晴風、艦橋

幸子「始まりました!演習開始です!!」

空母大鳳から全艦に演習開始の号令が来て

芽衣「よっしゃ!!久しぶりに撃って、撃ちまくるぞ!!」

志摩「うい!うい!」

演習で再び撃てる事に芽衣と志摩が浮かれるが

次郎「こら!まだ早い!!」

撃つにはまだ早いと次郎に怒られる。

ましろ「取り合えず艦長？」

明乃「ん!・・・教官指示を？」

明乃は、薫に指示を求む。

薫「先ずは、対空戦闘用意！」

薫は、先ず航空攻撃に対応する為、対空戦闘の号令を出す。

『え?!・・・対空・・・戦闘?』

だが、明乃達には、対空戦闘の意味が分からなかった。

薫「あつ、そっか!?!・・・貴方達は知らないもんね・・・先ず納沙さん!・・・各艦

に武蔵を中心にした円陣を組む様に指示を！」

薫は、それに気づき、改めて、先ず幸子に各艦に対し、輪形陣を組むよう命じ

幸子「分かりました。」

薫「見張りは、上空を警戒して！」

続いて、マチコと秀子、まゆみに上空を見張るよう命じる。

『はい!』

マチコ『了解!』

マチコと秀子、まゆみは、双眼鏡で上空を見張る。

各艦は、武蔵を中心とした輪形陣を組む。

東部隊も高千穂を中心とした輪形陣を組んだ。

晴風、艦橋

ましろ「こんな陣形は、始めて見ますが・・・これで大丈夫なんですか？」

始めて組む輪形陣にましろは、疑問を持つが

薫「大丈夫・・・この陣形は、対航空機用に発案したものだから！」

それに対して、薫がこの陣形は、対航空機用に発案したものだからと言って、ましろを安心させる。

ましろ「そうですか・・・」

それを聞いて、ましろは、安心する。

次郎「気を抜くな！・・・間もなく航空攻撃が始まるぞ!!」

安心もさて置き、間もなく航空攻撃が始まると次郎が注意を呼び掛ける。

鈴「ど、どんな攻撃が来るんですか？」

鈴は、航空攻撃がどんなのか、恐ろしく聞く。

次郎「そうだな・・・先ず知らないうちにいきなり目の前に着弾が来るだろう。」

鈴「目、目の前!?!」

目の前に着弾と聞いて、鈴はビビり始め

次郎「そして、今度は、ミサイルが猛スピードで向かって来て、一撃でボカーンだ!!」
鈴「ひい・・・!!」

更に一撃でボカーンと聞いて、鈴は悲鳴を出す。

薫「もう次郎君! 知床さんをあんまりからかわないで!」
余りのからかいに薫から怒られる。

次郎「悪い悪い、少しやり過ぎた・・・でも、今言った事は、全部本当だから気を抜くなよ・・・」

薫に怒られ、次郎は謝罪する。

だが、次郎が言っている事は全部本当であり、気を抜けなかった。

空母大鳳、艦橋

龍之介「成程!・・・両部隊も対航空機用の輪形陣を組んでるな!」

一方、空母大鳳からも、E2Gからのオンライン映像で、両部隊が輪形陣を敷いている事が確認していた。

古庄「初めて見る陣形ですね・・・何故この様な?」

古庄は、何故輪形陣を組むのか問う。

功「この陣形は、敵航空機から艦隊を守る為に考案された陣形です。」

この輪形陣は、元々空母機動部隊を敵航空機から守る為に発案された陣形で、空母を

中心に置き、周りを戦艦や巡洋艦、駆逐艦が円陣を組んで守りを固める陣形。今回は、武蔵と高千穂を中心として、円陣を組む。

数分後

空母大鳳を発艦した両攻撃隊は、両部隊上空に達した。

西部隊

すくね、CIC

すくねのレーダー主「敵機捕捉、数39！」

東部隊

さつま、CIC

さつまのレーダー主「敵機捕捉、数39！」

早くも両部隊は、対空レーダーで攻撃隊を捕捉し

晴風、艦橋

まゆみ「来ました!？」

雲から現れた攻撃隊を肉眼でも確認した。

『対空戦闘!!』

先ずは、薫達西部隊の戦闘から見てみよう。

西部隊に襲撃して来たフェイト率いるライトニング隊39機は

春乱、操縦席

フェイト「全機!・・・中央の武蔵に構わず・・・周りを囲む艦艇を攻撃せよ!」
『了解!』

中央の武蔵を攻撃せず、周りを囲んでいる艦艇を攻撃する。

西部隊

晴風、艦橋

マチコ『敵機!此方に向かってくる!!』

敵機数機が武蔵以外の旗艦晴風以下数隻に攻撃を仕掛けてきた。

次郎「何で、こつちを狙って来るんだ!?!・・・普通なら武蔵を狙うだろう?」

普通なら中心の武蔵を狙うのに、フェイトは、何故周りの艦から攻撃するのか疑問を抱く。

薫「多分フェイトちゃん・・・味方の被害を最小限にしようと、あえて武蔵を狙わないで、私達を攻撃して・・・此方の攻撃力を削ぐつもりなのよ!」

それに対して、薫は、フェイトが味方の被害を最小限にしようと、あえて武蔵を狙わないで、周りの艦を攻撃し、部隊の攻撃力を削ぐつもりだと見抜く。

次郎「如何する薫?・・・こいつらの艦じゃ、航空機には太刀打ちできないぞ!」

次郎の言う通り、GF艦なら兎も角、学生艦の武装では、音速を飛行する航空機には、

太刀打ちできない。

それに対し、薫の判断は

薫「今打つ手は一つだけ……全力で回避するのみ！」

航空機の攻撃を全力で回避するのみと判断した。

薫「艦長！敵機の攻撃を全力で回避するのにだけ専念して！」

薫は、明乃に全力で回避に専念するよう命じる。

明乃「は、はい！」

明乃は従う。

芽衣「に、逃げるの？向かってくるんだから、反撃しようよ!!」

志摩「うい！うい！」

だが、芽衣と志摩は、逃げるより、反撃しようと言うが

次郎「馬鹿かお前らは？……音速で向かってくる敵機に、この艦の攻撃が当たる訳無いだろう!!」

そんな2人に対して、次郎が音速で向かってくる敵機に攻撃が当たる訳無いと言つて、2人を叱る。

『ん!!!』

撃てないと分かり、2人は落ち込む。

次郎「そんなに気を落とすな!・・・次の水上戦じゃ、いくらでも打たせてやる!」

落ち込む2人に次郎は、次の水上戦で、いくらでも打たせてやると告げ

芽衣「本当!」

志摩「うい?」

それを聞いて、2人は、立ち直り

次郎「ああ本当だ!!約束する。」

次の水上戦で、いくらでも打たせてやると、2人に約束する。

芽衣「やった!!」

志摩「うい!!」

次郎（単純な奴ら・・・）

立ち直りが早い2人を見て、単純な奴だと思う。

薫「納沙さん!他の艦にも回避に専念するよう伝えてくれる。」

幸子「分かりました。」

改めて、他の艦にも回避に専念するよう伝え、薫は受話器を取り

薫「すくねとせんだいは、敵機の迎撃をお任せします。」

五月『了解。』

与力『心得た。』

すくねとせんだいに敵機の迎撃を依頼。

せんだい、C I C

与力「よろし、学生艦には、一発も当てさせるな！一機残らず叩き落とせ!!」

橘「了解！」

すくね、艦橋

五月「はあく世話が焼けるわ！」

志津真「まあ、あの艦長が命じる事は、大体分かっていきますから・・・」

五月「とは言え・・・此処は、私達が一肌脱いであげましょう副長。」

志津真「はい！」

すくねとせんだいは、敵機の迎撃に専念し

武蔵、艦橋

親子「攻撃しないのですか？」

もえか「今は、山本教官の命令に従いましょう。」

天津風、艦橋

千華「何で攻撃しないのよ!?あの指揮官は、何を考えているの?」

あゆみ「とは言え、命令には従った方が良いのでは、艦長?」

千華「わ、分かってるわよ!!」

時津風、艦橋

つむぎ「だ、大丈夫かな・・・」

君江「まあくなる様に成るんじゃないんですか？」

晴風以下の学生艦は、回避行動をする。

こうして、本格的な戦闘が始まった。

「目標捕捉!」

『てーっ!』

敵機を捕捉したすくねとせんだいが速射砲と20mmフランクスCIWS（両方も演習用のペイント弾）で攻撃する。

2隻の攻撃でライトニング隊39機のうち15機に命中、機体に撃墜の印であるペイント弾の絵具が付着した。

だが、残りの24機が学生艦に突入し

春乱、操縦席

ライトニング隊「目標を捕捉!・・・投下!!」

容赦ない雷爆撃を慣行。

模擬魚雷、模擬爆弾の猛攻撃で、比叡は小破、摩耶は中破し、五十鈴と浦風、谷風は大破、航行不能と言う事で脱落した。

晴風、艦橋

鶴『五十鈴から連絡です……ワレ多数ノ被弾ヲ受ケ、航行不能……浦風、谷風からもです!!』

早くも3隻が脱落した情報が晴風に齎された。

次郎「早くも3隻脱落かよ……」

薫「今は、回避に専念するしかない!……皆頑張つて!」

容赦ない爆撃に対し、学生艦は、回避するしか術はなく

マチコ『敵機1機、左舷より此方に向かう!』

そんな中、晴風にも敵機1機が向かって来た。

明乃「リンちゃん、主舵一杯!!」

明乃は、鈴に右に回避するよう命じる。

鈴「はい……!!」

鈴は、急いで舵を右に舵を切る。

回避する晴風に対し、春乱1機から2発の模擬爆弾が投下。

晴風の左舷付近に着弾した。

鈴「ひい……!!」

至近での着弾に鈴は、悲鳴を上げる。

ましろ「なんて速さ何だ!?これじゃ、こっちの照準が着かない!」

航空機のアマリの攻撃の速さにましろは驚愕し

ましろ「これが戦闘なのか?」

これが戦闘なのかと疑問視する。

薫「そうよ!」

それに薫が答え

ましろ「えっ?」

薫「これが私達の戦闘・・・貴方達がいっつもしているのは、水上と対潜戦闘の2種類のみ・・・でも私達のは、水上と対潜、そして対空戦闘の3種類なの!」

明乃達に自分達の戦闘の違いを説明する。

確かに明乃達がいっつもしているのは、水上と対潜戦闘の2種類だけで、薫達の方は、水上と対潜戦闘の1種類が増えている。

幸子「成程!1つ種類が増えているんですね!」

それを聞いた幸子は納得し

芽衣「ど、如何やったら勝てるの?」

志摩「うい?」

芽衣と志摩は、勝つ方法を問う。

次郎「そんなの無い！相手は、無限に来るからな！」

それに対して、勝つ方法など無く。

相手が無限に来る事を告げる。

鈴「む、無限!?!」

無限だと聞いて、鈴は怯える。

薫「私達が今やれる事は、全力で回避して、この攻撃に耐えるしかない！」

今やれる事は、全力で回避して、攻撃に耐えるしかない。

次郎「分かったなら、敵は、まだ来るぞ！全力で回避に専念しろ!!」

『はー』

明乃達は、回避に専念する。

そして、他の艦も

武蔵、艦橋

親子「五十鈴が……」

もえか「これ以上被害を大きくする訳にも行かない……砲術長!……速射砲で敵

機を攻撃して！」

武蔵の砲術長「了解！」

親子「何をする気ですか？」

もえか「私達が囷になって、敵の注意を引き付けるの!・・・大丈夫、私達の艦ならちよつとやそつとの攻撃にも耐えられるから!」

もえかは、武蔵の防御力を活かして、囷になって、敵の注意を引き付ける。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

アウレリア「左舷より敵機!?!」

ロミルダ「右舷からもです!?!」

ミーナ「艦長!!」

テア「うろたえるな!素早く対応すれば大丈夫だ!!」

テアの指示のもと、2方向からの攻撃を易々と回避する。

天津風、艦橋

千華「反撃よ!あいつらを打ち落してやる!!」

あゆみ「無理です!回避に専念して下さい!!」

千華「わ、分かっているわよ!!」

千華は、反撃を試みるも、あゆみに止められ、回避に専念する。

時津風、艦橋

君江「艦長!敵が向かってきます!?!」

つむぎ「ど、如何しよう!?!」

つつじ「回避で良いんじゃないですか？」

敵機の接近につむぎは戸惑うが、航海長の賀茂つつじの判断で危機を脱する。

一方、美由紀達東部隊もものは率いるスターズ隊の攻撃を受けていた。

高千穂、艦橋

「敵機接近！」

美由紀「さつまといばらぎは迎撃せよ！」

此方も高千穂とさつま、いばらぎが迎撃を担当し、学生艦は、退避に専念する。

3艦の攻撃でスターズ隊は、39機の中、20機を撃墜した。

だが、此方もスターズ隊の容赦ない雷爆撃でビスマルクは小破、鳥海中破し、磯風、

萩風は小破し、磯風が萩風は大破、航行不能で脱落した。

しばらくして、空襲は止み、攻撃隊は帰路に着く。

晴風、艦橋

薫「ふう……一先ず終わった見たいね……」

薫は、一先ず空襲が終わった事を確認する。

ましろ「やっとか！」

明乃「ひやっとしたよ！」

一先ず空襲が終わった事に明乃達も一段落した。

薫「納沙さん!各艦の損害状況の確認をお願い!」

幸子「了解です!」

幸子は、タブレットで被害状況を確認する。

数時間後

幸子「損害の確認できました。」

タブレットで各艦の損害の確認を終え、報告する。

幸子「五十鈴と浦風、谷風は、轟沈・・・比叡は小破・・・摩耶は中破・・・我々晴風と武蔵以下3隻は健在です。」

西部隊の被害は

五十鈴、浦風、谷風は大破、航行不能、比叡は小破、摩耶は中破。

健在なのは、旗艦の晴風、武蔵、すくね、せんだい、アドミラル・グラフ・シユペー、天津風、時津風の計7隻。

一方、東部隊の被害は

磯風、萩風が大破、航行不能、ビスマルクは小破、鳥海は中破。

健在なのは、旗艦の高千穂、さつま、いばらき、涼風、浜風、舞風の6隻
どちらとも損害は、同じだった。

空母大鳳、艦橋

功「あれ程の攻撃を受けて、どちらも損害は同じとは……」
古庄「どちらとも非常時に対応ができています。」

両部隊の損害状況を見て、薫と美由紀が非常時に対応ができていますと評価する。

龍之介「まだ続くぞ！……次は、水上戦だ!!」

そして、いよいよ待ちに待った水上戦へと移る。

晴風、艦橋

薫「次は、水上戦！」

明乃「水上戦!？」

芽衣「よっしゃ、やっと出番だ！」

志摩「うい！」

遂に水上戦だと聞いて、芽衣と志摩は、浮かれる。

ましろ「水上戦ですか!？」

薫「ん！……だけど、相手が権藤中佐だから油断は、禁物！……注意して！」

だが、相手が美由紀である為、薫は、油断は、禁物だと注意する。

次郎「だそうだ！……お前ら、気を引き締めていけ!!」

『は、い、い、い』

明乃「ココちゃん！敵との距離は、どのくらい？」

明乃は、東部隊との距離を幸子に問う。

幸子「ん・・・位置からして・・・敵との距離は・・・40,000mです！」

幸子は、タブレットで東部隊との距離を測定。

東部隊との距離は、まだ40,000mも離れていた。

薫「40,000mなら、まだ余裕が有る・・・今のうちに交代で少し休みましょう艦長！」

明乃「そうですね。」

接敵まで、まだ余裕が有るので、薫は、今のうちに交代で休むよう命じる。

西部隊は、接敵前に交代で休養を取る。

だが、一方の東部隊では

高千穂、艦橋

美由紀「敵との距離は、まだ40,000mもある・・・今頃、接敵に備えて、向こうは休養している頃ね！」

美由紀は、薫達が接敵に備えて、休養していると予測する。

文夫「此方も接敵に備え、休養を取りますか？」

此方も接敵に備えて、休養をするのか問う。

接敵まで、まだ距離が有る。

美由紀の事だから、当然休養を命じると思った。

だが、美由紀の判断は

美由紀「何を言っているの副長！……向こうが休養している最中なら、先手必勝！……直ちに攻撃するべきよ！」

休養せず、攻撃を命じる。

文夫「攻撃ですか？」

美由紀「この好機を逃す訳にはいかない！……砲撃用意！」

春美「了解！全主砲砲撃戦用意！！」

美由紀は、砲撃を命じ、高千穂砲術長の井上春美大尉は、全主砲塔に砲撃用意を指示する。

高千穂のみ砲撃準備をする。

40,000mでは、高千穂と武蔵の18インチ砲しか届かない。

高千穂、全主砲塔

高千穂の全主砲塔は、砲撃準備をする。

高千穂の砲術員「砲弾装填！」

下の弾薬庫から46cm演習用砲弾が上げられ、隣の砲術員の指示で砲身に装填。

高千穂の砲術員「よし、降ろせ！」

高千穂の砲術員「装薬装填！」

続けて、装薬が降ろされ、砲術員達の手で砲身に装填される。

高千穂、艦橋

美由紀「砲術長！・・・遠距離レーダーで目標を捕捉！」

春美「了解！」

春美は、遠距離レーダーで目標に狙いを付ける。

高千穂の測距儀で見える距離は武蔵と同じ23,000mが限界。

それ以上はレーダーだが、普通のレーダーでは遠すぎて捕捉できない。

その為、対巡航ミサイル用の遠距離レーダーで目標を捕捉する。

春美「測定完了！砲撃準備完了！」

美由紀「って!!」

美由紀の号令のもと、高千穂の全主砲が一斉に射撃を開始する。

その頃、西部隊は、接敵に備え、各艦それぞれ交代で休養を取っていた。

そんな時

晴風、艦橋

慧『主砲弾多数！此方に向かう!!』

『えっ!?!』

電測員の慧からの報告に明乃と薫は、驚愕する。

そして、高千穂から発射された砲弾が至近に着弾する。

『きゃ……!!』

いきなりの着弾の衝撃に悲鳴を上げる。

晴風、炊飯所兼食堂室

『きゃ!?!』

百々「なんツスカ？」

媛萌「分かんない!？」

炊飯所兼食堂室で休息を取っていた生徒達も、いきなりの着弾の衝撃に困惑する。

晴風、艦橋

次郎「完全に隙を突かれたぞ!？」

明乃「総員！直ちに配置に戻って!!」

完全に此方の隙を付かれ、急いで配置に戻るよう命じる。

晴風、電探室

慧「更に主砲弾多数！此方に向かう!!」

更に数分待たずに第2波がやって来て

晴風、見張り台

マチコ「比叡に着弾!?!」

5発が比叡に命中する。

晴風、艦橋

ましろ「ひ、比叡が!?!」

武蔵、艦橋

親子「艦長!比叡が!?!」

もえか「ん・・・」

主砲弾5発の命中で比叡は、甚大な被害を受け

古庄『判定、比叡大破!』

脱落した。

更に中破した摩耶も被弾し、脱落する。

これで残っている艦は、6隻。

晴風、艦橋

ましろ「こんな見えない距離で、弾着観測なしで当てるとは・・・」

幸子「普通のレーダー照準では、こんなに正確に当てる事は・・・」

弾着観測や普通のレーダー照準なしで、正確に当てた事に、2人は困惑する。

薫「おそらくこれは・・・遠距離レーダー照準での射撃!?!」

だが、薫は、直ぐにそれが遠距離レーダー照準での射撃だと見抜く。

『遠距離レーダー!?』

遠距離レーダーに明乃達は注目する。

次郎「おい薫!・・・遠距離レーダーは普通、遠距離からのミサイル迎撃に使うものだろう・・・こんな風に使うなんて聞いた事が無いぞ?」

だが、次郎の方は、これが遠距離レーダー照準での射撃とは思えなかった。

次郎の言う通り、遠距離レーダーは、遠くから発射されたミサイルをいち早く捕捉する為に開発された物で、こう言う風に艦船への攻撃に使うとは聞いた事が無い。

薫「それは前例がないだけ・・・遠距離レーダーは、対物レーダーと同じだから射撃にも応用出来るよ!」

それに対して、薫は、前例がないだけと告げる。

次郎「そ、そうか!?!・・・あんまりミサイルに頼り過ぎているから、応用できる事に気づかなかったのか!?!」

薫の言葉に次郎は納得する。

薫「もう次郎君たら、大事どころが抜けてるよ!・・・発想の転換だよ!」
確かに発想の転換であるが

次郎「わ、分かってるよ、そんな事!!」

次郎本人は、全く分かってない様だ。

芽衣「何なの、この雰囲気?」

鈴「何か・・息ピッタリ?」

志摩「うい?」

2人を見て、芽衣、鈴、志摩は、息ピッタリだと思うのだった。

だが、そんな事を思ってる中、砲撃は更に悪化し

ましろ「砲撃が益々悪化して来た!?!教官、如何すれば?」

如何すれば良いか薫に問う。

薫「大丈夫!・・向こうがレーダーで射撃するなら使えない様にすれば良いだけの

事!」

ましろ「えっ?」

薫は、そう言って、受話器を取り

薫「十六夜艦長、原田艦長!ジャミングをお願いします!」

すくねとさつまにジャミングをお願いします。

すくね、艦橋

五月「良いけど、そんな事をすれば、此方のレーダーや通信機器が使えなくなるわよ

!」

だが、すくねの艦長五月から、ジャミングは、敵のレーダーを妨害出来るが、此方もレーダーと通信ができなくなると忠告される。

確かにジャミングは、敵のみじゃなく、味方のレーダーや通信機器に影響を及ぼす。

薫『それは分かっています・・・しかし、この砲撃から逃れるには、それしか・・・』
その事は、薫も重々承知していたが、この砲撃を逃れるにはそれしかなかった。

五月「はあ・・・分かったわ。」

せんだい、艦橋

与力「了解した！」

両艦の艦長は、承諾する。

晴風、艦橋

薫「納沙さん！他の艦に通信が出来ないので、発光信号で応答するように！」

幸子「分かりました。」

通信が出来なくなるので、予め発光信号で応答する様、各艦に通達する。

五月「ジャミング開始！」

すくねとせんだいの電波探知妨害装置NOLQ—3及びOLT—3が作動。

これによりレーダー及び通信が使用できなくなつた。

高千穂、艦橋

高千穂のレーダー主「艦長!・・・敵が対抗処置を取って来ました・・・遠距離レーダーが妨害されています!!」

すくねとせんだいの妨害装置によって、高千穂の遠距離レーダーは、西部隊を感知できなくなった。

それを聞いた美由紀は

美由紀「そう・・・此方の射撃から逃れる為に、2艦にジャミングを行わせているのね・・・もし同じ立場なら、私もそうするわね!」

すくねとせんだいがジャミングをしているのだろうと察し
もし同じ立場なら自分もそうしていただろう。

春美「砲撃を続けますか?」

春美が美由紀に砲撃を続けるのか問う。

美由紀「止めておきましょう・・・弾の無駄よ!・・・此方もジャミングを行いなから様子を見ましょう。」

美由紀は、砲撃を一時中止し、此方もジャミングで向こうのレーダーから隠れる。

美由紀「さて・・・砲撃から逃れた事は褒めてあげるわ!・・・でも、この状態では遠距離での攻撃は出来ないわよ!・・・如何するのかしら・・・」

砲撃から逃れる為とは言え、ジャミングを行った事で両部隊は、遠距離での攻撃が出

来ない。

如何するのか

薫の行動をお手並み拝見する。

空母大鳳、艦橋

実「両部隊の通信が途絶えました。」

攻撃隊収容中の空母大鳳でも両部隊が妨害装置を作動させた事を確認する。

古庄「えっ!？」

通信が途絶えた事に古庄は驚く。

信吾『此方CIC!・・・両部隊がレーダーから消えました。』

古庄「雅か、事故か何か？」

通信やレーダーからの消失

古庄は、一瞬非常事態が起きたかと思ったが

龍之介「いや・・・おそらくジャミングの影響だろう・・・心配いらない!」

龍之介は、両部隊のジャミングの影響だと察し、心配いらないと告げる。

古庄「しかし、これでは何か有った時に此方から直ぐに救援が出せなくなるのでは？」

古庄の言う通り、この状態では、直ぐに救援が出せない。

龍之介「その点は問題ない・・・E2Jのレーダーが代わりに監視している。」

だが、龍之介は問題ないと言う。

何故なら、監視で飛んでいるE2Jのレーダーは、妨害にも強いレーダー機器を使っているのです、此方に代わって監視を続けられる。

更にヘリ6機で編成されている救難部隊が、いつでも出撃できるように準備していた。西部隊

話は戻し、ジャミングの影響の中、西部隊では

晴風、艦橋

明乃「あっ!？」

ましろ「砲撃が止んだ。」

砲撃が止んだ事を明乃とましろが確認する。

次郎「ジャミングのお陰で、助かったな!」

『ふう．．．』

助かった事に安心する。

幸子「でも、この状態では、レーダーや通信もおろか攻撃もできません。」

幸子の言う通り、この状態では、通信も攻撃が出来ない。

例え、攻撃で来ても距離が遠すぎて撃てない。

芽衣「ああ、もう、折角の水上戦なのに距離が遠すぎて撃てない!!」

志摩「うい！うい！」

折角の水上戦なのに撃てない事に芽衣と志摩は悔しがる。

次郎「如何する薫？・・・この状態じゃ、あの武蔵の艦長が立てた作戦ができないぞ！」

次郎は、この状態じゃ、もえかが立てた作戦が実行できない。

もえかが立てた作戦とは

敵部隊に対して、武蔵と比叡の援護の元、味方部隊が二手に分かれ敵部隊に突入し、乱戦に用いる作戦だった。

しかし、ジャミングを行って以上、遠距離の支援が出来ない。

更に先の砲撃で比叡と摩耶を失い、戦力は半減している。

これでは、とても実行できない。

薫「ん・・・」

如何すれば良いか、薫は考える。

そんな時

明乃「じゃ！」

薫「ん？」

明乃「私達が、その分何とかすれば良いんじゃないですか？」

明乃が、その自分達が何とかすれば良いんじゃないですかと薫に進言する。

次郎「お前聞いてなかったのか? ……この状態で何が……」

それに対して、次郎が言い返すと

薫「出来るかも!」

次郎「えっ!?!」

薫が何かを思い付き、各艦に命令を出す。

東部隊

西部隊が動く中、東部隊は、西部隊に備え防備を固めていた。

そして

高千穂、防空指揮所

高千穂見張り員「ん!?!」

高千穂の見張り員が海上にマストの様な構造物を視認。

やがて、それが艦の構造部だと分かり

高千穂見張り員「敵艦隊発見、数3!!」

直ちに艦橋に報告する。

高千穂、艦橋

報告を受けた美由紀は、直ぐに双眼鏡で見る。

美由紀「ん!?・・・あれは?」

美由紀が見たものは、煙幕を展開しながら此方へと全速で向かってくる敵部隊の姿だった。

文夫「奴ら何も考えないで突撃して来たのか?」

双眼鏡で相手が何も考えないで突撃してきたのかと文夫は推測する。

美由紀「そんな訳が無いわ!・・・煙幕で上手く隠しているけど・・・どうせ囿よ!・・・私達が前方に気を取られているうちに別動隊が後方から責める魂胆ね!」

美由紀は、前方の敵が此方の目を欺く陽動だと認識し、別動隊が後方から責めてくる
と推測する。

文夫「ならばいかがいたしましうか?」

それに対して文夫は、如何するか問う。

美由紀「前方のさつま、いばらきを迎撃に向かわせなさい・・・他の艦は、そのまま
周囲の警戒を続行。」

文夫「了解!」

美由紀は、前方を航行中のさつま、いばらきを迎撃に向かわせる。

一方、前方から向かってくる艦艇は、旗艦の晴風とアドミラル・グラフ・シユペーの
2隻で、両艦は、煙幕を張りながら航行していた。

晴風、艦橋

次郎「如何やら、上手く言ったな! . . . 奴らこつちが困だつて気づいた様だ。」

次郎は、双眼鏡で向こうの動きを見て、向こうが困だと気付いた様だと判断する。

薫「ん、このまま煙幕を張りながら主砲の有効射程まで接近 . . . 但し、速度は27ノットを維持 . . . 艦長!」

それを聞いた薫は、煙幕を張りながら27ノットで主砲の有効射程まで接近するよう明乃に命じる。

明乃「リンちゃん! 第4戦速を維持しつつ前進!」

鈴「ヨ、ヨーソロー!!」

明乃は、鈴に第4戦速を維持しつつ前進と命じ、

明乃「ココちゃん! シュペーにも伝えて!」

幸子「分かりました。」

隣のアドミラル・グラフ・シュペーにも伝える。

2隻は、煙幕を張りながら27ノットで有効射程まで接近する。

高千穂、艦橋

美由紀「 . . . 妙ね?」

双眼鏡で接近してくる敵部隊を見ていた美由紀は、敵部隊の行動に疑問を抱く。それは、2隻が、かなりの近距離で航行している事。

しかも煙幕を張りながら

美由紀「何故、あんなに距離を詰めて航行するのかしら？」

文夫「さあ、どうせ素人が操舵しているのでしょ。」

文夫は、相手が素人が操縦しているのだから、距離を間違えていると思っていた。

美由紀「そんな筈は・・・はあ!？」

だが、美由紀は、そんな筈はないと思っっている内にある事に気づき

美由紀「急いでさつまといばらきに撤退するよう命じて!!」

文夫「え？」

美由紀「早く!!」

急いで迎撃に向かわせたさつま、いばらきに撤退を命じる。

だが、時既に遅かった。

晴風、艦橋

薫「今よ! 煙幕止め! 距離を開けて、全速前進!!」

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

ミーナ「艦長!」

テア「全速前進!!」

薫の号令のもと、2隻は、煙幕を張るのを止め、全速で距離を開けながら接近する。やがて2隻が展開していた煙幕が晴れ、其処から

さつま、艦橋

さつまの見張り員「前方に大型艦!」

大型艦が姿を現した。

守「艦長、あれは!」

重雄「ん!!」

前方に現れた大型艦を見て、重雄は驚愕する。

高千穂、艦橋

美由紀「む、武蔵!」

その大型艦は、紛れも無く武蔵だった。

武蔵、艦橋

親子「雅か、こんな方法で敵に接近するとは!」

もえか「ん、流石に考える事は凄いね!」

薫の作戦に驚きながら

もえか「砲撃用意! 目標前方の2艦!!」

武蔵の砲術長「了解！」

迎撃に来たさつま、いばらきに主砲の照準を合わせる。

さつま、艦橋

重雄「全速退避！急げ！！」

さつま、いばらきは、退避行動を取るが

武蔵、艦橋

もえか「砲撃始め！」

武蔵の砲術長「つて！！」

武蔵は砲撃を開始。

2艦に命中した。

さつま、艦橋

さつまの乗員「機関部に被弾！航行不能！！」

さつまの乗員「いばらきも同じです！！」

2艦共、機関部を損傷し、航行不能になり

古庄『判定、2艦とも航行不能で脱落と見なします！』

脱落した。

晴風、艦橋

『よっしや!!』

次郎「よくし! 2艦仕留めたぞ!!」

幸子「流石武蔵! 初弾で見事に当てましたね!」

明乃「流石もかちゃん!!」

敵2艦を脱落させた事に明乃達は大喜びする。

薫「まだよ! まだ手強いのが残っている……このまま武蔵と共に敵部隊に突入する。」
だが、薫は喜ばず、このまま武蔵と共に敵部隊に突入を命じる。

高千穂、艦橋

文夫「さつまといばらきが……」

学生艦じゃない艦2隻がやられた事に文夫は驚愕するが

美由紀「……へ……やるじゃないの……だけど、此処までよ! ……全速前進!! 目標武蔵!」

美由紀は、それを見て、此方も負けていられないと思ったのか、艦を武蔵へと向けるよう命じる。

武蔵、艦橋

武蔵の生徒「敵艦向かってきます!!」

もえか「砲戦用意!」

向かってくる高千穂にもえかは砲戦準備を命じる。

晴風、艦橋

ましろ「教官、私達も！」

武蔵が高千穂とやり合うのを見て、ましろは、自分達も参加しようと言うが

薫「いえ、このまま進みます！」

薫は、そのまま前進を命じる。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

ミーナ「我々も援護しましょう。」

テア「うむ！」

アドミラル・グラフ・シュペーも武蔵を援護するが

アレクサンドラ「前方よりビスマルク!? 向かってきます!!」

前方からビスマルクが向かって来た。

ビスマルク、艦橋

クローナ「貴方達の相手は、この私よ！」

艦橋では、テアのライバル、クローナが笑いながらテアの前に立ちはだかる。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

ミーナ「くそ、クローナの奴！」

テア「砲戦用意!」

止む無く、アドミラル・グラフ・シュペーは、ビスマルクと一戦交える。こうして、武蔵は、高千穂を

アドミラル・グラフ・シュペーは、ビスマルクを

そして、晴風は、残っている敵部隊に単独で突入する。

残っている敵は、鳥海、涼風、浜風、舞風の4隻。

それに対して、晴風は1隻のみで交戦を挑む。

雅に無謀だ。

だが、薫はまだ奥の手を残していた。

それはさておき、武蔵は、高千穂と交戦を交え様としていた。

高千穂、艦橋

美由紀「目標武蔵!」

春美「全主砲照準! 目標武蔵!」

高千穂の主砲が武蔵に照準を合わせる。

武蔵、艦橋

もえか「砲術長! 目標高千穂!」

武蔵の砲術長「了解! 目標高千穂!」

武蔵も高千穂に照準を向ける。

高千穂と武蔵

史上初めての超戦艦同士の砲撃戦が始まる。

高千穂の18インチ砲12門に対し、武蔵は18インチ砲9門。

数から見て、高千穂の方が有利だが、武蔵も負けてはいない。

武蔵は自動装填に対し、高千穂は手動装填。

高千穂より武蔵の方が装填速度が速い。

どちらとも違いは有るが、それでも超戦艦同士の撃ち合いに代わりはない

『つて!!』

両艦は、砲戦を開始した。

同じ頃、アドミラル・グラフ・シュペーもビスマルクと交戦を開始しようとしていた。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

テア「全速前進!!ビスマルクに近づける。」

テアは、ビスマルクに対し、接近戦を挑む。

アドミラル・グラフ・シュペーの性能ではビスマルクにまともに太刀打ちできない。

その為、テアは、接近戦に持ち込もうとする。

ビスマルク、艦橋

ビアンカ「シユペーが向かってきます!?!」

クローナ「ククク・・・このビスマルクに対し、接近戦に挑むきね!・・・そうはさせないわよ。」

接近してくるアドミラル・グラフ・シユペーに対し、ビスマルクは迎撃する。

そんな中、晴風は、単独で残った敵部隊に突入しようとしていた。

晴風、見張り台

マチコ「前方より鳥海以下、航洋艦3隻近づく。」

マチコからの報告で、前方から鳥海と涼風、浜風、舞風の4隻が接近してきた。

晴風、艦橋

明乃「戦闘用意!」

明乃は、戦闘用意を命じ

芽衣「よっしゃ、やっと出番だ!」

志摩「うい!」

芽衣と志摩は、主砲と魚雷の用意をする。

4隻は、しだいに近づいてくる。

鈴「ううう・・・」

4隻が近づいてくるのを見て、鈴は、震えて来た。

ましろ「教官、攻撃は？」

ましろは、薫に攻撃の許可を問うが

薫「まだ！」

薫はまだと言って、攻撃を待つ。

やがて、鳥海の主砲が此方を向いた途端

薫「今よ、艦長！」

明乃「信号弾用意！」

晴風、射撃指揮所

光「つて!!」

晴風から信号弾が放たれる。

鳥海、艦橋

鳥海艦長「何、何だ!？」

いきなりの信号弾に何かと驚き

すくね、艦橋

志津真「旗艦より合図です！」

五月「全速前進！」

せんだい、艦橋

与力「いくぞ!!」

信号弾から直ぐに左右からすくね、せんだい、天津風、時津風の4隻が現れた。

4隻は、本体とは別に敵に気づかれない様に密かに接近していたのだ。

鳥海の生徒「左右から敵!? 囲まれました!!」

前方から晴風、左からすくねと時津風、右からはせんだいと天津風。

4隻は、完全に包囲された。

高千穂、艦橋

高千穂の通信主「艦長! 後続の部隊が敵に包囲されています!!」

美由紀「な、何ですって!?!」

後方に残っていた味方艦4隻が敵に包囲された報告を聞いて、驚愕する。

美由紀「ま、雅か!?! 主力艦を囿にして、此方の主力を引き付け、その間に残っ

た艦船を包囲する。」

薫の作戦は、先ず煙幕で敵に近づき、此方が囿と気づかせて、今度は、武蔵を出して、

此方が本命だと思わせる。

そして、敵の主力2隻が此方に引き付けている間に晴風が残った敵部隊に接近、単独

で戦闘をすると見せかけ、信号弾で隠れていた4隻に合図を出し、敵部隊を包囲する。

文夫「か、艦長?」

美由紀「ふん！・・・完全にしてやられたわね・・・あの子に！」

まんまと薫の作戦にはまってしまった事に美由紀は嘲笑う。

報告を聞いたところで今は戦闘中、囲まれた味方を救う事はできない。

仕方が無く、戦闘を続行するしかなかった。

晴風、艦橋

幸子「包围完了しました。」

次郎「雅が成功するとは!?!」

次郎は、薫の作戦が成功するとは思わなかった。

薫「岬ちゃんのお陰だよ！あの時、岬ちゃんの言葉で思い付いたの！」

薫は、あの時、戦力が半減し、窮地になった時、明乃が励ましたお陰で今の作戦を思

い付いたのだ。

雅に明乃は、幸運の持ち主だ。

明乃「いやあ・・・照れるな・・・！」

明乃は、照れてしまう。

まして「はあ・・・其処は照れるところじゃないでしょう艦長！」

だが、ましては、其処は照れるところじゃないでしょうと呆れる。

空母大鳳、艦橋

古庄「これは!？」

功「主力を囷にして、敵の主力を引き付けている間に残りが残った敵を包囲する……何とも大胆な作戦を立てましたね！」

空母大鳳の艦橋で見ていた古庄と功も薫の戦術に驚いていた。

龍之介「やはりあいつには、指揮官の才能が十分にある。」

薫の戦術を見て、龍之介は、薫には指揮官としての才能が有ると確信する。

まあ、それはさて置き、晴風以下5隻は、包囲した4隻の攻撃を開始した。

明乃「砲雷戦用意! 目標鳥海！」

芽衣「魚雷! …敵針180度、敵速20ノット、雷速52ノット、写真角0度。」

志摩「うい！」

芽衣と志摩は、鳥海に照準を合わせ

明乃「攻撃始め!!」

芽衣「撃てえ!!」

晴風から魚雷8本が鳥海に向け発射され

志摩「つて!!」

更に砲撃も開始する。

8本の魚雷の内、4本が命中し、砲弾も中央付近に命中する。

芽衣「よっしゃ！命中!!」

志摩「うーい！」

命中した事に芽衣と志摩は大喜びする。

晴風、見張り台

マチコ「鳥海発砲!?!」

攻撃を受けた鳥海も負けていられず反撃する。

だが、前の航空攻撃によって、主砲の2基が使用不能になっているので、隙が出来ていた。

その隙を狙って、攻撃を続け

晴風、見張り台

マチコ「鳥海大破!・・・マストに白旗が上がっています。」

遂に鳥海は白旗を揚げ、降伏する。

晴風、艦橋

次郎「よし！1隻仕留めた。」

芽衣「やった・・・!!やった・・・!!」

志摩「うい!!」

芽衣「イエーイ!!」

志摩「うい!!」

鳥海を仕留めた事に芽衣と志摩は、大喜びし、ハイタッチをする。

ましろ「やったのか・・・」

幸子「そうだよシロちゃん!!」

明乃「やったね教官!」

薫「うん、これで残るはあと3隻・・・このまま包囲の輪を締めよう。」

喜びに漬しながら包囲の輪を縮める。

やがて、鳥海に続いて、涼風、浜風、舞風までもがすくね、せんだい、天津風、時津風によって、降伏した。

古庄『鳥海降伏!他の3隻も降伏を確認。』

晴風、艦橋

幸子「これで残るは2隻だけですわね!」

包囲戦によって、敵4隻が脱落し、残りは高千穂とビスマルクの2隻のみ。

薫「ん!先ずは、高千穂から・・・全艦前進!」

晴風以下5隻は、武蔵と戦闘中の高千穂へと針路を向ける。

その頃、高千穂は、武蔵と戦闘を続けていた。

高千穂、艦橋

春美「つて!!」

武蔵、艦橋

武蔵の生徒「2番主砲及び3番主砲大破!!」

高千穂の砲撃で2番主砲及び3番主砲が大破した。

もえか「向ここの被害は?」

親子「保々軽微の模様・・・」

一方の高千穂は、2番副砲と左舷5インチ砲の数基が大破したのみだった。

武蔵の生徒「2番及び3番副砲大破!後部甲板にも被弾!」

僅か数十分で武蔵は追い詰められていく。

夏美「ま、雅か私達が・・・」

自分達が追い詰められている事に困惑する夏美。

いくら成績優秀な武蔵の生徒でも高千穂の乗員は実戦経験の差で武蔵が不利だった。

もえか「ん・・・」

如何すれば良いのかもえかは考えるが、高千穂の砲撃更に迫ってゆく。

高千穂、艦橋

美由紀「これでトドメよ!」

武蔵にトドメを刺そうと高千穂の全主砲が武蔵に向く。

春美「つて!!」

最後の砲撃が武蔵に迫る。

武蔵、艦橋

『きゃあ……!!』

高千穂の砲弾が武蔵の至る各所に命中し、被弾の衝撃に生徒達は悲鳴を上げる。

そんな中

もえか「……白旗を上げて!」

親子「えっ!?!」

突然、もえかは降伏の意味でもある白旗を上げるよう命じる。

夏美「降伏するんですか艦長?」

武蔵の生徒「まだ私達は戦えます!!」

もえかの降伏命令に夏美達が反対するが

もえか「確かにまだ私達は戦える……だけど、私はこれ以上、皆を危険な目に遭わ

せたくない!!……此処は潔く負けを認めよう!」

もえかは、これ以上、皆を危険な目に遭わせたくないと思い、此処は潔く負けを認め

ようと皆に告げる。

親子「ん……分かりました。」

もえかの言葉に親子は納得し、他の生徒も潔くもえかに従う。

高千穂、艦橋

高千穂の見張り員「武蔵より白旗!?!」

やがて武蔵に白旗が上がった事を高千穂の見張り員が確認する。

美由紀「潔く降伏するとは・・・敵ながらあつぱね!」

美由紀は、潔く負けを認めたもえかを高く評価する。

文夫「これで敵は、要を失ったも同然です!!」

西部隊は、武蔵が脱落した事で主力艦を失った。

残るは、旗艦の晴風以下巡洋艦3隻と航洋艦2隻のみだった。

美由紀「これより残った敵を殲滅する・・・全速前進!!」

武蔵を仕留めた高千穂は、残りの敵を殲滅する為、晴風へと針路を取る。

晴風、艦橋

古庄『判定!武蔵、大破により降伏を確認!』

ましろ「む、武蔵が・・・」

芽衣「う、嘘でしょ!?!」

志摩「うい・・・」

幸子「あの武蔵が!?!」

明乃「もかちゃん！」

武蔵の降伏に明乃達は、驚愕する。

なんせ成績優秀でエリートと謳われた武蔵が、あつという間に撃破されたからだ。

次郎「流石は元教官、侮れねえな！」

薫「うん！」

しかし、薫と次郎の方は、冷静だった。

高千穂相手に武蔵では勝つてないと分かっていたのだろう。

武蔵の生徒は、成績優秀だが実戦経験が無い。

一方の高千穂の乗員は、冷戦とゴジラ戦を戦い抜いているので実戦経験が豊富だ。

もしラット事件で高千穂が地中海に派遣されていなかったら武蔵を止めていたかもしれない。

雅にそれを語っているかの様だった。

とは言え、武蔵を撃破した高千穂が此方へと向かってくる。

鈴「こつちに来る！ど、如何すれば!？」

こつちに向かつてくる高千穂に鈴は困惑し

芽衣「あの武蔵を仕留めるなんて・・・あんなのとまともに戦ったら!？」

志摩「うい・・・」

高千穂の強さに芽衣と志摩がビビってしまう。

幸子「確かに、あの武蔵を撃破するなんて、とても我々では・・・」

ましろ「やはり無理なのか？」

更に幸子やましろも怖じ気づく。

明乃「ん・・・」

そんな中、明乃も如何すれば良いのか迷う。

高千穂の強さに恐れをなす明乃達を見て

次郎「おいおい、何だよその情けなさわ!!・・・今さら高千穂の強さにビビって如何するんだ!!」

次郎は激怒する。

ましろ「しかし、あんなのとまともに戦うとなると・・・」

ましろは、無理だと言うが

次郎「じゃ降伏するか？」

それに対して、次郎は降伏するのかとましろに言う。

ましろ「それは・・・」

それに対して、ましろは、迷うが

次郎「俺は嫌だね！まだ戦ってもいないのに降伏するのは恥だ!!」

次郎は、まだ戦つてもいないのに降伏するのは恥だと言つて、降伏を拒否する。

薫「私も!」

ましろ「えっ!？」

薫「私も降伏には反対!・・・まだやれるのに、此処で諦めたら、それこそ負けになる・・・此処は挑戦すべきだよ皆!」

薫も降伏を拒否し、此処は挑戦すべきだと告げる。

それを聞いた明乃は

明乃「ん、教官の言う通りだよ!・・・まだ私達やれるのに此処で諦めたら駄目だよ皆!」

自分もまだやれるのに此処で諦めたら駄目だよと言ひ張り

芽衣「そうだよ!まだ私達やれる!!」

志摩「うい!うい!」

芽衣と志摩もやる気を見せ始め

幸子「やりましょう!此処は挑戦すべきです!!」

鈴「わ、私も頑張ります!!」

幸子や鈴も同じである。

あとはましろだけとなり

ましろ「ん……」

ましろは悩む。

悩むましろに薫が

薫「ましろちゃん……もし嫌なら参加しなくても良いわよ……別に参加しなくても責めたりしないから！」

嫌ならこの戦いに参加しなくても良いとましろに言う。

ましろ「いえ、私もやります。」

だが、ましろは逃げずに参加する。

次郎「これで戦えるな！」

皆のやる気差を見て、これで高千穂と戦えると次郎は把握。

薫「ではこれより高千穂との戦闘を開始します。」

明乃「全速前進!!」

せんだい、艦橋

与力「行くぞ!!」

すくね、艦橋

五月「面白くなってきたわね。」

そして、晴風以下5隻は、高千穂へと戦闘を開始する。

それにましろは、理解し

明乃「ココちゃん！他の艦にも伝えて！」

明乃は、幸子に薫の作戦を他の艦に伝えるよう命じ

幸子「分かりました。」

明乃「リンちゃん！全速で高千穂に接近して！」

鈴に高千穂に全速で接近するよう命じる。

鈴「ぜ、前進全速ヨーソロー！！」

鈴は、高千穂に接近する針路を取る。

明乃「マロンちゃん！機関を一杯にして！」

更に明乃は、機関室の麻命に機関を一杯にするよう命じる。

麻命『がつてん承知！』

晴風、機関室

麻命「よし、皆！・・・機関一杯、全力でぶん回すぜ！」

調整している麗緒達に機関一杯、全力でぶん回すぜとカツを入れる。

『おお・・・！！』

晴風は、速力を最大にし、高千穂へと接近する。

他の艦も全速で高千穂へと接近する。

高千穂、艦橋

高千穂の見張り員「敵部隊! 全速で此方に接近してきます!!」

文夫「何をやる気だ?」

文夫は、此方に全速で接近する敵部隊を見て、何をやる気なのか分らなかつたが

美由紀「恐らく此方の主砲に対し、接近戦を挑もうとしているのよ!」

美由紀は、薫の作戦を察知する。

文夫「しまった!?! 懐に入れれば、此方は打つ手はありません!!」

美由紀「何としても阻止しなさい!!」

美由紀は、敵部隊の接近を絶対阻止を命じる。

春美「了解!」

接近戦を挑む敵部隊に対し、容赦ない砲撃を加える。

晴風、見張り台

マチコ「高千穂から発砲!」

晴風、電探室

慧「主砲弾多数! 此方に向かう!!」

高千穂の攻撃を察知し

晴風、艦橋

明乃「リンちゃん、回避しながら全速!!」

明乃は、回避しながら全速を命じ

鈴「はい・・・!!」

鈴は、巧みに舵を左右に切る。

高千穂の砲撃を回避しながら接近する晴風。

他の艦も同様な行動で接近するが

晴風、見張り台

マチコ「すくね、被弾!!」

すくねが被弾した。

晴風、艦橋

薫「五月中佐!」

すくねの被弾に薫は、動揺したが

鵜『すくねから通信!』

五月『私達に構わず、行きなさい!!』

五月から自分達に構わず、行けと言われ、そのまま通信は切れた。

薫「このまま前進を続けて!!」

薫は、構わず前進を命令。

明乃「はい！」

すくねが脱落する中、晴風以下3隻は高千穂に接近。

幸子「高千穂に近づきました。」

高千穂に接近する事に成功した。

高千穂、艦橋

春美「近すぎる・・・これでは主砲が撃てません!!」

近すぎて主砲が使えなくなり

美由紀「主砲以外で応戦しなさい!!」

春美「了解！」

主砲以外の副砲と5インチ砲で応戦する。

晴風、艦橋

マチコ『敵が応戦してきます。』

高千穂が副砲と5インチ砲で応戦してくると報告が入るが

薫「構わず、攻撃して!!」

薫は、そんなの無視して、攻撃を命じる。

ましろ「分かりました・・・魚雷、全弾撃ち尽くすつもりで撃って！」

芽衣「よくし！全部撃ちまくるぞ!!」

ましろは、芽衣に撃ち尽くすつもりで魚雷を打つよう命じ

ましろ「主砲、砲では抜けないけど撃ち尽くすつもりで撃つて良い。」

志摩「うい！」

更に主砲も撃ち尽くすつもりで、撃つよう命じる。

ましろ「攻撃始め!!」

晴風以下、3隻は、左右から主砲や魚雷で攻撃する。

高千穂、艦橋

高千穂の乗員「左舷、右舷5インチ砲破損！」

高千穂の乗員「進水区画拡大しています!!」

4隻からの主砲と魚雷攻撃に被害が拡大する。

文夫「怯むな！応戦しろ!!」

だが、高千穂は怯まず応戦する。

しかし、主砲が使えない以上、高千穂は追い詰められていく。

そんな中、晴風の後方を航行していた時津風に異常が起きる。

晴風、艦橋

まゆみ「艦長！時津風が!!」

高千穂の応戦に恐怖したのか、戦列を離れ、高千穂から距離を開けていく。

時津風、艦橋

君江「いや〜ど派手に撃ってきますね!」

つむぎ「ど、如何すれば・・・」

至近の着弾に如何すれば良いのか戸惑うつむぎ。

晴風、艦橋

ましろ「このままではやられてしまうぞ!!」

次郎「何やってるんだ!!」

このままでは時津風が主砲の餌食になる。

その時

明乃「シロちゃん! 此処任せて良い?」

突然、明乃は、ましろに晴風の指揮を押し付ける。

ましろ「はあ・・・どうせそう言うと思いましたが・・・行ってください!!」

それを聞いたましろは、溜息をしながら、明乃のやる事が分かっていたかの様に行かせる。

明乃「うん! じゃ行ってくる。」

明乃は、ましろに指揮を預け、時津風に向かう。

次郎「おい、艦長が勝手に持ち場を離れたぞ!!」

次郎は、明乃の行動に驚く。

薫「大丈夫！……いつもの事だから……」

それに対して、薫は大丈夫だと言って、笑顔を露にする。

次郎「……可笑しな艦だぜ、此処は！」

そんな薫を見て、晴風は可笑しな艦だと思った。

時津風、艦橋

君江「スキッパー接近!？」

君江は、前方の晴風からスキッパー艇が此方に向かってくる事を確認する。

君江「あれは……晴風艦長です!？」

しかも乗っているのは、晴風艦長明乃だった。

つむぎ「え!?!何?戦闘中に!？」

つむぎは驚愕していた。

戦闘中に艦長自らスキッパーで此方に来る事に驚愕していたからだ。

君江「面白いなあ、晴風の艦長って……」

それとは逆に君江の方は、明乃の行動に興味を抱く。

やがて、明乃が艦橋にやって来て

明乃「皆大丈夫?」

大丈夫かとおむぎに言う。

おむぎ「な、何とか大丈夫・・・だけど、敵の砲弾が・・・」

おむぎは、何とか大丈夫だと答えるが、敵の着弾に脅えて指揮が出来なくなっていた。

明乃「分かった! 私が指揮するから言う通りにして!」

おむぎ「分かった。」

おむぎは、明乃の言う通りに指揮をし、戦列に復帰する。

天津風が戦列に復帰する中

今度は、反対側にいる天津風に問題が起きる。

天津風、艦橋

紀子「敵の反撃が激しくなった!」

天津風砲術長の大指紀子が高千穂の反撃が激しくなったのを確認。

千華「ええい、面倒だわ!! こうなったら!」

それに乗じて、敵の反撃に血が上ったか千華は、艦を全速で高千穂の前に出ようとする。

せんだい、艦橋

せんだいの見張り員「後方の天津風が全速で向かってきます!!」

与力「雅か高千穂の前に出るきか?・・・回線を繋げろ!!」

天津風が高千穂の前に出ようとするのを察知した与力は、無線で呼び止めようとする。

天津風、艦橋

天津風通信員「せんだいから通信です。」

与力『何をしている・・・艦が前に出ようとしているぞ!!』

千華「見れば分かるでしょ!・・・このままじゃやられるだけよ・・・それなら私らが囷になつて敵を引き付けてやるのよ!!」

千華は、自分が囷になつて敵の攻撃を引き付け様とする。

与力『馬鹿なマネは止めろ!!・・・お前1人の勝手な判断で味方を危険に晒す気か!!』
それに対して、与力は千華を叱る。

千華「ん!!」

与力に叱られ千華は、悔しがるが

あゆみ「艦長・・・此処は止めるべきです!」

悔しがる千華をあゆみが宥め様とする。

千華「・・・分かったわ。」

あゆみに宥められ、千華は艦を元に戻す。

色々とトラブルはあつたが、両者の戦闘は続き

やがて、晴風以下3隻が砲弾と魚雷を撃ち尽くした頃。

晴風、艦橋

芽衣「もう魚雷が無いよ！」

芽衣は、もう魚雷が無いと言って

志摩「うーい……」

志摩も首を振るう。

ましろ「不味いな……向こうの方は、かなりの被害を受けているが、まだ戦えるみたいだ。」

ましろから見て、高千穂の方は、かなりの被害を受けていたが、まだ戦えると見ていた。

次郎「万事休すか？」

既に弾薬が尽きた状態では、戦闘は続けられない。

最早、絶体絶命。

薫（やはり無理だったのかな……それでも私達は、全力でやったと思う……此処で負けても……悔いはない。）

薫は、やはり無理だったと思ってたが、逆に悔しくは無かった。

例え無理でも自分達は、精一杯やり遂げたんだから悔しくなかったからだ。

そんな時だった。

まゆみ「敵が白旗を上げています!!」

『えっ!?!』

何と高千穂のマストに降伏を表す白旗が掲げられていた。

古庄『演習終了!・・・西部隊の勝利!!』

高千穂が降伏した後、西部隊の勝利の判定が出た。

本当は、まだビスマルク1隻残っていたが

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

ミーナ「如何やら、向こうも勝った見たいですな艦長!」

テア「ああ」

既にアドミラル・グラフ・シュペーによって、大損害を受けて、マストに白旗が上がっていた。

ビスマルク、艦橋

クローナ「負けた負けた・・・」

テアに負けた事にクローナは、負けた負けると言いながら、口から魂が抜けた状態になっっていた。

とは言え、これで西部隊の勝利は、確定だった。

晴風、艦橋

ましろ「か、勝ったのか?」

勝った事にましろは信じられなかったが

幸子「そうだよシロちゃん! やったよ・・・!!」

幸子は、勝利に喜びながらましろに抱き付く。

だが、ましろは、抱き付く幸子に嫌がるが突き放さなかった。

次郎「やったぞ薫!! ・・・俺達は、遂にあの教官に勝ったんだ!!」

次郎は、美由紀に勝利した事に大喜びし

薫「うん! 私達勝ったんだね!」

薫も喜んでいた。

時津風、艦橋

同じ頃、時津風に居た明乃とつむぎ達も

君江「如何やら勝った見たいですね!」

つむぎ「えっ!? 勝ったの?」

明乃「そうだよ! 私達勝ったんだよ!!」

勝利に喜ぶ。

明乃「じゃ、私は戻るね!」

演習が終了したので、明乃は晴風へと戻っていた。

君江「いや、助かりましたね艦長。」

つむぎ「うん！」

つむぎ達は、明乃に感謝した。

空母大鳳、飛行甲板

なのは「如何なつたのかな？」

フェイト「ん・・・」

空母大鳳に戻っていたなのはとフェイトは勝負の行く末を伺っていたが

文雄「勝つたよ！」

『班長!?!』

2人の前に整備班長の文雄が現れ

文雄「勝つたよ！艦長殿が!!」

薫達が勝つた事を告げる。

『やった・・・!!』

薫達が勝つた事を聞いて、2人は、大喜びする。

空母大鳳、艦橋

古庄「信じられない・・・雅か、あんな戦法で高千穂に勝つとは・・・あの子は、そ

れ程の実力を持っているのね！」

判定を出した古庄は、薫の実力に驚いていた。

龍之介「いや！・・・むしろあんたの生徒のお陰かもしれない・・・じゃなかったら、あいつは勝つてなかったろうな！」

だが、龍之介の方は、薫の実力ではなく、むしろ生徒のお陰で勝利したと主張する。

武蔵、前部甲板

演習は終わり、双方のGF隊員と生徒達が武蔵の前部甲板に集められる。

古庄「皆さん演習ご苦労様でした・・・これにて演習を終了します・・・今日は、それぞれ艦に戻って休む様に・・・生徒達には、明日から特別研修を行います・・・それでは解散！」

古庄は、今日の演習の終わりを宣言し、明日からの特別研修を行うと言って、解散を告げる。

GF隊員と生徒達が艦に戻る中

薫は、次郎達と明乃達と勝利を祝っていた。

そんな時

「ちよつと良い!!」

薫「ん？」

後ろから声を掛けられ薫は、振り向くと、其処には千華とつむぎが立っていた。

薫「な、何ですか？」

薫は、何を言われるかと思つたが

千華「そ、その・・・中々やるじやないの・・・見直したわよ！」

千華は、かたぐるしく薫の事を認める。

薫「ありがとう。」

薫は、千華に礼を言つて、つむぎの方を見る。

薫「榊原さんは、大丈夫だった・・・岬さんから聞いたけど、大変だったそうね？」

薫は、明乃から時津風の状況を聞いていたので、つむぎ達を心配していた。

つむぎ「い、いえ・・・晴風艦長のお陰で、何とか助かりました。」

それに対して、つむぎは、明乃のお陰で助かったと告げる。

薫「そう・・・あっ!？」

それを聞いた薫は安心し、辺りを見ていると美由紀が自分の艦に戻つて行くのが見え
て

薫「ちよつと御免。」

後を追いかけて

薫「権藤中佐!!」

美由紀を呼び止める。

美由紀「ん!？」

美由紀は足を止め、薫を見る。

薫「ん……」

何か言おうとしたが、言葉が出ず

美由紀「おめでとう……これで貴方は、優秀な指揮官として認められたわ!」

先に美由紀が薫を優秀な指揮官と認める。

薫「いえ、私なんかまだまだです……それに今回は、あの子らのお陰で助かったんですから!」

それに対して、薫は、自分はまだまだと言つて、今回の演習の手柄は明乃達だつと告げる。

美由紀「……貴方には、私が持っているモノを持っているのね……私も欲しかったわ。」

美由紀は、次郎達と明乃達を見て、自分が持っているモノを薫は、持っている事を認識した。

美由紀自身も欲しかった。

友人と言うモノが

美由紀には、友達はいない。
辛くなるから作らなかつた。

薫「居るじゃないですか、私達が！」

美由紀「えっ!?!」

薫「私達と中佐は、同じ仲間じゃないですか!?!」

だが、美由紀は、1人じゃなかつた。

薫やGフオースの仲間が居る。

決して、1人じゃない。

美由紀「はあ・・・そうだったわね・・・今まで忘れていたわ。」

美由紀もそれを思い出す。

薫「ですから今まで通り、これからもよろしくお願いします。」

薫は、そう言つて、美由紀に頭を下げる。

美由紀「全く、教え子にはいつも手を焼かせるわ！」

そう言つて、美由紀は、去つていった。

薫「そんなに手を焼いているのかな・・・私つて？」

薫は、自分がそんなに手を焼いているとは自覚していなかつた。

とは言え、演習も終わり

次は、
特別研修へと進む。

第7章 特別研修

7月1日

鳥島沖

あの大規模な演習から1日後

Gフォース艦隊と横須賀女子海洋学校の学生艦隊は、相変わらず共に停泊している。特に横須賀女子海洋学校の生徒は特別研修でGフォース艦隊旗艦の空母大鳳の見学に向かう。

内火艇

留奈「大きい!？」

空「流石は武蔵を超えた大型艦!」

内火艇から改めて、空母大鳳の大きさを見て驚愕する生徒達。

桜良「でも大型艦なのに、何で武装が無いの?」

それとは逆に武装が無い事に疑問を抱く。

とは言え、内火艇は空母大鳳に着き、古庄を先頭に生徒達はタラップを登る。

上った先に艦内に通じる入り口が見え、入ると其処には

薫「ようこそ我が艦へ！」

薫と次郎が生徒を出迎えるべく、待っていた。

明乃「教官！」

薫「歓迎します生徒の皆さん！」

薫が出迎えた事に生徒達は驚き、薫と次郎は生徒を歓迎する。

古庄「出迎えご苦労、山本中佐！」

薫「いえ、これも仕事ですから……あつ古庄教官！……准将が呼んでいたの……

此処は私達に任せて、教官は直ぐに会議室に行ってください!!」

薫は、古庄に龍之介が呼んでいると言つて、生徒達の事は自分に任せて、会議室に行くよう告げる。

古庄「あら、そう!?……じゃ任せるわね。」

薫「はくい！」

古庄「では、各自山本中佐の指示に従う様に！」

そう言つて、古庄は、生徒達を薫に託し、龍之介達が居る会議室へと向かう。

空母大鳳、艦内

薫「それでは皆さん！私に付いて来てください!!」

薫の案内の元、生徒達は艦内を見る。

幸子「かなり大きいですけど……以外と中は普通の艦とは変わりないですね……」
鈴「でも何か違う。」

次郎「当たり前だ！……何しろ6隻も建造された国防軍最強の攻撃型空母だぞ!!」
芽衣「ろ、6隻!?!」

ましろ「そんなに有るのか？」

同じ艦が6隻も有ると聞いて、生徒達は驚愕する。

幸子「でも、こんな大きな艦をよく6隻も作れましたね……普通なら予算とかで作れない筈では？」

驚く中、幸子は空母大鳳の建造に疑問を抱く。

薫「流石納沙さん！其処に目を付けたわね……実は、この艦は古い艦の資材を再利用したりサイクル艦なの！」

それに対して、薫は、空母大鳳が古い艦の資材を再利用したりサイクル艦だと告げる。
『リサイクル艦?!』

薫「だから、この艦を見て……皆分からない？……使われている艦の資材は貴方達に乗っている艦だよ！」

薫に言われ、艦内の至る所を見るが

理都子「自分が乗っている艦って、言われても……」

果代子「私達には分からないよ！」

見ても分からない。

次郎「全然分からないのか！……お前らの頭の中にはカエルでも入っているのか？」生徒達の反応に次郎は、頭にカエルでも入っているのかと思ひ呆れる。

薫「まあしようがないよね……普通は分からないのが当たり前……良いわ！……特別に教えてあげる……この艦の建造には武蔵と信濃の資材が使われているのよ！」
分からない生徒に薫は、答えを告げる。

夏美「む、武蔵!？」

亜衣子「こ、これが!？」

武蔵の資材を使っていると聞いて、武蔵クラスの生徒達は驚愕する。

もえか「ん……」

そんな中、もえかは、何かを考える。

とは言え、艦内を進む。

薫「それでは、先ず機関室をお見せします。」

先ず機関室に行こうと下に降りる。

薫「此処が機関室です！」

そう言って、機関室の扉を開き中に入る。

空母大鳳、機関室

機関室に入ると、其処には巨大な機関とそれを整備する機関士達の姿が有った。

留奈「うわあ凄い!？」

麗緒「以外と大きい!？」

巨大な機関を見て、機関科の生徒は驚く。

薫「あれ?・・・機関長は何所かな?」

薫は機関長の夏雄を探す。

そんな時

夏雄「よく来たなひよっこ共!!」

『!』

生徒達の後ろから夏雄が現れる。

明乃「あつ、なっちゃん!」

明乃は、つい夏雄をニツクネームで呼ぶ。

夏雄「誰がなっちゃんだ!?!篠原機関長と呼べ!!」

だが、夏雄は、明乃のニツクネームを気に入らず、普通に篠原機関長と呼べと明乃を怒る。

明乃「うえ!!!」

夏雄に怒られ、明乃はビビる。

麻命「夏雄!!」

夏雄「おう、麻命!久しぶりだな!」

だけど、同じ機関長の麻命だけは、再会を喜ぶ。

やはり似た者同士だからだろう。

薫「機関長!何所行ってたんですか?」

突然現れた夏雄に薫は、何所行ってたんですかと問う。

夏雄「ちよつとボイラーの様子を見に・・・」

如何やらボイラーの様子を見に行っていた様だ。

薫「雅か、また何処かのパイプに亀裂が?」

それを聞いた薫は、また去年の様に調整パイプなどに亀裂が生じたのかと思ったが

夏雄「いや、お湯の循環パイプの調子が悪いって言うから修理に行っていただけではない。」

如何やらお湯の循環装置が故障しただけだった様だ。

薫「何だ、そうだったんですか・・・良かった・・・」

それを聞いた薫は安心する。

夏雄「それよりも見て見ろてんでいい・・・この機関を!」

改めて夏雄は、生徒達に機関を見るよう言う。

洋美「改めて見たけど……殆どこの機器は私達が使っているのと変わらないわね！」
桜良「そう言えば、この制御盤も……」

改めて生徒達は、機関や制御盤を間近で見ても、自分達の艦の機関と同じ事に気づく。

夏雄「よく気づいたな！……この蒸気タービンは、大ききだけで、お前らが使っている機関と何ら変わらない……既に骨董品だがな……」

夏雄は、この機関が既に骨董品だと主張。

麗緒「でも最新鋭じゃ？」

それを聞いて、麗緒は、この艦が最新鋭艦と思っていたが

次郎「いや、30年も経っている老朽艦だ！」

それに対し、次郎が30年も経っている老朽艦だと告げる。

空母大鳳は、建造から既に30年は経過している。

鳳凰型の建造は、8年ごとに行われ、冷戦時には、4隻が就役した。

冷戦後には、更にレーザー核融合炉を搭載した最新鋭2隻が建造中だった。

留奈「3, 30年!？」

空「結構、年数経ってるね！」

それを聞いて、機関科4人衆は驚く。

芽衣「何か……教官が下見したいになっている……」

志摩「うい……」

生徒達は、薫の立場が下だと思った。

夏雄「まあ、馬鹿はほつといて、それより麻命……暇なら手伝ってくれ……色々話してえからよ！」

夏雄は、機関の整備に麻命を誘う。

麻命「おう任しとけ！いくぞお前ら!!」

それに麻命は応じ、他の5人も誘う。

麗緒「マジカー!?!」

留奈「何で私達まで……」

だが、洋美以外の4人は、麻命の誘いに乗り気じゃなかったが、結局麻命に強制され、機関の手伝いをする。

小百合「ジェニーもやるヨー！」

他にも天津風機関長の加藤小百合が加勢し

薫「じゃあとで食堂に合流と言う事でお願ひしますね機関長！」

薫は、麻命達を夏雄に預け、先へと向かう。

空母大鳳、医務室

薫「此処は医務室です。」

機関室を後にし、今度は医務室に入る。

美波「おお！・・・設備が整っている。」

美波は医務室の診察台や治療用の道具を見て、治療に必要な道具が揃っている事に感心する。

そんな時

ミーくん「ニヤーン！」

薫「あら、ミーくん!？」

やつてきた生徒達をミーくんが出迎える。

明乃「ああ、この前の猫!？」

明乃は、ミーくんを見て、この前の猫だと気づくが

ミーくんは、生徒達を無視し、何故か百々に目を向ける。

だが、ミーくんが目を向けているのは、百々ではなく、百々が抱いている五十六だった。

ミーくん「ニヤーン！」

五十六「ぬう！」

五十六もミーくんに気づき

百々「あっ？」

百々の腕から離れ、ミーくんの前に降り立ち

多聞丸「ニヤン！」

ましろ「多聞丸!？」

ましろが抱いていた多聞丸もミーくんの元に降り

ミーくん「ニヤン！」

五十六「ぬろう」

多聞丸「ニヤン！」

3匹は、じゃれ合いながら再会を祝う。

薫「相変わらず仲良しね・・・この3匹！」

3匹のじゃれ合いを見ていると

吾郎「いらつしやい！」

薫「宗方軍医！」

部屋の奥から吾郎が現れ

吾郎「よく来たね生徒の諸群!・・・歓迎するよ!・・・俺は軍医の宗方吾郎だ・・・
見ての通り・・・この医務室では乗員の体調診断や治療を行っている・・・まあ、平たく言えば・・・何所か体調が悪ければ此処で見ると言うところかな・・・患者がいない時は暇なだけだな・・・」

生徒に此処での医療の現状を説明する。

光「へ……」

順子「そうなんだ。」

それを聞いた生徒はあまり驚かなかつたが

吾郎「とは言え、お前らの中で指を切断したら俺を呼べ！……いつでもくっ付けて

やるからな……ははは！」

『うう……』

吾郎の指の手術の話聞いて、怖くなる。

薫「ははは……次行こう。」

薫は、次へと行く。

空母大鳳、炊飯所兼食堂室

薫「此処が食堂室です。」

今度は、我が艦の台所でもある炊飯所兼食堂室を訪れる。

美甘「わあく大きい!？」

ほまれ「こんなに広い食堂は初めて見た!？」

あかね「やりがいがありそう！」

広い炊飯所兼食堂室を見て、美甘や杵崎姉妹は驚愕し

美甘「あっ!? 売店まであるよミミちゃん!!」

厨房の隣には、売店まで有る事にも驚く。

俊秋「よく来たな3人共!」

『桐野さん!?!』

驚く3人に主計科長兼料理長の俊秋が迎える。

俊秋「来いよ! こつちに入つて!」

俊秋は、美甘と杵崎姉妹を厨房へと案内する。

ほまれ「此処が桐野さんの仕事場ですか?」

あかね「広〜い!?!」

俊秋「ああ! . . . 此処でしょつちゆう5000人の隊員の飯を作っているよ!」

あかね「5, 5000人も!?!」

俊秋「だが、何故か皆、俺の飯にケチを付けるんだよな . . .」

ほまれ「何で?」

次郎「そりゃ料理長が、何時も作るのが中華料理ばかりだから、飽き飽きしてるん

だよ皆!」

ほまれ「ああ!」

あかね「成程!」

薫「それで、何時も私達が手伝いに駆り出されるんだけど……今日は皆忙しくて、貴方達の歓迎会までは……」

今日は、見学に来た生徒達の為に歓迎会をする予定だったが、隊員達は忙しく、とてもそつちには手が回らない。

そんな時

美甘「じや私達が手伝っても良いですか？」

薫「えっ？」

何と美甘達が歓迎会の準備を手伝うと声を上げる。

美甘「どうせ私達の歓迎会をする予定なら、私達が作っても問題ないと思います……

ねえ、ほっちゃん！あっちゃん！」

ほまれ「そうだね！」

あかね「皆でやれば歓迎会がうくと盛り上がるよ！」

確かに自分達の歓迎会を自分達でやるなら問題も無い。

それにあかねやほまれも賛同しているし

俊秋「おお、お前達が手伝ってくれるなら、百人力だ!!」

3人の加勢に俊秋も喜んでいる。

優衣「私も手伝うわ！3人だけ手伝わせる訳にも行かないわ！」

セリカ「わ、私も！イタリア料理なら得意です!!」

更に間宮艦長の藤田優衣や時津風給養員の鈴木セリカも加勢する。

薫「じゃあまた戻ってくるから、楽しみにしているわよ!」

薫は、主計科達を俊秋に預け、先へと向かう。

空母大鳳、作戦室

薫「此処が作戦室です。」

作戦室に入ると、部屋では航空服を着た搭乗員達が定期の哨戒任務の打ち合わせをしていた。

薫「見ての通り・・・出撃するパイロット達が此処で作戦に関する最後の打ち合わせをしています。」

薫が生徒達に説明していると

『!?!』

搭乗員達が生徒に気づくが、薫と次郎に敬礼をし、打ち合わせを続ける。

楓「あの人達を見て、始めてじゃないんですけど・・・先見た人達とは、雰囲気が違う感じがしますわ・・・」

打ち合わせをする搭乗員を見て、楓が今まで艦内で見て来たGF隊員達とは雰囲気が違う事に気づく。

薫「万里小路さんの言う通り……彼らパイロット達は、私達普通のGフォース隊員とは違い、戦闘機の搭乗員になる為の過酷な訓練を受けているの……だから、いくらエリートでも：パイロットに成れるのは、希望者の大半の内の僅か数人しかいない：そして、更に体の異常などで資格を剥奪される事も有るわ！」

薫の言う通り、搭乗員になるには、普通の訓練よりも更に過酷な訓練を受けなければならない。

その為、パイロットに成れるのは僅か数人のみ。

更に体の異常などで資格を得られなくなったり、剥奪される事も有る。

龍之介もそれに類する。

聡子「結構厳しいぞな!？」

薫の話聞いて、聡子が厳しいと言う。

薫「そうならない様に……私達艦長は、常に艦の乗員だけじゃなく……以外にも目を向けとかなければならないの!……事故を起こさない様に。」

薫は、彼らが事故を起こさない様に自分達艦長が常に目を向けなければならぬと明乃以下の艦長達に告げる。

まして「薫姉さんの言ってる事……何だか分かる様な気がします……艦長は常に乗員だけじゃなく……状況などを把握し……それに対して、決断をしなければなら

ない・・・どんな時でも！」

それを聞いて、ましろは薫の言う事が分かると言つて、艦長に成る為の大事な事を言う。

薫「ふうくん！」

ましろ「な、何ですか？」

薫「ましろちゃんにしては、成長しているわね・・・偉い！・・・偉い！」

薫は、ましろが前より成長していると喜び、頭を撫でる。

ましろ「や、止めて下さい!!!」

ましろは恥ずかしくなり、頭を撫でるのを止めるよう言う。

そんな時

『薫先輩!!』

薫「あら、なのはちゃん！フェイトちゃん！」

なのはとフェイトが現れ、生徒達に手を振る。

次郎「2人とも今から哨戒任務だろ？」

フェイト「はい、これから行くところです。」

如何やら、2人は、今から哨戒任務に出るみたいだ。

薫「2人とも気を付けてね・・・くれぐれも事故犯さず慎重に・・・」

薫は、出る2人にくれぐれも事故犯さず慎重にと注意を告げる。

なのは「分かってますって！」

フェイト「大丈夫です。」

その事は、2人は、重々承知で

なのは「じゃ行つてきます!!」

出て行く。

薫「それが心配なんだけどね・・・」

だが、それでも薫は心配性だった。

空母大鳳、格納庫

作戦室を後にした薫達と生徒達は、航空機が格納されている格納庫へと入る。

薫「此処が艦載機格納庫・・・出撃したり、帰還した艦載機を、此処で整備します。」

『!』

格納庫に入ると春乱やE-2Gなどが数十機置かれており、それを整備員達が整備している。

ミーナ「おお!昨日見た航空機が沢山置いて有るぞ!」

整備中の春乱を見て、昨日の演習で見た航空機だとミーナは思い出す。

文雄「いらっしやい生徒諸群!」

薫「山崎整備班長!？」

機体を見る生徒達を整備班長の文雄が出迎える。

文雄「私は整備班長の山崎文雄技術少佐だ・・・此処では出撃したり、帰還した艦載機を交代で24時間整備を行っている。」

『2, 24時間!?!』

24時間と聞いて、生徒達は驚愕する。

珊瑚「ほお・・・24時間とは、結構長いね!」

だが、珊瑚が、それに食い付く。

次郎「まあ・・・整備員は休みが無いからな・・・」

次郎が整備員は休みが無いからなと嫌味を言うが

薫「でも、そのお陰でなのはちゃんやフェイトちゃんは、無事に飛行できるんだよ!・・・感謝しないと!」

薫は、逆に機体が無事に飛行できる事に感謝する。

珊瑚「質問しても良いですか?」

そんな中、珊瑚が文雄に質問をする。

文雄「何だね?」

珊瑚「この航空機の他に違うものも有るんですか?」

珊瑚は、整備している春乱の他にも航空機が有るのかと問う。

文雄「勿論だ！・・・ほら、あそこに有る双発機や向こうの回転翼機がそうだ!!」

それに対して、文雄はYESと答え、隣に置いてあるE-2GやUH-1Gを指す。

珊瑚「見ても良いですか？」

珊瑚は、それらの中を見ようと文雄に許可を申し出る。

文雄「ああ良いとも！・・・君達も自由に見ても良いぞ！」

文雄は許可し、他の生徒達にも自由に機体を見るのを許可する。

珊瑚は、UH-1Gの中に入り、機体の機器などを見る。

他の生徒達も機体を見て回ったり、整備員の話聞く。

機体の機器などを見て、珊瑚は

珊瑚「機器とか見たけど・・・凄いな、これ！・・・ブルーマーメイドが使っている

飛行船とは全然違う。」

直ぐにブルーマーメイドの飛行船とは違う事に気づく。

文雄「よく気づいたな！・・・その通りだ！・・・この機体は、君達が知っている飛行船とは、性能も全然違う・・・飛行船は、速度などでは、こいつには、到底及ばない・・・更に救助作業でも十分に性能を発揮できる。」

文雄は、珊瑚にUH-1Gの性能を説明する。

珊瑚「成程！・・・確かに、これならあり得るね！」

珊瑚は、納得する。

文雄「君は確か、明石の艦長だったね？」

珊瑚「そうですが・・・」

文雄「あの艦は、工作艦としては良い艦だ・・・工作用の機械や補給用の部品が全て揃っている・・・あれ程の艦は、うちの艦以外は見た事がない！」

珊瑚「お褒めの言葉ありがとうございます・・・」

2人は、気が会う様だ。

薫「はい、皆さん！そろそろ行きますよ!!」

ある程度、見せたところで、薫は、生徒達を集合させる。

そして、艦載機用エレベーターで上に上がる。

上がる時、偶々整備された春乱1機も共に上がる。

空母大鳳、飛行甲板

飛行甲板に上がると、甲板では、発進する艦載機に弾薬や燃料を搭載する作業が行われていた。

光「うわあゝ!?!」

美千留「あれ噴進弾かな?・・・3人で持ち上げてるし・・・」

順子「あつちは機関砲だよ！」

彼らの作業を見て、興味を抱く3人。

薫「さあ、皆さん！・・・此処から艦橋まで行きますので、私に付いて来てください

!!」

生徒達は、艦載機を避けながら艦橋を目指し、階段を上がり

空母大鳳、艦橋

薫「此処が我が艦の司令塔となる艦橋になります。」

艦橋へと着く。

艦橋では、龍之介以外の乗員が通常の勤務をしていた。

はやて「薫先輩!!」

薫「はやてちゃん！異常ない？」

はやて「今のところおまへん・・・もう直ぐなのはちゃんとフェイトちゃんが哨戒任

務に出発します!!」

今のところ以上はなく、間もなく、なのはとフェイトが哨戒任務に出発すると薫に報

告し

薫「そう」

はやて「ようこそ皆さん！・・・久しぶり知名さん！」

艦橋に來た生徒達を歓迎し

もえか「お久しぶりです八神教官！」

もえかと再会する。

美奈「やつほ！知床さん!!」

鈴「よ、四葉さん!?!」

鈴も航海長の美奈と再会し

美奈「舵持つて見る？」

鈴「うえ……!?!」

いきなり操舵を握らせようとし、鈴は困惑する。

美奈「冗談よ！」

今のは冗談だった。

流石に生徒に本艦の操舵は任せきれない。

生徒達は、それぞれ艦橋を見学する。

鈴達航海科は、最新式の操舵装置を見る。

嶋と慧は、通信機とレーダー機器を見る。

明乃「教官は、何時も此処で指揮を取るんですか？」

薫「そうだよ……私は此処で艦長として、艦の指揮を取っているの……勿論、そ

れだけじゃないわよ!・・・他にもいろんな事を此処で行っているの!」

ましろ「そんなに!?・・・私が想像していた艦長とは全然違う?」

薫から話を聞いて、ましろは、自分が想像していた艦長とは全然違うと思った。

薫「あんま代わらないよ・・・ましろちゃんは、あんまり考え過ぎだよ!」

それに対して、薫は、変わらないと言って、ましろに考え過ぎだと主張する。

ましろ「私を馬鹿にしてるんですか?・・・私は、真面目に艦長について、勉強しているんです!!」

だが、それを聞いたましろは、自分が馬鹿にされていると思い、逆切れする。

薫「うう・・・あつ!?・・・窓の外を見て、もう直ぐ発進するわよ!」

逆切れするましろをかわそうと、もう直ぐ発進する哨戒隊に目を向けさせる。

ましろと明乃は、窓から発進するのは機とフェイト機を見る。

そして、もえかも見る。

機体は、カタパルトに据え付けられ、アフタバナーが火を吐き

薫「哨戒隊発進!」

薫の号令のもと、2機は発艦する。

ましろ「おお・・・!?!」

明乃「す、凄い!?!」

発艦した春乱を見て、明乃とましろは、雅に一番凄い場面を見たと思うが
もえか「ん・・・」

もえかは、またしても難しい顔をしていた。

龍之介「生徒諸群！・・・特別研修は順調に進んでいるかな？」

そんな時、龍之介と功、美由紀、古庄の4人が艦橋にやってきた。

薫「あつ兄さん、じゃなかつた准将！」

薫と次郎達は、直ぐに敬礼するが

龍之介「そのままが良い・・・で、どうだ・・・始めて我が艦に乗った感想は？」

龍之介は、そのままが良いと言つて、生徒達に艦に乗った感想を聞く。

ましろ「凄いです!!」

明乃「流石は、Gフォースが誇る旗艦ですね！・・・ブルマとは違うけど・・・活気

が有つて良いですね！」

ミーナ「すごいいな、この艦の装備している航空機！・・・こんな装備我が国にはないぞ!!」

始めて空母大鳳に乗艦して、初めて航空機を見て、生徒達は驚愕していた。

龍之介「当然だな・・・飛行技術が発達していない世界では当たり前・・・だが、こ

れらが配備されれば、ブルーマーメイドが画的的に代わるだろう。」

驚愕する生徒に対して、龍之介は、航空機が配備されればブルーマーメイドが画期的に代わるだろうと主張する。

龍之介「君は、どう思う？」

そんな中、龍之介はもえかにも感想を聞く。

もえか「ん・・・山本准将！一つ質問しても良いですか？」

それに対して、もえかは、龍之介に質問をする。

龍之介「何だ？」

もえか「さつき見た航空機がブルーマーメイドに配備されれば、具体的には何が変わりますか？」

もえかは、航空機がブルーマーメイドに配備されれば、何が変わるのか問う。

龍之介「そうだな・・・変わると言う・・・ブルーマーメイドから戦艦や飛行船が無くなり、最も早い航空機が主力となるだろう。」

それに対して、龍之介は、戦艦や飛行船が無くなり、最も早い航空機が主力となるだろうと主張する。

まして「戦艦が無くなる。」

夏美「じゃ、私達の武蔵や比叡も無くなるんですか？」

龍之介「その通りだ。」

親子「そんな・・・」

戦艦が無くなると聞いて、武蔵や比叡クラスの生徒達は、自分の艦が無くなると聞いて困惑する。

龍之介「そんなにガツカリするな！・・・いづれは、そう成ってしまうんだ・・・だけど、航空機が発達すれば、今まで時間が掛かる場所まで、あつという間に行ける様になる・・・決して、ガツカリする事じゃない！」

困惑する生徒達に龍之介は、戦艦の廃棄は、いづれ来る事だと言って、航空機が発達すれば、今まで時間が掛かる場所まで、あつという間に行けるのだと言う。

親子「でも、武蔵が無くなるのは納得できません・・・武蔵は、私達の憧れであり、大事な艦です・・・そう簡単に失う事はできません!!」

だが、生徒達は戦艦の廃棄に納得できなかった。

特に武蔵クラスの生徒達は、自分達の艦が無くなる事に反感を持っていた。

まあ、武蔵が無くなる事は、武蔵への憧れが消えるのと同じ事、そう簡単には捨てる事が出来ないだろう。

そんな生徒達に薫が

薫「確かに武蔵や比叡を失う事はとても辛い事だけど・・・でも、貴方達は、何時までも同じ場所に入られない・・・貴方達はいづれ卒業すれば武蔵から出なければいけない

くなる・・・その事は分かっているでしょう。」

自分達が何時までも武蔵に乗っている訳でもない、貴方達はいづれ卒業すれば武蔵から出なければいけなくなると現実を付き付ける。

『ん・・・』

でも、それでもまだ不満を持っていた。

薫「それに今無くなる訳でも無いんだし、まだ先の事なんだから・・・卒業までに自分の艦を可愛がれば良い事じゃない!!・・・まあ、私は、そう考えているけど・・・」
だが、薫は、そんな生徒に今無くなる訳でも無いんだし、まだ先の事なんだから、卒業までに艦を可愛がれば良い事じゃないと自分の考えを主張する。

もえか「・・・そうですね・・・山本中佐の言う通りだよ!」

薫の考えにもえかが賛同する。

夏美「艦長?」

もえか「私達だって、卒業すれば武蔵を出なければならぬ・・・皆と違って、進路が違うからバラバラになる・・・それは仕方がない・・・だから、私達は、卒業までの3年間を大事に過ごすべきだよ!」

もえかも卒業すれば武蔵を出なければならぬ事は分かっていた。

卒業までの3年間を大事に過ごすべきだと告げる。

親子「そうですね・・・私達も卒業すればブルマーに成りますし、一緒に居る訳でもありません・・・艦長の言う通り、卒業までの3年間を大事に過ごすべきですね。」

もえかの言葉に親子や武蔵クラスの生徒は納得し、卒業までの3年間を大事に過ごす事にした。

美由紀「ん・・・」

生徒を納得させたもえかの行動を見て、美由紀はある事を考えていた。

美由紀（知名もえか・・・不満を持つ生徒達をあつという間に鎮めるとは・・・昨日の演習と言い、彼女の能力には驚かされるわ・・・いづれブルマーメイドになれば我々の脅威に成るかも知れないわね！）

美由紀は、もえかの能力に驚かされ、いづれ自分達の脅威に成ると考えていた。

そんな時

美甘『みなさくん、歓迎会の準備が出来ました・・・』

炊飯所兼食堂室に居た美甘から歓迎会の用意が出来たと連絡が入る。

薫「さて、皆さん！・・・食堂に戻りましょう!!」

薫は、生徒達と共に食堂へと戻る。

龍之介達や古庄も一緒に行く。

空母大鳳、炊飯所兼食堂室

麻命「おう待ってたでえい!!」

炊飯所兼食堂室に戻ると、既に機関室に居た麻命や夏雄達が来ていた。

生徒達と隊員達は、それぞれテーブルに着き、グラスを持ち

薫「では皆さん!・・・乾杯!」

『乾杯!!』

『ヨーソロー!!』

薫の号令のもと、乾杯する。

乾杯後は、それぞれで会話をしたりする。

龍之介「それにしても、貴方の生徒はとても優秀だな古庄教官!」

生徒達を見て、龍之介は優秀だと告げる。

古庄「ありがとうございます・・・貴方の部下も優秀ですね・・・特に貴方の妹さんは!」

それに対して、古庄も同じ言葉を返し、特に薫の事を褒めていた。

美由紀「当然よ!・・・私の元生徒何だから!!」

薫の褒めに美由紀が元生徒何だからと言って自慢をし、薫と明乃、ましろ、もえかを見る。

特別研修後の次の日には、GF艦に搭載されているハーブーンやシースパローなどの

兵器のテストを開始した。

高千穂、艦橋

美由紀「ハーブーン発射用意！」

高千穂、C I C

G F 隊員「目標捕捉！発射用意よし！」

高千穂、艦橋

美由紀「ハーブーン発射始め！！」

高千穂、C I C

春美「よーい・・・って！！」

高千穂よりハーブーンが発射された。

高千穂のレーダー主「ハーブーン発射成功！・・・ミサイルは順調に飛行中！」

やがて、数分後

高千穂のレーダー主「目標に命中！！」

標的である岩礁に命中した。

続いて、シースパローの発射テスト。

せんだいから無人標的機が発進。

すくね、C I C

すくねのレーダー主「無人標的機を確認！」

すくね、艦橋

五月「シースパロー発射用意！」

すくね、CIC

GF隊員「目標捕捉！発射用意よし！」

すくね、艦橋

五月「シースパロー発射始め!!」

すくね、CIC

GF隊員「よいい・・・って!!」

すくねから無人標的機に向かって、シースパローが発射された。

すくねのレーダー主「シースパロー発射確認・・・目標迎撃まで4分」

数分後

すくねのレーダー主「目標を撃墜!!」

シースパローは無人標的機に命中した。

それから数回の兵器テストを繰り返し

全て成功した。

空母大鳳、艦橋

実「各兵器、テスト終了」

薫「全て成功です・・・性能的には申し分もありません。」

この世界で製造された兵器の性能は、雅に申し分も無いと言う結果が出た。

こうして、演習もテストも終了し、両艦隊は帰路に着く。

横須賀に帰投した後、深町に兵器テストの報告書を提出する。

その後、兵器の生産が政府から認められた。

その頃、とある演習海域では

舞鶴女子海洋学校所属、超大型直接教育艦信濃

燕「そう言えばあず社長、聞きましたか？」

亜澄「何が？」

燕「ブルーマーメイドやホワイトドルフィンに並んで新たな部隊が新設されたそうですよ。」

亜澄「ほう・・・新部隊とは珍しいね！」

燕「何でも、元々はブルーマーメイドだったのが、独立したらいいですから・・・」

亜澄「独立!?!・・・てっことは、余程の実力が有る部隊何だろうね・・・一度勝負し

て見たいわね！」

燕「あず社長！そんな事よりも今年の競闘遊戯会の事が有るでしょう!!」

亜澄「競闘遊戯会と言えば・・・武蔵は出てくるかな？」

燕「多分、出ると思いますよ・・・横須賀で開催される予定みたいですから・・・」

亜澄「なら、武蔵の艦長や宗谷家の三女とも会えるんだな・・・よし！そうと決まれば明日からは不眠不休の猛特訓ね!・・・武蔵の子達に恥ずかしいところは見せてもらえないもの！」

燕「あず社長！無茶は止めて下さい!!」

「佐世保女子海洋学校所属、超大型直接教育艦紀伊

沙千帆「新部隊か・・・ワクワクするな啓子さん！」

啓子「私は千葉さんが競闘遊戯会で活躍するのを見たいです。」

呉女子海洋学校所属、超大型直接教育艦大和

十海「競闘遊戯会・・・武蔵の艦長にも会えるわね！」

進愛「そやねみやさん・・・あの宗谷家の三女も会えるかも知れませんし・・・噂の航洋艦の生徒にも会えるかもやねん！」

横須賀以外の3校の生徒達は、9月の競闘遊戯会を楽しみに訓練を続けていた。

第8章 婿養子と同居 前編

7月15日

合同演習から14日後、学校の期末考査が終わり、生徒達は夏休みに待って
いた。

だが中には

麗緒「ああ・・・結局補修になっちゃったよ！」

留奈「折角の夏休みが!!」

桜良「補修じゃ仕方ないよ！」

空「今回は、赤点が多かったしね！」

中間と期末考査で赤点を取り、夏休みの半分が補習となった為、落ち込む者もいた。

一方のGフォースの方は、相変わらずのゴジラの哨戒を続けていた。

それ以外では

美由紀「ようこそ我が再教育訓練教室へ・・・私は、貴方達の指導教官を行う権藤美
由紀大佐です・・・貴方達は、ブルーマーメイド及びホワイトドルフィンから再教育訓
練が必要だと言われ、この再教育訓練教室へと送られてきました・・・今日から3週間、

私は貴方達をぎっちり教育しますので覚悟しなさい!!」

大佐に昇進した美由紀がブルーマーメイドとホワイトドルフィンから戦力外だと見なされた隊員達の再教育訓練を行っていた。

再教育訓練を受ける隊員達は、いやいやな表情で受ける。

そんな中、ある出来事が起き様としていた。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

真霜「えっ、龍之介を婿養子に!?!」

この日、横須賀ブルーマーメイド庁舎に居た真霜の元に真雪からある相談が来た。

横須賀女子海洋学校、校長室

真雪「そう・・・龍之介さんを家の婿養子に迎えようと思つて!」

それは、龍之介を宗谷家の婿養子として、迎える話だった。

龍之介は、既に真霜とは肌を合わせ、何れは一緒になるだろうと職場などで噂になっている。

なら、いつそ宗谷家の婿養子に向かい入れようと真雪は画策する。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

真霜「良いわね・・・龍之介の事だから、多分喜んで引き受けると思うわ!」

それに真霜も同意する。

一方、龍之介本人は

横須賀女子海洋学校、Gフォース総司令室

龍之介「哨戒任務ですか？」

総司令の深町から、ある任務を言い渡されていた。

深町「そうだ・・・今回、政府が我々に命じたのは、通常の哨戒任務だ。」

龍之介に言い渡された任務は、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンが行っている通常の哨戒任務だった。

龍之介「そんな任務、我々Gフォースのやるべき任務じゃないでしょう!!」

それを聞いた龍之介は、我々Gフォースのやるべき任務じゃないと呆れるが

深町「確かに通常の哨戒任務など我々がするべき任務ではない事は、分かっている・・・だが、我々に逆らう事は出来ない・・・今の政府には、資金援助をしてくれた恩が有るからな！」

我々に逆らう事は出来ないと深町は、龍之介を説得する。

新起動したGフォースは、早くも資金問題を抱えていた。

部隊の創設や運用などで資金が不足していた。

だが、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンと並んで政府に組み込まれる事になり、資金も政府が面倒を見る事で資金問題は解決した。

しかし、その一方で、政府の命令には逆らえなくなり、嫌な任務を引き受ける事になる。

龍之介「はあ……仕方ありません……分かりました。」

龍之介も結局引き受ける事にした。

そして、もう一つ

横須賀女子海洋学校、広場

次郎「えつ、家を出る!」

薫「ん……私、宗谷家を出て、次郎君と一緒に暮らそうと思つて!」

何と薫が今下宿している宗谷家から次郎の部屋に移ると言い出した。

次郎「良いのか、勝手に一緒に暮らしたら准将が怒るんじゃない?」

次郎の言う通り、勝手に一緒に暮らしたら龍之介が激怒するんじゃないのかと言うが

薫「兄さんの事は、私が説得するから大丈夫!……それに私と次郎君は、もう離れられない関係なんだから!」

薫は、龍之介を説得すると告げる。

確かに薫と次郎は、既に肌を合わせる中までの関係になつている。

龍之介も薫の事は、次郎に任せているのだから大丈夫だろう。

次郎「そ、そうか……そうだよな……じゃ、俺……待つてるよ……お前が来

るのを……」

次郎は、薫の言葉信じ、待っていると告げる。

薫「あつ、そうだ！」

薫は、ある事に気づき、下に有った物を取る。

次郎「ん？」

次郎は、何かと思つたが

薫「一緒に住むなら、この子も一緒に！」

五十六「ぬう！」

それは、五十六だった。

薫は、同居するなら野放しされている五十六も連れて行きたいと次郎に頼む。

次郎「そ、その猫も……で、でも寮では、ペットを飼つちや駄目じゃないのか？」

次郎の言う通り、寮ではペットは禁止であり、特に五十六は、猫だから駄目であった。

薫「取り合えず寮母さんと相談するわ……如何なるか分らないけど……」

画して、龍之介の婿養子と薫が次郎との同居の2つの件が進行する。

宗谷家、龍之介の部屋

その夜、薫は、龍之介に次郎との同居の件を話した。

龍之介「何!?!次郎と一緒に暮らす?」

次郎との同居の件を聞いて、驚愕する。

薫「そう・・駄目かな？」

薫は駄目かと思つたが

龍之介「駄目じゃないけど・・急に言われたらビックリするだろ！」

薫「じゃ？」

龍之介「ああ、次郎なら別にお前達と一緒に住まわしても大丈夫だろ。」

龍之介は、あつさり許した。

薫「ありがとう兄さん!!」

龍之介の言葉に薫は、大いに喜んだ。

そんな時

トン！トン！

突然、誰かが訪ねてきた。

『ん？』

真霜「龍之介居る？」

それは真霜だった。

龍之介「真霜か、如何した？」

龍之介は、何かと思つた。

真霜 「大事な話があるからリビングまで来て頂戴！」

如何やら何か大事な相談事の様だ。

龍之介 「今行く!!」

龍之介は、今行くと言つて、部屋を出る。

薫 「ああ、私も行く!!」

薫も着いて行く。

宗谷家、リビング

真霜に呼ばれて、リビングまで来た。

リビングに着くと、何故か真霜の他に母の真雪や妹の真冬やましろまで居た。

龍之介 「皆揃つて、如何したんだ？」

一家全員が揃うとは、何が有つたのか、2人は反対側に座る。

真雪 「実は貴方に、おり言つて話が有るの」

龍之介 「何ですか？」

真雪 「龍之介さん！貴方を・・・うちの婿養子に向かい入れたいの！」

真雪は、2人に婿養子の件を話す。

『えっ?!』

それを聞いた龍之介と薫、そして、婿養子の件を知らなかつた真冬やましろも驚愕す

る。

龍之介「む、婿養子!? 如何いう事だよ真雪さん?」

真冬「そ、そうだよ!? 如何いう事だよ母さん?」

如何言う事なのか理由を問う。

真雪「だって貴方、真霜と付き合っているんでしょ……でも、それだと貴方には、それなりの家柄が必要になるわ……其処で真霜と相談して、龍之介さんには、正式に我が家の婿養子になってもらう事にしたの……今後続ける為にも!」

真雪は、4人に理由を告げる。

ましろ「つまり龍之介さんが、うちの当主になるって事?」

真霜「そうよましろ! ……因みに龍之介は、貴方の義理のお兄さんで、薫は、貴方のお姉さんになるのよ!」

ましろ「あっ……」

真霜の言葉を聞いて、ましろは薫を見る。

自分を見るましろに薫は笑顔を返す。

真冬「そう言う事なら、あたしも大賛成だ!! 龍之介なら真霜姉の嫁にピッタリだしな!」

真冬も龍之介の婿養子に賛成する。

真雪「後は、貴方の答え次第だけど・・・どお？」

後は、龍之介の答え次第。

2人は、当然賛同すると思つた。

だが

龍之介「ん・・・有りがたい申し出ですが・・・お断りします。」

龍之介は、家柄を継げないと断る。

真霜「えっ?!如何して？」

龍之介の判断に驚き、断る理由を問う。

龍之介「俺は、任務とは言え、薫やましろ達を危険な目に遭わせた・・・そんな俺に

宗谷の名は継げられません。」

龍之介は、この前のRATa事件で薫やましろ達を危険な目に遭わせた。

その事を根に持っているせいか、婿養子の件を受ける事が出来なかった。

真霜「あれは、貴方だけのせいじゃない!!・・・私や母だって、あの時頼んで、事件に巻き込んだ責任が有るわ!」

薫「そうだよ兄さん!・・・それに私やましろちゃんも無事だったし、それで良かったじゃないの!」

だが、その事に対して、真霜は、自分や真雪にも責任が有ると言い、薫も気にしてい

なかった

龍之介「だが、俺的には、また同じ事をするかも知れない・・・そんな自分を許せないでいる・・・残念だが、とても受ける気にはならない。」

しかし、それでも龍之介は、受ける気にならない。

そんな龍之介を見て

真霜「じゃ、私との関係も終わりなのね?・・・折角、好きに馴れて、一緒になったのに!」

真霜は、自分との恋人関係は終わりなのねと問う。

龍之介「いや、それは・・・」

それに対して、龍之介は弁解できず

真霜「弁解もできないなんて、結局貴方も遊びで付き合っていただけだったのね!」
弁解が出来ない龍之介に真霜は、今まで付き合っていたのは遊びだったと誤認する。

龍之介「それは違う!お前との関係は、決して遊び何かじゃ!」

それに対して、龍之介は違うと言うが

真霜「もう良いわ!貴方何か嫌いよ!!・・・もう顔も見たくないわ!!」

龍之介「ま、待てくれ真霜!!」

真雪「真霜!」

真霜は、龍之介の言葉を聞かずに行ってしまった。

龍之介「ん・・・」

真霜に弁解出来なかつたせい、龍之介は顔を暗くする。

更に

真冬「真霜姉を泣かせやがって・・・見そこなつたぞ龍之介!!」

真冬からも見そこなつたと言われ

薫「如何するの兄さん!・・・真霜姉さんを泣かせて・・・これで終わりにするの?」

薫からもこれで終わりにするのかと問われる。

真雪「2人とも止めなさい!・・・私が悪いの・・・私が龍之介さんの気持ちも知ら

ずに婿養子の事を進めたからいけないかつたの・・・御免なさい龍之介さん!」

龍之介を叱る2人に対し、真雪が自分が悪いと言つて、龍之介に謝罪する。

龍之介「いや、2人の言う通りだよ・・・俺が悪かたんだ・・・俺が言えなかつたから・・・

しばらく考えさせて下さい。」

謝罪する真雪に龍之介は、2人の言う通り、自分が弁解できなかつた事を悔やみ、し

ばらく考えさせて下さいと言つて、自分の部屋へと戻つて行つた。

宗谷家、真霜の部屋

この夜、真霜の部屋から、真霜の鳴き声が響いていた。

真霜「うう・・・うう・・・龍之介の馬鹿!!・・・龍之介の馬鹿!!・・・うう・・・」
さつきの事で相当シヨックを受けた真霜は、朝まで泣き続けた。

しかし、その泣き声を部屋のドアの前で聞く者が居た。

龍之介「・・・」

それは、龍之介であつた。

さつきの事を真霜に謝りに来たが、真霜の部屋に来た途端、真霜の鳴き声が聞こえて来て、つい何も言えなくなり、唯立つたまま真霜の鳴き声を聞くしかなかつた。

画して、龍之介と真霜の関係は崩れてしまうのか

第9章 婿養子と同居 後編

7月18日

横須賀ブルーマーメイド庁舎、廊下

B P F 隊員「ねえねえ、聞いた?・・・私の後輩が今度結婚するそうよ!」

B P F 隊員「えっ嘘、本当?」

B P F 隊員「本当よ!・・・ああ、私も早く結婚したいな」

休憩時間にB P F 隊員達が恋愛相談をしていた。

その時

真霜「随分と楽しそうね!」

『うえ?!』

後ろに真霜が立っていた。

B P F 隊員「む、宗谷監督官!」

隊員達は、驚き

真霜「何を話してたの?」

真霜は、何を話していたのか問う。

BPF隊員「いえ、その・・・私の後輩が結婚する話をしていたんです。」

隊員達は、恋愛相談をしていたと真霜に言う。

真霜「!？」

それを聞いた途端、真霜は、反応し

BPF隊員「す、すいません！私たら、この場でしちやいけない話を・・・」

それを見た隊員達は、慌てて謝罪する。

真霜「い、良いのよ！・・・気にしてないから・・・」

真霜は、笑顔で、そう言いながら行ってしまふ。

BPF隊員「宗谷監督官、可愛そう・・・」

BPF隊員「やっぱり山本准将と別れた事を今だに根に持っているのかな？」

隊員達は、真霜の笑顔の裏では、落ち込んでいるんだと気づいており、同時に心配していた。

横須賀女子海洋学校、軍港エリア

一方、当の龍之介の方は、軍港エリアの栈橋で一人海を眺めていた。

龍之介「はあ・・・俺は何をやっているんだ！」

龍之介も真霜同様、溜めい気しながら自分が何をやっているんだと悔やんでいた。

横須賀女子海洋学校、食堂

その頃、薫は、次郎達と共に生徒達の中で昼食を食べていた。

はやて「ほんで、宗谷監督官と准将は、まだ喧嘩してんの？」

薫「うん．．．あれから、全然口を聞かなくて．．．しかも顔を合わせるたびに暗くなる一方だし．．．私如何したら良いか．．．」

薫が言うには、あれから2人は全然口を聞かず、しかも顔を合わせるたびに暗くなる一方だった。

なのは「薫先輩も大変だね．．．でも、何で准将は、宗谷家を継がなかったんだろう？」

フエイト「よっぽど、この前の事件の事を根に持っているのかな？」

やはり龍之介は、この前のRATa事件の事を根に持っているのだとなのはとフエイトは、そう思ったが

次郎「それは、違うと思うな！」

『えっ?』

次郎の方は、違うと言う。

次郎「単に事件の事だけじゃなく、むしろ宗谷家を継ぐのにプレシアを感じているんじゃないか．．．なんせ宗谷家は、名門の家柄だからな．．．それをいきなり継がないかと言われたら、本人だって戸惑し、プレシアだって感じる．．．俺も昔はそうだった。」

次郎は、龍之介が単にRATa事件の事だけじゃなく、むしろ宗谷家を継ぐのにプレシアを感じているんじゃないかと思ひ、かつて自分もそうだったと言う。

なのは「そうか、次郎君は、財閥の出身だよね？」

次郎「ああ、泣く子も黙る小沢家の三男だよ！……まあ、俺の方は、嫌気がさして家を飛び出したがな！」

次郎も、かつては、名門小沢家の3男として生まれ、後継ぎに指名されたが、本人は、それに嫌気がさし、家を飛び出した。

次郎「兎に角、この事は2人が自ら解決するから大丈夫だよ薫！」

取り合えず、この問題は、2人が自分から解決すると薫に言つて、励ます。

薫「ん……ありがとう。」

薫は、元氣を取り戻す。

横須賀女子海洋学校、職員室

古庄「そう……山本准将と宗谷監督官の絶縁は、まだ続いているのね。」

功「ええ、宗谷監督官と別れた事で、かなり落ち込んでいますよ……私にも話そうとせず、1人で自分を責めています。」

古庄「仕方がないわ……2人の事は、2人が自ら解決するのを待つしかないわ。」

功「そうですね。」

此方も同じ様に2人が自分から解決するのを待つしかなかった。
横須賀女子海洋学校、運動場

『はあ・・・はあ・・・』

美由紀「あと10週残ってるわよ！ダラダラしない!!」

運動場では、美由紀が落ちこぼれのブルーマーメイドとホワイトドルフィンの隊員達を訓練していた。

両隊員達は、重いリュックを担ぎながら運動場を50周走らされる。

そんな指導中に

龍之介「・・・」

龍之介が現れ、訓練中の彼らを見る。

美由紀「あら准将!?何か御用ですか?」

美由紀が龍之介に気づき、声を掛ける。

龍之介「いや、何でもない!」

それに対して、龍之介は、別に要はなく、直ぐに去ろうとしたが

美由紀「待ってください!」

美由紀が待ったを告げ、龍之介は足を止める。

美由紀「宗谷監督官の事は聞いています・・・貴方が宗谷家を継がない理由も!」

美由紀も龍之介と真霜が別れた事を知っていた。

宗谷家を継がない理由も

美由紀「ですが、貴方は宗谷家を継ぐ資格はあります……これは他の人に譲れませんが……逃げないで下さい。」

そして、美由紀は、龍之介に宗谷家を継ぐ資格があると、逃げると告げる。

龍之介「分かってるよ……だけど、俺は……」

しかし、龍之介もその事は分かっているが、やはり無理だと思いきってしまった。

龍之介が去った後、美由紀は

美由紀（私は何を言っているのかしら……宗谷監督官と別れている今、准将を奪えるのに……）

恋敵である真霜と別れている今、龍之介を自分の物にできるのに、美由紀は、奪おうとせず、それどころか真霜との仲直りの手助けをしてしまった。

何故そんな事をしたのか、自分の行動に疑問を持ちながら指導を続ける美由紀。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、食堂

一方、真霜は、真冬と一緒に食事を取っていた。

序に平賀や福内も共に食事をする。

真霜「はあ……」

しかし、真霜は溜息ばかりし、食事に手を付けてもいない。

真冬「大丈夫かよ真霜姉？」

そんな真霜を心配する真冬。

真霜「大丈夫よ真冬！・・・ちよつと気分がすぐれないだけだから・・・」

それに対して、真霜は大丈夫だと言う。

だが、真冬は、大丈夫だとは思えず、他の2人も心配する。

そして、真冬は、思い切って

真冬「あのさ真霜姉！」

真霜「何真冬？」

真冬「あたしが家を継ぐから、真霜姉は・・・龍之介と仲直りしろよ!!」

自分が宗谷家を継ぐから真霜は、龍之介と仲直りしろと告げる。

真霜「き、急に何言うのよ!？」

いきなり真冬が宗谷を継ぐと聞いて、驚く真霜。

真冬「だって、あたしも宗谷家の1人だから、あたしが継げば真霜姉は、自由になるだろう・・・それなら龍之介とだって・・・」

真冬は、自分が犠牲になり、姉である真霜を自由にさせようとしたが

真霜「それは駄目!・・・宗谷家は、長女である私が継がなければならないの・・・こ

れは誰にも譲れない！」

真冬「でも！」

真霜「何でも言わせないで、私が継ぐから良いの!!」

真霜は、あくまで宗谷家は長女である自分が継ぐと言つて、譲らなかつた。

真霜「それに龍之介の事は、もう終わった事だから、もう関係ないでしょう！」

更に龍之介の事は、自分にはもう関係ないと言う。

真冬「真霜姉……」

真霜「やっぱり気分がすぐれないから先に戻るわね。」

結局、食事に手を付けずに部署へと戻つてしまう。

真冬「ん……」

真霜が去つた後、真冬は、何とかしなければならぬと思ひ。

平賀「真冬姐さん!？」

真冬は、席を立ち

真冬「いくぞ2人共！」

龍之介の元へと向かう。

横須賀女子海洋学校、廊下

その頃、龍之介は、生徒がいない廊下で、ある事を考えていた。

龍之介（はあ・・・俺は、何をやっているんだ・・・あいつとの事は何とかしなきゃいけないのは分かっている・・・だが・・・）

龍之介も真霜の事は、何とかしなければいけないと思っていたが、如何言えば良いのか分らないでいた。

そんな時

「見つけたぞ龍之介!!」

龍之介「!？」

自分を呼ぶ声を聞き、前を向くと

龍之介「真冬？」

それは真冬で、しかも平賀と福内まで居た。

真冬「龍之介！」

真冬は、龍之介に近寄る。

龍之介「な、何だよ？」

龍之介は、何かと思つたが

次の瞬間

真冬「お願いだ！宗谷家を継いでくれ!!」

真冬は、宗谷家を継いでくれと龍之介に頭を下げてくださいする。

龍之介「い、いきなり何のマネだ!？」

いきなり頭を下げる真冬の行動に驚愕する龍之介。

平賀「真冬姐さん何を!？」

平賀や福内も驚愕し

横女の生徒「な、何？」

横女の生徒「何なの？」

真冬の大声に校内の生徒達が気づき、3人の前に集まり始める。

龍之介「お、おい真冬！」

頭を下げる真冬を龍之介は止めさせようとするが

真冬「お前が継いでくれないと真霜姉が、真霜姉が……頼む、一生のお願いだと思つて、宗谷家を継いでくれ!!」

真冬は止めず、真霜の為に宗谷家を継いでくれと龍之介の足を握りせがむ。

それを集まった生徒達が驚いた顔で見る。

また

薫「真冬!？」

ましろ「真冬姉さん何を!？」

ましろと明乃、薫、次郎も、その場を目撃する。

龍之介「止めろ真冬！皆見てるだろう!!」

生徒の前だったせいか、龍之介は戸惑う。

真雪「何をしているの真冬！」

生徒の集まりに気づいたせいか、今度は、校長の真雪が現れた。

真冬「母さん!・・・母さんからも言ってくれ!!・・・龍之介に宗谷家を継いでくれ
て・・・」

真冬は、母の真雪にも助力をお願いするが

真雪「いい加減にしなさい真冬!!・・・生徒の目の前ではしたない!・・・それに、そんな事を無理に龍之介さんに押し付けるんじゃないやありません!!」

余りの真冬の勝手な行動に真雪は、止めるよう真冬を叱る。

真冬「でも母さん!!」

しかし、叱られても真冬は止めず、それに激怒した真雪は、無理やりにも止めさせようとする。

その時

「はい、其処まで!」

それに待ったを掛ける者が現れた。

『!?!』

龍之介「総司令!?!」

それは、Gフオース総司令の深町だった。

深町「何をしてるんだ?・・・生徒の目の前で見ともないぞ!!」

深町は、3人が生徒の前で揉めているのを見ていた。

そして、揉め事を止め様と間に入る。

深町「宗谷校長!・・・此処は私に任せて貰えませんか?」

真雪「あっ・・・」

深町が間に入り、真雪は怒るのを止め

薫「さあ、手を放しましょう真冬」

真冬も薫に言われて、龍之介の足から手を外す。

深町「ほら見世物じゃないぞ!さっさと教室に戻らんか!」

深町に言われ、生徒達は、教室に戻る。

深町「ちよつと来た前!」

生徒達を追い払った後、深町は、龍之介を連れて行く。

横須賀女子海洋学校、Gフオース総司令室

深町は、龍之介を総司令室に連れて行き

深町「さて、話を聞こうか?」

事情を聞く。

龍之介「総司令！……俺は、もう分からなくなつてしまいました。」

深町「……」

龍之介「真霜とは仲直りできず、宗谷家の事も継ぐかどうかとも判断できない……このままでは、俺は……」

龍之介は、深町に事情を話す。

深町「君の気持は、よく分かる……しかし、君は宗谷家を継ぐべきだ！……皆だつて、そう思っているじゃないのか？」

話を聞いた深町は、龍之介に宗谷家を継ぐべきだと告げる。

だが、当の龍之介は

龍之介「確かに皆そう思っています……俺は、そんな宗谷家を継げる人間ではありません……それに継げたとしても、重みに耐えられるかどうか……もしかしたら奴みたいになつたら……俺は、あいつを……」

自分は、宗谷家を継げる人間ではない。

例え告げたとしても、宗谷家の重みに耐えられるかどうか分からない。

もしかしたら、前の許婚の邦夫の様に成つたら、自分は真霜を裏切るかも知れないと恐れていた。

その為、龍之介は、宗谷家を継げなかった。

深町「それは如何かな？：君は邦夫君とは違い、真霜君を決して弄んだりしない：：また、人の命の重さを十分に分かつている：：だから、オバマやRATa事件では、要請も前に独断で救助を敢行した：：それを見たからこそ、宗谷校長は、君を選んだんだ！」

深町の言う通り、龍之介は邦夫と違い、真霜を決して弄んだりしない。

更に両親を早くに亡くしているから、人の命の重さを十分に分かつている

更にオバマでの救助作戦やRATa事件での要請も前に独断で救助を敢行した。

真雪もそれを見たからこそ、龍之介を婿養子に選んだ。

龍之介「あれは皆のお陰で有って、俺には、そんな：：」

深町「いや、君の決断が有ってこそ、あれだけ救助で来たんだ：：いい加減認めろべきだ！」

認めない龍之介を無理やり認めさせる。

龍之介「はい：：」

龍之介は認める。

深町「さて、話は変わるが：：真霜君とは仲直りできるのかね？」

話を変え、真霜と仲直りできるのか問う。

龍之介「それは、無理かもしれませんが。」

それに対して、龍之介は、無理だと告げる。

深町「如何して・・・謝って、自分の気持ちを言えば良いだけではないか？」

何故無理だと言うのか、深町は理由を問う。

龍之介「確かに謝って、自分の気持ちを言えば済みますが・・・あいつは、それだけでは・・・」

龍之介は、真霜に唯謝って、自分の気持ちを言えば済むとは思えないと分かっていた。仲直りするには、もっと別な方法を考えないといけない。

深町「確かに・・・なら、私に良い方法があるのだが！」

龍之介「良い方法？」

深町は、龍之介に真霜との仲直りのできる良い方法を教える。

横須賀女子海洋学校、校外

一方、泣きながら龍之介にお願いをしていた真冬は、薫と次郎に連れられ、校外の廊下の段差に腰を下ろす。

薫「大丈夫真冬？」

平賀「大丈夫ですか真冬姐さん？」

真冬「ああ、わりいな！」

心配かける薫や平賀に真冬は、大丈夫だと言って、落ち着いた表情をし

ましろ「真冬姉さん？」

真冬「シロも御免な、心配かけて・・・明乃にも！」

明乃「いいえ」

更にましろや明乃にも謝罪をする。

次郎「全く何考えているんだお前は？・・・准将の前で、はしたない事やりやがって、

お前は、それでもブルーマーメイドか？」

それはさて置き、次郎は、さっきの事で真冬を叱る。

薫「次郎君だって、人の事言えるの？」

だが、薫から自分も人の事言えないと言われる。

次郎「俺は良いんだよ！」

それに対し、次郎は、自分は良いんだと言い張る。

そんな中

真冬「くそ、龍之介の奴！何で、宗谷家を継いでくれないんだよ！・・・やっぱり真

霜姉とは遊びで！」

真冬は、龍之介が宗谷家を継ぐと言わなかったので激怒していた。

そして、龍之介は、やはり真霜とは遊びで付き合っていたと思ってしまう。

薫「そんな訳……」

それに対して、薫は、違うと言おうとしたら

次郎「それは違うな！」

次郎が真つ先に違うと言い出す。

『ん?』

次郎「俺は、准将を知っているから、よく分かる……あの人は決して、遊びでは付き合わない人だ。」

真冬「じゃ何で、嫌がるんだよ？」

次郎「それはだな……きっとプレシアを抱えているんだよ宗谷家に……准将だつて人間だ!……宗谷家を継ぐつて事は、そのプレシアに耐えなければならぬ……それは、お前にも分かる筈だ!!」

次郎は、さつき薫に言つた事を真冬達にも告げる。

真冬「ん……」

ましろ「確かに！」

明乃「シロちゃん？」

それにましろが反応し

ましろ「小沢さんの言う通り、私もご先祖様や母さんにあやかりたいなと思つて、今まで宗谷家の名に傷を付けない様プレシアに耐えてきましたから、よく分かります。」

次郎の言つてる事を理解する。

ましろも以前は、宗谷家の名にプレシアを抱えていた。

本当なら学年主席を取れたのに、入学試験で簡単なミスをしてしまい、宗谷家の名に傷を付けた。

それを挽回しようと、何とかプレシアに耐えてきた。

だが、明乃や晴風クラスとの出会いで、ましろは変わり、今はもうプレシアなど感じなくなつていた。

次郎「そうだ・・・だから、宗谷家を継ぎたくないんだ准将は・・・もし継げば、プレシアに耐えられなくなり、宗谷監督官に迷惑を及ぼす事になる・・・准将は、そう考えているんだろ！」

次郎は、龍之介が考えている事を殆んど見通し

真冬「あいつは、そんな事まで!？」

次郎「だから、待て!・・・待てば、そのうち何とかなる。」

真冬には待てと、薫に言つた事を言う。

そして

「薫！」

『ん？』

誰かが薫を呼ぶ声がしたので、7人は、上を向く。

薫「兄さん？」

すると、其処に居たのは、龍之介本人だった。

さっきの事を叱りに来たのかと思つたが

龍之介「すまないが・・・今から内火艇を用意してくれ！」

そうではなく、唯内火艇を用意してくれと頼みに来た。

薫「内火艇を今から!?何するの？」

いきなり内火艇を用意してくれと言われ、何するのか問う。

龍之介「良いから今すぐ用意してくれ!!」

だが、龍之介は、理由を言わず、唯用意してくれと言う。

真冬「おい、真霜姉は如何すんだよ!？」

側に居た真冬は激怒し、真霜の事は如何するんだ問うと

龍之介「心配するな!その為にも内火艇が必要なんだ!」

それに対して、龍之介は、その為にも内火艇が必要なんだと真冬に告げる。

結局、薫達は、内火艇の用意をする。

横須賀ブルーマーメイド庁舎、真霜の執務室

その頃、真霜は、自分の執務室で書類仕事をしていた。

真霜「はあ……」

だが、さつきと同じ真霜は溜息ばかりし、作業は全然捗っていないかった。

真霜「早く終わらせないと……」

早く終わらせようとするが、全然捗らない。

そんな時、真霜は、ある事を思ってしまった。

真霜（私は何をしているのだろう……あいつと仲直りしたいのに……家の事になると堆意地を張ってしまう……本当に馬鹿みたい……）

本当は、真霜も龍之介とは仲直りしたかったのだが、宗谷家の事になると、何故か意地を張ってしまい、言い出せない。

そんな自分を馬鹿だと思ってしまう。

その時

ブブ……！ブブ……！

真霜「ん!？」

ポケットに入れていた携帯が鳴り、真霜は誰かと思い、着信画面を見る。

真霜「真冬！……何かしら？」

如何やら、着信は妹の真冬からで、取り合えず電話に出る。

真霜「もしもし・・・」

真冬『あつ姉ちゃん、大変だ!!』

出ると、いきなり真冬が大変だと怒鳴り

真霜「如何したのよ真冬!?!いきなり大声出して?」

真霜は、何かと問う。

真冬『母さんが!母さんが!!』

真霜「お母さんが如何かしたの?」

真冬『母さんが倒れた!!』

何とそれは、母真雪が倒れたと言う知らせだった。

真霜「何ですって!?!それで病状は?」

知らせを聞いた真霜は驚愕し、真雪の病状を問う。

真冬『分かんねえ!・・・いきなり倒れたから・・・早く来てくれ!!』

しかし、真冬は困惑しており、早く来てくれと言わんばかりで

真霜「分かった!直ぐに行くわ!」

真霜は、直ぐに行くと言つて、電話を切り、急いで真雪の元へ向かう。

横須賀女子海洋学校、棧橋

横須賀女子海洋学校の棧橋に着いた真霜は、急いで保健室に向かう。

平賀「あつ、宗谷監督官!？」

その途中で平賀と福内に出会う。

真霜「御免2人共!急いでるから!!」

だが、真霜は、そのまま行ってしまう。

平賀「如何やら、上手くいった様ね!」

福内「これで2人が・・・フフフ」

行ってしまう真霜を見て、2人は、ヒソヒソと笑う。

横須賀女子海洋学校、保健室

真霜「お母さん!!」

保健室に着いた真霜は、行き良いよくドアを開ける。

すると

龍之介「やつと来たか!」

真霜「えっ!？」

真冬「よお真霜姉!」

中に入ると、其処には龍之介と真冬が立っていた。

真霜「龍之介!?!何で貴方が此処に?・・・それよりお母さんは?」

何故龍之介が居るのか分らず、それよりも真雪の安否を問う。

真冬「ああ、母さんなら大丈夫だぜ！・・・ピンピンしてるよ。」

それに対して、真冬は、真雪はピンピンしてるよと告げ

真霜「えっだって、さっき倒れたって・・・」

真冬「ああ、あれ嘘だぜ！」

真霜「嘘!？」

真冬「真霜姉を呼ぶ為にちよつと母さんに協力して貰ったんだ。」

如何やら、さっきの訃報は、真霜を誘き出す為の嘘だった。

真霜「ううう真冬！あ、貴方ね!!」

嘘だと聞いて、真霜は怒りを露にし、真冬を叱ろうとするが

龍之介「こいつを責めないでくれ・・・俺がこいつに嘘を付くよう頼んだんだ。」

龍之介が間に入り、自分が頼んだと言って、真冬を庇う。

真霜「!？」

龍之介「こうしないとお前と話が出来なくて・・・」

龍之介は、真霜に話が有ると言うが

真霜「話?・・・ふざけないで!・・・私は貴方と話す気なんて無いわ!!・・・忙し

いんだから・・・帰らせて貰うわ!!」

真霜は、聞く耳を持たず、逃げ様とする。

龍之介「待つてくれ真霜!!」

逃げ様とする真霜を龍之介が手を掴む。

真霜「離して!!」

真霜は嫌がり、強引に手を離そうとする。

龍之介「お願いだ、話を聞いてくれ!!」

だが、嫌がる真霜に龍之介は、怯まず話を聞いてくれと訴える。

真霜「いや!」

それでも真霜は、聞く耳を持たない。

そんな時

真冬「姉ちゃん!!」

真霜「あっ!?!」

真冬「龍之介の奴が話が有ると言ってるんだ・・・話ぐらい聞いたら如何なんだ!!」

嫌がる真霜を見て、真冬が激怒し、話ぐらい聞いたら如何なんだと真霜に告げる。

真冬「それに今の姉ちゃんの顔なんて見たくないよ!」

真霜「真冬・・・」

そして

ましろ「真冬姉さんの言う通りだよ！」

真霜「ましろ!？」

ましろ「本当は真霜姉さんだつて、龍之介さんと仲直りしたいと思つてるんじゃないの?」

ましろも真霜に本当は、龍之介さんと仲直りしたいと思つてるんじゃないのと告げる。

真霜「ん・・・」

2人の妹に言われ、真霜は何も言い返さない。

真雪「2人の言う事はもつともよ！」

真霜「お母さん!？」

真雪「真霜!・・・此処は、龍之介さんの話を聞くべきよ!・・・貴方達2人の為にも!」

更に真雪まで現れ、一緒になって、真霜を説得する。

真霜「はあ・・・良いわ、話を聞いてあげる。」

3人に言われ、真霜は逃げるのを止め、龍之介の話を聞く。

龍之介「そう来なきやな!じゃ行くぞ!!」

真霜「えっ、ちよちよつと!？」

すると、話を聞こうとする真霜を龍之介は連れて行く。

横須賀女子海洋学校、校外

真霜「何処へ行くのよ？」

龍之介「良いから来い！」

真霜は、龍之介が何所に連れて行くのか分らず、仕方なく委ねるしかなかった。

横須賀女子海洋学校、埠頭

軍港エリアの埠頭まで真霜を連れて来た龍之介は

薫「あつ兄さん!？」

次郎「やつと来たな、お2人さん！」

其処で内火艇を用意していた薫、次郎と合流する。

龍之介「準備は出来てるか薫？」

薫「準備はOK!何時でも使えますよ！」

既に埠頭には、内火艇が用意されていた。

龍之介は、そのまま内火艇に乗り

龍之介「さあ乗れよ！」

真霜を誘う。

真霜「一体如何言うつもりなの？内火艇まで用意して・・・」

真霜は、龍之介が何を考えているのか問う。

龍之介「良いから一緒に来い！・・・来れば分かる。」

真霜「ん・・・」

だが、龍之介は明かさず、来れば分かると言うだけで、仕方なく真霜は内火艇に乗る。

龍之介「じゃ行くぞ！」

龍之介は、内火艇のエンジンを起動した時

「待たんか准将!!」

『ん?』

誰かが待ったで、やって来た。

次郎「あれ軍医長!」

それは宗方軍医長だった。

一体何をしに来たのか

吾郎「これを忘れているぞ！」

吾郎は、龍之介にある物を渡す。

龍之介「これは!」

それは酒瓶だった。

吾郎「態々会いに行くんですから必要でしょう?」

龍之介「ありがとう軍医長、恩に切るよ！」

如何やら龍之介は、誰かに会いに行く様で、その挨拶として酒瓶が必要だった。

龍之介「出すぞ！」

内火艇のエンジンを起動。

埠頭を離れ、東京湾に出る。

真霜（このまま外海に出るつもり？）

乗船中真霜は、龍之介がこのまま外海に出るのかと思ったが

龍之介は、外海えは行かず、逆方向の東京方面へと向かう。

真霜（何所へ向かうの？）

真霜は、龍之介が何所へ向かっているか分らなかった。

内火艇は、晴海から皇居を通過、新宿区に入る。

新宿区に入ると、龍之介は内火艇を止める。

真霜（止まった？）

真霜は、エンジンが止まった事に気づき

龍之介「着いたぞ！」

如何やら、目的地に着いた様だ。

真霜は、辺りを見回す。

其処は、住宅やビルなどのフロート艦が有るだけで何も無い。

真霜「こんな所まで連れて来て、何をする気？」

こんな所に龍之介は何をしに来たのか、真霜は分からなかった。すると龍之介は

龍之介「此処はな．．．俺と薫が暮らしていた場所なんだ！」

真霜「えっ!？」

何とこの辺りは、龍之介と薫の家、町工場が在った場所だった。

龍之介は、酒瓶を持ち、真霜の横に立ち

龍之介「父さん．．．母さん．．．遅くなって御免な!．．．でも良い話が有るんだ．．．薫がようやく身を固めた．．．それに俺も．．．今此処に連れて来ているんだけど．．．」

亡き両親に報告しながら、酒を海に流す。

真霜「は、初めまして宗谷真霜です!!」

龍之介の両親に慌てて、自己紹介する真霜。

龍之介「何緊張してるんだよ?」

真霜「だって、両親の前何だから緊張ぐらいするわよ!!」

いきなり龍之介の両親の前に出されるものだから、真霜は緊張していた。

龍之介「ああ、そうか．．．そりやそうだ。」

真霜「ねえ、如何して此処に連れて来たの？」

真霜は、龍之介が何故此処に連れて来たのか問うと

龍之介「実はな・・・総司令に言われてな・・・お前、両親に顔を見せていないから・・・この際、お前を連れて、両親に顔を見せたら如何なんだって・・・」

実は、深町が考えた仲直りの方法とは、亡き龍之介の両親の前で真霜と仲直りする事だった。

流石に普通に謝つても簡単に関係は治らない。

なら龍之介の亡き両親の墓前のお互いの気持ちを言う。

亡き龍之介の両親の前なら龍之介も嘘は言えないと深町は考えたのだ。

真霜「そうだったの・・・」

龍之介「と言つても、墓なんて実は無いし、遺骨だつてない。」

真霜「無い？」

龍之介「ゴジラ戦の後、直ぐにはやての元に引き取られて、両親が死んだ場所に戻れなかった・・・いざ戻つて見たら、其処はもう都市開発で何も無くなつていた・・・貴めて墓を建てようとしても、墓を建てる金も無い・・・だから残つてるのは・・・」

両親を失つた龍之介と薫は、直ぐにはやてが居る親戚の元に引き取られてしまい、更に両親の死んだ場所は、残留放射能の被爆を恐れ立入禁止なり、戻る事もできなかつた。

いざ戻ると、其処は既に都市開發で何も無くなっていた。
責めて墓を建てようと思つたが、親の借金や薫やはやての生活費も有つたので、立て
る事が出来ず

残っている物は

龍之介は、そう言つて、懐から一枚の写真を出す。

真霜「それは？」

龍之介「俺の家族の写真だ・・・生まれた時に撮つた。」

それは家族の写真だった。

龍之介が薫から借りて、持つて来た唯一の遺品。

真霜「これが貴方のお父さんとお母さん・・・何だか貴方と薫に似てるね！」

真霜は、写真を見て、両親が2人にそっくりだと思つた。

龍之介「ああ・・・」

龍之介もそう思つていた。

そして、龍之介は

龍之介「なあ真霜！」

真霜「ん？」

龍之介「俺はお前に言わなければならぬ事が有る。」

真霜「……」

龍之介「この前は言えなかったけど……お前との付き合いは、決して遊びじゃない……だけど宗谷家の婿養子と言われた時、俺は正直自分が怖くなった……もし、このまま宗谷家を継げば、お前の前の許婚見たいに成るかと思うと怖くて言えなかった……だけど、お前がいなくなつた途端、俺は後悔した……何故はいと言えなかったんだろう……今さらこんな事、良い訳にもならないがどうか信じてくれ……お前への気持ちに嘘はない！」

自分の気持ちを真霜に告げる。

真霜は、真剣に聞き

更に

龍之介「もし、それでも許さないのなら……俺は、あの家を出て行くよ！」

龍之介は、真霜が許してくれないなら、今下宿している宗谷家を出て行く時まで言い出す。

真霜「えっ!？」

それを聞いて、真霜は驚愕する。

龍之介「そして、お前の前からも消える……それで機が済むのなら……」

龍之介は、既に真霜と別れる覚悟が出来ていた。

自分のせいで、もう真霜を苦しめたくなかった。

自分の気持ちと別れる覚悟は言った。

後は、真霜が如何判断を下すか

だが、本人からは何も言つてこない。

思わず龍之介は、真霜の方を向く。

すると

龍之介「あっ!？」

龍之介が見た物は、何故か涙を流す真霜の姿だった。

龍之介「な、何で泣いているんだ？」

何故泣くのか問う。

真霜「だって、だって……貴方がいなくなると聞いて……私耐えられないの!!」

龍之介「えっ!？」

真霜「本当は私……貴方と別れた事を後悔してるの……自分がなんて事をしたんだろう……直ぐにでも貴方と仲直りしなきゃいけないかったのに……でも家の事になると、意地を張つてできなかつた!!」

真霜は泣きながら、自分の気持ちを龍之介に打ち明けた。

本当は、自分も後悔していた。

直ぐにでも仲直りしなきゃいけないかったのに、家の事になると、意地を張ってできなかった事も

真霜「ほんと私は馬鹿ね！」

自分を責める真霜。

龍之介「そんな事わない！」

真霜「えっ!？」

龍之介「直ぐに仲直りだ何て、そんな簡単に出来るもんじゃない!!・・・俺だって言い出せなかったし・・・俺も馬鹿だよ！」

それに対して、龍之介も同様だと言い

真霜「龍之介？」

龍之介「お前は家を守ろうとしただけだ・・・それは消して悪い事じゃない・・・だから自分を責めるのは止めろ・・・良いな！」

更に真霜は、家を守ろうとしたただけであって、消して悪い事ではないから自分を責めるのは止めろと言って、真霜を慰める。

真霜「ん、ん」

それを聞いて、真霜も自分を責めるのを止める。

龍之介「よっし!・・・じゃ」

真霜「あっ!？」

真霜が責めるのを止めると、突然龍之介は真霜を抱く。

龍之介「しばらく抱いてやるから、今のうちに思い切り泣いとけ!」

龍之介は、真霜にしばらく抱いてやるから、今のうちに思い切り泣いとけと言って、真霜が泣きやむまで抱く。

真霜「……ん!」

龍之介の行為に真霜は感謝しながら龍之介に抱かれながら思い切り泣く。

泣く真霜を龍之介は優しく頭を撫でる。

そんな時

龍之介「あっ!？」

龍之介は、海上にあるものを見てしまった。

それは、死んだ両親の姿だった。

龍之介「!!!」

これは、幻なのだろうか

まるで生きているのかの様な姿で龍之介と真霜を見ていた。

両親の幻影を見て、龍之介は

龍之介（もう大丈夫だから心配しないでくれ）

そう思って、にっこりと笑顔を見せる。

それが分かったのか、両親の幻影は消える。

横須賀女子海洋学校、埠頭

しばらくして、龍之介と真霜は、横須賀女子海洋学校の埠頭へと戻って来た。

龍之介「あれ薫と次郎は何処へ居たんだ？」

戻って見ると薫と次郎の姿が無い。

真霜「先に帰ったんじゃない？」

もう遅いから帰ったんじゃないかと思つたが

龍之介「そんな訳が無い！・・・今日は当直なんだぞ！」

今日は、2人は当直だから帰る訳がない。

すると

パン！パン！

クラツカーの音が鳴り響く。

真霜「!？」

龍之介「な、何だ!？」

いきなりのクラツカー音に龍之介と真霜は困惑し

『おめでとう!!』

2人の前に薫と次郎、それに真冬と真雪や生徒達が現れた。

薫「兄さん、真霜姉さん、おめでとう！」

次郎「やったな准将！」

龍之介「これは何のマネだ？」

龍之介は、これは何かと問う。

薫「いやね・・・2人の仲直りを祝おうと・・・皆で待っていたの！」

如何やら、薫達は、龍之介と真霜の仲直りを祝おうと2人の帰りを待っていた様だ。

真霜「態々、皆で？」

薫「はい・・・皆で兄さんと真霜姉さんの帰りを待っていました。」

次郎「で、准将！仲直りできたんですか？」

改めて、次郎は、龍之介と真霜が仲直りできたのか問う。

龍之介「ああ、この通り！」

真霜「心配かけて御免ね！」

不機嫌な2人は、既にもう元の関係に戻っていた。

真冬「やったな龍之介！あたしに感謝しろよ！」

真冬は、自分に感謝しろと言うが

真霜「何言っているの真冬！・・・龍之介から聞いたわよ！・・・貴方ね人前で何て

事をしてるの!!」

真霜から自分が人前でした事を叱られる。

真冬「げ、勘弁してくれ真霜姉!?! 龍之介お前!」

真霜に叱られ、告げ口した龍之介を睨むが

龍之介「まあ、言わなくてもどうせバレるぞ・・・皆見ているんだから・・・」

龍之介が言わなくても、いづれ真雪や他の人から言われれば、バレる事だ。

真雪「龍之介さん! それに真霜!」

すると真雪が来て

真霜「お母さん!」

龍之介「真雪さん!・・・ご迷惑を掛けて申し訳ありませんでした・・・でも俺決めました。」

龍之介は、真雪にある事を告げる。

真雪『・・・・』

龍之介「俺、宗谷家の婿養子になります。」

何と龍之介は、宗谷家の婿養子になる事を決めたと告げる。

真雪「良いの、それで?」

それを聞いた真雪は驚かず、本当にそれで良いのか問う。

龍之介「ええ……2人で決めましたから問題ありません。」

それに対して、龍之介は2人で決めましたから問題ありませんと言って、真霜の手を握る。

真霜も同意しているかの様に龍之介の手を握る。

それを見た真雪は

真雪「そう……なら宗谷家の婿養子として、これからもよろしくお願いするわね宗谷龍之介さん！」

そう言つて、龍之介を宗谷家の婿養子として認める。

真冬「じゃ、これからは、あたしらは兄弟だな薰！」

それを聞いて、真冬やましろは喜び、これからは兄弟だなと薰に言うが

薰「ん、そうだね……でも、私は宗谷家は入らないわ！」

薰は、宗谷家に入らないと言い

『えっ?』

薰「実は私、宗谷家を出ようと思つているの！」

更に宗谷家を出る事と告げる。

『ええ!?!』

それを聞いた真霜は驚愕し

真冬「何だよそれ？あたしは聞いてねえぞ!!」

真冬は、聞いてないぞと反論する。

薫「だって、兄さんの事で言えなかつたんだもん……でも、それも解決したから、これで迷わず家を出られます。」

龍之介の事で薫は、皆に言えなかつた。

しかし、もうそれも解決したので、改めて皆に家を出る事を打ち明けた。

真雪「本当に家を出るの？」

真雪は、薫に本当に家を出るのか問う。

薫「もう決めました。」

それに対して、薫は、もう決めましたと言つて、次郎に抱き付く。

次郎「ど、どうも!」

次郎は照れる。

真雪「そう……寂しくなるわね。」

2人の決心を見て、真雪は納得する。

夏雄「よっし! 4人の祝福を祝つて、乾杯しよう!!」

話も終わり、夏雄が4人の祝福を祝つて、乾杯しようと告げ

美甘達と優衣達がジュースの入ったグラスを配る。

吾郎「ジュースで乾杯か・・・酒の方が良かったな・・・」

本当は、お酒で乾杯何だが、未成年の生徒達にお酒は、ちよつと無理な為、ジュースで乾杯という事になった。

吾郎は、仕方なくジュースで我慢する。

夏雄「皆取ったな・・・じゃ乾杯!!」

夏雄が乾杯と言ひ

『乾杯!!』

『ヨーソロー!!』

皆乾杯と言つて、4人の祝福を祝う。

はやて「先輩おめでとう!」

『おめでとう!!』

はやてやなのは、フェイトが祝う中

真雪「4人ともおめでとう・・・式は何時上げるの?」

真雪が4人の結婚式を何時上げるのか問う。

龍之介「まだ、考えていません・・・2人で話し合つて決めようかと・・・」

薫「同じくです。」

まだ決めていないが、4人とも話合つてから決める事にした。

そんな4人を遠くで見る者が居た。

高千穂、防空指揮所

深町「これで良かったのか？」

美由紀「ええ・・・これで思い残す事は有りません。」

実は、この祝いは美由紀が深町に頼んでした事だった。

これは龍之介との恋を忘れる為のけじめであった。

画して、龍之介と真霜は元の関係に戻り、更には薫が次郎の元に無事とつぐ事が出来た。

それから数日後

7月24日

4人は、空母大鳳で結婚式を挙げる事になった。

空母大鳳、会議室

会議室では、ウエディングドレス姿の真霜と薫が居た。

真雪「奇麗よ真霜！」

真霜「ありがとうお母さん！」

はやて「薫先輩奇麗ですよ！」

薫「ありがとう！」

真雪とはやてが2人のウエディングドレス姿を評価する。

真雪「御免なさい・・・本当ならば教会で挙げたかったけど」

薫「仕方ないですよ・・・何分急だったし、それにどうせなら艦の上でつてのも良いと思ひまして・・・それに皆にも協力して貰ったから！」

本当なら教会で挙げたかったが、何分急だったので、会場とかに問題が有つて出来なかつた。

其処で話し合つた結果、艦の上で式を上げる事になつた。

艦の上なら問題も無い。

ウエディングドレスもはやて、美奈、百々の3人で作つた手作り。

会場の設置も皆の協力がつて、保々整つた。

龍之介「準備は出来たか？」

薫「うん、大丈夫！」

紺色軍服姿の龍之介と次郎が来た。

真霜「そつちは、あんまり変わらないわね！」

龍之介「まあ、何時も着ている奴だし・・・違ふのは次郎だけだな！」

次郎「行事の時にしか着ないからな、これ！」

ウエディングドレス姿の真霜と薫に比べ、龍之介の服装は変わらず、変わったのは次郎だけである。

まあ、紺色軍服は上級幹部や行事以外は着ないものだから、次郎にとっては、あまり着ない物だ。

龍之介「それにしても・・・中々奇麗だぞ真霜・・・」

真霜「ありがとう」

龍之介は真霜のウエディングドレス姿に見惚れる。

次郎「薫も奇麗だぞ・・・特に胸辺り・・・」

薫「何嫌らしい事考えてるのよ！」

次郎「いててて!!!」

それとは逆に次郎の方は、薫の胸を見て変な事を考えたので、薫にお仕置きされる。

龍之介「全く何考えてるんだ、お前は・・・」

そんな次郎に呆れる龍之介。

真雪「龍之介さん、小沢さん！」

龍之介「真雪さん！」

真雪「4人共!・・・これからは夫婦なんだから、幸せにしないといけないわよ！」

真雪は、4人に夫婦となるからには、幸せにしないといけないと忠告する。

龍之介「大丈夫ですよ！……俺は兎も角、次郎の方が危ないかも……」
それに対して、龍之介は大丈夫だと言うが、問題は次郎の方である。

次郎は、嫌らしい面もあるから直ぐ浮気するタイプだ。

次郎「そ、そんな事しねえよ!!」

次郎はそんな事しないと言い張るが

5人は、信じようとせず

次郎「ひ、酷い！あんまりだ!!」

5人に信じて貰えなかったので、次郎は泣く。

龍之介「悪かった、悪かった！ほら泣くな……」

あんまり虐め過ぎたので、泣く次郎を龍之介は慰める。

「間もなく式が始まりますので、準備をお願いします。」

間もなく式が始まると告げられる。

龍之介「じゃ、そろそろ行きましようか！」

6人は、式場へと向かう。

空母大鳳、飛行甲板

空母大鳳の飛行甲板には、艦載機の姿は1機も無く。

結婚式に備え、式場の設置がなされていた。

式場には既になのは、フエイト達GF隊員や真冬、平賀、福内達BPF隊員の関係者、更に明乃、ましろ、もえか達横女の生徒が集まっていた。

明乃「もう直ぐだねシロちゃん！」

ましろ「ん！」

明乃やましろが見守る中

『新郎新婦の入場です。』

新郎新婦の入場の放送が流れ

明乃「来た！」

皆が見守る中、龍之介と真霜、そして、次郎と薫が入場する。

やがて、4人が正餐台に着き、総司令の深町が司祭役として

深町「汝は、この者を妻とし、良き時も悪き時も、富める時も貧しき時も、病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添うことを神聖なる婚姻の契約のもとに、誓いますか？」

結婚の誓約を読み上げ

『誓います！』

4人は誓いますと告げる。

深町「では証として、指輪を花嫁の手に！」

そして、証として、2人は花嫁の手に指輪を付け、口付けをする。

口付けした瞬間、皆は拍手で祝う。

こうして、4人は夫婦に成った。

結婚後、薫は宗谷家を出て、次郎の元に新居を構えた。

第10章 新婚と日常

7月28日

龍之介と真霜及び次郎、薫の結婚式から数日後

横須賀女子海洋学校、軍港エリア

巡洋艦さつまを旗艦とする巡洋艦2隻と護衛艦2隻が通常及びゴジラの哨戒任務へと出撃して行く。

他の艦は、待機態勢のまま居残りする。

はやて「居残りか……」

薫「まあ、いつもの事だけ……」

最早通常任務も薫達には当たり前になっていた。

はやて「そう言えば……きょうびの新生活どう……あんじよう行つとんの？」

薫「ん、まあまあね！……でも次郎君たら全然起きないから困るのよね……まあ何とか五十六のお陰で助かつてるけど……」

薫と次郎の新生活は、まあまあ続いている。

だが、結婚しても次郎の寝坊は直らず、起こす薫が大変で、いつも五十六の猫パンチ

か爪でひつかくかで起こされる。

当の本人は・・・

横須賀女子海洋学校、公園

次郎「このクソ猫野郎！よくも俺の顔をこんなにしやがって!!!」

公園の敷地で五十六と睨み合いをしていた。

顔は五十六にめためたにされたせいかな、ひっかき傷だらけである。

五十六「ぬう・・・」

だが、五十六は全く相手にしていない。

次郎「キィ・・・可愛くねえ!!」

猫に舐められて、頭に来る次郎だった。

横須賀女子海洋学校、軍港エリア

薫「それはそうと部屋に寄ってく?・・・御馳走するわよ!」

はやて「ほんまでつか?それじゃお言葉に甘えって・・・」

はやては薫に誘われ、薫の新居へと向かう。

薫の新居は学生寮にある。

実は、ブルーマーメイドの寮では、五十六が飼えなかつた。

困り果てたところに横須賀女子海洋学校の学生寮の寮母さんが、寮に2人が住める部

屋を提供すると言って来た。

2人は喜んでそれを受け入れ、2人で新居へと引越す。

提供された部屋は二部屋とキッチン、シャワー、トイレがあり、生活に不自由は無かった。

ブルーマーメイド、設備研究課、兵器開発工場

その頃、龍之介は真霜と共にブルーマーメイドの設備研究課の兵器開発工場を訪れていた。

龍之介「すまんな真霜！・・・忙しいところ付き合っただけで・・・」

龍之介は、忙しい真霜を態々呼び出した事を謝罪するが

真霜「うんうん・・・他ならぬ貴方の要なら断れないわ！」

本人は、全く気にしていない。

むしろ一緒に居るだけでも嬉しかった。

真霜「それにしても・・・態々こんな所を呼び出して、何の要なの？」

話は変わり、真霜は自分を呼び出した理由を問う。

龍之介「来れば分かる。」

それに対して、来れば分かると言って、先へと向かう。

そして、工場の中に入ると

真霜「こ、これは？」

其処には、まだ制作中だが巨大な航空機らしき物が置かれていた。

龍之介「試作大型飛行艇・・深山！」

それは烈風に続いて、試作中の大型飛行艇深山だった。

真霜「飛行艇？」

飛行艇と聞いて、真霜は？する。

龍之介「以前試作した烈風とは違って、こいつは水の上から飛ぶ航空機だ・・・空中戦はできないが対艦、対潜戦闘は出来る・・・勿論救難活動もだ。」

飛行艇が分からない真霜に龍之介は説明をする。

真霜「と言う事は、そのまま海の上にも着水できるの？」

龍之介「その通りだ！」

真霜「なら、救難活動もやりやすくなるわね！」

説明を聞いた真霜は、深山が完成すれば、今後の救難活動もやりやすくなると確信するが

「それは結果を見ないと分かりません！」

それに異議を出す者が居た。

真霜「!？」

真霜は、その人の方を向くと

真霜「浦賀主任！」

それは、ブルーマーメイド設備研究課、主任研究員の浦賀鈴留だった。

浦賀「矢野主任からの連絡で、宗谷准将が視察に来るとは聞いていましたが・・・雅か宗谷監督官まで起こしになるとは・・・」

浦賀は、龍之介が視察に来る事は、慶介から連絡を受けていたが、真霜まで来る事は知らなかった。

龍之介「こいつを見せようと思って、俺が呼んだんだ。」

浦賀「そうですか。」

龍之介「ところで制作は順調か？」

龍之介は、製作状況を問う。

浦賀「遅れてはいますが、制作は順調です。」

深山の制作は遅れていたが、順調に進んでいた。

龍之介「そうか」

真霜「浦賀主任・・・何故貴方が此処に？」

真霜は、何故浦賀が此処に居るのか問う。

浦賀「此処は、私の管轄ですし、私は此処で制作の監督をしています。」

浦賀は、元々設備研究課の主任研究員でもあるから、此処は自分の管轄でもある。その為、深山の制作監督をしている。

真霜「監督つて、確か貴方は艦の無人化計画の方を監督していたんじゃない？」

真霜は、浦賀が監督しているのがおかしいと思った。

本来、浦賀はブルーマーメイド艦の無人化計画を監督している筈なのに、何故こつちも監督しているのか

浦賀「勿論、其方も監督しています・・・共同で・・・」

真霜「共同？」

浦賀「此方の制作を手伝う代わりに、其方の主任が我々の計画を手伝って貰っています。」

浦賀は、慶介と共同で深山の制作を行っていた。

深山の開発を手伝う代わりに、慶介が計画に必要な技術を提供している。

浦賀「ですが、私的にはこんな物は不要と思っています。」

だが、浦賀本人は深山の開発に不服だった。

『…………』

浦賀「こんな物より・・・私が推進する計画の方が将来的にブルーマーメイドには最も必要性が有ると思います・・・」

浦賀は、航空機より自分が推進する艦無人化計画の方が必要性があると告げる。

真霜「ん……」

真霜は黙っていたが

龍之介「俺はそうとは思わないな！」

龍之介がそれに異議を唱える。

龍之介「これだつて将来的には必要なものだよ……はなから必要ないと決めつけるのは、研究員として如何かと思うが……」

確かにはなから必要性がないと決めつけるのは研究員として如何かと思う。

浦賀「確かにそうですね……ですが私の意見は変わりません。」

それに対して、浦賀は素直に認めるが、本人の意見は変わらなかった。

その後、2人は工場を後にし、戻る中

真霜「御免ね……あの人もあんなに悪い人じゃないんだけど……」

真霜は、浦賀の長所を言う。

龍之介「分かっているよ……本人だつて、自分の研究が邪魔されたら誰だつて言うだろう。」

龍之介も、その事は分かっていた。

そんな時、真霜はふっと足を止める。

真霜「本当はね・・・艦の無人化計画にあまり乗る気じゃないの!」

真霜は、龍之介に自分が浦賀の計画にあまり乗る気じゃない事を告げる。

龍之介「・・・」

真霜「確かに無人化計画が推進すれば人員の削減にもなるし、運用にも効率が良いけど・・・私的には、ブルーマーメイドを目指す子達の将来を潰すような気がするの・・・」
確かにブルーマーメイドの艦を無人化すれば効率も良いし、不要な人員も削減できる。

だが、それは明乃達や将来ブルーマーメイドを目指す子達にブルーマーメイドに成るのを諦めろと言う事じゃないのかと真霜は思っていた。

龍之介「確かに俺もそう思うよ・・・でも結局それを決めるのは我々人間だ・・・機械は決断できないからな!」

龍之介も同じ思いだったが、でも結局それを決めるのは我々人間で機械は決断できないと主張する。

真霜「それは分かっているんだけど・・・如何したら良いのか・・・」

真霜もそれは分かっているが、如何にも出来ない。

龍之介「なら証明させれば良いじゃないか!」

それに対して、龍之介は証明させれば良いじゃないかと真霜に言う。

真霜「証明!？」

龍之介「お前のいつもの手でな！」

真霜「ん．．．そうね．．．考えてみるわ！」

真霜は、龍之介に言われ、無人化計画に対して、何かを考えていた。何れそれは現実になるが、まだ先の事である。

横須賀女子海洋学校、食堂

一方、横須賀女子海洋学校の食堂では、ちよつとした女子会が有っていた。

志津真「では、これより夏休みの合コンについて話し合います。」

題目は、夏休みに行う彼女達の合コンについてだった。

『．．．．』

那月「全く何かと思つたら、唯の合コンか．．．バカバカしい！」

と言つて扇子を扇ぐ那月。

志津真「ふん．．．どうせモテナイ人はほつといつて．．．」

乗らない那月に対して、志津真は冷たくする。

那月「くっ!?! 誰がモテナイって!!」

それを聞いて、那月はキレる。

天音「まあまあ、艦長落ち着いて下さい．．．背が低いとはいえモテナイって事は無

いですから……」

キレル那月を慰めようとするきしゆう副長の天音。

那月「お前まで言うな！」

天音「いた!？」

だが、背が低い事が帰って、仰いでしまった。

みちる「まあ……見た目じゃねえ……」

美冬「そうそう」

とよだのみちると美冬が釣られて、那月の頭を撫でる。

那月「うう……」

子供扱いされる事に腹をかく那月。

五月「こらこら……あんまり子供を虐めないの!」

更には、五月からまでも子供扱いされるじまい。

志津真「さて、話は戻ります……知つての通り、准将と妹さんが結婚しました……

我々は完全に出遅れています……それを挽回する為、今度の夏休みで合コンをしたい

と思います!!」

話は戻り、志津真は夏休みの合コンを計画する。

美冬「何処でするの?」

志津真 「そりゃ、海に決まってるじゃないの！・・・狙いはイケメン!!」
合コン場所は海。

つまり海水浴場で合コンする気の様だ。

天音 「海か・・・」

みちる 「そう言えばこの前、新しい水着買ったばかりだし！」

五月 「ふん、どんな男もあたしの魅力で・・・」

『ないない』

海と聞いて、4人はやる気満々。

志津真 「兎に角、早くしないとうちら全員本当に出遅れる事になるわよ！・・・必ず

男を見つ出すわよ!!」

『おお・・・!!』

4人は、合コンの計画を進める。

空母大鳳、格納庫

そして、空母大鳳の格納庫でも

GF整備員A 「今度の夏休み・・・私海行くの！」

GF整備員B 「子供かよ！」

GF整備員A 「何よ！そう言うあんたは如何するの？」

G F整備員B 「そりゃサバゲだろ！」

G F整備員A 「バカじゃないの！・・・あんたの方がよっぽど子供だわ！」

G F整備員B 「五月蠅いな！・・・好き何だから！」

文雄 「何をやっている!!・・・サボってないで作業をしろ!!」

『す、すみません!?!』

G F隊員達の中で夏休みの話題が上がって行く。

やがて夜に成り

横須賀女子海洋学校、学生寮、次郎と薫の部屋

次郎と薫が部屋に帰宅する。

次郎 「さあ早く飯にしようぜ！」

薫 「慌てないで、今作るから・・・」

次郎が飯と言いながら、薫が飯の準備をする。

次郎 「ほれほれ・・・」

五十六 「ぬうぬう・・・」

その間に次郎は五十六と遊びながら待つ。

薫 「お待たせ！」

飯ができ、次郎と五十六は飯を食う。

次郎「相変わらず薫の料理は美味しいな！・・・お前も幸せ者だな！」
五十六「ぬう！」

薫の美味しい料理を食べて、次郎と五十六は満足する。

満足そうな姿を見て、薫は喜びの顔を露にする。

雅に念願の新婚生活。

宗谷家、リビング

だが、その一方で龍之介の方では

真冬「おいしい飯はまだか!!」

だらしなにかつこで飯はまだかと言う真冬。

龍之介「もう少しでできるから待ってる！」

急いで飯を作る龍之介。

今日は真雪の帰りが遅いので、龍之介が代わりに夕飯を作っている。

真冬「早くしてくれ・・・腹減ったよ！」

真霜「貴方も手伝いなさいよね真冬！」

念願の新婚生活とは裏腹に真冬にこき使われる龍之介。

それを手伝う真霜。

ましろ「姉さんだらしなないよ！きちんとして！」

だらしのない真冬をましろが注意する。

真冬「良いじゃねえかよ！家に居るぐらい！」

だが、真冬は聞こうとしない。

龍之介「ほら、飯だ！」

やがて、飯ができ、飯を食おうとするが

真冬「遅いぞ！・・・薫だつたら、もちよつと早く出来ているのに・・・」

飯を作るのが遅いと真冬が文句を言う。

龍之介「文句を言うな！・・・薫はもう嫁に行つたんだ・・・そんなに言うならお前も早く嫁に行くんだな！」

それに対して、龍之介は早く嫁に行くんだなど真冬に言い返す。

真霜「そうそう！」

真霜も同じ考え

真冬「くう・・・」

2人に言われ、真冬は悔しがる。

龍之介「お前もだぞましろ！」

今度はましろにも言う。

ましろ「わ、私は先ず艦長に!!」

ましろは艦長になるのが先だと言う。

新婚に成つての食卓は相変わらず

宗谷家、龍之介と真霜の部屋

だが、食卓が終われば後は自由。

龍之介「今日は色々あつて、疲れたな！」

真霜「そうね・・・骨が折れるわ！」

そう言つた2人がベツトに座り

真霜「ん!？」

何時もの快樂を始めた。

新婚の中で一番の安らぎであつた。

画して、新婚と仕事が続いていた。

そして、間もなく交代の一週間の夏休みが訪れようとしていた。

第11章 特別実習 前編

8月10日

とある孤島

薫達と晴風クラスは夏休みに入った。

と思いきや

何故か薫と晴風クラスの姿がとある孤島に有った。

『.....』

皆薫と古庄の前に整列し

古庄「傾注！」

2人に注目する。

古庄「ではこれより晴風クラスの特別実習を開始する！」

古庄が晴風クラスの特別実習を開始すると告げる。

芽衣「え!? 今日って遊びに来たんじゃないの!？」

皆の中で驚愕する芽衣。

此処で事態を明確にする為、時系列は遡る。

横須賀女子海洋学校、廊下

明乃「……」

明乃は何事も無く廊下を歩いていると

「岬さん！」

明乃「!？」

突然誰からか呼ばれ振り向くと

明乃「あつ、古庄教官！」

其処には古庄が立っていた。

古庄「ちよつと良いかしら？」

古庄は、明乃に何か用事が有る様だ。

明乃は、何かと思ひ古庄に着いて行く。

横須賀女子海洋学校、食堂

古庄は、明乃を椅子に座らせ

古庄「どうぞ」

お茶を差し出す。

明乃「ありがとうございます。」

明乃は礼を言ひお茶を飲む。

すると

古庄「新しい艦はどう？」

古庄が新しくなった晴風の状況を問う。

明乃「え？あつはい！・・・問題ありません元の晴風と同じ部分も多いですから、皆も喜んでます。」

それに対して、明乃は問題ないと告げる。

古庄「そう」

問題ないと聞いて、古庄は安心する。

明乃「あのー・・・それでお話って？」

話を変え、明乃は何の話か古庄に問う。

古庄「そうね、本題に入る前に・・・」

古庄は本題に入る前にと言つて、辺りを見回す。

まるで誰かを待っているかの様なふるまい。

そして

「御免！遅くなりました!!」

誰かが遅れてやって来た。

明乃「山本教官!？」

薫「あれ岬ちゃん!？」

それは薫だった。

薫「何で此処に？」

薫は何故此処に居るのか問う。

明乃「古庄教官に呼ばれて・・・」

明乃は古庄に呼ばれて来たと言う。

薫「あら、私も!？」

それを聞いて、自分も同じだと言う。

古庄「私が呼んだの!・・・薫さんにも話を聞いて貰おうと思って・・・まあ、連絡

事項のようなものだけ・・・」

薫も揃い、古庄は話しを始めた。

古庄「晴風クラスは夏休みに特別実習を予定しているの!」

古庄は、2人に夏休みの特別実習の事を話す。

『特別実習?』

特別実習と聞いて、2人は?する。

古庄「ええ・・・詳しい事は後で伝達されるけど・・・先にちよつと2人に伝えてお

こうと思つてね!」

古庄は、後で詳しく薫と明乃に伝える予定だったが、先に伝えて置く事にしたのだ。

明乃「・・・それだけですか？」

明乃は、それだけですかと問う。

古庄「それだけよ・・・何か悪い事でもして身構えてた？」

それに対して、古庄はそれだけと言って、何か悪い事でもして身構えてたと告げ、明乃を睨む。

明乃「ええっ！ちつ違います私は何も・・・っ」

と言って、明乃は、慌てふためく。

薫「岬ちゃん落ち着いて！」

薫は、慌てふためく明乃を落ち着かせる。

古庄「ふふっ冗談よ！」

古庄は、冗談だと言って笑う。

古庄「さっきの話、軽くで良いから他の乗員にも伝えておいてね！」

明乃「はい！」

と言って、古庄は去って行く。

明乃は古庄の言う通りに他の生徒にも伝える。

横須賀女子海洋学校、廊下

2人と別れた古庄は、職員室に戻ろうとする

薫「待ってください！」

古庄「!?」

薫が追いかけて来た。

古庄「何ですか薫さん？」

薫「先の実習！私が参加して良いんですか？・・・私はもう関係ないのに・・・」

薫は何故自分も参加して良いのか問う。

確かに薫はもう教員じゃないので、参加する資格はない筈だが

古庄「貴方が居る方が晴風クラスにとっては都合が良いの・・・それに晴風について、

貴方が誰より詳しいから・・・」

それに対して、古庄は薫が参加した方が晴風クラスにとっても都合が良いし、何より

も晴風クラスに詳しいからだと告げる。

まあ、確かに薫は晴風クラスと行動を共にしていたから面々には詳しい。

薫「それはそうなんですけど・・・准将の許可は？」

薫は、龍之介の許可は取って有るのかと問う。

古庄「それは大丈夫！・・・校長からの直々の指示だから！」

それに対して、真雪からの直々の指示だと告げる。

薫「そうですか！」

それを聞いて、薫は不満そうな顔をするが

古庄「いやかしら？」

薫「いえ・・・甘んじ得て実習に参加したいです。」

甘んじ得て、実習に参加する事を告げる。

古庄「そう」

こうして、時系列は戻り

とある孤島

薫と晴風クラスと共に古庄の特別実習に参加する事になった。

の筈が

薫（何が如何なったらこうなるのよ？）

生徒の思い違いに驚く薫。

幸子「それからこの事が伝言ゲームのように伝わって行って・・・何故か何所かで遊びに行くって内容にすり替わったようですね！」

何所で伝達を間違えたか、晴風クラスの面々は遊びに来たとばかりだと思っていた。

鶯「私ちゃんと特別実習って連絡したのに・・・」

ましろ「遊びに行くって考えが念頭にあつたせいで実習のところをよく読まなかった

んだろう……」

如何やら鶴は皆に連絡したのだが、遊びに行くって考えが念頭にあつたせいで実習のところをよく読まなかつた様だ。

芽衣「遊びに行くにしては、上手く全員揃つてたし、艦まで動かすしで可笑的なくと思つたんだよね……」

志摩「うい……」

だが、芽衣と志摩は、遊びにしては何処か可笑しいとは思つていたのはいたのだが、結局気づかなかつた。

ましろ「気付け！其処で！疑問に思つたなら人に聞け！」

そんな2人をましろが叱る。

そんな時

「あの……」

ましろ「ん？」

後ろから誰か声を掛けて来た。

由美子「私遊びに行くからって誘われて来ちゃつたんですけど……」

小百合「ジェニーもいるヨー！」

それは時津風水雷長の美子と天津風機関長の小百合だった。

何故関係も無い2人が此処に居るのは

芽衣「遊びに行くって聞いたから・・・」

麻侖「旅は道連れてなあ！」

遊びに行くと思つて、芽衣と麻侖が序に誘つたのだ。

ましろ「如何するんだこれ・・・」

関係ない2人を如何するのかましろは困り果てる。

序に

夏雄「全く、遊びと実習を間違えるとは如何いう考えをしてたんでい！」

何故か、我が空母大鳳機関長の夏雄が居た。

薫「そう言う機関長は何で此処に？」

夏雄「いや、麻侖と一緒に遊びに行こうつて誘うから付いて来たんでい！」

本人も麻侖に誘われた1人。

薫「機関長も人の事を言えないじゃないですか!!・・・如何するのよこれ？」

人の事を言えないじゃないですかと呆れ果て、付いて来た夏雄を如何するのか困り果

てる薫。

そんな時

「来ちゃったものはしょうがないんじゃないんですか？」

薫「!?」

そう言って、薫の前に現れたのは

薫「平賀さん、福内さん!」

鈴「あっ、ブルーマーメイドの・・・」

幸子「平賀さんと福内さんですね!」

それはブルーマーメイドの平賀と福内だった。

古庄「2人にも山本中佐と同じ、今回の実習の手伝いに来てもらいました。」

平賀「よろしくー!」

如何やら2人は薫と同じ実習の手伝いに態々来てもらった様だ。

古庄「さて、情報が上手く共有されていない様なので、改めて今回の実習について説明します。」

改めて、古庄は今回の実習の内容を説明する。

古庄「晴風はRATt事件後、一時沈んでしまった為、新たな艦を用意できるまで海洋実習を行えずにいました・・・其処で今回、夏休みを利用して特別実習と言う形で穴埋めをする事になったと言う訳ね。」

古庄は、RATt事件で晴風クラスは艦を失い、実習が出来なかった。

その穴埋めをしようと今回の実習を企画したのだ。

幸子「簡単に言うとは強制的な補習授業見たいなものですね！」
補習授業だと言う事を理解する幸子。

麗緒「うちら、ガチの補習終わったばつかなのに・・・!!」

今回の実習は、夏休み補習ばかりだった晴風クラスにとっては、いやいやなものだった。

古庄「確かに晴風クラスだけ一時的に艦を失ってしまったのは不可抗力・・・そのせいで補習が増えるのも可哀想では有ると言う事で・・・」

だが、古庄はそんな事は予測しており

古庄「無事実習を終えたら明日1日は自由時間とします!」

それに対して、無事実習を終えたら明日1日は自由時間にするかと告げる。

『やった・・・!!』

それを聞いた明乃達は、いっぺんに代わり大喜びする。

だが

古庄「但し!実習自体は気を引き締めて取り組む様に!・・・返事は!」

『はい!』

喜びも束の間、古庄の言葉に晴風クラスは、気を引き締める。

古庄「よろしい!」

薫（流石に、これは聞くわね！）

流石に効いたと薫は実感する。

古庄「ではこれから実習の内容を伝える！」

改めて、古庄は実習の内容を発表する。

古庄「横須賀女子海洋学校オリジナル・・・オリエンテーティング！」

実習の内容は、オリエンテーティングだと告げる。

明乃（オリエンテーティング・・・！）

発表された内容に明乃は？する。

由美子「えーっと・・・私達は如何すれば良いんだろう・・・？」

小百合「アイドン ノウ！」

2人は、如何すれば良いか分らなかった。

続く

第12章 特別実習 後編

8月10日

とある孤島

古庄「実習内容は……オリエンテーリング！」

『オリエンテーリング……』

芽衣「オリエンテーリングって何？」

古庄が言うオリエンテーリングに晴風クラスの面々は意味が分からず

薫「要するにオリエンテーリングてのは……地図とコンパスを使って、各地に設置されたポイントを通過しながらゴールを目指す……言うなれば野外スポーツの一種の事よ！」

それに対して、薫がオリエンテーリングの意味を説明する。

幸子「成程！野外スポーツですね！」

幸子もタブレットで調べて理解する。

芽衣「魚雷撃つチャンスはあるの？」

だが、芽衣は魚雷撃つチャンスはあるのかと関係ない事を問う。

ましろ「あるわけないだろ！」

それに対して、ましろがないと真実を言う。

鈴「わ・・・私、小学生の頃キャンプでやったことあるかも・・・」

まゆみ「あーやったやった！・・・何か文字とかが描いてある看板を探して森の中を歩き回ったやつだよね。」

鈴とまゆみはオリエンティングの経験が有った。

まゆみ「あの時は道に迷って鈴ちゃん泣いちゃって・・・」

鈴「ううう・・・そうだっけ・・・」

幸子「幼馴染だからこそ知るエピソードですね！」

2人にとっては、恥ずかしいエピソードも有る様だ。

古庄「はいはい、其処まで！」

干渉も束の間、古庄が皆を静粛させる。

福内「オリエンティングは元々訓練として始められたものなの」

平賀「競技としては順位を競う物なんだけど、グループで行う登山ってイメージが広く浸透しているかもね！」

平賀と福内がグループで行う事を説明し

古庄「今回行う実習もグループで行動してもらいます。」

薫「先ずは皆4つのグループを作ってちょうだい！」

古庄と薫が4つのグループを作るよう告げる。

そんな中で

由美子「あの・・・私達は如何すれば良いんでしょう？」

由美子と小百合は如何すれば良いかを問う。

確かに晴風クラスじゃない由美子と小百合は如何するのか

古庄「そうね・・・折角だから参加で！」

由美子「やっぱり!？」

小百合「しかたないネ！」

結局参加する事になった。

序に夏雄の方は

夏雄「よーし、あたしも！」

薫「機関長は此処にいて下さい！」

夏雄「ううう・・・」

釣られて参加しようと思ったが、薫に止められ、此処に残る事になったが

古庄「良いんじゃないの参加させて！」

薫「え!?良いんですか？」

古庄「生徒の中に経験者を入れた方が実習がより良くなるわ!」

薫「それはそうなんですけど・・・」

夏雄「古庄教官が言うんだから良いじゃないか艦長!」

薫「それが心配なの!」

古庄の一言で参加する事になったが、薫は心配性だった。

明乃「組み合わせは如何すれば良いですか?」

明乃が組み合わせは如何すれば良いか問う。

古庄「其方に任せます・・・3分以内にグループに分かれて整理する様に!」

組み合わせは自由で、3分以内に整理するよう告げる。

ましろ「組み合わせは自由か・・・如何します?」

芽衣「科で分ければ?丁度四つだし!」

志摩「うい」

芽衣は、科で分ければ良いじゃないかと言うが

明乃「それが一番早いけど・・・それだとグループごとに得意な事が偏っちゃうか

も・・・」

幸子「確かに能力は均等に分けた方が良いかもしれませんがね。」

流石に科に分けてもグループごとに得意な事が偏ってしまうので却下された。

明乃「じゃあ科ごとにグーチョキパーで分かれてみよう！」

其処で明乃は科ごとにじゃんけんのグーチョキパーで分かれてみようと言いだした。

ましろ「良いのか、そんな決め方で……」

ましろは不安な様子であった。

だが、グループを分けようとした途端問題が生じた。

果代子「4つに分かれるならグーチョキパーじゃ1つ足りないんじゃない？」

明乃「あ、そっか！」

それは、グループを分けるにはグーチョキパーでは、1つ足りなかった。

聡子「ならもう一つは、これぞな！」

其処で聡子が

まゆみ「何それ？」

慧「フレミングだよ！」

フレミングを提案する。

薫「あと1分！」

明乃「とつ、取り合えず皆でそれで分かれよう！」

取り合えず時間がないので、グーチョキパー、フレミングでグループに分ける事にした。

組分けたグループは

グーチーム

明乃、媛萌、小百合、美波、麻侖、まゆみ、果代子、順子

チヨキチーム

ましろ、光、楓、洋美、麗緒、美甘、聡子、秀子

パーチーム

幸子、ほまれ、理都子、美千留、美海、マチコ、桜良、鈴、空

フレミングチーム

芽衣、夏雄、あかね、慧、鶯、志摩、由美子、百々、留奈

で編成された。

薫「では各グループに地図を配ります。」

各グループごとに薫が地図を配布する。

明乃「これが地図？・・・殆んど何も描いてないけど・・・」

配布された地図は、何も書かれていない唯の地図だった。

福内「見て分かる通り、その地図は不完全です・・・各グループには、その地図を持っ

て、それぞれ別の位置からスタートしてもらいます。」

古庄「進む道にはポイントが設置されていて、地図にはそのポイントのいくつかだけ

が表記されているので、道中、ポイントを見つけながら進み地図と照らし合わせて現在位置や方角を割り出し、最終地点に辿り着く事・・・制限時間は3時間・・・内容は以上！」

ルールは、3時間以内にポイントを見つけながら、この集合地点に戻る事。

薫「じゃあ、皆、気をつけていってらしゃい!!」

薫に見送られて、晴風クラスは、それぞれの地点から集合地点を目指し出発した。

出発して数分後

各グループの状況は

グーチーム

明乃率いるグーチームは順調に進んでいたが

美波「重い・・・」

かろているリュックが重いせいで美波がばてる。

明乃「みなみさん大丈夫？」

流石に12歳の美波には重過ぎた様だ。

すると、突然後ろから

美波「!？」

小百合が美波のリュックを持つ。

小百合「ジェニーが持つヨ！」

如何やら肩代わりしてくれる様だ。

美波「あ……ありがとう……」

小百合「ユア、ウエルカム！」

麻侖「これ何が入ってんだ？」

今頃になって麻侖がリュックの中身を気にする。

まゆみ「あれ、見なかったの？」

明乃「水とか食料とか、あと発煙筒とかだね……非常時の準備だけど、今回はトレーニング用の重り代わりなんじゃないかな？……ほらいつも権藤教官がブルマーの人達を訓練する時に使ってるじゃない！」

リュックの中身は当然サバイバル用品で、今回はトレーニング用の重り代わりに持たされたのだ。

麻侖「悪かったなジェニー……こんなつもりで誘った訳じゃ無かったんだが……」
麻侖は、こんな事に付き合わせた小百合に申し訳ないと思つたが

小百合「ノープロブレム！山登りも楽しいネ！」

本人は全く気にしておらず、むしろ楽しい気分だ。

まゆみ「虫よけスプレー持つてて良かった……気が影になって日焼けの心配はなさ

そうだけど……」

日焼けを気にするまゆみ。

順子「それにしても変わった実習だよね！」

果代子「特別実習だからね……」

順子と果代子が実習に疑問を抱く中

明乃「皆足元気を付けてね！」

明乃が足元に注意を呼び掛ける。

媛萌「艦長は結構場慣れしてるね？」

媛萌は、明乃がサバイバル慣れていると思ったが

明乃「そんな事ないけど……昔もかちゃんと色んな所を探索したので……思い出したら、ちよつと楽しくなっちゃって」

如何やら小さい頃にもえかと共に色んな場所を探検した事が有るので、こう言う事に離れていた。

本人的には楽しいと思ってる。

麻命「相変わらずだなあ艦長は！」

小百合「ポジティブなのは、よいことだね！」

そんな明乃に麻命と小百合が感心する中

果代子「ところでポイントって何所に在るんだらうね・・・？」

果代子がポイントを捜すが中々見つからない。

美波「簡単には見つからない様に隠されてる可能性も有る。」

美波の言う通り、簡単には見つからない様に隠されてる可能性も有る。

麻侖「テキトーに進んでてもいずれば辿り着けそうだけだな・・・」

だが、進んでいれればいずれば辿り着けるのも有りだが

明乃「うん・・・だけど制限時間も有るし、早い内から位置を把握して最善の道を選ぶ必要が有るのよ。」

制限時間も有るので、素早くポイントを探して、最短ルートを選ぶ必要が有る。

順子「ポイントは出来るだけ見つけて地図に記入するってルールも有るしね。」

明乃「もしかして少し道を外れないと見つからないのかも！」

順子「この辺りで一度探して見る？」

明乃「そうだね！」

明乃達は、辺りを探索しながら進む。

パーチーム

幸子達率いるパーチームも順調に進んでいる。

マチコ「発見！赤のG！」

木の上から探索していたマチコがポイントを発見し

幸子「赤のGは此処・・・つと」

幸子が位置を地図に記入する。

幸子「位置の把握は、保々出来ましたね！」

鈴「野間さんが居ると直ぐポイントが見つかって助かるよね！」

美海「流石マツチー！」

マチコのお陰で幸子達は既にポイントを何個か見つけていた。

理都子「私達一番にゴール出来るかもね・・・」

美千留「そうね」

自分達が一番に辿り着けると思っっている理都子と美千留。

ほまれ「他の皆は大丈夫かな？」

桜良「如何かしら・・・連絡取り合うのは禁止されてるからね。」

他の皆を気にするほまれと桜良。

美千留「そもそもこれは如何いう訓練なの？」

空「サバイバル力アップ？」

幸子「そうですね・・・想定としては、機械の故障などで方角も位置も分からず孤立した状態での行動・・・と言ったところででしょうか？」

桜良「山でやる必要はあるのかしら？」

空「何時も海だからね！」

理都子「理由それだけ？」

空「さあ？」

明乃達同様に幸子達も、この訓練に疑問を持つ。

それはさて置き

幸子「兎に角、このままゴールを目指しましょう……地図によると……こつちです
すね！」

鈴「次のポイントも探さなきゃね！」

美海「マツチが居れば完璧よ!!」

マチコに探索させながら進む幸子達。

フレミングチーム

芽衣率いるフレミングチームは順調に進んでいる。

と思っただが

ガサツ!

芽衣「うーん……成程成程……迷った？」

志摩「うい！」

道に迷ってしまった。

芽衣「ぷはあ！道に迷って飲む水は美味しい！」

道に迷って一息入れる芽衣。

百々「こんなんで大丈夫ですかね？」

と言つて不安を感じる芽衣。

そんな中、慧は膝を抱え、ある事を思い浮かべる。

慧（ぬかった！・・・じゃんけんによつて四つに分かれたチーム・・・一見ランダムに決まった様に見えるけど・・・実は好んで手を出す手には、その人の性格が大きく関係している・・・と私は考えている・・・例えばグーは強く握った拳から力強くエネルギーギッシュなイメージ・・・そして石から連想される頑固な一面・・・、職人やリーダータイプ！：：つまりこのチーム分けは、結果的に似たタイプ同士で結成されている！：：それで言うと・・・このフレミングチーム・・・本来ジャンケンには存在しない特別な枠）

グーチームはリーダーシップのチーム

チヨキチームは平和と攻撃のバランス力を重視したチーム

パーチームは紙のような柔軟性、裏もあるかもしれないチーム

そして自分達フレミングチームは、本来じゃんけんが存在しない特別な枠

そう思い、辺りを見回す。

慧「それを出すタイプは・・・目立ちたがり!・・・新しい物好き!・・・好機心旺盛!・・・自由人!!・・・出す手を間違えた気がする。」

目立ちたがりの芽衣、夏雄、新しい物好きのあかね、好奇心旺盛の百々と留奈、自由人の鶴。

鶴「めぐちゃん如何したの?」

慧「ううん何でもない・・・」

面々を見て、自分が出す手を間違えたとつくづく悔やむ慧だった。

百々「何はともあれ、兎に角ポイントを探るのが先決つすね!」

ともあれポイントを捜す事が先決だと言う百々。

あかね「位置が分からないと、如何しようも無いもんね!」

由美子「確かに・・・」

しかし、位置が分からない以上、どうしようもない。

そんな時由美子が

由美子「どんなに打球が伸びても方向が悪ければ唯のファール・・・!」

今の状況を野球言語で話す。

芽衣「タマ分かる?」

志摩「うい」

野球に詳しい志摩には分かるが、芽衣達には分からない。

すると今度は夏雄が

夏雄「此処はあたしに任せろ！こう言う時は機関科のカンに頼れば良い事だ！」

と言つて、得意のカンを使つて

夏雄「あたしのカンによれば・・・あつちだ!!」

ポイントの方向を指で指すが

芽衣「ホントに？」

慧「そんなの信用できないよ！」

芽衣達には信用されてない。

そして、今度は

鵜「なら探し物なら任せて！」

鵜が探し物なら任せてと得意のタウジングを出す。

慧「やると思つた！任せられないよ!?!」

慧は任せられないと言うが

留奈「でもつぐちゃんつて、これまでもタウジングで色々見つけてるんでしょ?・・・

意外とイケるかも！」

留奈は、鵜のタウジングを信用していた。

慧「そんなオカルトは信じないもん！」

鵜「探し物の内容をチェックポイントにすれば・・・」

慧「そんな融通利くの!？」

百々「まあ他にアテもないっすから一度試して見るのも面白いかもしれないっすよ
！」

由美子「この采配試合にどう影響するのか・・・見ものだね！」

志摩「うい！」

慧「何でそんなに他人事なのが分からない・・・」

芽衣「よーしじゃあ行ってみよう！」

慧「ふあ・・・ん！」

結局、鵜のタウジングを頼りに芽衣達は進む。

進む中

夏雄「お前ら、あたしのカンは無視かよ！」

自分のカンは無視された事に夏雄は不信感を抱きながら後を追う。

チョコキチーム

ましろ率いるチョコキチームは順調に進んでいたが

ましろ「うわっ!!」

洋美「宗谷さん!」

進む中、突然セミの突進され、ましろはその場に尻もちする。

洋美「大丈夫?」

ましろ「あ、ああ……」

洋美が手を差し伸べて、ましろは起き上がる。

美甘「宗谷さん、もう3回もセミに突撃されてるね!」

聡子「先頭を行ってくれるから犠牲になってるぞな!」

如何やら既に3回もましろはセミに突撃され、尻もちを付いている様だ。

ましろ「はあく、ついてない……」

何時ものセリフを言つて、悔むましろ。

光「副長の不運を除けば、探索は極めて順調だけどね!」

麗緒「優秀なのは間違いないからね……うちの副長……運はないけど……」

ましろの運以外は、順調に進んでいた。

そんなの束の間

秀子「ポイント発見しました!!」

秀子がポイントを発見する。

麗緒「流石航海科、よく見てるね！」

ましろ「此処まで順調に進めているのは山下さんの功績が大きいな」

楓「やつぱり目がよろしいんですのね！」

聡子「ウチも何個か見つけたぞな！」

此処まで順調に進んでいるのも秀子と聡子の功績が大きい。

そんな中、洋美は地図を見ながら辺りを見て

洋美「このまま行くと川が有るわね……ゴール付近にも川が流れている見たいだし……
遡って行けばゴールできそうだけど……これはルール上良いのかしら？」

集合地点付近に川が流れていると分かり、遡って行けばゴール出来そうだと確信するが、ルール上大丈夫なのか疑問を抱く。

美甘「ゴールに辿り着くのが目的ならそれで良いんじゃない？……位置を把握する最低限のポイントは見つけてるんだし！」

光「そうだよね。」

既にある程度のポイントは見つけているので、問題はないと思うが

楓「ですが……ポイントはできるだけ見つけるといったルールも有りませんでしたわよね？」

楓が言う様にポイントはできるだけ見つけるといったルールも有る。

麗緒「それって最短のルートを阻害する為だけに有るひっかけ問題の可能性も有るよね！」

だが、麗緒は最短のルートを阻害する為のダミーだと主張する。

聡子「時間内にゴールは絶対条件ぞな！」

しかし、時間内にゴールは絶対条件。

それを聞いたましろは

ましろ「そうだな・・・」

ある事を考える。

ましろ「しかし例えばこの実習・・・チェックポイントを救助者と仮定した救助訓練なのだとしたら・・・時間内に成るべく多くの救助者を発見し、目的地に辿り着くのが本来の意味なのかも知れない？」

ましろは、チェックポイントを救助者と仮定した救助訓練なのだと思います、時間内に成るべく多くの救助者を発見し、目的地に辿り着くのが本来の意味だと考える。

光「救助訓練・・・？」

ましろ「勿論唯の推測だが・・・」

洋美「確かに特別実習にしては説明されたルールだけを遂行するだけならそれ程難しい事じゃないわ・・・別の意味が隠されてる可能性も充分考えられる・・・」

洋美もましろと同じ考えだった。

ましろ「勝田さん！地図を見る限り此処からゴールまではどのくらいかかる？」

聡子「道が悪い事を考慮しても・・・1時間はかからないくらいぞな？」

美甘「まだ時間には余裕が有るね。」

ゴールするには1時間もかからない。

時間に余裕が有った。

光「じゃあゴールはひとまず置いといて、もう少しポイント探しに行つて見る？」

ましろ「良いのか？・・・自分で言つておいて何だが・・・これが救助訓練だと決まつた訳では・・・」

洋美「良いのよ・・・少なくとも私は宗谷さんの意見に納得したわ・・・恐らく他の皆も！」

ましろ「皆・・・ありがとう」

皆の一致を見て、ましろは感謝し

ましろ「よし！ではこれからはポイント探しを重視！・・・広範囲を搜索しつつゴールへの道筋は大きく外れないよう移動する！・・・それと制限時間には遅れない様に気を付けるぞ!!」

『了解!!』

時間内に残りのポイントを検索する事にした。

集合地点

その頃、集合地点で各グループの到着を待っていた古庄達の方は

古庄「……………」

薫「……………」

平賀「まだどのチームもゴールに辿り着いていませんね……この時間だと真つ先にゴールに向かう事を想定としたチームはゼロ……ですか？」

平賀は、この時間にゴールしたグループはまだいない事を告げる。

古庄「そうね……最低限のポイントでゴールを目指すなら最速を目指さなければ……その先の目標を達成できない……でもそれは数ある中の一つの想定よ……この実習内容をどう受け止めて、如何行動するか……それは生徒達の自由。」

それに対して、古庄は最低限のポイントでゴールを目指すなら最速を目指すのも数ある一つの想定。

だが、この実習内容をどう受け止めて、如何行動するかは、生徒達の自由だと告げる。

福内「楽しみに待ちましょう……あの子達が何に気づきそれを想定した上で、しっかりミッションを達成できるかどうか」

古庄「……………ええ」

薫「大丈夫ですよ！あの子達ならきつとやり遂げますよ！」

古庄達は、明乃達が無事に実習を終えて戻ってくるのを楽しみに待つ。

数分後

芽衣「いっちょば——ん！」

最初にゴールしたのは、何と道に迷いながらも辿り着いた芽衣達フレミングチーム。

幸子「雅かフレミングチームに一着を取られるとは思いませんでした。」

鈴「2位でも凄いよね！」

美千留「自信あったのにな・・・」

更に幸子達パーチームが2位でゴール。

果代子「疲れた・・・」

小百合「でも楽しかったネ！」

続いて、明乃達グーチームが3位でゴール。

そして、最後に

ましろ「すまない・・・時間を管理していた私の時計が不具合を・・・」

美甘「まあまあ」

麗緒「ギリギリ間に合ったんだし、だいじょうぶじゃん？」

ましろ達チヨキチームが時間ぎりぎりゴールした。

平賀「皆お疲れ様！」

古庄「ひとまず制限時間内に此処まで辿り着く事が出来た見たいね！」
ゴールした晴風クラスを古庄達が出迎える。

芽衣「はいはい！一位ゴールには何かご褒美とか有りませんか？」
一番にゴールした芽衣が褒美が有るのか問う。

薫「これは実習なので、そう言うものはありません！」
すると、薫が実習なので、そう言うものはありませんと言い返す。

ガン！

芽衣「頑張ったのに・・・」

ましろ「そりやそうだ！」

ないと聞いて、シヨックを受ける芽衣。

まあ確かにこれは授業の一環なので、褒美などは出ない。
それに

古庄「それに実習はこれで終わりじゃないわよ？」

実習はまだ終わっていない。

『え!?!』

それを聞いて、クラス一同に固まる。

福内「先ず本日各チームが作成した地図を回収します。」

古庄「あとは明日までに本日のオリエンテーリングで何を考え、どのように行動したのかレポートにまとめて提出する事……最終的に探索にかかった時間、地図の完成度、レポート内容をトータルで吟味の上、評価を下します。」

各グループで作成された地図を回収後、生徒達が作成したレポートと合わせて、評価を下す。

芽衣「うへえ……レポートもあるのか……」

レポートまでであると言われ、流石に皆やる気をなくすが

薫「皆何を落ち込んでいるの？もう少しがんばらないと！」

平賀「そうそう、もう終わったも当然！……レポートを乗り切れば明日は自由時間！……もう一息よ！頑張れ若者よ!!」

薫と平賀に激励され

『おお……!!』

皆はやる気を取り戻し、レポート作成を始める。

皆が書く中

薫「機関長もレポートを提出して下さいね！」

薫は特別参加した夏雄にもレポートを作成するよう言う。

夏雄「うう・・・」

夏雄は嫌々ながらレポートを作成する。

8月11日

翌日、レポートを作成し、古庄に提出した晴風クラスは

明乃「海じゃなくて、川だ・・・!!」

全員水着に着替え、川で遊ぶ。

川で遊ぶ中

平賀「賑やかだね!・・・川で遊ぶなんて何年振りかしら・・・」

平賀と福内が何故か水着姿で現れた。

芽衣「ええ!?!2人まで完全に遊びモード・・・」

福内「ふふっ!実は私たちも半分夏休みで来てるのよ!」

如何やら2人は夏休みで此処に来ていたのだ。

平賀「ビーチバレーでもする?ビーチじゃないけど!」

平賀は、ビーチバレーをしようと言い

由美子「現役ブルマーとビーチバレー対決!オープン戦みたいでワクワクするね

!」

小百合「ワーオ!エキサイティングね!」

麻命「よーし！やっつてやろってんでい！」

皆は平賀達と共にビーチバレーをする。

そんな中

明乃「あっ!？」

明乃はパラソルの下で地図の採点をしている古庄と薫に話しかけた。

明乃「古庄教官、山本教官！」

『ん?』

明乃「教官達も水着なんですわね？」

古庄と薫も何故か水着を着ていた。

古庄「あの子達が持ってきたのよ！まあ、どんな格好でも採点できるから仕方なくね」

薫「私は自前だけど！」

古庄の方は平賀達が持って来たと言ってブランケットを羽織る。

薫の方は自分で持って来た。

明乃「あの、実習の点数次第では、更に補習・・・なんて可能性も？」

明乃は、今回の実習で点数が悪かったら補修が増えるのかと心配したが

古庄「それはないわ・・・元々この実習自体補習みたいなものだし・・・点数をつけると言っても、判断能力や適性を見るのが大きな目的だから」

自習自体が補習で、判断能力や適性を見るのが目的。

明乃「そつか・・・」

それを聞いて、明乃はホツとする。

古庄「チーム分けの方法も少しは採点に影響してるわよ？」

だが、ホツとするのも束の間、チーム分けの方法も少しは採点に影響すると言われ

明乃「えっ!? それってもしかしてマイナスなんじゃ・・・」

それを聞いて、明乃は動揺する。

古庄「ふふっ、どうかしら？」

と言つて古庄は笑みを浮かべて誤魔化す。

そんな時

鈴「岬さん！」

麗緒「艦長も一緒にやらない？」

鈴と麗緒と一緒にビーチバレーをしようと誘う。

古庄「ほら、私は良いから岬さんも遊んでいらつしやい！」

古庄は、自分の事は良いから遊んで来なさいと告げる。

明乃「はい、あの・・・良かったら教官達も、それが終わったら一緒に遊びませんか

？」

明乃は、古庄と薫に採点が終わったら一緒に遊びませんかと誘う。

古庄「・・・そうね、考えておくわ!」

それに対して、考えておくわと告げる。

明乃「やった!じゃあ待ってますね!」

古庄「ええ」

それを聞いて、明乃は待ってますねと言って、皆の元に向かう。

明乃が行った後、2人は採点を続ける。

古庄「此処は良いから貴方も行ったら!」

古庄は、薫にも遊びに行くよう言うが

薫「いえ、私も手伝います・・・どうせ仕事ですから!」

薫は拒み、古庄を手伝う。

古庄「そう」

2人は採点を続けるが、次のフレミングチームの地図を採点し様とした途端

古庄(・・・宝の地図・・・?)

フレミングチームが書いた地図で『まいぞー金』『温泉足湯サイズ』と書かれており古

庄は思わず首を傾げた。

第13章 新たなる敵と陰謀

8月10日

薫と晴風クラスが特別実習に行っている頃

国土交通省

国土保全委員会

「では今回の予算案について、閣議を始めます。」

国土保全委員会では、来年度の予算案について会議が行われていた。

龍之介も真霜と共に主席していた。

今回の予算案の会議では、烈風の量産や試作中の深山の量産許可、それと飛行場の設
営地の確保について協議が行われた。

橘「では、今回の課題である航空機の量産及び拡張計画について・・・Gフォースの
宗谷准将！」

橘 文絵新国土交通大臣に言われ

龍之介「はい！」

龍之介は、Gフォースの代表として、委員会の幹部達の前に立つ。

龍之介「今回の航空機の量産及び拡張計画についてですが……RATa事件では、学生艦の捕捉や拿捕に大いに活躍をしました……これを機に方々には航空機の量産許可を認めてもらいたい……それと訓練に必要な飛行場の確保も！」

龍之介は、RATa事件での活躍を話し、委員会の幹部達に航空機の量産をこぎつけ様とする。

更に訓練に必要な飛行場の確保も提案した。

『……』

それを聞いた委員会の幹部達は、何も反対はしない。

RATa事件以降、殆んど委員会の幹部達は交代している。

真霜も反対しない。

このまま通ると思った。

しかし

「お待ち下さい!!」

それに待ったをかける者がいた。

橘「滝 一等監督官」

それはホワイトドルフィンの滝 総一郎一等監督官。

前任の野田に代わって、新たにホワイトドルフィンの最高責任者に就任した。

総一郎「宗谷准将に言う事も最もですが、私は反対です！・・・確かに航空機の量産は必要です・・・ですが我々ホワイトドルフィンに必要なのは武蔵より強力な戦闘艦です・・・この前のRATa事件では、武蔵相手にブルーマーメイド艦3隻があつという間に航行不能になりました・・・その原因は噴進魚雷などの誘導兵器に頼り過ぎた事です・・・これを機に現在建造している超甲巡あづま型の量産計画を提案します。」

総一郎は航空機の量産及び拡張計画に反対する。

更にこの前のRATa事件の教訓を生かして、現在建造している超甲巡あづま型の量産計画を提案して来た。

龍之介「愚かだな！」

それに対して、龍之介は愚かだと告げる。

総一郎「何だと!？」

龍之介「いくら最強の戦闘艦を増やしても航空機には勝てない！」

龍之介は、総一郎にいくら最強の戦闘艦を増やしても航空機には勝てない事を告げる。

総一郎「そんな事はない！・・・あづまの武装は強力だ！・・・航空機など蠅よりも恐ろしくない！」

それに対して、総一郎は、あづまの武装は強力だと言って譲らない。

龍之介「まだ分からないのか！……いくら武装が強力でも、航空機の速さには叶わない！……それは、この前の戦闘でも出ているだろう……そんな事も分からないのか？」

龍之介もいくら武装が強力でも、航空機の速さには叶わないと言つて馬鹿にする。

総一郎「何だと！」

龍之介「何を！」

双方とも意見を怯まない。

それを見かねた橘国交相は

橘「止めなさい2人共！」

争う2人を止める。

橘に言われ2人は争うのを止める。

橘「取り合えずこの件は後日改めてと言う事で……」

結局、この件は後日に決まる事になった。

会議は終了し、退出する。

龍之介「くそ！あともう少しで！」

退出した龍之介はご機嫌斜めだった。

真霜「ご機嫌斜めね！」

龍之介「ああ！・・・折角通ると思つたのに・・・何なんだあいつは？」

龍之介は、真霜に総一郎とは何者か問う。

真霜「滝　総一郎・・・最近ホワイトドルフィンの監督官に就任した凄腕のエリートよ！」

それに対して、真霜は最近ホワイトドルフィンの監督官に就任した凄腕のエリートだと説明する。

龍之介「そんなヤツがホワイトドルフィンに居たとは驚きだな！」

真霜「確か前任者に嫌われて、地方に左遷されていたらしいわよ！・・・」

如何やら邦夫によつて、地方に左遷されていたが、邦夫の失脚で呼び戻されたようだ。

龍之介「じゃ、今回は復帰と言う事か・・・」

龍之介は、再び敵が現れたと感じ取る。

一方、反対側の通路でも

総一郎（宗谷龍之介・・・あの忌まわしい野田を失脚に追いやった人物！・・・深町前国交相や宗谷監督官の後ろ盾を良い事に好き勝手しているが・・・私が復帰した以上そうはさせない！・・・何としてもこの計画を通さねば！）

総一郎は、龍之介の好き勝手にはさせない為にもあづまの量産計画を何としても通さねばと考えていた。

横須賀女子海洋学校、Gフォース艦隊指揮官室

龍之介「ただいま！」

功「お帰りなさい！」

国土交通省から戻って来た龍之介を功と美由紀が迎える。

美由紀「如何でした？」

美由紀は早速会議の結果を問う。

龍之介「保留になったよ！」

龍之介は、保留になったと伝える。

功「保留？」

美由紀「如何いう事ですか？」

2人は保留になった理由を問う。

龍之介「ホワイトドルフィンから思わぬ邪魔が入った。」

それに対して、ホワイトドルフィンから思わぬ邪魔が入ったと言う。

功「ホワイトドルフィン!？」

美由紀「またホワイトドルフィンが!?!? 一体誰が?」

またもホワイトドルフィンが介入した事に美由紀は腹をかきながら、誰だと問う。

龍之介「滝 総一郎!?!?!? 何でも地方に左遷されていたエリートで、新しく監督官

に着任したそうだ。」

龍之介は、総一郎の事を説明する。

功「ほう・・・態々地方から呼び戻したと言う事は・・・その新しく着任した監督官は余程のキツネですかね？」

総一郎の事を聞いて、余程のキツネだと言うが

美由紀「単に馬鹿なだけでしよう・・・地方に飛ばされるぐらいだから・・・どうせいやいやで戻されたんでしょう。」

美由紀は、単に馬鹿なだけだと侮る。

龍之介「いや、参謀の言う通りかも知れない・・・そいつは逆に超甲巡あづま型の量産計画を提案して来た。」

龍之介も功と同じで、更に総一郎が提案して来た超甲巡あづま型の量産計画の事を告げる

美由紀「何と愚かな！」

超甲巡あづま型の量産計画を聞いて、愚かだと言う美由紀。

龍之介「確かにな・・・だが、向こうのも保留になっている事だし、こつちの提案もまだ生きている・・・次の予算会議で決まるだろう・・・その時こそ、俺達の提案が通るだろう。」

次の予算会議では、間違いなく航空機量産と空母の量産が通ると龍之介は確信する。だが、そう事が上手く運ぶだろうか

何れにせよ

次の予算会議で決まる。

果たして、どちらが選ぶだろうか

そして、龍之介は、この事を総司令の深町に報告した。

横須賀女子海洋学校、Gフォース総司令室

龍之介「以上が予算会議での結果です。」

深町「ん．．．ホワイドルフィンが．．．」

龍之介「雅か、またホワイドルフィンがじゃまだてするとは．．．ゴジラ対策と言い、今回の事も．．．我々に何の恨みがあるのか？」

龍之介は、何度も邪魔をするホワイドルフィンは、自分達Gフォースに何か恨みがあるのかと思ったが

深町「恨みなど無いだろう．．．向こうは前の監督官を失脚するきっかけを作った我々に感謝しているだろう。」

深町は、今のホワイドルフィンに恨みなど無く、前任である邦夫を失脚させたきっかけを作ったGフォースに感謝しているのだと告げる。

龍之介「では何故邪魔を？」

深町「恐らく我々がこれ以上好き勝手しない様にと歯止めを掛け様としているんだろ
う……相変わらずな奴だ！」

深町は、総一郎の考えを呼んでいた。

龍之介「随分と滝監督官の事に詳しいですね……如何いう関係で？」

深町「私の教え子だよ！」

龍之介「教え子!?!」

何と総一郎は、深町の教え子だった。

深町「私はまだホワイトドルフィンに在席していた頃、短期間だったが、彼の指導教官をした……優秀な生徒だったよ……君とは比較にならない程……」

深町は、かつてホワイトドルフィンに在席していた頃、短期間だが総一郎の指導教官をしていた。

深町が言うには、総一郎の優秀差は、龍之介とは比較にならない程だと言う。

龍之介「成程!……しかし、何故そんな優秀な男が今まで地方に左遷されていたんですか？」

それに対して、龍之介は何故そんな優秀な総一郎が今まで地方に左遷されたのか問う。

深町「左遷と言うよりは更迭だ……彼は野田監督官の右腕だった……だが、突然彼は更迭され地方に飛ばされた……理由も明かされないままな！」

総一郎は、かつて邦夫の右腕だったが、突然更迭され地方へと左遷された。

更迭の理由は、深町にも分からず

龍之介「奴の右腕だったなら益々警戒しなくてはなりません！」

邦夫の右腕だったと知った以上、龍之介は総一郎の動きを警戒する。

深町「ん……」

しかし、深町には別の方向で見えていた。

横須賀女子海洋学校、地下ドック

此処は、横須賀女子海洋学校の地下ドック

此処では、横須賀女子海洋学校所属の学生艦やGフォース艦の整備が行われている。

白鳳は此処に有った。

GF隊員「おっ！管制システム如何だ？」

GF隊員「異常なし……現在30%まで修復！」

GF隊員「推進システムは？」

GF隊員「此方も20%までしか修復が完了していません！」

ゴジラとの戦闘で白鳳は大きく損傷を受け、この地下ドックで大規模修理が行われて

いた。

装甲が外され、更に武装も外されてむき出しの状態だった。

次郎「此処から見ると……まだ修理には大分掛かりそうだな！」

慶介「ええ、まだ機関部の修理に大分掛かりそうです：それから外装の取り換え：更にハイパーメーサー砲からプラズマグレネード砲への換装：そしてシステムチェック……少なくともあと1年は……」

慶介の見立てでは、機関のレーザー核融合炉の修復に時間が掛かっていた。

更に外装の取り換え、新装備の換装、システムのチェック。

少なくともあと1年は掛かる。

次郎「1年!?!……そんなに待てねえよ！何とかならないのか？」

修理期間が1年と聞いて、次郎はそんなに待てないと言って、何とかならないのかと問う。

慶介「こればかりは如何する事も……」

流石の慶介にもこればかりは如何する事も出来なかった。

次郎「1年か……何も無ければ良いんだが……」

次郎は、何も無ければ良いと祈る。

慶介「そう言えば……山本中佐は一緒じゃないんですか？」

話は変わり、薫は一緒じゃないんですか問う。
すると

カン！

いきなり手摺りを叩き

次郎「古庄教官と一緒に晴風クラスの特別実習だそうだ……俺は置いてきぼり……」
暗い顔をしながら晴風クラスの特別実習に行った事や自分が置いてきぼりにされた事を言う。

慶介「そ、それはお気の毒に……」

次郎「だろー！……折角結婚したのに、これじゃ俺は……ううう!!!」

薫に置いてきぼりにされた事にかなり落ち込んでいた。

慶介「そんなに泣かないで下さいよ……今にきつと良い事がありますよ！」

落ち込む次郎に慶介は慰め様とするが

次郎「そんなの今欲しいよ!!」

次郎には、無駄な慰めだった。

横須賀ホワイドルフィン庁舎

此処は、ブルーマーメイドと並ぶホワイドルフィンの本部がある場所。

横須賀ホワイドルフィン庁舎、総一郎の執務室

ホワイドルフィンの執務室では総一郎が書類作業をしていた。
そんな時

ブーブー

電話が鳴り

総一郎「はい！」

出ると

『Gフォースの深町総司令が面会したいと』

何と深町が総一郎に面会する為、態々出向いて来たのだ。

総一郎「深町国交相が!?!? お通ししろ！」

それを聞いた総一郎は、直ぐに深町を通す。

深町「久しぶりだな滝！」

総一郎「お久しぶりです深町教官！」

師と教え子、久しぶりに2人は再会する。

深町「教官はよしてくれ!?!?!? 今はGフォースの深町総司令として此処に居る。」

総一郎「そうでしたね!?!?!? それで、此処には何様で?」

再開も束の間、深町に何よう出来たのか問う。

深町「率直に言おう!?!?!? 滝!?!?!? お互いに争うのを止めて、我々に協力して欲し

いー！」

深町は、率直に協力を申し出るが

総一郎「ん……それはできません！」

総一郎は拒否する。

深町「何故だ？……君と私は日本を守る事では考えが同じの筈？」

拒否する総一郎に深町は理由を問う。

総一郎「確かに日本を守る事では貴方と考えは同じです……ですが貴方々は単にそれを口実にして、我々の上に立とうとしている……結果貴方々は組織を独占している……だから私は、それを阻止しようと……」

総一郎は、Gフォースがゴジラから日本を守る事を口実に自分達の上に立とうとしている。結果的にGフォースが組織を独占している様にしか見えなかった。

深町「確かに君の言う通り、我々は組織を独占しているのかもしれない……だが、我々は決して、君達の上に立とうとしてはいない……あくまでGフォース、ブルーマーメイド、ホワイトドルフィン……三体制による協力体制を確立したいだけだ……それがいずれ来るゴジラ戦の備えにもなる。」

それに対して、深町はあくまでいずれ来るゴジラ戦の為に、三体制による協力体制を

確立したいだけだと言うが

総一郎「では、その後は？・・・その体制を維持できるのですか？」

深町「ん・・・」

総一郎「維持できないでしょう・・・何れ戦いが終われば、貴方達は我々を・・・」

総一郎は、ゴジラ戦の後の事を恐れていた。

今は協力体制を確立しても、ゴジラ戦が終われば、その体制は一気に崩れる。

そうなれば、一番に功績を挙げるGフォースがブルーマーメイド、ホワイトドルフィンを潰すかもしれない。

深町「そんな事はない・・・我々は、その事を重々承知している・・・だから私は絶対そんな事は無いと信じている。」

それに対して、深町は龍之介達がそんな事は全然考えていないと分かっている。

だから、そんな事は絶対ないと告げる。

総一郎「これ以上話しても無駄ですね・・・結局、貴方とは敵同士という事です。」

深町「残念だよ！・・・君とは争いたくなかったが・・・」

結局、2人の意見は一致せず、敵同士となった。

深町「最後に聞きたい・・・君は何故更迭されたんだ・・・君ほどの優秀な？」

深町は、最後に何故更迭されたのか問う。

総一郎「嫌気ですよ！」

深町「嫌気？」

総一郎「私は野田監督官がしている事に嫌気がさしたんですよ……あの男は監督官でありながら、予算を横領したり、その金を委員会と政府に横流しをしていたんです……更にはアメリカとの裏取引も……」

深町「君はRATt事件の事を知っていたのか……何故、止めなかったんだ？」

総一郎「止め様としました……ですがあの男は、私の意見には全く耳を持たず、あろう事か、私を更迭しようとしてました……私は抵抗しましたが、部下達に裏切られ、止む追えず去りました。」

総一郎は、邦夫の右腕として活躍しようとしたが、邦夫が裏で行っていた事に激怒し、更にRATtの実験に関与を止める様に進言したが、聞き入れられず、逆に更迭され地方に左遷されてしまった。

深町「そうだったのか……すまない事をした。」

左遷された理由を聞いて、深町は何もできなかった事を悔やむ。

首相官邸

その頃、首相官邸では、田沼に代わって、二階堂友里恵通商大臣が日本初の女性総理大臣として就任していた。

側近A「総理！外務省から報告が！」

二階堂「何と？」

側近A「アメリカから我が国との関係を修復したいとの要求が来ています！」

RATt事件以降関係を悪くしていた日本政府との関係を修復したいとアメリカ政府から要求が来ていた。

二階堂「まだ、RATt事件から数ヶ月しか経っていないのに・・・何故今になつて？」

二階堂は、RATt事件から数ヶ月しか経っていないにもかかわらず、何故今になつて日本との関係を修復したいのか、分からなかった。

側近A「分かりません・・・ですが、散々我が国を侮辱しておきながら今になつての關係修復とは・・・これは何か思惑があつての事だと思われます。」

確かに、RATt事件の時に散々日本を悪者同然に言っておきながら今になつての關係修復は、何かアメリカの思惑が有るのかと推測する。

二階堂「では如何すれば良いと思う？」

二階堂は、側近に返事は如何すれば良いのか問う。

側近A「今は拒否して、様子を見る方がよろしいと思います・・・今承諾すれば、前の総理と同様に何らかの裏取りを強引に交わされる恐れが・・・」

今は拒否して、様子を見る方が良いと提案する。

友里恵「そうね・・・国民を守っている我々がそんな事に手を染める訳にはいかないわね・・・良いでしょう・・・この件は丁重にお断りする様に伝えて！」

側近A「はっ！」

結局、アメリカからの要請は拒否する事にした。

側近A「それと国交相から！」

二階堂「!?」

側近A「Gフォース及びホワイトドルフィンからの別々の提案が出されているので、どちらを上げれば良いのかと意見が来ていますが」

橘から保留になっているGフォース及びホワイトドルフィンからの別々の提案でどちらを取り上げれば良いのかと意見が来ていた。

二階堂「流石の橘国交相もお手上げ見たいね!・・・取り合えず此方でも検討してから後日に返答すると伝えて！」

二階堂は、自ら検討してから返答すると伝えた。

果たしてどちらの提案が取り上げられるのか

宗谷家、リビング

真霜「そう、深町総司令でも駄目だったのね！」

龍之介「ああ、総司令が何度も言ったが駄目だった。」

龍之介は真霜に総一郎の説得が駄目だった事を告げる。

真霜「折角、R A T t事件が終息したのに、また争う事になるなんて・・・」

龍之介「仕方がない・・・こればかりは如何しようもない！」

真霜「一体何が不満なの？」

龍之介「総司令が言うには・・・如何やら俺達が組織を独占している事が不満らしい・・・」

真霜「あり得ないわ！だってそんな事！」

龍之介「得なくもない！」

真霜「えっ！」

龍之介「確かに俺達GフォースはR A T t事件やゴジラ戦で大きな功績を上げた・・・その為にブルーマーメイド、ホワイトドルフィンと同様に国土保全委員会で大きな発言権を得ている・・・しかし、いつの間にか出し抜いてまで意見を言っている・・・これじゃ、俺達が組織を独占していると言われても仕方がない！」

Gフォースは、R A T t事件やゴジラ戦で大きな功績を上げた。

その為にブルーマーメイド、ホワイトドルフィンと同様に国土保全委員会で大きな発言権を得た。

だが、いつの間にか出し抜いてまで意見を言える様にまでなってしまった。

これでは独占しているとと言われても仕方がない。

真霜「じゃ、如何するの？」

龍之介「本当は大人しくしたいんだが：ゴジラの存在がある以上それでもできない：このまま行くしかない！」

確かに独占しているとと言われるなら、此処は大人しくするべきだが、ゴジラの存在がある以上そうはいかず、このまま行くしかなかった。

真霜「出来れば協力したいんだけど・・・」

それに対して、真霜は協力できれば良かったが

真霜「流石にブルーマーメイドまで巻き込むのは不味い・・・折角の2体制の協力が崩れるのは避けたい。」

流石にブルーマーメイドまで巻き込むのは不味いと思ひ、龍之介は協力を断った。

それから二日後

8月12日

国土交通省

国土保全委員会

橘「では、保留にしていた件ですが・・・」

遂にこの日、保留になっていた案が決まる。

『・・・・・・・・』

決まるのは龍之介の案か

それとも総一郎の案か

両者共緊張が走る。

そして

橘「検討した結果・・・・・・・・滝監督官の案を了承いたします！」

採用されたのは総一郎のあずま量産計画だった。

龍之介の航空機の量産及び拡張計画は採用されなかった。

龍之介「・・・・・・・・」

敗北した事に龍之介は何も言わない。

反対する者もおらず、これで終わりと思ったが

真霜「待ってください!!」

真霜が待ったを掛けた。

橘「宗谷監督官!？」

真霜「何故宗谷准将の案ではなく、滝監督官の案が採用されるのですか？」

何故総一郎の案が採用されたのか理由を問う。

橘「それは滝監督官の案が最も最適だからです・・・確かに宗谷准将の案も発想も良いですが・・・今からの航空機の量産及び拡張すればかなりの予算が掛かるし、能力も掛かる・・・それよりは超甲巡あづま型の量産の方が予算も掛からず、無駄な能力もいらぬ・・・だから採用したのです。」

理由は、予算が安い事と無駄な能力がいらなかつた事だつた。

龍之介の航空機の量産及び拡張計画は発想は良いが、今からすればかなりの予算と能力が必要になる。

今の政府にそんな余力はない。

その為、総一郎の超甲巡あづま型の量産の方が予算も掛からず、無駄な能力もいらぬから採用されたのだ。

真霜「納得できません!!・・・確かに航空機の量産や搭乗員の育成には予算も能力も掛かります・・ですが、新しいのを取り入れる事は、それぐらいの代償が必要になる・・それは当たり前じゃないですか!!」

だが、真霜は納得せず、予算と能力が掛かるのは当たり前じゃないですかと反論する

が

橘 「いくら貴方が反論しても決定を変える気はありません。」

橘は決定を変える気はなく、それでも真霜は反論するが

真霜 「橘国交相！あっ!？」

龍之介 「止せ真霜！」

それを龍之介が止めた。

真霜 「!？」

龍之介 「もう良いんだ！」

真霜 「龍之介・・・」

龍之介の言葉に真霜は大人しく反論するのを止める。

龍之介 「分かりました・・・決定を変える気はないと言うなら、此方としては従うしかないでしょう・・・ですが、後からこの決定が誤りだった事を後悔しない様に・・・」

龍之介は、橘に従うもこの決定が誤りだった事を後悔しない様にと忠告した。会議は終了し、龍之介と真霜は会議室を後にする。

国土交通省、廊下

帰路につく中

真霜 「如何して止めたの！」

真霜は、龍之介に何故反論を止めたのか理由を問う。

龍之介「あのまま反論したって、向こうが変える気がないなら無駄な足掻きだろう。」
それに対して、龍之介は向こうが変える気がないなら無駄な足掻きだろうと告げる。

真霜「そうだけど、でも！」

龍之介「俺の代わりに反論した事は感謝する……だが、今は耐える事だ真霜……何れこの案を採用した事を後悔する日が来るまでな！」

龍之介は、真霜に反論した事を感謝しながら今はこの案を採用した事を後悔する日が来るまで耐えろと告げて行く。

真霜「ん……」

それに対して、真霜は何も言わず龍之介の後を追う。

その時

「宗谷准将！」

突然待ったを掛ける者が居た。

龍之介「!？」

真霜「滝監督官？」

それは、総一郎であつた。

総一郎「何故何も言わない？」

総一郎も何故反論しないのか問う。

龍之介「言ったところで何も変わらないからだ。」

それに対して、真霜と同じ事を告げる。

総一郎「最後に一つ聞きたい・・・貴方はゴジラとの戦いで何を望む？」

それを聞いた総一郎は、龍之介にゴジラとの戦いで何を望むのか問う。

龍之介「何も・・・唯望むと言ったら・・・それは安らかな平和だ！」

それに対して、安らかな平和だと言う。

総一郎「その平和で貴方は如何するのですか？」

龍之介「そうだな・・・取り合えず一線を引く！」

何と安らかな平和がくれば龍之介は一線を引くと告げる。

『!』

それを聞いて2人は驚く。

龍之介「平和になれば俺みたいな奴はいらないし・・・それに代わりも居る・・・後はそいつらに任せるだけだ。」

龍之介は、既に自分に代わる後継者を育てていて、後の事をその人に任せて、自分はさっさと一線を引く事にしていた。

そう言つて、龍之介は去る。

真霜は、不安そうな顔をしながら後を追う。

総一郎「やはり侮れない！」

総一郎は、龍之介の真意を聞いて、侮れないと覚った。

画して、龍之介の航空機の量産及び拡張計画は振り出しに戻ってしまった。

だが、これで終わりではない。

アメリカ、ワシントンD・C

ホワイトハウス、大統領執務室

一方、アメリカのホワイトハウスでは

大統領補佐官「大統領！・・・日本政府が我々の要求を拒否しました。」

日本政府がアメリカ政府の要求を拒否したと報告が入る。

キング「おのれミス二階堂め！女だと見て甘く見過ぎた！・・・折角日本に我が国の

借金を肩代わりし様と思ったが・・・」

報告を聞いたキングは、二階堂総理を女だと思つて甘く見すぎていた為、要求が拒否

されるとは思わなかつたのだろう。

お陰で日本がアメリカの借金を肩代わりするのを防いだ。

しかし

大統領補佐官「相手は元々ブルーマーメイドから政治家に転身した人物です・・・そ

う簡単に我々の意のままになるとは思いません！」

キング「寄りにも寄つてブルーマーメイドが総理になるとは……やはりあの時ミスター田沼を切り捨てるべくではなかつたな！」

キングは、相手が元ブルーマーメイドの出身だと聞いて、やりにくい相手だと思い、田沼を切り捨てた事を後悔する。

大統領補佐官「今さらくいても仕方ありません……此処は日本政府に我が国に盾突いた事を思いしらしめるべきです!!」

補佐官は、拒否する日本政府に対して、制裁を加えるよう言うが

キング「しかし、そんな事で日本に制裁を加える事はできない……唯でさえ国際問題になる。」

キングの言う通り、戦争行為なら兎も角、たかだ要求を拒否した事で制裁を加えるれば国際問題になる。

大統領補佐官「仰る通りです……ならば我々以外で！」

それに対して、補佐官はアメリカ政府以外に頼もうとする。

キング「ほう……具体的に？」

大統領補佐官「例えば……海賊とか！」

何とそれは世界の海上交通を脅かす武装集団

つまり海賊である。

キング「成程！・・・奴らにテロ行為をさせると言うのかね？」

大統領補佐官「そうです！・・・日本政府が手に負えない程の大規模テロ行為を発生させれば・・・日本政府として我々に救援をこうでしょう・・・其処を狙って、救援の代償に要求を付き付けるのです・・・さすれば日本政府として、要求を飲むしかないでしょう。」

海賊を利用して、日本政府が手に負えない程の大規模テロ行為を発生させる。

日本政府が手に負えなくなりアメリカ政府に救援をこう様にする。

其処を狙って、救援の代償に要求を付き付ける。

またもアメリカ政府の陰謀が進行しようとしていた。

第14章 夏休み 前編

8月14日

予算案会議から数日後

宗谷家、龍之介と真霜の部屋

龍之介「ぐう……ぐう……」

真霜「すう……すう……」

この日、龍之介と真霜は夏休みで部屋で寝ていた。

ついでに相変わらず部屋の中は、読んだ本や脱いだ服が散乱していた。

2人が寝ていると

ガチャ！

ましろ「もう……！」

ましろが部屋に入って来て

ましろ「いい加減2人とも起きろ……!!それと服は、脱いだら洗濯機!!」

と2人を起こし、散乱している服や本を片付けるよう言うが

龍之介「ん、何だ!？」

龍之介が起きた途端

ましろ「ひっ!？」

ましろは急に顔が赤くなる。

それは2人が裸で寝ていたからだ。

起きやがった龍之介が裸で対応したので、それを見たましろは

ましろ「う、うああああ・・・!!」

顔を赤くし、悲鳴を上げて逃げ去っていった。

ましろにとつて初めて男の裸を見たので、刺激が強すぎた様だ。

真霜「ん、何!？」

ましろの悲鳴に横で寝ていた真霜は目を覚ます。

宗谷家、リビング

しばらくして、2人はリビングに集う。

ましろ「もう寝る時ぐらい服を着てください!!」

龍之介「御免、御免!」

ましろに注意される龍之介。

真霜「良いじゃない寝る時ぐらい・・・」

寝ぼけた状態の真霜。

真冬「はっはっはっ！・・・結婚しても相変わらずだなあ2人共！」

結婚しても2人が家でずぼらな事に変わりない事に笑う真冬。

龍之介「結婚したって、そう簡単には変わらねえよ！」

結婚したって、そう簡単には変わらないと言う龍之介。

真霜「休みの日くらいのおんびりしたいの！」

ましろ「何度も言うけど・・・のんびりとだらしないのは違うよ・・・もう昼だよ！」

ましろに何度も注意される真霜。

何度も見る光景だ。

ましろ「はいお茶！」

ましろは、真霜にお茶を渡す。

真霜「ありがとう。」

ましろ「龍之介さんにも・・・」

序に龍之介にも

龍之介「ああ、すまねえ・・・」

真霜「それにしても・・・皆揃って、休み何て、久しぶりね！」

真冬「母さんは、仕事だけだね！」

仕事でない真雪を除いて、宗谷家全員揃うのは久しぶりだった。

真冬「それにしても残念だったな！・・・龍之介の案が通らなくて・・・」

真霜「!？」

真冬は、この前の予算案会議で龍之介の航空機量産及び拡張計画が通らなかつた事に驚いていた。

龍之介「仕方ねよ！・・・向こうが決めたのなら・・・それに向こうはあづま量産計画がお好きな様だ！」

それに対して、龍之介は向こうが決めた事だし、あづま量産計画がお好きな様だと告げる。

真冬「そうかな！別にあたしらは好きじゃないんだけど・・・」

真冬は、あづま量産計画をあまり好きではないと言うが

龍之介「お前はそう言うけど・・・完成すれば言い方も変わるだろう。」

確かにいくら好きではないと言っても、あづまが完成すれば気が代わる事も有る。

人間とはそう言う者だ。

真霜「そう言えば・・・ましろは最近学校の方は如何？」

真霜は、話を逸らそうとましろに学校生活は如何かと聞く。

ましろ「如何って別に・・・RATt事件以降は特に問題なく過ごせてると思うけど」
真霜「そう」

如何やら何事も無くましろは学校生活を過ごしている様だ。

真冬「艦長になれなくて捻くれてるかと思つたけど……何とかやつてる見たいだな！」

それを聞いた真冬は、ましろが艦長になれなくて捻くれてるかと思つた。

ましろ「べつ、別に捻くれてなんか……っ」

それに対して、ましろは捻かれては無いと言うが

思えばそんな事も無くも無かつた。

いつも何で明乃が艦長何だと影で不満を抱いていた事も有つた。

だが

ましろ「ま……まあ艦長じゃなくてもそれぞれに大切な役割が有る訳だし……今は別に気にしてないよ！」

今はそんな気も無く、今は副長として艦長を支える役割が有るのだから別に気にしてない。

真冬「何!?!」

それに真冬は激怒し

真冬「そんな事で如何する！もつと野心を持って野心を！」

ましろにもつと野心を持ってと言ひ張る。

ましろ「どっちなんだ一体!? 捻くれてた方が良いのか!？」

しかし、ましろは真冬の言い方が理解できない。

捻くれてた方が良いのか、それとも捻くれていない方が良いのか、全く分らず

真冬「久々に根性入れてやろうか・・・!？」

ましろ「止めて・・・!!」

全く真冬は根性を入れるしか考えない。

その犠牲になるましろ。

真霜「我が家ねえ・・・お尻揉んでも根性は入らないと思うけど・・・」

龍之介「困ったものだ。」

そんな2人に呆れる龍之介と真霜。

そんな時

真冬「つとそうだ・・・学校と言えば母さんから聞いたぞシロ・・・スキツパーの免

許取るんだって?」

ましろ「!」

真冬は、ましろがスキツパーの免許を取得しようとしている事を真雪から聞いたと告

げる。

真霜「あらそうなの? 良いじゃない!」

それを聞いた真霜は良いじゃないと賛同する。

ましろ「うん、まあ・・・最初の海洋実習が色々想定外な事ばかりで・・・でも実際海に出たら、それが当たり前前何だと思った・・・それでまあ、その・・・出来る事は多い方が良いかと思つて・・・」

ましろは、前回の海洋実習で自分がいかに何もできなかった事がはつきりと分かり、もつと自分が出る事をしようと思ひ。

其処で明乃、聡子、理都子と並んで、自分も大型スキッパー免許を取得する事にしたのだ。

真冬「そうか!・・・良いぞ!・・・出来ないよりは出来る方が良い!何だつてそうだ!」

ましろのスキッパー免許取得の理由を聞いた真冬は納得し

龍之介「確かに自分の取り柄が増えるのは良い事だぞ!」

龍之介も感心する。

真冬「よしよし!じゃあ今日は特別にあたしが稽古を付けてやろう!」

そして、真冬は自らましろに稽古を付けると言い出す。

ましろ「ええっ!?!」

それを聞いたましろは驚愕し

ましろ「いや、良いよそんなのっ！」

拒否しようとするが

真冬「遠慮すんなって、現役ブルーマーメイドの個人稽古なんて貴重だろ？」

真冬の勢いに拒否する事も出来ず

ましろ「真霜姉さん何とかしてっ！」

真霜に助けを請うが

真霜「頑張つてね♡」

あっさり見放される。

ましろ「龍之介兄さん！」

今度は龍之介に助けを請うが

龍之介「健闘を祈る！」

此方もあっさり見放されてしまった。

ましろ「役立たず!!」

2人に見放され、ましろは役立たずと言って、結局真冬の稽古を受けに行つた。

2人が居なくなつた後、リビングには龍之介と真霜だけになつた。

龍之介「さてと！」

真霜「!?」

突然、龍之介は立ち

龍之介「折角の眠りを邪魔されたんだから、どつか遊びに行くとするか!」

真霜「あつ・・・そうね!」

と言う訳で、ましろと真冬がいない間に2人は何処かに遊びに行くのだった。

横須賀市、とある海水浴場

その頃、薫は、なのは達に誘われ、次郎と共に海水浴場に来ていた。

なのは「いくよ!」

ビーチバレーをするなのは、フェイト、次郎、はやて、ヴィヴィオの5人。

フェイトと組んでなのはは、アタックする。

次郎「よし・・・うえ!」

『!?』

なのはの一撃が次郎の顔面に命中した。

なのは「じ、次郎君大丈夫?」

次郎に駆け寄るなのはとフェイト、はやて、ヴィヴィオ。

次郎「だ、大丈夫、大丈夫・・・」

大丈夫だと言って笑う次郎。

薫「……」

それを遠くからパラソルの下で見る薫。

だが、薫は有る事に悩んでいた。

そんな時

次郎「如何した薫!？」

薫「!？」

ビーチバレをしている次郎が薫に駆け寄り

次郎「皆と遊ばないのか？」

と言つて誘う。

薫「う、うん！後で行くね！」

それに対して、薫は後で行くねと言う。

次郎「何を考えていたんだ？」

次郎が側による。

薫「ん……兄さんの事を考えていたの」

次郎「准将の事か？」

薫「この前、兄さんがゴジラ戦後に一線を引くつて言つてたでしょ！」

薫は、龍之介が以前言つた事を考えていた。

次郎「ああ、そんな事言つてたな？」

薫「今まで肝心な事は全部兄さんが決めていたけど……今度は私達が決めなきゃいけない……でもそんな事出来るんだろうか……全然分かんなくなっちゃった。」

今までの事は龍之介が決めていたが、今度は自分達が決めなければならぬ事に薫は不安を抱いていた。

次郎「確かにそんな事押し付けられたら分かんねえよな普通。」

次郎も思つていたが

薫「だよね！」

次郎「でもよ……そんな事考えなくても良いんじゃないのか？」

薫「えっ!？」

次郎「今さら考えたつて如何にもなんねえし、そうなつた時に考えれば良いさ……それにほら！」

薫「ん？」

次郎「俺やあいつらが側に居るんだから……一人で考えるなよ……死ぬ時もある時も一緒だろう！」

次郎の言う通り、今さら考えても如何にもならない。

それならば、そうなつた時に考えれば良いし、それに薫一人で考える事じゃない。

仲間と共に決めれば良いのだから

薫「ん、そうだね！」

次郎「ほら、皆が待つてるから来いよ！」

薫「うん！」

薫も次郎に誘われ、ビーチバレーに参加する。

薫が入った事で次郎側が逆転する。

横須賀市、ヴェルニー公園

一方、龍之介と真霜は、横須賀の街をブラブラしながらヴェルニー公園にいた。

真霜「んん．．．良い風！」

龍之介「まあ、平和だと言う証拠だ！」

真霜「ねえ！」

龍之介「何だ？」

真霜「この前滝監督官に言った事．．．本気じゃないよね？」

真霜は、この前龍之介が総一郎にゴジラ戦が終われば自分は一線を退くと言った事。

本気じゃないか問う。

龍之介「ああその事か．．．いや本気だ！」

だが龍之介は本気だった。

真霜「如何して？・・・Gフォースには貴方が必要なのに！」

それを聞いた真霜は今のGフォースには貴方が必要だと言って反対するが

龍之介「いや、ゴジラ戦が終われば俺の役目は終わる・・・そうなれば後は薫達に任せて、さっさと一線を引いた方が良い。」

龍之介は、ゴジラ戦が終われば自分の役目は終わる。

そうなれば後は薫達に任せて、さっさと一線を引いた方が良いと告げる。

真霜「そんな簡単に・・・」

龍之介「決められるのか？・・・でも、それが良いんだ・・・何時までも俺が指揮を執っていたら薫達は成長しないだろうし、深町総司令だつて、お飾りだと言われるままだ・・・俺が一線を引けば少しは見る目も変わるだろう。」

今のGフォースは、元国交相だった深町を総司令にし、代行を務めた野田一誠を総参謀長にしている。

だが、実際に主導権を持っているのは龍之介だと見られている。

これを打開する為にも龍之介はゴジラ戦最終後に一線を引いて、主導権を深町総司令に返さなければならぬと決めていた。

更に薫達を一人前にする事でもあった。

真霜「ん……」

それを聞いた真霜は何も言えず、唯不安になる。

それを見た龍之介は

龍之介「まあ、直ぐに辞める訳じゃないから、そう暗い顔をするな！」

直ぐに辞める訳じゃないと言つて、真霜を慰める。

真霜「そうだね……」

龍之介の言葉を聞いて、真霜は開き直る。

真霜（だけど……私は諦めない……何としても貴方を止めさせない様にするわ！）

だが、真霜は諦めてはいなかった。

何とか龍之介を止めさせない様に策を考える。

龍之介「さて、きばなしに何処かに寄るか！」

2人は、また、横須賀の街をブラブラする。

特別編

特別編 前編

横須賀沖

R A T t 事件から4ヶ月後、此処横須賀では、4年に1度の競闘遊戯会が開催されようとしていた。

競闘遊戯会とは、横須賀女子海洋学校、呉女子海洋学校、舞鶴女子海洋学校、佐世保女子海洋学校の4校の生徒がお互いの技量を競い合うイベント。

今年は、横須賀で開催される事になり

それに向け、横須賀女子海洋学校の艦艇は、全て港外に停泊し、猿島フロート艦も港内に移動した。

来賓出来ているブルーマーメイドなどの艦艇は、全て港内に停泊。

そして、我がGフォースも空母大鳳と戦艦高千穂、大型補給艦2隻だけ学生艦と共に港外に残りは、港内に停泊する。

準備が進む中、水平線上に艦影らしき物が複数現れた。

それは、紛れもなく呉、舞鶴、佐世保の女子海洋学校の艦艇だった。

各女子海洋学校艦艇は、大和型3隻を基準に横須賀に入る。

呉女子海洋学校所属超大型直接教育艦大和、艦橋

十海「……………」

進愛「……………」

舞鶴女子海洋学校所属超大型直接教育艦信濃、艦橋

亜澄「両舷停止、錨入れ！」

燕「内火艇下ろせ！」

佐世保女子海洋学校所属超大型直接教育艦紀伊、艦橋

沙千帆「……………」

啓子「……………」

横須賀に入りや、各艦は港外に停泊。

大和型3隻から内火艇が下され、一同、横須賀女子海洋学校を目指す。

横須賀女子海洋学校、会議室

横須賀女子海洋学校の会議室では、真雪と深町、教頭、老松、一誠の5人が集まって

いた。

深町「……………遂にこの日が来たか！」

教頭「いよいよですね。」

真雪「……」

5人は、モニターで行末を見守る。

やがて、3隻の内火艇が港外に設置されている門に差し掛かろうとしていた。

横須賀港、門

その門の裏では、明乃達晴風クラスが左右に分かれ何かの準備で彼女らを待ち受けていた。

明乃「用意！」

3隻の内火艇が門の差し掛かろうとした時、明乃は、用意と言って、手を上げ、下ろした途端、生徒達はロープを一誠に引っ張り、海中に隠していた物を海上へと現せる。

それは、看板らしき物で

『わぁ……!?!』

「凄い!?!」

それを見た各校の女子海洋学校生徒達は、歓喜に沸いた。

其処には

歓迎! 呉・舞鶴・佐世保女子海洋学校の皆様

横須賀女子海洋学校一同

と書かれていた。

『ようこそ横須賀へ!!』

そう、これは、明乃達横須賀女子海洋学校から各校の女子海洋学校生徒達に向けての歓迎の挨拶的なサプライズだったのだ。

そうと知った各校の女子海洋学校生徒達は、歓迎してくれる横須賀女子海洋学校に感激する。

そして、もう一つ

「何あれ？」

上空に春乱5機が飛行機雲を出しながら飛んでいた。

春乱、操縦席

なのは「……………」

フェイト「……………」

5機は、飛行機雲出しながら演技を披露する。

それは、まるでブルーインパルス見たいな演技だった。

こっちは、龍之介達から各校の女子海洋学校生徒達に向けての歓迎の挨拶的なサプライズである。

それを見た各校の女子海洋学校生徒達は、驚きながら横須賀女子海洋学校同様に感激

する。

競闘遊戯会、会場

しばらくして、会場に横須賀、呉、佐世保、舞鶴の女子海洋学校生徒達が整列する。

次郎「うわあ!？」

薫「流石は、女子海洋学校!・・・左から右まで全部女子だね!？」

会場の横に設置されている本部から生徒達を見る龍之介、真霜、薫、次郎、真冬、平賀、福内達。

真霜「この競闘遊戯会では、呉、佐世保、舞鶴、そして、横須賀の海洋学校が一堂に集まって、お互いの親睦を深めながら技量を競い合うのよ!」

真霜は、薫に競闘遊戯会で生徒達が親睦を深めながら技量を競い合う事を説明する。

薫「そして、其処から新たなブルーマーメイド達が誕生して行くんですね・・・」

真霜「そうよ・・・私達にとっては、後輩の様なもの・・・よく見ると良いわ!」

薫「はい!」

真霜からの説明を聞いて、薫は、生徒達を見ながら、いづれブルーマーメイドになつて行く事を思うのだった。

龍之介「彼女らにうとれて、任務を忘れるなよ薫!」

其処に龍之介がうとれて、任務を忘れるなつとくぎを刺す。

薫「分かってます！・・・次郎君じゃあるまいし！」

次郎「何で俺に振るうんだよ？」

薫「次郎君の事だから、生徒の魅力に引かれて、手を出すかもしれないし・・・」

次郎「俺は、そんな事しねえよ!!」

薫「如何だか・・・」

薫は、次郎を睨む。

次郎「ん・・・」

薫に睨まれ、次郎は、言い返せない。

そんな時

真冬「うるせえな・・・」

真霜の隣で居眠りをしていた真冬が五月蠅いと怒鳴る。

如何やら真冬は、寝不足で居眠りをしている最中だった様だ。

真霜「起きなさい真冬！生徒の前で見つとも無いわよ！」

居眠りする真冬を真霜が起こすが

真冬「眠いんだよ・・・」

何とも情けない真冬。

真霜「もお・・・」

そんな真冬に呆れる真霜。

薫「大丈夫真冬？」

次郎「だらしねえな、寝不足か？」

真冬「うるせなあ！昨日忙しかったんだよ！」

薫「忙しかったって、また報告書の作成が遅れたの？・・・何時もちゃんとやってないから徹夜になるのよ！」

真冬「分かってるよ・・・」

薫に説教され、イライラする真冬。

だがそれも束の間

龍之介「おいお前ら、揉め事は其処までにしとけ！宗谷校長が来たぞ！」

龍之介に言われ3人は、もめ事を止めて、生徒に注目する。

真雪が生徒達の前に現れ、開会式が始まる。

真雪『おはようございます！』

真雪は、壇上に立ち生徒達に向けて一礼をする。

各校の生徒『おはようございます!!』

真雪の礼と共に生徒達は、真雪に一礼する。

真雪『・・・遠路はるばる集まってくれた生徒の皆さん、先ずはご苦労様でした・・・』

皆さんは日頃、学生ごとに分かれて、それぞれの学校で学んでいます。全学年が一堂に会するこの機会にぜひ交流を深めて下さい。また、明日の競闘遊戯会では、皆さんの頑張る姿を見せて貰える事を楽しみにしています。そして、もうひとつ・・・ブルーマーメイドに導入される予定の超甲巡あづまがドックで再就航に向けて作業中です・・・来賓の皆様はぜひ、この機会にご覧ください。』

開会式が続く中、真雪は、ブルーマーメイドのに導入される予定の超甲巡あづまを生徒に紹介する。

『わあ・・・!?!』

次郎「こりや強そうだな!？」

会場のモニターに映し出される超甲巡あづまを見て、真霜達は、驚き、次郎は、強そうだと評価する。

龍之介「・・・」

だが、真霜達が驚く中、龍之介だけがあまり驚かず唾然としていた。

何故なら、この頃の龍之介達Gフォースは、ブルーマーメイドとホワイトドルフィンと共に取締や救難任務にあたった。いた。

本来は、ゴジラ対策が主任務なのだが、最近ではゴジラの出現が無いので、出撃する機会が無い。

それに目を付けた国土保全委員会や海上安全整備局が前と同じ様に海賊の取締や人命救助の任務に着かせた。

それに対して、総司令である深町は反対したが、資金援助やその他の事で結局、航空兵力が整うまで引き受けるしかなかった。

龍之介達は、連日出撃した。

出撃した回数ごとに海賊の摘発数が多くなつた。

特に海賊に恐れられたのが、航空機による攻撃であつた。

いくら武装した艦でも航空機による攻撃は防げない。

その為、海賊からは、空飛ぶ悪魔と恐れられていた。

龍之介は、超甲巡あづまを見て、まだまだ自分達の取締任務は続くと思つた。

真雪『この後は毎年恒例歓迎祭です・・・町中で我が校の生徒が皆さんをおもてなししますので・・・お楽しみください！』

とは言え、今日は歓迎祭と明日は競鬪遊戯会

今は任務も無いので、この状況を楽しむしかない。

開会式も終わり、生徒達は、それぞれ歓迎祭へと向かう。

その中には、晴風の機関科4人の一行も居た。

麗緒「ちよつと小耳に挟んだんだけどさ・・・」

向かう中、麗緒は、何かの噂話を耳にしていた。

留奈「なになに、どんな話？」

それを聞いた留奈は、麗緒に注目する。

麗緒「競闘遊戯会に来てるブルマーはスカウト目的らしいよ！」

留奈「活躍したら卒業した時、お声が掛かるって事？」

如何やら麗緒が聞いた噂と言うのは、真霜達がこの競闘遊戯会に来て目的がスカウト目的だと言うのだ。

空「ありそうな話ね・・・」

それに空も同意する。

まあ、半分は、当たっているのだが

洋美「噂話に夢中になつてる暇はないわよ・・・」

3人が夢中になっているところに洋美が釘を刺す。

桜良「そうね、直ぐに歓迎祭が始まるわ！」

麻侖「おうおうおう、とつとと行くぞ・・・チャキチャキ走れ!!」

麻侖に押されて、会場へと向かう。

洋美「ちよつと気を付けてよ・・・」

そんな麻侖を心配しながら後を追う洋美と桜良。

それを離れた場所で見ている明乃とましろの2人。

ましろ「大丈夫か？うちのクラスの演し物は・・・」

4人を見て、ましろは、自分達のクラスの演し物が大丈夫なのか心配する。

明乃「何日も準備したし、教官のところの人達も協力してくれたから、きつと大丈夫だよ！」

それに対し、明乃は、何日も前から準備していた事と龍之介達が協力してくれたので、大丈夫だと言う。

実は、この歓迎祭には、龍之介達Gフォースも生徒達と協力して、演し物を出している。

何故参加しているのかと言うと、この機会に各女子海洋学校にGフォースの事をして貰おうと真雪が考えたのだ。

当然、明日の競闘遊戯会にも何かする予定。

とは言え、いくら生徒達と協力しているとは言え、問題は起きる。

其処で薫と次郎が祭りを回りながら見回りをする任務に着く予定になっている。

ましろ「はあ！骨が折れますが、全て視察して回らないと・・・」

明乃「うん！」

明乃とましろは、見回りの為、歓迎祭の会場へと向かう。

古庄「例の件は、このあと私から話すと言う事でよろしいですか・・校長？」
真雪「ええ、任せるわ！」

2人を遠くから見ていた古庄と真雪は、この後、ある事を2人に告げる。

それが、明乃とましろを運命付けるとは、この時、2人は、知るよしも無かった。

同じ頃

薫「じゃ兄さん！私と次郎君は、見回りに行つてくるね！」

龍之介「ああ、対処は任せる。」

薫と次郎も見回りへと会場に向かう。

真霜「そう言えば、例の件！・・薫には、もう？」

龍之介「ああ、後は、本人の気持ち次第だ！」

そして、こつちでも2人と同じ様な事が進んでいた。

歓迎祭、会場

歓迎祭の会場には、横須賀女子海洋学校の学生とGF隊員がそれぞれ屋台などを出していた。

各校の学生や横須賀市民などが出店を回る。

三笠ビル商店街

そして此処、三笠ビル商店街では、武蔵のクラスが屋台や砲身やスキッパーの展示を

行っていた。

ましろ「武蔵クラスは有意義な展示だな・・・」

明乃「さっすがだね！」

明乃とましろは、武蔵クラスの演し物に驚いていた。

そんな時

明乃「あっ!？」

もえか「あっ！」

見回りをしていたもえかとバツタリ会ってしまった。

明乃「もかちゃん！」

もえか「ミケちゃん！」

2人は、再会を祝い、ましろは、もえかに一礼し、もえかも一礼する。

もえか「ミケちゃんのクラスは、どんな演し物をやってるの？」

明乃「色々、やってるよ！もかちゃんも手が空いたら見に来て！」

もえか「うん、そうする。」

2人がお互いのクラスの演し物について話していると

少女A「うわぁ本物だ!？」

少女B「待って・・・」

少女達が展示されているスキツパーへと通り過ぎて行く。

明乃「……何か思い出すね。」

もえか「フフツ、私達も小さい頃、浜に置いてあつた古いボートに乗って遊んだりしたね。」

明乃「そうそう!」

2人は、昔話をしながら少女らを見て

もえか「あの子達もブルマーを目指す様になるのかなあ?」

明乃「なるよ、きつと……」

将来に期待していた。

隣でましろは、にっこりしながら2人を見る。

「知名艦長!」

『ん?』

その時、武蔵クラスを手伝っていた空母大鳳の副長はやてがやって来た。

はやて「ちょっと問題が有つて、来てほしいんやけど……」

如何やら、武蔵クラスで何か問題が有つた様で、その件で態々もえかを呼びに来たのだ。

もえか「はい、分かりました。」

はやて「岬ちゃんも後で来たつてな！」

明乃「はい！」

もえか「じゃあミケちゃん、また後で……」

明乃「もかちゃんもまた後でね！」

もえかは、はやてと共に現場に向かい、明乃は、ましろの元に戻る。

明乃「海の仲間は家族……今日と明日は、すっごい大家族だね。」

ましろ「そうですね」

2人が歩きながら、そんな話を話していると

美海「パン粉、パン粉!!」

いきなり美海がパン粉、パン粉と言いながら、慌てて2人の横を通る。

ましろ「あつ、等松さん？」

明乃「ミミちゃん？」

2人は、驚きながら美海に声を掛けるが、急いでいる美海には、聞こえずそのまま行ってしまった。

明乃「あ……」

2人は、行ってしまった美海に呆然としながら、何か有ったと思い後を追う。

とんかつ方丈

此処は、とんかつ方丈と言うとんかつの専門店。

此処には、美甘とほまれ、あかね、美波、俊秋が働いていた。

先程、急いでいた美海は、此処にパン粉を届けていた。

美海「はあ、はあ・・・雅かパン粉が切れるとは・・・こんなにお客が多いなんて予想外よ・・・」

如何やら予想外の客の多さにとんかつに使うパン粉が切れたので美海が態々買い出しに行っていたのだ。

俊秋「態々すまないな、主計長！」

美甘が上げたカツを切りながら、パン粉を買って来てくれた美海にお礼の言葉を言う俊秋。

美海の後を追ってきた明乃とましろも店に入ってきた。

美甘「お願い、美波さん！3番テーブルにとん定2上がったよ・・・」

美甘が出来た定食を運ぶ様美波にお願いする。

美波「はいよ！」

美波は、セグウェイミニの兎走鳥飛24号で出来上がった定食を3番テーブルへと運ぶ。

あかね「ミミちゃん、お皿お願い！」

美海「了解！」

あかねに言われ、美海は、お皿を持って行くが

ほまれ「ミミちゃん、お皿こつちで……」

美海「りよ……りようか……」

今度は、ほまれに言われ慌てる美海。

俊秋「其処濡れてるから気をつけろ……」

慌てる美海に俊秋が床が濡れているので注意を呼び掛けるが

美海「うっ、わわっ、わ……！」

間に合わず、濡れている床に足を滑らせ、体勢を崩してしまう。

その瞬間、運んでいた皿が宙を舞い下に落ち様とした時

明乃「わあ……はむっ！」

ましろ「うっ、ううっ」

それに気づいた明乃とましろが急いで宙に舞ったお皿を割れる寸前にキャッチする。

2人がキャッチしたお陰で何とか割れずに済んだ。

美海「ありがとう！助かったよ……」

2人がお皿をキャッチしてくれた事に感謝する美海。

ましろ「我々も手伝った方がよさそうですね。」

明乃「だね！」

店の現状を見て、2人は、手伝う事にした。

しばらくして、客足が減り

美海「フウ・・・やつと落ち着いたわね・・・」

客が減った事に美海達は、ようやく落ち着く。

『それでは次のニュースです・・・大型の海水淡水化装置と植物生成プラントを搭載した自給自足可能な自己完結型フロートの運用実験が太平洋上で進められています』

そんな中、店に据え付けられているテレビが現在実験が進められている植物生成プラントの話題を発表していた。

美海「あつ、マツチが出てる映画見に行かないと・・・ちよつと席、外しても良い？」

美海は、テレビを見て、マチコが出る映画が始まるのを思い出し、急ぐ為、後の事を5人をお願いする。

『OK!』

俊秋「行ってらしゃい・・・」

美波「後は任せろ・・・」

5人は、任せろと言って、美海を送り出す。

まして「私達も行きましょう。」

明乃「うん」

奥で手伝っていた明乃とましろも店が落ち着いたんで、美海の後を追う。

俊秋「そう言えば・・・艦長殿の映画も、もう直ぐ始まるな!」

三笠公園

三笠公園では、晴風クラスの仁義ある晴風 横須賀頂上戦争と同時上映のGフォース制作の海底軍艦 ムー帝国の逆襲が上映されつつあった。

記念艦三笠、艦内上映室

艦内上映室には、既に映画を見ようと客がわんさか集まっていた。

ましろ「こっちは順調そうですね。」

明乃「そうだね!」

特に問題が起きていない事に明乃とましろは、安心する。

まゆみ「間もなく上映します!」

秀子「ポップコーンいかがですか?」

聡子「飲み物もあるぞな・・・!」

まゆみが間もなく上映しますとアナウンスを流し、秀子と聡子がポップコーンと飲み物を販売する。

受付では、マチコと美奈が映画を見に来たお客が持っている前売り券を確認し

バツシ!

客「ううつ?!?ええ・・・」

部分を切つて渡す。

信吾と実が映写機の準備をする。

ミーナ「フツフツ・・・いよいよ、ワシの監督デビュー作が・・・」

舞台の横でかつこ付けるミーナ。

幸子「はい、ではリンちゃん!そろそろスクリーンを出して下さい。」

そろそろ上映開始の為、スクリーンを下ろす様、幸子が鈴に命じる。

鈴「うん!・・・とりやつ」

鈴は、スクリーンを下ろそうとするが

鈴「うつ・・・あれ?・・・あれ?・・・よいしょ!」

中々下りず、思い切つて、下ろすと

バツシ・・・!!

『・・・』

何とスクリーンが破れてしまった。

スクリーンが破れてしまった事で映画が上映できなくなったので、観客には、しばらくお待ち下さいと看板を出して待たせる事にした。

鈴「どどど、どどど……如何しよう！これじゃあ上映できないよ!!……わ……私のせいで……」

スクリーンが破れてしまった事で映画が上映できなくなったのを自分の責任だと責める鈴。

美奈「泣かないで、これは半ば事故の様なものだから……」

自分を責める鈴に美奈が事故だと言って、鈴を慰める。

秀子「そうだよ、リンちゃんが悪いんじゃないよ！」

聡子「どうぞな！」

秀子と聡子も鈴を慰めるが

実「でも如何するんだ？スクリーンが無ければ、上映ができない……」

信吾「折角、准将と権藤中佐に協力して貰って、制作したのに……このままじゃ恨まれる！」

後ろの実と信吾が五月蠅かった。

仁義ある晴風 横須賀頂上戦争と同時上映の海底軍艦 ムー帝国の逆襲は、美奈と

実、信吾の江田島三羽ガラスが企画した映画で制作に態々、深町総司令や美由紀に協力をお願いして制作したのに、このままでは、3人は、恨まれる。

美奈「五月蠅いから黙ってなさい!!」

あまりの五月蠅さに美奈が切れて、2人に黙れと言う。

『は〜い!』

美奈の黙れと言われて、2人は、大人しく黙る。

美海「ああ・・・」

しかし、2人の言う通り、このままじゃ上映できない。

そんな時

明乃「スクリーンの代わりに有れば良いんだよね?」

明乃がスクリーンの代わりに有れば良いんだよねと閃く。

『え?』

明乃の言葉に皆注目する。

明乃「白くて大きい物が有れば・・・」

信吾「そんなの有るのか?」

信吾がスクリーンの代わりに有る物かと尋ねると

ましろ「あっ!分かりました。」

ましろが何かを思い付き

ましろ「等松さん、辻さん、一緒に来て!」

信吾「何所行く気だ?」

美海「ええっ!? また走るの? . . . でも、マッチの為なら!」

美海と信吾を連れて、出て行く。

しばらくして、3人は、模造紙を数枚持つて来た。

明乃達と美奈達は、何をするのかと思ひ、ましろの指示通りにすると

何と模造紙がスクリーンの代わりになったのだ。

スクリーンの代わりが見つかった事で、ようやく上映が出来る様になった。

上映が開始され、最初は、晴風クラスの仁義ある晴風 横須賀頂上戦争から上映された。

幸子『フウ . . . 』

あるバーのカウンター席で一人で酒を飲む幸子。

幸子『何なら . . . 』

其処へテアが幸子の横に座る。

テア『いや、何もありやせんよ . . . 唯、こんなところでのんびり飲んでええんかう? 』

テアがそう言う

幸子『ま . . . 雅か!』

幸子がはっとする。

まゆみ「模造紙って、奇麗に映るんだね・・・」

媛萌『悪う思わんとつて、つかあさい』

実「雅かこういう使い方が有るとは・・・」

聡子「上等なスクリーンぞな！」

上映中、模造紙がこんな役に立つとは、3人は、思わなかった。

百々『あんたにや消えてもらうしかないツス』

鈴「宗谷さんと辻さん、ミミちゃんが買いに言ってくれたんだよね」

百々『これも組の為ツス』

明乃「流石シロちゃん！」

明乃は、この窮地を解決したましろを褒める。

ましろ「いや、私はただ艦長のアイデアを・・・」

ましろは、照れる。

まゆみ『やれい！』

美海「きや・・・！マッチ！」

『あっ？』

美海「ワイルド！ワイルドマッチ最高！・・・マッチ劇場の開幕だ・・・」

上映中、マチコが出るシーンに美海がペンライトを振りかざしながら興奮する。

幸子「少し遅れたけど、お陰で無事に上映できました。」

ミーナ「うんうん」

信吾「これで助かった・・・」

トラブルもあつたが、何とか無事に上映出来た事に3人は、ホツとする。

ましろ『夜中にコーヒー飲んでるとつくづく船乗りが嫌になつてのう・・・足を洗うちやるか思うんじや』

明乃『最後じゃけん、言うたるがのう・・・そがな考えじや隙ができるぞ』

ましろ『隙が出来るか・・・』

明乃「はっ・・・」

ましろ「・・・」

明乃「何か自分が出てるところって、恥ずかしいね」

ましろ「ええ」

流石に自分達が出ているシーンは、恥ずかしかった。

美奈「今度は、こつちのだね！」

仁義ある晴風 横須賀頂上戦争も終わり、今度は、Gフォースの海底軍艦 ムー帝国の逆襲が上映された。

功『おい、止めろ！』

道が違ふ事に気づいた功は、サングラスを掛けた運転手の信吾に止めろと言うが
信吾『……』

信吾は、聞かずに乱暴な運転で何処かへと向かう。

功『如何するつもりだ？』

功は、何所へ向かうのかと言う。

美奈『ねえ、まだ？』

今度は、水着姿の美奈が現れ

次郎『まだまだって、うるせえぞ！』

カメラを取る主人公の次郎。

まゆみ「何だか、嫌らしいです。」

上映中、美奈の水着姿を取るシーンにまゆみは、嫌らしいと言う。

信吾「そう言うな、この後、ビックリ見たいな出来事が起きるから……」

信吾がこの後、ビックリ見たいな出来事が起きると言うので、皆は、注目する。

美奈『きや……！』

美奈が何かにビックリし、次郎の元へ走って行き、埠頭から銀色のダイバーズスーツを
着た男がリング見たいに現れ

鈴「きや……！」

銀色のダイバースーツの男を見た鈴は、ビツクリして悲鳴を上げて、美奈に抱き付く。明乃「リンちゃんには、流石に刺激が強すぎた見たい！」

続いて、潜水艦の模型を使用した戦闘シーンが出て

秀子「模型でこんな戦闘シーンが出来るんだ。」

実「今はCGが多いから、昔見たいに模型を使ったこんな戦闘シーンは撮れないだろ。」

模型を使用した戦闘シーンに秀子は、興味を抱く。

しばらくして、今度は、白い海軍服を着た海底軍艦艦長の神宮司大佐役の龍之介が次郎とヒロイン役の薫の前に現れるシーン

ましろ「海軍服だ!?!」

龍之介の海軍服にましろは、憧れを抱く。

龍之介『発進用意!』

『発進用意よし!』

龍之介『発進!』

龍之介の号令のもと、海底軍艦は、発進する。

次郎『ムー帝国皇帝です!!』

続いて、今度は、奇麗な衣装を着た皇帝役の美由紀が現れた。

美由紀『神宮司!・・・無駄な抵抗は止めよ!・・・ムー帝国に勝てるつもりか?』

龍之介『無駄な抵抗は、貴方の方だ!』

美由紀『ムー帝国は必ず勝つ!・・・世界を征服するのは、ムー帝国じゃ』

信吾『何だか見ていると権藤中佐が以外と美人だな・・・』

美奈『そうだね、とても30歳には見えない!?!』

信吾と美奈は、衣装姿の美由紀を見て、とても30歳には見えなかった。

ラストシーンは、次郎と薫がお互いに抱き合うシーン

ミーナ『ロマンチックだな・・・』

明乃『奇麗だね教官・・・』

ましろ『ん・・・』

ラストシーンを見て、明乃とましろは、つい見とれてしまう。

三笠ビル商店街

そして、当の本人達である薫と次郎は、武蔵クラスの隣で構えているGフォースの屋台や展示物を視察していた。

薫「此処は、隣の武蔵クラス同様、順調の様ね!」

薫は、視察して、隣の武蔵クラス同様、順調だと視認する。

屋台は、武蔵クラスと変わらないが、展示物は、特に凄かった。

目玉と言ったら主力の戦闘攻撃機F A—3 G春乱と特殊潜航艇さつま、対潜ヘリSH 60 Gが展示され、更にダミーの90式短距離空対空ミサイルや93式空対艦ミサイルなどが一緒に展示されており、生徒達などがそれに興味を抱く。

次郎「隣の武蔵クラスと比べるとこっちの展示物の方が凄いな・・・」
次郎が武蔵クラスより此方の展示物が凄いと評価する。

薫「でも向こうだって、こっちに負けずにやっっているわよ！」

だが、武蔵クラスも負けられない様に頑張っていると評価する。

横須賀中央駅前

一方、明乃とましろは、横須賀中央駅前で楓、鶯、百々の3人が出している本屋晴風を訪れていた。

媛萌「新刊ありますよ!!」

慧「立ち読み、大歓迎です!!」

媛萌と慧が宣伝をしながら、客を集める。

ましろ「此処は問題なさそうだな！」

百々「ええ、絶好調ツス！」

鶯「私は問題ないけど売れていない。」

店としては、順調だが、同人誌が売れていない様子。

明乃は、隣で百々の同人誌を読む。

ましろ「八木さんは、どんな本を作ったんだ？」

ましろは、鵜の本を取る。

本の題名は、電波本と書かれており

楓「わたくしもお手伝いしました。」

楓が指さす、下の欄に特別寄稿 万里小路 楓 音と電波の関係と書かれていたの

で、製作には、楓も携わっていた。

ましろ「これは・・・人を選ぶ本だな！」

ましろは、店に置いてある本を見て、如何して売れないか大体分かった様だ。

そんな時

百々「副長！」

ましろ「!？」

百々「副長も本、どうぞツス！」

百々がましろに明乃が読んでいるのと同じ同人誌を差し出す。

ましろ「ああ、いくらだ？」

ましろは、差し出した本の値段を聞くと

百々「クラスの子達と山本教官の所の人達には、無料で献本してるツス、ネタにさせ

て貰ってるんで……」

如何やら晴風クラスと空母大鳳の連中だけ無料で献本してる見たいだ。

ましろ「ん？」

ましろは、百々の同人誌を読む。

ましろ「うつ……うつ！うつうつ！」

読んだ瞬間、ましろの表情は、恥ずかしくなり、更には、口から魂が抜けた状態になる。

如何やら、いやらしいシーンでも記載されてあったんだろう。

明乃「ねえ、シロちゃん、これって何してるの？」

同じ様に明乃がそのシーンを見て、何をしているのかましろに問う。

ましろ「うわぁ……！」

それに対して、ましろは、慌てて

ましろ「ううう……次に行きましよう!!」

急いで次の場所へと向かう。

流石にあのシーンは、明乃には説明できなかつた。

どぶ板通り

どぶ板通りの駐車場の一角では、芽衣と志摩がコント舞台を構え、漫才を披露してい

た。

芽衣「お前も強情な奴だなあ？」

取り調べを行う刑事役の芽衣。

志摩「うい」

取り調べを受ける犯人役の志摩。

芽衣「お前が盗んだって事は分かかってるんだよ!!」

強引に自白させ様とする芽衣。

志摩「うい」

それに対して志摩は、ういとしか答ええない。

芽衣「証拠も挙がってるんだ……こいつでドアをこじ開けて盗みに入ったんだろ？」

自白しない志摩に芽衣が証拠のボールを出す。

志摩「うい」

それでも志摩は、ういしか言わない。

芽衣「ほーら、よく見ろ……ういいう言ったりやいいてもんじやないぞ!!」

今度は、追い詰め様とするが

志摩「ぶい！」

志摩は、その手に乗らずそっち向けする。

芽衣「あつ！今ぷいって言ったな・・・」
流石に切れる芽衣。

2人の漫才は、面白そうだが、客は、1人もいない。

いるとすれば寝転がりながら見る爺さんと座つて見ながらあくびをする少女と五十六のみだった。

近くでは、砲雷科の5人が串焼きなどの屋台を営んでいた。

果代子「此方でーす！」

此方の方は、客足は、多いがあまりの多さに列を作っている。

光「ガツンとお客が来ちやったね？」

美千留「全然、さばききれないし・・・」

あまりの客の多さにさばききれない状態。

順子「アチ・・・!？」

『あつ！』

順子「ズキユンとヤケドしちゃったよ！」

よそ見したせいで順子がやけどを負う。

『ああ・・・』

順子に呆れる2人。

理都子「押さないで下さい！」

果代子「順番に伺います！」

とは言え、このままでは、客が入店できずに他の店に行ってしまう。

ましろ「これは何とかしないと？」

現状を見たましろは、何とかしようと考えるが

明乃「並んでいる間、退屈にならない様にすれば良いんじゃないかな？」

明乃が並んでいる間、客が退屈にならない様にすれば良いんじゃないのかと思いつき

ましろ「ああ、成程・・分かりました。」

ましろも明乃の思い付きを理解し

明乃「うん！」

2人は、ある物を此処に持って来た。

芽衣「いい加減白状したら如何なんだ？・・・盗んだブツは何所に隠した？」

志摩「うい」

2人が持つて来たものとは、駐車場の一角で漫才をしていた芽衣と志摩のコントだった。

このままでは、客が入店できず、退屈にあきて他の店に行ってしまう。

それなら客が退屈にならない様にしようと調度、客がいなくて寂しそうに漫才をして

いた芽衣と志摩に、こつちに舞台を移設して、漫才をして貰う事にしたのだ。

芽衣「仲間か・・・共犯者が持つてるんだな？」

志摩「うい」

芽衣「もーっ！ホントういしか言わないな、この容疑者は!!」

ういしか答えない志摩に芽衣は、頭を抱えながら叫ぶ。

志摩「うい」

芽衣「良いのか？そんなんで？田舎のお母さんは泣いてるぞ？」

志摩「う・・・」

芽衣の言葉によく反応する志摩。

芽衣「お？効いたか？お母さんを思い出してるのか？」

反応に気づく芽衣。

芽衣「ふう・・・ちよつと疲れたよ・・・メシにしよう・・・カツ丼でも食うか？」

取り調べの半ばで一休みしようと志摩にカツ丼を食うか問うと

志摩「カレー」

志摩はカレーと答え

芽衣「其処は、ういじゃないのかよ！」

志摩「うい」

芽衣「また戻ったよ……」

結局ふりだしに戻った。

流石に受けたのか、並んでいた客から笑い声と拍手が返された。

如何やら成功した様だ。

果代子「お待たせしました!!」

理都子「先頭のお客様から屋台の方にお越しく下さい!!」

それに乗じて、店の方も落ち着き、次の客が入って行く。

明乃「この流れなら何とかなるね!」

芽衣「艦長、副長!」

『あ……』

芽衣「お陰でお客様が増えてやりがい満点だよ!!」

志摩「ういうい」

見てくれる客を増やしてくれて、礼を言う2人。

ヴェルニー公園

ヴェルニー公園でも機関科6人と夏雄、敏郎が野外入浴を営んでいた。

明乃「マロンちゃん、どう?」

明乃は、銭湯のボイラーを手入れする赤の法被を着た麻侖と敏郎に声を掛ける。

麻侖「おう、絶好調でえい！」

問題はなく順調の様だ。

敏郎「……」

敏郎は、黙って横で作業をする。

ましろ「水没していた晴風のボイラーを此処まで使える様にするとは……」

銭湯のボイラーは、元々晴風で使用していたボイラーだった。

「当たり前だ！」

明乃「あつ、ナツオちゃん、クロちゃん！」

隣から洋美と麻侖とお揃いの法被を着た夏雄（今回だけ横女の制服を着ている）がやって来た。

洋美「大変だったわよ……一度、全部バラして、洗浄して研磨して……でも、マロンや篠原さんが如何してもやるって聞かなくて……」

如何やら、晴風のボイラー復活には、相当の苦勞が有ったが、2人の機関長と機関科7人のお陰で此処まで元通りに出来たのだ。

麻侖「手入れすりゃ使えるんならやらねえ手はねえよ！」

夏雄「その通り、パーツさえ有れば、何だった出来るんでえい！」

2人は、かっこ付ける。

やはり似た者同士だ。

敏郎「全く、うるせえ奴らだ・・・」

でも、敏郎には、うるせえ奴らだとしか認識されなかった。

麻侖「それより艦長、副長！折角だし入ってくんねえ！」

話は変わり、麻侖は、折角来た明乃とましろに風呂に入って行く様誘う。

2人は、お言葉に甘え風呂に入る。

女湯

『ふう・・・』

2人は、寛ぎながら風呂を上がって、体を洗う。

しかも同時に一緒の場所を洗う。

君江「何なんですかねえ、あの動きの一致率は？」

それを後ろで目撃していた航洋直接教育艦時津風副長の長澤君江。

つむぎ「よっぽど息が合ってるのかしら？」

2人が意気投合しているのだと思う航洋直接教育艦時津風艦長の榊原つむぎ。

隣では、機関科4人が入っている。

君江「艦長、私達もアレやったら、うちの子達にウケますよ！」

君江は、2人を見て、自分達も同じ様にしたら自分とこのクラスの生徒に受けると言

うが

つむぎ「何でクラスメートから笑いを取らなきゃいけないの？」

つむぎ本人は、やりたくなかった。

『ふう……』

そんな事を言いながら、2人は寛ぐ。

まして「そもそも、何でうちのクラスだけ無駄に演し物が多いのか……」

体を洗いながらましてろは、何で自分達のクラスがこんなに演し物が多いのか思う。

明乃「やりたい事が沢山有るんだよ……でも、シロちゃんのお陰で何とかなつたよね？」

それに対して、明乃は、皆やりたい事が有るんだと思い、それを助けてくれたましてろに感謝する。

ましてろ「私は別に……艦長の思い付きには驚かされますけど、それを実行するのが副長の務めですから……」

明乃「やだなあ、シロちゃん！今日はお祭り何だから、艦長呼びは無しだよ！」

ましてろ「え……じゃあ……岬さ……あ……いや、やつぱり艦長で！」

明乃の名前を言おうとしたが、恥ずかしくて、元の艦長を言う。

明乃「フフフ」

そんなましろに明乃は笑う。

とんかつ方丈

その頃、とんかつ方丈では、午前の仕事も終わり、午後の準備をしていた。

美甘「はあ・・・洗い物完了！」

ほまれ「こつちもとんかつの仕込み終わったよ！」

美甘「ありがとうほつちゃん!!」

俊秋「午後の仕込みは、これで終わりだな・・・」

美甘「これで夕方にお客さんがどつと来ても大丈夫だね！」

ほまれ「美波さんは、さつき休憩に出たところなんだけど、ミミちゃんまだ戻ってこないね？」

あかね「マッチが出ている映画に夢中なんじゃないかな？」

ほまれ「あはは・・・」

美甘「私達も今のうちに休んでって・・・」

午後の仕込みも終わり、4人は、休憩に行こうとした時

美甘「あつちゃん何してるの？」

俊秋「ん？」

あかねが何かを作っていた。

あかね「新しいメニューの試作だよ！」

如何やら新しいメニューの試作を作っていた様だ。

ほまれ「また・・・今度は、大丈夫なの？」

あかね「艦内で皆が、持ち場を離れられない時でもそつと食べられて、なおかつ栄養満点言う革命的メニューになる予定だよ！」

今度試作されるのは、携帯食料の一種見たいだ。

ほまれ「ホントかな・・・」

ほまれは、あかねの革命に疑惑を抱く。

俊秋「凄いな・・・完成したら、俺にも作り方教えてくれ？」

だが、俊秋は、これに飛び付き、あかねに完成したら作り方を教えてくれと要求する。

あかね「良いですけど、艦内の皆に振舞うんですか？」

あかねは、自分の艦で振舞うのかと思ったが

俊秋「搭乗員の弁当にする。」

『弁当？』

如何やら、パイロット達の弁当にする様だ。

俊秋「搭乗員は、長時間飛んでいる時に食べる弁当が保存食ばかりだからさ、新しく

入れようと思って・・・」

俊秋の言う通り、なのは達パイロット達は、飛んでいる時に食べているのは、殆んどが携帯用の保存食で、味は無いが栄養はある。

しかし、毎回同じ物だとパイロット達も飽き飽きしていた。

あかね「成程！」

美甘「良い考えかも・・・」

俊秋「だろう・・・これなら飽き飽きしている保存食から解放されるぞ!!」

俊秋は、あかねの革新的なメニューで、飽き飽きしている保存食から解放されると確信する。

そんな時

『いらっしやいませ!!』

客が来て、出迎えると

美甘「あつ、まゆちゃんとしゅうちゃん！」

店に来店したのは、三笠艦内で映画を上映していたまゆみと秀子だった。

まゆみ「お疲れ様！」

ほまれ「お疲れ様！」

秀子「今つて、注文しても大丈夫かな？お腹空いちやつて・・・」

2人は、休憩で来た様だ。

ほまれ「勿論よ！ゆっくり食べて行って！」

まゆみ「じゃお言葉に甘えて・・・」

2人は、席に付き注文しようとする

『ん？』

また誰かが来店して来た。

『山本教官!』

薫「こんにちは、杵崎さんに伊良子さん！それに山下さん、内田さん！」

次郎「よう！」

それは、見回りにしていた薫と次郎だった。

俊秋「これは、艦長殿！見回りだったんじゃない？」

次郎「ちよつと腹減つちまつたんで・・・すまんがトンカツ定食を二つお願い！」

此方もさつきの2人同様休憩しに来た見たいだ。

2人は、とんかつ定食を注文し

美甘「分かりました・・・まゆちゃんとしゆうちゃんは？」

まゆみ「じゃ同じとんかつ定食ください。」

秀子「私は、メンチカツ定食で・・・」

まゆみは、2人と同じトンカツ定食、秀子は、メンチカツ定食を注文する。

美甘「了解！」

ほまれ「映画の方は、どんな感じなの？」

料理を作る間、ほまれば、ほまれと秀子に映画の上映状況を問う。

(ぎょく!?)

それを聞いた薫と次郎は、緊張する。

それもその筈、上映されている映画のうちの一つは、2人が主役なのだから

秀子「これが何と多いり何だよ！」

薫(えっ本当!?)

まゆみ「くちこみでお客さん増えている見たいで、最初の回より、さっきの回の方が

込んでたんだよね！」

次郎(そんなに増えているのか?)

自分達の映画がそんなに売れていた事に驚く薫と次郎。

秀子「でも分からないな・・・教官達の内容もだけど、あの内容が其処まで受けるな

んて・・・」

秀子は、自分達の映画の内容が、何故受けるのか分らなかつた。

薫(何だ・・・私達のじゃないんだ・・・)

売れてたのは、自分達の映画じゃないと聞いて、薫は、ガツカリする。

まゆみ「私も分からないけど、何て言うか言葉で説明できない勢いだけは、あると思うよ、私達の映画！」

秀子には、分からなかったが、まゆみには、大体理解している様だ。

薫（確か岬ちゃんのところの映画って、納沙さんとミーナさんが考えたんだよね！）

美甘「一体どんな映画何だろう？」

美甘は、上映されている自分達の映画がどんなのか気になる。

薫（多分、あの2人の考える事だから仁義物じゃないの・・・）

薫は、仁義物だと察する。

ほまれ「そう言えば、教官達の映画は、どんな感じ？」

今度は、薫達の映画の上映状況を聞いて来た。

（ん・・・）

それを聞いた2人は、注目する。

秀子「こつちもばっか受けて・・・確か、特撮の映画だけど・・・」

（嘘!?!）

如何やら薫達の映画も同様に売れていた見たい。

まゆみ「内容が凄くって・・・最後、教官と小沢さんが・・・」

薫「止めて！その先言わないで!!」

まゆみがラストシーンの事を言おうとした時、薫が驚愕してしまふ。

次郎「落ち着け薫!・・・はい水!」

次郎は、薫を落ち着かせようと水を差し出す。

薫「ん・・・はあ・・・」

水を一気飲みした薫は、落ち着く。

ほまれ「そんなにお客さん来ているのに抜けて来て平気なの?」

ほまれは、秀子に上映中なのに向けて大丈夫なのか問う

秀子「映写機ずっと回してたら熱をもちやつて、しばらく上映休止って事になったんだよ・・・」

如何やら映写機を使い過ぎたんで、しばらく休業らしい。

まゆみ「今のうちにご飯食べて休憩して、またポップコーンとコーラをどんどん売るよ!・・・この調子で行けば、かなりの売り上げになりそう!」

秀子「まゆちゃんらしいやる気のだしかただね!」

俊秋「はい、お待ち・・・トンカツ定食2つ!」

ほまれ「お待たせしました!・・・トンカツ定食とメンチカツ定食です!」

話す間に料理がやって来た。

『いただきます!』

4人は、仲良く飯を食う。

そんな時

ほまれ「ん？」

またまたお客が来て

美甘「いらつしやいませ!!」

美甘が出迎える。

十海「6人ですけど・・・入れますか？」

入って来たのは、呉女子海洋学校所属の超大型直接教育艦大和艦長の宮里十海と副長の能村進愛、舞鶴女子海洋学校所属の超大型直接教育艦信濃艦長の阿部亜澄と副長の河野 燕、佐世保女子海洋学校所属の超大型直接教育艦紀伊艦長の千葉沙千帆と副長の野際啓子の6人だった。

あかね「う!・・・何か、凄い迫力・・・」

6人を見て、あかねは、殺気を感じる。

美甘「ど、どうぞ!此方の大きいテーブルで・・・」

6人は、大きいテーブルに座る。

ほまれ「ご注文はお決まりですか？」

ほまれが怯えながら注文を聞く。

十海「トンカツ定食を！」

亜澄「同じで！」

燕「私も！」

啓子「合わせませす。」

4人は、トンカツ定食を頼み

沙千帆「私は、トンカツ定食のトンカツダブルで！」

沙千帆は、トンカツ定食のトンカツダブルの大盛りを頼んだ。

ほまれ「ご注文ありがとうございます……其方のお客様は？」

ほまれは、残っている進愛に注文を聞く。

進愛「味噌カツはあらへんの？」

進愛は、味噌カツは無いのか問う。

ほまれ「すみません……今日は、ちよつと味噌カツはできなくて……」

今日は、トンカツとメンチカツだけで、味噌カツは、無かった。

進愛「わやちゃんね……ほんじゃ、普通のトンカツ定食にするわ！」

仕方が無く進愛は、4人と同じトンカツ定食にする。

ほまれ「あ、ありがとうございます。」

まゆみ「ねえ、隣のテーブルの人達って、先輩だよね？」

秀子「うん、あの制服間違いないね！」

料理が出来る中、秀子とまゆみは、十海達をジロジロ見る。

次郎「流石に上級生は、雰囲気が違うな……」

薫「そうかな……私的には、同じだと思うよ……綺麗だし！」

次郎は、彼女らを見て、雰囲気が違うと察する。

逆に薫は、同じだと言って、十海を見る。

秀子「あの！」

そんな中、ジロジロ見ていた秀子は、十海達に声を掛ける。

秀子「皆さんは、海洋学校の先輩ですよね？」

まゆみ「ええ!?話しかけちゃうの？」

まゆみは、ビビってしまう。

秀子「何となく、大型艦の艦長さんと副長さん見たいな雰囲気ですけど……」

十海「その通りですけど、貴方は？」

秀子「横須賀女子海洋学校航洋艦晴風クラスの航海員で山下秀子と言います……こつ

ちは、同じ航海員の内田まゆみちゃんです。」

まゆみ「よ、よろしくお願いします。」

秀子「あつちに居るのは、同じクラスの給養員で……」

美甘「伊良子美甘です！」

ほまれ「杵崎ほまれです・・ほら、あつちゃん！新メニューの試作に夢中になってないでござ挨拶して・・・」

あかね「と・・・杵崎あかねです。」

沙千帆「へ・・・これが噂の晴風クラスか？」

十海「私は、呉女子海洋学校2年大和艦長宮里十海。」

進愛「大和副長の能村進愛だわ！」

亜澄「舞鶴女子海洋学校3年信濃艦長阿部亜澄ね。」

燕「副長の河野 燕です！」

沙千帆「佐世保の紀伊で艦長をやっている千葉沙千帆、3年だ！よろしく頼む！」

啓子「野際啓子、紀伊の副長を務めてます。」

何となくお互いに自己紹介をする。

秀子「ほお・・・何だか、挨拶しているだけなのに、かつこいいですね先輩達！」

秀子は、礼儀正しく挨拶する十海達をかつこいいと褒める。

まゆみ「しゅうちゃん、それ失礼か失礼じゃないかで言うときりぎりアウトじゃない大丈夫？」

まゆみは、流石に上級生に対して、失礼だと思っただが

秀子「大丈夫だと思っけど・・・」

沙千帆「君、中々度胸が据わっているな！・・・ブルーマーメイドになつた暁には、一
緒に仕事をしたいタイプだ！」

如何やら大丈夫の様で、しかも逆に褒められていた。

秀子「そうですか、やった!!」

逆に褒められて、ウキウキする。

啓子「フフ・・・うちの千葉さんは、人を褒めるのが上手ですからね・・・」

秀子「えっ、お世辞だったんですか？」

さっきのは、お世辞だったのか。

啓子「そうは、言つてませんよ・・・むしろ・・・」

沙千帆「私は、お世辞やらはらげやら、回りくどい事が苦手なんだハハハ！」

お世辞ではなく、本気で褒めていた。

啓子「とまあ嘘がつかないタイプなの！」

如何やら、沙千帆は、めんどくさいなタイプだ

薫「何だか、真冬を見てるみたい！」

薫は、沙千帆を見て、真冬を見てる感じだと察する。

まゆみ「と言う事は、しゅうちゃんがマジで褒められてる!？」

秀子「へへ・・・照れるね！」

褒められた事で秀子は、照れる。

十海「まあ兎に角、他の皆もそんなに固くなる事はないわ！・・・私達も先輩方も、何も1年生をとって食う訳じゃないし！」

進愛「そうじゃんね！私らは、前日祭を楽しんだだけで・・・先輩、後輩の杵なく気楽にいこまい！」

十海は、先輩とか後輩に関係なく接する。

薫「意外と良い事を言うのね大和の艦長さん。」

十海を密かに褒める薫。

次郎「あれは、少女漫画で言うお姉様って感じだな！」

十海を見て、少女漫画で言うお姉様だと認識する。

薫「次郎君少女漫画読むの？」

次郎「いや、晴風クラスが出している同人誌を呼んだんだ。」

次郎は、本屋晴風で売られていた百々の同人誌を読んでいた。

薫「ああ青木さん達の・・・」

同人誌と聞いて、本屋晴風だと察する。

美甘「迫力あるけど優しい人達だね！」

台所から見ていた美甘も十海達が優しい人達と安心し

ほまれ「ふう・・・良かった・・・あつ！お料理出来てるよ！」

ほまれも安心して、美甘に出来た料理を渡す。

美甘「オツケ！」

美甘は、十海達の元に料理を持って行く。

美甘「お待たせしましたトンカツ定食です！」

十海「ありがとう」

燕「美味しそう、いただきます！」

6人は、仲良く飯を食う。

秀子「そう言えば先輩達は、どんな演し物見て回ったんですか？」

秀子は、十海達に各クラスが出している演し物を見て回ったのか聞く。

十海「私とのむさんは、和菓子の露店で買物したわ」

進愛「確か間宮クラスじゃね・・・シベリアって言う、カステラの間にようかんを

挟んだ奴じやに、どえらい甘いけどペロツと食べれるんだわ！」

十海と進愛は、優衣達の間宮クラスを回った。

特に進愛が優衣が試作していたシベリアを好む。

まゆみ「美味しそう！でも、カロリーー高そう？」

話を聞いて、流石にカロリー高いと思った。

沙千帆「なくに、食べた分、体を動かせばどつて事は無い……何なら一緒にやるか？」

それに対して、沙千帆は、体を動かせば解決できると言う。

まゆみ「ダイエットに効く運動とか教えていただけるとですか？」

啓子「うちの千葉さんは、スポーツと言えば格闘技何ですよ……空手とかキックボクシングとかフフフ！」

沙千帆「ダイエツトとか知らんが、空手は良いぞ！心身を鍛えられる……ごお……ふっ！……ふっ！……ひ！」

沙千帆は、秀子とまゆみの前で空手を見せる。

次郎「おっ空手だな！」

薫「じ、次郎君!？」

それに次郎が食い付き、沙千帆の元へ行き

沙千帆「ん？」

次郎「お前、空手するんだな……俺も格闘技が好きでな……はっ！……はっ！……おっ！……おっ！」

沙千帆の前で自分の格闘技を披露する。

沙千帆 「中中筋が良いね・・・ホワイトドルフィンの方ですか？」

沙千帆は、次郎を見て、ホワイトドルフィンの人と思っただが

次郎 「いや、俺は、Gフォースだ！」

『Gフォース？』

Gフォースと聞いた途端、十海達は、頭を？する。

進愛 「Gフォースと言うと最近創設された部隊やね・・・確か巨大生物に対処するとか・・・」

次郎 「でもそれ以外では、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンと保々変わらない！・・・そうだよな薫！」

次郎は、十海達に今の新生Gフォースの役割を説明し、そうだよなと薫にふる。

薫 「まあね・・・」

十海 「其方の方もGフォースですか？」

薫 「初めまして、Gフォース大鳳艦長の山本薫です。」

次郎 「同じく白鳳艦長の山本次郎だ・・・と言っても今は修理中でフリーだがな！」

2人は、十海達に自己紹介する。

『・・・』

2人を見て、十海達は、偉大差を痛感する。

薫「そんなに固くならなくても、今は、守る者同士なんだから、気楽に行きましょう！」

自分達を見て、固くなる十海達を見て、薫は、十海が言った言葉と同じ事を言つて、十海達に接する。

十海「では・・・よろしくお願いします。」

薫「此方こそ！」

秀子「話は戻りますが、阿部先輩と河野先輩は、何か買いました？」

話を戻して、次は、亜澄と燕にどんなクラスの演し物を見て回ったのか聞く。

亜澄「買つては無いけど・・・面白い物見たよ！りんご飴の屋台！」

亜澄は、店を見て回つてる途中、あるりんご飴の屋台を目撃した。

秀子「りんご飴って・・・あのお祭りとかでよく売られてる奴ですよね？」

亜澄「そうそうりんご飴自体は、何の変哲も無いんだけど、全自動りんご飴製造機つて言う機械で作つてたんだよ！」

如何やら、りんご飴を作る機械を見た様だ。

秀子「え!？」

亜澄「りんごを入れると自動的に水洗いされて、串が刺されて、溶けた飴に浸かつて、機械から出て来た時には、ちゃんと飴が固まつてるの!!」

燕「明石クラスの出し物でしたね！……やっぱりああ言う艦に乗っている子達って、機械弄りに強いんでしょうね……」

2人は、全自動りんご飴製造機を見て、明石クラスの生徒に興味を抱く。

秀子「へ……」

薫（まあ、うちの山崎整備長や篠原機関長達には、遠く及ばないけど……）

だが、それを聞いた薫は、自分の所の整備員や機関員には、遠く及ばないと思う。

まあ、薫の所では、航空機を扱っているから、普通とは違うだろう。

亜澄「うちにも欲しいな……あの人材は、何かこう労働の効率をアップする様な物を作ってもらいたい。」

亜澄は、労働の効率をアップする機会を欲しいとねだる。

秀子「良いですねそれ！皆の仕事が減って、楽になりますし……」

それを聞いた、秀子は、楽になって良いと思ったが

亜澄「何言ってるの？……仮に効率が2倍になったとして、労働時間も2倍にすれば4倍の成果が上がる訳よ！」

如何やら亜澄は、楽にするんじゃない、仕事を倍に増やそうと思った様だ。

『え……!?!』

薫（何それ？）

亜澄の言葉に薫は、馬鹿げていると思った。

燕「亜澄社長！……そう言うブラック発言を後輩達の前でやるのは止めて下さい！」
ブラック発言する亜澄を止める燕。

亜澄「良いじゃない！……私だってクラスの皆の2倍働いているし、あれなところら摘発されないぎりぎりのラインを見極めて、皆の仕事量を管理している燕専務がいるから大丈夫！」

燕「フオローになつて無いですよ！後、私を持ち上げても何も出ませんから……」

次郎（全然大丈夫じゃないな……）

薫（ある意味、副長が大変そう見たい？）

2人を見て、薫は、燕の大変さを察する。

秀子「あの……今、社長とか専務とか聴こえたんですけど？」

燕「ああ、うちのクラス達がね、艦長のあまりの人使いの悪さに、まるでノルマのキツイ会社だよ……艦長が社長で、私らは、社員だよ……で、言い始めて、それが定着しちゃたの！……で、副長の私もついでに専務呼ばわりされるようになって……」

次郎（艦と言うより海運会社だな！）

次郎は、2人が指揮する信濃が海運会社だと想像する。

亜澄「ノルマ達成できなくても、ペナルティは無いんだけどな……むしろ月間で一

番頑張った子には、社長賞だしてるくらいなのに、くどい様だけどペナルティは無いんだけどな……」

燕「逆に怪しく聞こえますから、其処強調しない方が良いでしょう！」

亜澄「君……山下と言ったけ？」

秀子「はい！」

亜澄「聞き上手だね君は、君に聞かれているとつい喋り過ぎてしまう……ズバリ言う」と営業向きの人材ね！」

秀子「営業つて、艦乗りにそう言う仕事あるんですか？」

薫（いや、多分営業じゃなくて、広報の仕事じゃない？）

亜澄「兎に角、私が君の才能を引き出せる様、上手く使ってあげるから、さっさと飛び級して信濃に編入するんだよ！」

亜澄は、またしても無茶な発言をする。

燕「無茶を言つては、駄目ですよ！私達卒業まであと半年しかないのに……」

亜澄「じゃブルーマーメイドになってから私の艦に来ると言い、待つてるからね！」と言つて、秀子をスカウトするが

秀子「ひい……!!？」

秀子は、流石に嫌がる。

薫「ハハハ・・・あまりのらない方が良いわね！」

余りのらない方が良いと忠告する。

まゆみ「あ、あの・・・千葉先輩と野際先輩は、どの辺を回られたんですか？」

今度は、まゆみが沙千帆と啓子にどんなクラスの演し物を見て回ったのか聞く。

沙千帆「ああ、先ずは金魚すくいだな！」

先ずは、金魚すくいが出て

まゆみ「金魚すくいですか!? 平和な感じですね！」

まゆみは、平和的だと表現する。

沙千帆「ところが其処は中々面白くてな、店主と対戦するんだよ!・・・たくさんす

くった方が勝ち!・・・と言う事でね。」

だが、沙千帆的には、面白い店で特に店主と対戦した事を話題にする。

まゆみ「ええ!」

まゆみは、驚愕し

薫（雅かその店主って、もしかして、高橋さん?）

薫は、店主と対戦と聞いて、店主が航洋直接教育艦天津風艦長の高橋千華だと察する。

沙千帆「確か天津風クラスだったな!・・・其処の艦長がそりやもう向きになって金

魚をすくうんだ、思わずこっちも本気になったよ!・・・ハハハ！」

結局、沙千帆が勝ったみたいで、思わずこっちも本気になったと笑う。

薫（やっぱり！）

薫の推理が見事に当たった。

まゆみ「全然平和じゃない！」

さつきの表現から一変し、まゆみは、全然平和じゃないと断言する。

沙千帆「後は片抜きをやったな・・・これも何故か店主が接客もそこそこに黙々と片抜きをやっていた・・・あれは・・・時津風クラスだったかな？」

次は、時津風クラスの片抜き屋台の事を言う。

薫（流石は、榊原さん！・・・相変わらずの静寂ね。）

片抜き屋台の事を聞いて、つむぎらしいと思った。

まゆみ「二つとも変わった屋台ですね・・・野際先輩も一緒にやったんですか？」

まゆみは、啓子も沙千帆と一緒にやったのか問う。

啓子「私は、うちの千葉さんが金魚をすくったり、片抜きをしてる様子を少し離れた所から見てました・・・フフフ！」

啓子は、沙千帆の様にはせず、遠くから見守っていた様だ。

沙千帆「啓子さんが見てくれると、これがまた燃えるんだよ・・・ワハハハ！」

啓子が見てくれているお陰で沙千帆は、やる気が出ると言って、笑う。

まゆみ「はあ、そうですねか・・・」

まゆみは、何となく納得する。

秀子「まゆちゃん、そろそろ戻らないと！」

まゆみ「あっ!? もうこんな時間!!」

時計を見て、そろそろ戻る時間になっていた。

秀子「教官達も後で私達の映画、見に来てください!!」

薫「ん、後でね！」

秀子「それと先輩の皆さんもありがとうございました!!・・・いろいろお話できて勉強になりました。」

まゆみ「お先に失礼します。」

十海「私達も楽しかったわ・・・ではまた！」

美甘「急いでるならお会計、夜でも良いからね！」

秀子「御免ね、ありがとう！」

秀子達は、薫達や十海達に別れを告げて、店を出て行った。

薫「じゃ、私達も！」

次郎「ああ」

十海「さって、我々もそろそろ出ますか？」

秀子達が行った後、薫達や十海達も店を出ようとした時

『ちよつと待つてくさい!!』

あかねと俊秋が待つたを掛けてきた。

『ん?』

8人は、何なのかと思ひ振り返る。

薫「如何したのあかねさん、それに料理長まで?」

進愛「今まで黙つて奥に引つ込んだ子が、どれくらい勢い出来たじゃんね?」

あかね「これを食べて見て下さい!!」

あかねは、8人にある物を差し出す。

次郎「何だこれは?」

進愛「コロツケか?」

あかね「コロツケじゃありません・・・革命的新メニュー・・・肉巻きミルフィーユ

かつおにぎりの試作品です!」

如何やらさつき作つていた試作の携帯食料見たいだ。

美甘「わわわあつちゃんに桐野さん!?試作品を教官達と先輩達に持つていちゃつたよ

!」

ほまれ「教官達は兎も角、先輩さん達には、流石にあつちゃんの試作品は・・・」

美甘「不味くは無い、ていうか味は良いんだけど、何時も奇抜すぎるのよ!」

調理場にいた美甘とほまれは、あかねと俊秋を心配しながら様子を伺う。

進愛「どれどれ、一つ食べて見よう?」

十海達は、あかねの試作の携帯食料を試食する。

俊秋「艦長達もどうぞ! 搭乗員の革命的な弁当になりますよ!」

次郎「ほんとかよ?」

薫「じゃ、おひとつ」

俊秋に勧められ薫達も試食する。

『はむ．．．．．ん!』

8人が恐る恐る試食すると

美甘「ああ．．．食べちゃった!」

ほまれ「念のためお茶を用意しとこ．．．」

2人は、念の為の対策を講じる。

ところが

進愛「．．．美味しい!!」

薫「美味しい!!」

次郎「美味!」

進愛や薫と次郎から出た言葉は、あかねの試作の携帯食料が美味しかったという評価だった。

あかね「よし！」

俊秋「やった！」

3人から美味しかったという評価を受け、あかねは、ガッツポーズをする。

『ええ・・・!?』

沙千帆「ん、こりや美味しい！」

啓子「美味しそうに食べてますね千葉さんフフフ！」

他からも同じ評価を受ける。

燕「凄く美味しいんだけどこれ如何いう作りになっているの？ご飯が入っているわね！」

あかね「カレー味のご飯を薄切りの豚肉をグルグル巻いて、衣を付けてフライにして見たんです・・・これなら立ったままで、片手で食べられますから、忙しくて手が離せない時でも食事が出来ます。」

進愛「よく考えられ取るじゃん、しかも味は良いし、腹もちもかなり良さそうだに・・・」
亜澄「うちの艦に最適じゃないか！毎食これにすれば食事休憩の時間をゼロに出来る。」

亜澄は、評価しながらまたもブラック発言をする。

燕「止めて下さい!!」

それを燕が止める。

あかね「やった・・・遂にやったよ・・・革命的な艦内食を発明したよ!」

遂にあかねは、革命的な携帯食を発明した。

俊秋「如何ですか艦長?・・・これなら飛んでいる搭乗員には、うってつけの弁当になるでしょ!」

薫「うん、これならいつも保存食ばかり食べているのはちゃんやフェイトちゃん達が喜ぶわ!!」

あかねの発明した携帯食料に薫も大喜び。

次郎「やったな料理長!遂に中華料理以外のものが作れましたね!」

次郎は、遂に俊秋が中華料理以外のものが作れましたと笑うが

俊秋「お前は、一言多いんだよ・・・」

次郎「イテテ・・・!?!」

一言多いとほつぺたを引っ張られる。

十海「フッフ・・・晴風と言う艦は、ユニークな人材の宝庫見たいですね。」

沙千帆「ああ、明日の競闘遊戯会が楽しみだな!ごお・・・!」

彼らを見て、十海達は、明日の競闘遊戯会が楽しみだと思ふのだった。
ヴェルニー公園

一方、明乃とましろは、ひつと風呂浴びた後、公園内のボードウォークを歩いていた。
ましろ「そろそろ帰りましょうか？」

明乃「そうだね！」

時間もう3時30分になり、そろそろ帰ろうかと思つた時だった。

ましろ「うわっ!？」

明乃「わっ、ああっ!？」

いきなり少女が2人の前を横切り

『ああ．．．?』

2人は、何かと思ひ見ると

その少女は、さつき芽衣と志摩の漫才を見ていた少女で、至る所で目撃されており、今度は隣で店を構えているたこ焼き屋の方に居た。

謎の少女「わあ．．．」

たこやきに目が行きながら涎を垂らす少女。

明乃「うう．．．」

ましろ「うん？」

一体何をする気なのかしばらく見てみると

謎の少女「フツ！……クツ！……フツ！」

少女は、たこ焼きを買おうと肩から下げていたカエルの財布を出し、お金を出すが、行先巡りでいろんな物を買ったせい、既に懐には、僅か30円しか残っていないなかった。

謎の少女「フツ……フツ……フツ……」

少女は、まだ入っているかもしれないと思ひ財布を振るうが、結局30円しかない

謎の少女「うう……」

お金が無いからたこ焼きが買えない事に落ち込み

謎の少女「う……」

店主の前で泣きそおな顔をして、憐みを乞おとするが

店主「え……」

謎の少女「ううっ……」

店主「ええ？」

少女の憐れみに店主も困り果てるが、流石に駄目である。

少女「う……」

少女は、更に落ち込むが

明乃「すみません、たこ焼き一皿下さい。」

少女「あ……」

店主「はいよ！」

少女の落ち込む姿を見ていた明乃とましろは、少女の代わりにたこ焼きを買い

明乃「食べる？」

少女に差し出す。

少女「あ……わああ……ありがと……ありがと……あくん……」

明乃の行為に少女は、大喜びし、たこ焼きを食べる。

明乃「見事な食べっぷりだね！」

少女の食べっぷりに明乃は、感心する。

ましろ「名前は何て言うんだ？」

ましろは、たこ焼きを食べる少女に名前を問う。

すると少女は、食べるのを止め、姿勢を直してから

謎の少女「私……スー」

スーと名乗る。

これがスーザン・レジエスとの出会いだった。

明乃「スーちゃんね！」

明乃は、直ぐに仲良くなり

ましろ「何所から来たんだ？お家の人は一緒じゃないのか？」

ましろは、何所から来たのと親は一緒じゃないのかスーに問う。

スー「スーだけ、遠くから来た・日本、初めて」

如何やらスーは、1人で来たらしく、しかも外国から来た様で日本は初めてだった。

ましろ「1人で来たのか？」

1人で来た事にましろは驚き

明乃「じゃあ大冒険だね！」

スー「うん！」

明乃は、大冒険だねと褒める。

明乃「私は岬 明乃・・・ミケって呼んで！」

スー「ミケ！」

明乃「フツ、こっちはシロちゃんね！」

スー「シロ！」

ましろ「え・・・おう」

2人は、スーに自己紹介をする。

明乃「スーちゃん、日本語うまいね？」

明乃は、外国から来たばかりなのに何で日本語が上手なのかスーに問う。

スー「パパに教わった・・。パパは日本で働いてる。」

如何やら日本語は、父親から教わつたらしく、しかもスーの父親は、日本で働いてい
ると言う。

そう言つて、スーはたこ焼きをあつという間に平らげると今度は、隣の焼きそばに目
が行く。

スー「う・・・」

今度は、焼きそばを食おうとしたが

スー「うっ?」

もうたこ焼きも奢つたのに、流石に焼きそばまでは無理かと思つたが、やはり食いた
いらしく、2人を見る。

ましろ「うっ、うう・・・」

ましろも流石に焼きそばまで奢るのかと迷うが

明乃「買って上げようよ!」

明乃は、焼きそばも買って上げる事にした。

ましろ「えっ!?!」

焼きそばも買うのかと驚愕する。

明乃「お給料も出たし」

学校からの義援金も有るので問題なかったので

ましろ「ああっ……仕方ありませんね。」

結局買う事にした。

3人は、焼きそばを買い、近くのベンチで食べる。

スーが焼きそばを1人で食い

明乃「はい」

ましろ「ん」

明乃「美味しいね？」

明乃とましろが一つの焼きそばを代わり番こで食べる。

スー「ミケとシロは仲良しね！」

それを見たスーは、2人が仲良しだと言い

明乃「うん、そうだよ！」

明乃は、そうだと答え

ましろ「う……」

それを聞いていたましろは、恥ずかしくなる。

スー「此処、良いところ……美味しい物沢山有るし、ミケとシロがいるし、海が近い。」

明乃「スーちゃん、海が好き何だね？」

スー「うん！」

明乃「遠くから来たって言ってたけど泊まる所は有るの？」

スー「大丈夫！」

ましろ「本当に大丈夫なのか？」

2人がスーと話していると

ブブブ・・・！

2人の携帯が鳴り

『あっ・・・!?!』

誰からだと思ひ見て見ると

ましろ「古庄教官から？」

明乃「私も！」

それは、指導教官の古庄からの呼び出しだった。

しかも明乃も同じで

スー「ん？」

隣で聞いていたスーは、何かと思つたが

2人は、急用が出来たので、スーに別れを言つてその場を去る。

一方、明乃とましろと入れ替えて、見回りを終えた薫と次郎が公園内のボードウォークを歩いていった。

次郎「何処も問題が無くて良かったな！」

取り合えず生徒と隊員達の問題が無かった事に次郎は、ホツとしていた。

薫「そうだね……」

しかし、薫は、何だか難しい顔をしていた。

次郎「如何したんだ薫？……さつきから難しい顔をして……」

それに気づいた次郎は、何故難しい顔をしているのか問う。

すると薫は

薫「次郎君！……貴方に言わなければならない事が有るの！」

次郎に何かを伝える。

次郎「な、何だよ？」

次郎は、何なのかと思ひ、取り合えず聞く。

薫「私ね……呼ばれているんだ……ブルーマーメイドから！」

何と薫は、ブルーマーメイドからスカウトのお声が掛けられていた。

次郎「如何いう事だ？」

それを聞いた次郎は、如何いう事なのか理由を聞く。

薫「実はね……」

それは、競闘遊戯会の前日の事であった。

昨日

横須賀女子海洋学校、艦隊指揮官室

この日、競闘遊戯会の打ち合わせを終えた薫は、突然、龍之介から呼び出しを受ける。

薫「えっ!? ……私がブルーマーメイドに?」

龍之介「そうだ……真霜からお声が掛かっていてな……お前を自分の部署に置きたいと……」

呼び出された理由は、薫がブルーマーメイドへの転属の話だった。

薫「何でそんな事に?」

いきなりのブルーマーメイドへの転属の話に何でそんな事になったのか理由を問う。

龍之介「実は、この前の事件でお前が窮地の中で晴風の生徒を守り抜いた事が真霜の部署の人達の耳に入ってな……それで是非ともお前を欲しいと真霜からお声が来ているんだ。」

この前のRAT事件で薫が晴風の生徒を守りながら事件を解決した事が真霜の部署の耳に入り、それで是非とも自分の部署である安全監督室に置きたいと転属の話が龍之介の元に来ていたのだ。

薫「そうですか……」

龍之介から転属の話聞いて、薫は喜ぶかと思つたが、逆に嬉しくない顔をする。

龍之介「何だ薫、嬉しくないのか？……お前の憧れているブルーマーメイドからお声が来ているんだぞ！」

薫「そりや嬉しいわよ……でも私が居なくなつたら艦長は、誰がするの？」

薫は、自分が居なくなつたら誰が艦長になるのか問う。

龍之介「それは、はやてに任せ様と思うんだ……そろそろあいつも艦長を任せる時だろうし……」

既に後任は、はやてに決まっていた。

薫「権藤中佐は、何と？」

上官であり、教官だつた美由紀の意見を聞く。

龍之介「中佐からは、あの子が決める事だからと……」

美由紀からは、薫の意思を尊重するとの事で、反対はしなかつた。

薫「兄さんは、如何思っているんですか？」

そして、今度は、龍之介が如何思っているのか問う。

龍之介「行けとは言えない、行くなとも言えない……自分で決めるんだな！」

自分には、行かせる権利や止める権利も無い、如何するかは、自分で決めろと薫に言

う。

薫「ん……」

結局、この日は、返事を出さず、保留になった。

ヴェルニー公園

時系列は、再びヴェルニー公園に戻る。

次郎「そんな話が……」

話を聞いた次郎は、難しい顔をする。

薫「それでね……私……」

薫は、次郎に自分の気持ちを言おうとしたが

次郎「悪い！要辞を思い出したから先に帰る……じゃあな！」

それを聞かず次郎は、何処かへ行ってしまう。

薫「……次郎君……」

自分の気持ちを伝えられなかった事に薫は、落ち込んでしまう。

一方、薫の前から逃げだした次郎は

次郎「くそ……俺は……」

自分が何をやっているんだと喰いながら水平線を見る。

横須賀女子海洋学校、校長室

同じ頃、古庄に呼び出されていた明乃とましろは、横須賀女子海洋学校の校長室で古庄に会っていた。

古庄「御免なさいね、歓迎祭の最中に呼び出して・・・」

明乃「いえ」

ましろ「あの・・・如何いったお話で・・・」

2人は、何故呼ばれたのか古庄に問う。

古庄「宗谷ましろさん・・・貴方・・・艦長やる気はある？」

何と呼び出された理由は、ましろに艦長への昇格の話だった。

ましろ「え!!？」

明乃「はっ!!？」

それを聞いた2人は、驚愕する。

古庄「比叡の艦長が病気療養で休学する事になったの!」

ましろの艦長昇格の理由は、比叡の前任の艦長が病気療養で休学する事になったからだ。

ましろ「あの・・・それで何故私が艦長に？」

何故自分が艦長に推薦されたのか理由を問う。

古庄「比叡の艦長、副長含め、複数の生徒から嘆願が出てるの・・・是非、貴方を艦

長にと・・・」

艦長への推薦が有ったのは、前任の艦長と副長を含め、複数の生徒が嘆願を出していた。

ましろ「えっ・・・でも私は・・・」

古庄「貴方、入学試験では、実力を発揮できなかったみたいだけど、定期考査は学内トップレベルの成績よ・・・おまけにあの状況で1カ月、晴風の副長をやりきった実績もある・・・急な話で申し訳ないけど・・・なるべく早めに返事を貰えると助かります。」

ましろは、入学試験の成績は不合格だったが、真雪の計らいで晴風クラスに編入すると言う条件で特別合格した。

そして、それを洗い流すかの様に晴風の副長をやりきっている。

その実績は、この時乗艦していた薫がはつきり見ていた。

古庄は、直ぐに返事は聞かず、成るべく考える時間を与えた。

明乃「シロちゃんが他の艦で艦長さんに・・・」

ましろの艦長昇格を聞いて、明乃は、喜び処か逆に気を落としていた。

ましろ「・・・」

それに対して、ましろも自分の艦長昇格に喜ばず、何故か難しい顔をする。

薫の転属の話と同時にましろにも艦長昇格の話が来ている。

だが、2人は、あんなに憧れていた場所に行けるのに何故か嬉しくない。
何故だろうか

ヴェルニー公園

とは言え、古庄との会合を終えた明乃とましろは、ヴェルニー公園のボードウォークを考えながら歩いていていた。

2人のテンションは低くて、何も言えない。

だが、このまま黙っているのも駄目だ。

思い切つて、自分の気持ちを言おうとした時

明乃「シロちゃ・・・」

ましろ「艦長！」

『あ・・・』

言おうとした事が同時だったせいか、固まってしまふ。

ましろ「どうぞ」

明乃「ううん」

改めてお互いの気持ちを言おうとしたが、2人は言葉が出ない。

そんな時

明乃「あ・・・」

ましろ「うん？」

近くから何か焦げ臭い匂いがしてきて

ましろ「魚？」

ましろは、直ぐに魚の焼ける匂いだと気づき

『あ・・・』

2人は、前方を見る。

するとスーが公園内で焚火をしながら魚を焼いているではないか

スー「シロ、ミケ、一緒にこれ食べ・・・」

魚を焼いている中、スーは、明乃とましろに気づき、一緒に魚を食べ様と声を掛けるが、2人は、それを聞くどころか、急いで焚火を消す。

スー「あ・・・？」

それにスーは、啞然と分からなかったが

ましろ「此処は、焚火、禁止だ!!」

ましろは、スーに対して、此処は焚火禁止だと看板を指して、怒る。

ましろに怒られ、スーは、泣いてしまう。

明乃「スーちゃん、日本語読めなかったんだね。」

スー「漢字、無理!!」

本人は、漢字が読めなかった。

まあ当然だな

ましろ「大体、何をしているんだ・・こんな所で？」

改めて、焚火をして、此処で何をするつもりだったのかスーに問う。

スー「スーは、此処でご飯食べて寝る。」

如何やらスーは、この公園にキャンプするつもりだった見たいだ。

ましろ「ホテルは取ってないのか？」

それを聞いたましろは、ホテルの予約をしていないのか問う。

スー「ない」

全くしていない。

明乃「だったら、私達の寮に泊まっていけば良いよ！」

それに対して、明乃が自分達の寮に泊まるよう薦めるが

スー「NO 此処が良い・・海が良く見えるから！」

本人は、此処に泊まるの一点張りで

ましろ「しかし、此処で1人で泊まると言うのは、流石に・・・

それにましろが1人では危ないと反対する。

明乃「じゃあ、私も此処で寝るよ！」

だが明乃が、それなら自分が止まるとましろに告げる。
ましろ「えっ!？」

それを聞いたましろは、驚き

スー「ホント？嬉しい!!」

それを聞いたスーは喜ぶ。

しかし、流石に2人だけ泊まらせる訳にはいかない

ましろ「だとすると寝具が心もとないな・・・」

ましろは、自分も一緒に泊まる事にした。

明乃「あ・・・」

ましろ「明け方は冷え込むし、寝袋3人分持つてくる・・・後は上掛けと・・・」

公園に泊まるに對して、寝具だけでは不足と思ひ、必要な物を持つてくる事にした。

明乃「シロちゃん!」

ましろの心遣いに明乃は感謝していた。

数分後

しばらくして、さっきの場所にテントが設置され、側で焼いていた魚を五十六と多聞丸が食べていた。

3人は、仲良く寝袋で横になる。

明乃「お父さんやお母さんと一緒に来れば良かったのに・・・」

寝る間に明乃が両親と一緒に来ればよかったのと言うが

スー「ママ病気・ずっと病院に居る・・・パパ、この国の何所に居るのか分からない。」

『え?』

如何やら、両親については訳ありの様だ。

スー「パパと連絡付かない・・・スーはパパの事捜してる。」

スーが日本に来た目的の一つが行方不明の父親を捜す事だった。

ましろ「そうだったのか・・・」

それを聞いたましろは、納得し

明乃「私にできる事が有ったら言つて、何でも手伝うよ!」

明乃は、自分にできる事が有るなら手伝うとスーに言う。

スー「ありがとう!」

明乃の行為に感謝する。

ましろ「じゃあ、スーは、ずっと一人で暮らしてるのか?」

両親の事を聞いて、ましろは、スーがずっと一人で暮らしてるのかと思つたが

スー「NO 兄弟、沢山居る・・・皆仲よし!」

本人には、兄弟が沢山居ると言う。

ましろ「そうか・・・」

スーが1人じゃない事にましろは、安心する。

スー「ミケとシロも仲よし、だけど・・・」

ましろ「えっ」

スー「昼はもつと仲よしだった・・・今はちよつと違う。」

如何やら今の明乃とましろの状況はスーには、おみとうしの様だ。

ましろ「そんな事は・・・」

それに対して、ましろは否定するが

スー「すう・・・すう・・・」

あつという間にスーは、眠ってしまった。

明乃「寝入っちゃったねスーちゃん！」

ましろ「ええ！」

スーが寝入っちゃった後、明乃とましろは、何も言えず唯黙っている。

そんな中、ましろはある事を思い出す。

それは、まだましろが小さい時の事

ましろ「今日は3人で寝るもん！」

ある夜、ましろが突然、2人の姉と一緒に寝ると言い出した。

真冬「ハハ・・・困った奴だな、シロは・・・」

我ままを言うましろに真冬は、嘲笑っていたが

真霜「貴方がホラー映画なんて見せるから・・・」

如何やら、こうなった原因は、真冬がましろにホラー映画を見せた事がそもその発端だった。

真冬「見せてねえよ・・・シロがいきなり部屋に入ってくるから」

本人は、見せて無くて、事故だと言うが

ましろ「うう・・・ついてないよ」

自分がつくづくついていない事を嘆くましろ。

真冬「おいおい、あんなものにビビってたらブルーマーメイドには、ましてや艦長には、なれねえぞ！」

そんなましろに真冬があんなものにビビってたらブルーマーメイドには、ましてや艦長には、なれねえぞと馬鹿にするが

ましろ「なるもん！」

それでもましろは艦長になると言い張り

真霜「フフ・・・ましろは、頑張り屋さんだから、きつと、良い艦長になれるわ！」

そんなましろを真霜は、褒める。

ましろ「やったあ！」

真霜に褒められ、ましろは、嬉しく思った。

ましろ「ふう・・・」

昔の事をつい思い出してしまい、ましろは貯めい息をする。
すると

スー「ん・・・ん・・・」

ましろ「あ・・・」

寝ているスーがましろの腕を握り

スー「・・・ママ」

ママと一言言う。

ましろ「へっ!？」

それを聞いたましろは、驚愕する。

明乃「フフ・・・夢を見てるのかも？」

ましろ「そ・・・そうなのか？」

明乃「きつとママの事を思い出してるんだよ・・・シロちゃん、頼りになるから・・・」
明乃は、スーがましろの腕を握りながら、母親の事を思い出していると思い、それに
ましろが頼りになると言う。

ましろ「私は、そんな……」

それに対してましろは、否定するが

明乃「シロちゃん、本当に頼りになるから、でも……」

本当に頼りになると確信していた。

ましろ「あ……」

明乃「私達!……シロちゃんが居なくても、しつかりやらなきやね!」

ましろ「あ……」

明乃「ホントはね、私……」

明乃は、ましろに何を言ったのかは、分からないが

ましろ「え?」

それを聞いたましろは、驚愕していた。

明乃「おやすみ……」

その後、明乃は、眠りに付き、結局、2人は、何も言えずに眠りに着くのであった。

ブルーマーメイド寮、次郎と薫の部屋

その頃、薫と次郎も任務を終え、寮に帰っていた。

薫「……」

次郎「……」

此方も明乃、ましろと同様に帰ってから夕食まで、2人のテンションは、低かった。

2人は、そのまま一緒にベツトで寝るが

薫「……………」

次郎「……………」

2人は、それぞれ反対側を向きながら何も言わない。

これでは、駄目だと思い

『あの!?!』

思い切って言おうとしたが

『あ……………』

言おうとした事が同時だったせいとか、固まってしまう。

次郎「お前から言えよ!」

薫「次郎君こそ……………」

2人は、自分の気持ちを言おうとするが言葉が出ない。

しかし

薫「ねえ次郎君!」

結局、薫から喋り

次郎「な、何だ?」

薫「もし私がいなくなったら、如何する？」

次郎「え……きゅ、急に何を言い出すんだよ!？」

いきなり薫が急にいなくなったら如何するのと言われ困惑する次郎。

薫「例えばの事よ!……私がブルーマーメイドに行ったら、次郎君寂しくない？」
改めて、薫がブルーマーメイドに行ったら、寂しくないのか問う。

次郎「そ、そりゃ寂しいよ……でもブルーマーメイドは、お前にとって憧れの対象
だろ。」

それに対して、次郎は、寂しいと思ったが、薫にとって憧れのブルーマーメイドに行
くなど言えない。

薫「それもそうだけど……」

次郎「それに、ブルーマーメイドに入れば、そのうちあいつらとも一緒に働けるんだ
ぞ!!」

次郎の言う通り、ブルーマーメイドに入れば、いづれ明乃やましろ達と仕事ができる。

次郎「お前にとっては良い事じゃないか？」

薫にとって、この上ない良い事だ。

薫「次郎君は、それで良いの？」

だが、薫は納得せず、それで良いのかと問う。

次郎「お、俺は……」

それに対して、次郎は、答えられない。

薫「私は……」

この時、薫は、次郎に対して何を言ったか分らない。

次郎「え？」

それを聞いた次郎は、驚く。

薫「おやすみ……」

その後、薫は、眠りに付き、結局、明乃、ましろと同様に2人は、何も言えずに眠りに着くのであった。

薫とましろ

2人の行く末は、如何なるのか

ワシントンD・C、ホワイトハウス、大統領執務室

横須賀で競闘遊戯会が開催されている中、此処ホワイトハウスでは

キング「例の作戦は、予定通り進んでいるか補佐官？」

補佐官「勿論です！……既に例の物も届いている頃です……後は、予定通りに事をなせば……」

キング大統領の指示で何かの思惑が進行中だった。

キング「ふふふ……これで再び日本を我々に従える事が出来る。」

予定通りに進んでいる事にキングは、大変満足していた。

またしてもアメリカの陰謀が迫りつつあった。

そして、これが再び日本を揺るがすテロ事件になろうとは、この時、龍之介と真雪、深町は、知るよしも無かった。

続く

特別編 中編

競闘遊戯会当日

ヴェルニー公園

スー「う・・・う・・・う・・・グッドモーニン・・・」

夜が明けて、スーは1人寝ぼけながら起きて見ると

スー「う？」

隣には、明乃とましろの姿はなく

唯前に朝ご飯のおにぎりと水筒が置かれていた。

スー「サンキュー シロ、ミケ！」

スーは、2人の行為に感謝する。

スー「はむっ！」

そして、おにぎりを食べながら横須賀港を見下ろし、リュックから携帯用端末を取り

出し、港内の地図と見比べ

スー「OK 行こう・・・はーむっ！」

港内の出入り口を確認した後、何処かへと行ってしまった。

競闘遊戯会、会場

一方、会場では待ちに待った競闘遊戯会が開催されようとしていた。会場には、既に4校の生徒達が集まっている。

来賓である龍之介達や真霜達も既に来て、技量をきそう生徒達を見守る。

古庄『それでは、唯今より、競闘遊戯会を開始します！』
遂に競闘遊戯会が開始され

4校の生徒達「いけーっ！頑張れ！」

観覧席から4校の生徒達がそれぞれのクラスを応援する。

そして、薫とはやても晴風クラス達と共に観覧していた

古庄『第1種目・・障害物航走』

第1種目は、内火艇による障害物競走である。

右から呉、舞鶴、佐世保、横須賀の順でスタートラインに付き

明乃達晴風クラスは、最後尾に付く。

因みにこの競技には、明乃、ましろ、鈴、まゆみ、秀子、聡子が参加していた。

古庄『用意！』

用意の号令のもと各クラスは、発進用意をし、審判の合図で発進する。

各クラスは、一斉に発進し、前方の廃棄フロートを目指す。

観覧席

薫「始まった！」

はやて「お手並み拝見やね！」

観覧席で薫とはやてが晴風クラスと共に行く末を見守る。

見守っている薫の表情は、昨日と違い穏やかだった。

内火艇

明乃「此処からコースが狭くなるよ！」

ましろ「前方、側方に注意！」

『ヨースローー！』

明乃達は、左右を警戒しながら廃棄フロートを通過する。

観覧席

順子「何か凄いとこに入ってくね！」

美海「廃棄予定の小型フロートを通過するコースなんだって！」

観覧席で薫とはやて、晴風クラスが見守る中、各クラスは、無事に廃棄フロートを通

過する。

通過後、直ぐに敷設されていた模擬機雷が内火艇の接近を探知し浮上。

前方に立ちはだかる。

内火艇

明乃「面舵いっばーい！」

鈴「面舵いっばーい！」

明乃達は、右に舵を切りながら前方の機雷を回避する。

機雷によつて、各クラスは、次々と脱落して行き、晴風クラスが3位に登りつめてきた。

観覧席

はやれ「あらあらもう3位に上がつてきよつた!？」

観覧席で見っていたはやては、明乃達が3位に登り上がつて来た事に驚愕する。

薫「流石は岬ちゃん達！良い調子で意気投合している！」

それを見ていた薫も明乃達が意気投合している事が分かる。

はやて「それに比べてうちのクラスは、負け取る……」

武蔵クラスが負けていた事にはやては、がくんとする。

薫「アハハハ……」

そんなはやてを薫が嘲笑う。

無事に機雷を回避した晴風クラスだったが、更なる難関が待ち受けていた。

内火艇

まゆみ「右120度から魚雷！」

ましろ「左10度、魚雷！此方に向かう！」

今度は、模擬魚雷が左右から襲い掛かって来た。

鈴「取り舵一杯！」

鈴は、急いで左に回避するが

聡子「後ろ！真艦尾からも2本ぞな！」

秀子「左80度からも来てるよ！」

今度は、後ろと左から同時に魚雷が向かって来た。

全方位からの魚雷攻撃

絶体絶命だったが

鈴「逃げるのは任せて!!」

此処で鈴、必殺の逃げ逃げ根性が炸裂する。

パーン！パーン！

魚雷接近の警報音が鳴り

明乃「はっ！皆、衝撃に備えて!!」

明乃達は、シヨック態勢を取る。

晴風クラスの内火艇は右に舵を切って、2本の魚雷を回避、続けて左に転舵し、2本

の魚雷を回避した。

全方位の魚雷攻撃を回避する事に成功したが、回避によって艇が大周りをしてしまいコースから外れ、その間に各クラスがすり向けて行く。

各クラスは、巧みに魚雷を回避する。

特に大和クラスは、向かってくる魚雷をわざとぶち当てて、魚雷の進路を狂わせた。

観覧席

留奈「え・・・!?今の当たってるじゃん・・・ズルい!!」

今の技を見て、留奈がずるいと叫ぶ。

美千留「魚雷1発に付き、ゴールタイムに3秒の加算ペナルティだよね?」

美千留も魚雷が当たっているのに何故かペナルティが加算しないのに驚いていた。

理都子「命中する時の角度が浅いと本物の魚雷でも威力が落ちるんだよね」

果代子「撃発しない事も有るよ」

それに対して、理都子と果代子はその理由を説明する。

留奈「そうなんだ。」

それを聞いた留奈は納得する。

美海「流石上級生!・・・最小限のロスで魚雷に対処してるって事ね!」

大和クラスを見て、美海は感心する。

順子「でも、うちのクラスもまだドキユンと挽回できる位置だよ！」
美千留「ペナルティゼロだし、上位狙えるよね！」

だが、まだ晴風クラスも負けていない。

このまま行けば1位も狙える。

麻侖「1発も当たらねえってのは凄いけど抜かれまくってるぞ！」

しかし、流石に回避の連続で順位が落ちていた。

幸子「回避に専念し過ぎて、本来の目的を見失ってますね。」

『ああ・・・』

順位が落ちている事に皆は、愕然とするが

薫「大丈夫！・・・まだ取り返せる。」

まだ順位を取り返せると薫は、信じていた。

魚雷を回避しながら順位を詰めて来る晴風クラス

そろそろ終盤に差し掛かろうとしていた。

内火艇

秀子「後ろから比叡クラスが追い上げて来てるよ！」

追い抜いた比叡クラスが盛り返してきた。

ましろ「はっ!?!・・・比叡・・・」

しかし、秀子の言葉を聞いていたましろは、つい比叡クラスの方を見てしまい見張りを疎かにしてしまった。

明乃「できるだけ抜かれない様に！」

鈴「分かりました！」

その間に明乃は、抜かれない様に出来るだけ比叡クラスと距離を開けようとするが、ましろが見張りを疎かにしてしまつたせいで魚雷2本が左舷から来ていた事に全く気付かなかつた。

明乃「はっ!?回避!!」

鈴「はっ！」

直前で明乃がそれに気づき右に回避を命じるが

『わぁ・・・!?』

既に遅く2本が命中した。

まゆみ「えく!?何所から？」

いきなりの魚雷攻撃にまゆみは、何所から来たかと分からなかつた。

ましろ「うっ・・・すみません!!」

しかし、ましろは、それが自分のミスだと分かり明乃達に謝罪する。

秀子「見えづらい所から来てたんだね。」

聡子「死角つて奴ぞな．．仕方がないぞな。」

だが、明乃達は、それを責めず自分達も気づかなかつた事に反省し、ましろをフオロースする。

ましろ「ん．．．」

しかし、それでもましろは、自分が比叡クラスに夢中になつたせいで折角のタイムを台無しにした事を悔しがる。

古庄『協議終了！．．．首位、呉女子海洋学校大和クラス!!』

結局、大和クラスが1位でゴールし、晴風クラスは、最下位でゴールした。

観覧席

観声が出る中、見ていた晴風クラスの生徒達は、明乃達が最下位でゴールした事にガツカリする。

薫「あつ．．．」

しかし、他の生徒がガツカリする中、薫だけは、驚いていた。

何故かと言うとさっきの魚雷は、上手く行けば回避できたのに何故できなかつたのだろうかと思つていたので。

美甘「皆！お疲れ様！．．．飲み物用意してあるから飲んで．．．」

負けて帰還した明乃達を美甘と杵崎姉妹が飲み物を用意して出迎えてくれた。

鈴「ううう……うつ、御免なさい!!」

負けた事に鈴は、大声で泣く。

明乃「皆で頑張ったんだけど……」

頑張ったのに結局最下位だった事に明乃は申し訳なかったが

あかね「気にしないで……まだ最初の競技が終わったばかりだし!」

ほまれ「きつと盛り返していけるよ!」

観覧していた皆は、そんな事は気にしないで、次の競技で挽回できると明乃達を励ます。

明乃「うん、そうだね。」

あかねの励ましに明乃は、元気を取り戻す。

そんな中、ましろは、1人ボーと立っていた。

そんな時

ましろ「あっ!?!」

前から一人の生徒とぶつかってしまい

ましろ「失礼……」

ましろは、謝罪するが

もえか「あ……」

それは、明乃の親友であるもえかだった。

ましろ「知名艦長……」

もえかと気づいたましろは

ましろ「あの……」

思い切つてもえかに声を掛け

もえか「何？」

もえかは、何かと問う。

ましろ「つかぬ事をお聞きしますが……貴方にとつて艦長とは何ですか？」

ましろは、もえかに自分にとつての艦長は何なのか問う。

もえか「私は……艦の皆のお姉さんになれたらなつて思つてる……」

もえかは、艦長として、クラスのお姉さんになれたら良いとましろに言い

もえか「そう言えば、ミケちゃんは、艦のお父さんになりたいって言つてたな……」

以前、明乃が話していた事を思い出す。

ましろ「……」

それを聞いたましろもその事を思い出す。

それを後ろで見ていた薫もある事を思い出す。

それは、まだ龍之介達が向こうの世界に居た頃の話である。

Gフオース東部方面艦隊との大演習を終えて、横須賀に帰還した事である。

空母大鳳、炊飯所兼食堂室

演習を終え、殆んどのGF隊員が休息する中

次郎「そう言えば聞きたかたんだが・・・」

薫「ん？」

次郎「お前にとって理想の艦長って何だ？」

次郎が突然妙な事を薫に問う。

はやて「それうちも聞きたい！」

なのは「私も！」

フェイト「私も聞きたいです！」

それにははやてやなのは、フェイトの3人が反応する。

薫「そうね・・・私にとって、艦長はお母さんて感じかな・・・皆の側にいて、皆を

守る存在・・・」

薫にとつての艦長は、艦のお母さんて感じで、母として、皆の側にいて、皆を守る存在だと思っている。

はやて「お母さんか・・・薫先輩には、お似合いやね！」

なのは「そうだね！・・・私達いつも薫先輩達のお陰で、無事に帰還出来るし！」

フエイト「うん！」

それを聞いた3人は、納得し

次郎「じゃあ、俺は親父だな！・・・親父として、妻を守るのが男の役目だ！」

それを聞いた次郎も薫がお母さんなら自分は、お父さんだと言う。

はやて「ほんまにおとんかな？・・・何時もトラブルばかり起こしとるけど・・・」

だが、はやて達には、お父さんと言うか、悪いイメージしかなかった。

次郎「それを言うなよ！」

それを言うなと次郎は叫び

『フハハハ・・・』

それを見ていた薫となのは、フエイトは笑う。

薫（こんな時が永遠に続けば良いな・・・）

笑う中、皆を見て薫は、こんな時が永遠に続けば良いと思つた。

でもそれが永遠に続くわけがない。

いづれは別れが来る。

薫は、それを思い出しながらましろを見ていた。

第1種目が終わって、それから第2, 3, 4の競技が行われ、続けて第5種目に移る。

競技フィールド

古庄『間もなく競技を開始します！……選手は各配置へ移動して下さい！』
水上に設置された不安定なフロートの上に指定水着姿の生徒達が頭に水風船を付けて、バットを持ち、それぞれ配置に着く。

晴風クラスからもマチコ、楓、美海、幸子、麻侖、洋美、空、留奈の8人が参加し、助っ人として、我が空母大鳳の機関長である夏雄（態々横須賀女子海洋学校の指定水着を着ている）が特別参加していた。

美海「うちのクラス、此処まで、良い所ないし……この競技は、頑張らないとね！」
幸子「はい！」

麻侖「おうよ！」

夏雄「まあ、あたしがいる陰り、優勝は間違いない！」

各校の生徒は、配置に付き

楓「先輩方の胸をお借りしましょうか？」

マチコ、楓が先頭に立ち、両者構える。

観覧席

薫「いくら特別参加とは言え、うちの機関長を参加させて大丈夫かな？」

はやて「せやけど、この競技に参加できるのは、うち機関長だけやから……」

本来は、学生でもないGF隊員を競闘遊戯会に参加させる事は普通駄目のだが、我

が空母大鳳の機関長の夏雄は、体格が小さいから大丈夫だと判断、古庄に頼んで、助っ人として、晴風クラスに送り込んだのだ。

競技フィールド

古庄『それでは第5種目・・・水上無差別合戦・・・用意・・・始め!』
とは言え、競技は開始され、各生徒は戦闘に入った。

晴風クラスも先頭の楓が先発し

マチコ「フンッ!」

後方のマチコが楓に自分のバットを投げる。

バットを受け取った楓は、二刀流で相手生徒を次々と倒して行く。

それを見ていた十海は、楓の強さに感心する。

一方、隣でもシユペークラスが奮闘していた。

テア「舐めるな!」

テアも小さい体格ながらも相手生徒を次々と倒して行く。

ミーナ「流石我が艦長!」

それを見ていたミーナも感心していた。

夏雄「オラ!オラ!・・・死にてい奴は掛かってこい!!」

夏雄も突撃しながら、相手生徒を次々と倒して行く。

古庄『風船が割れた選手は速やかに競技フィールドから出る様に……』
各生徒が奮戦する中

リーゼロッテ「あっ……」

亜澄のバットが弾みでリーゼロッテのブラジャーをめくってしまい
リーゼロッテは、自分から落水する。

古庄『風船が無事でも落水は失格とします。』

落水した事でリーゼロッテは失格となった。

洋美「じゃあ……これも……ありなのね！」

古庄からのルールを聞いた洋美は、得意の相撲で相手生徒をフィールドへと放り投
げる。

一方、楓とマチコは、相手生徒に包围されていた。

楓「全周目標ですね！」

絶体絶命

全方位から相手生徒が2人に向かって襲い掛かって来た。

マチコ「ううっ……」

だが、此方も負けていない

マチコは、楓を高く投げ

楓「はああっ！」

投げ出された楓は、必殺の竜巻サイクロンで襲い掛かってくる生徒を一瞬に倒す。

観覧席

まゆみ「あれは幻の合体技・・・竜巻サイクロン！」

ましろ「は？」

秀子「高速回転の遠心力で破壊力は通常の4倍・・・風による追加ダメージで更に4倍・・・合わせて16倍！・・・接近する相手の動きも鈍らせる・・・雅に攻防一体の必殺技」

聡子「恐ろしいぞな！」

マチコと楓の必殺技に関心する。

競技フィールド

しかし、マチコと楓、洋美、夏雄が奮戦しているもの

美海「うわあっ！・・・ヤバいわ、これ！」

空「バトルロイヤルですからね！・・・生き残る事が重要・・・」

戦況は、晴風クラスに振りになっていた。

麻命「うわっ！てことは・・・逃げるが勝ちだい！」

結局戦況を打開できずに麻命達は敵を前にして逃げる。

留奈「逃げるって何所に？」

留奈の言う通り、此処は不安定なフロートの上、逃げ場などないのだが
そして、此処にも

幸子「そつちとは、やり合いとうなかつたわ！」

ミーナ「そがな極楽、この世界にはありやあせんで・トルか、トラれるかよ！」

幸子がミーナと対峙していたが

幸子「ふっ」

ミーナ「ふん！はあっ！」

幸子「うわあっ！きゃあ・・・ほんきですね、これは！」

此方も勝てないと思い逃げる。

夏雄「こら！逃げんな!!」

奮戦する夏雄は、逃げる麻命達を見て逃げるなど叫ぶ。

彼らが逃げた場所は

美海「マツチ！助けて・・・」

マチコ、楓、洋美がいる場所であつた。

3人が前を見ると

麻命達が相手生徒に追いかけられながら逃げて来る。

逃げて来た麻侖達は、3人の後ろに隠れる。

麻侖「はあ・・・これで一安心だな！」

幸子「この3人がいれば鉄壁の守りですよ！」

マチコ、楓、洋美がいる限り大丈夫だと思ひ麻侖達は、安心するが

洋美「ちよつと、貴方達・・・此処は・・・」

安心するのも束の間、逃げた場所は災厄にも不安定な端っこだった。

『わっ・・・あたた・・・わわ・・・!!』

洋美「ウレタンマットの端・・・」

重さのせいで8人は、運悪く落下、落水した。

晴風クラス8人全員が失格となり、残ったのは

夏雄「ふん!・・・結局、残ったのは・・・あただけか!」

特別参加の夏雄だけになった。

十海「・・・」

亜澄「・・・」

テア「・・・」

夏雄は1人、相手生徒に包囲される。

夏雄「周りは敵だらけ・・・死に場所にはもってこいてんでえい!」

包围され夏雄は覚悟を決め

夏雄「どっから出も掛かってこいてんでえい!!」

単身相手生徒に特攻する。

だが結局、相手生徒達にボコボコにされ、晴風クラスは敗北した。

観覧席

ましろ「駄目だ!」

麻命達の敗北にましろは、駄目だとガツカリし

明乃「アハハハ・・・」

明乃は、嘲笑う。

そして

薫「あらら・・・」

はやて「機関長、メッタ、メッタやで・・・」

ボコボコにされた夏雄を見て、薫とはやては、同情する。

そんな時

「ミケ、シロ・・・今は夜より仲よしかな?」

『うん?』

後ろから声を掛けられ

『え?』

後ろを振り向くと

スー「フフツ」

其処にはスーが立っていた。

薫（誰かしら・・・岬ちゃんの友達?・・・それともましろちゃんの友達かしら?）

薫もスーを見て、2人の友達なのかと思つた。

午前の競技も終わり生徒達は、昼休みに入る。

五十六「ぬう!」

『ニヤ〜ン!』

五十六、多聞丸、ミーくんの3匹が見てる前で晴風クラスも昼休みをまんしつしていった。

美波「美味しい。」

ハンバーグを美味しく食べる美波。

美甘「美波さん!ハンバーグまだ沢山有るよ!」

ほまれ「肉じゃがも作って来たから・・・」

あかね「どんどん食べてね!」

弁当を配る美甘と杵崎姉妹。

美波「楽しい・・・これこそ和気あいあい。」

和やかで楽しく打ち解けた気分が満ちていると言う意味。

桜良「美波さん、飛び級ですつと忙しかったから・・・こんな風にご飯食べるの初めてなのよね！」

美波「ああ、代えがたい喜びを感じる。」

ここんとこ、美波は、研究とかで忙しかったので、こう言う風に皆と過ごした事が無かった。

久々の休みを美波は、まんしつする。

だが、隣では

夏雄「ううう・・・」

夏雄が恨めしくしていた。

頭には無数のタンコブが有った。

はやて「ええ加減機嫌直したってえなあ機関長！」

薫「皆も悪気があって、逃げたんじやないんだから・・・」

恨めしくする夏雄を薫とはやてが慰め様とするが

夏雄「いいや許さねえ!!・・・敵を目の前にして、逃げ出すとは如何いうりようけんでえい!!」

さっきの競技で麻侖達が逃げた事に夏雄は、切れていた。

留奈「だって怖かったんだもん!!」

空「あの場合普通逃げるでしょ」

それに対して良い訳するが

夏雄「良い訳なんて聞きたくねえ!!・・・敵を前にして逃げるとは、お前らそれでも
漢かってんでいい!」

夏雄は、それでも許さず、訳分らない事を言う。

果代子「私達、女性ですけど・・・」

夏雄「似た様なもじゃねえか!」

幸子「違うと思いますけど」

麻侖「まあまあ夏雄!・・・もう負けた事をとやかく言うのはもう止めにしようぜ!・・・
ほれ!」

そんな夏雄を同じ機関長である麻侖が慰め様とおにぎりを手渡す。

夏雄「・・・ふん!」

夏雄は、黙ってそのおにぎりを食べる。

『ハハハ・・・!!』

そんな夏雄を皆は笑う。

麗緒「ねえ、艦長！……この子、誰？」

改めて、麗緒が明乃にスーの事を問う。

明乃「あ……スーちゃん？……私とシロちゃんの友達だよ！」

明乃は、皆にスーを紹介する。

薫「へ……岬ちゃんとましろちゃんの友達か……」

明乃から聞いて、薫は納得する。

留奈「OKー！じゃあ、一緒に食べよう。」

留奈がスーと一緒に食べようと誘う。

スー「おおつ、食べて良いのか？」

薫「良いわよ！」

スー「はむっ！」

一緒に食べようと誘われ、スーは、弁当をがぶがぶ食う。

聡子「凄い食欲ぞな!？」

はやて「よっぼどお腹空いてたんやね！」

スーのあまりの食欲に聡子とはやては、驚く。

秀子「名前、スーちゃんって言うの？」

スー「うん！」

秀子「何所から来たの？」

秀子は、スーに何所から来たのか問う。

スー「外国!!」

するとスーは、外国だと答える。

まゆみ「私達はね、海洋学校って言って、船乗りの勉強をする学校の生徒なの！」

まゆみは、自分達の事をスーに紹介する。

スー「おー！皆、艦の学校の子か!？」

まゆみから聞いたスーは、明乃達が横須賀女子海洋学校の生徒達だと理解する。

美甘「そうだよ!・・・で、私は艦のコックさん!」

スー「ハハッ!スーはコックさん大好き!!」

スーがコックさんと聞いて、それに飛び付く。

媛萌「フフフ・・・と言うか、食べるのが大好きなんじゃないの？」

スー「そうとも言う。」

『ハハハ・・・!!』

スーの面白さに皆は笑う。

スー「スーは艦も大好き!・・・スーの国では艦の仕事してた・・・サイトシーイングのゲストを乗せたり大きい艦も動かすよ!」

スーは、自分の国で艦の仕事をしていた事を皆に言う。

美波「まだ小さいのに大したものだ。」

それに対して、美波がスーを褒め称える。

麗緒「あ……」

すると突然、スーが美波の元に来て

美波「う……」

美波は何かと思つたが

スー「スーの方が大きい！」

スーが美波と身長を比べて、自分の方が背が高いと告げる。

美波「ぐ、ぐぬぬ……」

それを聞いた美波はショックを受け

『ハハハ……!!』

皆は笑う。

慧「スーちゃんの方がちよつと高いね……」

美波「これは誤差という……」

スーと美波は同じ年の子とは言え、スーは外人だから日本人の美波より背は高いだろう。

そんな中、ましろは浮かない顔をして、何処かへ行ってしまふ。

明乃「ウフフ・・・あ・・・!!」

それに気づいた明乃は

明乃「シ・・・」

声を掛けようとしたが、流石に声を掛けられず

そのまま何処かへ行くましろの後ろ姿を見ているしかなかった。

薫（如何したのかしら・・・あの2人？）

一部始終を見ていた薫は、何故2人が不仲なのか分らなかった。

その時

「薫↓」

薫「あっ!？」

後ろから誰からか声を掛けられ、振り向くと

其処には次郎が立っていた。

次郎「ちよつと良いか？」

次郎は、薫と話そうと薫を誘う。

それに薫は、黙って次郎について行く。

薫と次郎が去って、明乃は、まだ、ましろの後ろ姿を見ていた。

そんな時

スー「ミケ！何で行かない？」

それを見かねていたスーが明乃に何故ましろの元に行かないのか問う。

明乃「えっ？何でって・・・」

それに対して、明乃は戸惑い。

スー「ミケはシロと一緒に良いんじゃないの？」

戸惑う明乃にスーは、明乃にましろを如何思っているのか問う。

明乃「私は・・・」

それに対して、明乃は

スー「ん？」

明乃「・・・私は今、やりたい事をやれてる・・・シロちゃんや皆のお陰で・・・だから、シロちゃんにもやりたい事をやってほしい。」

明乃は、ましろや晴風クラスの皆のお陰で今、艦長として此処に居る。

だから、ましろにも自分がやりたかった艦長をして欲しい。

それが明乃がましろに対しての気持ちだった。

スー「それがミケの気持ち？・・・だったら気持ちの通りにすれば良い！」

明乃の気持ちを聞いたスーは、ならそうすれば良いと明乃に告げる。

明乃「うん、そうだね！」

明乃は、そうする事にした。

競闘遊戯会、本部テント

その頃、本部テントでは、教員達や来賓のブルーマーメイドが午後の打ち合わせやお昼をまんしつしていた。

龍之介「午後の最後には、なのは達のデモンストレーションもあるな・・・」

真霜「楽しみね！」

龍之介も真霜と仲良く弁当を食べていた。

そんな時

ブブ・・・！ブブ・・・！

『!?!』

真霜の携帯に着信を知らせる振動音が鳴り、真霜は、箸を置いて、携帯の着信を見る。

真霜「あっ!?!」

携帯の着信を見た真霜は、怪しげな顔をする。

龍之介「如何した？」

それに気づいた龍之介は、如何したのかと問う。

すると真霜は、自分の携帯を龍之介に見せる。

龍之介「こりゃ!？」

真霜の携帯の着信を見て、龍之介は何かの事件が発生した事を認識する。

2人は、席を立ち

龍之介は直ぐに深町総司令の元に、真霜は真雪の元へと向かう。

龍之介「総司令・・・」

深町「何事かね宗谷准将？」

深町に緊急事態が発生した事を密かに知らせ

真雪「？」

真霜も真雪に緊急事態が発生した事を密かに知らせて、平賀、福内を連れて、庁舎へと戻る。

深町「分かった・・・至急幹部達に召集を掛けたまえ・・・密かにな・・・」

龍之介「はっ！」

龍之介も功と美由紀を連れ、幹部達を密かに召集する。

そんな中、もえかが校内を歩いている時に真霜達が偶然通り掛かり、もえかは啓礼するが、真霜達は見向きもせず行ってしまふ。

その態度にもえかは、何か事件でも発生したのじゃないかと察する。

棧橋

一方、次郎と薫は、人気がない棧橋に居た。

薫「何？」

薫は、次郎が此処まで連れてきた理由を問う。

すると次郎は

次郎「薫……俺は昔、財閥の3人兄弟の末っ子だった……暮しに不自由なく過ごしてつた。」

いきなり自分の出成の事を言う。

薫「そんなの知ってる事じゃないの？」

薫は、既にそれは知ってる事だと言うが

次郎「話は最後まで聞け！……でも、俺は、そんな暮らしをしている時、何か自分のやりたい事が違うと分かって、親父の反対を押し切つて、国防軍の海士学校に入り海の男である艦長を目指した……結局、副長だったが……それでもお前の副長としてやりがいがあった。」

話の中で次郎は、薫の副長として、後悔はない人生だった。

薫「ん……」

次郎「俺はもうやりたい事を成し遂げている……お前もやりたい事をすれば良い！」
もう自分はやりたい事を成し遂げているので、薫にもやりたい事をすれば良いと告げ

る。

薫「それが次郎君の気持ちなの？・・・私がない方が良いんだ！」

次郎の気持ちを聞いた薫は、シヨックを受けて涙を流して、自分がない方が良いんだと次郎に言う。

次郎「それは違うぞ薫！」

だがそれに対して、次郎は、違うと答える。

薫「えっ？」

次郎「お前がいなくなったら寂しい！・・・でも、お前の夢を潰したくないんだ！！・・・それにいくら離れても俺達は、繋がっている・・・どんな時だって・・・そうだろう？」

次郎は、薫がいないと寂しいと思つたが、薫が望んでいたブルーマーメイド行きを潰したくなかつた。

それに離れていても次郎達とは、どんな時でも繋がっている。

薫「ん！」

それを聞いた薫は、悲しかったが少し嬉しくなる。

次郎「だから、お前はブルーマーメイドに入れ、俺はGフォースでお前の活躍を見守っているから・・・」

次郎は、Gフォースに残って、薫の活躍を見守ると告げる。

薫「ありがとう次郎君……でも、私は……」

それに対して、薫が自分の気持ちを言おうとした。

その時

ビビ……!ビビ……!

『あっ!?!』

突然、2人の携帯が鳴り、見て見ると

薫「非常?」

次郎「召集?」

それは、龍之介からの緊急招集の知らせだった。

2人は、仕方なく切り止めて、直ぐに向かう。

横須賀女子海洋学校、校舎入口

その頃、明乃達から別れたましろは、1人校舎の入り口前に立っていた。

ましろ「はあ……」

ましろの顔に笑顔はなく、唯溜息をする。

そんな時

「シロー!」

ましろ「えっ!?!」

突然誰からか声を掛けられ、振り向くと、其処には、さつき明乃と一緒に居た筈のズーがいた。

ましろは、何だと思ったが

ズー「トイレ何所？」

ズーは、トイレに行きたい様だ。

ましろ「ああ・・・中に入って右だ！」

ましろは、慌ててトイレの場所を教えるが

ズーは何故かましろをジツと見ていた。

ましろ「何だ？・・・トイレに行くんじゃないのか？」

そんなズーにましろは、トイレに行くんじゃないのかと問う。

するとズーは

ズー「シロは！・・・此処に何をしに来た？」

ましろに何故この学校に来たのか問う。

それを聞いたましろは、校舎の上に飾られているブルーマーメイドの標識を見て
ましろ「此処に・・・私は・・・何をしに来たのか・・・」

そう言う。

本当は、ブルーマーメイドとして、また艦長になる為に此処に来た筈なのに

今は何故か、此処に来た目的が分からなくなっていた。

スー「シロは、何がしたい？」

そんなましろにスーが何をしたいのか問う。

ましろ「何がしたいのか決めないとな・・・」

それに対して、シロは何をしたいのか迷う。

スー「ミケはシロのやりたい事分かってる見たい！」

迷っているましろにスーは、明乃のがましろのやりたい事を既に知っている伝える。

ましろ「えっ？」

それを聞いたましろは驚く。

スー「シロがやりたい事やってほしいって言ってた。」

更にスーは、ましろに対する明乃の気持ちも伝える。

ましろ「そうか・・・」

スーから明乃の気持ちを聞いて、ましろは、少し安心し

ましろ「スーは、やけに私達の事気にかけてくれるんだな？」

やけに自分達を気にかけてくれる事に何故だか問う。

スー「当たり前！だって一緒にご飯食べたし、寝る時も一緒にいてくれた・・・もう

ファミリーと同じ！」

スーは、もう明乃達を自分の家族の一部だと思っていた。だから、気にかけるのも当たり前だ。

ましろ「フフフ・・・そうか！・・・スーのお父さんも早く見つかるとうれいな・・・家族は一緒にいるのが・・・」

ましろは納得し、スーの父親が見つかる事を願う。

スー「もう直ぐ見つかる！」

だが、スーは、既に自分の父親を見つけた様な素顔をする。何故だか分からなかった。

その時

古庄『間もなく午後の部を開始します！・・・学生の皆さんは会場に集合して下さい！』

午後の競技を開始するアナウンスが成り

スー「スーは行く！」

ましろ「え？」

スー「シロ・・・バイバイ！」

スーは、何処かへと去ってしまった。

ましろ「あ……トイレじゃなかったのか？」

ましろは、スーが何しに來たのか分らなかった。

洋美「……」

そのましろを草むらの影から見ている洋美の姿が有った。

横須賀女子海洋学校、講堂

古庄『午後は図上演習の競技を行います！……個人競技なので参加希望者は本部に申し出て下さい！』

午後の競技は、図上演習の競技。

図上演習とは、艦隊戦を想定した模擬演習の事である。

普通は、空母などを使った艦隊航空戦が主流だが、この時代には航空機がない、その為、戦艦などを使った艦隊水上戦が主流になっている。

幸子「やはり暗黙の了解で、どのクラスも艦長がエントリーする見たいですね！」

美海「毎年そうらしいわね！……指揮能力がモロに出る競技だし……」

この競技には、殆んど艦長が参加していた。

本人達の指揮能力が試されるのである。

そして

ましろ「艦長！」

明乃「んっ?」

ましろ「艦長、お願いがあります!」

ましろは、明乃にあるお願い事をする。

ましろ「私は図上演習競技に出ます!」

『え?』

ましろ「艦長も出て下さい!・・・出て、私と勝負して下さい!」

何とましろのお願いとは、自分と一緒に図上演習競技に出て、自分と勝負する事だった。

『ええ!?!』

それを聞いた幸子達は驚愕する。

明乃「うん、分かった!」

だが、明乃は、それを素直に受ける。

『えええ!?!』

ましろの挑戦を受ける明乃にまたも驚愕する。

こうして、明乃とましろの勝負が始まろうとしていた。

もえか「・・・」

反対側では、もえかが何か難しい顔をしていた。

夏美「艦長！ エントリーされなんでしょうか？」

そんなもえかに夏美が図上演習競技に出ないのか問う。

もえか「私はパスするから出たい子は自由に出て！」

だが、もえかは何故か参加を拒否し何処かへ行ってしまう。

夏美「えっ!?! よろしいんですか? . . . 艦長なら優勝狙えると思うのですが . . .」

もえかの参加拒否に夏美は、驚愕する。

参加すれば優勝できるのに何故だろうか

それは、いづれ分かる事だ。

棧橋

その頃、棧橋では、スーが何処からかボートを持ってきた見たいで、それを棧橋まで持ってきて、水面に下し、エンジンを起動させて、何処かへと向かっていた。

向かっている先には、先程の障害物航走の競技に使っていた廃棄フロートがあった。

横須賀女子海洋学校、講堂

一方、講堂では、図上演習競技の一回戦が行われ様とされていた。

最初は、千華と沙千帆の勝負とつむぎと亜澄の勝負が開始され、ましろの相手は、十海だった。

両者は、パネルを操作し、戦闘の準備をする。

芽衣「一回戦目から、いきなり大和の艦長に当たっちゃうなんて……やっぱりついていないね……うちの副長！」

一回戦でましろが最悪にも十海に当たった事に芽衣は、ついていないと思った。

戦闘は開始され、先ず十海が先頭の航洋艦1隻を攻撃。

攻撃を受けて、ましろは航洋艦1隻を失う。

幸子「回避失敗？」

見ていた幸子は、回避が失敗したのかと思った。

ミーナ「筋金入りのついてなさじゃな！」

ミーナも同じでましろの不運を嘆く。

テア「人は誰しも不運が続くと闘争本能が衰えるものだ……しかし……」

だが、テアは何故か違うと考えていた。

『うん？』

テア「あれは諦めている人間の顔ではない！」

テアは、まだましろが諦めていないと推測していたのだ。

ましろ（ついていない事は、最初から分かっている……だったら、それも織り込み

済みで策を考えるだけだ！）

ましろ「んっ……」

こうしている間にもまたも航洋艦1隻を失い、戦況は十海に有利と思つたが
十海「あ……」

十海は何故か、ましろが落ち着いていた事に気になつて画面を見ると

十海「ん!?!」

何と自分の陣営の大巡1隻が攻撃を受け、更に接近戦で大型艦1隻が攻撃を受けた。

この攻撃で十海は大型艦1隻、大巡1隻を一瞬に失つた。

『あつ……』

思いもよらない戦況に驚愕する。

鈴「こ……これつて、もしかして、ちよつと盛り返してる?」

テア「ああ……幾度もの不運に見舞われながら、損害を最小限に食い止めて反撃で
きる形を作つた。」

テアの推測通り、ましろは攻撃に耐えながらも反撃のチャンスを伺つていた。

そして、反撃を開始したのだ。

十海「あつ……」

思わぬ反撃に十海も反撃する。

テア「凶上演習は現実の海戦を模倣したもの……運、不運が勝敗に大きく影響する
が、それで、全てが決まる訳ではない……大和の艦長は攻めつ気を誘われたな……不

運が功を奏したとも言える。」

テアの言う通り、ましろは、次々と十海の艦艇を撃破していき、あつという間に十海の陣営は全滅した。

古庄『宮里対宗谷、試合終了！・・・勝者、宗谷！』

これによりましろは一回戦を無事に通過した。

十海「あつ・・・こんな事が・・・」

思わぬ敗北に十海はシヨックを受けるが

ましろは、そんな十海に一礼をし

十海「あ・・・」

それに応えて、十海も一礼をする。

十海「やられたわ・・・でも不思議ね！・・・何で、貴方見たいな子が航洋艦の副長なのか？」

一礼を返した後、十海は、実力が有るましろが何故、航洋艦の艦長なのか気になる。

ましろ「いえ、その・・・」

それに対して、ましろは恥ずかしくて、言えなかった。

十海が去るとましろはある事を考えていた。

ましろ（もし、最後まで勝ち続ける事が出来たら・・・）

それは、このまま勝ち続ければいづれ明乃と勝負する事になるだろうと察していたからだ。

タグボート

その頃、スーは、ボートで廃棄フロートを曳航しているタグボートに向かっていた。

無人で停泊するタグボートにスーは乗り込み、艦橋を目指す。

タグボート、艦橋

艦橋に入ったスーは、直ぐに操縦席に座り、隣に置いてあつた無線機のスイッチを入れる。

スー「フロートの機関は？」

『いつでも動かせるぜ』

スーは、無線で誰かと会話していた。

スー「じゃあ速力は3ノットで、行き足が付いたら停止・・・私がタグボートでを止めたらフロートも少し後進をかけて止めて・・・」

『分かった。』

スー「じゃあ、始めよう。」

スーは、無線で指示を出しながらタグボートを操縦し、それに乗じて廃棄フロートも動き始めた。

横須賀女子海洋学校、ブルーマーメイドに危機が迫っていた。

そして、学生艦と一緒に停泊してある我が空母大鳳にも

空母大鳳、格納庫

文雄「作業を急がせろ!!」

その頃、空母大鳳の格納庫では、出撃に備え機体の整備を急がせていた。

だが、整備している整備員の中に

謎の男「よし、この隙に・・・」

何者かが整備員達の中に紛れ込み、航空燃料タンクに高性能爆弾をしかけていた。

そして、機関室にも

空母大鳳、機関室

謎の男「へへ・・・」

謎の男2人がへへと笑いながら

謎の男「これでこの艦は、海のもクズだな・・・我々の受けた屈辱を受けるがいい。」

機関に高性能爆弾を仕掛けて、嘲笑っていた。

その時

「おいお前!あたしの機関に何をしてるんでえい?」

いきなり誰かに見つかり

謎の男「ギク!？」

後ろを振り向くと、其処には、頭にタンコブだらけの夏雄が立っていた。

謎の男「だ、誰だ!？」

夏雄「あたしは機関長の夏雄だ!・・・緊急招集で帰って来て見たら・・・お前見られない顔だな?・・・あたしの機関に何を仕掛けていた・・・素直に答えろてんでえい!!」

夏雄は、問い詰め様としたが

謎の男「く、くそ!」

謎の男は、懐から拳銃を取り出し夏雄に向けるが

夏雄「ふん!」

夏雄はスパナを投げつけ

謎の男「うわあ!？」

見事に拳銃に命中し、足元に落ちる。

夏雄「オラ!」

その隙に夏雄が男に飛び掛かり、男をボコボコにする。

謎の男「如何した?」

夏雄がボコボコにしている最中にもう一人の男が、それに気づきこつちに来たが

謎の男「うわあ!？」

隠れていた機関員達に取り押さえられた。

取り押さええた後、直ぐに警報装置を作動させた。

ブウ……! ブウ……!

空母大鳳艦内に警報音が鳴り響く。

空母大鳳、格納庫

謎の男「ば、バレた!？」

警報音にビビる。

整備員「な、何事だ!？」

整備員「機関室に侵入者だ!!」

機関室に侵入者が出たと聞いて、整備員達は急いで機関室に向かう。

謎の男「しめた!……この隙に……」

整備員達が機関室に向かってる隙に逃げ様とする。

しかし

慶介「何をしているんだ？」

たまたま機体の能力改修をしていた慶介に見つかってしまう。

謎の男「いや、その……」

慶介「見られないな顔だな?・・・名前と階級は?」

謎の男「お、俺は・・・」

慶介に問い詰められ、男は、懐から拳銃を取り出す。

慶介「ん?」

慶介は何かと思つたが

謎の男「死ね!!」

男は拳銃を慶介に向け、引き金を引こうとする。

だが

文雄「動くな!」

謎の男「うっ!」

直前に文雄に阻止される。

文雄「一步でも引き金を引いて見ろ!お前の頭は吹っ飛ぶぞ!」

謎の男「うう」

文雄に頭に拳銃を突き付けられ、男は引き金から手を外し

文雄「拳銃を床に捨てろ!」

謎の男「く、くそ・・・」

言う通りに拳銃を床に捨てる。

文雄「ふん！」

謎の男「うっ!？」

拳銃を捨てた途端、文雄は男をスパナで殴る。

スパナで殴られ男は、その場で倒れる。

倒れた後、男は必死にベルトに付いていた起爆スイッチを押そうとするが

慶介に阻止される。

慶介「ふう・・・」

文雄「危ないところでしたね主任！」

危機一髪、爆発は回避された。

慶介「安心するのはまだ早い！・・・艦内に爆発物を仕掛けられているかも知れませ
ん？」

だが、安心はできない

慶介は、艦内に爆弾が仕掛けられているかも知れないと思い艦内調査を文雄に命じ
る。

文雄「分かりました！いくぞ!!」

文雄は急いで、艦内調査をする。

整備員と機関員達の必死の努力で、艦内に仕掛けられていた高性能爆弾合計6個を発

見。

直ぐに慶介が解体した。

捕まえた男3人も艦底の独房に放り込んだ。

これにより空母大鳳の破壊工作は未然に防ぐ事が出来た。だが、これで終わりじゃなかった。

横須賀女子海洋学校、講堂

そんな状況になっているのも知らず、講堂では

古庄『それでは図上演習競技の決勝戦を開始します!』

図上演習競技の決勝戦が始まろうとしていた。

明乃「シロちゃんは残ると思ってたよ!」

まして「私も艦長が残ると信じてました!」

既に此処まで勝ち抜いた明乃とまして。

2人の勝負が開始された。

先ず明乃がましての陣営の航洋艦1隻を攻撃、脱落する。

『おお．．．!?!』

その攻撃にざわつく。

攻撃後、両陣営は、接近する。

麻侖「うちの艦長と副長で決勝戦とはな！」

秀子「でも、あの2人はまるで、こうなる事を分かってた見たいな雰囲気だね！」

秀子は、2人がこうなる事を分かっていたと察する。

まゆみ「いや、雅か、そんな・・・」

まゆみは否定する。

聡子「・・・で、どっちが勝つぞな？」

どちらが勝つのか

そんな時

『ん？』

鵜「これで予想して見る。」

鵜がいつものタウジングで占うと言う。

慧「ハハツ・・・」

それに慧は呆れる。

本部でも

古庄「宗谷ましろも・・・知名もえか、岬 明乃と並んで、指揮官の素養を十分に備

えていますね！」

真雪「・・・」

古庄と真雪は、ましろを見て、もえかや明乃と並んで、指揮官の素養を十分に備えていると察する。

そんな時

ブブ・・・！ブブ・・・！

真雪の携帯に着信を知らせる振動音が鳴り、真雪は携帯の着信を見る。

真雪「はっ!?」

携帯の着信を見た真雪は、怪しげな顔をし、何処かへと行つてしまった。

ましろ「艦長！もし私が艦長に勝てたら、その時は・・・」

明乃「うん・・・分かつてるよ！シロちゃん！」

ましろ「だから、絶対手は抜かないで下さい！」

明乃「勿論だよ！・・・そんな事したら、シロちゃんには、直ぐばれちゃうし！」

ましろ「そうですね！」

2人の勝負は果たして

横須賀女子海洋学校、会議室

その頃、横須賀女子海洋学校の会議室では、非常事態が起きていた。

真雪が会議室に入ると

深町「おお宗谷校長！ちようど良かった！」

会議室には、既に秘書の老松とGフォース総司令の深町、総参謀長の一誠がいて、画面に出ている真霜から状況を聞いていた。

真雪「状況は？」

真雪も深町と一緒に真霜から状況を聞く。

真霜『北緯26度、東経135度付近の洋上で試験運用されている・・・水精製プラントが海賊に占拠されたわ!』

真霜からの情報によると日本の南方海域で試験運用中だった水精製プラントが海賊に占拠されたと言う。

一誠「水精製プラント？」

真雪「確か・・・植物栽培と人口蛋白合成ユニットが付いている自己完結型の・・・」

真雪の推測通り、占拠された水精製プラントは、大型の海水淡水化装置と植物生成プラントを搭載した自給自足可能な自己完結型フロートだった。

真霜『そう・・・プラントの技術者は全員人質にされている。』

しかも、その技術者も海賊に人質に取られている。

真雪「やっかいね!」

深町「やっかいだな!」

人質を取られている事に厄介だと考える2人。

真霜『それだけじゃないの!』

だが、占拠されたのはプラントだけじゃなかった。

深町「まだ有るのか?」

真霜『南シナ海でモスボールされていた海上要塞も同じ組織とみられる海賊に奪取されて、動き出しているのよ!』

深町「何だと!」

真雪「何ですって?」

何とプラントと同時に南シナ海でモスボールされていた海上要塞も占拠され、プラントに向かっていると言うのだ。

真霜『アメリカからの情報だと海上要塞の武装は破壊してあるから使えないらしいわ・・・但し、プラントと合流したら人質に無理やり修理させるでしょうね!』

通報してきたアメリカ側からは、海上要塞の武装は既に破壊されていると言っている。

深町「アメリカから!」

だが、アメリカからの情報だと聞いて、深町は急に難しい顔をする。

真雪「国土保全委員会の方針は?」

真霜『人質救出が最優先・・・主力をプラントに向けて、海上要塞は余剰戦力でマ―

クする事になりそうよ!」

この事態に国土保全委員会からは、人質救出が最優先とし、主力部隊をプラントに向かわせて、海上要塞については、残った兵力で足止めする様だ。

真雪「この装甲厚では・・・ブルーマーメイドやホワイトドルフィンの艦艇で足止めするのは困難ね!」

海上要塞を見て真雪は、要塞の装甲がブルーマーメイドやホワイトドルフィンの艦艇の火力では、太刀打ちできないと推測する。

真霜『数で囲んで、乗り込んで止めるしかないわ・・・向こうに撃てる砲がない間にね!』

その為、真霜は、数で対抗し、素早く開放する作戦を計画する。

真雪「万一、プラントと海上要塞が合流すれば、難攻不落な上、自給自足が可能になる!」

真霜『移動できる海賊行為の拠点・・・想定しうる最悪の結末よ!』

真雪「ん・・・」

もしプラントと海上要塞が合流すれば、無敵の海賊の拠点ができる。

そうなれば最悪の事態になりかねない。

深町「・・・」

2人がそれを考えている中、深町は、何かを考えていた。そして、もう一つ

「.....」

隣の部屋で、この会話を盗み聞きしている者がいた。

横須賀女子海洋学校、教室

一方、龍之介も緊急事態を受け、薫達を招集させていた。

次郎「ん.....」

薫「.....」

何かとGF隊員達はざわめいている中、さっきの薫の気持ちを聞けなかったせい
か、薫を見ていた。

龍之介「諸群！お楽しみのところ招集させてすまない！」

龍之介が功と美由紀を連れて、教室に入って来た。

フェイト「何事ですか？」

いきなりの召集に薫達は、何事か問う。

龍之介「詳細は、総司令からおって知らせがある.....直ちに攻撃準備に掛かってく
れ!!!」

『はっー!』

自体の詳細は、いづれ深町から伝えられると聞いて、薫達は、直ぐ出撃準備に取り掛かる。

その時

実「准将！」

突然、実が教室に駆け込んできた。

龍之介「如何した？」

突然、駆け込んだ実は何事かと問う。

実「大変です！・・・旗艦からの緊急連絡で侵入者が出たそうです！」

実は、空母大鳳から侵入者が出たと報告をする。

『えっ!?!』

実からの報告を聞いて、薫達は驚愕する。

龍之介「それで？」

それで如何なつたのか続きを聞く。

実「侵入者3人は逮捕・・・仕掛けられていた爆発物も無事に解体したとの事です。」
侵入者3人は、既に夏雄や文雄達に捕らえられ、仕掛けられていた爆発物も無事に解体された。

美奈「ふう・・・助かったわ！もし爆発してたら・・・」

信吾「今頃、大爆発だつたらうな！」

報告の続きを聞いて、薫達は、安心した。

だが、龍之介は安心せず、ある事を考える。

龍之介（可笑しいな・・・真霜からの緊急事態を受けた途端に空母に侵入者とは・・・まるで我々の動きを封じる見たいだ・・・いや、まだこれだけじゃないかも・・・はっ!?）

ふつと龍之介は、ある事に気づき

龍之介「緊急命令だ！直ちに艦艇を港外に退避させろ!!」

直ちにGフォースの艦艇を港外に退避させるよう命じる。

『えっ?』

いきなりの退避命令に薫達は何事かと思ひ。

龍之介「急げ!!」

薫達は、急いで艦艇を港外へと避難させる。

だが、時既に遅く、更なる非常事態が起き様としていた。

横須賀女子海洋学校、講堂

その頃、講堂では、明乃とましろの死闘が繰り広げられていた。

やられながらも耐えるましろ。

ミーナ「あやつ！さつきから事も無げに低い確率の成功判定を引き当てよる。」

明乃とましろの対戦を見て、ミーナは、明乃がさつきから事も無げに低い確率の成功判定を引き当てている事に気づく。

幸子「艦長のラッキーとシロちゃんの不運の相乗効果ですかね？」

それに幸子が2人の相乗効果と言う。

テア「しかし、宗谷も唯、やられている訳ではない！」

だが、ましろも負けてはいない事をテアは見抜く。

『ええ？』

テア「先程撃沈されたのは、今までの攻撃で、既に中破していた艦だった・・・宗谷は岬が何処を狙ってくるか読んで、継戦能力の落ちた艦を其処に配置し、被害担当艦としていた。」

テアの言う通り、ましろは、既に被害を受けた艦を楯にしていた。

百々「名勝負っす！漫画にしたいくらいなの！」

麗緒「これ、もうどっちが勝つか分らないわ！」

留奈「口八手八丁ってやつだね！」

空「それ全然、使いどころ違うから・・・」

鈴「うう・・・どっちも頑張れ・・・！」

2人の勝負の行く末を見守る晴風クラス。

反対側でも

沙千帆「いやゝやられちゃったね・・・」

啓子「ですね!」

亜澄「雅か3人そろって、晴風の副長にやられるなんて!?!」

啓子「でも、うちの千葉さんは惜しかったですよ!」

沙千帆「いや、私だけじゃないんだ・・・宮里も阿部もぎりぎりの所で逆転負けしている・・・つまりそれがあの子の勝ちパターンなんだ!」

十海「千葉先輩のおっしやるとおりです・・・終番の入り口まで、常に優位に運んでいたの、私とした事がつい緩んでしまいました・・・そして、其処からの驚異的な粘りにやられました。」

亜澄「みやさんが珍しく油断したのも無理ないだら・・・あの子本当についてなかつたし・・・こりや勝つてると誰でも思うんじゃないね・・・それにしても悔しいな・・・」

十海「私も悔しくはありますが、彼女は勝つべくして勝ったと言うべきでしょう。」

沙千帆「何処までも敗北を受け入れない者は、何時か勝利を手にするって事か?」

十海「はい!我々も見習うべき感じが有りました。」

十海達が2人の勝負の行く末を伺っていた。

横須賀女子海洋学校、会議室

真雪「直ちに競闘遊戯会を中断して、横須賀港内のブルーマーメイド艦を全て出港させる様……来賓に伝えて！」

真雪は、直ちに競闘遊戯会を中断し、港内に停泊するブルーマーメイド全艦を出港させる様、来賓に伝えるよう命じる。

老松「了解しました。」

命を受けた老松は会議室を出る。

一誠「我々も直ちに出勤させましょう！」

そして、一誠もGフォース艦隊を出撃させ様とするが

深町「いや、我々は行かない！」

深町は、何故か出撃を拒否した。

真雪「えっ？」

一誠「行かないとは如何いう事ですか？」

深町の出撃拒否に一誠は理由を問う。

深町「言った通りだ……我々は、出撃しない！」

一誠「何故ですか！……我が艦隊が出撃すれば海上要塞などあつという間に落とせるではないですか？」

一誠の言う通り、Gフォース艦隊を差し向ければ、海上要塞などひとひねりで落とせる。

深町「私は気に喰わないのだよ・・・アメリカからの情報が・・・本当に海上要塞の武装は破壊しているのか？」

だが、深町は、アメリカの情報が信じられなかった。

本当に海上要塞の武装は破壊しているのか分らなかったからだ。

一誠「そ、それは・・・」

深町「それにプラントの占拠と言ひ、海上要塞の占拠・・・海賊にしては、上手いきすぎている・・・もしかしたら、これも奴らの策略かもしれない」

プラントの占拠と言ひ、海上要塞の占拠。

これらの海賊の動きに余りにも上手いきすぎていると思ひ、もしかしたらアメリカの陰謀かと察した。

一誠「あり得ませんよ!・・・これは単なる海賊による悪質な占拠事件で有つて、国が介入する事など・・・」

それに一誠は、あり得ないと言うが

深町「だとしても・・・何が待ち受けているか分らない海域に隊員達を行かせる訳にはいかない!!・・・それに我々の任務は、ゴジラ迎撃で有つて、海賊退治ではない!・・・」

これは決定事項だ！」

それでも深町は、大事な隊員を危険な場所へは、行かせられない。

結局、龍之介達の出撃は無いと決定された。

一誠「分かりました・・・宗谷准将にはそう伝えます。」

一誠も納得し、会議を出る。

深町「すまないな宗谷校長！・・・これ以上、犠牲を出したくないのだよ！」

龍之介達を出撃させない事に申し訳ないと真雪に謝罪する。

真雪「分かっています・・・これも仕方がない事でしょう。」

真雪もその事は分かっていた。

そんな時

真雪「はっ!?!・・はい！」

突然画面に通信が入り

通信員「校長！廃棄フロートが動いているのですが・・・」

廃棄フロートが動いている報告が入る。

真雪「日没後、移動する予定だった筈よ？至急、確認して！」

予定にない行動に真雪は、直ぐに確認するよう命じる。

通信員「はい！」

真雪「何故、こんな時に……」

深町「嫌な事ばかり起きるな……」

2人は、何か嫌な予感がすると感じた。

タグボート、艦橋

そして、その廃棄フロートを曳航しているタグボートは

スー「あと少しね！」

横須賀港の出入り口に接近していた。

スー「私が合図したら微速後進にして！」

自分の合図で微速後進を掛けるよう無線で指示するが

『……』

スー「?……聞こえてる?」

無線からの応答はない。

横須賀女子海洋学校、棧橋

そんな中、港内に停泊していたGフォース艦は、全艦慌ただしく出港する。

龍之介「何とか無事に出港出来たな！」

何とか無事に出港出来た事に安心する龍之介。

一誠「宗谷准将！」

龍之介「野田総参謀？」

其処に深町からの出撃拒否の知らせを持って来た一誠がやって来た。

一誠「何故勝手に艦艇を出港させた!？」

何故勝手に艦艇を出港させたのか問う。

龍之介「勝手な事をしてすいません・・・後でどんな処罰もお受けします・・・ですが、今は急いで艦艇を港外に避難させないと・・・」

それに対して、龍之介は、具体的な理由は後にして、兎に角まずは、艦艇を急いで港外へと避難させるのが先決だと艦艇の出港を急がせる。

だが、時既に遅く。

すくね、艦橋

志津真「間もなく、港外に出ます。」

出港した巡洋艦すくねは、港の出入り口に差し掛かろうとしていた。

すくねの見張り員「前方に障害物!!」

五月「!？」

しかし、前方にスーが曳航している廃棄フロートが行く手を阻む。

横須賀女子海洋学校、講堂

同じ頃、講堂では、明乃とましろの勝負が大詰めになろうとしていた。

ましろ「このターンで決着ですね！」

最早戦況は、完全にましろが有利となり

明乃「うん、シロちゃん、やつぱり凄いよ！私なんかより、ずっと立派な・・・」

勝敗が決し様としたその時だった。

ボン！！ボン！！

明乃「わっ、うわっ!!」

ましろ「はっ!!」

突然講堂に爆発音が鳴り響く。

横須賀女子海洋学校、棧橋

一誠「な、何だ!!」

龍之介「しまった!!」

いきなりの爆発音に龍之介達は、急いで状況が見える丘へと向かい、丘から状況を見ると

何と港内の出入り口付近で廃棄フロートが爆発しているではないか

すくね、艦橋

五月「りよ、両舷停止！後進一杯!!」

港外に出ようとしていたすくねは、爆発に巻き込まれない様に急いで後進を掛ける。

廃棄フロートの爆発で港の出入り口が残骸で塞がれてしまった。

美由紀「これじゃ殆んどの艦艇が出港出来ない！」

龍之介「やられた！・・・やはり破壊工作だけじゃなかったか？」

出入り口が残骸で塞がれてしまった事により、停泊しているブルーマーメイド艦及びGフォース艦は出港出来なくなった。

龍之介の予感は見事に的中したのだ。

そして、明乃とましろや他の生徒達も丘の上から廃棄フロートが爆発しているのを見る。

そんな時

明乃「あっ・・・」

明乃は、廃棄フロートが爆発している付近で何かを目撃し

明乃「あれは・・・ちよつと貸して！」

秀子から双眼鏡を借りて見ると

爆発している付近でBPF隊員達が誰かを救助していた。

良く見るとそれは

明乃「スーちゃん！」

『えっ?』

何とそれは、スーだった。

恐らく脱出する時に爆発で起きた荒波に巻き込まれたのだろう。

ましろ「艦長！」

明乃とましろは、急いで救助されたスーの元に向かう。

薫「岬ちゃん!？」

龍之介と一緒に現状を見ていた薫もスーの元に向かう明乃とましろを見かけて

次郎「おい何所行くんだよ薫？」

2人の後を追い、次郎も一緒に向かう。

そして隣の方でも

進愛「如何いう事やで？」

十海「廃棄フロートが爆沈している。」

沙千帆「フロートに人はいない様だが・・・」

啓子「あれは!?!港の出入り口を塞ぐ形になっていますね！」

亜澄「嫌な予感がする・・・港内のブルーマーメイド艦が外に出られなくなっている。」

現状を見て、十海達は最悪の状態になっていると理解する。

そんな時

「阿部先輩のおっしやる通り！危険な状況です！」

『あっ!?!』

十海達の前にもえかが現れた。

亜澄「君は武蔵艦長の?」

もえか「はい、知名もえかです・・・皆さんに相談したい事が有って来ました。」
もえかは、十海達に何かの相談事を持ちかける。

龍之介「ん?」

そして、龍之介達ももえかが相談事をしている所を目撃する。

横須賀女子海洋学校、会議室

老松「爆沈したフロートの操舵を行っていたと見られる少女を保護しました・・・他に怪我人はありません・・・唯、水路が塞がれた為、横須賀港内のブルーマーメイド及びGフォース艦は全て出航不能です。」

老松からスーを保護したと、また、港内の出入り口が塞がれた事でブルーマーメイド及びGフォース艦は全て出航不能と言う報告を受ける。

真霜『やられたわ!・・・対処できるまともった戦力は、ホワイトドルフィンだけに!』

真雪「うっ・・・」

報告を受けた真霜と真雪は、悔しさを露にする。

真霜の言う通り、港内の出入り口が塞がれた事でブルーマーメイドとGフォース艦全

てが出港不能となり、残っているのは、ホワイトドルフィン艦艇だけとなった。

深町（ブルーマーメイドとが出動できない以上……残るは、ホワイトドルフィン……）
後は、我が艦隊旗艦の空母大鳳と高千穂の2隻のみか……）

そして、深町も残っている戦力が空母大鳳と高千穂の2隻のみだと分かり、出撃させるのか迷う。

ワシントンD・C、ホワイトハウス、大統領執務室

横須賀で危機的状態になっている頃、此処ホワイトハウスでは

補佐官「大統領閣下……彼らが上手くやってくれました……これで邪魔なブルーマーメイド艦隊とGフォース艦隊は動きを封じたも同然です。」

補佐官が横須賀の危機的状態をキングに報告する。

キング「うむ……作戦の第一段階は上手く行ったな……後は海上要塞とプラントが合流すれば……無敵の海賊行為の拠点が完成する。」

報告を聞いたキングは、作戦の第一段階は上手く行き、後は海上要塞とプラントが合流すれば無敵の海賊行為の拠点が完成すると察する。

補佐官「拠点が出来た暁には、日本の海上治安は益々悪化するでしょう……そうなれば日本政府も我々に助けを請うしかないでしょう……その時こそ、再び日本を裏から操れます。」

実は、このテロ事件は、全てアメリカが裏で糸をひいていたのだ。

RATt事件以降、アメリカに対する日本政府の対応が厳しくなった。

特に裏取引や資金援助が一切中止となり、日本から借金を肩代わりできなくなった事で赤字が増えキング大統領は、危機的状态に陥っていた。

これを打開しようとするが、流石に武力行使は国際問題になる為できない。

其処で裏のルートを利用して、海賊と取引した。

モスボールしていた海上要塞をワザと占拠されたと見せかけて、海賊に提供し、プラントの情報を海賊に教え、プラントの占拠を援助した。

更に海賊を利用して、これらを奪取できない様に予めブルーマーメイド艦隊とGフォース艦隊を港内に封じ込め出撃出来ない様にして、Gフォース艦隊旗艦の空母大鳳も爆沈させる。

後は、海上要塞とプラントが合流すれば無敵の海賊行為の拠点が完成する。

そうなれば日本の海上治安維持が悪化し、アメリカに助けを請う事になる。

そう言う計画だった。

キング「最早勝つたも同然だな！」

キングは、勝利を確信する。

だが、残念な事に空母大鳳の破壊工作は失敗、更に学生艦が無傷だった事を知らな

かった。

これは、事件が起きる数週間前の出来事

とある町の路地裏

此処は、とある町の路地裏でスーは、怪しげな男と会っていた。

謎の男「お前の腕を見込んで、頼みたい仕事があるんだが・・・」

男はいかにも怪しげな表情でスーにある事を頼みこむ。

スー「どんなの？」

スー頼み事の内容を聞く。

謎の男「所定の時間にフロートを動かして欲しい・・・タグボートは用意する。」

スー「それだけで良いの？」

スーは、男の頼み事を聞きながらタブレットを見る。

謎の男「見ての通り・・・停船位置に対してフロートの幅はギリギリだ・・・付近の

水深も浅い・・・並の船乗りならぶつつけちまうが、お前なら・・・」

男が言うには、タブレットに記載された通り、水路が狭い割に水深も浅い、普通の水

先案内人ならぶつけてしまう程。

しかし、スーの腕なら可能だ。

スー「簡単だわ！」

話を聞いたスーは簡単だと言う。

謎の男「ふっ、流石だな！」

スー「でもこれ何所なの？」

スーは、何所の港か問う。

謎の男「ああ、横須賀と言う日本にある港だ！」

男は横須賀だと言う。

スー「日本……」

謎の男「出入国の段取りは此方でやるし、報酬も弾む」

スー「お金はいらない！……その代わり、日本にいる私のお父さんを探せるかな？」

スーは、お金の代わりに行方不明の父親を捜す手伝いをして欲しいと要求する。

謎の男「ああ、そんな事ならお安い御用だ！」

男は易々とスーの要求を引き受ける。

スー「ほんと！じゃあやる！任せて！」

それを聞いたスーは、男の頼み事をあっさり引き受ける。

謎の男「但し、この仕事は誰にも気づかれない様にやってくれ……サプライズなんだ……近くでフェスティバルがあつてな……その客にフロートから打ち上げる花火を見せるんだ。」

付け加えて、サプライズな為、この事は、他の人には内緒と言う条件をスーに付き付ける。

スー「分かった！」

スーもその条件を飲み、何処かへと去る。

黒ずくめの男「大丈夫なのか、あんな頼み事を引き受けて？」

スーが去った後、黒ずくめの男が現れ、スーの頼み事を簡単に引き受けて大丈夫なのか問う。

謎の男「問題ない・・・役目が終われば最早用済みだ。」

それに対して、問題ないと答える。

男は、最初からスーの要求など引き受ける気はなかった。

男は海賊のボスで、今言った事は全てスーを誑かす為の嘘。

そして、もう一人は、CIAの諜報員で、このボスとキングの仲介役を務めていた。

そうとは知らずにスーは、男が用意した偽装パスポートで日本に向かう。

横須賀病院、病室

そして、男の要求を満たしたスーは用済みとなり、海に落ちたところをBPF隊員達に救助され、此処横須賀病院の病室に収容された。

吾郎「命に別状はない・・・少し安静が必要だ。」

病室には空母大鳳軍医長の宗方吾郎がスーの主治医として居り、スーの側には事情を聞こうと古庄も居た。

スー「あ……」

そんな中、スーは、目を覚ます。

吾郎「気が付いた様だな！」

スー「此処……何所？」

目が覚めたスーは、自分がいる所が分からなかった。

古庄「大丈夫？……貴方に聞きたい事が有るのだけど……あのフロートを動かしていたのは……貴方で間違いない？」

目が覚めたスーに対し、古庄は気に掛けながら、フロートを動かしていた事を問う。

スー「……」

それに対して、スーは、だんまりするが

ポーン！

入口から何か物音がし

古庄「あっ!？」

吾郎「な、何だ？」

2人は何かと思つたが、しばらくすると

ＢＰＦ隊員『ドアから離れなさい！』

ＢＰＦ隊員『学生は会場で待機よ！』

『お願いします・・・入れて下さい！・・・あの子は私達の友達なんです！』

『どうか、お願いします！』

『私からもお願いします！・・・この子達を如何か通してください！・・・この子達は、あの子の友達！』

ＢＰＦ隊員『駄目です！』

如何やら廊下で歩哨に立っているＢＰＦ隊員と誰かが揉めてる様だ。

スー「ミケ、シロ！」

だが、スーは、それが明乃達だと直ぐに分かった。

古庄「あの子達と知り合いなの？」

それを聞いた古庄はスーが明乃達と知り合いなのか問う。

スー「うんうん」

スーはそうだと頷き

古庄「その２人を通して！」

それを聞いた古庄は、通すよう命じる。

命令を受け、ＢＰＦ隊員達は、明乃達を病室に入れる。

明乃「スーちゃん!？」

スー「ミケ! シロ!」

病室に入った明乃はスーに抱き付く。

後からましろと薫、次郎も入って来て

吾郎「お前ら何をやっているんだ?」

吾郎に叱られる。

薫「すみません軍医長! スーちゃんの容体は?」

叱られながら薫は、スーの容体を聞く。

吾郎「心配するな! 命に別状はない!」

それに対して、命に別条ないと言う。

薫「そうですか・・・」

それを聞いた薫も安心し

明乃「良かった!」

明乃も安心する。

スー「う・・・うう・・・うわああ・・・!!」

明乃に抱きつかれ、スーは突然泣き出す。

スー「仕事ちゃんとすれば、パパを捜してくれるって・・・うわああ・・・!!」

スーは泣きながら自分が海賊に利用された事を吐く。
泣くスーを明乃とましろが慰める。

薫「酷い！・・・父親の事に付け込んで利用するなんて、許せない！」

スーから利用された話を聞いて薫は、怒り狂う。

吾郎「酷い話だ！」

吾郎も酷い話だと言つて、スーに同情する。

そして、側で聞いていた古庄は、スーから詳しい事情を聞く。

横須賀女子海洋学校、会議室

古庄「少女は海賊に利用されていました。」

古庄は、スーから聞いた事を真雪と深町に報告する。

深町「自分の手を汚さず、その少女の内情に付け込んで利用する・・・犯罪者がよく

使う手だな！」

報告を聞いた深町は、犯罪者がよく使う手だと察する。

古庄「なお、日本に来る前に海賊の依頼を受けて、海上要塞でも仕事をしていたそう

です・・・今、要塞の内部構造を話して貰っています。」

更に古庄は、スーが例の海上要塞で働いていた事も報告する。

深町「その子は、要塞の構造に詳しいのだな？」

古庄「はい！」

深町「ん……」

スーが要塞の構造に詳しいと分かり、深町は

深町（なら……その子を使って、海上要塞に殴り込みを掛けるか？……だが、今の戦力では……）

スーを道案内役として、海上要塞に殴り込みを考えるが、稼働できる艦が立った2隻しかないので無理だと判断する。

だが、真雪は

真雪「ん……その子は動けるの？……怪我は？」

何故かスーの容体を聞く。

古庄「大きな外傷はありません……脳波と内臓も異常なしです。」

古庄は、命に別条はないと報告する。

真雪「ん……」

それを聞いた真雪は

真雪「その子を……武蔵に乗せられないかしら？」

古庄「えっ？」

何とスーを武蔵に乗せられないかなと発言する。

深町「雅か宗谷校長？」

真雪の言葉に深町は、真雪が自分と同じ事を考えていると察し、

深町「無理だ！・・・要塞相手に武蔵だけでは・・・」

反対する。

真雪「ですが、誰かが行かないと・・・此処は、私が行くしかありません・・・要塞の内情を知っている少女がいる今、落とせる見込みがあります。」

だが、真雪は、要塞の攻略を知るスーがいる以上、落とせる見込みがあると断つて、断固行くのを諦めない。

深町「如何しても行く気なのか？」

真雪「はい！」

深町「・・・分かった・・・私も行こう・・・高千穂と武蔵・・・2隻なら申し分も無いだろう！」

真雪の頑固さに深町は折れ、自分も高千穂と一緒にいくと真雪に言う。
こうして、真雪は、深町と共にプラントと海上要塞奪取に向かう。

横須賀女子海洋学校、棧橋

武蔵と高千穂に乗艦すべく、3人は、内火艇に乗艇しようとしていたが
ましろ「待って下さい!!」

それに待ったを掛けて来るかのように明乃とましろ、薫、次郎がやって来た。

真雪「学生は全員、会場で待機と命令が出ています筈よ！」

深町「何しに来た！お前達も待機だと命じているだろう。」

2人は、4人に待機を命じている筈が何しに来たか問う。

明乃「スーちゃんを連れて行くなら、私達も行かせてください」

ましろ「その子を1人で行かせたくないんです！」

『お願いします！』

明乃とましろは、スーだけを行かせる訳にも行かないと言って、自分達も同行を頼む。

スー「ミケ、シロ・・・」

深町「お前達もか？」

薫「はい、この子達が行くなら私達も！」

次郎「俺もだ！」

そして、薫と次郎も明乃とましろが行くなら自分達も行くと言ふ。

明乃「スーちゃんは私達の友達なんです」

ましろ「側に、付いていたいんです・・・同じ艦に乗るのが無理なら、せめて晴風で

随伴を！」

薫「私達も大鳳で！」

4人は、一緒に乗れないなら自分の艦で随伴すると言う。それに対して、真雪と深町は

真雪「随分、はつきり物を言う様になったわね．．．ましろ！」

深町「流石は、准将の妹だな．．．山本中佐！」

はつきりと物を言う2人を褒め

ましろ「はっ！」

薫「じゃあ私達も一緒に．．．」

同行できると思つたが

真雪「それとこれとは話が別よ！．．．貴方達を連れて行く訳には．．．」

真雪は、それでも駄目だと言って、水平線を見た途端、表情が変わる。

深町「はっ!？」

真雪の表情変わりに気づいた深町も水平線を見ると突然驚いた顔をする。

2人が見た先には、何と学生艦が一齐に煙突から煙を出し、何時でも出撃できる態勢をとっていた。

真雪「罐に火が？」

深町「如何いう事だ？」

何故、学生艦が出撃態勢を取っているのか、分からなかった。

その時

もえか「私達に行かせてください！」

明乃「もかちゃん!？」

ましろ「知名艦長!？」

薫「兄さん!？」

次郎「准将!」

4人の後ろからもえかと龍之介達が現れた。

龍之介「また勝手な事をしたなお前達!」

現れた龍之介は、勝手な事をした薫と次郎を叱る。

薫「御免なさい!・・・でも私!」

叱られても薫は自分の気持ちを言おうとしたが

龍之介「分かってるよ!」

だが、龍之介は、薫が言いたい事は、既に分かっていた。

もえか「いつでも出港出来る様に機関科の子達には、先に動いてもらいました。」

もえかは、真雪にいつでも出撃準備は出来ていると告げる。

龍之介「ついでに俺達も、この子に言われて、いつでも出撃準備は出来ていますよ総

司令!」

そして、改めて龍之介も深町にいつでも出撃準備は出来ていると告げる。

深町「君は、何をしているのか分かっていいのか!?・・・勝手に学生と組んで・・・学生を危険にさらす気か?」

真雪「その通りです!・・・学生を危険にさらす訳にはいかないわ!」

それを聞いた真雪と深町は、勝手に動いた事を叱る。

龍之介「だが、他に手はない!・・・今使える戦力が有るなら、大いに使うべきです!」

しかし、龍之介は、今使える戦力が有るなら大いに使うべきだと尊重する。

もえか「それに要塞の武装は使えない状態にあると聞きました・・・ですから、私達が事態に臨んでも危険は大きくないと見積もります。」

もえかも要塞の武装が使えない状態であるという情報を言っ、自分達が行っても問題ないと告げる。

真雪「貴方!何所でそれを・・・」
もえかの情報に驚く真雪。

もえかが言っている情報は、一部の人しか知らない情報なのに何故もえか見たいな学生が知っているのか

深町「雅か准将!」

それに対して、深町は、龍之介がもえかに情報を全部教えたと思ったが

龍之介「いや、俺は何も話していないんです……この子が最初から全部知っていた様で……」

龍之介は何も話しておらず、もえかが最初から全部の情報を知っていたと告げる。

深町「何!?!」

それを聞いた深町は驚愕する。

実は、その出来事は、数時間前に遡る。

横須賀女子海洋学校、丘

港内の出入り口が塞がれ、生徒達はその現状に夢中になっている頃、もえかは、十海達とある相談をしていた。

亜澄「い、いきなりだな!?!……ていうか、この騒ぎでよく見つけられたね私達を?」

もえかがこの騒ぎに自分達を見つけた事に驚く。

もえか「状況を一番よく見渡せるのは、この地点ですから、先輩達が此処にいるんじゃないかなって……」

もえかは、最初から十海達が此処にいると分かっていた様だ。

亜澄「成程!……で、相談というのは?」

亜澄は、もえかに何の相談か聞く。

もえか「協力していただきたいんです……私達大和型4隻の力が必要になります。」
沙千帆「話がデカイな君は？」

十海「ちよつと待って！さっき貴方が言っていた危険な情報とは具体的には何なの？」

もえか「ブルーマーメイド及びGフォース艦を港に封じ込めた上で大規模な海洋テロが行われようとしています……具体的には海水淡水化装置と植物精製プラントを搭載したフロート……及び移動式海上要塞を合流させ自給自足可能のテロ行為の拠点を形成する事が狙いと見積もります。」

もえかは、今起きようとしているテロ事件の内容を十海達に説明する。

進愛「あんたそれ、何を根拠で言っとるの？」

啓子「随分とつぴおしないお話に聞こえますけど……」

それを聞いた十海達は、もえかの話を直ぐには信じなかった。

もえか「根拠があります！実は……」

もえかは、その情報を仕入れた先を告げようとした時

龍之介「何の話をしてるんだ？」

もえか「はっ!？」

『んっ!』

龍之介と功、美由紀が気になってやって来た。

もえか「宗谷准将!？」

十海「宗谷!？」

宗谷と聞いて、十海は驚く。

恐らく宗谷と聞いて、龍之介が男だった事に驚いているんだろう。

まあ、まだ宗谷家に婿養子として入籍したばかりだから仕方がない。

ついでに宗谷家に婿養子する代わりに次郎にも山本家へと婿養子させた。

龍之介「面白い話をしているな!・・・俺達も仲間に入れてくれないか知名艦長?」

話を変え、何を話しているのかもえかに問う。

もえか「調度良い所に!・・・後から宗谷准将達にも相談をするとところだったんで!」

だが、もえかは、十海達に相談した後、龍之介達にも相談する予定だった様だ。

龍之介「何だ、それなら今此処で説明して貰おうじゃないか知名艦長?」

それを聞いた龍之介は、今此処で説明しろともえかに命じる。

もえか「はい!」

もえかは、龍之介達にもさっきのテロ事件の内容を説明し、情報を仕入れた先を告げ

る。

それは、まだ港内が封鎖される数時間前に遡る。

もえかは、図上演習競技をパスして、楓と一緒にいた。

もえか「御免なさい万里小路さん！・・・ミケちゃんから話は聞いていると思うんだけど・・・」

楓「はい！岬さんから伺っています・・・知名艦長のお手伝いをして欲しいと！」

もえかは楓に何かを手伝わせ様とする。

もえか「晴風の艦長と副長が決勝戦をしている最中に本当に申し訳ないんだけど、何しても万里小路さんの力が必要なの！」

楓「おきになさらないで下さいな！わたくしにできる事でしたら何なりと！」

楓は、易々ともえかの手伝いを引き受ける。

もえか「ありがとう・・・じゃ、これを使って・・・」

もえかは感謝し、楓にある物を渡す。

楓「聴診器・・・ですか？」

それは、医者がよく検診に使う聴診器だった。

もえか「私と一緒に会議室の隣の部屋に忍び込んで、中の会話を聞いてほしいの・・・中にいる人達には分からない様に・・・」

楓「盗聴・・・ですね！」

如何やら、聴診器で会議室の会話を盗聴する見たいだ。

もえか「理由は後で説明します。」

もえかは、何故聴診器を使うのかは後で話すと言う。

楓「委細、承りました！……岬さんが信頼している知名艦長をわたくしも信頼します。」

楓ももえかの事を信じる。

もえか「ありがとう……会議室の隣が無人である事は確認済みだから……唯、壁の厚さが10cm、もちろん断熱材や防音材も入ってる……普通の人間では聴診器を使っても会話は聞き取れないの……でも、万里小路さんなら！」

もえかが言う様に会議室は、完全に密閉されてて、普通の人なら中の会話は聞けない。だが、楓なら水測員として、密閉された部屋の会話など、物ともせず聞き取れる筈。

楓「最善を尽くします。」

楓は最善を尽くすと告げる。

もえか「聞き取った内容は、このノートに書き留めて！」

もえかは、楓に盗聴用のノートを渡す。

楓「承知いたしました。」

もえか「じゃ行こう！」

楓「はい！」

2人は、会議室の隣の部屋へと向かう。

もえか「万里小路さん、足音は消せる？」

楓「はい、勿論！」

もえかと楓は、密かに会議室の隣の部屋に入り、会議室の会話を盗聴し、ノートに記載した。

もえか「と言う訳なんです！」

『ええ．．．!』

もえかから盗聴の事を聞いて、十海達は驚愕する。

龍之介「成程！」

だが龍之介達は驚かなかった。

もえか「これが、その時取ったノートです。」

もえかは、盗聴した会話を記載したノートを十海達と龍之介達に見せる。

美由紀「貴方勝手に会議室の会話を盗聴したわね！」

見ている間に美由紀は、盗聴した事でもえかを叱る。

もえか「申し訳ありません．．．でも、状況を知るには、これしか．．．」

もえかも盗聴に関しては、お叱り覚悟だった。

美由紀「まあ良いわ．．．貴方のお陰で、この情報を知れたのだから．．．今回だけ

は大目に見てあげるわ！」

美由紀も今回のテロ事件の内容を知れた事を感謝し、これ以上もえかを叱らなかつた。

功「ん……よく聞き取れている。」

十海「確かに！……これは危険な状況ね！……主張の根拠も明白になった。」

龍之介「破壊工作や廃棄フロットの爆破……全てはこの為だったか！」

ノートを見た十海達は、もえかが言っている事をようやく信じ、龍之介もさっきの空母大鳳の破壊工作や港内の出入り口封鎖の確証を得る。

亜澄「て言うか無茶苦茶するな君！」

もえかの盗聴に無茶苦茶だと言う亜澄。

燕「うちの社長に無茶苦茶呼びわりするの初めて見ましたよ私！」

沙千帆「そもそも何故会議室を盗聴しようと思っただ？」

沙千帆は何故会議室を盗聴したのか問う。

もえか「昼休みに来賓でいらしゃっているブルーマーメイドの皆さんの様子がちよつと……雰囲気に違和感があったので……」

もえかは、廊下を歩いている時、真霜達とバッタリ会ってしまい、その時、真霜達の雰囲気に違和感があると気づき、何か有ったと察したのだ。

龍之介（あっちゃや・・・真霜の奴、雰囲気ではれているじゃないか？）

雰囲気ではれた事に龍之介は呆れる。

亜澄「それだけの事で盗聴までするのか君は？」

十海「結果的に当たっている訳だけど、自分の直感にじゅんづる為には、手段を選べないのね貴方！」

亜澄と十海は、もえかのやり方に呆れる。

もえか「ブルーマーメイド艦で出動できるのは、宗谷真冬さんの弁天のみ、後は、ホワイトドルフィン艦隊・・・これらは、全て人質がいるプラントに回されます・・・海上要塞の足止めには、残っている宗谷龍之介さん達の大鳳と高千穂、そして、学生艦で臨むほかありません！」

もえかは、今使える戦力の現状まで十海達と龍之介達に告げる。

龍之介（もの凄い観察力だ！・・・将来真霜と競うのが面白くなってきた！）

龍之介は、もえかの観察力に感心する。

進愛「でも、武装はついとらんで言つとたやろ？」

もえか「その確証は無いと思料します。」

美由紀「私も同感だわ！」

以外にももえかと美由紀の意見が一致した。

沙千帆「其処で大和型の力が必要になると言う事か、成程分かった！」

もえかから大体の事情を聞いて、十海達は納得する。

亜澄「専務！うちの社員に召集を掛けて、機関科最優先で艦に送りこんで！」

燕「はい、社長！」

十海「副長！うちも釜に火を入れておきましょう！」

進愛「了解！」

沙千帆「啓子さん！」

啓子「指示を出しておきました。」

沙千帆「ありがとう」

十海達は、直ぐに出撃準備を命じる。

龍之介「参謀！現在の出撃準備の状況は？」

功「既に大鳳には、機関長と整備班長が乗り込んでいます。」

美由紀「此方も既に出撃準備は整えています・・・後はご命令を待つのみです！」

そして、龍之介達も十海達より先に出撃準備を整えていた。

もえか「ご理解いただき、ありがとうございます・・・これが今回の作戦指示書です」

もえかは、龍之介達と十海達に作戦指示書を渡す。

美由紀「これ、貴方が全部練ったの？」

美由紀は、もえかが自分で練った作戦指示書を見て驚愕する。

十海「予定航路・・・接触想定日時・・・良く練られているわね・・・艦隊編成は・・・」

沙千帆「ん？・・・旗艦が武蔵になっているが・・・」

美由紀「何故武蔵なの？」

編成を見て、艦隊旗艦が武蔵に成っているのに驚く。

亜澄「いゝやいゝや、この非常時に1年生が旗艦とかないから！」

亜澄は、武蔵が旗艦なんてありえないと言う。

沙千帆「そうだな、此処は我々紀伊が旗艦をやろう！・・・テロリストが接舷して乗り込んだ時に最も戦えるのは、うちの艦だ！」

十海「失礼ながら申し上げますと・・・今回の任務において統制射撃のしよげんを出すのは、旗艦がこれを行うのが合理的ではないでしょうか？・・・主砲の命中率は私達の方が先輩達より上です。」

亜澄「うちの砲術員なら24時間撃ち続けられるよ！」

燕「非常時だからこそ、ホントそう言うの止めて下さい社長！」

それに乗じて、3人は、自分の艦を旗艦にしたいと言い出す。

美由紀「何を言ってるの！・・・貴方達が旗艦を務めるのは十年早い！・・・此処は、

我が艦隊旗艦の大鳳が旗艦を務めるべきです。」

だが、それに対して、美由紀が大和型とは別の空母大鳳を旗艦にすべきだと言う。

亜澄「大鳳？・・・何所かで聞いた事が有る艦だが・・・戦艦かな？」

亜澄は、大鳳が戦艦だと思つたが

龍之介「戦艦じゃない、空母だ！」

それに対して、龍之介は戦艦じゃないと否定する。

十海「戦艦じゃない艦が旗艦を務めるなんて、あり得ないわ！」

戦艦じゃない艦が旗艦を務めるなんて、あり得ないと十海は言う。

美由紀「いいえ、准将が乗るのだから旗艦は大鳳です。」

それでも美由紀は旗艦は空母大鳳だと言い張る。

龍之介「だが中佐！・・・俺のところは航空攻撃などの指示は出来ても統制射撃指示

はできないぞ！」

言い張る美由紀に対し、龍之介は、空母大鳳では高千穂と大和型4隻に対し、統制射

撃の指示はできないと告げる。

確かに空母大鳳は、航空機への航空管制が出来るが、砲撃への統制射撃指示はできな

かった。

美由紀「統制射撃など必要ありません！」

だが、美由紀は統制射撃は必要ないと告げる。

『えっ?』

美由紀の言葉に十海達は驚愕する。

美由紀「相手は海賊・・・護衛の航空機もない・・・此処は、得意の航空攻撃で一氣に叩くべきです・・・それから砲撃を加える・・・そうなれば統制射撃も必要なく叩けます。」

美由紀はもえかの作戦指示に反して、空母大鳳の航空機を使って要塞を沈黙かさせ、後から砲撃で無力化する作戦を立てる。

沙千帆「何を言ってるんだこの人は?」

進愛「全く意味が分からへん?」

美由紀が言ってる事に十海達は分からなかった。

功「確かに、それなら落とせるが、向こうは要塞!・・・攻撃をする高町隊長やハラオウン隊長達を危険にさらす訳には・・・」

功は流石にそんな作戦でなのは達を危険にさらす訳に行かないと反対する。

美由紀「高々要塞相手に何を言うんですか参謀・・・あの子達の腕なら必ず!」

それに対して、美由紀は、なのは達の腕を信じていた。

もえか「でも、恐らく旗艦は武蔵になりますから・・・」

しかし、それを覆すかの様にもえかは、旗艦は武蔵になると察する。

『はあ!』

美由紀「如何いう事?」

何故武蔵になるのか理由を問う。

もえか「先ず、多分ですけど……うちの校長先生が自ら武蔵に乗り込んで指揮を取ります……そして、准将の所の深町総司令もそれに乗じて、高千穂で指揮を取ろうとします。」

もえかは、真雪が最初から武蔵に乗り、それに乗じて、深町も高千穂に乗ると推測していたのだ。

沙千帆「そうか! お宅の校長……来島の巴御前だもんな!」

十海「あり得るわね!」

もえかの推測に沙千帆と十海は納得する。

龍之介（成程……母さんならあり得るな……でもうちの総司令までも雅か……）もえかの推測に龍之介もあり得ると思うが、深町も一緒に行く事になるとは思ってもみなかった。

もえか「ですが多分、国土保全委員会から横やりが入ります。」

しかし、もえかは、途中で国土保全委員会が横やりをすと言う。

進愛「どんな横やりやって？」

もえか「プラントと海上要塞と言う2正面作戦になるので・・・宗谷校長と深町司令には陸上に残って統合作戦参謀をやってほしい・・・という要請がくるのではないかと・・・海上治安維持法第11条にブルーマーメイド及びホワイトドルフィン関係者を一時的、強制的に認容する条文が有りますから・・・」

もえかは、国土保全委員会が海上治安維持法第11条で真雪と深町を統合作戦参謀に据え置くと推測。

亜澄「国土保全委員会がやりそうな事ではあるけど・・・如何かな？」

もえか「そして多分、校長先生は、自分らが陸上に残る代わりにブルーマーメイドの宗谷真霜さんを武蔵に乗せて、宗谷龍之介さんと共に現場の指揮官に据える・・・この様にして、武蔵が艦隊司令、即ち旗艦になると思います。」

更に2人に代わって、現場の指揮を龍之介と真霜に任せると推測した。

亜澄「多分多分って言っている割には、まるで見て来た様に話すね君は？」
大胆な推測に亜澄は、まるで全部見た様だと言う。

美由紀「憶測でしょ？そんな事になる訳が・・・」

美由紀もそんな推測を信じる事は出来なかつた。

もえか「でも多分こうなりますよ！」

しかし、もえかは、そうなると判断する。

進愛「でも、仮定の話をされてもね……」

それでも信じられなかったが

沙千帆「……よし！……分かった！……じゃ、君が言う通りの展開になったら我々は一切異論を唱えず武蔵を旗艦とし統制射撃も武蔵に従うよ！」

沙千帆はもえかの推測が本当の展開になったらもえかの言う通りにすると告げる。

亜澄「うちもそれで良いよ！だってそんな都合良く全てが予想通り運ぶなら経営者は誰も苦労しないよ！」

十海「私達も異論はありません！」

それに亜澄と十海も賛同する。

沙千帆「じゃ、この子の予想が外れた時に何所の子が旗艦をやるか、じゃんけんでも決めておくか？」

啓子「千葉さんグッドアイデアですよ！」

沙千帆「だろう！」

但し、外れた時の事も入れてだが

もえかとの打ち合わせをした十海達は、各々それぞれの艦の準備へと戻る。

そんな中

美由紀「随分と自信があるわね？」

もえか「？」

美由紀「何故？」

美由紀は、何故もえかが自信があるのか問う。

もえか「私も自信なんて、本当は無いんです！．．．唯、私は海の仲間を守りたいだけなんです。」

本当は、もえかも自信など無かった。

唯、自分は海の仲間を守りたいだけだと美由紀に告げる。

美由紀「フフハハハ．．．貴方面白いわね！．．．うちの部隊に欲しいわ！」

もえかの言葉を聞いた美由紀は笑い。

自分の部隊に欲しいと言う。

もえか「ありがとうございます．．．でも、私は、ブルーマーメイドを目指しますから．．．」

だが、もえかは、ブルーマーメイドを目指す和美由紀に告げる。

美由紀「残念ね！．．．まあ取り合えず貴方の筋書き通りになるか．．．お手並み拝見するとうましよう。」

もえかに断られた事に美由紀は残念だと思いつつもえかの筋書き通りになるか、お

手並みを拝見する。

龍之介「案外・・・そうなるかも・・・」

2人が話してる中、龍之介は、案外もえかの筋書き通りになると考える。という経緯で今に至る。

横須賀女子海洋学校、棧橋

沙千帆「始まったな！」

十海「始まりましたね！」

遠くから十海達と美由紀が会話の様子を伺っていた。

亜澄「宗谷校長が武蔵に乗る気満々と言うところまでは、あの子の言った通りになっている見たいけど・・・」

美由紀（確かにうちの兄さんまで、宗谷校長と一緒に行くところまで・・・あの子の筋書き通りに・・・）

遠くから会話を聞いて、もえかの筋書き通りに進んでいる事に驚く。

燕「まあ、こうなりますよね・・・」

亜澄「罐に火は入れたけど・・・結局、ブルーマーメイドが使う事になるかもね・・・私達の艦！」

真雪と深町の学生を危険にさらす訳にはと言う言葉を聞いて、燕と亜澄は、自分達の

出撃は無いと思った。

美由紀（さあ如何する・・・知名艦長？）

更に会話が進み、もえかが真雪達しか知らない情報を真雪と深町に告げた。

沙千帆「賭けに出たな！」

もえかが真雪達しか知らない情報を言った事に賭けに出たと沙千帆は言う。

進愛「本来知りえん情報じゃんね！・・・それをぶつけるとは良い度胸やね！」

進愛は、もえかが真雪に極秘情報をぶつけた事に感心する。

そして

ピピ・・・！ピピ・・・！

真雪の携帯が鳴り

真雪「宗谷です！」

真雪は出る。

『!?!』

沙千帆「この連絡は、雅か!?!」

啓子「雅かですね？」

一体何の連絡か周りの者はそれに注目する。

真霜『国土保全委員会から深町吾郎総司令と宗谷真雪校長に緊急要請です！』

何と真霜から国土保全委員会より深町と真雪にある要請が下る。

真霜『二正面作戦の困難性を鑑み、深町吾郎、宗谷真雪両名に統合作戦参謀として協力していただきたい……この要請は海上治安維持法第11条に基づくものである。』

その要請とは、海上治安維持法第11条に基づくもので、深町と真雪両名に統合作戦参謀として協力しろと言う要請だった。

深町「11条だ?!」

真雪「11条……ブルーマーメイド及びホワイトドルフィン関係者を一時的に強制的に任用する条文ね!」

真霜『ご協力をお願いします深町総司令、宗谷校長!』

しかもそれは、もえかの筋書き通り。

龍之介「ふん……やはりな!」

『えっ?』

11条と聞いて、龍之介は、もえかの筋書き通りなつたと確証する。

美由紀「あっ!」

沙千帆「本当に来ちゃたよ11条!」

進愛「嘘だらう!」

十海「でも、此処からが問題ですよ!」

そして、後ろで聞いていた美由紀や十海達も、もえかの筋書き通りなつた事に驚愕しながら、会話を聞く。

もえか「時間がありませんし、学生艦の扱いに慣れている私達が乗った方が良いと思いますです……砲の偏差も舵の癖も毎日触って知っていますから！」

『うん！』

もえかは、改めて、時間がないので、自分達に行かせてほしいと真雪にお願いする。

『あ……』

深町と真雪は黙ってしまい

沙千帆「聖論で押し切った！」

啓子「宗谷校長……黙ってしまったですね！」

2人が見てる中で

もえか「艦隊編成と作戦概要です……宗谷准将や他のクラスの子達と先輩達にも賛同して頂いています。」

もえかは、艦隊編成と作戦概要を記したタブレットを深町と真雪に見せ、既に龍之介達や十海達などが賛同している事を告げる。

まして「いつの間に……」

いつの間にそんな事をしたのか問う。

もえか「宗谷さんとミケちゃん、それに薫さん達は、スーちゃんの所に居たから、伝えるのが今になっちゃったけど……フフ！」

それに対して、もえかは、4人がスーの所に行っている間と言って、ふふつと笑う。

真雪「よく出来ているわ！……但し、ブルーマーメイド宗谷真霜、そして、龍之介さん両名を現場責任者として乗せます……分かってるわね？」

艦隊編成と作戰概要を確認した真雪は、遂に出撃を承諾し、現場監督として、龍之介と真霜を武蔵に乗艦させる。

もえか「はい、指揮に従います！」

もえかもそれに賛同し、指揮に従うと告げる。

真雪「フフ……」

それを聞いた真雪は笑う。

だが

龍之介「ちよつと待てくれ！」

真雪「ん？」

いきなり龍之介が待ったを掛け

龍之介「悪いが俺は、大鳳に乗るよ！」

自分は、空母大鳳に乗ると告げる。

『えっ!?!』

それを聞いた明乃達や薫達、そして、もえかも驚く。

龍之介「その方が2人固まっているより、上手く指揮が執れるし……何よりこいつらを守る。」

龍之介の言う通り、1つの艦に2人の指揮官がいては、上手く指揮が執れないそれなら自分は古巣の空母大鳳で指揮を執り、学生艦隊を支援すると言うのだ。

真雪「分かったわ!……貴方の好きな様にしなさい!」

龍之介の理由を聞いて、真雪は承諾する。

龍之介「ありがとうございます宗谷校長!……聞いた通りだ!……お前ら急いで出撃準備に取り掛かれ!!」

それを聞いた龍之介は感謝し、急いで出撃準備に取り掛かるよう命じる。

『は、はい!』

明乃達と薫達は、直ぐに自分の艦へと向かう。

こうして、真霜は武蔵に龍之介は空母大鳳へ乗り込み指揮を執る事になった。

『ええ!?!』

その会話を遠くで聞いていた十海達は驚き

美由紀「ふん!……見事だわ!」

美由紀は、見事だと言つてもえかを褒める。

亜澄「最初から最後まで全部あの子の言う通りになったよ!」

燕「何なんですかあの子?」

沙千帆「こりや武蔵も旗艦で、統制射撃も武蔵に従うつて事でやるしかないな!」

啓子「そう言う約束でしたからね!」

十海「宗谷校長に対する交渉術を含めて、ちよつと普通じゃないですよあの子?」

進愛「一体何者がつて?」

もえかの余りの凄さに十海達は、何者なのかと驚愕していると

もえか「あつ先輩達!?!此処にいらしゃたんですね!」

『あつ!?!』

打ち合わせを終えたもえかが現れ

もえか「皆さんにご協力いただいたお陰で、うまくいきました・・・いたなる点も思いますが、今回の作戦よろしくお願いします。」

十海達の協力に感謝し、今回の作戦もよろしくとお願いする。

美由紀「フフ・・・了解!」

美由紀は了解と告げ

十海「全力を尽くすわ!」

十海も全力を尽くすと告げる。

もえか「ありがとうございます。」

それにもえかは感謝し、自分の艦へと戻っていた。

沙千帆「ふん！まああれだ！……海の上では、我々の方がキャリアが有るんだし、頼れるところも見せてやらないとな！」

亜澄「してやられたまんまじゃ、先輩とは言えないもんね！……あの子達の力になってあげないと……」

十海「そうですね！」

筋書きには負けたが、それ以外では負けられないと思う十海達。

美由紀「何やってるの？さっさと行きなさい!!」

だが、そんな事を思っている間に美由紀に早く自分の艦に行くよう命じられる。

十海「ん……行きましょう！」

十海達は自分の艦へと向かい、そして、美由紀も自分の艦へと向かのだった。

それぞれが艦に向かう中

深町「君は自分が何をしているのか分かってるのか？」

深町は、龍之介に自分が何をしているのか分かってるのか分かってるのか問う。

龍之介「分かっていますよ！」

龍之介もそんな事は分かっていた。

深町「なら何故、私が君達を行かせなかったか、分かるだろう……もしかしたら、これも奴らの陰謀かも知れないんだぞ！」

深町は、この事件が何かの陰謀が有ると思ひ龍之介達を行かせたくなかつた。

龍之介「それでも……学生だけ行かせて、自分達だけ行かないなんて、出来る訳無いでしょう……それに俺達は、こんな事は慣れてますから心配いりませんよ総司令！」
しかし、龍之介は、そんな陰謀には慣れているし、学生達だけ行かせる訳にも行かなかつた。

深町「はあ……君には本当に驚かされるよ……生徒の事を頼むぞ宗谷准将！」

それを聞いた深町は、龍之介に呆れ、生徒を頼むと言つて、真雪同様に出撃を承諾する。

龍之介は、空母大鳳に向かう為、SH—60 Gが駐機している場所へと向かう。

発進態勢のSH—60 Gに乗り込む中、次郎は、SH—60 Gに乗り込む薫を見て

次郎「これが……薫との最後の任務になるのか……」

この任務が薫との最後の任務だと思ひながらSH—60 Gに乗り込む。

龍之介と功、薫、次郎の4人を乗せたSH—60 Gは飛び立ち、空母大鳳へと向かう。

武蔵、甲板

その頃、武蔵に戻ったもえかは、艦橋に向かう途中

真霜「ねえ、知名さん！」

もえか「えっ？」

突然、真霜に声を掛けられ、何かと思い真霜の方を向く。

真霜「貴方も行きたがるのは……お母さんの事があるから？……私達も懂れた……

凄腕のブルーマーメイド」

真霜は、もえかの亡き母親の話をする。

もえか「ありがとうございます……母の事を覚えていてくださって……」

もえかは、真霜が亡き母親の事に感謝し、水平線を見る。

もえか「私も海にいる皆を守りたいんです……道は遠いけど……いつかは……」

もえかは、真霜に美由紀に言った事とを告げる。

内火艇

一方、晴風に向かう内火艇では

ましろ「はあ……艦長との勝負はつかなかった。」

ましろが明乃との勝負がつかなかった事に嘆く。

ましろ「けど……結論は出さなければならぬ。」

だが、自分の結果を出さなければならぬと告げ、晴風へと向かう。

横須賀女子海洋学校、会議室

会議室では、統合作戦参謀の真雪と深町が海上安全整備局と会談をしていた。

海上安全整備局長『くれぐれも人質の安全を最優先してくれ……これは政府全体の
総意だ!』

政府から人質の安全を最優先と言う指示が出される。

真雪「それは、勿論です!……ところで海賊側からの要求は?」

真雪は勿論と答え、海賊側からの要求を問う。

海上安全整備局長『現時点では、全く入っていない。』

それに対して、今のところは全くないと告げる。

深町「入っていないだ?」

要求がない事に深町は、違和感を感じる。

海上安全整備局長『君達の報告は読んだ……我々も同じ考えだ……要塞にプラン
トを取り込み半永久的に稼働可能な移動要塞として、海賊行為を行うか……』

真雪「もしくは……直接都市を狙う?」

深町「最悪の筋書き……」

海上安全整備局長『その通り!……要塞がどこかの都市に突っ込んで来たら止める
手立てはない……人質の救出は最優先だが、プラントと要塞を絶対に合流させるな……』

それには、あらゆる手段を許可する。』

真霜からの報告を読んだ海上安全整備局も同じ考えで、人質の救出は最優先にし、どんな手段を使つてもプラントと要塞を絶対に合流させるなど命じる。

深町「なりふり構わずか？」

あらゆる手段を許可すると聞いて、深町は、雅になりふり構わずだと思ひ。

真雪「了解しました。」

真雪は、了解したと告げる。

海上安全整備局長『人命が最優先だが、要塞は必ず破壊しろ！』

空母大鳳、艦橋

薫「出港準備！」

空母大鳳に戻った薫は、出港準備を命じる。

美奈「航海科準備よし！いつでも行けます！」

実「通信機準備よし！」

空母大鳳、C I C室

信吾「レーダー及び武器管制用意よし！」

空母大鳳、作戦室

なのは「航空隊も全員居るよ！」

フエイト「同じく！」

空母大鳳、格納庫

文雄『艦載機全機！……いつでも出せるぞ！』

空母大鳳、機関室

夏雄『機関はご機嫌斜めだぜい！』

各部からの準備よしのもと

空母大鳳、艦橋

はやて「近錨、各部出港準備完了や！」

出港準備が完了する。

そして、龍之介が現れ、指揮官椅子に座る。

龍之介「晴風に信号！……直ちに出港せよ！」

晴風に出港指示の信号を出すよう命じる。

薫「了解！……晴風に信号！」

空母大鳳から晴風に出港指示の発光信号が出される。

晴風、艦橋

明乃「出港準備！」

一方、晴風でも明乃達が出港準備をしていた。

志摩「うい！」

芽衣「砲術、水雷準備完了！」

鈴「航海・・・行けます！」

晴風、機関室

麻命「機関、いつでも行けるぜい！」

『ヨーロー!!』

晴風、艦橋

幸子「艦内警戒閉鎖よし！」

ましろ「ひとつ甲板、近錨・・・各部出港準備よし！」

各部の出港準備が完了し、ましろは、羅信義の上に置いてあつた艦長帽を取ろうとする。

艦長帽の上には五十六が寝むていた。

艦長帽を取ろうとしたが、何故か躊躇う。

五十六「んん・・・」

それに気づいたか五十六は目を覚まし

五十六「ぬっ！」

地面に降りる。

降りた後、ましろは艦長帽を取り、明乃に差し出す。

明乃「副長！」

ましろ「行きましよう！」

明乃は、艦長帽を受け取る。

やがて

晴風、見張り台

マチコ「大鳳から発光信号！・・・直ちに出港せよ！」

空母大鳳から晴風に出港指示の発光信号が来た。

晴風、艦橋

明乃「晴風出港!!」

明乃は、出港命令を出す。

出港命令と同時に楓がラツパを吹き、錨が上がる。

美海が旗を上げて用意よしと知らせると晴風は、汽笛を鳴らしながら出港する。

空母大鳳、艦橋

次郎「晴風が出港する。」

薫「出港！両舷前進微速!!」

晴風出港と同時に薫は、出港命令を出す。

美奈「両舷前進微速、赤黒なし・進路130度！」

出港命令と同時に美奈がテレグラフを操作し、夏雄がバルブを開ける。

空母大鳳も出港、晴風の後方に付く。

晴風、艦橋

出港する中

明乃「あ……」

明乃は、前方の武蔵を見る。

武蔵、艦橋

晴風、空母大鳳が出港する中、武蔵でも

もえか「出港準備完了しました。」

もえかが真霜に出港準備が完了したと報告し

親子「各艦、出港準備完了！」

各艦も出港準備が完了する。

それを聞いた真霜は手を上げ

親子「信号……予定順序に各艦揚錨……出港せよ！」

各艦に出港命令を出す。

もえか「出港用意……錨を上げ！」

各艦の出港命令と同時にもえかは出港用意を命じ、ラツパと同時に錨が上げられる。

もえか「両舷前進微速！……130度よりそろ……航海長操艦！」

両舷前進微速を出し、航海長に操艦を任せる。

武蔵航海長「いただきました航海長！」

すると後ろから武蔵の航海長が現れ

武蔵航海長「両舷前進微速、赤黒なし……進路130度」

操艦の指示を出す。

武蔵も汽笛を出しながら出港する。

高千穂、艦橋

文夫「武蔵が出港します！」

美由紀「出港！両舷前進微速！」

武蔵に続いて、高千穂も出港した。

武蔵、艦橋

真霜「定刻5分前行動……何事もブルーマーメイドの慣習通り……先行させた晴

風もそうだけど……よい腕ね！」

真霜は、明乃ともえかの操艦ぶりに感心する。

もえか「ありがとうございます。」

真霜「よろしい・・・湾外に出次第、第4警戒航行序列に占位せよ！」
もえか「了解！」

真霜は、湾外に出次第、第4警戒航行序列の陣形を取るよう命じる。

晴風を先頭に、空母大鳳、武蔵、高千穂の順に各艦が進み、後から真冬の弁天が艦隊に合流、先頭を行く。

横須賀女子海洋学校、会議室

老松「遅れて来たべんてんだけが動けるとは・・・」

真雪「全くだわ・・・あの子は悪運が強いよね！」

老松「悪運ですか？」

ブルーマーメイドの艦で動けるのは真冬の弁天のみ、雅に悪運が強い証拠だ。

武蔵、艦橋

そんな中、スーは、武蔵の艦橋で1人その場に座っていた。

もえか「如何したの？」

そんなスーにもえかが声を掛ける。

スー「知ってる人・・・いない」

如何やら友達がいないので、寂しい様だ。

もえか「そうでもないよ！」

だが、もえかはそうではないよと言って、右側を指すスー「ん？」

スーは右側を見ると晴風が右側を航行していた。

スー「ミケ、シロ！」

艦橋から明乃とましろが手を振っていた。

それに気づいたスーは手を振る。

更に発光信号が晴風から送られ

スー「えつと・・・あれ・・・私の知らない信号・・・何て言ってる？」

スーは、読もうとしたが分からず

もえか「戻ったら一緒にご飯食べようね”だって!”

もえかが代わりに読んで聞かせる。

スー「うん、食べる！」

もえか「フフ！」

晴風、艦橋

明乃「届いたかな？」

明乃は、さっきの信号が届いているか心配になったが

ましろ「大丈夫見たいですね・・・ほら！」

ましろが大丈夫と言つて武蔵の艦橋を指す。

艦橋から手を振るスーともえかの姿が有つた。

明乃「良かった。」

明乃は安心した。

その時

まゆみ「後方のシユペーから信号です！」

後方にいたアドミラル・グラフ・シユペーから信号の旗が掲げられる。

ましろ「読み上げろ！」

まゆみ「はい！」

まゆみは信号を読む。

まゆみ「本艦も協力する」この事です。」

それは、アドミラル・グラフ・シユペーもこの作戦に参加すると言う内容だった。

幸子「えっ！」

内容を聞いた幸子は

幸子「う……」

双眼鏡でアドミラル・グラフ・シユペーの方向を見る。

すると艦橋にミーナが晴風に向けて何かを言っている。

幸子「『仁義で首くくつとれ言うんならくくろうじゃないの』……艦長、シユペーへ
応答して、よろしいでしょうか？」

ミーナからの内容を聞いて、返信して良いか明乃に問う。

明乃「えっ? ……うん・…良いよ!」

明乃は許可する。

幸子「『ワシら海で、ええ思いする為に船乗りになつたけえ』」

幸子は、返信する。

アドミラル・グラフ・シユペー、艦橋

ミーナ「『海で体張ろういうんが何所が悪いの』か」

幸子からの返信を見て

ミーナ「フフ・…やるな!」

フフと笑う。

テア「副長、楽しそうだな」

後方からテアが現れ、ミーナに楽しそうだなと言う。

ミーナ「ええ、帰国する前にもう一度晴風たちと同行できるとは思いませんでしたか

ら……」

テア「そうだな……この作戦に参加する為に随分母国とやり取りしていたし……そ

の努力は尊敬する。」

ミーナ「このシユペーの実力をきちんと見せるいい機会でもありますから」

本当は、この作戦には、テア達は参加できなかった。

何故なら、これは日本領海で起きている事件で有って、他国は干渉できない。

だが、ミーナの粘りの交渉でアドミラル・グラフ・シユペーだけ参加する事を許され

た。

『フフ』

2人は、そう言いながら出港する。

横須賀の学生艦などが出港する中、他校の学生艦の方は

大和、艦橋

進愛「罐の温度が上がつたらんだらあ！横須賀に負けんようにしりん！」

十海「副長！」

進愛「あ……」

十海「無理をさせて罐を壊しては元も子もないわ……少し落ち着きましょう。」

進愛「はい」

信濃、艦橋

亜澄「1年も2年も気合十分……うちの子達も24時間残業いけそうなテンション

ね！」

燕「また、そう言うブラックな人使いを……」

亜澄「先ずは武蔵と大鳳の艦長がどんな仕事っぷりか、お手並み拝見といこうかな……」

紀伊、艦橋

沙千帆「さて……如何なる事やら……」

啓子「1年生とあの平べったい艦が旗艦ですが……大丈夫でしょうか？」

沙千帆「事前の根回しは完璧だったな……我々上級生のメンツも潰さず、むしろ手伝おうと言う気分にはさせたんだ。」

啓子「成程見事なものです……あまり活躍されると私達の立場が脅かされるかもしれないですよ！」

沙千帆「ふっ！頼もしいじゃないか……それくらいでないと我々も張り合いがない！」

6人は、なんだかんだ言いながら

『出港用意！』

横須賀の学生艦に遅れる事、出港した。

出港して行く艦艇を棧橋から居残り組の五月達や岸間達が手を振りながら見送る。

横須賀女子海洋学校、会議室

真雪「必ず全員無事で帰って来なさい！」

深町「心配はいりませんよ！・・・彼らなら必ず！」

そして、真雪や深町も無事を祈りながら見送る。

画して、Gフォース、ブルーマーメイド、そして学生艦で編成された混成艦隊はプラント及び海上要塞制圧に向けて出撃した。

続く。

特別編 後編

東京湾の出口付近の海中

東京湾の出口付近の海中には、アメリカの潜水艦ニューヨークが息を潜めながら湾外に出る艦艇を見張っていた。

そんな時

ニューヨーク、発令所

ニューヨークのソナー主「ソナーに感あり！」

ソナー員が湾外から出撃する艦を探知した。

ニューヨークの艦長「潜望鏡上げ！」

報告を聞いた艦長は、直ぐに確認するべく潜望鏡を上げる。

ニューヨークの艦長「こ……こりや!？」

艦長が見たのは、湾外から出て来る大艦隊の姿だった。

ニューヨークの艦長「潜望鏡を下ろせ！ケーブルアンテナ射出!!」

この情報は、直ぐに本部を通じて、ホワイトハウスに報告された。

ワシントンD・C、ホワイトハウス、大統領執務室

補佐官「大統領！・・・潜入していたニューヨークからの報告で・・・大艦隊が横須賀を出撃したとの事です！」

キング「何かの間違いじゃないのか・・・港内は塞いだから残っているのは、ホワイアドルフインの艦艇だけの筈？」

報告を受けたキングは、驚愕する。

雅が残っている艦が有るとは、思わなかったのだろう。

キング「大丈夫なんだろうな補佐官？」

補佐官「ご心配いりません・・・こうなる事を予測して、既に手は打っています。」
だが、こうなる事を予測して、既に手は打ってあった。

八丈島南

その頃、混成艦隊から先行していた弁天は、八丈島の南300海里まで進出していた。

弁天、艦橋

弁天艦橋の後ろにあるCIC 室では、真冬と福内が画面を見ながら現状を見る。

真冬「現状は如何なっている？」

福内「現在、バルーンでプラントの偵察を行っております。」

既に弁天からは偵察の為、無人飛行船が発艦し、プラントの偵察を行っていた。

福内「そろそろ映像が入る筈です。」

やがて、無人飛行船からの映像が映る。

真冬「見えた！」

映像から移動するプラントを視認する。

福内「現在、目標は本艦の260度：：38マイル、8ノットで西南西へ移動中：：」
プラントは、低速で要塞へと向かっていた。

真冬「よし！・・・潜入部隊を高速艇で送り込み、人質と海賊の配置を確認・・・可能ならプラント内部の監視システムをジャックせよ！」

真冬は、人質と海賊の配置を確認する為、プラントに潜入部隊を送り込むよう命じる。

福内「了解！」

こうして、弁天からプラントに向け潜入部隊が放たれる。

空母大鳳、飛行甲板

GF隊員『ペガサス隊が発艦する・・・整備員は退避せよ！』

同じ頃、空母大鳳からも索敵と警戒の為、ペガサス隊の早期警戒機E-2G 2機が発艦しようとしていた。

空母大鳳、艦橋

薫「ペガサス隊発進！」

空母大鳳からペガサス隊のE-2G 2機が発艦した。

龍之介「これで周辺の警戒は大丈夫だな．．．さて、我々も飯にしよう。」
俊秋「飯だぞ！」

哨戒機の発艦が済んだので、龍之介達は安心して、作戦に備え飯を食う。

因みに出されている夜食は、あかねが試作した肉巻きミルフィーユかつおにぎりだった。

次郎「．．．．」

夜食を食べながら次郎は薫を見る。

薫「．．．．」

それに気づいた薫は

薫「終わったら．．．言うね。」

そう言つて、夜食を食う。

龍之介「．．．．」

その光景を後ろで見ていた龍之介は、黙つて様子を見る。

武蔵、艦橋

龍之介達が飯を取る中、他の艦も作戦に備え夜食を食べていた。

そんな中、スーは、夜食のおにぎりを食べていると

スー「ん？」

もえか「うん？」

スーが何かに気づき、犬みたいに鼻で臭いを嗅ぎ、匂いの先を見る。もえか「何を見ているの？」

もえかは、スーに何を見ているのか問う。

スー「あっち！すつごく美味しそう！」

するとスーは、すつごく美味しそうと言って、匂いの先を指す。

匂いの出元は、先頭を航行する晴風からだった。

もえか「ミケちゃんの所？・・・見えるの？」

スー「何か良い匂いまでする。」

如何やら晴風の飯の匂いに食い付いた様だ。

スー「ねえ！あっちに移っちゃ駄目？」

晴風の飯の匂いに食い付いたスーは、晴風に移りたいと言うが

もえか「駄目です。」

もえかはあつさり駄目だと告げる。

スー「え・・・」

もえかに駄目だと言われ、スーは、ガツカリする。

本人は、此処に一体何しに来たのか、分かっていない様だ。

晴風、艦橋

一方、晴風の生徒も作戦に備え、飯を食べていた。

此方も空母大鳳と同じ肉巻きミルフィーユかつおにぎりが出されていた。

生徒達が夜食を食う中、艦橋には、当直として明乃とましろが残っていた。

そんな中

洋美「宗谷さん、夜食です。」

洋美がましろの為に夜食を持って来た。

ましろ「ああ、ありがとう。」

ましろは、洋美から夜食を受け取る

すると洋美が

洋美「何か悩んでいるなら私に相談して！」

耳元でましろに悩み事が有るなら自分に相談してと言つて去る。

ましろ「あ……」

それを聞いたましろは、黙つて明乃の方を見る。

明乃「……」

明乃も同じ様にましろを見る。

ましろ「今は目の前の作戦に集中します。」

今は、答えを出さず、目の前の作戦に集中すると告げる。

明乃「うん」

それを聞いて、明乃もそれに賛成する。

しばらくして、混成艦隊は、プラントを張っていた弁天と合流。

状況を知る為、龍之介、功と真霜、もえかの4人は、弁天へと向かう。

弁天、艦橋

福内「現在、プラントの内部状況は、保々完全に把握完了！」

画面に出ているプラントの図面をもとに説明する福内。

潜入部隊によって、プラントの内部状況は保々把握されていた。

真冬「人質は全員、デツキの此処に……」

真冬は、指を刺して、人質の居場所を示す。

真霜「見張りは？」

続いて、見張りは何人か問う。

福内「人質の見張りは常に3人……まだ交代のタイミング自体は分かりません。」

見張りは3人で、まだ交代のタイミングは把握できていない。

真霜「他の海賊は？」

福内「管制室に12名、上層部にも見張りが6名……それ以外は食堂に集まってい

る模様です。」

他の海賊は、管制室と上層部に居り、他は食堂に居た。

真冬「人質がいなければ、あつ突つ込んで、ドカーンって、行くのになあ……」

人質がいなければあつという間に制圧できるのにと真冬は、大胆に言い張るが

龍之介「そんなに上手く行く筈が……」

龍之介が上手く行く筈がないと否定し様とした時

真霜「だったら、人質を全部解放してしまえば良いでしょう。」

真霜は、人質を全部解放してしまえば良いでしょうと2人に告げる。

真霜「母さ……校長からも人質救出を最優先と指示が出ているわ……でも……人

質さえ救出すれば……手加減する必要……ないでしょう?」

真霜は、真雪から人質救出を最優先と指示が出ているが、人質さえ救出すれば後は、手

加減する必要はないと言って、不気味さを露にする。

『うう……』

それを見た真冬と福内は、怯え

龍之介（出た!?!……真霜のブラック状態だ!）

龍之介も真霜のブラック状態が出たと感じ怯える。

もえか「貴方は何かプランがあるかしら?」

3人が怯える中、真霜は、もえかに何か作戦が有るのか問う。

もえか「ああ・・・そうですね・・・此処まで情報が把握できていいるなら・・・このまま監視装置に欺瞞情報を流して、その間に人質を救出できればどうか？」

もえかは、画面を見て、プラントの情報が把握できているなら、監視装置に欺瞞情報を流し、その間に人質を救出しようと言う案を出す。

真霜「大体、正解ね！」

もえかの案に真霜も同じ考えだった。

真霜「でも、見張りの交代のタイミングがつかめない以上、迅速な制圧が必要よ！」
真霜の言う通り、見張りの交代のタイミングがつかめない以上、迅速な制圧が必要だと告げる。

もえか「その場合は大きな陽動が必要ですよね。」

それに対して、大規模な陽動が必要だと発言する。

真霜「フフ！」

真霜もその通りだにとっこりと笑う。

龍之介「なら！」

『えっ?』

龍之介「その陽動は俺達が引き受けよう。」

龍之介は、その陽動を引き受ける。

真霜「何をする気？」

龍之介の陽動について、真霜は、何をする気なのか問う。

それについて、龍之介は唯黙って、指で上を指す。

と言う事で予め作戦は決まり、作戦の許可を仰ごうと横須賀女子海洋学校に報告する。

横須賀女子海洋学校、会議室

真雪「作戦は以上です・・・この方法なら、先ず間違いなく人質に危害が及ぶ事はありません。」

報告を受けた真雪は、作戦内容を海上安全整備局に説明する。

海上安全整備局長『確率は？』

説明を聞いた海上安全整備局は作戦の成功確率を問う。

真雪「95%！」

確率は95%だと告げ

真雪「残りの5%は、大鳳、弁天乗員が暴走する可能性ですが・・・宗谷真霜、宗谷龍之介兩名が抑えてくれるでしょう。」

残りの5%は、大鳳、弁天乗員が暴走する可能性で、其処は、龍之介と真霜が抑えて

くれるだと信じていた。

海上安全整備局長「真霜君と龍之介君か……2人なら確かに彼らの手綱を引き受けるだろう……よろしい……作戦を承認する……プラントが我が国の管轄海域外に出るまでに……必ず作戦を必ず完遂せよ！」

それを聞いて、海上安全整備局も同じ考えで、作戦を承認した。

真雪「了解しました。」

こうして、作戦は承認され、プラントが国の管轄海域外に出るまでに作戦を必ず完了しなければならなかった。

弁天、艦橋

福内「本部から作戦決行の指示が来しました。」

真雪からの作戦が許可されたと言う報告が齎される。

真冬「よし、腕が鳴るぜ！」

作戦を許可され、真冬は、腕が鳴ると言つて、腕をゴキゴキと鳴らしながらやる気を見せ

真冬「姉ちゃん！作戦の指示を？」

真霜に指示をこうが

真霜「此方の指揮官は貴方でしょう。」

真霜は、此処の指揮官は真冬本人だと言う。

真冬「あ……そうか……」

それを聞いた真冬は、自分が指揮官と言うのを自覚していなかった。

龍之介「しつかりしろよ！……俺の大事な部隊を貸すんだから！」

真冬の自覚してない事に呆れる。

真冬「わつてるよう！」

それに対して、真冬も分かっていると云うが

龍之介「本当に大丈夫なのか？」

龍之介は、真冬に貸す陽動部隊が心配になって来た。

真霜「私達は、学生艦隊に戻って、大至急、要塞に向かうわ……今のままなら0600に管轄海域に侵入する筈……その瞬間に航空隊が攻撃を開始、その後此方も攻撃を開始します。」

真霜達と龍之介達が立てた作戦とは、先ず潜入部隊を使って、プラントに潜入し、人質を救出。

その後、陽動部隊が敵を攻撃し、引き付けている間に人質を弁天に収容し、プラントを制圧する。

プラント制圧完了次第、海上要塞に向け龍之介達の航空隊が攻撃を開始し、続いて、真

霜達が砲撃で要塞のゲートを破壊し、ホワイトドルフィンが要塞を制圧する。

龍之介「ああ！」

もえか「了解しました。」

龍之介達と真霜達も行動を開始し様と混成艦隊に戻る。

その頃、混成艦隊は、補給を受けていた。

晴風、甲板

そんな中、晴風は、明石からある物を搭載し様としていた。

理都子「何、あのおっきいの？」

果代子「普通の倍ぐらいあるよね！」

それは、魚雷だが、普通の倍ぐらいの大きさ。

珊瑚「フツフツフツ……私の秘蔵コレクション」

しかも珊瑚の所有物。

百々「おー！あれは幻の36インチ魚雷っスね！初めて見たっスよ！」

何と搭載され様としているのは試製の36インチ魚雷だった。

『36インチ!?!』

36インチと聞いて、理都子と果代子は驚愕する。

珊瑚「そう……試験的に開発されたけど……無駄に威力が大き過ぎて、使い道が

無くなった。」

珊瑚が言うには、あまりの破壊力に開発が中止されたそうだ。

理都子「これなら要塞にも効くのかなあ？」

理都子は、この魚雷なら要塞に効くと思つた。

珊瑚「普通に正面から撃つただけなら多分効果はない。」

だが、正面から攻撃しても効果は期待できなかった。

果代子「それじゃあ積む意味ないんじゃない？」

果代子の言う通り、積む意味はない。

珊瑚「きつと貴方方の艦長なら面白い使い道を考えてくれる筈……他のも含めて、レ

ポート楽しみにしてる。」

だが、珊瑚は明乃が、この魚雷を有効に使ってくれろと信じ、レポートを楽しみにし

ていると不気味に笑う。

『ええ……!?!』

それを見た3人は驚愕する。

空母大鳳、飛行甲板

一方、空母大鳳の飛行甲板でも艦載機の換装作業が行われていた。

護衛戦闘機には、対空装備の90式短距離空対空ミサイル2発と99式中距離空対空

ミサイル8発、300ガロン増槽1基、攻撃機には、Mk. 84 2000ポンド爆弾6発が装備された。

そして、陽動部隊として、AH-1G 1機とUH-1G 2機が発進準備をする。

三郎「何で俺達がおとり何だ？」

古野間「それはですね・・・か弱い女性達を危険にさらさない為に俺達が危ないめに会うんだ。」

三郎「全然意味分かんねえよう・・・よは、危ない仕事を引き受けたって事だろう・・・嫌な役目だな・・・」

三郎は嫌な役目を引き受けたと思いながら、UH-1Gに乗り込む。

やがて全艦補給が完了し

武蔵、艦橋

もえか「全艦、補給完了！出撃準備完了です！」

もえかは、殆どどの艦が補給を終えた事を真霜に報告する。

真霜「よろしい・・・それでは、要塞に向かいます！」

報告を聞いた真霜は、海上要塞に向けて出撃命令を出す。

画して、弁天と比叡、アドミラル・グラフ・シュペーの3隻を残し、混成艦隊は、一斉に海上要塞に向かう。

空母大鳳、艦橋

G F 隊員『此方アツタカ部隊、発進する！』

実『了解！幸運を祈る。』

それに乗じて、空母大鳳からも陽動部隊が発進

発進後、混成艦隊の後を追う。

弁天、艦橋

真冬「フツ・・・潜入作戦開始！」

混成艦隊出撃後、真冬は、予定通りプラントへの潜入作戦を開始する。

弁天、艦内

作戦開始に辺り、特殊部隊が準備をしていた。

真冬『我らの行けぬ海はなし！・・・素早く・・・そして確実に・・・徹底的にやれ

！！』

準備する中、真冬は、彼らを激励する。

B P F 隊員『ウツス！』

真冬の激励の元、特殊部隊は、水中スクーターでプラントに向けて出撃する。

U H — I G、機内

同じ頃、空中で待機している陽動部隊のU H — I Gの機内では、突入予定時刻に備え、

強襲の準備をしていた。

そんな中、三郎は

三郎「なあ？」

GF 隊員「何です少佐？」

三郎「此処の指揮官は、宗谷真冬何だろう？」

GF 隊員「そうですけど……」

三郎「嫌な予感がする……」

真冬が指揮官なのが如何も嫌な予感がする。

実は三郎は、内緒で真冬と付き合っている。

だけど、いつも付き合いで、真冬の尻拭いをやらされる。

今回もそれで嫌な予感がすると思いきや落ち着かなかつた。

GF 隊員「心配いりませんか……こつちには、歴戦勇士の古野間隊長が居ますから問題ないですよ！」

『ハハハ……！』

だが、GF オースの特殊部隊は、そんな事は考えず、歴戦勇士の古野間が居るから大丈夫だと言って笑う。

三郎（問題あり過ぎだろう……）

だが、やっぱり落ち着かない。

植物プラント船、バラストタンク室

何だかんだ言いながら、ブルーマーメイドの特殊部隊は、海中からプラントの船底取水口からバラストタンク室へと侵入。

BPF隊員「……………」

1人が内部の安全を確認し、合図で一斉に侵入する。

侵入後、人質が居る貨物倉庫へと向かう。

向かう中、行く手を阻む見張りをレーザー銃で巧みに倒して行き、人質が居る貨物倉庫の船内大通路に辿り着く。

植物プラント船、船内大通路

辿り着いたブルーマーメイドの特殊部隊は、倉庫の入り口付近にいる見張り3人に気づかれない様に通路の隅に隠れて、見張りの様子を伺う。

その間にもう1人がプラントのコンピュータにハッキングし、監視カメラの映像をリンクする。

弁天、艦橋

弁天乗員「同期しました。」

弁天でも監視カメラの映像をリンクした事を確認し、欺瞞映像を流す。

植物プラント船、操船艦橋

海賊手下「ん？」

プラントの操船の操船艦橋にいた海賊の1人が、監視カメラの映像が一時乱れた事に気づく。

海賊ボス「如何した？」

部下の1人が何かに気づいて、如何したかと問う。

海賊手下「今ノイズが？」

部下は、さつき画面が乱れた事を報告し

海賊ボス「カメラを切り替えて見ろ！」

それを聞いて、確認の為カメラを切り替えるが

海賊ボス「異常なしか・・・一応人質区画に人を送れ」

何所も異常もなく。

念の為、貨物倉庫に人をやるよう命じる。

海賊手下「了解！」

こうして海賊は、弁天から贈られた欺瞞映像に騙される。

植物プラント船、船内大通路

海賊達が欺瞞映像に騙されているうちに

『うおっ……』

倉庫に立っていた見張り3人を一誠に倒す。

倒した後、急いで倉庫へと向かう。

植物プラント船、貨物倉庫

貨物倉庫へと入ると、其処には、プラントの関係者数十人が怯えた状態で中にいた

プラント関係者「あなた方は……」

BPF隊員「ブルーマーメイドです……救助に来ました。」

救助に来たBPF隊員達に関係者達は大いに喜ぶが、騒がれては、他の海賊に気づかれるので、関係者を静かにさせる。

BPF隊員「さあ、急いで……時間がありません。」

プラント関係者「さあ行こう。」

ブルーマーメイドの特殊部隊は、急いで人質にされていたプラント関係者達を舷側搬入口へと誘導する。

弁天、艦橋

福内「予定時間です。」

真冬「よし！作戦開始!!」

攻撃予定時間になり、真冬は、攻撃を開始するよう命じる。

U H—1 G、機内

古野間「突入!!」

空中で待機していたGフォースの特殊部隊は、A H—1 Gを先頭にプラントに突入を開始する。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

ミーナ「作戦開始の指示です!」

テア「よろしい・・・攻撃・・・始め!」

そして、弃天からの作戦開始を知らせる発光信号に伴い、アドミラル・グラフ・シュペー、比叡は、プラントへの砲撃を開始。

植物プラント船、操船艦橋

『うう・・・!?!』

いきなりの砲撃で操船艦橋にいた海賊達はパニックを起こし

海賊ボス「何事だ?」

何事かと問う。

海賊手下「砲撃です!」

海賊ボス「出せ!」

砲撃だと知り、映像を出すよう命じる。

映像が出ると海上に無数のボートが探照灯を照らしていた。

海賊ボス「人質を見殺しにするか？・・・反撃するぞ！」

映像を見た海賊のボスは、ブルマーメイドが人質を見殺しにするのかと思ひ、反撃を命じる。

だが、それは、海賊の目をそらす為の陽動で、ボートには、誰も乗っていないかった。

そして、もう一つ

植物プラント船、舷側通路

ゴオオ・・・!!

海賊手下「な、何だ!？」

突然の轟音に何かと驚く海賊の1人が前方を見ていると

下からA H—1 Gが轟音を鳴らしながら、姿を現した。

海賊手下「そ、空飛ぶ悪魔だ!？」

突然現れたA H—1 Gに海賊達は、空飛ぶ悪魔だと言って、反撃する。

だが、そんな反撃にA H—1 Gは、物ともせず海賊達に向けて、ロケット弾攻撃を浴びせる。

『うわあ!』

A H—1 Gのロケット弾攻撃に舷側通路にいた海賊は制圧され

G F 隊員 「降下！」

続いて、U H—1 G から三郎と古野間率いるGフォースの特殊部隊が次々と降下する。

植物プラント船、操船艦橋

海賊手下 「舷側通路より強襲！」

海賊ボス 「映像を出せ！」

舷側通路から強襲の報告を聞いて、直ぐに舷側通路の映像を出す。

海賊ボス 「こつちが本命か？・・・増援をやれ！」

海賊手下 「了解！」

攻撃しているGフォースの特殊部隊を本命だと思い込み、返り撃ちにしようと増援を送る。

植物プラント船、舷側通路

降下した三郎、古野間達は、海賊相手に白兵戦を繰り広げていた。

古野間 「撃ちまくれ！」

三郎 「陽動とは言え、向こうも派手だな・・・」

後から来た海賊の増援相手に三郎、古野間達は、ゆうかんに戦う。

海賊達がGフォースの特殊部隊に気を取られている間にブルーマーメイドの特殊部

隊は、人質達を舷側搬入口から内火艇で弃天に収容する。

弃天、艦橋

福内「全人質、収容完了！」

真冬「よし！殴り込みだ!!」

人質を収容が完了したと報告を聞いて、真冬もプラントに殴り込みを命じ、弃天は、プラントに向け突入する。

植物プラント船、舷側通路

三郎「そろそろ良いんじゃないのか？」

古野間「よくし！行くぞ！」

そして、三郎、古野間達も頃間つと判断し、海賊相手にいつもの閃光手榴弾を投げつける。

『うう・・・!?!』

閃光手榴弾を受けた海賊達は、一時的に動きを封じられる。

古野間「突入!!」

その隙に古野間が突入を命じ

三郎「おりゃ！」

動けない海賊達を肉弾戦で次々と倒し、内部に突入する。

植物プラント船、舷側搬入口

同じ頃、弁天もプラントの舷側搬入口に接舷

真冬「よし・・続け！」

『ウツス！』

真冬自らが率いて内部に突入する。

植物プラント船、内部

海賊手下「ぐわっ・・・」

三郎「艦橋を目標せ！」

プラント内部に突入した三郎、古野間達は、行く手を阻む海賊を倒しながら、真冬達と合流する為、操船艦橋を指す。

一方、突入した真冬達も操船艦橋を指していた。

『うおっ！』

エレベーターから増援に来た海賊達は、いきなり飛びこんできた真冬にコテンパンにされながら上へと上がる。

後から来たBPF隊員達は、エレベーターが何階に上がっているのかを確認し、隣の階段を上がる。

やがて、エレベーターが5階に止まり、ドアが開く。

B P F 隊員「あっ……」

遅れて5階へと上がって来たB P F 隊員達が目撃したのは、エレベーター内で海賊達が真冬にコテンパンにされ、1人が顔をドアに挟まれながらのびていた。

その光景を見たB P F 隊員達は、真冬の恐ろしさに怯えながら、真冬の後を追う。

植物プラント船、植物栽培室

海賊手下「はっ……」

植物栽培室で見張りに立っていた手下の1人が何かに気づく。

すると前方から真冬が単身で突っ込んで来た。

手下は、真冬に向かって、容赦なく発砲するが、真冬は、素早く避けながら手下の頭に飛び蹴りの一撃を浴びせる。

海賊手下「ぐわっ……!?!」

飛び蹴りの一撃をもろにくらって、手下は、前方の壁へと叩き付けられて、のびてしまった。

後からB P F 隊員達がぞろぞろと現れ、真冬と合流。

B P F 隊長「管制室は上です。」

真冬「よし続け！」

真冬は、操船艦橋を目指す

BPF隊長「艦長！こっち……」

うっかり反対方向へと行ってしまおう。

『あ……』

真冬のうっかりに呆れながら

BPF隊長「潜入部隊だけ続け!!」

真冬の後を追う。

植物プラント船、操船艦橋

海賊ボス「状況は如何なってる?……プラント区画で侵入者を食い止めろ!」

次々と制圧される中、操船艦橋では、何とかプラント区画で食い止め様とするが

海賊ボス「!?!」

突然左のドアが開く音がしたので、確認しようと近づいて見ると

ドアが開き、中から手下の1人が、その場に倒れた。

海賊ボス「なっ……うっ……」

手下の1人が、その場に倒れた事に驚くと今度は、右からBPF隊員達が現れ

海賊ボス「うっ……」

さっきの左のドアからは、三郎達が現れた。

古野間「武器を捨てろ!」

後ろからも古野間達とBPF隊員が現れ、武器を捨てる様海賊達に命じる。

海賊達は、言われるままに武器を捨てて手を上げる。

残るはボス1人だけになった。

三郎「残るは、お前だけだ！・・・諦めて降伏しろ！」

三郎は、残ったボスに降伏する様言うが

海賊ボス「ほざくな！」

ボスは、降伏を拒否する。

三郎「お前の為に言ってるんだ！・・・早く降伏しないと命がないぞ！」

降伏を拒否するボスに三郎は、何とかしようと降伏させようとする。

何故なら、ボスの後ろの窓から操船艦橋を指してくる真冬の姿が有ったからだ。

操船艦橋を指していた真冬は

真冬「とうっ・・・！」

操船艦橋へ向けジャンプ

三郎「手遅れだ・・・」

海賊ボス「うう・・・」

三郎が手遅れと言ってるうちにボスの後ろにジャンプする真冬の姿が見え

『ううっ！』

ジャンプする真冬の姿が見えた事に手下どもは喚き立てて、ボスに危険を知らせる。
海賊ボス「うおっ？」

それを聞いたボスが後ろを向くと

真冬「でやあ……！」

真冬が窓ガラスを割って、艦橋に乱入して来た。

海賊ボス「うう……ええい」

乱入してきた真冬にボスは驚きながら真冬に向けて銃を乱射する。

銃の乱射で真冬のマントは、ポロポロになるも、其処に真冬の姿はなく。

海賊ボス「なっ!？」

よく見ると真冬は、上にいた。

真冬「フツ、うああ……でいっ！」

真冬は、上からボスに向かって、強烈な一撃を浴びせる。

海賊ボス「ぐわっ! ううっ……」

真冬の強烈な一撃を浴びて、壁に叩きつけられた。

真冬「んっ！」

それに真冬は、怯まず銃を拾って、ボスを殴る。

海賊ボス「うっ、ぐっ……うう……」

真冬に銃で殴られ、ボスは地べたを這い上がりながら真冬から逃げ様とするが真冬「根性ある奴が1人も・・・根性！」

真冬に捕まり、右手で鼻を掴められ

海賊ボス「あ・・・あ・・・あが・・・」

更には、左手で首を絞められた状態になり

真冬「へへっ」

真冬は不気味な笑いを出し

次の瞬間

海賊ボス「ノ・・・！！」

真冬に半殺しにされた。

アドミラル・グラフ・シュペー、艦橋

テア「ああ・・・」

その光景をアドミラル・グラフ・シュペーの艦橋から見ていたテアは、啞然とし
テア「あれは子供には見せられんな！」

ミーナ「・・・えっ？」

その光景は、子供には見せられない光景だと感じた。

植物プラント船、操船艦橋

三郎「警告したのに・・・半分死んでるぞ！」

半殺しにされたボスを見て、三郎は、真冬を叱る。

真冬「海賊は、これぐらい傷めつけないと・・・」

三郎「だからと言って、これはやり過ぎだ！」

真冬「良いじゃねえかよ！何はともあれ制圧したんだから・・・」

三郎「はあ！何が制圧だ！・・・大体何だ！・・・海賊相手に丸腰で戦うなんて自殺行為だぞ！」

真冬「ふん！・・・海賊相手にそんなもんはいらねえよ！」

三郎「それだから、何時もうちの艦長に舐められるんだ！」

真冬「何だと！」

2人は、隊員達がいる前で喧嘩を始めた。

それを側で見ていた隊員達は、

BPF隊員「如何しますか？」

古野間「気がするまでやらせとけ・・・」

気が済むまでやらせる事にした。

しかし、2人が喧嘩している間にボスが隙をついて、腰に付けていたセンサらしき物を起動した。

センサーから何らかの信号が発せられた。

そうとは、知らず真冬、三郎達は、プラント制圧を完了した。

海上要塞から70,000m付近

プラントが制圧される中、混成艦隊は、海上要塞から70,000mにまで進出した。

空母大鳳、艦橋

功「間もなく発進時刻です。」

はやて「攻撃隊の発進準備は、既に整っています。」

飛行甲板には、攻撃隊が既に出撃態勢を整えていた。

そして、遂に

龍之介「そろそろ行くか!・・・第1次攻撃隊発進用意!」

龍之介は、第1次攻撃隊発進用意を命じる。

薫「スターズ隊(第1次攻撃隊)発進用意!」

空母大鳳、作戦室

なのは「よし!皆行くよ!」

『おう!』

スターズ隊(第1次攻撃隊)発進用意の命令が下り、なのは達は、機体に乗り込む。

空母大鳳、飛行甲板

なのは達が乗り込んだ春乱4機がカタパルトに前脚を装着し、発艦準備が完了する。
空母大鳳、艦橋

はやて「スターズ隊（第1次攻撃隊）発進用意完了！」

薫「艦首を風上に！」

美奈「取り舵10ヨーソロー！」

発進の為、艦首を風上に向ける。

薫「スターズ隊（第1次攻撃隊）発進！」

薫が発進の命令を下す。

なのは「スターズ1行くよ！」

薫の号令のもと、スターズ隊（第1次攻撃隊）が次々と勢いづつ発艦して行く。

大和、艦橋

進愛「な、何や、あのもの凄いもんわ!？」

十海「あれが噂の航空機なの・・・以外と速いわね！」

信濃、艦橋

亜澄「凄いなうあれ!・・・うちの艦に欲しいくらいだ！」

燕「亜澄社長!・・・あんなもの如何やって艦に乗せるんですか？」

紀伊、艦橋

沙千帆「何か、すつごく強そうだな！」

啓子「やはりあの艦は、侮れませんか！」

発艦して行くスターズ隊（第1次攻撃隊）を見て、十海達は、驚きながら航空機に興味を示す。

空母大鳳、艦橋

はやて「スターズ隊（第1次攻撃隊）発進完了！」

空母大鳳からスターズ隊（第1次攻撃隊）（戦闘機15機、攻撃機25機）、計40機が発進、海上要塞へと向かう。

海上要塞付近

要塞付近の海中には、東舞鶴男子海洋学校所属の伊号第201潜水艦が要塞を偵察しながら、要塞の状況を逐一混成艦隊に報告する。

武蔵、艦橋

夏美「偵察中の伊201より入電！・・・要塞の針路、速力は、依然として変化なし！」

武蔵にも伊号第201潜水艦からの報告が齎される。

もえか「射程内まで、あと10分です。」

真霜「予定通りなら、そろそろ内部に突入した頃ね！」

もえか「全艦に攻撃準備をさせますか？」

真霜「ええ……要塞側に情報が伝わる前に、つまりプラント制圧後に航空隊の攻撃が始まる……その直後に初弾発砲します！」

もえか「了解しました！……再確認しますが……本艦が高千穂や他の上級生も指揮下に置くので問題ありませんね？」

真霜「ええ、それは既に通達済みよ！」

要塞砲撃に備え真霜は、武蔵以下5隻に砲撃準備をさせる。

高千穂、全主砲塔

武蔵以下4隻が砲撃準備をする中、高千穂でも全砲塔が砲撃準備をしていた。

高千穂砲術員「砲弾装填！」

46cm砲弾が降ろされ、砲身に装填し

高千穂砲術員「よし、降ろせ！」

高千穂砲術員「装薬装填！」

続けて、装薬が降ろされ、砲術員達の手で砲身に装填される。

高千穂の主砲は、他の大和型4隻と違い、4連装18インチ砲3基を搭載しているが、装填システムが自動ではなく手動システムだった。

その為、装填速度が他の3隻と違い遅い。

だが、照準精度は此方が上である。

晴風、通信室

そんな中、晴風の通信室では、鵜が何かの通信を傍受していた。

鵜「ノイズ：」

それが何なのかは、不明で、鵜は解析する。

とは言え、混成艦隊は、海上要塞50,000mまで迫っていた。

春乱、操縦席

その頃、スターズ隊（第1次攻撃隊）も海上要塞20,000mまで迫っていた。

なのは「伊201からの情報だと目標の針路、速力は変わらない・・・このまま針路を維持！」

スターズ隊（第1次攻撃隊）は、伊号第201潜水艦の情報を頼りに針路を取る。

スターズ隊員A「敵の戦闘機がないから楽勝！」

スターズ隊員B「これで要塞への一番乗りは頂きだな！」

敵の航空機が居ない事にスターズ隊（第1次攻撃隊）の連中は、楽勝だと言い張るが
なのは「油断しないで・・・何が有るか分らない・・・周辺の警戒を怠らない様に・・・」

『了解！』

だが、なのはは、何か嫌な予感がすると思ひ、周辺の警戒を怠らない様に命じる。

E—2 G、機内

攻撃隊が海上要塞に突撃する中、周辺を偵察していたペガサス隊の早期警戒機E—2 Gでは

ペガサス隊レーダ員「な、何だこれは!？」

E—2 Gのレーダーが要塞方面から未確認飛行物体らしき大編隊を捕捉した。

しかもそれは、真っ直ぐ此方へと向かっていた。

ペガサス隊レーダ員「直ぐに本体に知らせろ！」

この報は、急ぎ空母大鳳へと報告する。

空母大鳳、艦橋

実「哨戒中のペガサスより入電!・・・未確認飛行物体らしき大編隊を探知!・・・

その数30・・・真っ直ぐ此方へと向かってくる！」

『えっ!?!』

龍之介「ん!？」

ペガサス隊からの急報が齎され、龍之介達は驚き

功「未確認飛行物体だと?」

はやて「何やろ?」

何かと思った。

薫「まさつか敵機!？」

薫は、敵機だと思った。

次郎「そんな筈は!？」

次郎は、冗談かと思った。

だが、現に未確認飛行物体の大編隊は、此方を目指して接近しつつあった。

それが何なのかは不明だ。

如何するか、龍之介の判断に委ねられた。

そして、龍之介は

龍之介「通信主!・・・なのは隊長に至急繋げろ!」

実「了解!」

至急、海上要塞に向かっていているスターズ隊（第1次攻撃隊）との回線を繋げる。

春乱、操縦席

龍之介『大鳳よりスターズへ!』

なのは「此方スターズ!」

龍之介『哨戒中のペガサスが敵らしき未確認飛行物体の大編隊を捉えた・・・その数30・・・真つ直ぐ本艦隊に向かっている・・・従がつて、護衛戦闘機隊は、これを捕捉せよ!』

龍之介は、なのはに未確認飛行物体の大編隊を捉えたと言つて、その方面に向かわせる。

なのは「了解！・・・皆聞いた！・・・私達は、その方面へと向かう・・・攻撃隊は、このまま要塞へと向かう様に・・・行くよ！」

『了解！』

こうして、スターズ隊（第1次攻撃隊）は、攻撃隊25機だけ、このまま海上要塞に向かわせて、護衛戦闘機隊15機を未確認飛行物体の方に向かう。

空母大鳳、艦橋

薫「対空戦闘用意！」

薫は、対空戦闘用意の号令を出す。

更に航空戦の指揮を執る為、混成艦隊から別れ、単独行動をする。

龍之介「通信主！・・・旗艦にもこの事を知らせろ！」

龍之介は、この報告を武蔵にいる真霜達にも知らせる。

武蔵、艦橋

夏美「大鳳より入電！・・・未確認飛行物体らしき大編隊を捕捉！」

『えっ!?!』

龍之介からの報告を聞いて、真霜ともえかは驚愕する。

夏美「なお、迎撃の為、戦闘機隊を向かわせた・・・我が艦は、航空戦の指揮を執る為、艦隊から離脱する・・・従がって、艦隊は、このまま要塞に向かう様に・・・」

龍之介は、真霜にこのまま海上要塞へと向かうよう命じた。

真霜「龍之介！」

真霜は、心配しながら、艦隊から離れる空母大鳳を見守る。

高千穂、艦橋

美由紀「頼むわよなのは隊長！」

美由紀も行く手を見守っていた。

そして、なのは達護衛戦闘機隊15機は、前方より接近してくる未確認飛行物体の大編隊をレーダーに捉えた。

春乱、操縦席

なのは「此方スターズー！・・・目標をレーダーで確認！・・・針路、速力は、依然として変わらず・・・後数分で会的します。」

未確認飛行物体の針路、速力は、依然として変わらず、後数分でなのは達と会的する。

空母大鳳、艦橋

龍之介「了解スターズー！・・・可能なら目標を視認せよう！・・・もし攻撃してきたら撃墜を許可する。」

なのはからの報告を聞いて、龍之介は、なのはに未確認飛行物体の正体を確認するよう命じ、更に向こうが攻撃したら撃墜を許可した。

なのは『了解!』

なのは達は、未確認飛行物体の大編隊に接近する。

しかし

バシユ……!

未確認飛行物体の大編隊から小型物体が分離した。

それは間違いなく対空ミサイルで、なのは達に向け発射した。

その状況は、E-2Gのレーダーにも捕らえられ、なのは達に知らせられる。

春乱、操縦席

ペガサス隊レーダー員『ペガサスよりスターズ隊へ……目標は、此方に向けて、ミ

サイルらしき物を発射した……注意されたし!』

ペガサス隊からの報告が齎され

なのは「了解!……皆聞いた通り……警戒して!」

なのは達は、警戒する。

こうして、初の空中戦が始まった。

そして、前方から対空ミサイルらしき物が迫って来た。

なのは「全機回避！」

なのはは、回避を命じて、フレアを出しながら回避する。他の機も同様にフレアとすれすれで回避する。

空母大鳳、艦橋

信吾『目標はミサイルらしき物を発射！．．．その数30！』

薫「やはり敵なの？」

実「スターズ隊被弾報告なし！」

状況は逐一、空母大鳳に齎され

功「流石はスターズ隊！．．．あれだけのミサイルを回避するとは．．．」

なのは達が30発もの対空ミサイルを回避した事に驚く。

龍之介「空母大鳳よりスターズ隊へ．．．敵を1機で追いかけるな．．．必ず1機を2機で攻撃しろ！」

龍之介は、なのは達に1機で1機を追いかけず、必ず2機で攻撃しろと命じる。これは雅に空中戦の基本通りのやり方である。

春乱、操縦席

なのは「了解！．．．今度はこっちの番．．．行くわよ！」

今度は、なのは達が攻撃を開始した。

なのは機は、編隊を維持しつつ、目標の1機に食い付き

なのは「目標ロックオン!・・・発射!」

目標に向けてミサイルを発射

ミサイルは目標に命中、撃墜した。

撃墜した飛行物体は、なのは達が乗っている春乱と同じ大きさで、同じジェットエンジンを搭載した機体。

なのは「敵は同じジェット機・・・コックピットが・・・ない?」

しかも落ちて行く敵機の先頭部分には、操縦席が無かった。

これは高性能の無人戦闘機だった。

ともあれなのは達は、敵無人戦闘機を次々と撃破して行く。

空母大鳳、艦橋

信吾『スターズ1、1機撃墜!・・・スターズ3、1機撃墜・・・スターズ2、1機撃墜・・・』

逐一戦況は、空母大鳳に齎された。

龍之介「良いぞ・・・」

薫(なのはちゃん・・・)

龍之介達が戦況を見守る中、なのは達は、敵機を撃墜していく。

海上要塞、上空

一方、なのは達と別れた攻撃隊25機は、海上要塞に接近しようとしていた。
春乱、操縦席

スターズ隊B「間もなく爆撃目標です！」

スターズ隊C「全機、爆弾投下用意！」

海上要塞上空到達に伴い、水平爆撃の用意をする。

同じ頃、混成艦隊も海上要塞から40,000まで迫っていた。

晴風、射撃指揮所

美千留「要塞って見える？」

光「全然・・・水平線の向こうだもん！」

順子「えーっ、それってどのくらい？」

光「現在の位置関係は、大体、フルマラソンの距離くらいかな・・・」

美千留「42,195k？」

順子「それって横須賀から横浜より遠いんじゃない？」

光「多分、品川の向こう。」

美千留「晴風の主砲は、水平線のちよい先までしか届かないのに・・・」

順子「武蔵は其処まで届くんでしょ・・・バキユンだね！」

3人は、高千穂、大和型4隻の遠距離砲撃に驚きながら、水平線を見る。

晴風、艦橋

幸子「艦長！プラント制圧完了の報告です。」

そして、混成艦隊にプラント陥落の報告が入る。

明乃「総員、戦闘配置！」

高千穂、艦橋

美由紀「水上戦闘！砲撃戦用意！」

混成艦隊全艦に戦闘配置が発せられた。

晴風、艦橋

志摩「遠距離……」

芽衣「く……！見えない位置からの超長距離射撃……あれぞ大型艦の夢だね……」

初めて見る遠距離射撃に志摩と芽衣は、わくわくしていた。

幸子「高千穂と大和型の測距儀は、大体、海面から37mぐらいの位置にあるとして、其処から見える距離は……えーと23k……砲弾は、その倍近くまで届きますから、目標に命中させるのには、目標近くでの弾着観測が必要ですね……って誰か聞いています？」

幸子の言う通り、高千穂と大和型4隻の射程距離は42,026m

だが、測距儀で見える距離は23,000mが限界で、それ以上は、目標近くで弾着観測が必要。

もちろんレーダー射撃と言う手もあるが、精密射撃だと、やはり弾着観測が必要になる。

その為に要塞付近に潜航していた伊号第201潜水艦が混成艦隊に向け、弾着測定のデーターを送っていた。

海上要塞、上空

スターズ隊C「用意・・・投下!!」

そして、プラント陥落の報告と同時に攻撃隊25機からMk. 84 2000ポンド爆弾が一斉に投下。

要塞上部に全弾命中、爆発が要塞上部に響き渡る。

武蔵、艦橋

親子「要塞への爆撃を確認!」

水平線から黒煙が見え、要塞への爆撃を確認した。

真霜「攻撃始め!」

爆撃の報告を聞いた真霜は、要塞への砲撃を命じた。

もえか「高千穂及び大和型全艦にて、統制射撃を行う！」

もえかは、高千穂及び大和型4艦に統制射撃の指示を出す。

武蔵副長「了解！旗艦武蔵より高千穂及び大和型各艦に通達・・・要塞に対して統制射撃を行う。」

『了解！・・・旗艦の諸元にて攻撃を行う！』

もえかの号令のもと、高千穂及び大和型4艦の全主砲を海上要塞へと向ける。

武蔵、艦橋

もえか「砲術長・・・目標要塞！・・・位置は伊201のデータを使用・・・交互打方！」

もえかは、遠距離砲撃に伴い、伊201のデータを元に照準を元に交互打方を指示。

武蔵砲術長「了解！」

高千穂及び大和型4艦は、伊201のデータを元に海上要塞に照準を合わせる。

武蔵砲術長「射撃用意よし！」

もえか「各艦に通達・・・武蔵、攻撃準備完了！」

『攻撃準備完了！』

美由紀「此方も攻撃準備完了！」

各艦、攻撃準備が完了し

もえか「打方・・・始め！」

もえかは、砲撃命令を出す。

高千穂、艦橋

美由紀「てーっ！」

高千穂及び大和型4艦は、一斉に砲撃を開始した。

5艦の砲撃は、壮烈差を増し、巨大な砲音が周辺に響き渡る。

高千穂、全主砲塔

高千穂砲術員「次弾装填！装薬装填急げ！」

一斉砲撃後、各艦は、次弾装填する。

5艦が発射した46cm砲弾は、海上要塞至近に着弾、付近に水柱が立つ。

大和、艦橋

伝令「伊201より入電・・・初弾全弾近！」

進愛「流石に初弾命中は難しいだら・・・」

初弾が外れた事に進愛は、悔しがる。

伝令「伊201より続報・・・目標は、此方の発砲直後に約5度、外方変針・・・旧

針路のままであれば、初弾は莢叉」

『なっ・・・』

進愛「変針しなければ初弾莢叉ですか？」

十海「ふうん、中々、武蔵の艦長は、大した腕の持ち主みたいね！」

進愛「どえらいもんだねえ！」

もえかの命中計算に驚く。

伝令「次弾、修正諸元来ました。」

高千穂、艦橋

美由紀「へ．．．中々計算しているじゃない．．．此方も負けてらんないわ．．．」

もえかの命中計算に美由紀は負けてられないと思つた。

高千穂砲術長「諸元修正終わり！」

美由紀「てーっ！」

5艦は、諸元を修正して、再び要塞に向け第2次一斉射を行う。

晴風、艦橋

その光景は、晴風でも見えていた。

幸子「お．．．交互打方！．．．最初は左右の砲、次は中央の砲が発砲して修正する

打方ですよ！」

幸子は、5艦の交互打方に興味を抱く。

志摩「斉射」

芽衣「高千穂と大和型4隻の46cm砲48門の同時発射は、見て見たいよね……」
志摩「弾着」

芽衣「そつか……安全圏にいたら弾着は見えないか……」

志摩「残念」

芽衣と志摩は、高千穂と大和型4隻の46cm砲48門の同時発射を見て、海上要塞に命中する瞬間を見たいと思ったが、安全圏では命中する瞬間を見る事が出来なかったので、ガツカリする。

鈴「此処は安全圏内だから、私は安心！安心！」

それと逆に鈴は、安全圏内だから安心する。

武蔵、艦橋

真霜「距離を詰めた方が良いかしら？」

正確に命中させる為、真霜は、もえかに距離を詰めた方が良いか問う。

もえか「大丈夫です。」

しかし、もえかは、大丈夫と言って、懐中時計で着弾時間を確認し

もえか「弾着！」

もえかの計算通り、砲弾は海上要塞のゲートに見事に命中した。

親子「伊201より入電……目標のゲートに命中！」

もえか「フツ！」

真霜「やるわね！」

もえかの砲撃計算に真霜は褒めたたえ

真霜「突入艦隊に連絡！」

待機していたホワイトドルフィン艦隊に海上要塞への突入を命じる。

空母大鳳、艦橋

実「ゲートに命中！」

次郎「やった！」

薫「流石知名さんやる！」

航空指揮をしている空母大鳳にもゲート命中の報告が入り、薫達は、大喜びする。

はやて「これで後は、ホワイトドルフィン艦隊が突入すれば、要塞も制圧したも同然
や！」

後は、ホワイトドルフィン艦隊が突入すれば、要塞も制圧したも同然だった。

龍之介「ん・・・」

だが、龍之介は、喜べなかった。

何故なら、先程の敵機と言い、まだ何か起こるかも知れないと思い

龍之介「第2次攻撃隊発進用意！」

待機していたライトニング隊（第2次攻撃隊）の発進用意をする。

晴風、通信室

鵜「あ・・・」

そして、晴風でも同じ様に鵜が先程傍受した不審な電波を調べ

晴風、艦橋

鵜『艦長！・・・プラント陥落直後にごく短時間だけど不審な電波探知！』

艦橋に報告する。

明乃「ブルマー関連じゃなくて？」

報告を聞いた明乃は、ブルーマーメイド関連かと思つたが

鵜『周波数が違います。』

周波数が違つていた。

明乃「旗艦へ報告！」

明乃は、この事を武蔵へと報告する。

砲爆撃を受け、沈黙した海上要塞にホワイトドルフィン艦隊が破壊されたゲートへと

突入を開始する。

武蔵、艦橋

親子「ホワイトドルフィンが突入を開始しました。」

武蔵にもホワイトドルフィン艦隊が突入を開始した報告が入る。

しかし

夏美「晴風から入電！・・・プラント陥落直後、内容不明の不審電波ありとの事！」

晴風からの不審電波傍受の報告が入る。

『えっ？』

それに真霜ともえかは、驚愕する。

そして、龍之介が予感した通り、沈黙していた海上要塞が牙を向いた。

要塞入口上部から砲身の様なものが現れ、突入してくるホワイトドルフィン艦隊に向けて砲撃を開始した。

うらづき、艦橋

うらづき副長「要塞から砲撃！」

いきなりの海上要塞からの砲撃にホワイトドルフィン艦隊は、パニックを起こす。

うらづき艦長「面舵一杯！」

パニックを起こしながら、海上要塞からの砲撃を何とか回避しながら

うらづき艦長「安全整備局へ連絡・・・要塞は稼動状態にあり・・・本艦は要塞へ突入を行う！」

この事を海上安全整備局に報告し

うらづき副長「了解！要塞へ突入します。」

何とか海上要塞ゲートに突入を試みる。

だが、突入先で思いもよらぬ事が判明した。

うらづき、艦橋

うらづき見張り員「ゲート入り口、推定幅14m、高さ25m！」

うらづき副長「この艦での突入は不可能です。」

それは、ゲートの破壊した部分が小さく、普通のホワイトドルフィンの艦では、突入する事が出来なかったのだ。

突入が出来ないと知り、ホワイトドルフィン艦隊は、砲撃を回避しながら、何とか打開策を講じ様とする。

横須賀女子海洋学校、会議室

真雪「何ですって!?! 要塞から砲撃?」

要塞からの砲撃の報告が真雪や深町にも齎され、2人は驚愕する。

真雪「武装は破壊したって、アメリカは言ってたわよね?」

老松「事前情報ではそうでしたが・・・」

事前情報では、確かに要塞の武装は破壊したとアメリカ側も言っていた。

だが実際は、武装は破壊されていなかったのだ

深町「やはり・・・先程の敵機と言い・・・突入を焦り過ぎた・・・」

深町は、先程の敵機の報告を聞いて、もう少し慎重に事を運べばと要塞への突入を早過ぎたと悔む。

真雪「ん・・・学生達を行かせるんじゃないわ！」

真雪もこんな事態になるなら、学生達を行かせるんじゃないかと悔む。

そんな中

海上安全整備局長『作戦が失敗したと?』

会話を聞いていた海上安全整備局は、要塞が砲撃して来たと知り、作戦が失敗したと判断する。

真雪「まだ失敗ではありません。」

それに対して、真雪は、まだ失敗じゃないと言い張る。

海上安全整備局長『要塞の武装が生きていて、内部に突入できなければ如何やって止めるんだ?』

失敗じゃないと言い張る真雪に他に如何やって要塞を止めるのか問う。

真雪「高千穂と大和型の砲撃と航空攻撃で！」

それに対して、砲撃や空爆を加えると主張する。

海上安全整備局長『直ぐ近くに内部に入れる艦が有るんじゃないか?』

だが、海上安全整備局は、海上要塞内部に突入できる艦が近くにあるのではないかと主張。

真雪「それは学生の艦の事ですか?」

確かに、海上要塞付近にある艦と言うと学生艦しかない

深町「無茶だ!」

それを聞いて、深町は、無茶だと断固反対する。

海上安全整備局長『私は特に・・・何も言っていない』

だが、海上安全整備局は、それに対して何も言わず、結局は、学生艦まで使っても海上要塞を止めろと言う事だろう。

真雪「はあ・・・」

深町「くそ!」

2人は、海上安全整備局の判断に呆れながら、混成艦隊に要塞への全面攻撃を命じる。
ワシントンD・C、ホワイトハウス、大統領執務室

混成艦隊とホワイトドルフィンが戦闘している中、此処ホワイトハウスでは、リアルタイムで戦況を見ていた。

キング「今のところは、戦況は、此方側の有利に立っているね!」

補佐官「はい大統領！・・・我々が提供した新型無人機も役に立っています。」

今なのは達が交戦しているのは、アメリカが極秘に試作している無人戦闘機で、アメリカが密かに自国のブルーマーメイドから技術を奪い、それを元に試作された。

まだ完成したばかりなので、数もそんなに制作されておらず、今回は、データを取る為に態々、海賊に提供したのだ。

キング「それにしても、大分苦戦しているな？」

だが、あまりの撃墜数にキングは失望する。

補佐官「仕方がありません・・・試作とは言え、操縦しているのは彼らなので、性能以上の威力を発揮できないんです。」

いくら新型とは言え、結局操縦するのは人だ。

しかも素人が操作をしているので、動きが鈍く、対応が出来ないでいる。

キング「まあ良い・・・ともあれ、これで日本政府がどう対応するか・・・見ものだな！」

キングは、予想もしない事態に日本政府がどう動くか見ものだと言っている。

雅か、学生艦まで使って、海上要塞を止めようとしている何て、予想できないだろう。そんな中、ホワイトドルフィン艦隊は、海上要塞の砲撃に苦戦していた。

高千穂、艦橋

美由紀「至急、大鳳にブローケン・アローを要請して！」

美由紀は、苦戦するホワイトドルフィン艦隊を支援しようと

高千穂通信主「了解！」

空母大鳳にブローケン・アローを要請した。

空母大鳳、艦橋

実「要塞から砲撃だそうです。」

薫「何で!?・・・武装は破壊されてたんじゃなかったの？」

報告を聞いて、薫達は驚愕する。

龍之介「やはり、あの艦長の言った通りになったな・・・」

龍之介は、もえかの言う通りになったと確信する。

そんな時

実「高千穂から入電!・・・ブローケン・アローを要請しています。」

高千穂からのブローケン・アローを要請が入る。

功「ブローケン・アロー・・・全航空機による集中支援要請?!」

既にホワイトドルフィン艦隊は突入を断念し、苦戦している状態。

その為、ブローケン・アロー

つまり全航空機による海上要塞への集中攻撃支援要請だ。

龍之介「至急、第2次攻撃隊発進させろ……それから帰還中の第1次攻撃隊を急ぎ収容し、再度要塞攻撃に向かわせろ！」

薫「りよ、了解！」

直ちに空母大鳳から待機していたライトニング隊（第2次攻撃隊）（戦闘機13機、攻撃機25機）を発進させ、更に攻撃を終えたスターズ隊の攻撃機25機を急いで収容し、補給を終えた後、再度海上要塞攻撃へと向かわせた。

そして、武蔵でも

武蔵、艦橋

真霜「最悪ね……」

ホワイトドルフィン艦隊の苦戦や真雪からの要塞への全面攻撃命令。

最悪な状態に落ちいたと真霜は、認識し

もえか「距離を詰めます。」

真霜「向こうも撃つてくるわよ！」

もえか「ホワイトドルフィンが頑張つて引き付けてくれていますので……その間にできるだけ砲弾を叩き込みます。」

もえかも距離を詰めて、海上要塞への集中砲撃を命じる。

こうして、海上要塞に対して空と海からの集中攻撃が開始された。

そして、それに乗じるかの様に

春乱、操縦席

スターズ隊A『これで13機目だ!』

なのは「よし……あれ?」

なのは達と交戦していた敵機17機も交戦を止めて、海上要塞の方へと引き返して行く。

それを見たなのは達も

なのは「追撃するよ!」

逃げる敵機を追撃する。

晴風、艦橋

2正面での攻撃がなされる中、晴風でも

鵜『……だ、そうです。』

真雪からの命令が齎され

ましろ「現在の要塞の位置と予想針路は?」

ましろは、海上要塞の位置と予想針路を問う。

幸子「此方です!」

幸子は、タブレットをましろに見せる。

ましろ「不味いな・・・6時間以内に到達可能な距離に、幅14m以下の艦はありません！」

明乃「それって・・・」

ましろ「ホワイトドルフィンもブルーマーメイドもGフォースも・・・どちらもです。」
タブレットの情報を見て、ましろは、6時間以内に到達可能な距離に海上要塞内部に突入できる艦が無いと分かった。

しかもそれは、ブルーマーメイド、ホワイトドルフィン、そして、Gフォースのどちらも無かった。

幸子「今のままだと5時間でプラントに合流・・・そうなった場合、再び奪い返されると思います。」

このままでは、海上要塞は、プラントと合流してしまう。

そうなればプラントは奪回され、真冬や三郎達の努力も無駄になる。

鈴「プラント・・・逃げちゃえば良いのに・・・」

それを聞いた鈴は、プラントが逃げれば良いと思ったが

幸子「何所に逃げてても、要塞の速度なら追いつかれますよ！」

鈴「え・・・」

何所に逃げてても要塞からは逃げられないので、無理だった。

明乃「囹だつたのかな……武装が使える状態で、もし要塞が東京湾に入ったら……」
明乃は、もしかしたらプラントは唯の囹で、本当は、そのまま東京湾に侵入するかも知れないと思つた。

幸子「そうなつたら首都圏は火の海です！」

ましろ「今、湾内にあの要塞を止められる艦はありません……此処で我々で止めるしか……」

ましろと幸子の言う通り、今東京湾に海上要塞を止められる艦艇は無い。

殆んどが横須賀港内に閉じ込められた状態にある。

そんな状態で海上要塞が東京湾に入ったら、間違いなく首都圏は壊滅状態になるだろう。

ましろが言う様に此処で止めるしかない。

だが、如何やって止めるのか

そんな時

明乃「この晴風なら中に入れる。」

明乃は、自分が乗っている晴風なら海上要塞内部に入れると言ひ出した。

ましろ「確かに最大幅は10・8mですが……正気ですか？」

確かに晴風は、小型の駆逐艦だから、普通の巡洋艦並みの駆逐艦よりは、小さいので

破壊されたゲート部分に入れるだろう。

だが、それは、余りにも危険で、下手すれば海上要塞の砲撃で撃沈される危険性があつた。

そんな危険性が有るのにやるのかましろは、明乃に問う。

明乃「分かんない・・・でも・・・私達がやれるなら・・・」

それに対して、明乃も分からないが、もし自分達がやれるならと思うた。

ましろ「・・・はあ・・・艦長なら、そう言うと思つてました。」

それを聞いたましろは、明乃が考えている事はお見通しで、自分も明乃の考えに同意する。

明乃「ああ！・・・シロちゃん！」

ましろの同意に明乃は喜び

ましろ「5分待つてください・・・作戦を検討します。」

ましろは、作戦を検討する。

そして、作戦を検討した後、武蔵と空母大鳳に作戦の実行の許可を申し出る。

その頃、海上要塞の戦闘は泥沼化していた。

武蔵以下5艦からの集中砲撃、そして、空母大鳳から発進した攻撃隊からの集中爆撃。

これらの攻撃を受けても海上要塞は、健在だった。

うらづき、艦橋

うらづき艦長「これ程の攻撃でも駄目か？」

戦況をまじかで見えていたうらづきの艦長は、如何すれば良いか考える。

うらづき副長「スキツパー部隊の突入を進言します。」

副長も何とかして、海上要塞内部に突入しようと、スキツパー部隊による海上要塞内部への突入を進言する。

うらづき艦長「そうだな．．．要塞砲の次弾装填までは30秒．．．それを使えば．．．よろしい！ぎりぎりまで接近させろ！」

艦長もそれに賛同し、要塞砲の次弾装填の時間を利用する事にした。

副長「了解！」

こうして、ホワイトドルフィン艦隊は、一か八かのスキツパー部隊の突入作戦を実行する。

しかし、それを読んでいるかのように接近してくるホワイトドルフィン艦隊に向け、海上要塞は容赦なく砲撃を浴びせる。

うらづき、艦橋

『ううー．．．うう．．．』

うらづき艦長「全速退避！」

海上要塞からの容赦ない砲撃に、ホワイトドルフィン艦隊は退避する。

うらづき艦長「これでは接近もできん！」

流星の容赦ない砲撃にホワイトドルフィン艦隊は、接近するどころかスキッパー部隊を突入させる事も出来なかった。

更に

うらづき見張り員「直上より航空機！」

うらづき艦長「何!?!」

艦隊の直上から敵機が来襲し、ホワイトドルフィン艦隊に向け容赦ない攻撃を浴びせる。

『ううー…うう…』

うらづき副長「これでは、殲り殺しにされます。」

海上要塞からの砲撃と敵機による攻撃

雅に殲殺しの状態になろうとしていた。

その時

うらづき艦長「はっ!?!」

攻撃して来た敵機が目の前で、突然爆発した。

よく見ると、後から味方の戦闘機が現れた。

それは、紛れもなく敵機を追撃していたのは達だった。

更に後からフェイト達13機も加わり、敵機を、ホワイトドルフィン艦隊に近づけさせない様に追い払う。

上空も乱戦になる。

空母大鳳、艦橋

龍之介「晴風が要塞に突入すると進言して来た。」

一方、航空戦の指揮を執っていた龍之介の元に晴風からの海上要塞への突入の進言が飛び込んで来た。

薫「晴風が!?! . . . 無茶です! . . . いくら要塞内部に突入が可能でも . . . もし失敗すれば、要塞砲からの集中攻撃にさらされる恐れが . . . 」

それを聞いた薫は、断固として反対する。

龍之介「だが恐らく、あいつらは行くだろうな . . . 例えそれが、どんな結果になるうとも . . . 」

だが、例え反対しても、明乃の事だから行くだろうと察する。

薫「ん . . . ならば准将! . . . お願いがあります。」

龍之介の考えを聞いて、薫は、龍之介にある頼み事をする。

龍之介「何だ艦長? 」

薫「私を……晴風に行かせて下さい！」

それは、薫が晴風への乗艦の要望だった。

『えっ?』

龍之介「……」

それを聞いた次郎達は驚き、龍之介は真剣に聞く。

薫「このまま晴風の生徒だけ向かわせるのは、余りに危険です……ですから……私も行つて、晴風生徒の力になりたいんです……お願いします!」

薫は、今まで共にしてきた明乃達を行かせたくなかった。でも止めても明乃達は行くと思ひ。

なら自分も共に向かおうと龍之介に頼んだのだ。

それを聞いた龍之介は

龍之介「はぁ……どうせ止めても行くんだろう……良いだろう……俺も晴風の生徒だけに任せるには、心細いからな……此処は、お前が行くのが適任だ……晴風への同行を認める。」

あつさりと薫の晴風乗艦を許可した。

実は、龍之介も明乃達だけ向かわせるのは、やばいと思つていた。

だから此処は、薫を行かせ、明乃達を監督して、海上要塞内部へと向かわせる事にし

た。

薫「ありがとうございます……兄さん！」

薫は、龍之介に感謝し

薫「では副長!……後の事を頼みます。」

後の事をはやてに任せる。

はやて「任せて下さい……先輩が留守の間、きつちりと守って見せますさかい！」

はやては、きつちり留守を預かると言い

薫「じゃ、行ってくる。」

薫は、晴風へと向かう為、艦橋を後にする。

次郎「あ……」

晴風へ向かう薫を唯見ている事しかできない次郎だったが

龍之介「何しているんだ次郎?……お前もさつさと行かんか！」

ボーとしている次郎に対し、龍之介は、薫と同行させる。

次郎「えっ!?!でも俺は?」

だが次郎は、迷う。

龍之介「お前には、薫を守ると言う大事な役目が有るだろう……さつさと行け！」

そんな次郎に龍之介は強引に行かせる。

次郎「は、はい！」

龍之介に命じられ、次郎は薫の後を追う。

2人が行った後、龍之介は

龍之介「全く・・・我が家は、如何して無茶ばかりするのか・・・」

山本家と宗谷家の女性性は、如何して危ない事ばかりするのに呆れてしまう。

とは言え薫と次郎は、待機していたSH-60Gで晴風へと向かう。

武蔵、艦橋

同じ頃、武蔵で指揮を執っていた真霜の方にも

真霜「晴風が作戦計画を上甲してきたわ！」

晴風からの海上要塞への突入の進言が入って来た。

もえか「ミケちゃんか？」

真霜「ええ・・・晴風で突入して、動力部を破壊するって！」

もえか「あっ・・・」

それを聞いたもえかは、考え

もえか「なら、打つ手は、一つですね！」

ある作戦を思い付く。

真霜「何をする気？」

真霜は、何をやる気なのか問う。

もえか「簡単です！・・・我々が撃つて撃つて撃ちまくって・・・その間に晴風を中に突入させます。」

それは、自分達が海上要塞に攻撃を集中させて、海上要塞の目を晴風から逸らし、その隙に晴風を海上要塞内部に突入させると言うのだ。

真霜「ホワイトドルフィン艦隊でも近づけなかったのに？」

真霜の言う通り、ホワイトドルフィン艦隊が出来なかった事を今度は、晴風1隻で行おうと言うのだ。

もえか「私とミケちゃんなら大丈夫です。」

だが、もえかは、明乃の事を信じ、大丈夫だと真霜に言う。

それを聞いた真霜は

真霜「はあ・・・貴方も一度言い出したなら、引き下がらないタイプなのね・・・仕方ないわ・・・確かに政府からも、学生を使つても止めると命令が来ているの・・・だけれど私としては、安全を十分に考慮して、作戦を立ててほしい。」

あつさりもえかの作戦を受け入れた。

本当は、政府からも学生を使つても止めると命令が出ているが、真霜としては、そんな事はしたくなかった。

「ただ、学生が向かう以上、安全を十分に考慮して、作戦を立ててほしいともえかに進言し」

もえか「分かっています。」

もえかもそれは、分かっていた。

そんな時

夏美「大鳳から入電！……此方も晴風の作戦を了承する……従がって、監督の為……山本中佐以下2名を晴風に乗艦させると……」

龍之介からも晴風の海上要塞への突入の進言を了承すると通信が入り、それに乗じて、薫と次郎の晴風へ乗艦するとまで言ってきた。

真霜「フツ！……如何やらもう1人引き下がないタイプがいるらしいわね！」

それを聞いた真霜は、薫ももえかと同じタイプだと認識する。

もえか「そのようですね……後は要塞の中を……」

もえかも認識し、後は海上要塞の中をと云った時

スー「それ……私、知ってる！」

スーがそれに飛び付く。

真霜「はあ……そうだったわね！」

確かにスーなら海上要塞に詳しい。

真霜もそれに同調する。

そんな時

夏美「要塞から通信です！」

今度は、海上要塞から通信が入ってきた。

真霜は、内容を見る。

もえか「何と？」

真霜「予想通りよ！……”近隣の艦を引き揚げてプラントを引き渡せ”……”そうでなければ東京湾に突入する”と……」

明乃ともえかの予測通り、攻撃を中止して、プラントを引き渡せ……従わなければ東京湾に突入すると警告して来た。

もえか「最悪……ですわね！」

最早、最悪だと認識し

真霜「ええ、こうなつた以上、作戦を承認します。」

真霜は、作戦を了承し

真霜「それと、あの子を晴風に送って！」

スーを晴風へと送るよう命じる。

もえか「了解！……晴風に連絡！」

こうして、龍之介と真霜の許可を経て、作戦は了承された。

晴風、艦橋

「まゆみ」が「作戦を了承する」だそうですね！」

作戦が了承され、晴風にそれを伝えた。

そして

スー「あはっ・・・」

『えっ!?!』

それに乗じて、スーが晴風に乗り込んできた。

ロープ経由で晴風に乗り込んできたスーは

『わっ!?!』

そのまま艦橋の窓にぶつか

『うわっ!?!』

そのまま下へと落ちた。

それを見ていた明乃とましろは、急いでスーの元に向かう。

晴風、甲板

甲板に出た明乃とましろは、スーがスキツパーの上に着地している事を確認し

明乃「スーちゃん！」

ましろ「何しに来た!？」

何しに来たのか問う。

スー「手伝いに来た!・・・スー、要塞の中、知ってる!」

それに対して、スーは、要塞内部への突入の手伝いに来たと言う。

明乃「えっ!?!本当に?」

それを聞いた明乃は驚き

ましろ「それは助かるが・・・良いのか?」

ましろは、本当に一緒に付いてくるのか問う。

スー「当然・・・もうファミリィよ!」

だが、スーは、既に明乃達と行く決めていた。

そんな中

スー「おっ?」

スーが犬みたいに匂いを嗅ぎ始め

スー「アハッ!」

何かを見つけた様に2人の側に飛び移って来た。

2人は、何かと思ったが、スーが後ろへと向かう。

その先にはあかねが立っていた。

スーは、あかねの前で

スー「さっきの良い匂い！」

あかねが持つていた肉巻きミルフィーユかつおにぎりに目を付ける。

如何やら夜食の時に気づいた肉巻きミルフィーユかつおにぎりに飛び付いた様だ。

あかね「私が作った肉巻きミルフィーユかつおにぎりなの・・・食べて食べて！」

飛び付くスーにあかねは、易々と自分が作った肉巻きミルフィーユかつおにぎりをスーに渡す。

スー「食べる食べる・・・」

あかねから肉巻きミルフィーユかつおにぎりを貰い

スー「は・・・あむっ！」

スーは、嬉しそうにそれを食べる。

全く手伝いに来たのか、それとも食べるに来たのか、全く食いしん坊な奴だ。

スーが食べている時

『!?!』

晴風上空にSH-60Gが飛来し、其処から薫と次郎がロープ降下で晴風の甲板に降りる。

明乃「教官!?!」

ましろ「如何して此処に？」

スー同様に何しい来たのか問うと

薫「貴方達が要塞に向かうつて聞いて、居ても立つても居られないから来て上げたのよ！」

薫は、明乃達が海上要塞に向かうと聞いて、居ても立つても居られないから来て上げたと告げる。

明乃「教官……」

そんな薫に明乃とましろは感謝する。

次郎「ついでに俺も薫の付き添い出来た……感謝しろ！」

ましろ「別に感謝は……」

だが、次郎については、別に感謝しておらず

次郎「何だよそれ……何かありがたみがないな……」

次郎は、ありがたみがないと思つた。

高千穂、艦橋

美由紀「全くあの2人は……まあ、生徒だけ行かせる訳にも行かないし……今回は、あの2人に任せるとしましょう。」

艦橋から見ていた美由紀も薫と次郎に呆れながら、2人にさせる事にした。

とは言え、これで晴風の海上要塞への突入準備は整い。

時津風や天津風他2隻を率いて、要塞に針路を取る。

武蔵、艦橋

真霜「啄木鳥作戦開始！」

真霜は、晴風での海上要塞突入作戦、啄木鳥作戦開始を命じる。

それに乗じて、ホワイトドルフィン艦隊は

うらづき、艦橋

うらづき艦長「我々が、奴らの砲撃を引き付ける。」

囀として、要塞の砲撃を引き付ける。

そして、龍之介も

空母大鳳、艦橋

龍之介「上空にいるのはとフェイト達に晴風を援護をさせるんだ。」

海上要塞上空にいたのはとフェイト達に晴風への援護を命じる。

5艦からの砲撃とホワイトドルフィン艦隊の陽動、そして、なのはとフェイト達が迫り来る敵機を追い払った事で海上要塞は、晴風から完全に目を逸らす。

更に

大和、艦橋

進愛「うん？」

戦況を見ていた進愛が何かに気づく。

進愛「武蔵、照準ミスしとるん？」

それは、武蔵が砲撃の照準ミスを犯している事だった。

しかし

十海「いえ、あれを見て！」

それは、違うと十海は言つて、進愛に双眼鏡を代わつて見せる。

進愛「ありやー！」

進愛が見た物は、武蔵が晴風に対し、染色弾で道案内をしていたのだ。

一方、晴風の方は、海上要塞に近づきにつれ、味方の弾着が近くなつていた。

晴風、見張り台

マチコ「目標まで距離30・・・水柱まで距離0.5!・・・くつ・・・」

晴風、艦橋

『うわっ!』

次郎「くつ・・・」

マチコ『弾着が近すぎです!』

流石の弾着の至近にかなりの衝撃と揺れが襲う。

ましろ「艦長！」

流石のましろも如何するか明乃に問う。

それに対して、明乃は、如何するか考えていると

明乃「はっ！」

薫「染色弾だわ!?!」

染色弾が前方に着弾した。

しかもそれは、何発弾着しているではないか

明乃「おもかくじ！赤色の水柱・・ヨーソロ！」

鈴「了解！」

明乃は、もえかの道しるべである染色弾に気づき、染色弾が弾着した方へと針路を取る。

染色弾の水柱で晴風は、海上要塞から見えない状態で進む。

『う．．．!?!』

だが、流石に至近なので衝撃や揺れが容赦なく遅い。

ましろ「艦長？」

流石のましろも当たるかと思つたが

明乃「大丈夫・・・絶対当たらないから・・・もかちゃんを信用して、あの水柱の中へ突入して！」

明乃は、もえかを信じ、断固、染色弾の水柱へと突入しながら進む。

ましろ「うう・・・雅かこんな方法で・・・」

進むに連れ、ましろは、もえかが、こんな方法で海上要塞に誘導するとは思っても見なかった。

武蔵、艦橋

もえか「高め5」

武蔵砲術長「高め5」

そのもえかも晴風を導こうと進むにつれ角度を変えながら染色弾を放つ。

真霜「染色弾で道案内なんて・・・」

双眼鏡で見ていた真霜は、もえかの誘導方法に驚愕する。

晴風、艦橋

薫と明乃達が衝撃と揺れに耐える中

次郎「やほうう！・・・良いぞ！このまま要塞へ向かえ！」

次郎は、逆に何だか楽しそうにしていた。

薫「楽しそうね次郎君・・・きや・・・」

次郎「だって、この揺れと衝撃……まるでサーフィンしている見たいだぜ！」

この衝撃と揺れに対して、本人は、サーフィンしている様だと迫力に面白がっていた。薫「う……次郎君って……サーフィンしたことあるの……う……」

それに対して、薫は、次郎にサーフィンをした事が有るのか問う。

次郎「……ない……兎に角、艦長の言う通りに進もう。」

だが、本人は、サーフィンなどした事がなく、結局、明乃言う通りに進む。

晴風が染色弾の水柱に目隠しされながら、海上要塞に進む中、隣を航行していた天津

風では

天津風、艦橋

あゆみ「艦長！……我々は囷として、目立つ様に後退せよ、と！」

武蔵からの囷として行動しながら後退せよとの指示が齎された。

千華「くっ！……本当は私が一番に突入したかったんだけど！」

だが、千華は、本当は自分が海上要塞に突入したかったと駄々をこねる。

あゆみ「あれを見てもそう思います？」

そんな千華にあゆみは、あれを見て、それでもそう思うのか問う。

千華「うん？」

千華は、歩みが指す方向を見ると

其処には、染色弾の水柱に突入しながら進む晴風の姿が有った。それを見た千華は

千華「よし！ 囀で一番、目立つわよ！」

流石に無理と判断し、命令どおり囀として行動しながら後退する事に決めた。

あゆみ「はい！ そうしましょう。」

こうして、天津風と時津風他2隻は、囀として、目立つ様後退する。

そして、晴風は、海上要塞付近まで到達していた。

晴風、艦橋

マチコ『要塞は目の前です！』

既に海上要塞は、目の前に狭っていた。

明乃「野間さん退避を！」

それを聞いた明乃は、マチコに見張り台からの退避を命じる。

流石に海上要塞ゲートの破損部分から入るので、マストが破損するかも知れない恐れがあったので、あえて見張り台にいたマチコに艦内への退避を命じたのだ。

マチコ『了解！』

マチコもそれに従い急いで降りる。

まして「万里小路さんも退避完了！」

既に楓も艦底からの退避は完了し

幸子「艦内防水扉、閉鎖完了！」

防水扉も閉鎖が完了する。

薫「皆捕まって！」

全てが完了すると薫は、突入に備えて、薫達と明乃達に何かに捕まるよう命じる。

ゲート付近に近づくと連れ、要塞砲からの集中砲撃が襲い掛かる。

晴風は、全速でそれを避けながら

明乃「どんびしゃーっ!!」

ゲート付近に突入する。

明乃「両舷停止！後進いっばい！・・・急げ！」

ゲート付近に突入した明乃は、減速しながらよゲートから内部に侵入する。

その通過時にレーダの一部とマストがゲート上部に衝突し、破損してしまった。

マチコは、何とか退避に成功したが

マチコ「私の部屋が・・・!!」

衝突したせいで見張り台まで壊された事にマチコは、ショックを受ける。

とは言え、晴風は見事に海上要塞内部へと侵入した。

武蔵、艦橋

真霜「砲弾で誘導するなんて、貴方達無茶するわね！」

侵入後、真霜は、もえかの誘導方法に無茶な事をするに驚いていた。

もえか「ミケちゃんなら絶対に大丈夫ですから！」

明乃ももえかを信じてた様にもえかも明乃を信じ、大丈夫だと思った。

真霜「はあ・・・薫やうちの家族も大概だと思つてたけど・・・この子達も相当ね！」

真霜は、それを聞いて、薫や自分の家族も大概だと思つてたが、もえかや明乃も相当だと思ふのだった。

空母大鳳、艦橋

龍之介「全くだ！」

龍之介も同じ思いだった。

とは言え、龍之介達と真霜達は、突入した晴風の無事を祈るんだつた。

一方、海上要塞に突入した晴風は

晴風、艦橋

マチコ『前部マスト上部欠損！』

慧『電探反応ありません！』

麻命『機関、舵、スクリュー異常なくし！』

光『全砲門異常なし・・・全力發揮可能！』

美甘「炊飯器無事です！」

楓「聴音、避難完了です。」

被害状況を確認しながら要塞内部奥に進む。

幸子「艦内状況確認終了！・・・電探、ソナー使用不能・・・それ以外は問題なし！」

次郎「まいったな・・・レーダーなしじゃ、何所から攻撃されるか分らん？」

薫「一応、前方の見張りを厳しくしましょう艦長！」

明乃「はい！・・・前方見張りを厳に！」

レーダーが使えないので、薫の言う通りに前方の見張りを厳しくする。

明乃「スーちゃん！道案内よろしく！」

後は、スーに海上要塞内部の道案内を頼む。

スー「任せて！」

薫「がんばって！」

次郎「お前が頼りなんだからな！」

スー「ん！・・・このまま、しばらく真っ直ぐ！」

2人に励まされ、スーは、道案内をする。

スー「あの先はドックになっていて・・・」

幸子「何で外の砲とか生きていたんですかね？」

内部に進むにつれ、幸子は、何故武装が生きていたのか不思議に思う。芽衣「海賊が修理したのか？」

最初は、海賊が修理したと思つたが

次郎「そうじゃないと思う・・・確か准将やはりと言つていた。」

次郎は、龍之介が予測してた事を言う。

薫「私も詳しい事は分からないけど・・・スーちゃん何か知ってる？」

だが、本当のところは、薫と次郎にも分からず、薫は、スーに何か知っているか聞く。

スー「分からないけど・・・時々、外から来た人が出入りしてた。」

スーも其処のとは分からず、唯関係者が時々出入りしていたと告げる。

ましろ「じゃあ、ひよつとして中にも武装が・・・はっ！」

薫「それは、あり得るかも・・・」

それを聞いた薫とましろは、嫌な予感がしてきたと思い、前方を警戒する。

そして、海上要塞内部のドックに侵入した時

天井付近からサーチライトらしき光が一斉に晴風を照らす。

薫「しまった!？」

ましろ「やっぱり!？」

2人の嫌な予感、見事に的中した。

明乃「面舵一杯！急げ！」

鈴「はい……！」

明乃は、急いでサーチライトから逃れようとする。

それに乗じて、上から10・2cm砲が晴風に向けて砲撃して来た。

晴風は、何とか回避しながら

明乃「反撃して！」

志摩「うい」

反撃する。

だが、内部が狭く、仰角が上げられなかった。

晴風、射撃指揮所

マチコ「弾かれた！」

砲塔の台座付近に弾かれてしまう。

無傷の10・2cm砲は、再度晴風を砲撃し、晴風も回避しながら反撃するも

光「全然、当たらないよ……」

美千留「回避が早すぎ……」

順子「バキユンと当てたい……」

内部の狭さと急回避な為、照準が出来ないでいた。

晴風、艦橋

鈴「ひえ・・・・・・・・・・・・・・・・」

攻撃に脅えながら回避する鈴。

次郎「撃つに狭すぎるぜ此処は・・・・」

志摩「うい・・・・・・・・」

砲弾が届かない事と内部が狭い事に次郎と志摩は、苛立つ。

ましろ「艦長！擁壁が邪魔で、此方の砲弾は当たりません！」

ましろは、明乃に打開策を問う。

幸子「上から撃ち込むしかないですね・・・・」

幸子は、目を回しながら上から撃ち込むしかないと言うが

薫「それは無理よ・・・・」

薫がそれは無理だと否定する。

明乃「主砲の仰角を上げるのは？」

明乃は、主砲の仰角を上げるのはと問うが

次郎「こんな狭さじゃ無理だ！それに・・・・」

志摩「天井、邪魔」

流石に内部が狭いし、例え撃つても天井に邪魔されて、当てられなかった。

芽衣「だくもく何か打ち上げるの、無いんか!!」

2人の話を聞いて、芽衣が何か打ち上げる者が無いかと言い張る。

それを聞いた途端

明乃「それだ!」

明乃は、何かを思い付き

明乃「爆雷準備!」

爆雷用意を命じる。

幸子「爆雷!」

次郎「爆雷なんて如何する気だ!」

ましろ「艦長、目標は潜水艦ではありません!!」

明乃の考えに3人は、分からなかった。

薫「投射機だわ!・・・あれなら上へと持ち上げられる・・・後は、上手く砲に投げ

込めば・・・」

薫は、大体明乃の考えは分かっていた。

明乃「ヒメちゃん、モモちゃん、爆雷用意!」

明乃は、媛萌と百々に爆雷の発射準備を命じ

明乃「タマちゃんお願い！」

志摩「うい！」

志摩にある事を命じる。

晴風、後部甲板

媛萌「投射距離と飛行秒時は？」

百々「単射で210mの7.2秒っス！」

媛萌と百々、美海の3人は、投射の距離と射撃のタイミングを計算。

媛萌「一番、上がった時がそれだから……え……と、仰角は50度……」

隣では、志摩がいつでも撃てる様に機銃の引き金を握っている。

美海「天井の高さから割り出すと……計算できました……一杯一杯で旋回してく

ださい！」

大体計算し、一杯一杯で旋回するよう命じる。

明乃『了解！』

晴風、艦橋

鈴「うええ……」

それに従い鈴は、怯えながら舵を左に一杯一杯切る。

晴風は大周りしながら艦尾を砲座に向け

晴風、後部甲板

百々「まだっスか・・・!?」

百々がまだかと言って、発射レバーに手を置いた状態で待っている。

媛萌「まだ!？」

媛萌は、まだと言い。

美海「もう少し・・・よい・・・てーっ!」

美海ももう少しと言って、しばらくして、発射を命令。

百々は、発射レバーを引き、爆雷1発が投射された。

投射された爆雷は、敵の砲座の上まで上がり

志摩「ひーはーラム・・・!」

続いて、志摩が機銃で上がった爆雷を狙い撃ち

撃たれた爆雷は、そのまま砲座の砲付近に命中した。

命中により砲座は大爆発を起こす。

『大成功・・・!!』

砲座に命中した事を3人は大喜びする。

晴風、艦橋

マチコ『砲塔、沈黙!』

ましろ「ああ……」

次郎「あいつは勲章もんだ！」

明乃「前方開口部に突入！」

砲座を破壊の報告を聞いて、明乃は、そのまま開口部に突入を命じる。

鈴「りよ、了解……！」

砲座を破壊した晴風は、開口部へと突入する。

薫「スーちゃん、この先の水路は？」

スー「しばらく直線、水深も十分にある。」

この先は、直線で水深も十分にあった。

薫「艦長！」

明乃「ん！……サトちゃん、内部の事前情報との違いをスーちゃんと至急確認して
！」

それを聞いて、明乃は、直ぐに聡子に内部の事前情報との違いをスーと至急確認する
よう命じる。

聡子『了解ぞな！』

聡子は、直ぐに艦橋に上がり、スーと内部の情報を確認する。

しばらく前方を進んでいると

晴風、射撃指揮所

マチコ「左右に砲座！」

またしても砲座があり、しかも今度は、バルカン砲だった。左右のバルカン砲の銃撃をもろに食らう。

晴風、艦橋

芽衣「ぐあ……！！魚雷、撃ちたい……！！」

バルカン砲の攻撃に芽衣は、魚雷撃ちたいと駄々をこね

鈴「狭いから避けられないよ……」

鈴は、水路が狭いから避けられないと泣き叫ぶ。

薫「落ち着いて、これぐらいの攻撃なら大丈夫だから……」

薫は、2人を落ち着かせようとする。

そんな時

志摩「左！」

志摩は左と言って、砲撃指示を出す。

それに従い、砲撃で左のバルカン砲を破壊する。

だが、更に奥にもバルカン砲があり、晴風を波状攻撃する。

『ううっ……』

次郎「くそ！一体何台有るんだ？」

ましろ「はっ！」

バルカン砲の波状攻撃に薫達と明乃達は耐える。

その時

聡子「最適航路のプロットと想定砲座位置、確認終了ぞな！」

スー「頑張った！」

聡子とスーが内部の情報と今ある砲座の位置を確認したと報告が入る。

薫「でかしたわよ！」

明乃「サトちゃん、スーちゃん、偉い！」

それを聞いた薫と明乃は、2人を褒め

『えへへ！』

薫と明乃に褒められ2人は照れる。

明乃「リンちゃん！プロット済み航路に従って航行！」

鈴「はい・・・！」

内部の情報の確認が出来た以上、明乃は、直ぐに鈴に確認した最適航路を進むよう命じる。

明乃「ココちゃん！万里小路さんを呼んで！」

幸子「はい！」

更に楓を艦橋に呼ぶ。

しばらくして、バルカン砲が次々と破壊されている。

何故だろうか

晴風、艦橋

それは、楓が耳を澄まして、砲の音を嗅ぎ分けているからだ。

楓「次、右で機械音・距離4・0」

楓は、得意の聴音でバルカン砲の位置を探り、志摩に報告する。

志摩「1番砲・20度・仰角15度に備え・射距離4・0」

志摩もそれに従い狙いを定めて

志摩「てっ！」

砲撃する。

砲弾は、右のバルカン砲に見事に命中する

『やった・・・！』

命中した事に明乃達は大喜びする。

ましろ「成程！見えないなら別な手段を使えば良いと・・・」

ましろは、明乃の策に感心する。

楓「左、機械音」

その調子でバルカン砲を次々と破壊して行き

聡子「目標までの距離8・0」

やがて、動力部が有る中央部に到達し

明乃「戦闘右魚雷戦！」

明乃は、魚雷戦の指示を出す。

芽衣「やった・・・！出番だ・・・！」

それを聞いた芽衣は、やっと出番だとはしやぎ

芽衣「でつかいの使っちゃって！」

例の36インチ魚雷の発射準備を命じる。

晴風、甲板

理都子「えっ、あれ使うんだ？」

果代子「発射管に入らないよ・・・」

理都子と果代子の言う通り、36インチ魚雷は、巨大な為、普通の発射管には入らな

い。

だが

百々「こんな事もあるのかとっス！」

『えっ?』

媛萌「一応レール・敷いておいだけど!」

こんな事態に備えて、媛萌と百々が自前で発射装置を作っていた。

晴風、艦橋

スー「この先動力用ゲート、距離600」

スーは、この先に動力用のゲートが有ると告げ。

ましろ「それを破壊すれば止まる筈!」

ましろは、それを破壊すれば止まると察し

明乃「速度このまま・通路から出た瞬間に取り舵一杯!」

鈴「了解!」

明乃は、通路が出た瞬間を狙い取り舵一杯を命じる。

聡子「魚雷発射位置まで・あと15秒」

やがて、魚雷発射位置まであと15秒を切り

次郎「いよいよだ・・・」

薫「ん・・・」

薫と次郎は、いよいよだと思い

聡子「10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・」

聡子はカウントダウンを行い

明乃「取り舵一杯！」

4で明乃は、取り舵を命じ

鈴「取り舵一杯……！」

鈴は、舵を左に切る。

聡子「3……2……1……0」

芽衣「よいい……てっ！」

聡子のカウントダウン終了と同時に晴風から36インチ魚雷が発射された。

明乃「衝撃に備え！」

薫達と明乃達は、衝撃に備える。

36インチ魚雷は、そのまま目標に命中した。

『うう……！』

爆発の衝撃で艦は、押し出されるが

『あっ』

衝撃が収まり内部がむき出しになった。

『やった……！』

明乃達は、やったと大喜びするが

次郎「喜ぶのはまだ早い！」

だが、まだ喜ぶのは早い、破壊したとは言え、内部がむき出しの状態になっただけであるからだ。

武蔵、艦橋

真霜「そろそろ時間だけど……」

海上要塞外で見守っていた真霜達も突入した晴風が海上要塞を止めるのを待っていた。

そんな時

夏美「聴音室より報告！……要塞内部で大規模な爆発を確認！」

聴音室から先程の36インチ魚雷の爆発音を確認したと報告が入り

もえか「ミケちゃん！」

もえかは直ぐに双眼鏡で海上要塞を見る。

もえか「まだ……動いてる。」

しかし、海上要塞は停止していなかった。

次郎の言う通り、まだ終わっていないかった。

むき出しになった内部には、柱見たいなものが動力炉の前に立塞がっていた。

晴風、艦橋

ましろ「まるで神殿だな・・・」

ましろは、それを見て、まるで神殿だと思い

明乃「スーちゃん、此処は知ってる？」

明乃は、スーに動力炉の事をしているのか問う

スー「ううん」

スーは、動力炉に関しては知らなかった。

薫「こうなれば破れかぶれよ！」

明乃「はい！・・・攻撃許可します。」

志摩「うい！」

志摩は、動力炉に向かって砲撃する。

しかし、いくら砲撃しても前方にある柱が邪魔で動力炉に当たらない

芽衣「柱が邪魔で砲弾が通らない！」

次郎「くそ！ミサイルさえ有れば・・・」

ましろ「不味いな・・・」

柱が邪魔で砲撃が当たらない事に3人は、如何すれば良いか悩んでいると

幸子「『枯れ木も山の賑わいじゃがの・・・柱も要塞の賑わい、かのう』」

幸子がいつもの一人芝居を始め

ましろ「ワシら・・・『柱に食いつぶされる訳にはいかんけえ!!』」
ましろはつい釣られてしまい

幸子「『おうよ!』」

ましろ「はっ!?!」

現実に戻る。

薫「はあ・・・こんな時まで、仁義のないしなくなつて・・・」

薫は、こんな時まで一人芝居をする2人に呆れてしまう。

そんな時

鈴「魚雷が自由に曲がれば良いのに・・・」

鈴が有りもしない事を言う。

明乃「それだ!」

鈴「え?」

明乃は、鈴の言葉を聞いて、ある事を思い付き

明乃「ココちゃん!美波さん呼んで!」

美波を呼ぶ。

しばらくして

美波「怪我人か!」

美波がセグウェイミニの兎走鳥飛24号で艦橋に現れ

美波「うっ！・・・あっ・・・」

まゆみと秀子に両腕を掴まれ、セグウェイミニの兎走鳥飛24号から降ろされた。

明乃は、セグウェイミニの兎走鳥飛24号を拾い

明乃「美波さん、これ貸して！」

美波に借してと迫る。

美波「えっ？・・・それっ・・・私の兎走鳥飛24号！」

いきなり自分のセグウェイミニの兎走鳥飛24号を貸せと言われ、何なのかと思い

次郎「おいおい！そんな物、一体何に使うんだ？」

次郎も何に使うかと思った。

取り合えずセグウェイミニの兎走鳥飛24号を使って何かを作る。

そして

晴風、後部甲板

美波「完成だ！」

完成したのが弾頭を搭載した。

百々「題して、超ダブルクロス号っす！」

遠隔操作式の超ダブルクロス号だった。

名前の通り、遠距離から操作が可能。

晴風、艦橋

鈴「これなら全然怖くない！」

鈴が幸子のタブレットで超ダブルクロス号を操作する。

そんな時

ましろ「艦長！水深が浅くなってきました。」

ましろは、内部の水深が浅くなっている事に気づく。

明乃「何で？」

何故、浅くなっているのか問う。

ましろ「原因は分かりませんが……このままでは座礁します。」

ましろも分からなかったが、座礁してしまう事は確かだった。

次郎「おそらく奴ら焦っているんだ！……俺達が動力炉を破壊しようとしているのが……」

2人の話を聞いて、次郎は、浅くなっている原因が海上要塞を抑えている海賊達が焦っているんだと思い、その為、動力部にいる晴風を動けない様にしようと最後の手段に撃つて来たんだと察した。

薫「なら、早く破壊しないと……」

薫は、早く攻撃しないと明乃に告げ

明乃「そうですね・・・リンちゃんは手が離せないからサトちゃん、操艦かんよろしく！」

明乃は、鈴が攻撃に集中している間、操舵を聡子に任せる。

聡子「了解ぞな！」

攻撃に備え晴風は、艦尾を動力部に向け

晴風、艦橋

幸子「目標見えました。」

攻撃準備が完了する。

明乃「攻撃始め！」

明乃は、攻撃を命じ

鈴は発進ボタンを押す。

晴風から超ダブルクロス号が動力炉を目指して発進した。

全速で航走する超ダブルクロス号

明乃「無線の届くぎりぎりまで後退」

聡子「両舷停止！両舷後進減速！」

明乃は、無線が届く距離まで後退し

明乃「マロンちゃん！」

晴風、機関室

明乃『爆発と同時に全速後退の準備！』

更に麻侖に爆発と同時に全速後退の準備を命じる。

麻侖「合点でい！・・・皆正念場だ！」

『了解！』

麻侖達は、全速後退に備える。

晴風、艦橋

そんな中

鈴「フツフツフツ・・・ハイパードリフトターン！」

鈴は、操縦に夢中に成り、隠れテクニクを見せつけ

鈴「突っ込め・・・！！」

見事に動力炉に突っ込ませた。

芽衣「リンちゃんにも撃て撃て魂が有ったよ！」

志摩「うい」

それを見ていた芽衣と志摩は、鈴にも撃て撃て魂が有ると思った。

動力炉に突っ込んだのを見計らい

明乃「後進一杯！」

明乃は、全速後進を命じ、動力部から退避する。

それと同時に動力炉が爆発。

誘爆を起こしながら大爆発をする。

その爆発は、外にまで及び

武蔵、艦橋

海上要塞外で見守っていた真霜達にも見えていた。

もえか「あれは！」

突然の要塞の爆発に何かと思っただもえかだが

夏美「要塞、速度低下しています！」

海上要塞の動きが止まったと報告が入り

真霜「やったわ！」

もえか「はあ・・・はい！」

もえかと真霜は、晴風が動力炉の破壊に成功したのだと喜び

空母大鳳、艦橋

実「要塞の速度低下！」

はやて「やった！」

功「やりましたね！」

龍之介「あいつら、本当にやりやがった！」

龍之介達も喜ぶ。

そして

なのは「あれ？」

それと同時になのはとフェイト達と空戦していた敵機もコントロールを失い、海上へと落ちていた。

なのは「如何なってるの？」

何が起こっているのか分らなかった。

おそらく要塞からの遠隔操作だったのが、動力炉を破壊したんで、機能を停止したんだろう。

とは言え、動力炉を破壊した事で海上要塞は完全に機能を停止した。

晴風、艦橋

楓「機関音停止！」

鵜『速度低下中！』

慧『要塞、停止した模様！』

晴風でも海上要塞が停止したのを確認し

次郎「よーし！」

薫「やったわ！」

鈴「うっしや．．．！」

『いえ．．．．．いい！』

次郎達や鈴達は、大喜びする。

幸子「やりましたよ艦長！」

明乃「うん、やったよ！」

明乃も喜ぶが

ましろ「艦長！水位が急速に低下中！」

ましろが水位が急速に低下していると報告を受け

更に

ポーン！

明乃「あつ．．．」

ましろ「えっ？」

突然の爆発音に2人は、何かと思つたが

スー「壊れる！」

スーが言う様に動力炉が爆発した事で内部が崩壊を始めた。

次郎「おいおい、ヤバイぞ！」

幸子「やり過ぎましたね・・・」

薫「早く逃げましょう艦長！」

明乃「はい！」

晴風は、反転して、急いで脱出する。

マチコ『要塞崩壊まで、およそ60秒！』

崩壊まで60秒を切り、晴風は、全速で出口に向かう。

しかし

晴風、電探室

慧「出口が塞がっています！」

瓦礫で出口が塞がれていた。

晴風、艦橋

ましろ「艦長！」

明乃「信号弾用意！」

明乃は、急いで信号弾で外にいる味方に支援砲撃を要請する。

晴風、射撃指揮所

光「10度、仰角50度に備え！・・・うつ・・・信号弾、星弾用意！」

美千留「主砲、射撃用意よし！」

順子「もうちよつと・・・もうちよつと・・・てーっ！」

晴風から外にいる混成艦隊に向け、支援砲撃を知らせる信号弾が発射された。

武蔵、艦橋

武蔵副長「信号弾、上がりました・・・晴風です！」

晴風からの支援砲撃を知らせる信号弾を確認。

もえか「全艦統制射撃準備！」

もえかは、直ぐに高千穂以下4艦に統制射撃準備を命じ

『了解！』

武蔵以下5艦は、要塞ゲートに照準を定め

もえか「攻撃始め！」

砲撃を開始。

武蔵副長「弾着！」

全弾要塞ゲートに命中するが

武蔵副長「駄目です！破壊出来ていません！」

肝心の障害物は、破壊出来ていなかった。

親子「次発装填完了まで30秒！」

もえか「ミケちゃん……」

次発装填まで30秒、もはや間に合わない。

高千穂、艦橋

美由紀「砲撃が駄目なら別の方法で……トマホーク発射用意！」

だが、美由紀の方は諦めず、トマホーク対艦巡航ミサイルの発射準備を命じる。

晴風、艦橋

楓「弾着音48！」

幸子「高千穂及び大和型4隻の一斉射撃です！」

一方、脱出する晴風にも先程の統制射撃の攻撃が伝わる。

晴風、射撃指揮所

マチコ「空気の流れなし……外界へ繋がってない！」

だが、障害物を破壊していない事はマチコの報告でも分かった。

晴風、艦橋

明乃「主砲は？」

志摩「よわよわ」

明乃「メイちゃん魚雷は？」

芽衣「折角のチャンスなのに、発射角が悪すぎて撃てないよ……」

2人は、爆弾を搭載したスキツパーで出る。

明乃「シロちゃん！」

薫「次郎君！」

薫と明乃が見守る中

ましろ『艦長！後を頼みます！』

次郎『俺達が突破口を作る！』

2人は、薫と明乃に後を任せ、爆弾を搭載したスキツパーで塞がれた出口へと突入する。

薫「分かった！」

明乃「小沢さんとシロちゃんを支援する。」

薫と明乃は、2人を支援する。

2人は、全速で突入。

しかし、2人の前に、巨大な瓦礫が立ちはだかる。

スキツパー、操縦席

ましろ「はっ！・・・くっ・・・」

立ちはだかる瓦礫にましろは焦る。

次郎「焦るな、大丈夫だ！」

だが次郎が焦るましろに大丈夫だと告げ、運転に集中させる。
次郎の言葉通り

晴風、艦橋

薫「スキップ―前方に障害物！」

薫が前方に立ちはだかる瓦礫に気づき

明乃「タマちゃん！主砲発射準備！」

志摩「うい」

明乃は、砲撃準備を命じ

明乃「手空き乗員は前部甲板に集合！」

スー「えっ!?何で、何するの？」

更には手が空いている生徒を前部甲板に集め

晴風、機関室

明乃『マロンちゃん！機関一杯お願いできる?』

麻命に機関最大を命じる。

麻命「おおよ!・・・こんな事もあるうかと、2度と壊れない様にしっかり手入れして
おいたぜ！」

麻命は、こんな時の為に予め機関を壊れない様にしていた。

そして

麻侖「よし、皆！・・・機関一杯、全力でぶん回すぜ！」

調整している麗緒達に機関一杯、全力でぶん回すぜとカツを入れる。

『おお・・・!!』

晴風は、速力を最大にし、突入するスキッパーの後を追う。

高千穂、艦橋

美由紀「発射！」

同じ頃、突入するスキッパーと同時に高千穂からトマホーク対艦巡航ミサイル1発が発射された。

こうして、外からは、トマホーク対艦巡航ミサイル、中からは、次郎とましろが障害物に向かって突入。

2 正面での破壊が進む。

そして、直前まで来た時

スキッパー

ましろ「艦長！」

ましろは、明乃に合図を送り

晴風、艦橋

明乃「てーっ！」

明乃は、砲撃を命じる。

砲弾は、立ちほだかる瓦礫の上部を直撃

瓦礫は、ゆつくりと下に傾き始め

スキッパー

次郎「今だ！」

それを見た次郎は、ましろに全速で進むよう命じ

ましろ「うう……」

ましろは、スピードを上げる。

2人が乗ったスキッパーは、全速で傾く瓦礫に突入。

上に乗り上げ、火花を散らしながら、瓦礫を発射代替わりに利用し、爆弾を搭載した

スキッパーを出口を塞いでる障害物へと投げ込む。

その瞬間に2人は、艇外に投げ出された状態で脱出。

次郎がましろを抱いた状態で安全装置が作動する。

投げ込まれたスキッパーと高千穂から発射されたトマホーク対艦巡航ミサイルは、同

時に障害物に命中した。

命中で大爆発が起こり、浮遊していた次郎とましろは、爆発の衝撃で安全装置に入っ

たまま投げ出された。

晴風、前部甲板

洋美「うう……」

前部甲板では、洋美達が2人を回収しようと集まっていた。
そして

2人が入った安全装置が現れ

ましろ「宗谷さん！」

洋美はキャッチしようとするが

洋美「!？」

結局、後ろに待機していた理都子と果代子に回収される。

2人を無事に回収した晴風は、そのまま開いた出口から脱出。

見事に生還を果たした。

武蔵及び高千穂、艦橋

『ははあ……』

晴風生還に武蔵や高千穂では、歓喜に沸き

武蔵、艦橋

もえか「はあ……」

もえかも晴風が無事な事に安心し

真霜「貴方達には、驚かされてばかりだわ！」

真霜は、何度も奇跡を起こす晴風に驚いていた。

もえか「私も・・晴風には驚かされてばかりです！」

その言葉にもえかも同じ気持ちだった。

そして

高千穂、艦橋

美由紀「全くあの子達は危ない事ばかり・・呆れてしょうがないわ！」

美由紀の方は、逆にそんな晴風に呆れていた。

だが、本当は嬉しかった。

空母大鳳、艦橋

龍之介「さて、馬鹿な2人を迎えに行くか・・・」

功「そうですね！」

なのは、フェイト達を収容していた龍之介達は、薫と次郎を迎えに行こうと真霜達の元に針路を取る。

ワシントンD・C、ホワイトハウス、大統領執務室

キング「雅か、こんな事になろうとは・・・」

たかだか晴風一隻に難攻不落の海上要塞が陥落した事に驚いていた。

補佐官「申し訳ありません大統領：雅か、あんなちぼっけな艦に、我々の計画を：」
補佐官も海上要塞が晴風一隻に陥落されるとは思っても見なかった。

キング「まあ良い・・・これではつきりした・・・我々にとつて、奴らと言い、彼らも最大の強敵だと・・・」

キングは、Gフォースだけでなく、今の横須賀女子海洋学校の学生も脅威だと認識した。

晴風、前部甲板

一方、生還を果たした晴風の前部甲板では、薫と明乃達が次郎とましろの無事を確かめに集まっていた。

洋美「宗谷さん、無事で良かった！」

ましろの無事を洋美は喜び

ましろ「大丈夫！・・・皆を信じていたから！」

無事なましろも明乃達ならやってくれろと信じていた。

隣も

薫「大丈夫だった次郎君？」

薫が生還した次郎を心配し

次郎「大丈夫だ！・・・信じてたからな・・・お前とこいつらなら！」

次郎もましろと同じ気持ちで、薫と明乃達ならやってくれと信じていた。それを聞いた薫は

薫「ん・・・」

次郎「はあ!？」

次郎に抱き付く。

同時に洋美も

洋美「うう・・・よかつ・・・」

ましろに抱き付こうとしたが

麻侖「クロちや・・・」

洋美「おえ・・・!？」

直前で側にいた麻侖にぎやくに抱き付かれ、後からスーが現れ

スー「凄い凄い凄い！・・・ミケとシロ・・・まるで艦のお父さんとお母さん見たいだった！」

明乃とましろを見て、まるで艦のお父さんとお母さん見たいだったと評価する。

ましろ「いや、あの・・・」

ましろは照れ

スー「私もこの艦に乗りみたい！」

スーは、自分も晴風に乗りみたいと言って

スー「フフフ！」

何所かへ行ってしまい。

隣にいた明乃は、ましろを見る。

ましろ「艦長・・・私もようやく、オールウエイズオンザデッキの意味が理解できた
気がします。」

ましろは、明乃にようやくオールウエイズオンザデッキの意味が理解できた告げ。

明乃「あっ・・・」

それを聞いた明乃は、啞然とする。

そして、ましろは

ましろ「決めました・・・私・・・艦長になります！」

明乃に艦長になると告げた。

明乃「シロちゃん・・・」

それを聞いた明乃は、寂しい顔をする。

それもそうだ。

艦長になると言う事は、比叡の艦長になると言う事で、明乃と別れる事になるからだ。

決めたましろに明乃は行かないでと言いたかったが、言葉が出ない。本当に別れるのか

しかし

ましろは、水平線を見ながら

ましろ「でも、それは今じゃないんです。」

それは今じゃないんですと言つて、明乃を見る。

明乃「え？」

明乃は、ましろの言葉に驚愕する。

一体如何いう事なのか

それは

ましろ「晴風にいれば、この後も間違ひなく……色々ともない事に巻き込まれるに決まっています……私が艦長になる為には、もつともつと経験が必要です。」

艦長になると言う事は、将来の事で比叡の艦長になると言う事じゃなかった。

つまり

明乃「え？」

ましろ「だから、私は晴風に残ります！」

ましろは、晴風に残る事を決意し、明乃にそう告げた。

それを聞いた明乃は

明乃「ああ・・・フフフ・・・ありがとうシロちゃん！」

余りの嬉しさにましろに抱き付く。

明乃は、嬉しかった。

何よりましろが残ってくれた事に

そして、もう一つ

薫「良かったね！」

次郎「ああ！」

2人を見た薫と次郎は、これでやっと解決したと喜び

薫「決めた！」

薫もある事を決めた。

次郎「な、何を？」

薫「私・・・やっぱり残るわ！」

次郎「ええ・・・!？」

薫は、次郎に残ると告げた。

残ると言う事は、ブルーマーメイド行きを断り、Gフォースに残ると言う事。

薫「だって、私がいないと次郎君、危ない事ばかりするし・・・私がいないと駄目で

しよ!」

次郎「いい、良いのか本当に？」

薫「うん!」

薫の言葉を聞いて

次郎「うう．．．うああ．．．!」

次郎は、泣き始め

『おおお．．．!』

薫「じ、次郎君!」

皆の目の前で薫に抱き付き

次郎「良かった!良かった．．．!」

良かったと泣き叫ぶ。

次郎的に本当は、薫が残っててくれる事に嬉しかったんだろう。

結局、薫もましろ同様に残る事に決めた。

その後、ホワイトドルフィン艦隊が海上要塞から脱出していた海賊達を全員逮捕。

空母大鳳も混成艦隊に合流し、横須賀に向け帰途に着いた。

画して、大規模なテロ事件は幕を閉じた。